山鹿市文化財調査報告書第14集

方保田東原遺跡Ⅳ

（かとうだひがしばるいせき）

重要遺跡確認調査

２００１年３月

熊本県山鹿市教育委員会

かとう　だひがしばるいせき

方保田東原遺跡Ⅳ

重要遺跡確認調査

２００１年３月
熊本県山鹿市教育委員会



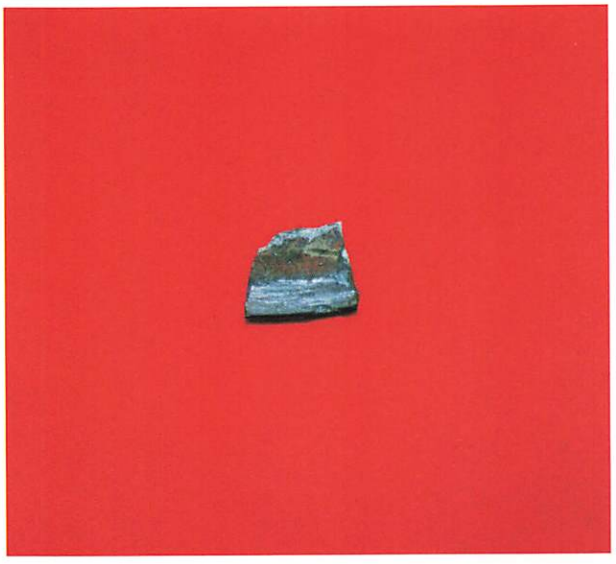
9年度　138番地出土　1



8年度　119番地出土　2



8年度　119番地出土　3



9年度　141番地出土　4

序

山鹿市には数多くの文化財が残されており、先人たちから長い時間をかけて受け継がれてきました。

私たちにとって郷土に誇りを持つことが出来ることはすばらしいことと思います。山鹿市で誇れるもののひとつが方保田東原遺跡であります。

弥生時代の人々の息吹が聞こえそうな環境の中に埋もれておりますが、この遺跡を未来に残し伝えることは歴史の最先端に生きるわれわれ市民の務めであります。未来の子供たちに出来るだけ現状のまま残せるように国指定史跡の追加と将来の史跡公園整備を見据えた上で、平成８年から12年にかけて遺跡範囲確認調査を実施いたしました。

その内容をまとめたのが本書であります。

より多くの人々に活用いただきますよう願っております。

平成13年３月31日

山鹿市教育長　中　原　哲　哉

例　　言

1　本書は山鹿市教育委員会が国庫補助事業として実施した市内重要遺跡確認調査の報告書である。

2　本調査は平成８年度から１２年度にわたり山鹿市大字方保田所在の方保田東原遺跡の範囲確認調査である。

3　調査に際しては山鹿市教育委員会が主体となって文化課および市立博物館がその任に当たった。

4　本書の執筆は中村幸史郎と山口健剛が行い、担当は文末に記入した。編集は主に中村が行った。

5　本書に使用した写真は遺構を山口が撮影し、遺物は中村、山口、酒井隆行が行った。

本 文 目 次

序

第１章　調査の経過……１
　第１節　調査に至る経過……１
　第２節　調査の経過……１
　第３節　調査の組織……８

第２章　遺跡の環境……10
　第１節　地理的環境……10
　第２節　歴史的環境……10

第３章　調査の方法……12
　第１節　調査の方法……12
　第２節　調査地区と地番……15

第４章　平成8年度の調査 ……16
　第１節　84－2番地の調査 ……16
　第２節　119番地の調査 ……45

第５章　平成９年度の調査……97
　第１節　131番地の調査 ……97
　第２節　132番地の調査……112
　第３節　136－1番地の調査 ……119
　第４節　138番地の調査……127
　第５節　141番地の調査……169
　第６節　267番地の調査……199
　第７節　268番地の調査……209
　第８節　調査の成果 ……239

第６章　平成10年度の調査 ……242
　第１節　813番地の調査……242
　第２節　814番地の調査……244
　第３節　816・817番地の調査 ……262
　第４節　820・821番地の調査 ……273
　第５節　324－2番地の調査 ……279
　第６節　825番地の調査……283
　第７節　調査の結果 ……287

第７章　平成11年度の調査 ……288
　第１節　831番地の調査……288
　第２節　932－1番地、932－2番地、
　　932－4番地の調査 ……297
　第３節　881番地、888番地、893番地、
　　1019番地の調査 ……302
　第４節　177－2番地の調査 ……304
　第５節　220番地の調査……306

第８章　平成12年度の調査 ……328
　第１節　209地番の調査……328
　第２節　196－1地番の調査 ……365

第９章　特異な遺物 ……385
　第１節　9年度出土の遺物……385
　第２節　10年度出土の遺物 ……392
　第３節　縄文式土器 ……396
　第４節　内面朱塗り土器について ……396

第10章　総括 ……396

表 目 次

第１表　調査地区と地番……15
第２表　84-2番地出土土器観察表 ……41
第３表　119番地出土土器観察表 ……86
第４表　鉄器計測値一覧表　８年度終わり……93
第５表　141番地２号石棺出土玉類観察表
　９年度終わり ……189
第６表　831番地出土土器観察表　10年度なし…325
第７表　932-1番地出土土器観察表 ……326
第８表　932-2番地出土土器観察表 11年終わり …327
第９表　209番地出土土器観察表……376
第10表　196-1番地出土土器観察表 12年終わり …383
第11表　遺構の時間的位置付け一覧表 ……397
第12表　方保田東原遺跡遺構別一覧表
　まとめ終わり …400

挿　図　目　次

第１図　遺跡分布図……11
第２図　調査区域地形図……13～14
第３図　84-2番地遺構配置図……16
第４図　84-2番地出土縄文式土器実測図……17
第５図　１号住居跡実測図……17
第６図　１号住居跡出土土器実測図……18
第７図　１号住居跡出土土製品実測図……19
第８図　２号住居跡実測図……20
第９図　２号住居跡土出土器実測図……20
第10図　84-2番地２号住居跡出土鉄器実測図……21
第11図　溝土層断面（ベルト南壁）実測図……22
第12図　溝（上層遺物出土状況）実測図……22
第13図　溝（下層遺物出土状況）実測図……23
第14図　溝（下層）出土土器実測図①……24
第15図　溝（下層）出土土器実測図②……25
第16図　溝（下層）出土土器実測図③……26
第17図　溝（中層）出土土器実測図……27
第18図　溝（上層）出土土器実測図①……28
第19図　溝（上層）出土土器実測図②……29
第20図　溝（上層）出土土器実測図③……30
第21図　溝（上層）出土土器実測図④……31
第22図　溝出土土製品ほか実測図……31
第23図　溝出土石器実測図……32
第24図　溝出土鉄（製品・欠損品・破損品）実測図…33
第25図　溝出土鉄（非製品）実測図……34
第26図　遺構に伴わない土器……36
第27図　遺構に伴わない遺物（鉄器）実測図……37
第28図　遺構に伴わない遺物（石器・土製品ほか）…38
第29図　１号土坑・３号土坑実測図……39
第30図　遺構に伴わない遺物(土師器・須恵器)…39
第31図　119番地調査区遺構配置図……46
第32図　１号住居跡実測図……47
第33図　１号住居跡出土土器実測図①……47
第34図　２号住居跡実測図……48
第35図　３号住居跡実測図……49
第36図　３号住居跡出土土器実測図……49
第37図　４号住居跡実測図……50
第38図　５号住居跡実測図……50
第39図　６号住居跡実測図……51
第40図　６号住居跡出土土器実測図……51
第41図　７号住居跡実測図……52
第42図　７号住居跡出土土器実測図①……53
第43図　７号住居跡出土土器実測図②……54
第44図　７号住居跡出土土器実測図③……55
第45図　７号住居跡出土土器実測図④……56
第46図　７号住居跡出土小型仿製鏡実測図……57
第47図　８号住居跡実測図……58
第48図　９号住居跡・13号住居跡実測図……59
第49図　９号住居跡出土土器実測図……59
第50図　10号住居跡実測図……60
第51図　10号住居跡出土土器実測図……61
第52図　11号住居跡実測図……62
第53図　12号住居跡実測図……62
第54図　11号住居跡出土土器実測図……63
第55図　12号住居跡出土土器実測図……63
第56図　13号住居跡出土土器実測図……63
第57図　14号住居跡実測図……64
第58図　14号住居跡出土土器実測図……65
第59図　15号住居跡実測図……66
第60図　15号住居跡出土土器実測図……67
第61図　16号住居跡出土土器実測図……68
第62図　16号住居跡実測図……68
第63図　17号住居跡実測図……68
第64図　17号住居跡出土土器実測図……69
第65図　18号住居跡実測図……70
第66図　19号住居跡実測図……70
第67図　18号住居跡出土土器実測図……71
第68図　19号住居跡出土土器実測図……71
第69図　20号住居跡実測図……71
第70図　１号土坑～９号土坑実測図……72
第71図　10号土坑～14号土坑実測図……73
第72図　土坑出土土器実測図……74
第73図　１号～５号土器群実測図……75
第74図　１号土器群出土土器実測図……76
第75図　２号土器群出土土器実測図……77
第76図　３号土器群出土土器実測図……78

第77図　4号土器群出土土器実測図……79
第78図　5号土器群出土土器実測図……79
第79図　119番地出土小型仿製鏡断面実測図 ……80
第80図　玉類実測図……81
第81図　遺構に伴わない遺物（土製品など）……81
第82図　遺構に伴わない土器実測図……82
第83図　鉄器実測図……83
第84図　石器実測図……84
第85図　131番地東西・南北トレンチ ……96
第86図　東西トレンチ1号住居跡実測図……97
第87図　131番地2号住居跡実測図 ……98
第88図　2号住居跡土出遺物実測図……98
第89図　131番地3・4号住居跡実測図 ……99
第90図　3号住居跡出土遺物実測図……99
第91図　東西トレンチ5号住居跡実測図 ……100
第92図　131番地東西トレンチ1号溝実測図……100
第93図　1号溝出土遺物実測図 ……101
第94図　1号溝出土遺物実測図 ……102
第95図　1号溝出土遺物実測図 ……102
第96図　2号溝実測図 ……103
第97図　2号溝出土遺物実測図 ……103
第98図　3号溝実測図 ……104
第99図　3号溝断面図 ……105
第100図　3号溝出土遺物実測図……106
第101図　3号溝出土遺物実測図……107
第102図　1号道路実測図……108
第103図　2号道路実測図……108
第104図　2号道路出土遺物実測図……109
第105図　1号土坑実測図……109
第106図　1号土坑出土遺物実測図……109
第107図　2号土坑実測図……109
第108図　遺構に伴わない遺物実測図……110
第109図　132番地トレンチ遺構配置図 ……111
第110図　132番地1号住居跡実測図 ……112
第111図　1号住居跡出土遺物実測図……112
第112図　溝実測図……113
第113図　溝出土遺物実測図……114
第114図　溝出土遺物実測図……115
第115図　溝出土遺物実測図……116
第116図　道路状遺構実測図……117
第117図　遺構に伴わない遺物実測図……118
第118図　136-1番地第1トレンチ遺構配置図 …119
第119図　136-1番地第1トレンチ溝実測図 ……120
第120図　溝出土遺物実測図……121
第121図　136-1番地第2トレンチ遺構配置図 …122
第122図　136-1番地第2トレンチ溝実測図 ……123
第123図　溝出土遺物実測図……123
第124図　138番地東西1トレンチ・南北1トレンチ遺構配置図 …125
第125図　138番地1号住居跡実測図 ……127
第126図　1号住居跡出土遺物実測図……128
第127図　2号住居跡実測図……129
第128図　3号住居跡実測図……130
第129図　3号住居跡出土遺物実測図……130
第130図　1号溝実測図……131
第131図　1号溝出土遺物実測図……131
第132図　1号溝出土遺物実測図……132
第133図　1号溝出土遺物実測図……133
第134図　138番地東西トレンチ2号溝実測図 …134
第135図　138番地東西トレンチ2号溝実測図 …135
第136図　2号溝出土遺物実測図……136
第137図　138番地東西トレンチ3号溝実測図 …137
第138図　3号溝出土遺物実測図……138
第139図　4号溝実測図……139
第140図　4号溝出土遺物実測図……139
第141図　138番地1号道路実測図 ……140
第142図　1号道路出土遺物実測図……141
第143図　遺構に伴わない遺物実測図……141
第144図　138番南北トレンチ祭祀土坑実測図 …143
第145図　祭祀土坑遺物出土状況実測図……145
第146図　祭祀土坑出土遺物実測図……146
第147図　祭祀土坑遺物出土状況実測図①……147
第148図　祭祀土坑遺物出土状況実測図②……148
第149図　祭祀土坑遺物出土状況実測図……149
第150図　祭祀土坑出土遺物実測図①……151
第151図　祭祀土坑出土遺物実測図②……152
第152図　祭祀土坑出土遺物実測図③……153
第153図　祭祀土坑出土遺物実測図④……154
第154図　祭祀土坑出土遺物実測図……156
第155図　祭祀土坑出土遺物実測図……157
第156図　祭祀土坑出土遺物実測図……158

第157図　祭祀土坑出土遺物実測図……159
第158図　4号住居跡実測図……160
第159図　4号住居跡出土遺物実測図……161
第160図　138番地東西第2トレンチ遺構配置図 …162
第161図　1号住居跡実測図……163
第162図　1号住居跡出土遺物実測図……163
第163図　1号溝実測図……163
第164図　1号溝出土遺物実測図……164
第165図　2号溝実測図……164
第166図　2号溝出土遺物実測図……165
第167図　3号溝・周濠実測図……166
第168図　3号溝出土遺物実測図……166
第169図　円墳周濠出土遺物実測図……167
第170図　141番地東西トレンチ遺構配置図 ……168
第171図　1号住居跡実測図……169
第172図　1号住居跡出土遺物実測図……169
第173図　2号住居跡実測図……170
第174図　2号住居跡出土遺物実測図……171
第175図　3号住居跡実測図……171
第176図　3号住居跡出土遺物実測図……171
第177図　4号住居跡実測図……172
第178図　4号住居跡出土遺物実測図……172
第179図　5号住居跡実測図……172
第180図　5号住居跡出土遺物実測図……173
第181図　6号住居跡実測図……173
第182図　6号住居跡出土遺物実測図……173
第183図　7号住居跡実測図……174
第184図　7号住居跡出土遺物実測図……174
第185図　1号溝実測図……175
第186図　1号溝遺物出土状況実測図……176
第187図　1号溝出土遺物実測図……176
第188図　1号溝遺物出土状況実測図……177
第189図　1号溝出土遺物実測図……177
第190図　2号溝実測図……178
第191図　2号住居跡出土遺物実測図……179
第192図　3号溝実測図……180
第193図　3号住居跡出土遺物実測図……181
第194図　4号溝実測図……182
第195図　1号貯蔵穴実測図……183
第196図　1号貯蔵穴出土遺物実測図……183
第197図　1号石棺実測図……184
第198図　1号石棺周辺出土遺物実測図……184
第199図　2号石棺実測図……185
第200図　1号石棺玉類出土状況実測図……186
第201図　1号石棺出土遺物実測図……186
第202図　141番地2号石棺出土玉類実測図 ……187
第203図　141番地2号石棺玉類実測図 ……188
第204図　遺構に伴わない遺物実測図……193
第205図　遺構に伴わない遺物実測図……194
第206図　267番地トレンチ配置図 ……195
第207図　267番地遺構配置図 ……197
第208図　1・2号住居跡実測図……199
第209図　1号住居跡出土遺物実測図……200
第210図　2号住居跡出土遺物実測図……200
第211図　267番地東西第2トレンチ溝実測図 …201
第212図　溝出土遺物実測図……203
第213図　道路状遺構実測図……203
第214図　遺構に伴わない遺物の実測図……204
第215図　268番地遺構配置図 ……205
第216図　268番地東西1～5トレンチ遺構配置図 …207
第217図　268番地東西1トレンチ1号住居跡実測図 …209
第218図　268番地南北2トレンチ・東西1トレンチ1号溝実測図 …210
第219図　東西1トレンチ1号溝南側断面図……210
第220図　1号溝出土遺物実測図……211
第221図　1号溝2段階の遺物出土状況実測図…211
第222図　1号溝出土遺物実測図……212
第223図　1号溝出土遺物実測図……213
第224図　1号溝3・4段階遺物出土状況実測図 …213
第225図　1号溝出土遺物実測図……214
第226図　1号溝出土遺物実測図……215
第227図　東西第2トレンチ実測図……216
第228図　1号溝出土遺物実測図……217
第229図　東西第3トレンチ住居跡実測図……218
第230図　東西第3トレンチ1号道路実測図……218
第231図　東西第4トレンチ6号溝実測図……219
第232図　東西第4トレンチ1号道路実測図……219
第233図　東西第4トレンチ2号道路実測図……220
第234図　2号住居跡実測図……221
第235図　2号住居跡出土遺物実測図……221
第236図　3号住居跡実測図……221

第237図　東西５トレンチ４号住居跡実測図……222
第238図　４号住居跡出土遺物実測図……222
第239図　４号住居跡出土遺物実測図……223
第240図　５号住居跡実測図……223
第241図　268番地南北１・２トレンチ遺構配置図…225
第242図　268番地南北１トレンチ１号住居跡実測図…227
第243図　268番地南北１トレンチ２号住居跡実測図…227
第244図　２号住居跡出土遺物実測図……227
第245図　268番地南北１トレンチ３号住居跡実測図…229
第246図　268番地南北１トレンチ２号溝実測図…229
第247図　268番地南北１トレンチ３号溝実測図…230
第248図　268番地南北１トレンチ４号溝実測図…231
第249図　268番地南北１トレンチ５号溝実測図…233
第250図　268番地南北１トレンチ１号道路(上層)実測図…233
第251図　268番地南北１トレンチ２号道路実測図…234
第252図　268番地南北１トレンチ土坑実測図…234
第253図　南北トレンチ土坑出土遺物実測図……235
第254図　南北第１トレンチ自然災害遺構・第２トレンチ１号溝断面図　236
第255図　268番地南北２トレンチ・東西１トレンチ１号溝実測図　237
第256図　１号溝出土遺物実測図……238
第257図　１号溝出土遺物実測図……239
第258図　平成９年度出土鉄器実測図……241
第259図　813番地第１トレンチ遺構配置図……242
第260図　溝実測図……243
第261図　溝出土遺物実測図……243
第262図　第１土坑実測図……244
第263図　第１土坑出土遺物実測図……244
第264図　814番地第１トレンチ遺構配置図……245
第265図　814番地第２トレンチ遺構配置図……245
第266図　１号住居跡実測図……246
第267図　１号住居跡出土遺物実測図……246
第268図　２号住居跡実測図……247
第269図　１・２号溝実測図……248
第270図　１・２号溝断面図……249
第271図　１号溝出土遺物実測図……250
第272図　１号溝出土遺物実測図……251
第273図　２号溝出土・遺構に伴わない遺物実測図　253
第274図　遺構に伴わない遺物出土状況図……253
第275図　遺構に伴わない遺物……254
第276図　814番地第３トレンチ遺構配置図……255
第277図　１号住居跡実測図……255
第278図　１号住居跡出土遺物実測図……257
第279図　２号住居跡実測図……257
第280図　２号住居跡出土遺物実測図……259
第281図　３・４号住居跡実測図……259
第282図　３号住居跡出土遺物実測図……260
第283図　４号住居跡出土遺物実測図……260
第284図　溝実測図……261
第285図　溝出土遺物実測図……261
第286図　土坑実測図……262
第287図　遺構に伴わない遺物実測図……262
第288図　816・817番地遺構配置図……263
第289図　１号住居跡実測図……264
第290図　１号住居跡出土遺物実測図……264
第291図　２号住居跡実測図（上層）……264
第292図　２号住居跡実測図（下層）……265
第293図　２号住居跡出土遺物実測図……265
第294図　３号住居跡出土遺物実測図……265
第295図　３号住居跡出土遺物実測図……266
第296図　４号住居跡実測図……266
第297図　４号住居跡出土遺物実測図……266
第298図　５号住居跡実測図……267
第299図　５号住居跡出土遺物実測図……267
第300図　６号住居跡実測図……268
第301図　６号住居跡出土遺物実測図……268
第302図　溝実測図……268
第303図　溝出土遺物実測図……269
第304図　不整形土坑実測図……270
第305図　遺構に伴わない遺物実測図……270
第306図　遺構に伴わない遺物実測図……271
第307図　820・821番地遺構配置図……272
第308図　溝実測図……274
第309図　溝出土遺物実測図……275
第310図　土坑実測図……276
第311図　土坑出土遺物実測図……276
第312図　遺構に伴わない遺物実測図……276
第313図　１号住居跡実測図……277
第314図　１号住居跡出土遺物実測図……277
第315図　道路状遺構実測図……278
第316図　遺構に伴わない遺物実測図……278

第317図　842-2番地遺構配置図 ……279
第318図　1号土坑実測図……279
第319図　2号土坑実測図……280
第320図　3号土坑実測図……280
第321図　3号土坑・遺構に伴わない遺物実測図 …280
第322図　825第1・2トレンチ遺構配置図 ……281
第323図　溝実測図……283
第324図　溝出土遺物実測図……283
第325図　溝実測図……285
第326図　溝出土遺物実測図……285
第327図　土坑実測図……286
第328図　土坑出土遺物実測図……286
第329図　平成10年度出土鉄器実測図……287
第330図　831番地遺構配置図 ……288
第331図　831番地1号溝実測図 ……289
第332図　1号溝出土土器実測図……289
第333図　831番地2号溝実測図 ……290
第334図　2号溝出土土器実測図……290
第335図　831番地3号溝実測図 ……291
第336図　3号溝出土土器実測図……292
第337図　831番地4号溝実測図 ……293
第338図　4号溝出土土器実測図……293
第339図　831番地1号土坑実測図 ……294
第340図　831番地出土鉄器実測図 ……294
第341図　遺構に伴わない土器実測図……294
第342図　遺構に伴わない土器実測図②……295
第343図　831番地出土その他の遺物実測図(土錘など) 296
第344図　932-1番地第1グリッド全体図 ……297
第345図　932-1番地第2グリッド全体図 ……298
第346図　第2グリッド出土土器実測図……298
第347図　932-1番地第3グリッド全体図 ……298
第348図　第3グリッド出土土器実測図……298
第349図　932-2番地遺構配置図 ……299
第350図　住居跡出土土器実測図……299
第351図　932-2番地1号土坑実測図 ……299
第352図　932-2番地2号土坑実測図 ……300
第353図　932-2番地3号土坑実測図 ……300
第354図　2号土坑出土土器実測図……300
第355図　遺構に伴わない土器実測図……301
第356図　881番地遺構配置図 ……302
第357図　888番地第1トレンチ遺構検出実測図 303
第358図　888番地第2トレンチ遺構検出実測図 303
第359図　117-2番地遺構検出状況実測図 ……304
第360図　117-2番地出土遺物実測図 ……305
第361図　第1トレンチ実測図……307
第362図　第1トレンチ土坑出土土器実測図……307
第363図　第2トレンチ1号溝実測図……308
第364図　第2トレンチ2号溝実測図……309
第365図　第2トレンチ2号溝出土土器実測図…310
第366図　第2トレンチ3号溝実測図……311
第367図　第2トレンチ3号溝出土土器実測図①(1層) 312
第368図　第2トレンチ3号溝出土土器実測図②(2層) …312
第369図　第2トレンチ3号溝出土土器実測図③(2層) …313
第370図　第2トレンチ3号溝出土土器実測図④(2層) …314
第371図　第2トレンチ3号溝出土土器実測図⑤(2層) …315
第372図　第2トレンチ3号溝出土土器実測図⑥(2層) …316
第373図　第2トレンチ3号溝出土土器実測図⑦(2層) …317
第374図　第2トレンチ3号溝出土土器実測図⑧(3層) …317
第375図　第2トレンチ3号溝出土土器実測図⑨(4層) …318
第376図　第2トレンチ3号溝出土土器実測図⑩(5層) …318
第377図　第2トレンチ3号溝出土土器実測図⑪(5層) …319
第378図　第2トレンチ3号溝出土土器実測図⑫(5層) …320
第379図　第2トレンチ3号溝出土土器実測図⑬(6層) …320
第380図　第2トレンチ3号溝出土土器実測図⑭(6層) …321
第381図　第2トレンチ3号溝出土土器実測図⑮(6層) …322
第382図　第2トレンチ1号土坑実測図……323
第383図　遺構に伴わない遺物（土錘など）……323
第384図　遺構に伴わない遺物（石包丁）……324
第385図　220番地出土鉄器実測図 ……324
第386図　209番地遺構配置図（その1） ……328
第387図　209番地遺構配置図（その2） ……329
第388図　1号溝実測図……330
第389図　1号溝出土土器実測図……330
第390図　2号溝（掘下部分）実測図……330
第391図　2号溝出土土器実測図……331
第392図　3号溝及び下層遺物出土状況実測図…333
第393図　3号溝土層断面図……333
第394図　3号溝遺物出土状況実測図……334
第395図　3号溝（上層）出土土器実測図①……335
第396図　3号溝（上層）出土土器実測図②……336

第397図　3号溝（上層）出土土器実測図③……337
第398図　3号溝（上層）出土土器実測図④……338
第399図　3号溝（上層）出土土器実測図⑤……339
第400図　3号溝（中層）出土土器実測図……341
第401図　3号溝（下層）出土土器実測図……341
第402図　4号溝（上層）出土土器実測図……343
第403図　4号溝（中層）出土土器実測図……344
第404図　4号溝（下層）出土土器実測図①……345
第405図　4号溝（下層）出土土器実測図②……346
第406図　5号溝実測図……347
第407図　5号溝土層断面図（西壁）実測図……348
第408図　5号溝出土土器実測図……349
第409図　1号住居跡実測図……350
第410図　1号住居跡出土土器実測図……350
第411図　2号住居跡実測図……352
第412図　2号住居跡出土土器実測図……352
第413図　3号住居跡実測図……353
第414図　4号住居跡実測図……353
第415図　1・2号土坑実測図……354
第416図　2号土坑出土土器実測図……354
第417図　4号土坑実測図……354
第418図　4号土坑出土土器実測図……354
第419図　5号土坑実測図……355
第420図　6号土坑実測図……355
第421図　6号土坑出土土器実測図……355
第422図　209番地出土鉄器実測図……356
第423図　遺構に伴わない遺物実測図……357
第424図　装飾文様のある土器・絵画土器・メンコ状土器片実測図…358
第425図　土製品実測図……359
第426図　3号土坑実測図……359
第427図　8号土坑実測図……360
第428図　3号焼土出土土器実測図……360
第429図　8号土坑出土土器実測図……360
第430図　4号焼土出土土器実測図……361
第431図　遺構に伴わない遺物実測図……362
第432図　焼成粘土塊実測図……363
第433図　196-1番地遺構配置図……366
第434図　道路状遺構実測図……367
第435図　道路状遺構出土土器実測図……367
第436図　鐸形土製品実測図……367
第437図　土坑実測図……368
第438図　土坑出土土器実測図……368
第439図　石器実測図……368
第440図　遺構に伴わない遺物実測図①……369
第441図　遺構に伴わない遺物実測図②……370
第442図　焼土検出状況実測図……370
第443図　焼土出土土器実測図……371
第444図　大溝実測図……372
第445図　大溝出土土器実測図……373
第446図　移動式かまど実測図……374
第447図　焼成粘土塊実測図……374
第448図　特殊な遺物実測図①……385
第449図　特殊な遺物実測図②……386
第450図　138番地出土の特殊な遺物実測図③…387
第451図　特殊な遺物実測図④……388
第452図　268番地出土の特殊な遺物実測図⑤…389
第453図　特殊な遺物実測図⑥……390
第454図　816・817番地出土の特殊な遺物実測図⑦ 391
第455図　特殊な遺物実測図⑧……392
第456図　821番地出土の特殊な遺物実測図⑨…393
第457図　特殊な遺物実測図⑩……394
第458図　平成10年度出土縄文土器……395

図　版　目　次

1　9年度　138番地出土
2　8年度　119番地出土
3　8年度　119番地出土
4　9年度　141番地出土
写真図版……403

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯

方保田東原遺跡の一部が国指定史跡となったのは昭和60年２月19日のことである。

指定範囲は約27,000㎡で、指定範囲の中心部分が宅地開発の危機にさらされたため緊急避難的に指定したものである。以来山鹿市では史跡の公有化とともに、史跡整備のための検討委員会を平成３年10月に設置し、委員には文化庁記念物課田中哲雄主任調査官、熊本大学白木原和美教授（現在甲元真之教授）、別府大学賀川光夫教授、福岡大学小田富士雄教授、熊本県教育庁文化課隈昭志審議員にお願いをした。

検討委員会では毎年発掘調査の成果を踏まえて検討を行ってきたが、史跡整備計画を立てる段階で最も支障になったのが、史跡指定区域内の遺構が何ら明らかになっていない事であった。

併せて山鹿市では博物館が文化財行政を行っていたこともあって、博物館の収蔵庫は出土遺物で溢れ、遺物整理すらできない状況に陥っていたのである。このため文化庁や熊本県の協力で平成７年度から８年度にわたり出土文化財管理センターの建設事業を行うこととなった。

建設に先立ち山鹿市では単独事業として建設予定地の発掘調査を実施し、その結果幅８ｍの大規模な溝状遺構が検出された。検出された場所が舌状台地の基部に当たるところから遺跡全体を区画するものと考えられた。さらに国指定史跡になった経緯から、遺跡の中心や範囲は把握できていなかった事を契機に文化庁から強い指導で出土文化財管理センターの建設計画の見直しと共に、遺跡自体の範囲を確認すべく４ヶ年計画で調査を実施することとなった。

特に今後の開発行為に対する指導と遺跡保護をおこなう基礎資料の収集を目的とした。なお、調査を進める中で遺跡の密度が極めて高く、遺物の出土量も膨大なものとなったので文化庁や熊本県と協議のうえ１年延長して５ヶ年計画に変更したものである。

第２節　調査の経過

１　平成８年度の調査

平成８（1996）年

８月６日（火）晴れ

発掘調査のための地形測量開始。かつて測量委託して図面を作成していたが、今回の調査予定区域は図化されていないので事前に行うこととした。

８月９日（金）晴れ

測量は本日で終了。

８月19日（月）晴れ一時雨

本日から84－２番地で10ｍ×10ｍの調査区を設定し重機による表土剥ぎを実施、約80㎝程度掘り下げる。

８月20日（火）晴れ

表土剥ぎ作業。北壁中央あたりにほぼ完形の高杯が顔をのぞかせている。

８月21日（水）くもり

表土剥ぎ作業。雨になりそうだったので午後作業を中止した。

８月22日（木）晴れ時々くもり

本格的に遺構検出に移る。白っぽい粘土質の土が広がっている。

８月27日（火）くもりのち晴れ

調査区東南隅でほぼ完形の鉄斧が出土し、周辺で硬化面を確認。

９月２日（月）晴れ

調査区の西半分で溝らしい黒色土層の広がりが見えて来た。

９月６日（金）晴れ時々くもり

溝の掘下げを行う、午後から博物館の考古学講座の受講生も応援に駆け付けにぎやかな現場となった。

９月９日（月）くもりのち雨

ようやく溝の西側の落ち込みが確認された、午後は雨のため作業は中止した。

９月10日（火）晴れ

溝の西側斜面は東側に比べ緩やかに落ちており、幅は２ｍ程度になりそうである。

９月11日（水）晴れ

溝の写真撮影、その後実測を開始する。調査区の北

壁中央部から土製勾玉が出土した。

9月17日（火）晴れ

今日は作業員を休ませ終日実測を行った。

9月18日（水）晴れ時々くもり

本日より新たに119番地の表土剥ぎを行なう。

84－1は引き続き実測継続中。

9月19日（木）晴れ

84－1番地は実測を行い、遺物の取上げを始めた。

119番地は重機による表土剥ぎであるが、思いのほか浅く早く終わりそうである。

9月23日（月）晴れのちくもり

博物館主催の一日発掘調査隊を行い、119番地には小中学生があふれ、午前中の作業を楽しんだ。

10月1日（火）晴れ

本日より前田軍治氏が新たに調査員として加わった。119番地を前田が担当し、84－1番地を山口が担当することとなった。119番地では調査員の増加を祝うかの様に小形の鏡が出土した。

10月4日（金）晴れ時々雨

河村県議発掘現場視察、84－1番地では溝の掘下げを行い、ようやく底が検出された。溝の深さは遺構面から1.3mである。

10月15日（火）晴れ

119番地は遺構の写真撮影を行い、1号住居の床面を検出し、ガラス玉2個が出土した。84－1番地では溝北側遺物出土状況の実測がほぼ終了したので、土器の取上げに終始した。

10月18日（金）くもりのち晴れ

119番地は2～4住居周辺の掘り下げを行う。石包丁，有孔土製品が出土した。84－1番地は溝南側を完掘した。

10月24日（木）晴れ

119番地出土鏡に関して記者発表する。

10月29日（火）晴れ

テレビ熊本（ＴＫＵ）取材のため来訪。

11月5日（火）くもりのち雨

84－1番地のみで作業する。先日の雨で土砂が流れ込んでいたため、除去し遺構面の写真を撮る。2号住居からガラス玉出土する。午後は雨のため中止した。

11月7日（木）くもり時々晴れ

本日で84－1番地の調査完了。

11月15日（金）晴れ

119番地調査区を清掃後写真撮影を行う。

11月19日（金）晴れ

市新規採用教職員研修で発掘体験を行う。

11月20日（水）晴れ

遺構実測にとりかかり南東隅から開始。

12月3日（火）晴れ

出土文化財管理センター落成式。午後から実測。

12月13日（火）晴れ

終日遺構実測。

12月26日（木）晴れ

遺物取上げを行う。

12月28日（土）晴れ

遺物取上げ。

平成9年（1997）

1月7日（火）くもりのち晴れ

遺構配置図作成のため平板測量を始める。

1月17日（金）晴れ

平板測量完了

1月21日（火）くもり

119番地の調査を再開。10月出土した鏡の残片が約60cm離れた場所から出土した。

1月23日（木）くもり時々晴れ

3号住居には白粘土を張詰めていたが、取り除くと硬い床面が検出された。

1月30日（木）晴れ

9、10、13号住居掘り下げ、厚さ5cmの焼土の下から黒色土が堆積しており、浮いた状態である。

2月5日（水）晴れ時々くもり

調査区全体の清掃後写真撮影を行った。その後実測にはいる。

2月18日（火）はれ

調査区の南側を追加で調査することとし重機で表土剥ぎを開始。

2月21日（金）晴れ

拡張部より鏡が1面出土した。鏡面を上にし斜めに立てかけるように置かれている。第4次調査で出土した鏡と共通した状態である。

2月25日（火）くもり

拡張部の遺構検出をするが、まだ検出できない。

3月4日（火）晴れ

未だに拡張部の遺構検出ができない、丹塗りのコップ形土器が出土した。

3月6日（木）晴れのちくもり

今日で遺構の全容が明らかになったようだ。7～8軒の住居跡、2～3基の貯蔵穴などが見られる。

3月9日（日）晴れ

作業員は休みであるが前田、山口で難しい判断の遺構を掘り進めた。

3月11日（火）晴れ

274－1番地のかつて池であった畑にトレンチを設定し重機を入れ表土を剥ぎにかかる。

3月12日（水）くもりのち時々雨

274－1番地は地表下深さ3.7mまで掘り下げ白粘土層に達したが遺物は見られず、水が湧き出て壁が崩落しかかったため写真撮影後埋め戻した。

3月20日（木）くもり

終日119番地の遺構および遺物出土状況の実測である。274－1番地第2トレンチでは浅い溝が出ている。中から青磁、須恵器などが出土している。

2　平成9年度の調査

平成9（1997）年

8月20日（水）晴れ

本日より138、141、268番地で調査区の設定および重機により表土剥ぎを行い、110－2番地は調査区の設定を行った。調査区の設定は基本的に国土座標に従って行う事とし、東西および南北方向に沿って設置したため畑の状況とはそぐわぬ形のトレンチとなった。各トレンチの幅は2mとし、それぞれの土地の状況で長さを決めた。

8月21日（木）晴れ

管理センター下で検出された大溝を追跡するに必要と考えていた131番地について地権者より調査依頼があったので急遽長さ65m、幅2mのトレンチを設定し表土剥ぎを行った。畑の形状と方向性のため国土座標とは異なり地形に合わせての設定になった。

110－2番地は長さ22m、幅14mの矩形でグリッドを設定して表土剥ぎを実施した。

8月26日（火）晴れ

138番地ではまとまって土器が出土した数ヶ所を残して全体を掘り下げた。141番地では焼土2ヶ所が検出され、大型土錘1点が出土した。

8月27日（水）晴れ

141番地トレンチ西端から円筒埴輪片1点が出土した。大道小学校に保存されている「大道村郷土誌」によれば亀塚古墳北側39間（約70m）の中島古墳（円墳）が存在している事が記録され、大正年間頃までは完全な姿で残っていた事が判明。

大道校区では中村双子塚古墳に次いで二番目に埴輪を出土し、方保田地区では初の確認である。

8月28日（木）晴れ

138番地では本日の段階では遺構検出は出来なかった。141番地トレンチ中央部に於いて石棺1基確認、現状での写真撮影を行う。

8月29日（金）晴れ

138番地では遺構の検出は出来なかったが、トレンチ西端部で南北に伸びる送水管が出てきた。141番地の石棺を実測する。現状では長さ120cm程度で恐らく子供用石棺と考えられる。

8月30日（土）晴れ

141番地で新たに2号石棺検出、臼玉16点等出土した。

9月2日（火）晴れ

138番地　トレンチ全体遺構が深いようであるが東側に小さい溝2本が平行して走っており、その西側に幅約6m程度になりそうな溝を確認した。

9月4日（木）晴れ

138番地　ようやく遺構らしきものが見えてきた、東端部および中央部で溝2本が存在しそうで、中央部の溝は幅約4m程度で南北からやや西に向けて走るようだ。

141番地　東端部で住居が確認され1号住居とした。西区では硬化面が2層に検出され上面は壁が確認できず、下面もプランがつかみにくい状態である。

9月9日（火）くもりのち晴れ

138番地　溝内の遺物露出作業とトレンチ内遺構検出を行う。溝についてはモグラのいたずらによって遺物が動いていた。

141番地　先日1号住居とした遺構が壁と床が確認

されないところから溝の可能性が高くなった。時期的には138番地のものと同じ頃と思われるが、方向的に異なっており別の溝の様だ。

2号石棺の廃土より14個の臼玉を確認、石棺内に30個確認、これまで総計132個が検出されている。

9月10日（水）晴れ

138番地　西端部より5mの地点で小形仿製鏡が完全な姿で出土した。裏面を西に向け斜めに立てかけた様な状態で出土した。

141番地　東端部において1号住居跡としていたものが溝であることが明らかになった。さらに東端から別の溝が検出され、それぞれ1号溝、2号溝とした。

9月11日（木）晴れ

138番地の西側において住居跡の切り合い関係が明らかになり、昨日の鏡の出土地点が住居跡になりそうである。

141番地　1号溝は「八」字形にプランが見えていたが、別の遺構が重なっていることが明らかになった。溝自体は2号溝と平行に南北方向に伸びている。

9月12日（金）晴れ

138番地　鏡を出した住居を切っていた遺構は住居跡でなく深い落ち込みとなり、理解しがたい遺構になりそうである。東地区には3本の溝があることが判明し、東端の大溝には硬化面が見られる。

141番地　2号石棺の臼玉取り上げで総数151個となった。

9月13日（土）晴れ

138番地　鏡を出した住居を切っていた遺構は明らかに住居跡とは異なる性格のようである。とくに東側にほぼ並んで住居跡が検出されており、床面の深さもまったく異なっている特殊な掘り込みの様である。

9月17日（水）晴れ

268番地　東西トレンチの東端に溝が検出されていたが、溝の幅を確認するため長さ3m東側へ拡張した。

9月18日（木）晴れ

別府大学坂田助教授が住居跡床面の調査申請のため来館。141番地1号住居跡で調査してもらった。

9月19日（金）晴れ

鏡出土の件で博物館に於いて記者発表を行う。268番地　南北トレンチ中央部の溝上面において道路跡を検出した。131番地においても道路跡が確認された。

9月23日（火）晴れ

一日発掘調査隊を実施。141番地1号住居跡から足痕発見を報告したら報道関係者が取材し全国放送となった。

9月30日（火）晴れ

足跡石膏を持参して河村市長へ説明に行く。

10月2日（木）くもり

141番地1号石棺の蓋石をはずした。全長1m程度で遺物は見られない、ただし、石材の目張り様の粘土に指の痕跡が見られた。

10月9日（木）晴れ

131番地　中央部の大溝の輪郭は未だ見えないが、土器が大量に出土しており露出作業に手がかかり、かなりの規模になりそうである。

10月11日（土）晴れ

141番地1，2号溝最下層まで掘り下げ完了。1号溝より石製のみ出土。

10月14日（火）くもり時々晴れ

131番地東端部で溝らしき落ち込みが見られるが、狭くて確認できない。大溝がようやく姿を現しているが幅は未だに明らかにならない。

10月16日（木）晴れ

別府大学坂田助教授足痕調査再来。141番地1号石棺内の指痕を見ていただき、石棺内の精査を行ってもらった。その結果乳歯が並んだ状態で検出された。138番地東端の溝底から道路状遺構が検出された。楕円形の落ち込みに円礫を敷き詰めたもので、北東から南西に向って伸びていることが明らかになった。

10月17日（金）晴れ

本日から遺構の実測に集中するため作業員さんは休みとした。

10月21日（火）晴れ

138番地　大溝および西側土器密集地の実測終了。

10月24日（木）晴れ

文化庁記念物課　磯村幸男調査官、熊本県文化課松本健郎氏と共に視察のため来訪。その際、県より掘り過ぎとの指摘がある。

10月29日（水）晴れ

268番地溝内より近畿系の壺1点が出土しているこ

とが判明。櫛描文による波状文、沈線。円形貼付文等が見られる。九州では特異な形状である。

10月31日（金）晴れ

138番地　中央区大溝完掘。141番地　1号溝と2号溝を掘り下げ終了。

11月4日（火）晴れ一時くもり

268番地　東西トレンチの東端から溝状遺構が検出され、東側にある谷に沿って構築されている事が判明したため、溝追跡のために2本のトレンチを増設し東西2，3トレンチとした。

138番地でも南へ20m移動したところに長さ30mの東西第2トレンチを設定した。ここでは138番地と141番地から検出された溝状遺構の関連性について明らかにすることを目的とした。

11月7日（金）晴れ

朝から米田小学校5、6年生77名が体験学習のため博物館で方保田東原遺跡出土の土器を水洗作業させた。午後から博物館考古学講座の受講生12名が方保田東原遺跡で体験発掘を行った。

11月11日（火）晴れ

138番地第2トレンチで3本の溝が確認されたが遺構上面で止めている。溝上端の不明確なものが数本存在している様だ。

11月18日（火）晴れ

131番地では溝上面に遺物が大量に出土しているが、道路状遺構がさらに上面の両端に走っているため溝自体の幅が確認できない。

11月19日（水）晴れ

文化庁記念物課岡村主任調査官を招いて調査検討会を行う。遺跡の範囲を早急に確定し保存地域と開発許可地域の決定をするよう指示を受ける。文化庁としての応援を約束された。

11月27日（木）晴れ

268番地道路状遺構と溝状遺構が重複しながら東西方向に延びている事が判明。

12月2日（火）くもり一時雨

本日で一応の区切りをつけ、追加調査は予算の追加内示を受けてからとなった。

平成10（1998）年

1月27日（火）くもり

追加調査開始。267番地で溝の追跡調査のため2本のトレンチ設定し掘り下げる。

1月29日（木）晴れ

267番地　第1トレンチは地山層が浅く、明確な遺構は出ていないが、北側の第2トレンチでは地山層が深く、古代から中世にかけての遺物が集中して出土している。

2月4日（水）くもりのち晴れ

136番地　第1トレンチでは遺構の確認はされていない。第2トレンチでは東端部に溝が出てきそうである。

2月5日（木）晴れ時々くもり

136番地第1トレンチでも東端部に溝状遺構が確認できた。

2月10日（火）くもり

131番地で上部が不確実だった溝を確認するため南側に位置する132番地にトレンチを設定した。

2月17日（火）晴れ時々くもり

132番地では未だ遺構の確認は出来ない。何ともはっきりしない土層である。

2月26日（木）くもり

本日は別府大学賀川光夫先生、熊本大学甲元真之先生を招いて調査検討委員会を開催した。

2月28日（土）くもり

268番地では道路状遺構と溝状遺構を追跡するために東西第5トレンチを設定し、掘り下げはじめた。

南北トレンチ大溝南側の上層は自然によるもので人為的な層でないことが明らかになった。

3月3日（火）晴れ

136番地　溝状遺構の中から大型の鉄斧が出土、土器も大きいものが多く見られ、比較的古い時期（後期）のものがあり、溝の古さから見ても管理センター下で見られた大溝との関連が考えられそうである。

3月7日（土）晴れ

136番地溝状遺構内の遺物実測を終え一部取上げた。138番地では祭祀遺構の底をめざして遺物を取上げた。まだまだ出そうである。

3月13日（金）晴れのちくもり

136番地第1トレンチ東端を昨日の午後から掘り下げるが遺物は少ない。138番地祭祀関連遺構遺物出土

状況の実測は数日かかりそうである。

3月17日（火）晴れ

267番地での中世遺物がようやく取上げられた。瓦質土器等から熊本市文化課の網田，美濃口氏によれば11世紀末から12世紀初頭のものとのことである。

3月18日（水）晴れ

268番地祭祀遺構底より女性の子供の足跡が検出された。

3月19日（木）晴れのち小雨

本日を持って今年度の調査を終了した。

3　平成10年度の調査

12月5日（土）晴れ

トレンチ設定、国土座標に載せて幅2mで東西方向に9本を設定し、総延長280mに達した。

12月11日（金）晴れ

前日と同じく825番地第1，2トレンチと824－2番地のトレンチを掘り下げる。814番地第1トレンチのピットを掘ったが数が多くて終わらなかった。

12月16日（水）晴れ

814番地第1トレンチ実測開始。813番地では白粘土が数ヶ所見られる。

12月19日（土）晴れ

814番地第2トレンチ廃土中から墨書土器発見「日」と書かれている。

平成11年

1月6日（水）晴れ

814番地第2トレンチから須恵の円面硯出土

1月8日（金）くもり時々晴れ

824番地第2トレンチで溝が交差していることが判明。

1月29日（金）晴れ

821番地トレンチより越州窯系青磁碗出土。別府大学坂田助教授足跡調査来訪。

2月6日（土）晴れ

久々の好天で実測作業も順調に進む。

2月13日（土）晴れ

814番地第3トレンチ3号住居で足跡検出作業を坂田先生が行う。

2月19日（金）くもりのち晴れ

814番地第2トレンチ溝底からベンガラ入りの甕が出土した。

2月24日（水）雨のちくもり

文化庁記念物課小池調査官を招いて調査指導を受ける。

2月26日（金）くもりのち雨

徳島文理大学石野博信教授と学生3名見学。

3月6日（金）晴れ

ほぼ本年度の調査を終了した。

4　平成11年度の調査

9月8日（水）晴れ

トレンチ設定と表土剥ぎと地形測量を行なう。831番地は幅2m長さ30mの中に、両端と中央の2ヶ所をグリット状に掘り下げた。このほかも同様の方法で調査を進める予定である。

9月9日（木）晴れ

831番地では芋穴検出。932－2番地では白粘土がまとまって出土、下から硬化面確認。

9月13日（月）くもりのち晴れ

昨夜までの雨で水と泥が溜まり、調査区内の排水作業と廃土作業に終始した。

9月17日（金）晴れ時々くもり

932－4番地は実測にはいる。

9月20日（月）晴れ

831番地では溝を掘り上げ南北方向に伸び、逆台形になっている。

9月29日（水）晴れ

932－2番地では古代の不整形土坑を掘り下げた。西側の竈周辺からは硬化面は確認できなかった。

10月1日（金）晴れ

831番地　2区の溝は大半を検出した。底は粘土層から礫層に達している。932－1番地は今日からグリット名を変更し南からNo.1・No.2・No.3とする。

10月8日（金）晴れ

831番地　実測。886－1番地　遺構検出作業。

10月14日（木）晴れ

831番地　遺物実測と取上げ。

11月1日（月）くもり

831番地　1区で小形の土製勾玉が出土。

11月4日（木）はれ

本日より新たに県道南側の117－2番地と220番地に

調査区を設定する。

11月11日（木）晴れ時々くもり

220番地　土師器の碗がまとまって出土している。

11月19日（金）晴れ

220番地　中央部と東端で見えていた遺構は溝になった。西端では中世の溝が出ており、かつてサンチェリー工業増築に伴う調査で検出されたものの延長であることが判明した。

11月22日（月）晴れのちくもり

220番地　2トレンチの東端の溝から大量の土器が検出された。古い時期の甕が出ている。

11月26日（金）くもり時々晴れ

831番地調査完了。220番地2トレンチ西端で出ていた中世の溝の東肩を掘りあげた。礫層を掘り込んでおり、埋土は礫を含み暗褐色土である。かなり急激な勾配で下に落ちていく。遺物は少なかった。

5　平成12年度の調査

7月31日（月）くもりのち雨

209番地と196－1番地で重機により表土剥ぎを行った。196－1番地ではかなり撹乱を受けており、表土の下から悪臭を放つ泥炭層からビニールと伐採された樹木が出た。

8月7日（月）晴れ夕刻雷雨

209番地では調査区の両壁を垂直に削り落とし、遺構検出に移る。龍泉系の青磁碗の破片が出ている。

8月11日（金）晴れ

209番地南端で炭化籾が出土した、時期は不明。

8月23日（水）晴れ

雨が続いたので久々の現場である。209番地4区では銅鏃が出土した。

8月30日（水）くもり

相変わらず遺構の検出に至っていない。そのため一部で掘り下げたところ溝と住居跡らしいラインが見えた。

9月11（月）くもり時々晴れ

3区では南北溝と東西溝との前後関係を確認し南北溝が古いことが判明。

9月12（火）くもり

3区東西溝から鉄製釣針出土。

9月20日（水）晴れ

米田小学校体験学習で196－1番地を発掘させる。32名のこどもたちはとても楽しそうであった。

9月23日（土）晴れ

昨日午後の雨で水汲みが大変であった。本日は博物館主催の一日発掘調査隊を196－1番地の調査区を利用して行った。

9月27日（水）晴れ

196－1番地では道路状遺構が出ている。

209番地1区は実測に取り掛かる。

10月4日（火）晴れ

209番地5区で大溝の南側の肩を確認、北と異なり緩やかな傾斜である。

10月12（木）晴れ

196－1番地3区の道路幅は1.5m程度で北西から南東に向っている。路面には土器片が敷き詰められており、一面に広がっている。

10月13日（金）晴れ

196－1番地5区の溝は南肩を検出できた。溝上面の幅は5.6m、底幅3m、深さ2mを測る。サンチェリー工業内で確認された溝とつながり、昨年220番地第2トレンチで出た溝に続くものである。

10月31日（月）晴れ

209番地4区の東西2本の溝が南側の大溝で切られそうである。

11月7日（火）晴れ

209番地3区東西溝実測終了。5区の大溝は東西2本の南北溝を切っていた。

12月7日（木）晴れ

熊本大学甲元教授視察、209番地5区大溝について指導される。重要性を示唆される。

12月8日（金）晴れ

本日で調査終了。

第３節　調査の組織

平成８年度

調査主体	山鹿市教育委員会
調査総括	中原　哲哉（山鹿市教育長）
調査事務	木上幸一郎（文化課長）
〃	木村　理郎（〃課長代理・文化財係長）
〃	次木万里子（〃主査）
〃	井上　欣也（〃主事）
調査指導	小池　伸彦（文化庁記念物課調査官）
	隈　　昭志（博物館長）
調査員	中村幸史郎（博物館副館長）
〃	前田　軍治（文化課嘱託）（調査担当）
〃	山口　健剛（〃）（調査担当）
調査補助員	上田健太郎　辻村美代子　藤江　望
	林　季美子
発掘作業員	一森正隆　井上秀美　奥村泰子
	父母勝代　垂水明美　冨田スミ子
	松尾秋博　松本誠剛　丸山武水
シルバー	奥村千鶴子　高橋信子　高橋道明
人材センター	野田辰起　福山千代美　福山陽子
	堀京之助　平尾トシ子　前川誠一
	宮崎静子　若杉教子　若杉美也子
	若杉久子
整理作業員	一森正隆　井上秀美　岡小夜子
	奥村千鶴子　奥村泰子　城　葉子
	高橋道明　立山琢朗　立山大二朗
	父母勝代　垂水明美　野田辰起
	福山千代美　福山陽子　堀京之助
	平尾トシ子　前川誠一　光永亜由美
	八木田博史　山崎絹子　若杉教子
	若杉美也子　若杉久子
調査協力	本田春一郎　飯田廣伸　飯田豊
	若杉明憲　飯田隆義

平成９年度

調査主体	山鹿市教育委員会
調査総括	中原　哲哉（山鹿市教育長）
調査事務	木下幸一郎（文化課長）
〃	木村　理郎（〃課長代理・文化財係長）
〃	井上　欣也（〃主任主事）
調査指導	岡村道夫（文化庁記念物課主任調査官）
〃	坂田　邦洋（別府大学助教授）
	隈　　昭志（博物館長）
調査員	中村幸史郎（博物館副館長）（調査担当）
〃	山口　健剛（文化課主事補）
〃	前田　軍治（文化課嘱託）（調査担当）
調査補助員	大坂亜矢子　高濱潔　前田光則
	松本誠剛　士野雄貴
発掘作業員	一森正隆　井上秀美　奥村泰子
	木庭慶子　酒井太志　島崎貴代子
	父母勝代　垂水明美　角田豊治
	冨田スミ子　山崎絹子
シルバー	奥村千鶴子　近藤裕子　坂本　光
人材センター	高橋信子　高橋道明　竹熊安晴
	中原照代　中原美代子　野田辰起
	野満イツ子　福山千代美　福山陽子
	船津京子　堀京之助　平尾トシ子
	前川誠一　松山カチ子　宮崎静子
	若杉教子　若杉美也子　若杉久子
整理作業員	一森正隆　岡小夜子　小原朱美
	木庭慶子　酒井太志　島崎貴代子
	城　葉子　角田豊治　冨田スミ子
	中山美恵子
調査協力	飯田貞雄　岩下義典　前田敏範
	福山賢護　濱武伊津男　若杉恵美子
	若杉勝治　網田龍生、美濃口雅朗

平成10年度

調査主体	山鹿市教育委員会
調査総括	中原　哲哉　（山鹿市教育長）
調査事務	木下幸一郎（文化課長）
〃	木村理郎（〃課長代理・文化財係長）
〃	井上　欣也（〃主任主事）
〃	八木田由美（博物館主査）
調査指導	賀川　光夫　（別府大学名誉教授）
	甲元　真之　（熊本大学教授）
	小池　伸彦　（文化庁記念物課調査官）
	坂田　邦洋　（別府大学助教授）
	隈　昭志　（博物館長）
調査員	中村幸史郎（博物館副館長）

〃	山口　健剛（文化課主事）（調査担当）
〃	前田　軍治（文化課嘱託）（調査担当）
発掘作業員	島崎貴代子　山崎絹子　木庭慶子
	緒方正和　冨田スミ子　若杉清美
	谷川亜紀子　前田光則　松本尚子
	茨木浩一
シルバー	高橋道昭　堀京之助　堀比沙子
人材センター	奥村千鶴子　宮崎静子　平尾トシ子
	森本タツ子　若杉敬子　若杉教子
	竹下章子　福永ケイ子　武藤スミ子
	武藤栄一　武藤代子
整理作業員	岡小夜子　城　葉子　中山三恵子
	小原朱美　宮田京子　森みつよ
	山口美智子　島崎貴代子　山崎絹子
	木庭慶子　冨田スミ子　谷川亜紀子
	前田光則　松本尚子
調査協力	飯田憲助　飯田晃敏　小田一幸
	小田則敏　若杉一男　若杉英資

平成11年度

調査主体	山鹿市教育委員会
調査総括	中原　哲哉（山鹿市教育長）
調査事務	木下幸一郎（文化課長）
〃	木村理郎（〃課長代理・文化財係長）
〃	井上　欣也（〃主任主事）
〃	八木田由美（博物館主査）
調査指導	岸本　直文（文化庁記念物課調査官）
	坂田　邦洋（別府大学助教授）
	隈　　昭志（博物館長）
調査員	中村幸史郎（博物館副館長）
〃	山口　健剛（文化課主事）（調査担当）
〃	前田　軍治（文化課嘱託）（調査担当）
発掘作業員	島崎貴代子　山崎絹子　木庭慶子
	冨田スミ子　若杉清美　田代和之
	浜武和利
シルバー	高橋道昭　堀京之助　堀比沙子
人材センター	奥村千鶴子　宮崎静子　平尾トシ子
	森本タツ子　若杉敬子　若杉教子
	竹下章子　福永ケイ子　武藤スミ子
	武藤栄一　武藤代子　高松一二三
	中島房子　光永　瞳
整理作業員	岡小夜子　城　葉子　中山三恵子
	小原朱美　宮田京子　森みつよ
	山口美智子　島崎貴代子　山崎絹子
	木庭慶子　鵜口裕子　音光寺真理香
	田中裕子　福本洋子　野満美幸
	松村起代
調査協力	飯田隆義　福山千英　森本實喜
	若杉勝治　若杉　定

平成12年度

調査主体	山鹿市教育委員会
調査総括	中原　哲哉（山鹿市教育長）
調査事務	池田　幸一（文化課長）
〃	木村理郎（〃課長代理・文化財係長）
〃	井上　欣也（〃主任主事）
調査指導	禰宜田佳男（文化庁記念物課調査官）
	坂田　邦洋（別府大学助教授）
	隈　　昭志（博物館長）
調査員	中村幸史郎（博物館副館長）
〃	山口　健剛（文化課主事）（調査担当）
〃	前田　軍治（文化課嘱託）（調査担当）
発掘作業員	島崎貴代子　山崎絹子　緒方正和
	冨田スミ子　若杉清美　井上秀美
	垂水明美　福本洋子　島田厚一
	田口邦彦　北原光雄　山元雄介
シルバー	堀京之助　堀比沙子　奥村千鶴子
人材センター	宮崎静子　平尾トシ子　若杉敬子
	武藤代子　武藤スミ子　渕上信助
整理作業員	岡小夜子　城　葉子　中山三恵子
	小原朱美　宮田京子　森みつよ
	山口美智子
調査協力	宮本至誠

（中村幸史郎）

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

九州の中央に位置する熊本県には世界一のカルデラを誇る活火山の阿蘇山がそびえている。カルデラの北西部には標高1,118ｍの鞍岳が在り、西に向かって大きく裾部を広げている。裾の先端は長く伸びて台地を形成しておりその中の一つが通称花房台地である。

また鞍岳山麓には多くの谷が刻まれ、数多くの湧水地を配しておりその中の一つに菊池渓谷が含まれる。

菊池渓谷からの流れは大小65の支流を集め菊池市、山鹿市、玉名市等を通り有明海に注ぐ全長61.2㎞の菊池川となっている。

鞍岳山麓からの流れは花房台地を挟んで南北に分かれており、北の流れは菊池市街地に注いでいる。
この地から山鹿市志々岐までの間は蛇行しながら流れている。また山鹿市が位置する中流域では海抜20ｍ程度で支流の多くが集まっており、熊本県北部で降った雨の殆どがこの地域に流れ込んでいる。

加えて下流域の玉名地方との間には菊水町の山間部を通り抜けているため梅雨時の大雨には水の流れが滞り洪水が絶えなかった。そのため菊池市から山鹿市の間には東西15㎞、南北２㎞にわたり氾濫原が形成され、現在この地を菊鹿（きくろく）平野と呼んでいるが、一部は「茂賀の浦三千町」として古くから県内有数の重要な穀倉地帯を形成している。

方保田東原遺跡はこの氾濫原を見下ろすように菊池川中流域の右岸に発達した標高35ｍ～40ｍの河岸段丘に立地しており、南に菊池川、北にはその支流の方保田川に挟まれ段丘西側で合流している。そのため東側を基部として西に伸びる舌状台地になっている。

特に南側の菊池川の流れは現在の流れが当時のままであるかは断定できないが、菊池市指定文化財の「菊池川全図」によれば安政２年（1855）には現在の流れと変わらない。

現在の川の流れを概観してみると、菊池方面から流れてきた本流に鹿本町中富で迫間川と内田川が相次いで合流している。水量を増した菊池川は方保田の東で合志川と合流しているが、合志川が植木町平島方面から勢い良く北に向って流れ込んでいるため、菊池川を北に押し出すようにして流れ込んでいる。そのため菊池川の流れが西から北西に変わって流れ、そのまま方保田の台地を洗い流すかのようにぶつかり年々浸食をしている。

安政年間の絵図に描かれているからと言ってどのくらい時間的に遡れるか解らないが、目を転じて、氾濫原の状況を見ると、条里制遺構の存在によって考えることができよう。

昭和52年刊行の「熊本県の条里」によれば菊池川と迫間川に挟まれた菊池市と七城町の間、木野川及び内田川流域西側の鹿本町稲田、高橋、中富と山鹿市藤井の地区、菊池川と合志川に挟まれた七城町橋田地区、及び鹿本町分田、小柳、山鹿市長坂、南島といった地区の集落を結んだ線から南側に条里制がのこっている。しかし、毎年梅雨時に氾濫し水害が出ていた地域では条里の跡が見られないようである。

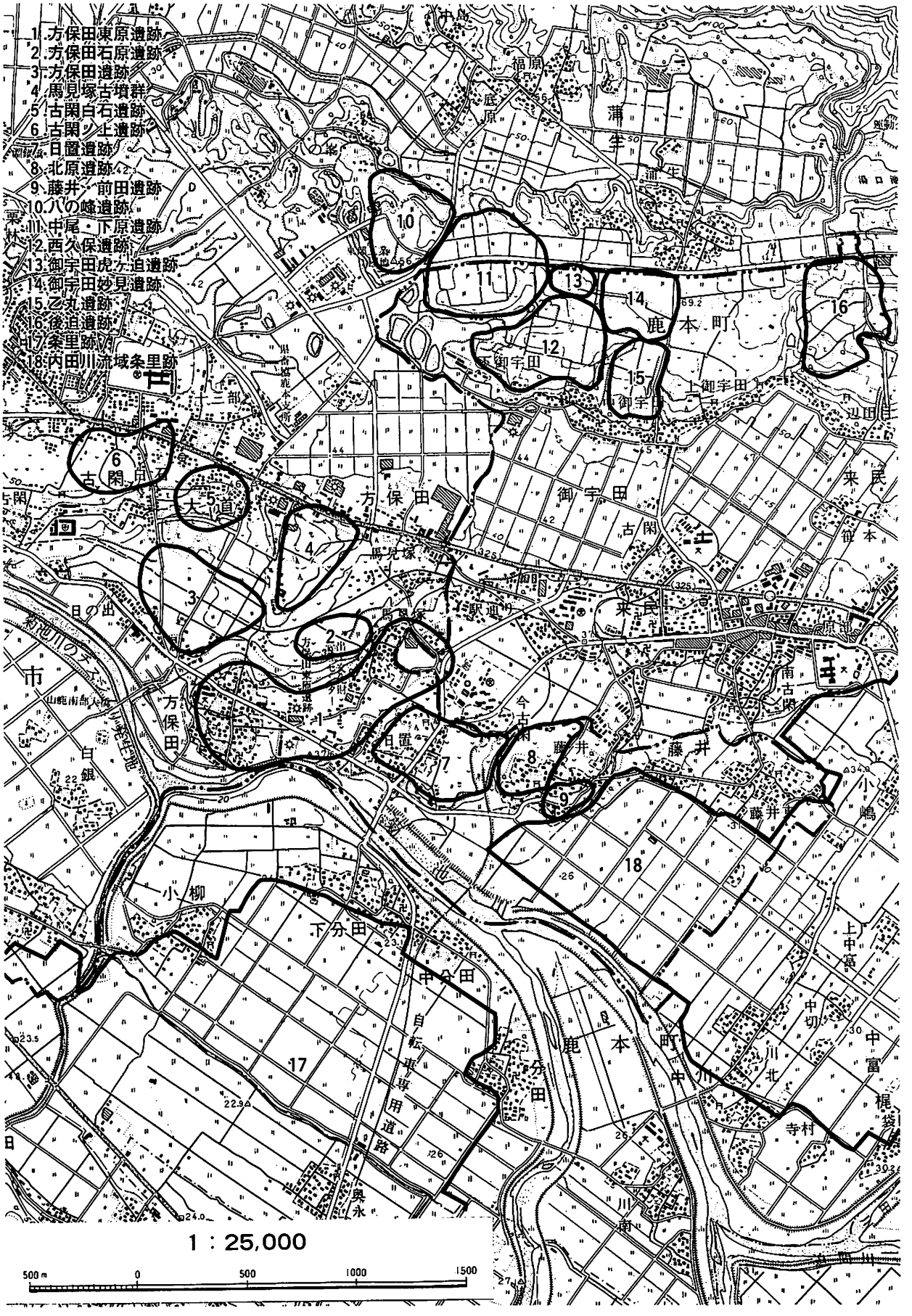
この事から少なくとも古代から今日まで川の流れが変化していないことを物語っており、弥生時代においても基本的には現状に近い川の流れであったものと推察される。

したがって、方保田東原遺跡の存在する舌状台地が菊池川に接していたことから、生活に不可欠な水資源や、魚貝類の水産資源の確保、さらには物資運搬等の水運、戦闘状況における防衛施設としての役割を担っていたものと思われ、方保田東原遺跡が優位性を保てた大きな要因であったことは明白である。

第２節　歴史的環境

熊本県内には弥生時代後期から古墳時代前期において拠点集落と呼ばれる遺跡が数多く存在しており、これまでにも発掘調査によって数多くの成果を挙げている。

特に玉名市柳町遺跡の調査では低湿地における初めての本格調査を行ったもので、現在の水田面の下に遺跡が残されていることを証明したことと、木製品を始めとした有機質の遺物の発見に貢献したことは、これまでの熊本県内の考古学的常識を覆した結果となった。


1.方保田東原遺跡
2.方保田石原遺跡
3.方保田遺跡
4.馬見塚古墳群
5.古閑白石遺跡
6.古閑ノ上遺跡
7.日置遺跡
8.北原遺跡
9.藤井・前田遺跡
10.八の峰遺跡
11.中尾・下原遺跡
12.西久保遺跡
13.御宇田虎ヶ迫遺跡
14.御宇田妙見遺跡
15.乙丸遺跡
16.後迫遺跡
17.条里跡
18.内田川流域条里跡
1：25,000
500m 0 500 1000 1500

第1図　遺跡分布図

また、弥生時代の遺跡の在り方においてもこれまでは台地上のみを中心に見ていたが、これからは平野の中も微高地を中心として発見に努めなければならないし、堆積層の下に遺跡が埋もれている可能性も高く、根本的に低湿地における遺跡の存在について念頭に置いた取り組みが不可欠である事を改めて認識した。

さて、菊池川流域における遺跡の在り方について概観してみることにする。

上流の阿蘇外輪山西側山麓ではこれまで詳細な調査がされていない事にも起因するが、大規模な遺跡は確認されていない。菊池市街地から山鹿市街地までの中流域では氾濫原およびその周辺において多くの遺跡を見ることができる。

上流側から見ると菊池市の外園遺跡は熊本県で最初に貨泉を出土した遺跡で、中国大陸との交流を考える上で重要な遺跡と言えよう。

七城町の台（うてな）遺跡でも貨泉を出土しているが、南に迫間川と菊池川を、西に内田川を見下ろす標高80mの台地上に位置している。熊本県の調査であるが、排水路及び道路内の調査であったため環濠のみの確認に終わっている。

同じく七城町の小野崎遺跡は北に菊池川、西に合志川を見下ろす標高60mの台地上に位置している。七城町教育委員会の手で調査が進められており住居跡、環濠等とともに青銅鏡を始め数多くの遺物を出土している。

鹿本町の津袋大塚遺跡は内田川の西側に位置し溝状遺構と多量の土器を出土しているが、詳細な遺跡の把握には至っていない。山鹿市であるがすぐ近くの蒲生上の原遺跡は標高95mの台地東端部に熊本県の調査で４重の環濠が廻っていることが確認された。

下流域は菊水町の諏訪原遺跡が見られ、未だに全容は明らかになっていない。

さて、目を転じて方保田東原遺跡の周辺における弥生時代の遺跡分布状況を見てみよう。なお遺跡名称は熊本県遺跡地図（熊本県教育委員会）に由った。

方保田東原遺跡の東側には日置遺跡、北原遺跡が広がり、共に土器の散布が確認されている。北東側には銅矛を出土した県立鹿本商工高校内の地園遺跡、北側の御宇田台地上には乙丸遺跡、西久保遺跡、御宇田妙見遺跡、御宇田虎ヶ迫遺跡、中尾・下原遺跡、八の峰遺跡等が存在している。

西側では方保田遺跡が広がっている。南側の氾濫原では弥生時代の遺跡の確認は出来ていないが、時折工事に際し地下２ｍで土器が出土ということで報告が有る所から考えて、遺跡が埋没したり、遺物が河川の氾濫等で流されている可能性もある。現在水田面として利用されており、現実には調査できない状況である。

第３章　調査の方法

第１節　調査の方法

今回の調査では遺跡の広がりと遺構密度の確認に主眼を置いており、より広範囲を対象とした。しかし、多くの土地が畑として耕作を行なっており、基本的に所有者の発掘同意が得られた部分の中で調査を進めていった。

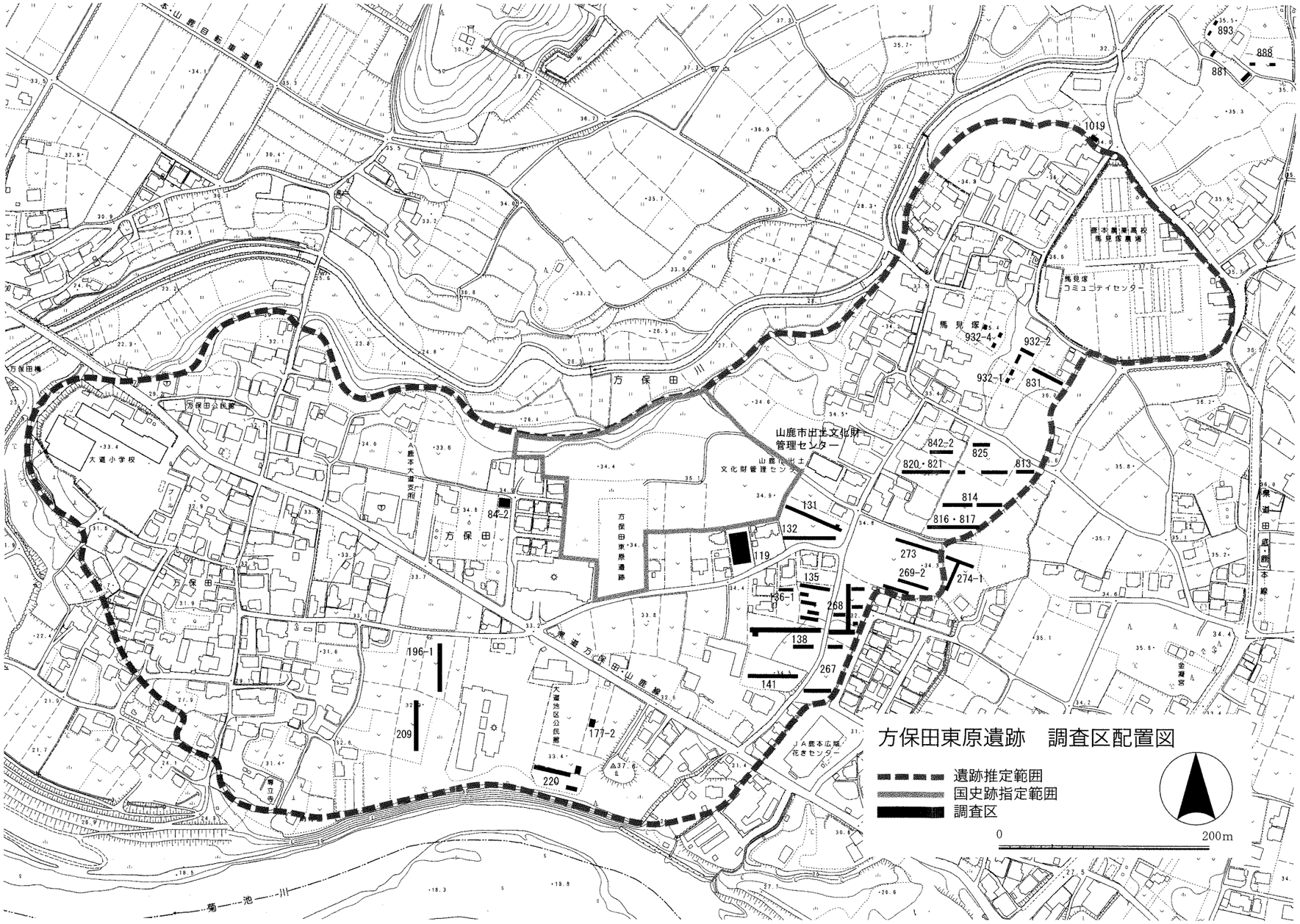
調査には地元の人々の献身的な協力により作付けを遅らせて頂いたうえに、調査に対する理解を深めていただいていることに対し頭が下がる思いであり、調査そのものが地域の人々に支えられていることを改めて知らされ、感謝の気持ちでいっぱいである。

このため年度で調査の方法に違いが見られ、初年度の平成８年度は個人住宅建設予定地を面的に広く調査を行ない、場所によってはトレンチ調査を実施した。

２年目の平成９年度は出土文化財管理センターの下から検出された大溝の追跡調査とし、出土文化財管理センターの南側を中心に調査を実施した。

調査に際しては国土座標に合わせて東西および南北方向に幅２ｍのトレンチを設定した。

３年目の平成10年度は方保田東原遺跡が地理的要因から東から西に伸びる形をしており、東側の基部に当たる部分が出土文化財管理センターの東側に標高36mのレベルで微高地として広がっている。遺跡内で最も高くなっているので墓域の可能性も考えられるところから調査を実施した。ここでも国土座標に合わせて東西方向に幅２ｍでのトレンチ調査とした。


方保田東原遺跡　調査区配置図
遺跡推定範囲
国史跡指定範囲
調査区
0
200m
方保田川
菊池川
山鹿市出土文化財管理センター
馬見塚コミュニティセンター
馬見塚
方保田
大道小学校
方保田公民館
JA鹿本大道支所
JA鹿本広域花きセンター
大道地区公民館
金灌宮
方保田東原遺跡
893
888
881
1019
932-4
932-2
932-1
831
842-2
825
820・821
813
814
816・817
273
269-2
274-1
131
132
119
135
136-1
268
138
267
141
84-2
196-1
209
177-2
220

第２図　調査区配置図

4年目の平成11年度には遺跡東端部では遺跡の輪郭の確認と台地南端部における遺構の確認に主眼を置いて調査を実施した。調査地の関係から畑の形状に合わせた方向でのトレンチの設定となった。幅は2mとした。

5年目の平成12年度では菊池川を見下ろすような所でサンチェリー工業の西側における遺構の確認を行った。ここでは国土座標に合わせて南北方向に幅4mのトレンチを設定した。

第2節　調査地区と地番

表－1　調査地区と地番

T：トレンチ．G：グリッド

小字	番地	調査地	長さ	幅	面積
平成8年度　調査地区					
東原	84－2		10	10	100
〃	119		34	15	510
〃	〃	北拡張部			11
平成9年度　調査地区					
東原	131	東西T	65	2	130
〃	131	南北T	5	2	10
〃	132	第1T	50	2	100
塚の本	136－1	第1T	19	2	38
〃	〃	第2T	18	2	36
〃	138	東西1T	100	2	200
〃	〃	南北T	10	6	60
〃	〃	東西2T	30	2	60
〃	141	東西T	50	2	100
一本杉	267	東西1T	24.8	2	49.6
〃	〃	東西2T	20	2	40
〃	268	東西1T	23	2	46
〃	〃	東西2T	5	2	10
〃	〃	東西3T	16.5	2	33
〃	〃	東西4T	17	2	34
〃	〃	東西5T	10	2	20
〃	〃	南北1T	50	2	100
〃	〃	南北2T	20	2	40
平成10年度　調査地区					
後原	813	第1T	26	2	52
〃	814	第1T	15	2	30
〃	〃	第2T	30	2	60
〃	〃	第3T	36	2	72
〃	816～7	第1T	49	2	98
〃	820～1	第1T	49	2	98
〃	824－2	第1T	25	2	50
〃	825	第1T	31	2	62
平成11年度　調査地区					
後原	831	第1T	30	2	60
馬見塚	932－1	第1G	2	2	4
〃	〃	第2G	2	2	4
〃	〃	第3G	2	2	4
〃	932－2	第1T	20	2	40
〃	932－4	第1G	2	2	4
〃	〃	第2G	2	2	4
〃	〃	第3G	2	2	4
〃	1019	第1G	3	2	6
金丸	881	第1T	8	2	16
〃	〃	第2T	8	2	16
〃	888	第1T	3	2	6
〃	〃	第2T	3	2	6
〃	893	第1T	3	2	6
〃	〃	第2T	3	2	6
塚の本	117－2	第1T	3	2	6
〃	220	第1T	3	2	6
〃	〃	第2T	20	2	40
平成12年度　調査地区					
〃	196－1		45	4	180
〃	209		50	4	200
					2867.6

（中村幸史郎）

第４章　平成８年度の調査

平成８年度は、個人住宅建設に伴う調査と範囲確認調査を行った。調査番地は84－２番地と119番地である。

第１節　84－２番地の調査（第３図）

個人住宅建設に伴って発掘調査を行った。住宅建設範囲である10m×10mの100㎡を調査対象面積とした。調査区からは住居跡2基、土坑2基、溝が1条検出された。調査前は畑地であった。戦後までは蚕業のため桑畑として利用されていたと地元の方から聞いている。最近は家畜の飼料としてトウモロコシなどが作られていた。

基本層序は、１層（表土－７cm）、２層（旧耕作土－12cm）の下に３層（明褐色土－22cm）、４層（褐色土－23cm）、５層（暗褐色土－30cm）、６層（暗褐色土－16cm）、７層（黄褐色土）と続く。３～４層に古代の遺物が多く包含する。５～６層が弥生時代後期後半～古墳時代前期の包含層で、７層が遺構検出面である。

５～６層で完形に近い土器が少なからず出土したので、その都度精査を行ったが、遺構を検出することができなかった。５層上面、６層上面が遺構検出面であった可能性は高い。

１　縄文時代の遺物（第４図）

縄文土器が４点出土した。いずれも包含層からの出土である。

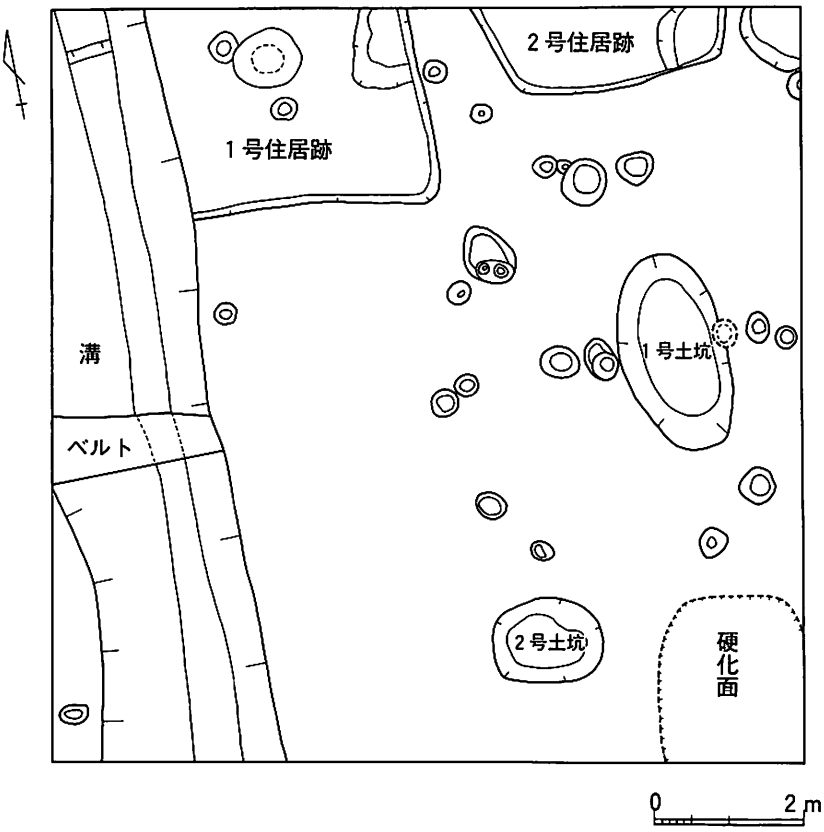
１、２は口唇部が肥厚し、そこに１は短斜線文、２には羽状文が施されている。３も口唇部が厚くなり、不明瞭であるが短斜線文が施されている。４は胴部と思われ、器壁が薄く、外器面に傾きの異なる斜線文が見られる。

文様や部分的な特徴から１～３は北久根山式、４は曽畑式と思われる。

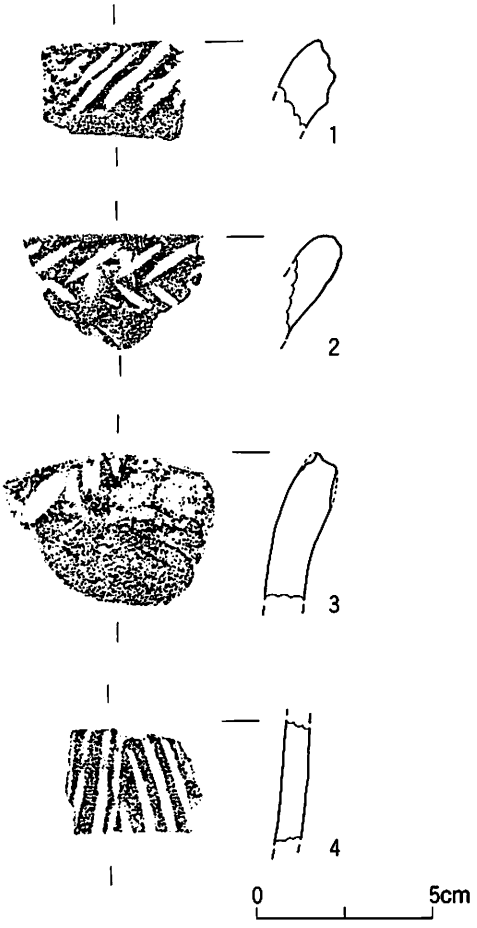
２　弥生時代後期から古墳時代前期の遺構と遺物

（１）　１号住居跡（第５図）

調査区の北西で検出された。北半分が調査区外で、西側が1号溝に切られているため、住居の規模は不明



第３図　方保田84－２番地　遺構配置図（S＝１／100）



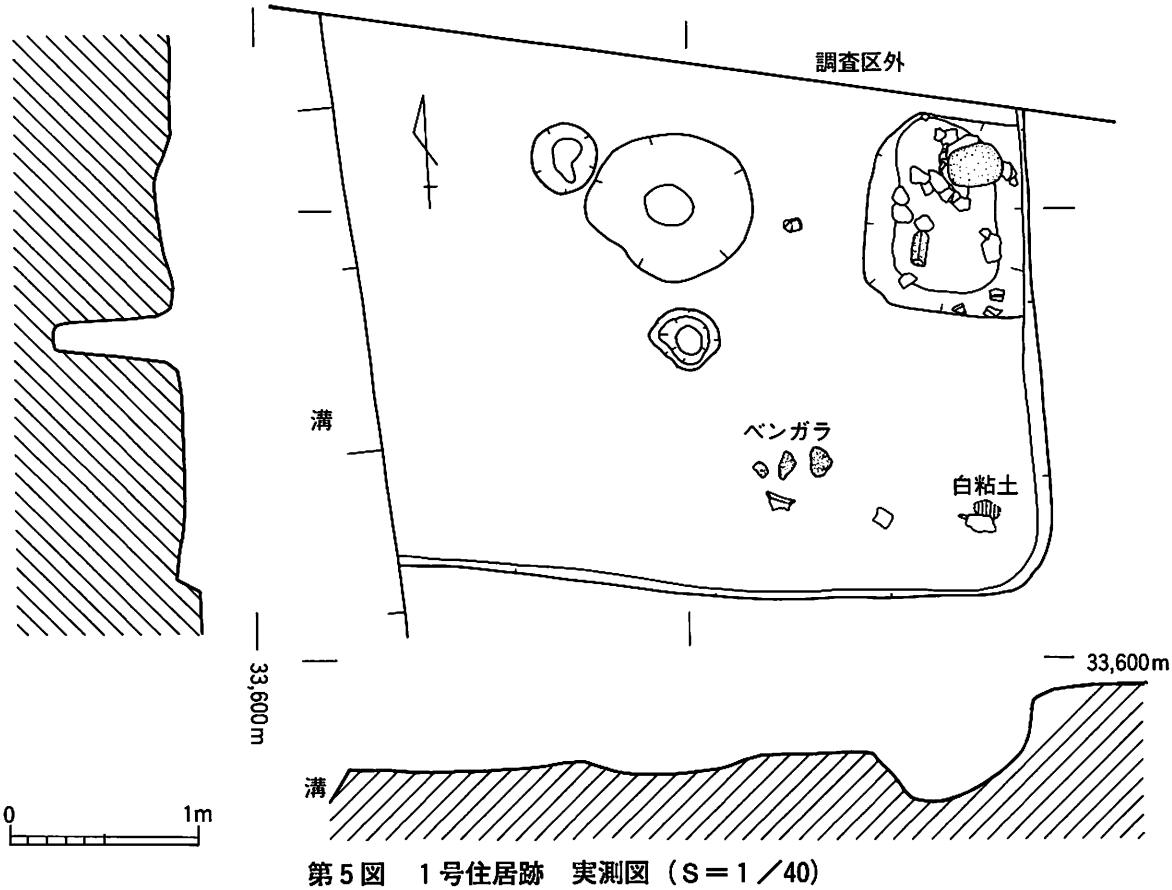
第4図　84-2番地出土　縄文式土器実測図（S＝1／2）

である。検出できた住居壁と主柱穴や炉の位置関係から推測すると、長さが4.1m、幅が3.9mになると思われる。検出面から床面までの深さは最大で38cmを測る。床はかなり硬化していてほぼ平坦に広がる。

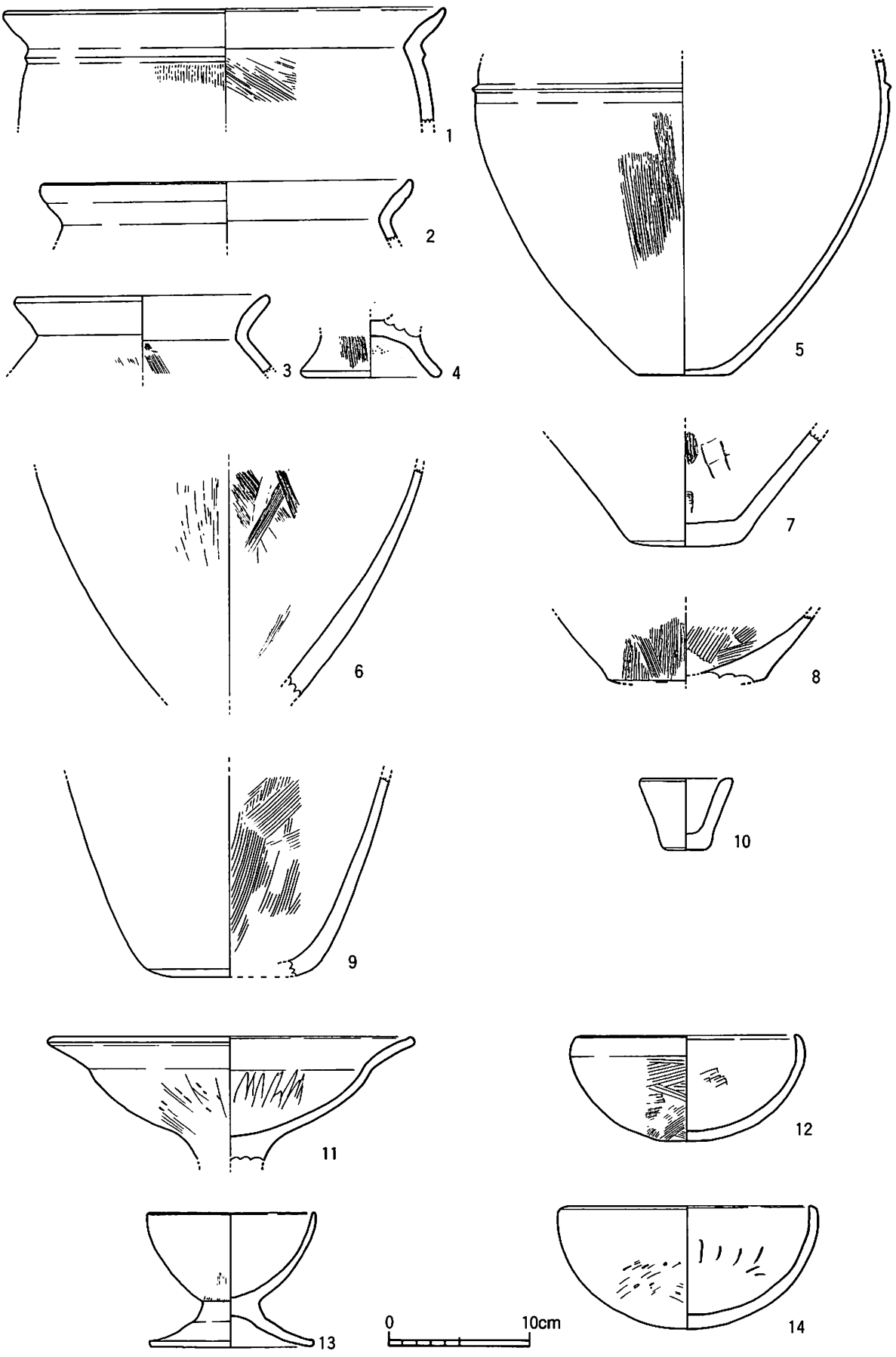
住居跡のほぼ中央部には径80cmの円形でスリバチ状の炉があり、すぐ西隣では径35cm、深さ10cmのピットが検出された。炉の埋土は炭化物と灰が混じる層で、その上に焼土層が堆積していた。各層の厚さは炭化物が18cm、焼土は10cmであった。

柱穴は炉の南側に1基検出した。深さは床面から65cmと深く、住居の主柱穴であると思われる。この配置からこの住居跡の主柱は、炉を中心に南北に対となる2本であると考えられる。

また、住居の東壁に沿ってほぼ長方形の土坑を検出した。長さ1.1m、幅が0.85mで、住居床面から底面までの深さは0.3mである。埋土は黄色土と黒色土が交互に厚さ3cm程度で堆積していた。また、この土坑内から30cm大の台石と、その直下に押しつぶされたかのような小片になった壺が出土した。壺のほかには、甕の底部、甕の口縁部なども出土したが、完形に復元できるものまでは無かった。これら土器片は被熱し、赤



第5図　1号住居跡　実測図（S＝1／40）



第6図　1号住居跡出土土器実測図（S＝1／4）

く変色したものも見受けられる。

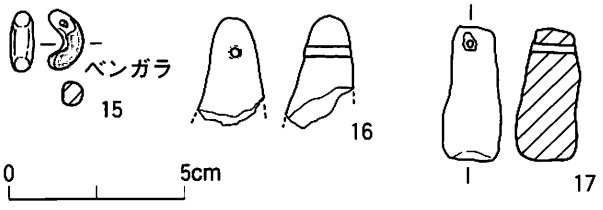
このほか、住居床面南東部でベンガラの散布が4カ所で確認され、南東部の壁近くではやや浮いた状態ではあるが、白粘土塊が3箇所にわたって散布していた。

遺物（第6・7図）

遺物は、甕の口縁部など土器片のほか、土製勾玉など土製玉類が3点出土している。（第6～7図）

出土土器のうち、3、6、7、9、10は住居内の土坑から出土した。1～3は甕の口縁部で、1は頸部に突帯がめぐる。5は壺の下半で胴部に1条の三角形の突帯がめぐり、底部は平底となっている。6は甕の胴部下半である。7、9は壺の下半部または底部で、いずれも内器面はハケ調整が施され、底部は平底である。10はミニチュアのコップ形土器と思われる。平底で、両器面ともなで調整である。11～14は住居上面での出土である。

15は土製の勾玉である。長さ1.6cm、幅0.5cm、厚さ0.7cmで、重さは0.7gである。表面にベンガラが付着している。16は不明土製品である。炉上面から出土した。他と同様に穿孔されている。湾曲部分から先端を欠く。17も不明土製品である。長さ3.5cm、径1.6cmで平面は台形を呈し、断面形は円形である。重さは9.3gである。上端に穿孔が施されてあり、穴の口の部分が磨り減っていることから紐が通されていたことが分かる。鐸形土製品の舌の可能性がある。



第7図　1号住居跡出土　土製品実測図（S＝1／2）

（2）　2号住居跡（第8図）

1号住居跡の北東で検出された。大半が調査区外であったため、住居の南側の一部しか検出できなかった。プランはややいびつであるがほぼ方形を呈するものと思われる。検出面から床面までは、6cmと非常に浅い。柱穴は検出されなかった。このほか、住居南壁沿いの東側で焼土ブロックを検出したが、それほどしっかりとしたものではなかった。住居東壁には深さ25cm程度の不整形土坑があって、その中から鉄片3点のほか、ジョッキ形土器や小型の甕、壺、鉢の口縁部などが出土した。

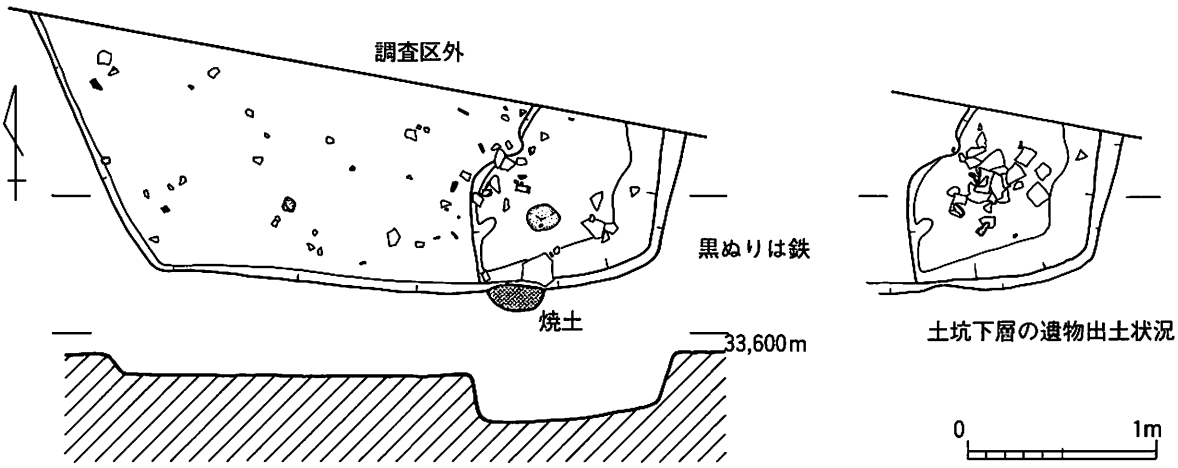
遺物は土器と鉄が出土した。（第9～10図）

土器は2及び7～10が埋土から、それ以外が土坑内の出土である。（第9図）

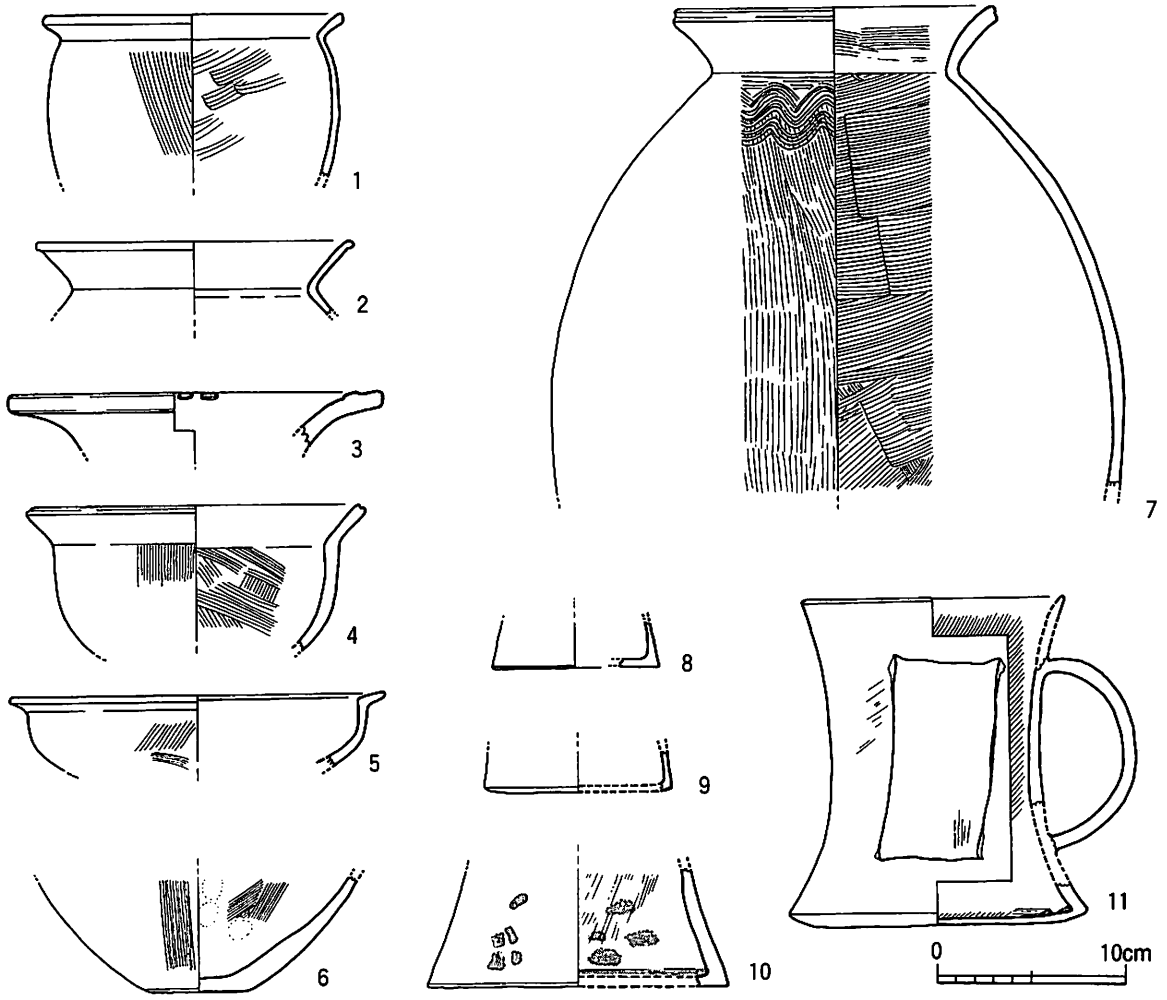
1は小型の甕口縁部と思われる。2は甕の口縁部と思われる。3は広口壺の口縁部である。口縁部上端に円形貼付文が2点施されている。4、5は鉢の口縁部である。5は非常に浅く、口縁部が外へ屈曲する。6は壺の底部と思われる。平底を呈する。7は壺の口縁部である。肩部には櫛描波状紋が、また、口唇部には1条の凹線が施される。8～10はジョッキ形の底部である。11はほぼ完形のジョッキ形土器である。口径が14cmと大型の部類に入る。底部はやや外側に膨らむ。底部内器面に鉄錆のようなものが付着している。外器面はナデ、内器面はナナメ刷毛で丁寧に調整されている。

住居跡内の遺物で特筆すべきこととして、多数の鉄の出土が挙げられる。発掘した部分はわずかであるのにもかかわらず、大小合わせて15点の鉄が出土した。鉄鏃の2点は製品として考えられるが、残りについては鉄片や鉄塊、棒状の鉄塊など製品として判断しづらいものである。ちなみに鉄鍛造に関係する遺物や遺構は見つかっていない。

鉄製品は、上記のとおり15点出土した。（第10図）このうち1は鉄鏃の茎部と考えられるが、それ以外は製品として考えにくいものであった。これら15点を、形状から4つに分類した。①幅1.5cm程度、厚さ0.5～0.8cmの棒状の鉄塊。②2×3cm以内の大きさで、厚さが0.3cm程度の小鉄片。③は2×3cm以上で厚さ0.3cm以上の板状鉄片。④は塊状の鉄塊である。



第８図　２号住居跡　実測図（Ｓ＝１／40）

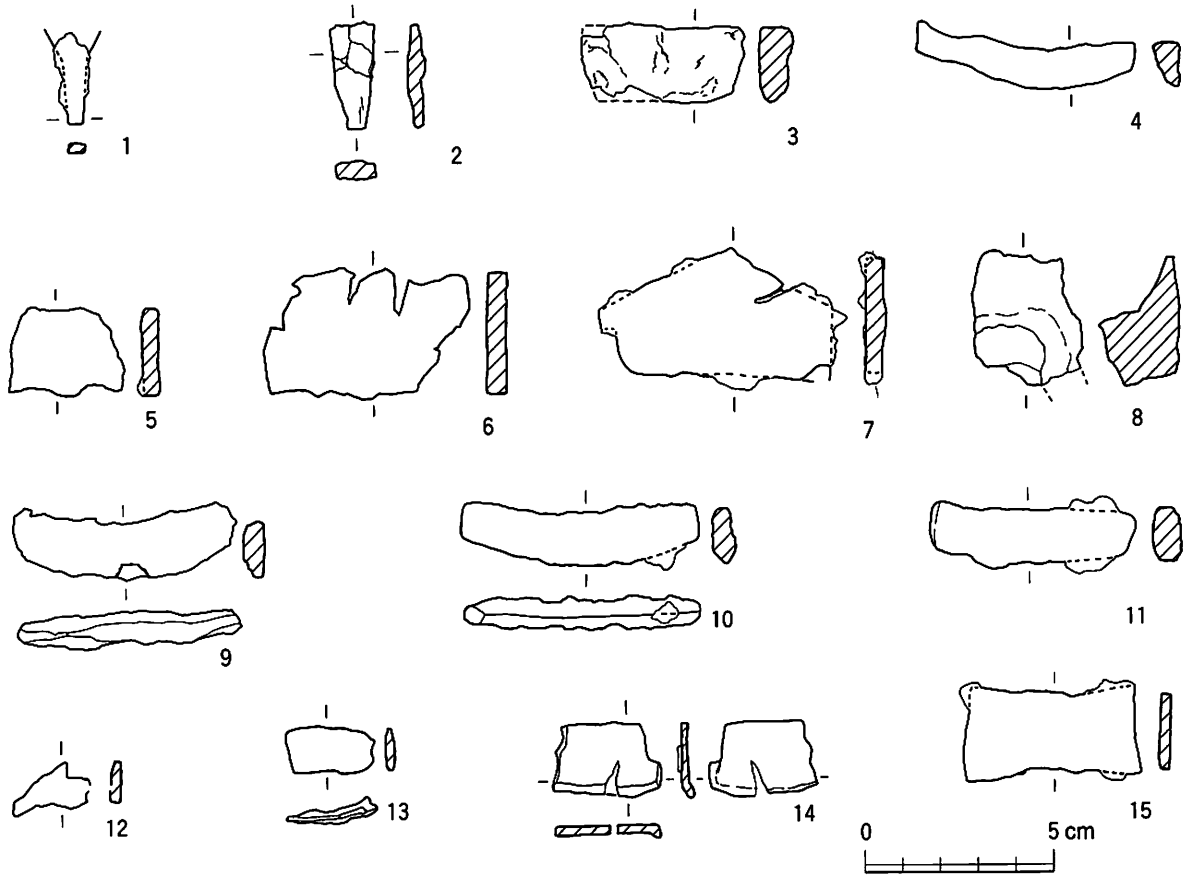


第９図　２号住居跡出土土器実測図（Ｓ＝１／４）

①は４点あった。９及び10は、形態、規模ともに非常によく似ている。平面形が緩やかな弧を描いており、断面形は隅丸長方形または、蒲鉾形である。10は、下辺がやや鋭利で刃部の可能性もある。４、11は上記の２点とは異なり、左右どちらかの先端近くにくびれのような部分が見られる。４がよりくびれが明瞭に見られ、断面から下辺は刃部の可能性もある。いずれも刀子の未製品か。②は５点である。13は図上辺に炭が付着する。全体が反っている。12は平面形が矢印のような形をしている。厚さは均一である。裁断され残った鉄片か。２は鉄鏃の未製品か。厚さはほぼ0.3cmと均一で、茎部が短い。茎部が発達していないことと明瞭な刃部を持たないことから未製品と判断した。３は図右辺が古い割れ面であるが、その他の辺は当初のものと思われる。厚さは0.3cmと均一で、表裏面ともに平面をなしている。14は下辺がやや鋭利で、刃部を持つ可能性がある。小型の片刃鉄斧として利用されたのかもしれない。③は４点である。５は平面形がほぼ台形で、厚さは0.5cmと均一である。四辺に刃部と思われる部分は見当たらず、むしろ裁断されたような印象を受ける。６は平行四辺形状の平面形をした板状の鉄片である。厚さ0.5cmと他に比べ厚みがある。破損の仕方が他と異なり、表面に２×２×0.2㎜程度の薄い鉄片が剥離する。鋳造品か？ 15は厚さが３㎜と均一で、平面の上下辺が内湾する。刃部は見当たらない。７は五角形を呈する板状鉄片である。右上辺に長さ９㎜、幅１㎜程度の切れ目が見られる。裁断の跡か。④は１点である。８は右下を欠く。下部から中部はほぼ正六面体を呈しているが、中部から上部にかけて徐々に厚みが薄くなっている。二つの物体が合わさったものではなく、上半部は叩かれた結果、延ばされたものではないかと思われる。

（３） 溝状遺構（第11～13図）

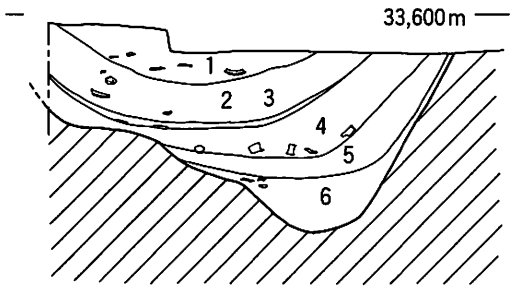
調査区の西端で検出された。溝状遺構（以下溝）の西壁は調査区外であるため、正確な幅は確認できなかったが、推定すると検出面で2.85mになると思われる。底の幅は20～65cmで、深さは0.94mを測る。溝の西側には幅30cmほどのテラス状が一段あって、そこから緩



第10図　84－２番地　２号住居跡出土鉄器実測図（S＝１／２）

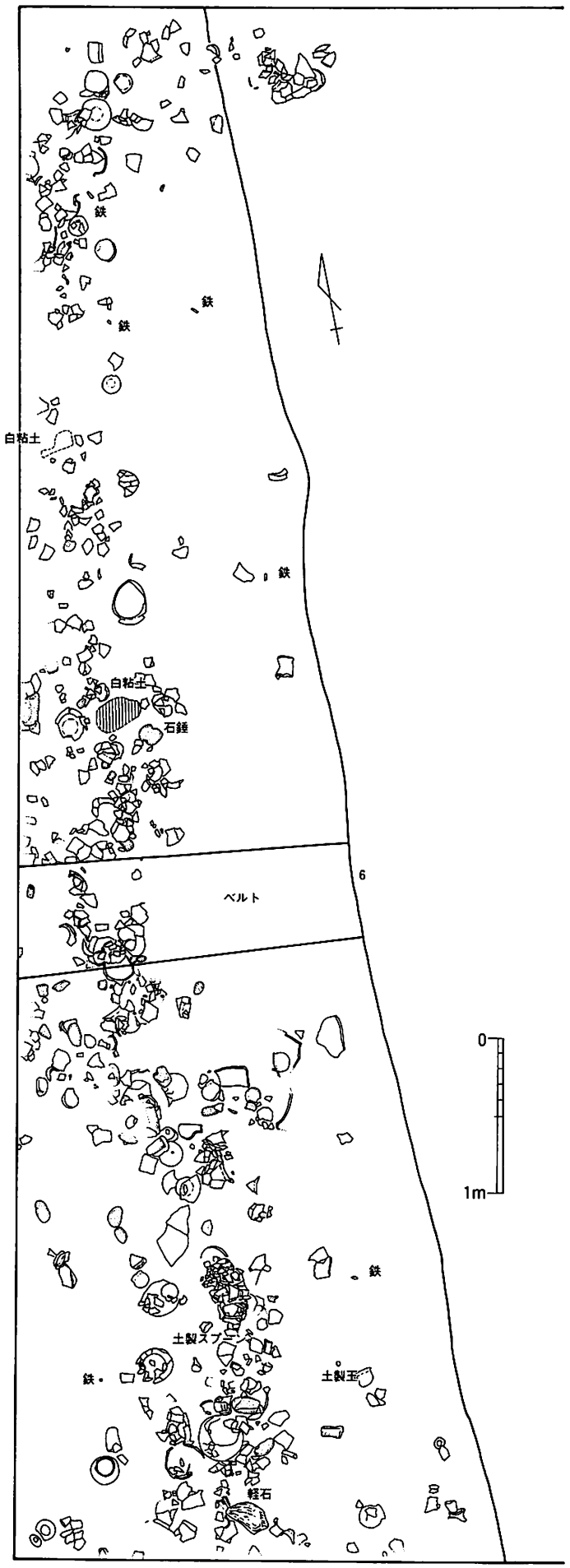
やかに底面へ傾斜していく。一方東側斜面は、西側と対照的に非常に急な勾配となっている。

土層の観察から、一度多量の土砂で埋まった後、再び溝が掘りなおされ、その後大量の廃棄された土器とともに埋没したようである。土砂は東から西へ流れて込んでいる。また、溝が浅い窪地状態であった段階で、再び多量の土器が廃棄されている。溝内の土器は中央から西側にかけての範囲に多く見られた。

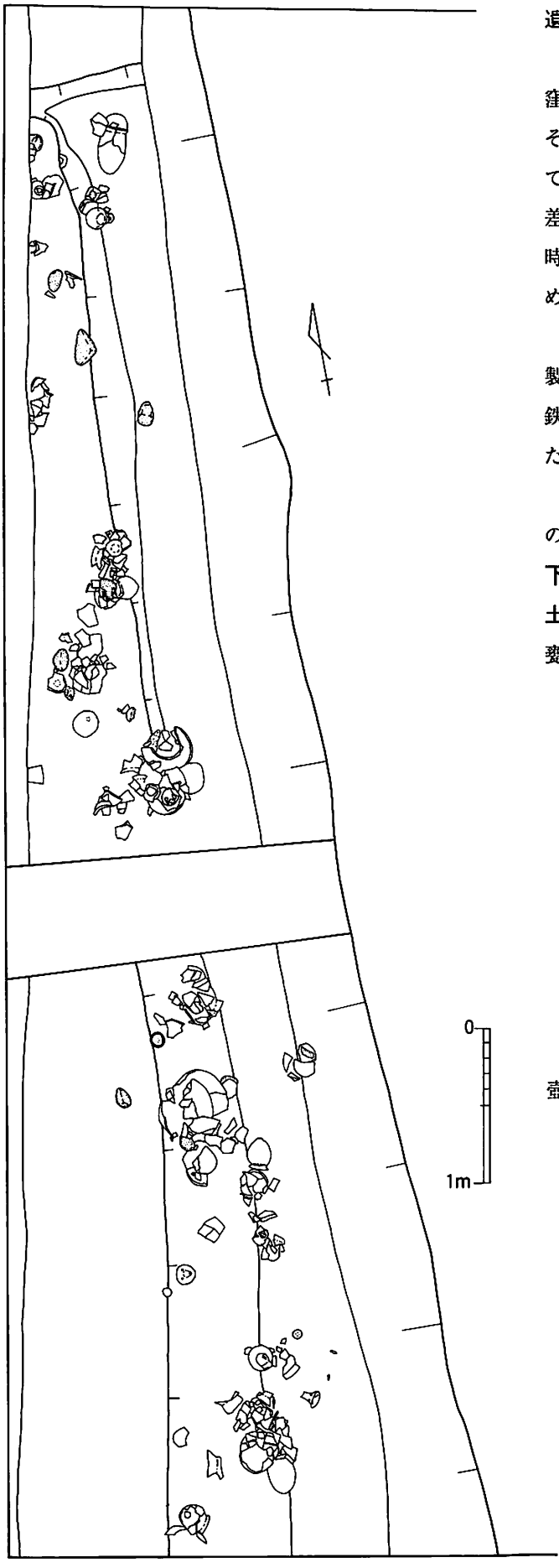


1層（暗褐色土）しまり、粘性ともにあまりない。多量の土器が出土
2層（褐色土）土質は1層と同じ。1層に黄色土粒が含まれる。
3層（暗褐色土）土質は上層と同じ。色調が2層と異なる
4層（明褐色土）しまりはあまりないが、粘性がややある。
黄色土粒やブロック状の黄色土を含むため、色調が他と比べ明るい。
土器がやや多い。
5層（暗褐色土）しまり、粘性がややある。4層に比べ色調が暗い。
6層（褐色土）しまりはあまりなく、粘性はややある。黄色土粒を多く含む。

第11図　溝土層断面(ベルト南壁)実測図(S＝1／40)



第12図　溝(上層遺物出土状況)実測図(S＝1／40)



第13図　溝(下層遺物出土状況)実測図(S＝1／40)

遺物（第14～25図）

遺物については、掘り直された段階までを下層とし、窪地の状態で廃棄されたものを上層として取上げた。その間で判断のつかなかったものを中層とした。よって、上層と下層には明らかな標高差があり、時期的な差があることが考えられるが、中層については取上げ時に明確な基準で分けた訳ではないので、時期差を求めることはできないことを明記しておく。

遺物については大量の土器のほか、80点の鉄器（未製品を含む）も出土した。重さにして600ｇを超える。鉄は溝中層～上層に見られ、特に上層で多量に出土した。今回はこれらのうち、実測可能な71点を掲載した。

土器の器種については甕、壺、高坏、鉢、器台、甑のほか、鉢を中心としたミニチュア土器も見られる。

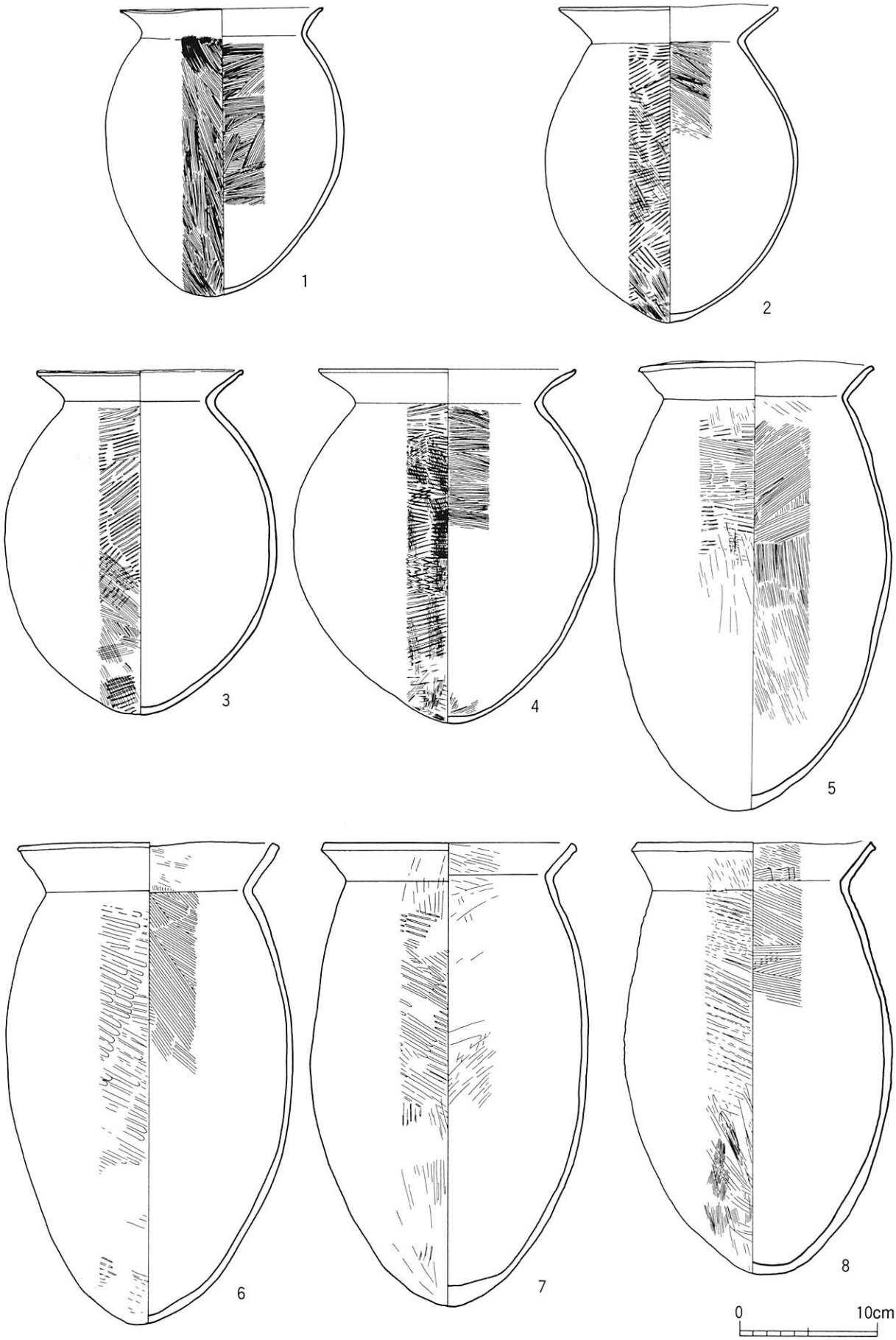
下層

土器（第14～16図）

甕　1、15は全面にハケ調整が施された甕である。1はやや長胴で、15は丸みがある。2～4は庄内系の甕である。外器面はタタキの後に一部ハケ調整が施されている。内器面は全面ヘラケズリのもの（3）と、上半がハケ調整、下半がヘラケズリのものとがある。5～8は、タタキ痕が明瞭に残る長胴の甕である。

9～14、16は小型の甕である。外器面がタタキ後ハケのものと、全面ハケのものがある。内器面についても、全面ヘラ削りと上半部がハケ調整されているものに分けられる。

壺　17、18は完形の広口壺である。19は大型の広口壺である。ラッパ上に開く口縁部を持ち、頸部には三角形突帯が1条巡る。口唇部には列点文が、肩部にはハケ調整後櫛描平行紋と波状紋が施されている。20は完形の広口壺である。ほぼ平底の底部から丸みを帯びながら最大径の肩部に至り、そこから頸部へすぼまる。口縁部は短く開いた後、ほぼ直立する。口唇部は丸く、外側にやや膨らむ。口縁部は横なで、肩部は横ハケ、胴部上半は斜め方向のハケ、胴部下半から底部にかけては縦方向のハケで調整されている。内器面は剥離している部分が多いため観察しづらいが、全面ヘラ削りである。器壁が非常に薄い。外器面の肩部にはヘラ状工具を押圧して施された羽



第14図　溝（下層）出土土器実測図①（S＝1／4）

状文がある。そのほか文様ではないが、斜め方向で色の濃い光沢をもつ部分が認められる。籠目痕と思われる。

高坏　29は高坏で裾部を欠く。坏部の両器面にはヘラミガキが施されている。30、31は高坏の脚部である。30の外器面には縦方向のヘラミガキが施される。裾部に4箇所の透かし孔がある。

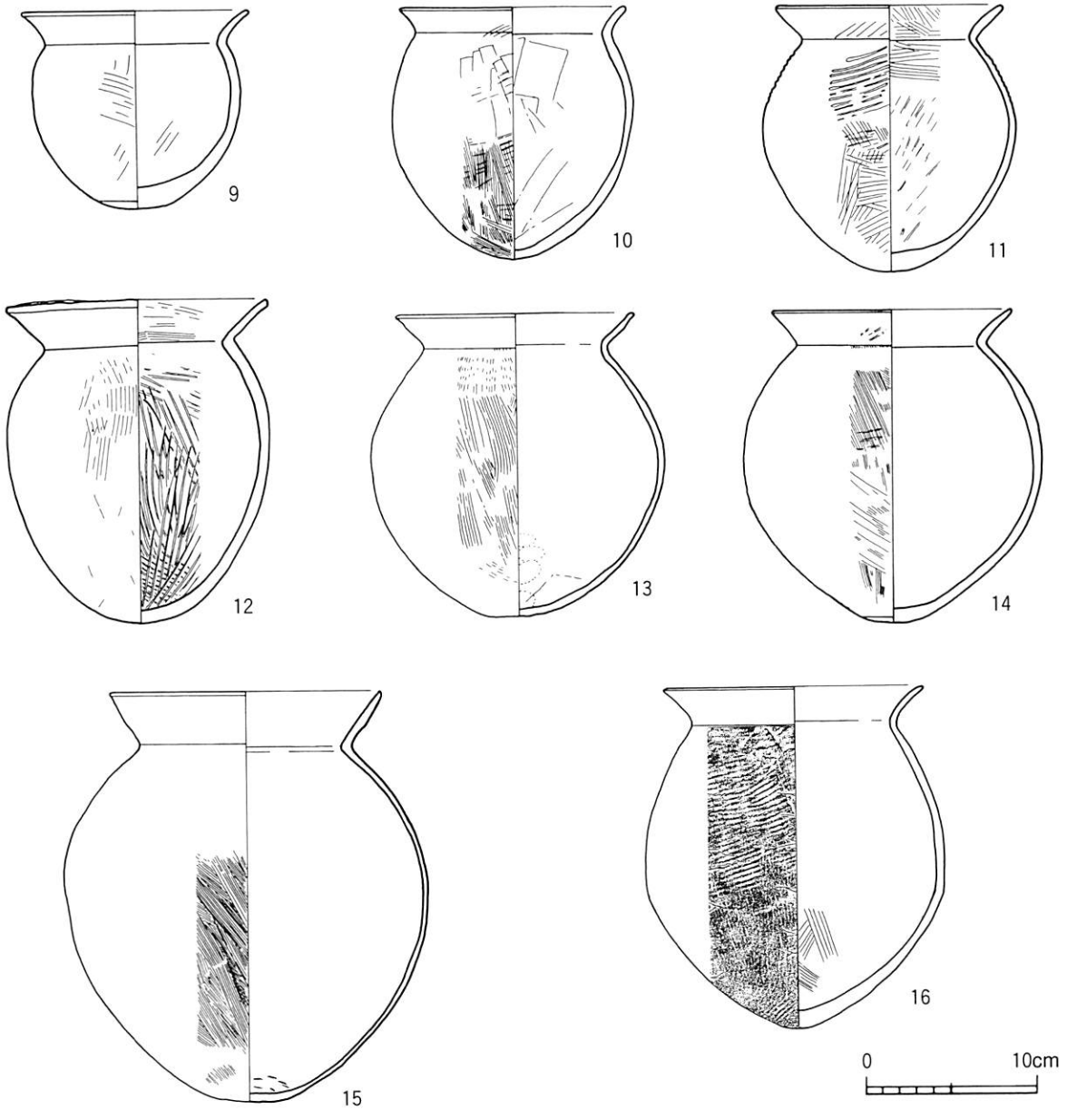
器台　25はつまみの付く沓形器台である。外器面は右上がりのタタキが、内器面には縦方向の指なでの痕が明瞭に残る。天面に穴があく。82は鼓形器台の上半部である。外器面はヘラ描き暗文が施される。内器面はヘラ削りである。

鉢　21～24は無頸の鉢である。26、27は無頸の台付鉢で裾部に4カ所透かし孔がある。28は有頸の台付鉢である。

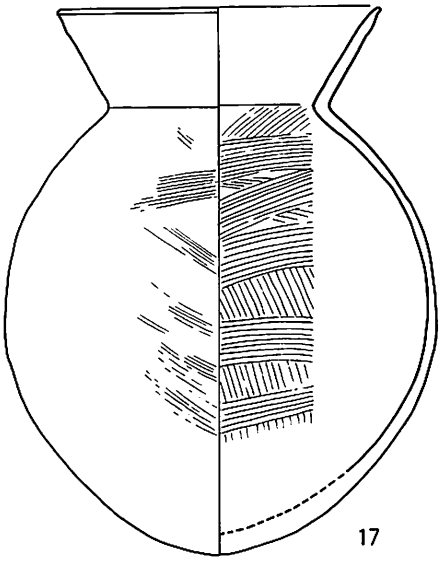
土製品（第22図）　1は土製玉である。直径3.1cmの球をなし、重さは28.0gを図る。穴の直径は0.28cmである。

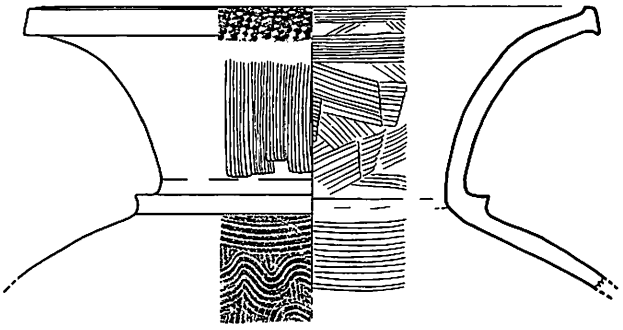
石器（第23図）　1は巨大な石錘である。両側を打ち欠いている。表面全体が赤く、打ち欠かれた部分だけ赤色が無い。重さ1054.8gとかなりの重量がある。

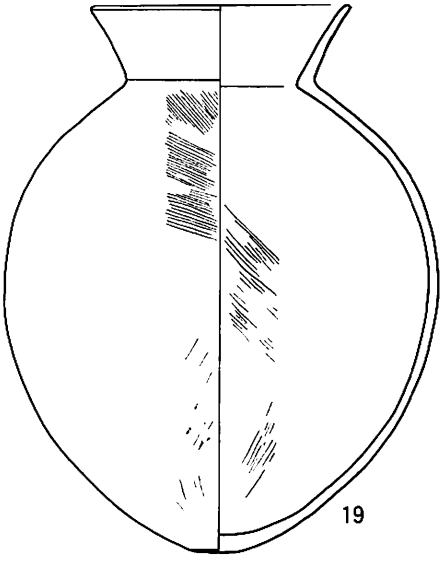
2は砥石である。長さ13.0cm、幅6.8cm、厚さ3.0cm

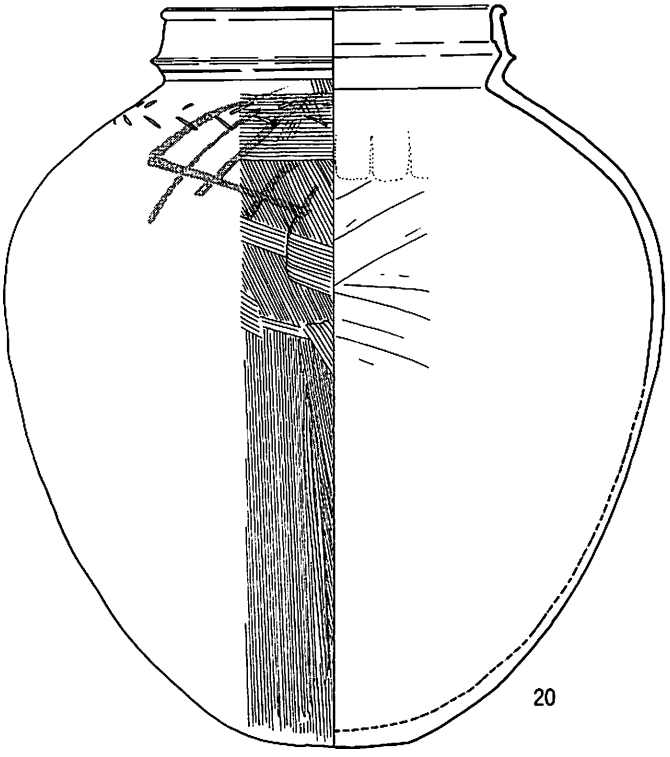


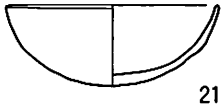
第15図　溝（下層）出土土器実測図②（S＝1／4）

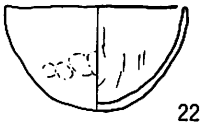

17

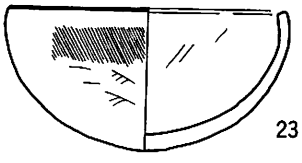

18

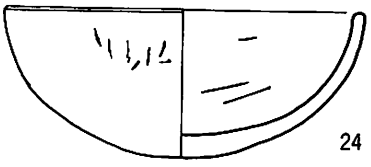

19

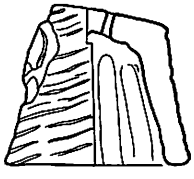

20

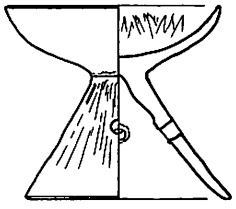

21

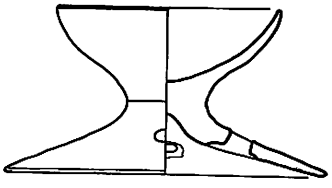

22

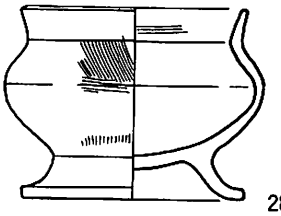

23

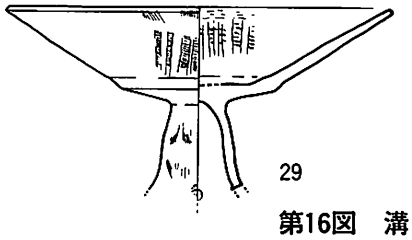

24

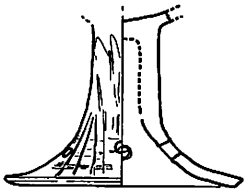

25

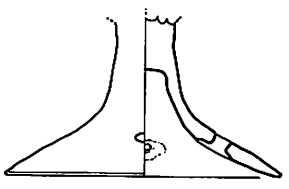

26


27


28


29


30


31

0 10cm

第16図　溝（下層）出土土器　実測図③（S＝1／4）

で、重さは514.8gである。上端には敲打痕が残る。

中層

土器（第17図）

壺　34は広口壺の上半部である。直口気味に口縁で、わずかに外へ開く。

鉢　33は無頸鉢である。深みを持つ。35は無頸の台付鉢である。

ミニチュア土器　32は鉢形のミニチュア土器である。頸部はほとんどすぼまらない。

石器（第23図）3は凝灰岩製の石製品である。裏面は剥離している。平面形は分銅形を呈しており、一部ベンガラによる赤彩が認められる。根元の部分に赤彩がよく残っている。重さは62.9gと見たよりも軽い。

上層

土器（第18～21図）

甕　37～47は完形または上半部の甕である。このうち外器面がタタキ後ハケ調整のもの（39～41、46）と全面ハケ調整のもの（37、38、42～45、47）がある。後者のうち43はわずかにタタキ目が認められる。47の外器面肩部の1箇所に7つの刺突文が施されている。36、48～56は小型の甕である。50は口縁の開きが鈍く、頸部に明確な稜線を持たない。56は口を大きく開き、頸部はほとんどすぼまらない。51の口唇部は内側に肥厚する。

壺　58は直口の複合口縁壺の口縁部である。57は完形の広口壺である。胴部がきれいな球状を呈しており、口縁はラッパ状に開く。底部はやや厚く、底面の中心がくぼむ。外器面はタタキ後ハケで、内器面は幅3～5㎜の工具で調整されている。59は長頸壺の胴部である。肩部にヘラミガキが施されている。内器面には粘土接合部が明瞭に残っている。

73、75、76は小型丸底壺である。75の内器面には放射状のヘラミガキが施されている。76の頸部外器面にランダムな横線が施されている。頸部のくびれを表すためか？

高坏　60は高坏の坏部である。両器面ともハケ調整である。61は完形の高坏である。坏の体部は丸みをもち、口縁は外反しながら大きく開く。下半は柱部というよりもむしろ、長い脚台という感じである。裾が大きく開く。外器面は丁寧なハケ調整が施されている。

鉢　有頸で脚台が付かないもの（69～72）と無頸で脚台が付かないもの（62～67）、無頸で脚台が付くもの（77～80）がある。74は大型の鉢で、くびれを強調するかのように、頸部に横方向の凹線を1条巡らせている。66は他に比べ底部が厚く、レンズ状の底部である。

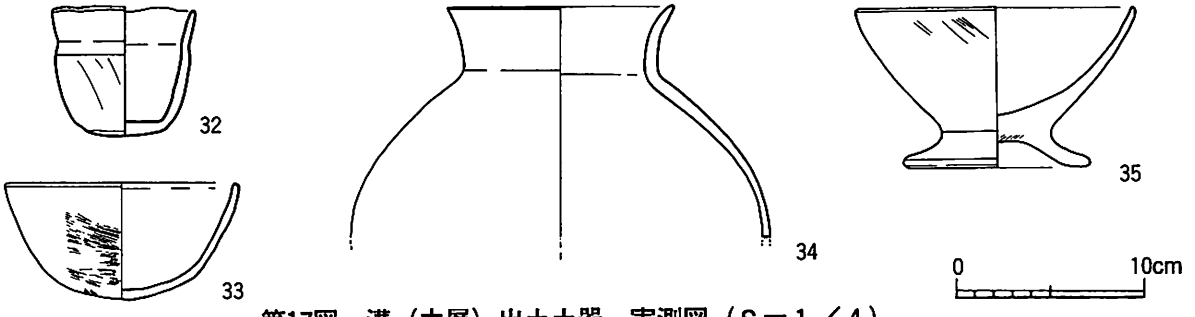
片口　81は片口の下半部と思われる。脚台をもつ。

甑　68は完形の甑である。底部に一箇所穿孔されている。

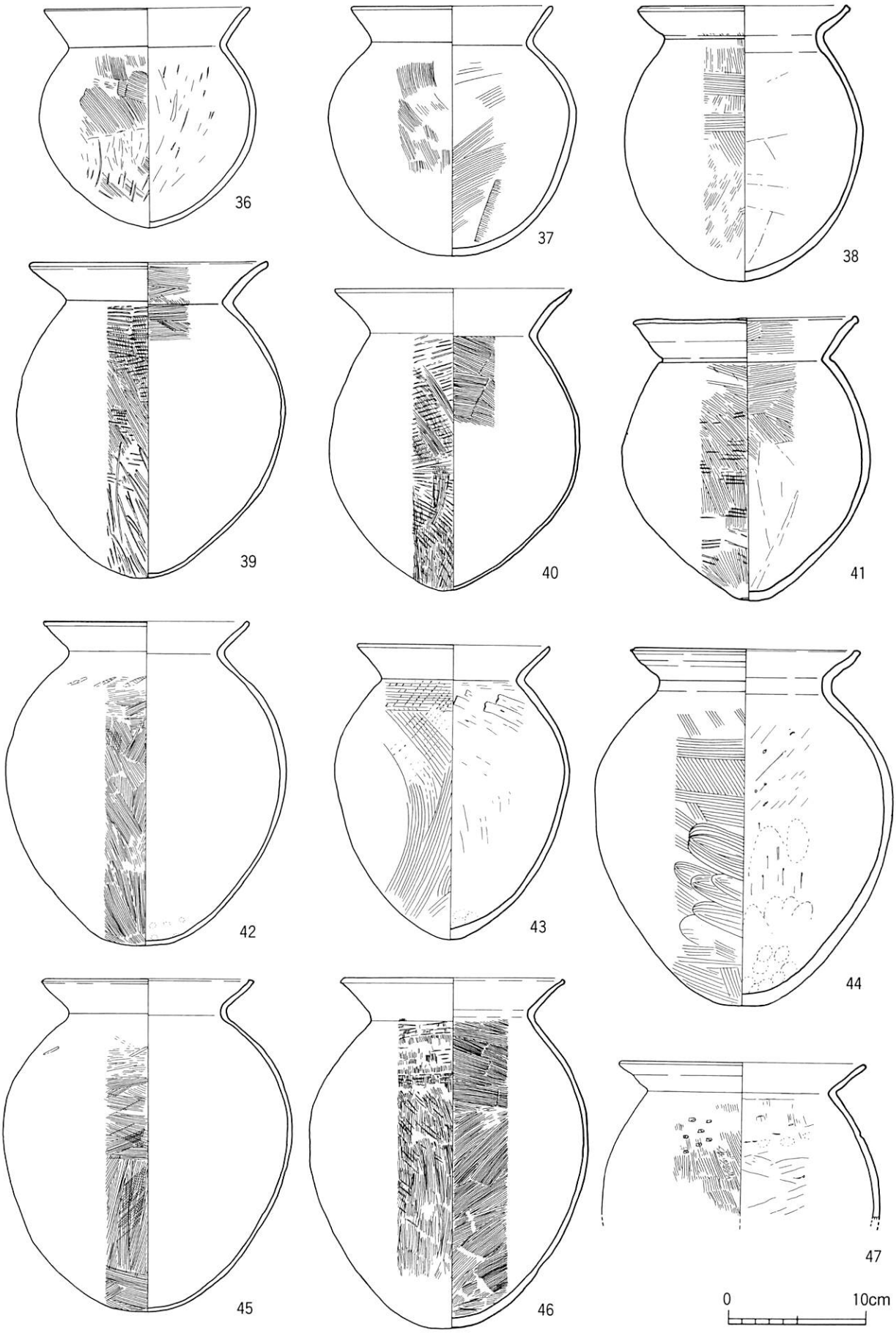
器台　82、83は鼓形器台の下半である。両者は酷似しており、同一である可能性がある。外器面は縦方向のヘラミガキ、内器面はヘラケズリである。

ミニチュア土器　溝上層では鉢、甕のミニチュア土器が出土した。84～86は無頸鉢形のミニチュア土器、87は甕型のミニチュア土器である。長胴の甕を模している。88、89は頸部がわずかにすぼまる鉢のミニチュア土器である。32とほぼ同形である。

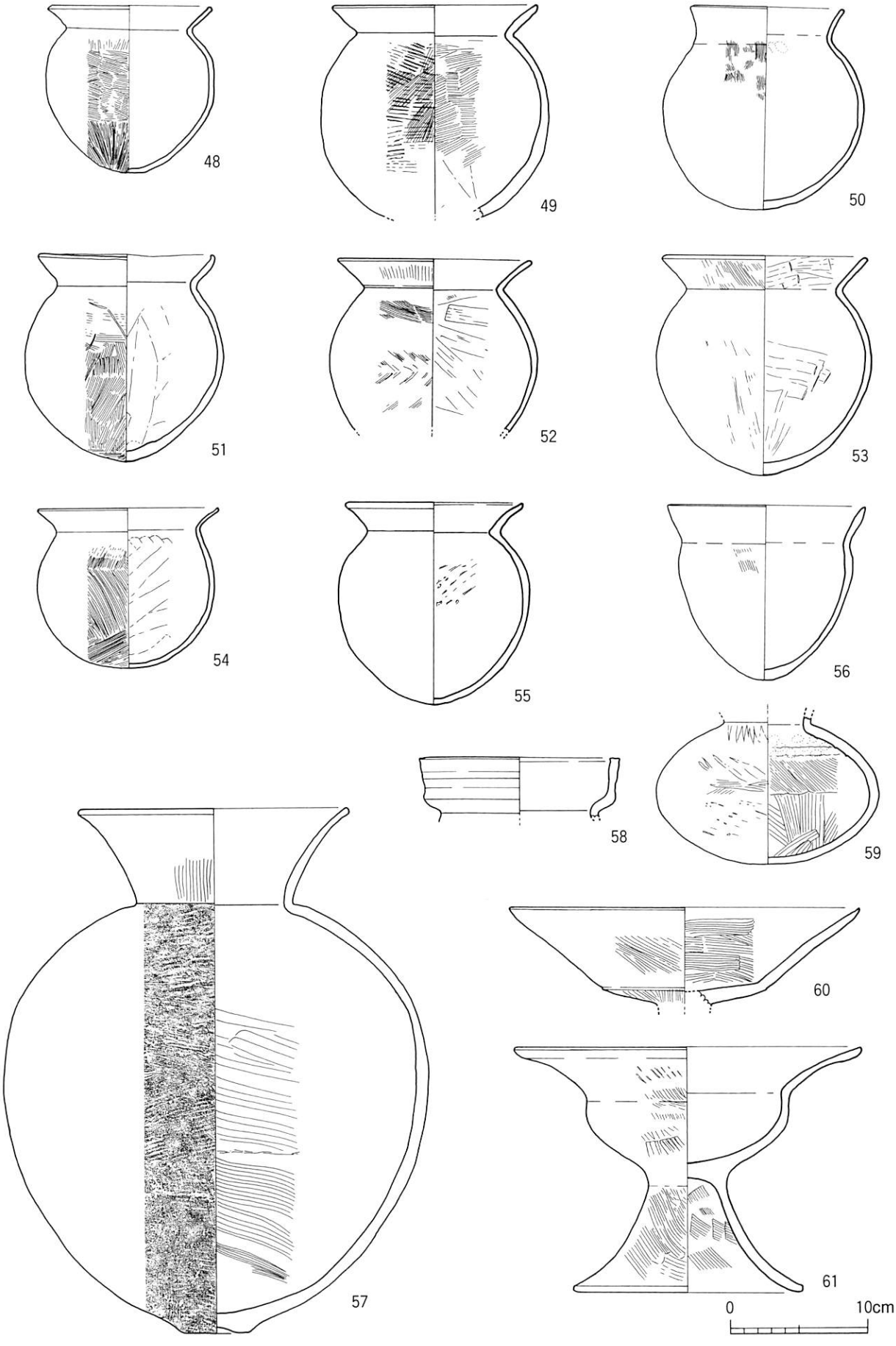
土製品（第22図）3は不明土製品である。平面形は半月形を呈しており、一面はハケで調整され、色調は黒斑のような黒色を呈する。裏面は、調整されず凹凸が残り、色調は灰白色である。長さ8.6cm、幅4.0cm、厚みは1.1cmである（計測地はそれぞれ最大）。



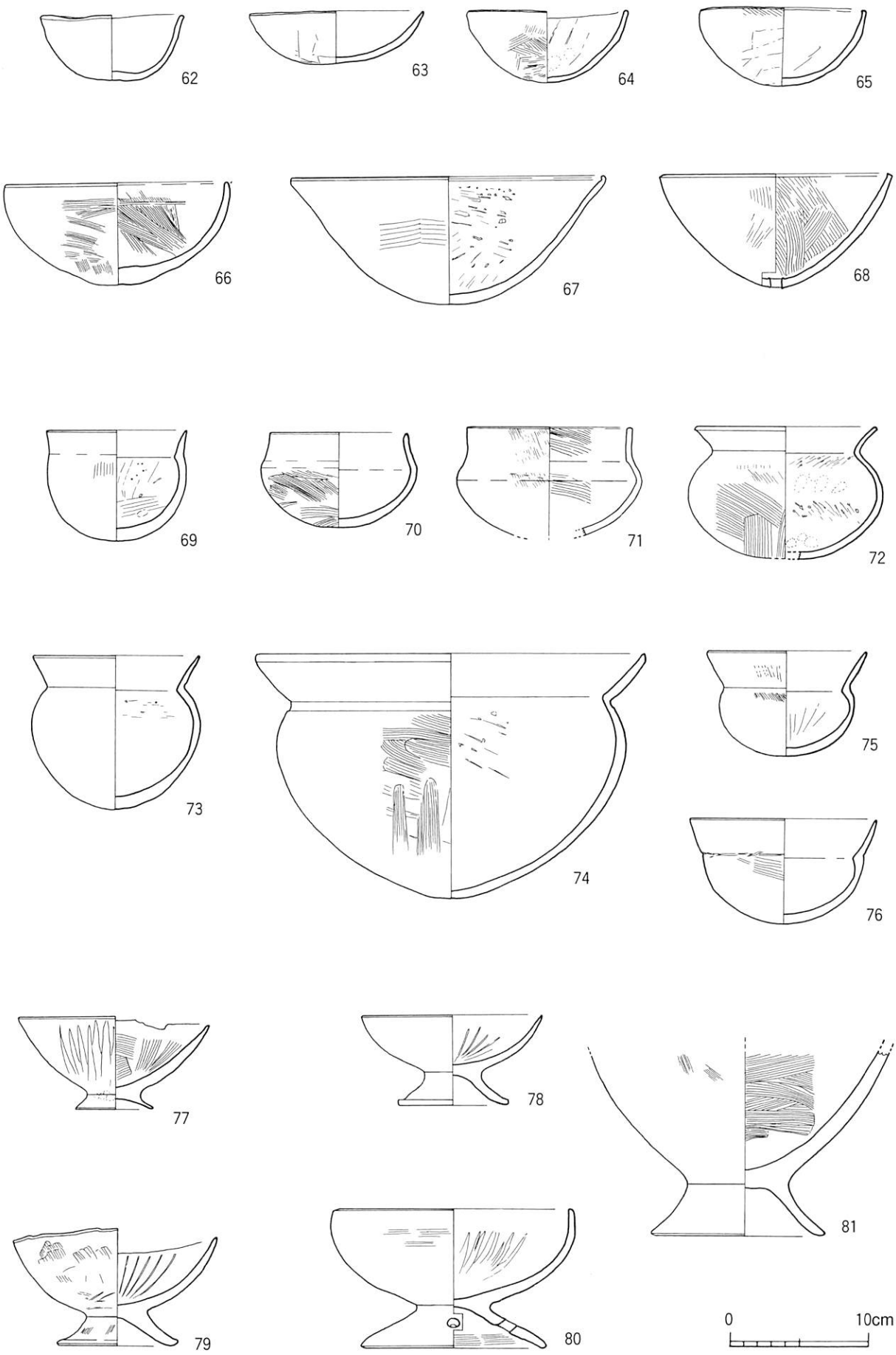
第17図　溝（中層）出土土器　実測図（S＝1／4）



第18図　溝（上層）出土土器　実測図①（S＝1／4）

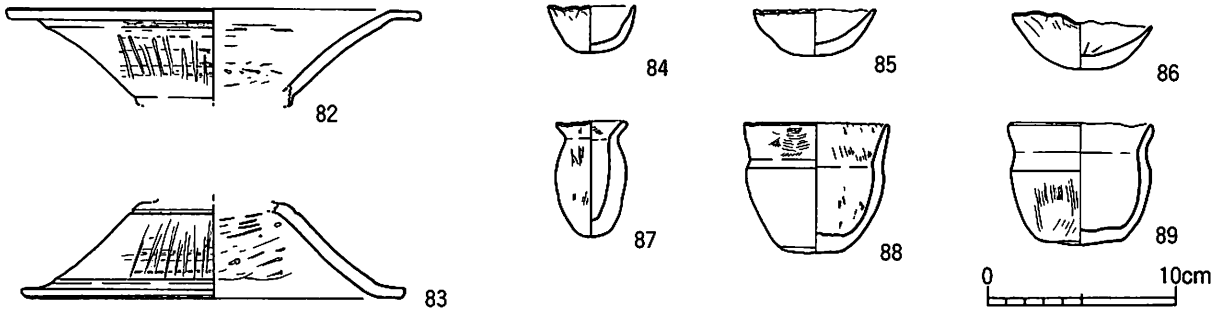


第19図　溝（上層）出土土器　実測図②（S＝1／4）

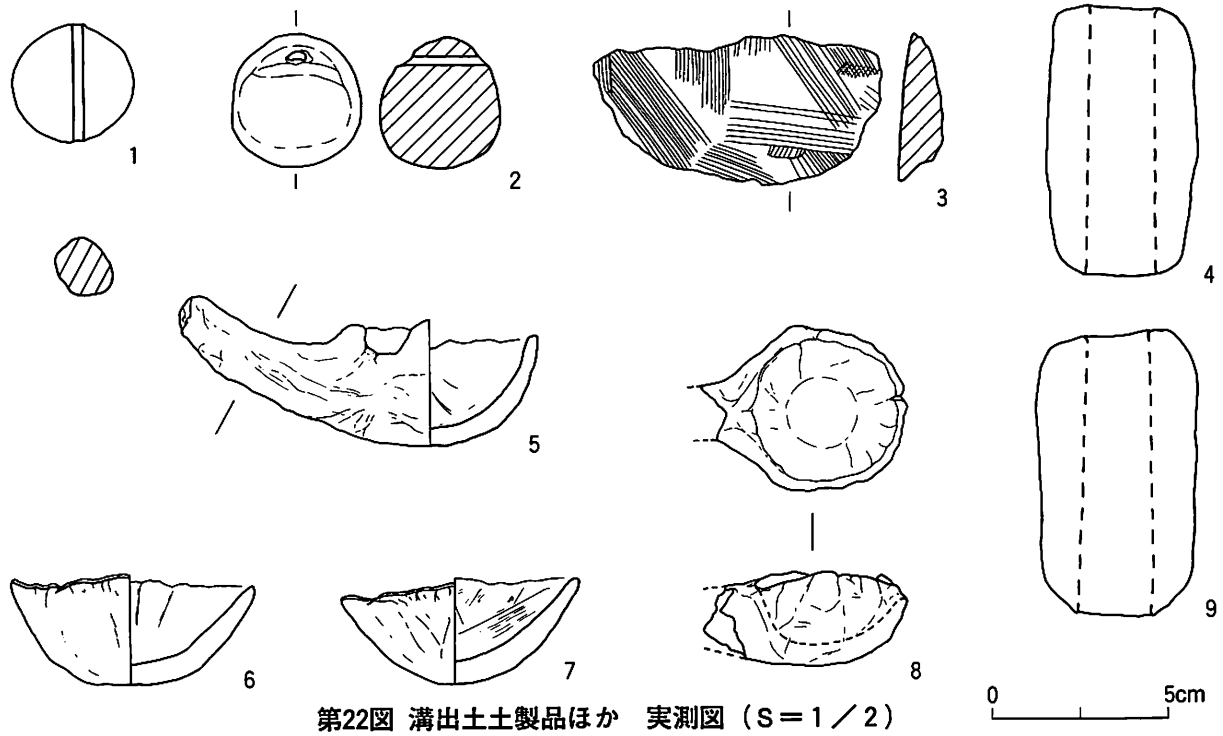


第20図　溝（上層）出土土器　実測図③（S＝1／4）

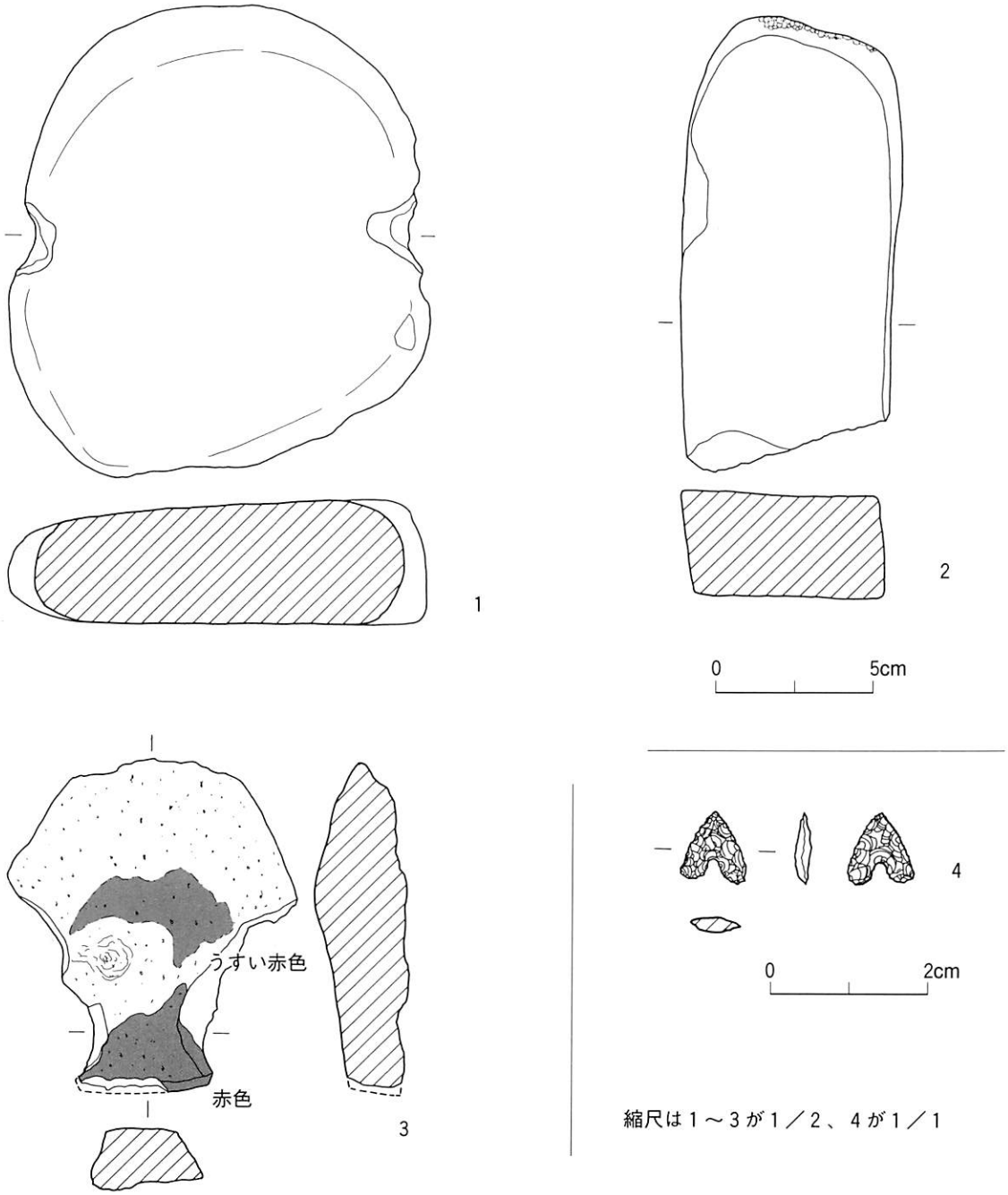
2も不明の土製品である。鈴のような形である。上部に植物の茎のようなもので一方向に穿孔されている。重さは36.3gある。4、7は土錘である。いずれも平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は円形である。またどちらとも同様に器面の剥離が見られる。4は長さ7.2cm、径4.1cmで、孔の口径は1.9cmで、重さは95.0gである。7の長さは7.3cm、径4.2cmで、孔の口径は1.7～2.0cmである。重さは99.5g。5は完形のスプーン形土製品である。全長9.7cmで、受部は平面形が楕円形を呈し、長軸は6.0cm、短軸は5.0cmである。柄は長さが4.0cmで先端に向かって上へ反っている。左手でもつと、手になじむ。



第21図　溝（上層）出土土器　実測図④（S＝1／4）



第22図 溝出土土製品ほか　実測図（S＝1／2）



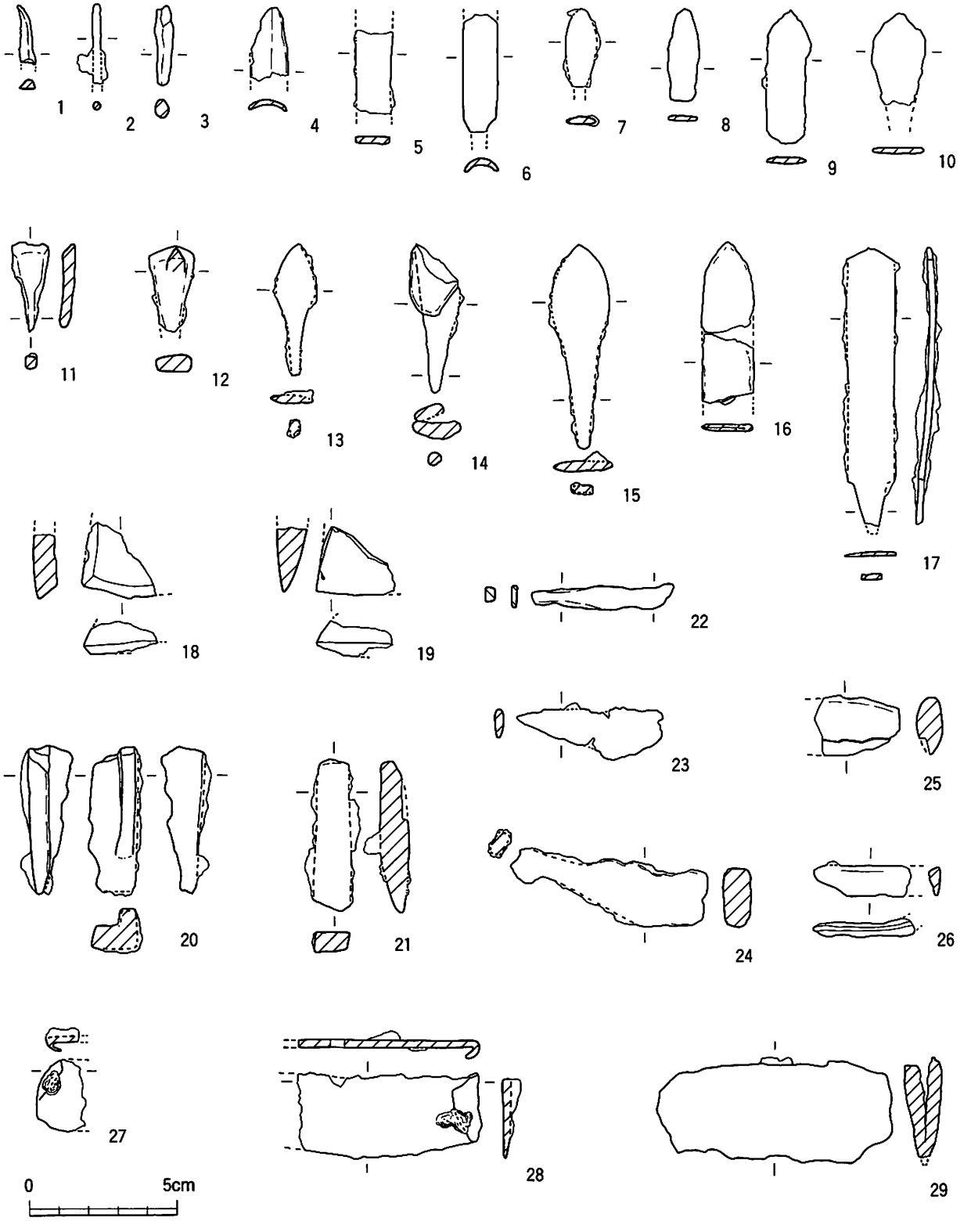
第23図　溝出土　石器実測図

鉄器（第24～25図）

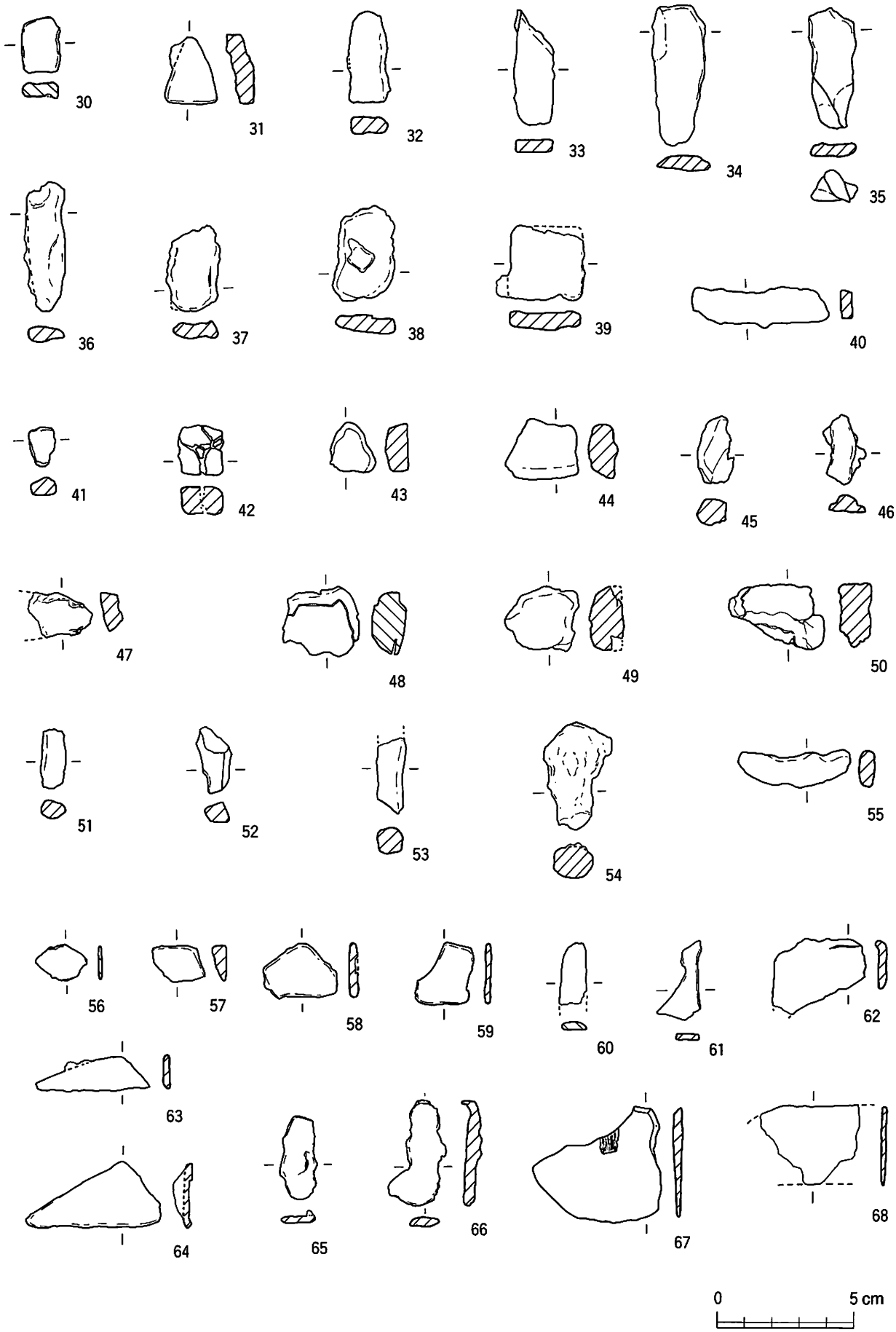
溝からは合計80点、総重量619.2ｇという大量の鉄器が出土した。このうち、製品として考えられるものはわずか17点で、大半が未製品または不明の鉄片、鉄塊であった。今回は図化可能な71点を掲載し、それらを便宜上、形態や厚さなどから以下の５つのタイプに分類した。

①製品または欠損品、破損品、未製品　②板状の鉄片　③鉄塊　④棒状鉄塊　⑤薄片状鉄片

計測値、出土した層については表－４のとおりである。



第24図　溝出土　鉄（製品・欠損品・破損品）実測図（Ｓ＝１／２）



第25図　溝出土鉄（非製品）実測図（S＝1／2）

①のうち製品と判断できたのは19点で、不明が10点であった。製品の内訳は鉄鏃が６点、鉋が３点、鉄斧が４点、手鎌が２点、鉄鑿が２点、針が２点である。

１～３は太さが３㎜ほどの細い針状の鉄器である。１の断面形は三角形で、２は正円である。
鉋は全て破損部である。４は刃部で、５、６は基部と思われる。

鉄鏃は６点のうち4点が完形またはほぼ完形である。42は鉄鏃の茎部と思われる。53は鋒部が曲がっているが、誤って調査中に曲がってしまったものであって、もともとのものではない。56は厚さが均一で、先端が尖る。他の鉄鏃と形態が異なり厚さもないため、他の器種の可能性もある。55も全体的に長く、非常に薄い。

鉄斧は全て破損している。18と19は刃部と思われる。18は片刃と判断した。20は刃部と袋部と思われる。断面形から分かるように、横断面形は梯形をなすものと思われることから、鋳造鉄斧の破損部ではなかろうか。また、57、58についても一般的な袋状鉄斧の刃部にしては厚みがあることから、鋳造鉄斧の刃部の可能性が高いと思われる。

手鎌はいずれも破損している。27はわずかに屈折部が残る。

鉄鑿は３点であるが、形態がそれぞれ異なる。11、12は鏃の可能性もあるが、先端部の形態と刃部から判断した。21は小型の柱状片刃石斧と形態がよく似ている。横断面形は長方形で、厚さもほぼ均一である。

未製品と思われるものは、10点出土した。形状から製品を想定し、刀子と鉄鏃、鋤先の3器種の未製品に分類した。ただし、あくまでも想定であるためことをご了承いただきたい。

刀子の未製品は5点である。22は平面形が刀子に近いが非常に小型である。先端は先細りになっている。26は基部側が反っている。断面を見ると刃部らしきものが確認された。23、25は鋒部か。23の先端は鋭く尖っているが刃部は確認できなかった。25は肉厚である。24は、基部がある程度の形に整えられているものの、鋒部は整形されず方形をなしている。

鉄鏃と思われる鉄片は７～10の４点である。いずれも鋒部の形のようにも見える。厚さが３㎜未満とあまりにも薄く、製品としてはなりえない。

29は、厚さと平面の形状から鋤先の未製品と考えた。錆がすすんでいたため、２枚に割れつつある。厚さは９㎜を測り、重さは51.4ｇとかなりの重量感がある。

②は厚さが均一で、５ｍｍ程度のものである。11点が確認された。このうち、長さ／幅の数値が２以上の棒状のもの（A）と数値が２未満のもの（B）に分類できる。計測値等は表のとおりである。

Aの33は先端がねじれている。35も同様に図下端がねじれている。いずれも人為的に曲げられたものと思われる。Bの31は見事な二等辺三角形を呈する。また、39は正方形を呈するものと思われ、これらはやはり故意的に整形されたものと考えるべきであろう。

③は厚さ５㎜以上で長さ／幅が２未満のものである。９点見られた。平面形は不整形が大半であるが、42のように正方形を呈するものもある。また断面形は、長方形または台形を呈するものが多い。

④は幅、厚さともにほぼ均一で、幅に対して長さのあるものである。９点が確認された。このうち最大径が１㎝未満の針状のもの（A）と1cm以上の棒状のもの（B）に細分類ができる。Aの11は先端が細くなって若干曲がっている。Bの55は上述した57号住居跡で出土した２及び５に形態がよく似ている。

⑤は厚さ5㎜未満の鉄片である。57を除いてほぼ厚さは均一である。平面形は大半が不整形であるが、63及び64は三角形を呈する。また、58～59については三角形ではないが、若干整った形をしている。裁断後に不要になった鉄片か。このほか67には表面に木片が付着している。

出土状況については、上述のとおり溝上層からの出土が41点と最も多く、次いで中層の16点、下層2点の順で少なくなっていく（一括が9点）。製品と非製品の別についてみてみると、上層は製品が9点、非製品が32点、中層は製品が6点、非製品が10点、下層は製品、非製品ともに1点となっている。

（4） 遺構に伴わない遺物（第26～28図）

上記の遺構に伴わない遺物を掲載する。遺物の中には完形に近いものもいくつか見られるため、実際は何らかの遺構に伴っていた可能性が高い。

土器（第26図）

1、2は鉢形ミニチュア土器である。3は壷形ミニチュア土器で、口縁部が直立気味である。4は複合口縁壺の上半である。肩部に6点からなる刺突文群が認められる。5は高坏のミニチュア土器で、裾部と思われる。6は器台か？手捏ねにちかく、両器面ともなでである。7は完形の器台である。外器面はタテハケ、内器面はヨコハケ調整で丁寧に作られている。8はほぼ完形の長胴甕である。口縁端部は角張っており、口縁部から外器面上半にはタタキ目が明瞭に残る。内器面はナナメ刷毛調整である。

土製品（第28図）

土製の勾玉、玉が出土した。3は土製玉である。球形を呈し、径は2.0cmである。貫通していない孔の上から再び穿孔した跡が認められる。重さは8.0g。4は土製の勾玉である。長さ2.5cm、幅0.8cm、厚さ0.8cmで、重さは2.2gである。5も土製勾玉か。半円状に大きく曲がっている。穿孔が認められない。上部先端の欠損部に穿孔が施されていた可能性がある。長さは2.6cm、幅、厚さは0.6gである。重さは2.6g。6は土錘である。縦半分に割れている。

石器（第28図）

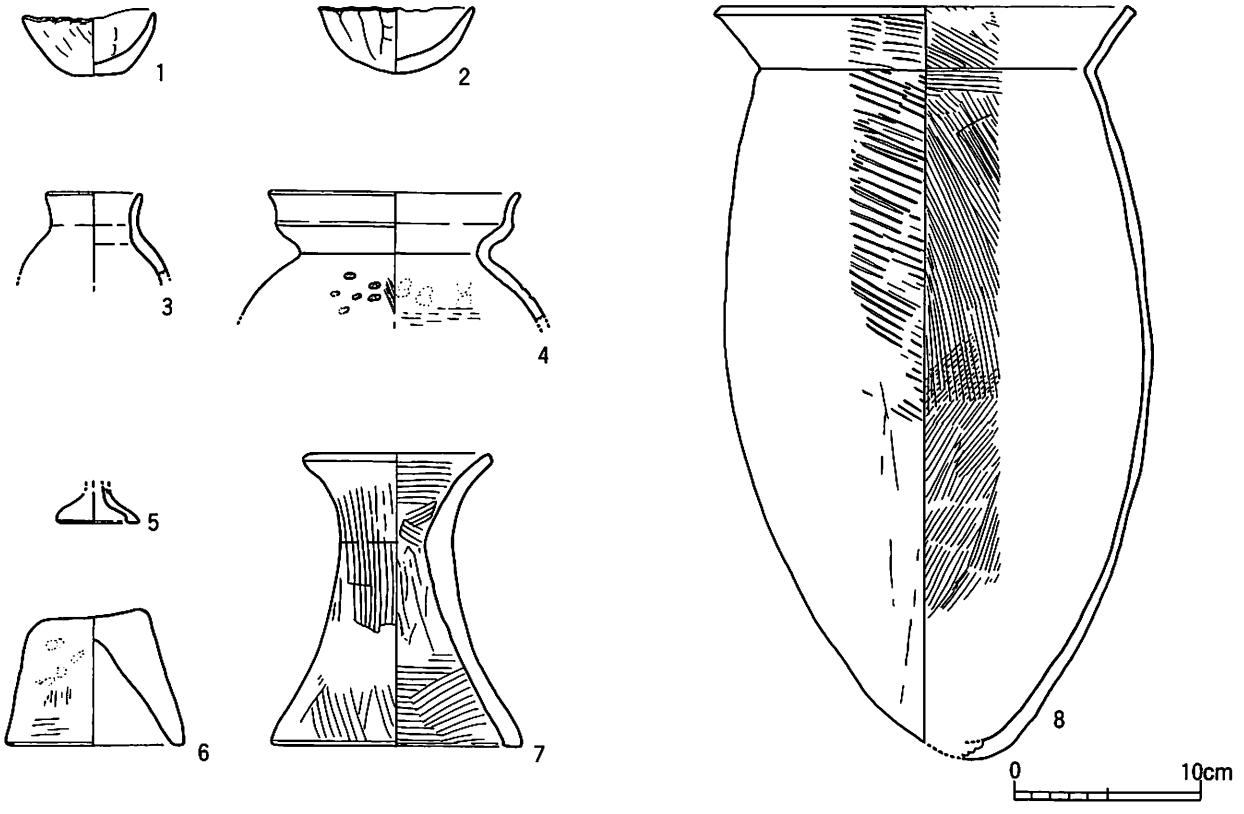
7は磨製石斧である。基部と側辺一辺が破損している。

ガラス玉（第28図）

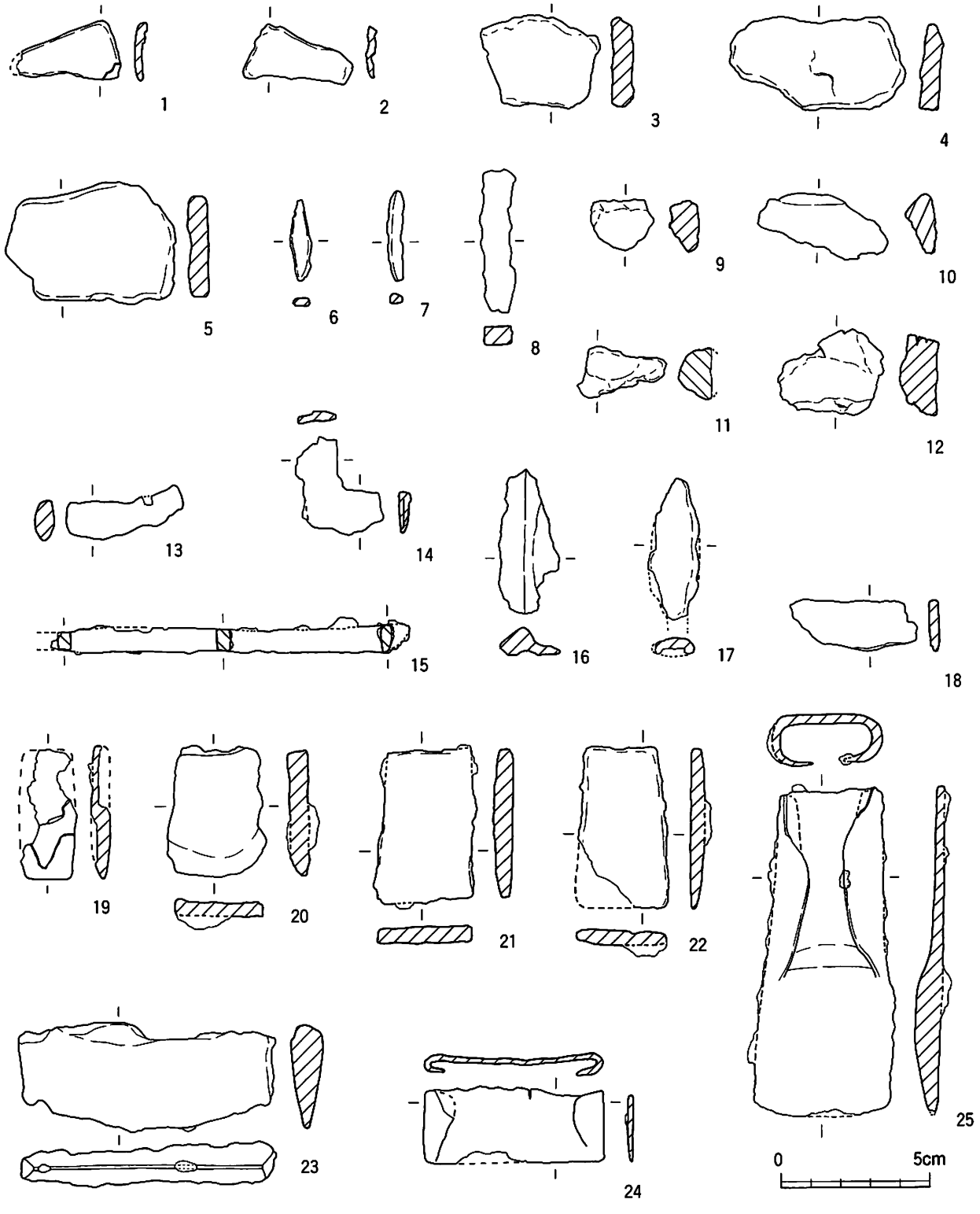
1はガラス玉である。直径3mmで、青色を呈する。

鉄器（第27図）

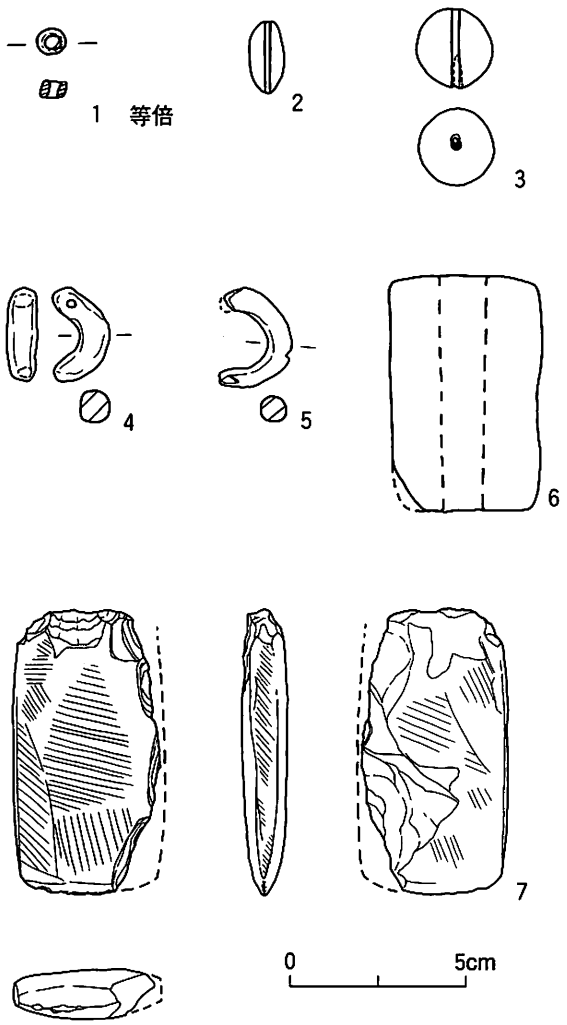
包含層出土として取上げた鉄器のうち、良好な資料の25点を掲載する。多量な点数であったため、かなりの数を割愛させていただくことをご了承いただきたい。包含層の遺物はグリッドを6分割して取上げている。まず、南北に分けて、さらに東、中央、西に分けた。その結果鉄器の出土点数と重量は、北東区では5点、重さ63.9g、南東区では11点、重さ308.6g、中央北区では11点、重さ81.5g、中央南区では12点、282.8gであった。また北西部、南西部については、溝内で数えてお



第26図　遺構に伴わない土器（S＝1／4）



第27図　遺構に伴わない遺物（鉄器）実測図（S＝1／2）



第28図　遺構に伴わない遺物(石器・土製品ほか)
(S＝1／2)

り、数値は80点、重さ約600ｇである。ここでの鉄器も同様に分類した。

①製品は、袋状鉄斧と板状鉄斧、刀子、鉄鏃、鋤先、鉄鑿の６器種である。(17～25) 25は完形の袋状鉄斧である。袋部を一部欠いているが保存状態は良好である。身は最も厚いところで８ｍｍを測る。板状鉄斧は３点出土した。20は明らかな刃部を持つが、他の21と22は明確な刃部はなく、徐々に厚みが薄くなっている程度である。18は形状と断面形から刃部を持つと判断し、刀子の鋒部とした。17は基部と側縁部を一部欠くが鉄鏃と思われる。24はほぼ完形の手鎌である。23は形状から鋤先と判断した。差込口はないが、明らかな刃部が確認される。重さは101.4ｇと重量感がある。19は鉄鑿の一部と思われる。片刃である。

未製品と思われるものと不明のものは、４点ある。(13～16) 15は刀子の未製品か。基部と刃部が形成されつつあるように見える。13は小型の刀子未製品か。断面形は先端が三角形に近い形状になっているが、それ以外は整った長方形を呈している。基部は欠損しているが同じ様に伸びていくと思われる。14は不明の鉄片である。平面形がＬ字状になっている。16も不明の鉄片である。中央に稜線を持つ。

②板状鉄片は３点（３～５）である。平面形はいずれも不整形であるが、厚さはほぼ均一である。

③鉄塊は４点（９～12)。12は先端が細くなっており、鉄鏃の未製品の可能性もある。

④棒状鉄塊は３点。６は平面形が細長い菱形に近い形状をしている。８は断面形が整った長方形形を呈している。

⑤薄片状鉄片は２点。（１～２）１はいわゆる三角状鉄片である。

これら鉄の時期については、形態からみて２号住居跡や溝から出土したものとほとんど差がないことから、弥生時代終末から古墳時代前期にかけてのものであると考える。

３　古代、中世の遺構と遺物

(１)　１号土坑（第29図）

長軸がほぼ南北を向き、規模は長軸2.6m、短軸1.45ｍの楕円形を呈する土坑である。検出面から床面までの深さは23cmで、ほぼ平坦に床は広がる。

遺物は須恵器が主体で、数点流れ込みによる弥生時代後期の土器が出土した。すべて小片であったため、図は掲載していない。

(２)　３号土坑（第29図）

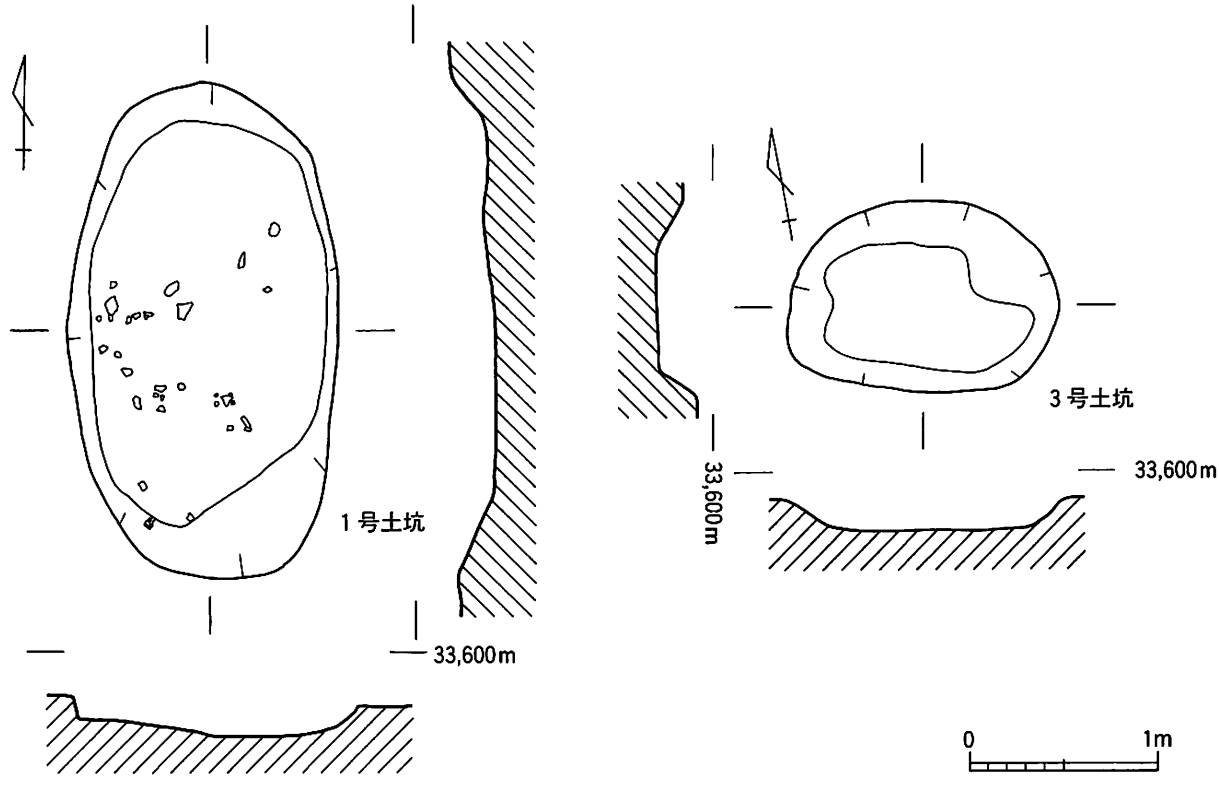
調査区中央やや南側で検出した。長軸1.44m、短軸1.02mを測る楕円形の土坑である。深さは12cmと浅い。目立った遺物は出土していない。

(３)　遺構に伴わない遺物（第30図）

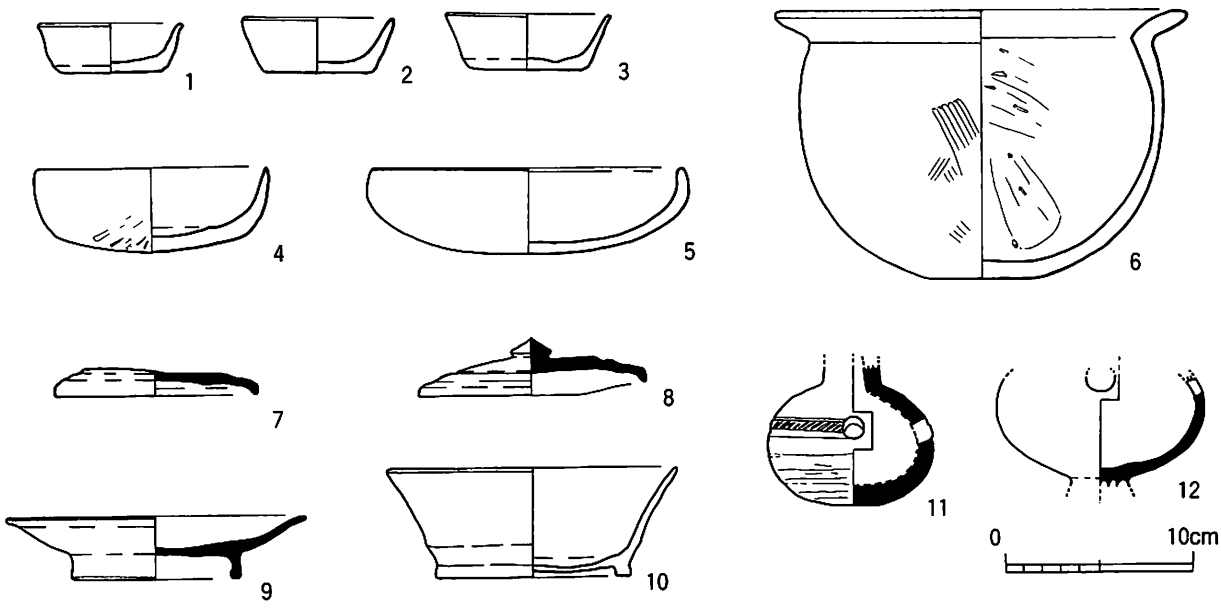
土師器　１～３は灯明皿である。４、５は坏である。５は口縁が内湾する。６は完形の甕である。口縁部は外へ大きく開き、底部は平底気味である。10は坏身である。口径は15.2cm、高さは5.8cmで底部に高台がつく。体部はやや外反気味に開く。体部下端にヘラ削りを施し、器面全体には化粧土を塗り丁寧に仕上げられてい

る。

須恵器　7、8は坏蓋である。8は宝珠形のつまみが付く。11、12は瓶である。12には台がつく。9は盤である。



第29図　1号土坑・3号土坑　実測図（S＝1／40）



第30図　遺構に伴わない遺物（土師器・須恵器）（S＝1／4）

4　まとめ

今回は調査面積わずか100㎡という狭い範囲であったが、重大な成果を挙げたと考える。

（1）　遺跡全体からみた今調査地点の位置付け

遺構についてはまず、弥生時代終末から古墳時代前期にかけての溝が検出された。この溝は過去の調査と照合すると、台地ほぼ中央を南北に切る溝であることが分かった。当該溝の北側、南側については、それぞれ過去に一度ずつ発掘されている。北側は、未報告であるが、今回の調査区北に隣接する32－2番地の溝である。今回の溝と同方向で、弥生時代終末から古墳時代前期の土器が出土した。また、南側については大道校区公民館建設に伴う調査の3号溝である。

今回遺跡内を区画する溝の一つが長い距離確認されたことは、今後の遺跡の構造を考える上で重要な鍵となりそうである。

また時期について、出土土器から遺跡のなかでも比較的新しい時期まで機能していた溝であることが分かった。当遺跡では、これまでの調査で溝は多数検出されているが、時期が弥生時代終末から古墳時代の溝というのは意外と少ない。大半が弥生時代後期後半のもので、終末の段階でほとんど埋没している。今回検出された溝は、上記のとおり台地を二つに分断するような形で走っていることが予想される。しかも、一度埋没した後再び掘りなおされており、この溝の果たす役割がかなり重要であったと言えよう。

また溝に隣接した地点で注目されるのが、大量に出土した鉄、鉄製品である。溝の出土層から考えて、おそらく庄内期以降にこの周辺で鉄器生産、加工に関係する作業が行われていたと考えられる。残念ながら遺構としては確認できなかったが、溝、包含層出土を含めて、製品となっていない出土鉄器総重量2,345ｇという数字がそれを示していると思われる。

これらの大量の鉄器未製品を積極的に評価して、今回の調査地点（84－2番地）から東側の1次調査地点（山鹿工業）にかけてのエリアが、鉄器生産、加工に関係した工房的な地域である可能性を指摘しておきたい。そして、この溝は遺跡内をさらに区画する意味の役目を持っていたと考える。

熊本県内の環壕集落を概観したときに、環壕の周辺に工房があるという事例が多く見られる。この遺跡も同様で、この溝が集落の外縁を示すもので、ここから東側にかけてのエリアが弥生時代終末期における集落の中心であったのではないかと想定するのである。しかし、まだ調査範囲はわずかである。今後の調査でより明らかにする必要がある。

（2）　住居跡について

溝以外には、住居跡が2基検出された。1基は二本柱の方形の竪穴住居で、中心に炉を持っていた。また、東壁に沿った長方形の土坑があり、台石とそれに押しつぶされたような状態で壺が出土した。遺跡内の住居を概観すると一般的に土坑は南側壁に付くものが多い。また、その中から台石が出土したことも注目される。

また、もう一方の2号住居跡については、多くの鉄器を出土したことと、内部の土坑から完形のジョッキ形土器などを出土したことが特徴として挙げられる。鉄鍛冶に関連する遺構かとも考えられるが、それを積極的に示す遺物は鉄以外には見つからなかった。しかし、住居の大半が発掘対象外であったため、その可能性も残されている。

（3）　鉄器について

遺物については、多種多様で大量の鉄器が挙げられる。確認した器種は、袋状鉄斧、鉄鏃、刀子、鉄鑿、手鎌、鉇であったが、製品と判別できるものは割に少なく、未製品、非製品の量が際立っていた。今回は、その形態や厚さから板状鉄片、鉄塊、棒状鉄塊、薄片状鉄片、未製品の5つに分類してみた。いずれも製品とは考えられず、破損品というよりも、未製品と、残った鉄くずという印象が強い。未製品と考えるのは、板状鉄片、鉄塊、棒状鉄塊、未製品であり、鉄くずと考えるのは、薄片状鉄片である。これら大量の未製品を見ると、これから製品と使用とする素材を、なぜこれほど大量に廃棄したのかという疑問が残る。比較的豊富に材料を持っていたにせよ、あまりにも粗末に取り扱っている。よほど豊富な原材料を持っていたのだろうか。再利用する技術を持ち合わせていなかったにせよ、これらの数量は目を見張るものである。

今回の調査で多くの成果を得たとともに、新たな問題点、疑問点が残った。今後の調査、研究で明らかにしていきたい。　　（山口健剛）

表－2　84-2番地出土　土器観察表　　その1

図	No	遺構名	P番号	器種	部位	口径	器高	色　調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備　考
6	1	1号住	P-7	壺	底部	－	－	10YR8/4 浅黄橙色	角閃石　長石 石英	良好	－	粗い刷毛目	無	無	
6	2	1号住	一括	甕	口縁部	25.4	－	5YR4/6 赤褐色	長石	良好	なで	なで	無	有	
6	5	1号住 土坑内	P-9	壺	口縁部	17.6	－	7.5YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石 石英	良好	はけ	はけ	有	無	
6	6	1号住 土坑内	P-9	壺	下半	－	－	10YR7/4 にぶい黄橙色	角閃石　長石 石英	良好	－	はけ	有	無	
6	7	1号住	P-5、6	壺	下半	－	－	7.5YR8/6 浅黄橙色	角閃石　長石 雲母	良好	縦刷毛	一部指頭圧痕	無	無	
6	8	1号住	P-16	壺	底部	－	－	10YR8/3 浅黄橙色	雲母　角閃石 長石　石英	良	－	刷毛目	有	無	
6	9	1号住	一括	壺	底部	－	－	10YR6/4 にぶい黄橙色	長石　雲母	良好	細い縦刷毛	ナナメ刷毛	有	無	
6	10	1号住 土坑内	P-9	ミニチュア 土器（台？）	完形	－	5.0	7.5YR8/4 浅黄橙色	角閃石　長石 石英	良好	－	指なで	有	無	コップの可能性もある
6	11	溝	P-4	高坏	坏部	25.0	－	10YR8/2 灰白色	長石　雲母	良好	口縁部なで　坏部ヘラケズリ後刷毛	口縁部なで　坏部ヘラミガキ	無	無	
6	13	溝	P-1	台付鉢	完形 復元	11.8	9.4	10YR8/3 浅黄橙色	長石　雲母	良好	なで	なで	有	無	
9	14	中央北	CNP-18	鉢	完形	17.2	6.5	10YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	口縁部なで　ヘラケズリ	口縁部なで　ヘラケズリ	有	有	土師器 内器面に煤が付着スリップ付？
9	1	2号住 土坑	一括	甕	口縁部	15.8	－	7.5YR7/3 にぶい黄橙色	長石　雲母	良好	口縁部なで　胴部縦刷毛	口縁部なで　胴部ナナメ刷毛	有	無	
9	2	2号住	P-12	甕	口縁部	17.0	－	7.5YR7/3 にぶい黄橙色	雲母　角閃石 長石	良好	なで	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	有	無	
9	4	2号住 土坑	P-33	鉢	口縁部	18.0	－	10YR7/3 にぶい黄橙色	長石	良好	口縁部なで　胴部縦刷毛	口縁部なで　胴部ナナメ刷毛	有	無	
9	5	2号住 土坑	一括	鉢	口縁部	17.0	－	10YR8/2 灰白色	長石	良好	なで	なで	無	無	
9	6	2号住 土坑	P-1,32, 34	壺	底部	－	－	5 YR6/8 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良	縦刷毛	ナナメ刷毛	無	無	
9	7	2号住		壺	上半	16.6	－	10YR7/4 にぶい黄橙色	角閃石　長石 石英	良好	口縁部なで　胴部縦刷毛	口縁部刷毛後なで　胴部はけ	有	有	肩部に櫛描平行紋と 波状紋　内器面が黒い
9	8	2号住	P-47	ジョッキ 形土器	底部	－	－	7.5YR8/2 灰白色	長石　石英　雲母	良好	なで	－	無	無	
9	9	2号住	一括	ジョッキ 形土器	底部	－	－	10YR8/2 灰白色	長石　石英	良好	なで	－	無	無	橙色の色素が浮かぶ
9	10	2号住	一括	ジョッキ 形土器	下半	－	－	10YR8/3 浅黄橙色	長石　石英　雲母	良好	なで	薄い刷毛目	無	無	内外面ともベンガラ付着
9	11	2号住 土坑	P-41、28、 NEP-8	ジョッキ 形土器	完形	14.0	17.3	10YR8/2 灰白色	角閃石　石英	良好	なで	ナナメ刷毛	無	無	内器面底部に鉄錆付着
14	1	溝	P-270	甕	完形	14.5	20.6	10YR8/3 浅黄橙色	石英　雲母	良好	口縁部なで　胴部刷毛	口縁部なで　上半横刷毛後一部 縦刷毛　下半なで、指押さえ	有	有	
14	2	溝	P-299、 142	甕	完形	15.8	22.5	7.5YR8/3 浅黄橙色	石英　雲母	良好	口縁部なで　胴部タタキ後刷毛 底部ナナメ刷毛	口縁部なで　肩部タテ、ナナメ刷毛 下半ヘラケズリ、指おさえ後なで	無	無	
14	3	溝	P-265	甕	完形	14.9	24.6	10YR8/4 浅黄橙色	石英　雲母	良好	口縁部なで　胴部上半タタキ 胴部下半タタキ後刷毛	口縁部なで　胴部ヘラケズリ、 ヘラなで	有	無	
14	4	溝	P-247	甕	完形	18.6	25.3	10YR8/3 浅黄橙色	石英　雲母	良好	口縁部なで　胴部タタキ後刷毛	口縁部なで　胴部上半指おさえ後 横刷毛　胴部ヘラケズリ 底部縦、横刷毛	有	無	
14	5	溝	P-291	甕	完形	17.0	32.0	10YR8./2 灰白色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	口縁部なで　胴部タタキ後はけ 底部タタキ後なで	口縁部なで　胴部刷毛 底部なで	有	有	
14	6	溝	甕	甕	完形	18.7	34.6	10YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 石英　雲母	良	口縁部なで　胴部上半タタキ 胴部下半タタキ後なで　底部なで	口縁部刷毛後なで　胴部刷毛	有	有	一部被熱部あり
14	7	溝	甕	甕	完形	18.2	33.3	7.5YR8/6 浅黄橙色	赤褐色粒　石英 雲母	良	口縁部なで　頸部タタキ後なで 胴部上半タタキ　下半タタキ後なで	口縁部刷毛後なで　胴部なで	無	有	
14	8	溝	P-329	甕	完形	17.7	31.1	10YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石	良好	口縁部刷毛後なで　胴部タタキ 胴部下半タタキ後刷毛　底部刷毛	口縁部刷毛後なで　上半刷毛 下半なで	無	有	ゆがみが激しい
15	9	溝	P-279	甕	完形 復元	13.0	11.4	5YR7/6 橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	刷毛	刷毛	有	有	

84-2番地出土　土器観察表　　その2

図	No	遺構名	P番号	器種	部位	口径	器高	色　調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備　考
15	10	溝	P-297	壺	完形	13.2	14.6	2.5Y8/2 灰白色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良	口縁部なで　上半タタキ後なで 下半タタキ後刷毛	口縁部～胴部なで 底部ヘラケズリ	有	無	
15	11	溝	P-327、 322、324	甕	完形	13.8	18.0	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	タタキ後、口縁部はなで、 胴部は刷毛	ヘラケズリ	無	有	
15	13	溝	P-282	甕	完形	15.3	18.7	10YR8/2 灰白色	赤褐色粒　角閃石 雲母	良	口縁部なで　上半刷毛後なで 下半ヘラケズリ	口縁部刷毛後なで 刷毛またはなで	有	有	
15	14	溝	北側	壺	完形 復元	12.4	18.5	10YR8/3 浅黄橙色	長石　雲母	良好	口縁部なで　胴部上半ナナメ刷毛 胴部下半ヘラケズリ	口縁部なで　胴部ナナメ刷毛	無	有	
15	15	溝	P-260	甕	完形	16.2	23.9	10YR8/3 浅黄橙色	角閃石　石英 雲母	良好	口縁部なで　肩部刷毛後なで 胴部ナナメ刷毛	口縁部なで　胴部なで、刷毛	有	有	
15	16	溝	P-281、 251、211	甕	完形	15.0	19.9	7.5YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	タタキ。胴部下半のみ タタキ後はけ　口縁部なで	口縁部なで　胴部刷毛	有	有	
16	17	溝	P-283、 285－2	壺	完形	16.8	28.9	7.5YR8/2 灰白色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	口縁部なで　肩部横刷毛 胴部ナナメ刷毛	口縁部なで　胴部縦刷毛後 横刷毛	有	無	
16	18	溝	P-264、 260	壺	完形	13.4	29.0	10YR8/2 灰白色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	口縁部なで　胴部上半刷毛 下半ヘラケズリ	口縁部なで　胴部刷毛	有	無	
16	19	溝	P-75、 301	壺	上半	28.8	－	7.5YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石 雲母	良好	頸部縦刷毛後なで	横刷毛	有	無	肩部外器面に櫛描紋
16	20	溝	P-285	壺	完形	17.0	39.2	7.5YR7/6 橙色	長石　石英	良好	口縁部なで　肩部ナナメ刷毛後横刷毛 胴部上ナナメ刷毛　胴部下縦刷毛	口縁部なで 胴部～底部ヘラケズリ	有	有	二重口縁壺 肩部に羽状紋 箆目の痕あり
16	21	溝	P-207	鉢	完形	11.4	4.4	2.5Y7/1 灰白色	赤褐色粒　角閃石 石英　雲母	良好	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	口縁部なで　胴部ミガキ？	無	有	内器面に赤色顔料付着？
16	22	溝	P-288	鉢	完形	9.7	5.7	10YR8/1 灰白色	赤褐色粒　角閃石 石英　雲母	良	なで　下半ヘラケズリ	口縁部なで　ヘラなで	無	無	
16	23	溝	P-283	鉢	完形 復元	14.6	7.5	7.5YR7/8 黄橙色	角閃石　長石 雲母	良好	ナナメ刷毛	横なで	有	有	
16	23	溝	P-320	台付鉢	完形 復元	11.6	8.8	7.5YR8/2 灰白色	長石	良好	なで	器面が剥離している	無	無	脚台に4つ穿孔
16	24	溝	P-311	鉢	完形 復元	18.6	7.8	5YR6/3 にぶい橙色	角閃石　長石 雲母	良好	なで	横なで	有	無	外器面にひび
16	25	溝	P-310	甕	完形	13.0	15.5	7.5YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	タタキ後刷毛	全面タタキ後、口縁部なで、 肩部刷毛、胴部ヘラケズリ	有	有	
16	26	溝	P-316、 318	台付鉢	完形 復元	11.5	10.2	7.5YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　長石 雲母	良好	ヘラミガキ	ヘラミガキ	無	無	脚台に4つ穿孔
16	28	溝	P-312	台付鉢	完形 復元	11.4	9.1	5 YR6/6 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石	良好	ナナメ刷毛	なで	有	有	
16	29	溝	P-294	高坏	坏部	20.0	－	7.5YR8/6 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良	刷毛後ヘラミガキ	横刷毛	有	無	二次的被熱を受けている 透かしが4カ所
16	30	溝	P-271	高坏	脚	－	－	5YR6/8 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	柱部刷毛後ヘラミガキ　裾部なで後 ヘラミガキ	なで	有	無	裾部に4つ穿孔
16	31	溝	P-276	高坏	脚部	－	－	7.5YR8/6 浅黄橙色	角閃石　長石 石英	良	なで	ヘラケズリ	無	無	裾部に4つ穿孔
17	32	溝	ベルト	ミニチュア 土器（甕）	完形	7.5	6.2	7.5YR6/2 灰褐色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	口縁部なで　胴部ヘラ調整後なで	ヘラ調整後なで	有	無	
17	33	溝	北端	鉢	完形 復元	17.0	7.2	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	横刷毛	横刷毛、縦刷毛	無	無	
17	34	溝	P-321ほか	壺	上半	11.2	－	7.5YR7/4 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良	不明瞭	胴部ヘラケズリ　その他不明瞭	無	無	
17	35	溝	一括	台付鉢	完形 復元	14.4	8.4	7.5YR8/6 浅黄橙色	長石	良好	なで	なで	無	無	
18	36	溝	P-91	甕	完形	14.8	15.8	10YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	なで	ヘラケズリ	有	有	
18	37	溝	P-29、30、 32、34	甕	完形	14.0	17.9	10YR8/2 灰白色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部なで　胴部刷毛	口縁部なで　胴部刷毛	無	有	
18	39	溝	P-142	甕	完形	17.2	19.3	10YR8/4 浅黄橙色	石英　雲母	良好	口縁部なで　胴部タタキ後刷毛 底部ヘラケズリ	口縁部なで、刷毛　肩部横刷毛 胴部ヘラケズリ	有	無	
18	40	溝	P-212	甕	完形	17.5	21.6	10YR8/4 浅黄橙色	長石　石英 雲母	良好	口縁部なで　胴部タタキ後刷毛	口縁部なで　肩部横刷毛 胴部ヘラケズリ	無	有	
18	41	溝	P-246	甕	完形	16.4	20.1	7.5YR7/4 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 石英　雲母	良	口縁部なで　胴部タタキ後刷毛 底部刷毛後なで	口縁部刷毛　胴部ヘラケズリ 底部なで	無	有	外器面剥落部が多い

84-2番地出土　土器観察表　　その3

図	No	遺構名	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備考
18	42	溝	P-254	甕	完形	14.9	23.3	10YR8/4 浅黄橙色	石英　雲母	良好	口縁部なで　肩部横刷毛 胴部上半ナナメ刷毛　下半縦刷毛	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	有	有	底部内器面に指頭圧痕
18	43	溝	P-63	甕	完形 復元	14.0	21.2	7.5YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	タタキ後刷毛、口縁部なで	口縁部なで　胴部上半横刷毛 胴部下半ヘラケズリ	有	有	
18	44	溝	P-74	甕	完形	15.8	25.5	7.5YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	口縁部なで　胴部ナナメ 刷毛、上半のみ刷毛後なで	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	有	有	底部内器面に指頭圧痕
18	45	溝	P-205	甕	完形	15.4	24.0	10YR8/4 浅黄橙色	石英　雲母	良好	口縁部なで　肩部横刷毛 胴部上半横刷毛後ナナメ刷毛 胴部下半縦刷毛　底部横刷毛	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	有	有	
18	46	溝	P-35	甕	完形	16.3	25.3	2.5Y8/4 淡黄色	石英　雲母	良好	口縁部なで　胴部タタキ後刷毛 底部なで	口縁部なで　上半横刷毛 下半ナナメ刷毛	有	有	
18	47	溝	P-117	甕	上半	17.6	–	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部なで　胴部ナナメ刷毛後なで	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	無	無	7つからなる刺突文群
19	48	溝	P-44	甕	完形	12.0	12.0	2.5Y8/4 淡黄色	石英　雲母	良好	口縁部なで　上半横刷毛 下半縦刷毛	口縁部横刷毛　胴部ヘラケズリ	有	無	
19	49	溝	P-71	甕	底部欠	14.8	–	10YR8/2 灰白色	赤褐色粒　雲母 角閃石	良	口縁部刷毛後なで 胴部タタキ後刷毛	口縁部なで　胴部刷毛 底部ヘラケズリ	無	有	
19	50	溝	P-237	甕	完形	11.1	14.6	2.5Y8/4 淡黄色	石英　雲母	良好	口縁部なで　肩部刷毛後なで 胴部なで	口縁部なで　頸部指押さえ 胴部なで	有	有	
19	52	溝	P-128	甕	上半	13.6	–	10YR8/2 灰白色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部縦刷毛後なで 胴部ナナメ刷毛	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	無	無	
19	53	溝	P-237	甕	完形 復元	14.2	15.8	7.5YR7/4 浅黄橙色	赤褐色粒　長石 石英	良好	口縁部刷毛　胴部ヘラケズリ	ヘラケズリ	有	無	
19	54	溝	P-183	甕	完形	13.1	11.4	2.5YR8/3 浅黄色	石英　雲母	良好	口縁部、頸部なで　肩部縦刷毛 胴部ナナメ刷毛　底部縦刷毛	口縁部なで　肩部ヘラケズリ、なで 胴部ヘラケズリ	有	無	
19	55	溝	P-192の1	甕	完形	12.8	14.5	7.5YR8/1 灰白色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	なで	なで　ヘラケズリ	無	有	煮こぼれの跡あり
19	56	溝	P-222	甕	完形 復元	14.2	12.6	7.5YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	ナナメ刷毛	なで	有	有	形がいびつ
19	57	溝	P-243、 244	壺	完形	19.0	37.9	7.5YR7/6 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	タタキ後刷毛	口縁部なで　胴部刷毛	有	有	内器面に煤が付着
19	58	溝	P-225	壺	口縁部	13.2	–	10YR8/2 灰白色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	なで	なで	無	無	
19	59	溝	P-175	壺	下半	–	–	5 YR8/4 浅黄色	赤褐色粒　角閃石 長石	良好	中位から上は横刷毛後 ヘラミガキ、下はヘラケズリ	ナナメ刷毛	有	無	肩部内器面は粘土紐 接合痕が明瞭に残る
19	60	溝	P-162	高坏	坏部	25.0	–	10YR8/2 灰白色	角閃石　長石 石英	良好	口縁部なで　坏部刷毛	横刷毛	有	無	
19	61	溝	P-195	高坏	完形	25.0	17.7	7.5YR8/4 浅黄橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	刷毛後一部なで	なで	無	無	
20	62	溝	P-199	鉢	完形	10.4	4.7	7.5YR7/4 浅黄橙色	角閃石　石英 雲母	良	なで	なで	有	有	
20	63	溝	P-52	鉢	完形	12.6	3.8	10YR8/2 灰白色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良	口縁部なで　ヘラケズリ後なで	なで	有	無	
20	64	溝	P-31	鉢	完形	11.7	5.2	10YR8/3 浅黄橙色	角閃石　石英	良	口縁部なで　胴部上半なで後刷毛 胴部下半刷毛後なで	なで　底部指頭圧痕	無	無	
20	65	溝	P-170	鉢	完形	12.0	5.6	2.5YR7/6 橙色	赤褐色粒　角閃石 石英　雲母	良	口縁部刷毛　胴部ヘラケズリ	なで	無	無	一部被熱部あり
20	66	溝	P-189	鉢	完形 復元	15.6	7.2	N1.5/ 黒	角閃石　長石	良好	横刷毛　ナナメ刷毛	ナナメ刷毛	有	無	
20	67	溝	P-220	鉢	完形	22.4	10.2	10YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	横刷毛	ヘラケズリ	有	有	内器面に煤が付着
20	70	溝	P-187、 188	鉢	完形 復元	9.8	6.8	10YR8/2 灰白色	角閃石　長石 雲母	良好	ナナメ刷毛	横なで	無	無	
20	71	溝	P-40	鉢	完形 復元	12.0	8.0	7.5YR8/4 浅黄橙色	角閃石　長石 石英	良好	刷毛後なで	刷毛目	有	無	
20	72	溝	P-15	鉢	完形 復元	12.8	9.4	10YR8/2 灰白色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	ナナメ刷毛	ヘラケズリ	無	無	
20	73	溝	P-94	鉢	完形 復元	13.8	11.0	2.5YR5/8 明赤褐色	角閃石　長石	良好	なで	ヘラケズリ	有	無	
20	74	溝	P-131	鉢	完形 復元	27.8	17.5	10YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	ナナメ刷毛、縦刷毛	ヘラケズリ	有	無	

84-2番地出土　土器観察表　　その4

図	No	遺構名	P番号	器種	部位	口径	器高	色　調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備　考
20	75	溝	P-81	鉢	完形 復元	11.4	7.5	2.5YR6/8 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	刷毛後ヘラミガキ	なで	無	有	
20	76	溝	P-18	鉢	完形	13.4	7.5	7.5YR8/4 浅黄橙色	石英　赤褐色粒	良好	なで	なで	有	無	
20	77	溝	P-117	鉢	完形	13.8	6.6	7.5YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	ヘラミガキ	縦刷毛、ナナメ刷毛	有	有	
20	78	溝	P-17	鉢	完形	12.5	6.2	10YR8/4 浅黄橙色	石英　雲母	良好	口縁部なで　胴部、底部横刷毛	胴部指おさえ後なで	無	無	
20	79	溝	P－248	台付鉢	完形	14.7	8.4	2.5YR5/8 明赤褐色	長石	良好	ナナメ刷毛	ヘラミガキ	無	無	
20	80	溝	P-27、28	台付鉢	完形 復元	16.4	10.0	7.5YR8/2 灰白色	長石　赤褐色粒 雲母	良好	横刷毛	ヘラミガキ	有	無	脚台に3つ穿孔
20	81	溝	P-151	片口	下半	－	－	10YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	はけ	胴部はけ　脚部なで	無	無	橙色の色素が浮かぶ
21	82	溝	P-155	器台	中位欠	21.8	－	10YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石 雲母	良好	ヘラミガキ、なで	なで　ヘラケズリ	無	無	鼓形器台
21	83	溝	西壁一括	器台	中位欠	－	－	10YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石 雲母	良好	ヘラミガキ、なで	なで　ヘラケズリ	無	無	鼓形器台
21	85	溝	P-205	ミニチュア 土器（鉢）	完形	6.4	2.5	10YR5/2 灰褐色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	指なで	なで	有	無	
21	86	溝	南一括	ミニチュア 土器（鉢）	完形	7.3	2.5	7.5YR4/1 褐灰色	角閃石　長石	良好		ヘラによる調整	無	無	
21	87	溝	一括	ミニチュア 土器（甕）	完形	3.8	6.2	10YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石 雲母	良好	刷毛後なで	口縁部刷毛後なで　胴部指なで	有	無	
21	88	溝	南西一括	ミニチュア 土器（鉢か甕）	完形	7.4	6.4	7.5YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石	良好	縦刷毛	指なで	有	無	
26	1	中央南	CSP-17	ミニチュア 土器（鉢）	完形	7.0	3.5	7.5YR7/3 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	ヘラ調整後なで	ヘラ調整後なで	無	無	
26	3	中央南	一括	ミニチュア 土器（甕）	口縁部	5.0	－	5YR4/1 褐灰色	角閃石　長石 雲母	良好	口縁部なで　胴部刷毛		無	有	ススは2次的なもの
26	4	南西	一括	壺	上半	13.0	－	10YR8/4 浅黄橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	口縁部なで　肩部縦刷毛	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	無	有	二重口縁　肩部に6つからなる刺突文群
26	5	南東	一括	ミニチュア 土器（高坏）	坏部欠	－	－	10YR7/4 にぶい黄橙色	長石　石英　雲母	良好	指頭圧	指頭圧	無	無	
26	6	一括	一括	壺	口縁部	15.0	－	7.5YR7/4 浅黄橙色	赤褐色粒	良	なで	なで	無	無	須恵器
26	8	南西	SEP-1	甕	完形	22.2	39.7	10YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石	良好	口縁部タタキ後なで　胴部タタキ 下半なで	口縁部刷毛後なで 胴部刷毛	無	有	
30	1	一括	一括	灯明皿	完形 復元	7.6	2.7	2.5YR6/8 橙色	角閃石　長石 石英	良	なで	なで	無	無	
30	3	一括	一括	灯明皿	完形 復元	8.6	3.0	2.5YR6/8 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良	なで	なで	無	無	
30	4	北東	NEP-14	坏	完形	12.2	5.5	5YR7/6 橙色	角閃石　長石 石英	良好	なで　底部はヘラケズリ	なで	無	無	土師器
30	5	中央北	CNP-4	鉢	完形	16.4	4.6	5YR7/6 橙色	角閃石　長石 石英	良好	なで	なで	無	無	土師器 スリップ付？
30	6	北東	NEP-1	鉢	完形	21.0	14.2	7.5YR8/6 浅黄橙色	角閃石　長石 石英	良好	口縁部なで　その他刷毛	口縁部刷毛　その他 ヘラケズリ	有	無	土師器
30	7	中央北	CNP-23	坏蓋	完形	10.8	1.4	10BG5/1 暗青灰色	長石　雲母	良好	なで	なで	無	無	
30	8	中央北	CNP-12-1	坏蓋	完形	12.1	3.0	10G3/1 暗緑灰色	長石	良好	回転ヘラケズリ	なで	無	無	
30	9	表土	一括	盤	完形 復元	16.0	3.4	5YR5/3 にぶい赤褐色	長石	良好	なで	なで	無	無	須恵器
30	10	南西	一括	鉢	完形 復元	15.2	5.8	5 YR6/6 橙色	赤褐色粒　長石	良好	なで	なで	無	無	土師器　スリップ付？
30	11	南東	SEP-12	壺	胴部	－	－	2.5GY6/ 1オリーブ灰色	長石	良好	上半ロクロなで 下半回転ヘラケズリ	なで	無	無	台付はそう
30	12	南東	SEP-15	壺	胴部	－	－	10GY2/1 緑黒色	長石	良好	回転ヘラケズリ	なで	無	無	台付はそう

第２節　119番地の調査（第31図）

遺跡範囲確認調査のため行った。

調査地点は、国指定範囲に南接する畑地である。地形は北から南へ緩やかに下っている。現状は畑地である。戦後までは蚕業が盛んで、当地を含め周辺は一面の桑畑であったと地元の方から聞いている。実際、発掘を進めていくとそれは明らかで、表土を取り除くと、畑の畝の跡が深く残っていた。また、それが遺構まで達している部分も随分と見られた。残念ながら調査区の北半分は、畑整地の際にかなりの削平を受けており、遺構の残りは悪く、遺物もそれほど見られなかった。逆に南側は比較的遺構の残りが良く、住居や土坑のほか多数の遺物が出土した。旧地形は、現状以上に、北へ向かうにつれて標高が高くなっていたと思われる。

調査区は当初24m×15mのグリッドを設定し、調査後さらに同じ幅で南へ10m拡張した。さらに調査区北西部において拡張した11㎡を含めると、調査面積は521㎡となる。

当初の調査区からは１号～13号住居跡及び10～14号土坑、拡張部から14号～20号住居跡及び1～9号土坑を検出した。なお、遺構の番号についてであるが、住居跡は基本的に北から、土坑は南から順に番号を付けた。

１　検出された遺構

（１）　1号住居跡（第32図）

調査区の北西角で検出した。住居全体を検出するため一部拡張して調査したものの、後世の激しい撹乱をうけ、北西半分の壁は消失していたため、住居の規模は不明である。唯一検出できた南東壁の長さは、4.4mであった。床は硬化しており、中心からやや南東側に径30cmの円形状に焼土を検出した。焼土の色調は、鮮やかなオレンジ色である。また、南東壁のやや北側に住居に付随すると思われる土坑があった。この土坑は長さ80cm、幅60cm、深さ27cmを測り、ほぼ長方形を呈する。

遺物（第33図）

住居床面からガラス玉が３点出土した（第79図）。４は径4.0㎜、厚さ1.8㎜の完形で、青色を呈する。６は径3.8㎜、厚さ2.5㎜でやや小型である。色は瑠璃色である９は径5.2㎜、厚さ3.65㎜で青色の色調である。一部割れている。

土器は台付鉢などの脚台部と甕の上半部が南東壁の土坑内から出土している。１は甕で、タタキの後に縦刷毛で調整されている。２は鉢の脚台と思われる。径の小さな３つの穴が穿孔されている。３は甕の脚台である。４は鉢の脚台である。

（２）　２号住居跡（第34図）

調査区北端中央部で検出され、北半分は調査区外になる。１号住居跡の東に位置する。ここも撹乱及び削平を受けていたため、住居の東半分がなくなっていた。住居のプランは方形と思われるが、規模は不明である。南壁に付くかたちで不整形の土坑が検出された。全体的に深さは浅いが、中央部が深くなる。土坑の長軸は0.9m、短軸0.6mで、一段深くなる部分の長辺は0.57m、短辺0.2mを測り、深さはもっとも深いところで0.33mになる。

床面は非常に硬化していてほぼ平坦に広がる。またこの面上には楕円形状に長軸約1.5m、短軸約0.8mの範囲で細かい砂粒を含む灰が広がっていた。

遺物

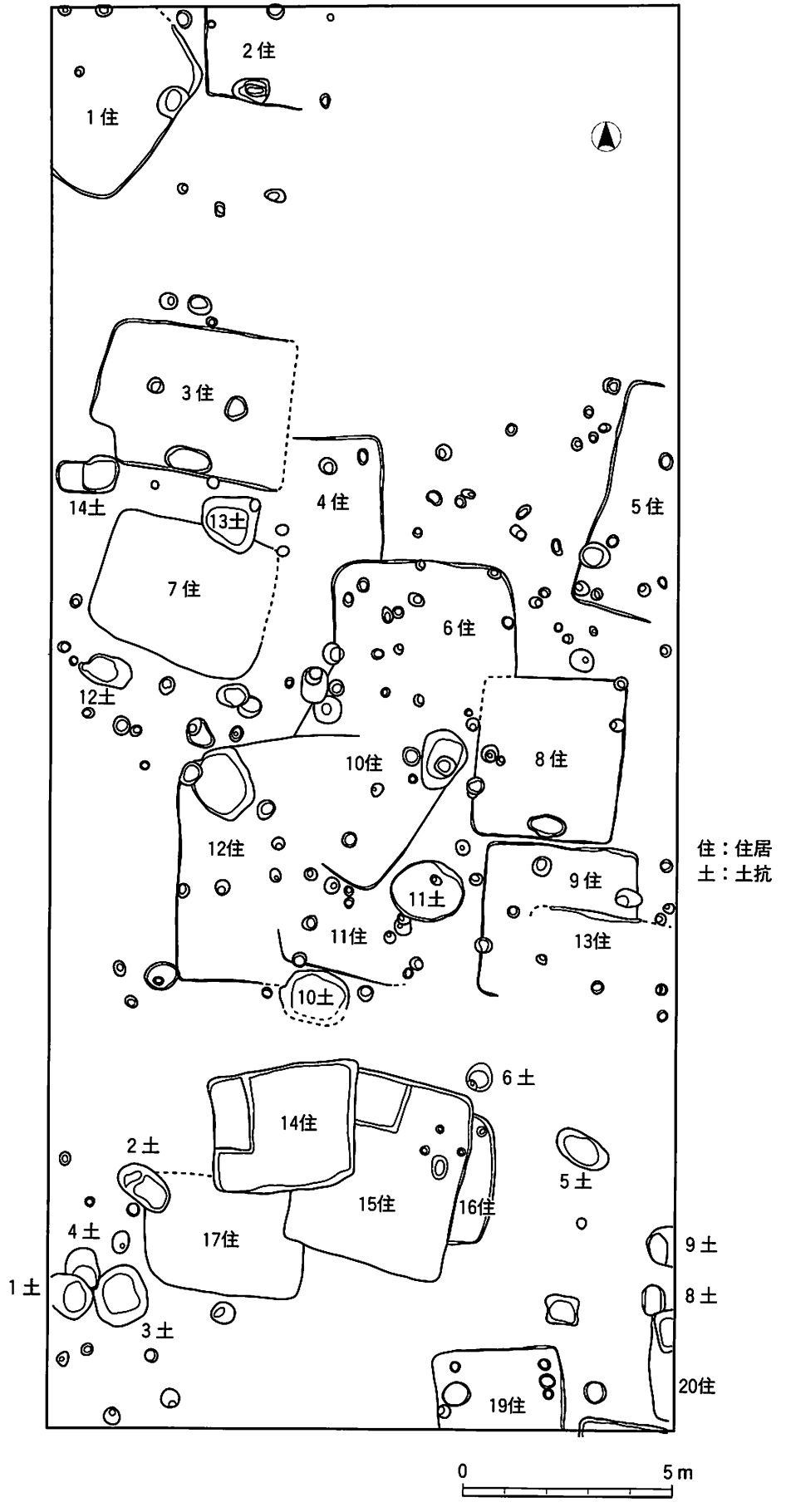
遺物は図化できないほどの小片の弥生土器しか出土していない。時期は不明。

（３）　３号住居跡（第35図）

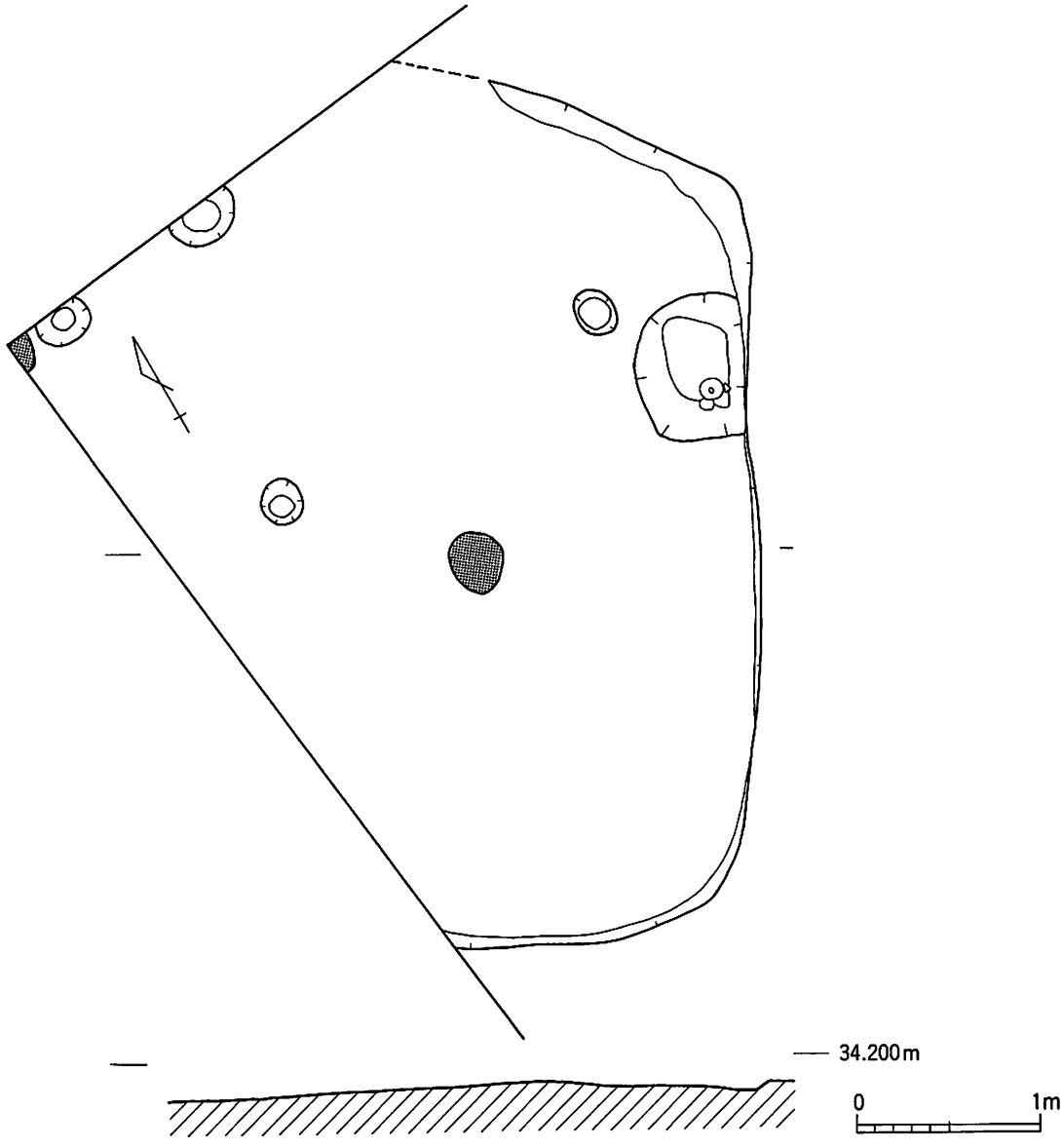
調査区の中央やや北側に位置する。すぐ南には７号住居跡がある。撹乱・削平のため、住居東壁が検出されなかったが、推定すると長辺は５mである。短辺は４mを測り、ほぼ長方形のプランを呈する住居跡になると思われる。検出面から床面までの深さはわずか６cmと非常に浅い。床は非常に硬く、中央部を中心に広がる。

住居跡の長軸と同方向に２つのピットが住居跡中央で検出され、これらが住居の柱穴になると考えられる。深さは0.6～0.65mである。中心には南北方向に50cm、東西に20cmの細長い範囲で炭化物の広がりが認められた。

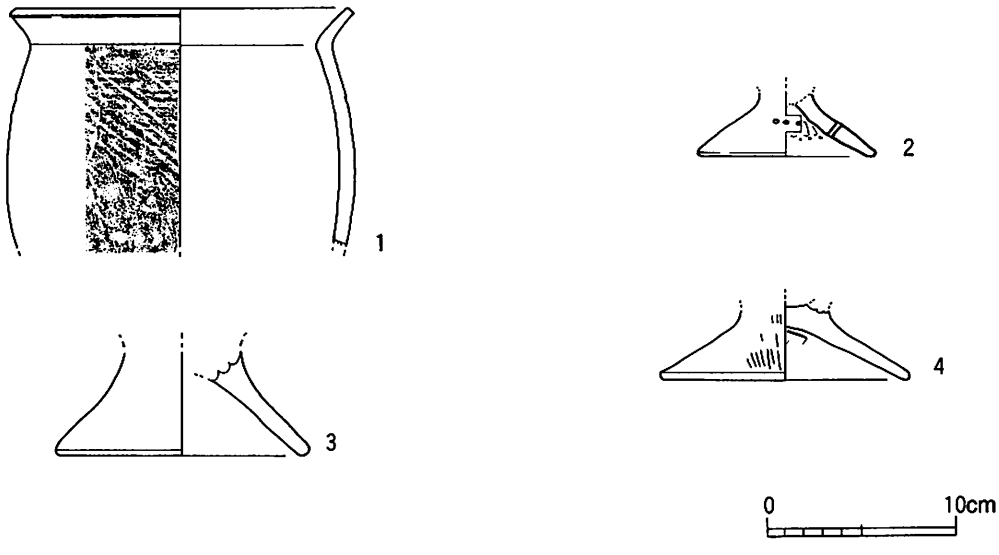
この住居の床面から、貼床状の白粘土が検出された。白粘土は、灰と１㎜角の長石などの石粒を多く含み、南壁から中央部やや北側にかけて広がって見られた。



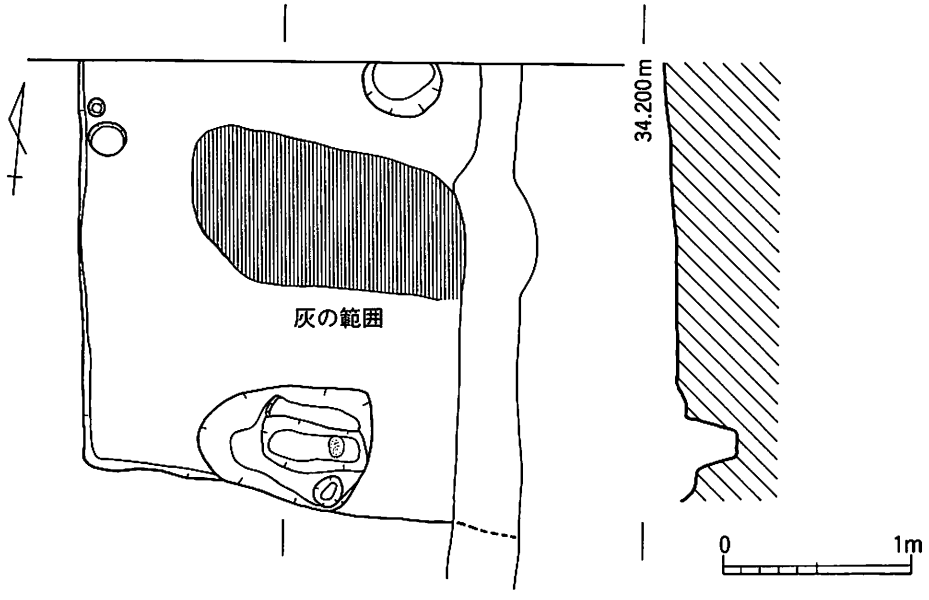
第31図　１１９番地調査区遺構配置図（S＝1／150）



第32図　１号住居跡　実測図（Ｓ＝１／40）



第33図　１号住居跡出土土器実測図①（Ｓ＝１／４）



第34号　2号住居跡　実測図（S＝1／40）

厚さは約5㎜であったが、特に住居南側についてはブロック状の白粘土が集中して検出された。粘土の下層からは粉々になった土器片が集中して出土した。その白粘土から、不整形の焼成粘土塊が17点出土した。この中には指の型が残るものや、藁のような幅3㎜程度の繊維の痕が付くものなどがある。このほかにも径5㎜程度の棒状の焼成粘土が3点出土している。

白粘土を取り除くと、住居南壁に添って土坑が検出された。平面形はほぼ円形で、一部が突出する。土坑は二段掘りになっていて、深い方の底までの深さは0.52mを測る。

遺物（第36図）

出土土器は壺、鉢、甕、大型の鉢がある。6が炉から、5と7が土坑から出土している。1は大型の鉢で細かい目のタタキ後に、目の粗い刷毛で雑に調整されている。整形、調整、胎土が10号住居跡の4と良く似ている。2は壺で、頸部外器面に粘土の接合痕が明瞭に残っている。3の壺は肩部にタテハケ、胴部にナナメハケを施す。5は甕の口縁部で内湾して開く。6は小型の鉢で、5㎜大の大きな長石を含む特徴のある胎土である。8は鉢または甕の脚台か。

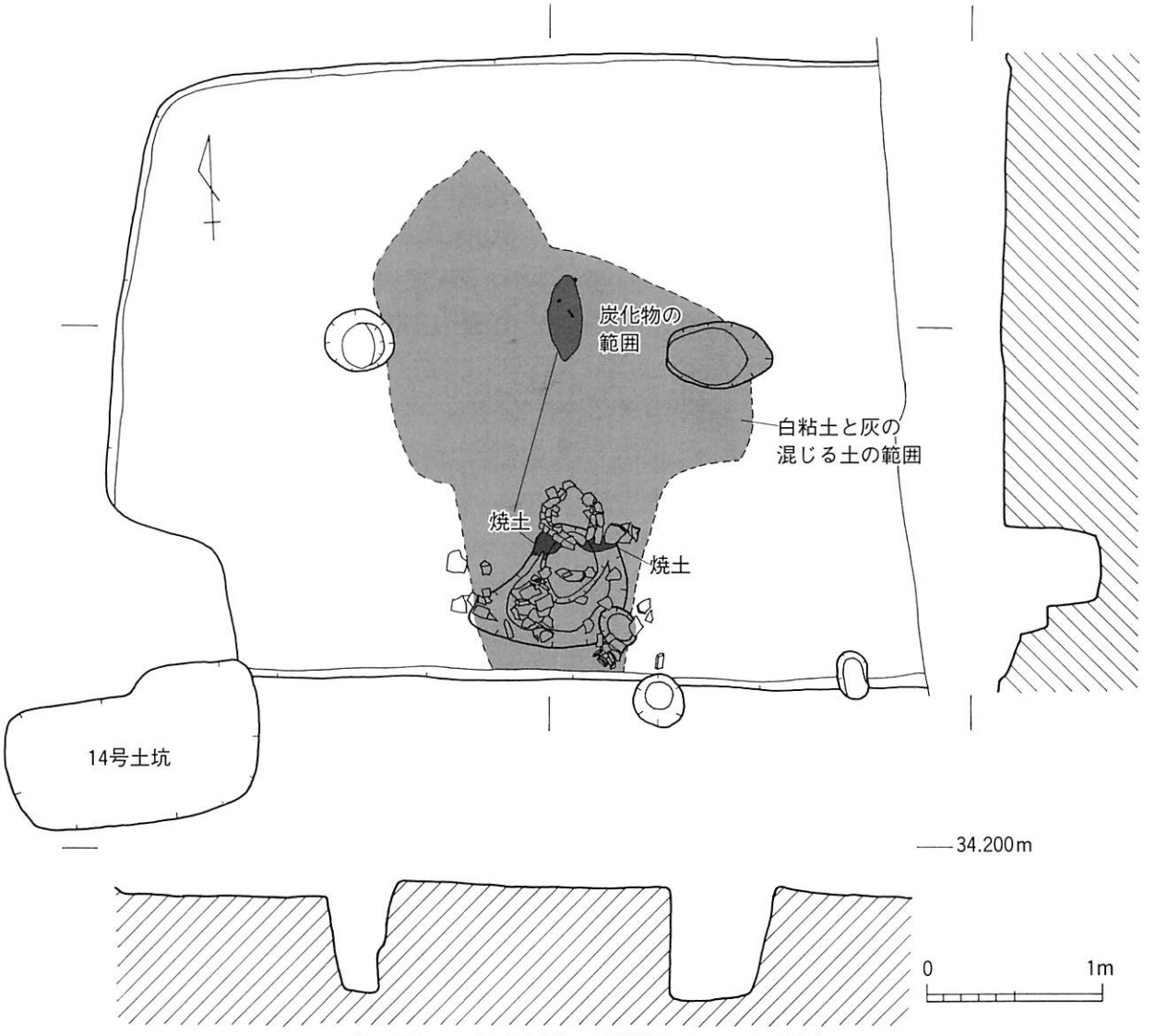
第81図13はミニチュアの鉢形？土器である。南壁の不整形土坑の焼土内で出土した。平底の底部からほぼ垂直に胴部へ立ち上がり、口縁部が外へ開く。口縁部端部を欠いている。内器面にはベンガラがしっかりと残っており、赤彩というよりも、塊として残っている状態である。容器、またはパレットのようなものとして利用されたものではなかろうか。

非常に硬化した床面と長石などの粒や灰が混じった白粘土、そして20点近くの焼成粘土塊から、3号住居跡が特殊な遺構である。この遺構の性格として、土器焼成に関係した遺構の可能性を挙げておきたい。焼成粘土塊が焼成時の炉壁と考えられないであろうか。今後の類例を待ちたい。

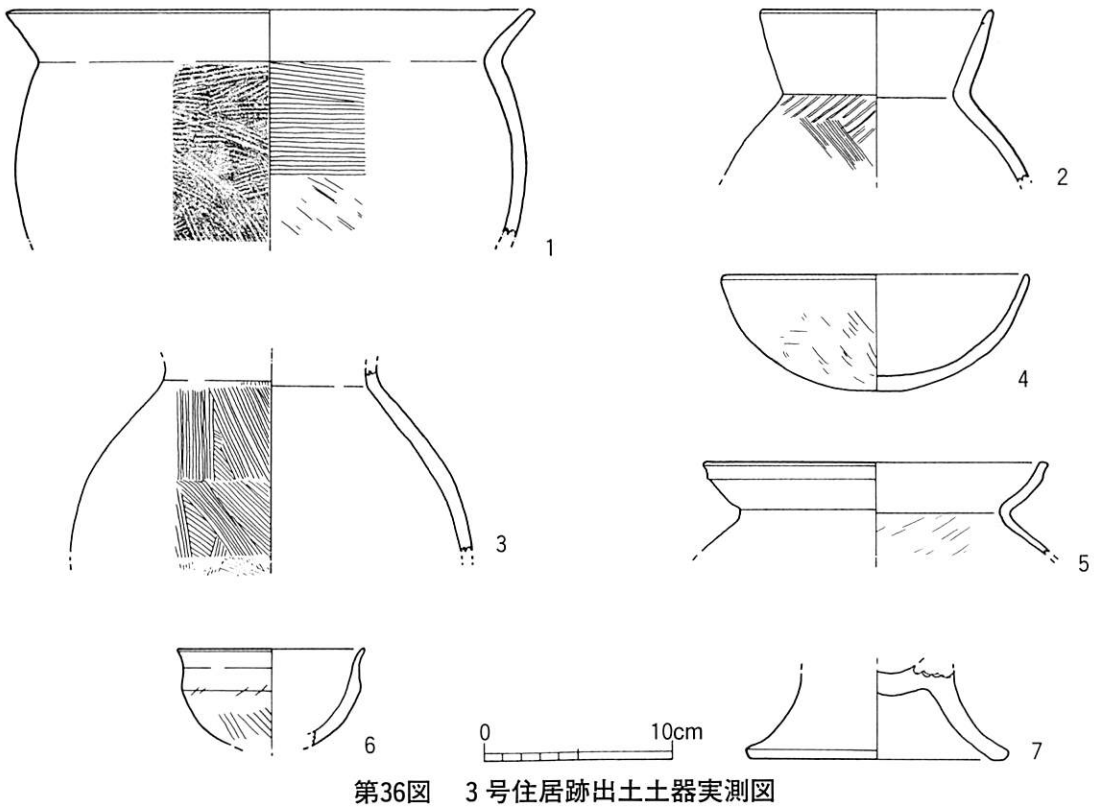
土器焼成と限定されなくとも、この住居跡にみられた特殊な遺物や非常に硬化した床面、貼床状の白粘土などから、この住居跡が何らかの工房跡である可能性が高いと思われる。

（4）　4号住居跡（第37図）

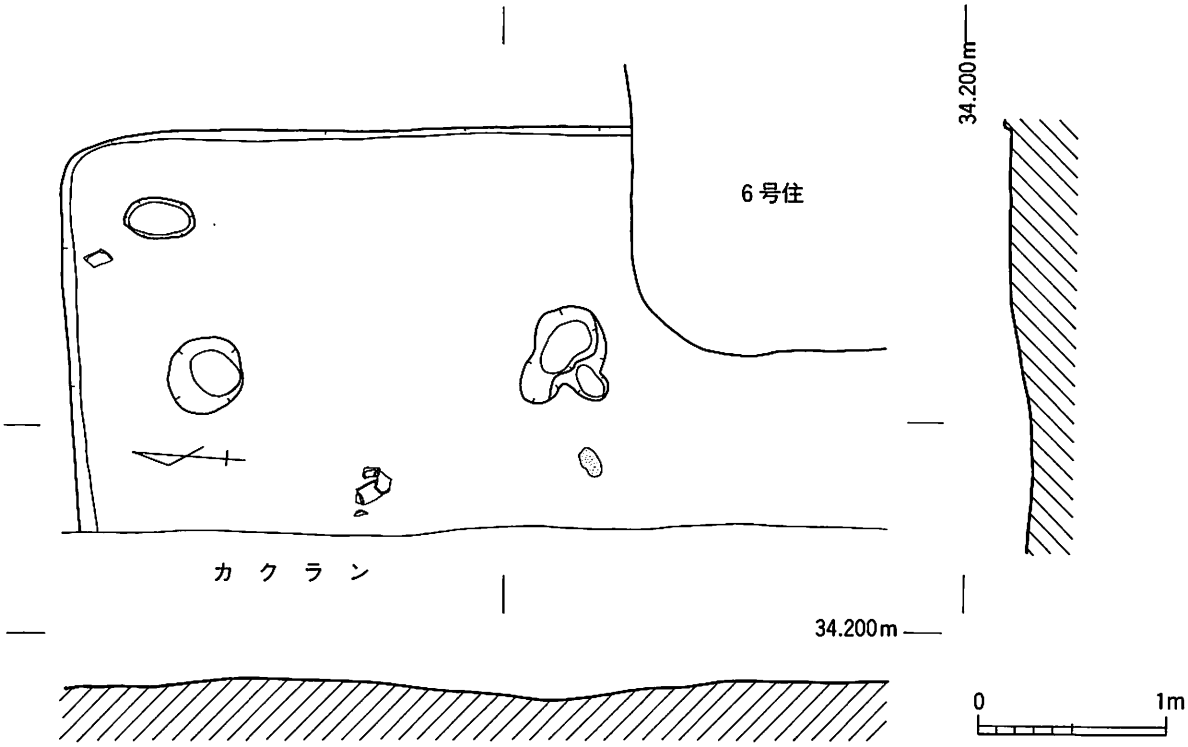
調査区中央やや北で検出された。南東部を6号住居跡で切られている。また、後世の削平により、西側半分は検出できなかった。規模については不明である。床はやや硬く、ほぼ平坦である。柱穴、炉などについては検出されなかった。



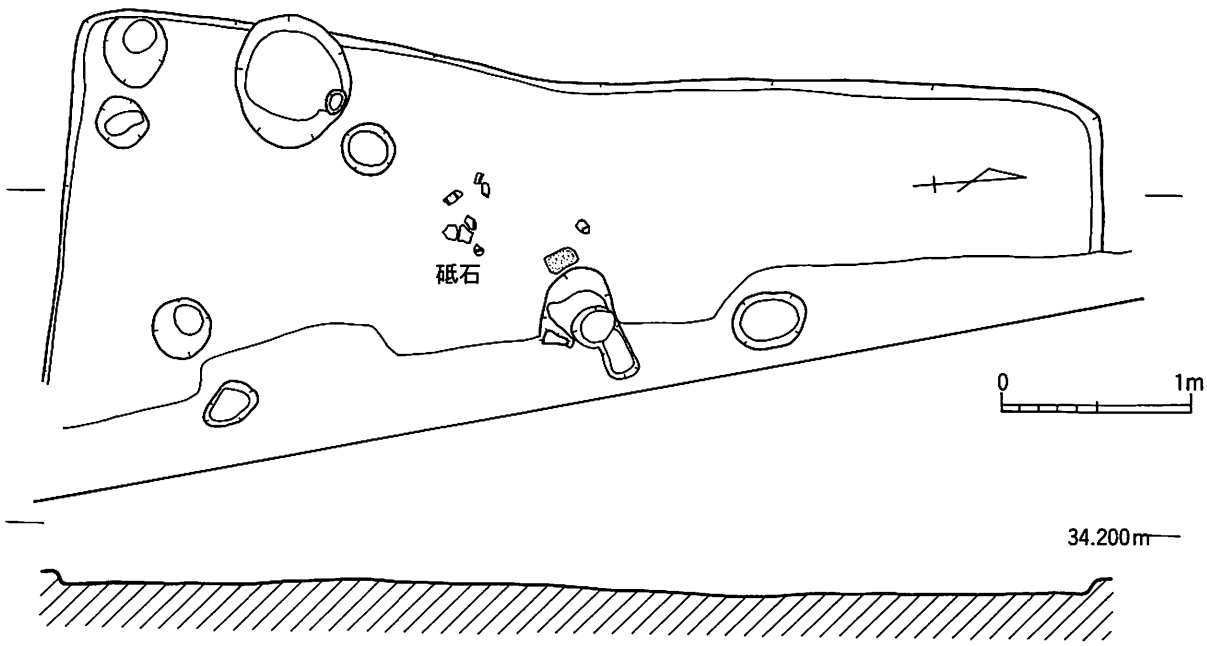
第35図　3号住居跡　実測図（S＝1／40）



第36図　3号住居跡出土土器実測図



第37図　4号住居跡　実測図（S＝1／40）



第38図　5号住居跡　実測図（S＝1／40）

遺物

甕の底部が1点出土している。図化できないほどの小片であるが、底部には脚台の剥離痕が残っており、砂型も残っている。

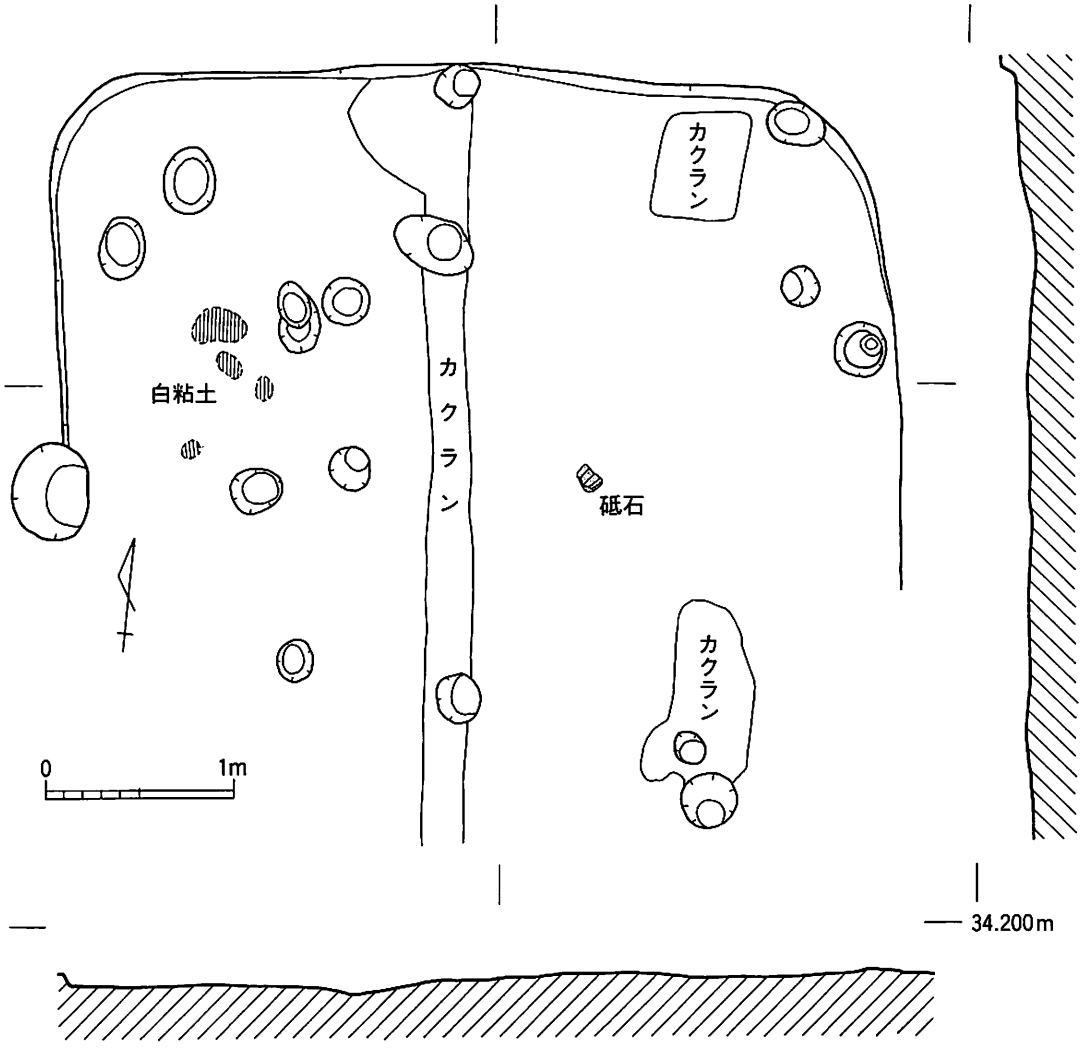
時期は不明であるが、弥生時代後期の範囲内ではあると思われる。

（5） 5号住居跡（第38図）

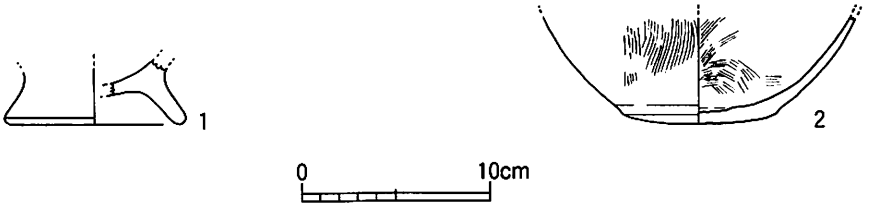
調査区中央の東端で検出された。検出できたのは西側の一部だけであるため、全体的な規模については不明である。検出できた西壁の長さは5.5mを測り、当遺跡では規模の大きい住居跡である。

遺物

図化可能な遺物は出土しなかった。時期も不明である。



第39図 6号住居跡 実測図（S＝1／40）



第40図 6号住居跡出土土器実測図

（６）　６号住居跡（第39図）

調査区のほぼ中央部で検出され、北にある４号住居跡を切る。しかし、住居の南半分は後世の削平のために検出できなかった。よって、南側にある８、10、12号住居跡との切り合い関係は不明である。一辺の長さを知ることのできた北壁の長さは4.4ｍである。住居の炉や柱穴になると思われるピットは検出されなかった。

住居の北西部からは、４箇所で白粘土が床から浮いた状態ではあるが、検出されている。この粘土は、長石や雲母を含む白粘土である。

遺物（第40図）

壺の底部と鉢の脚台部が出土した。１は壺の底部で、レンズ状の底部で、胴部は球形に張るものと思われる。２は台付鉢の脚台であろう。また、大型の砥石も出土した。

（７）　７号住居跡（第41図）

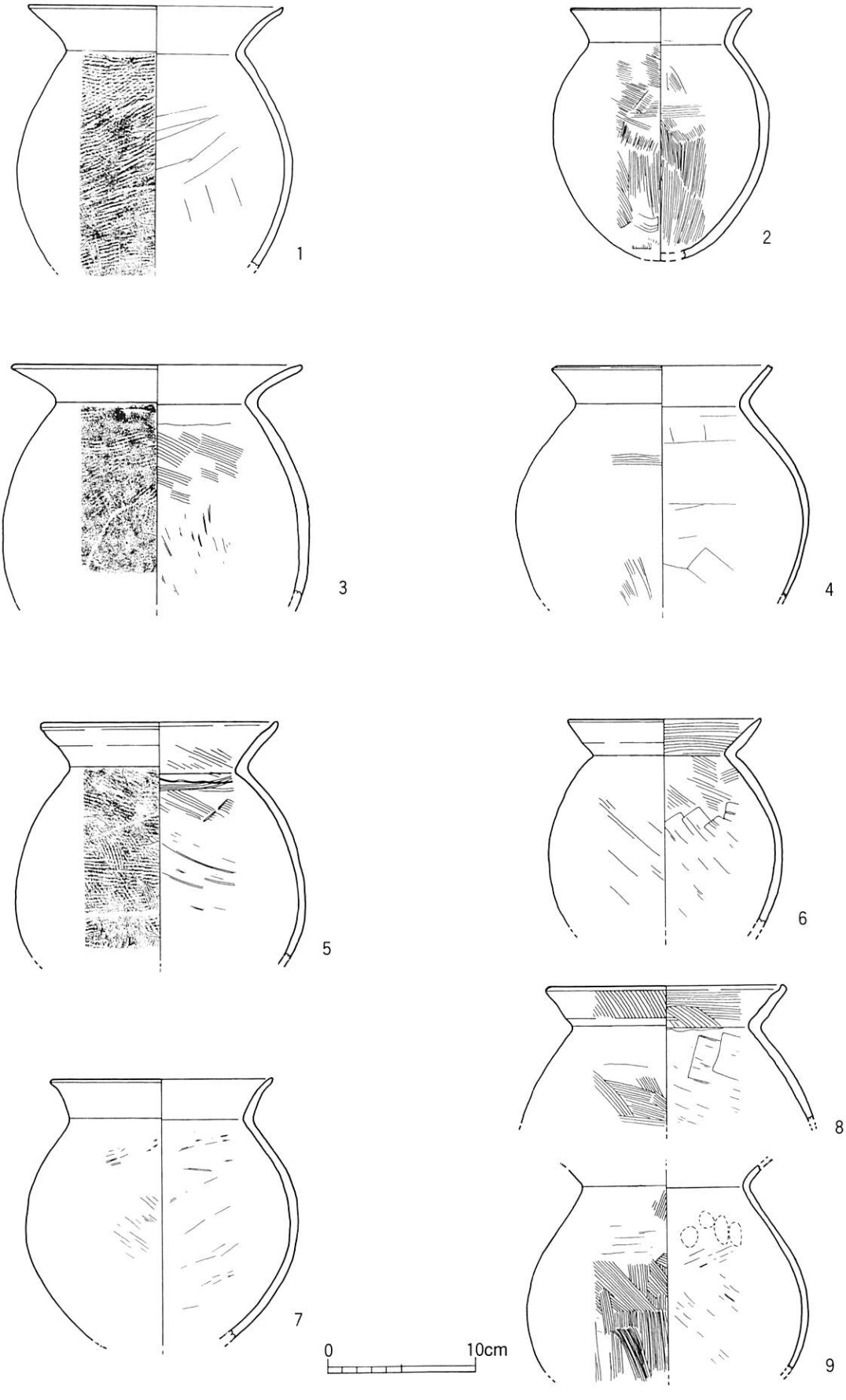
調査区中央部やや西側で検出された。北壁の一部が土坑に切られ、住居の北東隅が撹乱で失われているが、ほぼ全体を知ることができる住居跡である。長辺が推定4.4m、短辺が3.2mのやや小型の住居跡で、プランは長方形を呈する。南壁には床が二段になった不整形の土坑が付く。住居中央部ではオレンジ色のしっかりとした焼土が検出された。しかし、円形を呈しておらず、15ｃｍ四方の３つの塊からなる。床面は硬化しており、ほぼ全面が平坦である。また、この住居は埋没途中に土器溜めとして多量の土器が廃棄されている。出土土器の器種は甕、壺、器台、高坏、鉢と多種多彩である。

遺物（巻頭カラー３　第42～46図）

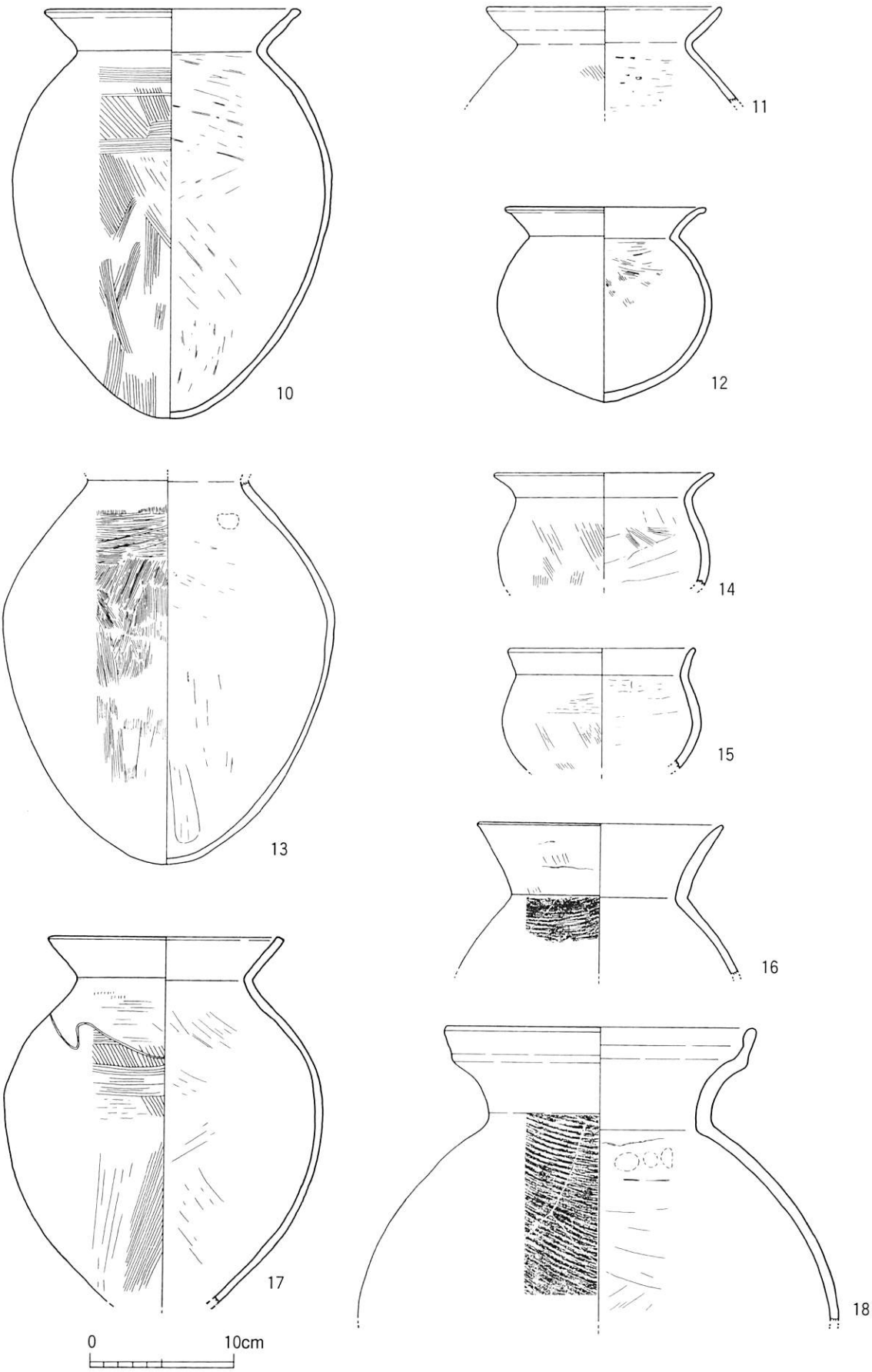
注目される遺物として小型仿製鏡が出土している。その出土状況は特殊で、ほぼ均等に割れた２つの破片



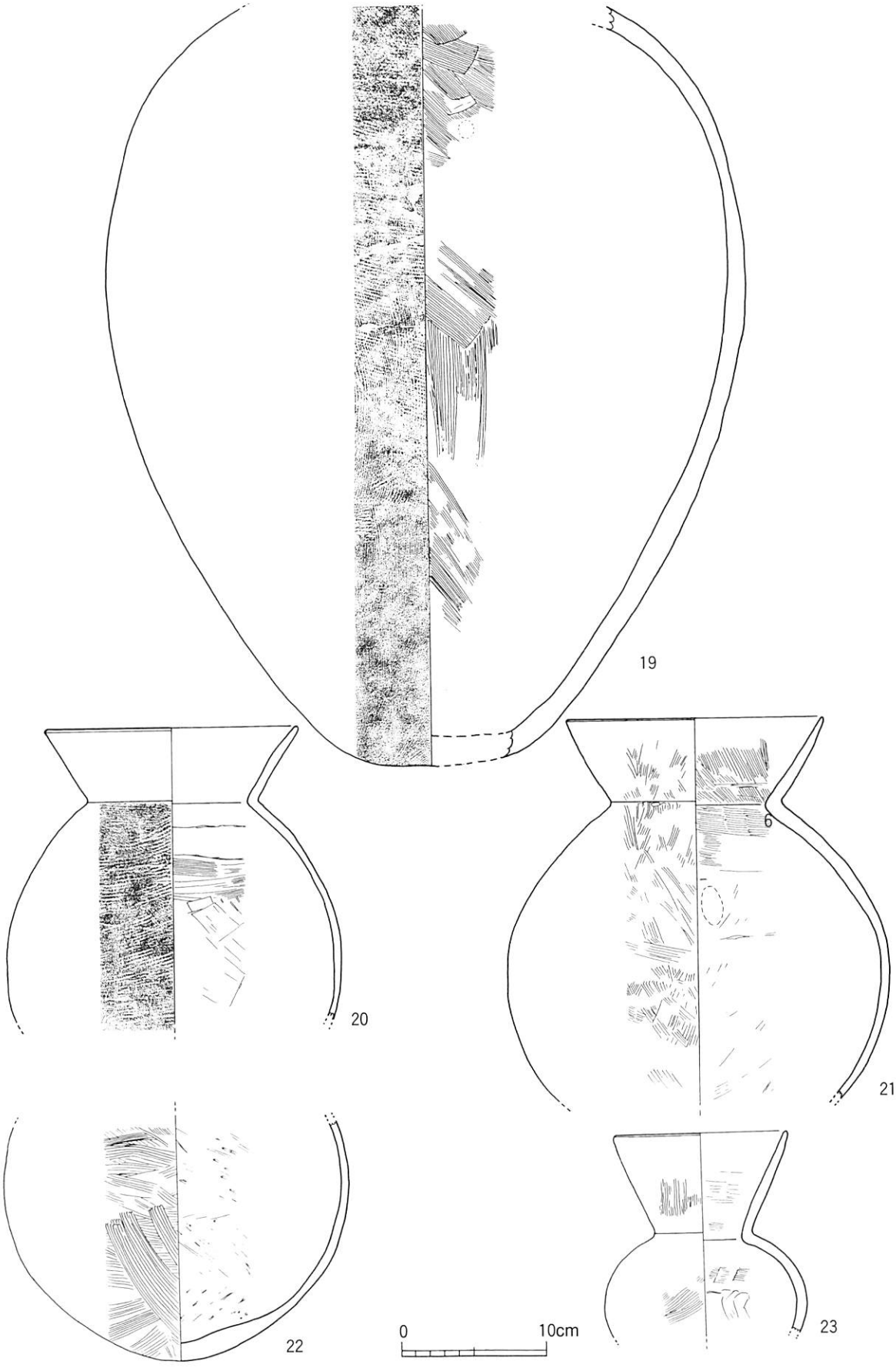
第41図　７号住居跡　実測図（Ｓ＝１／40）〔淡色は上層〕



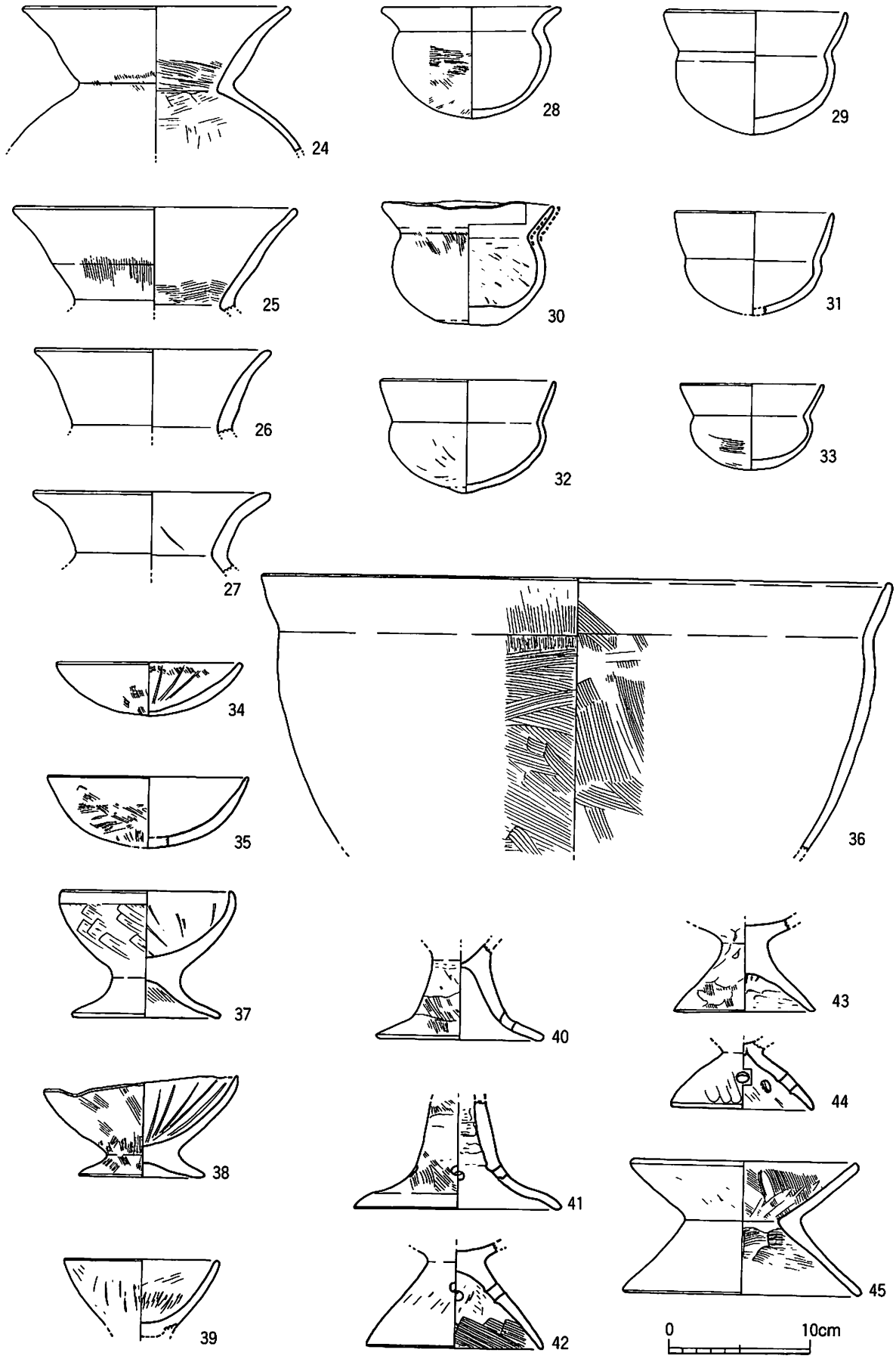
第42図　7号住居跡出土土器実測図①



第43図　7号住居跡出土土器実測図②



第44図　7号住居跡出土土器実測図③



第45図　7号住居跡出土土器実測図④

が、位置もレベルも異なって出土した。一点は土器群からやや北へ外れた住居北東部で、凹面を天に向け、住居床面から浮いた状態で出土した。もう一点は床直上からの出土で、一方から南西へ60ｃｍ離れた地点であった。こちらも凹面が天を向いた状態で出土した。後世の撹乱によって二つに分かれたことも考えられるが、どちらも明らかな撹乱範囲からの出土とは言いきれない。鏡を廃棄した際、故意に割り、別々の場所に捨てたのであろうか。疑問が残る。

小型仿製鏡は直径7.8cmで外縁をわずかに欠いているがほぼ完形である。後で見つかった図右半分はブロンズ病による損傷が激しいため、細かく割れ文様が見えない部分がある。文様は外側から外縁、櫛歯文帯、内行花文帯、内縁、鈕で構成されている。外縁の厚さは1.5㎜で、断面は丸い。櫛歯文帯の幅は３㎜で櫛歯は斜め（左上斜め）を向く。図の左（時計でいうと９時の）部分で鋳くずれが見られる。内行花文は12個で構成されている。上面は研磨され平坦になっている。鈕の高さは４㎜である。全体の厚さはわずか１㎜で、非常に薄い。鋳造後、かなり研磨されたことが分かる。

外縁が狭い点、面径、文様構成から小型内行花文仿製鏡Ⅰb類にあたると思われる。

当資料と同笵の可能性が強い資料が、菊池川中流域の集落遺跡である「うてな遺跡」から出土している。直径、文様の構成ともに同じであり、櫛歯文帯に見られる鋳ながれも酷似している。（高木正文1999「熊本県うてな遺跡」『季刊考古学　別冊９　邪馬台国の国々』西谷正編　雄山閣）。同水系で共に拠点的集落と考えられている遺跡から、同笵の小型仿製鏡が出土したことは当時の集落間の関係を考える上で非常に興味深い。

甕は器高25cmから30cmの中型のものが５点、それ以下のものが８点出土した。中型の甕は倒卵形で、外器面はハケ調整、内器面はヘラケズリが施されている。17は外器面の肩部に波状紋が描かれている。小型の甕は、外器面にタタキ目が残っているもの（1.5）と丁寧なハケ調整が施されているものとがある。内器面は大半がヘラケズリであるが、５と６は胴部上半に、２は全体に刷毛調整が施されている。

壺は破片を含めて11点掲載している。（小型丸底壺を除く）。口縁部が二重口縁になるものが1点(18)、直線的に外へ開くもの（18、23以外の９点）、長頸のもの（23）に大きく分けられる。内器面はいずれもヘラ削りが施されているが、外器面はタタキ目が残るものと、ハケ調整が施されているものとがある。またこれ以外に、胴部の高さだけで50cmを越える大型の壺（19）が１点出土している。

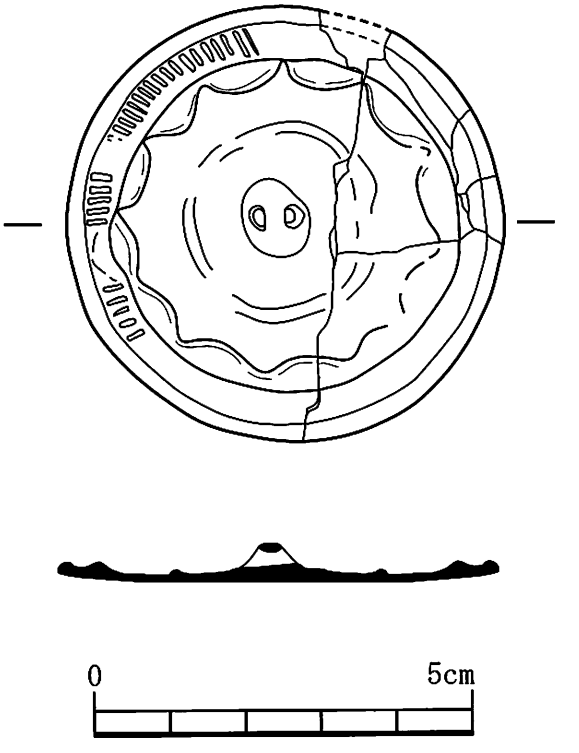
小型丸底壺は８点掲載している。30は口縁部がいびつである。

鉢は９点掲載している。脚台が付くものと付かないものに分けられる。38は低い脚台が付き、鉢部の内器面は放射状にヘラミガキが施されている。このほか、形状がかなり異なるが口径43.4cmという大型の鉢36が1点出土している。両面ともハケ調整である。

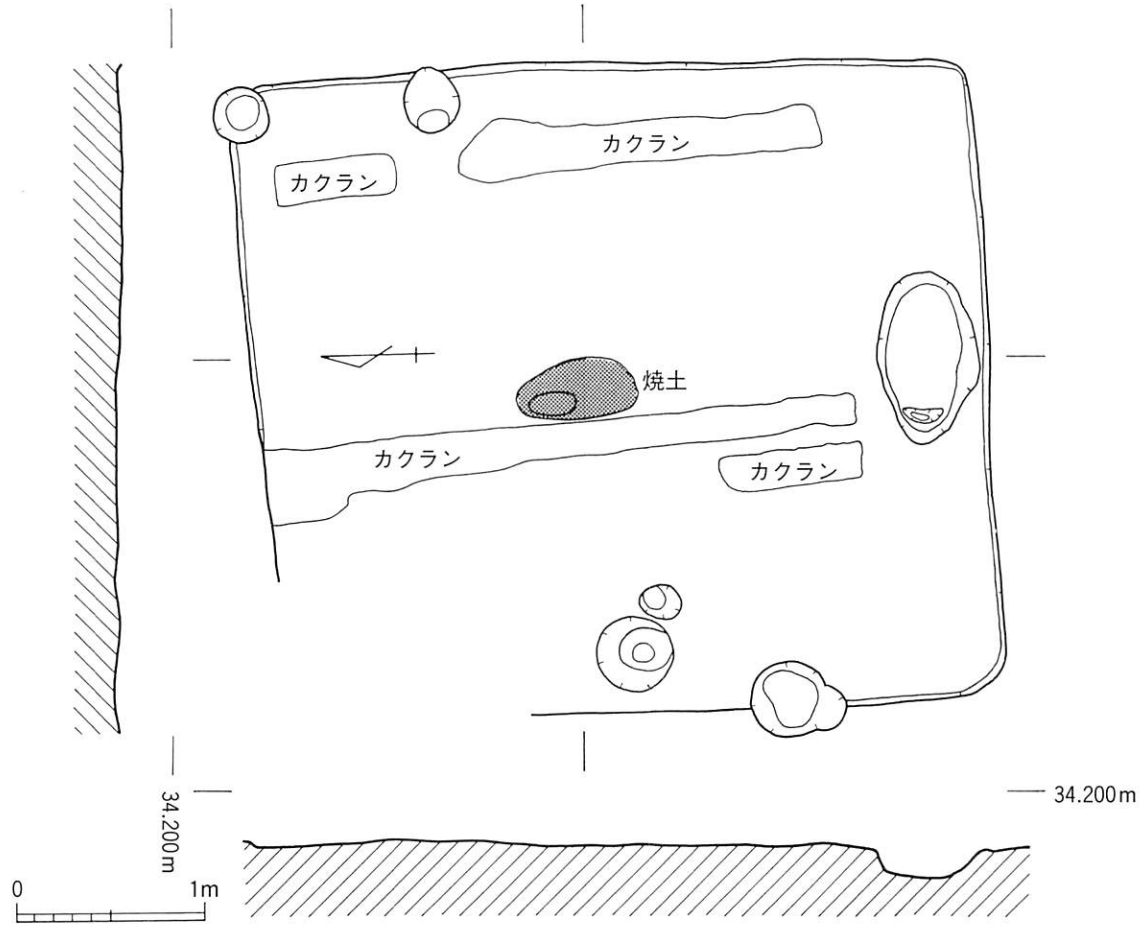
器台は1点掲載した。45はほぼ完形の器台で、布留系の小型器台である。内器面は丁寧にハケ調整が施されている。

高坏は脚部だけであるが、３点掲載している。41は裾部が一度緩やかに膨らみ端部へいたる。

鉄器は無頸鉄鏃（第82図13）の下半が１点出土した。



第46図　７号住居跡出土小型仿製鏡実測図（Ｓ＝１／１）



第47図　8号住居跡　実測図（S＝1／40）

（8）　8号住居跡（第47図）

調査区中央東側で検出された。壁の北西部が撹乱により破壊されていたものの、ほぼ規模は知ることができた。プランは長方形で、長軸は3.9m、短軸は3.5mを測る。住居のほぼ中央に縦長の浅い炉があり、住居南壁際には楕円形の貯蔵穴が作られている。主柱穴にあたるようなピットは、住居中央西側の1基しか検出できなかった。

遺物は出土しなかった。

（9）　9号住居跡（第48図）

調査区中央からやや南東部で検出された。南東部を13号住居跡に切られており、後世の削平により南壁はほとんど検出できなかった。しかしながら、若干残っていた南と東の壁から推定すると、9号住居跡は一辺3.7mの正方形を呈するようである。床はそれほど硬化していなかったが、南西隅の床面に、長径1.3m、短径0.6mの楕円形状に厚さ5㎝の焼土が広がっていた。この焼土の下で直径0.7mの大型のピットが検出され、焼土が埋土上層となっていた。上層の焼土は厚さ20㎝で、その下層には15㎝の厚さで黒色土が堆積していた。そしてさらにその下層で厚さ15㎝程度の焼土が認められ、結局15㎝程度の焼土と黒色土が交互に2層ずつ堆積していた。

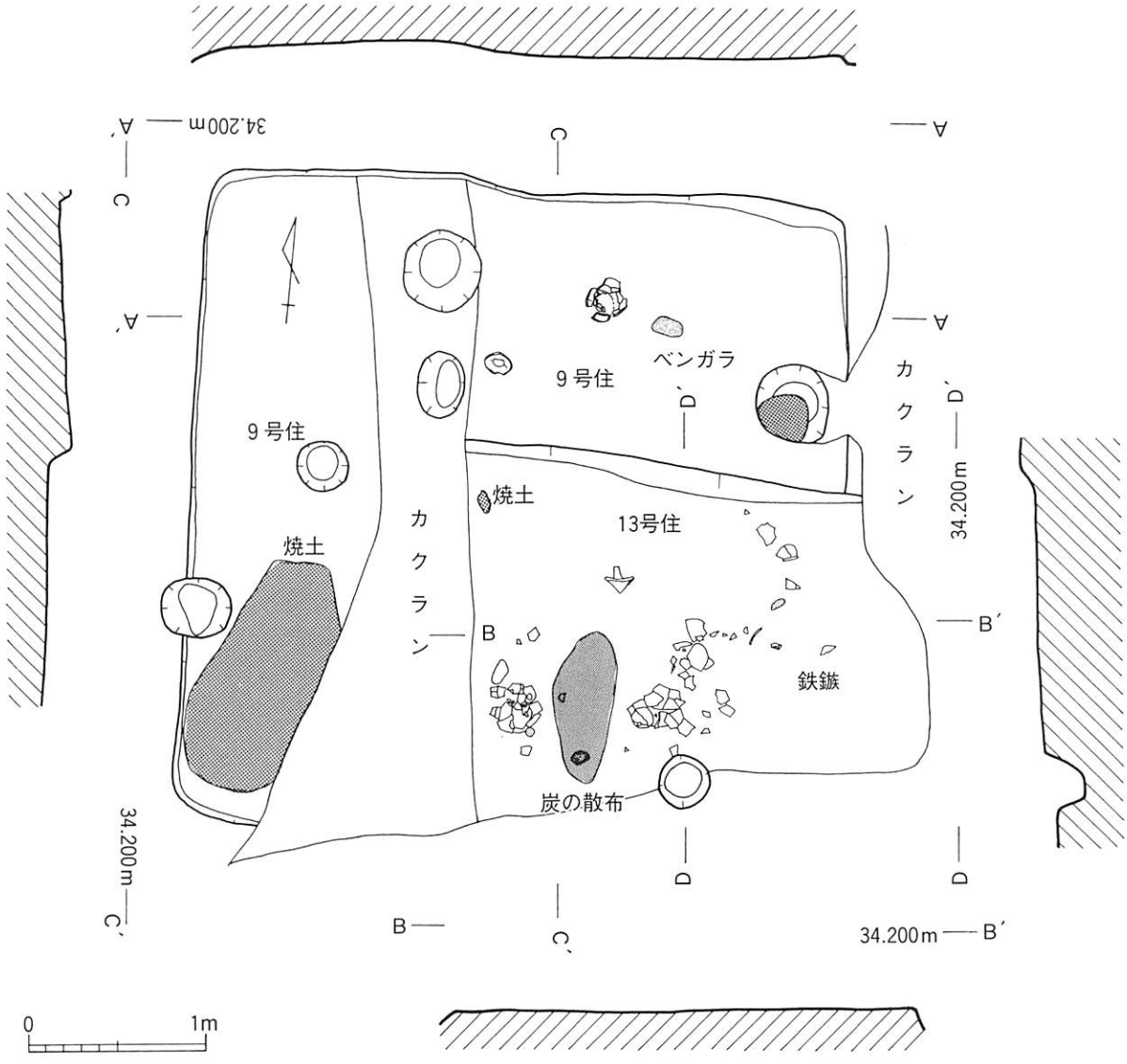
このほか、別の焼土が住居東壁際のピットからも炭化物とともに検出された。

現在のところ火災住居の可能性と鉄製品の工房的な遺構であった可能性の二つが考えられる。残念ながら、この遺構の性格を決定付ける遺物が出土しなかったため、二つの可能性があることだけを述べておきたい。

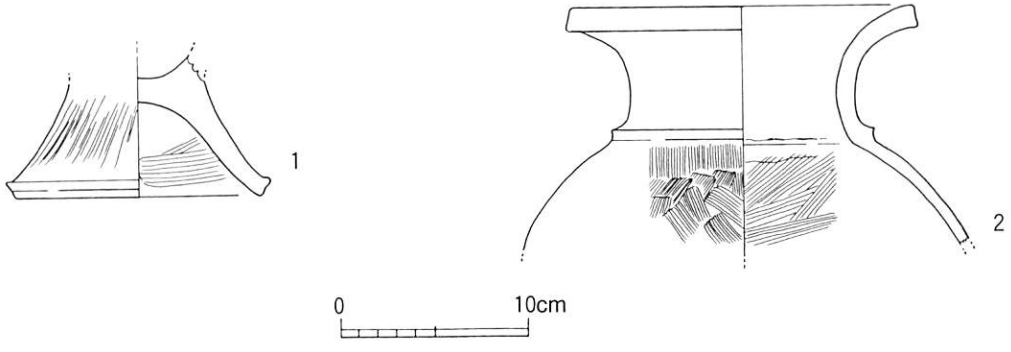
またこの他に、住居北東側の床面でわずかではあるが、ベンガラが検出された。

遺物（第49図）

遺物はやや浮いた状態ではあるが、甕の脚台と壺の上半が出土した。1は甕の脚台である。裾部が角張る。2は壺の上半部で、頸部に突帯が1条めぐる。



第48図　9号住居跡・13号住居跡　実測図（S＝1／40）



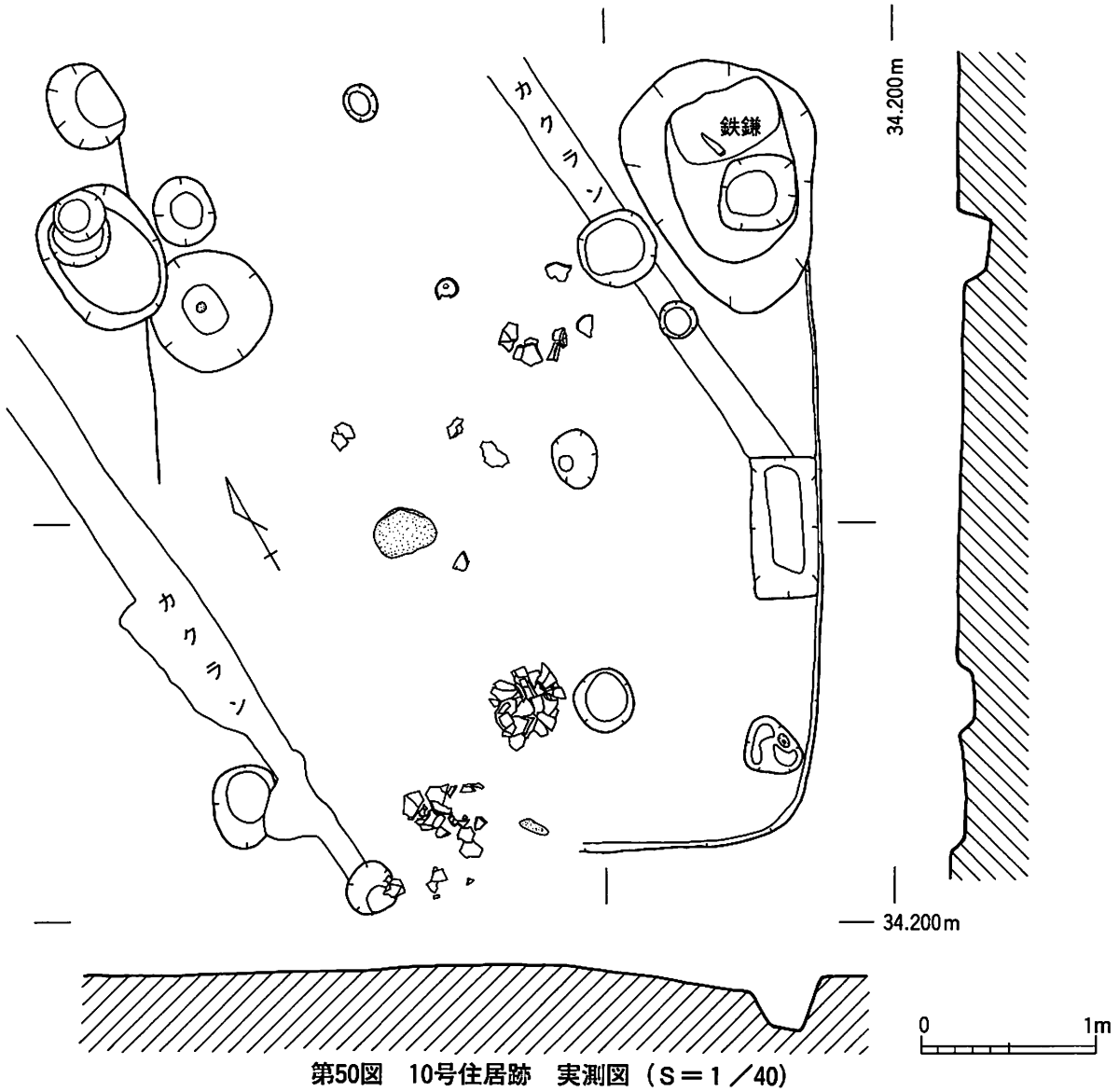
第49図　9号住居跡出土土器実測図

(10)　10号住居跡（第50図）

調査区中央のやや南側で検出された。撹乱を受けて残存状態が極めて悪いため、住居のプラン、規模は確認できなかった。推定で長さ4.5m、幅3.8mの長方形のプランになると思われる。唯一確認できた東壁には、長方形の土坑を有する。規模は長さ0.8m、幅0.35m、深さ0.2mを測る。中から完形の鉄鏃が1点出土した。

遺物（第51図）

遺物は甕2点、壺1点、砥石2点が出土した。1は甕の上半部である。胴部中位よりやや下が最大径にな



第50図　10号住居跡　実測図（S＝1／40）

る。また口縁端部は先端に行くにつれ薄くなって、尖り気味になる。外器面はタタキ後ハケ調整が施されている。2は完形の布留系甕である。口縁部が内湾気味に開き、先端部は若干肥厚する。3はほぼ完形の広口壺である。口縁部はラッパ状に開く。胴部は丸く膨らみ、尖底の底部に至る。外器面は右上がり斜め方向のタタキ（肩部は横方向のタタキ）の後、縦方向にハケ調整が施されている。4は大型の鉢の上半部である。

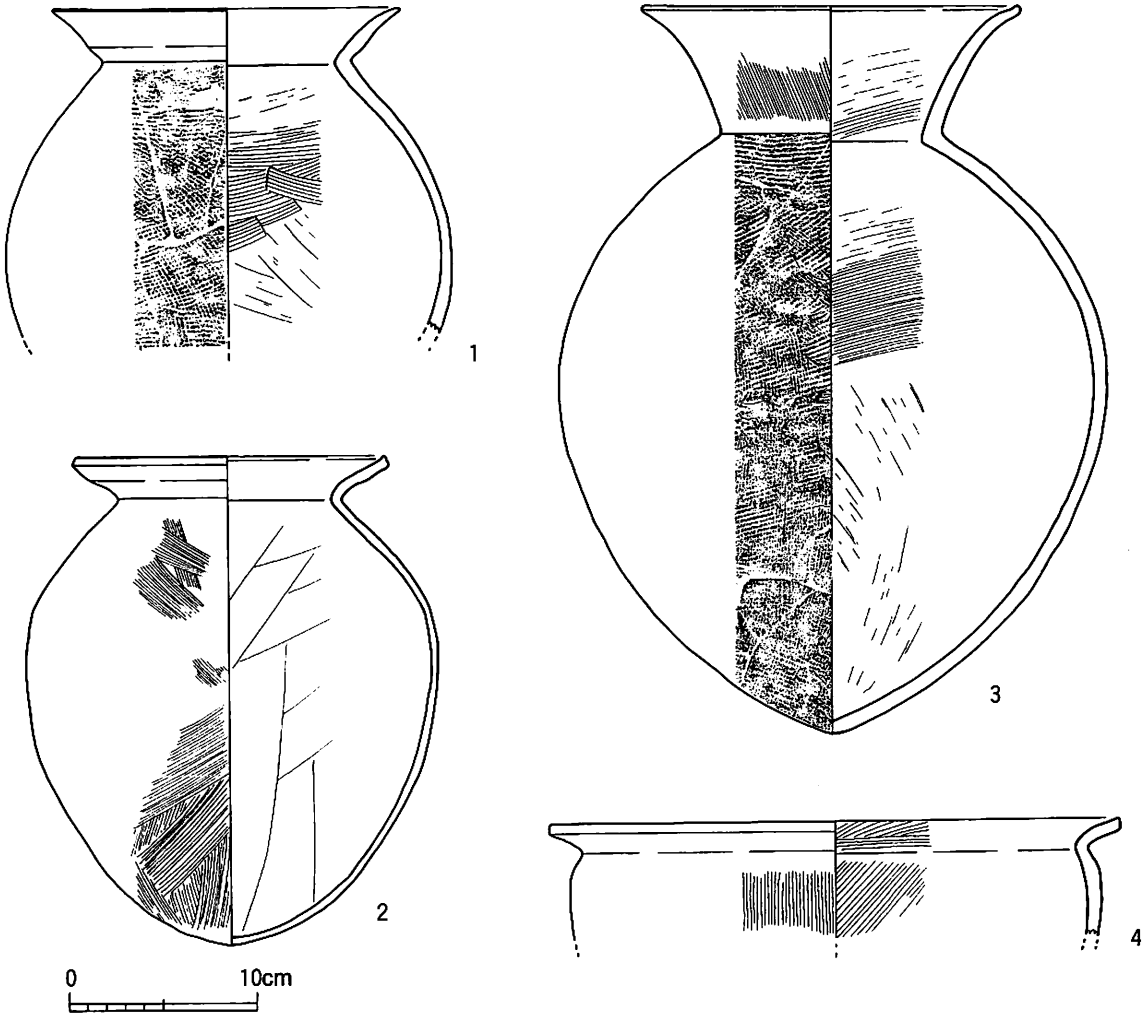
第83図6は砥石である。長さは9.8cm、幅14.6cm、厚さは最大5.6cmである。重さは943.5ｇ。実測図の断面から分かるように、上面は磨り減ってくぼんでおり、かなりの使用されたことが分かる。くぼんだ部分には縦方向に細い条痕が何本も見られる。下面も砥ぎ痕がみられる。第83図8も割れた砥石である。長さ12.6cm、幅5.5cm、厚さ3.0cmで、重さは338.3ｇである。実測図の上面と左側面のみ残っており、その他の面は剥離又は欠損している。

鉄器は鉄鎌が1点出土した。第82図14は鉄鎌で、長さは18.5cm、幅は3.0～4.5cm、厚さは0.4cmを測る。重さは94.1ｇである。基部の屈折部は鋭角でなる。平面形を見ると、上辺は緩やかな弧を描くのに対し、下辺は中程を頂点にした山形になっていて、刃部中央部がかなり磨り減っていることが分かる。随所に白色の錆が付着している。

(11)　11号住居跡（第52図）

調査区中央南側で検出された。北側を10号住居跡に、南東部を11号土坑に切られており、プラン、規模ともに不明である。

遺物（第54図）



第51図　10号住居跡出土土器実測図

遺物は鉢2点、高坏の口縁部が1点出土している。

2は高坏の口縁部である。口縁部がやや長く伸び、緩やかに外反する。1はほぼ完形の鉢である。胴部やや下位が最大径となり、口がややすぼむ。外器面は右下がりの目の粗いタタキ後ナナメ刷毛が、内器面はナナメ刷毛が施されている。

(12)　12号住居跡（第53図）

調査区中央南側で検出された。西壁は検出できたものの、撹乱や土の判別の難しさ等により全体を把握できなかった。また、10号、11号住居跡との切り合い関係は不明である。住居北西隅には、長径1.55m、短径1.3m、深さ0.23mの楕円形を呈する土坑を有する。

遺物（第55図）

土坑からは、高坏の脚部（2）が出土した。住居からは小型丸底壺の上半（1）が出土した。

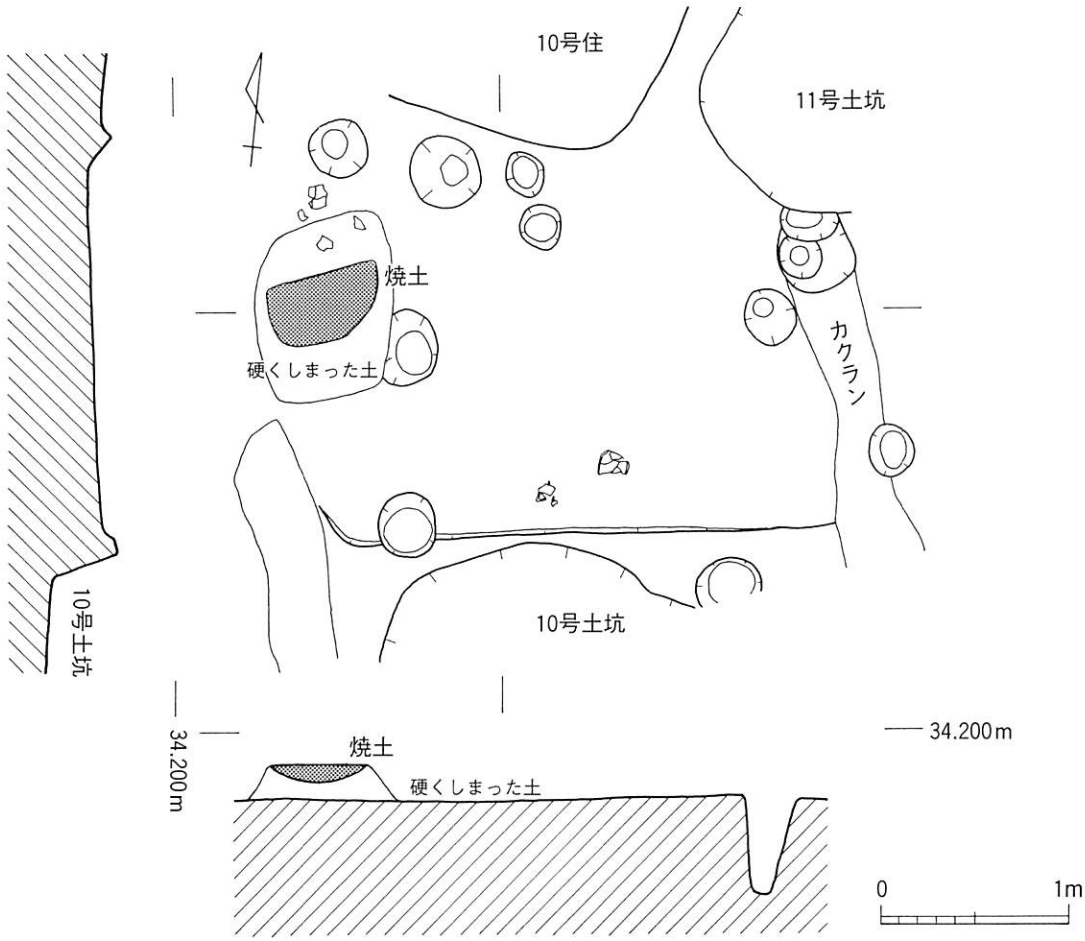
(13)　13号住居跡（第48図）

調査区南東部で検出された。北側にある9号住居跡を切る。しかし、周囲の撹乱が激しいため、全体の規模などは不明である。

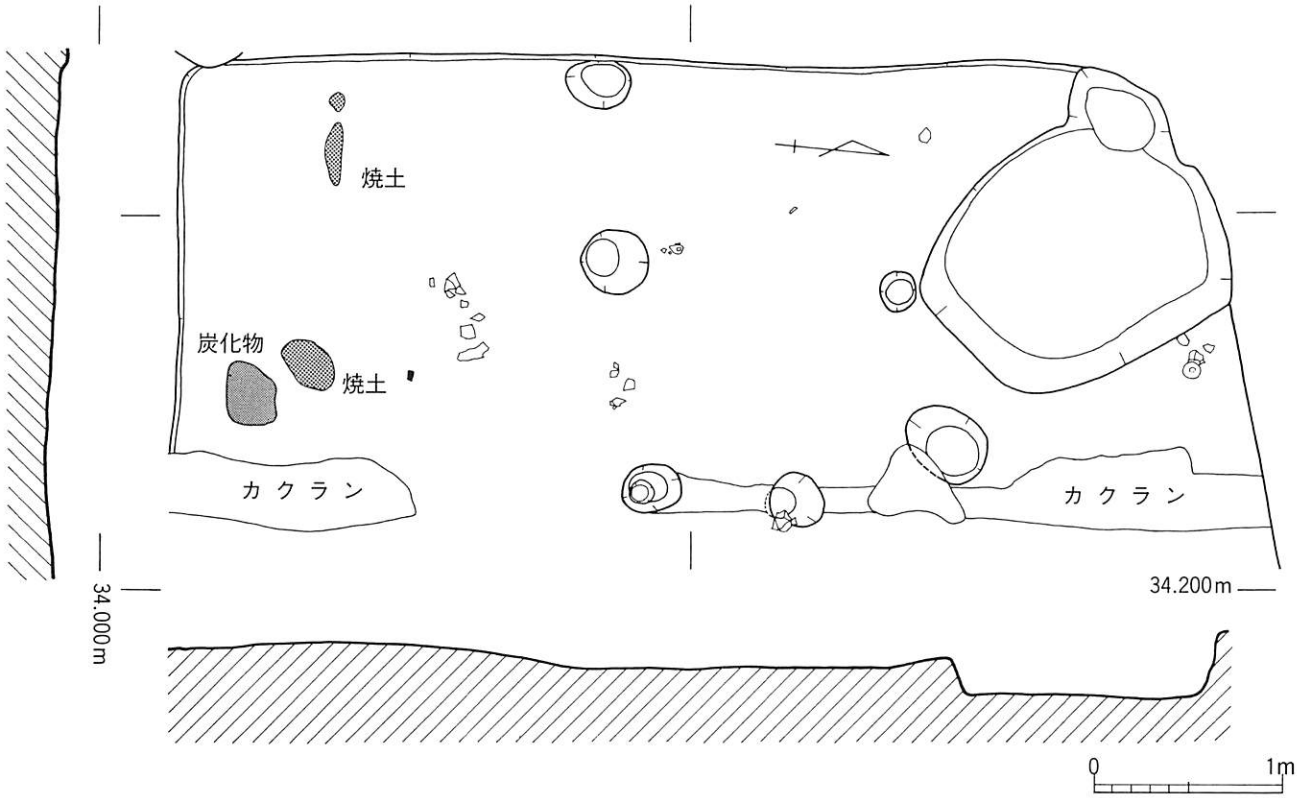
遺物（第56図）

遺物は比較的多くの器種が出土した。内訳は長胴の甕（完形1点、下半2点）、鉢2点、ミニチュア土器1点、壺口縁部1点である。1は長胴丸底の甕である。外器面は胴部上位から中位にかけて横方向のタタキ目が明瞭に残り、胴部下半は縦方向にヘラ調整が施されている。内器面はハケ調整だが、下半は明瞭に残っていない。2、6は甕の下半である。3は二重口縁の壺の口縁部である。7は鉢のミニチュア土器か。

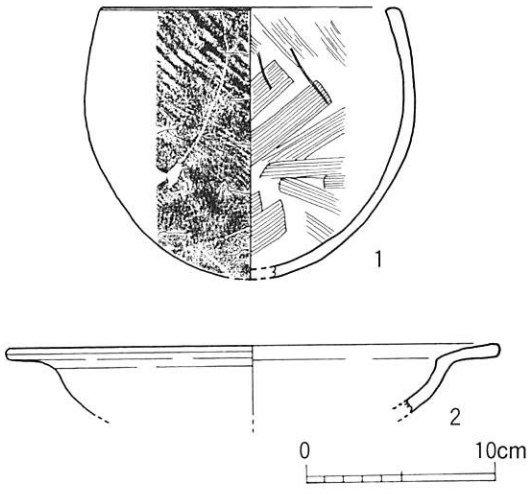
鉄器は手鎌片が1点出土した。（第83図20）ほぼ左半分の部位である。



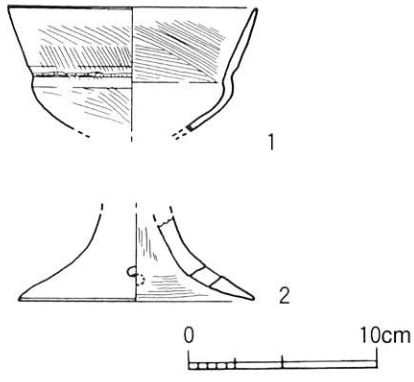
第52図　11号住居跡　実測図（S＝1／40）



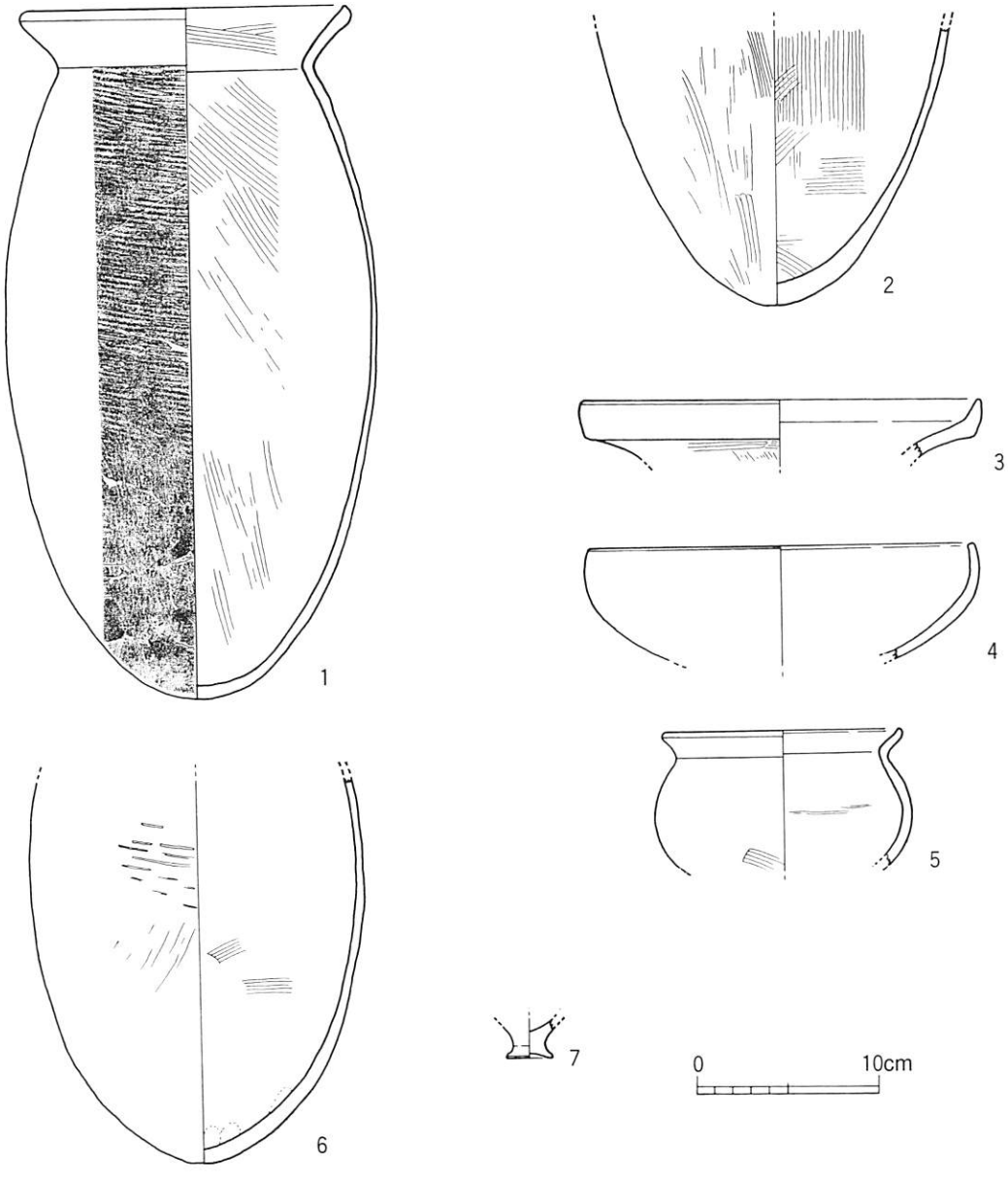
第53図　12号住居跡　実測図（S＝1／40）



第54図　11号住居跡出土土器実測図



第55図　12号住居跡出土土器実測図



第56図　13号住居跡出土土器実測図

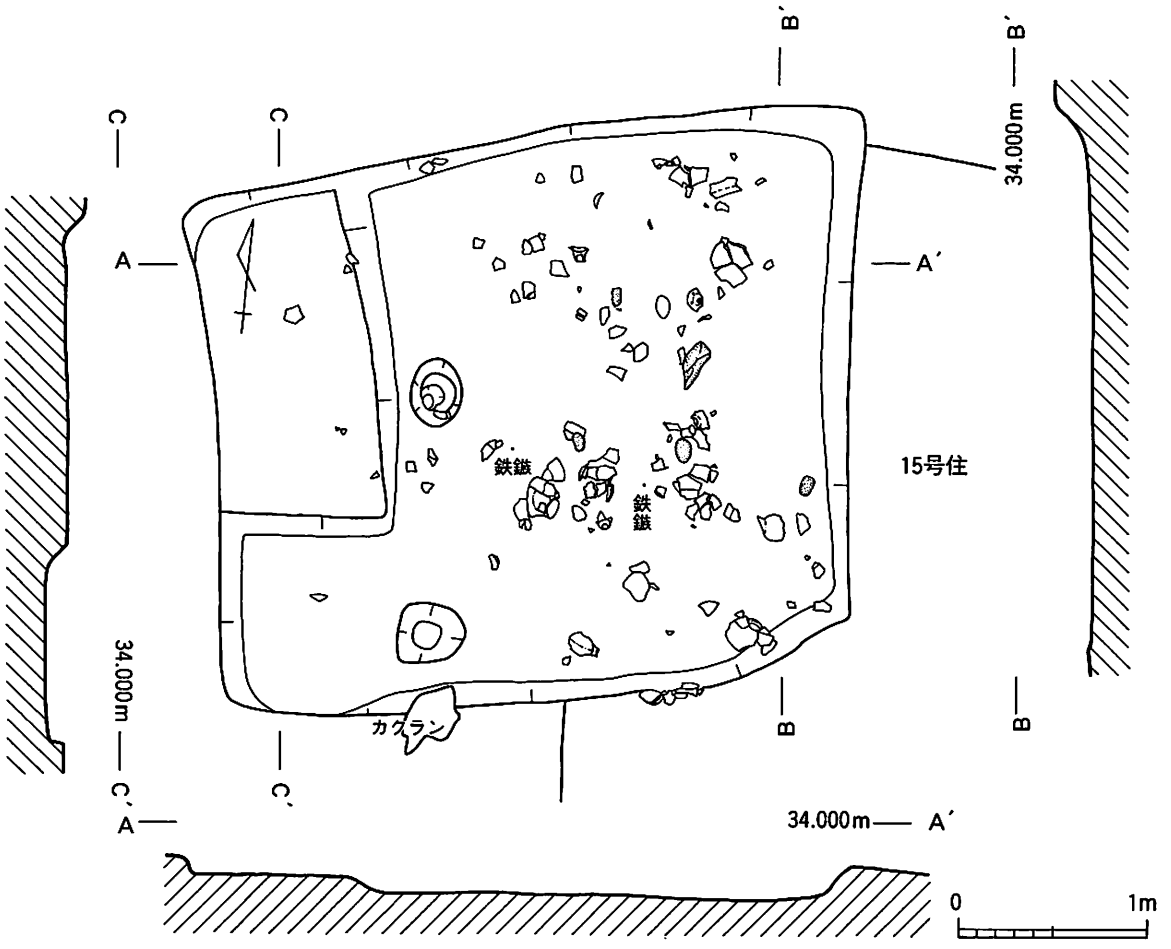
(14)　14号住居跡（第57図）

調査区拡張部中央南で検出された。周辺の住居跡の中では時期の新しい住居であり、南東の17号住居跡と西側の15号住居跡を切る。長辺は3.95m、短辺は2.95mを測り、長方形のプランを呈する。検出面から床面までの深さは、もっとも深いところで16cmある。北西隅に0.85m×1.85m、高さ17cmの長方形を呈するベッド状遺構を持つ。炉は不明である。主柱となりえそうなピットを住居中央のやや西側で検出した。柱穴の深さは0.4mである。

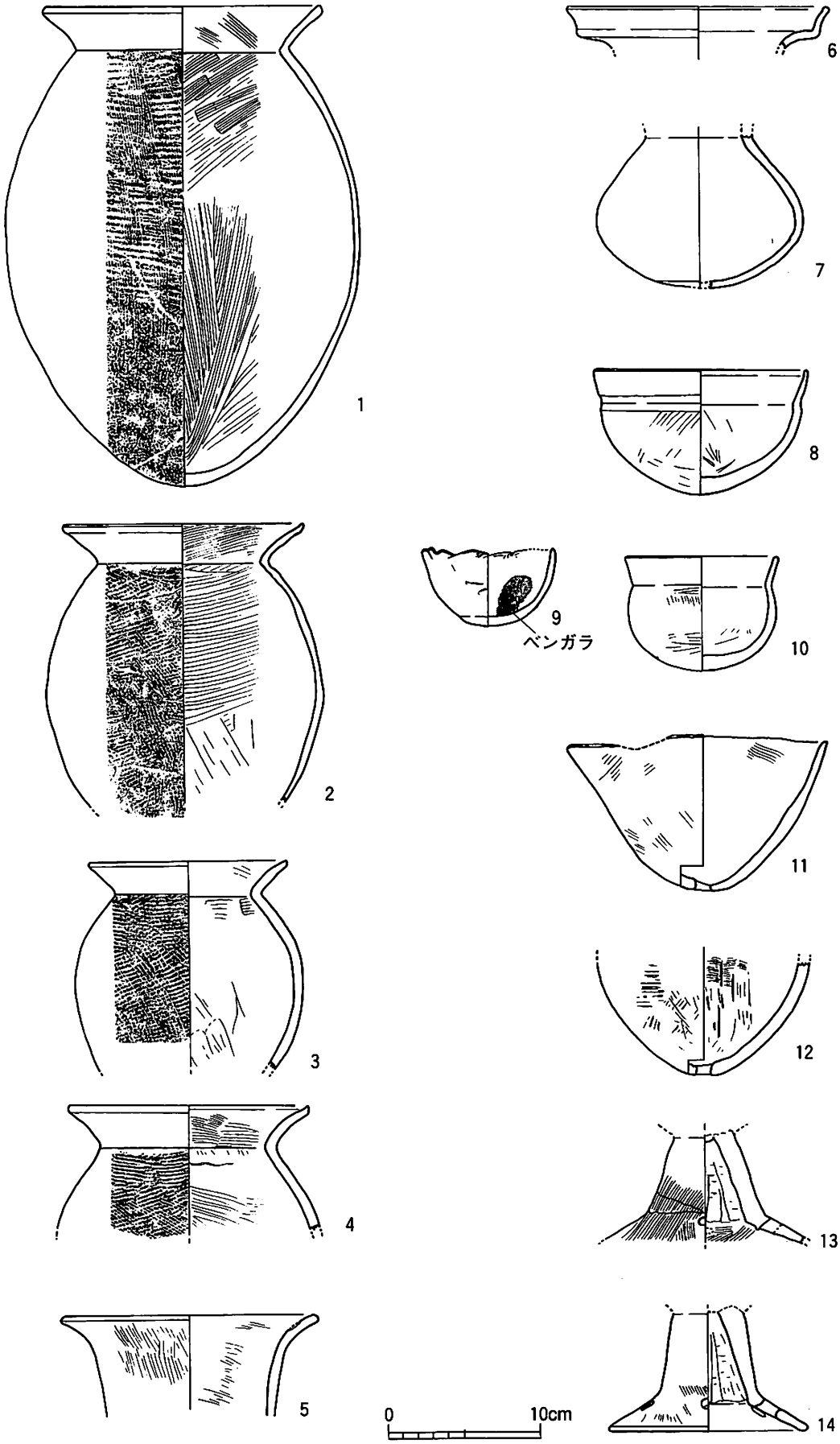
遺物（第58図）

遺物は多くの土器が出土した。甕のほか、鉢、甑、壺、高坏が出土している。1はほぼ完形の甕である。やや長胴であるが、胴部が横に張り出す。口縁部は外にまっすぐ開き、底部は丸底を呈する。外器面はタタキ後縦刷毛で、内器面はハケ調整である。外器面の口縁部には斜め方向の工具の痕が残る。2～4は甕の上半で、調整等は1とほぼ同様である。4の口縁端部はやや上に突き出る。5、6は壺の口縁部である。5は二重口縁で、6は口縁がラッパ状に開く。7は壺の下半で口縁部を欠く。胴部の最大径が下位にあるため、下膨れの形になっている。外器面にわずかであるが刷毛目が残る。11、12は甑である。11はほぼ完形であるが、口縁部がかなりいびつである。いずれも穴は底部に1つ穿ってある。13、14は高坏の脚部である。鉢は完形のものが2点出土した。また、鉢形のミニチュア土器が1点出土している。8は頸部に1条の凹線を施し、くびれを表している。9は手づくね土器で、いびつな形となっている。内面に赤色顔料（ベンガラ）が付着する。

鉄器は鉄鏃が1点出土した。（第83図8）基部は欠損しているため尖ったように見える。鋒部は錆のため膨らんでいるが、図の右側刃部は鋭さを残している。



第57図　14号住居跡　実測図（S＝1／40）



第58図　14号住居跡出土土器実測図

(15)　15号住居跡（第59図）

調査区中央南部で検出された。東の16号住居跡を切り、西の14号住居跡に切られる。硬化面の広がりにより長方形というプランは確認できたが、南壁および東壁の一部は検出できなかった。長軸は南北方向と考えられ、その長さは4.6mである。住居北西隅に高さ12cmのベッド状遺構を持つ。規模は不明である。住居中央やや南に、壁と同方向の軸の楕円形を呈する土坑があり、その規模は長軸55cm、短軸35cm、深さ10cmであった。

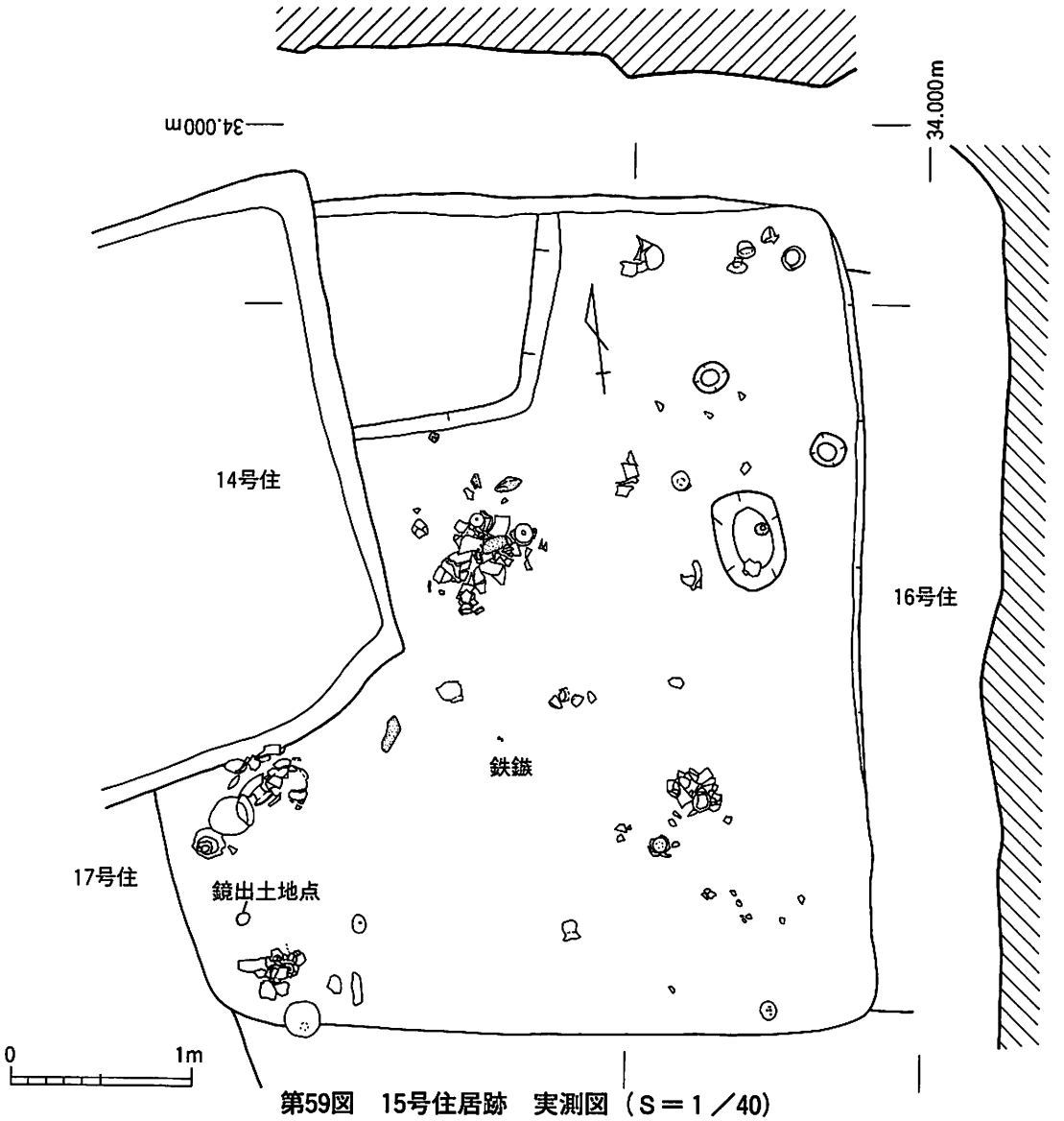
この住居の上面で集中して廃棄されたと思われる土器群が2ヶ所確認された（4号、5号土器群）。この土器群は布留期の土器からなり、甕などが主体であった。この遺物については後述する。

遺物（第60図）

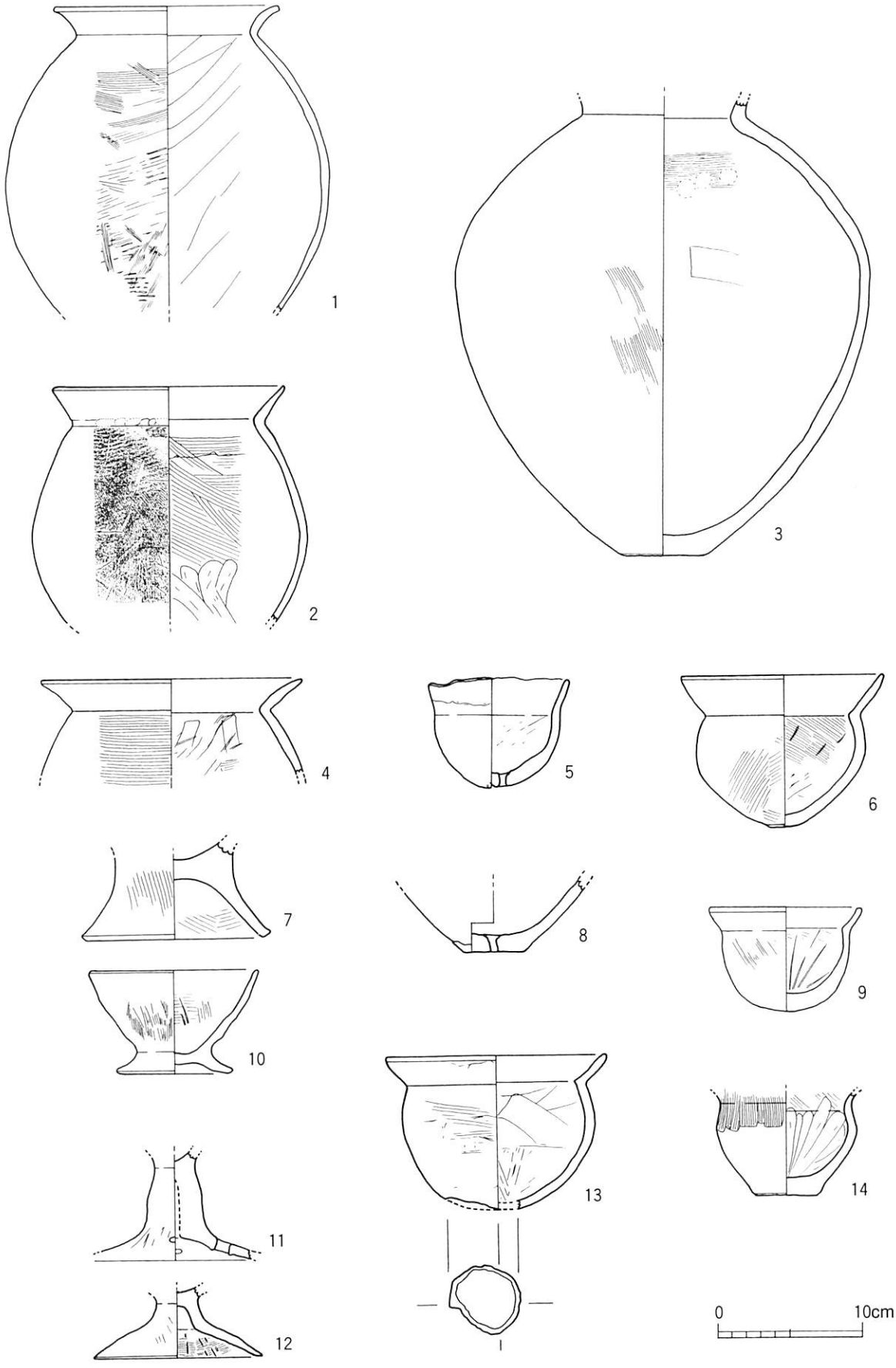
住居の床面から出土した遺物は、甕や鉢、高坏の脚、手捏ね土器、底部穿孔の鉢などが出土している。1、2、4は甕の上半部で、ともに口縁部端部が薄くなる。7は甕の脚台であるが、おそらく流れ込みであろう。5、6、10、13、14は小型の鉢で、10には低い脚台が付く。また、13、5は底部穿孔が施されているが、孔の大きさ、穿孔された時期（13は焼成後）が異なることは注目される。3は平底の壺である。口縁部を欠くがおそらく広口であろう。12と11は高坏の脚部である。12は裾部内器面に横刷毛が施される。

14号住居跡との遺物を比べてみると、それほど時期差がないと思われるので、15号住居跡の廃絶後、すぐ隣で建て替えられたと考えられる。

なお、小型仿製鏡（巻頭カラー2）が15号住居跡上で出土しているが、位置的に当てはまるだけであって、この住居に伴うものとは考えていない。鏡が出土した地点は、住居の床面からかなり浮いており、ほぼ同レベルで古代の土器も混在して出土しているからである。



第59図　15号住居跡　実測図（S＝1／40）



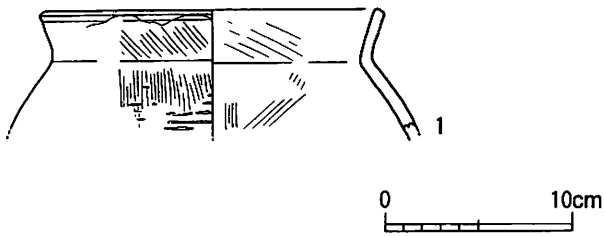
第60図　15号住居跡出土土器実測図

(16)　16号住居跡（第61図）

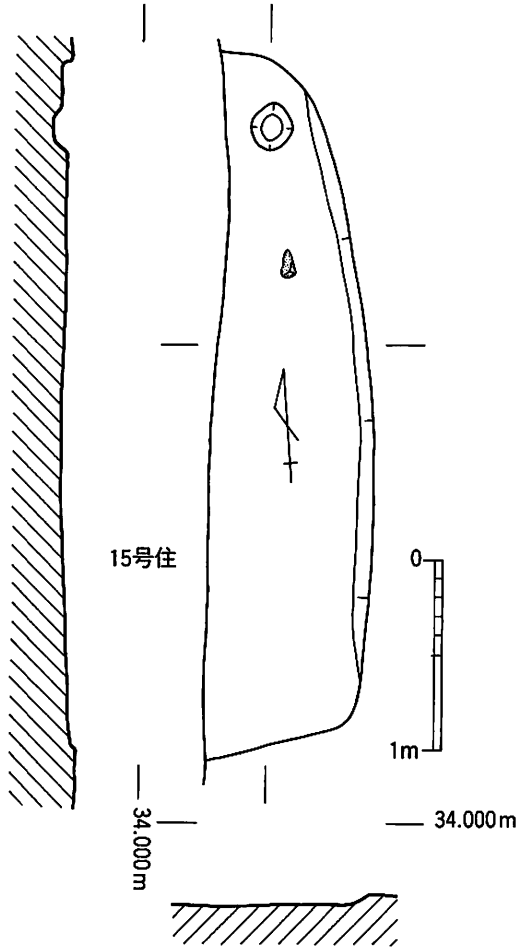
調査区中央南で検出された。住居のほとんどを15号住居跡に切られており、住居東の一部が検出されたのみである。確認できた一辺の長さは3.65mで、検出面から床までの深さはわずか５cmであった。住居北東隅でピットが検出されたが、深さは７cmにすぎない。

遺物（第62図）

遺物は甕の口縁部が１点のみである。しかも一括資料であり、床面直上ではない。１は甕の口縁部で、肩部にタタキ目が残る。口縁部にもナナメ刷毛が施されている。



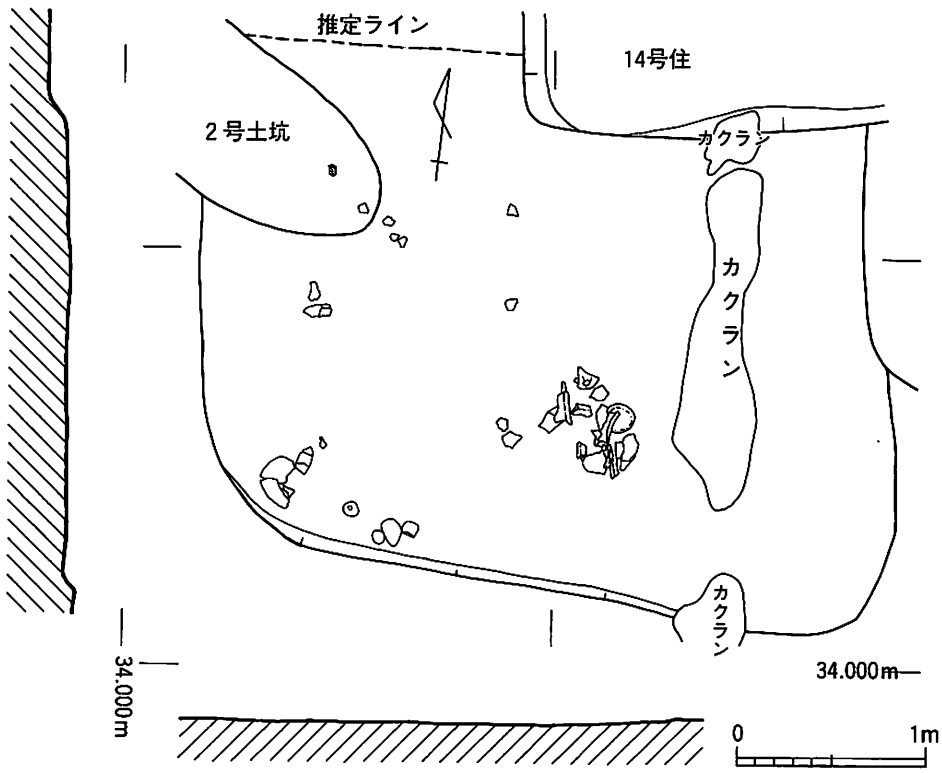
第62図　16号住居跡出土土器実測図



第61図　16号住居跡　実測図

(17)　17号住居跡（第63図）

調査区南西側で検出された。住居北東部を14号住居跡に、北西部を２号土坑に切られている。また、東隣に15号住居跡があるが、切り合い関係は撹乱のため不



第63図　17号住居跡　実測図（S＝1／40）

明である。

検出が困難であったため、検出できた壁は南壁と西壁の一部であった。しかし、硬化面の範囲によって住居の規模は把握することができた。長軸は4.15m、短軸は2.80mである。長軸はほぼ東西方向である。

住居跡中央やや西の、床から26cm浮いた部分で、厚さ20cmの焼土粒を多く含む部分が検出された。平面形は楕円形を呈するが、明確なプランではない。当初は住居の竈や炉の一部かとも考えられたが、断定できる材料は見当たらず性格は不明である。住居埋没後の窪地を利用して、長期間火がたかれた跡か？同レベルで古代の土器が集中して出土しているので、焼土はその時代のものと思われる。

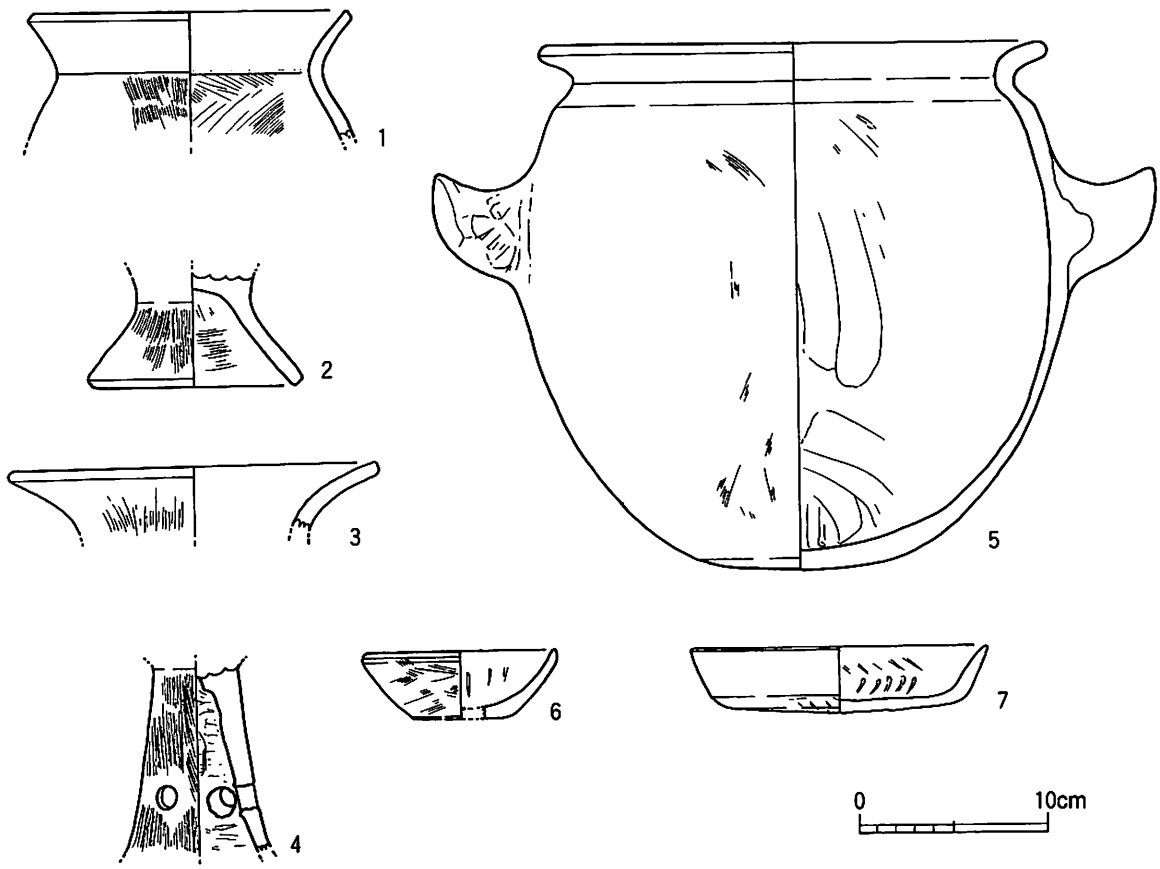
遺物（第64図）

住居南西隅床面から壺、甕が出土した。1は甕の口縁部で、肩部に縦刷毛が施されている。2は甕の脚台である。3は壺の口縁部で、ラッパ状に開く。4は高坏の脚部である。

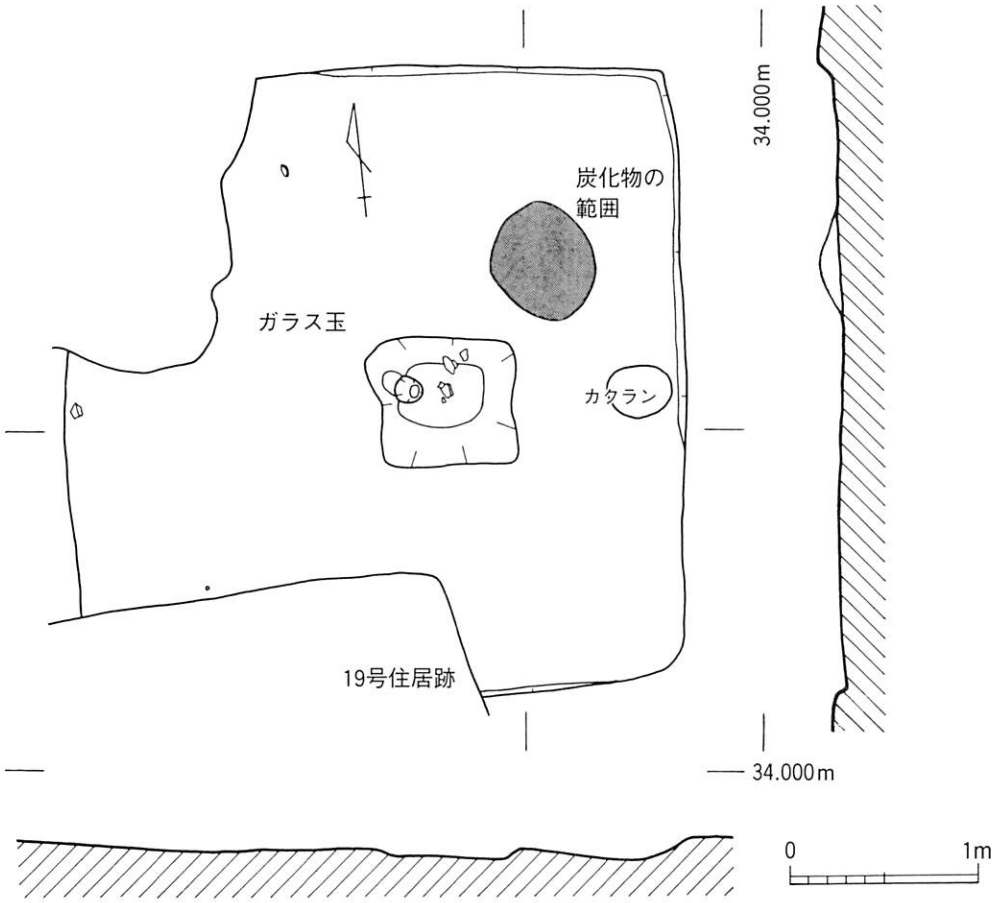
上層の焼土に伴う土器のうち掲載しているのは5、6、7である。5は完形の甕で、側面に把手がつく。また、片方の把手は剥落しており、把手の接合痕がよく見える。7は土師の坏身で、内面にヘラ調整の痕が残っている。

(18) 18号住居跡（第65図）

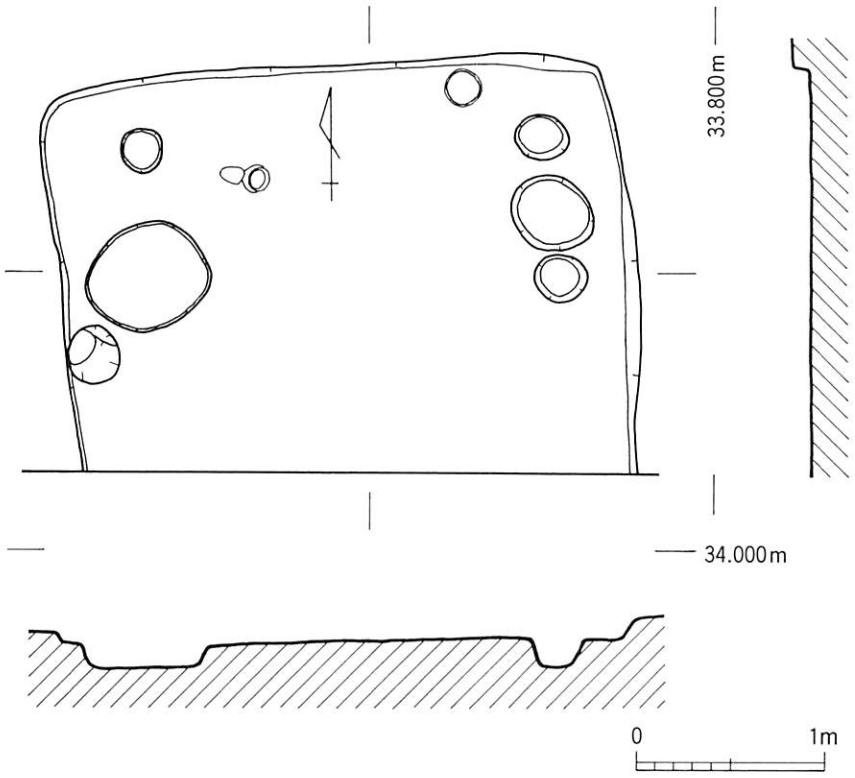
調査区南東部で検出された。南西部を19号住居跡に切られる。東にはほぼ同軸方向の20号住居跡がある。この住居跡も検出作業を失敗し、ほとんど壁らしい壁を確認できなかった。床は全体的にかなり硬化していたため、その範囲を住居の範囲の手がかりとした。その結果、この住居は一辺3.4mの正方形のプランを呈するものであることが分かった。住居北西隅にベッド状遺構を持ち、住居東壁中央部に柱穴を1基確認した。また、住居中央部には長方形を呈する深さわずか6cmの浅い土坑を検出した。埋土は灰を多く含んでおり、住居の炉であると思われる。



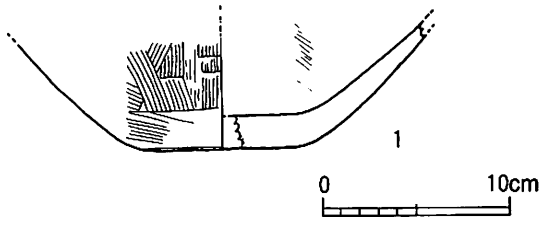
第64図　17号住居跡出土土器実測図



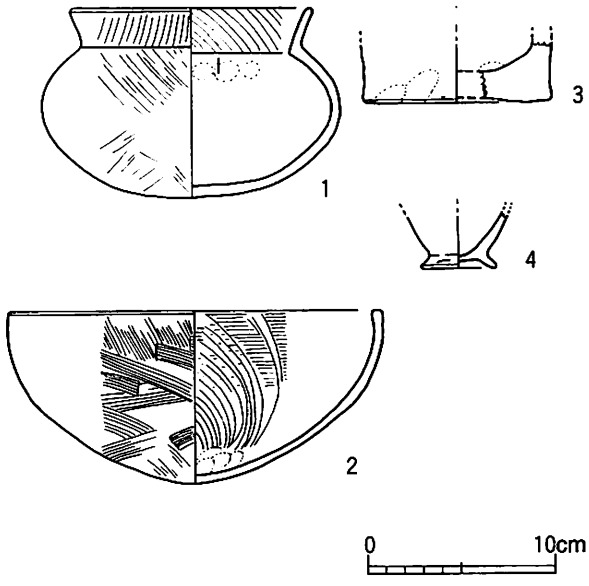
第65図　18号住居跡　実測図（S＝1／40）



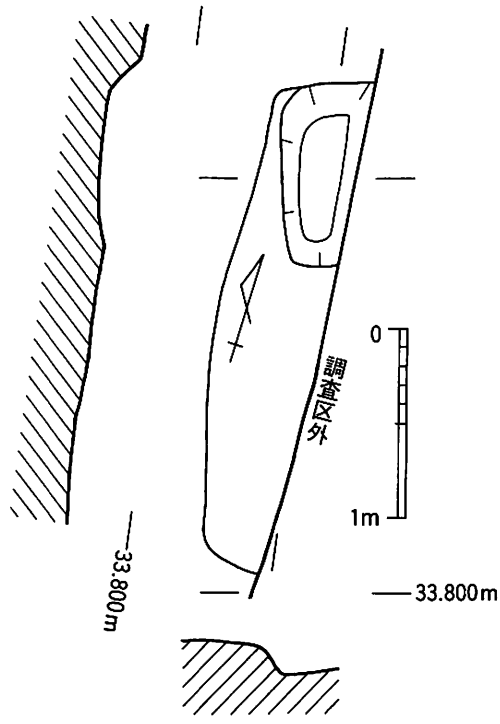
第66図　19号住居跡実測図（S＝1／40）



第67図　18号住居跡出土土器実測図



第68図　19号住居跡出土土器実測図



第69図　20号住居跡　実測図（S＝1／40）

遺物（第67図）

遺物は少なく、実測できたのは壺の底部1点（1）である。また、図化してないが、高坏の口縁部の小片が1点出土した。

(19)　19号住居跡（第66図）

調査区南端で検出された。住居南半分は調査区外のため未掘である。北壁の長さは3.04mで、検出面から床までの深さは深いところで12cmを測る。柱穴と思われるピットを、北西隅と北東隅にそれぞれ検出した。直径21～30cm、深さ12～16cmであった。またこのピット以外にも直径30cm程度のピット3基のほか、西壁近くでは直径56cm深さ10cmを測る円形の土坑を検出した。

遺物（第68図）

遺物は完形の鉢が2点のほか、ミニチュア土器、不明土器が出土した。1は扁平な胴部を持つ鉢で、肩部の内器面には指調整の痕が残る。2は無頸の鉢で、内器面に横刷毛後放射状のヘラミガキが施されている。また底部には指頭圧痕がみられる。3は不明土器で、底部のようである。胎土は多量の砂粒を含み、色調は明赤褐色を呈する。内外器面とも指調整の痕が見られる。4は台付鉢のミニチュア土器か。

(20)　20号住居跡（第69図）

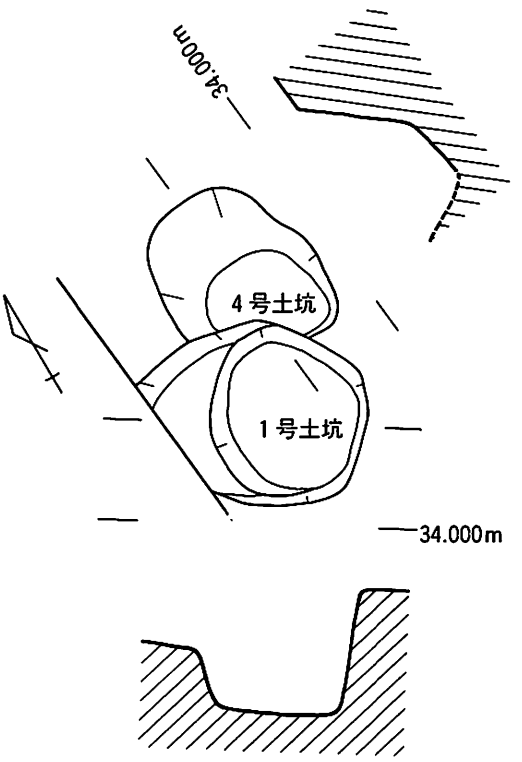
調査区南東部で検出された。ほとんどが調査区外で、検出されたのは西壁とその付近のわずかな部分である。西壁の長さは4.70mであった。壁の高さは後世の撹乱のために不明である。遺物はない。住居北西隅に不整形の土坑が検出された。

(21)　1号土坑（第70図）

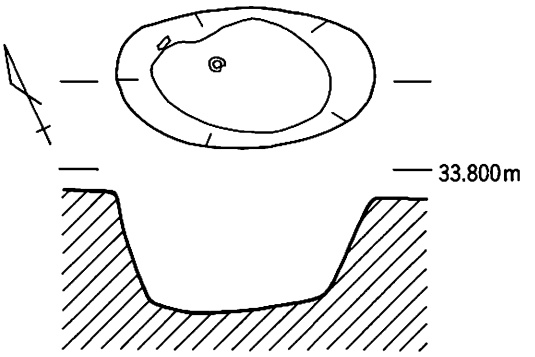
調査区南西部で検出された。北東にある4号土坑を切っている。ほぼ楕円形のプランで、床は二段になっている。検出面から上段までの深さは32cm、下段までは65cmで、互いの比高差は33cmであった。床面はどちらともほぼ平坦であった。土坑の規模は、北西部が調査区外であったため正確な数値は不明であるが、長軸は推定で1.15m、短軸は0.95mになると思われる。

遺物（第72図）

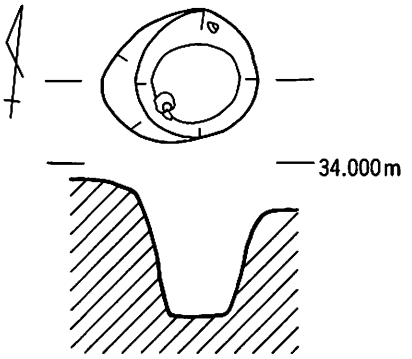
遺物は台付鉢が1点（1）出土した。



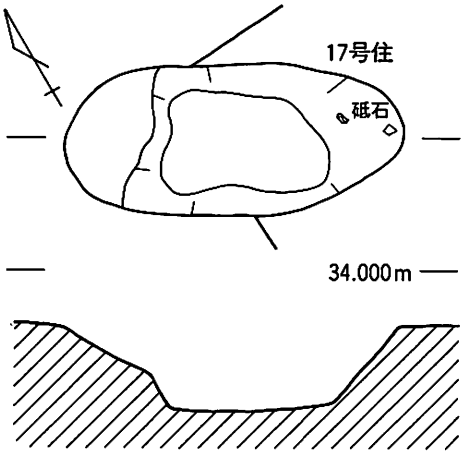
1号土坑・4号土坑



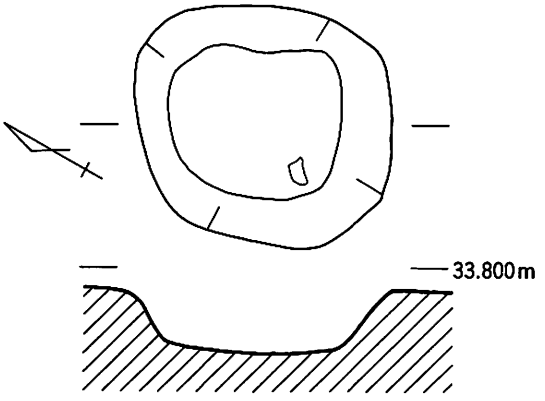
5号土坑



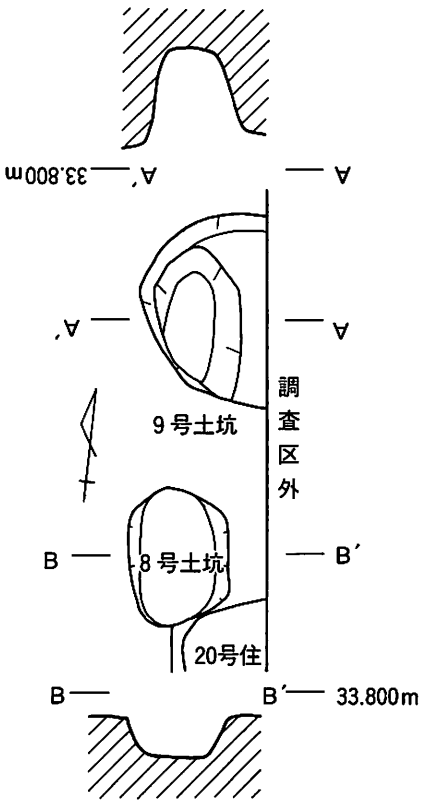
6号土坑　　7号土坑は欠番



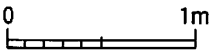
2号土坑



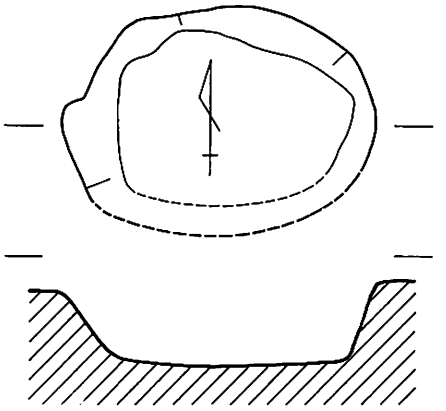
3号土坑



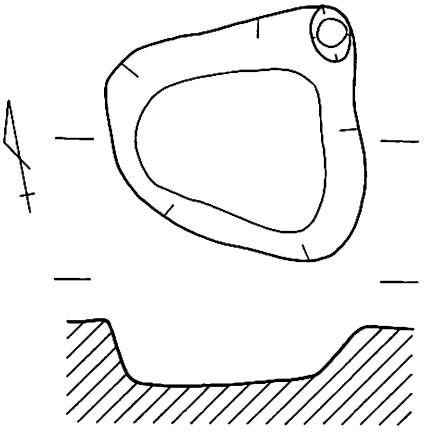
8号土坑・9号土坑



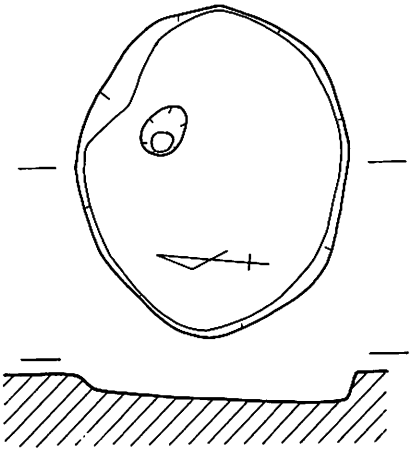
第70図　1号土坑～9号土坑　実測図（S＝1／40）



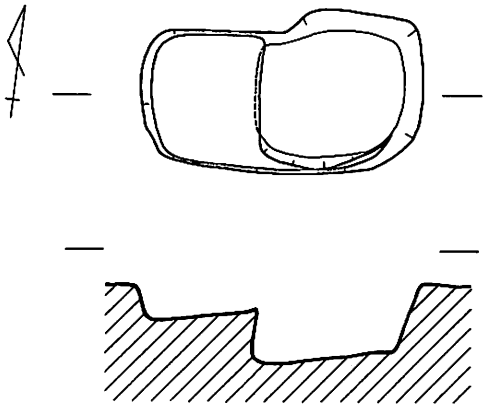
10号土坑



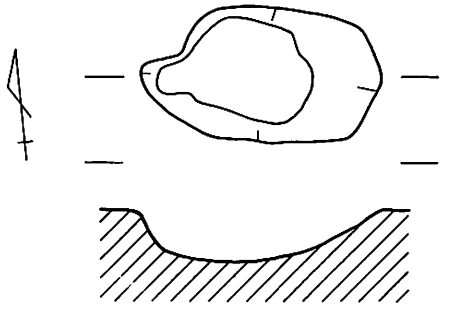
13号土坑



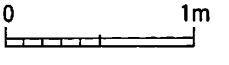
11号土坑



14号土坑



12号土坑



第71図　10号土坑～14号土坑　実測図（S＝1／40）

(22)　2号土坑（第70図）

調査区南西部で検出された。17号住居跡の北西隅を切る。プランは長軸の長い楕円形で、規模は長軸1.8m、短軸0.8mを測る。検出面から床面までの深さは42cmで、北西側から緩やかに下り、ほぼ平坦な床が続く。遺物は、砥石が出土した。

(23)　3号土坑（第70図）

調査区南西部で検出された。北東隣には17号住居跡があって、西には1号、4号土坑がある。隅丸正方形のプランを呈し、床はほぼ平坦である。長軸1.36m、短軸1.25m、深さは0.34mを測る。

遺物（第72図）

高坏の脚部が1点出土した（2）。

(24)　4号土坑（第70図）

調査区南西部で検出された。南西部を1号土坑に切られる。隅丸長方形のプランを呈し、長軸0.95m、短軸0.82m、深さ0.47mを測る。遺物はない。

(25)　5号土坑（第70図）

調査区南東側で検出された。当調査区119番地はかなり密集して遺構が検出されたが、5号土坑周辺だけ遺構がない。楕円形を呈し、長軸1.38m、短軸0.75m、深さは0.57mを測る。この土坑の上面は、中心から0.8m四方で厚さ15cmほどの黄色土が堆積していた。

遺物（第72図）

小型丸底壺のほか台付鉢が2点出土した。8は小型丸底壺の上半部である。6、7はいずれも台付鉢の脚台であるが形状は異なる。鉄鏃の基部らしき鉄器が1点出土した（第83図1）。錆が激しい。

(26)　6号土坑（第70図）

調査区中央やや南で検出され、南には15号、16号住居跡が隣接する。プランは東西に長い卵形で、長軸は0.84m、短軸0.66m、深さ0.70mを測る。

遺物（第72図）

遺物は完形の鉢（3）と台付鉢の鉢部（5）が出土した。3は完形の無頸鉢である。内器面の底部に径1cm浅いくぼみを有する。焼成前に施されている。

(27)　7号土坑　欠番

(28)　8号土坑（第70図）

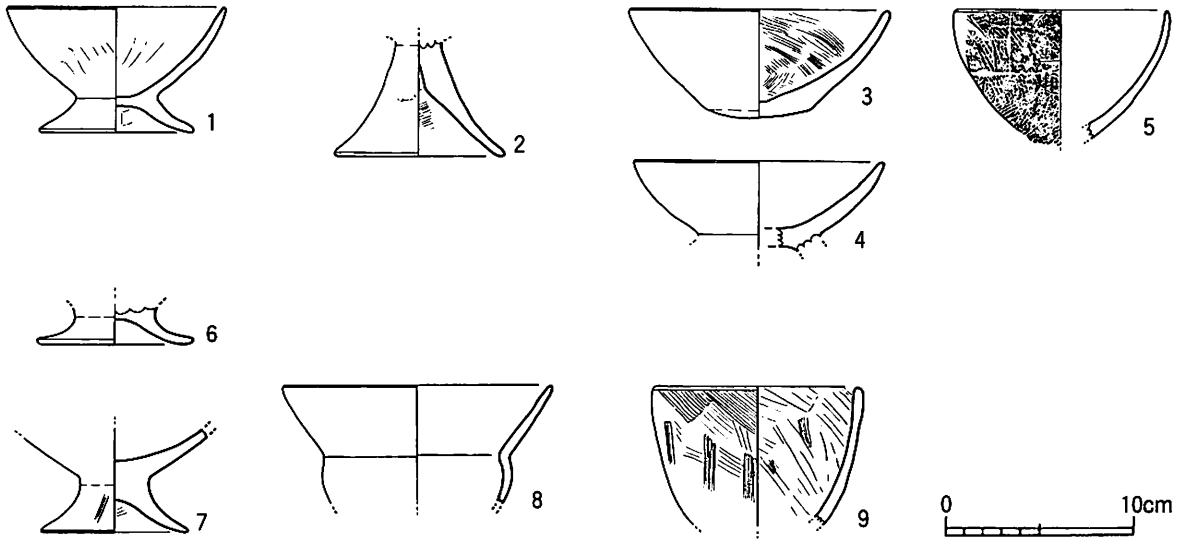
調査区南西部で検出された。南側の20号住居跡に隣接する。ほぼ方形のプランを呈し、長さ0.73m、幅0.52m、深さ0.22mを測る。床はほぼ平坦である。遺物はない。

(29)　9号土坑（第70図）

調査区南西部で検出され、南には8号土坑がある。プランは不整楕円形で、長軸0.90m、短軸0.5m、深さ0.54mを測る。遺物はなかった。

(30)　10号土坑（第71図）

調査区中央部やや南側で検出された、隅丸方形のプランを呈する土坑である。北側すぐ隣には11号住居跡が、北西には12号住居跡がある。土坑東側を撹乱され



第72図　土坑出土土器実測図

ており、南側の一部は未掘部分である。規模は推定で長さ1.65m、幅1.20m、深さ0.41mである。床はほぼ平坦で、東壁は西壁に比べやや急に立ち上がる。

遺物（第72図）

遺物は深みのある鉢（9）が1点出土した。比較的丁寧なハケ調整が外器面に施されている。

(31) 11号土坑（第71図）

調査区中央付近で検出された。東には9号住居跡、西には10号住居跡がある。楕円形のプランで、床面は平坦である。規模は長軸1.75m、短軸1.45m、深さ0.14mである。また、この土坑の床面でさらに長軸28cm、短軸20cm、深さ20cmの楕円形を呈するピットが1基検出された。遺物は見られなかった。

(32) 12号土坑（第71図）

調査区中央西側で検出された。北東には7号住居跡がある。不整方形のプランで長さ1.25m、幅0.72m、深さ0.26mを測る。床面は浅いスリバチ状で東壁が緩やかである。遺物はなかった。

(33) 13号土坑（第71図）

調査区中央部で検出された。7号住居跡の北壁を切る。一角が飛び出た不整方形を呈し、長さ幅ともに1.32mを測り、深さは0.34mである。床面はほぼ平坦で、西壁が急に立ち上がる。北東隅に径20cmの円形を呈するピットがあった。遺物はなかった。

(34) 14号土坑（第71図）

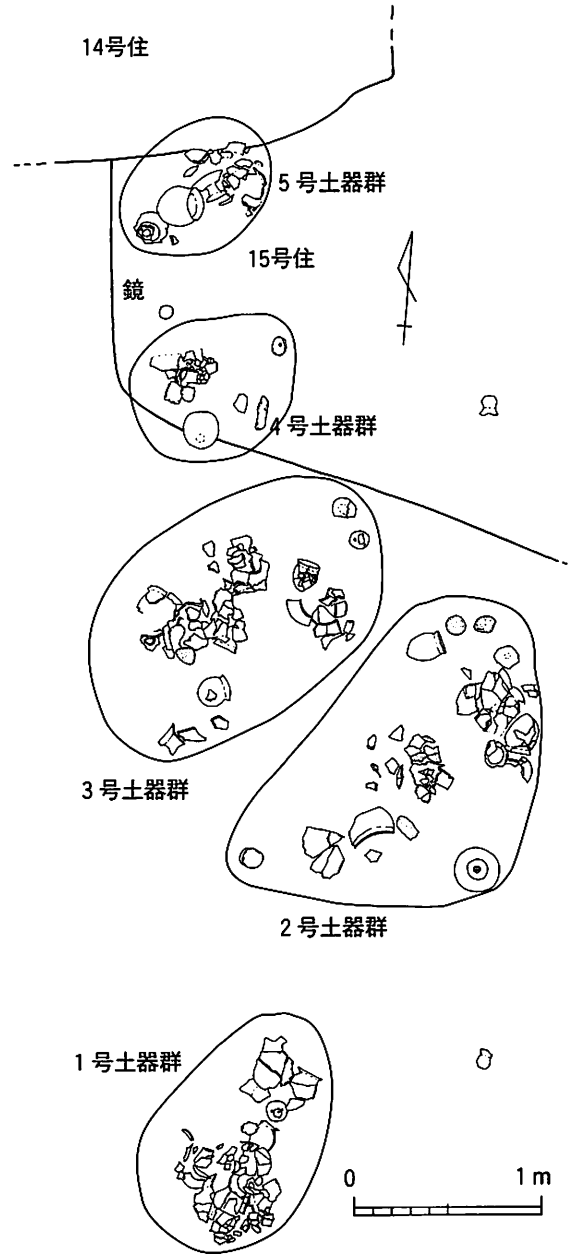
調査区中央西で検出された。北東に3号住居跡がある。プランはほぼ長方形で、幅は0.75mを測る。床面が二段になっていて、西側の方が深くなる。西側の深さは37cm、東側の深さは18cmであった。

遺物（第72図）

遺物は、鉢が1点出土した（4）。外器面はハケ調整が施されている。

(35) 土器群（第73図）

調査区中央南で多くの土器が集中して出土し、それに伴う遺構が検出されなかったため、任意に1号～4号土器群と名付け取上げた。器種は甕が大半で、このほか小型の壺、器台などがある。非常に密集して折り重なるように出土しているので、資料の一括性はあると思われる。また、完形に近い状態で出土しているものが多いのも特徴である。4号土器群については15号住居跡が埋まったくぼみを利用して廃棄した可能性があるが、土器群と同レベルでは住居を検出できなかった。また、1～3号土器群については、その下層にも遺構が検出されておらず、どういった経緯でこのような出土状況になったのか不明といわざるを得ない。



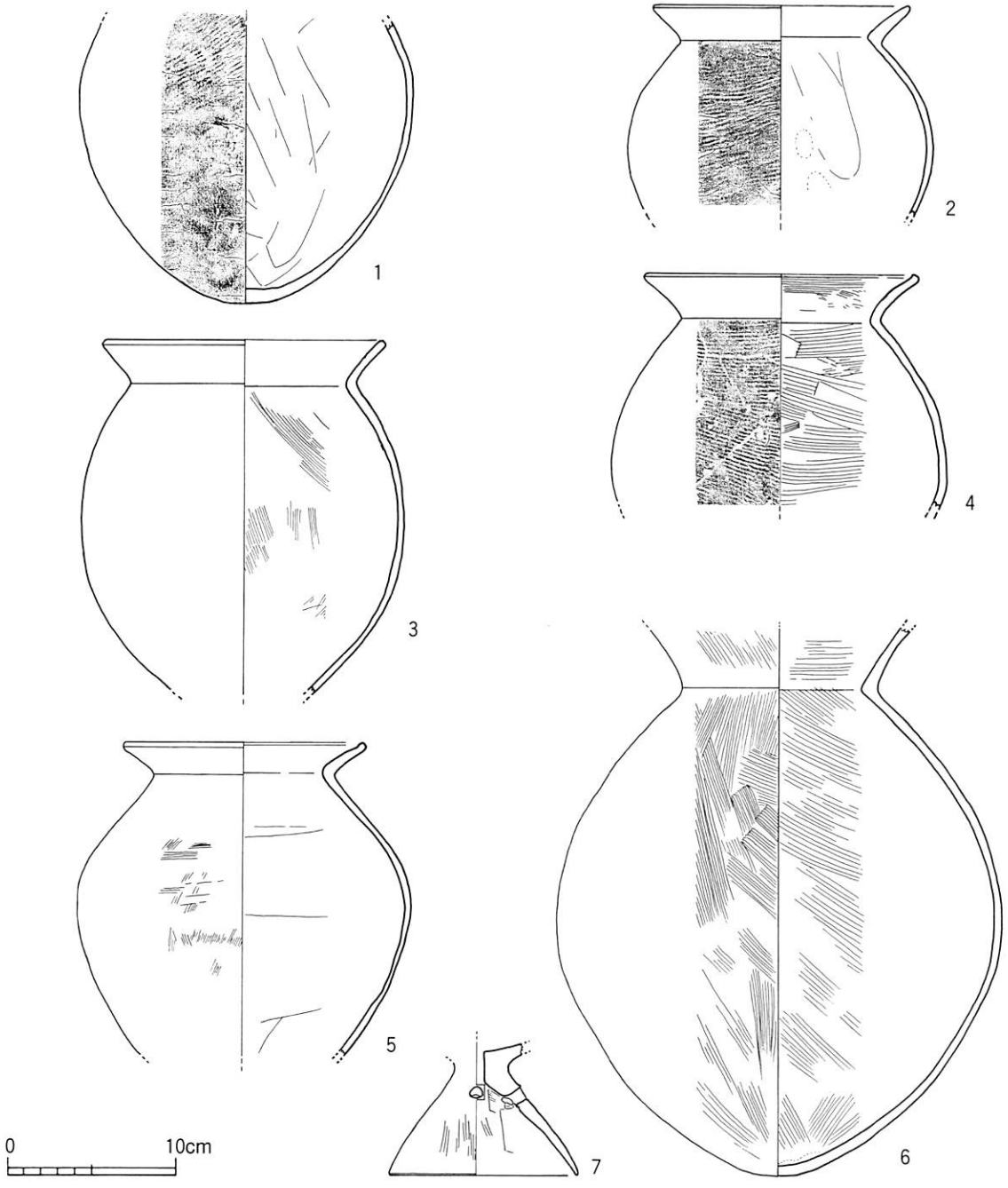
第73図　1号～5号土器群実測図（S＝1／40）

①１号土器群（第74図）

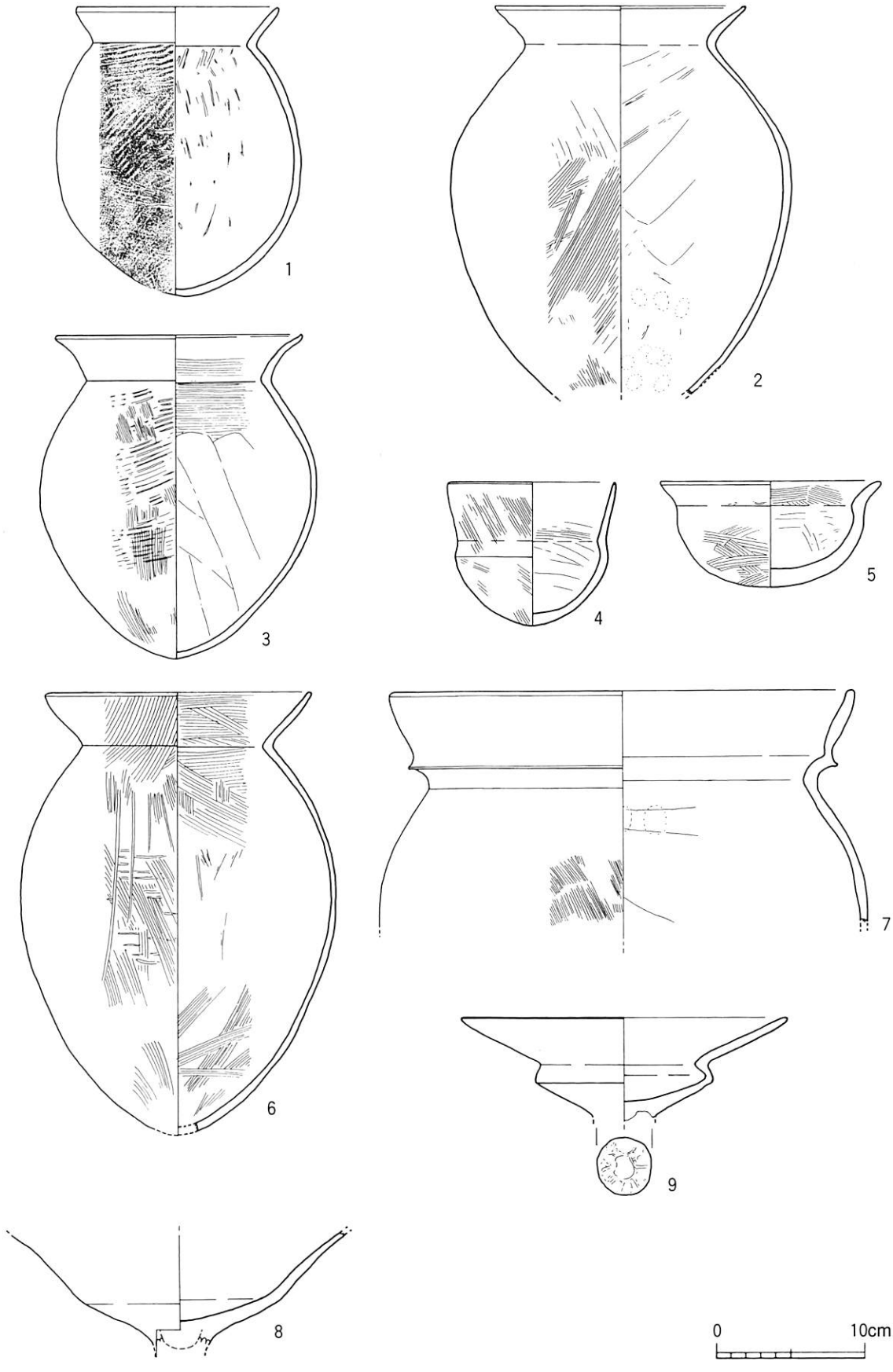
図化可能な土器は、甕が５点、壺が１点、器台が１点である。甕は５を除き、外器面にタタキ目が残る。４はタタキの後に縦刷毛を施す。５は、外器面は丁寧なハケ調整が施されている。また、口縁部端部が肥厚する。６は口縁部を欠く壺である。内外器面ともハケ調整である。７は中空の小型器台の脚台である。裾部に３ヵ所の穿孔が施されている。

②２号土器群（第75図）

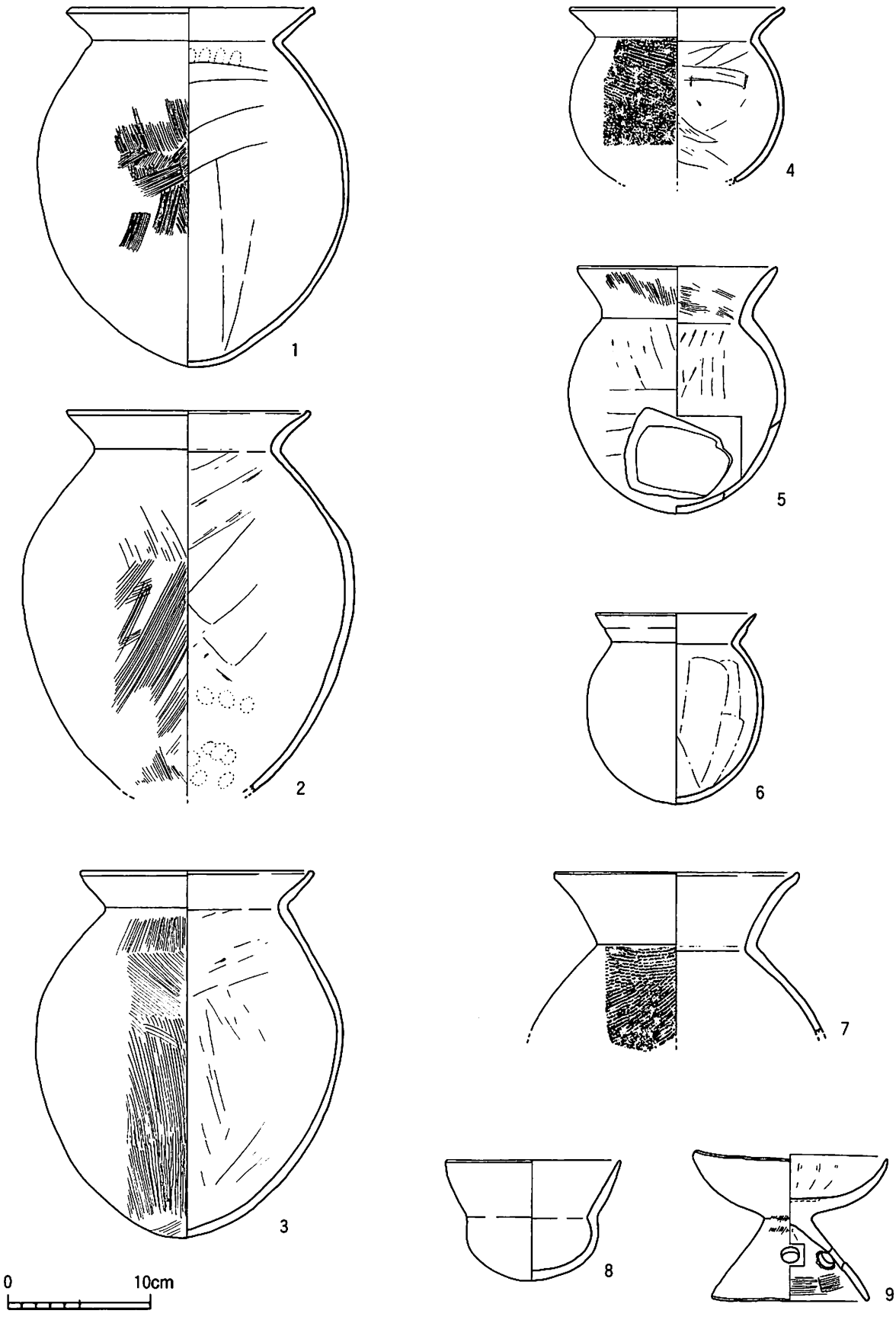
甕は、外器面はタタキ後縦刷毛が施され、内器面はヘラケズリである。３、６は、内器面がヘラ削りの後ハケで調整されている。７は山陰系の甕の上半である。器壁が非常に薄い。外器面は目の細かいハケ調整が施されている。４、５は完形の鉢で、５の外器面は幅の狭い刷毛で調整されている。８、９は高坏の坏部である。９は坏部と柱部の接合痕がよく残っている。



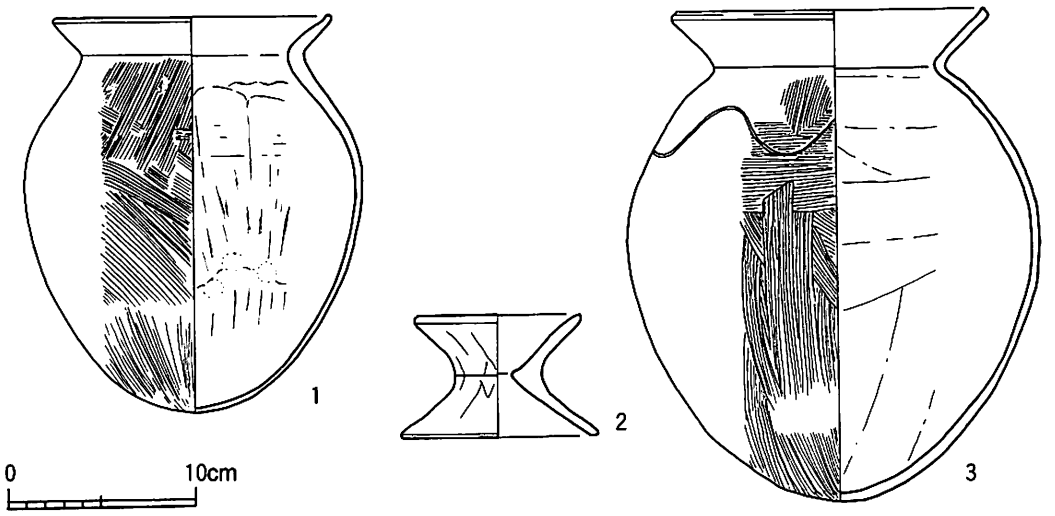
第74図　１号土器群出土土器実測図



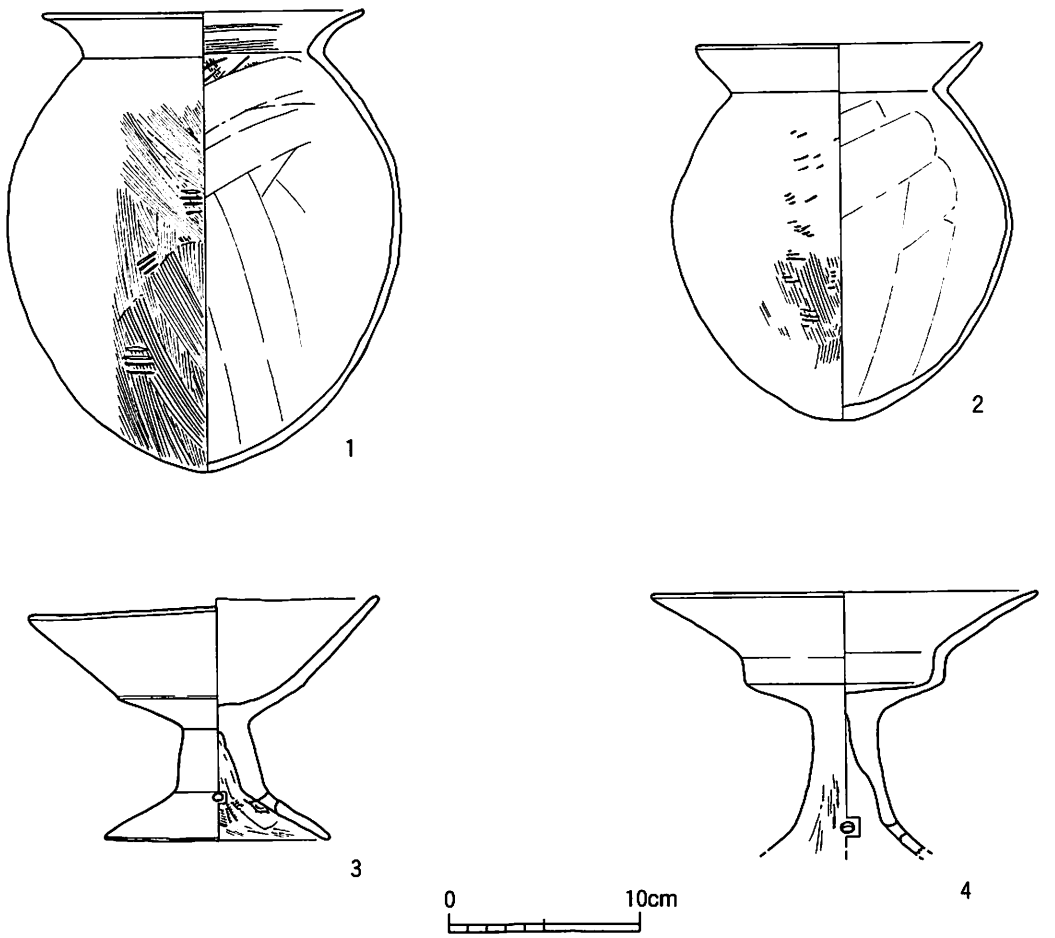
第75図　2号土器群出土土器実測図



第76図　3号土器群出土土器実測図



第77図　4号土器群出土土器実測図



第78図　5号土器群出土土器実測図

第80図12は土錘で、長さ7.5cm、径が4.3cm、穿孔の口径は1.5cmである。一部わずかに剥離しているが、重さは144gある。

③３号土器群（第76図）

甕３点、壺５点（うち小型４点）、器台１点が出土した。甕はすべて外器面がハケ調整で、内器面がヘラケズリである。２と３は口縁部端部が肥厚する。７は中型の壺の上半部で、肩部に明瞭なタタキ目を有する。小型の壺は４点あり、５は底部穿孔の小型壺である。また、８はいわゆる小型丸底壺で、口縁部がやや発達する。９は完形復原できた器台で、裾部に３ヵ所穿孔が施されている。

④４号土器群（第77図）

甕３点（２点を掲載）と小型の器台１点が出土した。１、３は布留系の甕である。１は口縁端部が肥厚する。３は肩部外器面に波状文の沈線が施されている。２は布留系の小型器台である。

⑤５号土器群（第78図）

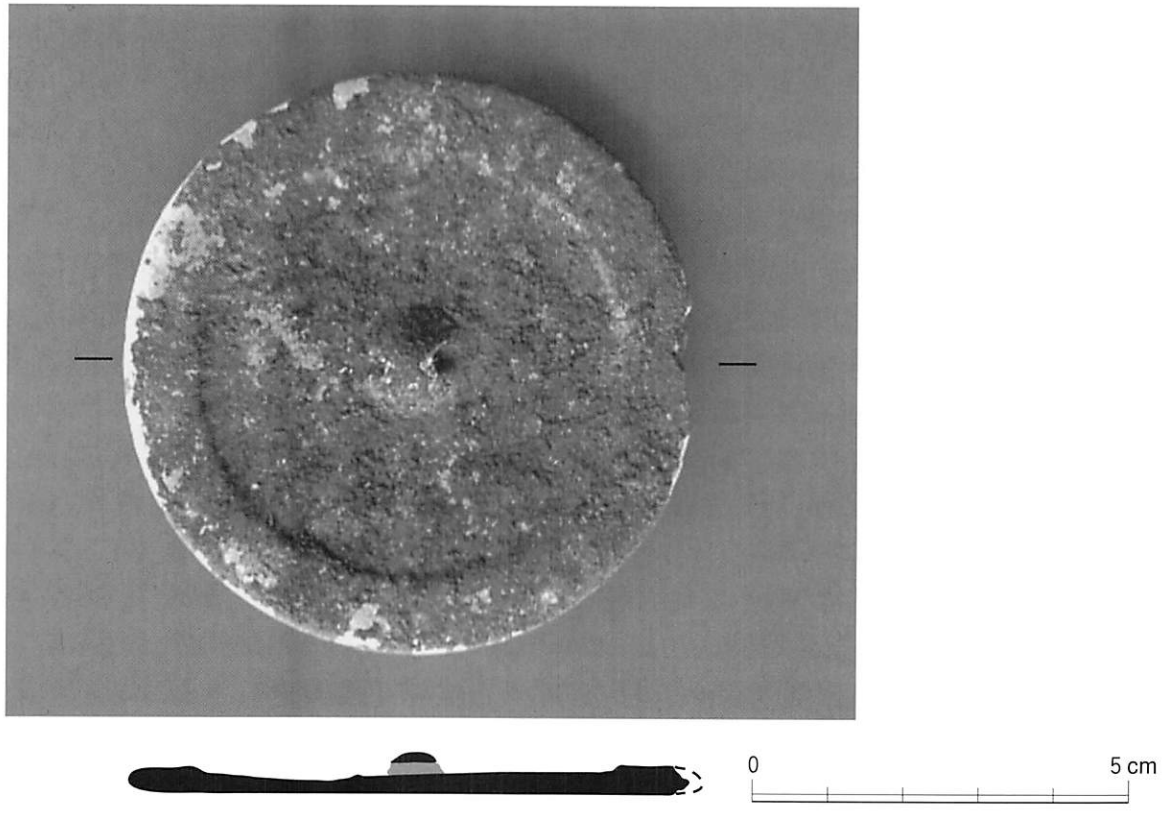
高坏２点と甕２点が出土した。甕の口縁部は形状がそれぞれ異なる。３、４は高坏で坏部の形状が異なる。３は坏部の屈折が不明瞭で、口縁部はまっすぐ外へ開く。４は坏部に段を持つ。坏部底部から垂直に立ち上がった後、外側へ外湾気味に大きく開く。

(36)小型仿製鏡（巻頭カラー２　第79図）

15号住居跡の南西角で、床面から約30cm浮いた地点から、凹面を天に向けやや斜めに傾いた状態で出土した。周辺にはほぼ同標高で出土した土器群がある。南に20cm離れたところで４号土器群が、北側25cmに５号土器群がある。いずれの土器も形がよく残っており、完形の甕などが見られる。15号住居跡で述べたが、この鏡は住居に伴わず、４号及び5号土器群とほぼ同時期に廃棄されたものではないかと考えられる。

小型仿製鏡は直径7.9cmの完形であるが、表面の風化が激しいため、文様は明瞭ではない。凸面は外側から、外縁、櫛歯文帯、内行花文帯、鈕で構成されている。外縁の幅は９㎜、厚さが2.5㎜である。櫛歯文帯がわずかであるが認められる（図左側）。幅は３㎜である。はっきりと見えないが、９つの内行花文で構成されていると思われる。鈕の高さは3.2㎜である。厚さは最も薄い部分の内行花文帯で2.5㎜を測る。当遺跡出土の仿製鏡の中では厚みがある部類に入る。

幅の広い外縁と、径が7.9cmと比較的大きい点、さらに内行花文を持つことから内行花内日光鏡系仿製鏡Ⅱa類と考えられる。



第79図　119番地出土小型仿製鏡断面実測図（Ｓ＝１／１）

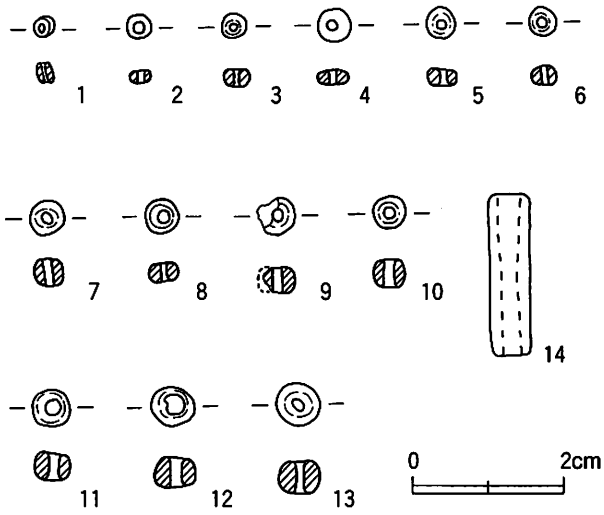
(37)　遺構に伴わない遺物（第80図～第84図）

ガラス玉、管玉（第80図）

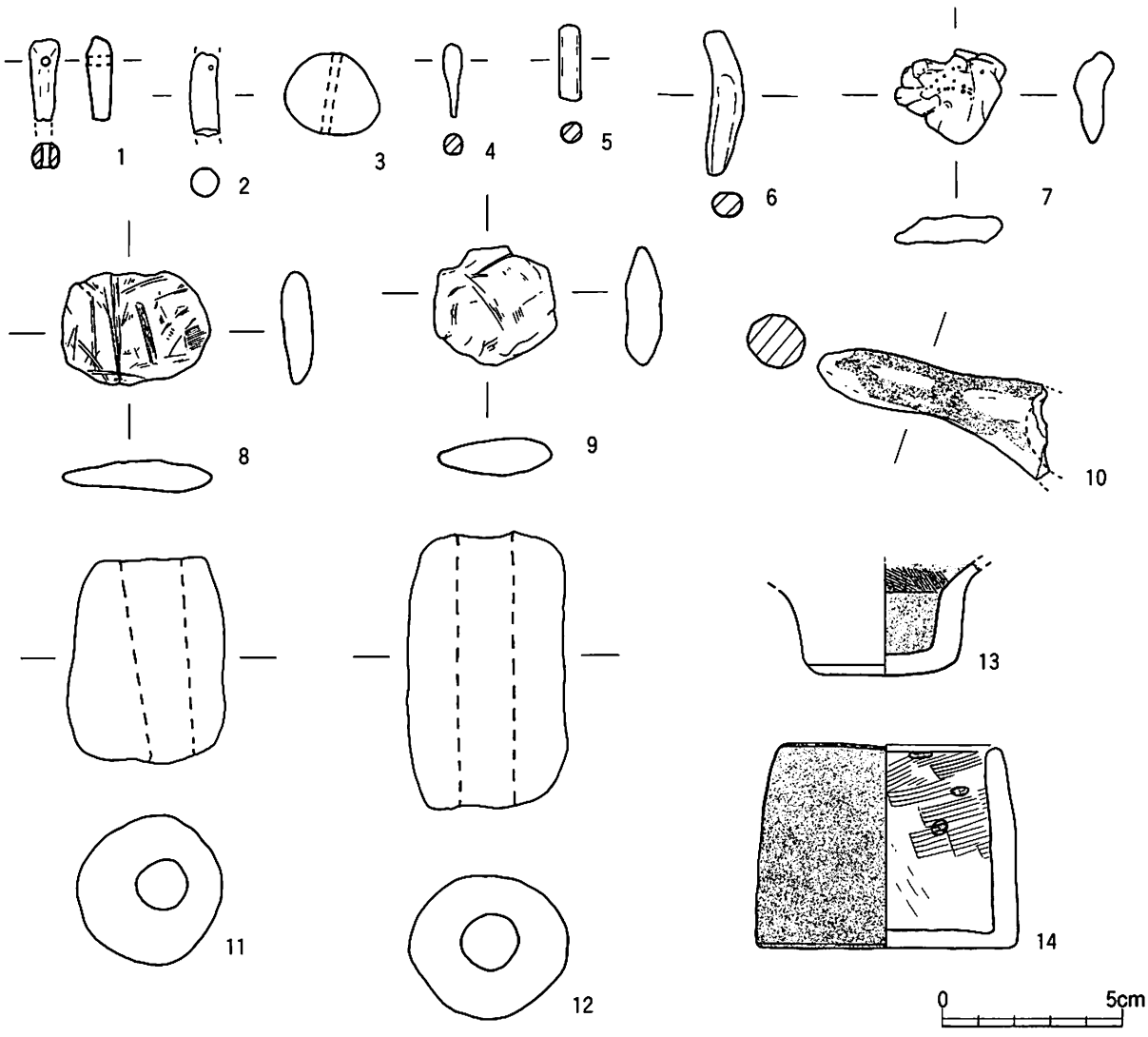
遺構に伴わず出土したガラス玉は合計10点ある。1号住居跡で3点出土しているので、119番地では合計13点のガラス玉が出土したことになる。ガラス玉は最小のものが直径2.8㎜で、最大のものが径5.8㎜である。直径が3㎜後半から4㎜前半にかけてのものが多い。ガラス玉のほか、管玉が1点出土した。14は長さが21.2㎜、断面の直径が6.3㎜、穿孔の口径が2.9㎜である。色調は灰白色を呈する。

赤彩土器（第81図）

赤彩が施され、器形がコップ形という、特殊な土器が出土した。遺構には伴わないが、石杵や3号住居跡南ピットのミニチュア土器と併せて、赤色顔料の生産



第80図　玉類実測図（S＝1／1）



第81図　遺構に伴わない遺物（土製品など）（S＝1／2）

を考える上で興味深い資料である。14はコップ形をした土器で完形である。外器面はベンガラにより赤く彩られ、なでが施されている。内器面はナナメ刷毛で調整されている。内器面や外器面底面にも赤彩が見られる。

土錘（第81図）

11は長さ5.7cmで、断面形が円形を呈する。径は4.0cmで、穿孔部の口径は1.4cmである。重さは108g。

土製品（第81図）

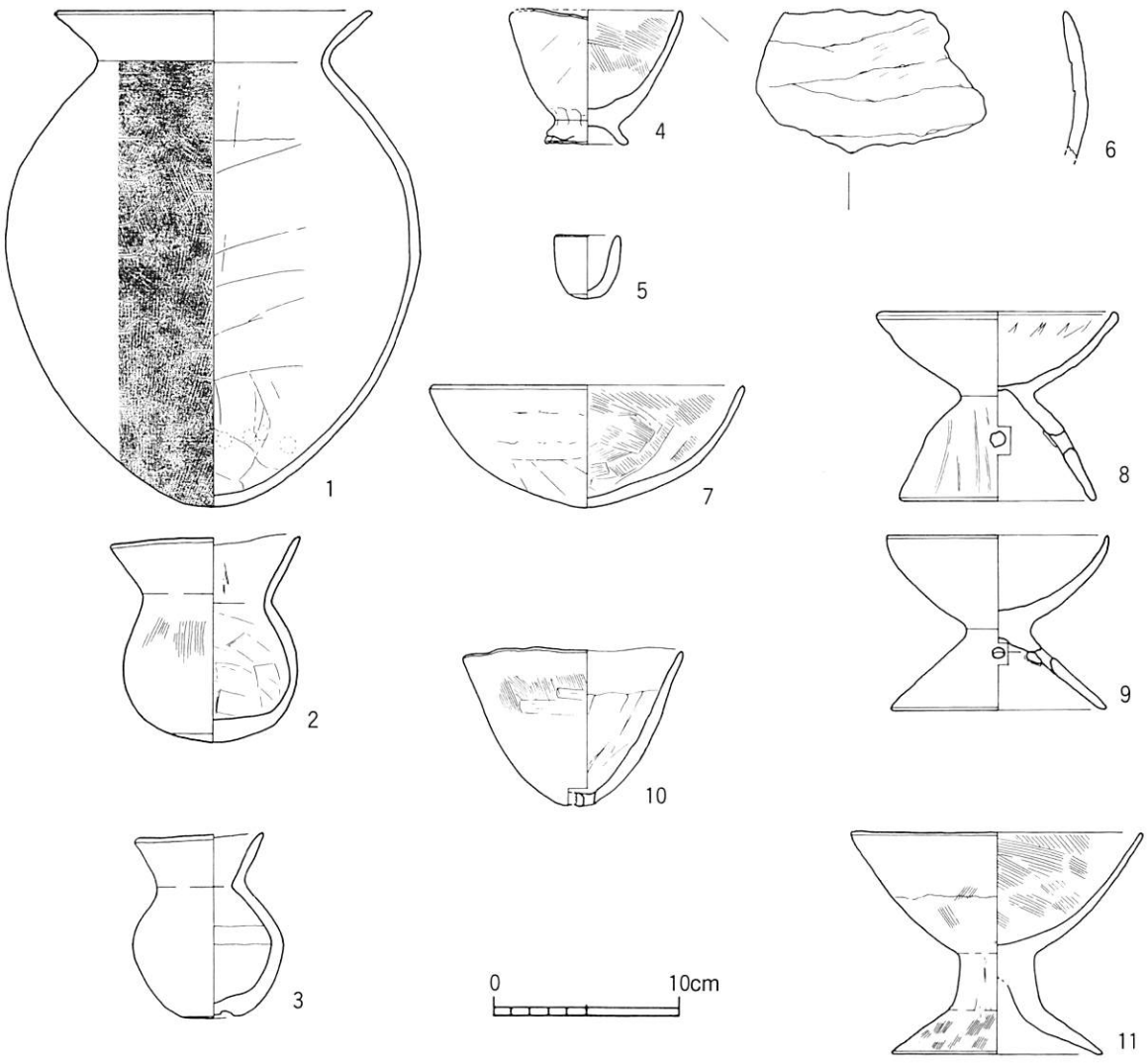
1は棒状の土製品で、上部に一つ穿孔が施されている。現存の長さは2.3cmで、円形を呈する断面の径は0.8cmである。3は完形の土製玉である。平面形はやや横に広がった楕円形になっている。長軸は2.7cm、短軸は2.3cm、穿孔部の口径は0.17cmである。

焼成粘土塊（第81図）

3号住居跡でも触れたが、そこで出土した同様の焼成粘土塊が包含層でも出土している。7、8、9では焼成粘土塊でそれぞれ植物の繊維痕が見られる。

石器（第84図）

未製品を1点含む3点の石庖丁が出土した。1は半分欠いた石庖丁である。現存の長さは6.9cm、幅は3.5cm、厚さは0.6cmである。刃部がかなり磨り減っている。3は石庖丁の未製品である。研磨が終わり、穿孔の段階で割れたものと思われる。穿孔部に敲打痕が残る。現存の長さは6.6cm、最大幅は5.1cmで平面形がきれいな半月形を呈している。厚さは0.6cmである。4は約1／4を欠いた石庖丁である。現存の長さ8.0cm、幅5.6cm、厚さ0.7cmで、1に比べて幅がある。あまり



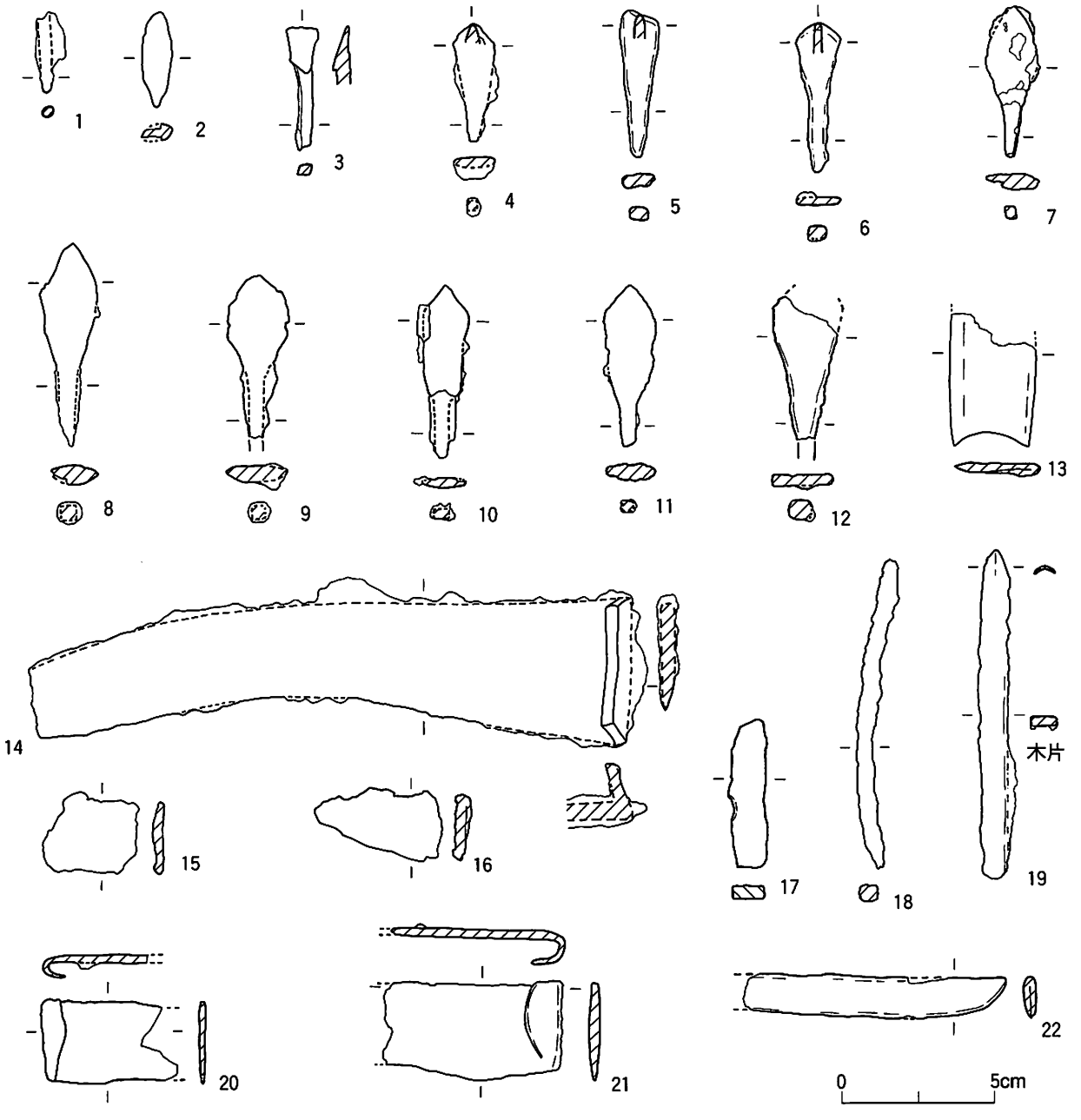
第82図　遺構に伴わない土器実測図

使用されないうちに折れたものと思われる。穿孔部には敲打痕が残っている。

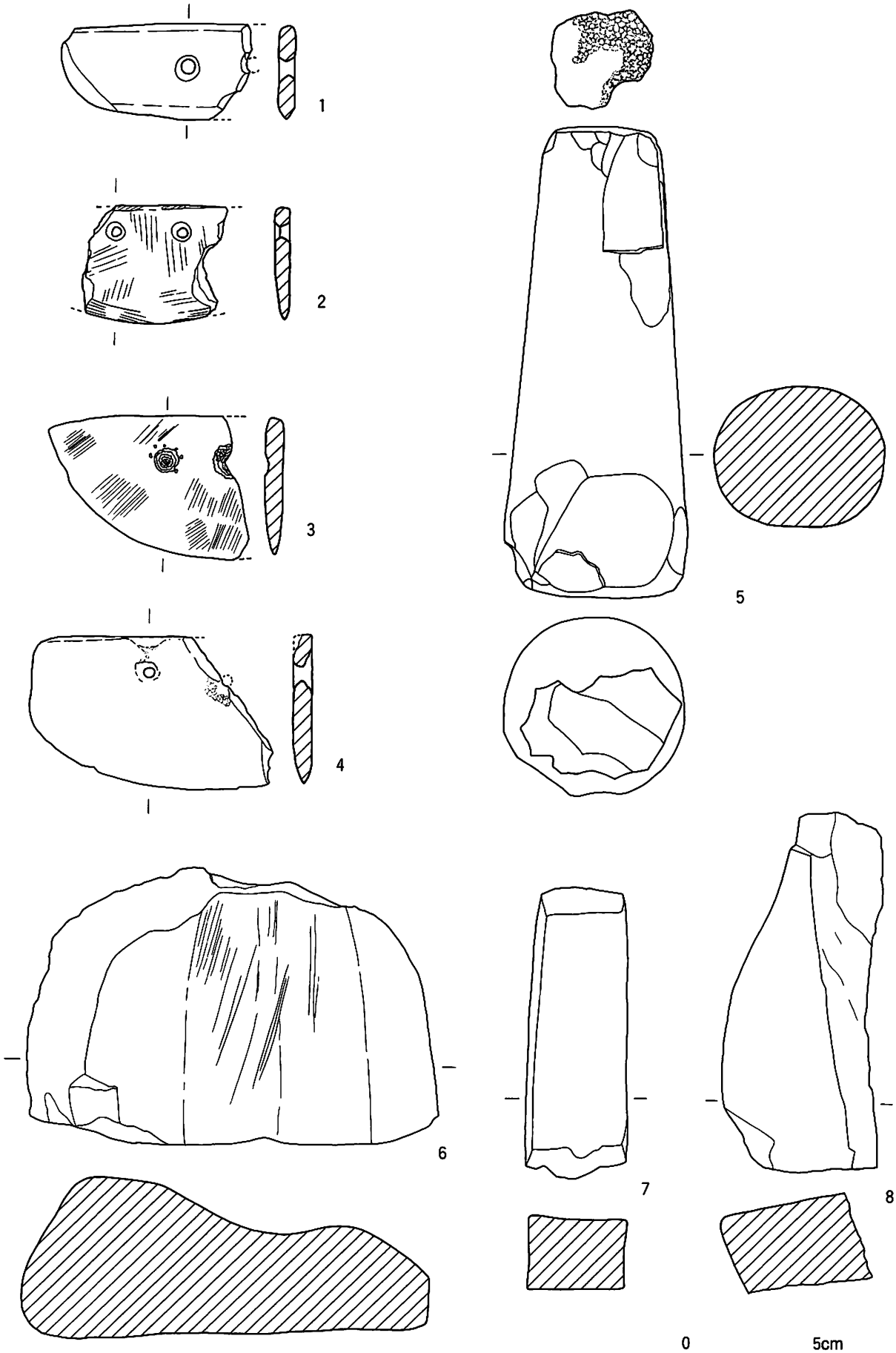
5は石杵である。一部剥離が見られるがほぼ完形である。平面形は台形を呈しており、上端幅は4.0cm、下端幅は推定7.0cmで、長さ16.7cmを測る。断面形は円形に近い楕円形で、欠損していない最大長軸は6.2cm、短軸は5.9ｃｍである。重さは969.2ｇあり、見た目よりも重量感がある。石材は玄武岩と思われる。側面は丁寧に研磨されて、光沢をもつ。上面、下面ともに研磨面と敲打痕が見られ、くぼんだ部分に朱が肉眼で確認された。表採資料ではあるが、棒状石杵は兵庫県以西では初の出土例である。（別府大学本田教授のご教示による）時期については、表採資料であるため確定できないが、石杵の形態や今回の調査地点の時期が布留期を主体としていることから、その時期の可能性が高いと思われる。

鉄器（第83図）

鉄器は17点である。そのうち製品が12点、未製品ま



第83図　119番地出土鉄器実測図（Ｓ＝１／２）



第84図　石器実測図（S＝1／2）

たは非製品が5点である。

製品は鉄鏃が8点、手鎌が1点、刀子が1点、鉇が1点、鉄鑿が1点である。

鉄鏃は全て有茎で、鋒部の形態で二つのタイプに分けられる。一つは鋒部が横に広がるもので、7、9、10、11、12、がそれにあたる。このうち10には、基部と刃部の一部に木片が付着している。もう一つのタイプは鋒部が横に広がらないもので、4、5、6の3点が確認された。

21は手鎌の右片である。刃部がかなり磨り減っている。22は刀子で基部を欠く。欠損部の断面から鉄板を折って作られたことが分かる。19は完形の鉇である。先端に刃部をもつが、それほど長さはない。基部は横断面形が長方形を呈しており、厚さは均一である。3は鉄鑿と思われる。縦断面形から片刃と判断される。基部の横断面形は整った長方形を呈する。

非製品は5点あり、板状鉄片、薄片状鉄片、棒状鉄塊、未製品に分類した。17は板状鉄片である。下辺中程に抉れた部分がある。16は薄片状鉄板である。厚さは2㎜と薄い。2と18は棒状鉄塊である。2は平面形が柳葉形である。横断面形は楕円形であると思われる。18は長さが10.2cmと長く、緩やかな弧を描く。15は刀子の未製品または欠損部か。明瞭な刃部は見られない。

(38) まとめ

①時期について

119番地の調査では、比較的広い面積を調査したことによって20基の住居跡と13基の土坑を検出することができた。後世の撹乱等により、残存状況は必ずしも良好ではなかったが、これだけ多くの住居跡を検出できたのは長い調査歴で、第1次調査以来のことである。

住居跡について、出土土器から時代別に見てみると、弥生時代後期のものが5基、弥生時代終末期が4基、庄内期が2基、布留期が3基、時期不明が6基となる。土器群を含めると出土した土器の量がもっとも多いのが布留期のもので、遺跡全体から見て東側に位置するこの地は、布留期に活動が活発であったことが窺える。

今回検出した住居跡で3号住居跡と7号住居跡の二つの住居は注目に値する。3号住居跡では床一面に広がった白粘土と灰、そして、20数点に及ぶ不整形の焼成粘土塊が出土しており、この遺構を中心に土器の焼成が行われた可能性がある。

②小型仿製鏡について

また、7号住居跡では土器溜めとして大量の土器が廃棄されている。この中から小型仿製鏡も出土した。貴重な青銅鏡とともに、布留期の良好な資料を得ることができた。

遺物については、小型仿製鏡の2点がまず挙げられる。わずか、500㎡強の面積にもかかわらず、2点の鏡が出土した点は驚きに値する。いずれも出土状況が床面から浮いた状態で、出土状況には他の遺物と比べて特異性は見られず、土器とともに廃棄されたという印象を受けた。

今回出土した鏡のうち、内行花文鏡については、同笵と思われるものが菊池川流域のうてな遺跡から出土しており、非常に注目される。

うてな遺跡は当遺跡から約4km上流の菊池郡七城町に所在する集落遺跡で、時期も当遺跡とほぼ同じである。互いに出土遺物の豊富さや遺跡の広大さなどから菊池川流域の拠点的集落と考えられている。

その巨大な集落が同笵の鏡を有していることは、互いが同盟的な関係であったことを示しているのではなかろうか。今回の同笵鏡の発見は、当時の菊池川沿岸の情勢を知る上で、非常に意味のある資料といえる。

菊池川流域には、菊池郡七城町の小野崎遺跡や玉名郡菊水町の諏訪原遺跡など巨大な集落が点在しているが、これらの遺跡との共通点と相違点を明確にしていけば、菊池川流域における弥生時代後期後半から古墳時代前期のより具体的な情勢を示していけるだろう。

③赤色顔料に関する遺物ついて

青銅鏡以外には、赤色顔料に関する遺物が上げられる。表採であるが、兵庫県以西では初の出土例となった棒状石杵は、古墳時代初頭における当遺跡の位置付けを考える上で重要な資料といえよう。石杵以外にも、内面朱の土器片も出土している。またこのほか、パレットのように利用されたのではないかと思われるミニチュア土器が1点出土している。当遺跡が赤色顔料の精製に関わる遺跡であるという、遺跡の特徴が見出されたことは、今回の調査の大きな成果といえる。

(山口健剛)

表－3　119番地出土　土器観察表　　その1

図	No.	遺構名	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備考
33	1	1号住	P-156	甕	上半	17.4	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部なで 胴部タタキ　胴部下刷毛	口縁部タタキ後なで 胴部タタキ	無	有	
33	2	1号住	P-157	台付鉢	脚部	－	－	5YR7/3 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良	ヘラミガキ 裾部なで	ヘラケズリ 裾部なで	有	無	1箇所に3つの穿孔
33	3	1号住	P-159	甕	脚台	－	－	10YR7/4 にぶい黄橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	ヘラケズリ後なで	ヘラケズリ 裾部刷毛後なで	有	無	橙色の色素が浮かぶ
33	4	1号住	P-156	台付鉢	脚部	－	－	10YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	縦刷毛後なで	ヘラケズリ 裾部なで	無	有	4号住居跡一括と接合
36	1	3号住	P-145 他	鉢	上半	27.2	－	10YR8/3 浅黄橙色	長石　石英　雲母	良好	口縁部縦刷毛 胴部タタキ後横刷毛	口縁部なで 胴部横刷毛	有	無	橙色の色素が浮かぶ
36	2	3号住	P-147 他	壺	上半	12.0	－	5YR7/8 橙色	赤褐色粒　長石 石英　雲母	良好	口縁部なで 肩部タタキ後ナナメ刷毛	口縁部なで 肩部ヘラケズリ	有	無	
36	3	3号住	P-147 他	壺	肩部	－	－	7.5YR5/8 明褐色	長石　石英　雲母	良好	肩部縦刷毛　胴部ナナメ刷毛	なで	無	無	内器面に接合部が明瞭に残る
36	4	3号住	P-152	鉢	完形 復元	16.0	6.1	7.5YR5/2 灰褐色	角閃石　長石　雲母	良好	口縁部なで　底部ヘラケズリ	口縁部なで	無	無	
36	5	3号住	一括	甕	上半	17.2	－	10YR6/3 にぶい黄橙色	角閃石　長石　雲母	良好	なで	口縁部なで 肩部ヘラケズリ	無	無	
36	6	3号住	一括	鉢	口縁部	9.8	－	7.5YR6/3 にぶい褐色	長石　石英	良好	口縁部なで　胴部ナナメ刷毛	なで	無	無	
36	7	3号住	一括	甕	脚台	－	－	7.5YR6/2 灰褐色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	なで	なで	無	無	
40	1	6号住	一括	台付鉢	脚台	－	－	5YR6/6 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	なで	胴部ヘラケズリ 底部ヘラケズリ後なで	無	有	
40	2	6号住	一括	壺	下半	－	－	2.5YR6/6 橙色	角閃石　長石　石英	良好	胴部タタキ 底部刷毛後なで	刷毛	有	無	
42	1	7号住	P-105 他	甕	上半	17.0	－	7.5YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良	口縁部なで　肩部横刷毛 胴部ヘラケズリ	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	有	有	
42	2	7号住	P-118	甕	底部欠	12.0	17.0	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	口縁部なで　上半ナナメ刷毛 下半縦刷毛	口縁部なで　肩部ナナメ刷毛 胴部縦刷毛	有	無	
42	3	7号住	P-56	甕	上半	19.4	－	5YR8/3 淡橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	口縁部なで　胴部タタキ後刷毛	口縁部なで　肩部刷毛 胴部ヘラケズリ	無	無	
42	4	7号住	P-84	甕	上半	14.2	－	7.5YR6/4 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	口縁部なで　肩部横刷毛 胴部縦刷毛	口縁部なで　肩部ナナメ刷毛 胴部ヘラケズリ	無	有	
42	5	7号住	P-81	甕	上半	15.6	－	5YR7/3 にぶい黄橙色	長石　石英	良好	タタキ後刷毛	口縁部～肩部刷毛 胴部ヘラケズリ	無	有	
42	6	7号住	P-91	甕	上半	12.8	－	7.5YR8/2 灰白色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	口縁部なで　胴部刷毛	口縁部なで　肩部刷毛 胴部ヘラケズリ	無	無	
42	7	7号住	P-88	甕	底部欠	14.8	－	2.5YR5/6 明赤褐色	赤褐色粒　角閃石	良	口縁部なで　肩部タタキ 胴部刷毛	口縁部　肩部なで 胴部ヘラケズリ	無	無	
42	8	7号住	P-69	甕	上半	15.6	－	10YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	口縁部縦刷毛後なで 胴部ナナメ刷毛	口縁部刷毛　胴部ヘラケズリ	無	有	
42	9	7号住	P-94	甕	肩～胴	－	－	10YR8/3 浅黄橙色	長石　石英　雲母	良好	口縁部なで　肩部縦刷毛後なで 胴部縦刷毛後ナナメ刷毛 底部縦刷毛	口縁部なで　肩部指頭圧 胴部ヘラケズリ	無	有	
43	10	7号住	P-171 他	甕	完形	16.6	28.0	10YR8/2 灰白色	茶褐色粒　長石 石英　雲母	良好	口縁部なで　肩部横刷毛 胴部上位ナナメ刷毛後横刷毛 下半縦刷毛一部ナナメ刷毛	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	無	有	
43	11	7号住	P-79	甕	上半	15.8	－	10YR8/3 浅黄橙色	茶褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部なで　肩部ナナメ刷毛	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	無	有	

表－3　119番地出土　土器観察表　　その2

図	No.	遺構名	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備考
43	12	7号住	P-192 他	甕	完形	13.8	13.2	10YR6/2 灰黄色	角閃石　雲母	良好	口縁部なで　刷毛後なで？	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	有	有	
43	13	7号住	P-112	甕	口縁部 欠	－	－	10YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良	頸部縦刷毛後なで 肩部縦刷毛後横刷毛 胴部ナナメ刷毛と縦刷毛	頸部なで 胴部ヘラケズリ	無	有	
43	14	7号住	P-71	鉢	上半	14.6	－	10YR8/2 灰白色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	口縁部なで 胴部ナナメ刷毛	横刷毛後工具によるなで	無	無	
43	15	7号住	P-76 他	甕	上半	12.6	－	7.5YR8/2 灰白色	角閃石　長石 石英	良好	口縁部なで 胴部刷毛後タテなで	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	有	有	
43	16	7号住	P-122	甕	上半	16.8	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	口縁部縦刷毛後なで 胴部タタキ	口縁部横刷毛 胴部刷毛	無	無	橙色の色素が浮かぶ
43	17	7号住	P-196、 198	甕	底部欠	15.2	－	10YR8/2 灰白色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	口縁部なで　胴部ナナメ刷毛	横刷毛後ヘラなで	無	無	
43	18	7号住	P-65	壺	上半	21.0	－	10YR7/4 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良	口縁部なで　胴部タタキ	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	無	有	明褐色の色素が浮かぶ
44	19	7号住	P-100	壺	肩～胴	－	－	5YR5/6 明赤褐色	角閃石　長石 石英　雲母	良	タタキ後刷毛	刷毛	有	無	内器面に剥離が 多くみられる
44	20	7号住	P-185	壺	上半	17.2	－	10YR8/2 灰白色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部なで　胴部タタキ	口縁部、肩部なで 胴部ヘラケズリ	無	無	
44	21	7号住	P-97 他	壺	上半	17.4	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部縦刷毛後なで 胴部刷毛	口縁部刷毛後なで 肩部刷毛　胴部ヘラケズリ	有	無	
44	22	7号住	P-82 他	壺	下半	－	－	2.5YR6/8 橙色	長石　石英	良好	刷毛	ヘラケズリ	有	無	
44	23	7号住	P-123 他	壺	上半	19.8	－	2.5YR6/6 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	縦刷毛後なで 胴部下半ヘラケズリ	横刷毛後なで 胴部下半ヘラケズリ	有	無	
45	24	7号住	P-188	壺	上半	18.0	－	10YR6/2 灰黄色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部縦刷毛後なで 胴部なで	口縁部なで　頸部、肩部刷毛 胴部ヘラケズリ	有	有	
45	25	7号住	P-98	壺	口縁部	19.6	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良	口唇部なで　口縁部下縦刷毛	口唇部なで　口縁部下横刷毛	無	無	
45	26	7号住	P-119	壺	口縁部	16.2	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	なで	なで	無	無	
45	27	7号住	P-119	壺	口縁部	16.2	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	なで	なで	有	無	粘土接合面が明瞭に 残る
45	28	7号住	P-194	壺	完形	12.4	7.7	2.5YR6/8 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良	口縁部なで　胴部ヘラミガキ	横ヘラミガキ	無	無	
45	29	7号住	P-120	壺	完形 復元	12.9	8.5	7.5YR7/6 橙色	角閃石　長石 石英	良好	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	口縁部なで 胴部ヘラケズリ後なで	有	無	
45	30	7号住	P-181	鉢	完形	11.9	8.5	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石	良	肩部刷毛　その他不明瞭	口縁部ナナメ刷毛 胴部ヘラケズリ	無	無	胎土に砂粒が多い
45	31	7号住	P-55	壺	底部欠	11.0	7.1	5YR7/8 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石	良	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	無	無	
45	32	7号住	P-180	鉢	完形	12.1	7.9	2.5YR5/8 明赤褐色	角閃石　石英 長石	良	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	なで	無	有	器面剥離が激しい
45	33	7号住	P-127	壺	完形 復元	10.2	5.9	7.5YR6/3 にぶい褐色	角閃石　長石	良	口縁部、肩部なで 胴部横刷毛	口縁部なで 胴部ヘラケズリ	無	有	
45	34	7号住	P-179	鉢	完形	12.7	3.7	5YR6/6 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石	良好	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	ヘラミガキ（放射状）	有	無	
45	35	7号住	P-192	鉢	底部欠	14.0	4.9	5YR5/6 明赤褐色	赤褐色粒　角閃石 長石	良好	口縁部刷毛後なで 胴部刷毛	なで	有	無	

表－3　119番地出土　土器観察表　　その3

図	No.	遺構名	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備考
45	36	7号住	P-93	鉢	上半	43.4	－	10YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	口縁部縦刷毛後なで 頸部縦刷毛　胴部横刷毛	ナナメ刷毛	有	無	
45	37	7号住	P-182	台付鉢	完形	11.6	8.8	2.5YR4/4 にぶい赤褐色	長石	良好	口縁部、脚部なで 坏部ヘラケズリ後なで	口縁部なで　坏部ヘラ調整 脚部刷毛後なで	無	無	
45	38	7号住	P-174	台付鉢	完形	13.5	6.6	2.5YR6/8 橙色	長石	良好	坏部刷毛後なで くびれ部なで　脚部なで	坏部ヘラミガキ　脚部なで	無	無	
45	39	7号住	P-178	台付鉢	坏部	10.6	－	2.5YR4/2 灰赤色	角閃石　長石 石英	良	ヘラミガキ	ヘラミガキ	有	無	
45	40	7号住	P-113	高坏	脚部	－	－	1.5YR1.7/1 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	柱部刷毛後ヘラミガキ 裾部刷毛　端部なで	柱部ヘラ調整　裾部なで	無	無	2個の穿孔が2箇所
45	41	7号住	P-60	高坏	脚部	－	－	2.5YR6/8 橙色	角閃石　長石 石英	良好	柱部刷毛後ヘラミガキ 裾部刷毛　端部なで	柱部ヘラ調整　裾部なで	無	無	穴13とも接合 裾部に4つの穿孔
45	42	7号住	P-101 他	台付鉢	下半	－	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	ヘラケズリ	脚部上位ヘラケズリ 脚部下位ヘラケズリ後なで	無	無	2個の穿孔
45	43	7号住	P-98	台付鉢	脚部	－	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　長石 石英　雲母	良好	脚部上位ヘラミガキ 脚部下位縦刷毛後ヘラミガキ	ヘラケズリ	無	無	
45	44	7号住	P-187	台付鉢	脚部	－	－	5YR7/8 橙色	赤褐色粒　長石 石英	良好	ヘラ調整後なで	不明	無	無	3つの穿孔
45	45	7号住	P-114	器台	完形	15.6	9.4	7.5YR7/6 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	端部なで　屈折部横刷毛 胴部ヘラケズリ	無	無	鼓形器台？
48	1	9号住	P-18	甕	脚台	－	－	7.5YR7/6 橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	縦刷毛　端部なで	横刷毛　端部なで	有	無	
48	2	9号住	P-19	壺	上半	18.0	－	2.5YR8/2 灰白色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	口縁部なで　肩部縦刷毛 胴部ナナメ刷毛	口縁部なで　胴部ナナメ刷毛 肩部刷毛後なで	無	無	
51	1	10号住	P-28 他	甕	上半	18.4	－	7.5YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	口縁部なで 胴部タタキ後刷毛	口縁部なで 胴部タタキ後刷毛	有	有	
51	2	10号住	P-26 他	甕	完形	16.5	25.7	10YR5/3 にぶい黄橙色	角閃石	良好	口縁部なで　胴部ナナメ刷毛	口縁部横刷毛　胴部ヘラケズリ 頸部ヘラケズリ後なで	有	有	
51	3	10号住	P-27	壺	完形	19.8	38.2	5YR6/6 橙色	長石　石英	良好	口縁部なで　頸部縦刷毛 肩部横刷毛　胴部タタキ後刷毛 底部縦刷毛	口縁部なで　胴部上半横刷毛 胴部下半ヘラケズリ	有	無	
51	4	10号住	一括	鉢	上半	29.8	－	10YR7/4 にぶい黄橙色	長石　石英	良好	口縁部なで　胴部縦刷毛	口縁部刷毛　胴部ナナメ刷毛	有	無	
54	1	11号住	一括	高坏	口縁部	25.8	－	7.5YR5/6 明褐色	角閃石　長石 石英	良好	なで	なで	有	無	
54	2	11号住	P-22	鉢	底部欠	14.2	14.3	2.5Y3/2 黒褐色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	口縁部タタキ　胴部ナナメ刷毛	ナナメ刷毛	無	有	
55	1	12号住	P-38	壺	底部欠	13.0	－	5YR4/4 にぶい赤褐色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	口唇部なで　口縁部ナナメ刷毛 胴部ナナメ刷毛	口縁部ナナメ刷毛 胴部ヘラケズリ	無	無	
55	2	12号住 北西 pit	一括	高坏	脚部	－	－	7.5YR8/8 黄橙色	赤褐色粒　長石	良好	なで	柱部ヘラ調整　裾部横刷毛 端部なで	無	無	4個の穿孔
56	1	13号住	P-9	甕	完形	17.4	37.8	7.5YR6/6 橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	口縁部なで　胴部上半タタキ 胴部下半ヘラ調整	口縁部横刷毛 胴部上半ナナメ刷毛 胴部下半縦刷毛	有	有	
56	2	13号住	－	甕	下半	－	－	10YR7/4 にぶい黄橙色	角閃石　長石 石英	良好	縦刷毛	胴部縦刷毛　底部横刷毛	無	有	
56	3	13号住	一括	壺	口縁部	21.6	－	7.5YR8/4 浅黄橙色	長石	良好	口唇部なで　口縁部横刷毛 頸部縦刷毛	口唇部なで　口縁部下横刷毛	無	無	
56	4	13号住	一括	鉢	底部欠	21.0	－	10YR7/3 にぶい黄橙色	赤褐色粒　長石 雲母	良好	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	うすい刷毛	無	無	
56	5	13号住	P-4	鉢	底部欠	12.6	－	10YR7/3 にぶい黄橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	口縁部～胴部上半なで 胴部下半ナナメ刷毛	口縁部～肩部なで	無	無	

表－3　119番地出土　土器観察表　　その4

図	No.	遺構名	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備考
56	6	13号住	P-14	甕	下半	－	－	10YR7/3 にぶい黄橙色	長石　石英	良好	胴部上半タタキ 胴部下半ヘラケズリ	横刷毛 底部指頭圧痕	無	有	
56	7	13号住	一括	ミニチュア土器（鉢）	下半	－	－	10YR5/2 灰黄褐色	長石	良好	不明瞭	不明瞭	無	無	
58	1	14号住	拡P-122 他	甕	完形	18.0	36.3	10YR7/2 にぶい黄橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	口縁部ナナメ刷毛 胴部上半タタキ後刷毛 胴部下半縦刷毛		有	有	
58	2	14号住	拡P-138	甕	上半	15.7	－	10YR7/3 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石	良好	口縁部縦刷毛後なで 胴部タタキ後刷毛	口縁部刷毛後なで 胴部上半刷毛 胴部下半ヘラケズリ	無	有	
58	3	14号住	拡P-117	甕	上半	12.9	－	10YR8/2 灰白色	角閃石　長石 雲母	良好	口縁部なで　胴部タタキ後刷毛	口縁部～肩部横刷毛後なで 胴部ヘラケズリ	有	無	
58	4	14号住	拡P-123	甕	上半	15.7	－	10YR6/3 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部なで　胴部タタキ後刷毛	口縁部横刷毛　胴部ナナメ刷毛	無	有	
58	5	14号住	拡P-116	壺	口縁部	16.4	－	10YR8/2 灰白色	角閃石　長石 雲母	良	口縁部なで　ナナメ刷毛 縦刷毛	横刷毛	無	無	
58	6	14号住	拡P-130	壺	口縁部	16.8	－	5YR7/6 橙色	赤褐色粒　長石 雲母	良	なで	なで	無	無	
58	7	14号住	拡P-108	壺	胴部	－	－	7.5YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石	良	頸部なで 胴部上半ナナメ刷毛 胴部下半横刷毛	ヘラケズリ後なで	無	無	
58	8	14号住	拡P-134	鉢	完形	14.0	8.2	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石	良好	口縁部なで 胴部上半ナナメ刷毛 胴部下半ヘラケズリ	口縁部なで 胴部ヘラケズリ			
58	9	14号住	拡P-141	手捏土器（鉢）	完形	8.5	5.1	N2/ 黒色	長石　石英	良	ヘラケズリ	ヘラケズリ	無	無	内器面に赤色顔料付着
58	10	14号住	拡P-137	鉢	完形	10.0	7.5	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石	良	口縁部なで　胴部刷毛	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	無	有	
58	11	14号住	拡P-139	甑	完形	17.0	10.1	7.5YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石	良	口縁部刷毛後なで 胴部刷毛	口縁部刷毛　胴部ヘラケズリ	無	無	口唇部がいびつ
58	12	14号住	拡P-138	甑	下半	－	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石	良好	刷毛	胴部上半刷毛　下半ヘラケズリ	有	無	
58	13	14号住	拡P-125	高坏	脚部	－	－	5YR7/6 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	縦刷毛	柱部ヘラケズリ 裾部ナナメ刷毛	無	無	4個の穿孔
58	14	14号住	拡P-135	高坏	脚部	－	－	7.5YR8/6 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	柱部なで　裾部刷毛後なで 端部なで	柱部ヘラケズリ 端部なで	無	無	2個1セットの穿孔が 2箇所
60	1	15号住	拡P-91 他	甕	上半	15.4	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　長石 角閃石	良好	口縁部なで 胴部タタキ後刷毛	口縁部なで 胴部ヘラケズリ	有	有	
60	2	15号住	拡P-152	甕	底部欠	15.8	－	7.5YR6/4 にぶい橙色	赤褐色粒　長石 石英　雲母	良好	口縁部なで 胴部タタキ後ナナメ刷毛	口縁部なで　胴部下半指調整 胴部上半ナナメ刷毛	無	有	煤が多量に付着
60	3	15号住	拡P-144	壺	口縁部 欠	－	－	7.5YR7/6 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	胴部刷毛	頸部なで 肩部横刷毛　胴部ヘラ調整	無	有	器面が摩滅している
60	4	15号住	拡P-145	甕	上半	17.8	－	7.5YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　長石 雲母	良好	口縁部なで　肩部横刷毛	口縁部なで　肩部ヘラケズリ？	無	有	
60	5	15号住	拡P-154	手捏土器（鉢）	完形	9.5	7.5	2.5Y8/2 灰白色	角閃石　長石 石英	良好	口縁部なで	口縁部なで　胴部刷毛 底部なで	有	無	
60	6	15号住	拡P-142	壺	完形	13.9	10.3	7.5YR8/4 浅黄橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	口縁部なで 胴部ナナメ刷毛	口縁部なで 胴部下半ヘラケズリ 胴部上半ヘラケズリ後ナナメ刷毛	有	有	口唇部がいびつ
60	7	15号住	拡P-151	甕	脚台	－	－	10YR7/3 にぶい黄橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	縦刷毛	横刷毛　端部なで	有	無	
60	8	15号住	拡P-144	手捏土器（鉢、甑？）	下半	－	－	10YR4/2 灰黄褐色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良	摩滅のため不明	摩滅のため不明	無	無	底部に小さな穴

表－3　119番地出土　土器観察表　　その5

図	No.	遺構名	P番号	器　種	部位	口径	器高	色調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備　考
60	9	遺構外	拡 P-79	鉢	完形	9.8	7.1	2.5YR4/8 赤褐色	長石　石英	良好	口縁部なで　胴部ヘラ調整	口縁部なで　胴部ヘラ調整	無	無	
60	10	15号住	拡 P-155	台付鉢	完形	11.2	7.1	7.5YR7/6 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石	良好	口縁部なで　坏部縦刷毛 脚部なで	横刷毛後ヘラ調整	無	無	
60	11	15号住	拡 P-143	高坏	脚部	－	－	7.5YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良	裾部刷毛	不明瞭	無	無	4個の穿孔
60	12	15号住	拡 P-157	台付鉢	脚台	－	－	10YR8/4 浅黄橙色	角閃石　長石 石英	良好	ヘラ調整	脚部上位なで 脚部下位横刷毛後ヘラ調整	無	無	
60	13	15号住	拡 P-156	鉢	完形	15.0	10.6	10YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部なで　胴部横刷毛	口縁部なで　胴部上半ヘラ調整 胴部下半ヘラケズリ	有	無	底部穿孔 形がいびつ
60	14	15号住	拡 P-146	手捏土器（鉢）	口縁部欠	－	－	5YR7/6 橙色	長石　石英　雲母	良好	胴部縦刷毛	頸部ナナメ刷毛 胴部～底部指調整	有	無	
62	1	16号住	一括	甕	口縁部	17.3	－	10YR8/2 灰白色	角閃石　長石 雲母	良好	口縁部ナナメ刷毛 肩部タタキ後縦刷毛	口縁部ナナメ刷毛 肩部ナナメ刷毛	有	無	
64	1	17号住	拡 P-168	甕	上半	16.6	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部なで　肩部縦刷毛	口縁部なで　肩部ナナメ刷毛	無	無	
64	2	17号住	拡 P-92	甕	脚台	－	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	縦刷毛　裾部なで	ヘラケズリ　裾部刷毛後なで	有	無	
64	3	17号住	拡 P-94	壺	口縁部	20.2	－	2.5Y5/3 黄褐色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口唇部なで 口縁部縦刷毛	横刷毛後なで	無	無	
64	4	17号住	拡 P-168	高坏	脚部	－	－	10YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石	良好	縦刷毛	ヘラケズリ	無	無	2個の穿孔
64	5	17号住 上面	拡 P-100 他	甕	完形	26.0	27.7	7.5YR7/6 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	口縁部なで 胴部刷毛	口縁部なで 胴部ヘラケズリ	有	有	
64	6	17号住	一括	手捏土器（鉢）	完形	10.0	3.6	10YR7/2 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	刷毛	ヘラ調整後なで	有	無	
64	7	17号住	拡 P-104	坏	完形	15.5	3.5	5YR7/6 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	口縁部なで　底部ヘラケズリ	なで後ヘラ調整	有	無	土師器 内器面に摩滅
67	1	18号住	一括	壺	底部	－	－	7.5YR5/3 にぶい褐色	角閃石　長石 石英	良好	縦刷毛	うすい刷毛	無	無	
68	1	19号住	拡 P-67	鉢	完形	12.2	9.9	10YR8/4 浅黄橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	口縁部ナナメ刷毛後なで 胴部ナナメ刷毛　底部刷毛	口縁部ナナメ刷毛後なで 頸部指調整後ヘラ調整後なで 底部指頭圧痕	有	無	
68	2	19号住	拡 P-68	鉢	完形	18.6	9.0	2.5Y8/2 灰白色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	口縁部縦刷毛後なで 胴部上半縦刷毛 胴部下半一部ナナメ刷毛	横刷毛後放射状にヘラミガキ 底部に指頭圧痕	有	無	
68	3	19号住	拡 P-67	壺？	底部	－	－	5YR5/6 明赤褐色	長石　多量の砂粒	良好	指調整	指調整	無	無	
68	4	19号住	一括	ミニチュア土器（鉢）	下半	－	－	5YR6/1 褐灰色	長石　石英　雲母	良好	不明瞭	不明瞭	有	無	
72	1	1号土坑	拡 P-175	台付鉢	完形 復元	11.5	6.6	5YR7/6 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	ヘラ調整後なで	ヘラ調整後なで	無	無	
72	2	3号土坑	一括	台付鉢	脚台	－	－	7.5YR4/1 褐灰色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	ヘラ調整後なで	脚部上半刷毛 脚部下半なで	有	無	
72	3	6号土坑	拡 P-161	鉢	完形	13.8	5.7	5YR6/8 橙色	赤褐色粒　長石	良好	なで	刷毛	無	無	内器面底部中心部に 径 1cm のくぼみ有
72	4	14号土坑	一括	鉢	上半	11.2	－	5YR7/6 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石	良好	口縁部刷毛後なで 胴部刷毛	ヘラケズリ後なで	無	無	穴１４とも接合
72	5	6号土坑	拡 P-160	台付鉢	坏部	13.0	－	5YR5/6 明赤褐色	角閃石　長石 白色粒	良好	ヘラ調整後なで	ヘラ調整後なで	無	無	

表－3　119番地出土　土器観察表　　その6

図	No.	遺構名	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備考
72	6	5号土坑	拡 P-173	台付鉢	脚台	－	－	5YR6/8 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石	良好	なで	なで	無	無	
72	7	5号土坑	一括	台付鉢	下半	－	－	5YR6/8 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石	良好	なで　脚台刷毛後なで	なで	無	無	
72	8	5号土坑	一括	壺	底部欠	14.1	－	5YR6/8 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石	良	なで	なで	無	無	
72	9	10号土坑	P-21	鉢	上半	10.4	－	2.5Y5/3 黄褐色	角閃石　長石 石英	良好	口縁部ナナメ刷毛　胴部縦刷毛	ナナメ刷毛	有	無	穴１０と接合
74	1	1号土器群	拡 P-14 他	甕	下半	－	－	10YR7/2 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	胴部中位タタキ 胴部下半刷毛	ヘラケズリ	有	有	
74	2	1号土器群	拡 P-9 他	甕	上半	15.5	－	10YR8/ 3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	口縁部なで 胴部タタキ	口縁部なで 胴部ヘラケズリ	有	有	
74	3	1号土器群	拡 P-10 他	甕	底部欠	16.5	－	10YR8/2 灰白色	赤褐色粒　長石 角閃石	良好	タタキ後刷毛	刷毛	有	有	
74	4	1号土器群	拡 P-5 他	甕	上半	16.0	－	10YR8/ 4 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	口縁部なで 胴部タタキ後刷毛	口縁部横刷毛後なで 胴部刷毛	有	有	明赤褐色の色素が 浮かぶ
74	5	1号土器群	拡 P-18	甕	上半	14.2	－	10YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部なで　胴部刷毛	口縁部なで 胴部ヘラケズリ	無	有	器面調整不明瞭
74	6	1号土器群	拡 P-2 他	壺	口縁部 欠	－	－	5YR4/8 赤褐色	角閃石　長石 石英	良	刷毛	ナナメ刷毛	無	無	長石の粒が大きい
74	7	1号土器群	拡 P-17	器台	脚台	－	－	10YR8/2 灰白色	角閃石　長石 雲母	良好	脚部刷毛	脚部刷毛　裾部なで	無	無	脚台に３つ穿孔
75	1	2号土器群	拡 P-39	甕	完形	13.8	18.7	7.5YR7/6 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	口縁部なで 胴部タタキ後刷毛	口縁部横刷毛 胴部ヘラケズリ	有	有	
75	2	2号土器群	拡 P-24 他	甕	底部欠	16.4	－	7.5YR8/2 灰白色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	上半なで　下半ナナメ刷毛	口縁部なで　胴部ヘラケズリ 底部指頭圧痕	無	有	
75	3	2号土器群	拡 P-34	甕	完形	16.2	21.5	10YR8/4 浅黄橙色	角閃石　雲母 砂粒	良好	口縁部なで 胴部タタキ後刷毛	口縁部横刷毛 胴部横刷毛後ヘラケズリ	無	有	
75	4	2号土器群	拡 P-22	壺	完形	11.2	9.7	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　長石 石英	良好	ナナメ刷毛	口縁部刷毛　胴部ヘラケズリ	無	無	
75	5	2号土器群	拡 P-33	鉢	完形	14.6	7.0	7.5YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　長石	良好	口縁部指調整後なで 胴部～底部ナナメ刷毛	口縁部ナナメ刷毛 胴部～底部ヘラケズリ	有	無	
75	6	2号土器群	拡 P-36	甕	完形 復元	17.4	29.5	5YR7/6 橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	口縁部縦刷毛後なで 肩部ナナメ刷毛　底部刷毛 胴部タタキ後縦刷毛	口縁部横刷毛 肩部横刷毛後縦刷毛 胴部ヘラケズリ　底部ナナメ刷毛	無	有	
75	7	2号土器群	拡 P-25	甕	上半	30.6	－	10YR7/3 にぶい黄橙色	赤褐色粒　長石 角閃石　雲母	良好	口縁部なで　胴部縦刷毛 肩部横刷毛後なで	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	無	有	吹きこぼれの痕 山陰系土器
75	8	2号土器群	拡 P-128	高坏	坏部	－	－	5YR6/6 橙色	角閃石　長石 石英	良好	なで	なで	有	無	
75	9	2号土器群	拡 P-23	高坏	坏部	22.0	－	2.5YR6/8 橙色	赤褐色粒　長石 角閃石　石英	良好	なで 口縁部縦刷毛	なで	無	無	坏と脚の接合面が明瞭
76	1	3号土器群	拡 P-45	甕	完形	17.0	24.9	10YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒　雲母 砂粒	良好	口縁部なで 胴部刷毛	口縁部横刷毛 胴部ヘラケズリ	有	有	
76	2	3号土器群	拡 P-24 他	甕	底部欠	16.4	－	7.5YR8/2 灰白色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	上半なで　下半ナナメ刷毛	口縁部なで　胴部ヘラケズリ 底部指頭圧痕	無	有	
76	3	3号土器群	拡 P-47	甕	完形	15.8	25.3	10YR5/2 灰黄褐色	長石　石英　雲母	良好	口縁部なで 肩部縦刷毛後なで 胴部～底部ナナメ刷毛	口縁部なで　胴部ヘラケズリ 底部指頭圧痕	無	有	
76	4	3号土器群	拡 P-51	甕	底部欠	14.6	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　長石 石英	良好	口縁部なで 胴部タタキ後ナナメ刷毛	口縁部なで 胴部ヘラケズリ	無	有	

表－3　119番地出土　土器観察表　　その7

図	No	遺構名	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備考
76	5	3号土器群	拡 P-42	壺	完形	13.8	17.0	7.5YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	口縁部横刷毛 胴部ヘラケズリ	口縁部横刷毛　胴部下半なで 胴部上位ヘラケズリ	有	無	胴部下半に焼成後穿孔
76	6	3号土器群	拡 P-54	壺	完形	11.2	13.1	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石	良好	口縁部なで 胴部刷毛後なで	口縁部横刷毛 胴部ヘラケズリ	有	無	
76	7	3号土器群	拡 P-40	壺	上半	16.8	－	7.5YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒 角閃石　長石	良好	口縁部なで 胴部タタキ	口縁部なで	無	無	
76	8	3号土器群	拡 P-48	壺	完形 復元	12.2	8.5	2.5YR6/8 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	口縁部なで 胴部ヘラミガキ	口縁部なで 胴部ヘラケズリ	有	無	
76	9	3号土器群	拡 P-58 他	器台	完形 復元	13.3	10.6	2.5YR5/8 明赤褐色	角閃石　長石	良好	頸部縦刷毛 その他ヘラ調整後なで	鉢部ヘラ調整後なで 脚部ヘラケズリ 脚端部刷毛後なで	有	無	脚台に3つ穿孔
77	1	4号土器群	拡 P-62	甕	完形	14.2	20.7	10YR8/4 浅黄橙色	長石　石英　雲母	良好	口縁部なで　肩部縦刷毛 胴部ナナメ刷毛 胴部～底部目の細かい縦刷毛	口縁部なで 肩部ヘラケズリ後なで 胴部～底部ヘラケズリ	有	有	煤が固まって付着 肩部に指紋が残る
77	2	4号土器群	拡 P-64	器台	完形 復元	8.6	6.4	5YR6/8 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	口縁部なで 胴部ヘラ調整	上端なで 下半ヘラケズリ後なで	無	無	鼓形器台？
77	3	4号土器群	拡 P-65 他	甕	完形	16.5	26.0	10YR7/4 にぶい黄橙色	角閃石　雲母 砂粒	良好	口縁部なで　胴部刷毛 肩部沈線波状紋	口縁部横刷毛 胴部ヘラケズリ	無	有	胴部に煤が多様に付着
78	1	5号土器群	拡 P-106	甕	完形	17.3	24.6	7.5YR7/6 橙色	雲母　砂粒	良好	口縁部、頸部なで 胴部タタキ後刷毛	口縁部刷毛 胴部刷毛後ヘラケズリ	無	有	
78	2	5号土器群	拡 P-110	甕	完形	15.3	20.1	7.5YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 雲母	良好	口縁部なで 胴部タタキ後ナナメ刷毛	口縁部刷毛　胴部ヘラケズリ	無	有	
78	3	5号土器群	拡 P-109	高坏	完形	18.5	12.9	7.5YR8/4 浅黄橙色	角閃石　長石 石英	良好	坏部なで 脚部縦刷毛	坏部なで　脚部ヘラケズリ 端部刷毛	無	無	
78	4	5号土器群	拡 P-105	高坏	坏部	20.4	－	5YR7/8 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	坏部なで 脚部ヘラ調整	坏部なで 脚部ヘラケズリ	無	無	脚部4個穿孔
82	1	遺構外	拡 P-1	甕	完形	16.8	26.7	10YR8/2 灰白色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	口縁部なで　胴部下半縦刷毛 肩部タタキ後ナナメ刷毛後なで 胴部中位タタキ後ナナメ刷毛	口縁部なで 肩部ヘラケズリ後なで 胴部ヘラケズリ	有	有	二次的被熱
82	2	遺構外	拡 P-60	壺	完形	9.9	10.6	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	口縁部なで 胴部上位縦刷毛	口縁部ヘラケズリ後なで 胴部ヘラケズリ	無	無	
82	3	遺構外	拡 P-21	手捏ね 土器（壺）	完形	6.8	9.8	10YR7/3 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	口縁部なで 胴部ヘラ調整後なで	口縁部なで 胴部ヘラ？調整	無	無	粘土接合部が明瞭に 残る
82	4	遺構外	Gr.中央 南	台付鉢	完形	9.6	7.2	7.5YR8/4 浅黄橙色	角閃石　長石	良好	鉢部なで　脚部指調整	鉢部刷毛　脚部指調整	無	無	手捏土器
82	5	遺構外	一括	ミニチュア 土器（鉢？）	完形	3.3	3.5	10YR6/2 灰黄色	角閃石　長石 石英	良好	指なで	指なで	無	無	
82	6	遺構外	一括	鉢？ 未製品	口縁部	－	－	10YR8/2 灰白色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	指で押さえた痕 所々に工具痕	指で押さえた痕 所々に工具痕	無	無	粘土紐の単位が残る 製品ではない
82	7	遺構外	拡 P-172	甑	完形	11.6	8.3	2.5YR5/8 明赤褐色	長石	良好	口縁部なで 胴部ナナメ刷毛後ヘラケズリ	口縁部ナナメ刷毛 胴部指なで	有	無	底部に1個小さな穴
82	8	遺構外	Gr.中央 南	台付鉢	完形	9.6	7.2	7.5YR8/4 浅黄橙色	角閃石　長石	良好	鉢部なで　脚部指調整	鉢部刷毛　脚部指調整	無	無	手捏土器
82	9	遺構外	拡 P-138 他	台付鉢	完形	12.4	10.2	10YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石 石英	良好	鉢部なで　脚部ヘラミガキ	鉢部ヘラミガキ　脚部なで	無	無	脚部に3ヵ所穿孔
82	10	遺構外	一括	台付鉢	完形	11.8	9.5	5YR5/8 明赤褐色	赤褐色粒　長石 白色粒	良好	摩滅のため不明	摩滅のため不明	無	無	
82	11	遺構外	一括	台付鉢	完形	15.4	12.1	10YR8/2 灰白色	赤褐色粒　長石	良好	口縁部なで　坏部ナナメ刷毛 脚裾部ナナメ刷毛	坏部ナナメ刷毛 脚裾部なで	有	無	

表－4　鉄器計測値一覧表　　その1

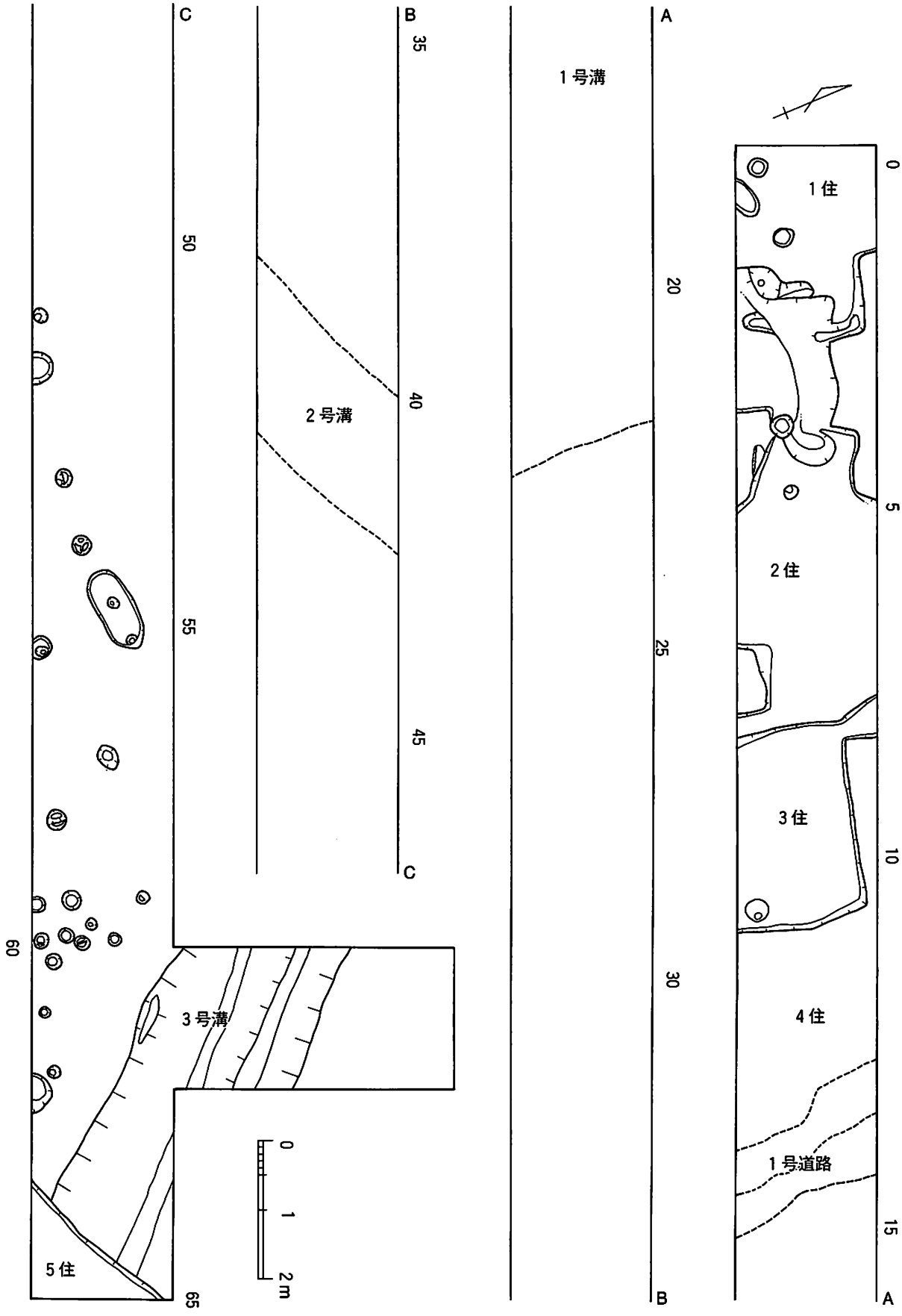
図	No.	器種名	残存状態	番地	出土遺構	土層	長さ	幅	厚さ	重さ	そ の 他	実測図No.
10	1	鉄鏃	茎部	84-2	2号住		2.5	0.4～0.9	0.2	1.5		4-13
10	2	鉄鏃	完形	84-2	2号住		2.7	1.0	0.3～0.5	3.0		4-11
10	3	不明鉄片		84-2	2号住		4.3	2.0	0.6	13.5		3-4
10	4	刀子？		84-2	2号住		5.7	1.1	0.2～0.7	10.3	棒状の鉄器	3-7
10	5	不明鉄片		84-2	2号住		5.5	3.3	0.6	27.5		3-3
10	6	不明鉄片		84-2	2号住		6.0	3.7	0.5	45.0	切り込みが残る	5-16
10	7	不明鉄片		84-2	2号住		3.0	2.4	0.5	9.1	厚さ均一	4-15
10	8	不明鉄塊		84-2	2号住		3.4	2.8	0.3～2.8	31.0		4-10
10	9	不明鉄片		84-2	2号住		6.3	1.3	0.5～0.7	12.5		3-5
10	10	不明鉄片		84-2	2号住		6.0	1.5	0.6	13.9		3-2
10	11	不明鉄片		84-2	2号住		5.5	1.5	0.8	15.0		4-8
10	12	不明鉄片		84-2	2号住		2.0	1.1	0.3	1.8	切断後の鉄片か	4-9
10	13	不明鉄片		84-2	2号住		2.4	1.2	0.3	1.8	炭化物付着	3-1
10	14	鉄斧？	半欠	84-2	2号住		2.0	2.9	0.2	5.2		4-14
10	15	不明鉄片		84-2	2号住		4.8	2.4	0.3	10.5		3-6
24	1	不明棒状鉄片		84-2	溝	一括	1.9	0.5	0.3	0.5	針状になっている	9-67
24	2	不明棒状鉄片		84-2	溝	一括	2.6	0.3	0.3	0.7	釣針の軸部か	9-68
24	3	不明棒状鉄片		84-2	溝	中層	2.5	0.7	0.7	1.5	断面が円形	8-53
24	4	鉇	切先	84-2	溝	一括	2.3	1.4	0.2	1.5		9-56
24	5	鉇？	茎部か？	84-2	溝	下層	2.6	1.2	0.2	2.4	厚さ均一	5-7
24	6	鉇	茎部	84-2	溝	上層	3.9	1.2	0.2	4.0		7-30
24	7	鉄鏃？	鋒部？	84-2	溝	上層	2.6	1.0	0.3	1.5		8-39
24	8	不明鉄片		84-2	溝	中層	3.0	1.1	0.1	1.1	厚さ均一	8-54
24	9	不明鉄片		84-2	溝	下層	4.4	1.3	0.3	4.2	鏃か	5-8
24	10	鉄鏃	鋒部	84-2	溝	上層	3.1	1.8	0.2	3.3		8-37
24	11	鉄鏃	完形	84-2	溝	中層	2.8	1.3	0.4	3.5		8-52
24	12	鉄鏃	茎部を欠く	84-2	溝	上層	2.8	1.5	0.6	4.2		7-19
24	13	鉄鏃	完形	84-2	溝	中層	4.4	0.4～1.5	0.3～0.5	4.6		6-10
24	14	鉄鏃	完形	84-2	溝	中層	5.0	1.6	0.5	11.0	切先が折れ曲がっている	8-47
24	15	鉄鏃	完形	84-2	溝	上層	7.0	0.6～2.0	0.4	10.0		6-9
24	16	鉄鏃		84-2	溝	上層	5.4	1.8	0.2	7.6	接合しない	9-78
24	17	鉄鏃	ほぼ完形	84-2	溝	上層	9.4	1.7	0.2	12.0		5-6
24	18	鉄斧片		84-2	溝	中層	2.1	2.4	0.8	9.9	片刃鉄斧の刃部片	8-49
24	19	鉄斧片		84-2	溝	上層	2.6	2.3	1.0	11.0	鉄斧刃部の一部か	6-15
24	20	鉄斧片		84-2	溝	上層	5.0	1.7	1.0	28.2	鋳造鉄斧を再利用か	7-29
24	21	鉄鑿		84-2	溝	中層	5.0	1.3	0.7	16.5	柱状片刃石斧に似ている	9-72
24	22	不明棒状鉄片		84-2	溝	上層	4.8	0.7	0.2～0.3	2.3		7-28
24	23	不明鉄片		84-2	溝	上層	4.9	1.7	0.3	5.6		9-73
24	24	刀子？		84-2	溝	上層	6.6	2.1	0.9	19.5	未製品か	6-11
24	25	刀子	切先	84-2	溝	中層	2.8	1.3	0.9	8.8		8-51
24	26	刀子？	切先？	84-2	溝	上層	3.3	1.0	0.2～0.4	4.6		8-40
24	27	手鎌	差込部	84-2	溝	上層	1.3	2.4	0.3～0.6	4.0		8-38
24	28	手鎌	一部欠く	84-2	溝	中層	6.2	2.8	0.3	16.0		6-12
24	29	不明鉄片		84-2	溝	中層	8.0	3.5	0.9	51.4	錆のため断面が割れている	6-13
25	30	不明鉄片		84-2	溝	上層	2.0	1.3	0.5	3.1		9-75
25	31	不明鉄片		84-2	溝	中層	2.3	1.8	0.5	7.5	三角形鉄片か	8-48
25	32	不明鉄片		84-2	溝	上層	3.3	1.4	0.6	5.6		7-21
25	33	不明鉄片		84-2	溝	上層	4.1	1.4	0.4	4.5	先端がねじれている	7-18
25	34	不明鉄片		84-2	溝	上層	5.2	1.9	0.6	16.5	上端の片側は刃部か	5-1
25	35	鉄鏃？	茎部を欠く	84-2	溝	上層	4.3	1.6	0.5	5.8	ねじれている	5-4
25	36	不明棒状鉄片		84-2	溝	上層	4.6	1.4	0.6	7.7		7-31
25	37	不明鉄片		84-2	溝	上層	3.0	2.0	0.5	8.0	錆がひどい	8-44
25	38	不明鉄片		84-2	溝	上層	3.3	2.2	0.5	9.8	厚さ均一	8-43
25	39	不明鉄片		84-2	溝	中層	2.7	2.6	0.5	14.2	厚さ均一	7-36
25	40	不明鉄片		84-2	溝	上層	5.1	1.2	4.2	10.5	厚さ均一	5-2
25	41	不明鉄塊		84-2	溝	一括	1.5	1.0	0.4	2.1		9-62
25	42	不明鉄塊		84-2	溝	中層	1.8	1.6	1.0	6.7	赤色顔料付着	9-70
25	43	不明鉄塊		84-2	溝	上層	1.8	1.6	0.8	5.3		8-46

表－4　鉄器計測値一覧表　　その2

図	No.	器種名	残存状態	番地	出土遺構	土層	長さ	幅	厚さ	重さ	そ の 他	実測図No.
25	44	不明鉄塊		84-2	溝	上層	2.6	2.2	1.0	12.2		7-32
25	45	不明鉄塊		84-2	溝	一括	2.4	1.2	1.0	4.9		9-59
25	46	不明鉄塊		84-2	溝	上層	2.5	1.2	0.2～0.5	2.9		7-33
25	47	不明鉄片		84-2	溝	上層	2.1	1.6	0.4～0.7	4.0	刀子の切先か	9-69
25	48	不明鉄塊		84-2	溝	中層	2.8	2.6	1.3	15.5		8-50
25	49	不明鉄塊		84-2	溝	上層	2.5	2.2	1.2	18.0		9-77
25	50	不明鉄片		84-2	溝	中層	3.4	2.3	1.2	13.5		9-71
25	51	不明棒状鉄片		84-2	溝	上層	2.2	0.9	0.6	2.4		8-41
25	52	不明鉄片		84-2	溝	上層	2.8	0.9	0.9	5.2		6-16
25	53	不明棒状鉄片		84-2	溝	上層	2.4	1.1	0.6	4.2		8-45
25	54	不明鉄塊		84-2	溝	上層	3.8	1.3～2.5	1.2	18.1		5-5
25	55	不明鉄片		84-2	溝	上層	4.1	1.3	0.6	5.5		7-35
25	56	不明鉄片		84-2	溝	一括	1.9	1.2	0.1	0.6	鏃の鋒部か	9-61
25	57	不明鉄片		84-2	溝	上層	1.8	1.3	0.4	2.5		9-76
25	58	不明鉄片		84-2	溝	上層	2.7	2.0	0.3	4.2		7-17
25	59	不明鉄片		84-2	溝	上層	2.2	1.8	0.2	2.9	厚さ均一	7-34
25	60	刀子	茎部	84-2	溝	一括	2.2	0.9	0.3	1.8		9-60
25	61	不明鉄片		84-2	溝	一括	2.2	1.6	0.2	1.9		9-57
25	62	不明鉄片		84-2	溝	上層	3.3	1.7～2.5	0.3	7.1		5-3
25	63	不明鉄片		84-2	溝	上層	4.2	1.2	0.3	4.0		7-20
25	64	不明鉄片		84-2	溝	中層	5.0	2.4	0.4	8.0	三角形鉄片	6-14
25	65	不明鉄片		84-2	溝	一括	3.0	1.3	0.3	3.1	ねじれている	9-58
25	66	不明鉄片		84-2	溝	上層	3.8	1.5	0.4	5.0		9-74
25	67	不明鉄片		84-2	溝	上層	4.6	4.2	0.3	11.0	木片が付着	7-27
25	68	不明鉄片	一部	84-2	溝	上層	3.6	2.8	0.2	4.4	鎌の一部か	8-42
27	1	不明鉄片		84-2	中央北		3.4	2.0	0.3	4.4	三角形鉄片	10-5
27	2	不明棒状鉄片		84-2	南東		12.0	0.9	0.5	15.7		12-9
27	3	不明鉄片		84-2	中央南		3.8	3.0	0.8	27.9	厚さ均一	11-7
27	4	不明鉄片		84-2	南東		6.0	2.9	0.6	31.8	厚さ均一	12-5
27	5	不明鉄片		84-2	中央南		5.7	4.0	0.6	44.6	厚さ均一	11-4
27	6	不明鉄片		84-2	中央北		2.7	0.6	0.3	0.9		10-7
27	7	不明棒状鉄片		84-2	中央南		3.0	0.5	0.2	1.2	断面は楕円形	11-6
27	8	不明棒状鉄片		84-2	中央南		4.7	1.0	0.6	10.0		11-3
27	9	不明鉄塊		84-2	中央南		2.1	1.7	1.0	5.1		11-5
27	10	不明鉄塊		84-2	中央北		4.4	1.8	1.0	15.8		10-3
27	11	不明鉄塊		84-2	中央北		3.6	2.7	1.0	23.4		10-4
27	12	不明鉄塊		84-2	中央南		2.7	1.6	1.1	9.8	鏃の未製品	11-8
27	13	刀子片	基部	84-2	南東		4.0	1.3	0.6	5.1		12-6
27	14	不明鉄片		84-2	中央北		3.0	1.4	0.3	6.1	L字形を呈する	10-6
27	15	不明鉄片		84-2	南東		3.8	1.7	0.3	4.9	三角形鉄片	12-8
27	16	不明鉄片		84-2	南東		4.8	2.0	0.2～0.8	9.0		12-4
27	17	不明鉄片		84-2	中央北		4.7	1.7	0.3	8.3	鏃鋒部か	10-8
27	18	刀子	半欠	84-2	中央北		4.3	1.7	0.4	6.1		10-2
27	19	鉄斧？		84-2	中央北		4.4	1.7	0.7	7.1	片刃鉄斧か	10-1
27	20	鉄斧？	完形	84-2	中央南		4.2	3.3	0.7	31.8	扁平片刃鉄斧か	11-1
27	21	不明鉄片		84-2	南東		5.2	3.5	0.6	31.2	扁平片刃鉄斧の未製品か	12-7
27	22	不明鉄片		84-2	南東		5.5	3.0	0.3～0.6	21.3	厚さ均一	12-2
27	23	鍬先？	完形	84-2	中央南		3.5	8.7	1.0	101.4		11-2
27	24	手鎌	完形	84-2	南東		7.0	2.5	0.2	12.6		12-3
27	25	袋状鉄斧	完形	84-2	南東		10.8	4.6	0.3～0.8	150.8		12-1
83	1	鉄鏃	茎部	119	5号土坑		2.5	0.3	0.3	1.6		1-5
83	2	不明鉄片		119	一括		2.9	1.0	0.5	1.7		2-15
83	3	鉄鏃	完形	119	一括		3.7	1.0	0.3	0.8		2-22
83	4	鉄鏃	鋒部	119	一括		2.6	1.2	0.7	4.4		2-17
83	5	鉄鏃	完形	119	一括		4.5	1.2	0.3	3.5		1-10
83	6	鉄鏃	完形	119	一括		6.6	1.4	0.2～0.4	3.7		2-16
83	7	鉄鏃	完形	119	一括		4.6	1.7	0.3	5.0		1-1
83	8	鉄鏃	ほぼ完形	119	14号住		6.2	1.8	0.6	9.1		1-8
83	9	鉄鏃	ほぼ完形	119	一括		5.0	1.9	0.5	8.2	銹がひどい	1-7
83	10	鉄鏃	完形	119	一括		5.2	1.5	0.3	6.9	木片が付着	1-9
83	11	鉄鏃	完形	119	一括		4.9	1.6	0.5	6.4		2-18

表－4　鉄器計測値一覧表　　その3

図	No.	器種名	残存状態	番地	出土遺構	土層	長さ	幅	厚さ	重さ	そ の 他	実測図No.
83	12	鉄鏃	先端を欠く	119	一括		4.4	1.9	0.4	6.5		2-21
83	13	鉄鏃	先端を欠く	119	7号住		4.0	2.6	0.3	7.2	無茎鏃	1-3
83	14	鎌	完形	119	10号住内土坑		18.5	3.0～4.5	0.4	94.1	石斧のような鍔が付着	1-6
83	15	刀子？	切先？	119	一括		3.9	2.0	0.5	7.7		2-14
83	16	不明鉄片		119	一括		2.9	2.2	0.2	4.1	手鎌片か	2-11
83	17	不明鉄片		119	一括		4.5	1.0	0.4	5.0		2-20
83	18	不明棒状鉄片		119	一括		10.2	0.5	0.5	7.8		2-13
83	19	鉇	完形	119	一括		10.0	0.9	0.3	7.9	木片が付着	2-12
83	20	手鎌	半欠	119	13号住内土坑		2.5	4.1	0.2	5.7		1-4
83	21	手鎌	半欠	119	一括		2.9	5.5	0.3	14.9	鋤先か	1-2
83	22	刀子	ほぼ完形	119	一括		8.0	1.3	0.4	8.5		2-19
258	1	不明棒状鉄片		136	第3 Tr.		7.1	0.7	0.4	5.0	下端の割れは新しい	13-3
258	2	不明鉄器		136	第1 tr		6.0	2.6	0.4	15.3	鉇の一部か	13-2
258	3	袋状鉄斧	ほぼ完形	136	第1 Tr.		11.4	5.5	0.4～1.0	210.3		13-1
258	1	鉄鏃	完形	141	1号住		4.7	1.3	0.4	6.3	方頭斧箭形式	13-4
258	2	不明鉄片		141	西区		3.7	1.6	0.4	3.5		13-5
258	1	刀子	完形	267	第2 tr		17.5	1.7	0.2	21.5		14-1
258	2	不明鉄片		267	第2 tr		4.3	0.9	0.2	2.7		14-3
258	3	鉄鏃	ほぼ完形	267	第2 tr		4.3	1.5	0.3～0.5	6.0		14-2
258	4	鉄鏃	完形	267	第2 tr		5.0	1.4	0.4	4.6		14-4
258	1	鉄鏃	完形	268	東西第5 tr		3.2	2.2	0.2	2.7	無茎鏃木片付着	14-8
258	2	鉄鏃	完形	268	東西tr		4.8	1.9	0.3	5.4		14-7
258	3	鉄鏃	完形	268	南北第5 tr		5.0	1.0	0.3	2.9		14-5
258	4	不明棒状鉄片		268	南北第5 tr		9.0	0.3	0.3	3.0		14-6
258	1	針状鉄器	一部	138	東区大溝		4.4	0.2	0.2	0.5		15-2
258	2	不明棒状鉄片		138	南北tr		4.8	0.4～0.5	0.4～0.5	3.1	断面形が円形	15-7
258	3	鉄鏃	完形	138	東西1 tr		3.6	1.5	0.3	3.4		15-8
258	4	鉄鏃	半欠	138	南北tr		2.7	1.7	0.2	2.2	無形鏃	15-9
258	5	鉄鏃	ほぼ完形	138	南北tr		5.8	2.6	0.4	9.9		15-6
258	6	鉄鏃	完形	138	東区大溝		6.8	1.6	0.3	6.5		15-3
258	7	鉄刀	完形	138	南北tr		12.7	1.8	0.4	26.1	背がある	15-5
258	8	釘	ほぼ完形	138	第1 tr		11.2	0.9	0.7	32.5	先端を欠く	15-11
258	9	手鎌？	一部	138	東区大溝		5.0	1.0	0.3	4.4	刃部を持つ	15-1
258	10	手鎌	半欠	138	中央区大溝		5.1	2.0	0.3	8.7	刃は磨り減っている	15-4
258	11	不明鉄片		138	南北tr		4.1	1.7	0.2	3.1	三角形鉄片	15-10
329	1	鉄鏃	完形	813	中央区		11.3	2.3	0.2	14.7	鋒部が曲がっている	16-1
329	2	鉄鏃	完形	813	中央区		10.6	1.9	0.2～0.4	10.8	茎部がねじれている	16-2
329	3	鉄鏃	完形	813	中央区		7.2	1.5	0.3	7.4	茎部が折れ曲っている	16-3
329	4	鉄鏃	完形	813	中央区		8.6	1.8	0.2	8.3	全体が曲がっている	16-4
	1	釘	半欠	814	第2 tr東区ピット		6.8	0.7	0.5	14.1		16-6
	2	不明鉄片		814	第3 tr西区焼土		5.3	0.6	0.3	2.8	鏃の茎部か	16-5
	3	不明鉄片		814	第1 tr 1号溝		4.6	0.6	0.3	2.5	先端は鋭利	16-7
329	1	刀子	完形	816	東区		7.2	0.8	0.3	8.7		16-8
340	1	鉄鑿？	ほぼ完形	831	1号溝		8.9	1.1～1.6	0.3～0.6	23.4	刃部はない	17-1
340	2	鉇？	完形	831	2号溝		7.4	1.3	0.2	6.8	木片が付着	17-2
340	3	不明鉄器	ほぼ完形	831	一括		6.5	1.1	0.2～0.8	18.0	ヘラ状になる	17-3
422	1	釘？	半欠	209	4区一括		2.0	0.5	0.4	1.6		17-7
422	2	鉇	鋒部	209	4区一括		3.0	0.9	0.3	1.8		17-8
422	3	不明棒状鉄片		209	4区一括		2.4	1.0	0.7	2.9		17-10
422	4	鉄鏃	完形	209	1区3層		6.5	1.9	0.6	9.3	刀子の可能性もある	18-3
422	5	刀子？	半欠	209	3号溝	最下層	3.6	0.9	0.8	3.2	未製品か	17-6
422	6	刀子	茎部	209	4区一括		6.1	1.0	0.3	6.2		18-2
422	7	釣針	ほぼ完形	209	一括		3.1	1.2	0.3	1.0		17-5
422	8	刀子	完形	209	4区一括		14.4	1.1	0.6	18.2	刃幅が狭い	18-1
422	9	不明鉄片		209	3区一括		3.1	2.8	0.1	2.6	木片が付着	17-9
422	10	不明棒状鉄片		209	一括		6.0	0.8	0.4～0.6	10.0	断面は円形と楕円形	17-4
422	10	袋状鉄斧	ほぼ完形	209	1区3層		4.7	2.8	0.3～0.5	18.5	端部が折り曲げてある	18-4
422	11	鉄剣？	半欠	196-1	3区一括		8.7	2.0	0.3	15.6	折られている	18-6
422	12	鉄滓		209	3区一括		9.6	7.5	2.2	210.6		18-5



第85図　131番地　東西・南北トレンチ

第５章　平成９年度の調査

第１節　131番地の調査（第85図）

１．東西トレンチ

国土座標Ｘ＝－588.25・Ｙ＝－26,034.72、
Ｘ＝－590.25・Ｙ＝－26,035.00、
Ｘ＝－605.75・Ｙ＝－25,972.75、
Ｘ＝－608.50・Ｙ＝－25,972.70

南北トレンチ

国土座標Ｘ＝－601.00・Ｙ＝－25,975.50、
Ｘ＝－601.25・Ｙ＝－25,948.63、
Ｘ＝－605.25・Ｙ＝－25,976.88、
Ｘ＝－605.75・Ｙ＝－25,975.00

出土文化財管理センター南に位置する畑で、地権者からの希望で調査の対象とし、畑の長軸に合わせて長さ65m、幅２mのトレンチを設定し、131東西トレンチとした。

その後東西トレンチの東端で、新たに溝が検出されたためトレンチ西端から60～62mの間を北側に５m拡張し131トレンチ南北拡張部とした。

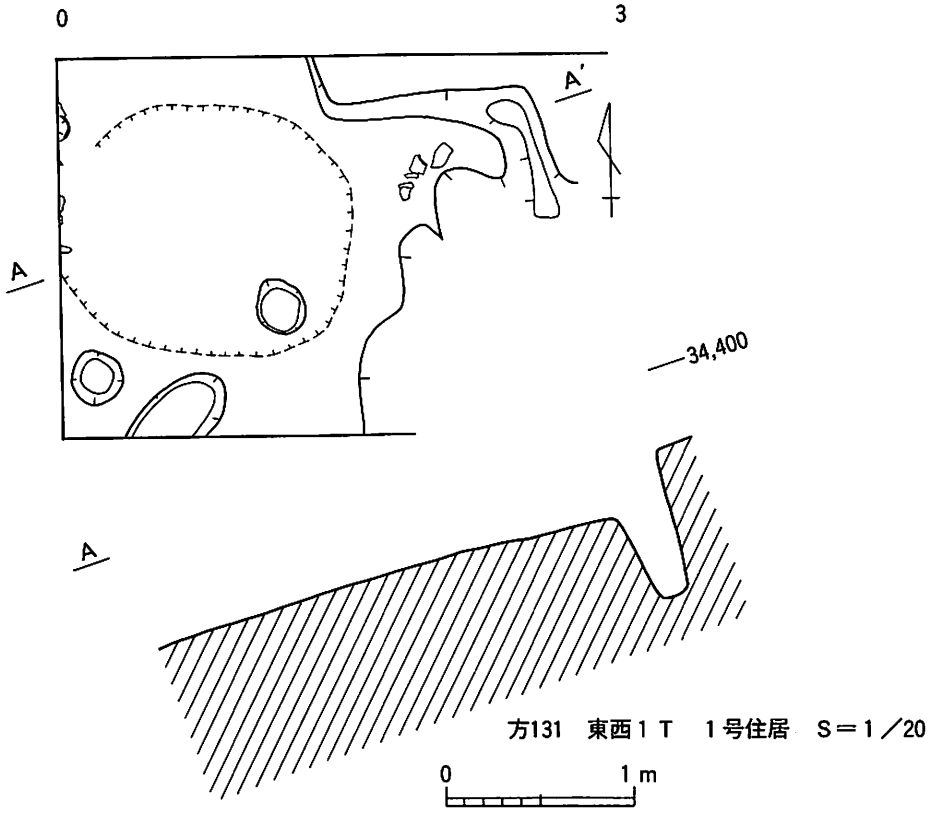
131東西トレンチでは出土文化財管理センターで発見された大溝など南北に伸びる２本の溝の行方を確認する事を目的とした。

調査の結果住居跡５軒、溝状遺構３本、道路状遺構２本、土坑２基を検出したが、溝状遺構３本の内、２本は溝上面における土器の散乱が著しく、県文化課より「時間と経費を取られ過ぎる」との指摘もあり、明確な輪郭を押さえることなく遺物も残したまま、調査を打ち切った。従って、２本の溝がどの様になっていたのか131番地での状況は明確にはならなかった。

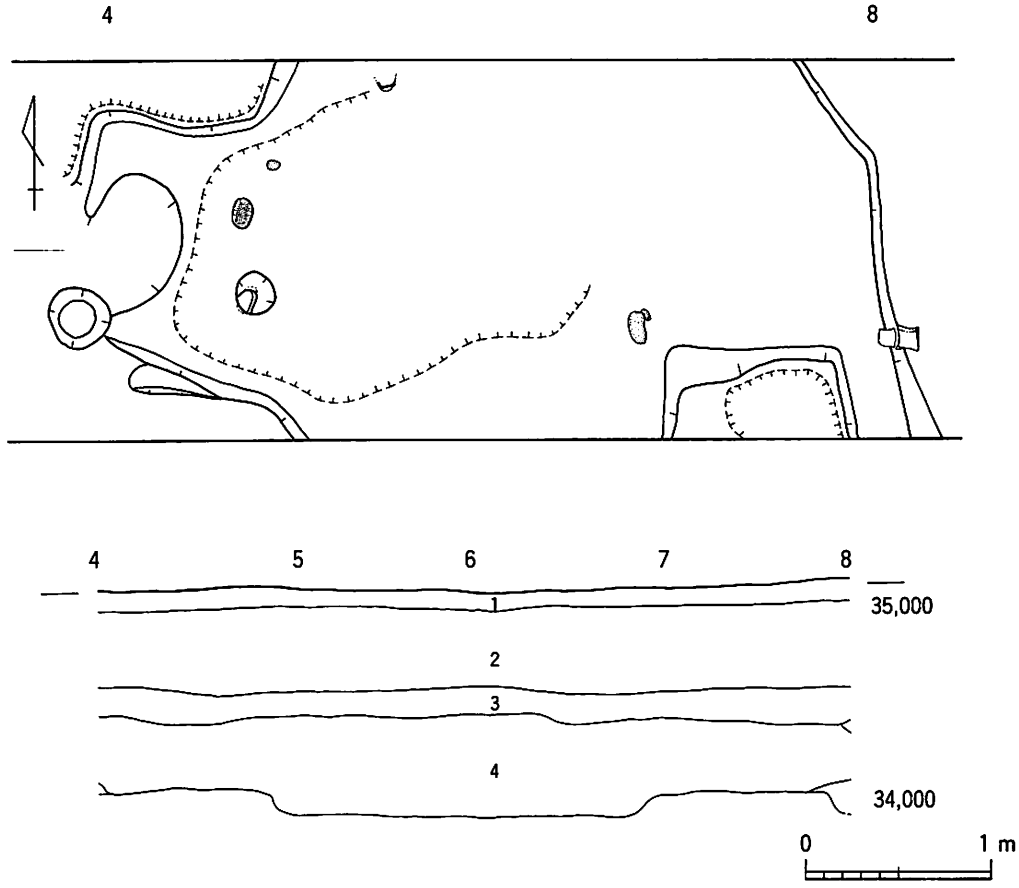
（１）　１号住居跡（第86図）

東西トレンチ西端で確認された１号土坑から東壁を切られていたが、東壁の一部を確認したのみで他の壁はトレンチの外に広がっていた。床は標高33.85mで、硬化面が１m×1.5mの広がりで検出された状況から住居と判断した。

壁は北東コーナーの一部と北側に拡張した北壁の一



第86図　東西トレンチ　１号住居跡実測図



第87図　131番地　2号住居跡実測図

部が検出され、高さは28～17cmが検出された。

東壁に沿って土器片が数点出土したが、実測に耐えうるものでなかったので図化しなかった。

（2）　2号住居跡（第87図）

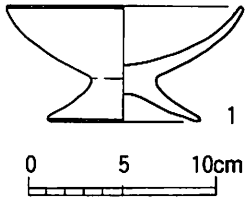
1号住居跡の西に位置し、1号土坑から西壁を切られていた。東壁も3号住居跡に切られており、北西コーナーの一部と西壁の一部が確認されただけであった。床は標高33.81mで硬化面の2m×1.2mの広がりを検出し住居と判断した。

なおこの住居の東端に明らかに高さの違う硬化面を確認したが、同一レベルで壁等は確認できなかった。また北西コーナーの壁の外にも硬化面を確認したが、これも住居跡としては確認できなかった。

遺物の出土が少なく、僅かに1点図化できた。

遺　物（第88図）

1は古式土師の脚付き鉢でほぼ完全な形であった。



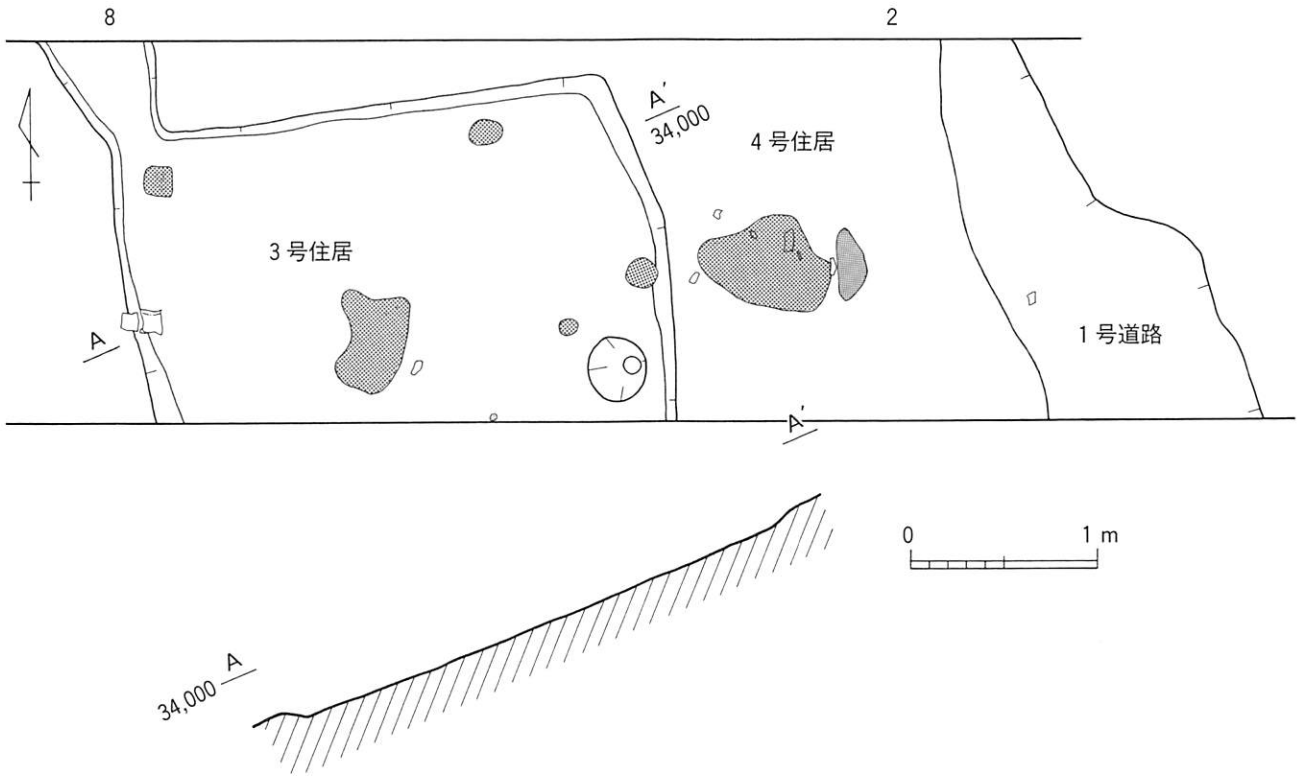
第88図　2号住居跡出土遺物実測図

（3）　3号住居跡（第89図）

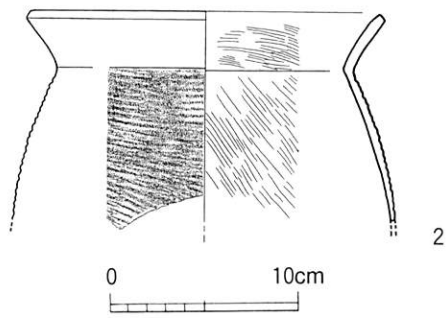
2号住居跡の西に位置し、2号住居跡と4号住居跡を切っていた。北の壁は長さ2.3mで、一部北側に張り出すようになっていた。東西の壁は約2m確認したが、南壁はトレンチの外に広がっていた。床面は標高33.62mで中央部と壁に沿って焼土が広がっていた。

遺　物（第90図）

西壁に沿って僅かに土器が出土したが、床面から浮いた状態であった。従って住居廃棄の時間を示したものと理解すべきである。



第89図　131番地　3・4号住居跡実測図



第90図　3号住居跡出土遺物実測図

2（P－66）は在地系甕である。胴部中位から下を欠いており、表面は頸部直下から明瞭にタタキ目を残しており、他の例から判断して底部は丸底の可能性が高い。

（4）　4号住居跡（第89図）

3号住居跡の西に位置し、西壁は3号住居跡に切られ、東壁は道路状遺構と溝状遺構の下に当たるため確認できなかった。南北壁はトレンチの外に存在するものと思われた。

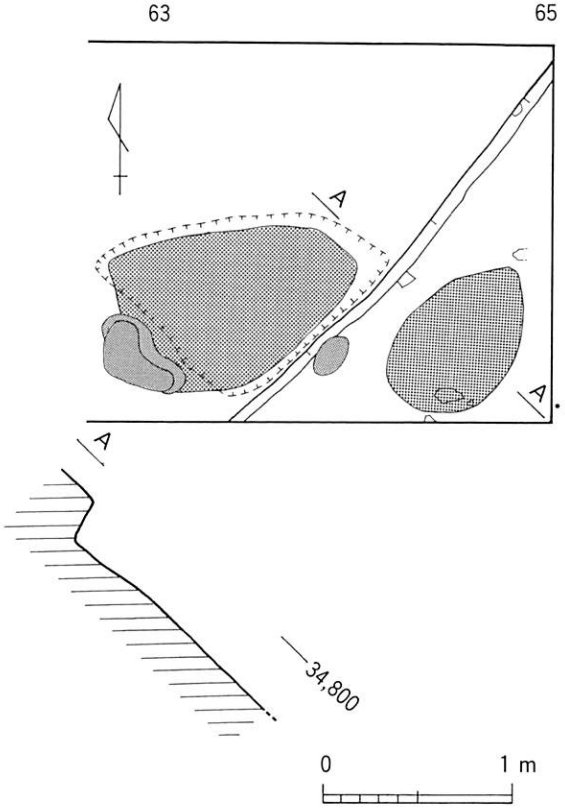
床面は標高33.66mで焼土が3号住居跡の横に広がっており、その中に土器の破片が数点含まれていた。

（5）　5号住居跡（第91図）

東西トレンチ東端で確認され、北壁の一部を長さ2.5m確認したのみで、他の壁はトレンチの外に広がっていた。

この住居跡は3号溝が埋没した後に築かれており、床は標高34.42mで他の住居跡より高い位置に残っていた。床面には焼土と炭化物の塊がそれぞれ検出された。

北壁の外側において（溝埋没後の上面部分）硬化面が広がっていた。



第91図　131番地　東西Ｔ　５号住居跡実測図

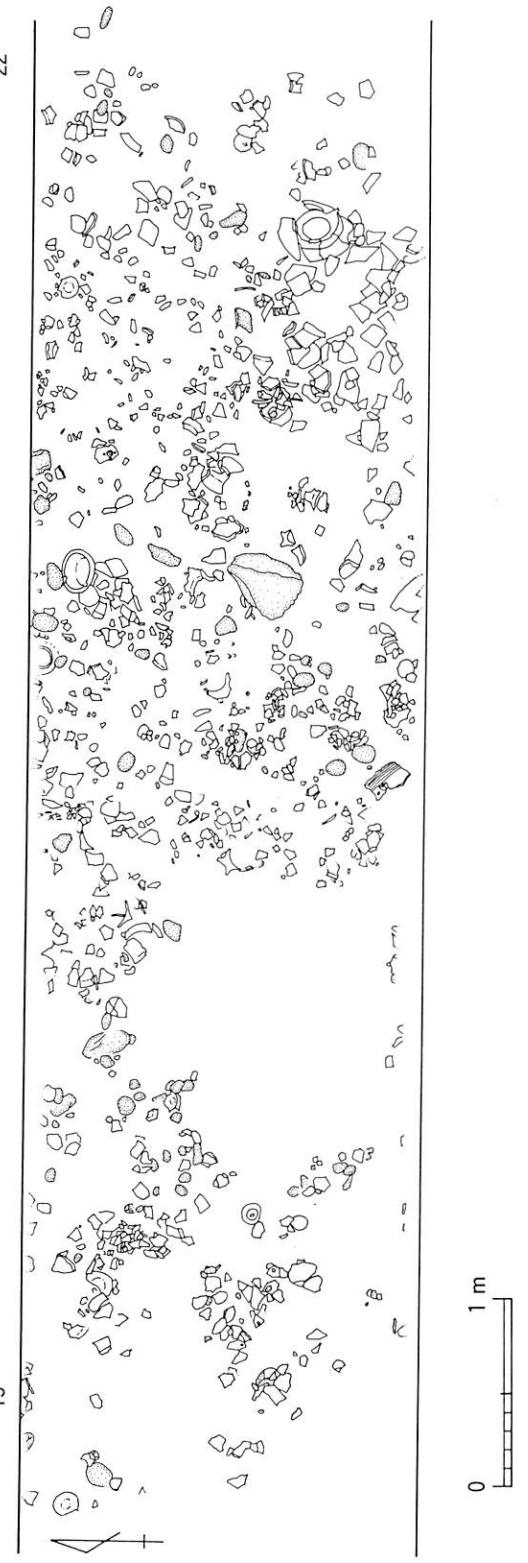
（６）　１号溝（第92図）

東西トレンチの中で西から15m地点から22m地点までの間で夥しい土器片が出土した。西側は１号道路が上に載っていたため、溝の肩を確認できなかった。東側も２号溝との境が不明確で肩の確認には至らなかった。

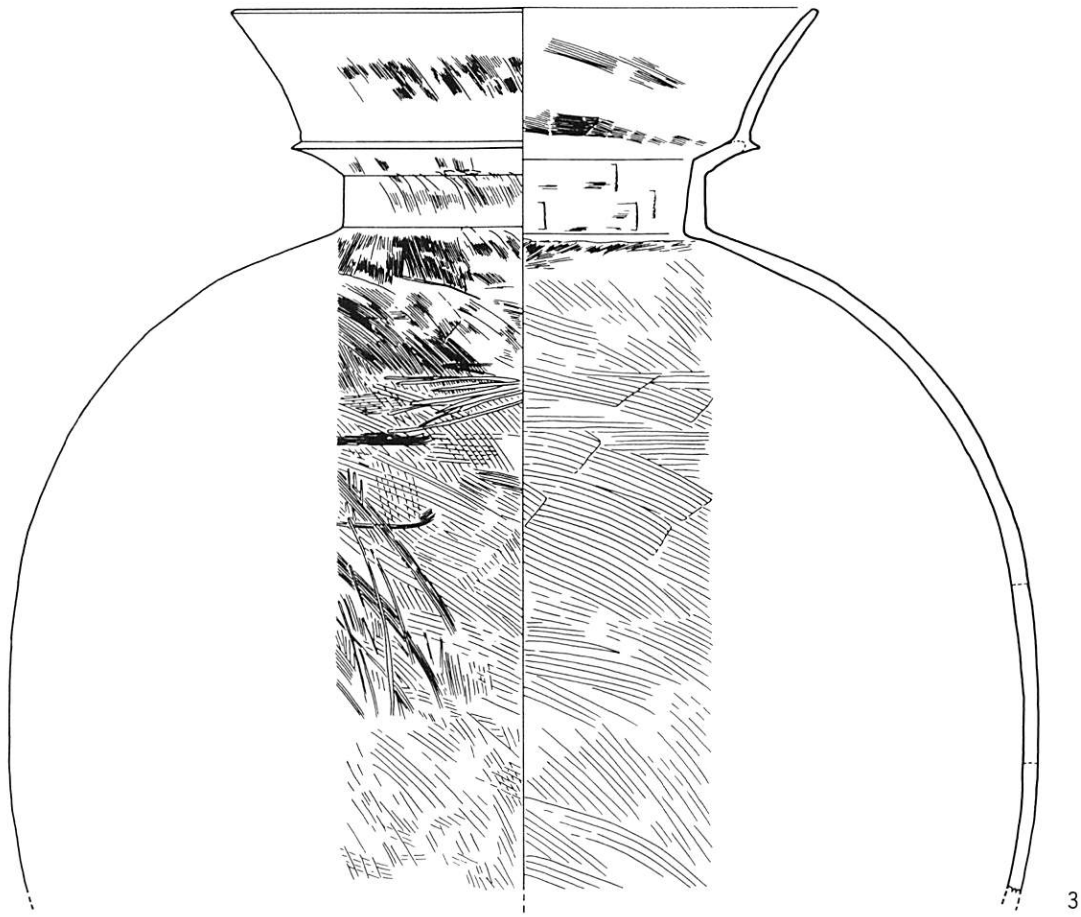
しかし、遺物の出土には目を見張るものがあり、出土文化財管理センターの建設に伴う発掘調査を実施した際検出された大溝の遺物出土状況と同じであり、位置的にも南に僅か40mの距離であることから溝と判断した。

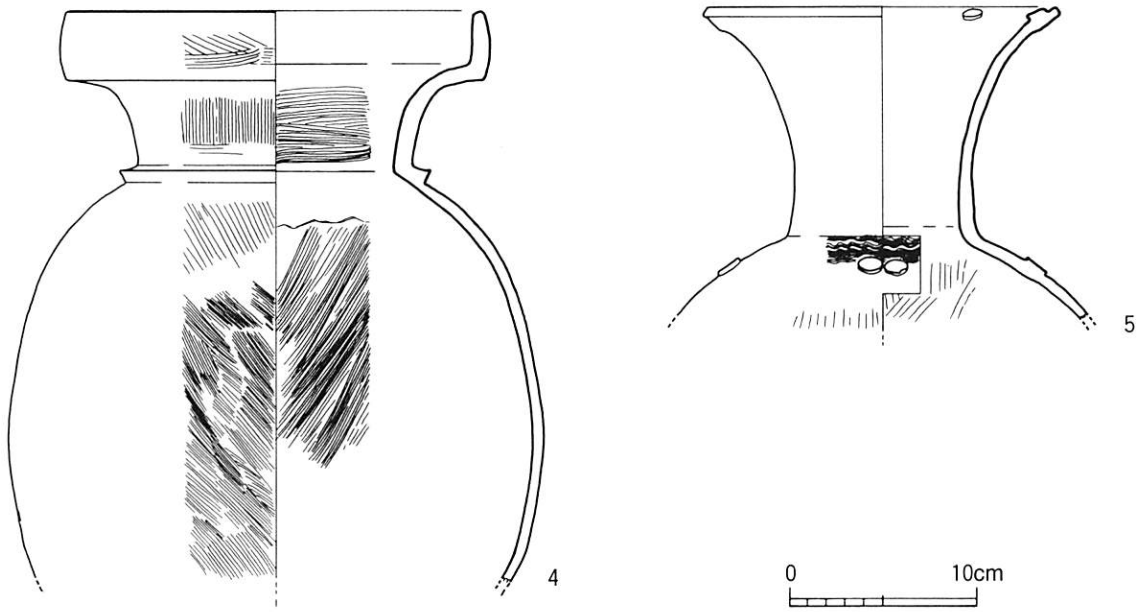
なお、夥しい量の遺物は出土状況の記録を作成したのみで一部の土器を取り上げ、将来整備事業を行なうとき遺構の露出展示に生かせると考え大半はそのまま埋め戻した。

遺　物（第93～95図）

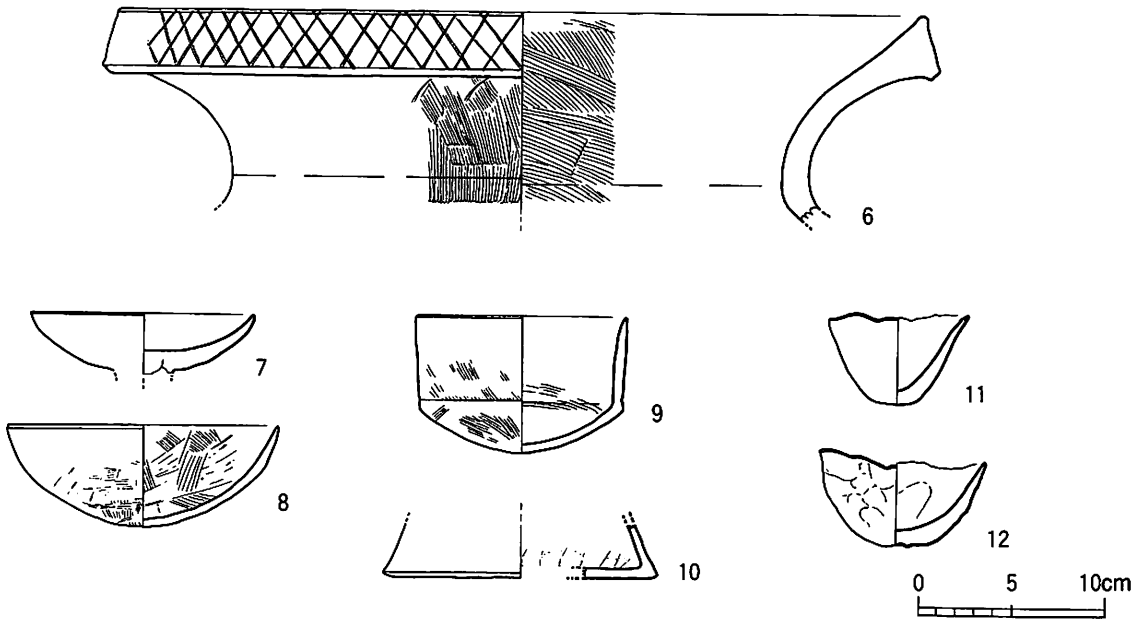


第92図　131番地　東西Ｔ　１号溝実測図





第93図　1号溝出土遺物実測図



第94図　1号溝出土遺物実測図

3（P－58と17・18・19・20・22・23・68）は畿内系の大形壺である。口縁部は複合で頸部との接合面が丁寧に仕上げている。口径30.8cmで胴部の張りが大きく球形になっており最大径54.7cmは中位に配し、焼成、胎土も極めて良い。底部は欠いているが恐らく溝の中に残っているものと思われる。

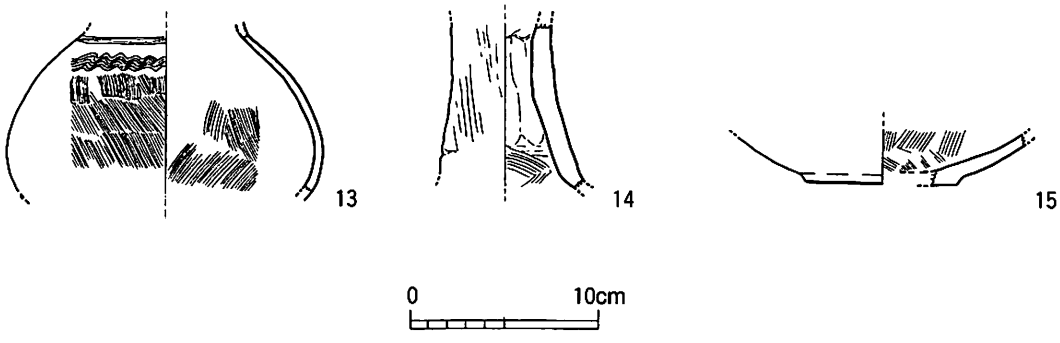
4（P－62）も壺であるが底部を欠いている。口縁部は複合口縁で頸部に三角凸帯を巡らしている。胴部の張りは少なく最大径を中位に配し28cmを測る。5（P－63）は肩から下を欠く壺である。頸部から口縁部にかけて反り気味に立ち上がり、口唇部内面に円形貼文を配している。頸部には櫛描波状文を巡らし、直下の肩部には2個の円形貼付文を3箇所に配していた。6（P－60・1）も大型壺である。口縁部のみであるが頸部から大きく開き口径43cmと極めて大きい。口唇部は三角形で外側には斜格子状の刻目を施している。

7（P－56）は小形の台付き鉢で脚部を欠いている。口径11.6cmで鉢部は浅い。

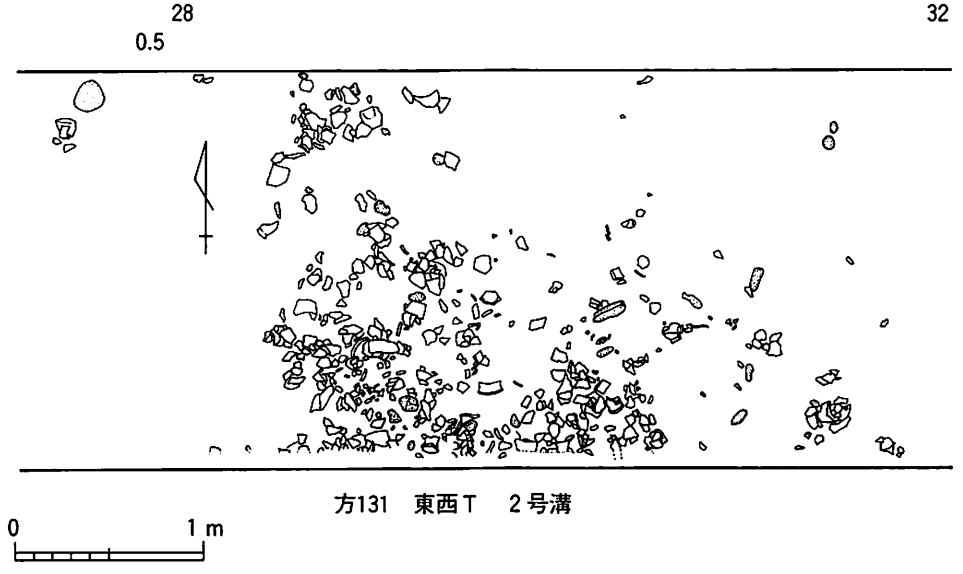
8（P－59）は鉢である。口径14.2cm、器高5.4cmで底は僅かに平坦部を有している。9（P－55）も鉢であるが、口縁部は直立し口径11.1cmで、胴部は浅く丸底になっている。器高は7.3cmであった。

10（P－65）はジョッキ形土器の底部である。底部径は16.6cmで口径、器高等不明。11（P－57）・12（西区上層一括）は手捏土器である。

13（西区上層一括）は肩から胴部下位にかけての壺である。頸部には櫛描の横線文と波状文を描いている。胴部下位に最大径を配し17.9cmを測る。14（西区上層一括）は在地の器台で口縁部と底部を欠くため規模は不明であった。15（西区上層一括）は鉢の底部である。



第95図　1号溝出土遺物実測図



第96図　2号溝　実測図

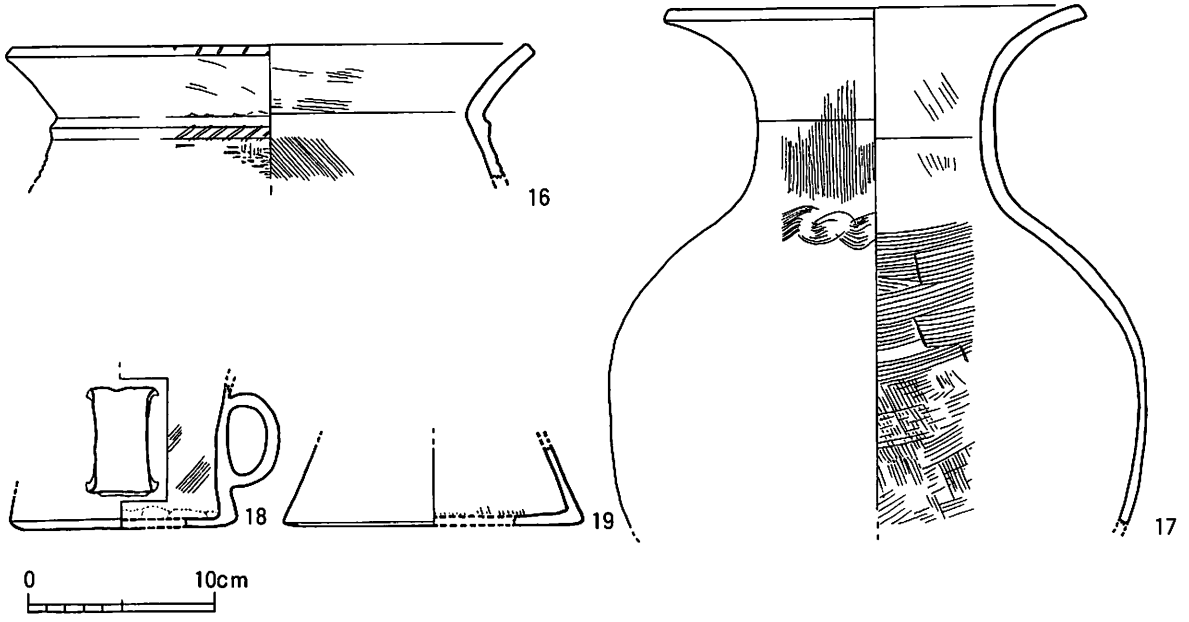
（7）　2号溝（第96図）

1号溝と同様に東西トレンチの中で西から28m地点から31m地点までの間で夥しい土器片が出土した。西側は1号溝との間で4～5mに亘って遺物の出土が極めて少ない広がりが存在していたが、明確な溝の肩を確認できなかった。東側も遺物の出土が極めて少ない広がりが見られたが溝の肩の確認には至らなかったが1号溝に比べると規模が小さく、2～3mの幅であろうと考えられた。

この溝も1号溝と同じく夥しい量の遺物は出土状況の記録を作成したのみで将来、整備事業を行なうとき遺構の露出展示に生かせると考えそのまま埋め戻した。

遺　物（第97図）

16（P－49）は口縁部から頸部にかけての在地系の甕である。口縁部は外反気味に「く」字に曲がり、口唇部には刻目を施し口径27cmを測る。頸部には三角凸帯を巡らし刻み目を配している。17（P－50・52・53・8）は底部を欠く壺である。口縁部が大きく開き肩部には櫛描き文による波状文を施している。18（P－48）、19（P－46）はジョッキ形土器で把手と底部を残している。



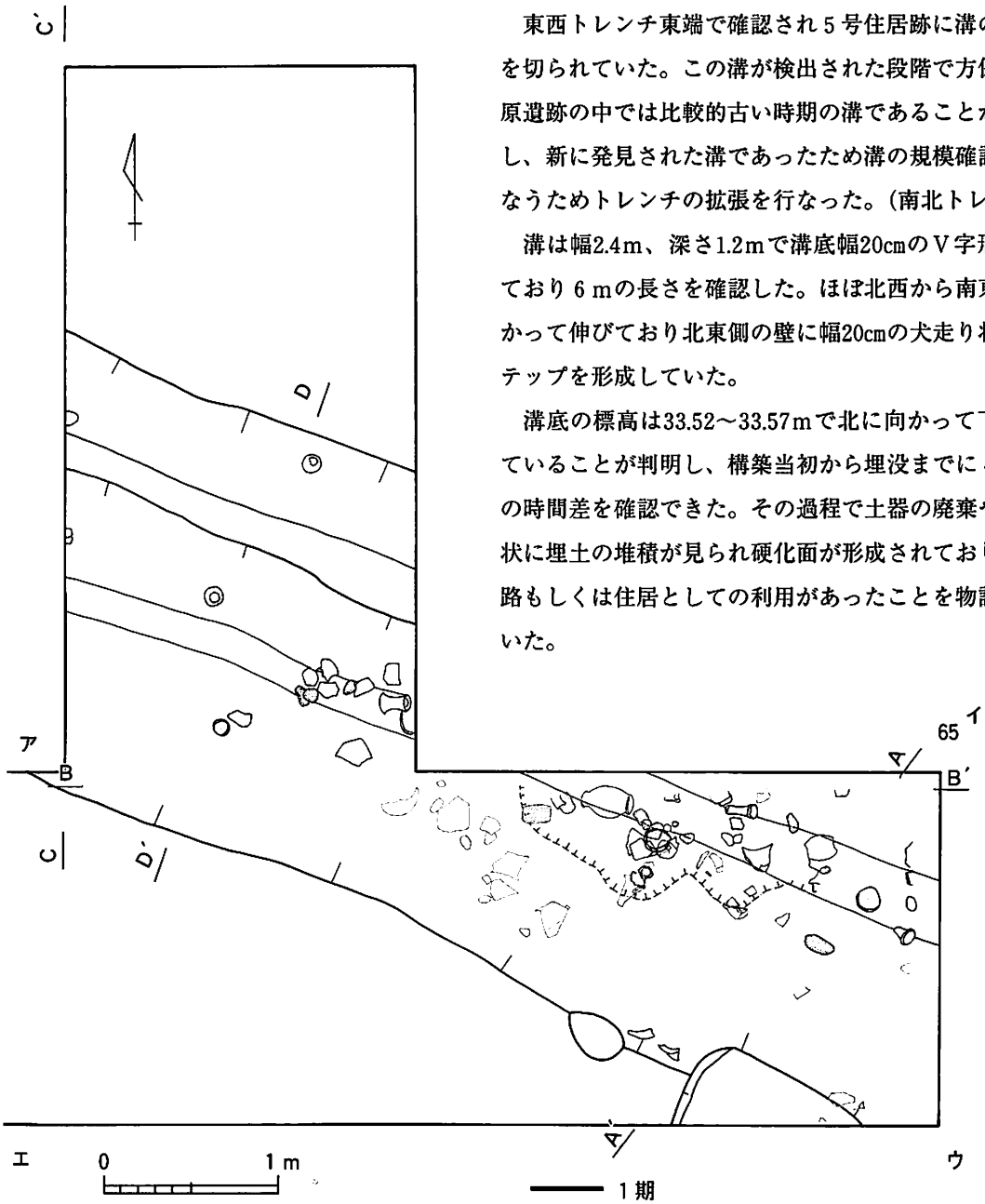
第97図　2号溝出土遺物実測図

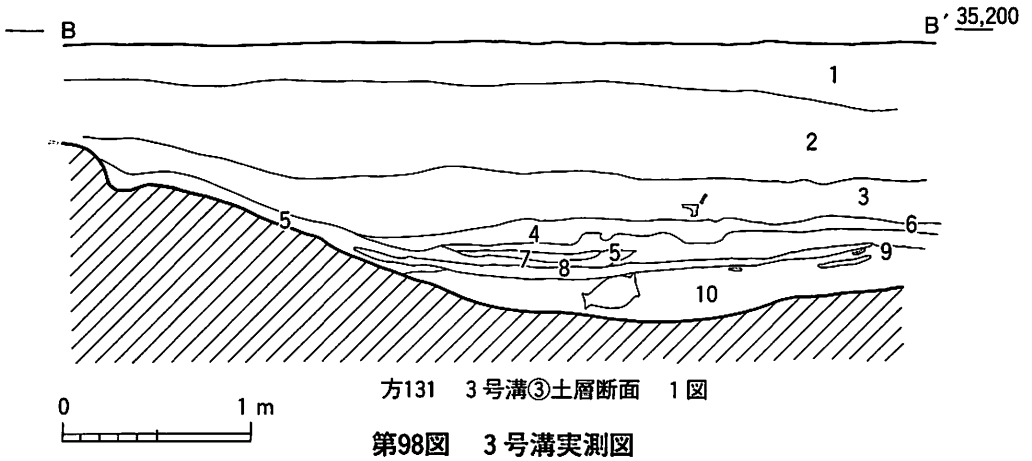
（8） 3号溝（第98・99図）

東西トレンチ東端で確認され5号住居跡に溝の上部を切られていた。この溝が検出された段階で方保田東原遺跡の中では比較的古い時期の溝であることが判明し、新に発見された溝であったため溝の規模確認を行なうためトレンチの拡張を行なった。（南北トレンチ）

溝は幅2.4m、深さ1.2mで溝底幅20cmのV字形をしており6mの長さを確認した。ほぼ北西から南東に向かって伸びており北東側の壁に幅20cmの犬走り状のステップを形成していた。

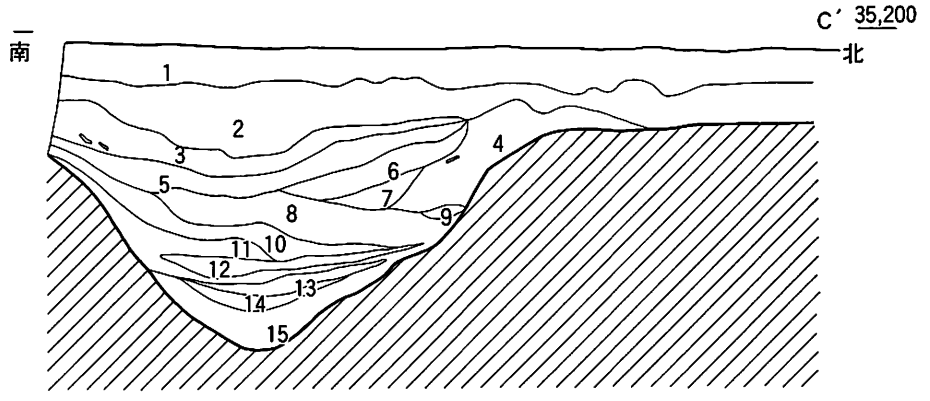
溝底の標高は33.52～33.57mで北に向かって下がっていることが判明し、構築当初から埋没までに4段階の時間差を確認できた。その過程で土器の廃棄や版築状に埋土の堆積が見られ硬化面が形成されており、道路もしくは住居としての利用があったことを物語っていた。



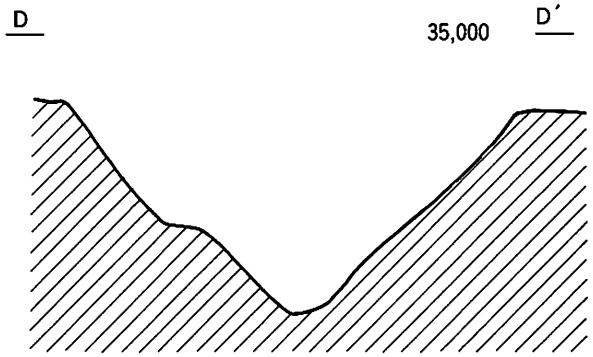


方131 3号溝③土層断面 1図

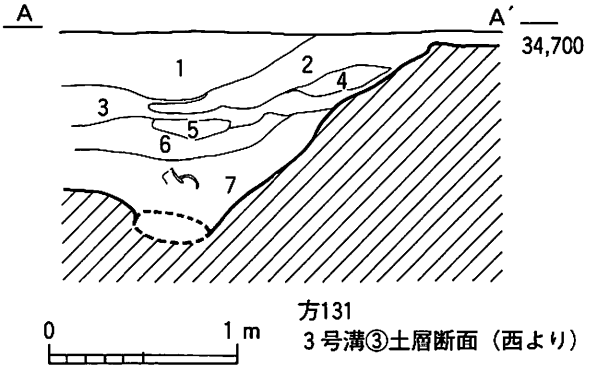
第98図 3号溝実測図



方131　南北１Ｔ西壁　３号溝④最下層
土層断面Ｃ～Ｃ′



方131　南北１Ｔ　３号溝④（断面）



方131
３号溝③土層断面（西より）

第99図　３号溝断面図

第１段階　溝構築直後の時期

溝の断面はＶ字形をなし、土器の出土も少なく転落した様なものであった。

第２段階　埋没初期段階

黒色の土が南西側から流れ込んでおり、多量の土器を廃棄していた。

第３段階　埋没段階での硬化面

黄色粘土層と黒色土層が版築状に堆積し、意識的に南西側から埋め戻した可能性が高い。さらに上面では硬化面を形成し、溝以外の機能を果たしている。

第４段階　埋没最終段階

黒色土堆積と伴に土器の廃棄も行なっていた。

遺　物（第100～101図）

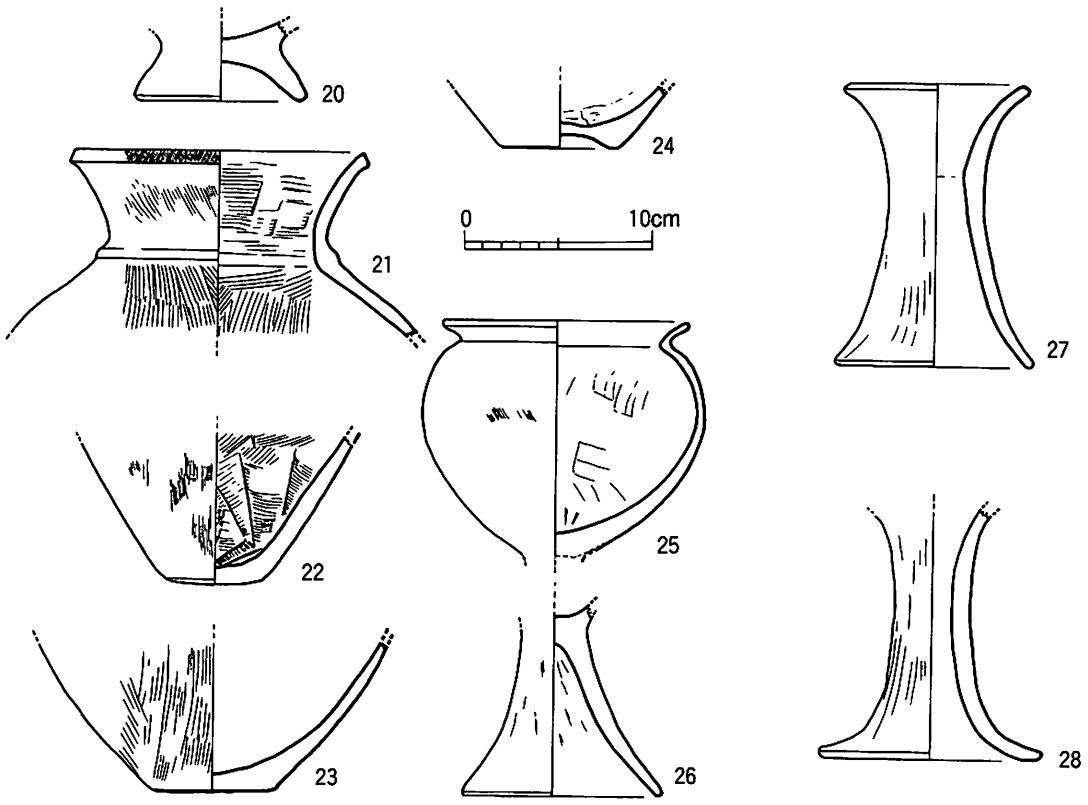
第１段階の遺物（20～28）

20（Ｐ－72）は在地系甕の脚部である。21（Ｐ－81）は胴部以下を欠く壺である。口縁部は外反しつつ開き口径15.4cmを測る。口唇部は平坦で刻み目を施している。頸部には三角形の貼付凸帯を巡らしているが稜線が緩やかである。器面は全面にハケ目で仕上げており底部は平底になる。

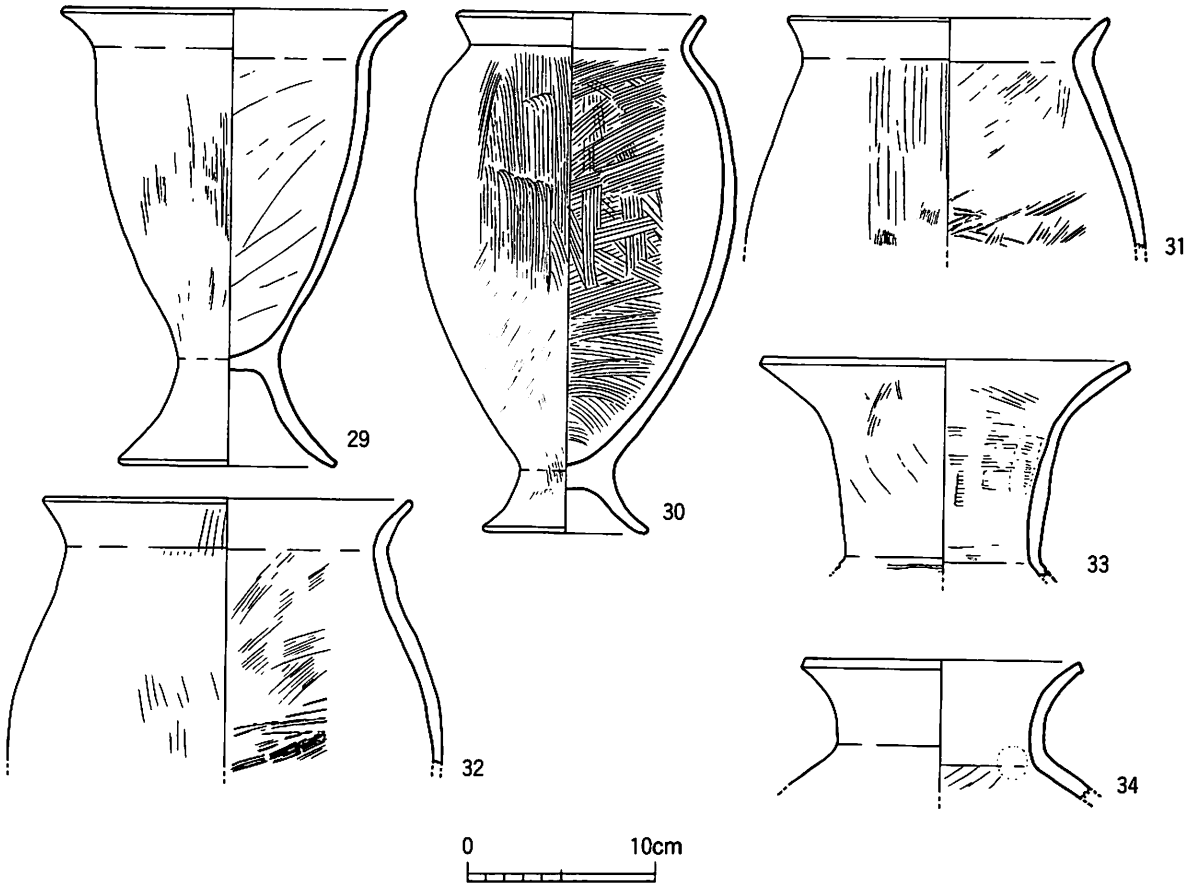
22（Ｐ－80）、23（Ｐ－21）は壺の底部である。23は平底であるが22は僅かに膨らみがある。

24（Ｐ－41）は鉢の底部である。25（Ｐ－40）は脚を欠く台付鉢である。口縁部は短く外反しつつ「く」字に折れ口径13cmを測る。頸部の稜線は明瞭で、肩が張った感じで最大径15cmを胴部上位に配している。かなりの火を受けていたため器面の剥離が著しい。

26（Ｐ－39）は高坏の脚である。多少歪んでいるが裾部径10.3cmである。27（Ｐ－79）は在地系の細身の器台である。くびれ部は中位より僅かに上に配していた。口径9.2cm、器高14.9cm、裾部径10.2cmであった。28（Ｐ－38）は在地系の細身の器台である。口縁部を



第１段階



第２段階

第100図　３号溝　出土遺物実測図

欠くため口径、器高は不明。

第２段階の遺物（29～34）

29（Ｐ－36）は在地系の小型の甕である。口縁部は外反しつつ開き口径18cmを測る。頸部は「Ｓ」字を呈し直線的な胴部へと続いている。胴部には最大径が見られず、口径が最大径となっていた。底部は脚台で器高24.1cmに対し脚台は４分の１の高さの5.8cmであった。器面は外面にハケ目、内面はヘラ削りを施している。

30（Ｐ－33）も在地系の甕でほぼ原形のまま出土した。口縁部は短いが外反しつつ「く」字に開き口径12.9cmを測る。頸部は緩やかに曲がり、胴部は肩が張ったように器高の３分の２の高さに最大径17.1cmを配していた。底部は低い脚台で、器高に対し９分の１の高さで裾部径8.5cmと小さい。器面は全面にハケ目とナデ調整を行いタタキ目は見られなかった。

31（Ｐ－34）も在地系の甕で胴部中位以下を欠いている。口縁部は短く外反しつつ開き口径17cmを測る。頸部は緩やかに曲がり、胴部中位以下に最大径を配している。他の甕に比べると器壁が厚く、器面はハケ目調整であった。底部は脚になるが欠いている。

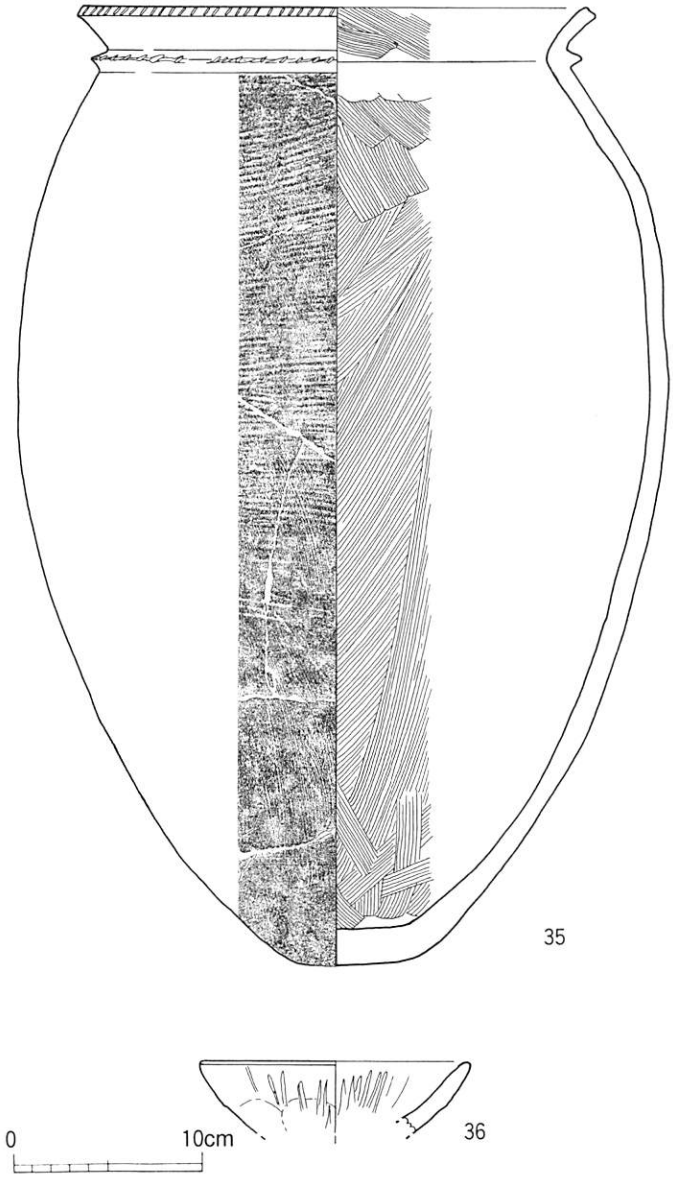
32（Ｐ－29）も胴部中位以下を欠いている在地系の甕である。口縁部は短く外反しつつ開き口径19.2cmを測る。頸部は緩やかに曲がり、胴部の中位以下に最大径を配している。器面はハケ目の後ナデ調整を行なっている。底部は脚になるが欠いている。

33（Ｐ－28）は口縁部のみの壺である。頸部から立ち上がり気味に大きく開き口径19.4cmを測り、口唇部は平坦に仕上げている。頸部にはヘラ描くによる２本の沈線が周回している。器面はハケ目のナデ調整を行なっている。

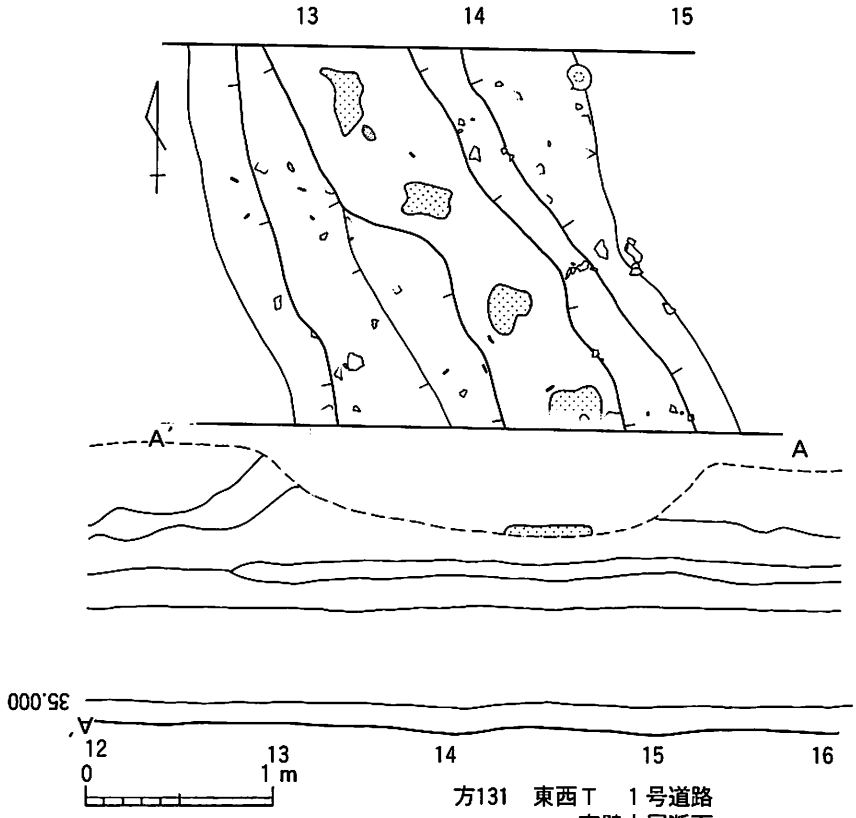
34（Ｐ－36）も壺である。口縁部は短く外反しつつ大きく開いており、口径は14.6cmであった。器面はハケ目の後ナデ調整を行なっている。

第４段階の遺物（35～36）

35（Ｐ－２・３・９・10～15・78）は主に４段階の層から出土し、１段階と３段階の層から１～２点の破片が出土しているが、詳細に見てみると各層の遺物より上に位置しており、第４段階の物として一括して取り扱った。この資料は外来系の甕である。在地系と類似しているが基本的に違うのは大形の甕で、底部が平底、頸部に凸帯を巡らしている点である。口縁部は口径26.4cmで外反しつつ「く」字に開き、口唇部には刻目を施している。頸部にも三角形の貼付凸帯を巡らし、稜線に刻目を施している。胴部はやや上位に最大径34.4cmを配し、器高は51.1cmである。底部は僅かに膨らむ平底である。器面は外面にはタタキ目とナデ調整、

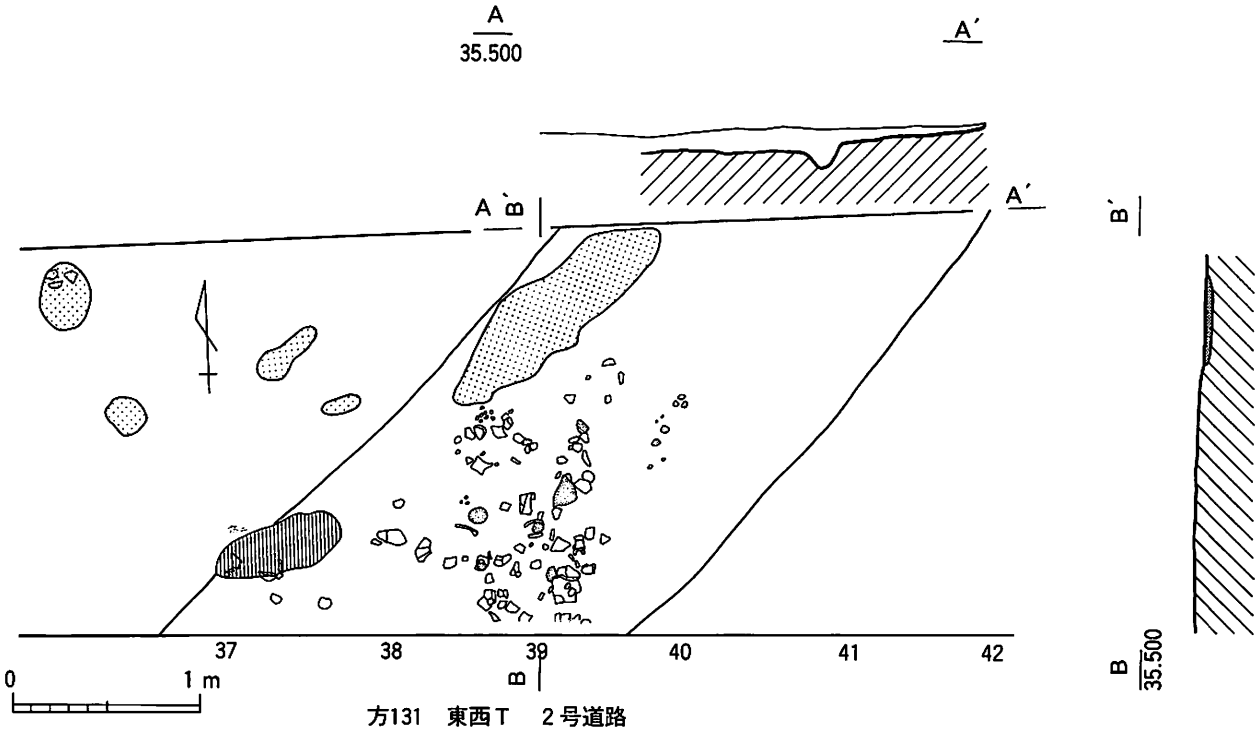


第101図　３号溝　出土遺物実測図



方131　東西T　1号道路
南壁土層断面

第102図　1号道路実測図



方131　東西T　2号道路

第103図　2号道路実測図

内面にはハケ目調整を行なっている。36（P－7）は明らかに混入したもので、土師の鉢である。口径14.1cmの丹塗り土器で、底は欠いている。器壁は厚く外面にヘラ削りが見られる。内面に煤の付着が著しく使用方法の特殊性を物語っているようである。

（9） 1号道路（第102図）

東西トレンチの西端から13～15mの範囲で4号住居跡の東壁と1号溝西側の肩の上に重なる様に南北に伸びる道路が2.5mの長さで確認できた。

小石と土器の破片を30×20cmの小判型に敷き詰め、飛び石状に約70cmの間隔で4ヶ所に配していた。この周囲も幅40～70cmで硬化が著しく、人の往来の激しさを推察できるものである。

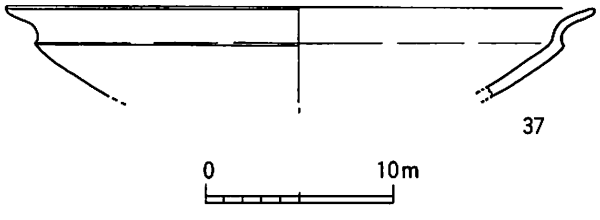
時間的な位置付けは、土器片の中に須恵器片の混入が見られないところから1号溝埋没後から4世紀代の範囲を出ないと思われる。

(10) 2号道路（第103図）

東西トレンチの西端から38～42mの範囲で幅1.7mの道路が西南西から東北東に向かって伸びる道路を2.5mの長さで確認できた。全面に硬化面が広がり小石と土器片が敷き詰められており、さらに道路の北西側でトレンチの西端から37～39mの範囲の中に小石と土器片を小判型に敷き詰めた飛び石4ヶ所も確認できた。

遺 物（第104図）

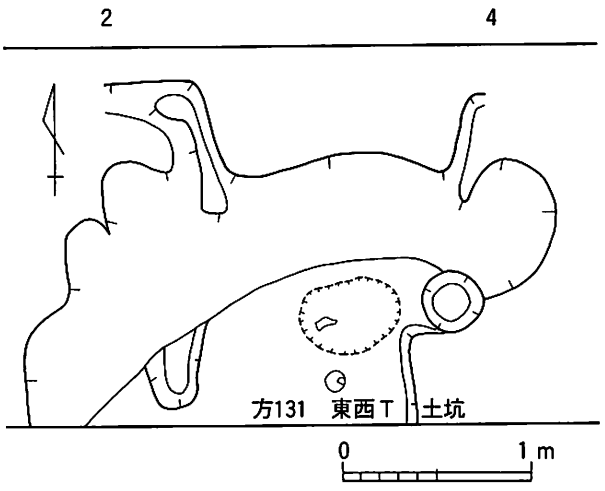
37（一括）は高坏の口縁部である。口径29cmで口縁部は短く大きく開き、頸部も短く立ち上がっている。この遺物が道路の時期を決定的にするものではないが、大幅な時間の幅が見えてきたようだ。



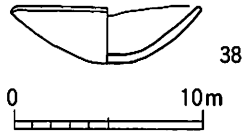
第104図 2号道路出土遺物実測図

(11) 1号土坑（第105図）

東西トレンチの西端から2～4mの範囲で1号住居跡の東壁と2号住居跡の西壁を切っていた。形状としても不整形で、上端の肩を検出した程度で性格もつかめず調査を終了した。現状では長さ2.4m、幅60cmの



第105図 1号土坑実測図



第106図 1号土坑出土遺物実測図

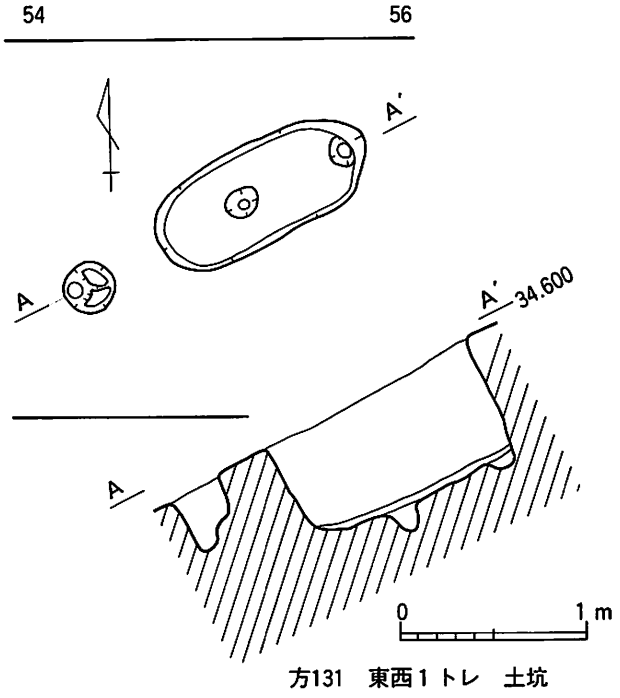
規模で時期の特定もできなかった。

遺物として土器が僅かに出土した。

遺 物（第106図）

38（P－68）は手捏ねの鉢で口径9.9cm、器高3.05cmの完形品である。

(12) 2号土坑（第107図）

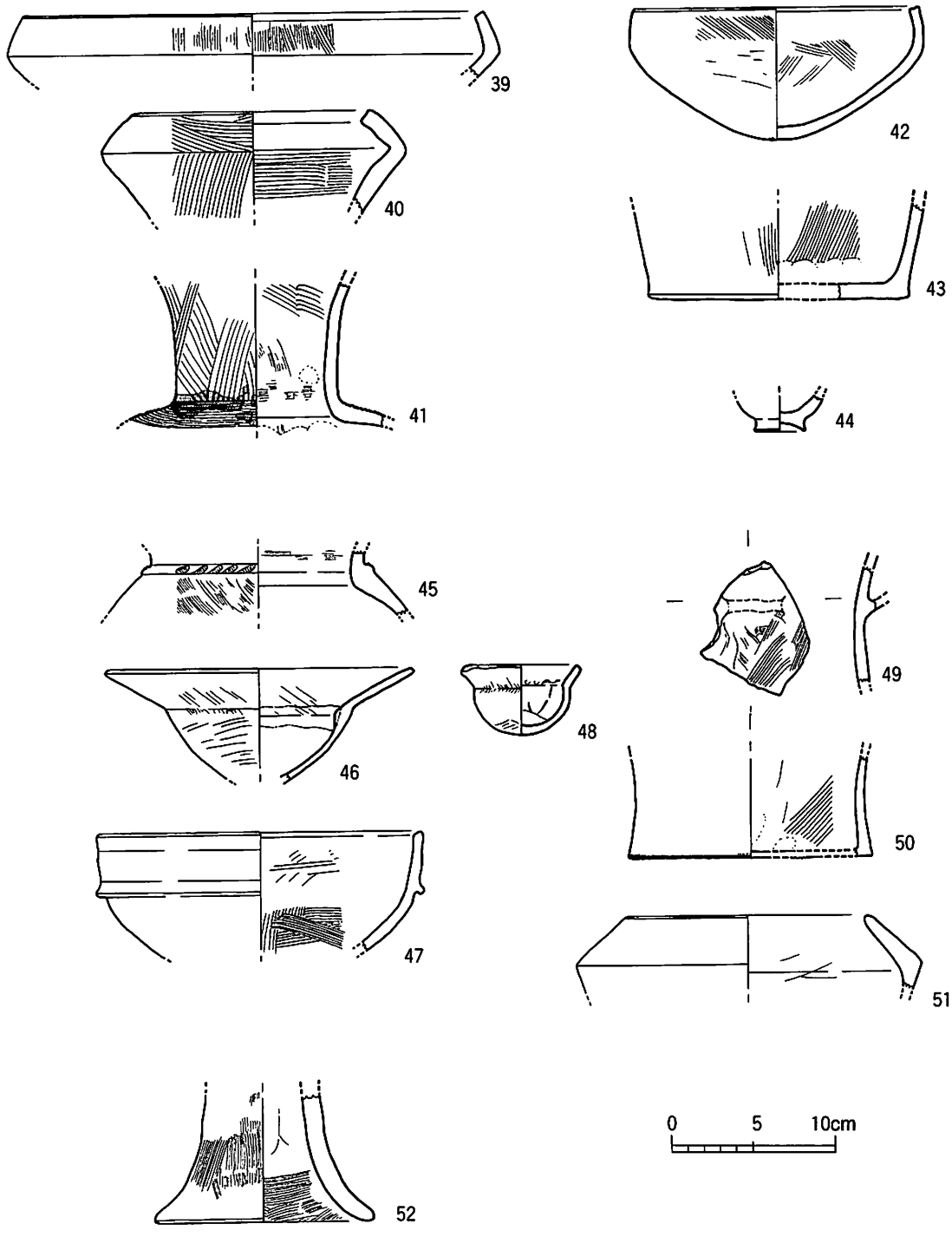


第107図 2号土坑実測図

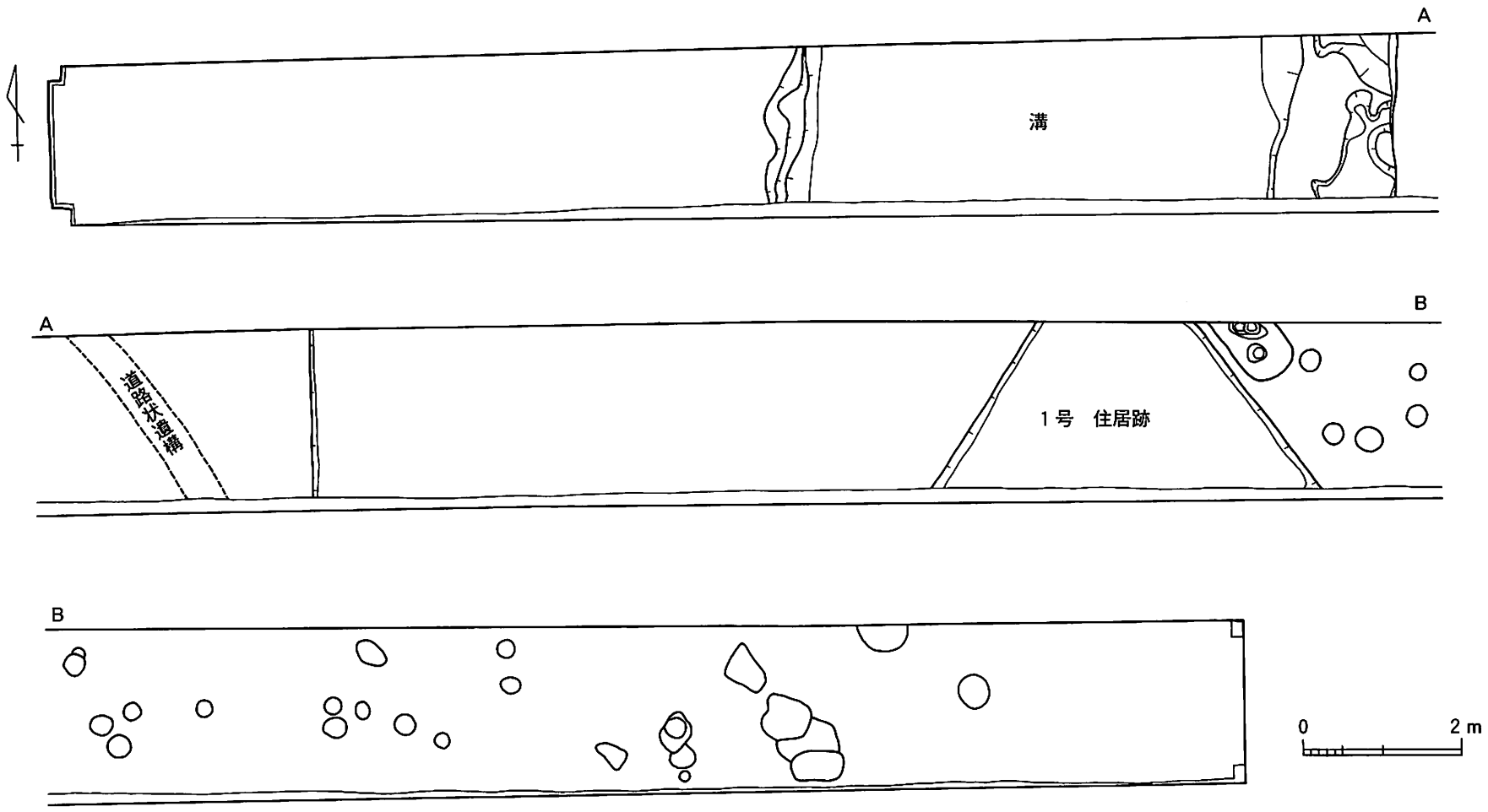
東西トレンチの西端から55mの地点で長さ1.2m、幅55cm、深さ63cmの楕円形をしていた。床面には平坦で中央と東端に2個の柱穴を配しており、土坑西側にも柱穴が1列を為すかのように掘られていた。形状から縄文時代の落とし穴に類似していたが、埋土の中から時間を示す遺物が検出されなかった。

(13) 遺構に伴わない遺物（第108図）

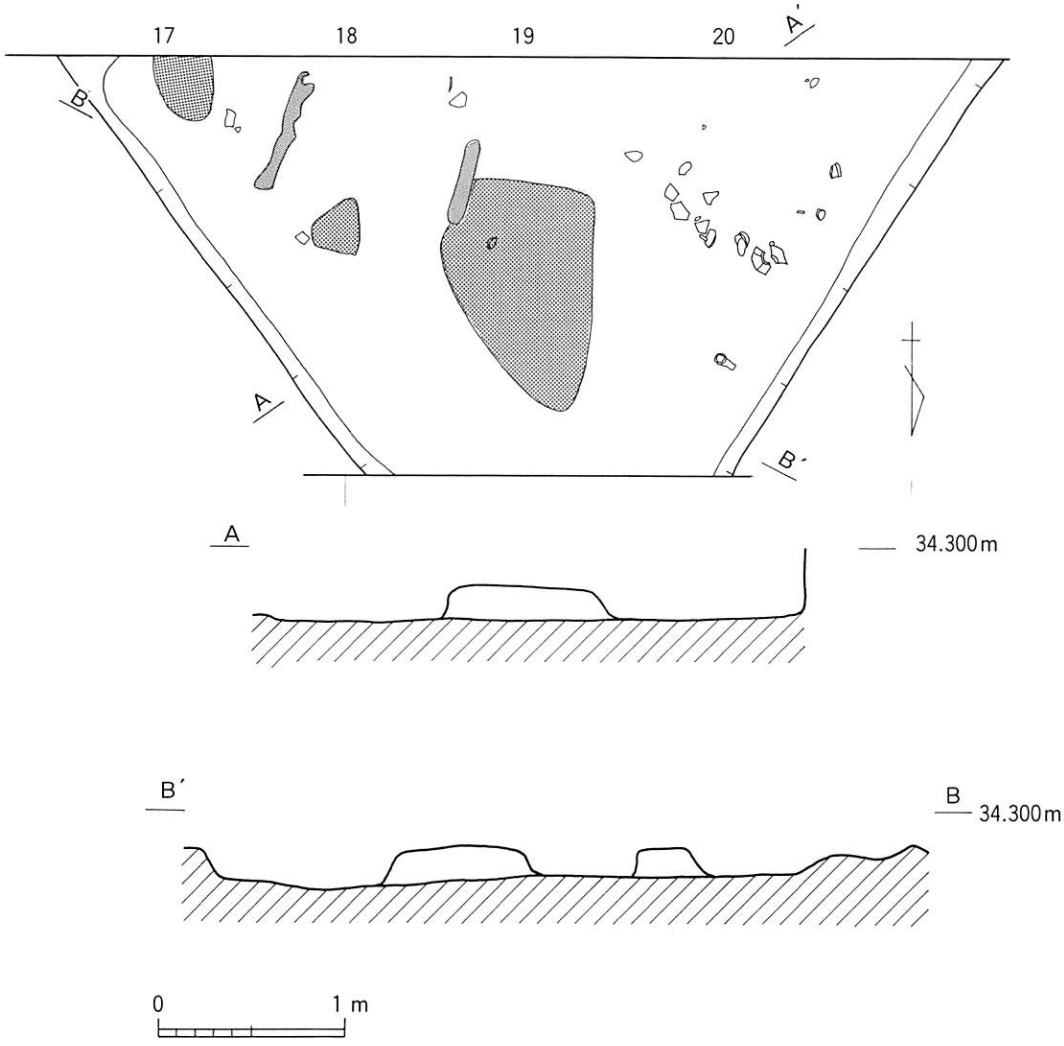
39～44はトレンチ中央部の一括資料で、45～51は西区一括、52は表土内の出土である。



第108図　131番地　遺構に伴わない遺物実測図



第109図　132番地　トレンチ遺構配置図（S＝1／80）



第110図　132番地　1号住居跡実測図

第2節　132番地の調査（第109図）

国土座標　南北X＝－613～－615・

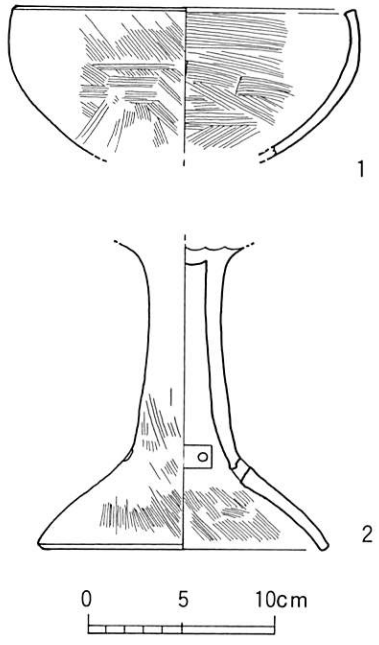
東西Y＝25,980～26,030

131番地南隣の畑で大溝の確認を目的として東西50m、幅2mでトレンチを設定した。この畑は地元では昔から低くて水が溜まっていたとの話で大溝の存在が期待されたが、削平が著しく東側から15mまでと42～50mまでは表土の下には地山層で柱穴のみが見られた。

そのため遺構の残りが悪く住居跡1軒と溝状遺構1本が確認された程度であった。

（1）　1号住居（第110図）

トレンチ東側から17mと21mの間に北東から南西に向かって伸びる壁が2.4m、北西から南東に伸びる壁が2.5mの長さで確認された。これらの壁は多少鋭角に交わる様であるが、焼土や炭化物の広がりから住居



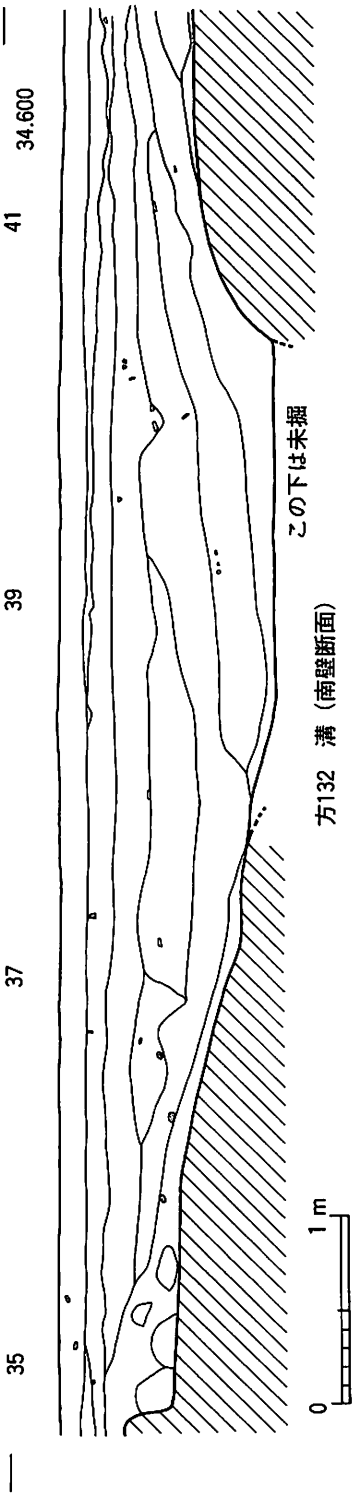
第111図　1号住居出土遺物実測図

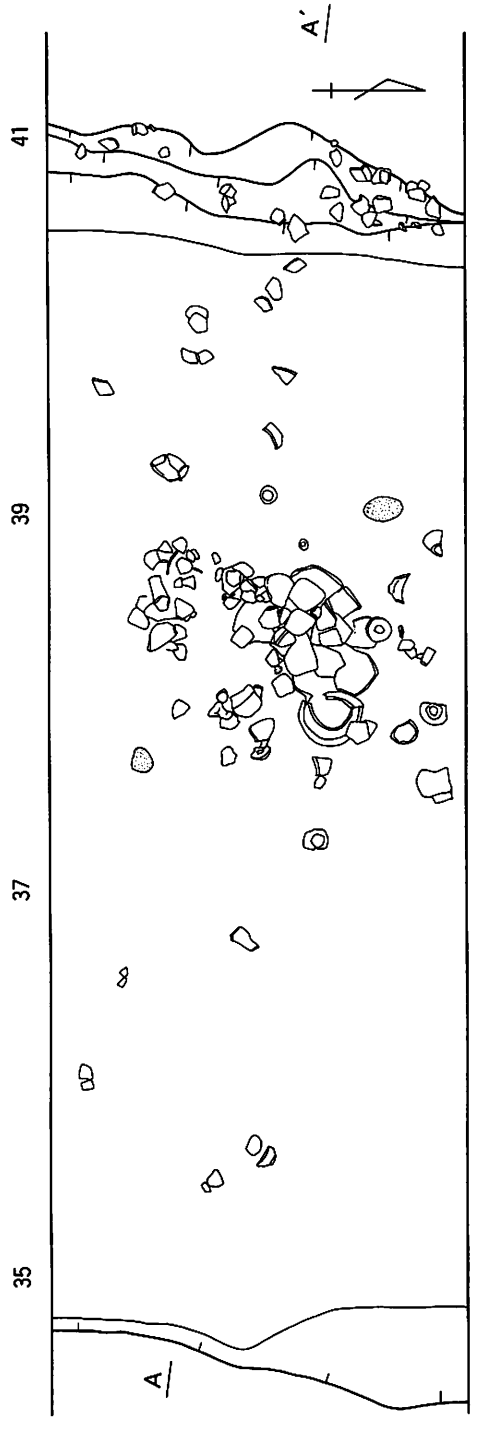
と判断した。床面は標高33.92mで、壁は標高34.11mの所で約20cmの高さがあった。

遺物は土器片が散在するように出土した。

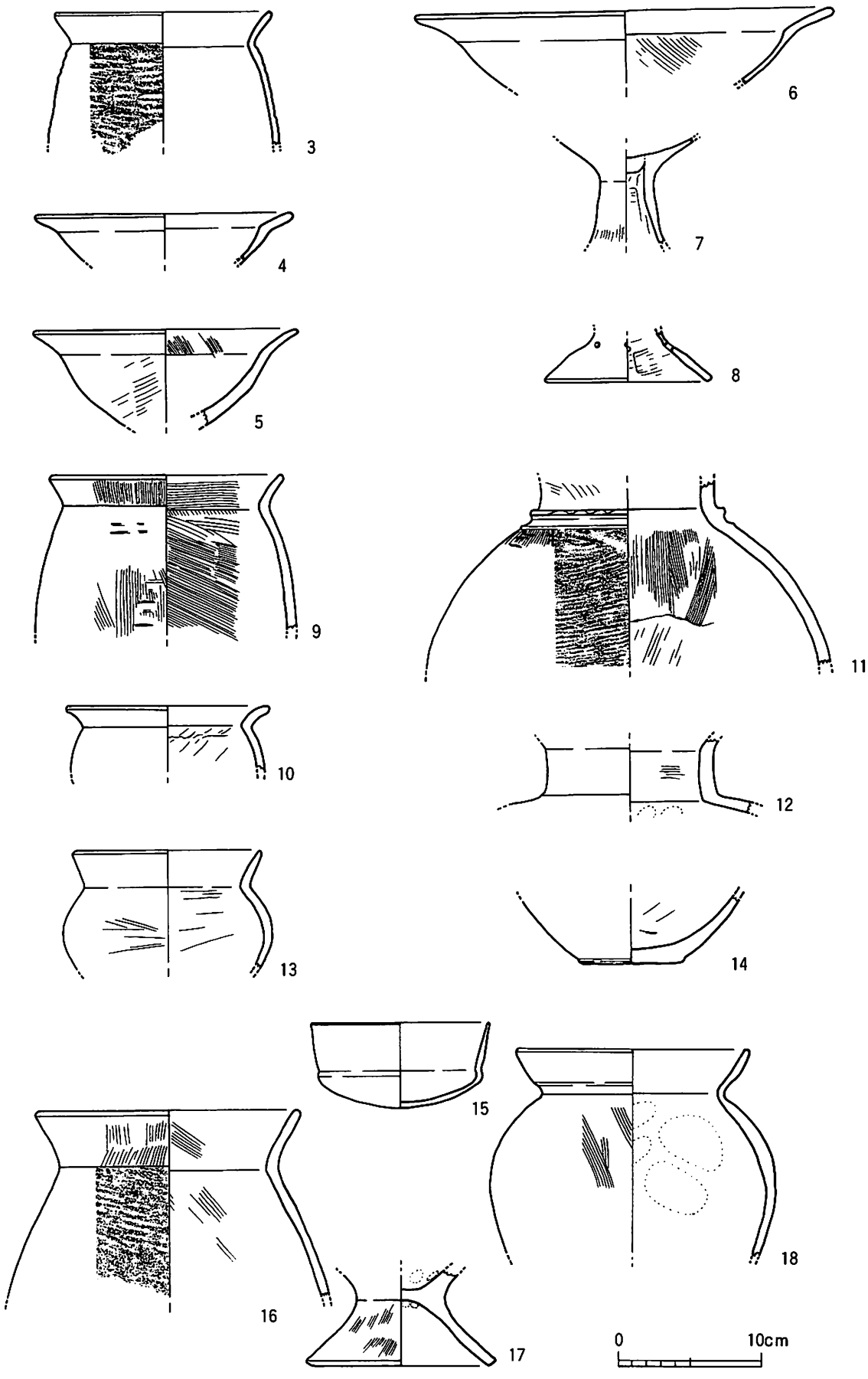
遺　物（第111図）

1（P－9）は鉢で底部を欠いている。2（P－10）は高杯で、杯部を欠いて脚部のみである。くびれ部には4個の孔を配している。

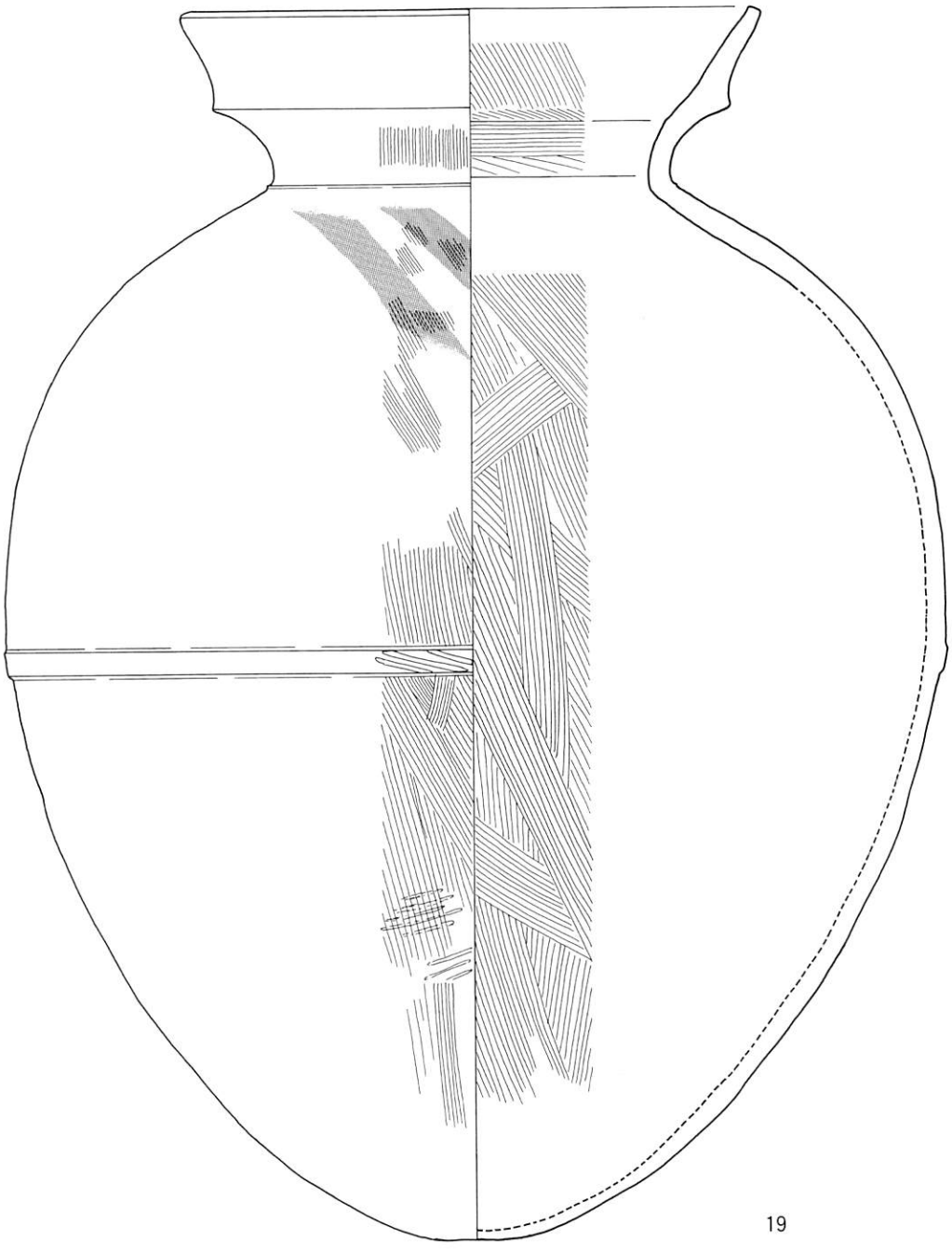


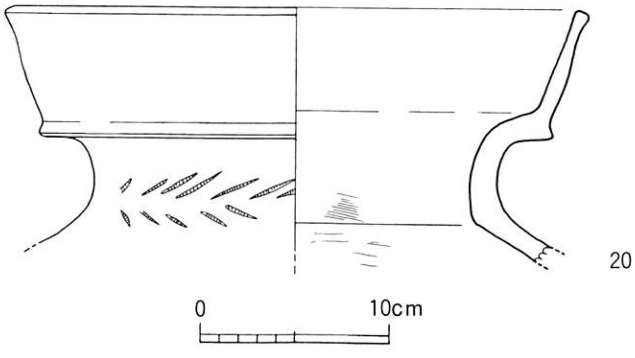


第112図　溝　実測図

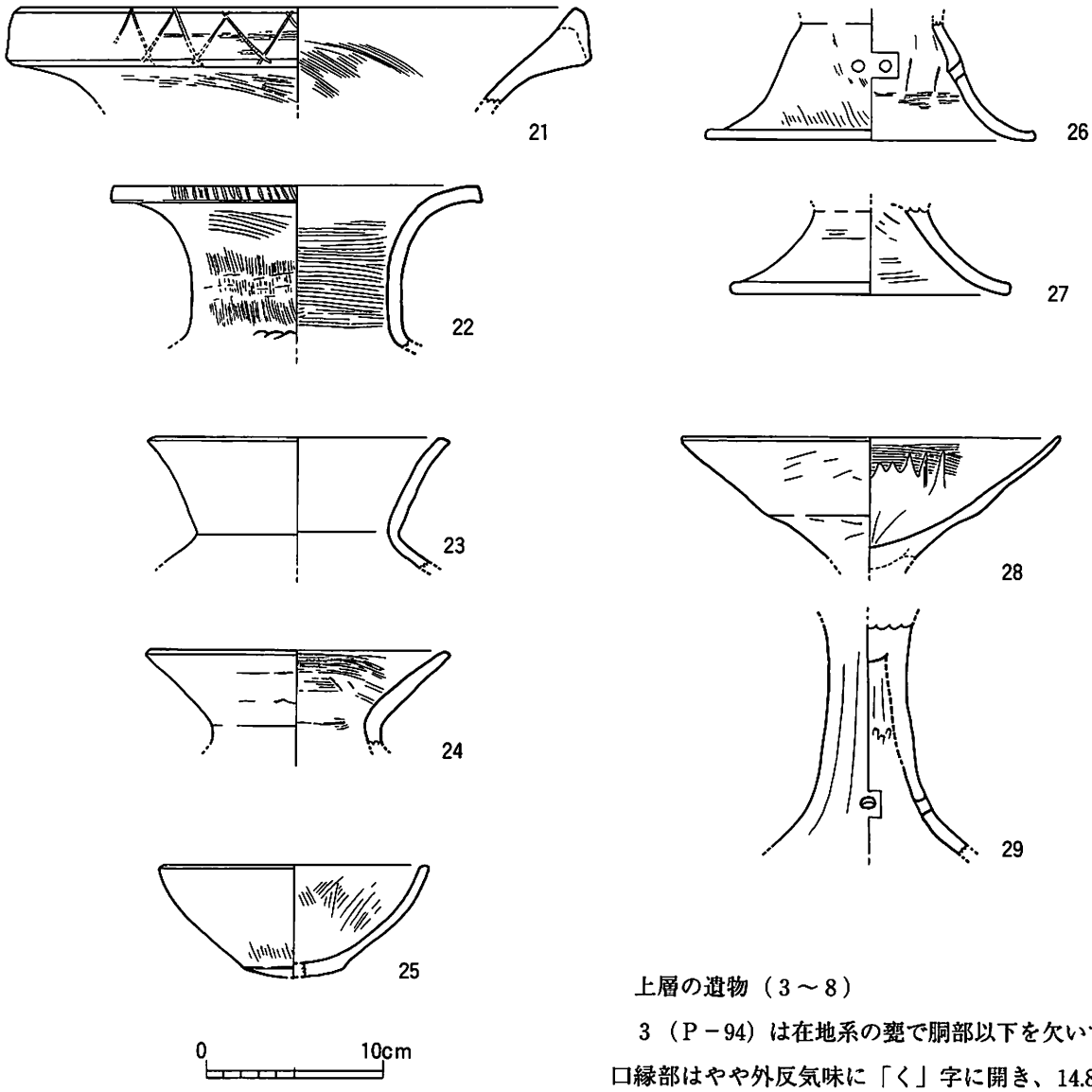


第113図　溝出土遺物実測図





第114図　溝出土遺物実測図



第115図　溝出土遺物実測図

(2)溝（第112図）

トレンチ東側から34.5～41mの間に確認されたもので、遺物の出土が多く見られたため溝の完掘は行なわなかった。従って深さについては確認できなかった。

西側の壁はほぼ南北方向に伸びており、東側の壁も同様な伸びをしていた。土層から最大幅は15mに達しているものと考えられる。土層断面から溝上端は標高34.1mであった。

西側の壁上の所と溝中央下層から遺物が廃棄された状態で出土していた。

遺物は隙間なく堆積していたので取上げの際、土器の形態変化を観察するため上・中・下の3層に分けた。

遺　物（第113～115図）

上層の遺物（3～8）

3（P－94）は在地系の甕で胴部以下を欠いている。口縁部はやや外反気味に「く」字に開き、14.8cmの口径を測る。胴部の張りは小さくタタキ目の胴長である。底は脚台か丸底か現段階では判断できなかった。

4～8（P－94）は高坏で坏部と脚部の一部である。口縁部は外反しつつ大きく開き、頸部は不明瞭で坏部も直線的に脚部に向うため深くなっている。

中層の遺物（9～15）

9（P－91）は在地系甕で底部を欠き胴部には僅かにタタキ目を残している。11（P－55）は口縁部と胴部下位を欠く壺で、頸部には凸帯に刻み目を有しており、胴部には全面にタタキ目を施していた。

下層の遺物（16～29）

16（P－67）は在地系の甕で胴部中位から下を欠き胴部には太目のタタキ目を残している。

17（P－82）は甕の脚台で、18（P－58）は外来系の甕で、布留期の特徴を残している。器面は全面に煤

が付着しており、器面調整は外面にハケ目、外面はヘラ削りが見られる。

19（P61・67・71・79）は大形の外来系の壺で、口縁部は二重口縁で胴部は球形に近く中位に低い凸帯をめぐらしている。口縁部の内面のみに煤が付着しており、一般的な使い方とは異なり特異な状況である。また、肩部には斜め方向に器面が剥離した痕跡があり、恐らく方保田の地に持ち込まれる際に籠に包まれて運ばれ、振動によって生じた剥離ではと推察される。

20（P－64・70・中層一括）も外来系の壺で頸部の羽状文から山陰（とくに出雲地方）系と判断した。口縁部と頸部の一部しか掘り出しておらず、他は現場に残している。口縁部は二重口縁でやや膨らみながら立ち上がっており、下端部は明瞭に摘み出している。

21（P－84・中層一括）も壺の口縁部で三角形の口唇部に鋸歯文状に刻み目を施していた。22（P－83）～24（P－77）も壺の口縁部で22にも口唇部に刻み目を施していた。25は鉢で、26（P－86）、27（P－60）は脚台付き鉢の脚である。28・29は高杯である。

（3） 道路状遺構（第116図）

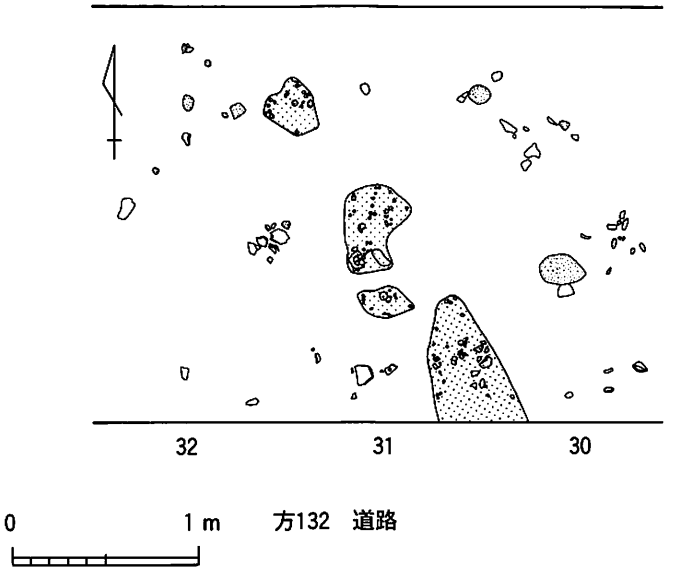
トレンチ東側から30～31mの間に確認され、標高34.07mの高さに飛び石状に山羊の糞みたいな小さな礫と土器片を敷き詰めたものが約80cm間隔で3箇所見られた。

これらは北北西から南南東に伸びており周囲も硬化が著しく道路として利用していた事を物語っていた。道路に敷き詰められていた土器の破片は弥生時代終末期のものと須恵器片が含まれていた事から古墳時代以降のものと考える。

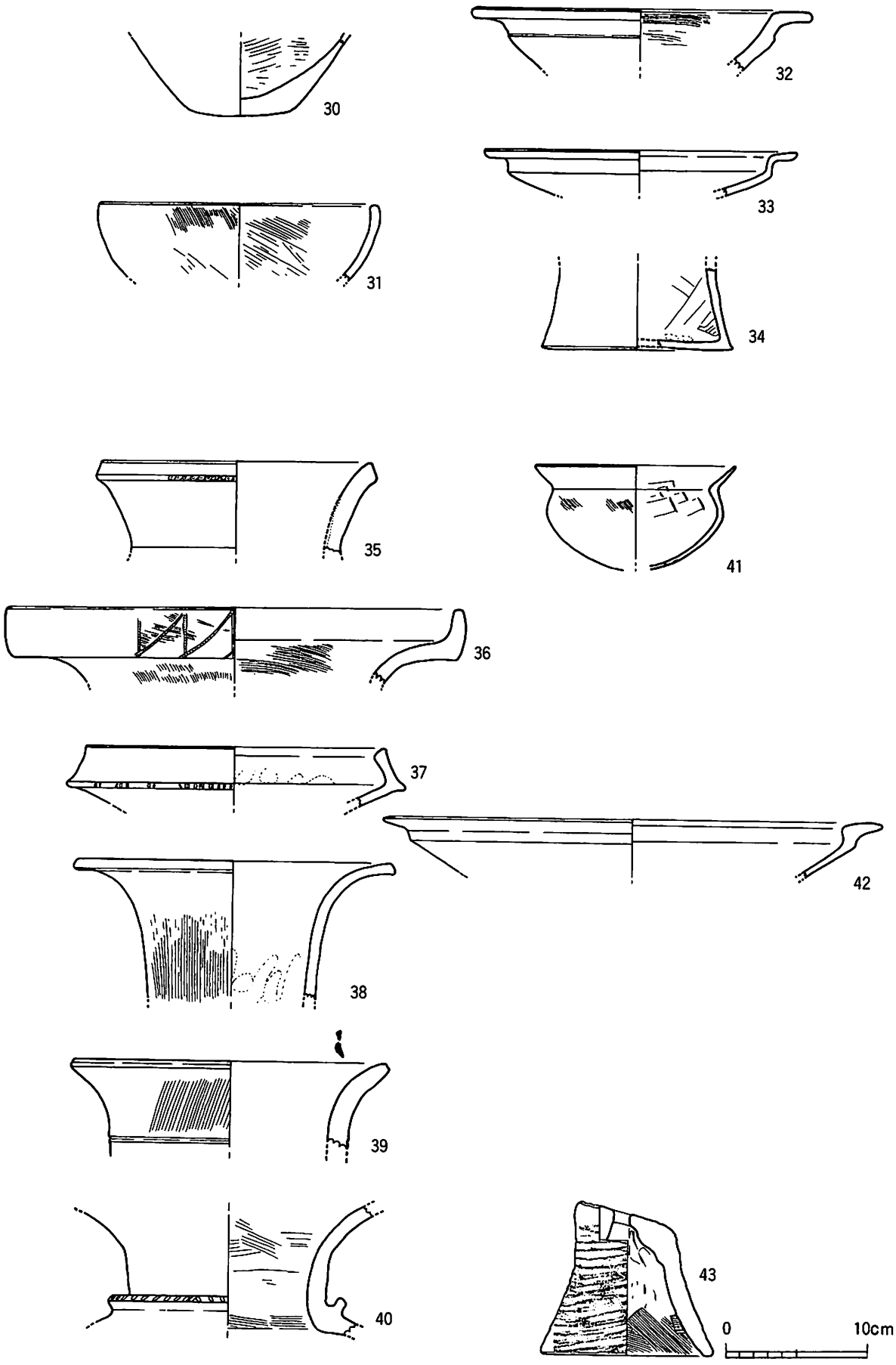
（4） 遺構に伴わない遺物（第117図）

出土した遺物のうち上層（30～34）と下層（35～43）で記載した。

35～40は壺で、41は鉢、42は高杯、43は器台である。36（P－45）と37（P－122）は二重口縁の壺で、37は口縁部と頸部の間を摘み出し、刻み目を施した数少ない種類である。40（P－46）は頸部に立ち上がり気味の凸帯に刻み目を施している。43（P－43）は沓形器台で表面は粗いタタキ目を施している。



第116図 道路状遺構実測図



第117図　遺構に伴わない遺物実測図

第３節　136－１番地の調査（第118・121図）

132番地のトレンチと道路を挟んだ南に位置し、南北に細長い土地の北半分が宅地として家が建てられ、南半分が畑地となっていたので溝追跡の調査を実施した。トレンチは東西方向に２本入れ、南側を第１トレンチ、北側を第２トレンチとした。

１　第１トレンチ（第118図）

国土座標　南北Ｘ＝－683～－685・

Ｙ＝26,019～26,037

東西方面に18mの長さでトレンチを設定し調査を進めていたが、東端で溝状遺構を検出したため、規模確認のため１ｍ東に延長した。

（１）　溝状遺構（第119図）

南北に伸びる溝で第２トレンチの溝に続くものである。現状では溝上部幅3.6ｍで標高33.78ｍに位置し、深さに関しては時間と経費の関係から完掘しなかったため確認できなかった。

溝の埋土の中には弥生時代終末期の土器片が廃棄された状態で出土していた。

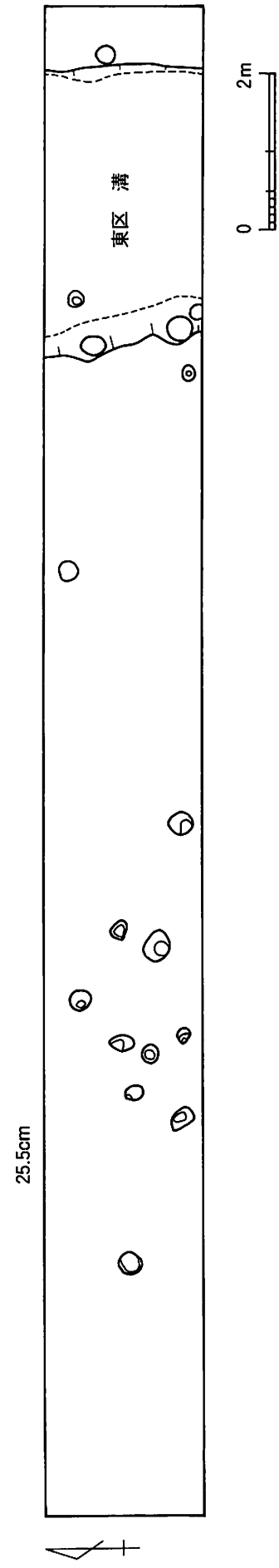
遺　物（第120図）

１（Ｐ－84）は在地系甕の脚台で、６（Ｐ－26）と同時期である。６は表面に煤を付け、火を受けて器面が剥離している。３（Ｐ－55）と４（Ｐ－80・81）は外来系甕で底部を欠いている。共に庄内期のものである。２（上層一括）と５（Ｐ－95）は壺で胴部以下を欠いている。２は口唇部に刻み目を配し、頸部には２条の凸帯をめぐらしている。５は頸部に櫛描きの沈線をめぐらしている。７（Ｐ－94）は小型丸底壺で、８（Ｐ－72）は鉢である。９～11は高杯で９（Ｐ－93）は杯部が浅く内面には暗文を施し口縁部は僅かに外反している。10（上層一括）は脚台で、ヘラで内部を削り出している。裾部には４個の孔を配している。11（下層一括）は口縁部が大きく外反し内面に暗文を施している。

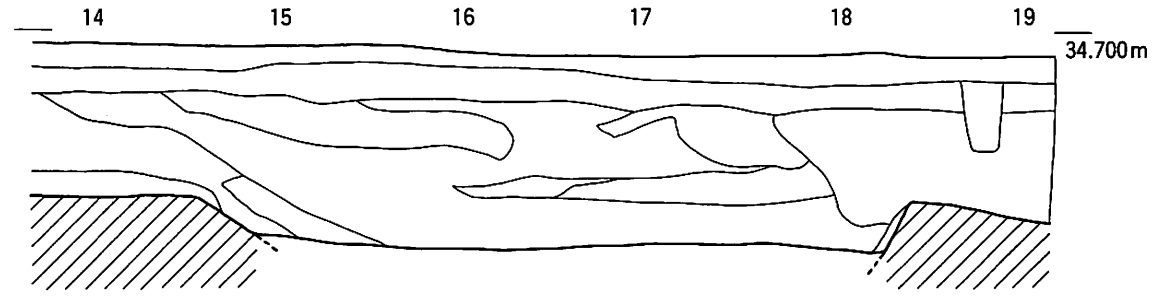
12（Ｐ－104）は器台であるが、成形が粗く調整痕が顕著に残っている。

（２）　遺構に伴わない遺物（第120図）

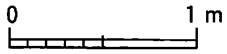
13（Ｐ－30）～15は遺構に伴わない遺物で、13は在地系甕で口縁部が短く外反し胴部の中位に最大径を配している。底部は脚台になるが欠いている。器壁は厚

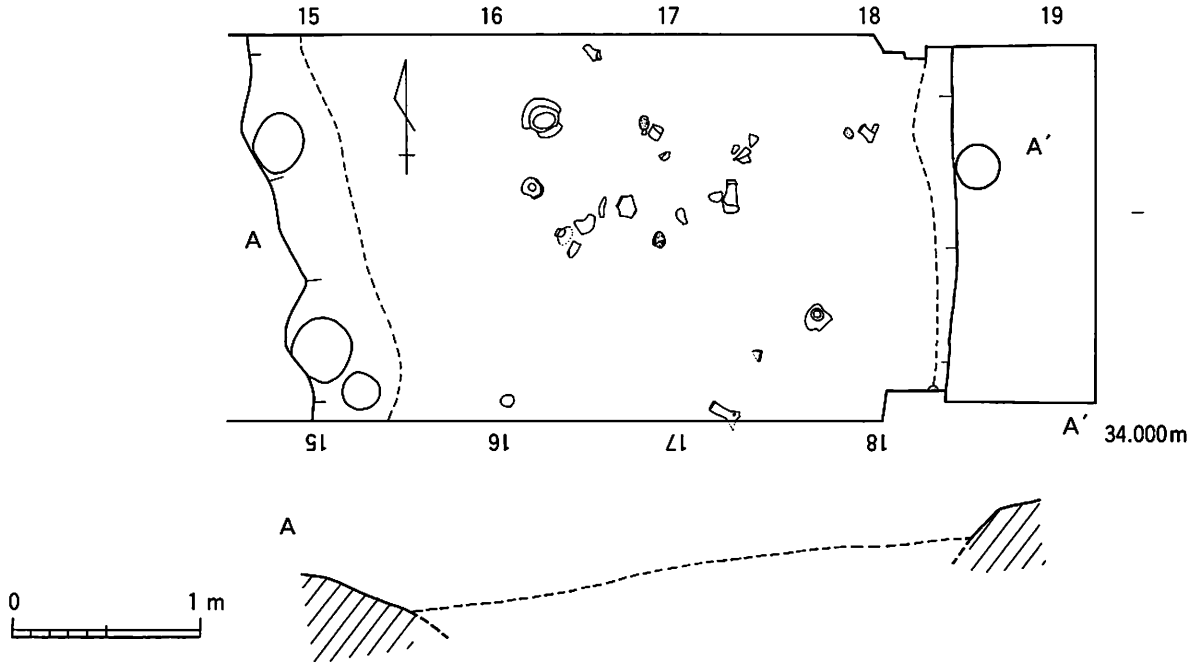


第118図　方保田136-1番地　第１Tr.　遺構配置図　（Ｓ＝１／80）

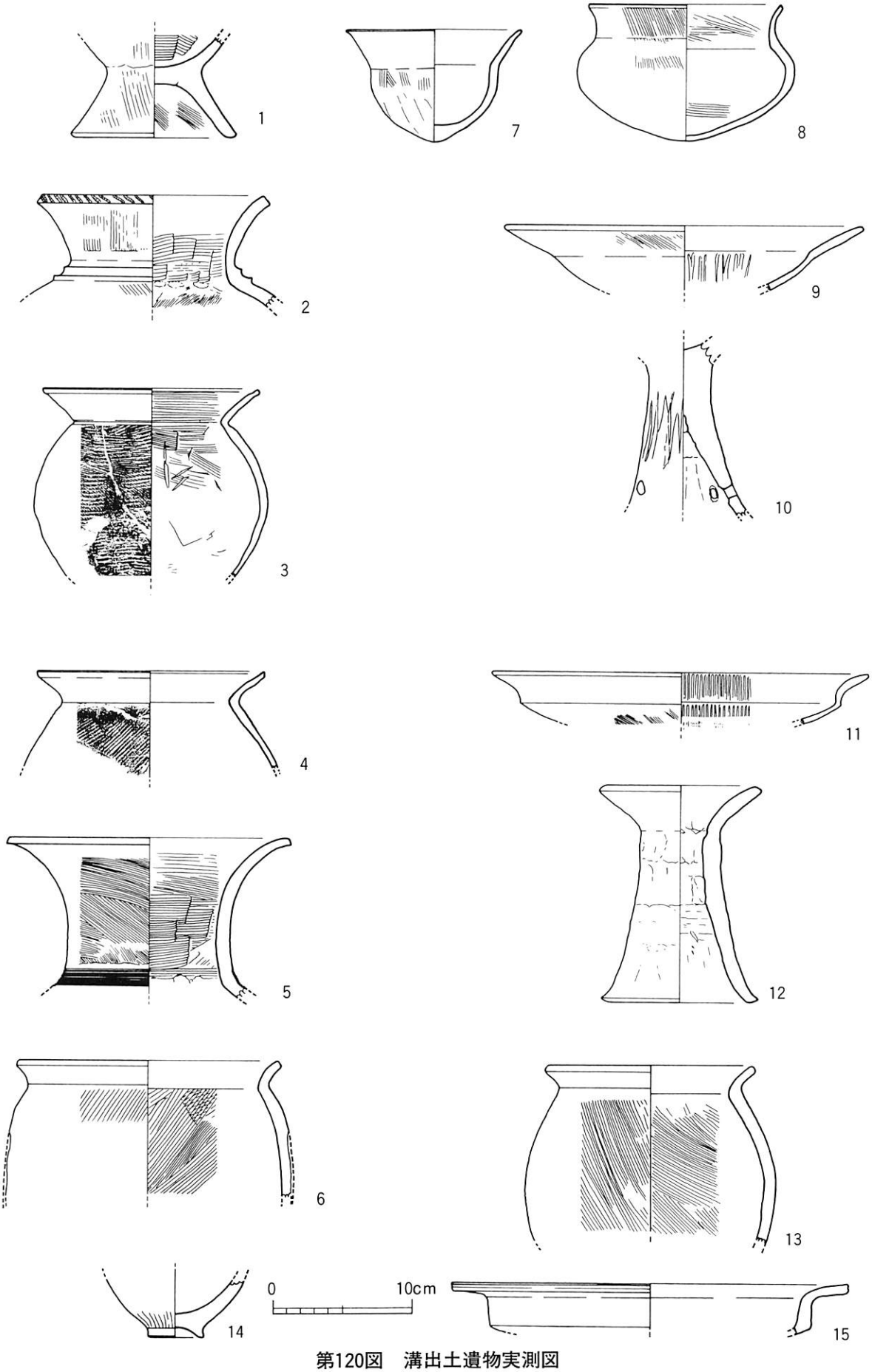


方136-1　1 T　溝　北壁土層断面





第119図　136－1番地　第1トレンチ溝実測図



第120図　溝出土遺物実測図

く古手の様相を示している。14は土師器の小形の鉢で底部は高台状に成形しており、これまでにあまり見られないものである。15は高杯で杯部の破片である、口縁部が垂直に立ち上がり外反しつつ口唇部へと続いている。

2　第２トレンチ（第121図）

国土座標　南北Ｘ＝－663～－665・

東西Ｙ＝26,019～26,037

第１トレンチの北18mの間隔を開けたところに東西方向18mの長さでトレンチを設定し、第１トレンチ同様東端で溝状遺構が検出された。

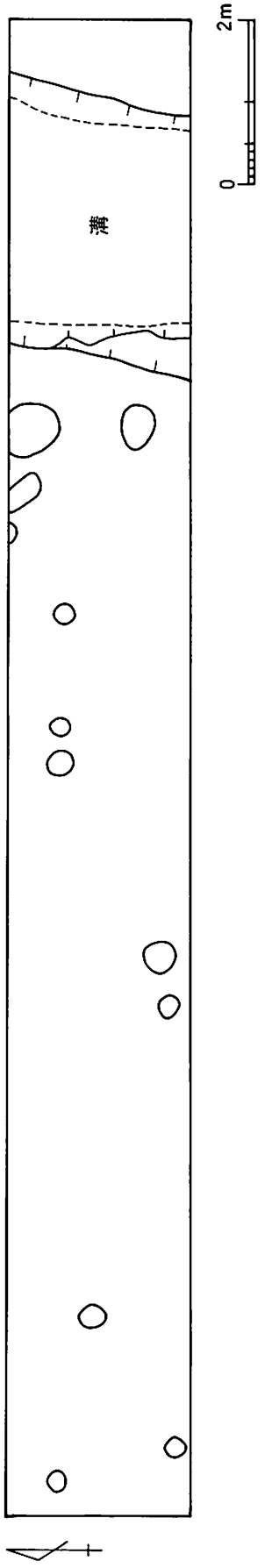
（１）　溝状遺構（第122図）

トレンチ西端から14～17mの位置に溝上部幅３mの溝が北北東から南南西に向って伸びており、第１トレンチの溝に続くものである。溝上部で標高33.75mに位置し、深さに関しては第１トレンチ同様の理由で完掘しなかったため確認できなかった。

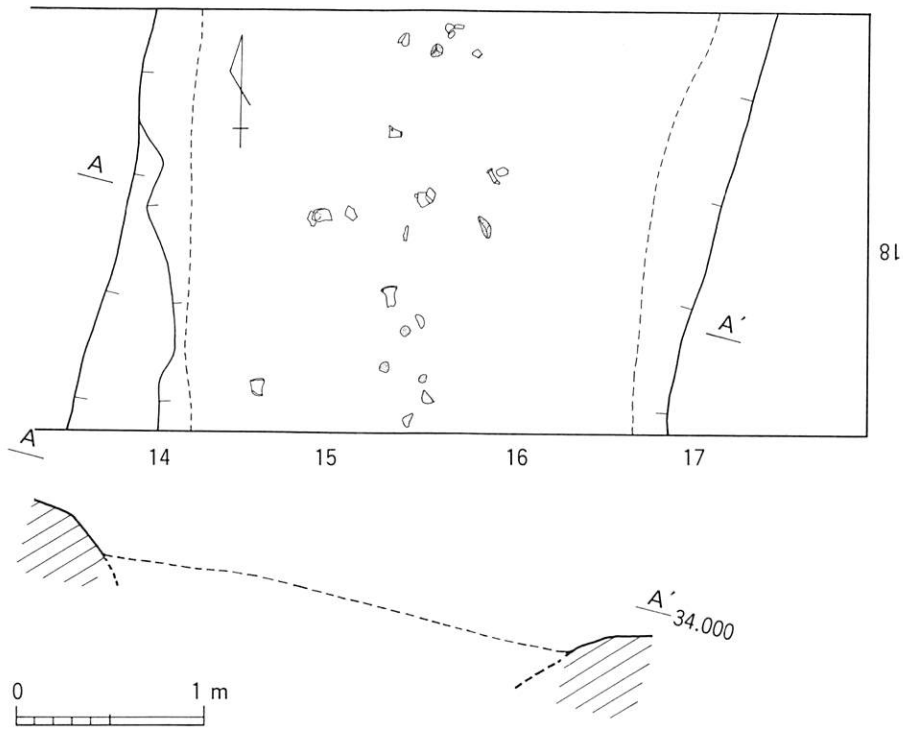
溝の埋土の中には弥生時代終末期の土器片が廃棄された状態で出土していた。

遺　物（第123図）

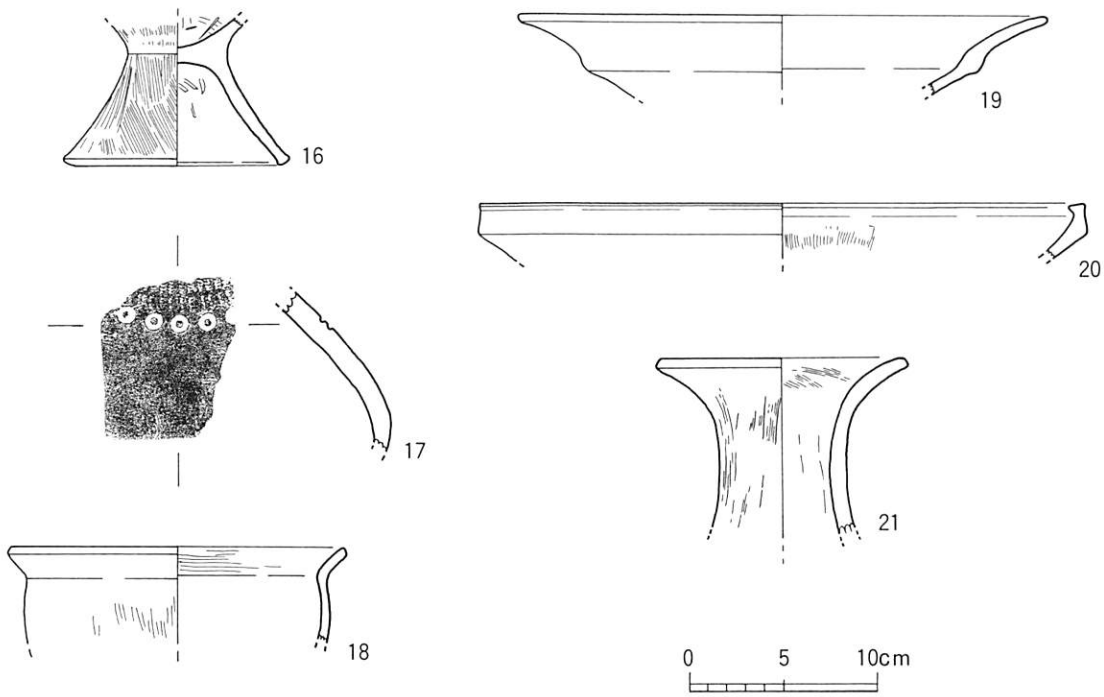
16（Ｐ－16）は在地系甕の脚台で薄く仕上げている。17（Ｐ－８）は壺の破片で肩の一部のみであるが櫛描き簾状文と半截竹管文を施している。18（Ｐ－20）は鉢で、19・20は高杯の口縁部で、20は口唇部が垂直に立ち上がり平坦部を形成している。21（Ｐ－７）は器台で下半分を欠いている。



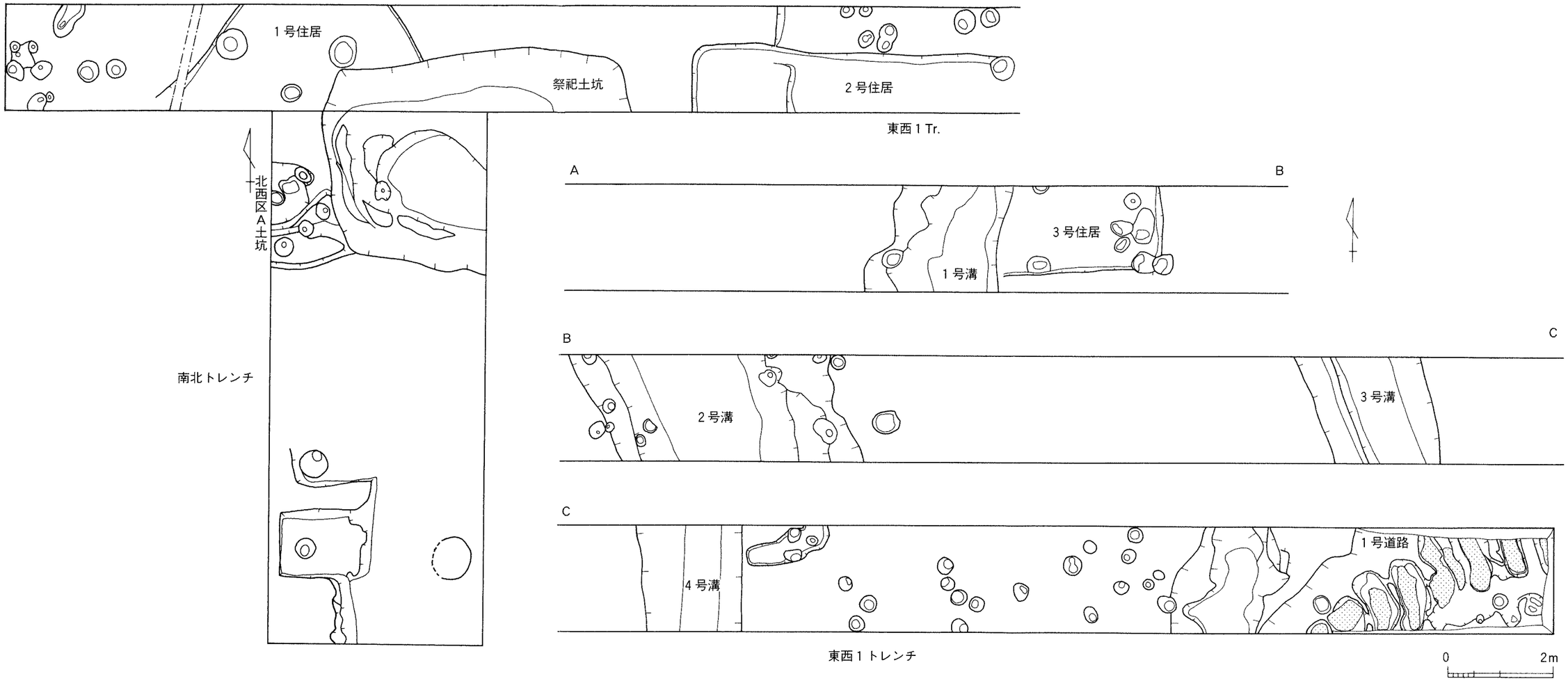
第121図　方保田136-1番地　第２Tr.　遺構配置図　（Ｓ＝１／80）



第122図　方136－1番地　第2トレンチ　溝実測図



第123図　溝出土遺物実測図



第124図　方保田138番地　東西1Tr. 南北1Tr.　遺構配置図（S＝1／80）

第４節　138番地の調査（第124図）

出土文化財管理センター南に位置し、135～137番地の南接した東西に長い畑で国土座標の東西方向に70mの長さで東西第１トレンチを設定し、このトレンチの南側20mに30mの長さで東西第２トレンチを設定した。調査を進めていく中で東西第１トレンチ西端近くに０祭祀遺構が検出されたため急遽南に拡張し南北トレンチとした。ここでは溝と遺構の確認を目的として調査を実施した。

１　東西第１トレンチ（第124図）

南北Ｘ＝－700～－702･

東西Ｙ＝－25,995～－26,065

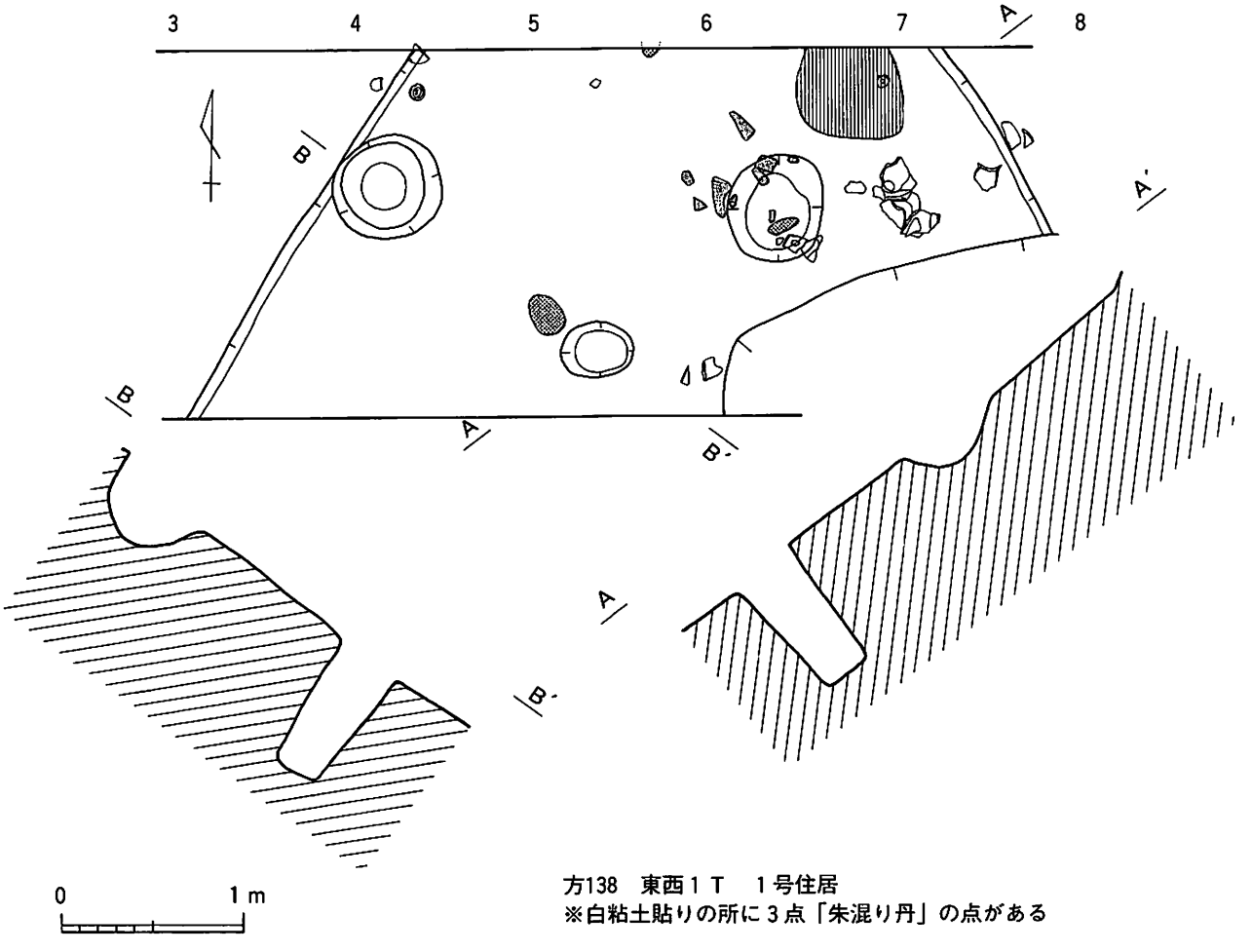
全長70mのトレンチは今回の調査で最長であり、東側の道路を挟んで268番地東西第１トレンチに続くように設定したため約100mに亘って、一直線にトレンチを設定したような形となった。このトレンチでは住居３軒、祭祀遺構１基、溝状遺構４本、道路状遺構１本が検出された。なお祭祀遺構については南北トレンチで一括報告することとした。

（１）　１号住居跡（第125図）

トレンチ西端で３～８ｍの範囲で確認され西壁の一部と床面が硬化し、焼土や炭化材が残されている事から住居と確認した。

しかしながら中心部は祭祀土坑から切られており、南北の壁はトレンチの外に広がっており、東側の壁はトレンチ内では確認できなかった。

西壁上部の標高は34.03ｍで床は標高33.90ｍであった。したがって壁の高さは13cmで北東から南西方向に長さ２ｍが確認できた。壁の一部は昭和40年代には灌漑用の送水パイプ埋設のため破壊されていたが、北西端で壁に立て掛けるかの様にして小形青銅鏡１点が出土した。（巻頭カラー　写真１）



方138　東西１Ｔ　１号住居
※白粘土貼りの所に３点「朱混り丹」の点がある

第125図　138番地　１号住居跡実測図　ｓ＝１／20

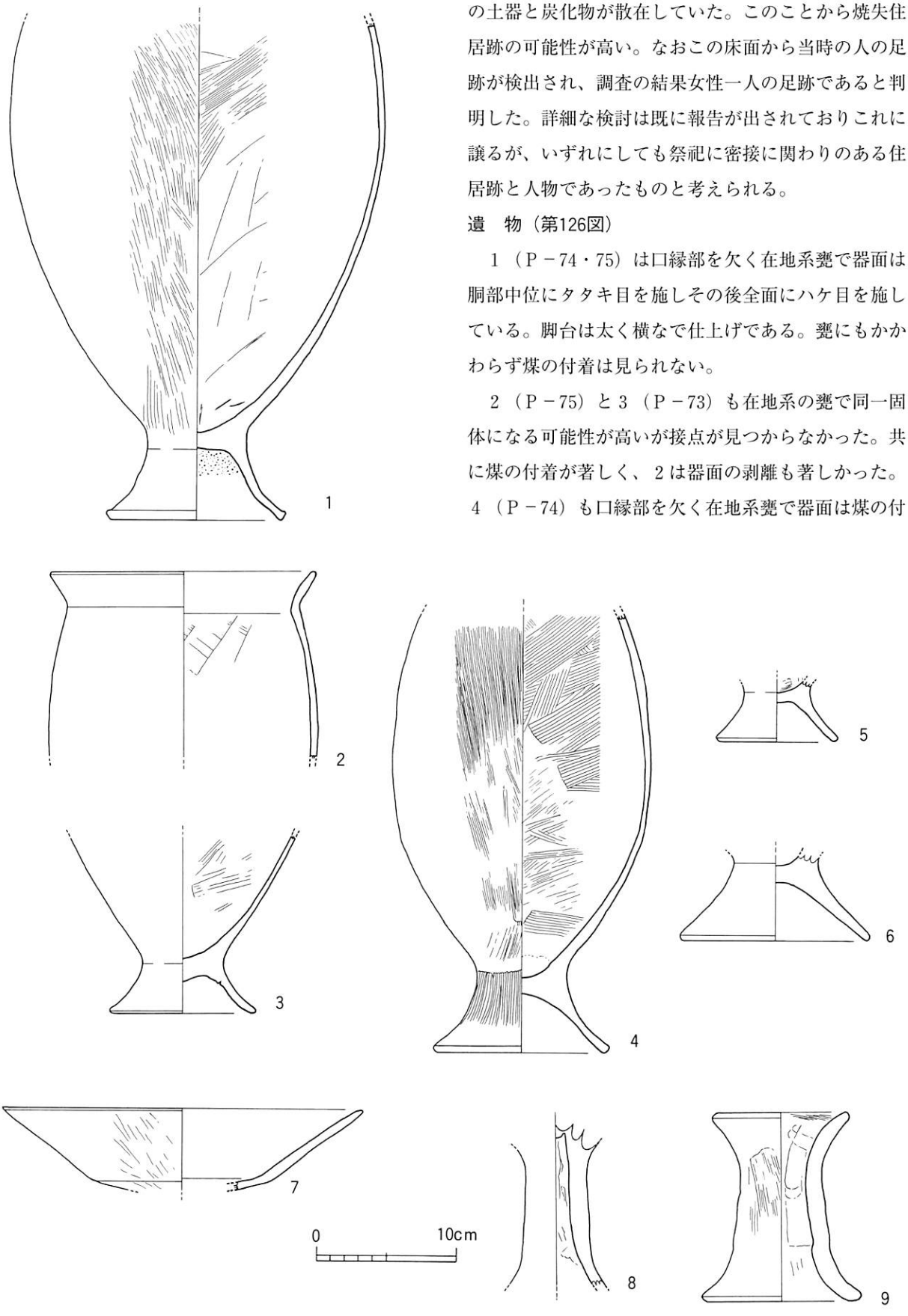
床は硬化面が全面に広がっており、弥生時代終末期の土器と炭化物が散在していた。このことから焼失住居跡の可能性が高い。なおこの床面から当時の人の足跡が検出され、調査の結果女性一人の足跡であると判明した。詳細な検討は既に報告が出されておりこれに譲るが、いずれにしても祭祀に密接に関わりのある住居跡と人物であったものと考えられる。

遺　物（第126図）

1（P－74・75）は口縁部を欠く在地系甕で器面は胴部中位にタタキ目を施しその後全面にハケ目を施している。脚台は太く横なで仕上げである。甕にもかかわらず煤の付着は見られない。

2（P－75）と3（P－73）も在地系の甕で同一固体になる可能性が高いが接点が見つからなかった。共に煤の付着が著しく、2は器面の剥離も著しかった。

4（P－74）も口縁部を欠く在地系甕で器面は煤の付



第126図　1号住居出土遺物実測図

着は見られず全面にハケ目を施している。脚台もハケ目を施している。5（P－76）は小形の甕の脚台で、6（P－73）は大形の甕である。7（P－70）は高杯の杯部片で口縁部が長く、暗文状に調整を施している。8（P－80）は高杯の脚である。裾部も欠いておりあまり出来も良くない。

9（P－79）は器台で半截状態である。粗い仕上げで稚拙な技術で造られている。

（2） 2号住居跡（第127図）

1号住居跡と祭祀土坑の東に位置し、トレンチ西端から13～19mの範囲で確認された大型の住居跡である。この住居跡は極めて北壁の状態が良く、ほぼ東西に主軸を向け北壁が長さ6mまで確認されたが東壁は不明確であった。

床面には西壁に沿って幅1.7mでベッドを築いており、床の硬化は著しかった。しかし、床面に残る遺物は出土してはいない。

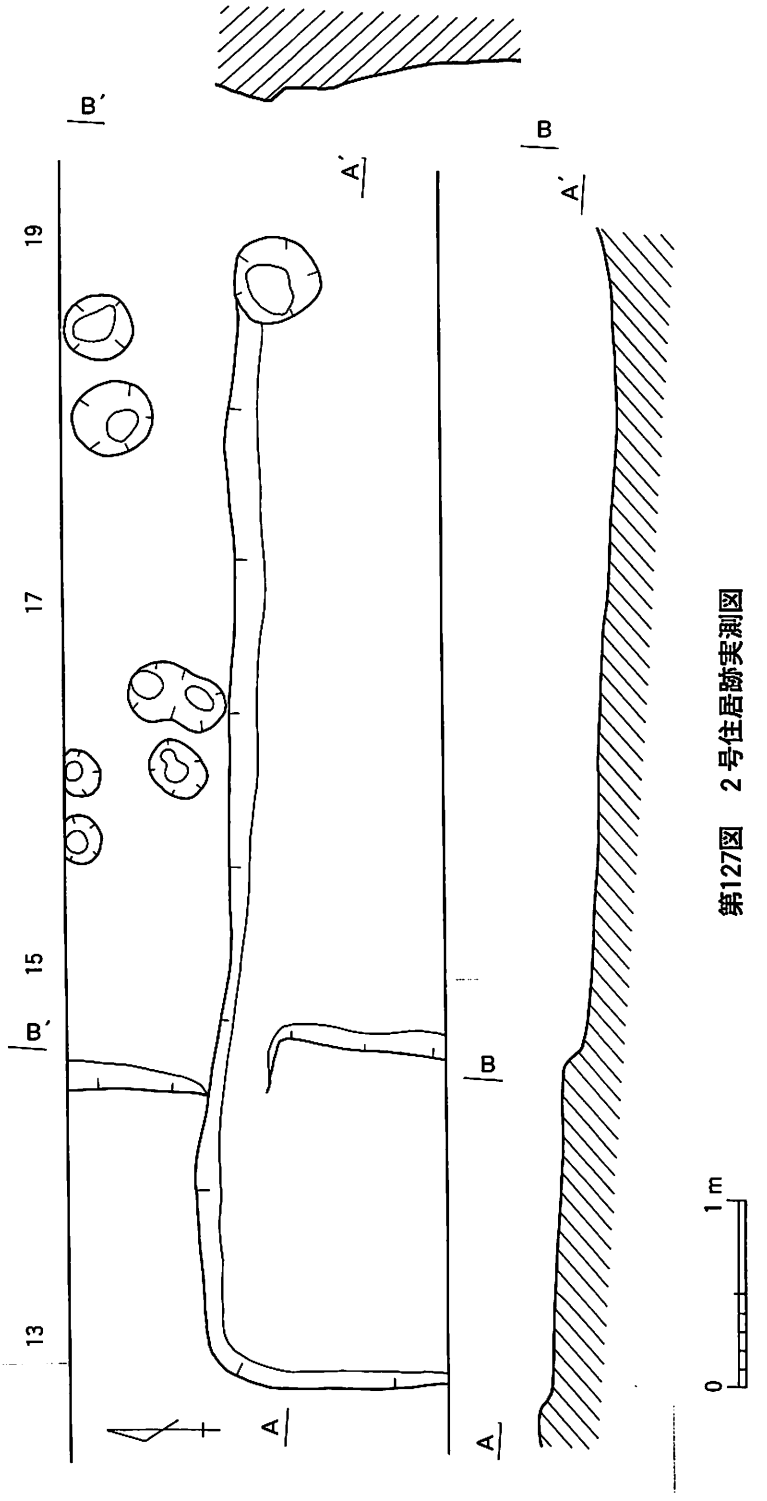
なお、この住居跡は祭祀土坑に並ぶかのような位置関係にあり、密度に関係があるものと考えられ今後追跡確認調査の必要がある。

（3） 3号住居跡（第128図）

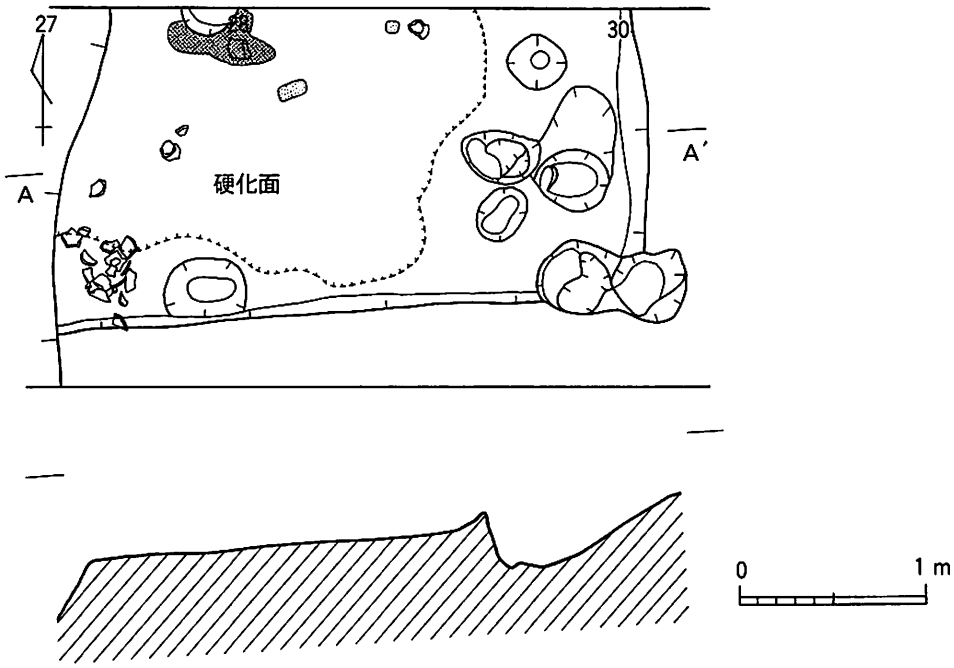
2号住居跡の東に位置し、トレンチ西端から27～30mの範囲で確認された住居である。西壁は1号溝から切られていたがほぼ東西に主軸を向け東壁は1.3m、南壁が2.5mの長さで確認され、溝の西には西壁が確認できなかったところから、西壁は溝で壊された可能性が高い。床面は標高33.76mで全面に硬化面が広がり、子供の足跡が多数検出された。

遺 物（第129図）

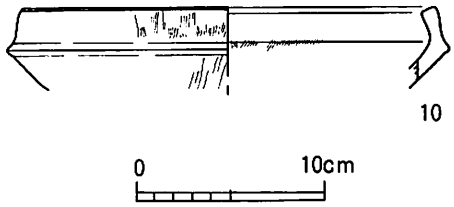
10（一括）は壺の口縁部で132番地出土の資料（第117図—37）に類似したものである。



第127図 2号住居跡実測図



第128図　3号住居跡　実測図



第129図　3号住居出土遺物実測図

（4）　1号溝（第130図）

3号住居跡の西に位置し、トレンチ西端から25～27mの範囲で南北方向に伸びており、3号住居の西壁を切っていた。

溝は上部幅2.1m、下部幅0.7m程度で基本的には逆台形を呈しており、西側の壁が階段状を呈しており上端部で標高33.94m、下端部で標高33.41mであった。

東壁は直線的に開きつつ立ち上がっており上端部で標高33.75m、下端部で標高33.41mであった。床面は土器が散在する程度であるが、溝が埋没してゆく過程で3号住居の上にまで土器を廃棄していた。

遺　物（第131～133図）

上部と下部の2層に分けて取上げた。その結果、甕の形状により溝掘削から埋没まで四段階にわたる事が明らかになった。溝掘削直後は在地系で脚台を有する甕、埋没していく頃には在地系地の長胴丸底の甕、埋没終了の頃には外来系の庄内系、および布留系の甕が見られる。

上層の遺物（11～17）

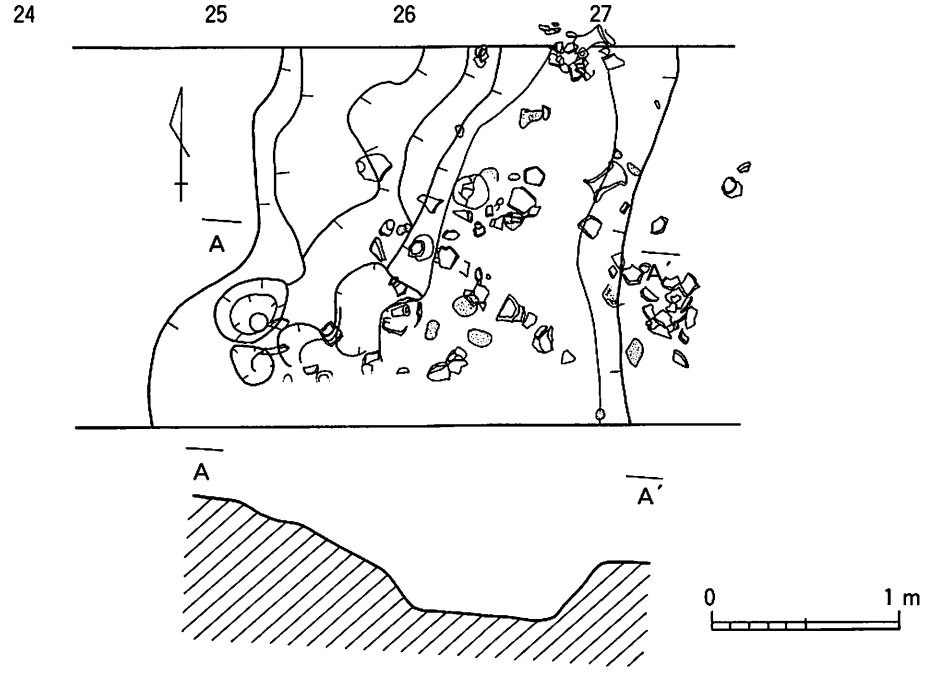
11（P－127・128・129・3号住一括・上層一括）は外来系の甕で庄内系の特徴を残している。口縁部は外反しながら開き、胴部は球形に近く、タタキ目とハケ目を施している。底部はないが全面に煤の付着が著しく使用頻度の高さを物語っている。

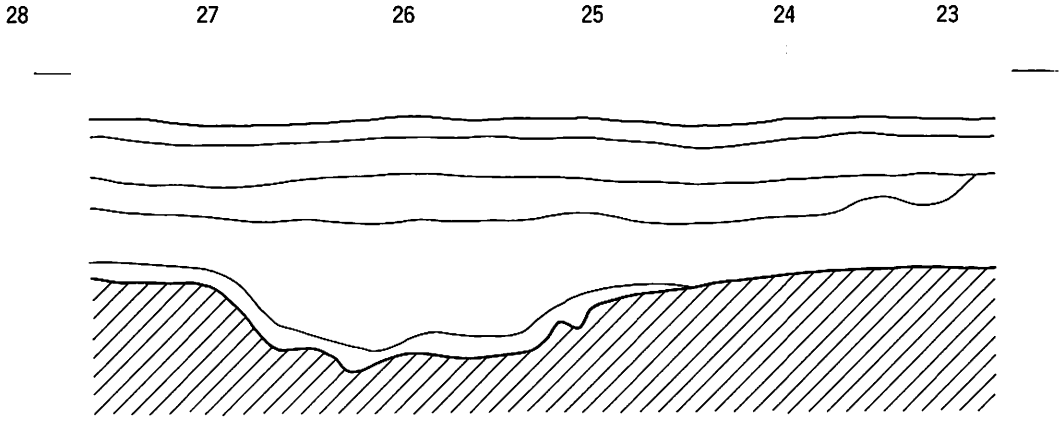
12（P－116・3号住一括）は外来系の甕で布留系の特徴を残している。胴部以下を欠いているが煤は見られない。

13（P－123）は在地系甕で長胴丸底になる。口縁部は僅かに外反し口唇部は内側に摘み上げている。胴部の張りは少なく頸部から胴部下位まで粗いタタキ目を施している。表面は全面に煤の付着が著しく、一部で器面の剥離が見られる。

14（P－121）は特殊な口縁部の外来系の甕で庄内系の特徴を残している。全体の形から見れば壺に含まれそうであるが甕として扱った。口縁部は内湾しつつ立ち上がり、中位で段を有している。胴部は大きく膨らみ最大径をやや下位に配している。器面はタタキの後粗いハケ目で掻き消す様に施している。煤の付着は見られない。

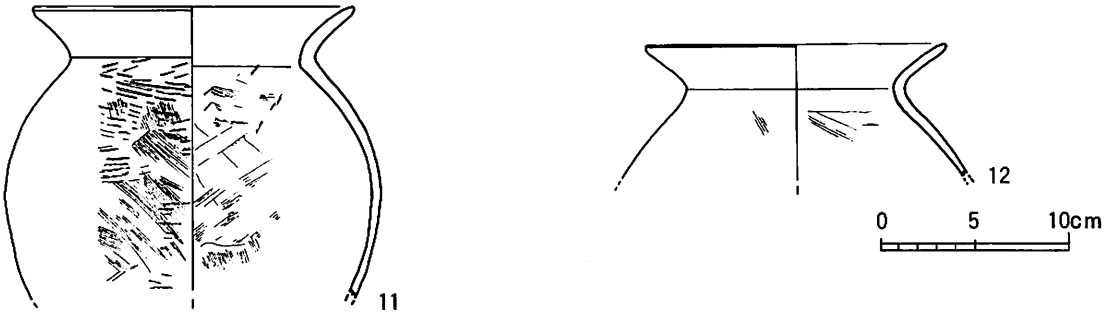
15（P－128・3号住周辺一括）も外来系の甕で庄



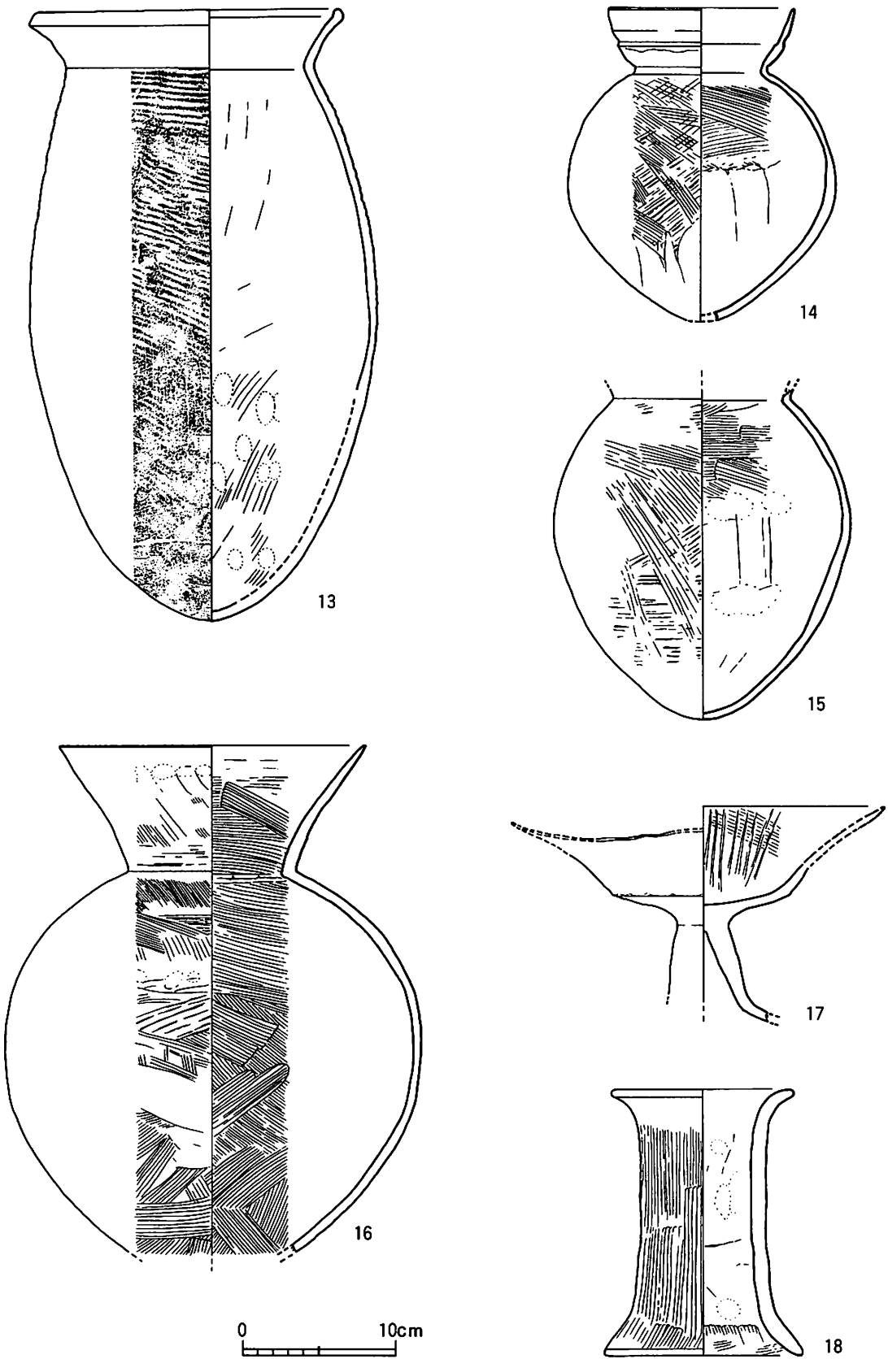


南壁土層断面

第130図　1号溝実測図



第131図　1号溝出土遺物実測図



第132図　1号溝出土遺物実測図

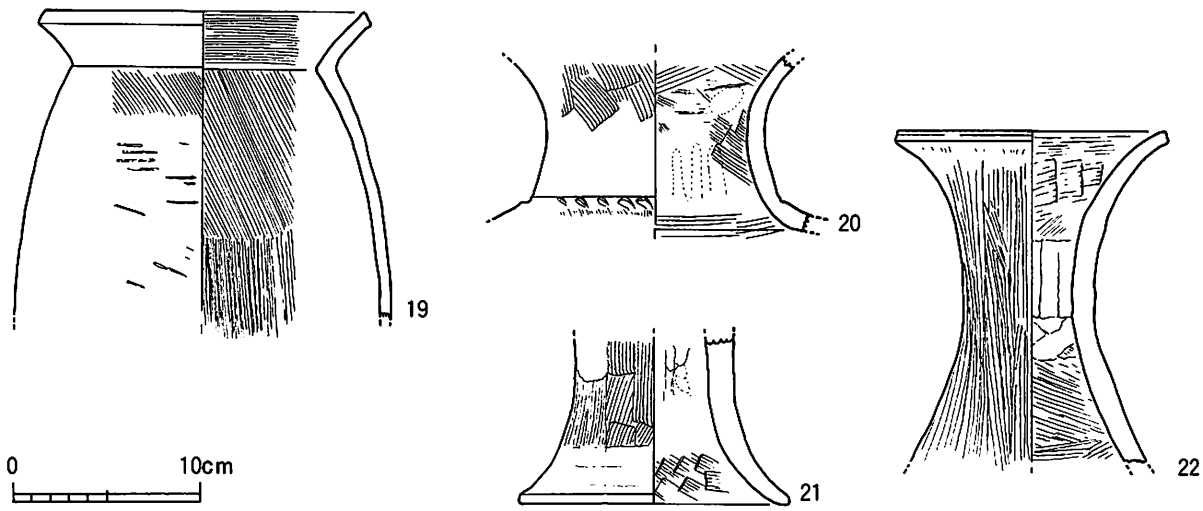
内系の特徴を残している。口縁部を欠いているが、全面に煤が付着している。器面はタタキの後粗いハケ目で掻き消す様に施している。

16（P－122）は壺で底部を欠いている。口縁部は外反気味に大きく開き、胴部は球形を呈している。

17（P－123・127・128・129・3号住一括・上層一括）は高杯で脚裾部を欠いている。杯部は浅く口縁部は外反しつつ大きく開いている、脚には4個の孔を配する様である。18（P－120）は器台で半截の状態である。器面に刷圧痕が見られる。

下層の遺物（18～21）

19（P－162－1）は在地系の甕で口縁部から胴部の中位にかけて残っている。底部は脚台になるもので器面にはタタキ目とハケ目を施している。全面に煤の付着が著しい。20（P－164－1）は壺頸部の破片である、頸部には刺突文を配している。21（P－170）と22（P－165－1）は器台で21は肉厚に仕上げてあった。



第133図　1号溝出土遺物実測図

（5）　2号溝（第134・135図）

1号溝と3号住居跡の西に位置し、トレンチ西端から33～28mの範囲で北北西から南南東に伸びている溝である。

溝は上部幅4.3m、下部幅1.3m程度で基本的には逆台形をしている。東壁は反り気味に広がり、上端部で標高33.66m、下端部で標高32.68mであった。

西壁は東壁に比べると傾斜が緩やかに立ち上がっており上端部で標高33.66m、下端部で標高32.68mであった。なお溝底西側には幅45cm、高さ6cmで平坦部を形成しており、全面から足跡が多数検出された。

土器の廃棄は溝の底には少なく埋没過程において廃棄しており、最終段階で大量の土器が廃棄されていた。埋没してゆく際、主に東側からの土の流れ込みが著しかった。

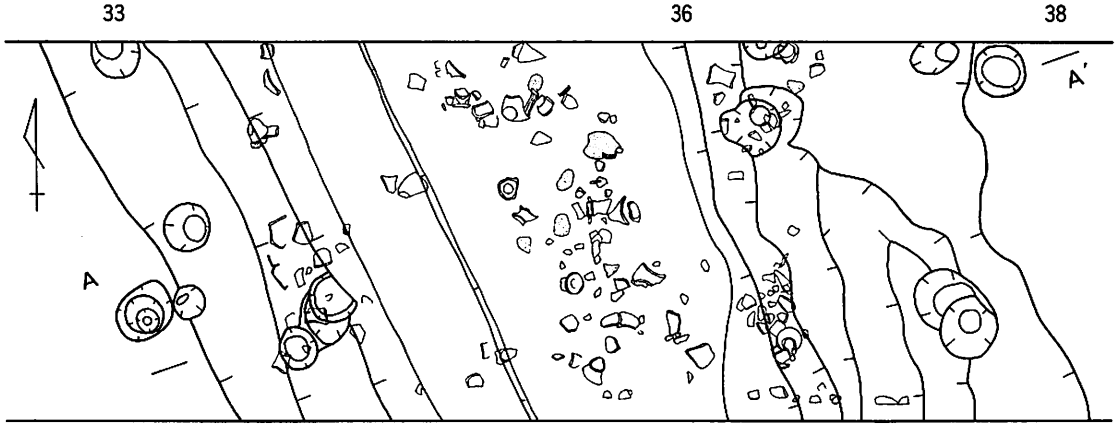
遺　物（第136図）

図面を書いていく中で上部と下部の2層に分けて取上げた。

上層の遺物（23～30）

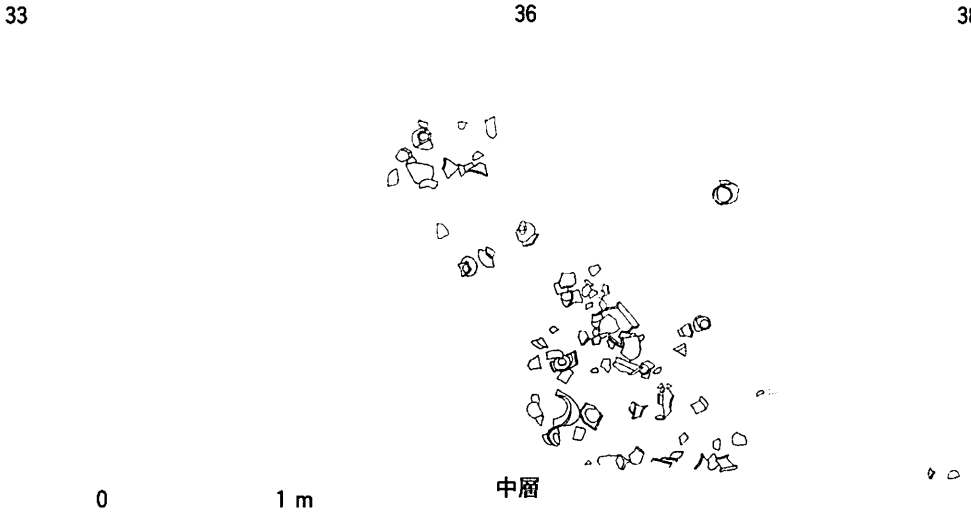
23（P－11）は壺の口縁部で頸部に小さな刺突文が僅かに確認できるが、図化出来なかった。口縁部内側には使用に際して生じた傷跡が残されていた。24（P－1）は小形丸底壺で、口縁部と胴部の間は太い凹線を巡らしていた。器面は外面を削り出した後研磨仕上げをしているが、小さな剥離痕が著しい。25（P－25）は壺の底部で平底である。26（P－18）は鉢の脚部で鉢本体と裾部先端を欠いている。脚には2個の穿孔が3箇所に配されている。27（P－27）も鉢であるが平底である。28（P－6）も29（P－13）器台で下端部を欠いている。30（P－24）は高杯で脚部のみで裾部先端を欠いている。

下層の遺物（31～40）



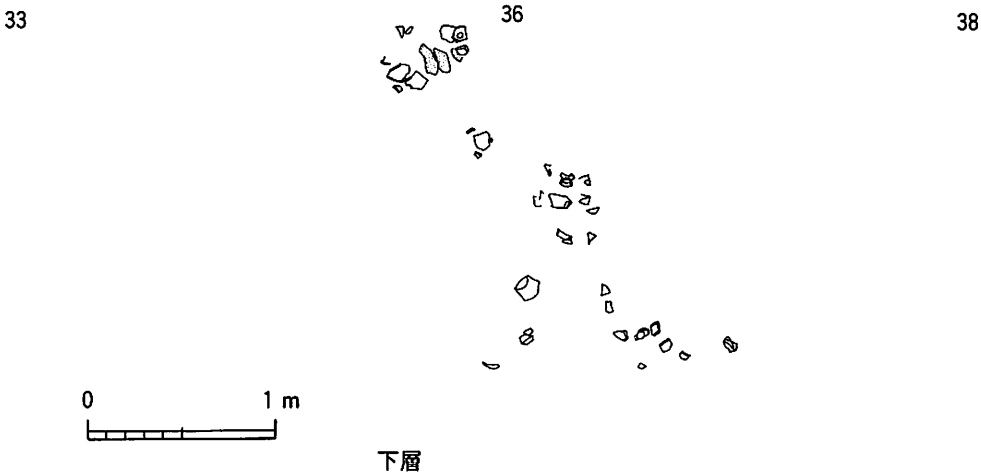
0 1 m

方138　東西1 T　2号溝



0 1 m

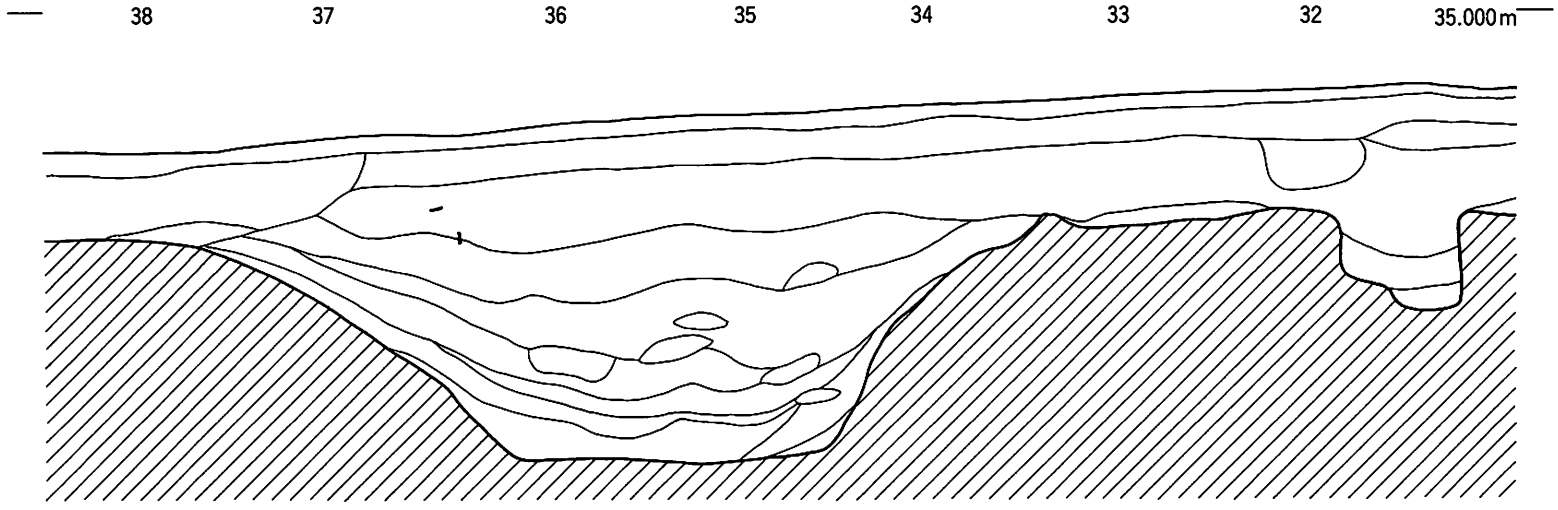
中層

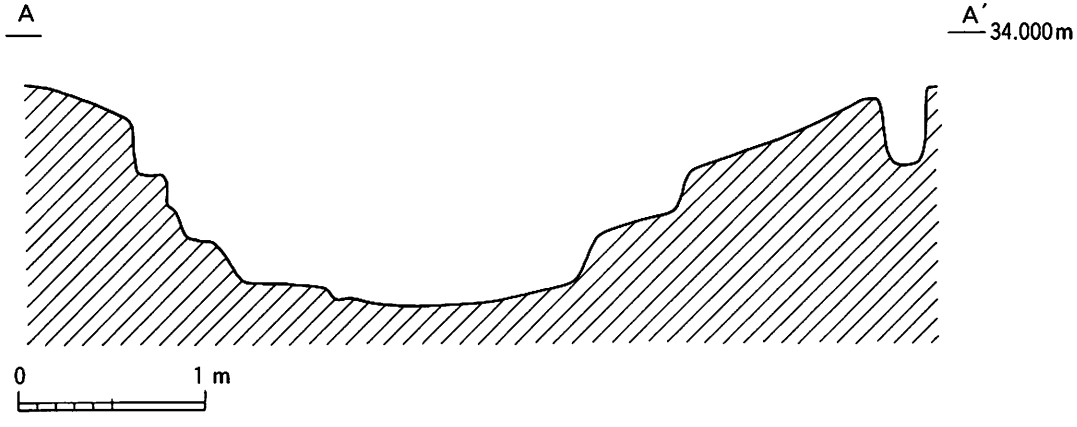


0 1 m

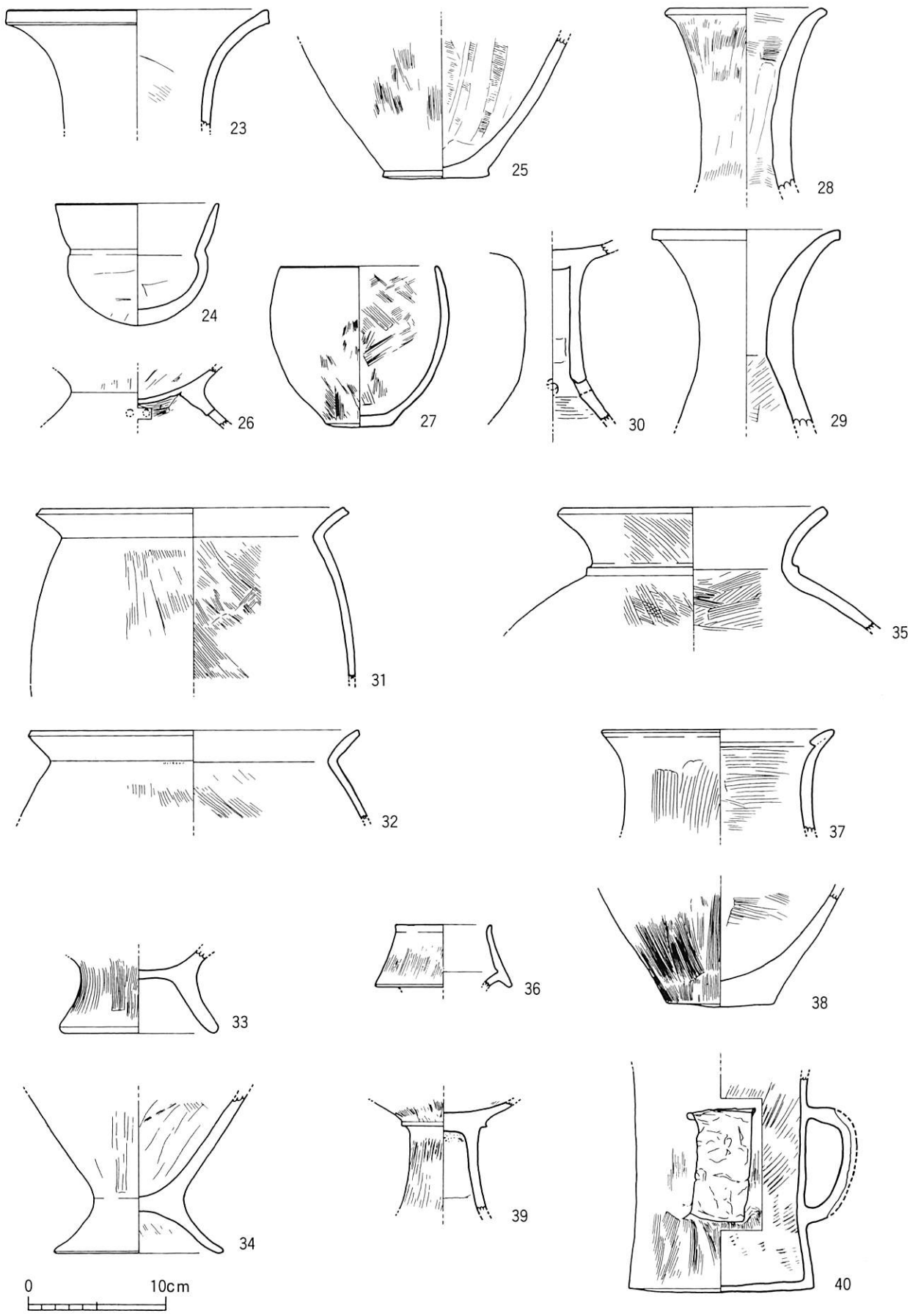
下層

第134図　2号溝実測図　s＝1／20





第135図　方138番地　東西１Ｔ　２号溝実測図



第136図　2号溝出土遺物実測図　s＝1／20

31（P－107）と32（中層一括）は在地系甕で口縁部から胴部にかけての一部である。口縁部は短く胴部の張りも少ない器面はハケ目調整で、タタキ目は見られない。表面には煤の付着が著しい。

33（P－108）と34（P－113）も在地系甕で脚台のみである。33はくびれ部が太く脚自体は短い。

35（P－106・109）は壺である。口縁部は短く外反し頸部に凸帯を巡らしている。胴部は大きく張り底部へと続くが欠損している。36（下層一括）は長頸壺の口縁部である。「く」字に折れた口縁部は特徴的で類例は少ない。37（中層一括）も壺の口縁部で鋤先形をしている。38（P－106）も壺である。胴部下位から底部が残ったもので平底を呈している。39（一括）は高杯で杯部と脚部の間に凸帯を巡らしている。

40（P－96）は溝の肩に穿たれたピット内より出土したジョッキ形土器である。口縁部を欠き、把手表面の剥離が著しい。胴部のくびれは少ないが焼成など仕上がりは優れている。

（6） 3号溝（第137図）

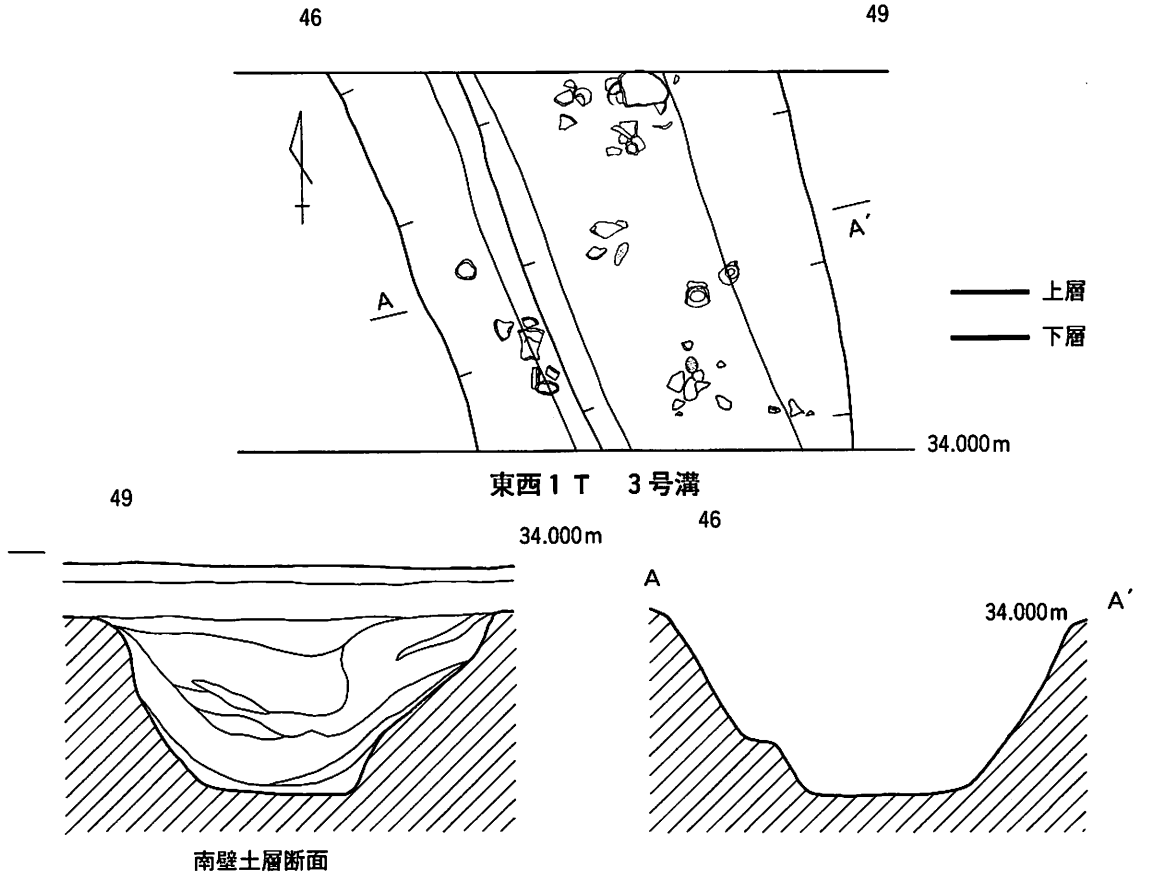
2号溝と4号溝に挟まれ、トレンチ西端から46～49mの範囲で2号溝と並行するように北北西から南南東に伸びている溝である。

溝は上部幅2.2m、下部幅0.9m程度で逆台形をしている。西壁には小さなステップを築いているが、緩やかな傾斜でほぼ直線的に開き上端部で標高33.67m、下端部で標高32.71mであった。東壁は傾斜がきつく直線的に立ち上がっており上端部で標高33.63m、下端部で標高32.75mであった。

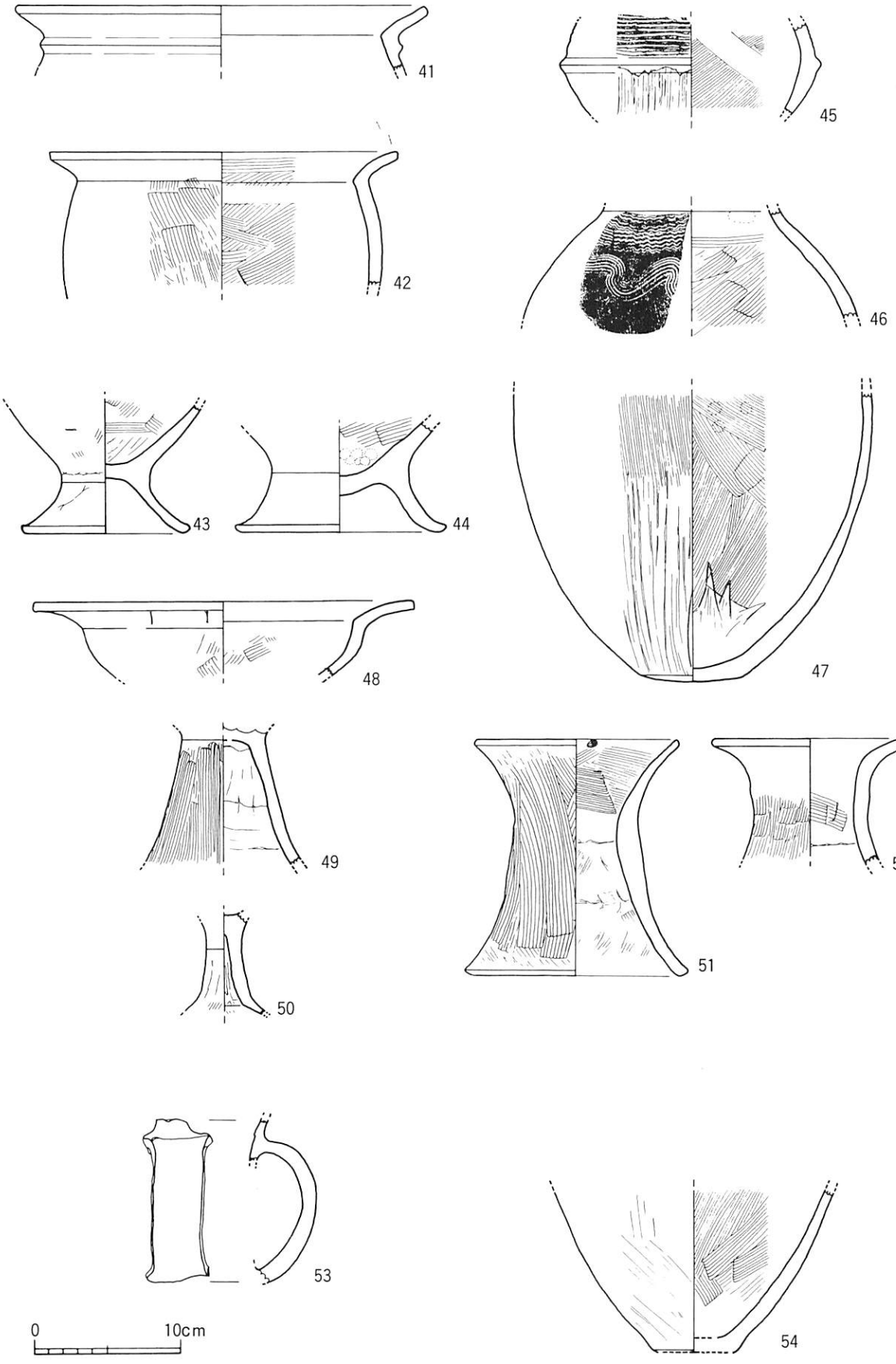
溝底からは土器の破片が数点見られ、埋没過程でも土器の出土は他の溝に比べると極めて少ないようである。出土した土器の多くは埋没途中での混入で溝掘削直後の土器は僅かに1点のみが図化できた。

遺 物（第138図）

41（P－35）と42（P－39）は在地系甕の口縁部から胴部にかけての破片であるが、41には頸部に三角凸帯を巡らしている。器面はハケ目調整である。43（P－42）と44（P－37）も在地系甕で脚台の底部のみであ



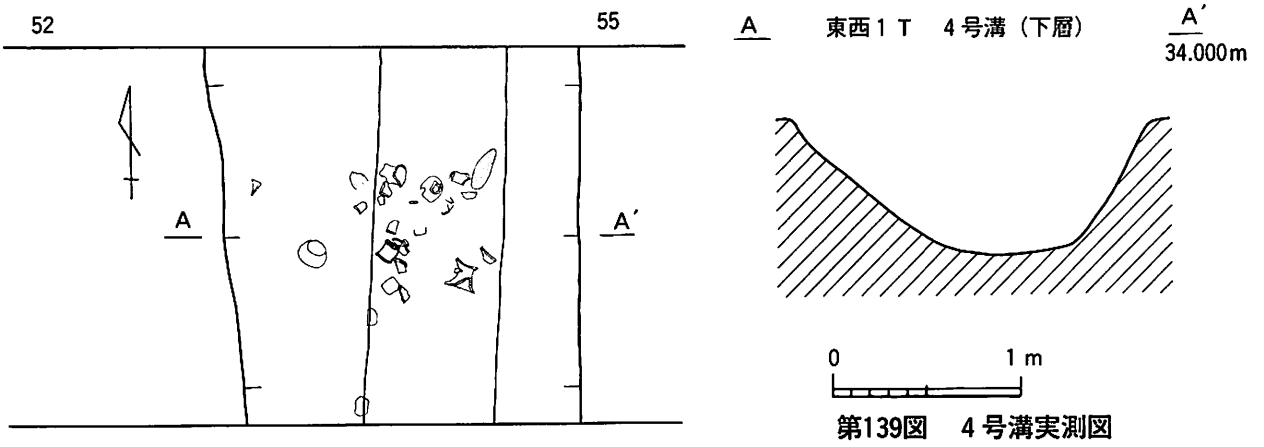
第137図 方138番地 東西1T 3号溝実測図



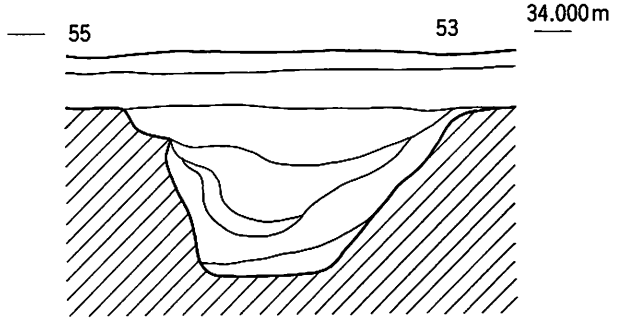
第138図　3号溝出土遺物実測図

る。44はくびれ部が太く脚部が短い。45（P－35）は壺の胴部片で肩部に8本の沈線を巡らし、胴部最大径に三角凸帯も配している。46（一括）も壺の胴部で肩には櫛描き文で大小の波状文を施している。施文具は7本の櫛状のものであるが、外から2本目は先端部が裂き割れしており大小の波状文は同一施文具によることが明らかになった。また、模様は左から右方向に進んでおり、工人の作業手順が理解できる資料である。47（P－40）も壺で胴部中位から底部の破片である。口縁部の形状は不明である。49（一括）と50（一括）は共に高杯の脚部である。49は太く、二次的に火を受けたためか表面は淡い桃色をしている。50は小形の高杯で脚部としては細い。51（P－39）と52（P－44）は器台である。53（P－39）はジョッキ形土器の把手で本体から遊離した状態である。断面は扁平で中央部がやや窪んだ様になっている。

54（P－98・99）は溝の下層から出土した壺の底部である。器壁が厚く焼成もあまり良くない。



第139図　4号溝実測図



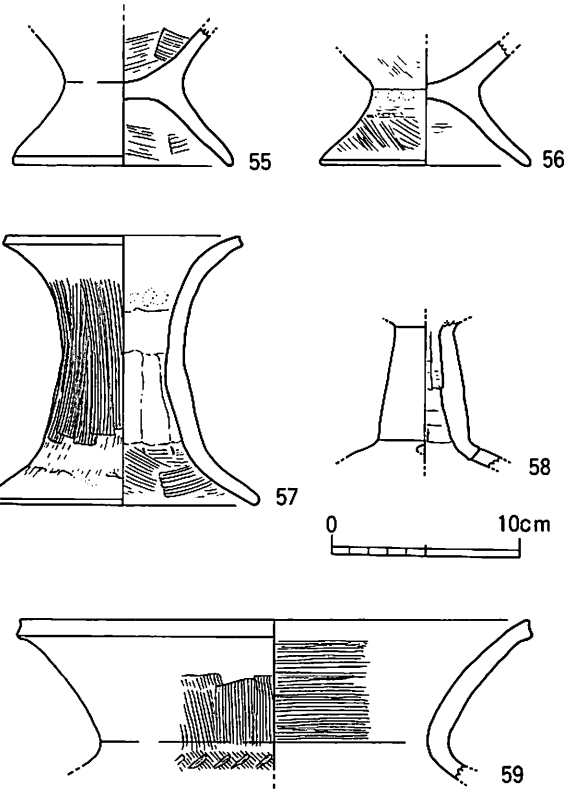
（7）　4号溝（第139図）

3号溝の東に4mの位置でトレンチ西端から53～55mの範囲で南北に伸びている溝である。

溝は上部幅1.9m、下部幅0.7m程度で逆台形をしている。3号溝と同様に東壁は傾斜がきつく直線的に立ち上がっており上端部で標高33.54m、下端部で標高32.89mであった。

西壁は緩やかな傾斜でほぼ直線的に開き上端部では標高33.59m、下端部で標高32.89mであった。

溝底から土器の破片が1点見られたのみで、埋没過程で土器が多少出土したが他の溝に比べると極めて少なかった。



第140図　4号溝出土遺物実測図

遺　物（第140図）

55（P－48）と56（P－49）は在地系甕の底部のみである。57（P－50）は器台で胴部のくびれが顕著である。58（P－49）は高杯の脚で裾先端を欠いている。

59（P－143）は溝底から出た壺である。口縁部から頸部にかけての破片で口縁部は大きく開き、頸部には2列に刺突文が施してある。

（8）　1号道路（第141図）

トレンチ西端から65～70mの範囲でトレンチ東端に位置し、東北東から西南西に伸びている道路状遺構である。

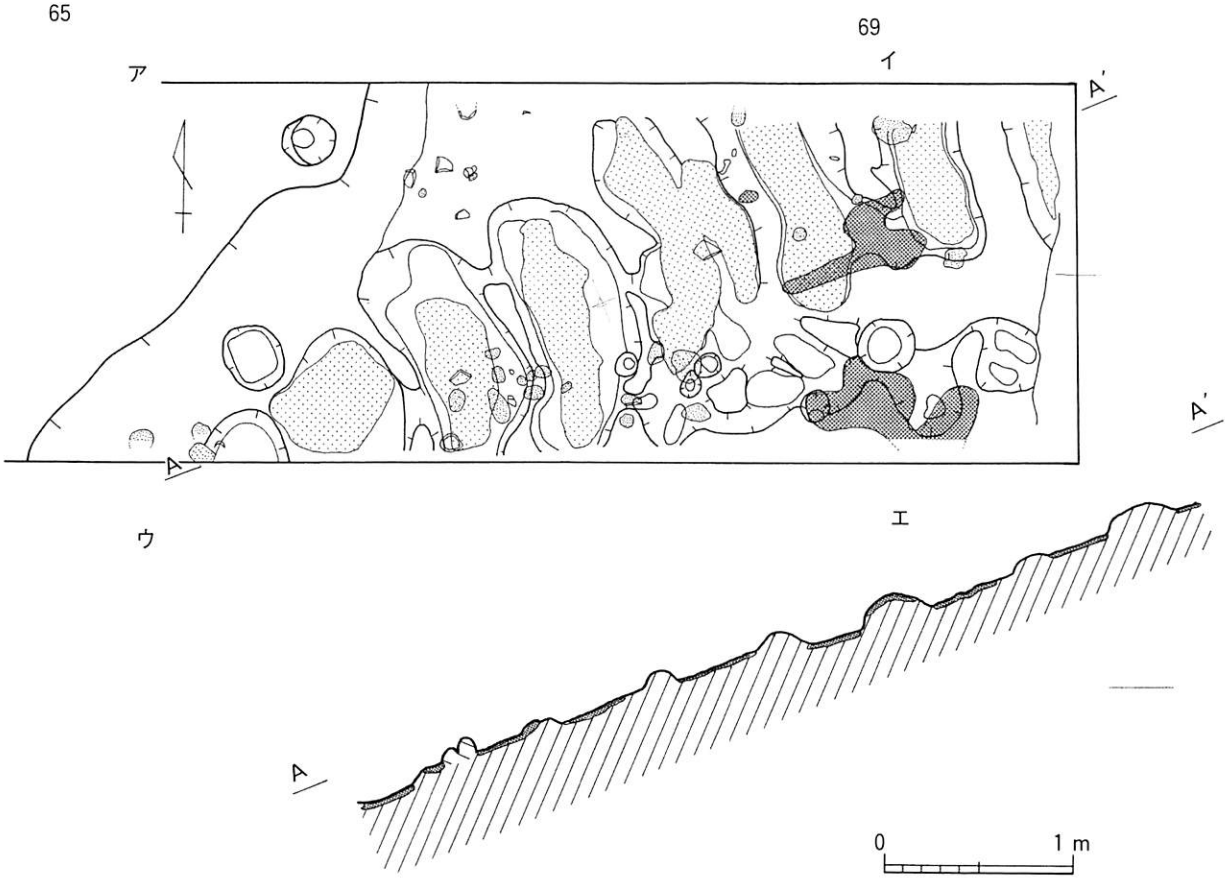
調査の過程では溝の様であったし、県の指導で遺構そのものの掘り下げに対して否定的であったので躊躇したが、出てきた遺物が円筒埴輪片や須恵器等が含まれていたため敢えて掘り下げた結果弥生の溝でも、古墳の周濠でもなく道路であった。

遺構の存在は明らかになっても、それが何であるのかを決定するためには下まで掘らないと判らない事もあり、この遺構に関してはまさしく掘り下げてようやく判断できたのである。

道路自体は両側が高くなった凹地を西南西から東北東に向かって降りていくかのように作られており、不整形ながら9箇所に小石を敷き詰めていた。これらは幅0.3～0.6m、長さ0.5～1.4mでそれぞれの間隔が60～80cmで人の歩幅と合うように配置され、最も西よりの踏み石が標高32.50mで最も東寄りの踏み石が標高32.35mで、市道を挟んで北東隣の268番地の各トレンチへと続いていた。

敷石は直径1cm程の小石から大きいもので15cm程の小石が使われているが、殆ど角のない円礫が使われ、上面が扁平になるよう配置していた。道は西から東へ向って低くなっておりあたかも東側の谷に向っているようである。

時期については共伴資料が少なく判断に苦しむが、埋土の上層から円筒埴輪片や古代の土師器、須恵器等が出土しているところから弥生時代から古墳時代前半の間に位置付け出来よう。不整形土坑と隣接しているためここで一括して紹介する。

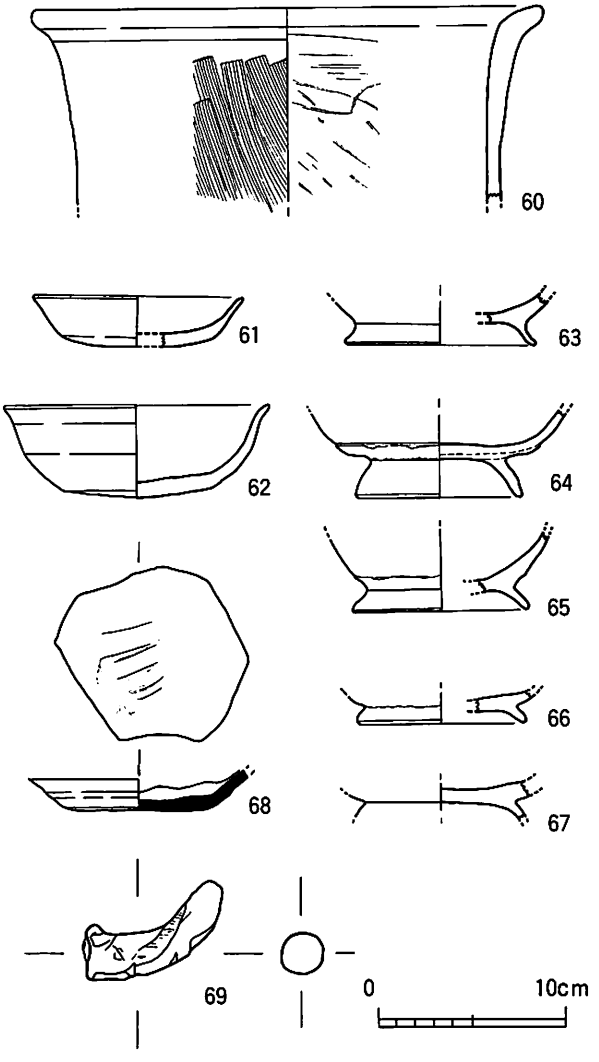


第141図　138番地　1号道路実測図

遺　物（第142図）

埋土上層に見られた土器ばかりであるが、60は土師器の甕もしくは甑である。表面は煤の付着が著しい。

61・62は土師器の皿で61は内外共にすすの付着が著しく底部は板目を残している。63～67も土師器の皿であるが、底部には高台が見られる。とくに64は高台が高い。68（P－55）は須恵器で底部は板目を残している。69は土師器の把手である。細くて湾曲が著しい。



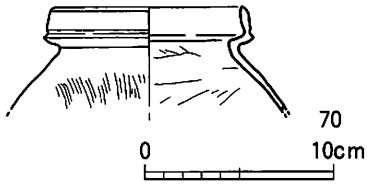
第142図　1号道路出土遺物実測図

（9）　不整形土坑

1号道路の西に隣接しトレンチ西端から63～65mの範囲で検出されたもので、輪郭も内部も不整形であった。本来墓地等として空間を利用する場合外形線や内面は整えるのが常識であるが、この遺構に関しては空間を作り出すことが目的でなく、土や粘土を採取することを目的とした結果できたものであろう。このような土坑は過去の調査でも見られ、例えば住居の床の整形用に粘土の採取をしたり、土器製造用に採取した跡の可能性も考えられる。

（10）　遺構に伴わない遺物（第143図）

70は山陰系の壺の口縁部である。口縁部は垂直に立ち上がり、肩が大きく張った胴部であるが欠いている。器面は外面をハケ目調整、内面をヘラ削りで仕上げている。



第143図　遺構に伴わない遺物実測図

2　南北トレンチ（第124図）

国土座標　南北X＝－702～－712・

東西Y＝－26,060～－26,054

東西第1トレンチの調査を進めていく中でトレンチ西端の6～12m近くで祭祀遺構が検出された。最初の段階では住居と考え2号住居と並行して掘り下げたが、2号住居は僅か10cm程度で床面が検出されたのに対し、この遺構では50cm以上掘り下げても壁が傾斜しながら降りていて、トレンチの範囲では床に達することが出来なかった。加えてトレンチの南側土層図作製後壁に残っていた遺物を取り上げた際、完形の甕や壺が出てきたのである。

本来は12月末で138番地は全て埋め戻し地権者へ返済する予定であったが、再度地権者の協を求めてこの部分の拡張を行い、他のトレンチについては全て埋め戻した。

なお、トレンチ西端の５～９ｍの間を南に10m拡張したもので、ここでは祭祀遺構の確認を目的として調査した。

（１） 祭祀遺構（第144・145図）

東西第１トレンチ西端から６～12mの範囲で２号住居と並ぶように検出されたもので、１号住居を切っていた。

今回の調査では全体の半分過を掘り下げ、残りは将来の整備や保存のため未発掘としたが、東西第１トレンチでは東西方向に北壁が5.8m、南北トレンチでは西壁が３ｍの規模で確認され、平面形は隅丸の長方形を呈しており中央では最大幅４ｍを測る。断面は多少のステップを持つが基本的には摺り鉢状をしていた。この中に庄内期の土器が完全な姿で安置するようにして累々と出土した。

出土状況を観察してみると第一段階では、祭祀土坑を掘り下げた直後で土器の量も少なく、割られたものを中央部に集中して廃棄していた。また、床面には一人の子供の足跡が残されていた。

第二段階ではこれらの上に据えるようにして甕を主体に土坑全体に広げて置いていた。特に甕は完全な姿を留めている物が集中し10個以上が確認できた。これらの多くには胴部穿孔が見られ、真牡蠣の殻が入れていたものも見られた。

第三段階では再び土器の破片が多く見られ、前段階の土器が埋もれてしまう程に土器片を廃棄していた様な出土状況であった。

第四段階は完全に埋没した状態で、山陰系土器やミニチュア土器が集中して出土している。

これらの事から、この土坑が祭祀行為そのものを行なったというより、祭祀行為に使用した土器の一括廃棄もしくは保管の意味があったものと考える。

祭祀行為に関しては２号住居で行なった可能性も高く、前の段階では１号住居で行なっていたものと考えられる。いずれにしてもこの周辺での祭祀行為が行われたことは間違いないが、どの様なものであったか別項で検討したい。

遺　物（第146～157図）

第一段階の遺物（１～６）

１（Ｐ－242・244・250・259・262・279）は在地系地甕で底部は丸底である。口縁部は「く」字に折れ胴部の張りは少なく粗いタタキ目を残している。外面は煤の付着が著しい。

２（Ｐ－63・70・85・87）も在地系地甕で底部は丸底になる。口縁部は「く」字に折れ胴部の張りは少なく粗いタタキ目を残している。外面は煤の付着が著しい。

３（Ｐ－247・248・250・277・278）は短頸の壺で底部を欠いている。口縁部は外反しつつ広がり、胴部はやや長胴で水平方向の粗いタタキ目を施している。４（Ｐ－248・247・250・278・297）も壺であるが、口縁部と底部を欠いている。胴部は球形に近く、肩部内面には輪積みの粘土帯が見られる。５（Ｐ－280）は小形丸底壺で胴部に穿孔が見られる。胴部にはタタキ目が施され、その後ヘラ削りで仕上げている。

６（Ｐ－151）は鉢形の甑である。底に直径4.35㎜の孔が穿たれている。器面は熱のため桃色に変色している。

第二段階の遺物（７～27）

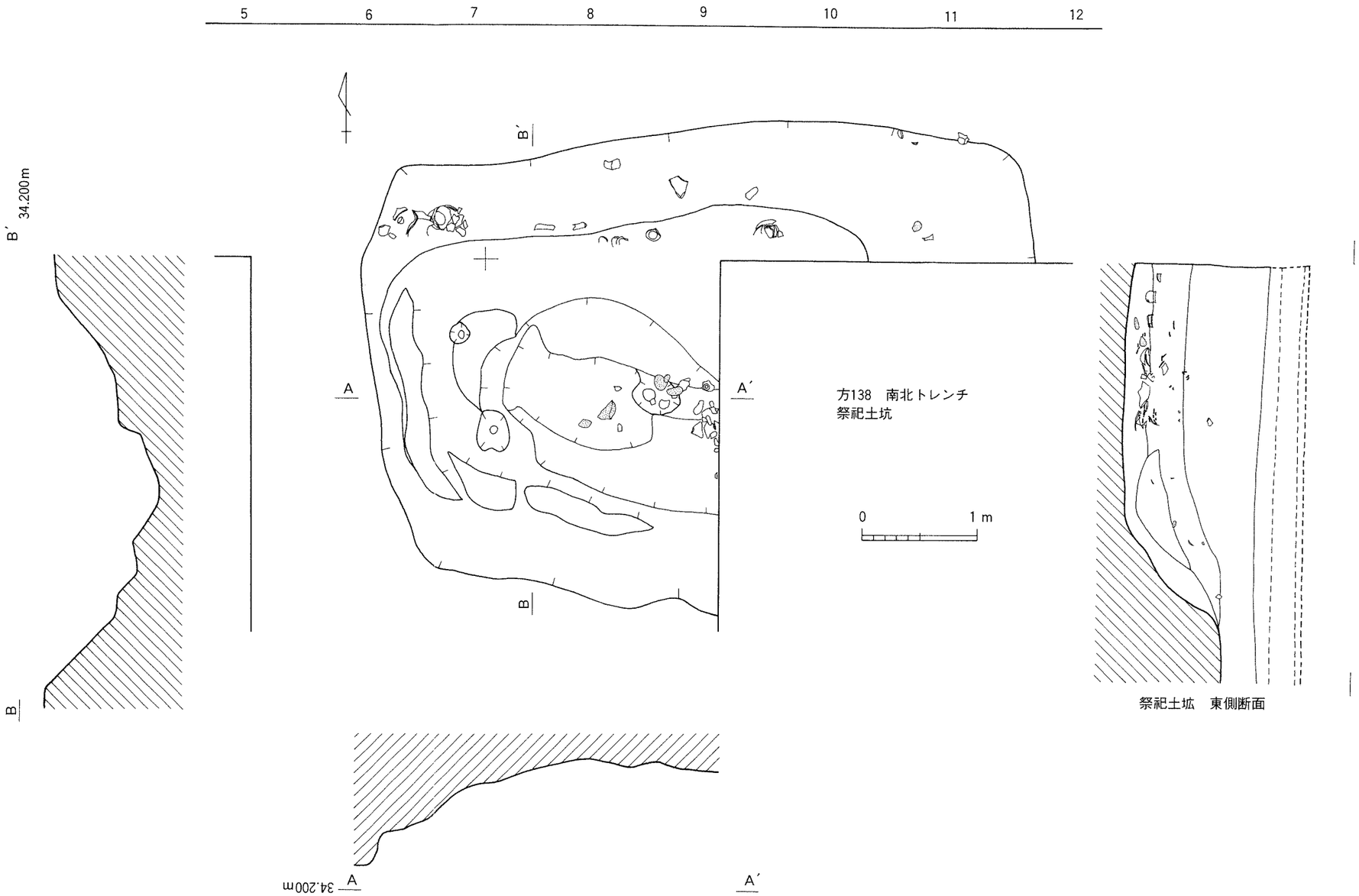
７（Ｐ－197・238・239・242・244・266・282）は在地系甕で底部は丸底である。口縁部は「く」字に折れ胴部の張りは少なく粗いタタキ目を残している。外面は煤の付着が著しい。

８（Ｐ－198・203・205・245・北東下層一括・北端下層一括）は外来形の甕である。口縁部は内湾気味に開き、胴部は肩の張った卵形で底部を欠いているが、尖り気味の丸底になる。胴部はハケ目仕上げで肩には１条の沈線で波状文を描いている。表面には煤の付着が著しい。

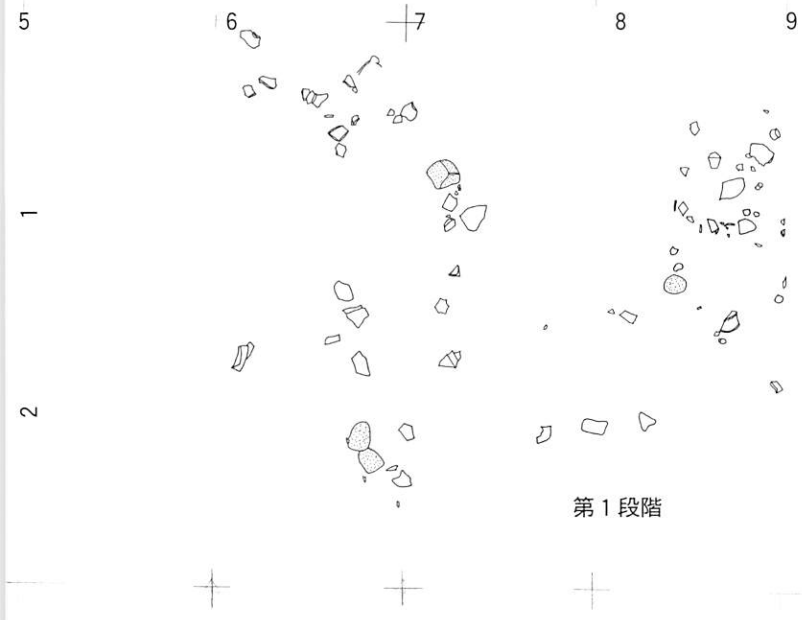
９（Ｐ－197）は外来形の甕である。口縁部は内湾気味に開き、胴部は肩の張った卵形で尖り気味の丸底になる。胴部はハケ目仕上げで肩には１条の沈線を配している。表面には煤の付着が著しく、内面にも焦付きの痕が明瞭に残っている。

10（Ｐ－211・251）は小形の外来系甕である。底部を欠くが恐らく尖り気味の丸底になる。粗いタタキ目を胴部に施し、煤の付着も著しい。

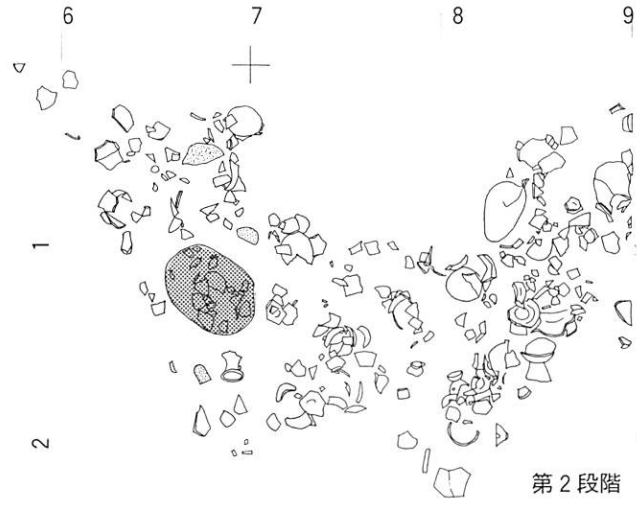
11（Ｐ－193・204・212・213・214・216・243・263）は外来系の甕で、胴部と底部が接合面の確認が出来たため図上で復元した。口縁部は先端を摘み上げ胴部は



第144図　138番地　南北Ｔ　祭祀土坑実測図

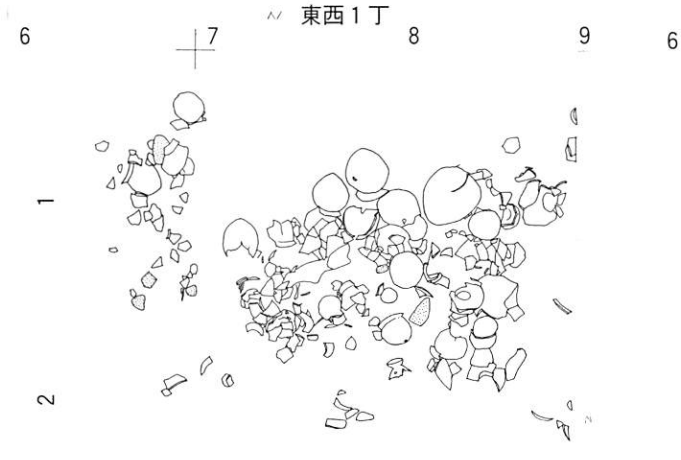


第 1 段階



第 2 段階

方138　南北 T　No. 2　2／4



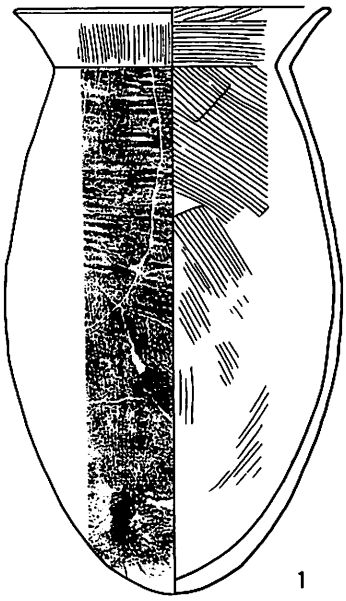
第 3 段階

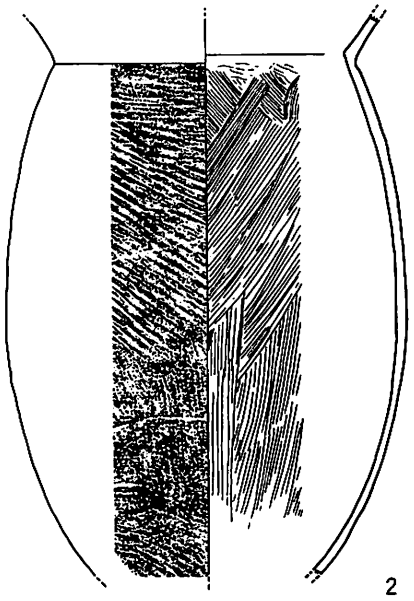


第 4 段階

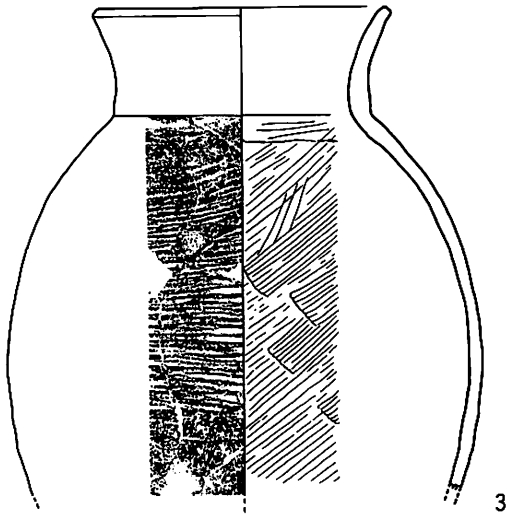
方138　南北 T　No. 4 （中） 3／12

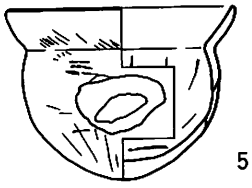
9 第145図　祭祀土坑遺物出土状況実測図

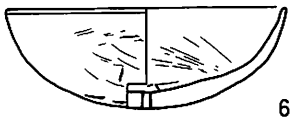


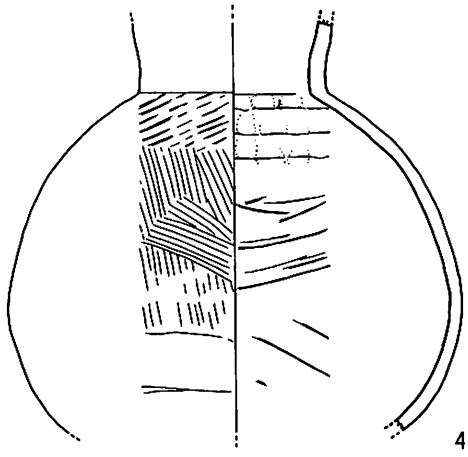






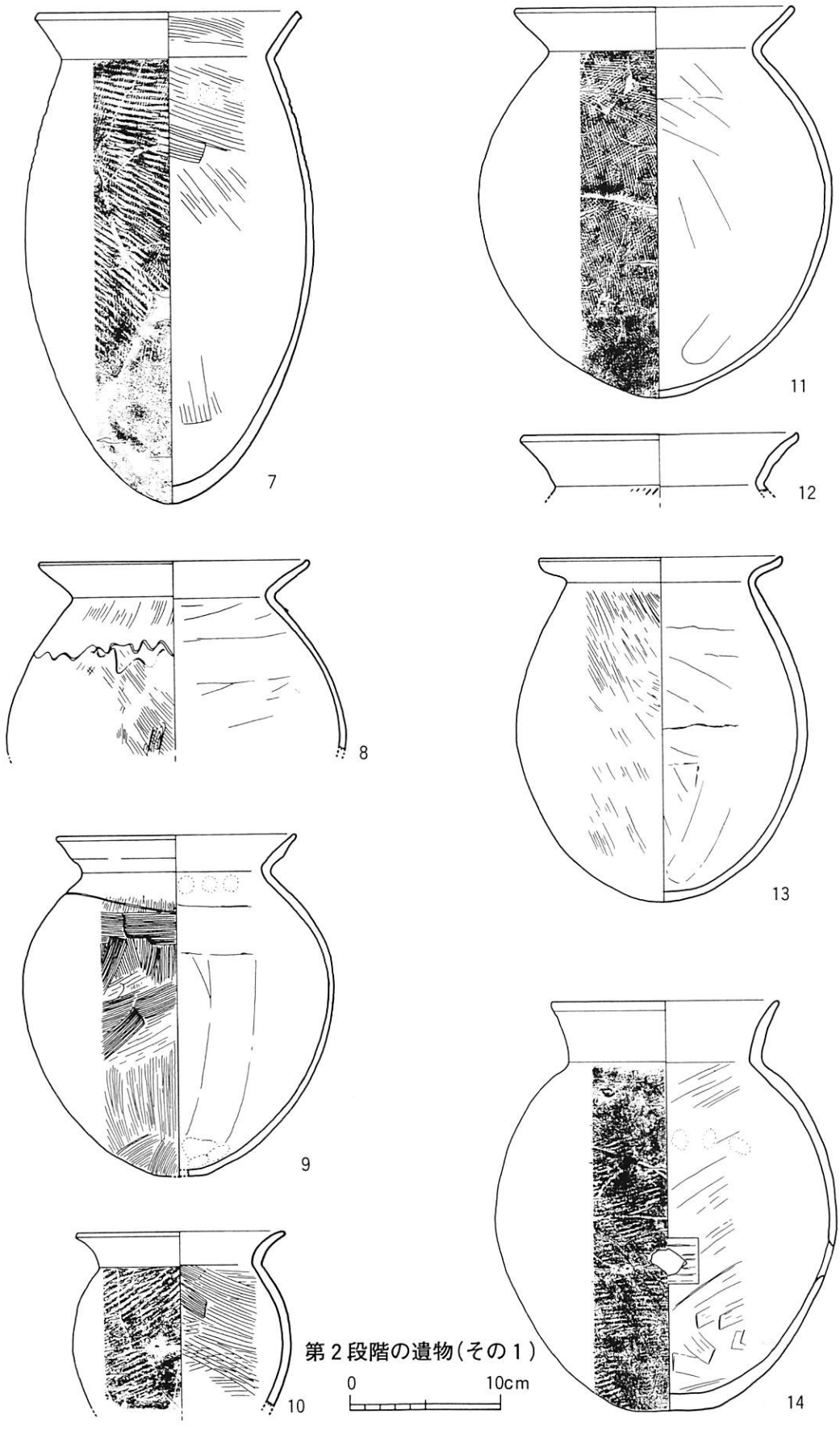




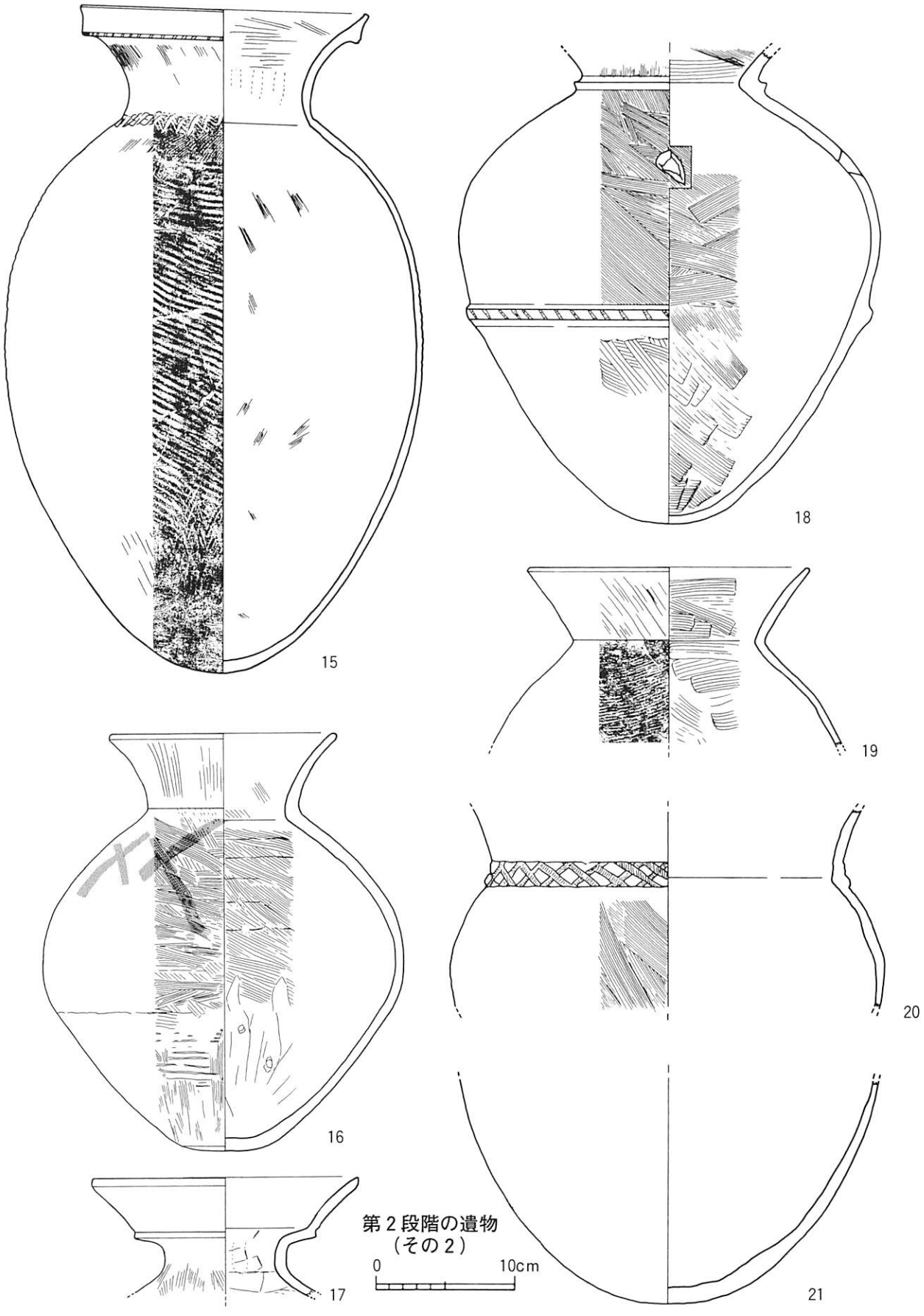


第１段階の遺物

第146図　祭祀土坑出土遺物実測図



第147図　祭祀土坑出土遺物実測図①



第148図　祭祀土坑出土遺物実測図②

丸味を持ち全面に明瞭なタタキ目を施している。底部は尖り気味の丸底である。表面には煤の付着が著しい。内面にも焦付きの痕が明瞭に残っている。12（P－18・234・235）は外来系甕の口縁部である。内面の剥離が著しいが煤の付着は見られない。

13（P－258）も外来系甕である。胴部中位に最大径を配し、底部は気丸底である。口縁部は短く水平に近く開いている。胴部の表面にはタタキ目の後にハケ目仕上げを行っており、煤の付着が著しい。その様な中に煤が飛ばされたように1条の筋が見られ、煮炊きによってふきこぼれた痕の様である。内面にも焦付きの痕跡が著しい。

14（P－247・281）は壺である。口縁部は僅かに開き気味に直口し、端部は膨れている。胴部にはタタキ目を施し、中央部近くには穿孔が見られる。内面にはヘラ削りで仕上げている。

15（P－221・222・265）は白川流域に多く見られる壺である。口縁部は三角形で下端部には刻み目を施し、頸部にも刻み目を巡らしている。胴部は長く全面に粗いタタキ目を施しており、内面では中位から底部にかけて使用時に生じた器面剥離が著しい。このことから壺の中には液体ではなく固体を入れるために使用したものと推察される。

16（P－197・244）も壺であるが、籠目痕を残しており、運搬の際付いたものと推察される。17（P－260）は山陰系の壺で口縁部と頸部のみである。口縁部は二重で、外部には凸帯状に摘み出している。

18（P－245）も壺である。口縁部は欠いているが頸部には凸帯を巡らし、胴部は肩が張ったように作られ、中位より下にも凸帯を配している。さらにこの凸帯には刻み目を施している。底部は小さな平底であるが、やや膨らみが見られる。なお肩部に穿孔が見られるが、破損時に欠落した可能性もある。

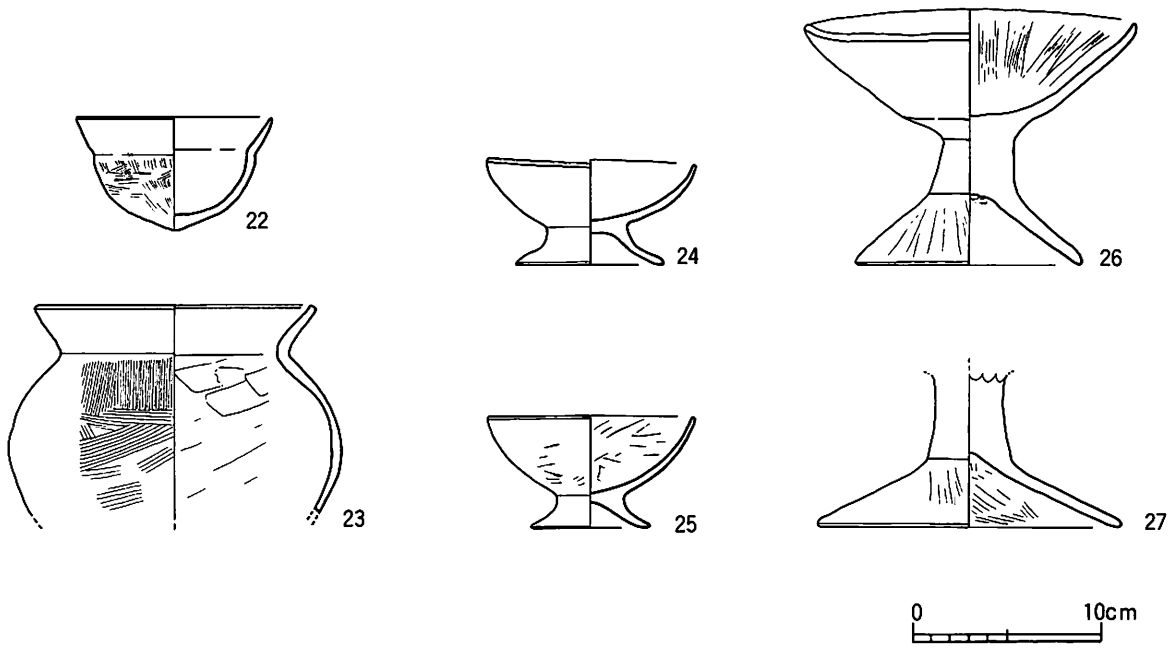
19（P－145・242・北東中層一括・北端下層一括）は胴部以下を欠く壺である。口縁部は直線的に開き、胴部は球形をなすものと思われる。胴部には細いタタキ目が明瞭に施されていた。

20（P－245・249・282）と21（P－246・247・249）は接点が確認できなかったが同一固体の可能性が高い。頸部には刻み目を入れた凸帯がめぐり、胴部から底部にかけて器面隔離が著しかった。

22（P－242・243）は小形丸底壺である。外面にはハケ目が残るが、内面はナデ仕上げを行っている。

23は外来系の甕で、胴部中位以下を欠いている。外面には煤の付着が著しい。

24（P－213）と25（P－239・240）は小形の脚付き鉢で24の内面は器面の剥離が著しく、25では鉢外面下部で剥離が見られる。



第149図　祭祀土坑出土遺物実測図

26（P－220・252・262）と27（P－257）は高杯である。26は杯部が傾いており、内面は器面の剥離が著しい。

第三段階の遺物（28～66）

28（P－192）は外来系の甕で口縁部は外反しつつ広がっているが、一部片口状に歪が見られる。胴部は球形で粗いタタキ目を残し、煤の付着が著しい。とくにこの甕は煮炊きの際にふきこぼれて煤が筋状にきえていた。底部はヘラ削りによって尖っている。

29（P－138・193・221・222）も外来系の甕で口縁部は僅かに内湾気味に開いている。胴部は球形で粗いタタキ目を残し煤の付着が著しい。底部はヘラ削りによって尖り気味である。底部には煤の付着は見られない、恐らく器台などの使用による現象であろう。なお胴部には籾圧痕が見られる。

30（P－192・193・197・217・220・263・264・北端下層一括・北東下層一括）も外来系甕である。口縁部は外反しつつ広がり、端部を摘みあげている。胴部は倒卵形でタタキ目と底部近くでは粗いハケ目で掻き消している。器面には全面に煤が付着しており、底部近くは熱による器面剥離が見られる。胴部内面はヘラ削りで仕上げているが、4.5～5.5cm間隔で直径1～1.5cmのくぼみが同じ高さで8個確認できる。恐らく土器製作段階で工人の指の痕が残ったものと考えられる。

31（P－199・201・北東下層一括）は底部を欠く外来系の甕で口縁部は外反しつつ広がっているが、内面は剥離が著しい。胴部は球形で粗いタタキ目を残し、外来系の甕で口縁部は外反しつつ広がっているが、歪が見られる。胴部は球形で粗いタタキ目を残し、煤の付着が著しい。

32（P－188）は胴部に穿孔されているが完形の外来系の甕である。煤の付き方に特徴が在り、甕を斜めにした常態で使用した際に生じたように胴部の煤に偏りが見られた。また、穿孔も直径2～2.5cmで外側から内側に向かって叩かれていた。

33（P－236）も口縁部を僅かに欠いているが、ほぼ完全な外来系の甕である。胴部にはかすかに叩き目を残しハケ目仕上げを行っており、胴部上位は煮炊きによるふきこぼれが見られ、下位には煤の付着が著しい。この甕には真牡蠣の殻が5枚残されており、当時の海産物の流通を考えるうえにも貴重な資料である。内面に於いても焦げ付きの痕が見られず、水分の多い調理を行っていた事を物語っている。

34（P－235）と35（P－238）は胴部以下を欠く外来系の甕で、共に煤の付着が著しい。

36（P－208）は小形の外来系の甕で口縁部は外反しつつ広がっているが、一部片口状に歪が見られる。胴部は球形で粗いタタキ目を残し、煤の付着が著しい。また煮炊きの際にふきこぼれて煤が筋状にきえていた。底部はヘラ削りによって尖っている。この土器は28の甕と形状、器面調整、胎土、色彩等が極めて類似しており同じ工人の手による可能性が高い。

37（P－187・220）も小形の外来系の甕で口縁部は外反しつつ広がっており、先端は摘み上げている。

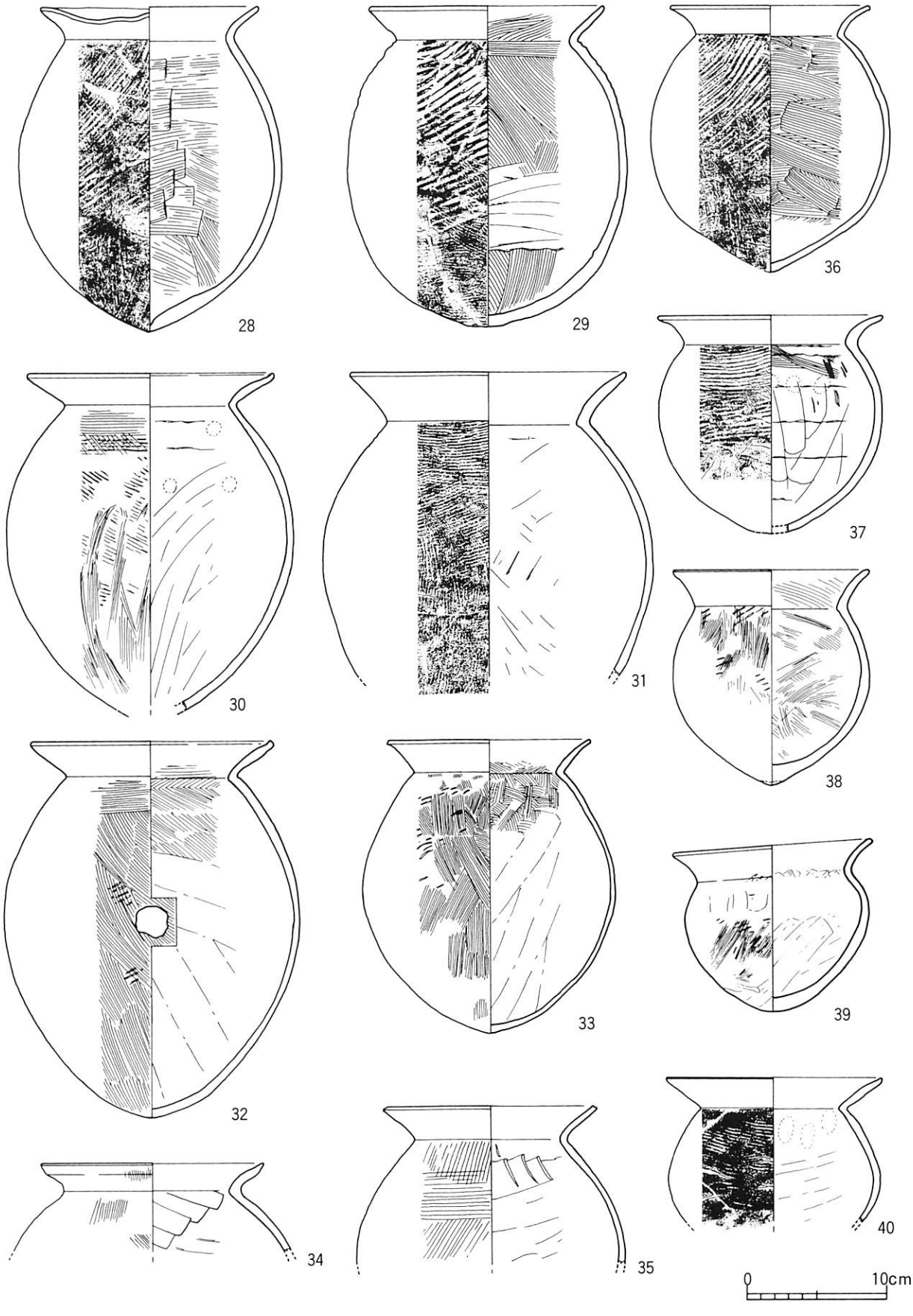
全面に煤の付着が著しく、内面には焦付きの痕が見られる。この土器も31の甕と形状、器面調整、胎土、色彩等が極めて類似しており同じ工人の手による可能性が高い。

38（P－234・235・237・北西下層一括・北端下層一括）も小形の外来系の甕で口縁部は外反しつつ広がっている、胴部は球形で底部は尖り気味の丸底である。胴部には粗いタタキ目の後ハケ目で掻き消すようにしており、全面に煤の付着が著しい。

39（P－194）は口縁部の一部を欠いているが、ほぼ完全な小形の外来系の甕である。胴部にはかすかに叩き目を残しハケ目仕上げを行っており、胴部下位には煤の付着が著しいが煤に偏りが見られた。

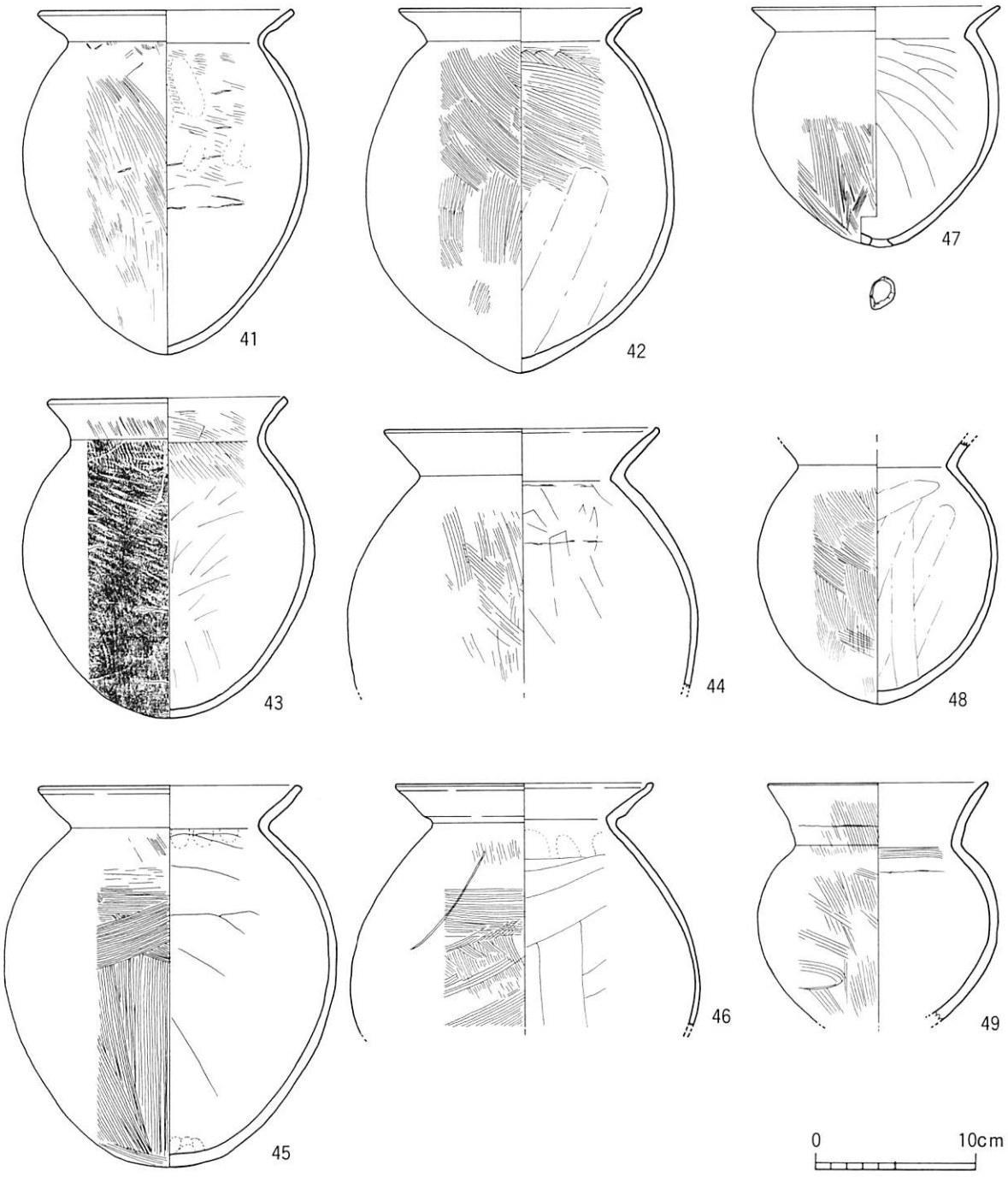
40（P－128・214・218）も小形の外来系の甕である。底部を欠くが尖り気味の丸底になる。煤の付着はなく、6と同様に器面は熱のため桃色に変色している。

41（P－198）外来系の甕で口縁部を破損しているが、胴部以下は残りが良い。器面はハケ目調整で仕上げ、煤の付着は全面に及んでいる。内面には焦付きの痕が見られる。42（P－187）も口縁部の一部を破損しているが、ほぼ完全な形を残す外来系の甕である。器面はハケ目調整で仕上げ、煤の付着は全面に及んでいる。内面には焦付きの痕が見られる。43（P－217・222・226・261）も外来系の甕で胴部には粗いタタキ目で仕上げられ、器面は真っ黒に煤が付着している。44（P－124・148・214）外来系の甕で胴部下位から



第３段階の遺物（その１）

第150図　祭祀土坑出土遺物実測図①



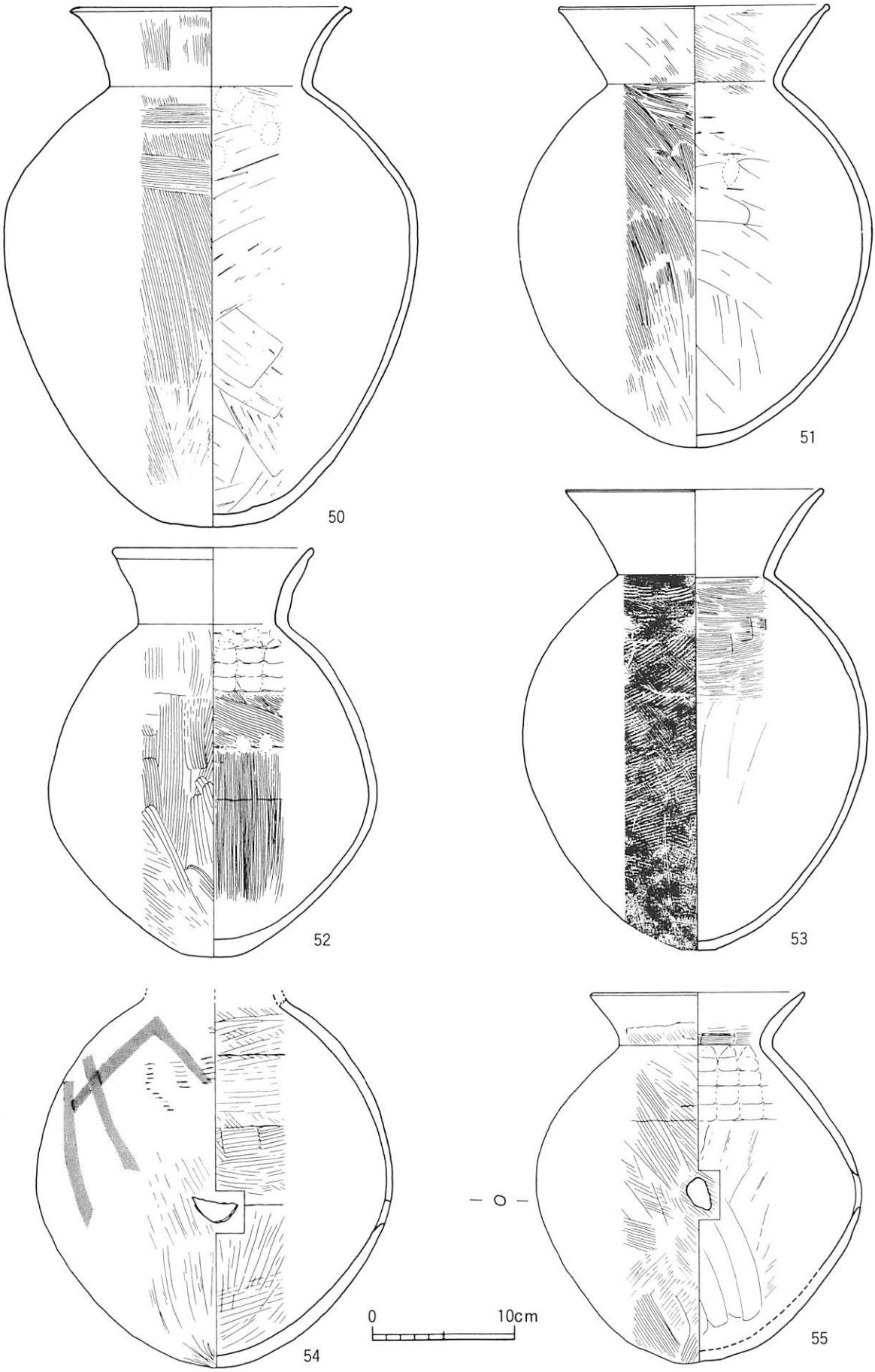
第３段階の遺物（その２）

第151図　祭祀土坑出土遺物実測図②

底部を欠いている。45（Ｐ－186・189・193・263・北端下層一括）も外来系の甕で胴部を破損しているが残りが良い。口縁部は内湾しつつ開き、胴部は倒卵形で器面はハケ目調整で仕上げ、煤の付着は全面に及んでいる。内面には焦付きの痕が見られる。

46（Ｐ－196）も外来系の甕である。口縁部は内湾しつつ開き胴部の張りは下位に配している。底部は欠くが尖り気味の丸底になる。煤の付着に偏りが見られる。

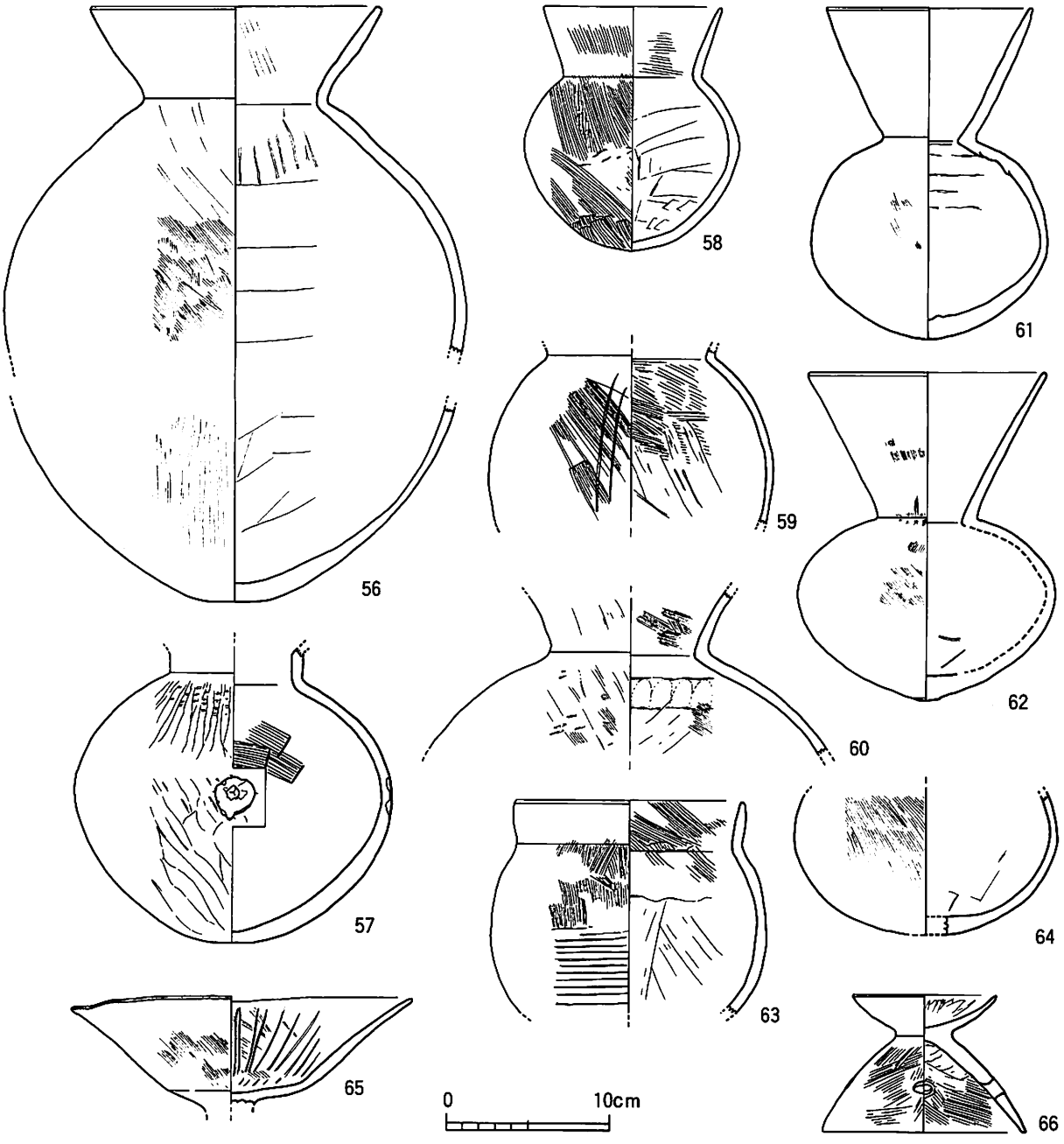
47（Ｐ－210）は小形の外来系の甕である。ほぼ半欠であるが口縁部から底部まで残している。底部には内から外に向かって穿った孔が１個ある。煤の付着は見られない。48（Ｐ－185）は口縁部を欠く小形の外来系の甕である。胴部には細かいハケ目を施し、一部



第152図　祭祀土坑実測図③

に煤の付着が見られる。49（P－197・北東下層一括）も小形の外来系の甕で底部を欠いている。口縁部は比較的長く胴部の張りも小さい。

50（P－183）は壺で口縁部の一部を欠いているが、胴部は完全な状態である。胴部は肩が張るように上位に最大径がある。51（P－199・201・241・243・北東下層一括）も壺である。口縁部は直線的に開き、胴部は球形に近い。細かいハケ目が施され焼きが良い。52（P－221）は胴部の下位に最大径を配している。胴部肩の内側には輪積みの粘土帯が4条見られ、指の痕も見られる。53（P－113・185・234・235・北端下層一括・北西下層一括）は胴部にタタキ目の後にハケ目で掻き消しており、加えて籠目痕が明瞭に残されている。54（P－217）は口縁部を欠いている壺で、胴部は球形でタタキ目の後研磨していた。この壺も胴部に籠目痕が明瞭に残されている。また穿孔らしい孔が1個見られる。55（P－195）は口縁部の一部を欠くが完全な形状をしている。胴部には2個の穿孔が共に外から



第153図　祭祀土坑出土遺物実測図④

内に向けて穿たれている。

56（P－183・北端下部一括・北東下層一括）は接点が確認されなかったが、57と明らかに同一固体である。

57（P－205）は口縁部を欠くが頸部以下は完全な姿を留めている。胴部は球形で研磨仕上げである。胴部には円形に器面の剥離が見られるが、中心部に小石が残っており、色彩が表面と剥離面が同じであるところから焼成段階での剥離と推察された。58（P－215）は51と焼成や色彩、器面調整等共通点が多く同一工人による小形の壺である。口縁部を一部欠いているが頸部以下は完全な姿を留めている。ハケ目が明瞭に残り、口縁部内側の器面剥離が著しい。59（P－177・199・祭祀土坑上層一括・北東下層一括）は胴部上部のみの破片である。60（P－203・206）も頸部から肩にかけての破片である。61（P－203）と62（P－237）は良く似た壺である。共に残りが良い。63（P－207・北東下層一括）は手捏ねの甕である。底部を欠き煤の付着が著しい。64（P－198・217・221・北西一括・北東下層一括・北端下層一括）は口縁部を欠く鉢である。65（P－18・119・126・北東中層一括・北西中層一括・北東下層一括）は脚部を欠く高杯で、杯内面にはヘラ条痕が明瞭に残っている。66（P－209）は山陰系の器台である。

第四段階の遺物

上層の遺物

67（P－168）は外来系の甕で表面に煤の付着が著しく、内部には焦付きの痕が明瞭に残されている。また、胴部内側の肩と中位には土器製作段階での工人の指の痕が残っている。

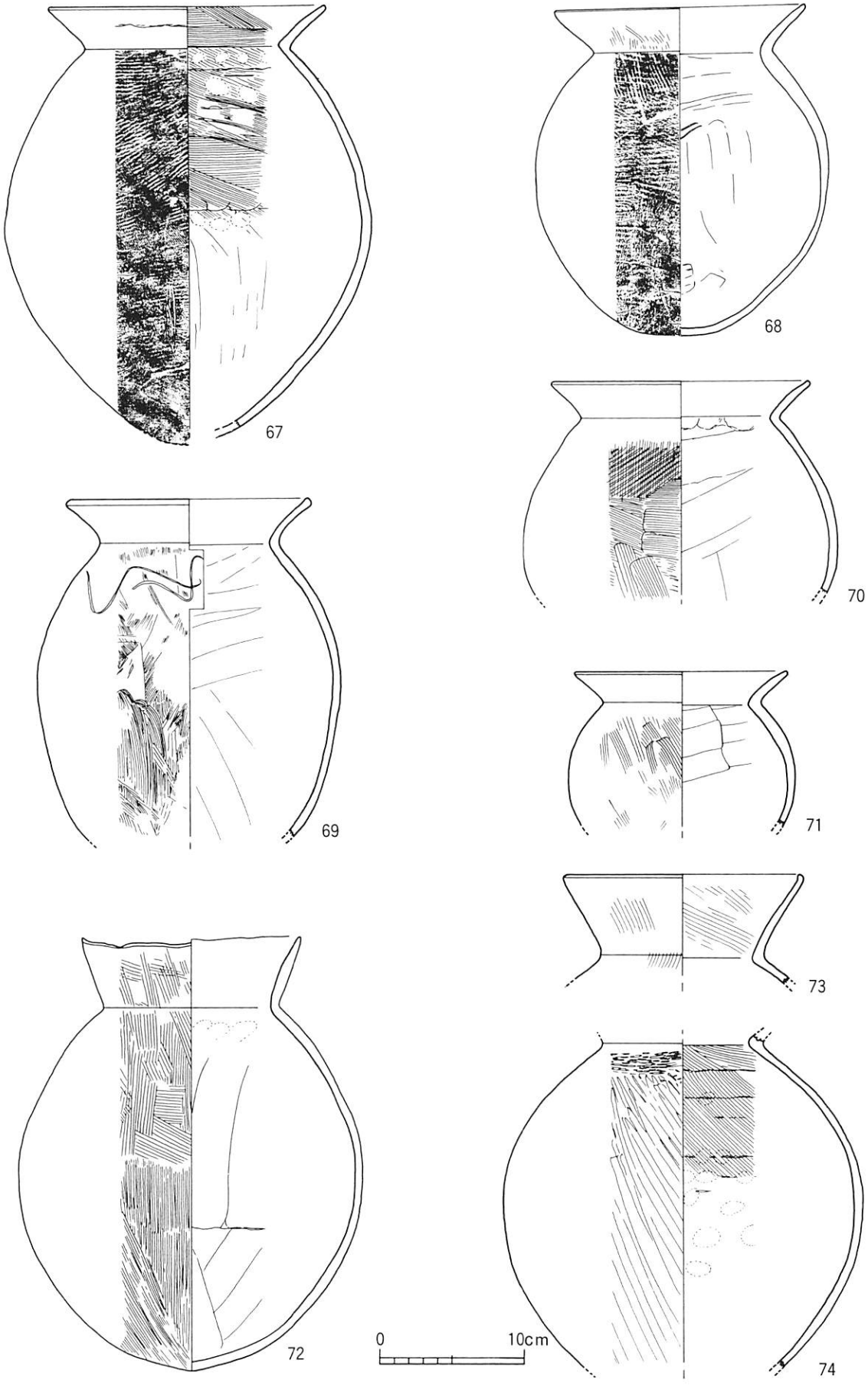
68（P－130・131・134・219・北西下層一括・北東下層一括・北東中層一括）も外来系の甕で表面には煤の付着は見られず、内面にも焦付きは見られない。69（P－168・180・183・北東下層一括）も外来系の甕で表面に煤の付着が著しく、内部には焦付きの痕が明瞭に残されている。胴部の肩には沈線による波状文が見られる。70（P－107・116）も外来系の甕で胴部中位以下を欠いている。表面には煤の付着が著しく、内部には焦付きの痕が残されている。71（P－154・164・178）は小形の外来系の甕で胴部中位以下を欠いている。表面は熱によって器面が剥離した部分もある。72（P－18・182・北東下層一括）は壺であるが、胴部に煤の付着と器面の剥離が見られる。73（P－145・242）も壺で口縁部のみである。74（P－102・104・105・115・211・231・北東下層一括・北西中層一括）も口縁部と底部を欠く壺であるが底部近くが煤の付着が著しく、通常壺は貯蔵用で煮炊きには使用しないと思われていたのが、ここでは否定される資料となった。75（P－142）は二重口縁の壺の破片である。76（P－117・北端下層一括・北東下層一括・北東中層一括・北西中層一括）は外来系の小形甕で壺との中間形のようである。表面の煤の付着が著しい。77（P－118）と78（P－141・170・北端下層一括・廃土一括）は丸底の鉢で、79（P－178・185・北端下層一括・北東下層一括・北西一括）と80（P－127・130）は脚台付き鉢である。81（P－157・207）は鉢の形をした甑である。82（P－99・100・1号住居周辺廃土一括）は脚台のみの高杯である。83（P－121）と84（P－176・192・北端中層一括）は器台で84は山陰系の鼓形器台である。

下層の遺物

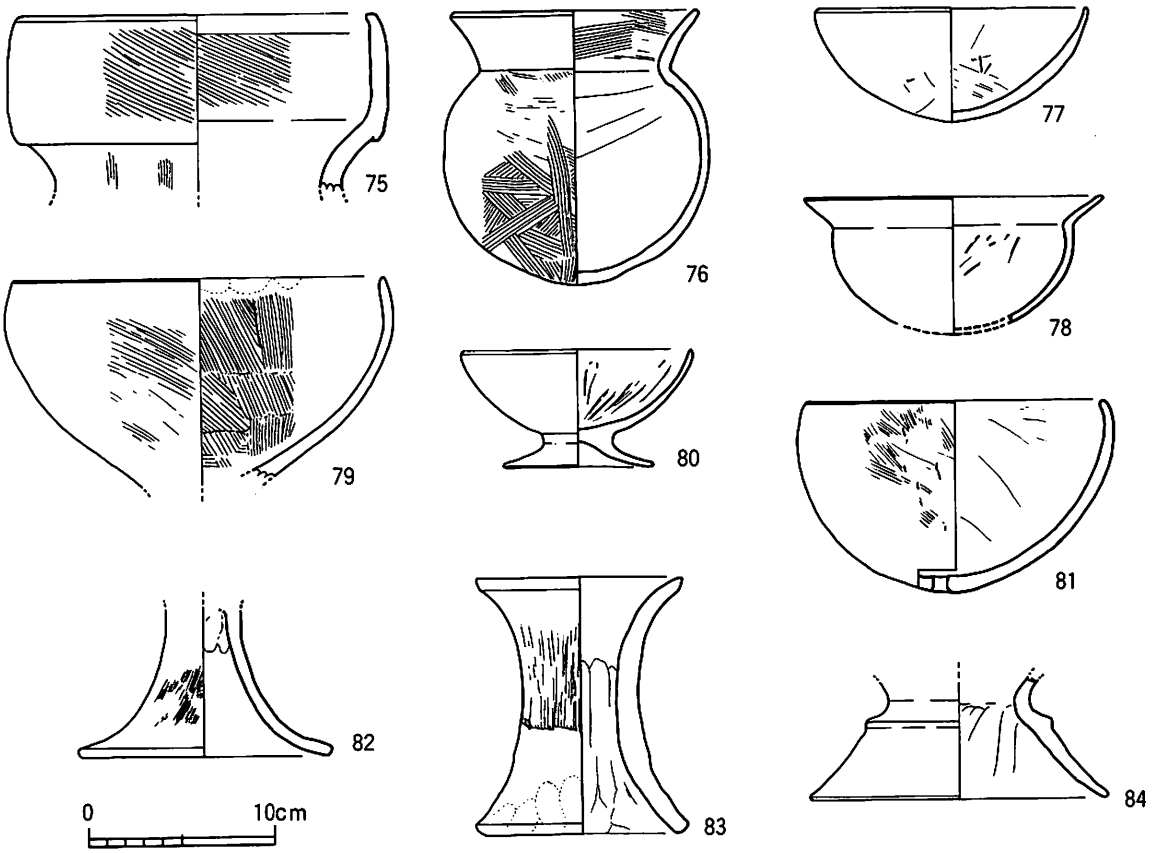
85（P－84・88・89・90）は外来系の甕で表面に煤の付着が著しく、内部には焦付きの痕が明瞭に残されている。86（P－81）は小形丸底壺で口縁部の一部を欠いているが残りの良い資料である。胴部の内外に使用段階における器面の剥離が見られる。87（P－24）は台付鉢で台の部分を欠いている。

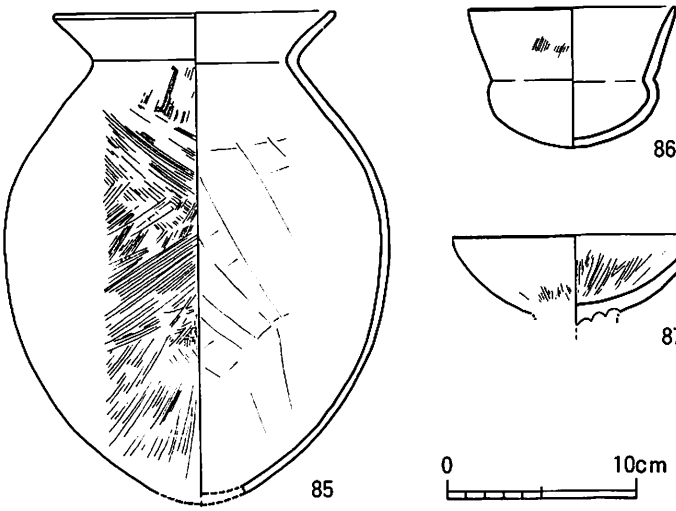
一括として取り扱った資料

88（北端下層一括）ほぼ完形に近い外来系の甕である。底部近くに長径7㎜、短径4㎜に穿孔を1個穿っている。表面に煤の付着が著しく、内部には焦付きの痕が明瞭に残されている。89（北端・北東一括）も外来系の小形甕で底部を欠いている。表面に煤の付着が著しく、内部には焦付きの痕が明瞭に残されている。90（北端下層一括）も外来系の小形甕で表面に煤の付着が著しく、部分的に煮こぼれにより煤が垂れる様に飛んで消えている。内部には焦付きの痕が明瞭に残されている。91（北端下層一括）も外来系の小形甕で底部を欠いている。表面には煤の付着が見られない。92（北端下層一括）も外来系の小形甕で表面に煤の付着が著しく、内部には焦付きの痕が僅かに残されている。



第154図　祭祀土坑出土遺物実測図





第155図　祭祀土坑出土遺物実測図

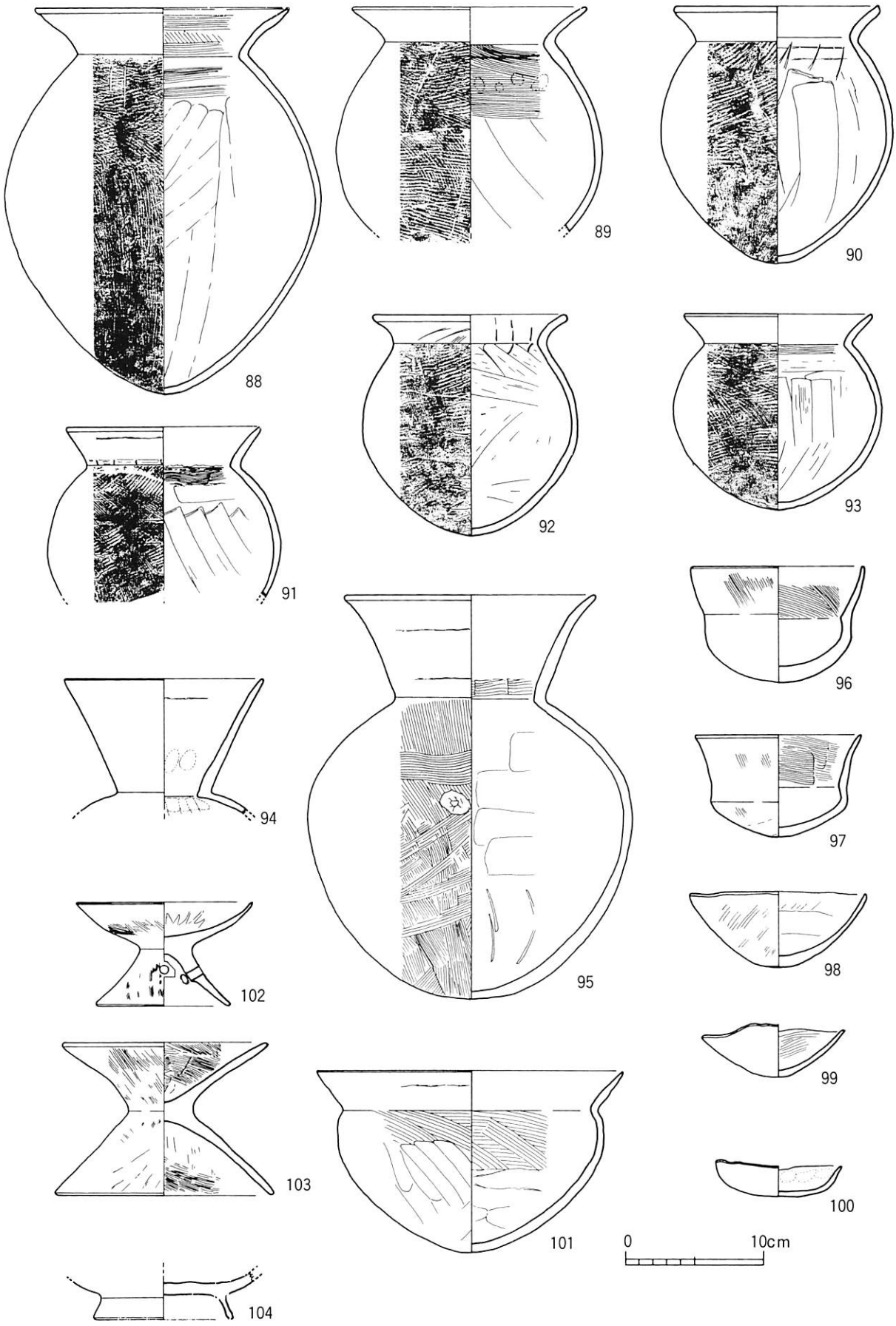
93（北端下層一括）も外来系の小形甕で表面には煤の付着が見られない。

94（北端下部）は壺の口縁部で95（北端下層一括）は口縁部の一部を欠損しているのみの完形品の壺である。胴部中位には焼成時の器面剥離が見られ、核の部分には籾圧痕が残されていた。恐らく土器づくりの際に混入したものと考えられる。

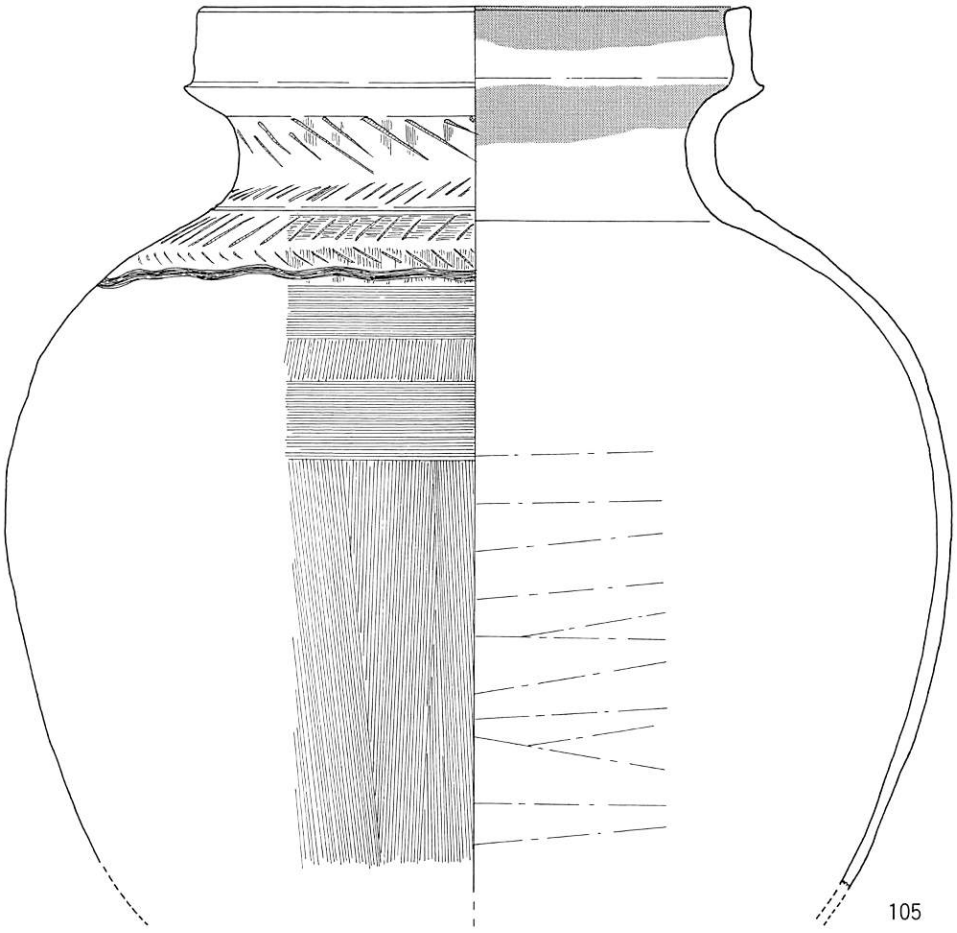
96（北端下層一括）と97（北端下層一括）は小形丸底壺である。98（北端下層一括）と99（北端下層一括・北端中層一括）100（北端下層一括）は手捏の小形の鉢である。101（北端下層一括）も鉢である。この資料も頸部に籾の圧痕を残していた。煤の付着は見られない。102（北端下層一括）は小形の脚台付きの鉢である。脚台には3個の円孔が穿たれている。

103（北端下層一括）は器台である。脚台付きの鉢と高杯にも似ているが、前者であれば円孔が穿たれ、後者であれば杯部が開かなければならないが、いずれにも該当せず器台と判断した。

104（北端）は明らかに時期の異なる遺物で、高台を持つ土師の皿である。祭祀土坑埋没後の遺物である。105（北端中層一括・北端下層一括・東西1トレンチ



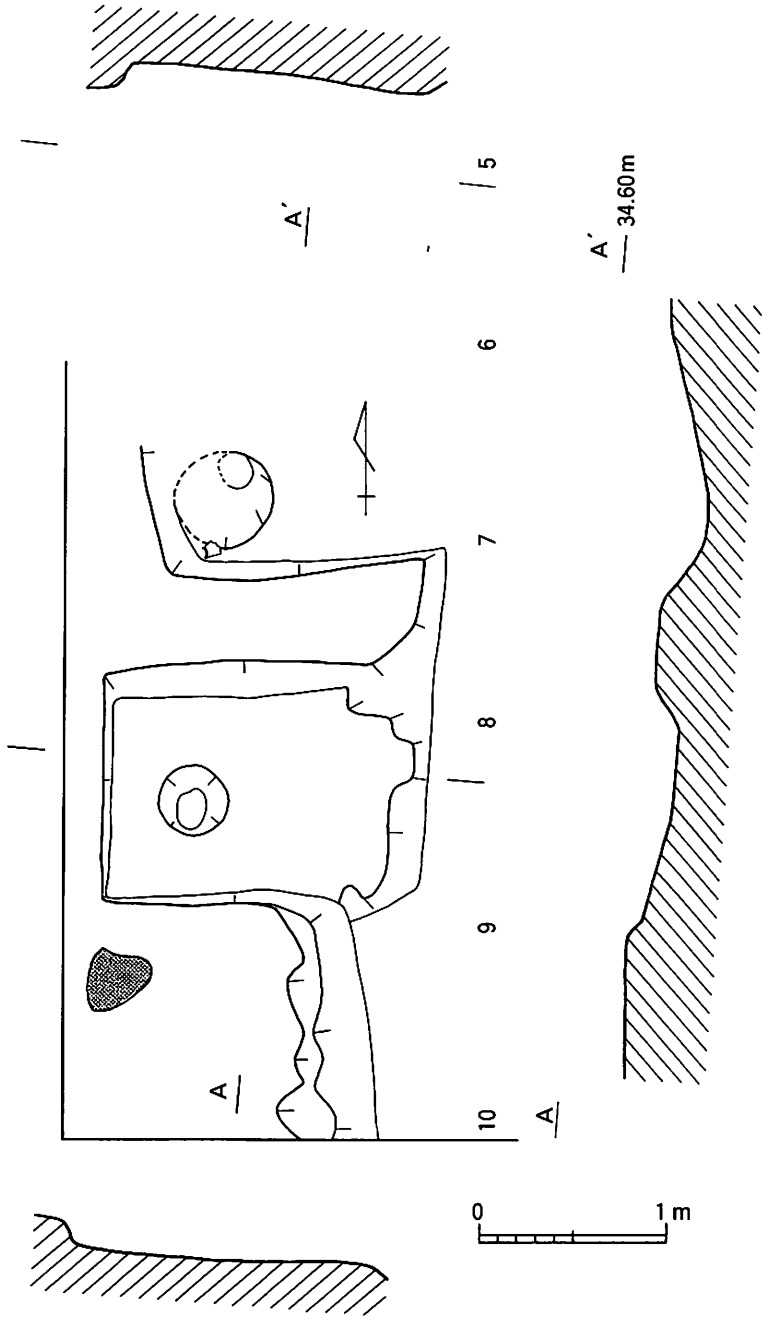
第156図　祭祀土坑出土遺物実測図



第157図　祭祀土坑出土遺物実測図

中層一括）も祭祀土坑埋没後の遺物である。大形の壺で、口縁部は垂直に立ち上がり、頸部との間に三角凸帯状に張り出している。肩部には羽状文を巡らし山陰系でも出雲地方の壺の特徴を色濃く残している。胴部には籠目状に器面の剥離痕が残されている。

この資料は口縁部の内側にのみ煤の付着が見られ、どのような状況下において発生するのか興味深い事例である。106（表土一括）は山陰系の特徴を持った壺の破片である。107（P－89・北東上層一括）は外来系の甕である。底部を欠くが明瞭なタタキ目を器面に残している。内面には土器製作工人の指の痕が残されている。108（表土一括）は高杯の脚部で裾部には4個の透かし孔を配している。109（北端一括）は手捏ねの鉢である。



第158図　4号住居跡実測図

（2）　4号住居（第158図）

トレンチ西側に於いて検出されたが、西壁が複雑で幅1.2m、奥行1.5mの出っ張りが見られ、ほぼ中央に柱穴を配していた。北側にも同様の遺構が並び、通常の住居とは趣が異なっている。床面は硬化し土器片が散在していた。

遺　物（第159図）

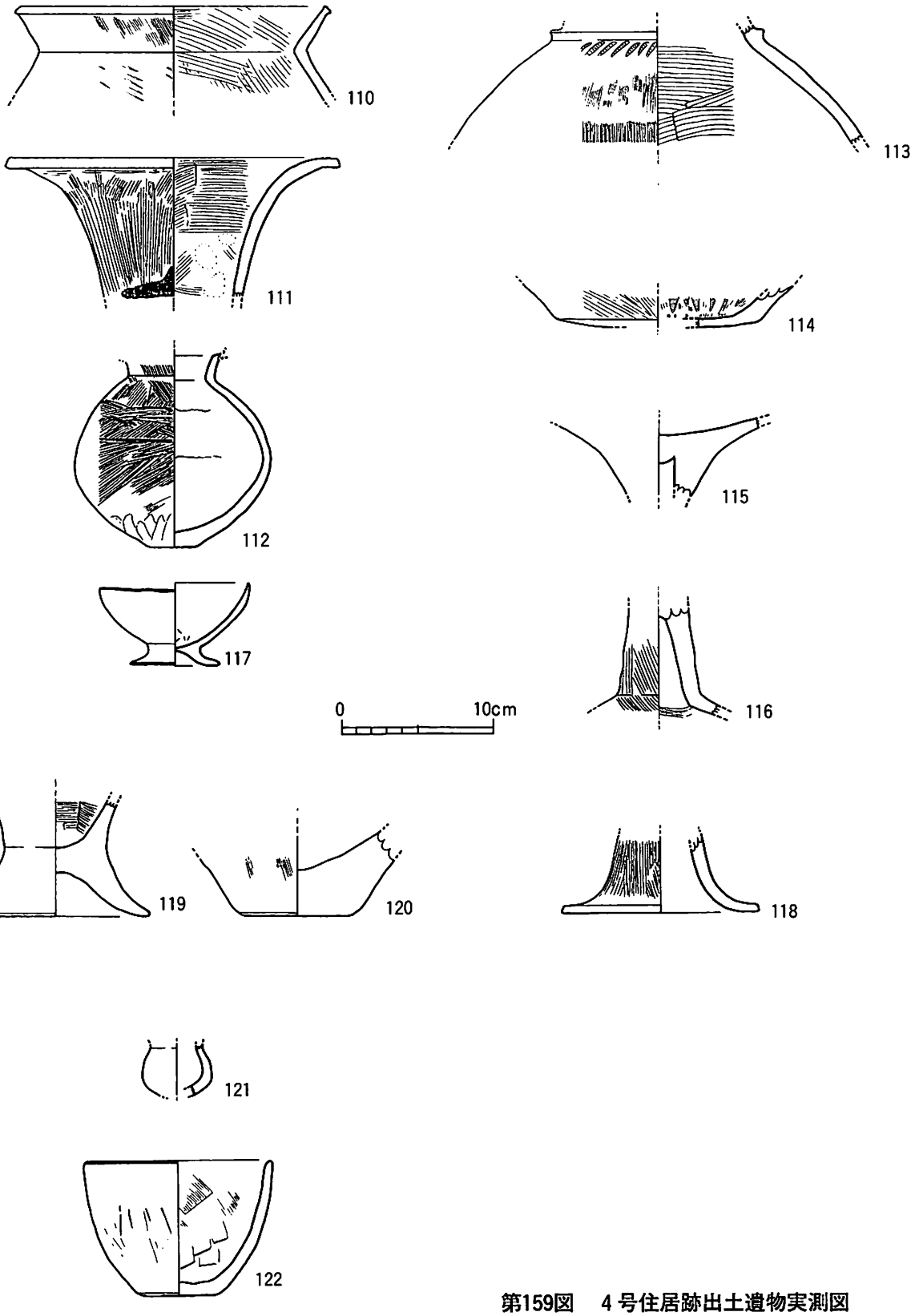
上層の遺物

110（P－63）は在地系甕の破片で口縁部のみである。111（P－69）は壺の口縁部の破片で、頸部に赤色顔料を塗っている。112（P－57）は口縁部を欠く壺で、原型を留めている。底部は小さな平底である。

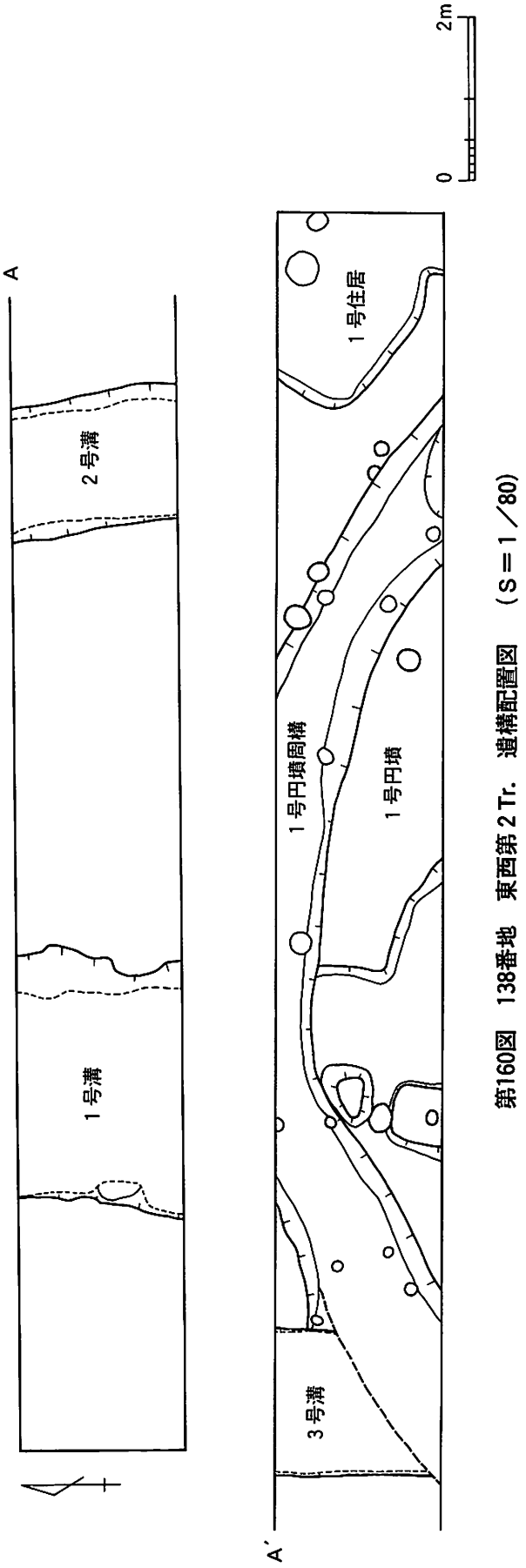
113（P－61）も壺の破片で肩部に凸帯と刻み目を配している。114（P－66）、115（P－44）、116（P－55）は高杯の破片である。117（P－66）は台付き鉢の脚台である。118（P－54）も台付き鉢である。

下層の遺物

119（P－88）は在地系甕の脚台である。120（P－91）は大形壺の底部である。121（P－267）はミニチュアの壺で、122（P－267）は平底の鉢である。



第159図　4号住居跡出土遺物実測図



第160図　138番地　東西第2Tr.　遺構配置図　（S＝1／80）

3　東西第２トレンチ（第160図）

国土座標　南北X＝－720～－722・

東西Y＝－26,000～－26,030

東西第１トレンチの南20mの地点で長さ30mのトレンチを設定した。ここでは東西第１トレンチで検出された４本の溝状遺構と、141番地東西トレンチで検出された２本の溝状遺構との関係を明らかにする事を目的とした。第１トレンチに比べると遺構面まで浅く僅か30cmを測る程度であった。同じ畑であったが埋土の状況はまったく異なっており、旧地形との格差が著しい事が明らかになった。

このトレンチでは調査の結果住居跡１基、溝状遺構３本、円墳１基が確認された。

（１）　１号住居（第161図）

トレンチ東端で検出されたもので、西隅を挟んで南西壁面が長さ２ｍと北西壁面が0.7ｍを確認した。壁自体10～４cmの高さで残っており上端部は標高33.42ｍ、下端部が33.38ｍ程度であった。床面は硬化していたが長径１ｍ、短径0.7ｍの範囲では特に著しかった。遺物としては土器片が少し出土した。

遺　物（第162図）

１（Ｐ－189・195）は脚台付きの鉢である。脚を欠いているが鉢の部分は大半を残している。２（Ｐ－189・191）も鉢であるが底部は丸底である。口縁部は片口状に絞っている。

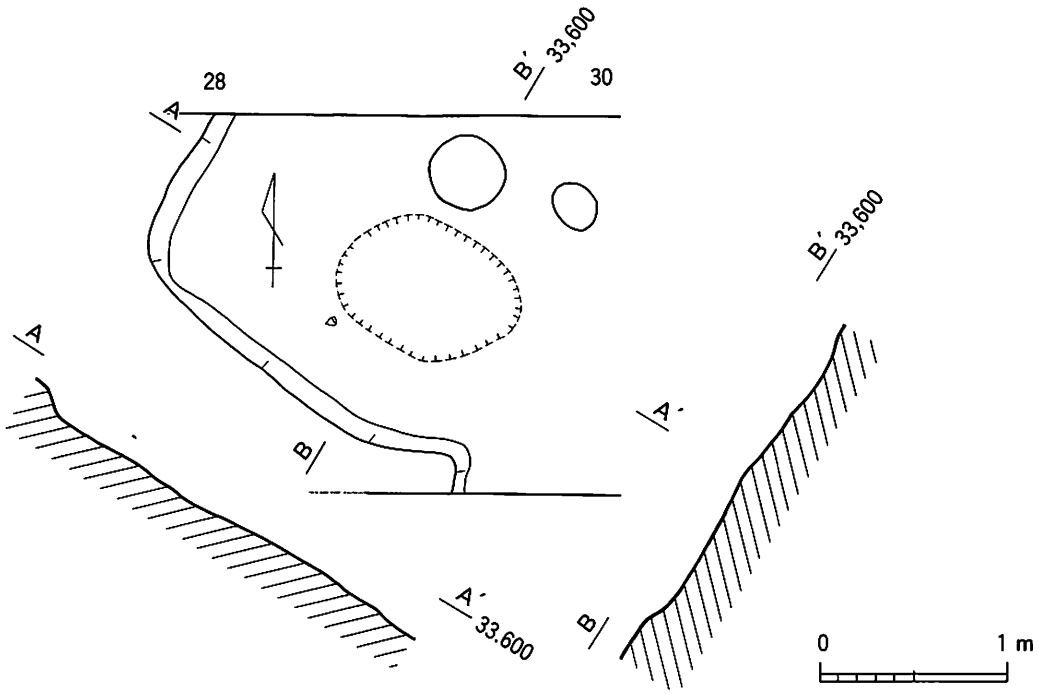
（２）１号溝（第163図）

トレンチ西端から３～６ｍの範囲で確認されたが、上部での確認のみで遺構の掘り下げをしなかったため南北に伸びる溝の上部幅３ｍを確認したのみで溝の上部は標高33.64ｍを測る。

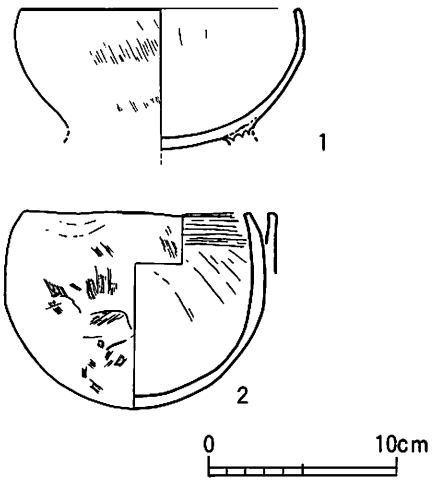
したがって遺物の出土は殆どない。この溝は東西第１トレンチの中では２号溝の延長になるものと考えられる。

遺　物（第164図）

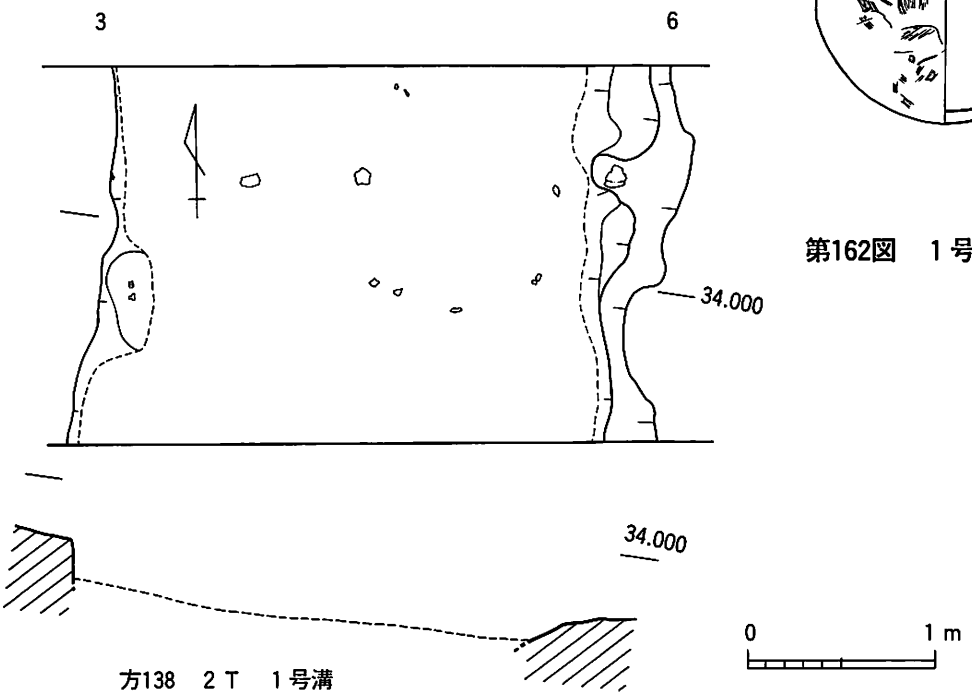
３（上層一括）は小形の在地系甕で、口縁部は短くやや立ち上がっており胴部以下を欠いている。４（Ｐ－235）は壺の口縁部で頸部には刺突文や沈線を巡らすと思われるが現状では確認できない。５（Ｐ－227）は鉢で底部の形状は脚台が付くか平底になるかは不明。６（上層一括）は器台の裾部である。



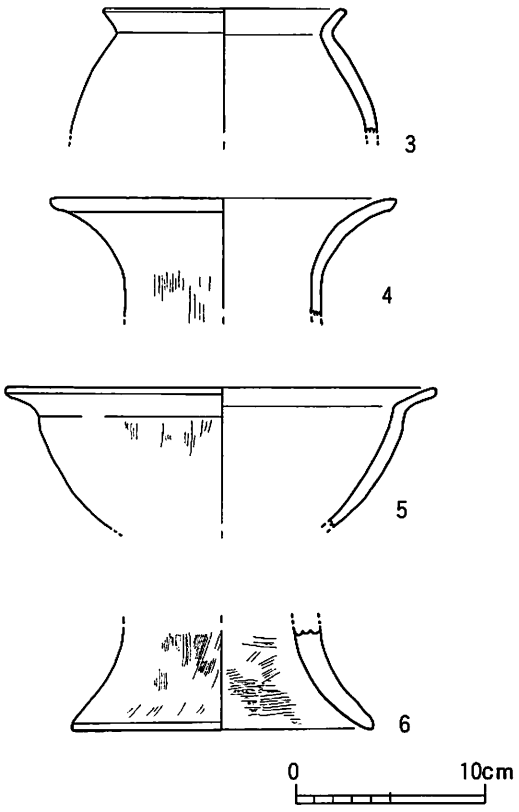
第161図　1号住居跡実測図



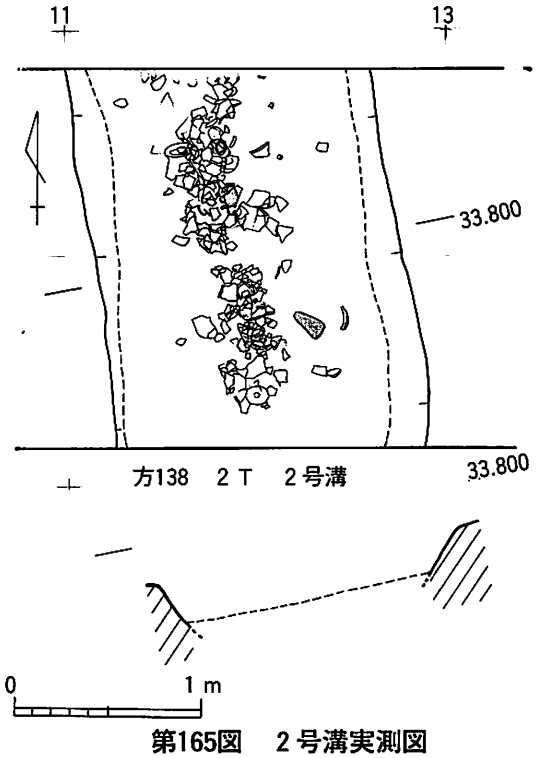
第162図　1号住居跡出土遺物実測図



第163図　1号溝実測図



第164図　1号溝出土遺物実測図



第165図　2号溝実測図

（3）2号溝（第165図）

トレンチ西端から11～13mの範囲で確認された溝で、1号溝とは5m、3号溝とは2mの間隔で挟まれている。溝は北から僅かに西に向いた方向に伸びており、上部での確認のみで遺構の掘り下げをしなかったため形状については不明であるが、溝の両側には僅かにステップが見られ、逆台形になるものと考えられる。溝上部での幅は1.7m程度で標高33.591mであった。中央には土器が廃棄された状況で出土した。上層では比較的大きな破片が出土し、下層では叩き潰したかの様に小さな破片が出土した。

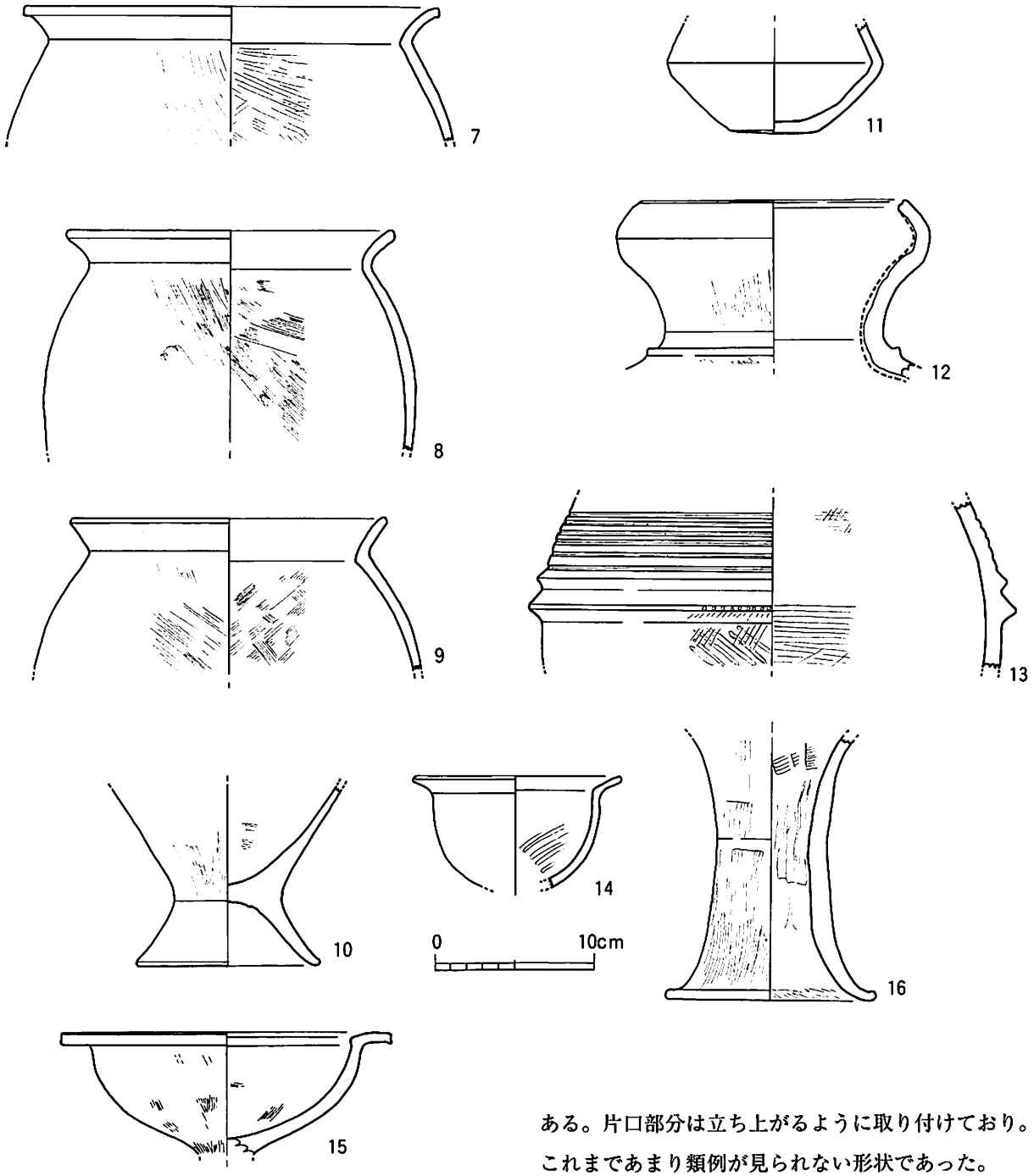
遺　物（第166図）

7（P－181・211・214・215・216）は大形の在地系甕口縁部で煤の付着が著しく、器面調整もハケ目のみである。底部は脚台になる。8（P－216）在地系甕で胴部中位から下を欠いている。煤の付着が著しく、器面調整もハケ目である。9（P－173・216・217）も在地系甕で胴部中位から下を欠いている。煤の付着が著しく、器面調整もハケ目である。10（P－181）も在地系甕底部の脚台である。煤の付着が著しく、内面には焦げ付いた痕も見られる。器面調整はハケ目であるが、火を受けて器面の剥離が見られる。11（P－162－2）は小形の壺であるが、口縁部を欠いている。焼きが悪いためかすかにハケ目が確認できた。胴部は「く」字におれて底部は平底である。12（P－220）は袋状口縁壺で、頸部には凸帯を巡らしているが肩部から下を欠いている。口縁部外側の一部には赤色顔料の付着が見られる。内面は剥離が著しく使用段階で生じたものと考えられる。13（P－217）も壺であるが、胴部の一部のみである。6条の沈線と2本の凸帯を巡らしている。14（P－217）は小形の鉢である。底部を僅かに欠いている。煤の付着などは見られない。15（P－214）は高杯であるが、脚部を欠いている。口縁部は水平になり、古いタイプである。

16（P－211）は器台である。裾部を欠いている。

（4）　3号溝（第167図）

トレンチ西端から14.5～16.5mの範囲で確認された溝で2号溝の東2mの位置にあり、円墳周濠と交叉していた。この溝も上部での確認のみで遺構の掘り下げをしなかったので形状は不明であるが南北方向に伸び



第166図　2号溝出土遺物実測図

ていた。

遺物は僅かに土器片が出土しているが、周濠と交叉していた部分からの出土が多かった。

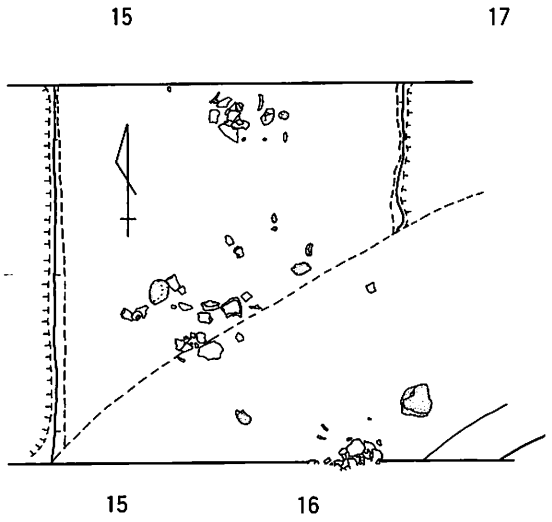
遺　物（第168図）

17（P－236）は在地系甕で胴部中位から下を欠いているが底部は脚台になる。器面調整は全面ハケ目で、外面には煤の付着が見られる。18（P－238－1）は鉢の破片である。19（P－236）は脚台付きの片口である。片口部分は立ち上がるように取り付けており。これまであまり類例が見られない形状であった。

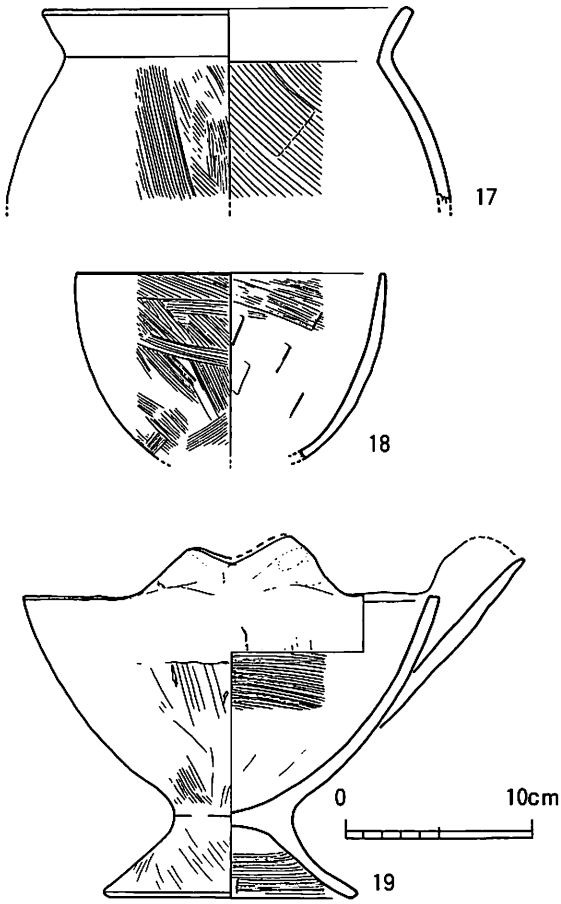
（5）　円墳（第160図）

今回の調査で初めて確認された古墳である。周濠のみであるが、須恵器と埴輪片が出土した事で古墳と判断した。現況では直径15～16m程度の円墳で、周濠の幅は上端部で1.2～1.6m、標高33.46m、下端部で0.5～1mの幅で標高33.10～33.24mを測り、20cm程度の深さが残っていただけで古墳自体と周辺の削平がひどく、周濠の底が僅かに残っていた状況であった。

したがって内部主体については確認できなかったが、石棺の可能性が高い。ちなみにこの場所の小字は「塚



第167図　3号溝・周濠実測図

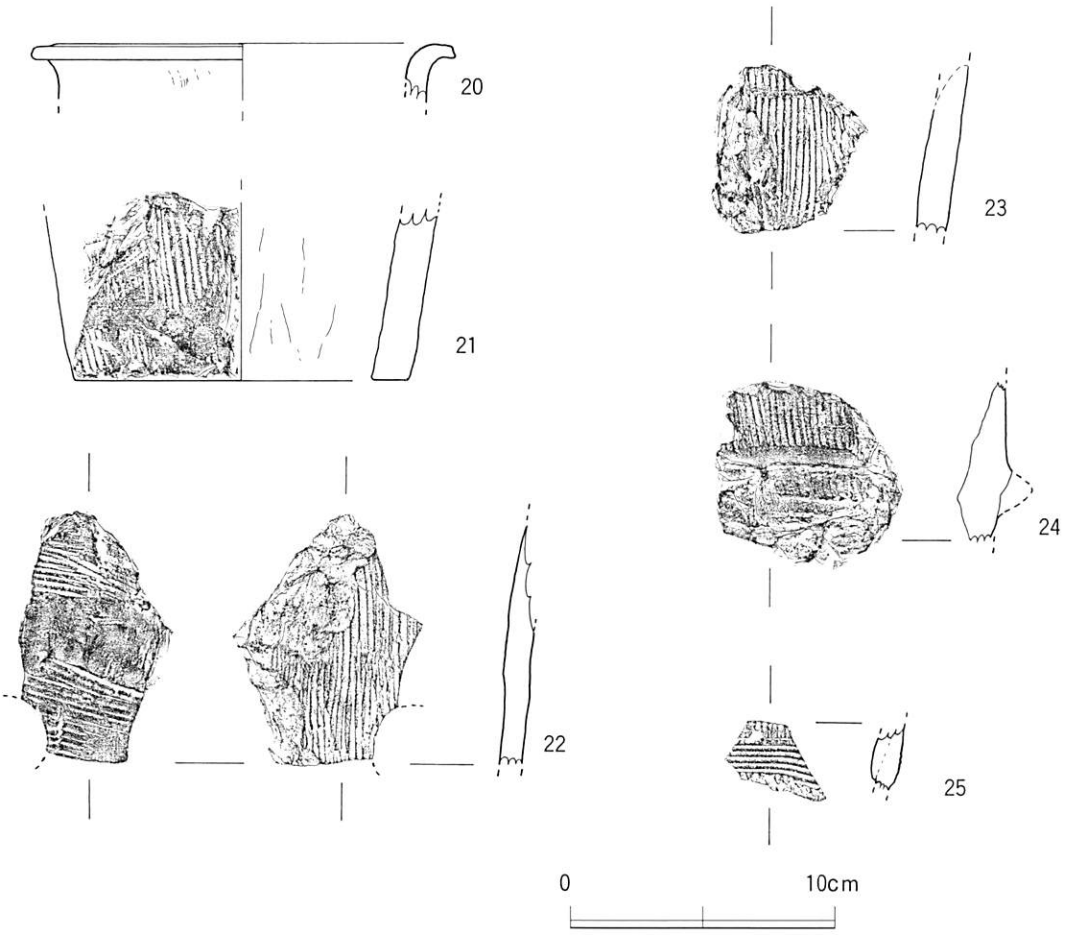


第168図　3号溝出土遺物実測図

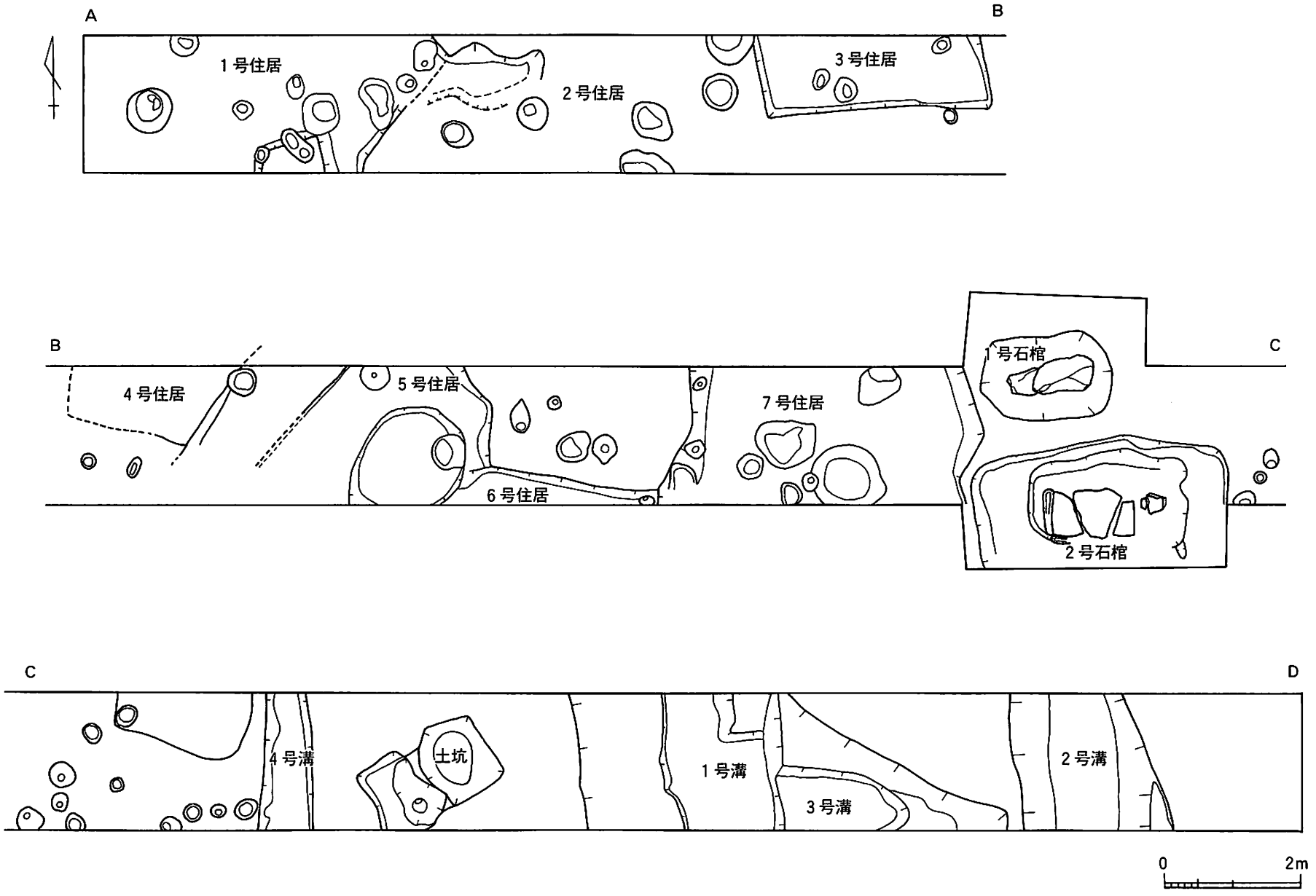
の本」であり、かつては多くの塚が存在していた事を伺わせる所である。

遺　物（第169図）

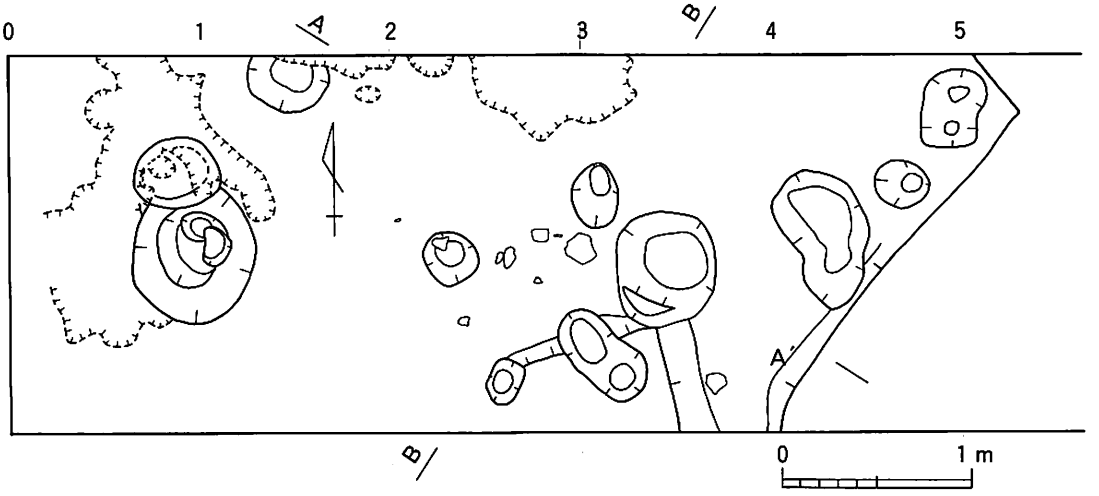
20は土師の甕口縁部である。21～25は円筒埴輪の破片で、すべて焼きがあまく破損状態が著しい。20は底部を残し、22は円孔を残している。24はタガが剥離している。

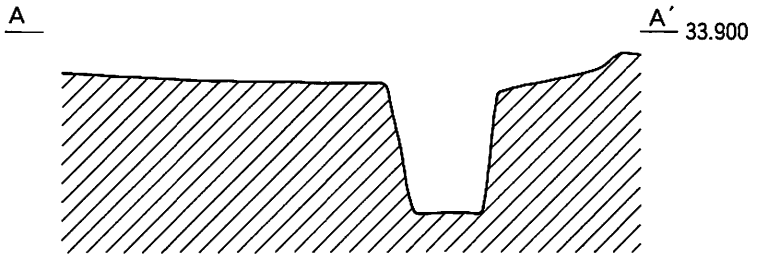


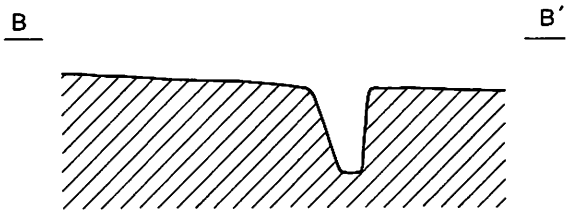
第169図　円墳周濠出土遺物実測図



第170図　方保田141番地　東西Tr.　遺構配置図　（S＝1／80）







第171図　1号住居跡実測図

第5節　141番地の調査（第170図）

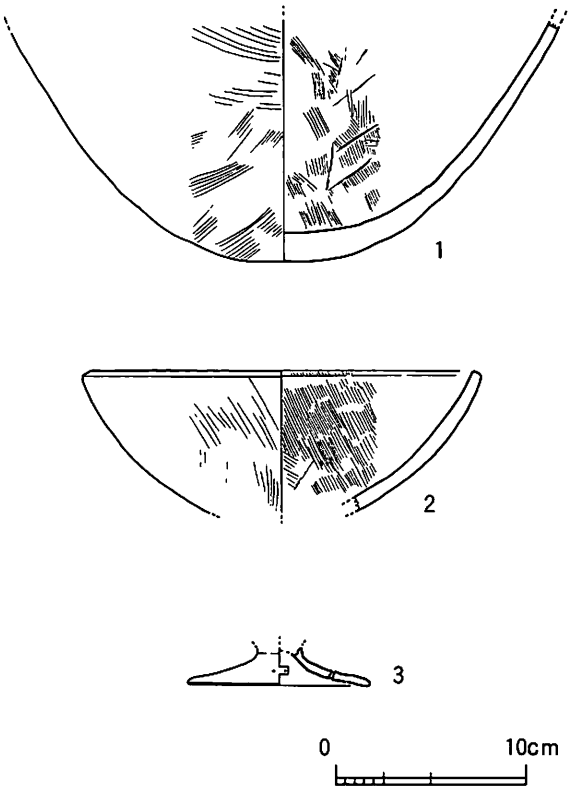
国土座標　南北X＝－748～－750・

東西Y＝－26,020～－26,070

138番地東西第1トレンチの南50mに位置し、国土座標の東西方向に幅2m、長さ50mにトレンチを設定した。このトレンチでは住居7軒、溝状遺構4本、石棺2基が検出された。

（1）　1号住居跡（第171図）

トレンチ西端から5mの範囲で床面と東側の壁の一部を確認した。南北及び西側の壁はトレンチの外に伸びていたが、東壁の上部の標高は33.75mで約5cm程度の高さを残していた。



第172図　1号住居跡出土遺物実測図

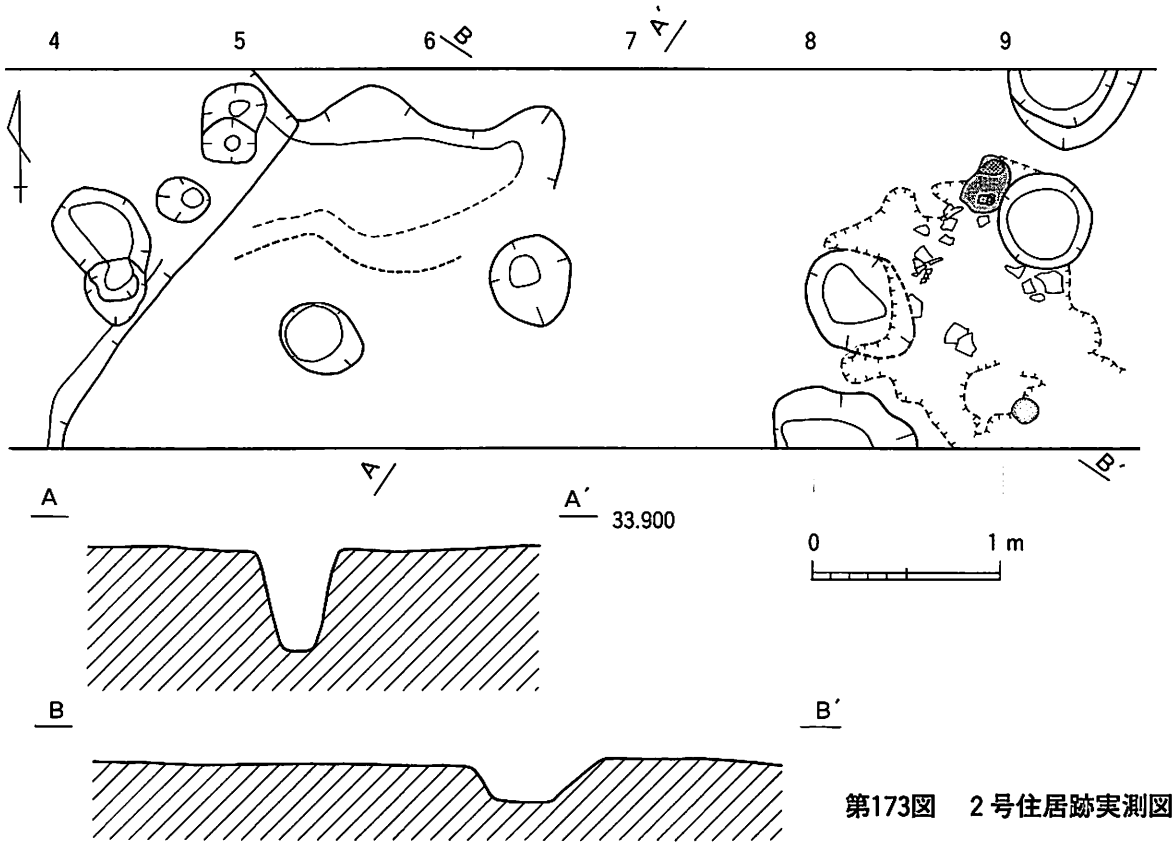
東側の壁は一部を切られているため北東方向に伸びる壁は1.1mしか確認できなかったが、少なくとも2.1mまでは推定できた。北西方向に伸びる壁は0.4mを確認し、コーナー部分であることから住居の中心部が検出されたものであった。

床は標高33.61mで硬化面が全面に広がっており、足跡が硬化面において検出された。

遺物の出土は極めて少なく床面に密着して3点出土した。なお住居埋没後の埋土から円筒埴輪片と砥石が各1点出土した。

遺　物（第172図）

1（P－18・4・11・西区一括）は壺の底部である。丸底で器面は両面ハケ目調整で仕上げていたが、一部に使用による剥離が見られた。2（P－19）は底部を欠いている鉢である。口径20.2cmを測り、底部はやや尖り気味の丸底になる。3（P－17）は脚付きの鉢で、鉢部を欠いている。脚裾部直径9.4cmの小型の鉢である。脚には2個の穿孔が見られる。



第173図　2号住居跡実測図

（2）　2号住居跡（第173図）

1号住居跡と3号住居跡の間に位置し、トレンチ西端から4～12mの範囲で確認された住居跡である。この住居跡は1号住居跡と3号住居跡から切られ、壁を確認できなかったが、床には標高33.70mで極めて良好な硬化面を形成しており、さらに硬化面に多数の足跡が残されていた点から住居の内部であろうと判断した。

しかし、この住居跡の規模は不明である。

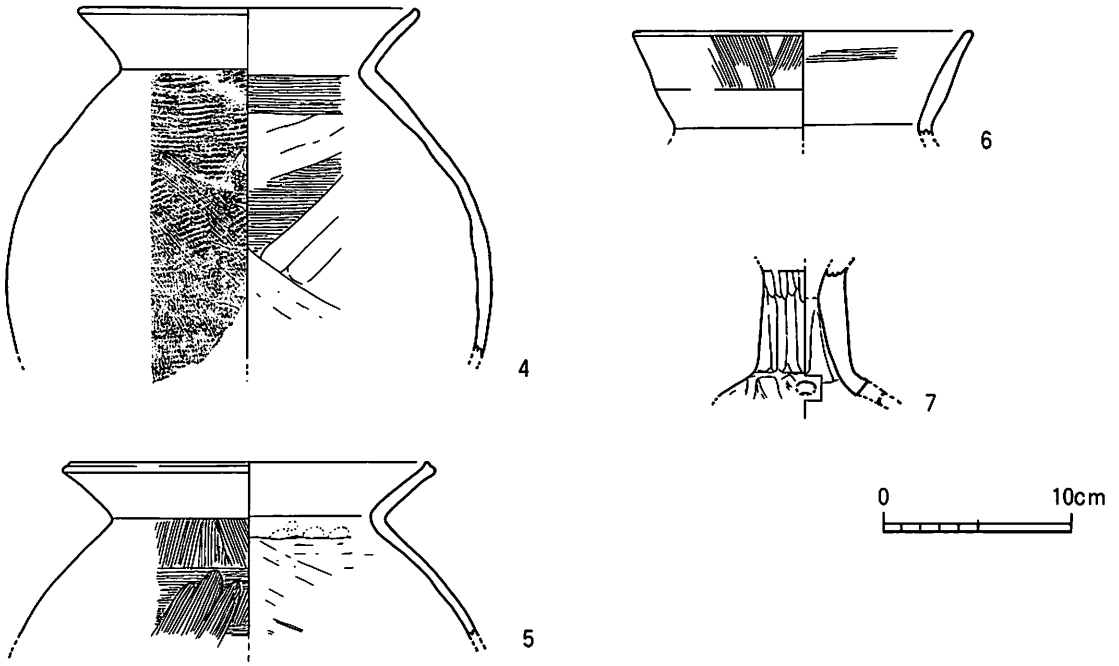
遺　物（第174図）

3号住居寄りの床面に散乱するように土器が出土した。

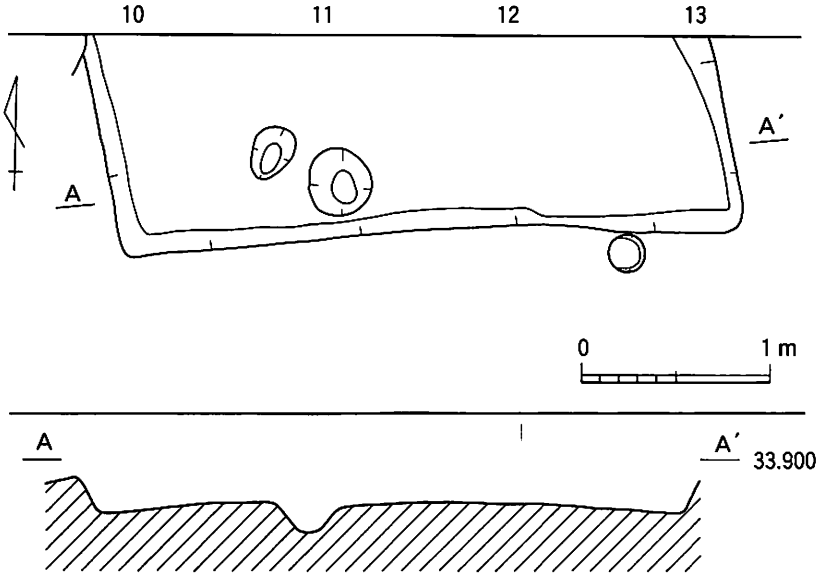
4（P－21）は庄内期の甕で底部を欠くが最大径は胴部中位に有しており、口径18cm、最大径24.4cmを測る。5 P－20）は布留期の甕であり、胴部以下を欠いているが口径18.8cmを測る。6（P－20）は在地系甕の口縁部で口径17.8cm、7（P－20）は高坏の脚の一部である。坏部と脚裾部を欠いており規模等不明。

（3）　3号住居跡（第175図）

2号住居跡の東に位置し、トレンチ西端から10～13mの範囲で南側壁と東西壁の一部が検出された住居である。南側壁は一辺長さ3.2m、東西の壁は各1.1mを検出し、上端部で標高33.80m、下端部で標高33.61mを測る。床面は明確であったが硬化はあまり進んでい



第174図　2号住居跡出土遺物実測図

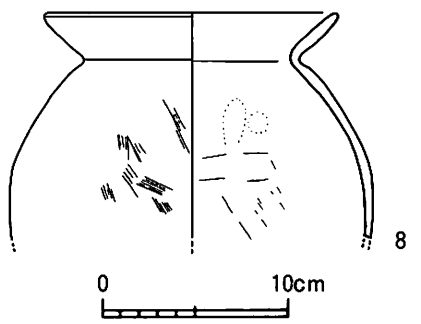


第175図　3号住居跡実測図

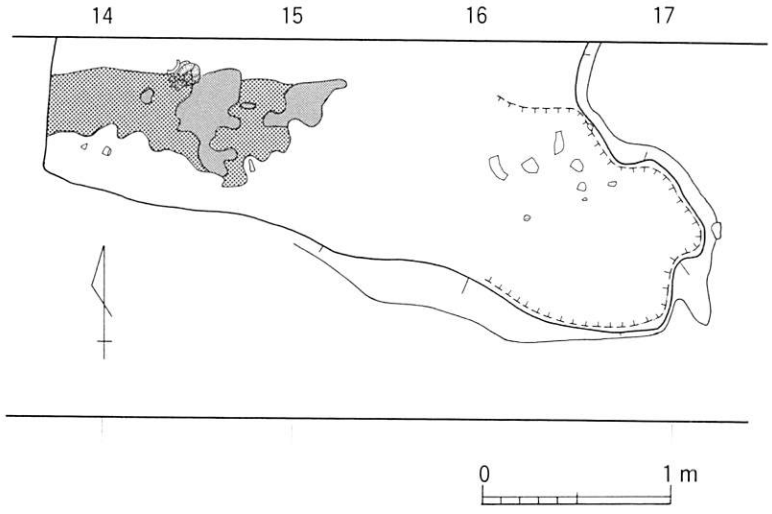
なかった。遺物も殆ど出土しておらず時期の特定には至らなかったが、床面より30cm高い位置で布留期の甕が出土しており、弥生時代の住居であると判断できる。

遺　物（第176図）

8（P－144）は床面より30cm高い位置で出土した布留期の甕である。したがって3号住居が埋没後の土器であり、住居として使用されていた時期を示しておらず時間差を考慮しなければならない。



第176図　3号住居跡出土遺物実測図



第177図　4号住居跡実測図

（4）　4号住居跡（第177図）

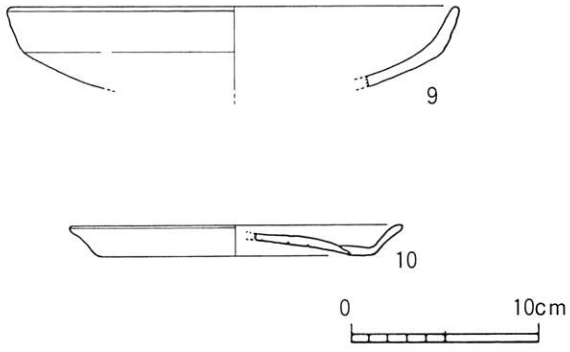
3号住居跡の西に位置し、トレンチ西端から14～11mの範囲で確認された住居跡である。この住居跡は5号住居跡が埋没した後築かれたものであるが、壁を確認できなかった。しかし床面の標高は33.72mで極めて良好な硬化面を形成しており、土器片、焼土、炭化物等が検出された点から住居であると判断した。

2号住居跡と同様この住居跡の規模は不明である。

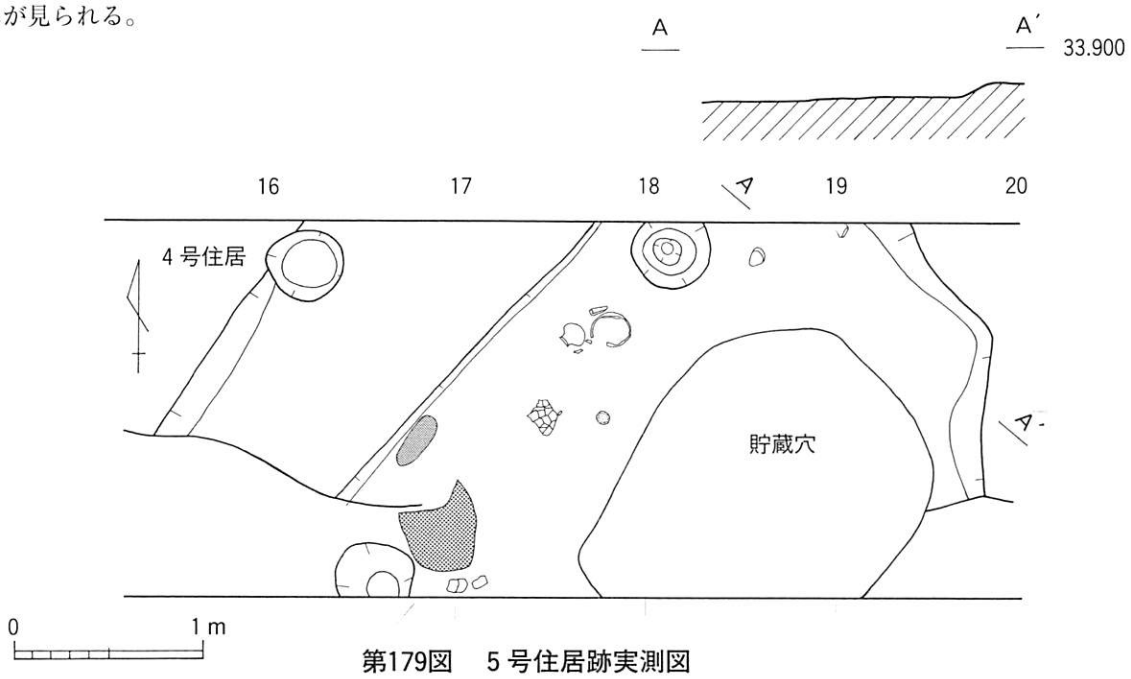
遺　物（第178図）

5号住居の上と貯蔵穴上にまで広がる硬化面に伴って出土したものである。

9（P－25）は口径が23.6cmの土師器の椀である。10（P－30）は口径が17.6cmの土師器の皿で、焼成による歪みが見られる。



第178図　4号住居跡出土遺物実測図



第179図　5号住居跡実測図

（5） 5号住居跡（第179図）

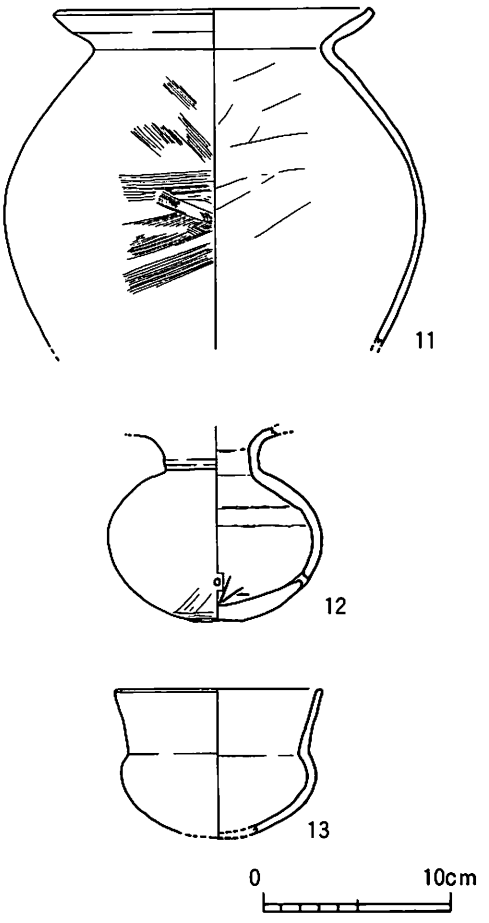
トレンチ西端から15～20mの範囲で確認され、4号住居の下で6号住居から切られており、1号貯蔵穴の上に築いていた。西側の壁は北東から南西方向に伸びており長さ0.7mを検出し上端部は標高33.92mであった。さらに、西壁に沿って幅1.1mのベッドを築いており、この面で標高33.68mであった。床面は標高33.62mで土器は置かれたように出土した。

なお、1号貯蔵穴の上にも硬化した床面が広がっていたため、埋没後構築したものと判断した。

遺　物（第180図）

床面の上に残されたもので比較的残りの良い土器であった。

11（P－28）は布留期の甕で、底部を欠いているが最大径は胴部のやや上部にあり、口径16.4cm、最大径21.8cmを測る。外面には全面にススが付着していた。12（P－27）は小型の壺で口縁部を欠いていたが二重口縁になると思われる。胴部は球形で底部はわずかに凹んだものであった。なお胴部下位に穿孔が1個見られた。13（P－29）は坩である。



第180図　5号住居跡出土遺物実測図

（6） 6号住居跡（第181図）

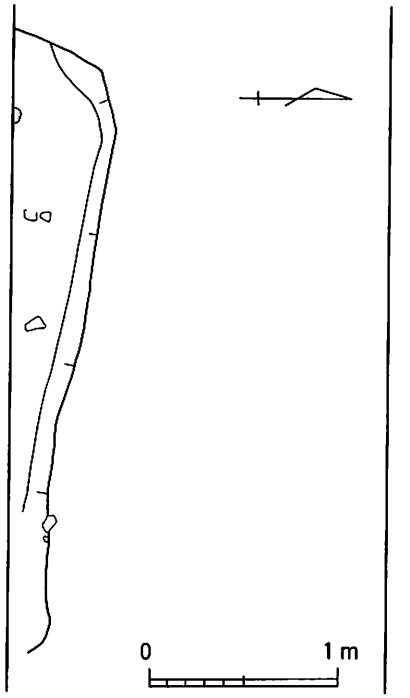
トレンチ西端から19～23mの範囲で確認され、5号住居と7号住居の間に位置しており、切り合い関係からこれらの遺構より新しく構築されていたことが判明した。

トレンチ内では住居北側壁が一辺約3mの長さで検出され、上端部で33.74m、下端部で33.48mを測り、壁自体はかなりしっかりしたものであった。

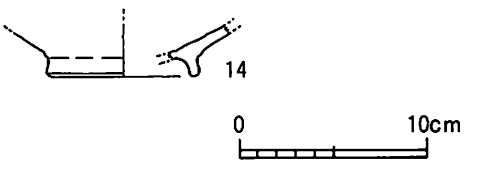
遺　物（第182図）

遺物の出土は少なかったが、僅かに土師の皿が壁に張り付いて出土している。

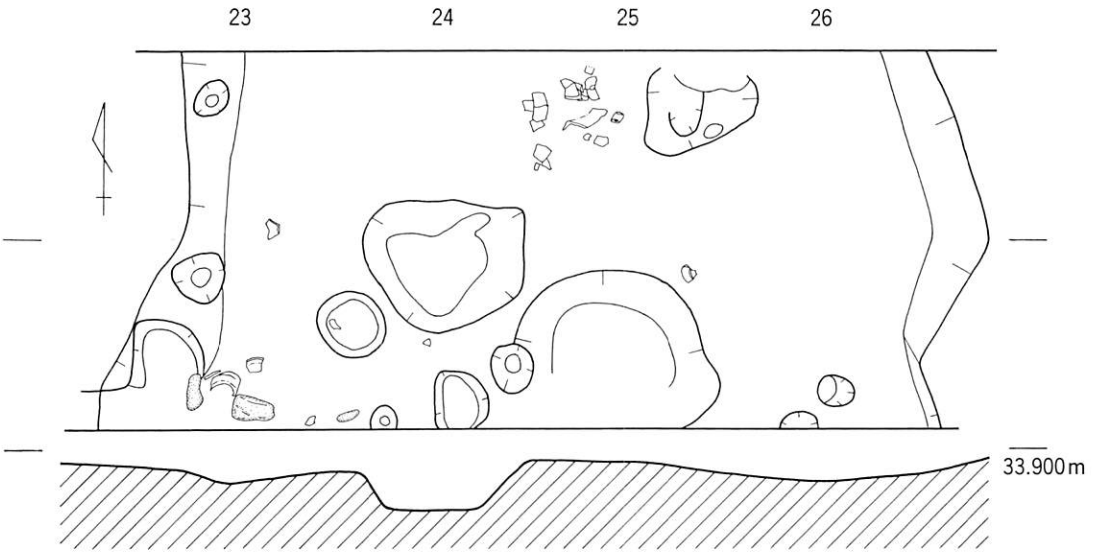
14（P－34）は高台を持つ土師の皿である。



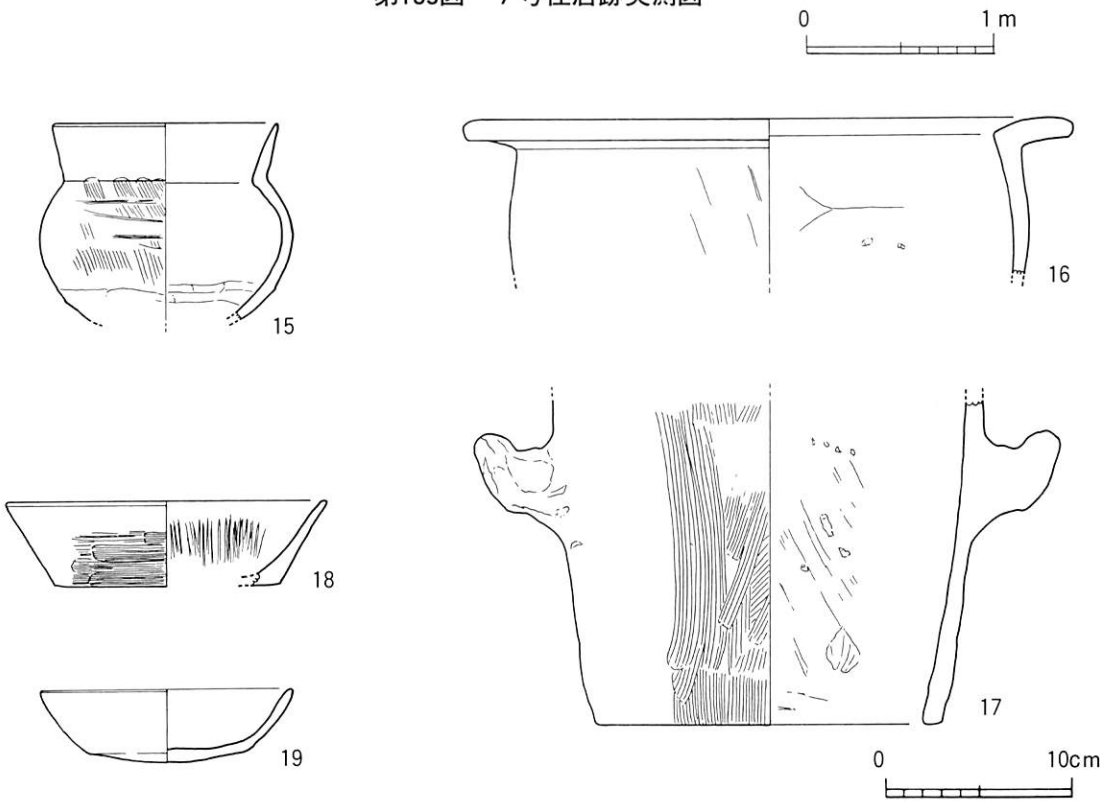
第181図　6号住居跡実測図



第182図　6号住居跡出土遺物実測図



第183図　７号住居跡実測図



第184図　７号住居跡出土遺物実測図

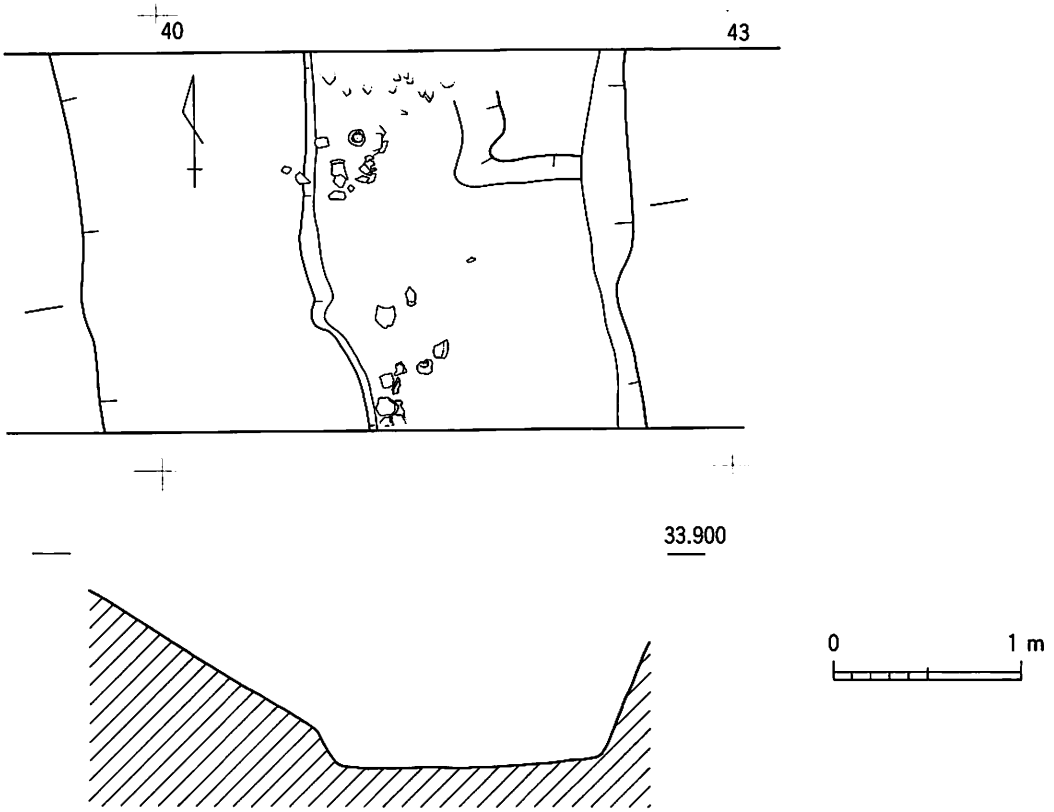
（７）　７号住居跡（第183図）

トレンチ西端から22～27mの範囲で確認され、５号住居と１・２号石棺の間に位置している。東西の壁は4.1～4.5mの間隔で南北方向に伸び西壁上端部が標高33.78m、下端部で33.71m、東壁上端部が33.85m、下端部で33.78mと高低の差が不鮮明であったが、土器（土師器）の出土から住居の可能性が高いと判断した。なおこの住居跡の規模は不明である。

遺　物（第184図）

西壁近くで15と中央近くで16～19の土器が出土した。

15（Ｐ－38）は小型の壺である、底部を欠いており口径は12cm、最大径13.5cmである。16（Ｐ－41）は土器の甕で最大径を口縁部に有し32.2cmを測る。器壁は厚く内側はヘラ削りを行なっている。17（Ｐ－41）は土師の甑で口縁部を欠いている。18と19（Ｐ－41）は土師器の坏である。口径は13.3cmと17cmであった。



第185図　1号溝実測図

（8）　1号溝（第185・186図）

トレンチ西端から39～42mの範囲で確認され、南北から僅かに西に振った方向に向かっており、上部幅3m、下部幅1.4m程度で東側の壁は直線的に急に立ち上がり、西側の壁は窪みながら緩やかに立ち上がっていた。

西壁の上端部は標高33.70m、下端部で32.77mであった。東壁は3号溝により切られていたため上端部で標高33.43m、下端部で32.81mであった。

溝は土器の出土状況と堆積土層から埋没過程を5段階に分けることができる。

第1段階　（最下層）

溝構築当時。床面に少量の土器片が散在する程度で廃棄した状態。

第2段階　（第Ⅵ層）

溝構築直後。床面から20cm程度土が流れ込んでおり、この時土器の破片を廃棄している。

第3段階　（第Ⅴ層）

3号溝が東壁の一部を壊し、溝には貼り床状に粘土を踏み固め、硬化面を形成し、この上から多くの土器が廃棄されていた。

これらは3号溝に伴う可能性が高い。

第4段階　（第Ⅳ層）

3号溝の機能が停止した段階で大量の土器を廃棄している。

第5段階　（第Ⅲ層）

溝が完全に機能せず埋没していく段階。

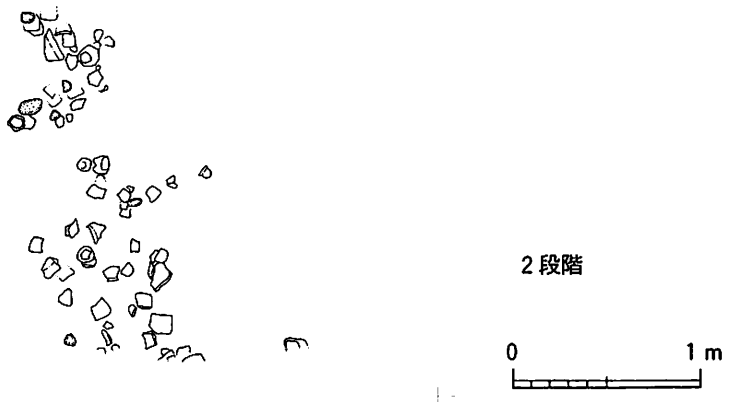
遺　物（第187・189図）

第1段階の遺物（20～22）

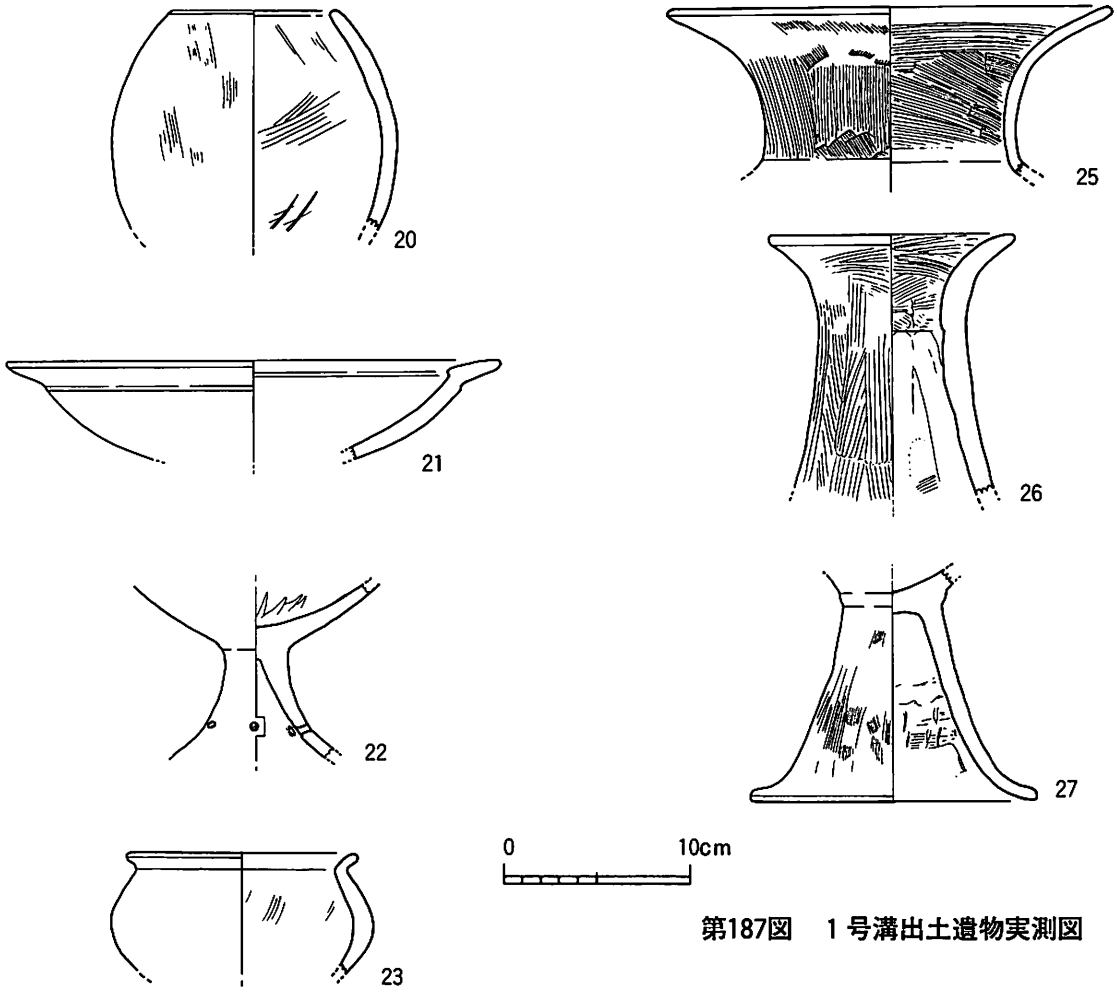
20（P－132－2）は無頸壺の破片である。底部を欠き、鉢とも言えそうな資料である。21（P－133～2）は高坏で脚部を欠いている。口縁部は鋤先状を呈し短く口径26.2cmである。胴部はやや膨らみを持ちながら脚部へと向かっている。22（P－135～2）も高坏で口縁部と脚裾部を欠いているため口径等不明。脚には6個の円孔を配している。

第2段階の遺物（23～24）

23（P－134～1）は小型壺である。口縁部は短く「く」の字に開き、胴部中位に最大径を配している。口径12cm、最大径13.8cmである。24（P－127）は高坏の口縁部である。胴部から口縁部の間は直立し口縁部は短く、口径は30cmである。



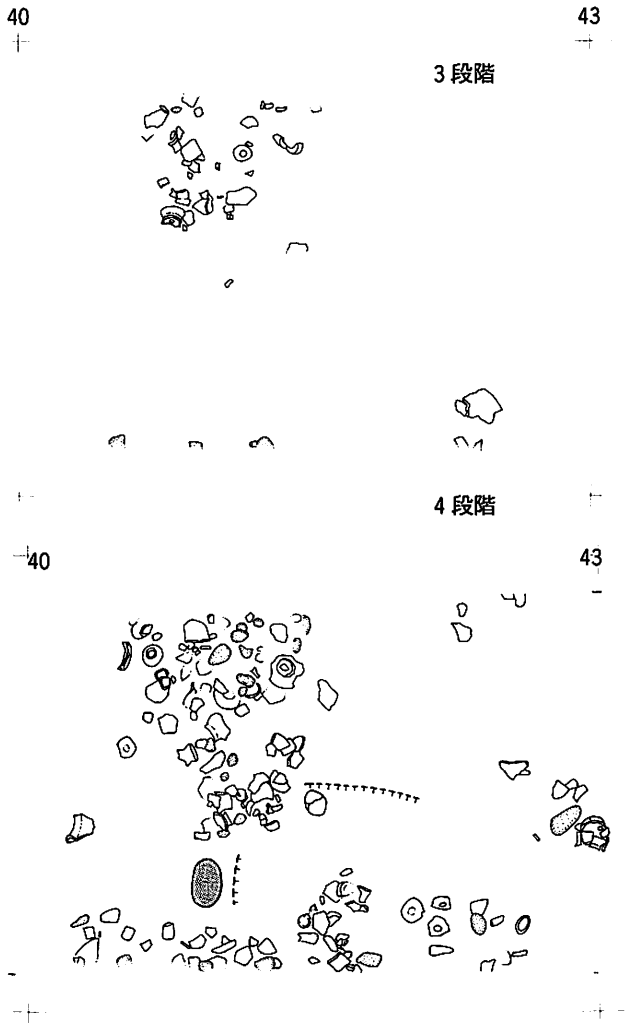
第186図　1号溝遺物出土状況実測図



第187図　1号溝出土遺物実測図

第3段階の遺物（25～27）

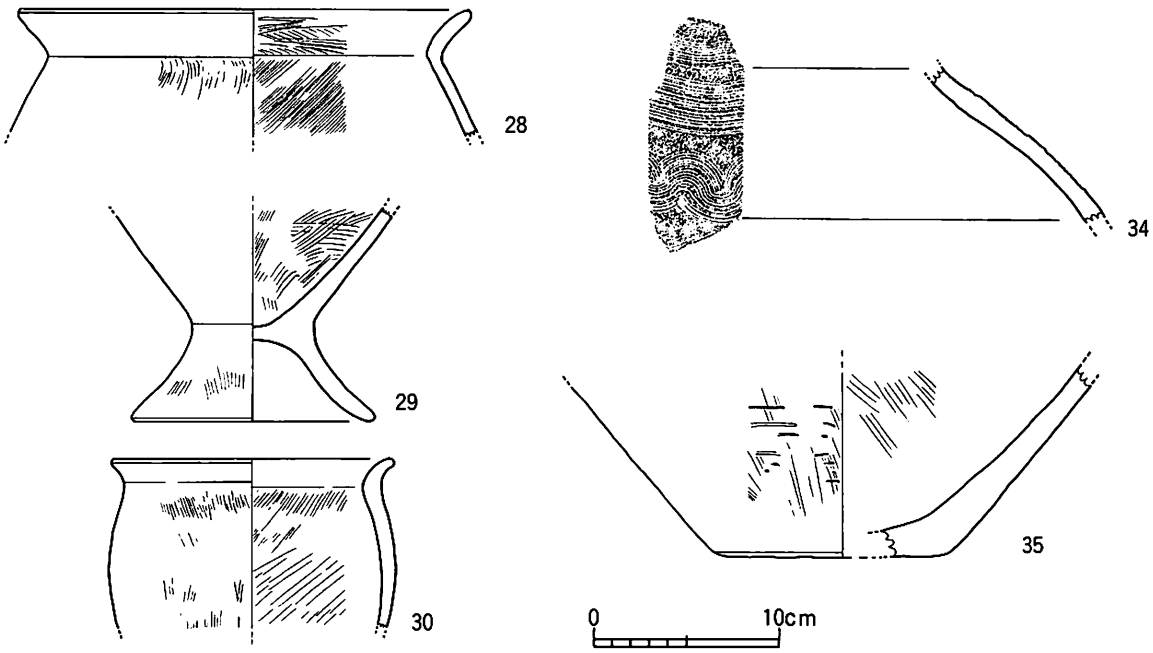
25（P－97）は壺の口縁部である。頸部から外反しながら大きく開き口径23.2cmである。口唇部や頸部は素文である。26（P－104）は器台である。くびれ部が上部にあり、比較的細身であった。27（P－94）は脚付鉢の脚である。裾部径15cm、高さ10.3cmで鉢とのくびれ部には僅かに膨らんだ凸帯をめぐらしている。



第188図　1号溝遺物出土状況実測図

第4段階の遺物（28～35）

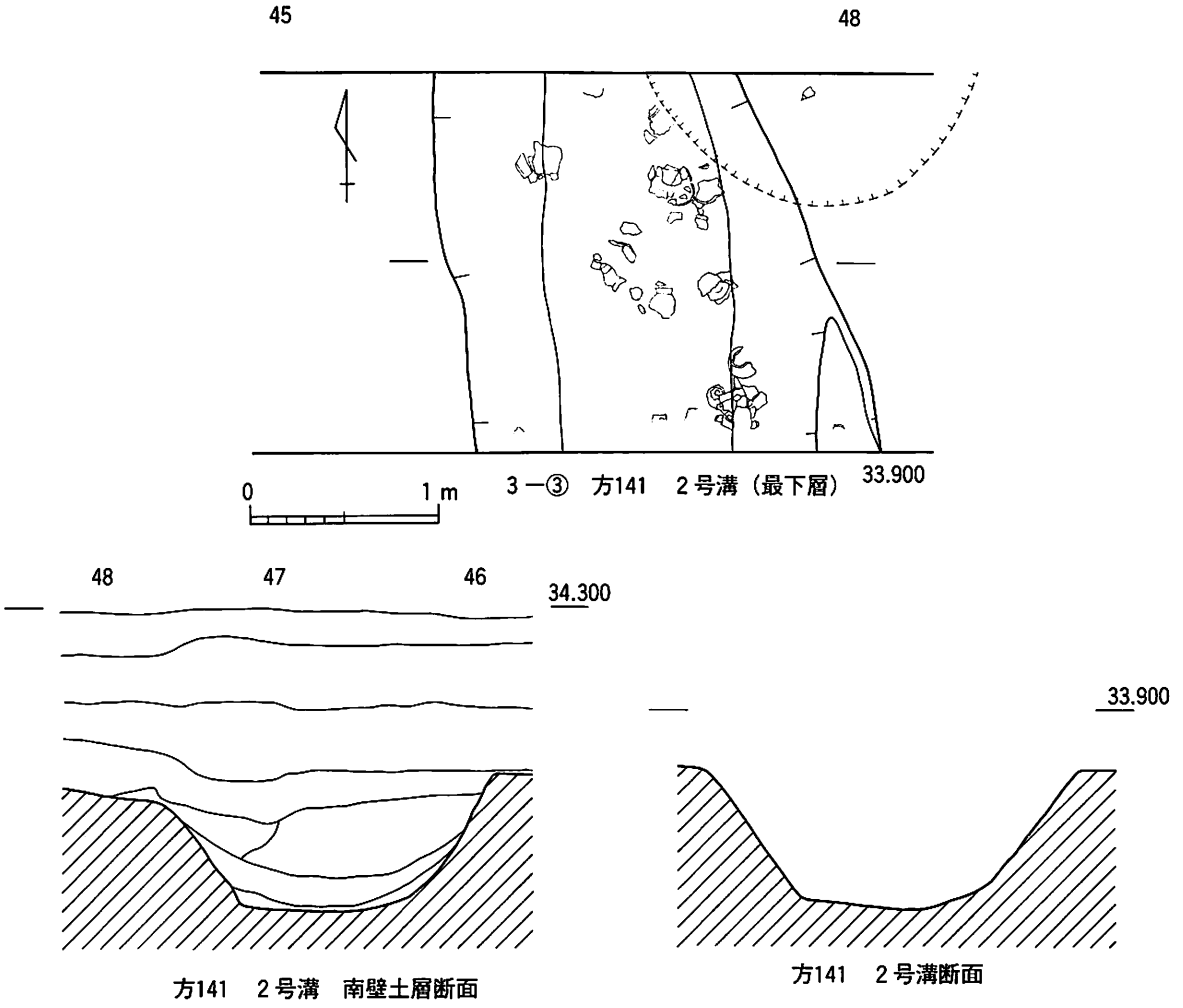
28（P－136）は在地系の甕である。口縁部から肩部にかけて残っており、口縁部は外反しつつ「く」字に開き口径25cmを測る。器面は両面にハケ目調整を行なっている。底部は脚台になる。29（P－86）は在地系の甕の底部である。脚台の裾部径は13cmでくびれ部径は6.4cmを測る。30（P－74）も在地系の小型甕である。口縁部から胴部中位にかけて残っていた。口縁部は短いが外反しつつ「く」字に開くが、内側の稜線は不明瞭で丸味を帯びていた。口径14.7cmを測り、胴



第189図　1号溝出土遺物実測図

部の張りが少なく両面にハケ目調整を行なっている。底部は脚台になる。

31（P－46）は壺で肩から下を欠いている。口縁部は外反しながら大きく開き口径19.7cmを測る。頸部には三角貼り付け凸帯をめぐらしている。32（P－72）も壺である。肩から下を欠いているが口縁部は直立気味に僅かに外反していた。頸部には列点文を配している。33（P－8）は複合口縁の壺で口径17.4cmを測る。34（P－86）は櫛描き文が施された壺で、肩の一部である。頸部には簾状文、その下に直線文さらに波状文を層位的に施文していた。35（P－48）は大形壺の底部で表面にタタキ目を残している。



第190図 2号溝実測図

（9） 2号溝（第190図）

トレンチ西端から46～48mの範囲で確認され、ほぼトレンチ東端に位置していた。溝は南側が広く上部幅2.15m、下部幅0.9m、北側が上部幅1.7m、下部幅0.85mとなっていたが、1号溝と並行するようにほぼ南北方向に伸びていた。

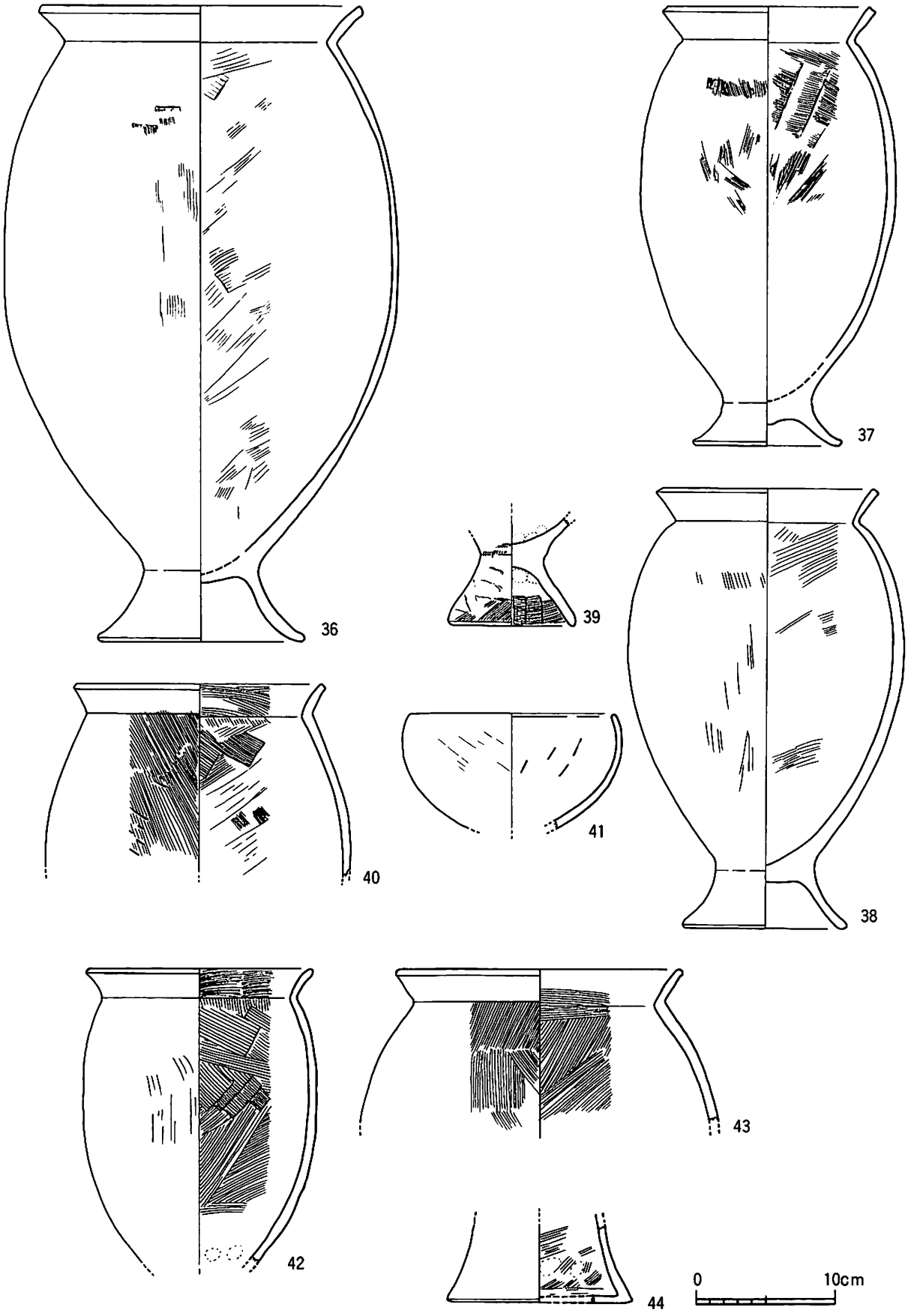
断面は逆台形に近く東西壁の標高はほぼ同じで上端部は33.58m、下端部で32.90mであった。溝の底からは殆ど遺物を出土しておらず（第Ⅶ層）、10cm程度埋没した段階で数個の土器が廃棄されている（第Ⅶ層）。また、埋もれてゆく過程で硬化面が形成されこの面に伴うかの様に土器を廃棄していた（第Ⅳ層）。

したがってこれらの土器は溝の時間を決定することはできないが、溝としての機能性が失われた時間的な位置付けができよう。さらに、1号溝の第4段階（第Ⅳ層）と同時期で、第5段階（第Ⅲ層）より古い事が土層断面から確認できた。

遺 物（第191図）

第Ⅳ層の遺物（36～41）

36（P－112・113）は在地系の甕である。器高44.9cm、口径22.4cm、最大径27.5cmは胴部中位に有している。口縁部は短く外反気味に「く」字に開き、胴部の



第191図　2号溝出土遺物実測図

張りは少なかった。底部は比較的小さな脚台で、器面は全面にハケ目調整を行なっている。

37（P－108・111）も在地系の甕である。器高30.8cm、口径14.4cm、最大径18cmは胴部中位に在り、口縁部は短く内湾気味に「く」字に開き、胴部の張りは少なかった。器面は全面にハケ目調整を行なっている。底部は小さく低い脚台である。

38（P－109・111）も在地系の甕である。器高30.9cm、口径14.8cm、最大径19.5cmは胴部中位に在り、37とほぼ同じ規模の土器であった。口縁部は短く僅かに外反気味に「く」字に開き、胴部の張りは少なかった。器面は全面にハケ目調整を行なっている。底部は小さい脚台である。

39（P－116）は手捏ねの甕の脚である。脚の裾部径は8.5cmで表面には粘土の皺や指圧痕が残されている。

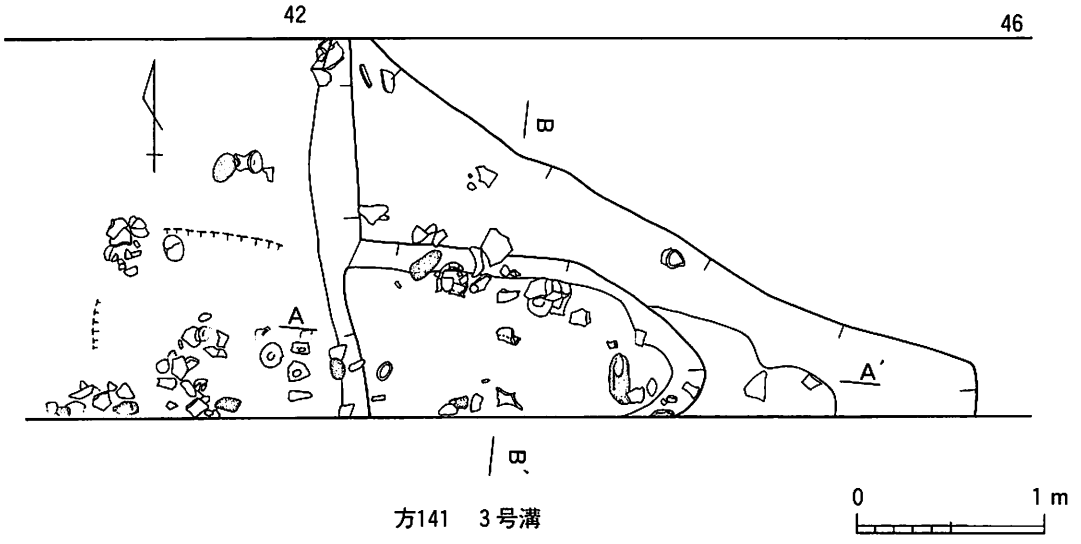
40（P－110）も在地系の甕である。胴部下位を欠き口径17.2cm、最大径20.8cmは胴部中位に配している。口縁部は短く僅かに外反気味に「く」字に開き、胴部の張りは少なかった。器面は全面にハケ目を施していたが、外面にはタタキ目を残していた。41（P－114）は鉢である。底部を欠いているが尖り気味の丸底になる。口径14.4cm、器高は9cm未満であろう。

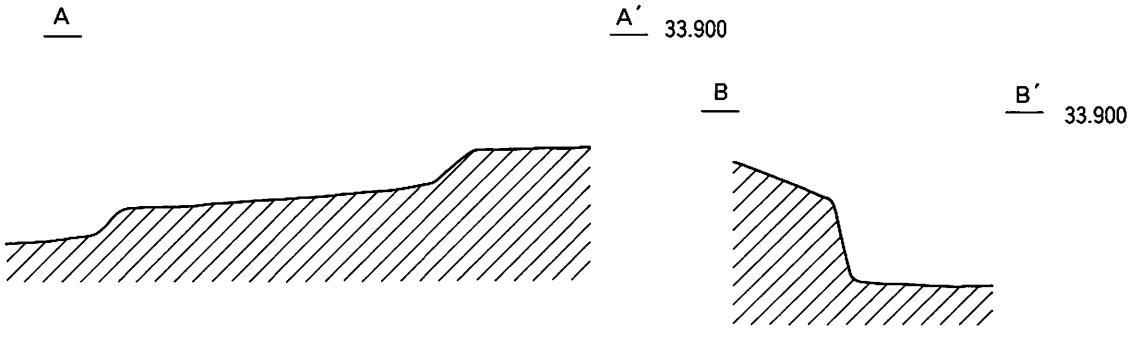
第Ⅶ層の遺物（42～44）

42（P－128～2・111）は在地系の甕である。底部は欠いているが脚台が付く。口径15.8cmで外反しつつ「く」字に短く開く。胴の張りは少なく最大径15.9cmは胴部中位よりやや上にあった。器面は全面にハケ目調整を行っている。

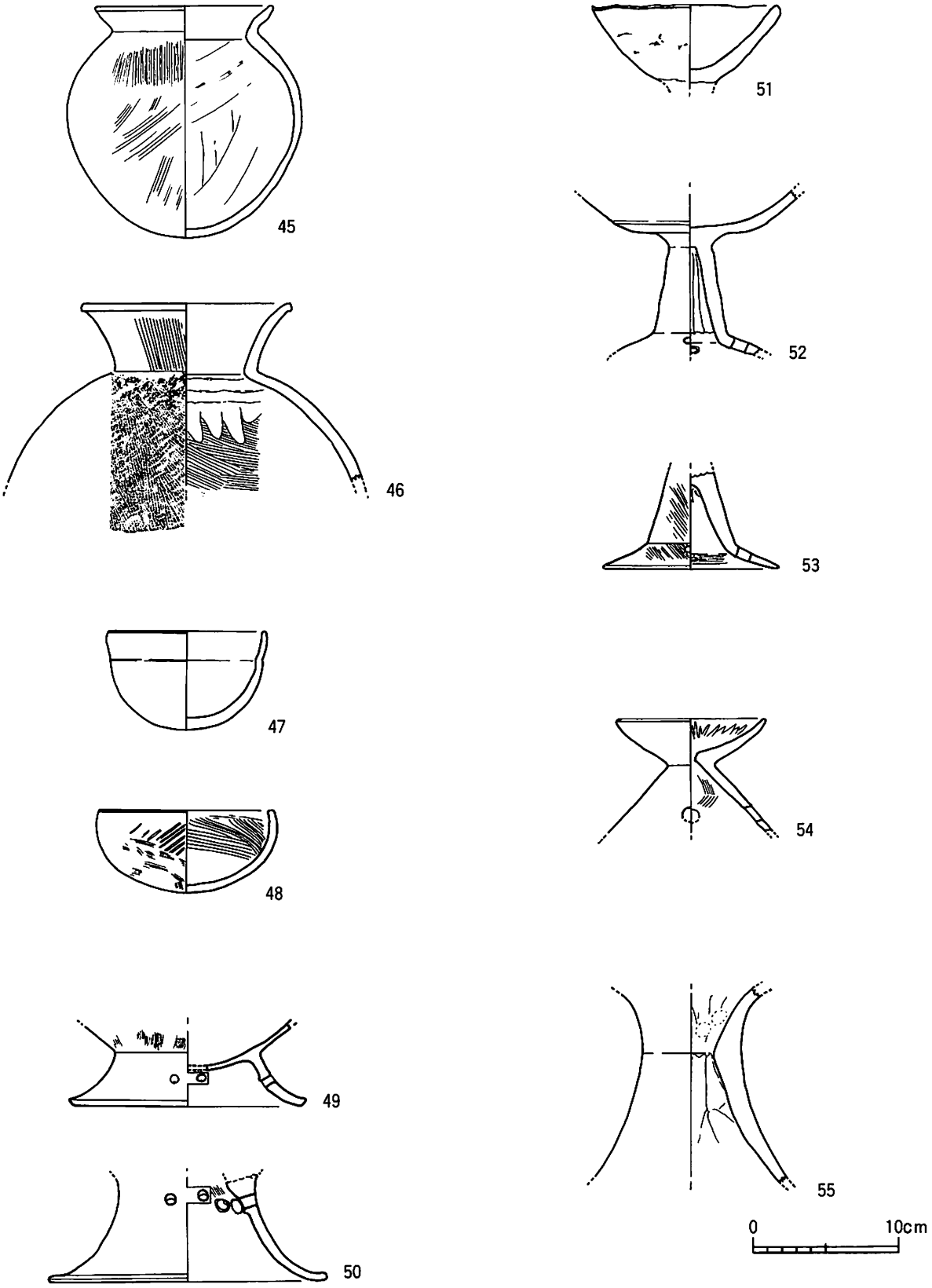
43（P－129～2）も在地系の甕である。胴部中位以下を欠いているが底部は脚台が付く。口縁部は短くやや外反しつつ「く」字に開き口径19.4cmである。胴の張りは大きく最大径は胴部中位よりやや下になる。器面は全面にハケ目調整を行なっている。

44（P－130～2）はジョッキ形土器で、底部から胴部の一部である。把手も残っていなかった。





第192図　3号溝実測図



第193図　3号溝出土遺物実測図

(10)　3号溝（第192図）

1号溝と2号溝に挟まれた位置にあり、トレンチ西端から43～46mの範囲で確認された。1号溝と2号溝を斜めに縫うように西北西の方向に伸びており、溝の壁のみが確認された。そのため溝の規模は明らかでないが長さ4mまでは確認された。

しかしこの溝が果たして溝であるのか疑問が残るところである。仮に溝とした場合、1号溝との関係では東側の壁のみをカットし、西側の壁に達していないことから交差するのでなく、分岐した形となっている。さらに1号溝のほぼ半分に広がるよう床面に長さ3.6m、幅1m以上の範囲で小判形に硬化面が広がっており（第Ⅸ層）、溝より道路や生活の跡としての機能性が強いようである。調査面積の制約から明確な答えは出せなかった。

遺物の多くは溝埋没過程での廃棄であり、1号溝、3号溝共に機能を失った段階のものであった。従って出土場所によっては明らかに1号溝の上であっても、廃棄の状況を考慮して3号溝埋没過程での廃棄に伴うものと判断されたので、Ⅲ層の遺物はここで取り扱った。

遺　物（第193図）

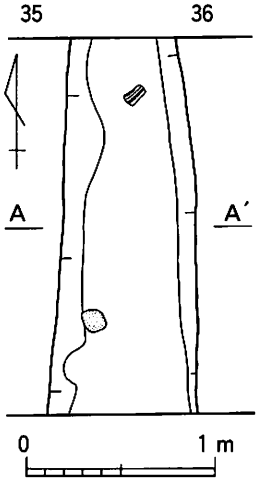
45（P－60）は布留系の甕である。口縁部は短く僅かに外反気味に「く」字に開き、中位が僅かに膨らみ、口唇部はつまみあげ口径11.8cmを測る。最大径は胴部やや上部に位置し底部は丸底で器高15.6cmの球形を呈している。器面調整は外面にハケ目を、内面にヘラ削りを行なっている。46（P－64）は胴部中位以下を欠いている壺である。口縁部は大きく反りながら開き口径14cmを測る。肩から胴にかけては丸味を帯びており、球形に近くなるものと思われる。器面調整は外面にタタキの後ハケ目を施し、内面はハケ目の後撫で消していた。肩部内面には粘土接合面が残っていた。

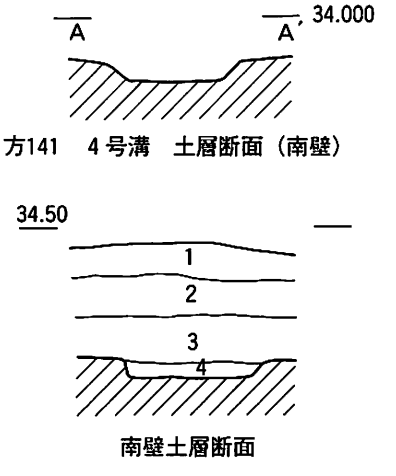
47（P－51）は小型丸底壺であるが、作りが悪く模倣品のようである。48（P－71）は鉢である。口径10.8cm、器高5.4cmの小型品で、器面調整は外面にタタキとハケ目を、内面にはハケ目を施している。

49（P－63）は台付き鉢の脚部である。裾部径15.4cmで脚の高さは4.6cmと低く、2個の円孔を3箇所に配している。50（P－82）は台付鉢の脚部である。裾部径は18.4cmで、2個づつ3箇所に円孔を穿っていた。51（P－53）も小型の台付き鉢である。脚部を欠いているが手捏出作りは雑で器壁が厚い。口径12.3cmを測る。52（P－52）は高坏で、口縁部と脚裾部を欠いているため口径等計測不能であるが、口縁部が大きく開き坏部は浅くなるタイプである。53（P－48）も高坏で坏部を欠き脚部のみである。52と同形式で脚の裾が折れ広がる。54（P－54・56）は外来系の小形の器台で脚裾部を欠いている。坏部は皿状になり底には孔を穿っている。脚は直線的に開き3～4個の円孔を配していたと推察できる。脚には4個の穿孔を配している。

55（P－66）も在地系の器台であるが口縁部と裾部欠損のため計測不可。

（P－61）は小型の鉢で口径10.6cm、器高6.5cmである。口縁部と胴部との間は僅かにくびれる程度であった。





第194図　4号溝実測図

(11)　4号溝（第194図）

トレンチ西端から35～36mの範囲で確認され、1号溝の西側4mに位置していた。溝は小規模であるが、南側が広く上部幅0.8m下部幅0.65m、北側が上部幅0.6m下部幅0.4mとなっていた。1号溝と並行するようにほぼ南北方向に伸びており、断面は逆台形に近く標高は東壁の上端部で33.76m、西壁の上端部で33.75m、溝底が33.66mであった。あまりに小規模のもので、溝としての機能性がどこまで求められるか疑問だったが、排水の役目は十分果たすことができる。

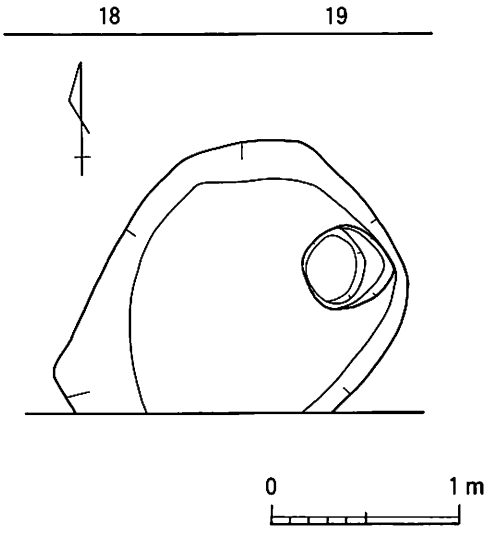
遺物の出土は少なく実測に耐えうる物はなかった。

(12)　1号貯蔵穴（第195図）

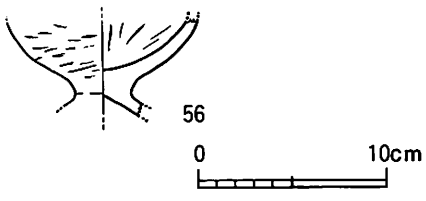
トレンチ西端から18～19mの範囲で確認され5号住居の下から検出され、長径1.68m、短径1.48mの不整形な円形で上端部の標高は33.62m、底は33.20mであった。貯蔵穴埋没後5号住居が築かれており上面で硬化面を確認できた。中から土器片が少し出てきたのみで、実測できた物は僅かに1点であった。

遺　物（第196図）

56（P－124）は小形の脚付き鉢で手捏風の脚の付き方である。器面は全面にヘラ研磨で仕上げている。



第195図　1号貯蔵穴実測図



第196図　1号貯蔵穴出土遺物実測図

(13)　1号石棺（第197図）

トレンチ西端から27～30mの範囲で2号石棺と並ぶように確認された。主軸は東西方向から僅かに北に寄せていた。石棺を埋設した土坑は長さ約2m、幅1.25mで、西側には柱穴1個を配していた。

石棺は安山岩と阿蘇溶結凝灰岩の板石を組み合わせて作られ、蓋石は安山岩で西側の石の上重ねるように東側の蓋石を置いていた。側石も左右共に2枚の安山岩で構成し、端石は各々1枚の阿蘇溶結凝灰岩であった。外測で長さ1.28m、幅0.53m、内測は長さ0.95m、幅0.28mと小さく、子供用の石棺であったことが判明した。この事を裏付ける様に乳歯の出土が見られ、下顎の歯は5本、上顎の歯が10本確認され4歳前後の幼児であったことが判明したが、性別の確認には至らなかった。注1　なお、石棺内部の形状から東に頭部を向けていた。

また、東側端石と南側側石との接合面の目張りに粘土を張り付けていたが、その部分にくっきりと右手の人差し指から薬指の跡を残していた。おそらく石棺構築の際工人の手で、併せて石棺内床面にも大人の足跡が1個残されており、同一人物の可能性が高い。

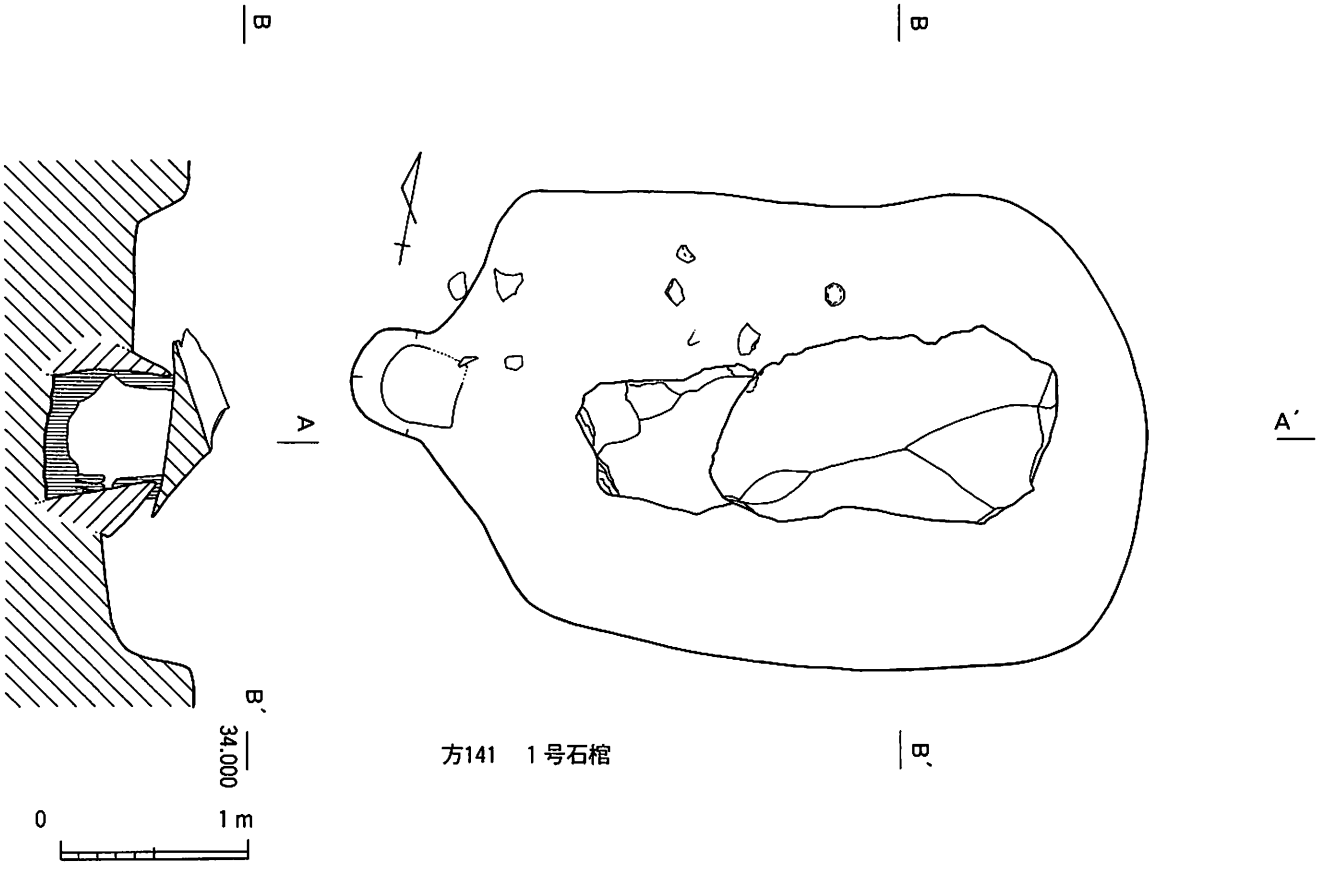
石棺内は全面に朱が塗られていたが副葬品はなかった。土坑埋土には布留期の土器が出土し、須恵器等の出土が見られなかったことから古墳時代前期に属するものと判断した。

遺　物（第198図）

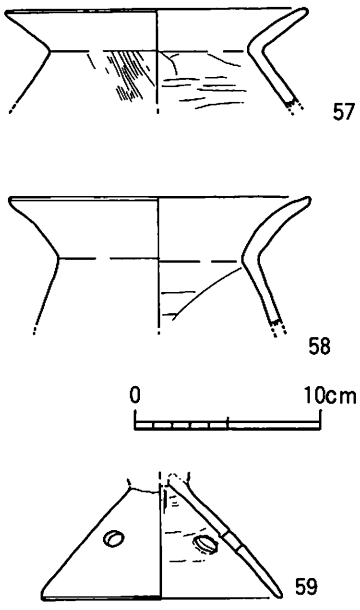
石棺土坑内より出土した土器で57（P－87）は口縁部から肩にかけての布留期の甕である。口縁部は短く僅かに外反気味に「く」字に開き、中位が僅かに膨らんでおり口径15.7cmを測る。器面調整は外面にハケ目を、内面にはヘラ削りを行なっている。58（P－89）も同様で口径17.8cmである。59（一括）が外来系の器台の脚である。高坏とも考えられたが上部に孔が穿たれていたことから器台と判断した。側面には4個の円孔を穿っている。

(14)　2号石棺（第199図）

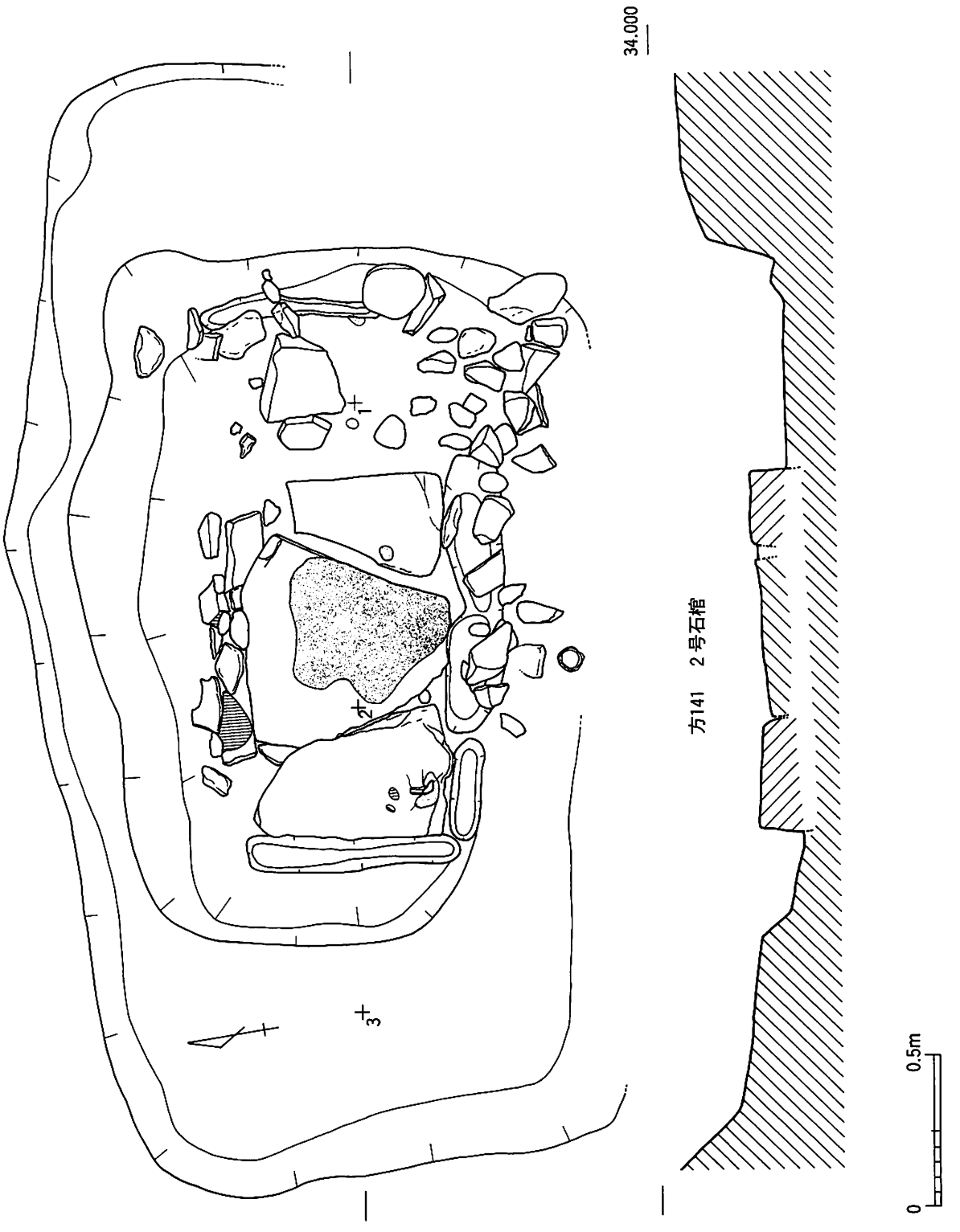
1号石棺の南に位置し主軸はほぼ東西に向けていたが既に盗掘や耕作によって破壊され石棺の形状は失っていた。石棺を埋設した土坑は二重になっており、外側の土坑はトレンチの南に広がっていたため全体は検



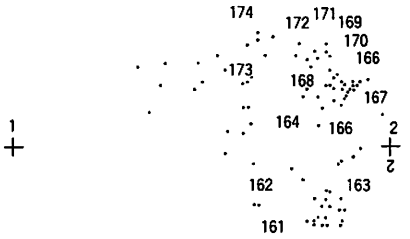
第197図　1号石棺実測図



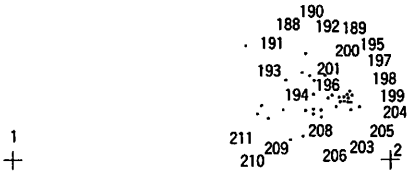
第198図　1号石棺周辺出土遺物実測図



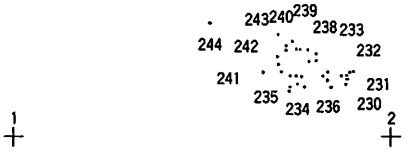
第199図　2号石棺実測図



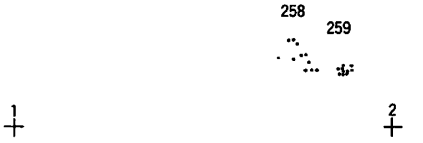
方141　2号石棺　No.1
玉161～174



No.2　玉　No.188～211



No.3　玉　No.230～244

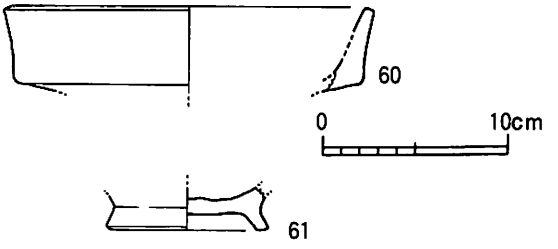


No.4

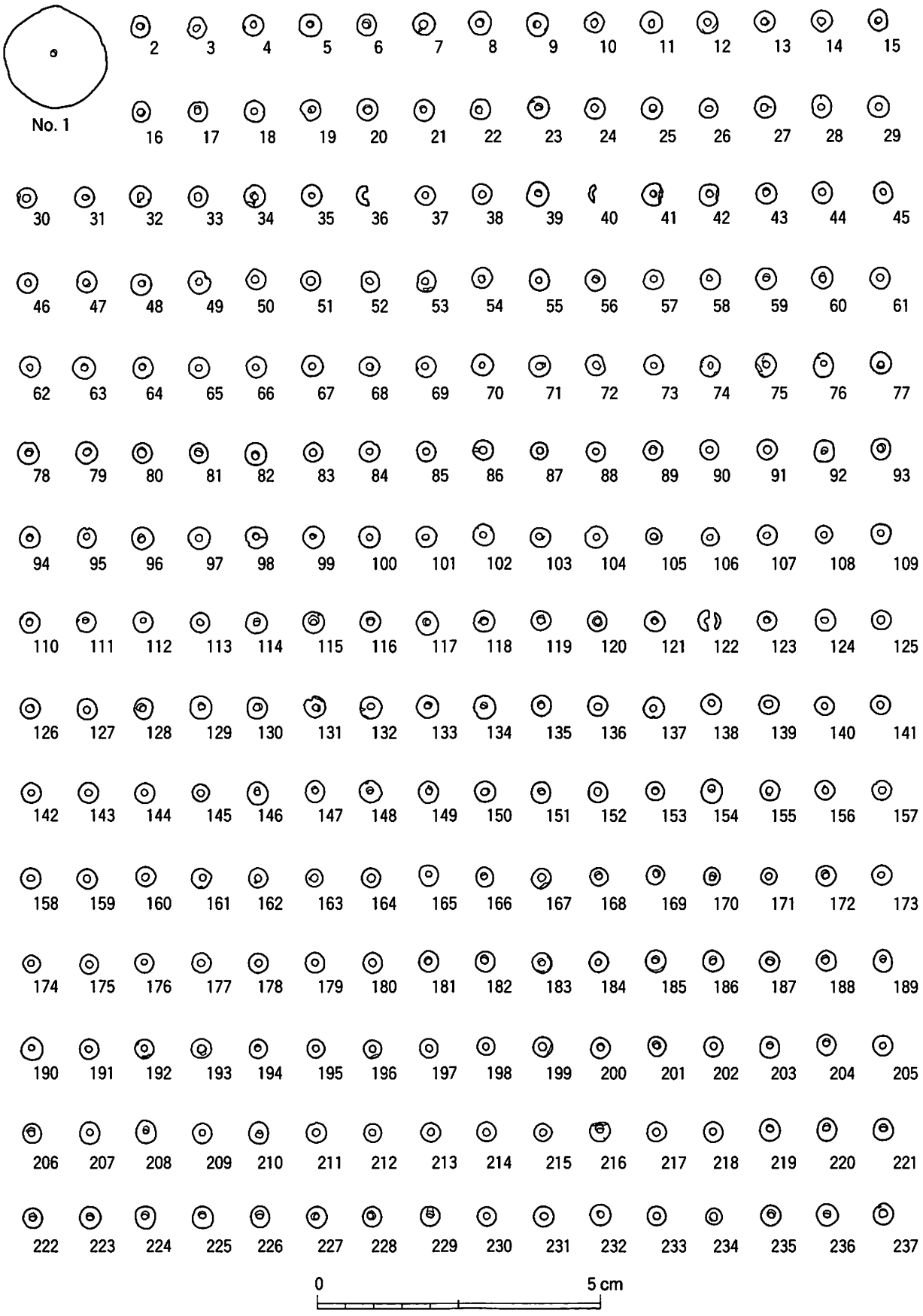


No.5

第200図　2号石棺玉類出土状況実測図



第201図　2号石棺出土遺物実測図



第202図　141番地　2号　石棺出土玉類実測図　No. 1 ～237



第203図　方保田141番地　2号　石棺　玉類　No.238～415

出できなかったが長さ3.7m、幅は東側で推定約２m、西側で1.6mの隅丸長方形であった。内側の土坑は長さ2.28m、幅は東側で1.6m、西側で１mの隅丸長方形であった。この事から東側に頭を向けて埋葬していたことが明らかになった。

この石棺も安山岩と凝灰岩を使った組合せ式の箱式石棺であったが、床材を除いて殆どの石材を失っており、端石抜き取り跡から石棺の大きさを推定すると外測で長さ1.91m、幅0.96m、内測は長さ1.70m、幅0.65m程度である。なお、破壊された時の様子を物語る様に石材を小さく叩き割って石棺周辺に散乱していた。さらに石棺調査中雨によって廃土の中から舶載鏡片１点(巻頭カラー４)が発見された。おそらく副葬品として本来は石棺の中にあったものであろう。

石棺内には歯と滑石製の飾り玉と臼玉が散乱していた。歯は４本が確認され壮年前半（20歳代）の女性で

表－5　2号石棺出土滑石製玉類観察一覧表(単位ミリ)　その1

番号	種別	直径	厚さ	孔径	色調	備　考
1	玉	23.5	2.9	1.3	灰色	
2	臼玉	4.7	3	1.5	灰色	5分の1程欠落
3	臼玉	4.6	2.2	1.4	淡灰色	
4	臼玉	4.8	0.8	1.1	淡灰色	
5	臼玉	5.1	1.85	1.2	淡灰色	
6	臼玉	4.6	2.5	1.2	灰色	
7	臼玉	4.9	1.2	1.5	淡灰色	真ん中で割れている
8	臼玉	5.15	2.5	1.6	灰色	
9	臼玉	5	1.75	1.2	淡灰色	
10	臼玉	4.7	1.5	1.1	淡灰色	
11	臼玉	5.2	2.2	1.1	淡灰色	
12	臼玉	5.1	2	1.2	淡灰色	
13	臼玉	4.9	2.25	1.5	灰色	
14	臼玉	4.9	1.7	1.15	淡灰色	
15	臼玉	4.9	1.6	1.1	淡灰色	
16	臼玉	4.7	2	1.15	灰色	
17	臼玉	4.8	2.65	1.2	灰色	
18	臼玉	5	2.1	1.15	灰色	
19	臼玉	4.75	2.1	1.5	灰色	
20	臼玉	4.8	2.9	1.65	灰色	
21	臼玉	4.8	1.9	1.4	灰色	
22	臼玉	5	2.4	1.3	灰色	
23	臼玉	4.9	2.3	1.3	灰色	
24	臼玉	4.9	1.15	1.25	淡灰色	
25	臼玉	4.85	1.9	1.6	淡灰色	
26	臼玉	4.6	1.9	1.3	灰色	
27	臼玉	5	1.9	1.3	灰色	
28	臼玉	4.8	2	1.2	灰色	
29	臼玉	5.1	2.4	1.5	灰色	
30	臼玉	4.65	2.9	1.65	灰色	側面中央が膨らむ
31	臼玉	4.7	2.1	1.15	灰色	
32	臼玉	4.9	1.6	1.2	灰色	
33	臼玉	4.75	3.4	1.7	灰色	
34	臼玉	4.9	2.8	1.35	淡灰色	
35	臼玉	4.9	2.3	1.35	灰色	
36	臼玉	4.85	2.7	1.5	淡灰色	
37	臼玉	5.1	2.55	1.2	灰色	
38	臼玉	4.65	2.55	1.1	淡灰色	
39	臼玉	5.1	2.4	1.55	灰色	
40	臼玉	4.25	0.8	1.35	灰色	
41	臼玉	4.9	2	1.25	淡灰色	
42	臼玉	5.2	2.1	1.25	灰色	
43	臼玉	4.65	2.6	1.4	灰色	
44	臼玉	4.7	2	1.3	灰色	
45	臼玉	4.6	2.5	1.4	淡灰色	
46	臼玉	4.55	1.6	1.25	淡灰色	
47	臼玉	4.75	2.15	1.35	灰色	
48	臼玉	4.95	2.5	1.25	灰色	
49	臼玉	5.05	2.2	1.35	灰色	
50	臼玉	4.8	1.7	1.45	淡灰色	
51	臼玉	4.65	2.95	1.8	灰色	
52	臼玉	4.95	1.9	1.35	灰色	
53	臼玉	4.95	2.2	1.4	灰色	
54	臼玉	4.75	2.2	1.35	灰色	
55	臼玉	4.85	1.5	1.4	灰色	
56	臼玉	4.9	3.1	1.5	灰色	
57	臼玉	4.45	2.3	1.4	灰色	
58	臼玉	4.65	1.4	1.3	淡灰色	
59	臼玉	4.7	2.75	1.35	灰色	
60	臼玉	4.9	2	1.45	淡灰色	
61	臼玉	4.8	1.9	1.45	淡灰色	
62	臼玉	4.85	1.4	1.25	灰色	
63	臼玉	5.15	2.2	1.5	淡灰色	
64	臼玉	4.9	2.1	1.35	淡灰色	
65	臼玉	5.1	2.25	1.4	淡灰色	
66	臼玉	5	2.2	1.35	淡灰色	
67	臼玉	5.25	2.2	1.55	灰色	
68	臼玉	4.8	2	1.3	灰色	
69	臼玉	4.7	2.8	1.45	淡灰色	
70	臼玉	5.05	2.1	1.5	灰色	
71	臼玉	5.05	1.7	1.4	灰色	
72	臼玉	4.95	1.9	1.5	灰色	
73	臼玉	4.6	1.5	1.3	灰色	
74	臼玉	4.8	1.6	1.45	淡灰色	
75	臼玉	4.85	2.7	1.4	灰色	
76	臼玉	4.8	2.7	1.4	淡灰色	
77	臼玉	4.9	2.2	1.45	灰色	
78	臼玉	5.1	2.6	1.6	灰色	
79	臼玉	5	2.3	1.55	淡灰色	
80	臼玉	4.7	2.8	1.6	灰色	
81	臼玉	4.55	3.55	1.6	灰色	
82	臼玉	5.1	2.4	1.45	灰色	
83	臼玉	4.7	3.8	1.6	灰色	
84	臼玉	5	2.2	1.25	淡灰色	
85	臼玉	4.65	4.15	1.5	灰色	
86	臼玉	4.9	3.7	1.5	淡灰色	
87	臼玉	4.15	1.25	1.6	淡灰色	
88	臼玉	4.5	2.5	1.5	灰色	
89	臼玉	4.3	3.3	1.55	灰色	
90	臼玉	4.9	3.2	1.5	灰色	
91	臼玉	4.75	3.2	1.6	淡灰色	
92	臼玉	4.95	3.2	1.45	灰色	
93	臼玉	4.9	2.8	1.45	灰色	
94	臼玉	5	2.6	1.4	淡灰色	
95	臼玉	4.45	3.1	1.45	淡灰色	
96	臼玉	5.15	2.8	1.5	灰色	
97	臼玉	5.1	1.4	1.4	淡灰色	
98	臼玉	5.1	2.3	1.35	淡灰色	
99	臼玉	5.1	2	1.15	淡灰色	
100	臼玉	4.95	1.9	1.2	灰色	
101	臼玉	5	1.5	1.35	淡灰色	
102	臼玉	5	2.9	1.45	灰色	
103	臼玉	4.65	1.3	1.4	淡灰色	
104	臼玉	5.05	1.7	1.45	淡灰色	
105	臼玉	3.85	1.3	1.45	灰色	
106	臼玉	4.4	2.7	1.45	灰色	
107	臼玉	4.4	2.2	1.45	灰色	
108	臼玉	4.1	2.1	1.35	灰色	
109	臼玉	4.9	4	1.45	淡灰色	
110	臼玉	4.7	2.3	1.3	灰色	
111	臼玉	4.45	3.8	1.5	淡灰色	
112	臼玉	4.4	3.55	1.3	淡灰色	
113	臼玉	4.45	1.7	1.45	淡灰色	
114	臼玉	4.65	2.9	1.5	淡灰色	
115	臼玉	4.85	2.6	1.35	淡灰色	側面中央が膨らむ
116	臼玉	4.65	2.6	1.4	灰色	

表－5　2号石棺出土滑石製玉類観察一覧表(単位ミリ)　その2

番号	種別	直径	厚さ	孔径	色調	備　考
117	臼玉	5.25	2.7	1.45	灰色	
118	臼玉	4.9	3.5	1.5	淡灰色	
119	臼玉	4.65	2.2	1.4	淡灰色	
120	臼玉	4.9	2.9	1.45	灰色	側面中央が膨らむ
121	臼玉	4.7	3	1.4	淡灰色	
122	臼玉	4.9	1.5	1.5	淡灰色	
123	臼玉	4.55	4	1.55	灰色	
124	臼玉	5.15	1.7	1.5	淡灰色	
125	臼玉	4.7	2.9	1.75	灰色	
126	臼玉	4.8	2.9	1.75	灰色	側面中央が膨らむ
127	臼玉	5	2.6	1.35	淡灰色	
128	臼玉	4.5	2.4	1.45	淡灰色	
129	臼玉	5.15	2.45	1.3	灰色	側面中央が膨らむ
130	臼玉	5.05	2.1	1.3	淡灰色	
131	臼玉	4.8	1.7	1.35	淡灰色	
132	臼玉	5.05	2	1.5	淡灰色	
133	臼玉	5.05	2.5	1.4	灰色	
134	臼玉	5	3.2	1.45	灰色	
135	臼玉	4.85	2.5	1.45	灰色	
136	臼玉	4.8	2.35	1.4	灰色	
137	臼玉	5	2.2	1.4	灰色	
138	臼玉	5	2.55	1.4	淡灰色	
139	臼玉	4.8	3.2	1.75	淡灰色	
140	臼玉	4.4	2.9	1.4	灰色	
141	臼玉	4.75	3.75	1.55	淡灰色	
142	臼玉	4.65	3.1	1.45	灰色	
143	臼玉	4.85	3.05	1.6	淡灰色	
144	臼玉	4.9	2.7	1.35	灰色	
145	臼玉	4.2	2.1	1.35	灰色	
146	臼玉	4.95	3	1.4	灰色	
147	臼玉	4.7	3.4	1.45	灰色	
148	臼玉	5.1	2.5	1.3	灰色	
149	臼玉	4.5	3.3	1.55	灰色	
150	臼玉	5	1.85	1.45	淡灰色	
151	臼玉	4.65	2.8	1.45	淡灰色	
152	臼玉	4.65	2.3	1.45	淡灰色	
153	臼玉	4.5	2.7	1.55	淡灰色	上下の径が違う
154	臼玉	4.95	3.7	1.55	灰色	
155	臼玉	4.9	4.2	1.6	淡灰色	上下の径が違う
156	臼玉	4.7	2.75	1.46	淡灰色	側面中央が膨らむ
157	臼玉	4.85	2.9	1.6	淡灰色	
158	臼玉	4.85	2.6	1.4	淡灰色	側面中央が膨らむ
159	臼玉	4.75	2.7	1.35	淡灰色	
160	臼玉	4.9	2.2	1.5	灰色	
161	臼玉	4.85	2	1.5	淡灰色	
162	臼玉	4.65	3	1.65	灰色	
163	臼玉	4.2	2.5	1.55	淡灰色	
164	臼玉	4.65	2.7	1.5	淡灰色	
165	臼玉	4.65	4.2	1.4	淡灰色	
166	臼玉	4.3	3.6	1.45	淡灰色	
167	臼玉	4.55	3	1.35	淡灰色	半分に割れている
168	臼玉	4.05	2.45	1.4	淡灰色	
169	臼玉	4.2	2.6	1.5	淡灰色	
170	臼玉	4.25	3.8	1.35	淡灰色	
171	臼玉	4.1	1.55	1.45	淡灰色	
172	臼玉	4.75	2.95	1.75	淡灰色	
173	臼玉	4.7	3.7	1.45	淡灰色	
174	臼玉	4.05	3.9	1.55	淡灰色	
175	臼玉	4.5	2	1.4	淡灰色	
176	臼玉	4.5	3.8	1.5	灰色	上下の径が違う

番号	種別	直径	厚さ	孔径	色調	備　考
177	臼玉	4.45	2.5	1.4	淡灰色	
178	臼玉	4.8	2.7	1.45	淡灰色	
179	臼玉	4.75	2	1.35	淡灰色	
180	臼玉	4.7	2.5	1.35	淡灰色	
181	臼玉	4.85	3.65	1.5	淡灰色	上下の径が違う
182	臼玉	4.7	4.5	1.6	淡灰色	上下の径が違う
183	臼玉	4.4	2.7	1.45	淡灰色	
184	臼玉	4.65	3	1.35	淡灰色	
185	臼玉	4.85	2.8	1.35	淡灰色	
186	臼玉	4.9	2.4	1.55	淡灰色	
187	臼玉	4.85	2.7	1.5	淡灰色	
188	臼玉	4.7	2.7	1.5	淡灰色	
189	臼玉	4.75	4	1.45	淡灰色	
190	臼玉	5.05	3.2	1.4	淡灰色	上下の径が違う
191	臼玉	4.9	2.2	1.4	淡灰色	
192	臼玉	4.75	3.5	1.5	淡灰色	
193	臼玉	4.75	2.5	1.5	淡灰色	
194	臼玉	4.15	4.7	1.35	淡灰色	
195	臼玉	4.45	2.5	1.4	淡灰色	
196	臼玉	4.4	4.2	1.4	淡灰色	
197	臼玉	4.2	2.35	1.4	淡灰色	
198	臼玉	4.15	3.75	1.4	淡灰色	
199	臼玉	4.6	2.7	1.5	淡灰色	
200	臼玉	4.55	3.1	1.5	淡灰色	
201	臼玉	4.45	2.9	1.55	淡灰色	
202	臼玉	4.65	2.5	1.45	淡灰色	
203	臼玉	4.65	3.65	1.45	灰色	
204	臼玉	4.5	3.7	1.45	淡灰色	上下の径が違う
205	臼玉	4.8	2.7	1.5	灰色	
206	臼玉	4.4	2.65	1.5	淡灰色	
207	臼玉	5	2.9	1.45	淡灰色	
208	臼玉	4.85	4.3	1.45	淡灰色	上下の径が違う
209	臼玉	4.8	3.85	1.5	淡灰色	
210	臼玉	4.9	3.8	1.5	淡灰色	
211	臼玉	4.9	2.35	1.4	淡灰色	
212	臼玉	4.55	4.2	1.4	淡灰色	
213	臼玉	4.65	3	1.45	淡灰色	
214	臼玉	4.65	2.6	1.45	淡灰色	
215	臼玉	4.25	2.6	1.5	灰色	
216	臼玉	4.85	3.2	1.35	淡灰色	5分の1程欠落
217	臼玉	4.45	3.5	1.45	白灰色	
218	臼玉	4.6	2.7	1.45	白灰色	
219	臼玉	5.05	2.7	1.45	淡灰色	上下の径が違う
220	臼玉	4.75	3.9	1.45	淡灰色	上下の径が違う
221	臼玉	4.85	3.7	1.5	淡灰色	上下の径が違う
222	臼玉	4.55	2.5	1.45	淡灰色	
223	臼玉	5.05	3.4	1.5	淡灰色	上下の径が違う
224	臼玉	4.9	3.7	1.55	淡灰色	
225	臼玉	4.75	3.9	1.5	淡灰色	
226	臼玉	4.7	3.4	1.55	淡灰色	
227	臼玉	5.1	3.65	1.5	淡灰色	
228	臼玉	4.65	3.4	1.45	淡灰色	
229	臼玉	4.7	3.6	1.65	淡灰色	
230	臼玉	4.55	4.1	1.6	淡灰色	
231	臼玉	4.85	2.2	1.4	淡灰色	
232	臼玉	4.9	3.2	1.5	淡灰色	
233	臼玉	4.5	2.45	1.4	淡灰色	上下の径が違う
234	臼玉	3.95	2.2	1.4	淡灰色	
235	臼玉	4.75	3.8	1.6	淡灰色	
236	臼玉	5.05	3.7	1.75	淡灰色	上下の径が違う

表－5　2号石棺出土滑石製玉類観察一覧表(単位ミリ)　その3

番号	種別	直径	厚さ	孔径	色調	備　考
237	臼玉	4.9	2.2	1.65	淡灰色	
238	臼玉	5	1.2	1.25	淡灰色	
239	臼玉	4.35	3.5	1.5	淡灰色	上下の径が違う
240	臼玉	4.7	3	1.6	淡灰色	上下の径が違う
241	臼玉	4.8	2.2	1.45	淡灰色	
242	臼玉	4.8	4.1	1.5	淡灰色	上下の径が違う
243	臼玉	-	-	-	淡灰色	
244	臼玉	4.65	3.5	1.4	淡灰色	上下の径が違う
245	臼玉	4.2	2.85	1.35	淡灰色	
246	臼玉	4.8	2.75	1.45	淡灰色	
247	臼玉	4.2	3.3	1.55	淡灰色	
248	臼玉	4.4	4	1.5	淡灰色	
249	臼玉	4.55	3.1	1.4	淡灰色	
250	臼玉	4.85	2.85	1.45	淡灰色	
251	臼玉	4.9	2.4	1.35	淡灰色	
252	臼玉	5	2	1.35	淡灰色	
253	臼玉	4.95	1.9	1.25	淡灰色	
254	臼玉	4.75	2.5	1.35	淡灰色	
255	臼玉	4.55	2.5	1.45	淡灰色	
256	臼玉	4.35	4.5	1.35	淡灰色	
257	臼玉	4.75	3.1	1.4	淡灰色	
258	臼玉	5.1	3.85	1.45	淡灰色	上下の径が違う
259	臼玉	4.45	3.15	1.35	淡灰色	
260	臼玉	5.05	3.6	1.45	淡灰色	上下の径が違う
261	臼玉	4.5	2.5	1.45	淡灰色	
262	臼玉	4.5	1.9	1.4	淡灰色	
263	臼玉	4.65	3	1.45	淡灰色	
264	臼玉	4.55	1.5	1.4	淡灰色	
265	臼玉	4.55	2.7	1.6	淡灰色	
266	臼玉	4.95	2	1.35	淡灰色	
267	臼玉	4.7	2.1	1.5	淡灰色	
268	臼玉	4.75	2.25	1.45	淡灰色	
269	臼玉	5.05	2.8	1.8	灰色	
270	臼玉	5	2.75	1.5	淡灰色	
271	臼玉	4.7	3.1	1.45	淡灰色	
272	臼玉	4.85	2.95	1.9	灰色	側面中央が膨らむ
273	臼玉	4	1.65	1.4	淡灰色	
274	臼玉	4.45	3.25	1.35	淡灰色	3分の1を欠落
275	臼玉	4.85	3.2	1.55	淡灰色	側面中央が膨らむ
276	臼玉	4.35	2.1	1.55	淡灰色	側面中央が膨らむ
277	臼玉	4.9	2.7	1.6	灰色	
278	臼玉	4.6	1.5	1.35	淡灰色	
279	臼玉	4.85	1.85	1.45	淡灰色	
280	臼玉	4	2.85	1.6	淡灰色	
281	臼玉	4.75	2.1	1.55	灰色	
282	臼玉	5.15	2.65	1.45	淡灰色	
283	臼玉	4.55	3.5	1.5	灰色	側面中央が膨らむ
284	臼玉	4.4	3.4	1.35	淡灰色	
285	臼玉	4.8	3.7	1.5	灰色	側面中央が膨らむ
286	臼玉	4.75	3	1.45	緑灰色	側面中央が膨らむ
287	臼玉	3.95	2.9	1.45	緑灰色	
288	臼玉	4.95	3.3	1.6	緑灰色	
289	臼玉	4.55	4.3	1.5	灰色	
290	臼玉	4.75	2.8	1.4	灰色	
291	臼玉	4.15	3.45	1.45	灰色	
292	臼玉	4.7	3.1	1.5	灰色	
293	臼玉	4.75	2.7	1.5	茶灰色	
294	臼玉	4.65	2.4	1.55	茶灰色	
295	臼玉	5.6	2.3	1.85	緑灰色	5分の1程欠落
296	臼玉	4.45	3.4	1.65	灰色	上下の径が違う

番号	種別	直径	厚さ	孔径	色調	備　考
297	臼玉	4.8	2.95	1.5	緑灰色	
298	臼玉	4.65	2.6	1.5	緑灰色	
299	臼玉	4.85	2.8	1.6	緑灰色	
300	臼玉	4.3	3.9	1.7	緑灰色	
301	臼玉	4.5	3	1.65	緑灰色	
302	臼玉	4.65	1.9	1.45	緑灰色	
303	臼玉	4.75	2.1	1.55	淡灰色	
304	臼玉	4.85	1.8	1.45	淡灰色	
305	臼玉	4.85	2.4	1.55	淡灰色	4分の1欠落
306	臼玉	4.85	2.35	1.45	淡灰色	
307	臼玉	5.05	1.8	1.4	淡灰色	
308	臼玉	4.65	1.7	1.4	淡灰色	
309	臼玉	4.85	1.8	1.5	淡灰色	
310	臼玉	4.85	2.3	1.45	淡灰色	
311	臼玉	4.9	1.6	1.5	淡灰色	
312	臼玉	4.8	2.1	1.25	淡灰色	
313	臼玉	4.65	2.45	1.45	灰色	
314	臼玉	5.1	2.7	1.6	灰色	
315	臼玉	4.85	2.1	1.35	灰色	
316	臼玉	4.5	2.85	1.45	灰色	
317	臼玉	4.95	2.6	1.35	淡灰色	
318	臼玉	4.95	2.2	1.45	淡灰色	
319	臼玉	5.1	2.35	1.5	淡灰色	
320	臼玉	5.1	2.3	1.45	緑灰色	
321	臼玉	4.8	2	1.4	灰色	
322	臼玉	4.9	1.8	1.4	灰色	
323	臼玉	5.15	3.4	1.55	灰色	4分の1欠落
324	臼玉	4.75	1.75	1.35	淡灰色	
325	臼玉	4.85	2.7	1.5	灰色	
326	臼玉	4.95	1.5	1.4	灰色	6分の1欠落
327	臼玉	4.55	1	1.4	淡灰色	3分の1を欠落
328	臼玉	4.7	2.4	1.6	灰色	
329	臼玉	5.25	2.05	1.3	緑灰色	
330	臼玉	5.15	2.9	1.35	緑灰色	
331	臼玉	4.85	2.65	1.55	緑灰色	
332	臼玉	4.8	1.25	1.35	淡灰色	
333	臼玉	4.65	1.9	1.35	灰色	
334	臼玉	4.7	1.35	1.5	緑灰色	
335	臼玉	5.1	1	1.4	緑灰色	
336	臼玉	5.1	3.9	1.5	灰色	
337	臼玉	4.85	2.5	1.35	灰色	側面中央が膨らむ
338	臼玉	5.3	2.3	1.45	緑灰色	
339	臼玉	4.95	2.8	1.45	灰色	4分の1欠落
340	臼玉	4.8	2.1	1.45	緑灰色	
341	臼玉	4.9	2.4	1.4	緑灰色	
342	臼玉	4.75	2.6	1.35	淡灰色	
343	臼玉	4.65	1.5	1.4	灰色	
344	臼玉	4.7	2.4	1.4	緑灰色	
345	臼玉	4.95	2.25	1.4	緑灰色	
346	臼玉	4.9	2.3	1.35	淡灰色	
347	臼玉	4.95	2.2	1.25	緑灰色	
348	臼玉	5.1	2.45	1.4	灰色	
349	臼玉	4.95	1.4	1.25	淡灰色	5分の1程欠落
350	臼玉	4.7	2.25	1.4	緑灰色	
351	臼玉	4.75	1.85	1.6	淡灰色	
352	臼玉	5	2.35	1.35	緑灰色	
353	臼玉	4.55	1.2	1.35	緑灰色	
354	臼玉	4.9	2.5	1.35	灰色	
355	臼玉	5.1	2.4	1.7	緑灰色	
356	臼玉	5	2.1	1.35	灰色	

表－5　2号石棺出土滑石製玉類観察一覧表(単位ミリ)　その4

番号	種別	直径	厚さ	孔径	色調	備　考
357	臼玉	5	2.4	1.4	緑灰色	
358	臼玉	4.25	2.7	1.35	淡灰色	
359	臼玉	4.9	2.7	1.55	灰色	
360	臼玉	4.95	2.65	1.45	淡灰色	上下の径が違う
361	臼玉	4.6	2.6	1.5	緑灰色	
362	臼玉	4.6	2.9	1.75	淡灰色	側面中央が膨らむ
363	臼玉	4.75	3.8	1.45	緑灰色	
364	臼玉	4.85	2.7	1.45	緑灰色	
365	臼玉	4.9	2.35	1.5	灰色	
366	臼玉	4.8	2.9	1.4	灰色	側面中央が膨らむ
367	臼玉	4.75	2.4	1.45	緑灰色	
368	臼玉	4.9	2.4	1.45	灰色	
369	臼玉	4.9	4.2	1.6	灰色	上下の径が違う
370	臼玉	4.9	2.5	1.25	緑灰色	
371	臼玉	4.95	2.2	1.4	緑灰色	
372	臼玉	4.7	2	1.4	淡灰色	
373	臼玉	5.1	2.25	1.5	灰色	
374	臼玉	5.2	2.5	1.35	灰色	
375	臼玉	4.75	3.1	1.5	淡灰色	
376	臼玉	4.95	1.5	1.45	灰色	
377	臼玉	4.85	2.4	1.4	灰色	
378	臼玉	5.1	2.2	1.3	緑灰色	
379	臼玉	4.95	3.1	1.7	灰色	側面中央が膨らむ
380	臼玉	4.7	3.2	1.4	灰色	
381	臼玉	4.35	2.6	1.5	緑灰色	
382	臼玉	4.6	2.9	1.75	灰色	側面中央が膨らむ
383	臼玉	5.1	2.5	1.55	緑灰色	
384	臼玉	4.95	2.4	1.45	緑灰色	
385	臼玉	4.8	2.8	1.45	灰色	側面中央が膨らむ
386	臼玉	4.7	2.3	1.35	淡灰色	
387	臼玉	5.1	3.2	1.45	緑灰色	
388	臼玉	4.1	1.9	1.4	緑灰色	
389	臼玉	5.1	2.1	1.3	淡灰色	
390	臼玉	4.95	2.6	1.4	緑灰色	側面中央が膨らむ
391	臼玉	4.9	1.8	1.6	緑灰色	
392	臼玉	4.8	1.85	1.45	緑灰色	
393	臼玉	4.8	2.1	1.5	緑灰色	
394	臼玉	5.05	2.6	1.35	緑灰色	側面中央が膨らむ
395	臼玉	4.65	3.2	1.4	灰色	上下の径が違う
396	臼玉	4.8	2.4	1.35	淡灰色	
397	臼玉	4.85	1.8	1.25	淡灰色	
398	臼玉	5.1	2.2	1.3	淡灰色	
399	臼玉	4.8	1.8	1.3	灰色	
400	臼玉	4.65	2.1	1.35	淡灰色	
401	臼玉	4.9	2.2	1.55	灰色	
402	臼玉	4.9	1.4	1.45	淡灰色	
403	臼玉	4.75	2.8	1.4	灰色	
404	臼玉	4.75	2.85	1.45	灰色	
405	臼玉	4.8	2.3	1.4	灰色	側面中央が膨らむ
406	臼玉	4.85	2	1.4	緑灰色	
407	臼玉	4.7	1.6	1.4	灰色	
408	臼玉	4.9	2.5	1.5	緑灰色	
409	臼玉	4.9	1.9	1.25	緑灰色	
410	臼玉	4.8	1.1	1.4	緑灰色	
411	臼玉	4.7	2.4	1.5	灰色	
412	臼玉	5	2.4	1.45	灰色	表土一括
413	臼玉	4.65	1.7	1.45	灰色	表土一括
414	臼玉	4.8	2.25	1.5	灰色	表土一括
415	臼玉	—	—	—	灰色	表土一括

あると推察された。　注２

遺　物（第201図）

60は二重口縁部のみの壺で、61は土師器で高台を持つ皿である。舶載鏡（巻頭カラー４）の破片が出土した。小片のため鏡の形式は不明であるが、平縁の幅が僅か６㎜しかなく連弧文の可能性が高く、直径も16.5cm程度になりそうである。多少ブロンズ病が発生しているが銅の質は高く光沢が残っていた。

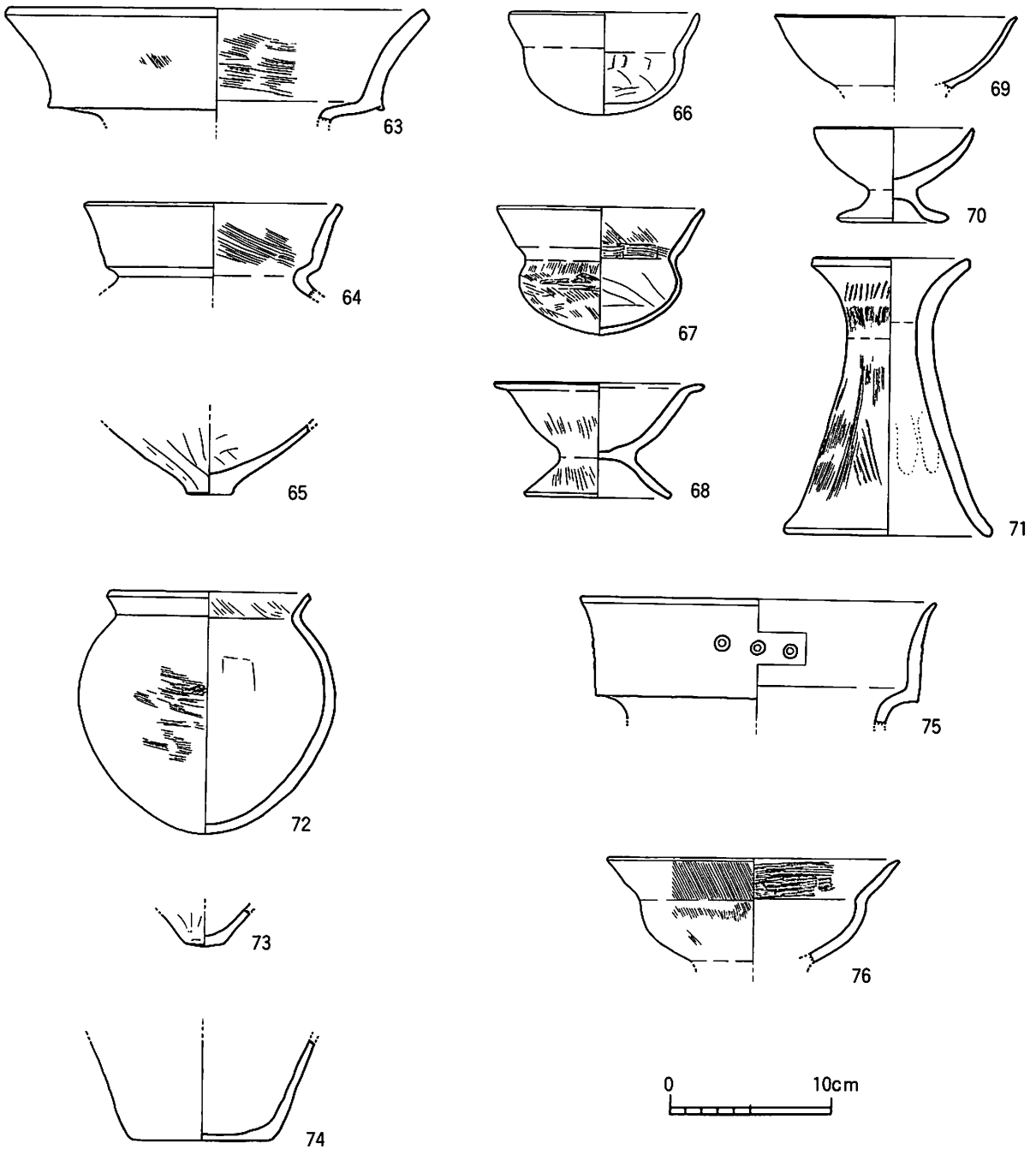
１　玉類の詳細は表－３に記載している。

２　自然遺物

糞石は２個検出され、１個は長さ23㎜、幅12㎜、厚さ７㎜、重さ2.36ｇ。もう１個は14㎜、幅18㎜、厚さ８㎜、重さ0.49ｇであった。共に赤褐色で中からバッタの足や外殻片が大量に含まれていたことから、被葬者が何らかの原因で死に至り、生前摂取過多により体内で消化不良を生じ、体内に残ったものと推察された。

注３

注１・２・３　坂田邦洋「足跡の研究」「史学論叢」28号別府大学



第204図　遺構に伴わない遺物実測図

(15) 遺構に伴わない遺物（第204・205図）

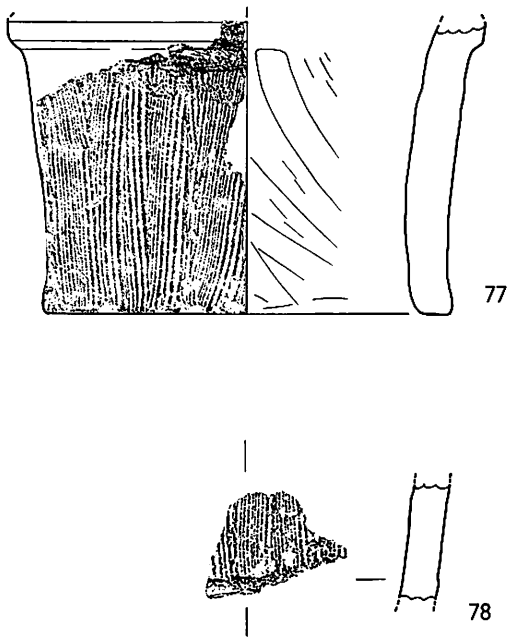
トレンチ内で出土した遺物のうち遺構に伴わないものをここでは取り扱った。63～71、77・78はトレンチの西側、72～74は中央部、75～76は東側から主に出土している。

63（P－7）・64は壺の口縁部で二重口縁部である。63は口縁部が大きく外反するが、64はやや膨らみを持ちながら立ち上がっている。

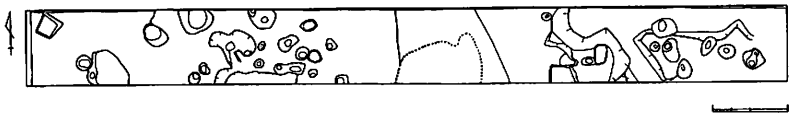
65は土師の底部で全面に削り出した小さな平底で、器種は壺の可能性が高い。66（P－16）と67（P－15）は小型丸底壺である。68（P－14）と70（P－3）は小型の脚付き鉢で68は口縁部の一部を欠いているが、ほぼ完全な形をとどめている。70は口縁部が小さく外反し、鉢内面の器面剥離が著しい。69は底部を欠く碗である。恐らく底部は高台になるものと思われる。全面が黒色を呈している。

71（P－12）は器台で裾部の一部を欠いているが、ほぼ完全な形をとどめている。72は短頸壺の破片である。口縁部から底部まで残っており、図面上で復元した。73は手捏土器で平底のみである。74は土師器で全面丹塗りである。75はは壺の口縁部で二重口縁部である。特に口縁部外側には3個の竹管文を配しているが口径9㎜の正円に近く均等に3個並んでいる。内面の器面剥離が著しい。76は脚付き鉢の破片で、脚部は剥離している。

77と78は円筒埴輪の破片である。76は底部とタガを僅かに残し縦目の粗いハケ目を施している。



第205図　遺構に伴わない遺物実測図



第２トレンチ

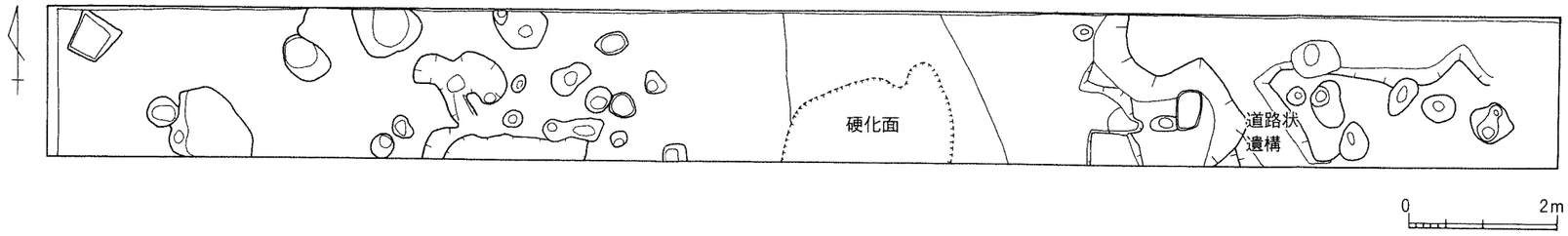
39ｍの間隔

方267　第１トレ
Ｓ＝１／40

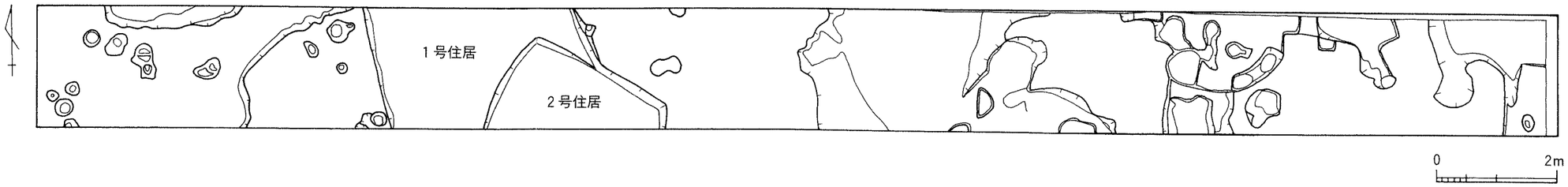


第１トレンチ

第206図　267番地Ｔｒトレンチ配置図

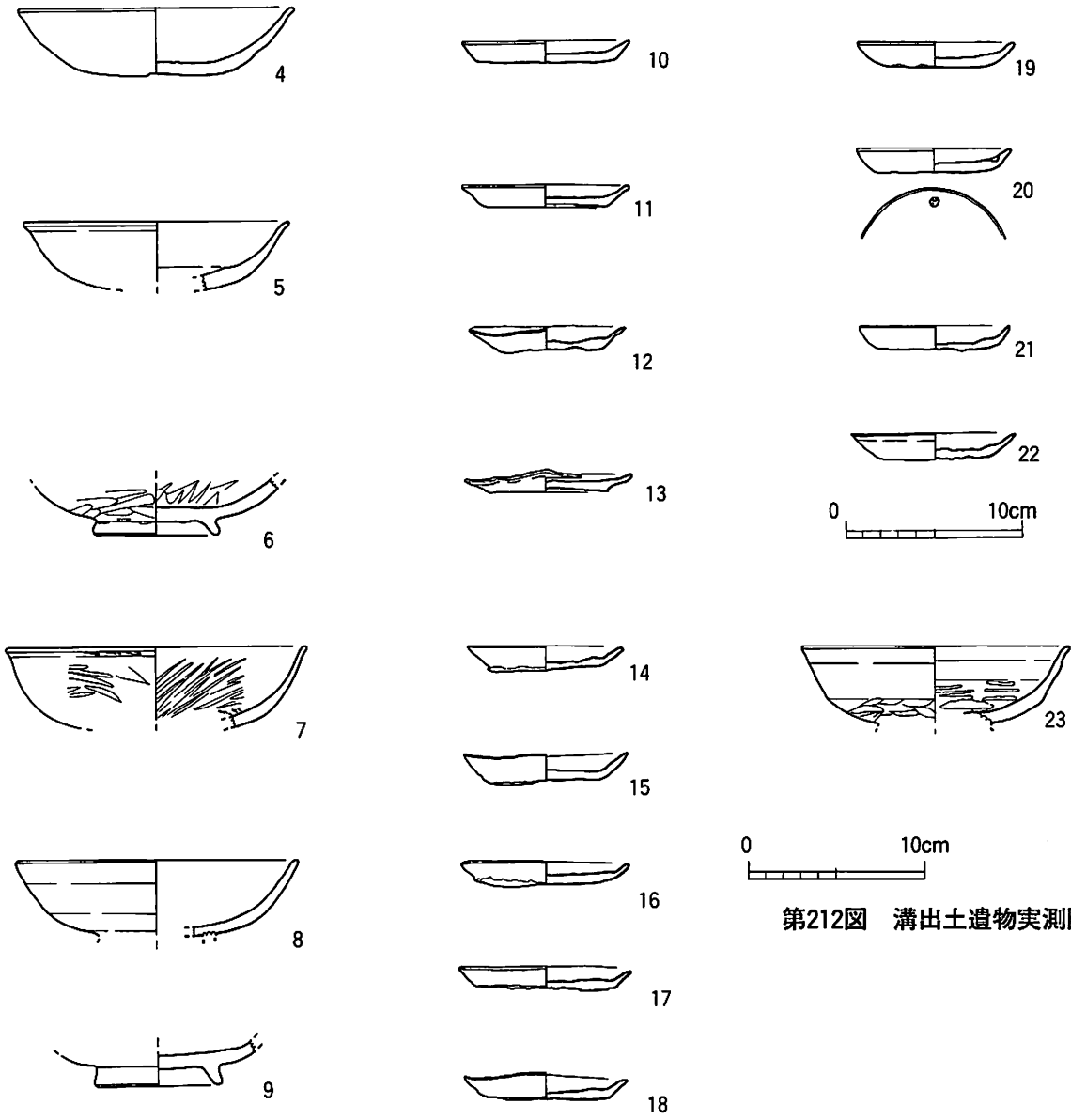


方保田267番地　第２Tr.　遺構配置図　（S＝１／80）

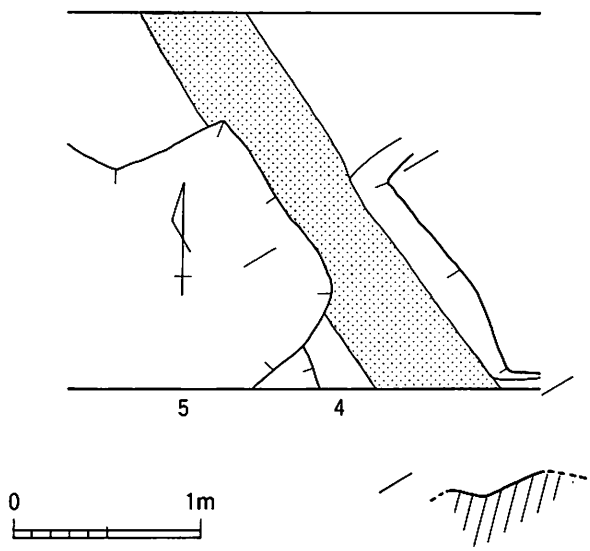


方保田267番地　第１Tr.　遺構配置図　（S＝１／80）

第207図　遺構配置図



第212図　溝出土遺物実測図

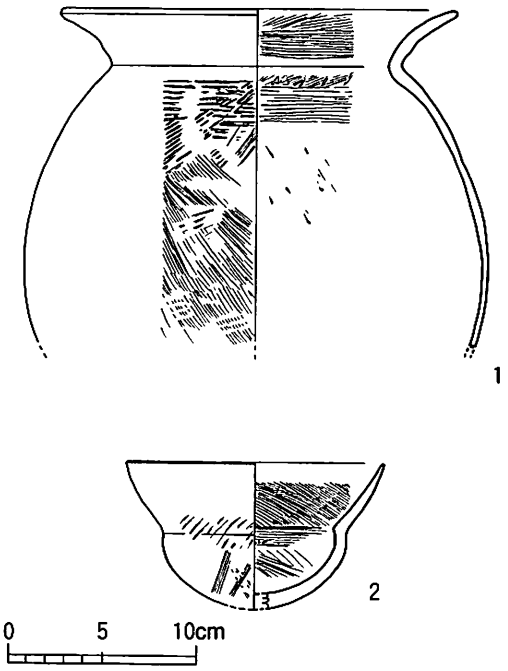


第213図　道路状遺構実測図

（３）　遺構に伴わない遺物（第214図）

24（Ｐ－75・87）は在地系の甕で脚台を欠いている。胴部にはタタキ目を施し、ハケ目で掻き消している。25（Ｐ－100）は壺で底部を欠いているが、口縁部はおおきく開き頸部に刻み目を施している。

26（Ｐ－４）と27（Ｐ－79）は鉢で、26は大きさの割には薄く仕上げ、表面上部はタタキ目、内面上部はハケ目、底部近くはヘラ削りで仕上げている。27も薄手で底部近くはヘラ削りで仕上げている。26と製作技法など共通性が見られる。僅かにひびが入っているが完全な姿を留めている。28（Ｐ－１）は底部に１個の円孔を穿った甑で、表面にはタタキ目を明瞭に残している。内面下部にはヘラ削りで仕上げており、26、27



第209図　1号住居跡出土遺物実測図

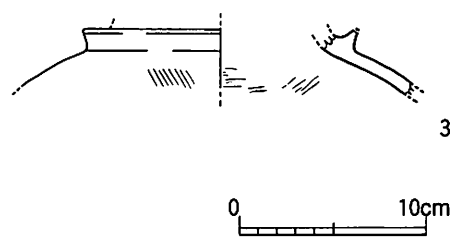
（2）　2号住居跡（第208図）

トレンチ東端から7～10mの地点に在り、1号住居の西壁と北壁の一部を切るように建てられている。南壁が長さ2.4mで、東壁は1.7mまで確認できた。

遺物として土器片が床面から10cm程度浮いた状態で出土した。したがって遺物の示す時間と住居が使用されていた時間には多少のずれを考慮すべきで、土器片もここで使用していてか疑問が残る。

遺　物（第210図）

3（P－25）壺の肩部で頸部に三角凸帯を巡らしている。壺としては弥生後期の特徴を示しているが、出土状況から埋没過程での混入と考えたほうが妥当である。



第210図　2号住居跡出土遺物実測図

（3）　道路状遺構

トレンチ東端から13～16mの地点に在り、浅いU字形溝の底に礫が敷き詰められ北北西から南南東に向かって伸びている。時期の特定は出来なかったが、少なくとも古代から先には下らないと考える。

東西第2トレンチ（第211図）

国土座標　南北X＝－720～－722・

東西Y＝－25,970～－25,990

東西20m、南北2mの規模で発掘を進めたが、このトレンチでは溝状遺構、道路状遺構、中世の遺物が主に検出された。特に青磁、白磁、瓦質土器、滑石製品等がまとまって出土し、弥生時代から古墳時代の遺構のみならず、古代から中世にかけても人々の暮らした跡が残されている事を再確認し遺構確認の必要性を痛感した次第である。

（1）　溝状遺構（第211図）

トレンチ東端から5～13mの範囲で確認されたものである。幅8.2m、深さ1mの規模で幅が大溝といえるものである。しかし、壁面はピット等が在り、不整形な状態であったため、平面図では明確に表現できず、断面図で理解できる状況であった。加えて溝底からは遺物の出土が少なく時間的位置付けが困難であった。

溝埋没過程において青磁、白磁、瓦質土器、滑石製品等古代から中世にかけての遺物が集中して出土した。

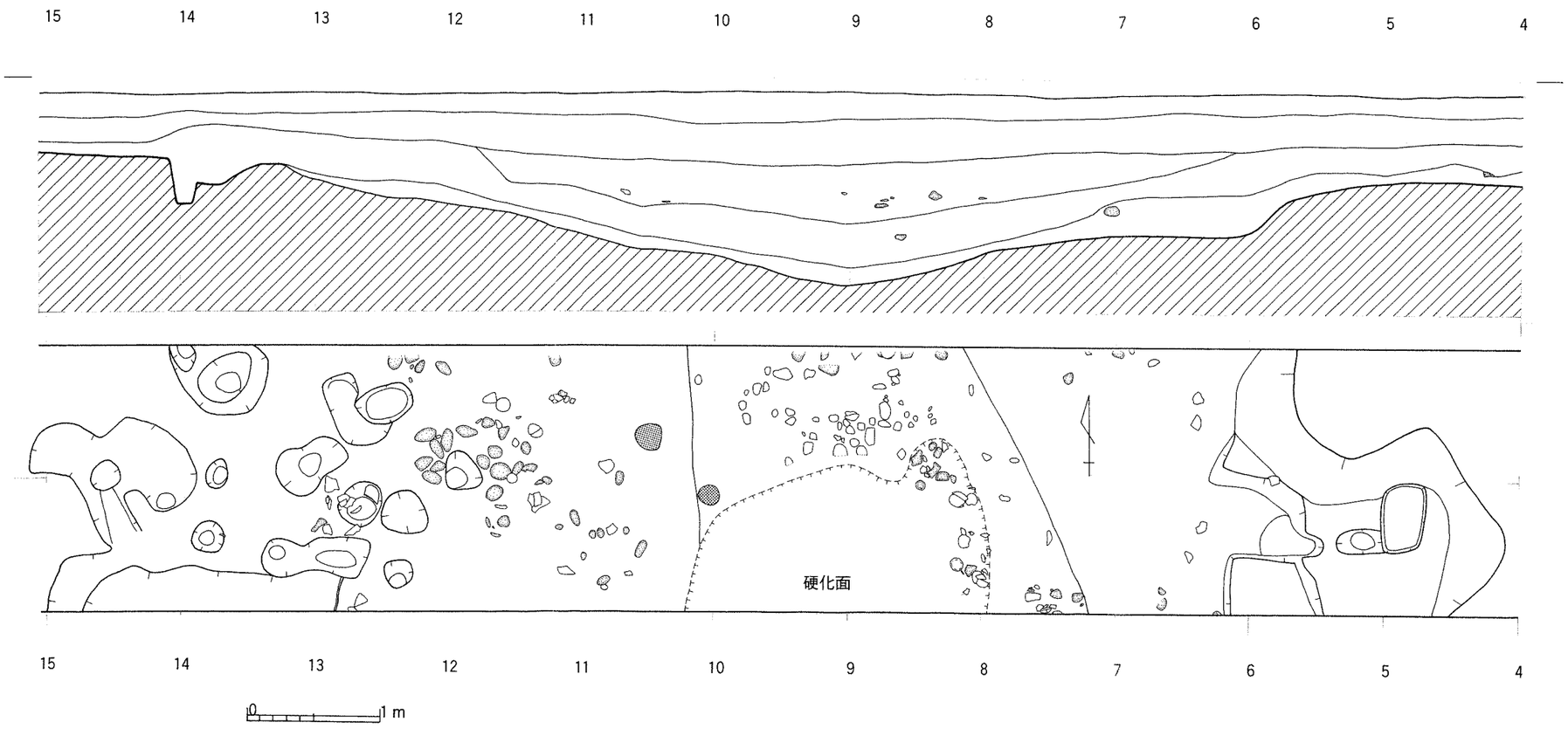
遺　物（第212図）

4（P－47）と5は平底の碗である。底部は板目を施し粘土の皺が残っていた。6～9は高台付きの碗である。6（P－54,110）は黒色土器である。全面ヘラ研磨で仕上げている。10～22は小皿で、10、11、13は糸切り底で、他は板目底である。23も黒色土器である。

（2）　道路状遺構（第213図）

トレンチ東端から僅か3～5mの地点で幅50cm、長約2mに亘って北西と北北東の中間から南東と南南東と中間に向けて伸びている。この方向は菊池川に注ぐように形成された谷に向かっており、舌状台地の基部を断ち切る形になっている谷である。

トレンチ内で遺構の北側については明確な規模が確認できなったが、硬化面は認められた。



第211図　267番地東西第２トレンチ　溝実測図

第６節　267番地の調査（第207図）

131番地や141番地と道路を挟んで東側に位置するのが267・268番地である。大道花卉・野菜集荷所の西に位置し、旧地形では遺跡東端部の谷を形成しており、これに沿って南北に伸びる様な地形である。

このため、大溝や道路状遺構の確認を目的として調査を実施した。

トレンチは南北に45mの間隔を持ち東西方向に２本入れ南側を第１トレンチ、北側を第２トレンチとした。

東西第１トレンチ（第207図）

国土座標　南北Ｘ＝－760～－762・

東西Ｙ＝－25,990～－26,015.8

東西24.8m、南北２mの規模で発掘を進めたが、このトレンチでは遺構面が表土から僅か10cmの深さにあり、既に遺構の大半を削平していることが明らかになった。従って明確に遺構の確認が出来たのは住居２軒と道路状遺構のみであった。

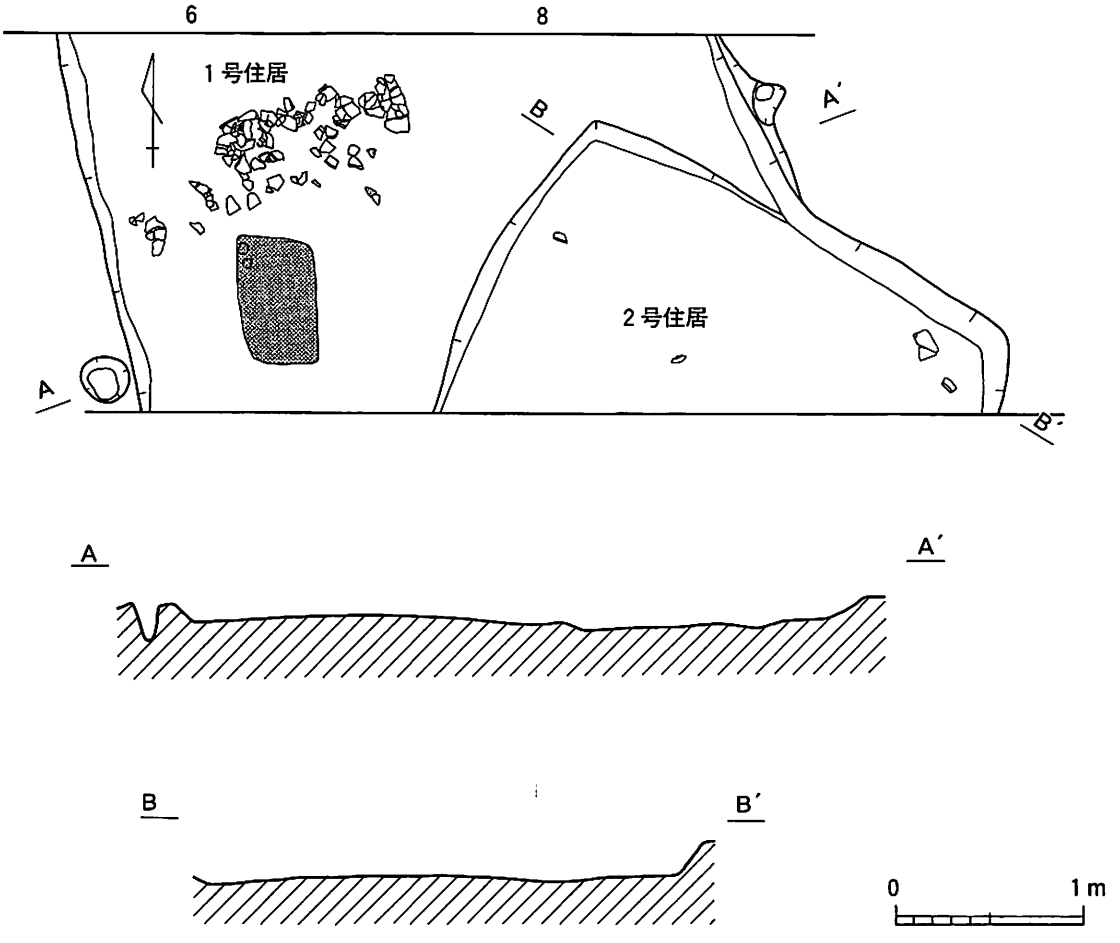
（１）　１号住居跡（第208図）

トレンチ東端から５～９mの地点に在り、東西の壁の一部が検出され西側壁が２号住居から切られていた。南北の壁はトレンチの外に広がるが、東西壁の間隔から3.6m程度になる。床面は土器片が散在していた。

遺　物（第209図）

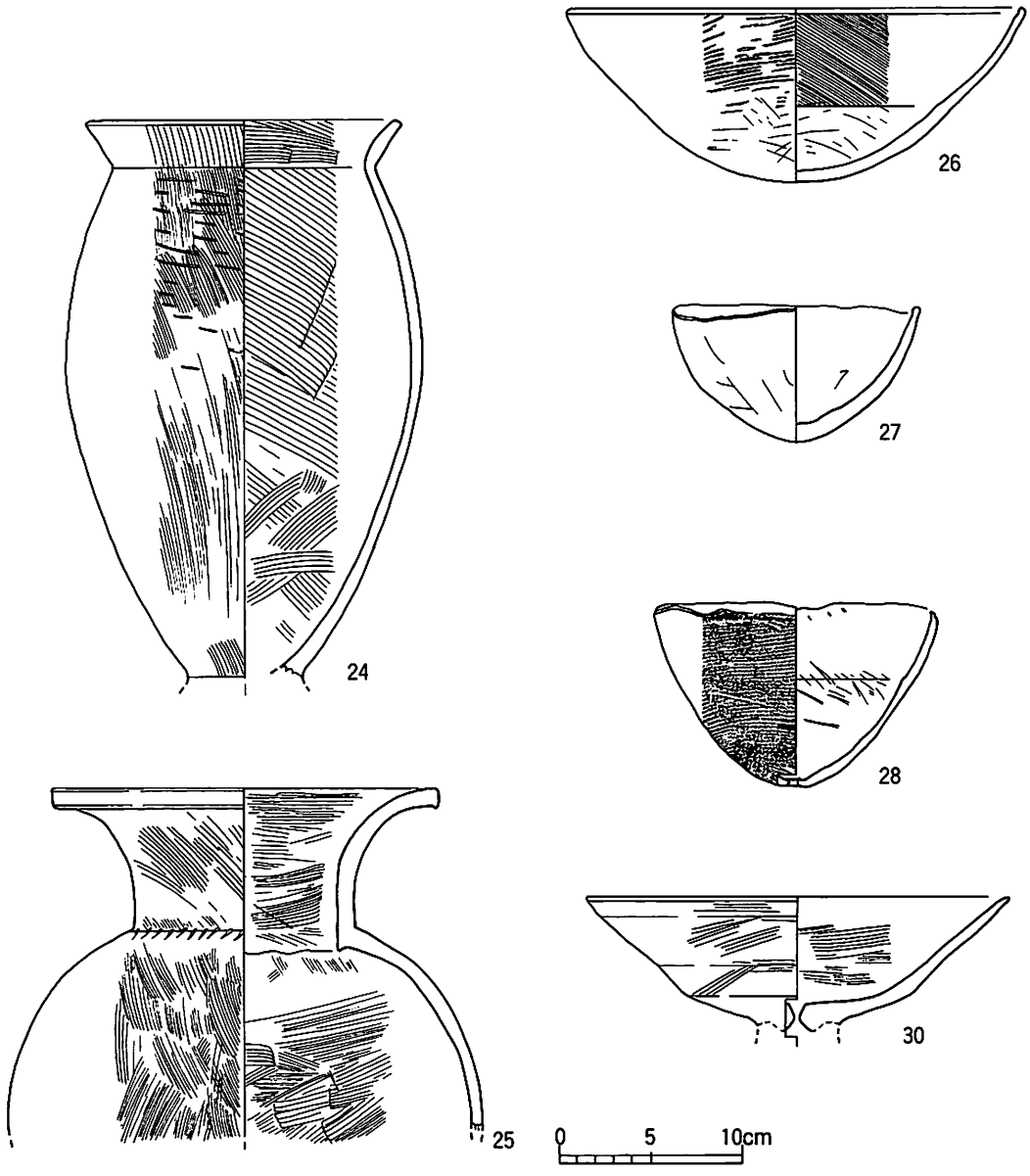
１（Ｐ－９・15・18）は外来系の甕で底部を欠いている。口縁部は短く肩にはタタキ目を施し、粗いハケ目で掻き消している。表面はすすで真っ黒である。

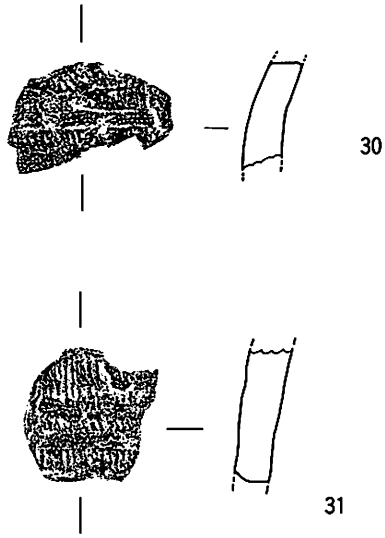
２は小型丸底壺の破片である、表面には粗いハケ目を残し内面では細かなハケ目を残している。



方267　ＩＴ　１号住・２号住

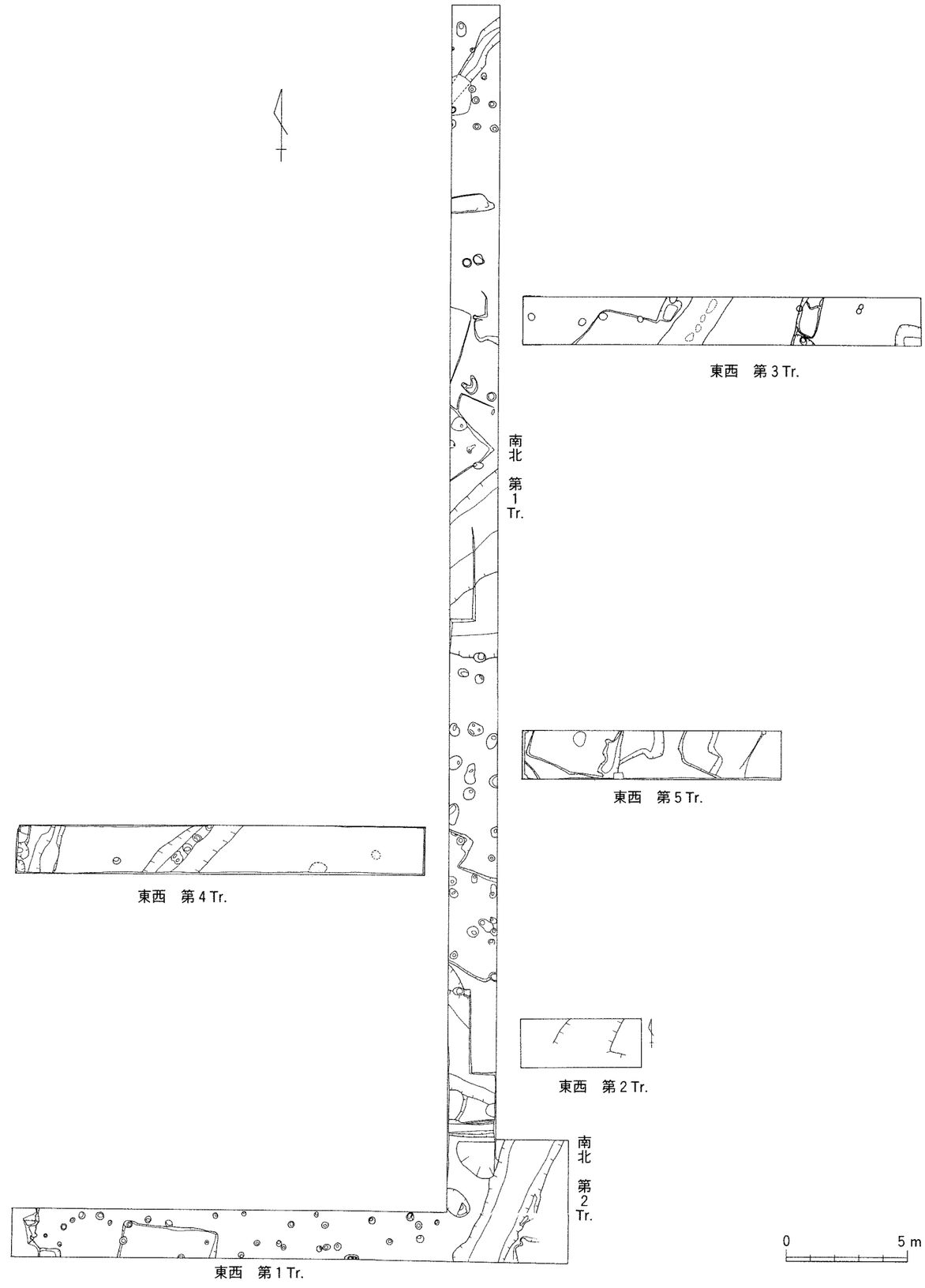
第208図　１・２号住居跡実測図



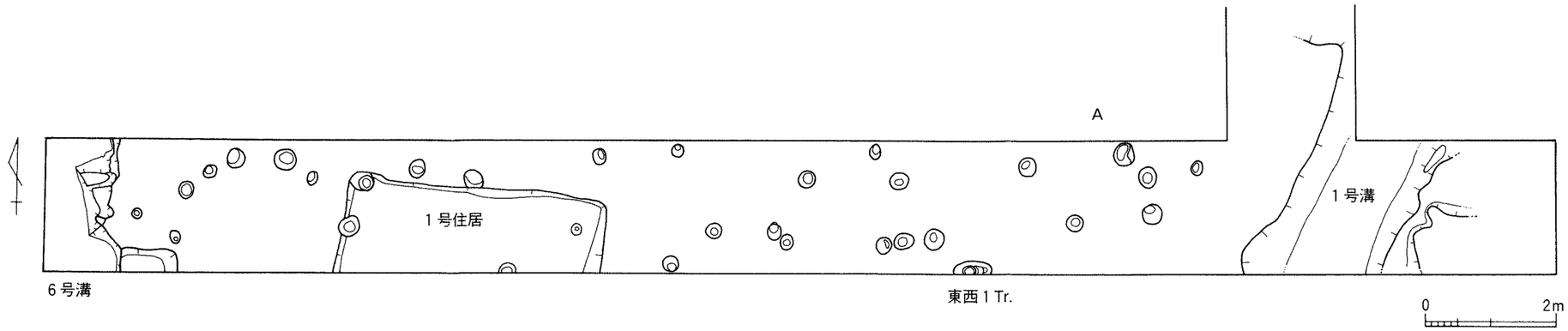


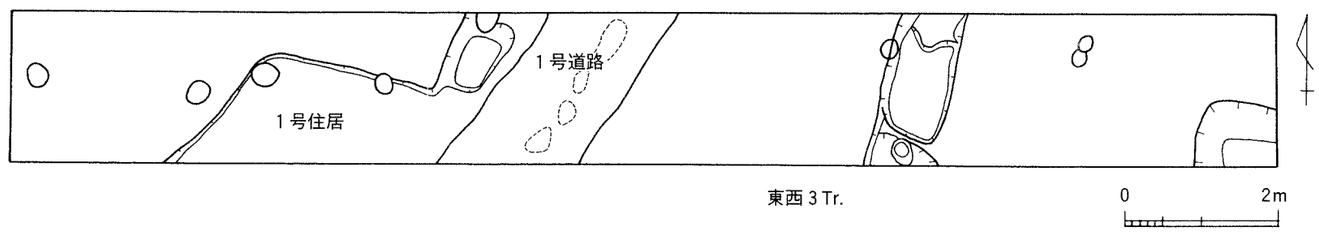
第214図　遺構に伴わない遺物実測図

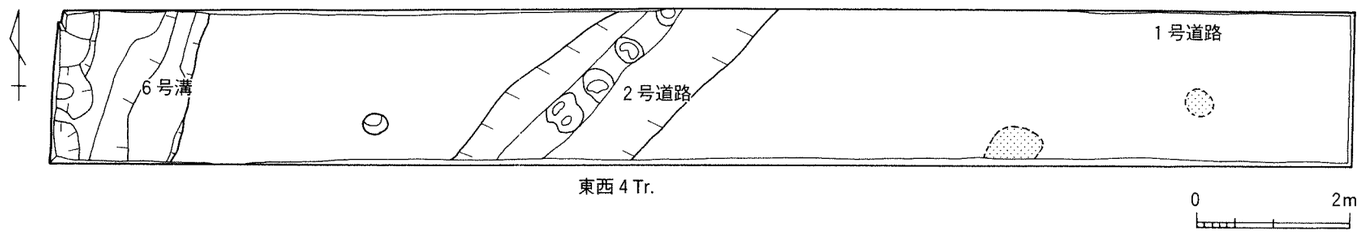
と製作技法など共通性が見られる。29（Ｐ－８）は脚部を欠いた高杯である。30と31は円筒埴輪の破片である、タガが剥離しているが縦方向のハケ目は明瞭に施されている。

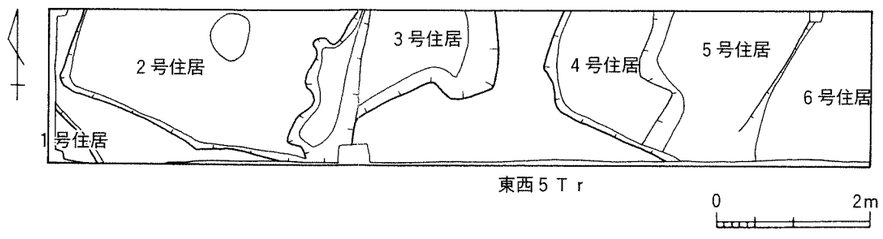


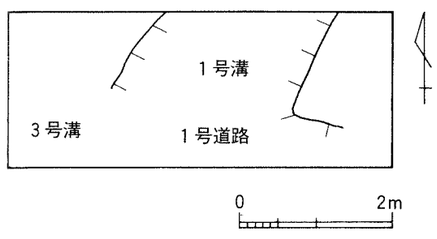
第215図　方保田268番地　遺構配置図　（S＝1／250）











第216図　方保田268番地　東西１～５トレンチ　遺構配置図　（Ｓ＝１／80）

第７節　268番地の調査（第215図）

267番地の北隣で135・138番地の東に位置する。大溝の確認を目的として畑の中央に南北方向に50mの長さでトレンチを設定し南北第１トレンチとした。

このトレンチの南端に直交する様に東西方向に長さ23mのトレンチを設定し東西第１トレンチとした。なおこのトレンチは138番地東西第１トレンチの延長になるよう設定した。

調査の結果東端部に於いて溝の存在が明らかになったためトレンチを増設して溝の追跡を行なったのが東西第２トレンチである。南北第１トレンチの南端から６～８mの地点で東に１mの間隔をもって長さ５mのトレンチを設定した。さらに溝の確認に東西第１トレンチ東端において長さ３m幅３mを北に拡張したのが南北第２トレンチである。

東西第３トレンチは南北トレンチの南端から37～39mの地点で東に50cmの間隔をもって長さ16.5m。東西第４トレンチは南北トレンチの南端から14～16mの地点で西に１mの間隔をもって長さ17m。東西第５トレンチは南北トレンチの南端から18～20mの地点で東に１mの間隔をもって長さ13mのトレンチを設定した。

この畑も削平がひどく、地山層までの僅か30～40cmしか堆積層が残っていなかった。

溝と道路については複数検出されたので、混乱をさけるため調査区全体で番号を付した。基本的には南北第１トレンチの中で南側から順に番号をつけた。

１　東西第１トレンチ（第216図）

国土座標　南北Ｘ＝－700～－702・

東西Ｙ＝－25,962～－25,985

このトレンチは当初20mの長さで、東端で南北第１トレンチと直角に交わるように設定したが、東端部に於いて溝状遺構が検出されたため東側に３m延長したものである。

西端部に於いて落ち込みが見られたが、同様に東西第４トレンチでも確認された。おそらく267番地第２トレンチにおいて検出された溝に続くものと考えた。

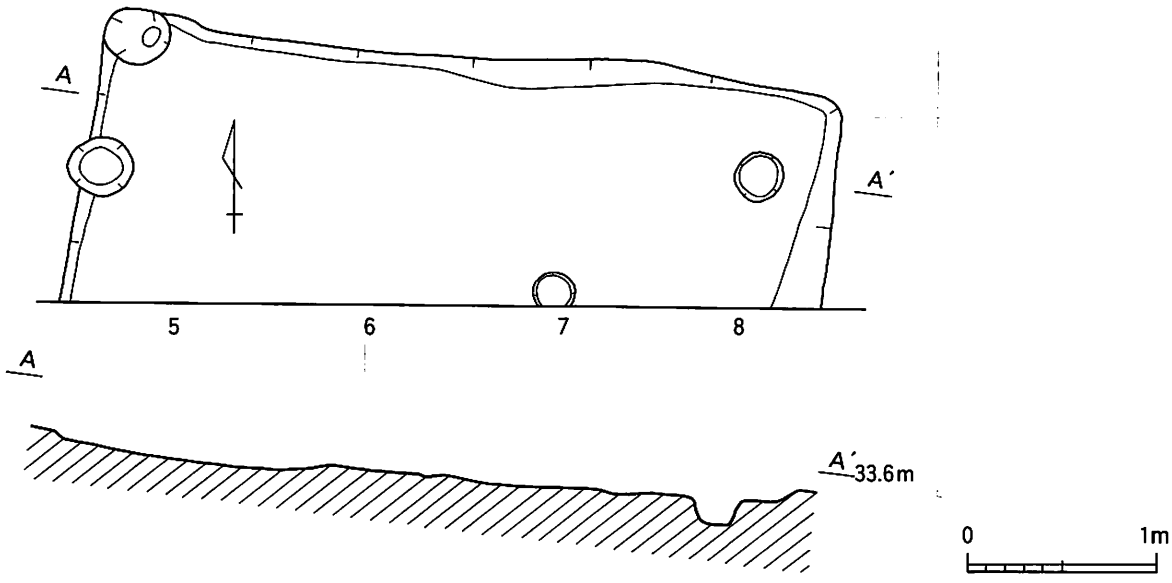
（１）　１号住居跡（第217図）

トレンチ西端部より4.4～8.5mの範囲で、住居の北側半分程度が検出された。北壁の長さ２mだけが規模を示すものとして確認されたが、東西の壁はトレンチの外に伸びており住居全体の規模は不明である。埋土には焼土と炭化物が広がり土器などの出土は少なかった。

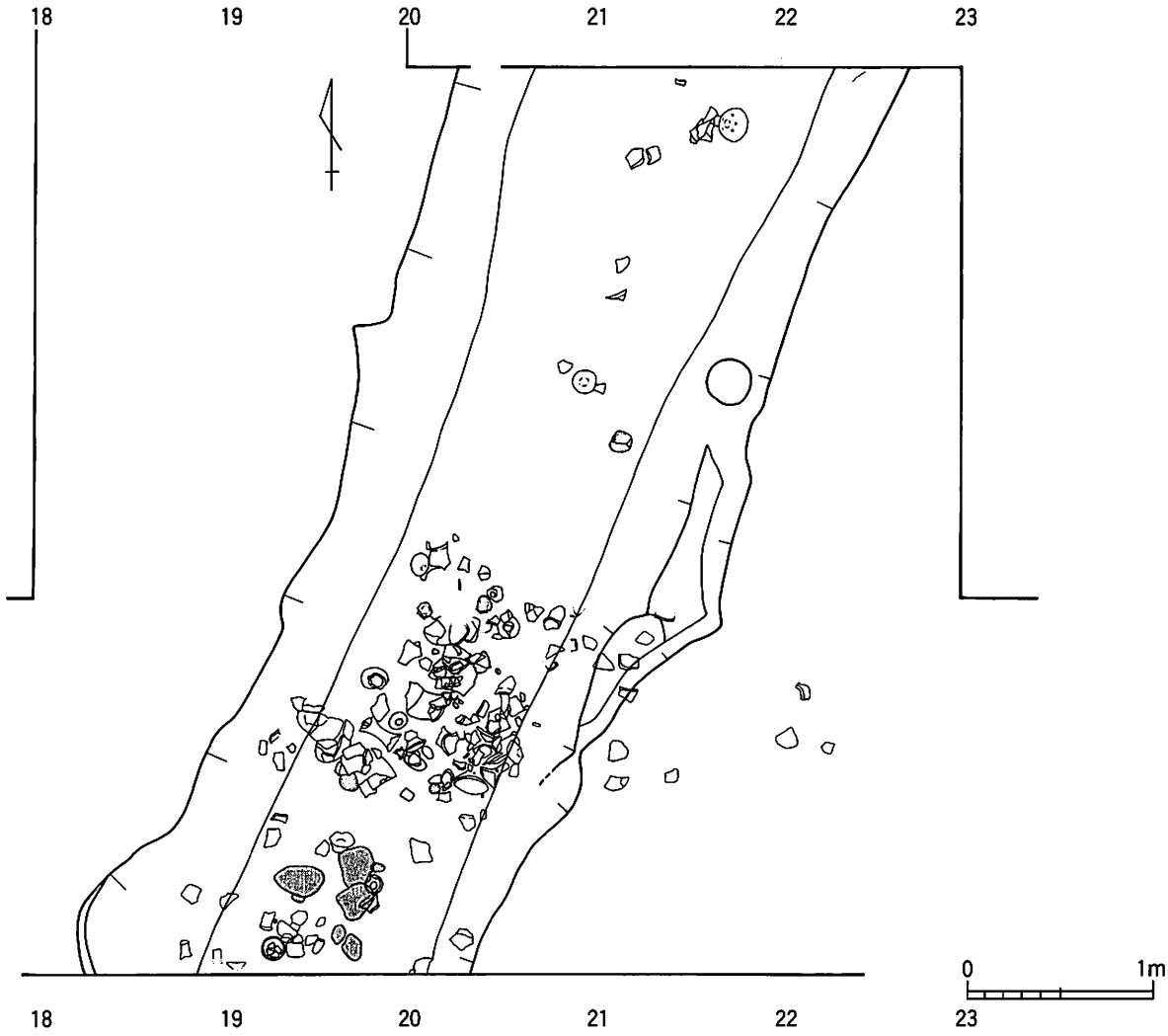
なお床面からは人の足跡が大量に検出された。この事については詳細に報告されているので参照されたい。

注１

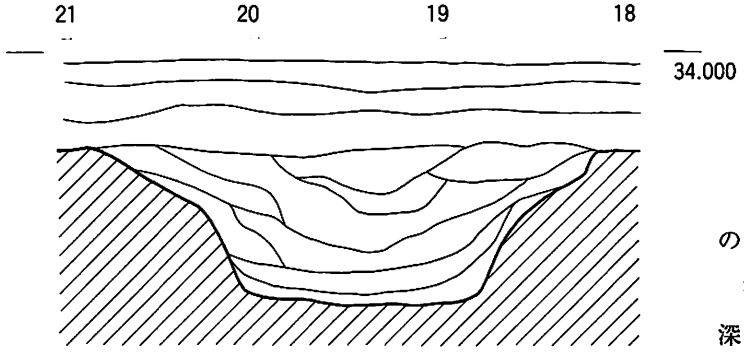
注１　坂田邦洋　「足跡の研究」「史学論叢」　第28号　1998



第217図　方268　東西１Ｔ　１号住居実測図



第218図　方268　南北２Ｔ・東西１Ｔ　１号溝実測図



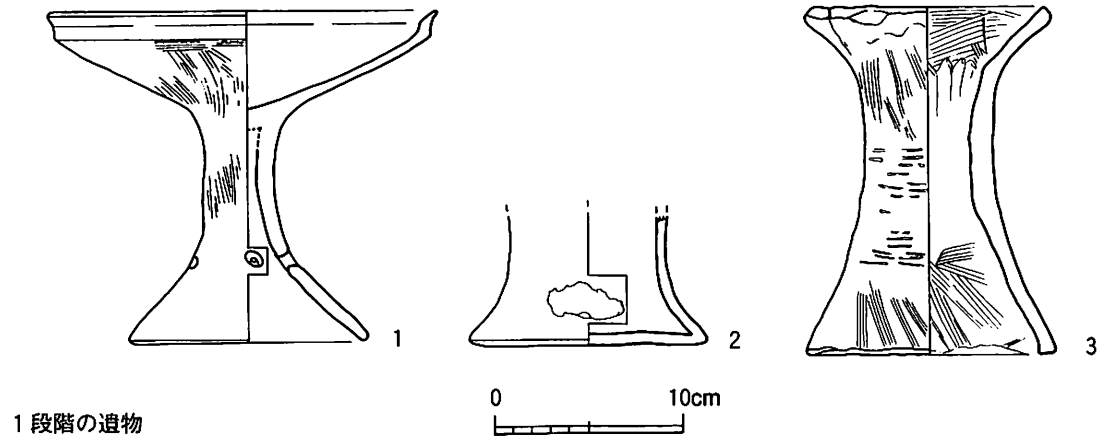
第219図　東西１Ｔ　１号溝南側断面図

（２）　１号溝（第218・219図）

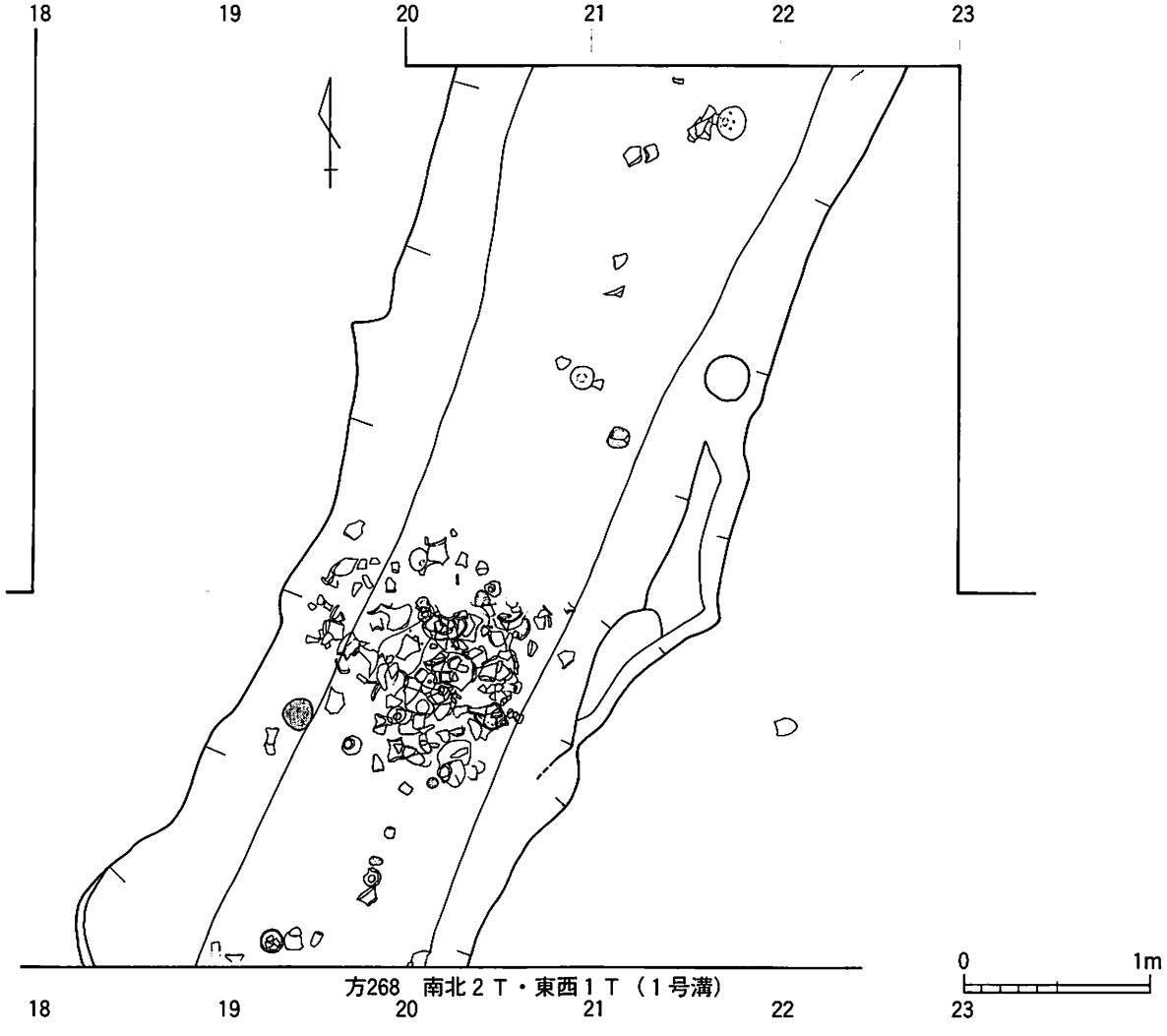
トレンチ西端部より18～22.5mの範囲で土器が集中して出土し、北東から南西に向かう溝が検出された。その溝を追跡するため北東方向に拡張してトレンチを設定した結果、南北第２トレンチおよび東西第２トレンチに於いて溝が確認された。同一の溝であるが個々のトレンチごとに遺物は紹介した。

溝の幅は上端部で約1.8m、下端部で約1.1m、深さ84cmの逆台形の断面を呈している。上端部で標高33.50m、下端部で32.67mを測り、溝自体は南西に向かって低くなっていくことが判明した。

特にここでは土器の廃棄が著しく、溝底よりある程度埋没した段階での廃棄が顕著で、Ⅲ層からⅧ層まではびっしりと土器が捨てられ層位的に分ける事すら出来ない状態であった。従ってここでは遺物出土状況の実測順に上層から下層に向けて５段階に分けて取上げており段階別に紹介する。

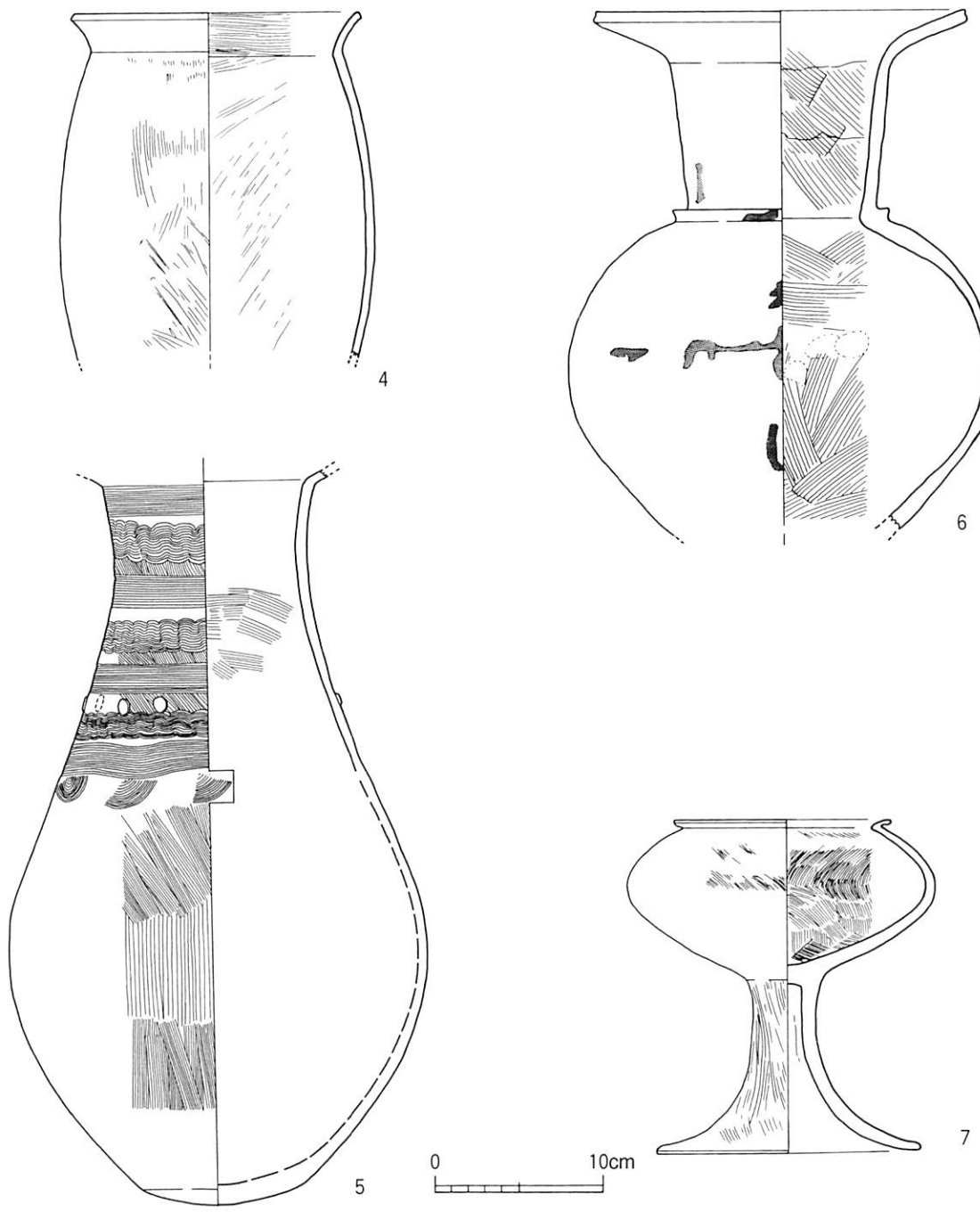


第220図　1号溝出土遺物実測図



第221図　1号溝　2段階の遺物出土状況実測図

その様な中でも弥生後期の土器が主体で、庄内期の土器は出土していないことから時間的には限られた時期の短期間で廃棄されたものと判断される。また、特殊な櫛描き文の壺や台付き鉢など外来系の土器が出土していることから他地域との交流を推察でき、この溝の重要性を証明したものであった。



2段階

第222図　1号溝出土遺物実測図

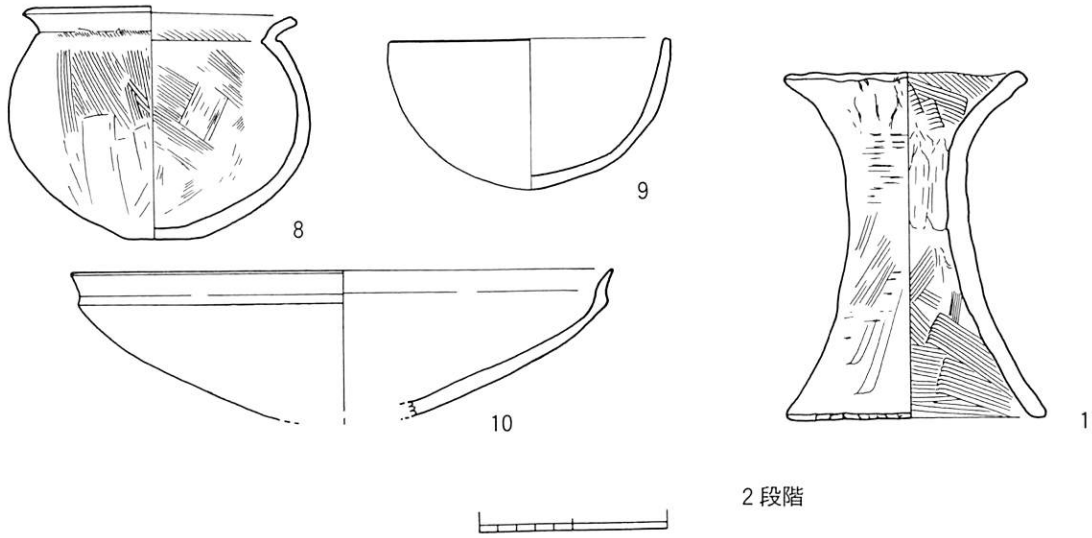
遺　物（第222～226図）

第1段階の遺物

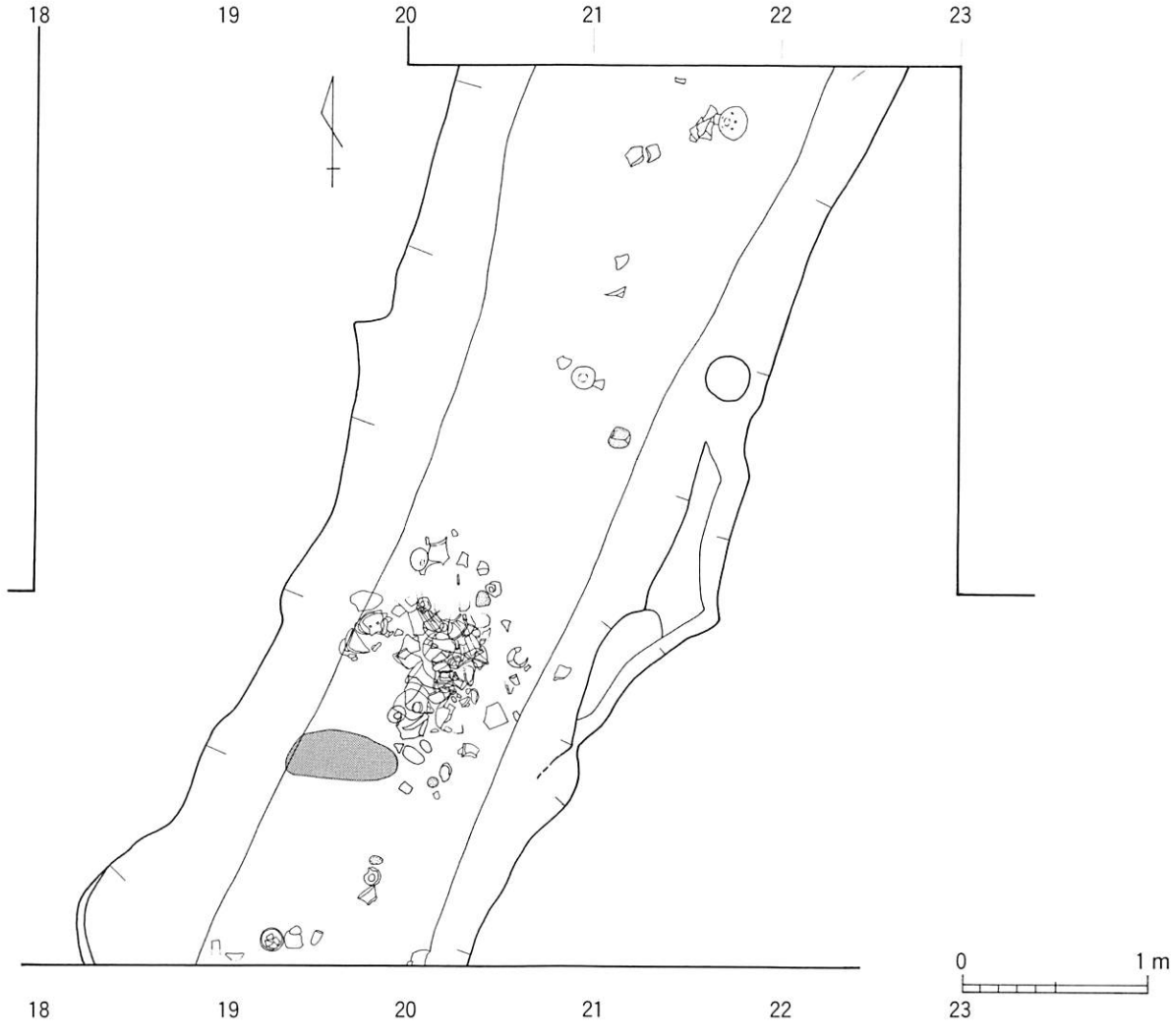
1（P－12、15、17、58、東端上層、東端一括）は口縁部が短く立ち上がる高杯で、第2段階の10および第3段階の14の高杯とともに同一工人によって製作されたものである。2（P－29）はジョツキで、把手と口縁部を欠いている。3（P－31）は器台である。

第2段階の遺物

4（P－105）は在地系甕である。脚台を欠き口縁部は外反している。5（P－86）は特殊な器形の壺である。口縁部は大きく開き、頸部から肩部にかけてはなめらかに移行し、胴部の張りは下位に位置し凸レンズ状の底部へと続く。頸部から肩部には櫛描き文による施文が行われている。横線文と波状文の組合せが3段に見られ、下段では横線文と波状文の間に円形貼付文をめぐらしている。さらに最下段は横線文と扇状文が施されている。この資料と類似するものは第二次調査B－1号住居出土の壺が、櫛描き横線文と波状文の



第223図　1号溝出土遺物実測図



方268　南北T・東西T（1号溝）

第224図　1号溝　3段階・4段階遺物出土状況実測図

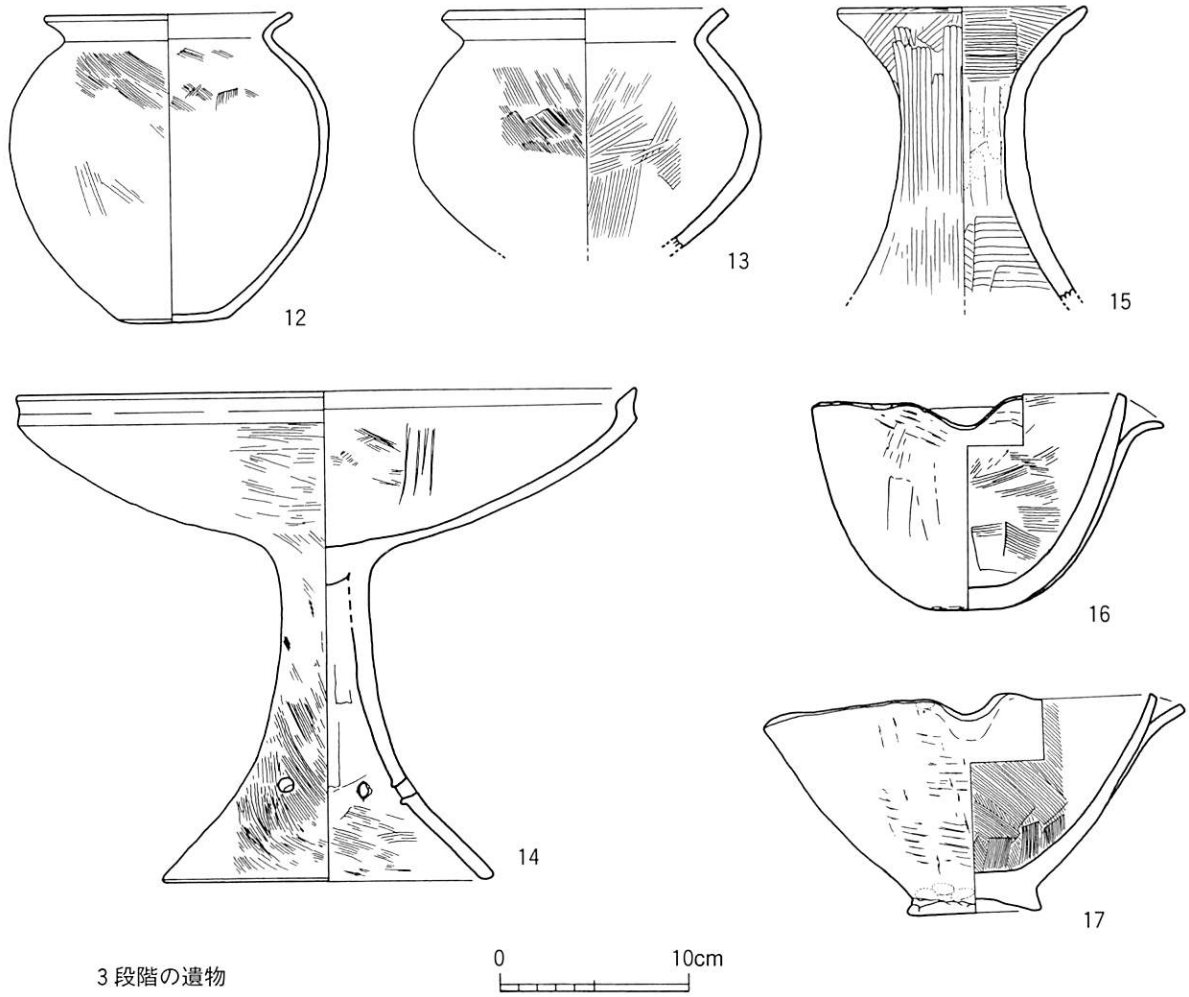
組合せや円形貼付文を配しているところは共通する点であるが、器形そのものは瓢箪形を呈する特殊な壺である。6（P－72，74，102）も壺であるが口縁部は大きく開き頸部に1条の凸帯を巡らしている。胴部は球形で頸部と胴部の一部に赤色顔料を塗っている。7（P－85）は脚付きの鉢である。発掘している時は脚部を口縁部と思い込んでいたが、取上げてみると上下逆になったのである。口縁部が極端に短く胴部の張りが大きい。熊本県内では見られない器形である。8（P－107）と9（P－91，92，103）も鉢である。8は口縁部が外反し、8は碗状である。10（P－22，96）は1と同一工人の手による高杯である。脚部を欠いているが、口縁部は短く立ち上がっている。11（P－87）は器台である。

第3段階の遺物

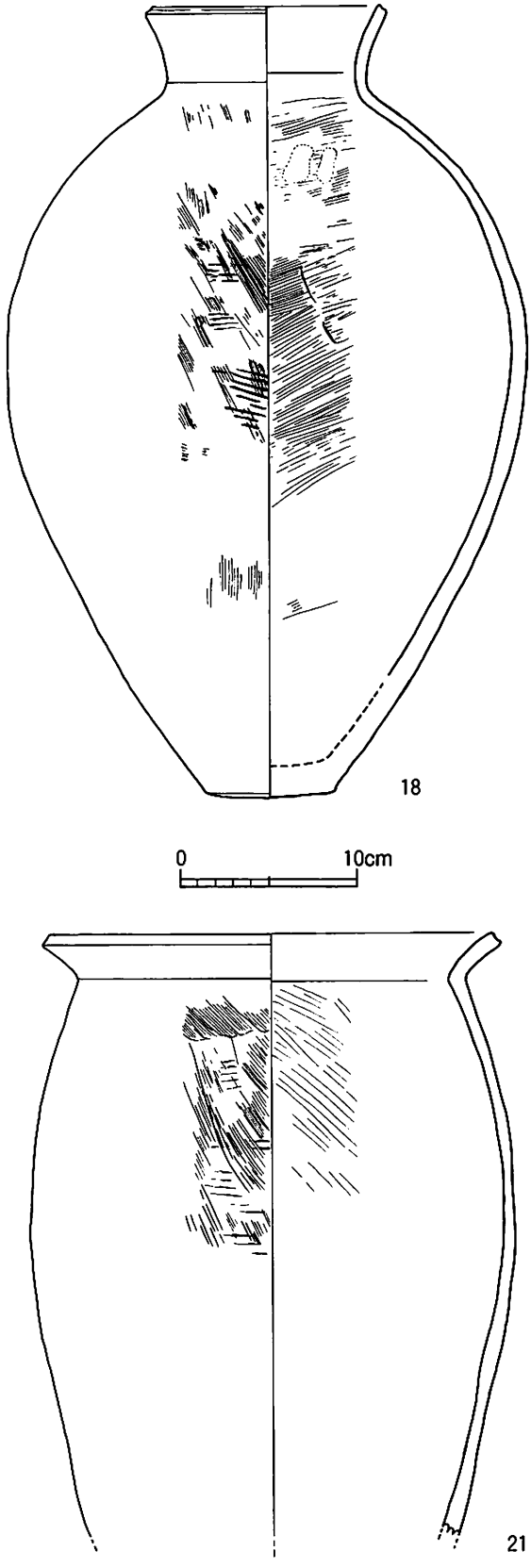
12（P－125）と13（P－123）は鉢である。共に底部を欠いている。14（P－58、98，106，119，121，124）は1、10と同一工人の手による高杯である。3個の高杯の中では最も大形である。接合した土器片は2段階と3段階から出土しているがここで取上げた。15（P－113、213）は器台で裾部を欠いている。16（P－127）と17（P－73，110）は片口である。16は平底で17は手捏の脚台である。

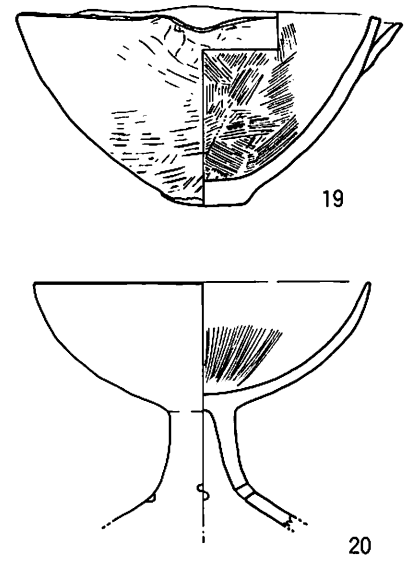
第4段階の遺物

18（P－35，47，94，95，110，129，134，139）は2～4段階までの破片が接合しており、最深部の4段階で取り扱った。短頸の壺で胴部は長く底部はやや膨らんだ平底である。19（P－143）は片口である。底部はやや膨らんだ平底である。器面にはタタキ目が見られる。20（P－66，197）は脚台付き鉢で2段階の破片と接合している。



第225図　1号溝出土遺物実測図





第226図　1号溝出土遺物実測図

第5段階の遺物

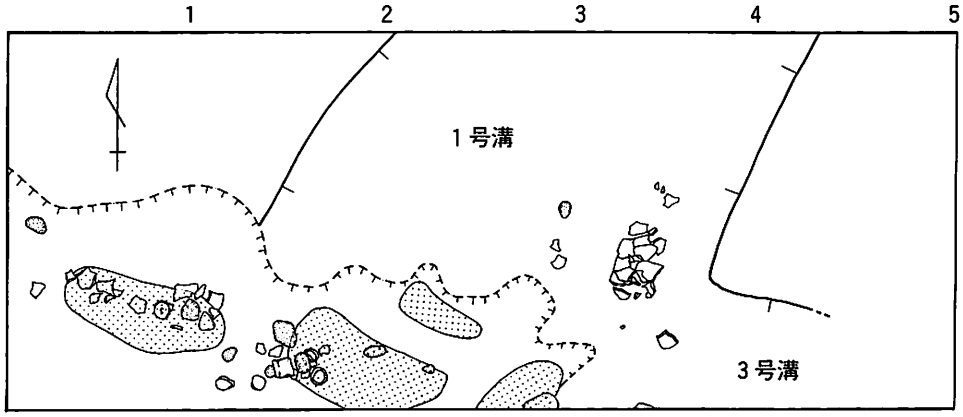
21（P－95，130，143，238）は在地系の甕である。脚台を欠いており、2～5の各段階からの破片が接合している。器面にはタタキ目を残している。

遺物の接合が上下層にまたがる事が明らかになったことから考え、大量の土器は一時期に廃棄されたものと理解される。

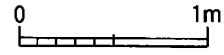
（3）　6号溝

トレンチ西端部より2m迄の範囲で検出されたもので、遺構の性格はつかめていなかったが、東西第4トレンチ西端部の同様の遺構が在り、僅か14mしか離れていないところから溝状遺構になると判断した。

規模などについてはトレンチ外に伸びるため確認出来ていない。溝上部で標高33.17m、溝底で32.80mである。



第227図　東西第２トレンチ　実測図



２　東西第２トレンチ（第219図）

国土座標　南北Ｘ＝－692～－694・

東西Ｙ＝－25,959～－25,964

東西第１トレンチ東端から北に６ｍ離れて５ｍの長さで設定し、東西第１トレンチで確認された１号溝と南北第１トレンチの１号道路および３号溝との交差点を確認することが出来た。しかし、遺構の下まで掘り下げなかったため溝の前後関係については確認できなかった。

（１）　１号溝（第227図）

東西第１トレンチから北東に伸びるもので、長さ1.5ｍを確認した。南北第２トレンチも含め11.5ｍまでの長さを確認できた事となる。トレンチ内で南側半分は３号溝と交差しているが前後関係は不明で、溝上面での幅は2.2～２ｍを測る。上面には土器が盛り上がる様に堆積しており、土器の廃棄状態が極めて多かった事を物語っていた。

ここでも層位的に分ける事すら出来ない状態であった。従って個々では遺物出土実測順に上層と下層の２段階に分けて取上げており段階別に紹介する。

遺　物（第228図）

上層の遺物

１（Ｐ－158）は在地系甕の破片で口縁部から胴部の一部である。２（Ｐ－180）も在地系甕の破片で脚台のみである。３（Ｐ－175）は壺の破片で口縁部から頸部にかけて残っている。口縁部は短く立ち上がっており頸部には刻み目のある三角凸帯を配している。４（Ｐ－184）は高杯の破片で杯部と脚裾部を欠いている。

下層の遺物

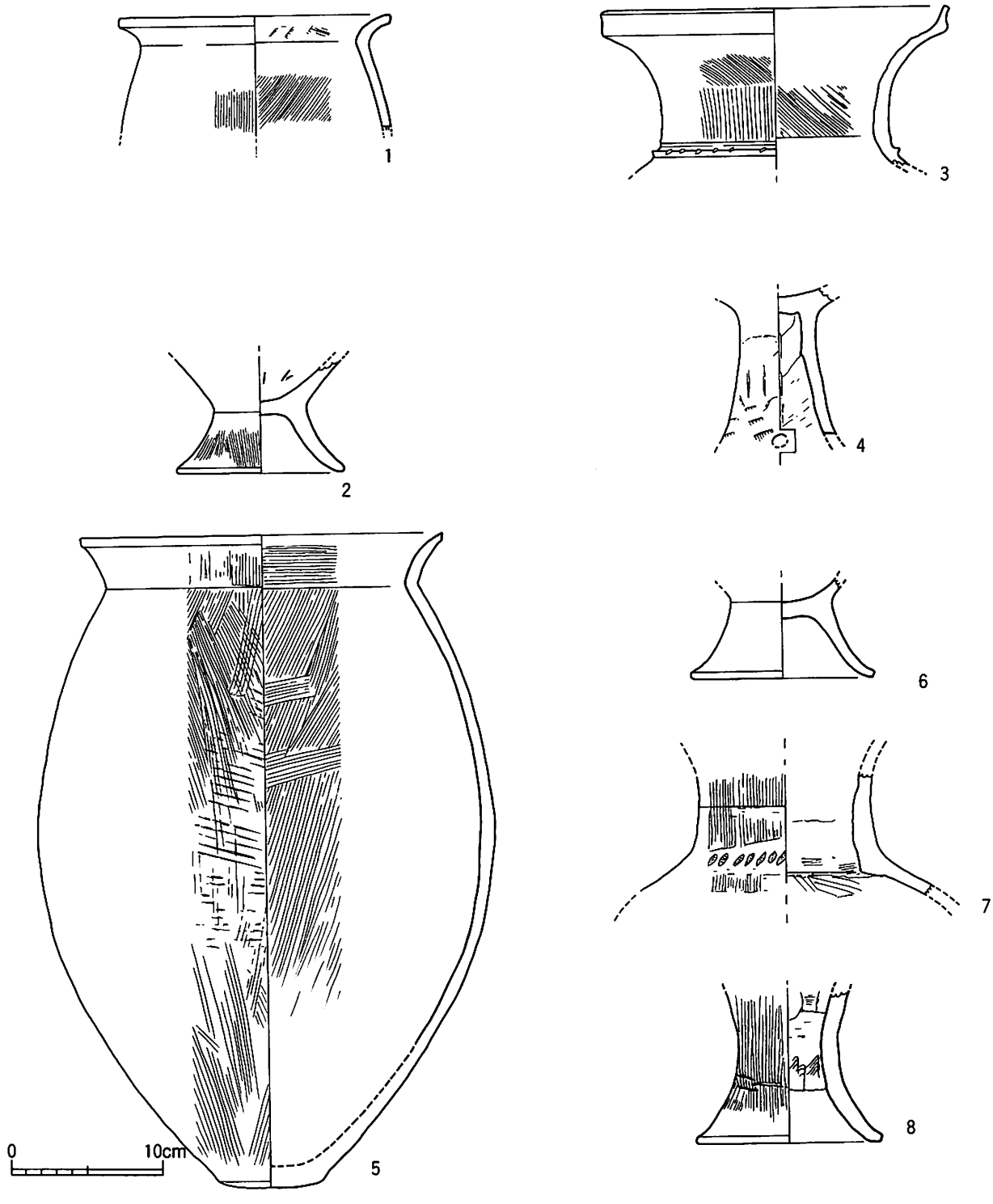
５（Ｐ－166，167，187，236）は上層と下層にまたがって出土した大形の甕である。この甕は方保田東原遺跡では珍しく底部が平底となっている。口縁部は外反しつつ開き、胴部の張りも大きい。恐らく北部九州からの持込であろう。６（Ｐ－249）は在地系の甕の脚台である。７（Ｐ－253）は壺の頸部のみの破片で、刺突文を配している。８（Ｐ－252）は器台の破片である。

（２）　３号溝（第227図）

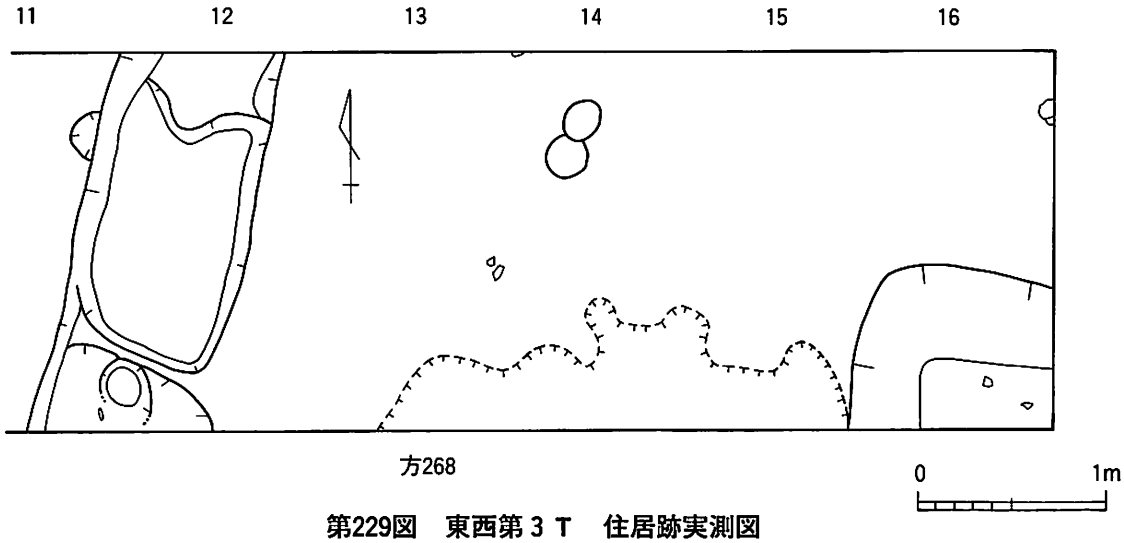
南北第１トレンチの１号道路の下に重なるように伸びており、詳細は南北第１トレンチの項で述べるが、ここでは１号溝と切り合った部分の検出が出来た事は大いなる成果であった。この場所での規模の確認は出来なかった。

（３）　１号道路（第227図）

飛び石状に小石を敷き詰めた道路は東西方向から11°南に振る様に伸びており、長さ３ｍが確認された。３号溝と重なるように残されており、溝埋没後道路として利用されたものと考えられる。なお南北第１トレンチの１号道路との関係については項を譲り南北第１トレンチの中で述べることとする。



第228図　1号溝出土遺物実測図



第229図　東西第３Ｔ　住居跡実測図

３　東西第３トレンチ（第219図）

国土座標　南北Ｘ＝－661～－663・

東西Ｙ＝－25,948～－25,964.5

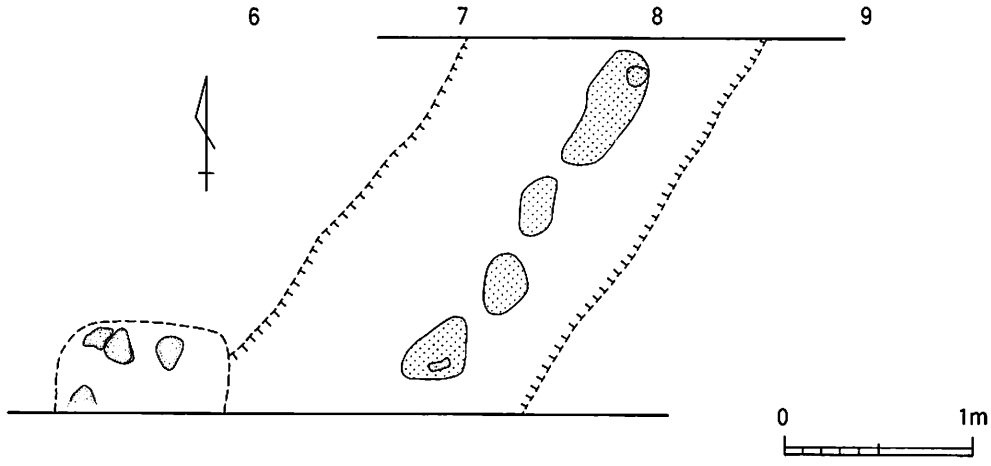
東西第３トレンチは南北トレンチの南端から37～39ｍの地点で東に50cmの間隔をもって長さ16.5ｍを設置した。ここでは南北第１トレンチで確認された２号道路と４号溝の延長を確認する事を目的としたが４号溝は検出されなかった。

（１）　１号住居跡（第229図）

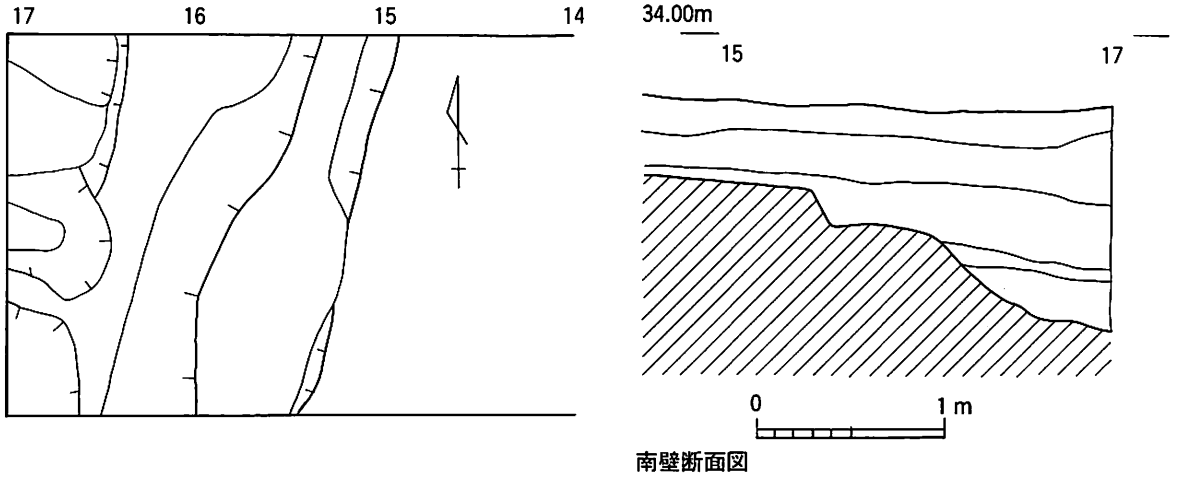
トレンチ西端から11ｍの地点で南北に伸びる壁と、それに沿って貯蔵穴が掘られ、13～15.4ｍの範囲に張り床の硬化面が広がっている事から住居跡と判断した。検出された壁は西壁で、東西の壁の間は６ｍ以上の長さになる。

（２）　１号道路（第230図）

トレンチ西端から5.8～8.6ｍの範囲で南西から北東に向かって伸びる道路が確認された。幅1.4ｍ、長さ2.5ｍの規模で硬化面の広がりがみられ、中心線からは東側に寄った形で小判型に小石の敷石が４箇所に飛び石状に配されていた。この道路は南北第１トレンチから東西第４トレンチへと続いており138番地東西第１トレンチの１号道路へと伸びていることが判明した。



第230図　東西第３Ｔ　１号道路実測図



第231図　東西第４トレンチ　６号溝実測図

4　東西第４トレンチ（第219図）

国土座標　南北Ｘ＝－684～－686・

東西Ｙ＝－25,968～－25,985

このトレンチは南北トレンチの南端から北へ14～16ｍの地点で西に１ｍの間隔をもって西方向に長さ17ｍの規模で設置した。東西第３トレンチと同様南北第１トレンチで確認された２号道路と４号溝の延長を確認する事を目的とし、加えて138番地東西第１トレンチで検出された１号道路との関連についても明らかにすることを目的とした。基本的には表土を剥いだ段階で遺構を確認することとしたが、２号道路から西側を掘り下げた。したがって、トレンチの東側半分における遺構の確認は出来なかった。

（１）　６号溝（第231図）

トレンチ東端から15～17ｍの範囲で片側の落ち込みが確認されたが溝の規模は不明である。

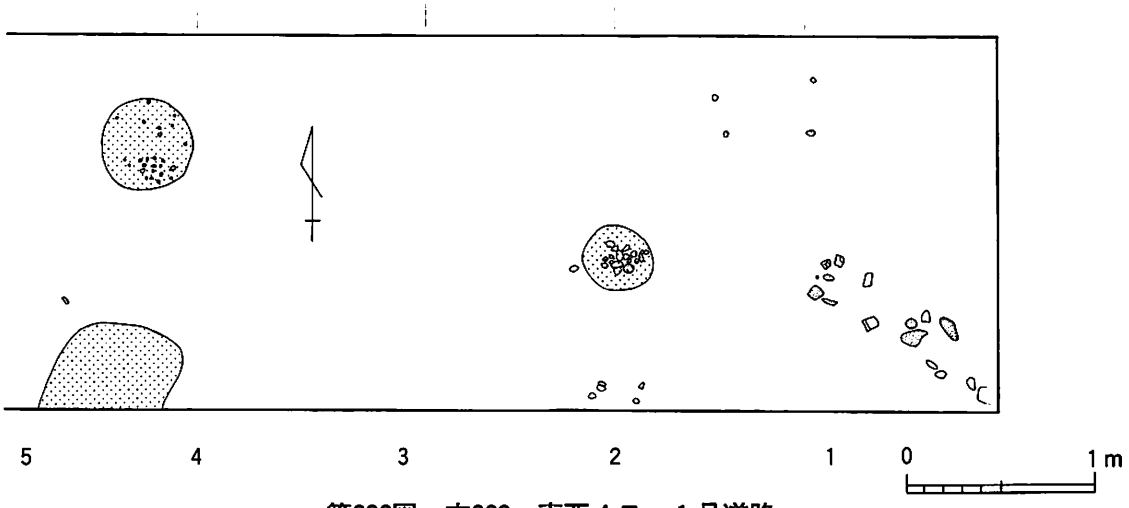
斜面も不整形で凹凸がひどく、底にも凹が見られ道路状遺構とも思われる。東西第１トレンチの６号溝に続くと推察される。

（２）　１号道路（第232図）

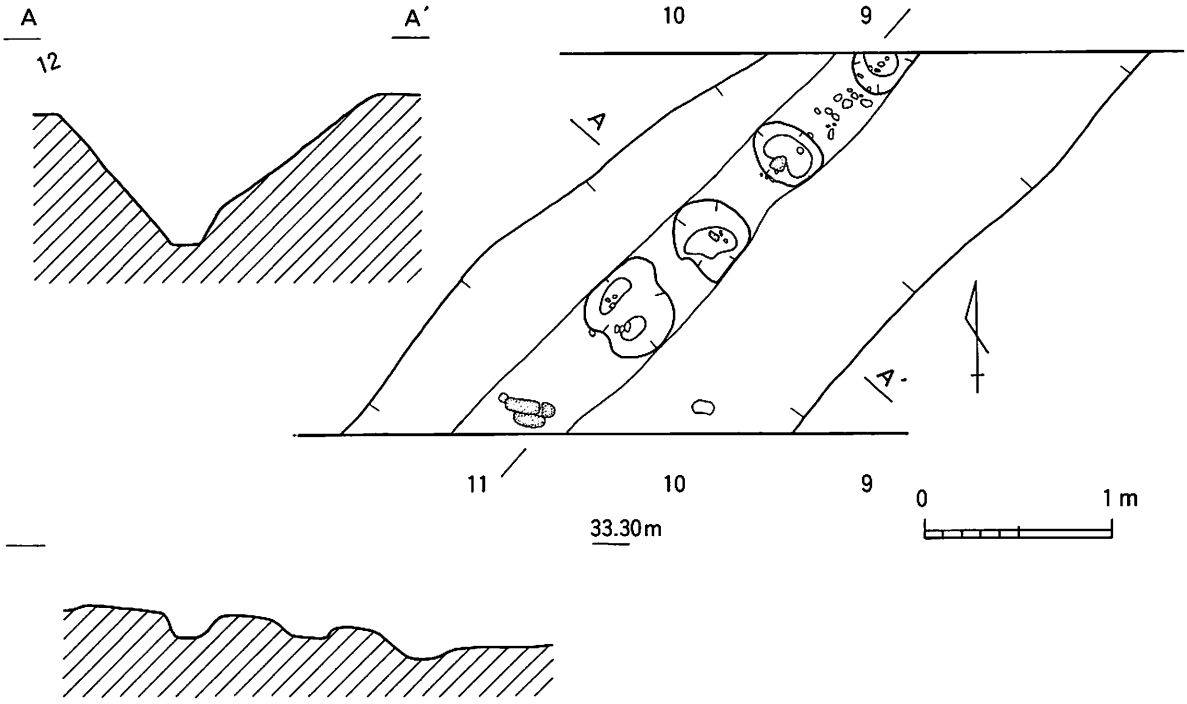
トレンチ東端から西へ６ｍの範囲で硬化面と小石の集積が点々と見られた。方向や範囲については明確に出来なかった。さらに土色から下層に溝が埋没しており東西第２トレンチで確認された１号道路と３号溝が伸びてきていると思われる。

（３）　２号道路（第233図）

トレンチ東端から7.5～11.7ｍの範囲で南西から北東に向かう道路を確認した。当初「Ｖ」字形に掘り込まれた溝と考えていたが、底から円形の凹みが連続して検出されたため道路と判断した。上端部幅1.7ｍ、下



第232図　方268　東西４Ｔ　１号道路



第232図　方268　東西４Ｔ　２号道路実測図

端部幅約0.4m、深さ95cmで底には長径約45cm、短径30cm程度の凹みは65cmの間隔に４個検出された。この間隔は人が歩く歩幅と一致し、138番地東西第１トレンチで検出された１号道路の延長線上にあたり、南北第１トレンチ２号道路へと続いていくことが明らかになった。

５　東西第５トレンチ（第219図）

国土座標　南北Ｘ＝－680～－682・

東西Ｙ＝－25,953.3～－25,964

このトレンチは南北トレンチの南端から18～20mの地点で西に１mの間隔をもって長さ10mの規模で、東西第２トレンチと同様東西第１トレンチで確認された１号溝の延長を確認する事を目的とした。しかしながら１号溝は検出できず、５軒の住居跡が確認された。特に住居跡から多数の足跡が検出されたので、70cm程東にトレンチを延長し、全体で10.7mとした。

（１）　１号住居跡（第234図）

トレンチ西端に壁の一部を残すのみで２号住居跡に大半を壊され、壁の多くをトレンチの外に延ばしていたため規模などは不明である。２号住居跡の西側に残る床面は全面に硬化し、焼土が見られたことから１号住居跡とした。

（２）　２号住居跡（第234図）

トレンチ西端から４mまでの範囲で南側半分程度が確認され、北側はトレンチの外に伸びている。１号住居跡と３号住居跡を切っており、南壁は長さ3.9mを測る。床面は硬化しており中央に長径70cm、短径50cmの炉を配していた。

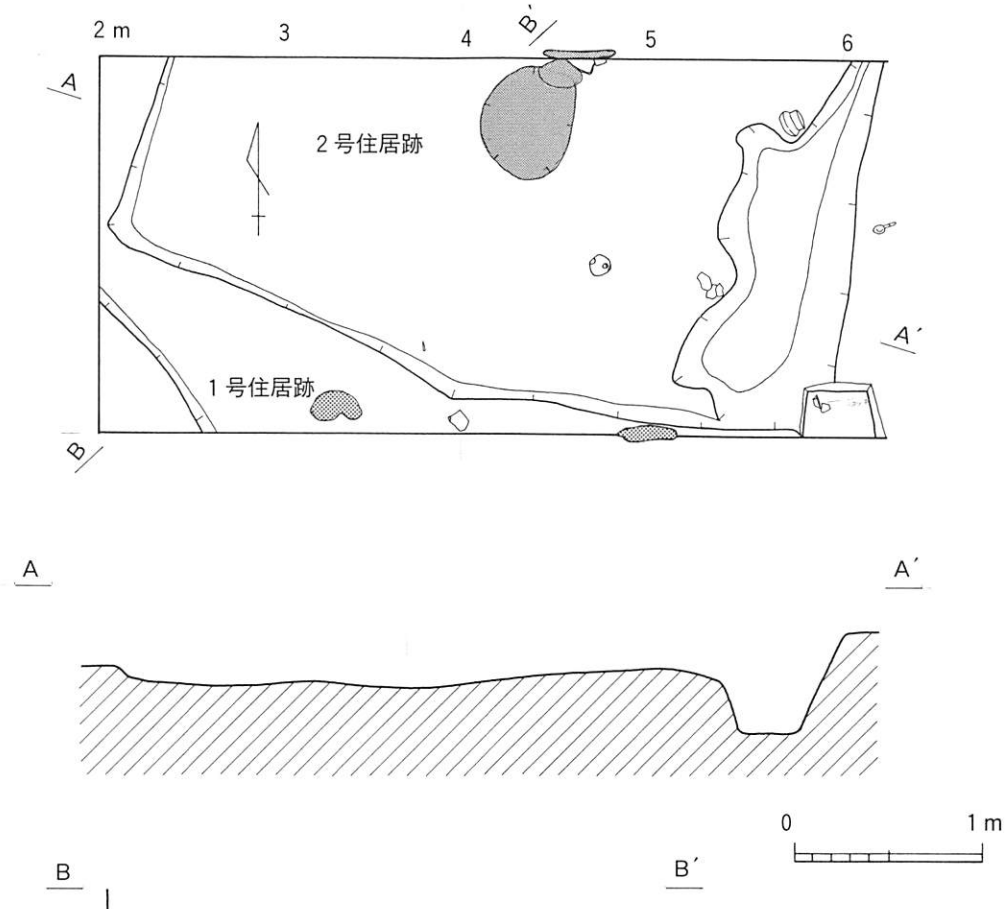
東側の壁に沿って貯蔵穴が確認され、構造当初の床面が下に存在することを確認した。したがって硬化した床は張り床であることが明らかとなった。残念ながら掘り下げる時間がなかったため全貌は明らかに出来なかった。東側貯蔵穴の近くに完形の鉢が出土し、炉の部分でも焼土の中から甕が出土した。

遺　物（第235図）

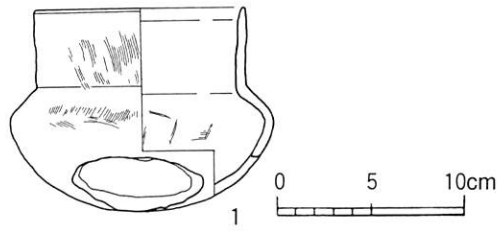
１（Ｐ－268）は底部近くに穿孔が見られる鉢である。口縁部が直立し胴部の張りが鋭い。

（３）　３号住居跡（第236図）

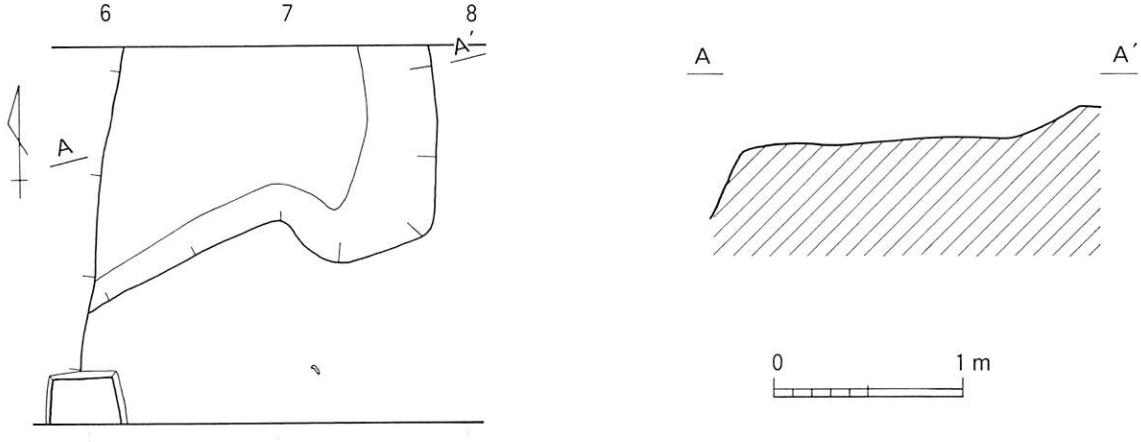
トレンチ西端から４～６mまでの範囲で確認され、北側はトレンチの外に伸び西壁と南壁の一部を２号住居跡から切られていた。床面は硬く締まっていたが、遺物は鉄片が出土した程度であった。



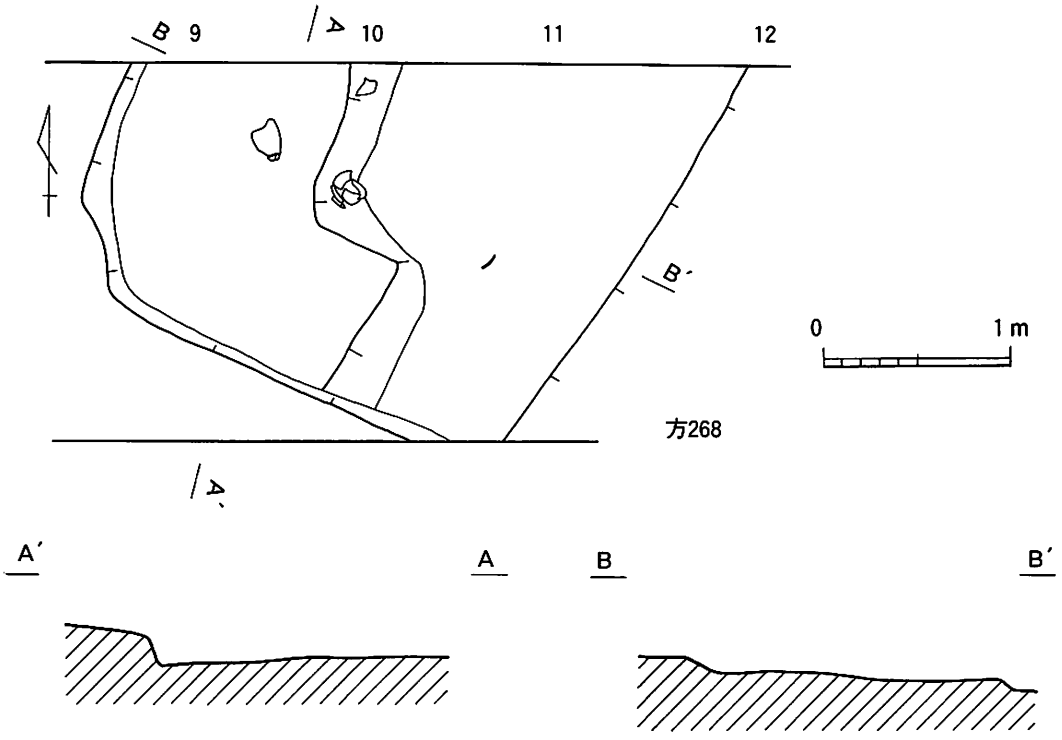
第234図　1・2号住居跡実測図



第235図　2号住居出土遺物実測図



第236図　3号住居跡実測図



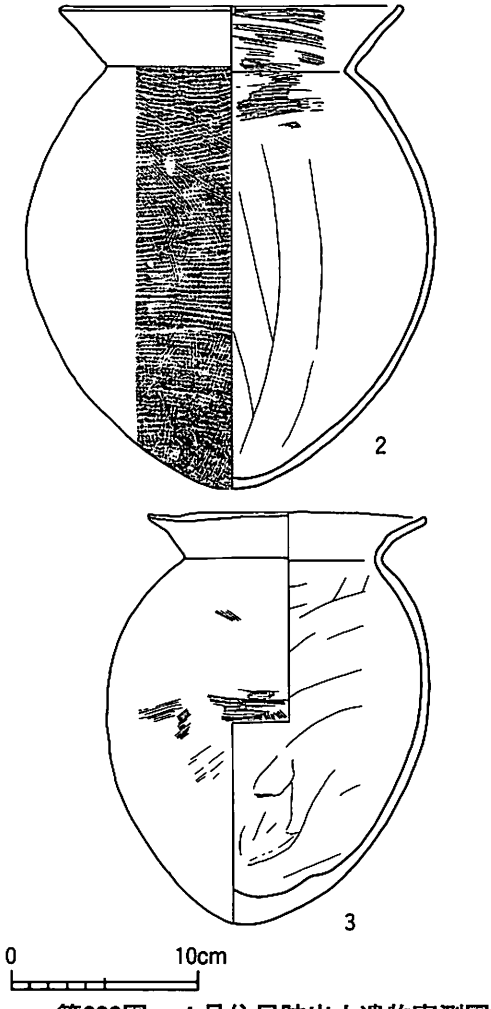
第237図　東西５Ｔ　４号住居跡実測図

（４）　４号住居跡（第237図）

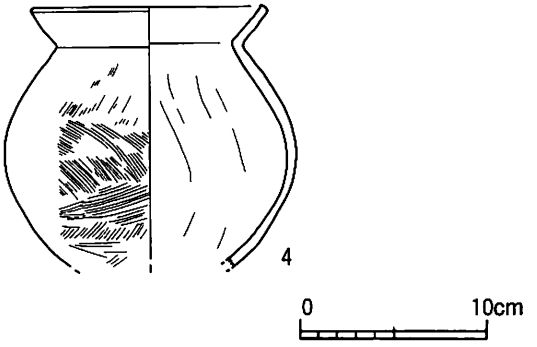
トレンチ西端から6.5～９ｍまでの範囲で確認され、西壁と南壁の一部を確認できた。東側は５号住居跡によって切られていた。西壁に沿って「Ｌ」字状にベッド状遺構を配し床面と共に硬化が顕著であった。当初床面とベッド部分においては別の住居が切り合っていると考えたが、壁が一直線にならず、同一住居のベッドであると判断した。南壁1.7ｍ、西壁1.2ｍ程度を残しトレンチの外へと伸ばし、床面は硬化して人の足跡が多数残されていた。

遺　物（第238・239図）

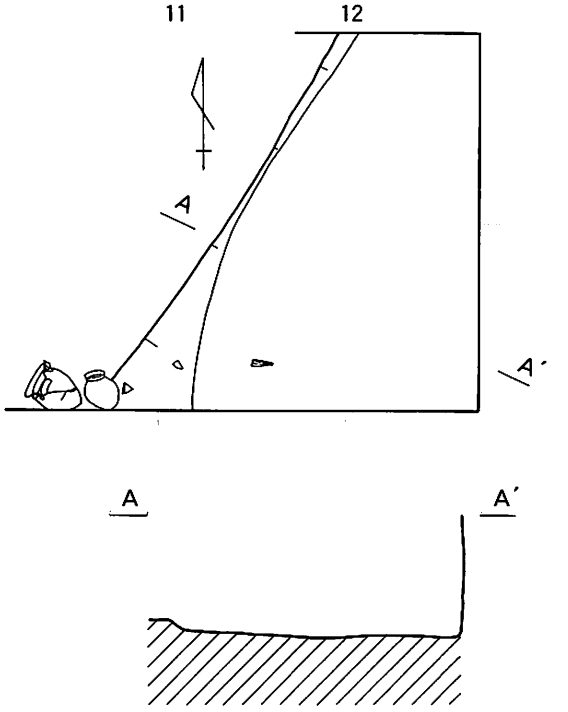
南壁に沿って２（Ｐ－276）と３（Ｐ－277）の庄内系甕置かれていたが、床面から浮いておりこの住居に伴う可能性は少なく住居埋没後廃棄された可能性が高い。本来の住居床面から出土した遺物は図化できなかったが観察の結果Ｐ－273～275から４の甕も含めこの住居の時期は庄内系甕の時期の範疇に収まり、短期間での埋没であったことが推察される。



第238図　４号住居跡出土遺物実測図



第239図　4号住居跡出土遺物実測図



第240図　5号住居跡実測図

（5）　5号住居跡（第240図）

トレンチ西端から9～10.7mまでの範囲で西壁の一部を確認できた。他の壁はトレンチの外に伸びていた。東壁は2mの長さを検出した床は硬化面が広がり、人の足跡が数多く検出された。遺物はほとんど残されていなかった。

6　南北第1トレンチ（第241図）

国土座標　南北X＝－650～－700・

東西Y＝－25,965～－25,967

南北に長い268番地の畑の中心に南北50m、幅2mに亘ってトレンチを設定した。ここらかは5本の溝と2本の道路、3軒の住居跡などが検出された。このトレンチで確認された遺構を追跡する形で他のトレンチの設定を行なった。

（1）　1号住居跡（第242図）

トレンチ南端から9.5～16mの地点で南と北の壁の一部を確認した。南北壁の幅から東西壁が約4mであることが推察された。南壁と3号溝の壁が接しており切り合い関係は不明である。床面は2箇所で硬化面が確認され多数の足跡を検出した。遺物は検出できなかった。

（2）　2号住居跡（第243図）

トレンチ南端から30～33.5mの地点で住居の隅を確認した。北東と南東の壁の一部を検出し2.3～2.6mの長さを測った。床の一部には赤色顔料が残っていた。

遺　物（第244図）

1（P－218）は鉢である、口縁部は内湾しつつ立ち上がり底部は丸底である。

（3）　3号住居跡（第245図）

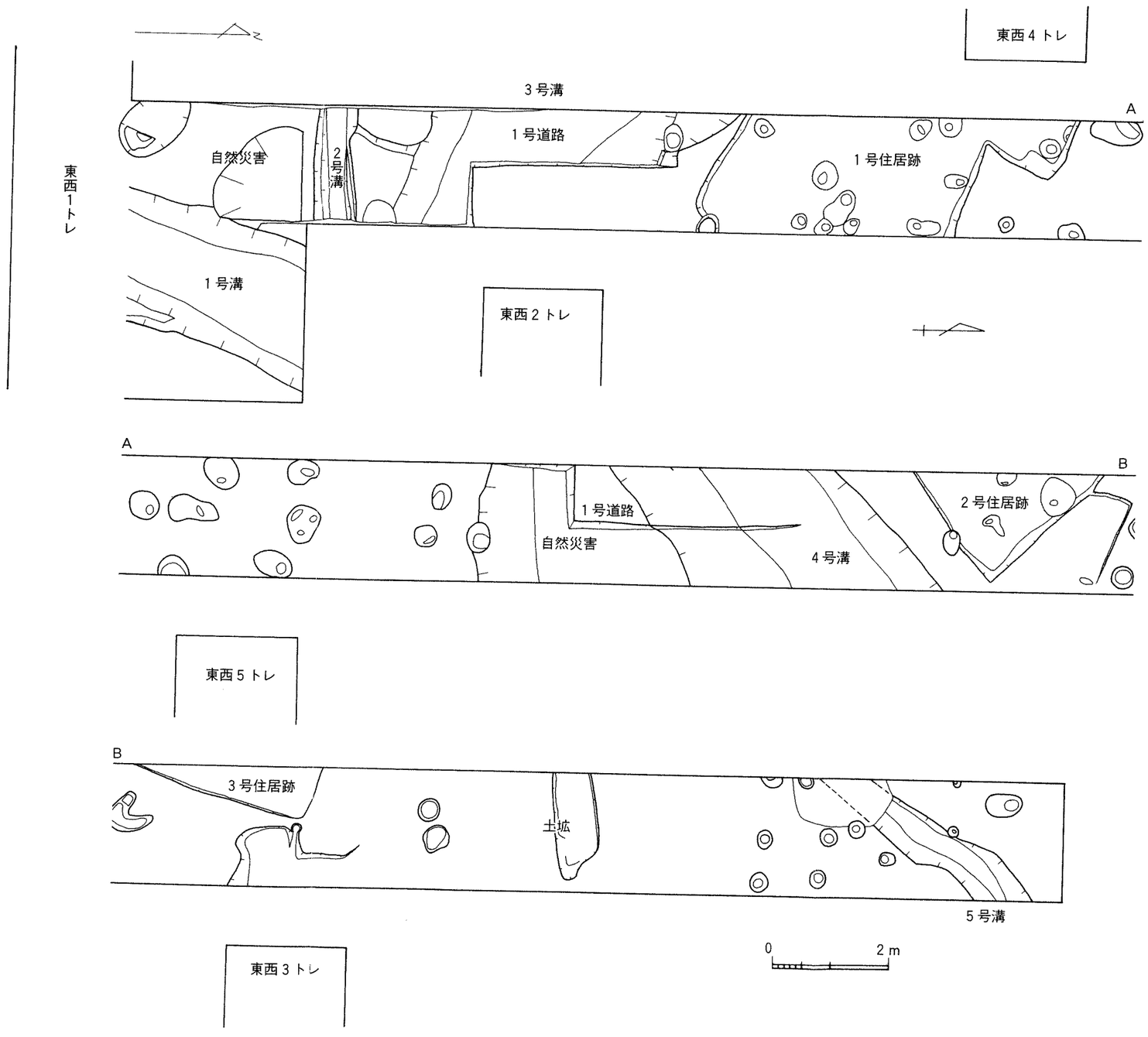
トレンチ南端から34.3～37.6mの地点で確認した。北と東の壁の一部を検出し東壁は長さ3mを測り、北壁は1m程度が顔をのぞかせていた。

（4）　2号溝（第246図）

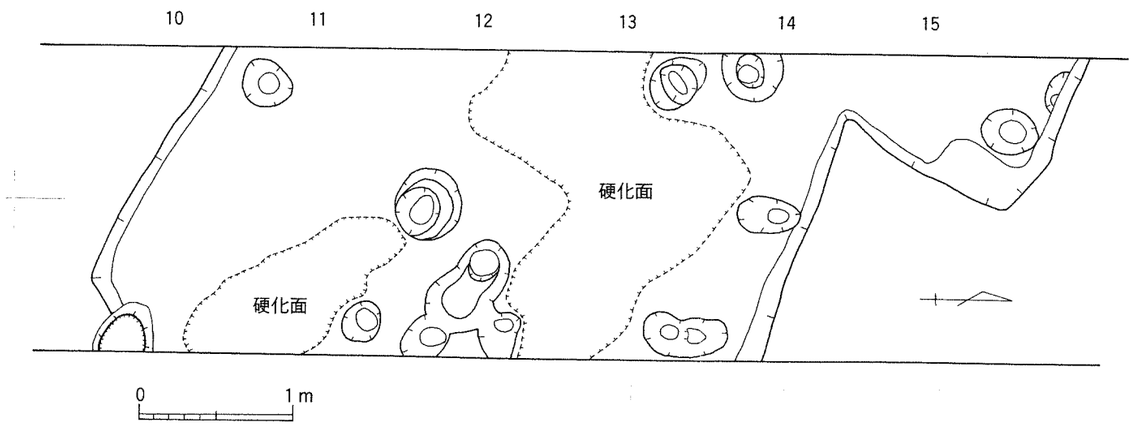
トレンチ南端から3～4mの地点で東西に伸びる細くて深い溝を検出した。上部幅65～70cm、下部30～35cm、深さは実に1mに達していた。床は平坦で遺物の出土は見られなかった。時期の特定は出来なかった。

（5）　3号溝（第247図）

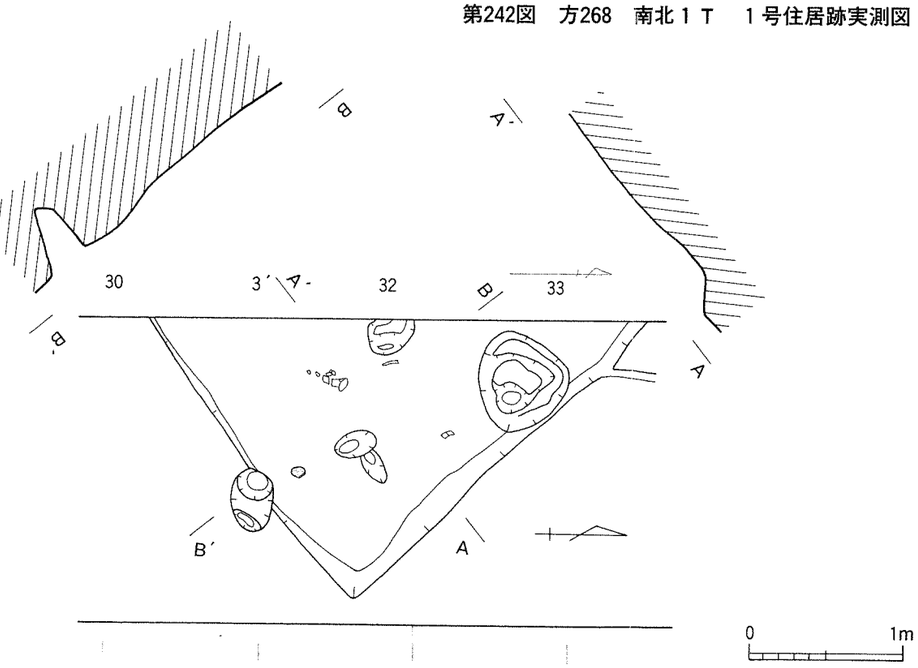
トレンチ南端から5～10mの地点で1号道路の下から検出したもので、北西から南東に向かう溝であった。トレンチ内の全てを発掘できなかったので明確ではないが、北側斜面を観察すると南側斜面に比べ斜め方向がきつくなっていて、東西第4トレンチに於いて平面で黒色土が明確に広がっており、また、東西第2トレンチに於いても検出された事と考え合わせると、湾曲気味に伸びてこれらに連続してくる可能性が高い。



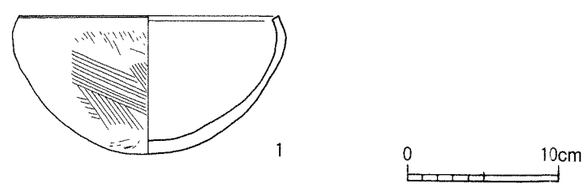
第241図　268番地　南北１・２トレンチ遺構配置図



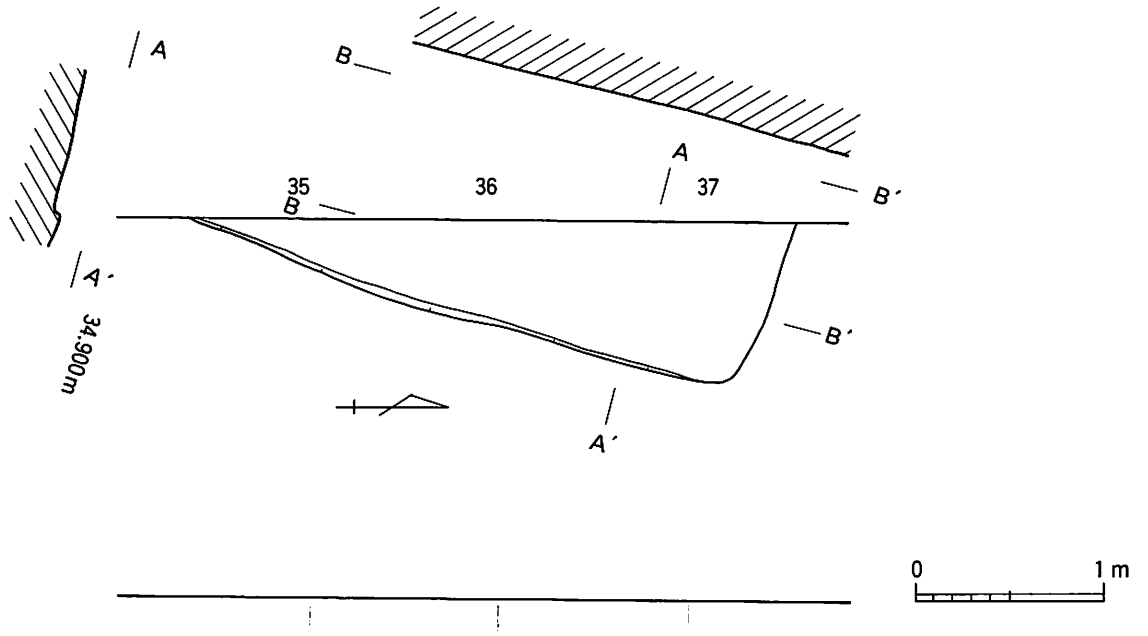
第242図　方268　南北１Ｔ　１号住居跡実測図



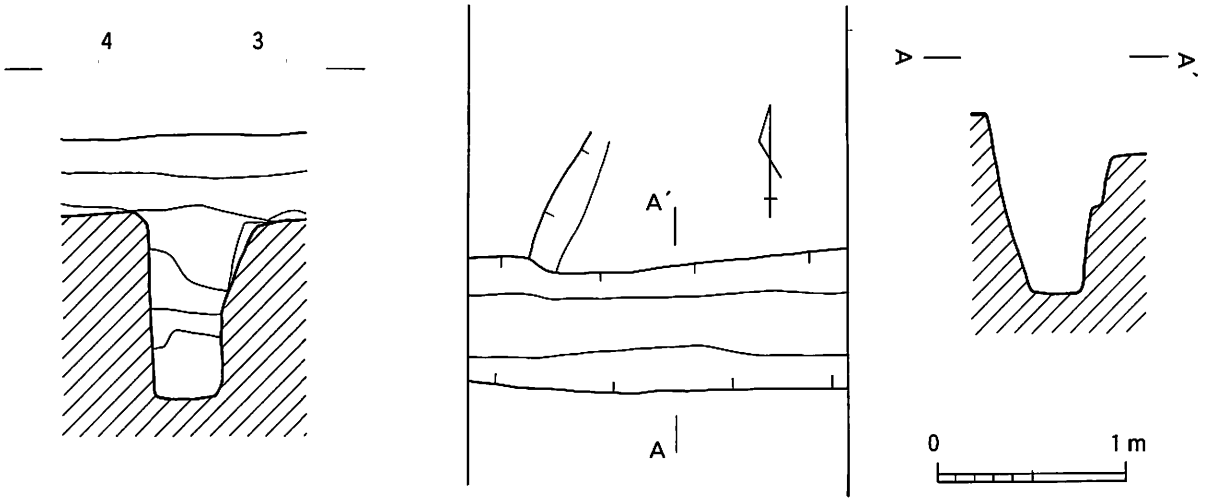
第243図　方268　南北１Ｔ　２号住居跡実測図



第244図　２号住居跡出土遺物実測図



第245図　南北１Ｔ　３号住居跡実測図



第246図　南北１Ｔ　２号溝実測図

したがって、トレンチの西側で溝上部幅5.1m、下部幅2.8mを測るが、これは斜めに測った形であるので本来の規模を示すものではない。いずれにしても逆台形の断面で上部幅４m、下部幅２m、深さ90cm程度の溝になる。標高は上端部南側で33.62m、北側が33.69m。下端部底で32.72cmあり、土層断面において次のことが判明した。

①溝外側（南側）は傾斜が急で、内側（北側）が緩やかな傾斜となっている。

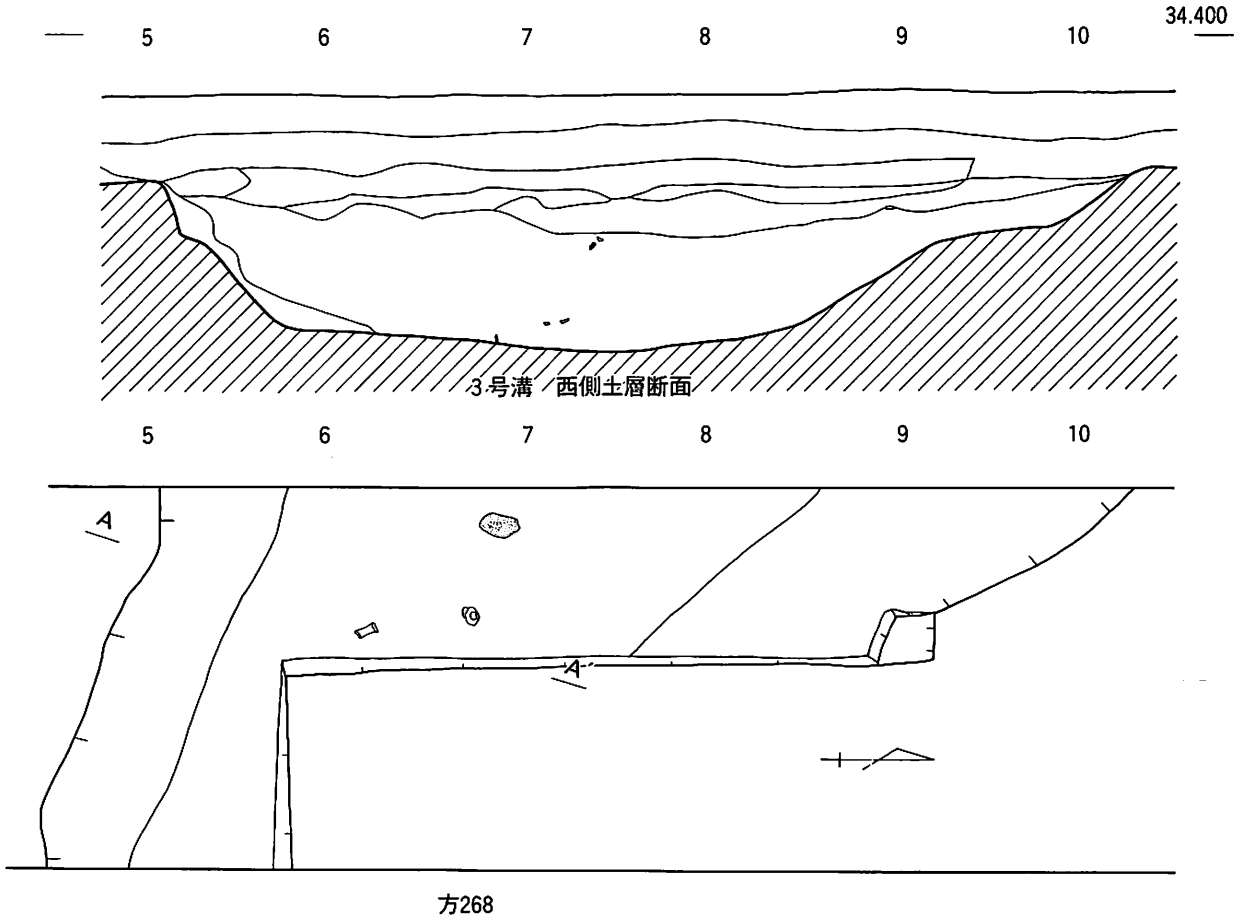
②溝掘削直後外側から明褐土色が流れ込んでいる。

③大量の黒色土が短時間で埋め尽くされた。遺物の出土が少ない。

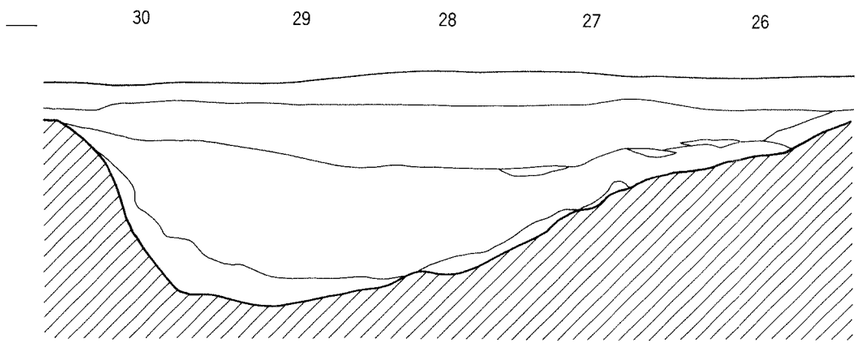
④溝埋没後道路として利用している。

（６）　４号溝（第248図）

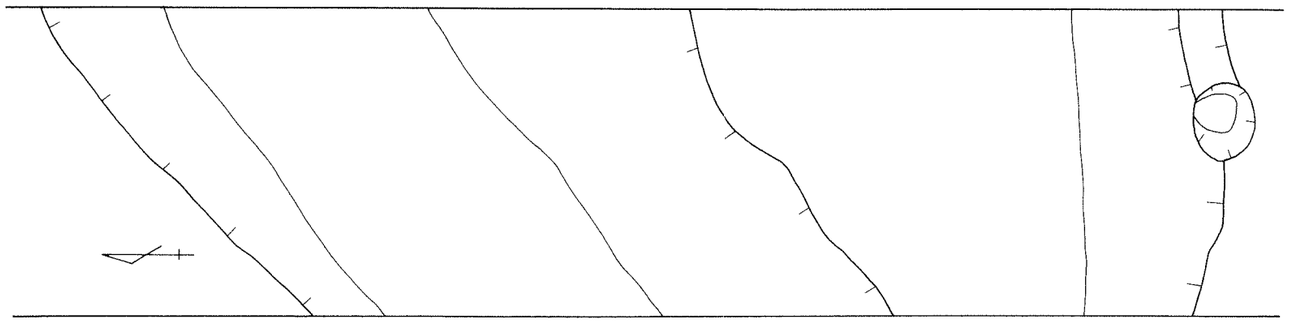
２号道路の下にあったため明確に溝の幅をつかめなかったが、トレンチ南端から25.2～30.7mの地点で検出した。南西から北東に向かって伸びており、上部幅3.2m、下部幅1.4m、深さ1.16mを測るが、やや湾曲



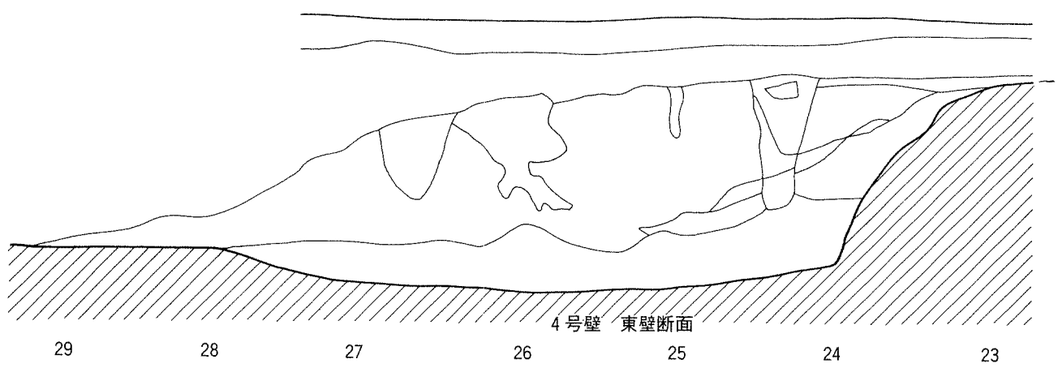
第247図　南北１Ｔ　３号溝実測図



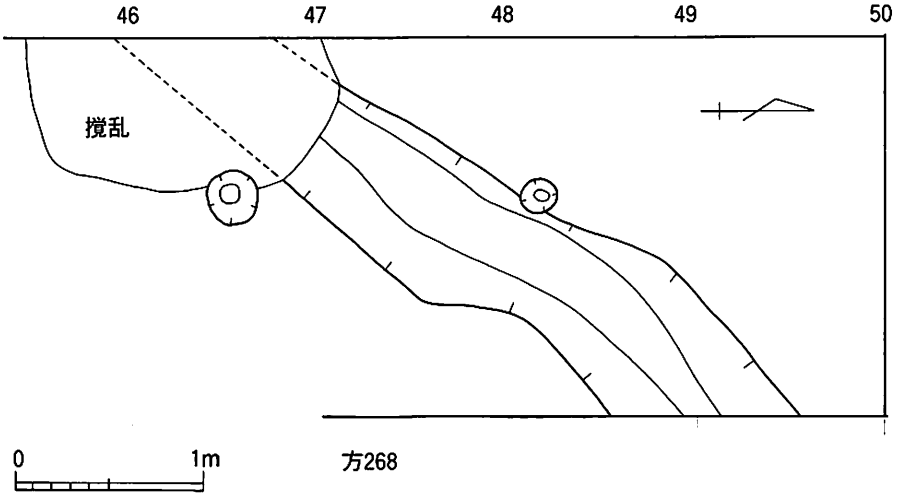
4号溝　東壁断面



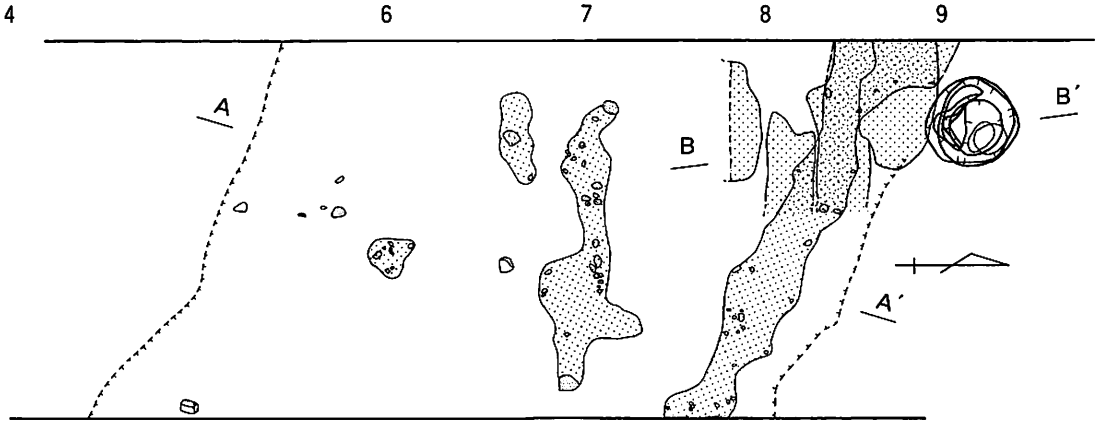
方268　南北１Ｔ　４号溝

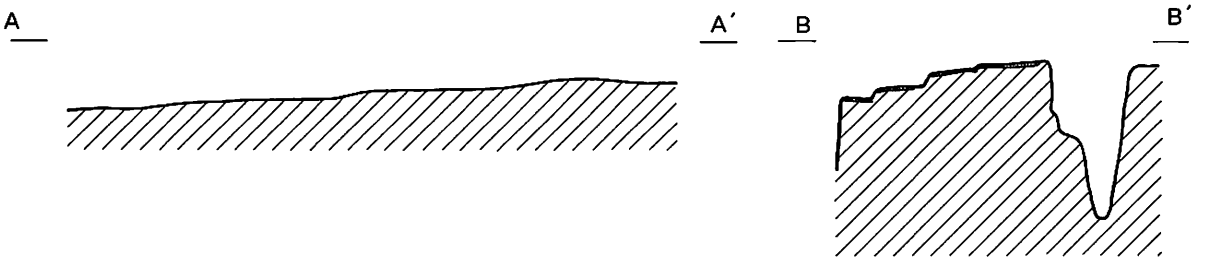


第248図　方268　南北１Ｔ　４号溝実測図



第249図　南北１Ｔ　５号溝実測図





第250図　方268　南北１Ｔ　１号道路（上層）実測図

気味に伸びるため土層断面においては内側が（南側）傾斜が緩やかで、外側（北側）の傾斜が急である。標高は上端部南側で33.62m、北側が33.89m。下端部底32.69mであった。

土層断面において次のことが判明した。

①トレンチ南端から23m地点の自然災害遺構がある時期発生

②その後粘土層が堆積し地山層を形成

③4号溝を掘削する。

④溝掘削直後外側から粘土を含む褐色土が多く流れ込む。

⑤大量の黒色土が短時間で埋め尽くされ溝が埋没する。遺物の出土が少ない。

⑥溝埋没後道路として利用している。

3号溝の埋土状況と極めて類似しており、この事から3号溝と4号溝が同一である可能性を示しており、加えて東西第4トレンチにおける黒色土の広がりと、東西第2トレンチの交差した溝を併せて考慮すると、円形に伸びるものと思われる。

（7） 1号道路（第250図）

トレンチ南端から北へ5～9mの地点で3号溝の上で検出したものである。西北西から東南東に向かって伸びて東西第2トレンチへ続いている。西北西には東西第4トレンチが存在するが、ここでは確認されず直線ではなく曲がりながら延びていることが推察される。道路幅は3.2～3.9mで全面に硬化が著しく小石と土器片を敷き詰めており、道路面は上層で1面、下層で4面が確認された。

東西第2トレンチまで含めると最低でも6mの長さを確認できた。時期の特定は困難である。

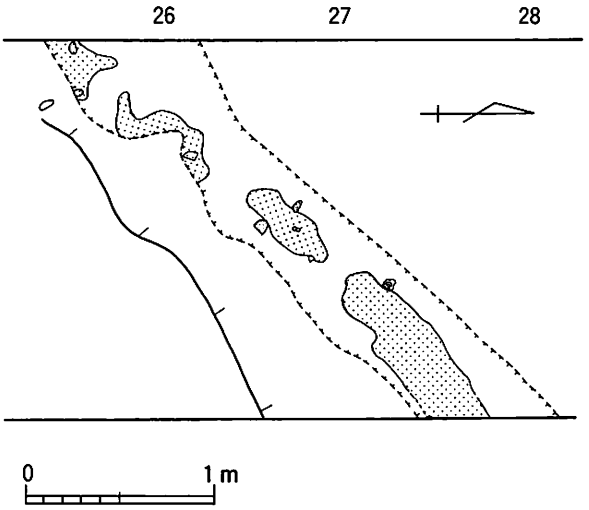
（8） 2号道路（第251図）

トレンチ南端から北へ25.5～28mの地点で4号溝の上で検出した。北東方向にある東西第3トレンチから南西方向にある東西第4トレンチへ続いており、さらに138番地東西第1トレンチに伸びていた。

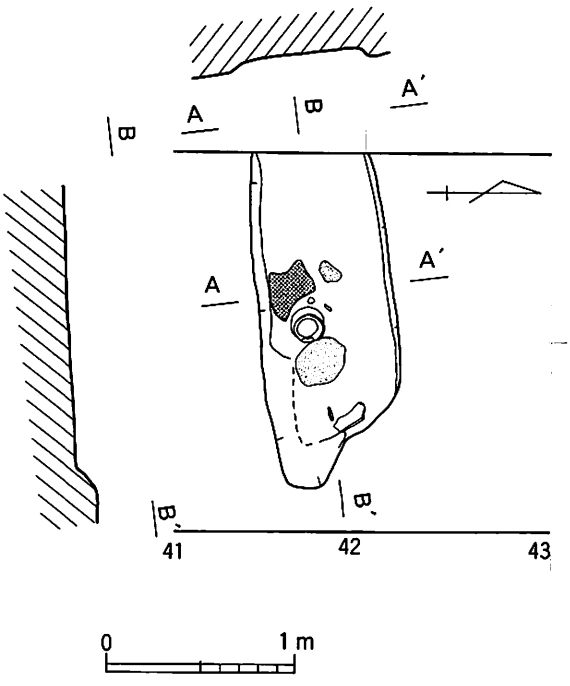
道路幅は狭く0.7～0.5mで全面に硬化が著しく小石と土器片を敷き詰めていた。道路面は3面が確認出来た。

（9） 土坑（第252図）

トレンチ南端から北へ42mの地点で検出した。東西方向に幅70cm、長さ1.8mを測るが全長は不明である。土坑内東寄りに台石を据え、周りに砥石、鉢、火を受け赤変した石が出土した。



第251図　南北1T　2号道路実測図



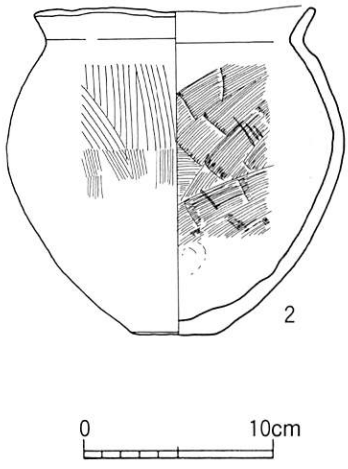
第252図　南北1T　土坑実測図

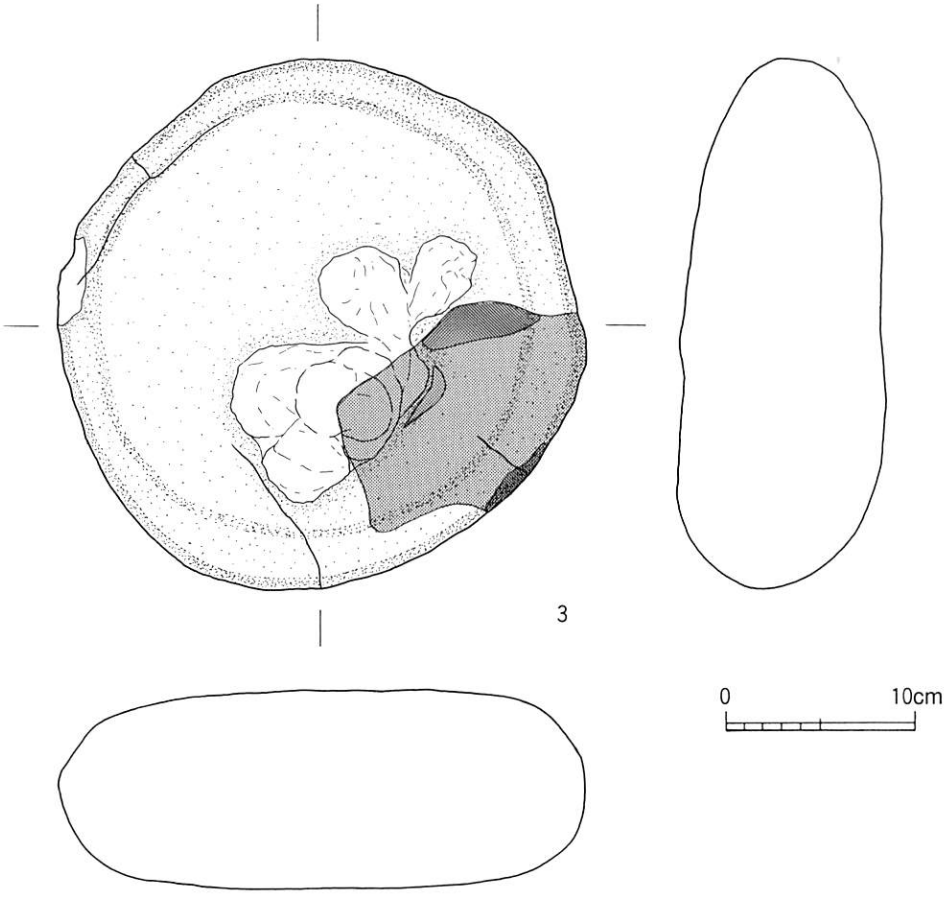
鉢は台石と焼土に挟まれるように置かれており、土坑周辺には空間が存在しているところから工房の可能性が高い。

遺　物（第253図）

2（P－58）は鉢である、口縁部の一部と胴部器面を円形に剥離しているが、ほぼ完全な姿を残している。口縁部は短く、胴部は張りが小さく深い、底部は小さな平底である。器面はハケ目調整であるが、僅かにタタキ目を残している。外面には煤などの付着は見られないが、内面には口縁部から胴部中位までは淡い黄色であるが、胴部中位以下では淡紅色に変色していた。

3（S－2）は自然石の台石で全面熱を受け淡紅色に変色している。加えて、表面の剥離と亀裂も観察できる。





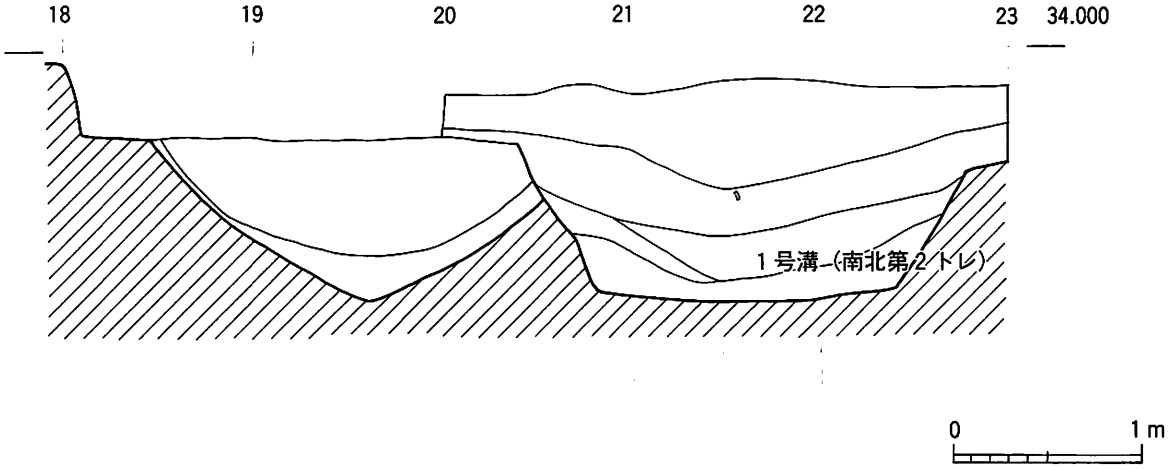
第253図　南北１トレンチ　土坑出土遺物実測図

(10)　自然災害遺構（第254図）

2箇所で自然の力によると考えられる遺構が確認された。1ヶ所はトレンチ南端から北へ2mの地点で検出した。この遺構は1号溝と2号溝に切られていたため半円形に残っているが、本来は直径2m程度の摺り鉢状になっていた。中心部は黄色粘土層で周囲は黒色土層で包まれる様に堆積していた。黒色土層は場所によって厚みに差があり、あたかも南から北に向った強風によってなぎ倒された木の根の様であった。

もう一ヶ所はトレンチ南端から北へ23～25mの範囲で確認された。4号溝に沿うように黒色土層が落ち込んでいったため、当初は4号溝が広がったものと考え掘り下げてみると、途中で止まっており、黄色粘土層と黄色砂礫層に挟まれたのである。

洪積層の中に入り込んだ黒色土層は南側にのみ堆積しており、先の遺構との共通性があると思われる。これらの中からは何も発見されなかった事からも旧石器時代の遺構と考えられる。ただし人工的なものの可能性は低く、自然災害の爪痕と考えた。



第254図　南北第1トレンチ自然災害遺構・第2トレンチ1号溝断面図

7　南北第2トレンチ（第241図）

国土座標　南北X＝－697～－700・

東西Y＝－25,962～－25,965）

東西第1トレンチで検出された1号溝を追跡するために拡張したトレンチである。3m×3m程度で北側に広げたものである。

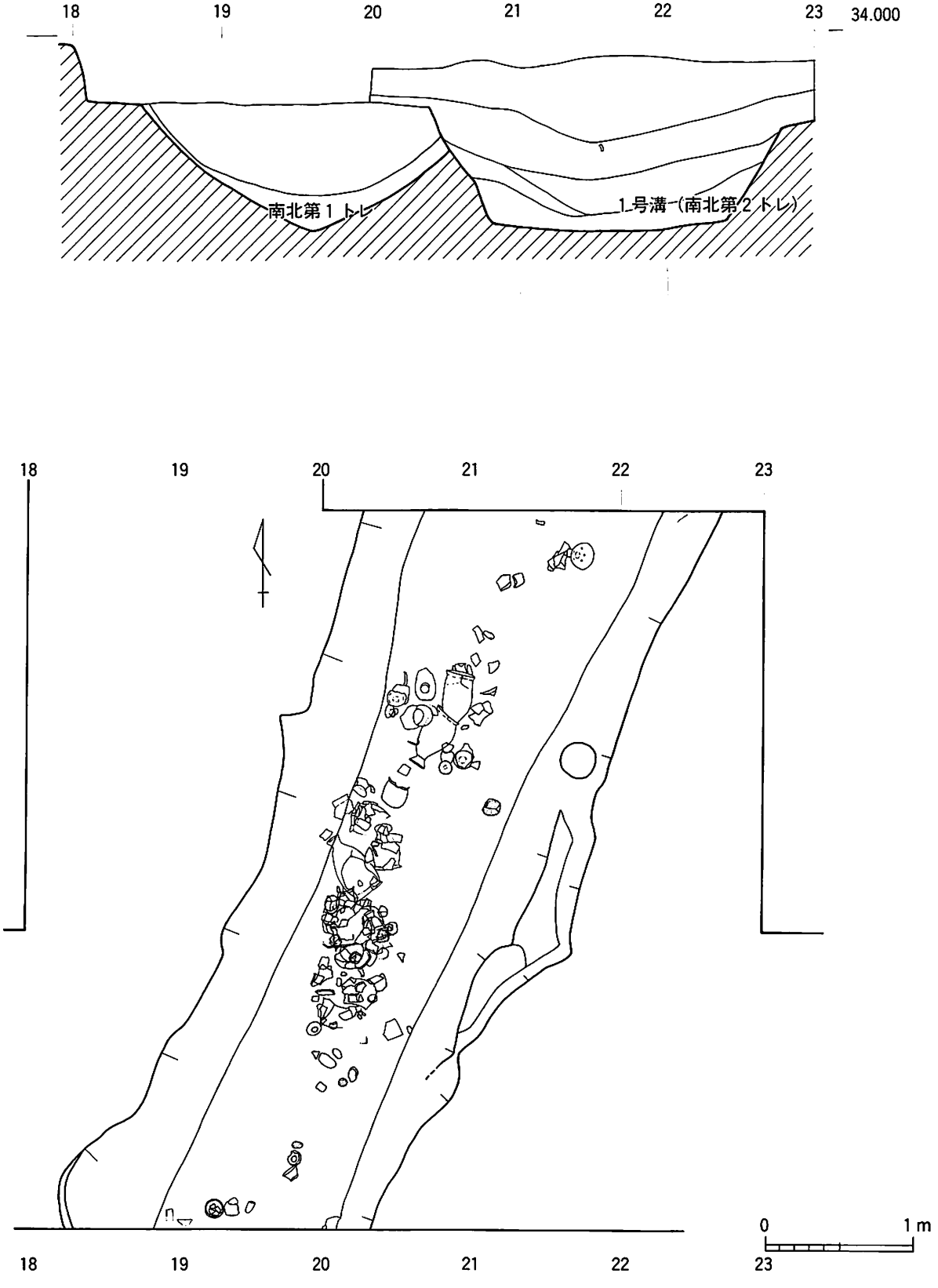
(1)　1号溝（第255図）

ここでは東西第1トレンチからも含めると約3mの範囲で検出する事ができた。北端で上部幅2.2m、下部幅1.5m、深さ85cmを測った。ここでは弥生終末の在地系甕が据えるように置かれていた。その中でも入れ子状態になった甕も発見された。遺物の多くは溝埋没過程での廃棄で第2層から集中して出土している。

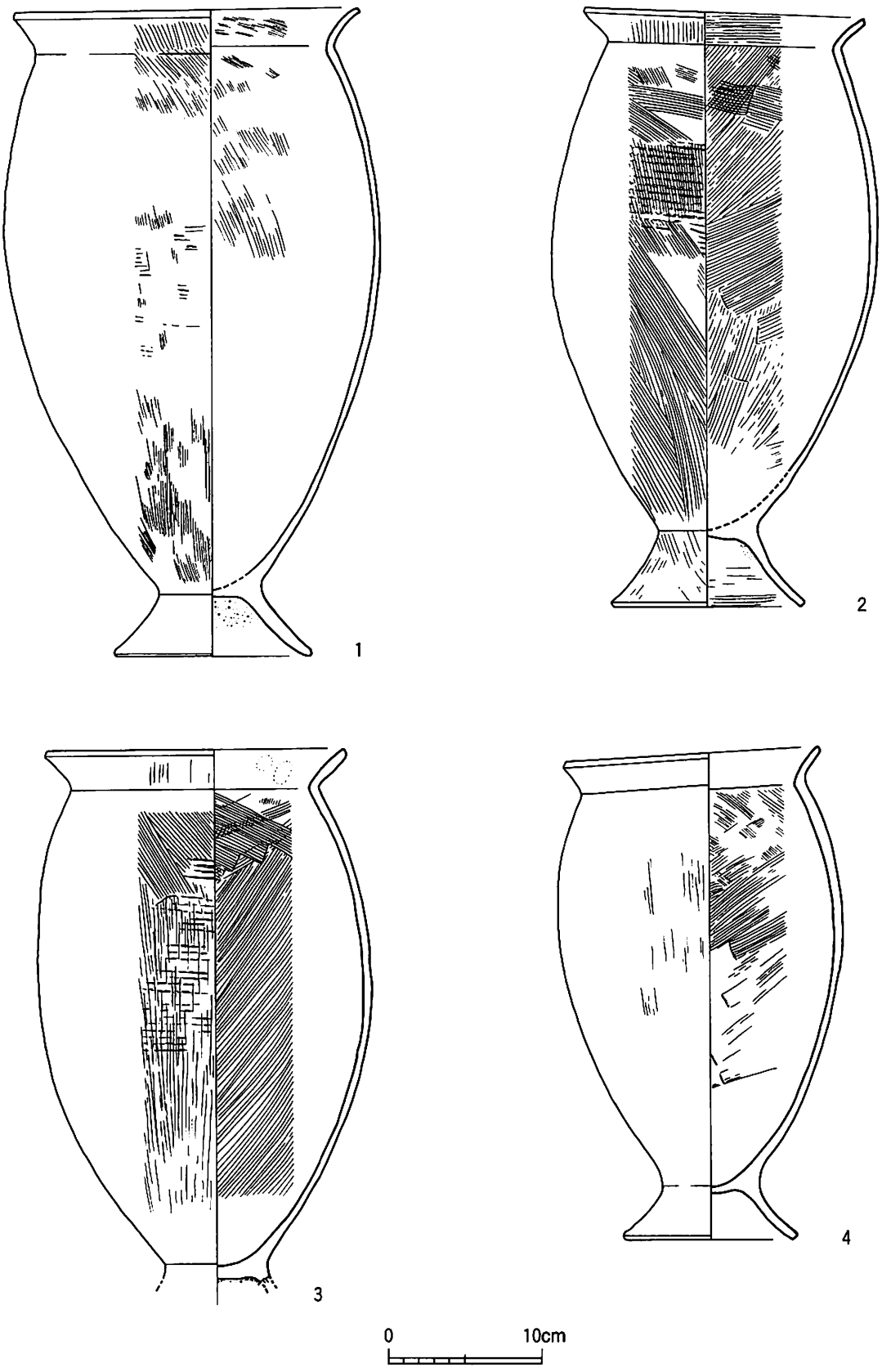
遺　物（第256・257図）

1（P－239）は在地系の大形甕である。口縁部は外反し、胴部の張りは少なく最大径を中位に配している。器面には僅かにタタキ目を残し、ハケ目調整で仕上げている。底部は脚台を有し内面には砂粒が付着している。2（P－250）も在地系の大形甕である。1に比べると僅かながら小さくなっているが、口縁部から胴部の張りは大きく最大径を中位に配している。この甕には3の甕を底部から差し込まれて入れ子状態にして廃棄されていたもので原形を保っていた。3（P－251）は脚台を欠いているが2同様在地系の大形甕である。4（P－242，244，245）は中型の在地系甕である。5（P－244，255）も中型の在地系甕である。6（P－245，246）と7（P－237）は小型の在地系甕である。8、9（P－262）、10は溝最下層から出土している。

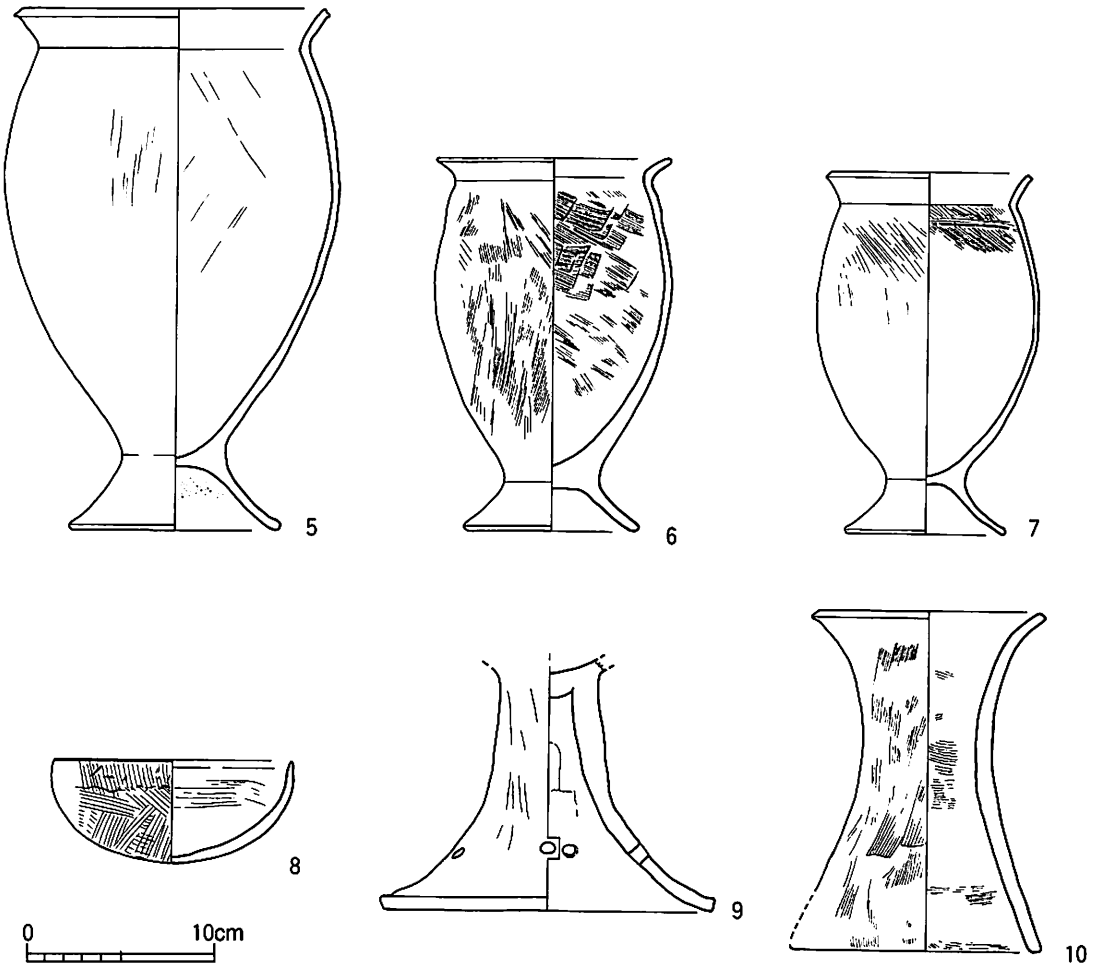
（中村幸史郎）



第255図　方268　南北２Ｔ・東西１Ｔ（１号溝）１号溝実測図



第256図　1号溝出土遺物実測図



第257図　1号溝出土遺物実測図

第8節　調査の成果

当該年度の調査は文化財管理センターの南側を中心に調査範囲として、方保田の舌状台地を分断する溝の確認を目的とした。その結果は以下に示すとおりであり、おおむね目的は達成された。

131番地に於いては文化財管理センター下で確認された大溝を追いかけたが、熊本県文化課の指摘もあり遺構を掘り下げずに上面で押さえるように努めたため大溝の規模については明確に押さえる事は出来なかった。さらに、2号溝についても同様で土器の廃棄状況から溝と判断したが規模については確認出来なかった。

しかし、新たに3号溝が検出され「V」字形の断面で北西から南東に向っていることが判明した。この溝は方保田東原遺跡の中では第2期に属し、古い時期の弥生時代後期後半に相当する。

132番地でも大溝について追跡調査を実施したが131番地同様遺構上面での検出に留め詳細な規模の確認は出来なかった。

136－1番地では平行して東西方向に2本のトレンチを入れそれぞれ東端に南北に延びる溝を確認した。上面のみの調査で、詳細は不明だが大溝の延長にはならず新たな溝である可能性が高い。

138番地は祭祀土坑が検出されたことが最大の成果である。隅丸方形のプランは福岡県小郡市の大板井遺跡に類似した土坑が出ており、大量の埋納された土器やミニチュア土器が出土し祭祀の状況を考えるに貴重な情報を得ることが出来た。遺物の中には明らかに山陰地方とくに出雲地域の壺が存在しており交流の一端を垣間見ることが出来る。また祭祀土坑に切られた1号住居跡からは鏡が立てかけるように出土している。

東西に2本のトレンチからそれぞれ4本と3本の溝が4本確認されたが、いずれもつながりを持って延び

ていた。さらに破壊された古墳の周濠が発見できた。この地域は小字を塚の本と言うが今では亀塚古墳と端山塚古墳を残すのみで、過去にはこのような古墳が数多く存在していたものと推察される。

トレンチ東端では北東方向に伸びる道路状遺構が検出され268番地に続いている。

141番地では西端部から円筒埴輪の破片が出土し、近くに古墳が存在していた可能性を示唆したものである。

2基の石棺のうち1基は明らかに子供用で、他の石棺は破壊されているが滑石製玉が大量に出土し、廃土中からは舶載鏡の破片が出土した。

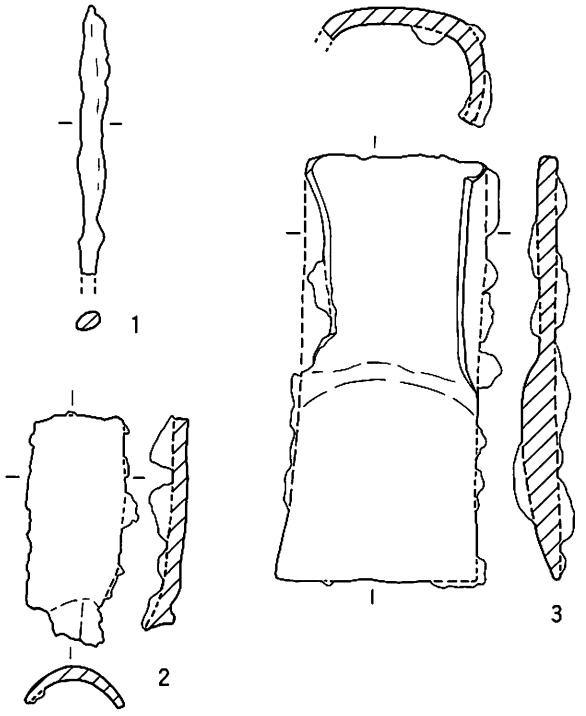
トレンチ東側で溝が複数確認されたが138番地の溝が延びるものと推察される。

267番地では削平がひどく南側のトレンチでは遺構上面の大半が壊されていた。北側トレンチでは溝の上面に中世の遺物が集中して出土した。

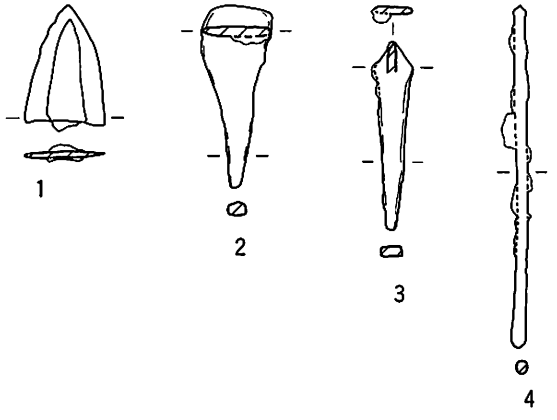
268番地では溝と道路状遺構が多く残されており、その中でも1号溝は東西1トレンチから南北2トレンチ、東西2トレンチと北東方向に延びており、時間的な位置付けも方保田東原遺跡の中では第2～3期に属し、甕の形状が脚台付きで器面調整にハケと叩き技法を残している。また櫛描き文の壺や脚付き鉢は特殊な形状で、交易によってもたらされたものと考えられる。また、南北1トレンチでは3号溝と4号溝が同一溝で、東西2トレンチの3号溝に延びていると推察される。西端には現在の道路と平行に南北方向に延びる6号溝が確認された。

とくに検出された溝の多くは南北もしくは台地を断ち切るかに様な方向に延びている事が明らかになった。さらに道路が複数検出されたが、時間的な位置付けは、困難であったが、おおむね古代に属するものであろう。

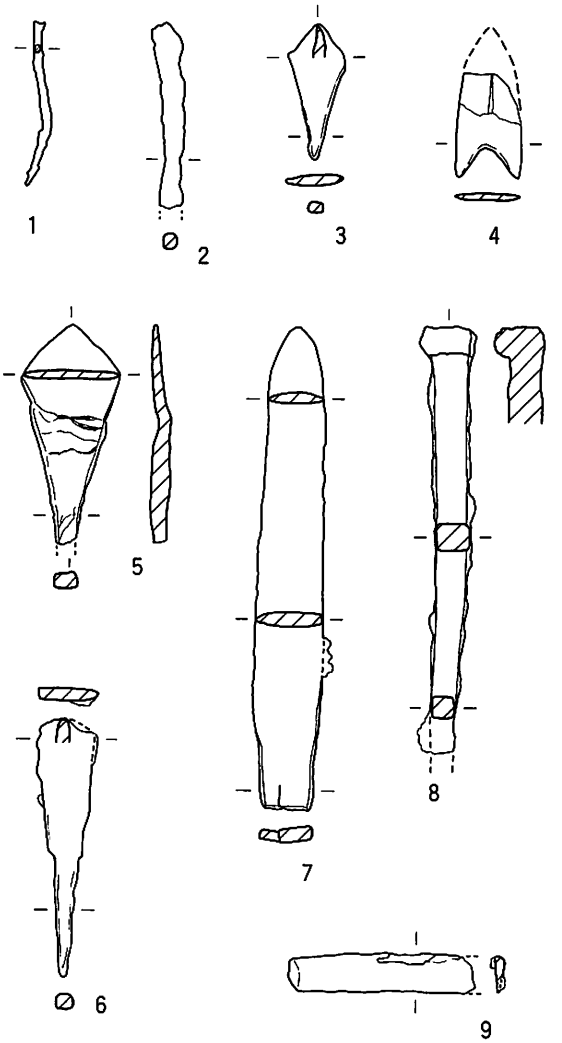
138番地での祭祀土坑は遺跡の中における祭祀地域として確定するに十分な材料であり、未来の遺跡整備に於いても中心的な露出展示の核になるものである。



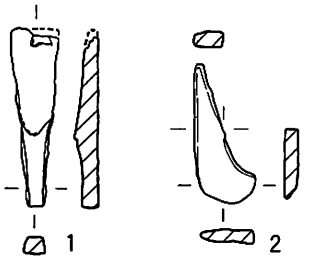
方保田136番地出土鉄器



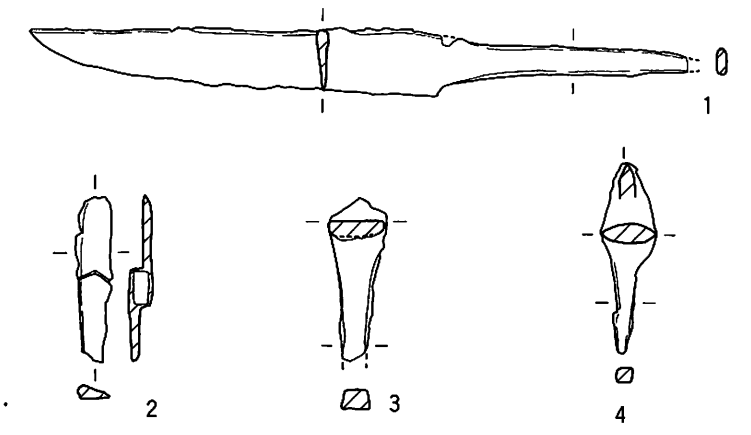
方保田268番地出土鉄器



方保田138番地出土鉄器



方保田141番地出土鉄器



方保田267番地出土鉄器

第258図　平成９年度出土鉄器実測図（Ｓ＝１／２）

第６章　平成10年度の調査

平成７年に出土文化財管理センター建設に先立ち調査した際、調査区内から方形周溝墓が検出され、その時の状況から調査区東側に墓域が広がるのではと疑念が生じた。方保田東原遺跡の在る方保田台地は標高33～35m程度でほぼ平坦になっているが、この区域は他の区域より一段高く36mラインが残っている所である。当初の地形が今と同じであったとは考えられないが、今回調査対象とした地区は最も高い場所であり、墓所としての可能性の確認と遺跡東端部の確認を目的として調査を実施した。

調査は遺構の分布を確認するため幅２mのトレンチ調査を行なった。調査区全体で国土座標の東西方向にトレンチを設定したが、大まかに25mの間隔を４段に列を為すように配置した。

このため畑の形状と異なる方向にトレンチを設定することとなり、地番毎に区切って一直線になる様にした。しかしトレンチ名は地番を優先し通し番号としたので、隣接してもトレンチ名が全く異なっている。

第１節　813番地の調査

１　813番地トレンチ（第259図）

国土座標　南北Ｘ＝－550～－552

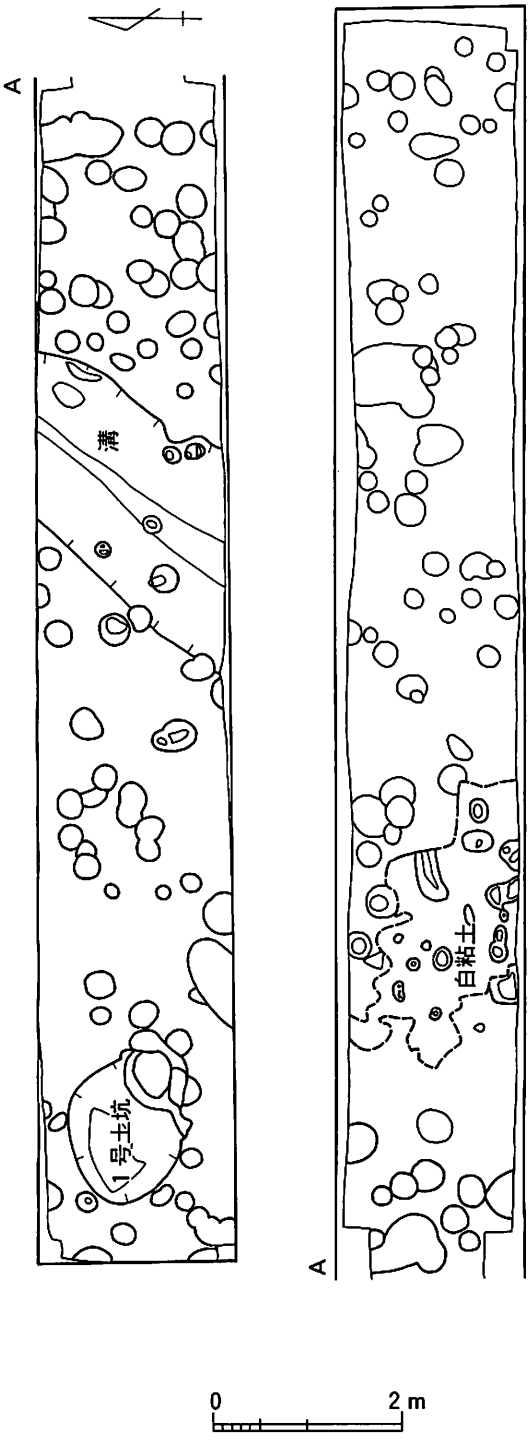
東西Ｙ＝－25,786.7～－25,812.7

現在は埋め立てられて畑や宅地になっているが、遺跡の東側には、かつて池と谷が存在していた。この谷の一番奥に当たるのが今回の調査地である。調査区の中で最も東に位置するのがこのトレンチで東西方向に長さ26mのトレンチを設定した。ここでは遺構面が東に向かって低くなっており、西側では地表から64cmであるが東側では実に175cmにも達していた。

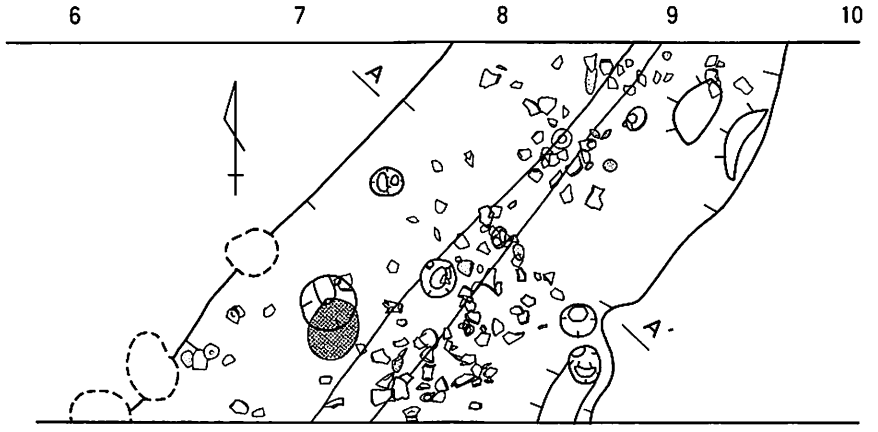
遺構そのものは少なく、弥生時代の溝と古代の竈と柱穴群が検出された。

（１）　溝状遺構（第260図）

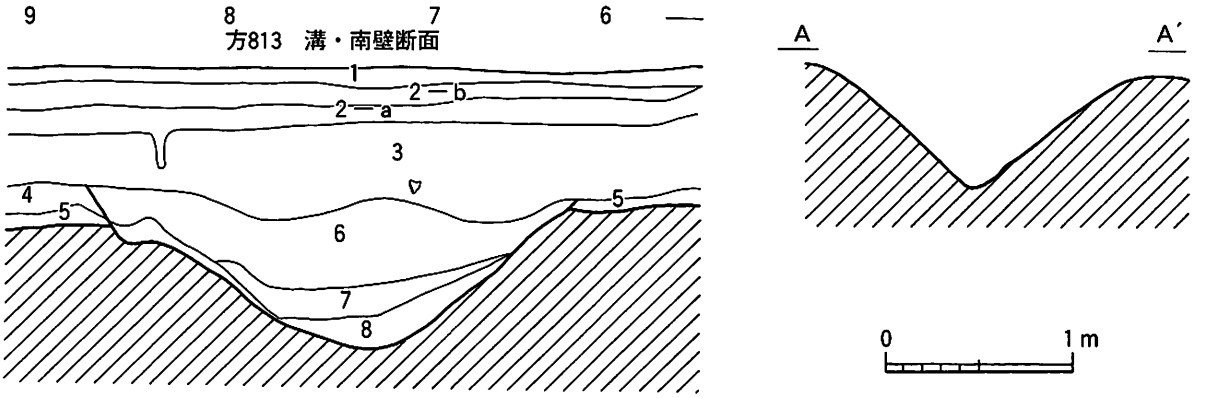
トレンチ西端の６～10mの範囲で確認されたものである。北東から南西に向かって伸びており、814番地第３トレンチの溝に続いていくようである。溝の幅は上部で1.6～1.9m、下部で12～38cm、深さ80cmの「Ｖ」字形の断面であった。遺物の多くは破片で、完形になるような土器は見られなかった。またこれらの土器片



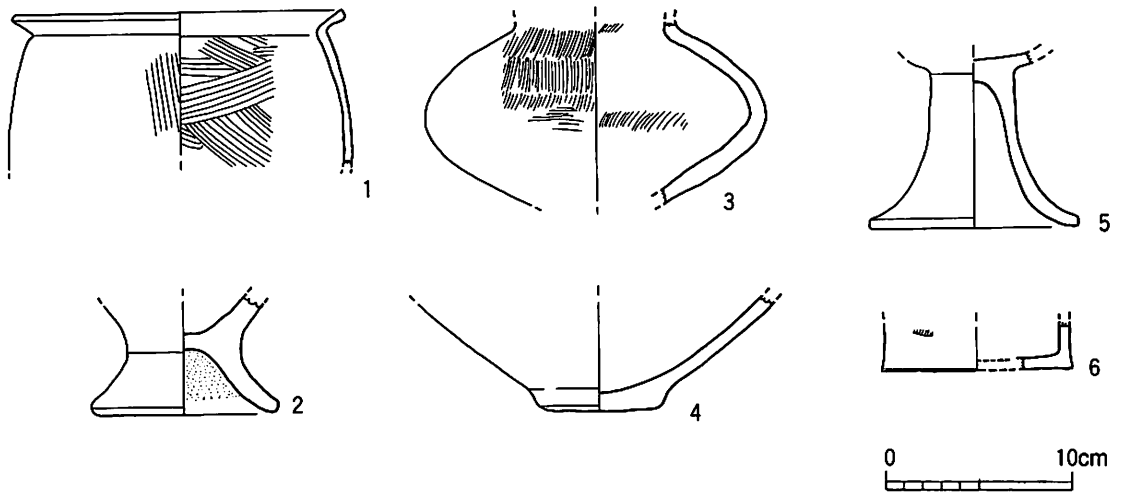
第259図　方保田813番地　第１Tr.　遺構配置図



方813　溝



第260図　溝実測図



第261図　溝出土遺物実測図

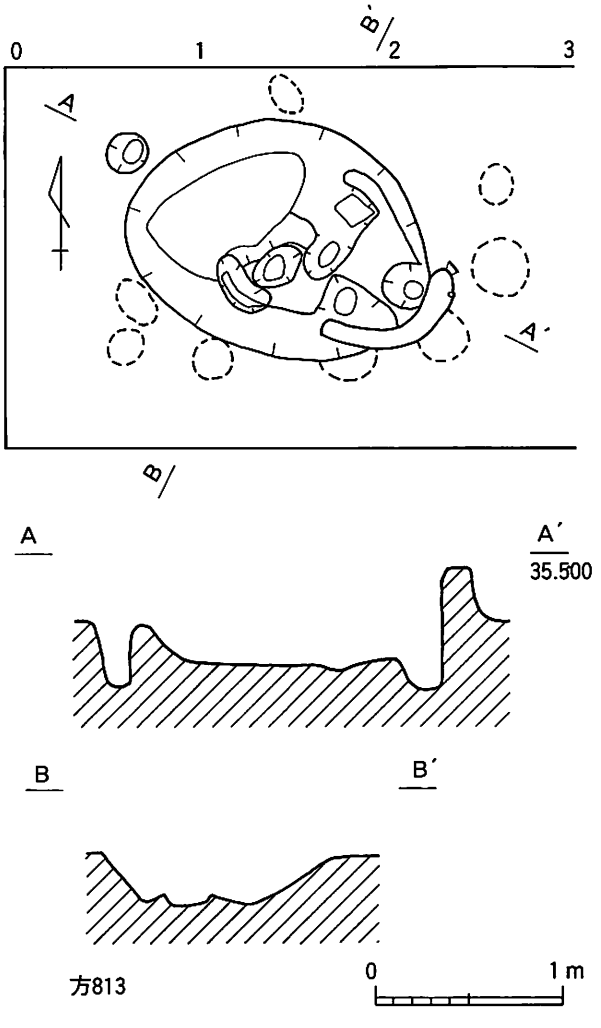
は溝埋没後に廃棄されており、溝構築時のものではなかったが、外来系の土器を含んでおらず131トレンチ3号溝および267番地1号溝などと同時期の溝と考えられる。

遺　物（第261図）

1（P－34）は在地系甕の破片である。口縁部は短く胴部の張りは小さい。表面には煤の付着が著しい。

底部は欠いているが、脚台になる。2（P－51）も在地系甕の破片である。底部のみで小さな脚台である。

3（P－35）は壺の胴部である。口縁部は細くて長くなるものと思われる。表面には粗いハケ目が施されている。4（P－60）も壺の破片で、底部のみである。小さな平底で胴部は大きく広がる。5（P－31）は高杯の脚部である。裾部の広がりが小さく、脚としての高さも低い。6（P－60）はジョッキ形土器の破片である。



第262図　1号土坑実測図

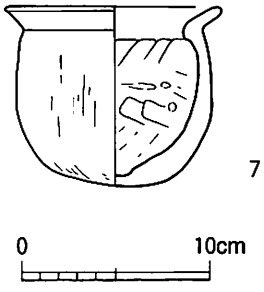
（2）　1号土坑（第262図）

トレンチ西端からの0.6～2.3mの範囲で確認された楕円形の土坑である。上部には白粘土と焼土が混在した土で竈を作っている。

竈に伴う住居の確認ができなかったし、竈と土坑の関係が理解できなかった。土坑は長径1.6m、短径1.2m、深さ0.3mの摺り鉢状を呈していた。

遺　物（第263図）

7（P－152）は小型の土師の甕である。口縁部は短く開き、厚みのある胴部は内面をヘラ削りで調整している。



第263図　1号土坑出土遺物実測図

第2節　814番地の調査

813番地の西側で825番地の一部を挟んだ形になっている。ここでは東西方向に3本のトレンチを南北2列に配した。第1トレンチは北側に、第2・3トレンチは南側に並んで設置した。

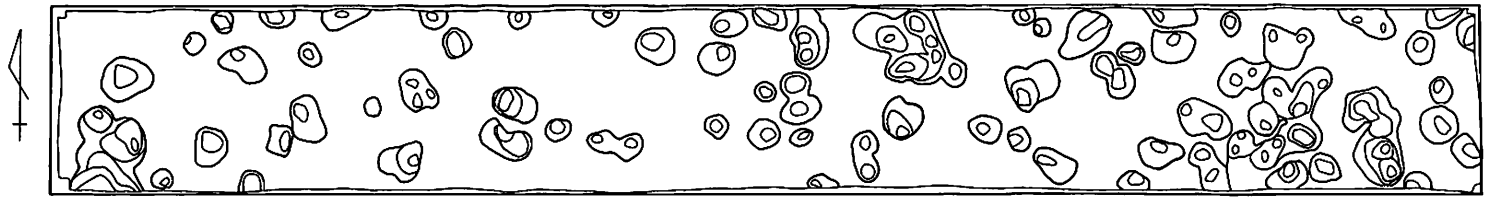
1　第1トレンチ（第264図）

国土座標　南北X＝－550～－552

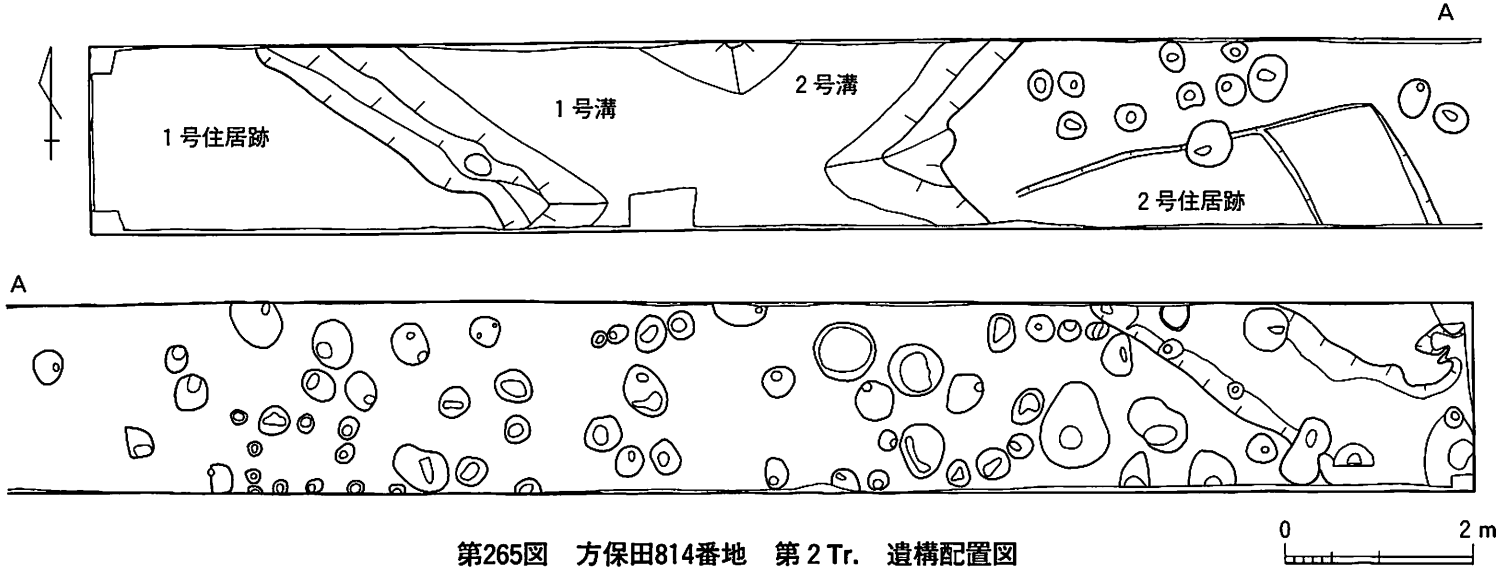
東西Y＝－25,853.8～－25,868.8

820トレンチと825トレンチに挟まれるような形で長さ15mのトレンチを設定した。813トレンチから820トレンチまで一直線になるよう設定した中で、ほぼ中央に位置している。

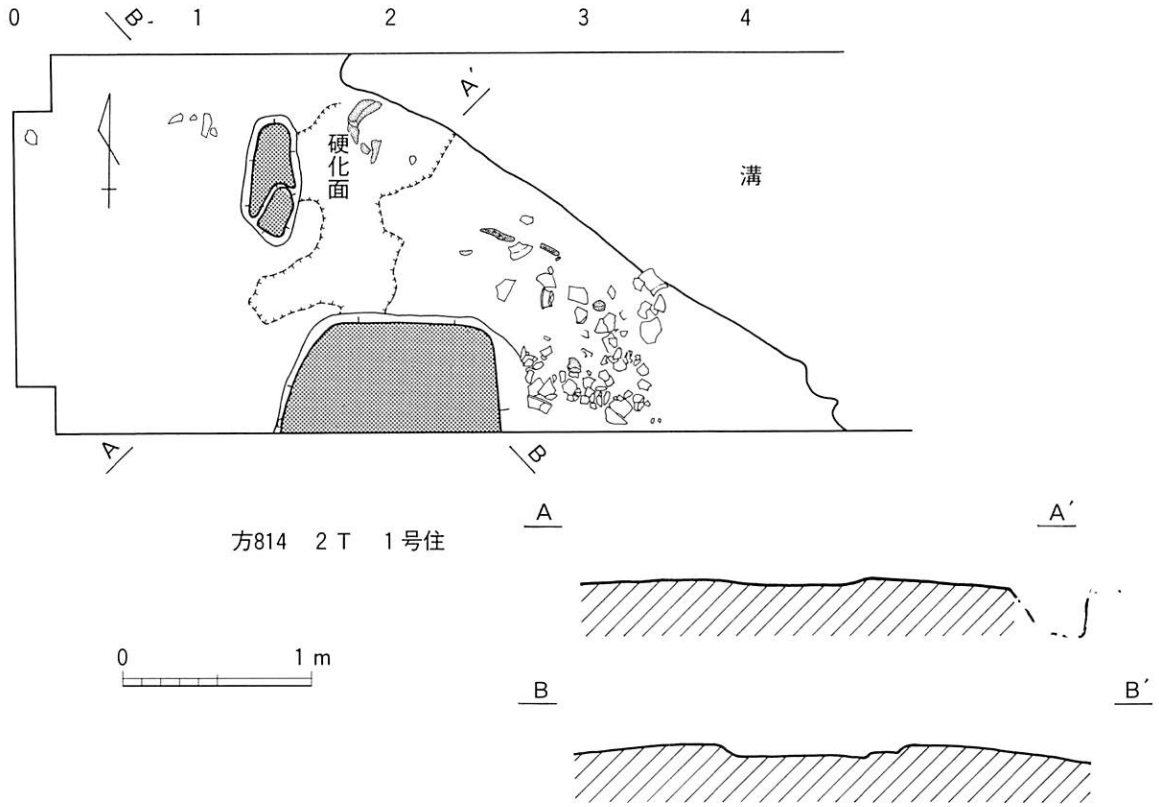
遺構としては柱穴群が検出されたが、僅か2mの幅の範囲では建物を構成する状態は確認できなかった。弥生時代から古墳時代にかけての遺物は検出されず、古代の須恵器や土師器の破片が出土したところから柱穴群の時期は古代の可能性が高い。遺物は図化できうる物は見られなかった。



第264図　方保田814番地　第１Tr.　遺構配置図

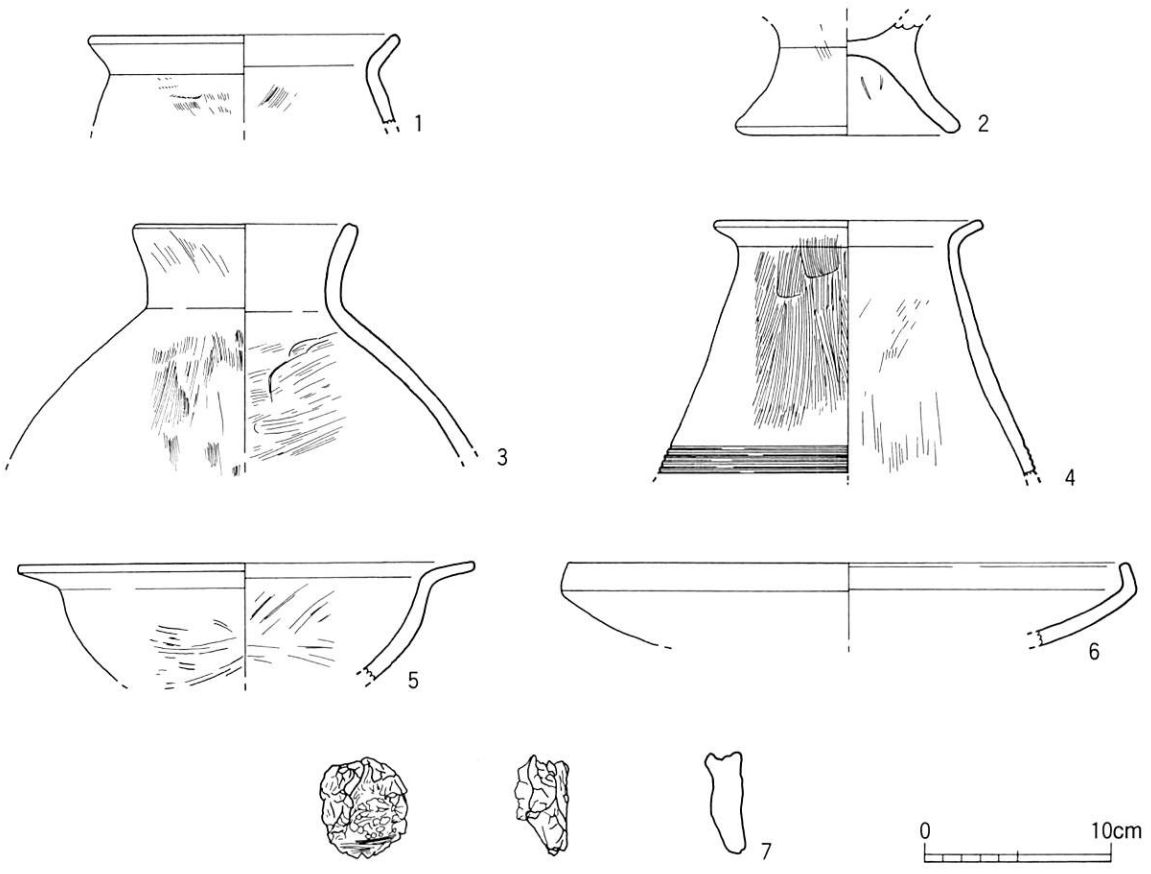


第265図　方保田814番地　第２Tr.　遺構配置図



方814　2 T　1 号住

第266図　1 号住居跡実測図



第267図　1 号住居跡出土遺物実測図

（第265図）

（国土座標　南北X＝－550～－552　東西Y＝－25,853.8～－25,868.8）

第1トレンチの南側に25mの距離を空けて第2トレンチと第3トレンチを設定した。これらは2mの間隔をもって一直線に設定し、西側の長さ30mのトレンチを第2トレンチとした。

ここでは住居跡2軒と弥生終末期の溝が交差する形で検出され、古代の柱穴群と共に須恵質円面硯が出土した。

（1）　1号住居跡（第266図）

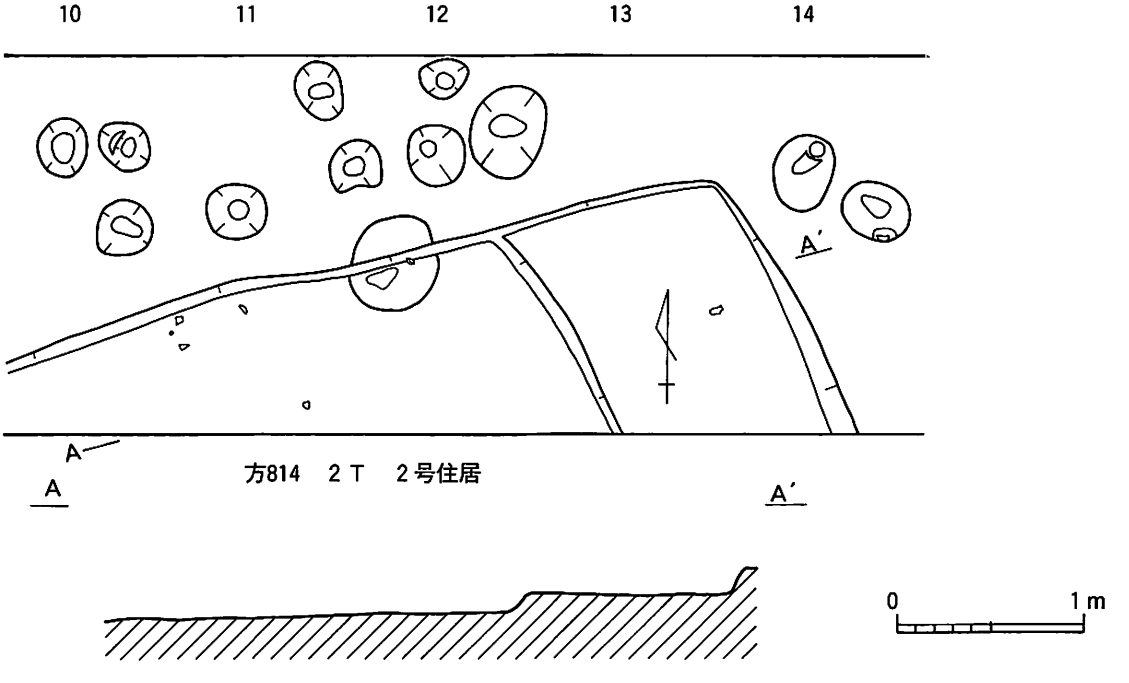
トレンチ西端から4.3mの範囲で確認されたが、1号溝と2号溝から切られていたことと大半がトレンチの外に広がるため、本来の規模は不明である。床面は硬化が著しく、焼土や炭化材などが土器と共に検出されたため住居跡と判断した。

遺　物（第267図）

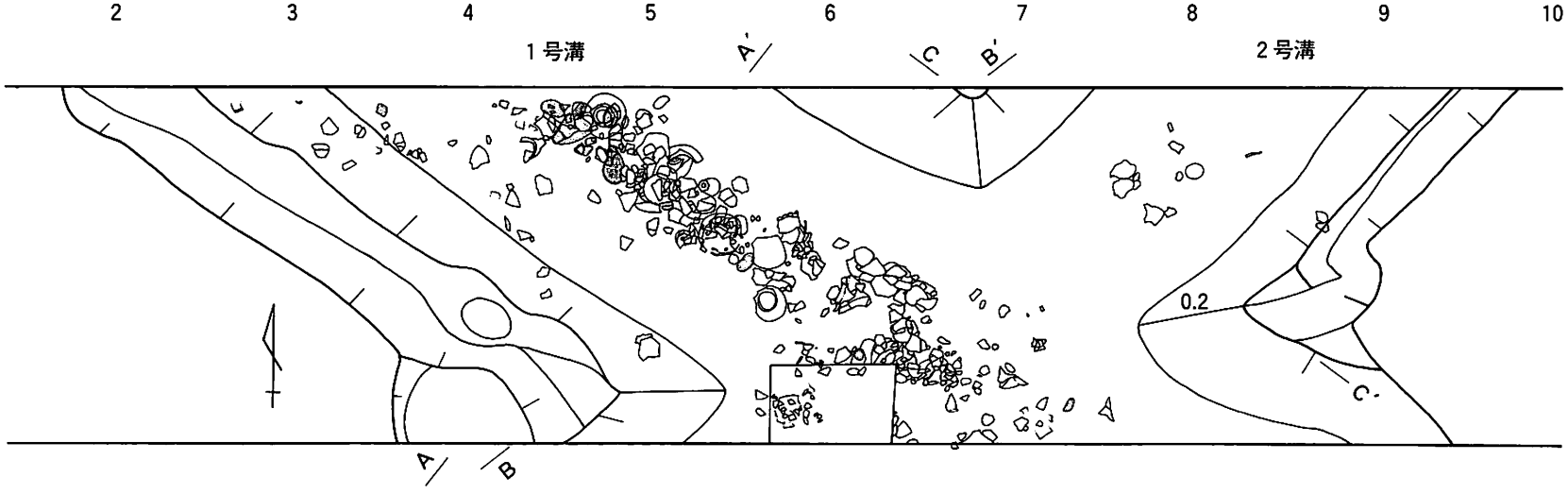
1（P－19、38）は小形の在地系甕の破片である。口縁部は雑で手捏風の仕上げで胴部にはハケ目を残している。2（P－17）も在地系甕の破片である。脚台のみであるが全面に煤の付着が著しい。3（P－27）は短頸壺の破片である。口縁部は直口し胴部は大きく膨らんでいる。内面に籾圧痕が見られる。4（P－13）も壺の破片であるが、これまでに見ることができなかった形状である。口縁部は大きく開くが短く、頸部から胴部へは縦方向の精緻なハケ目を施しながら直線的に広がっている。肩部には5本の沈線が巡らされている。5（P－14）は鉢の破片である。口縁部は水平に開き丸みを帯びた胴部へと続く。6（P－21、24、31）は高杯の杯部の破片である。口縁部は内傾しつつ立ち上がるが極めて短い。二次的に火を受けたのか淡い赤色に変色し胎土の状態も悪い。7（P－30）は焼成粘土塊である。円盤状の粘土を握り締めた後押し潰したような形状で、表面には皺が多く残されている。割れたり剥離した様な痕は見られず、1固体を為している。

（2）　2号住居跡（第268図）

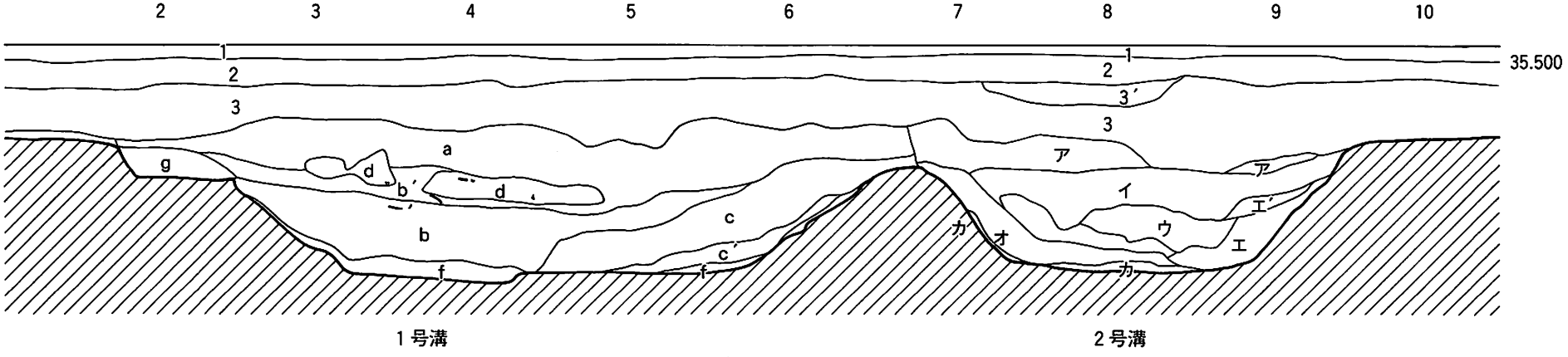
トレンチ西端から9.7～14mの範囲で確認された。1号溝から西側の壁を切られたうえ住居の大半がトレンチの南に広がるため本来の規模は不明である。主軸を東北東から南南西に向け、東側にはベッド状遺構が奥行1mで作られていた。床面は硬化が著しいが土器などの出土は少なかった。北側の壁は現状で3.9m、東側壁は1.5mを測る。



第268図　2号住居跡実測図



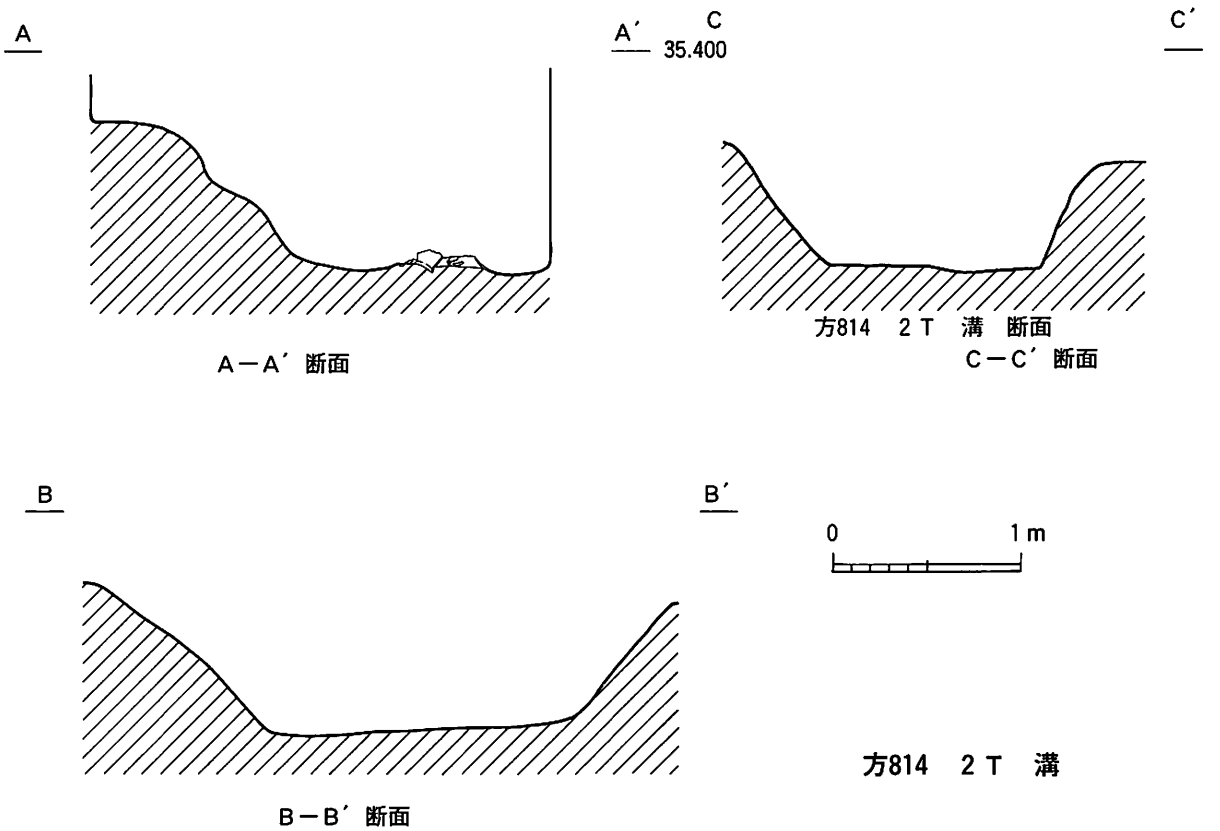
方814　2Ｔ　溝（1号・2号）



方814　2Ｔ　溝　断面層

第269図　1・2号溝実測図

0　1m



第270図　1・2号溝断面図

（3）　1号溝（第269図）

トレンチ西端から1.7～9.4mの範囲で確認されたもので、北西から南東に向かって伸びており、820トレンチの溝へと続いているようである。溝底の幅は1.6mであるが、溝上端部の幅は不明で約3.3m程度になるものと考える。溝の標高は南西上端部で35.06m、下端部では東端で34.16m、西端で34.29mになり、東から西に向かって低くなっていた。とくにここでは2号溝と交差しており土器の出土状況は1号溝に沿うように2段階に堆積して出土している。

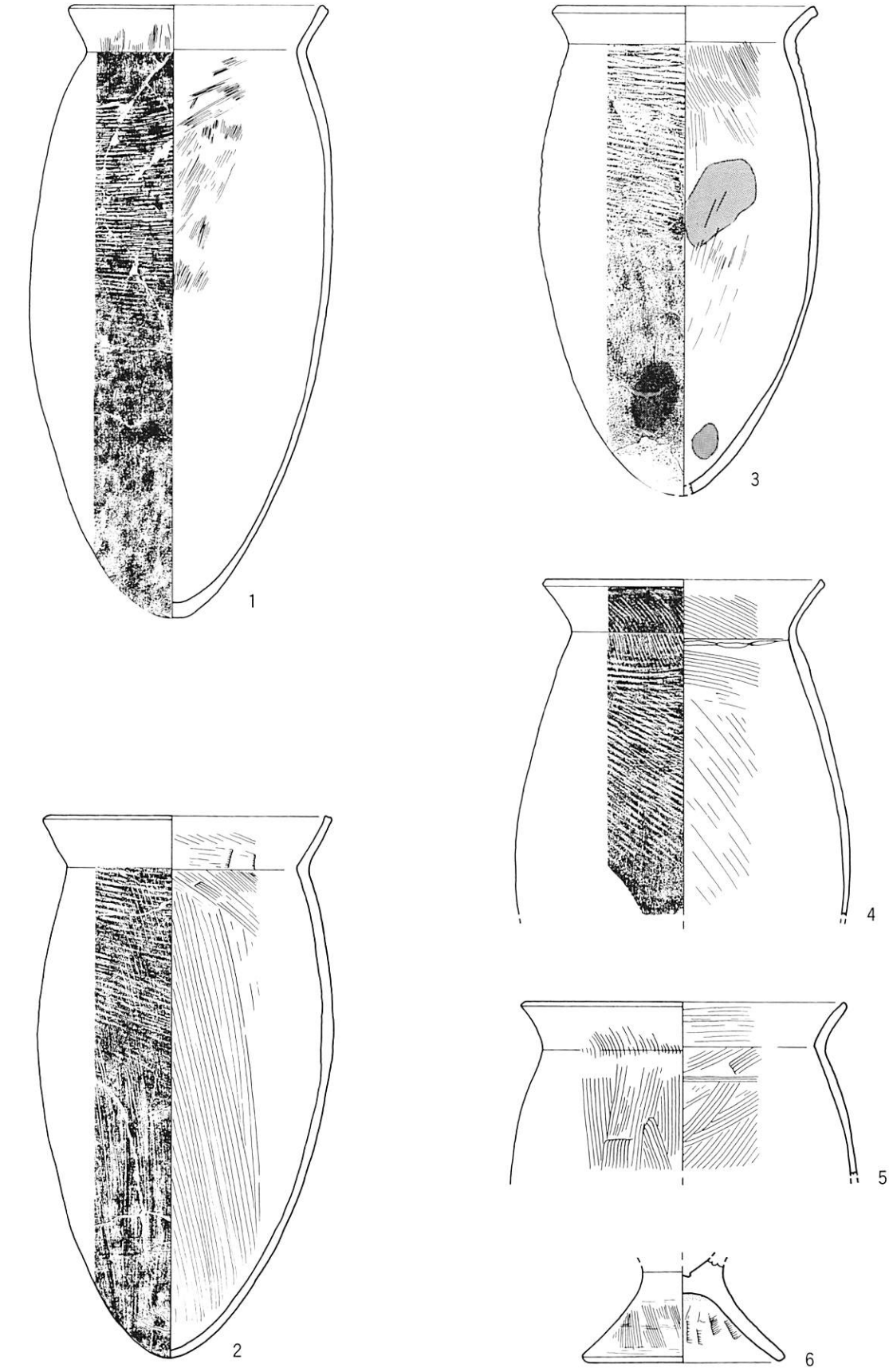
このことから判断すると2号溝が古く1号溝が新しいかの様であった。同時に出土した土器を観察すると、在地系甕で長胴丸底の表面にタタキ目を施しており、外来系甕を共伴していなかった。これと同時期になるのが第7次調査で検出された溝（Aコープ大道支所）の第3期の遺物であった。

遺　物（第271～273図）

土器は第1段階として溝底に張り付くように破壊されたものが並んで出土しており、第2段階は溝埋没過程で完形品に近い土器が廃棄されている。

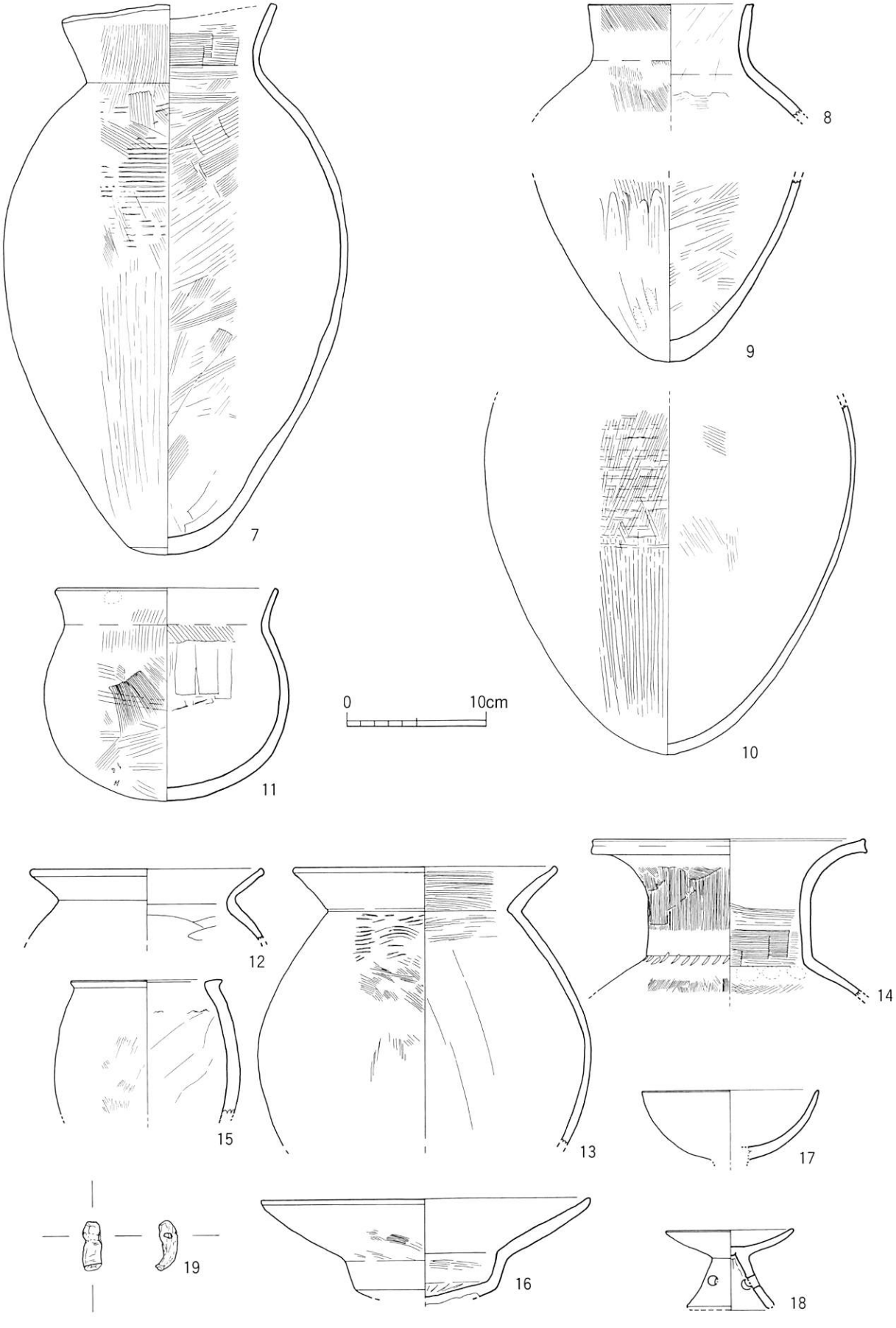
第1段階の遺物（下層）

1（P－112、116、135）は在地系甕である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、胴部は張りが少なく最大径は器高の中位に配している。底部は丸底で砲弾形を呈している。器面はタタキ目で仕上げており、全面に煤の付着が著しい。2（P－118、121）も在地系甕である。1と同様口縁部が内湾気味に立ち上がり、胴部は張りが少なく最大径は器高の中位よりやや上部に配している。底部は丸底で砲弾形を呈している。器面はタタキ目で仕上げており、全面に煤の付着が著しい。3（P－121、122）も在地系甕である。口縁部は外反気味に立ち上がり、胴部は張りが少なく最大径は器高の中位よりやや上部に配している。底部は丸底で砲弾形を呈している。器面はタタキ目で仕上げており、全面に煤の付着が著しい。4（P－113、135）も在地系甕である。1と同様口縁部が内湾気味に立ち上がり、胴部の中位より下を欠いている。底部は丸底の可能性が高い。器面はタタキ目で仕上げており、全面に煤の付着が著しい。5（P－131）も在地系甕である。である。胴部上位以下を欠いているが脚台の可能性が高



第１段階の遺物

第271図　１号溝出土遺物実測図



第272図　1号溝出土遺物実測図

い。6（P－120）は在地系甕の脚台である。7（P－49，118，120）は壺で第1段階の破片と第2段階の破片が接合したものである。口縁部は直線的に開き、口唇部はやや不整形に仕上げている。胴部は細長く底部は小さな丸底である。器面調整は口縁部は縦方向のハケ目、胴部中位まではタタキ目の後に斜めのハケ目、下位にはヘラによるナデ調整で仕上げている。8（P－132）も壺の口縁部の破片である。口縁部は直口しており、口唇部も水平に仕上げている。9（P－126）も壺である。胴部下位のみの破片である。10（P－120，125）も壺の破片で胴部中位以下のみである。底部は小さな丸底であるが、器面の剥離が著しい。胴部器面は粗いタタキ目の後縦のハケ目で仕上げている。内部は使用段階での器面剥離がひどい。11（P－116、117）は鉢である。口縁部は短く立ち上がり、頸部のくびれは緩やかで、胴部の張りも小さい。底部は平底に近いが僅かに丸味を帯びている。胴部器面に皺が多く残されている。

第2段階の遺物（上層）

12（P－45）は外来系甕口縁部の破片である。口唇部を僅かに摘みあげている。13（P－59、下層一括）も外来系甕の破片である。下層出土の破片と接合しているが多くは上層で出土したものであるのでここで取り扱った。12同様口唇部の摘み上げが見られ、肩部にはタタキ目を施し、その後にハケ目で仕上げている。胴部内面にはヘラ削りで仕上げている。14（P－60、61）は壺の口縁部で肩部以下を欠いている。口縁部は大きく開き頸部には刻み目を施している。器面は細かなハケ目で仕上げている。15（P－48）は鉢の破片である。底部を欠いているが、口縁部は短く外側に摘み出し、口唇部は水平である。胴部の張りはなく底部へと続いている。あたかも朝鮮半島からもたらされた資料に類似性を求めることが出来る様である。16（P－55）は脚部を欠いた高杯である。口縁部は大きく内湾気味に開き、杯部は小さいが頸部が垂直に立ち上がる。17（P－58）は脚付き鉢であるが脚部を欠いている。18（P－59）も脚付き鉢であるが小形の高杯とも言えそうである。19（P－42）は土製の勾玉である。作りは粗く、先端を欠いている。

（4） 2号溝（第269図）

北東から南西に向かって伸びており1号溝とほぼ直角に交差する溝である。トレンチ西端から4.5～9.7mの範囲で長さ4mを確認できた。

この溝には遺物が少なく僅かに数点が出土しているに過ぎなかった。したがって1号溝にのみ土器を廃棄し2号溝には廃棄していない状況を作り出している。

土層図（第269図）では1号溝埋没後2号溝を掘り込んだ様にも見えたが、互いの溝の地層が埋没してゆく過程で生じる可能性も残しているため、明確には断定できなかった。

遺 物（第273図）

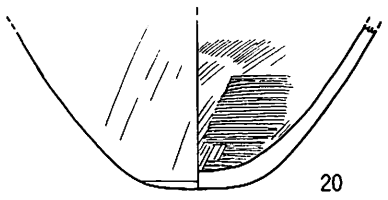
20（P－106）は溝の底から出土した壺の底部である。胴部中位から上を欠いているため、形態は不明である。21（P－144）は南壁から出土した在地系甕の脚部である。胴部との接合面で剥離し、脚の中央に円形の粘土を栓するように詰めており土器製作状況が理解できる。22（P－71）は溝の上面から確認された鉢の破片である。

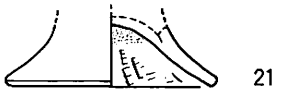
（5） 遺構に伴わない遺物（第273～275図）

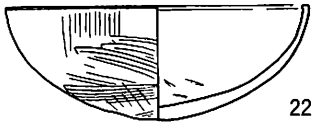
23～26はトレンチ西端から東へ14～15mの範囲でまとまって出土した。2号住居の北東に当たるが遺構の確認はできずここで取り扱った。

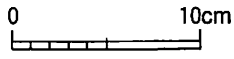
23（P－78、80、93、95，100、102）は大形の甕であるが方保田東原遺跡では極めて少ないタイプで北部九州地域からの持ち込みである。口縁部は僅かに外反し口唇部には刻み目を施している。胴部中位よりやや上に最大径を配し、底部は平底である。器面はハケ目調整で一部にヘラ削りが見られる。表面はかなり煤が付着し使用状況が理解できる。24（P－98、99、78）は在地系甕である。脚部を欠いているがくびれは小さい。口縁部は短く胴部の張りは中央やや上で器面はハケ目で仕上げている。25（P－75）も在地系の小形の甕である。口縁部に最大径を配し短く外反している。胴部は直線的で張りがなく底部は脚台である。胴部表面は煤が付着し脚台にはまったく見られない。使用方法を考察する材料といえよう。26（P－96）は完形の器台である。比較的小形であるが全体に不整形で手作りの雰囲気を醸し出している。

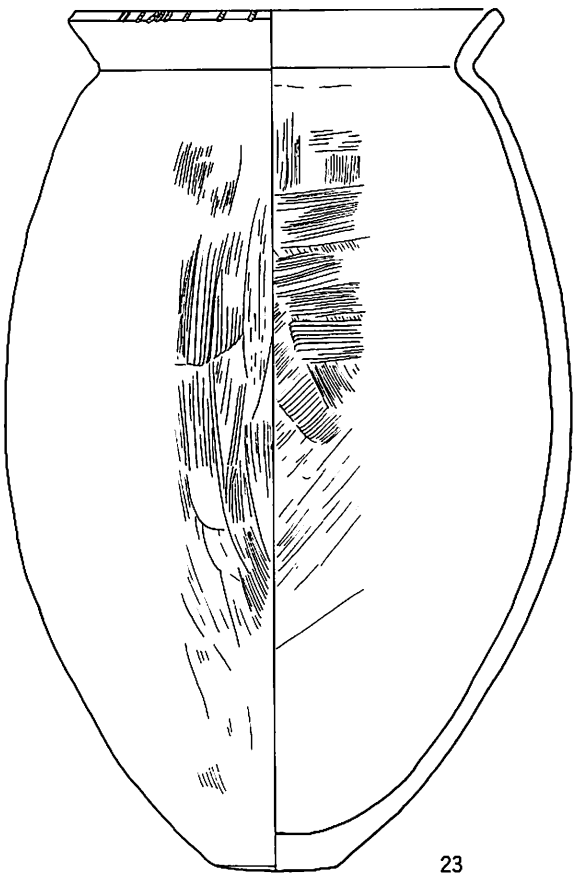
27（P－72－2）はトレンチ西端から東へ11～12m



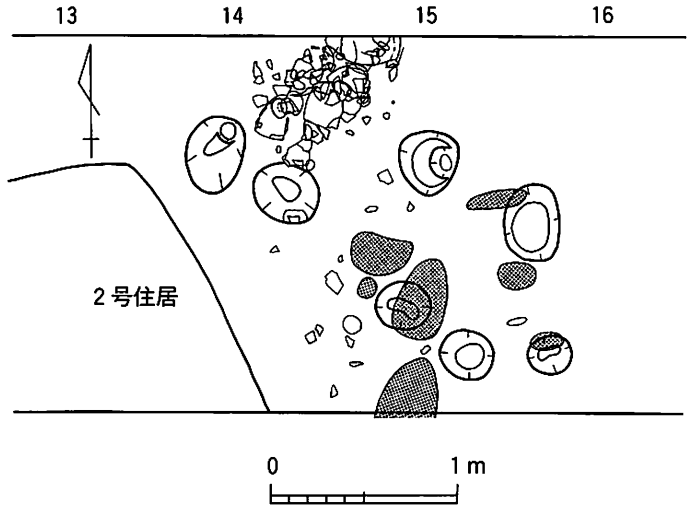








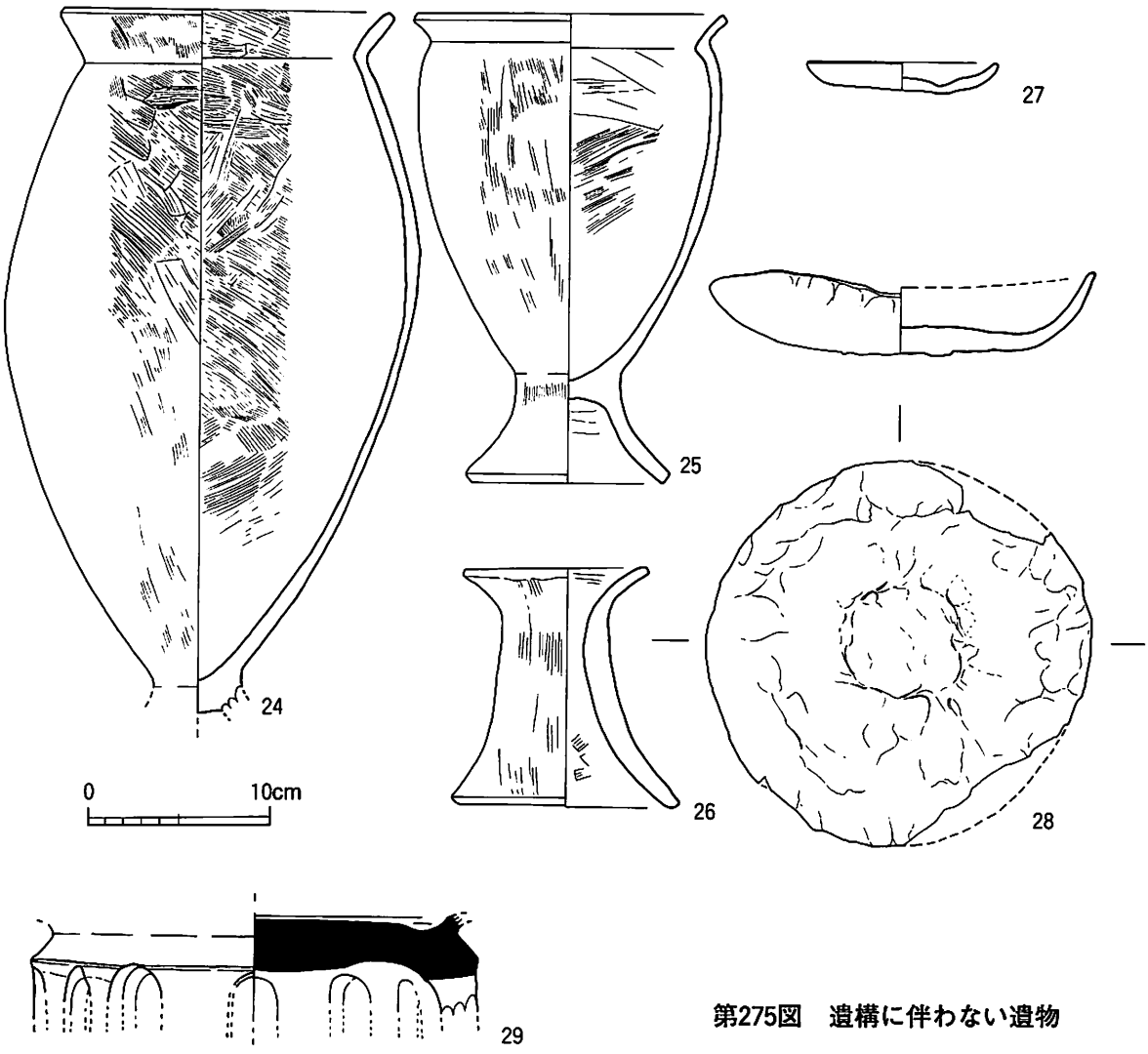
第273図　2号溝出土・遺構に伴わない遺物実測図



第274図　遺構に伴わない遺物出土状況図

の範囲で出土した土師器の皿である。2号住居の北側に位置するが遺構は確認できなかった。類似資料として大道小学校と鹿本農協大道支所から出土している土師器がある。28（P－101）はトレンチ西端から東へ14～15mの範囲で23～26が出た場所の南側から出土した台付き鉢である。手捏土器の最たるもので、これまでに見られないものである。底部は高台状に作っているが押し潰されて平底を呈している。口縁部もいびつで指の痕や指紋が残され、粘土の張り合わせや皺も明確に見られる。胎土や焼成から23～26と同じ時期であろう。

29（P－1）は須恵器の円面硯である。円面硯の中でも圏足硯に属し全体の3分の1程欠いているが脚部には透かしを14個配していたものと思われる。硯面は全面に墨が付着しているが陸部は低く、逆に海部は浅い作りになっている。外提は欠損しているため高さは不明である。ただ、外提の欠損状況として波状の剥離痕が見られ意識的に破損したことを物語っている。



第275図　遺構に伴わない遺物

3　第３トレンチ（第276図）

国土座標　南北Ｘ＝－575～－577

東西Ｙ＝－25,813.5～－25,849.5

第２トレンチの東に２ｍの間隔を開けて東西方向に長さ34ｍのトレンチを設定した。このトレンチでは大型の住居２軒、溝状遺構１本、土坑１基、それに古代の柱穴群が検出された。

（１）　１号住居跡（第277図）

トレンチ西側から2.4～10.7ｍの範囲で確認された大型の住居である。トレンチ内で２ｍ程度しか壁が見られないが、壁の間隔は実に８ｍを測る大型の住居である。

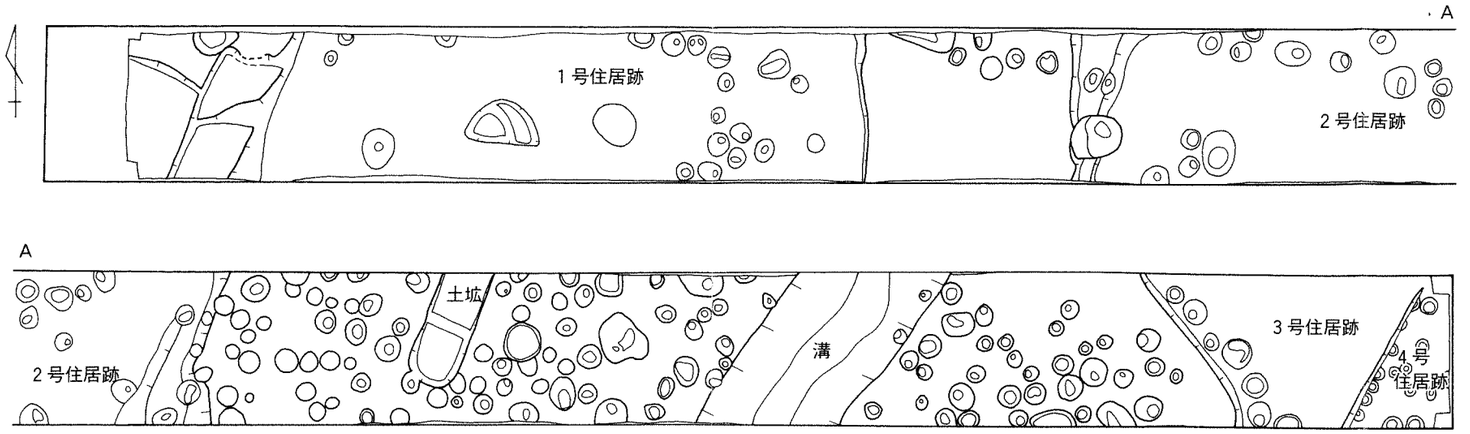
床面は硬化が顕著でほぼ中央に炉を配し、周囲には土器片が散在していた。

遺　物（第278図）

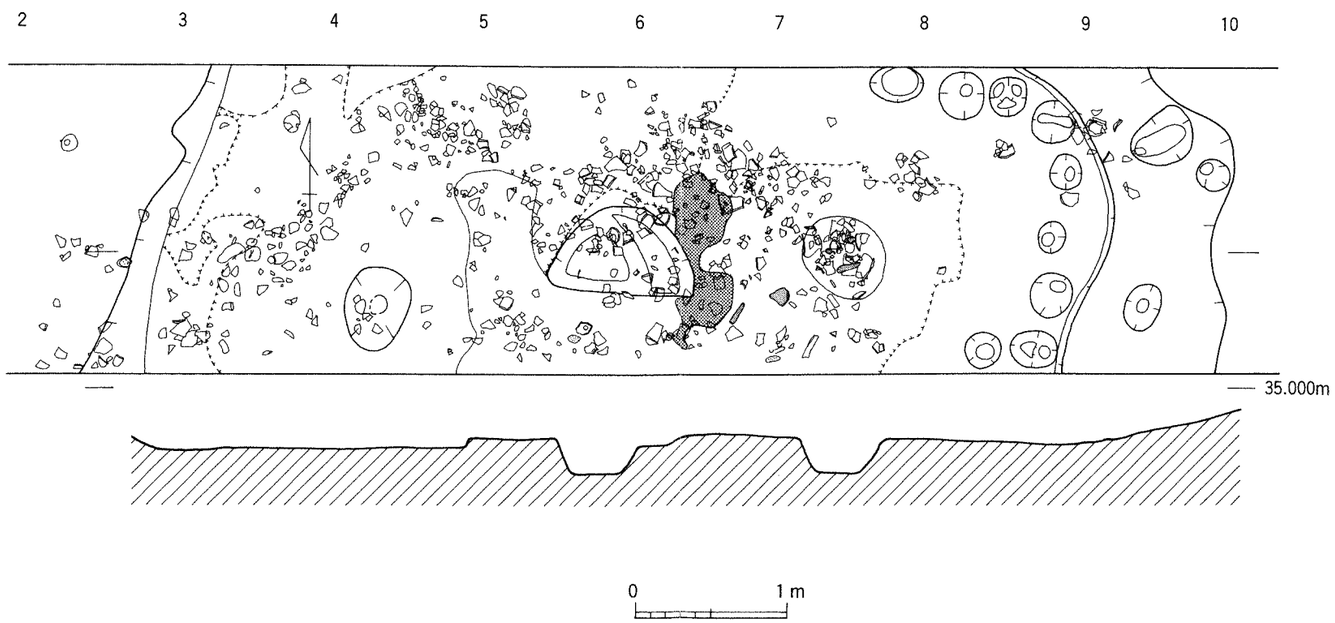
１（Ｐ－97、98、193）は在地系甕の破片で、胴部下位から下を欠いているが底部は脚台になる。器面は表裏ハケ目で仕上げており、焦げと煤の付着が著しい。２（Ｐ－99、191、197）も在地系甕の破片で、胴部中位から下を欠いているが底部は脚台になる。器面は表裏ハケ目で仕上げているが、１とは若干方向が異なっている。煤と焦げの付着も著しい。３（Ｐ－244）は在地系小形甕の破片で、胴部中位から下を欠いているが底部は脚台になる。器面は表裏ハケ目で仕上げている。４（Ｐ－102、242）も在地系甕の破片で脚台である。５は器台である。

（２）　２号住居跡（第279図）

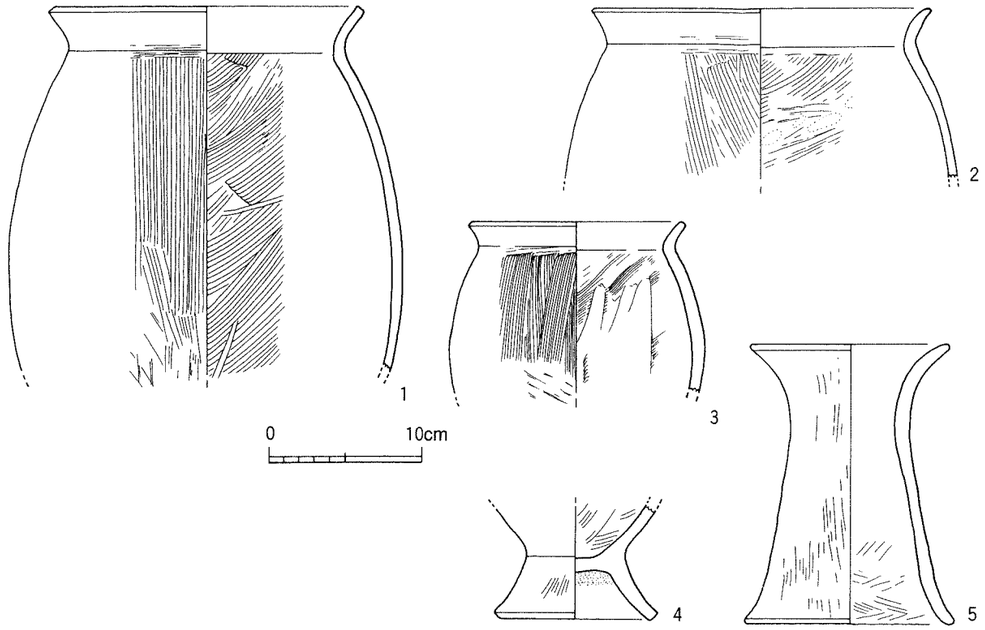
１号住居跡の東５ｍの位置に在り、トレンチ西端か



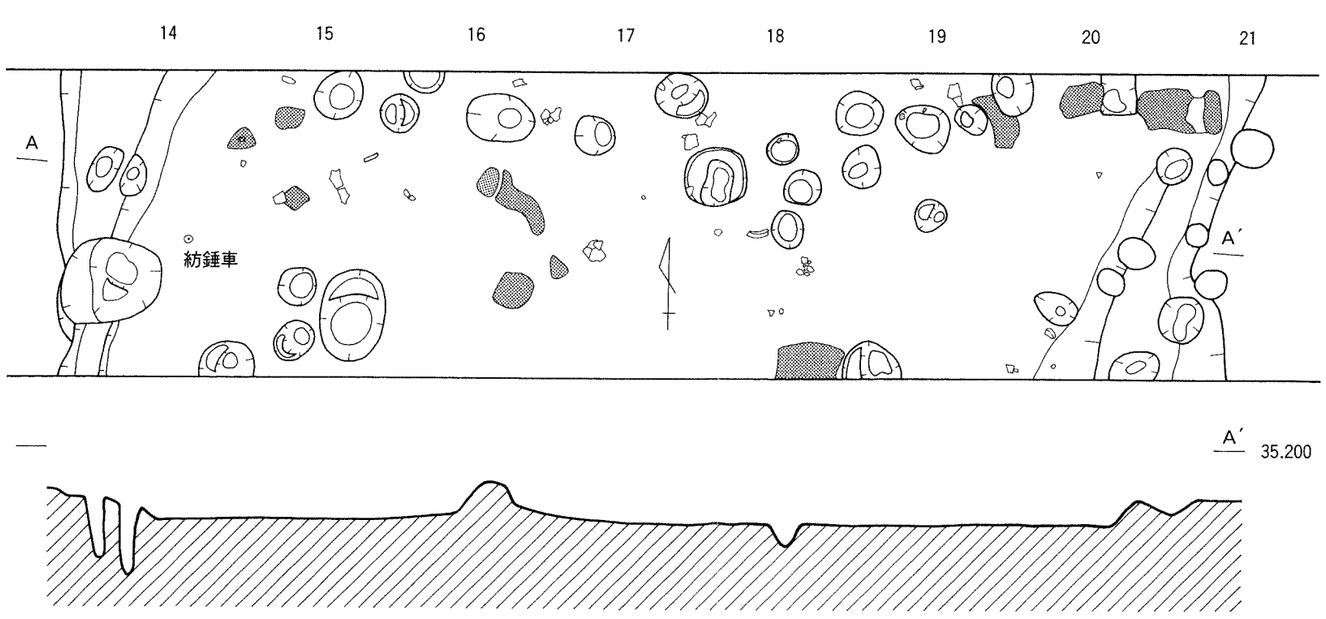
第276図　方保田814番地　第 3 Tr.　遺構配置図



第277図　1 号住居跡実測図



第278図　1号住居跡出土遺物実測図



第279図　2号住居跡実測図

ら13.4～21mの範囲で確認された住居である。トレンチ内では北北東から南南西に向う壁が約２mの長さで確認されているが、壁の間隔は6.6mを測る大型の住居であった。

床面は硬化面が広がり焼土が数ヶ所で見られた。併せて土器片も散在するように出土した。なお、西壁近くから紡垂車１点が出土した。

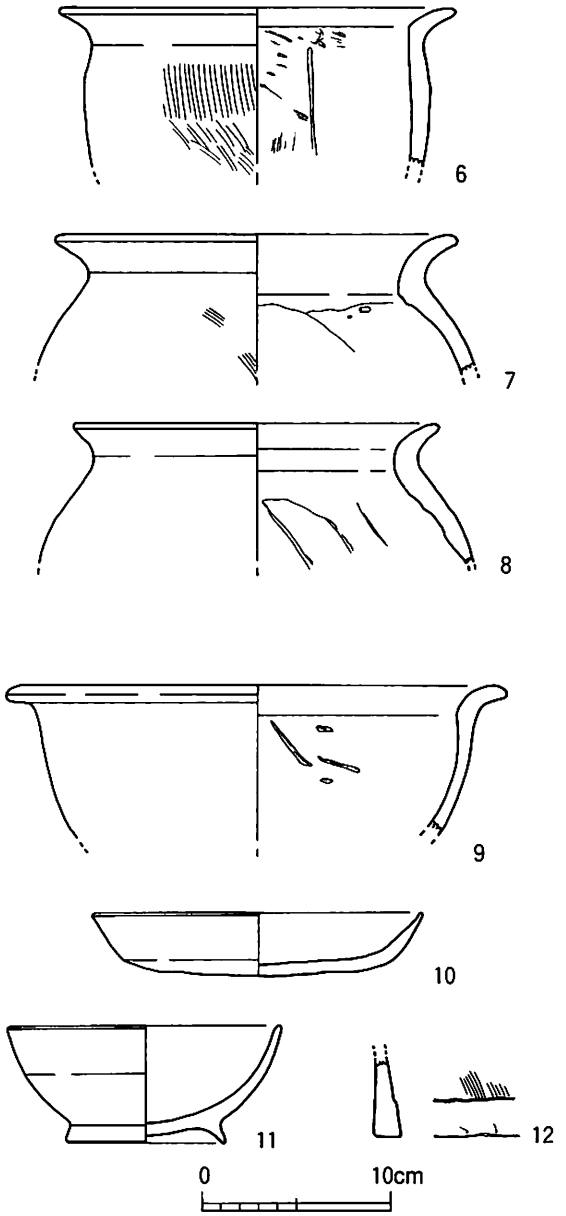
遺　物（第280図）

６（Ｐ－207）は土師器甕の破片で胴部中位以下を欠く。口縁部から大きく開き、器面は胴部外面を粗いハケ目で内面はヘラ削りで仕上げている。７（Ｐ－211）も８（Ｐ－200）も土師器甕の破片で胴部中位以下を欠いている。口縁部は大きく外反している。９（Ｐ－215、下層一括）は土師器の鉢の破片である。10（Ｐ－218）は土師器の皿である。全面にヘラ研磨を施している。11（Ｐ－253）は高台付きの碗である。内面は黒色を呈しており、全面ヘラ研磨で仕上げている。12（Ｐ－205）は薄いが移動式竈の破片であろう。

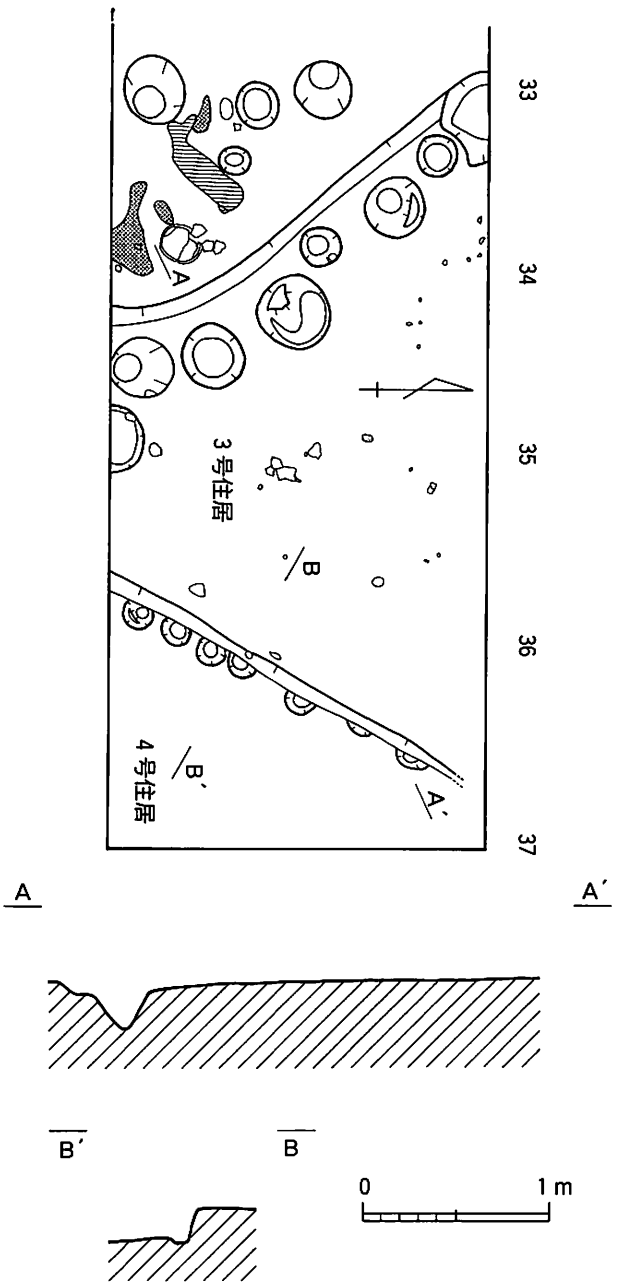
13は紡錘車である。

（３）　３号住居跡（第281図）

トレンチ東端に近く、西端から33～36.6mの範囲で確認されて住居である。壁のラインは押さえてみたが、



第280図　２号住居跡出土遺物



第281図　３・４号住居跡実測図

東側の壁は残すべき所を掘り下げた可能性が高い。

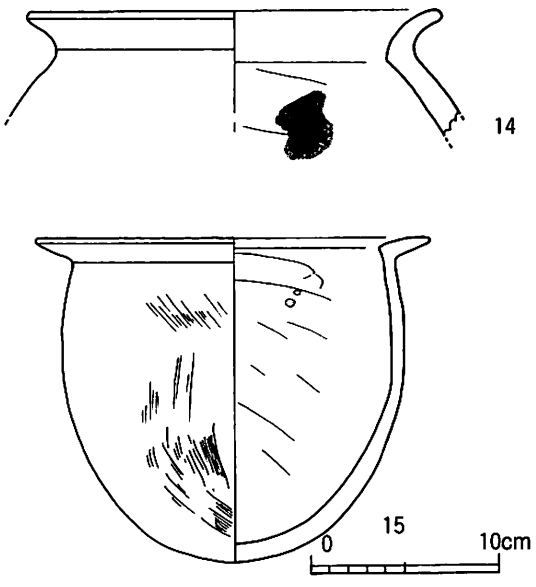
西側壁の外には竈を据えており、中には土師器の甕を支柱代わりに伏せていた。しかし竈と住居との関係が納得できない状況での検出であった。床面は全面に硬化面が広がり、土器片が散在していた。

遺　物（第282図）

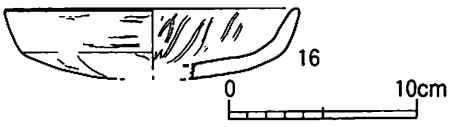
14（P－238）はは土師器甕の破片で胴部上位以下を欠く。口縁部から大きく開き、器面は胴部外面に赤色顔料を塗り、内面はヘラ削りで仕上げている。15（P－236）は竈の中に支脚の代用として使用されており口縁部を下に伏せるようにして出土した土師器の甕でほぼ完全な形で残っている。口縁部は水平に開き胴部の張りはない、底部は平底でやや丸みを帯びている。内面のヘラ削りは著しく、赤色顔料（酸化鉄）の付着も見られる。

（4）　4号住居跡（第281図）

トレンチ東端部に位置し3号住居跡を切っている。壁は明確に出たが床面は地山層に切り込んでおり硬化面は確認できなかった。床には浅い穴が点在していたが用途は不明である。



第282図　3号住居出土遺物実測図



第283図　4号住居出土遺物実測図

遺　物（第283図）

16（P－240）は土師器の杯の破片で全体の3分の1程度を残している。内外面をヘラ研磨で仕上げ、底部はへら削りの後に研磨している。

（5）　溝状遺構（第284図）

トレンチ東端に近く、西端から27.2～30.5mの範囲で確認された溝状遺構である。

北東から南西に向かって伸びており、813トレンチの溝から伸びてきたものと思われる。

溝は「V」字形の断面で、上端部幅1.65m、下端部幅0.4m、深さ0.8mを測り、東側に比べると西側の傾斜が緩やかになっていた。埋土も西側から流れ込んだ様に堆積しており、土塁の存在を示しているかのようであった。なお、出土遺物の多くは溝埋没後の廃棄に伴うもので破片が多く存在していた。

遺　物（第285図）

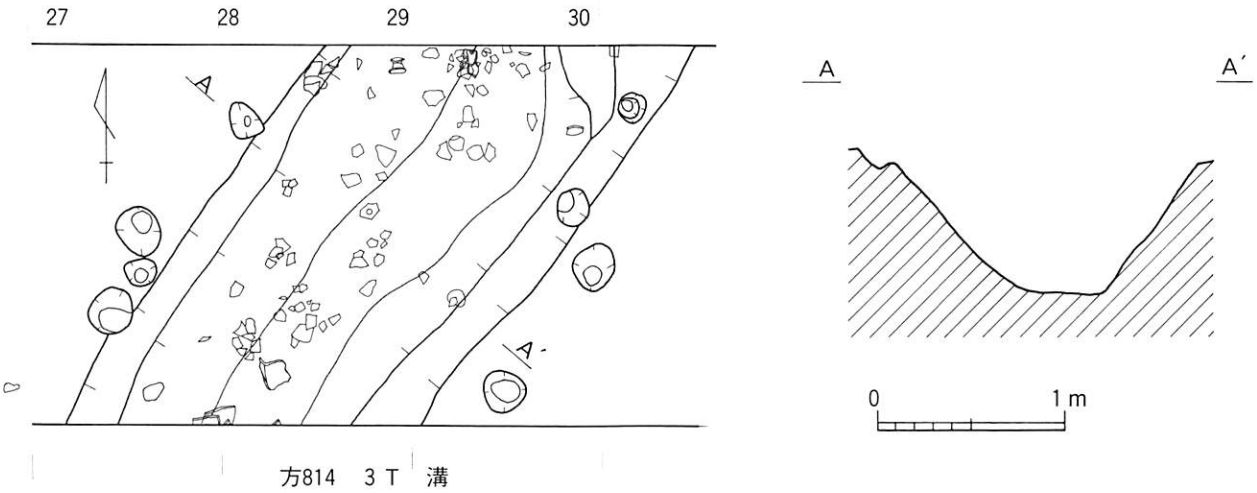
17（P－248）は壺の破片で肩から胴部にかけて残っている。特に肩部には櫛描き文を施し、上部に横線文、その下に波状文を巡らしていた。さらに波状文の起結部分が残されており、施文原体は巾21㎜の中に14本の櫛歯が残され、右回りに施文されていることが確認できた。また、一部に赤色顔料の付着を認めることができる。18（P－160、下層一括）も壺の破片で口縁部から胴部にかけて残っている。口縁部は短く立ち上がり、同部は丸みを帯びている。器面は粗いハケ目で仕上げているが、焼きが甘くもろい感じである。

（6）　土坑（第286図）

トレンチ西端から23.5～24.6mの範囲で確認された土坑である。長さは現長1.6mで2m近くになると思われる。幅は0.65m程度で、深さは0.4mであった。内部からは何ら遺物が出土しておらず、時期の決め手に欠き、併せて性格も墓か否かの断定に苦慮している。

（7）　遺構に伴わない遺物（第287図）

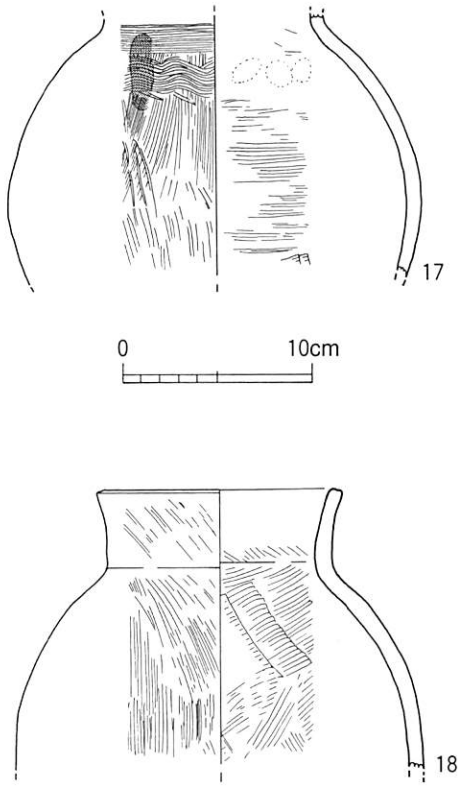
19（P－59、60、110）はトレンチの西側から出土した鉢である。手捏であるが、接合する破片の色がまったく異なっており、二次的に破損後の状況が異なった事によるものか、製作焼成で破損し火の受けた状況が異なった結果によるものか類例を調査しまとめとして



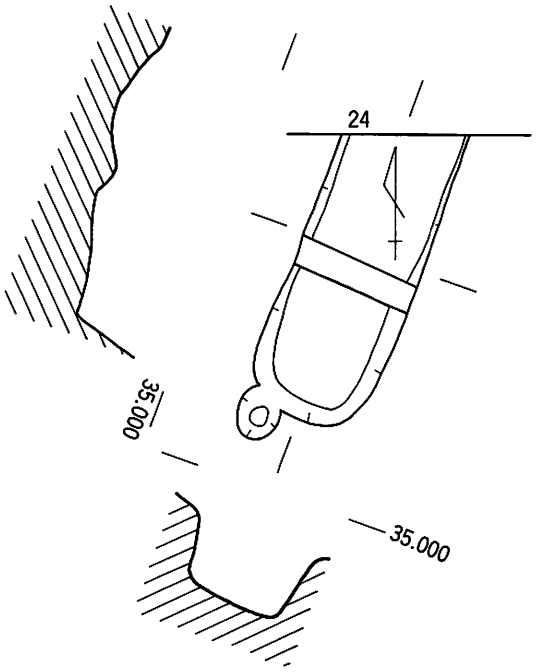
第284図　溝実測図

取り扱いたい。

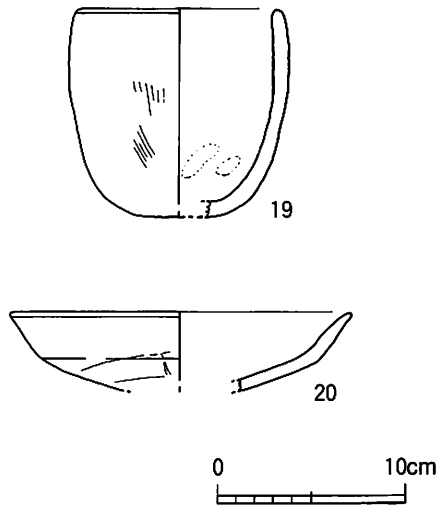
20（P－128）は土師器の杯である。内面はナデ調整で、底部はヘラ削りを施し全面に丹を塗っている。



第285図　溝出土遺物実測図



第286図　土坑実測図



第287図　遺構に伴わない遺物実測図

第３節　816・817番地の調査（第288図）

X＝－600～－602・Y＝－25,844～－25,893

814番地第２トレンチから南に25m離れて816番地と817番地に跨ぐ形であるが、東西に49mの長さでトレンチを設置した。遺構として住居跡６基、溝状遺構２本が確認された。

（１）　１号住居跡（第289図）

トレンチ西端から東へ２～８mの間に位置しているが、床面には数箇所の焼土と硬化面が確認できたが壁は確認できなかった。東側は２号住居跡によって切られている。

遺　物（第290図）

１（Ｐ－275）は在地系の小形甕の破片である。口縁部から胴部中位まで残り、底部を欠いているが脚台になる。器面は火を受け剥離が著しい。内面にはハケ目が明瞭に施されている。２（Ｐ－286）も在地系の甕の破片である。脚部のみであるが、粘土接合面での剥離が見られ、脚部の製作状況が理解できる資料である。くびれから上には煤の付着が見られる。３（Ｐ－280）は小形の鉢の破片である。表面には煤の付着が見られる。４（Ｐ－17）は外来系の器台である。脚部を欠いているが、作りは丁寧である。

（２）　２号住居跡（第291・292図）

トレンチ西端から東へ８～11.5mの間に位置している、北側と西側の壁は残っているが東側は切られていた。床はあまり硬化していないがプランの形態から住居跡とした。なお柱穴は掘り下げていない。

遺　物（第293図）

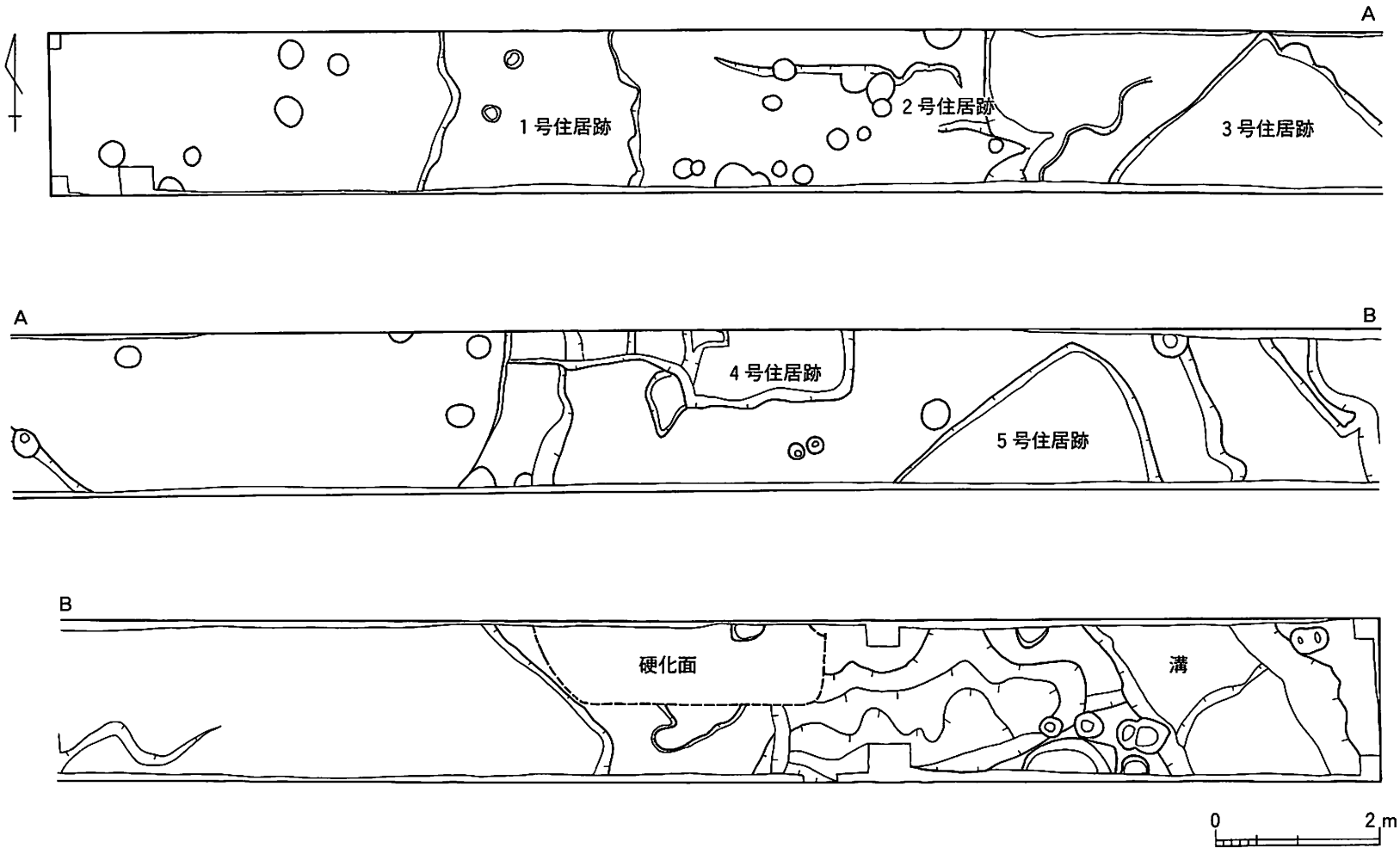
５（Ｐ－63）は須恵の杯である。底部にはヘラ描きの模様が見られる。

（３）　３号住居跡（第294図）

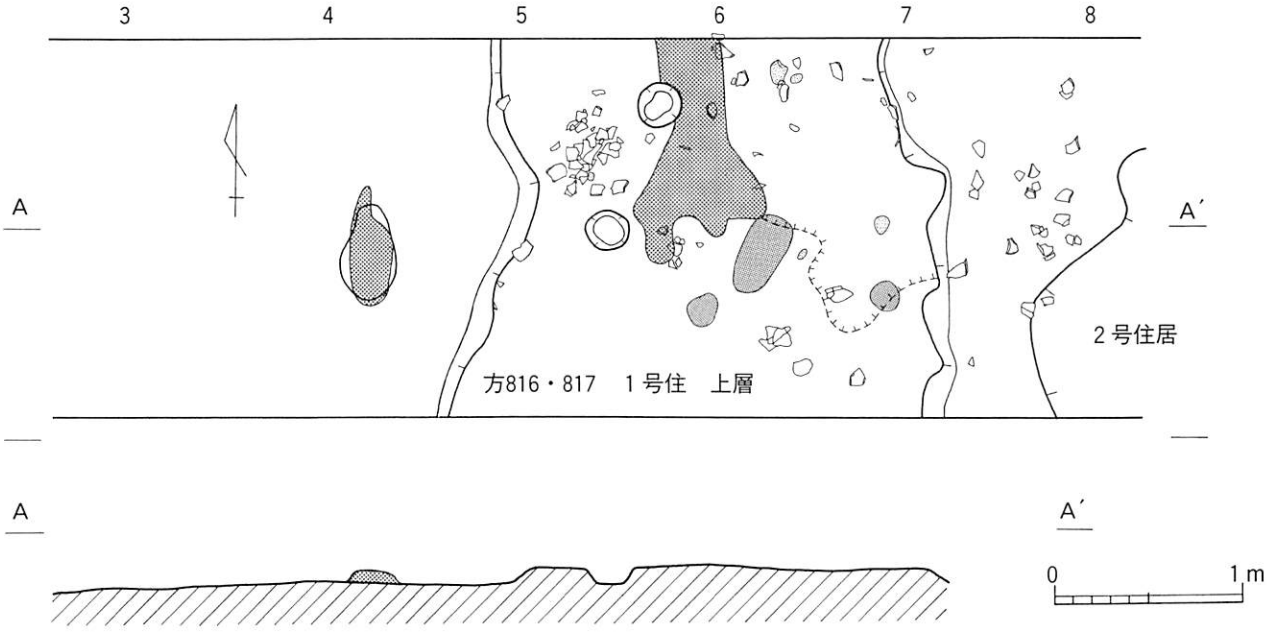
トレンチ西端から東へ13～17mの間に位置しており、住居跡の北側の隅が確認され北西の壁と北東の壁の一部が検出され、床面は硬化が著しい。

遺　物（第295図）

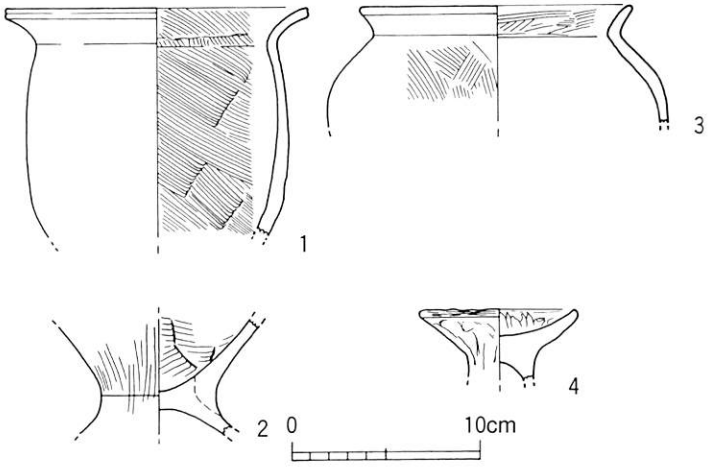
６（Ｐ－83）は土師器の甑の破片である。牛角把手の部分のみである。７（Ｐ－365）は須恵器の杯蓋の破片である。つまみを欠き、焼成段階の歪と杯蓋受けの付着が見られる。



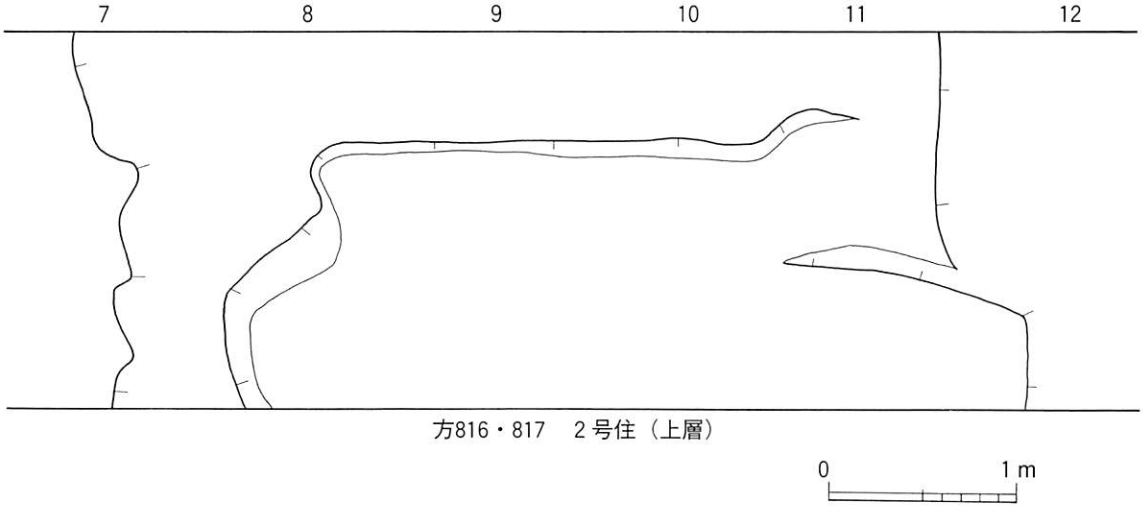
第288図　方保田816・817番地　遺構配置図



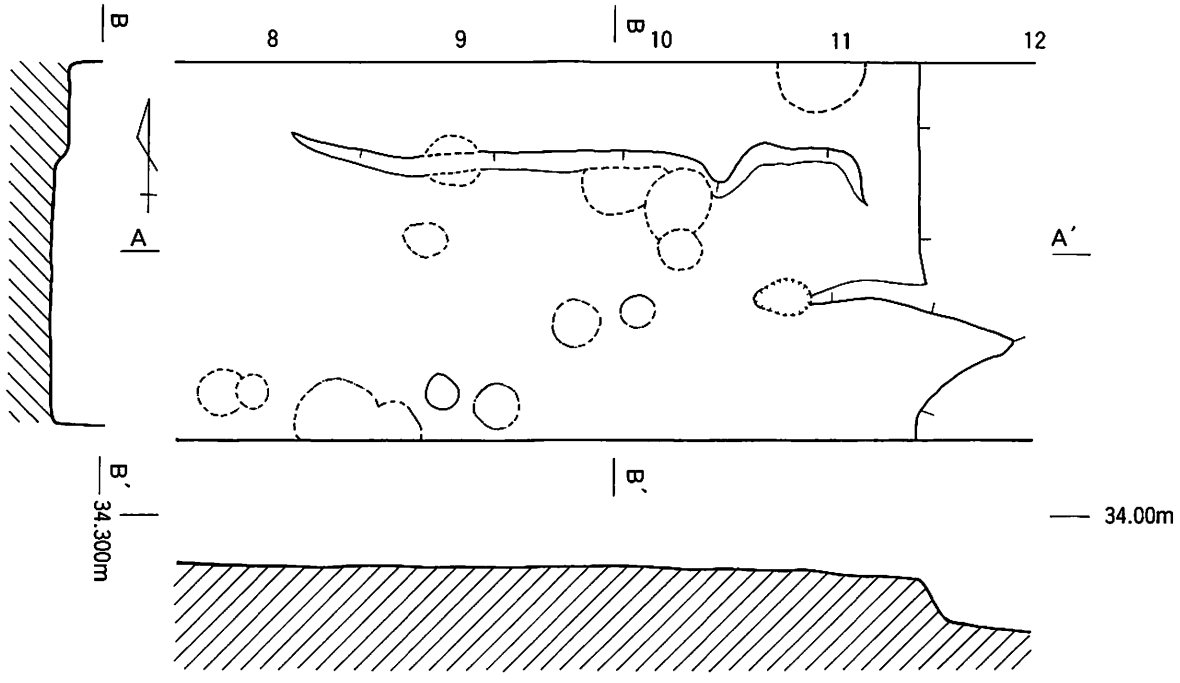
第289図　1 号住居跡実測図

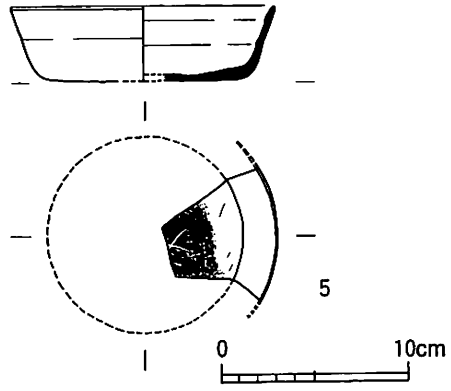


第290図　1 号住居跡出土遺物実測図

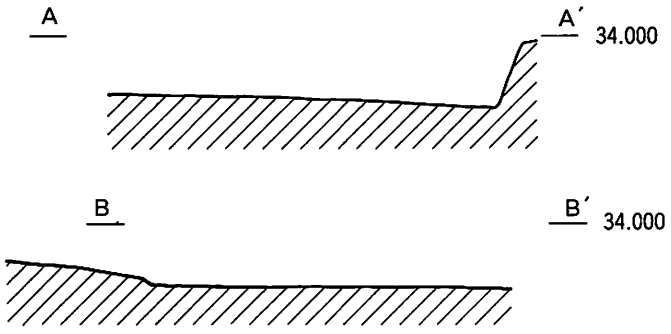


第291図　2 号住居跡実測図（上層）

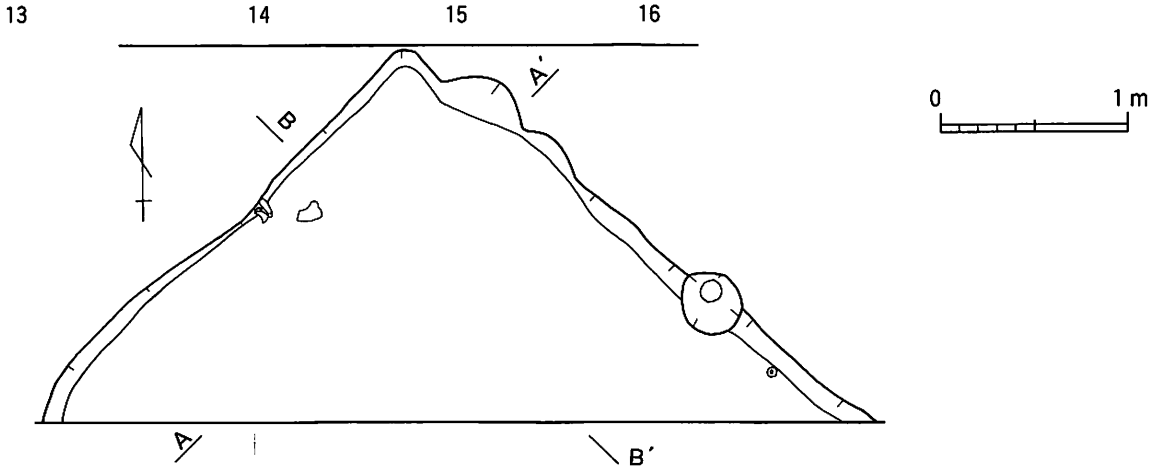




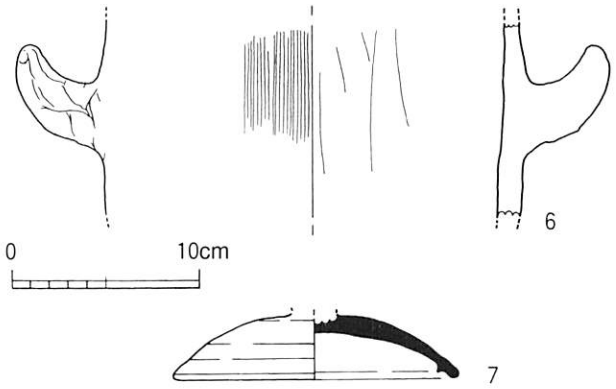
第293図　2号住居跡出土遺物実測図



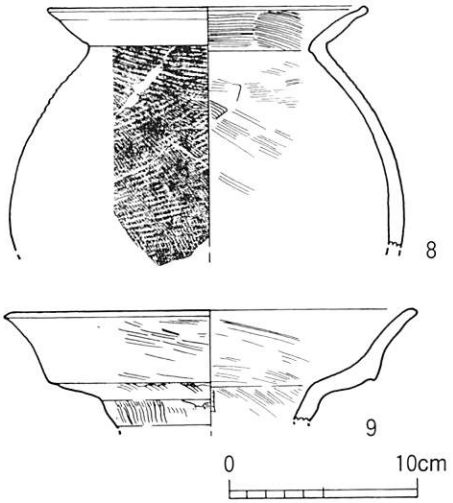
第292図　2号住居跡実測図（下層）



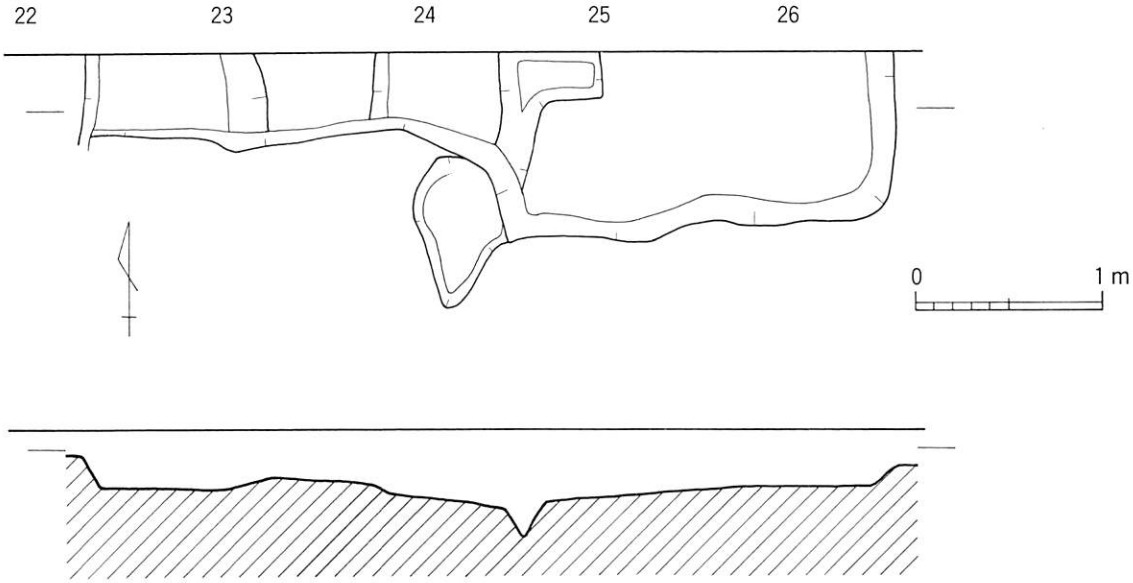
第294図　3号住居跡実測図



第295図　3号住居跡出土遺物実測図



第297図　4号住居跡出土遺物実測図



第296図　4号住居跡実測図

（4）　4号住居跡（第296図）

トレンチ西端から東へ22.3～26.5mの間で確認された。トレンチと平行に南側の壁を検出できた。床面は壁際のためか一部で硬化面は見られた程度であった。中央部で土器の出土を見た。

遺　物（第297図）

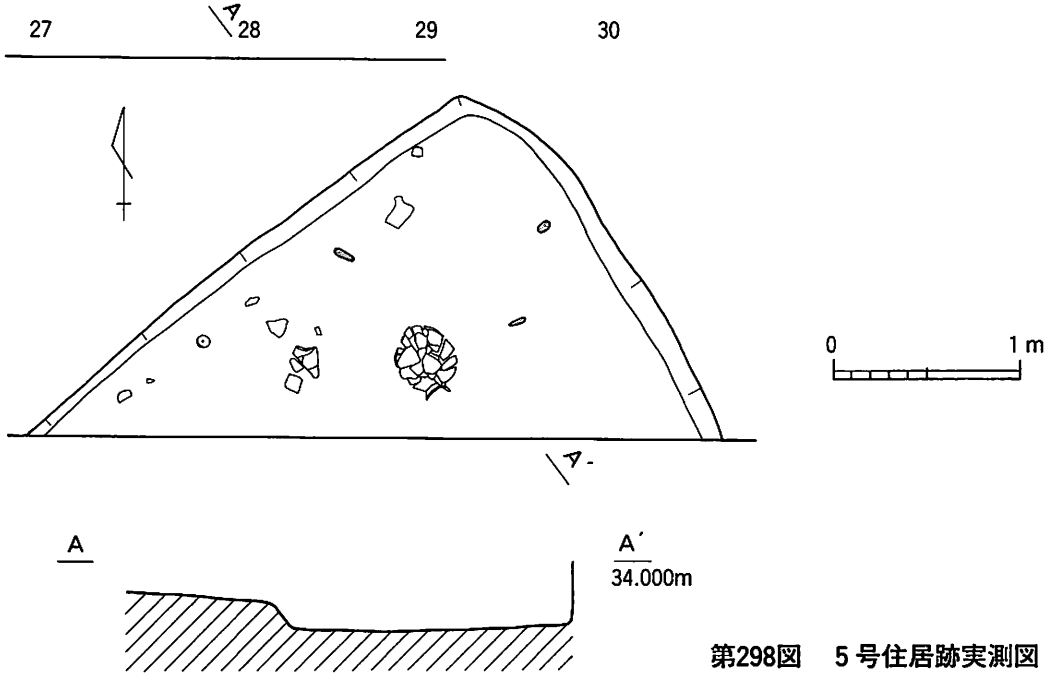
8（P－309）は外来系の甕の破片である。庄内系で表面にはタタキ目とハケ目で仕上げている。煤の付着が著しい。9（P－308）も外来系の壺の破片である。口縁部から頸部のみであるが、焼成がよく器面に光沢が見られる。

（5）　5号住居跡（第298図）

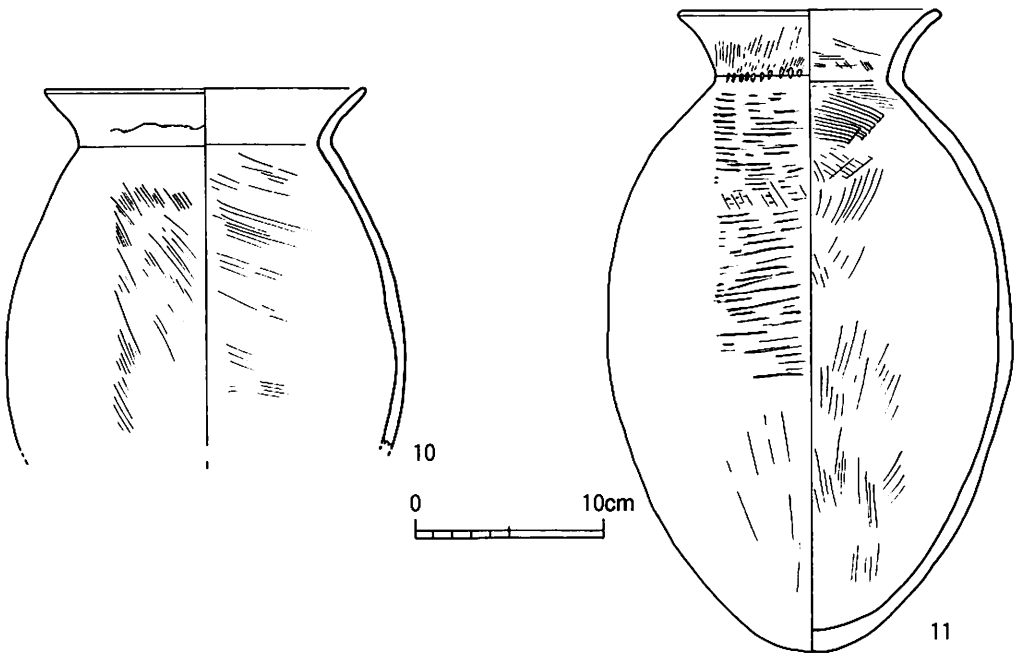
トレンチ西端から東へ27～30.5mの間に位置しており、住居跡の北西の壁と北東の壁の一部が検出され、東側の壁には焼土が見られた。床面には壺が（P－382）がつぶれる様に出土している。

遺　物（第299図）

10（P－373，374）は外来系の甕の破片である。胴部中位以下を欠いている。口縁部外面には粘土接合面を残している。器面にはタタキ目をハケ目で掻き消している。煤の付着が著しい。11（P－382）は壺である。短い口縁部が外反しつつ開き、頸部には刻み目を



第298図　5号住居跡実測図



第299図　5号住居跡出土遺物実測図

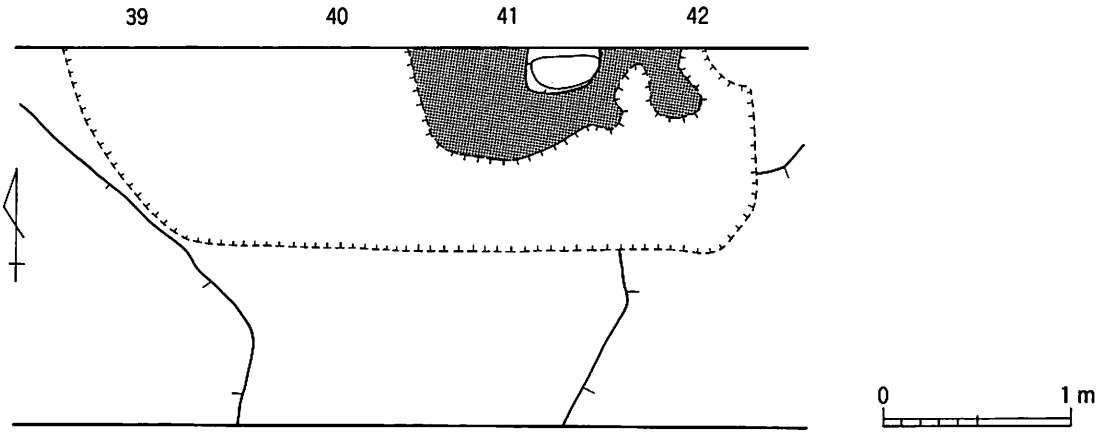
施している。胴部は長く中位までタタキ目を施し、下位はヘラ削りで仕上げている。

（6）　6号住居跡（第300図）

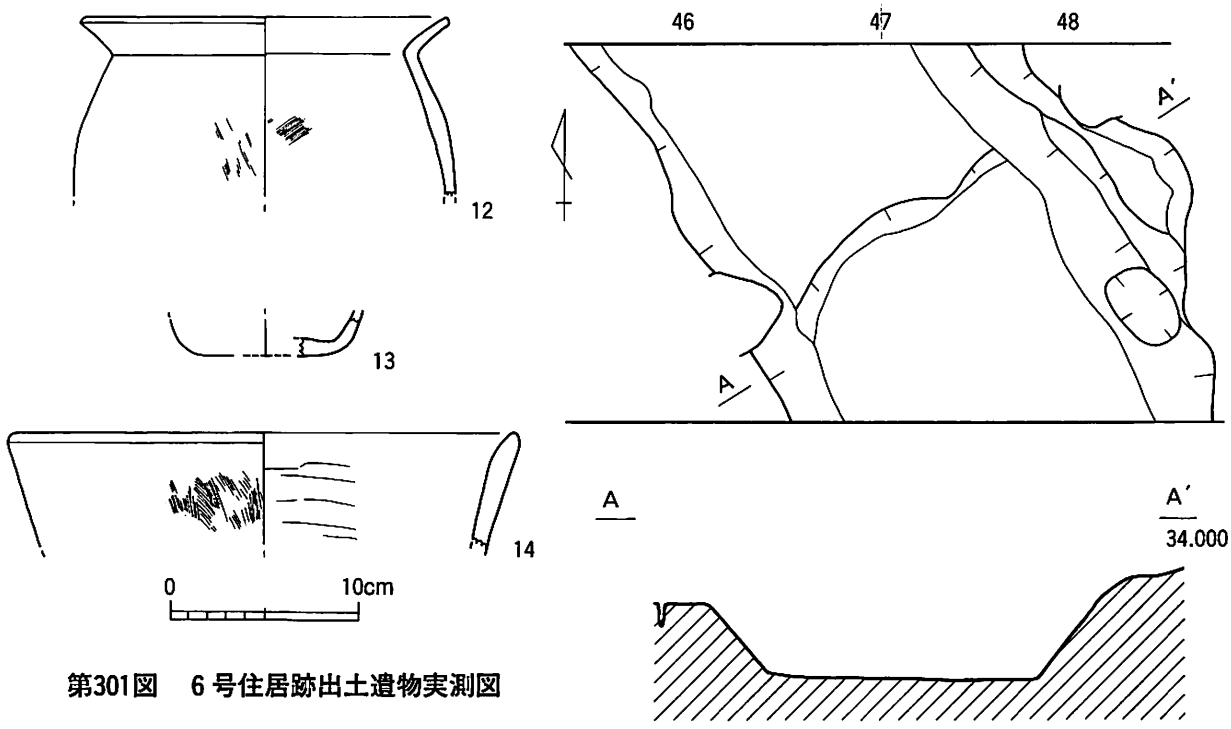
トレンチ西端から東へ38.7～40.3mの間で確認されたもので住居跡の壁は確認できなかったが、床面の硬化した状況と焼土の広がりが見られたため住居跡とした。

遺　物（第301図）

12（P－346）は土師器の甕の破片である。口縁部はナデ仕上げで、表面はハケ目とナデ仕上げである。13（P－213）は土師器の皿である、底部はヘラ削りである。14（P－213）も土師器で甑か鉢の口縁部である。



第300図　6号住居跡実測図



第301図　6号住居跡出土遺物実測図

第302図　溝実測図

（7）　溝状遺構（第302図）

トレンチ東端で確認されたもので、西端から東へ44.4～48.7mの位置に在る。北西から南東に向って延びており、814番地第2トレンチで検出された交差する溝へと続き、さらに、820番地西端の溝にほぼ一直線で延びてゆくものと考えられる。また、813番地のトレンチと814番地第3トレンチで検出された溝の延長がこの溝の南東側で交わるものと考えられる。上部最大幅2.45m、下部幅1.4mで長さ3mにわたり確認できた。床面には高杯等土器片が僅かに残っていたが、遺物の量としては少ないほうである。なお、床の中心で段落ちが見られ、溝掘削段階での分担の違いの様に南東部が低く掘られている。

遺　物（第303図）

14（P－252）は溝埋没後の廃棄によるものである。土師器の高台付き碗で、底部には十文字に線刻を複数書いている。胎土には鉄砂粒を多く含んでいる。15（下層一括）は外来系の甕で口縁部を欠いている。器面はハケ目調整で、内面はヘラ削りである。16（下層一括）は壺である。胴部にはタタキ目の後ハケ目で仕上げており、下位には穿孔をしている。さらに、黒く

籠状の痕跡を残しており、使用方法の検討に最適の資料である。胴部内面はハケ目とヘラ削りが著しい。17（P－390、下層一括）は鉢の破片である。18（下層一括）も鉢である。半分しかないが、口縁部から底部まで見られる。19（P－390）は高杯である。口縁部と脚裾部の一部を欠く程度で、ほぼ原形を留めている。口縁部は長く、仕上げも良好である。脚部には4個の円孔を配している。20（P－385）も高杯であるが、杯部のみで、脚部を欠いている。杯部は外来系のものである。21（P－387）はちくわ状の土錘である。川での漁労具としては大形の土錘である。

22（一括）は外来系の小形甕の破片である。器面は火を受けて淡赤色に変色している。23（一括）は脚部を欠いている鉢である。



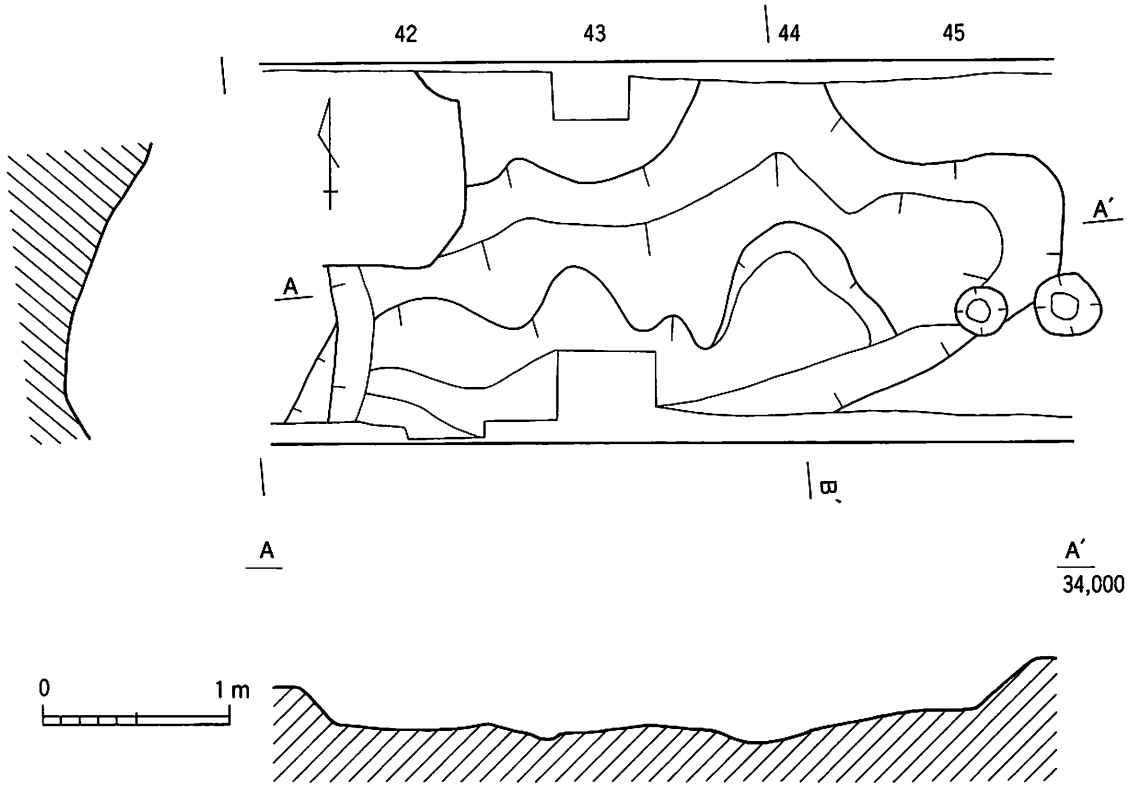
第303図　溝出土遺物実測図

（8） 不整形土坑（第304図）

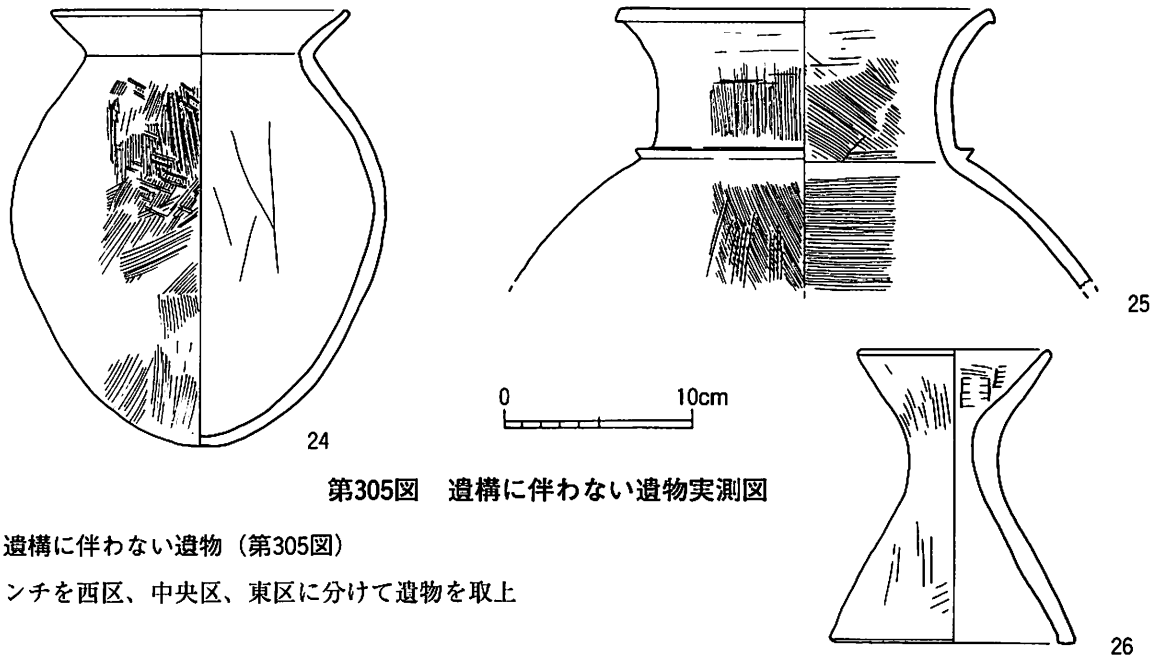
6号住居跡の下から溝状遺構の間でトレンチ西端から東へ41.3～45.5mの位置に在る土坑である。

平面が波状に伸びて長方形に近い形状になり、下には3段に掘られていた。床面は硬く締まっていた。

どのような性格の遺構であるかは不明である。



第304図　不整形土坑実測図



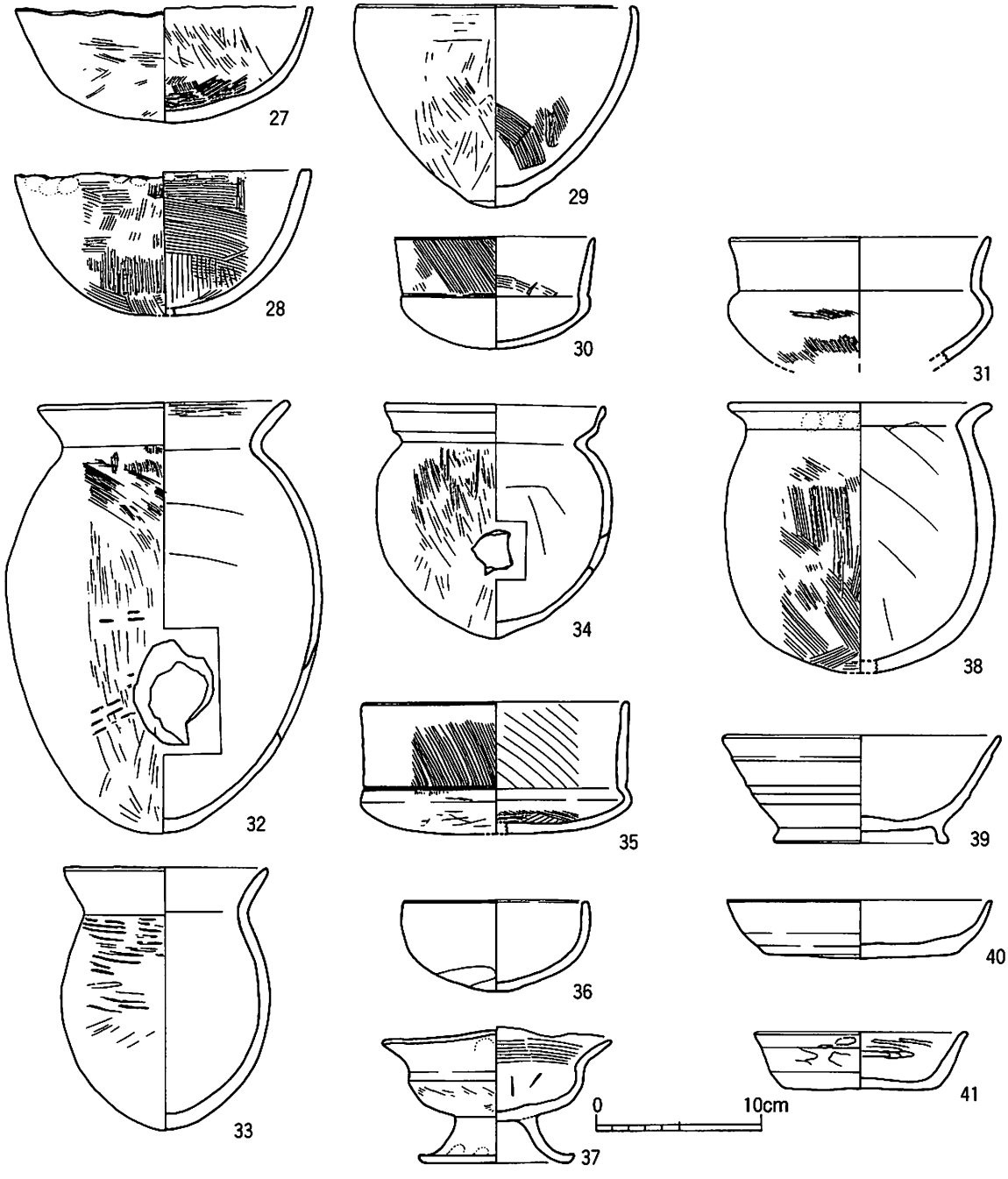
第305図　遺構に伴わない遺物実測図

（9） 遺構に伴わない遺物（第305図）

トレンチを西区、中央区、東区に分けて遺物を取上げた。

西区の遺物

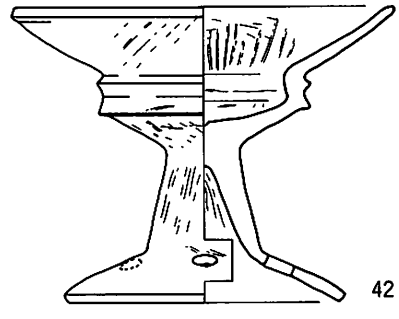
24（P－369）は外来系の甕である。胴部にはタタキ目の後ハケ目で消している。煤の付着が著しい。25



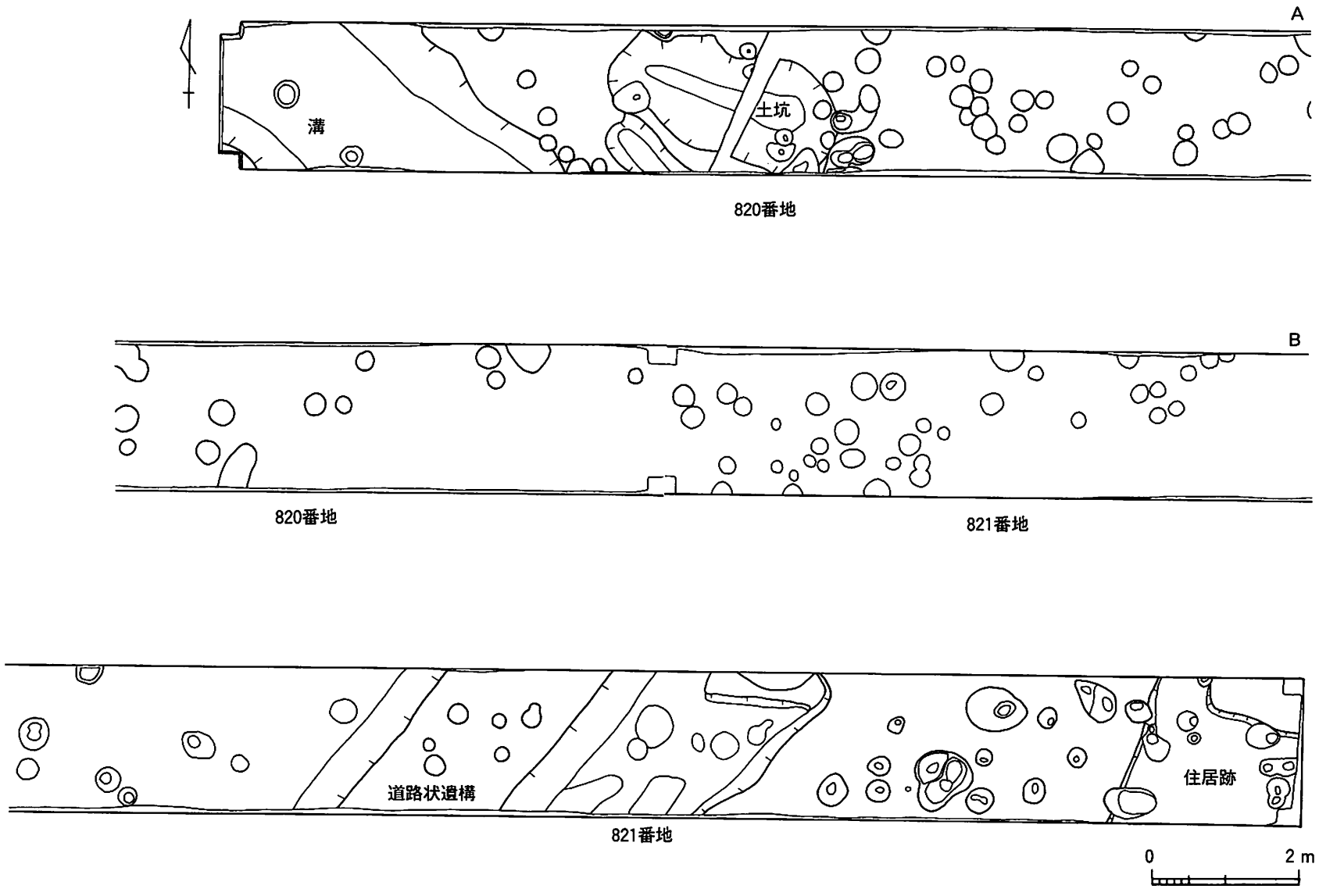
（P－29，46，360，362）は壺の破片である。口縁部から肩部までである。頸部には三角凸帯を巡らしている。26（P－368）は器台である。くびれ部が細く作りは良い。

中央区の遺物

27（P－312）は鉢である。口縁部は不整形である。28（P－119）も半欠の鉢である。ハケ目が明瞭に残っている。29（P－122）も鉢である、やや深くなっている。底部は小さな平底である。30（P－321）も鉢



第306図　遺構に伴わない遺物実測図



第307図　方保田820・821番地　遺構配置図

である、口縁部は直立し底部との間に沈線を巡らしている。31（P－157）も鉢である。底部を欠いている。

東区の遺物

32（P－384）は外来系の甕であるが、胴部が長く10と共に在地系にアレンジされた様な甕である。胴部下位に粗いタタキ目を残し穿孔している。上部はハケ目を施している。煤の付着が著しい。内面はヘラ削りで仕上げている。33（P－175，177，178）は外来系甕を模倣したような小形の甕である。底部は熱により淡赤色に変色している。34（P－175，176，339）は外来系の小形甕である。口縁部は「S」状にまがり、胴部には穿孔を施している。底部はやや尖り気味の丸底である。35（P－186）は鉢である。口縁部は直立し底部との間に沈線を巡らしている。36（中層一括、下層一括）薄手の鉢である。37（P－192，240，340、下層一括）は脚付き鉢である。手捏土器で口縁部は波打っている。38（P－221）は土師器の小形甕である。内面底部近くに焦げ付きが見られる。39（P－252）も土師器で高台付きの碗である。底部以外は全て赤色顔料を塗っている。40（P－199）も土師器で、杯である。底部は回転ヘラ削りである。41（P－237）も土師器の杯である。底部はヘラ削りで煤の付着が見られる。口縁部にも見られ灯明皿として使用している。

42（P－187）は外来系の高杯である。脚裾部を欠いているが極めて作りの良い高杯である。口縁部は大きく開きヘラにより暗文を施している。杯部は小さく外側に三角凸帯を巡らしたようにしている。縁は明瞭に作られ特徴的な形状である。

第4節　820・821番地の調査（第307図）

X＝－550～－552・Y＝－25,874～－25,923

814番地の西側に接するように南北に820，821番地の畑があるが、813番地トレンチ、825番地第2トレンチ、814番地第1トレンチの西側延長上に820，821番地の畑を跨ぐように長さ49mのトレンチを設置した。国土座標のX＝－550、Y＝－25,900を中心に西側半分（23m）が820番地で、東側半分（26m）が821番地である。この地点が標高36m以上で最も高く、期待もしながら調査に臨んだが遺構の密度としては低いようであった。

1　820番地トレンチ（第307図）

X＝－550～－552・Y＝－25,900～25,923

（1）溝状遺構（第308図）

トレンチの西端で溝状遺構を検出することができた。トレンチ西端から4.7mの範囲で北西から南東方向に向っているが、トレンチの南西隅で僅かに南寄りに弧を描き、北西隅でも北側に広がる傾向を示している。溝の断面は逆台形で上部幅2.9m、下部幅1.7mを計る。溝部分の土層断面は図－‥で示すように、溝中の埋土は大きく3層に分けられ、6層から遺物の量はさほど多くないが、7層から破片がまとまって出土している。溝埋没後に1～4層が堆積している。

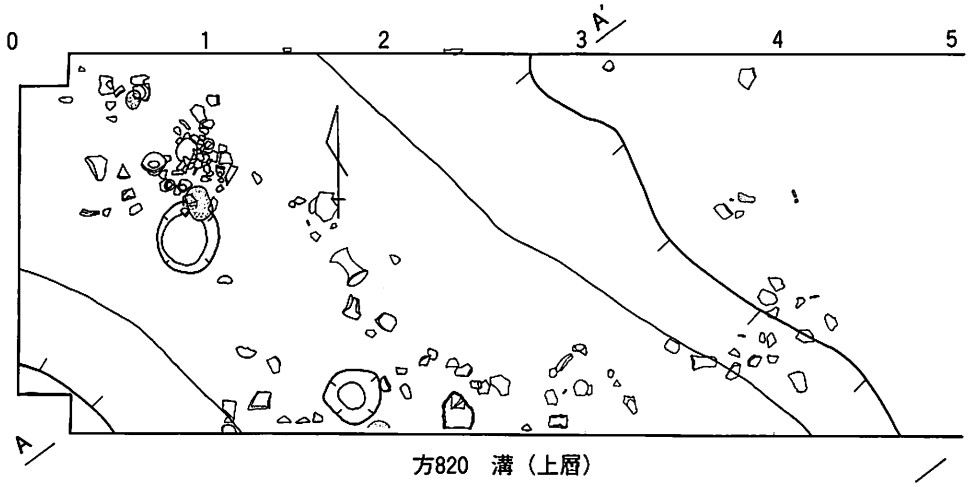
遺　物（第309図）

上層の遺物

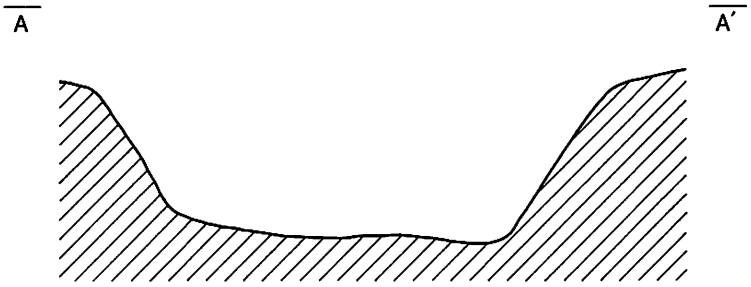
1（P－137、上層一括）は在地系甕である。口縁部は外反しつつ開き、胴部中位に張りを有している。外面はタタキ目を施し、下位ではハケ目で掻き消し煤の付着が著しい。内面はハケ目で、焦げの残りが著しい。2（P－51）は鉢である。平底で全面ハケ目仕上げである。3（P－126、下層一括）は脚台付き鉢である。脚部を欠いているが粘土接合状況が理解できる。鉢の内部には焦げ付きの痕跡が見られるが、外部には煤は見られない。4（P－17）は高杯の脚部である。4個の円孔を確認できるが裾部を欠いているため総数は不明である。5（P－32）はほぼ完形品の器台である。

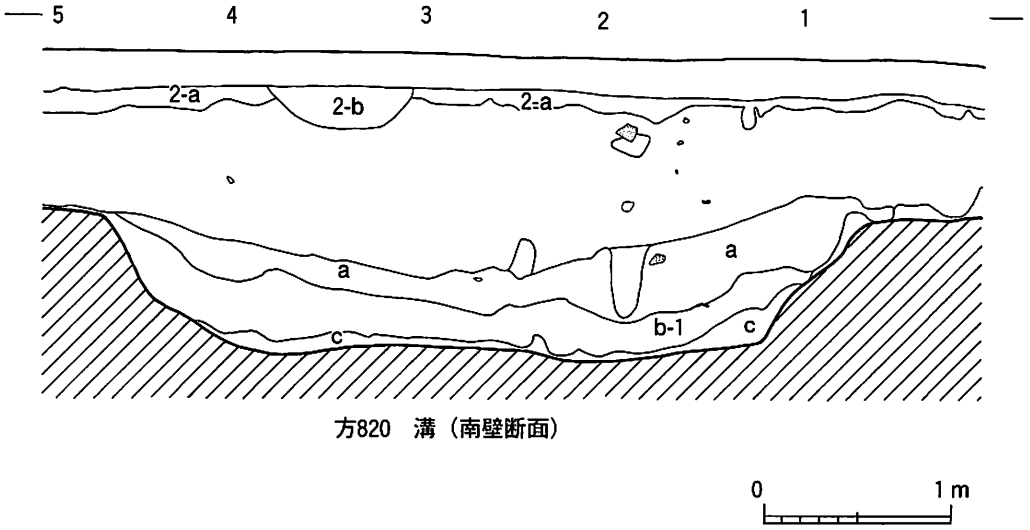
下層の遺物

6（P－35）は在地系甕の破片である。底部は脚台になるが欠いており、表面には煤の付着が著しい。7（P－33）は壺の底部である。表面に籾圧痕が見られる。8（P－120）は器台の破片である。手捏風で荒々しい仕上がりである。9（P－146）は縄文後期の鉢の口縁部である。波状口縁部には2本の沈線がめぐり最上段には磨消縄文を施している。溝には混入したものと判断される。



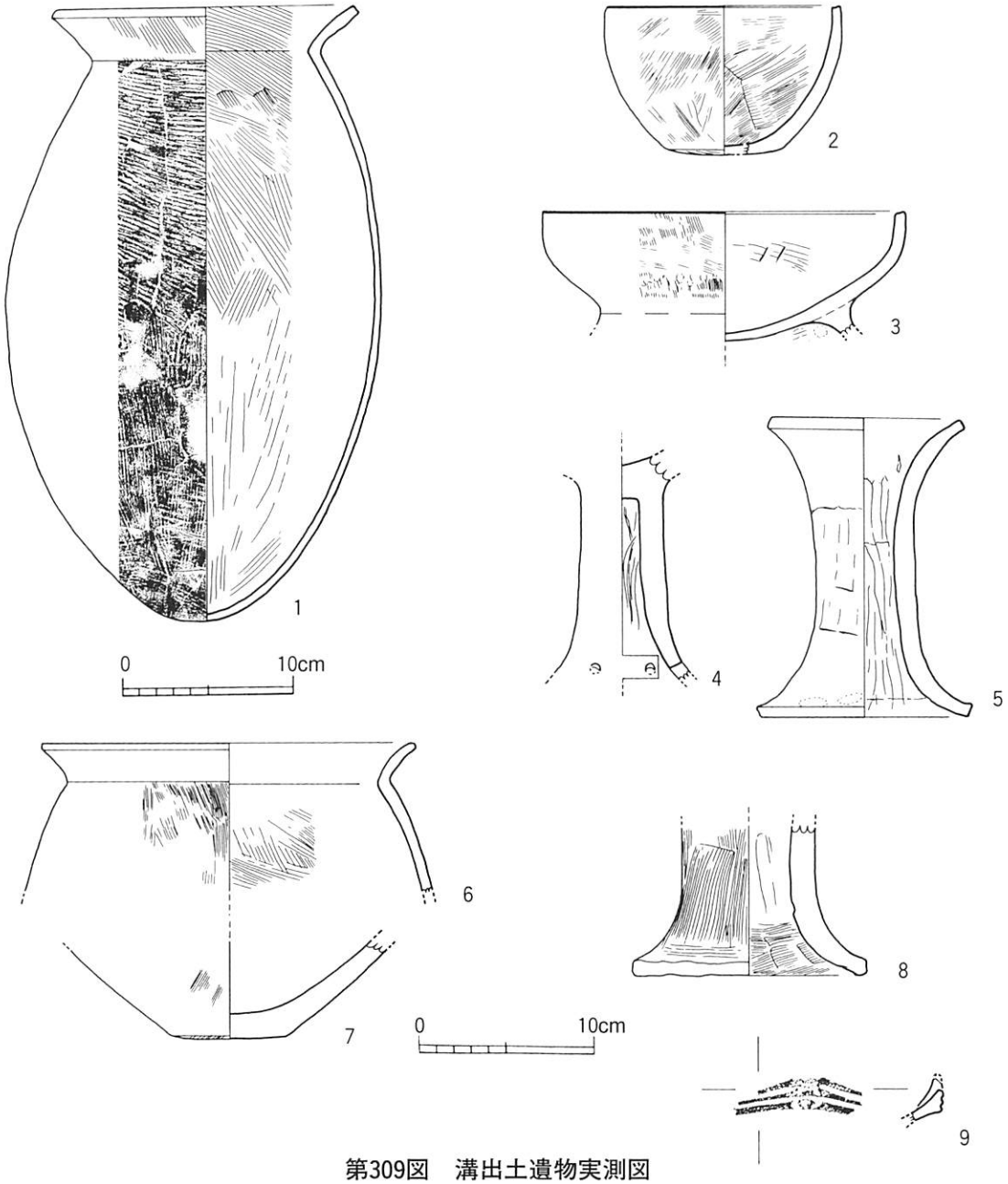
方820　溝（上層）





方820　溝（南壁断面）

第308図　溝実測図



第309図　溝出土遺物実測図

（２）　土坑（第310図）

トレンチ西端から5.2～8.3ｍの範囲で確認された不整形の土坑である。中からは遺物は検出できず、埋没後に土器が置かれている。したがって、土器の時期より古くなるが決定に至るべきものは見られなかった。性格も墓であるか否かも不明である。

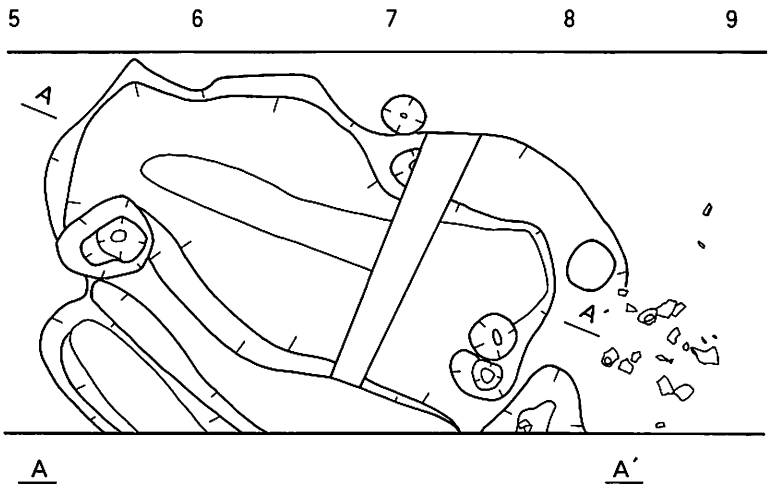
遺　物（第311図）

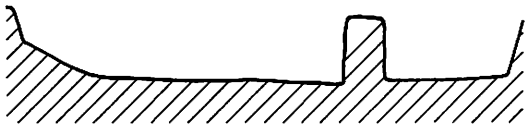
10（Ｐ－44）は在地系大型甕の脚部である。方保田東原遺跡内では古い段階の甕である。粗いハケ目の仕上げである。11（Ｐ－50）も在地系大型甕の脚部である。脚内面には砂の付着が見られ、裾部はナデ仕上げである。表面には小動物の歯でかじられた様な傷が見られる。12（Ｐ－40）は脚台付き鉢の脚である。４個の円孔を配している。13（Ｐ－49）は小形の高杯である。杯部と裾部を欠いている。

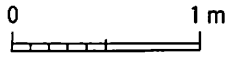
（３）　遺構に伴わない遺物（第312図）

14（Ｐ－78）は在地系甕で底部を欠くが脚台になる。15（Ｐ－64）は高杯の杯部片である。口縁部が短く杯部は深い。16（Ｐ－79）は脚台杯鉢である。脚部のみであるが残りが良い。17（Ｐ－84）は器台である。裾部の一部を欠いているが状態は良い。18（Ｐ－61）も器台である。裾部を欠いているが状態は良い。くびれ

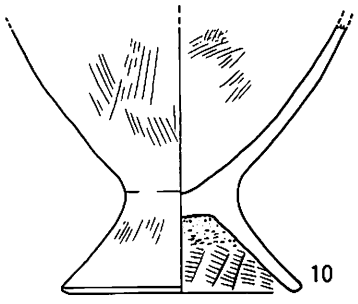
が上部にあり17とは異なり内面はヘラ削りで調整している。

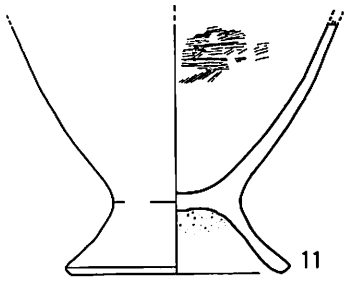


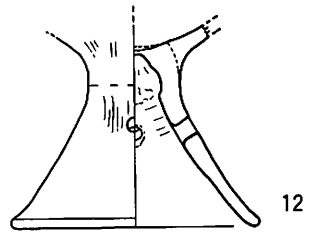


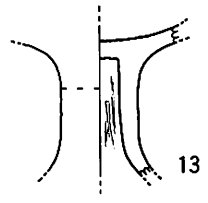


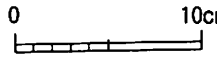
第310図　土坑実測図



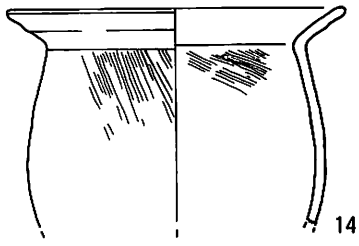


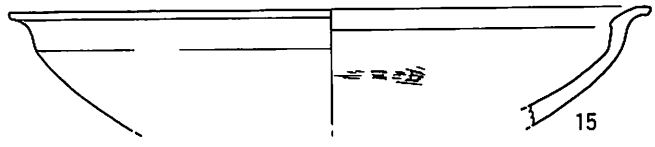


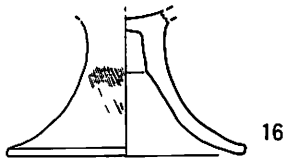


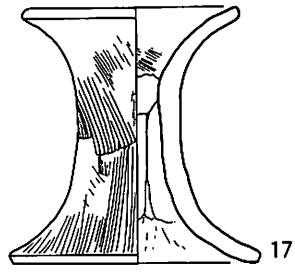


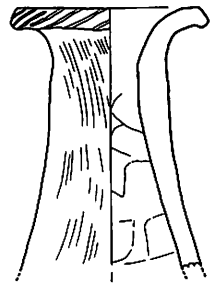
第311図　土坑出土遺物実測図





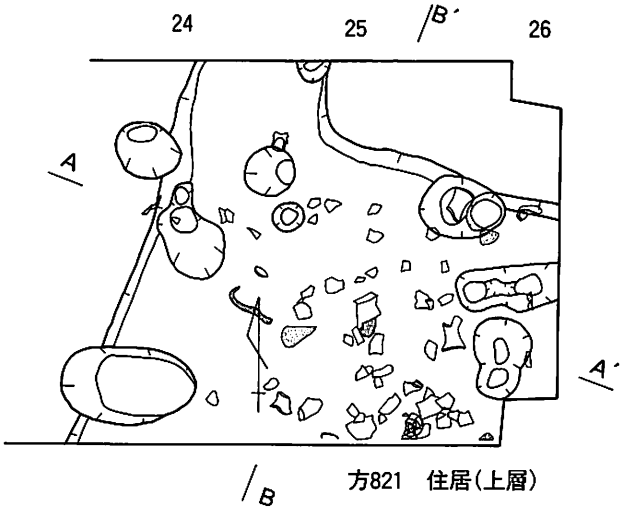


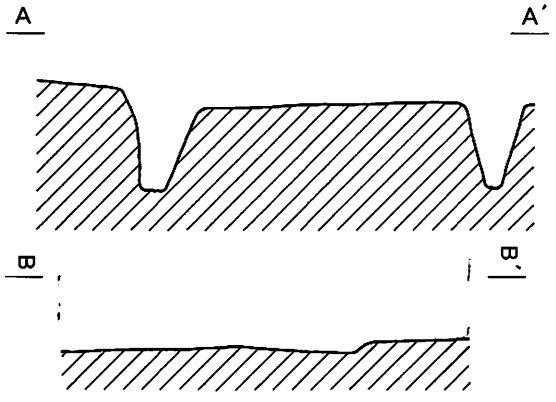






第312図　遺構に伴わない遺物実測図





第313図　1号住居跡実測図

2　821番地トレンチ（第307図）

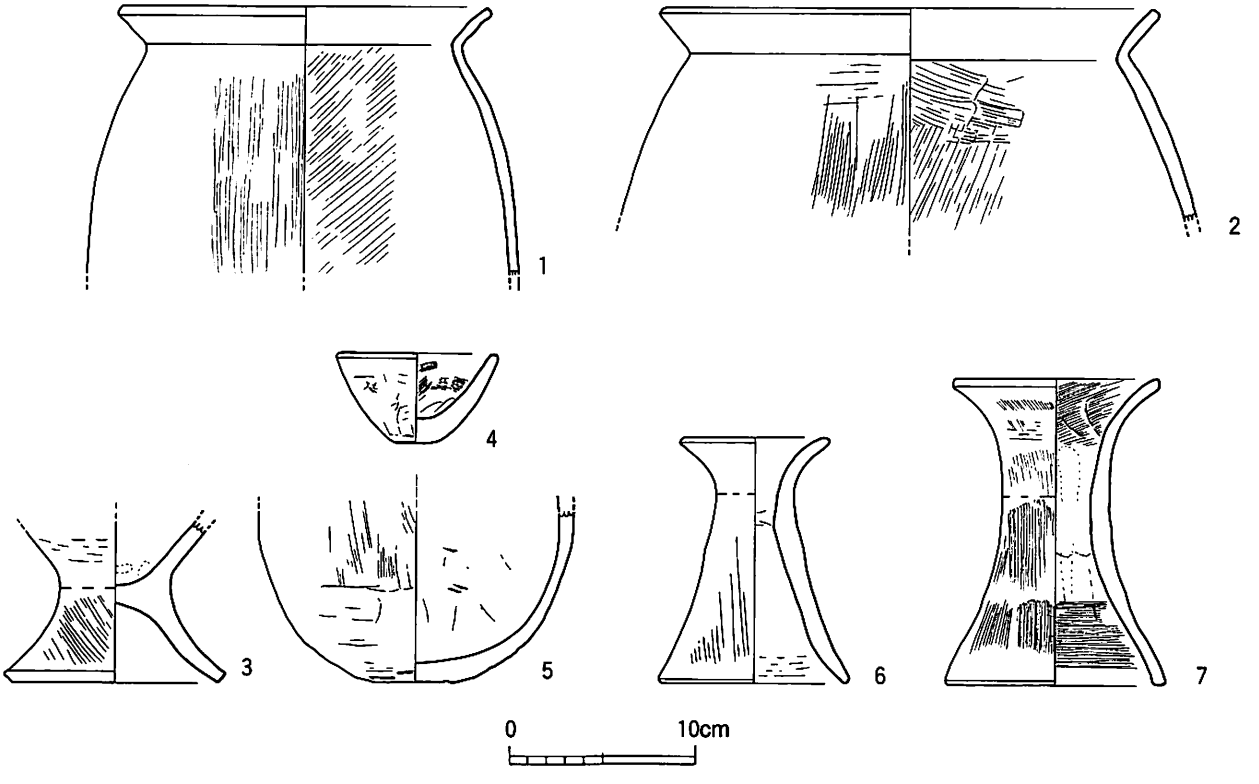
X＝－550～－552・Y＝－25,874～－25,900

（1）　1号住居跡（第313図）

トレンチ西端から23.4m～26mで確認されたものである。西壁を2.1mの長さで検出し、北東部にベッド状遺構を有している。土器片を廃棄するような状態で出土している。床面は硬化が著しく炭化材も残されていた。

遺　物（第314図）

1（P－82, 83, 90, 91, 93, 94, 95）は在地系甕である、底部を欠くが脚台になる。口縁部は短く胴部の張りも少ない。表面には煤の付着が著しい。2（P－100）も在地系甕である、底部を欠くが脚台になる。口縁部は短く胴部の張りも少ない。表面には煤の付着がみ見られない。3（P－86）も在地系甕で脚台のみである。淡赤色に変色している。4（P－80）は手捏の小形の鉢である。半欠であるが残りは良い。5（P－90, 95）は鉢である、口縁部がないが、表面はヘラ削りで荒々しい作りである。6（P－107）は小形器台の破片である。くびれが上位にあり、全面にナデ仕上げである。7（P－110）も器台である。口縁部の一



第314図　1号住居跡出土遺物実測図

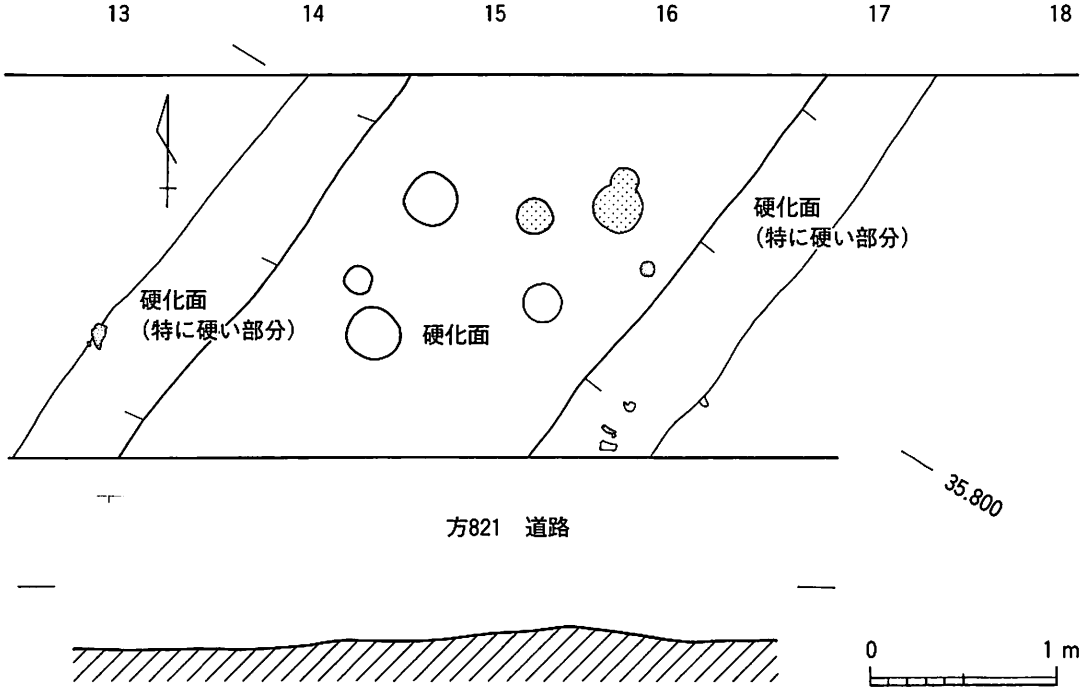
部を欠いているが残りは良い。くびれは中央に配し表面は細かいハケ目で仕上げている。

（2） 道路状遺構（第315図）

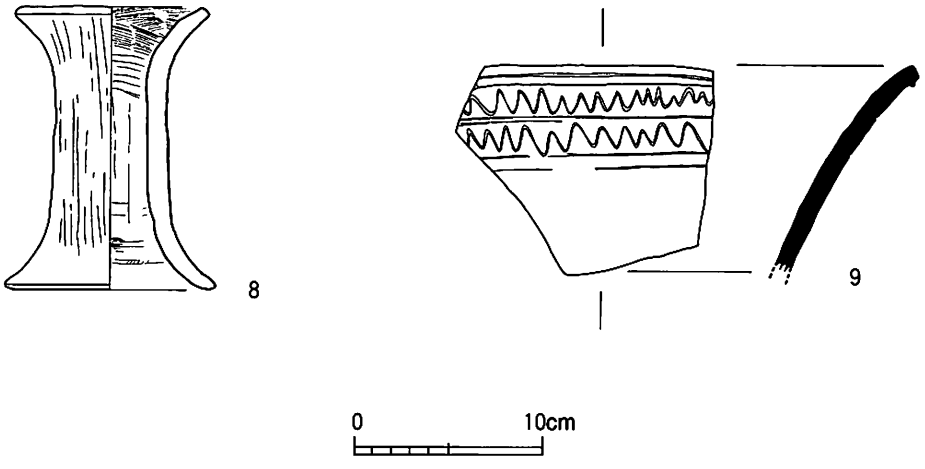
トレンチ西端から12.5m～17.3mの間で確認されたものである。北東から南西に向って伸びており、著しい硬化面を形成している。特に中央部の約1.6mには、小石と土器片を含んだ敷石を2ヶ所で見ることができる。さらに両側には幅50cmの極めて硬い面を配している。

（3） 遺構に伴わない遺物（第316図）

8（P－134）は器台で粗いハケ目で仕上げている。9（P－73）は須恵器の壺の口縁部である。2本の沈線の上に波状文を巡らしている。



第315図 道路状遺構実測図



第316図 遺構に伴わない遺物実測図

第５節　824－２番地の調査（第317図）

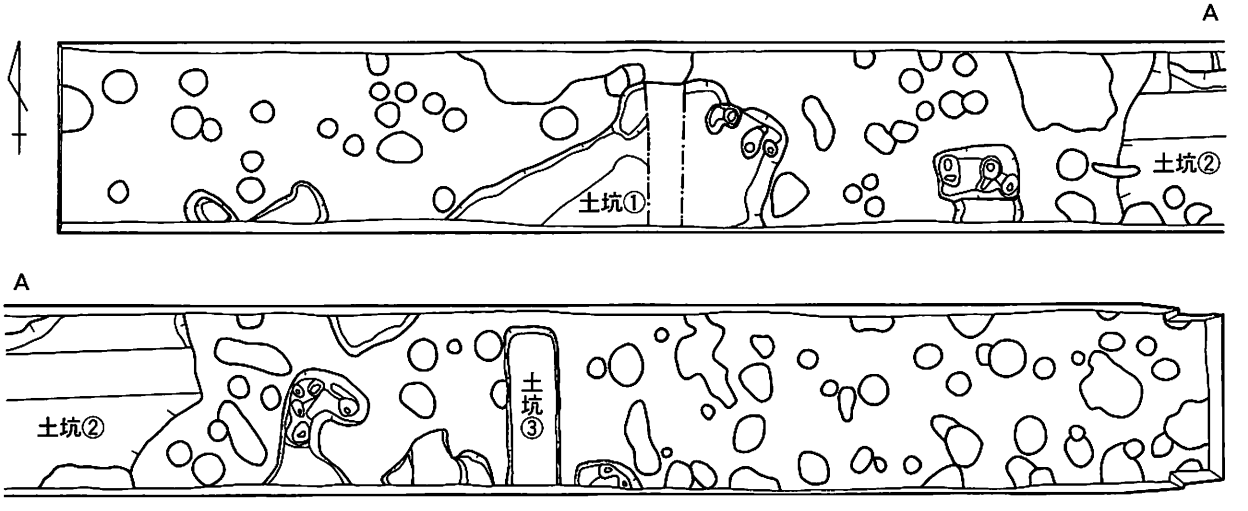
国土座標X＝－531～533、Y＝－25,897～－25,872

821番地の北側に位置し、北には民家が隣接している。南側を除き３方の隣接地は削平され１ｍの段差が生じている。トレンチは821トレンチの北17ｍの所で畑の中央に東西25ｍの長さで設定した。

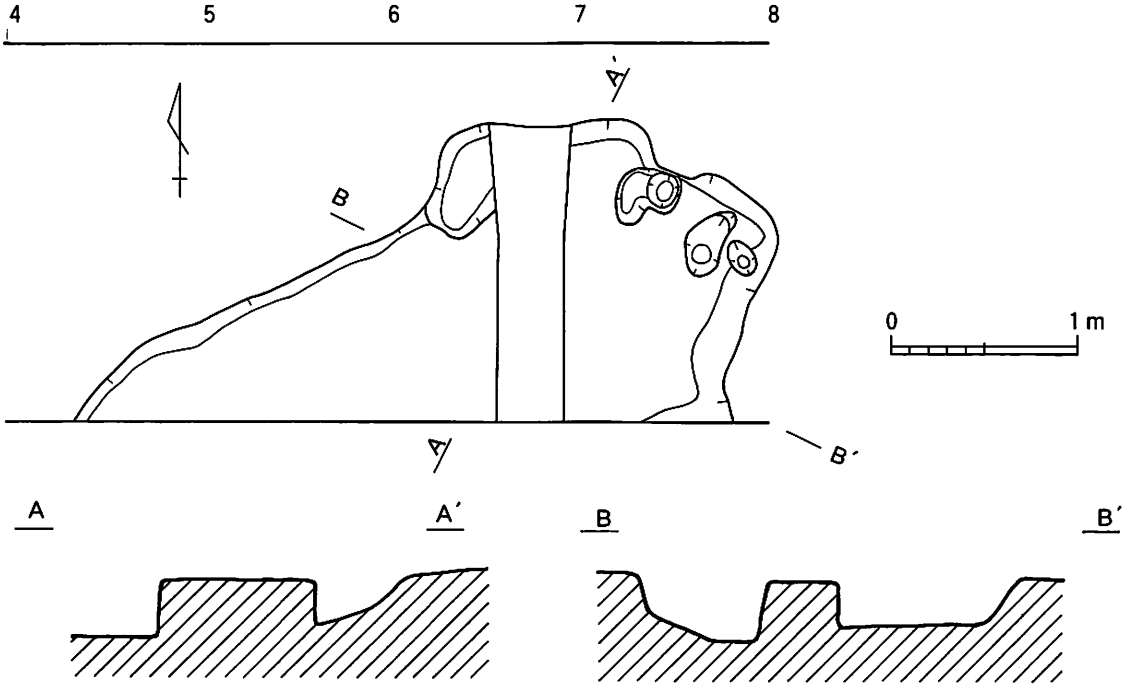
柱穴が多く検出されたが埋土の掘り下げは行わず上面での確認のみに留めた。

（１）　１号土坑（第318図）

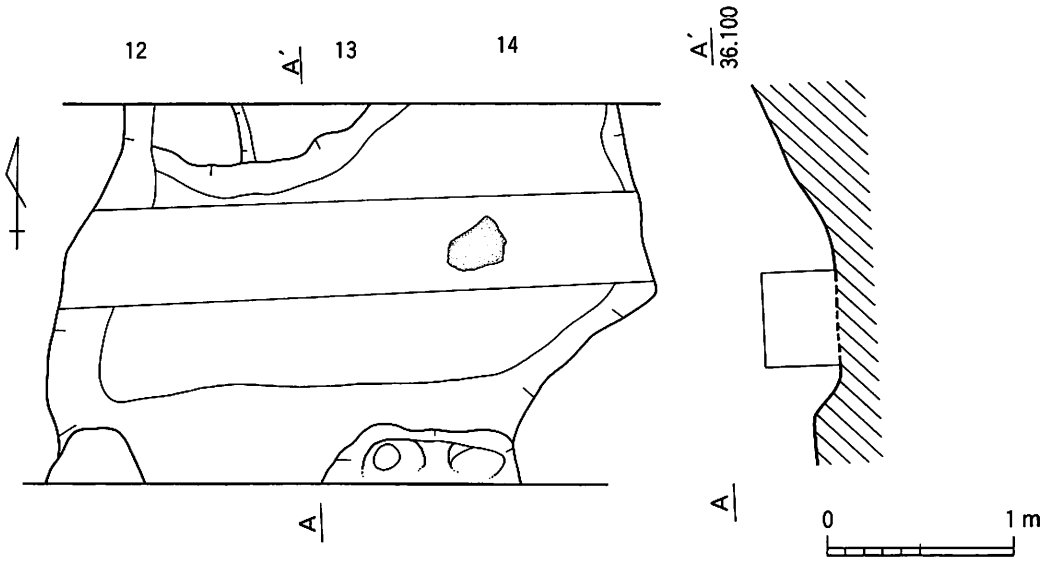
トレンチ西端から4.4ｍ～８ｍの間で確認された不整形の土坑である。端部はトレンチの南に延びており、現状での長さ３ｍ、幅1.7ｍ程度になる。掘り込みは明確であったが、埋土や床面からの遺物の出土は見られなかった。したがって、性格も、時期も決め手に欠く土坑である。



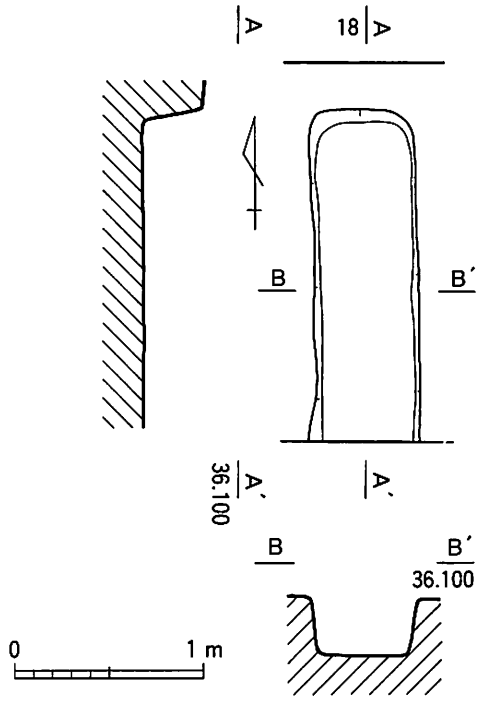
第317図　方保田824-2番地　遺構配置図



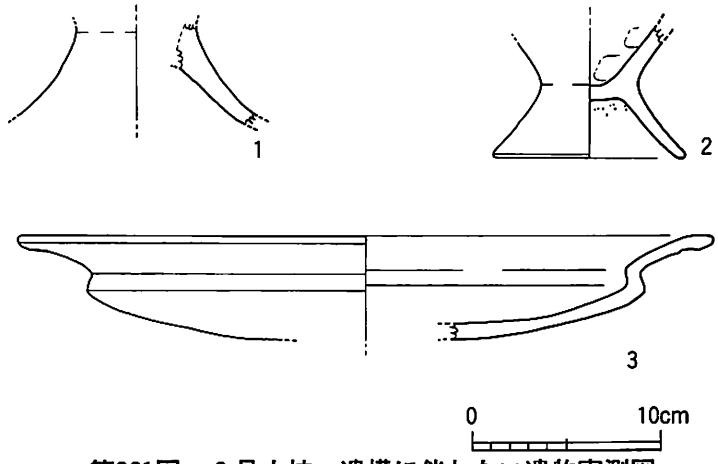
第318図　１号土坑実測図



第319図　2号土坑実測図



第320図　3号土坑実測図



第321図　3号土坑・遺構に伴わない遺物実測図

（2）　2号土坑（第319図）

トレンチ西端から11.5m～14.7mの間で確認された不整形の土坑である。端部はトレンチの南北に延びており、現状での長さ2m以上、幅3.1m程度になる。掘り込みは明確であったが、埋土や床面からの遺物の出土は見られなかった。この土坑も性格や時期は不明である。

（3）　3号土坑（第320図）

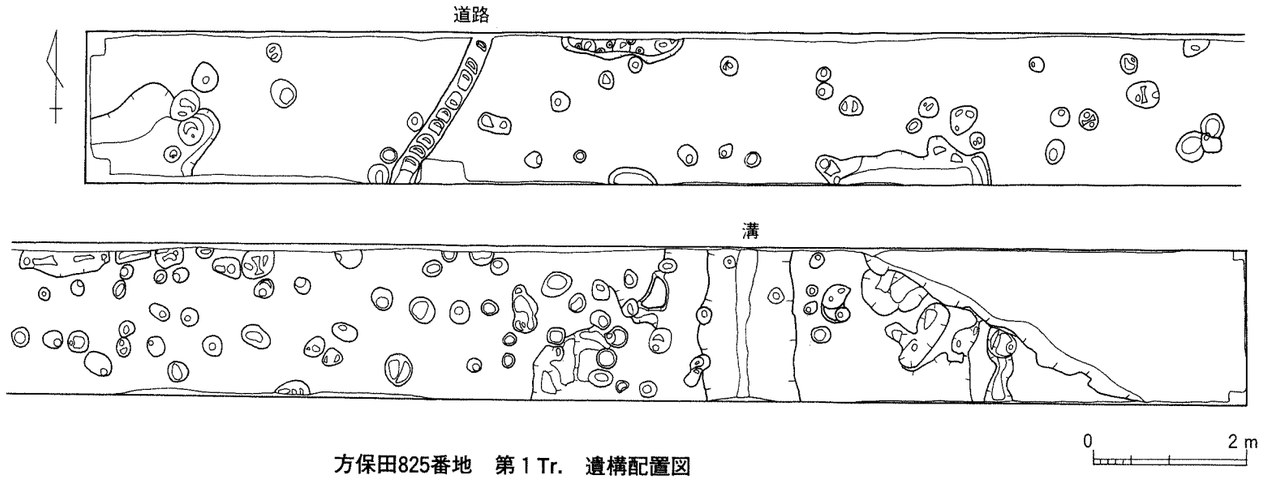
トレンチ西端から17.9m～18.3mの間で確認された長方形の土坑である。端部はトレンチの南に延びており、現状での長さ1.7m以上、幅55cm、深さ30cm程度になる。埋土や床面からの遺物の出土は見られず時期は不明であるが、墓として使用された可能性が高い。

遺　物（第321図）

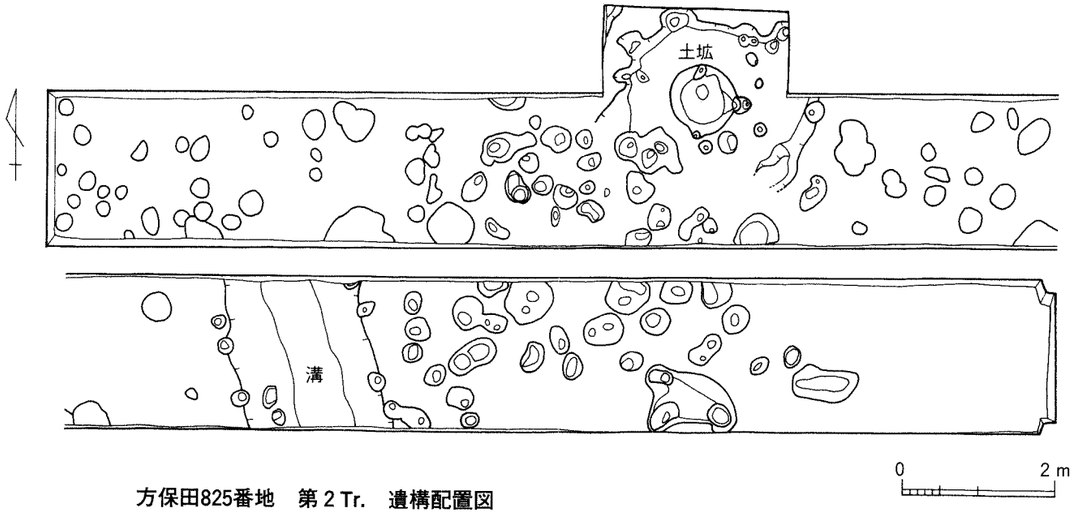
1（P－5）は在地系甕の破片である。脚台で粘土接合面から剥離している。

（4）　遺構に伴わない遺物（第321図）

2（P－7）は在地系甕の破片である。脚台のみであるが小形の甕である。3（P－7）は高杯の杯部の破片である。口縁部は短く杯部が浅い。



方保田825番地　第１Tr.　遺構配置図



方保田825番地　第２Tr.　遺構配置図

第322図　825番地　第１・２トレンチ遺構配置図

第６節　825番地の調査（第322図）

今回の調査区で最も北に位置している。長方形の畑の北西隅と南東隅に東西方向にトレンチを配し、北側を第１トレンチ、南側を第２トレンチとした。

１　第１トレンチ（第322図）

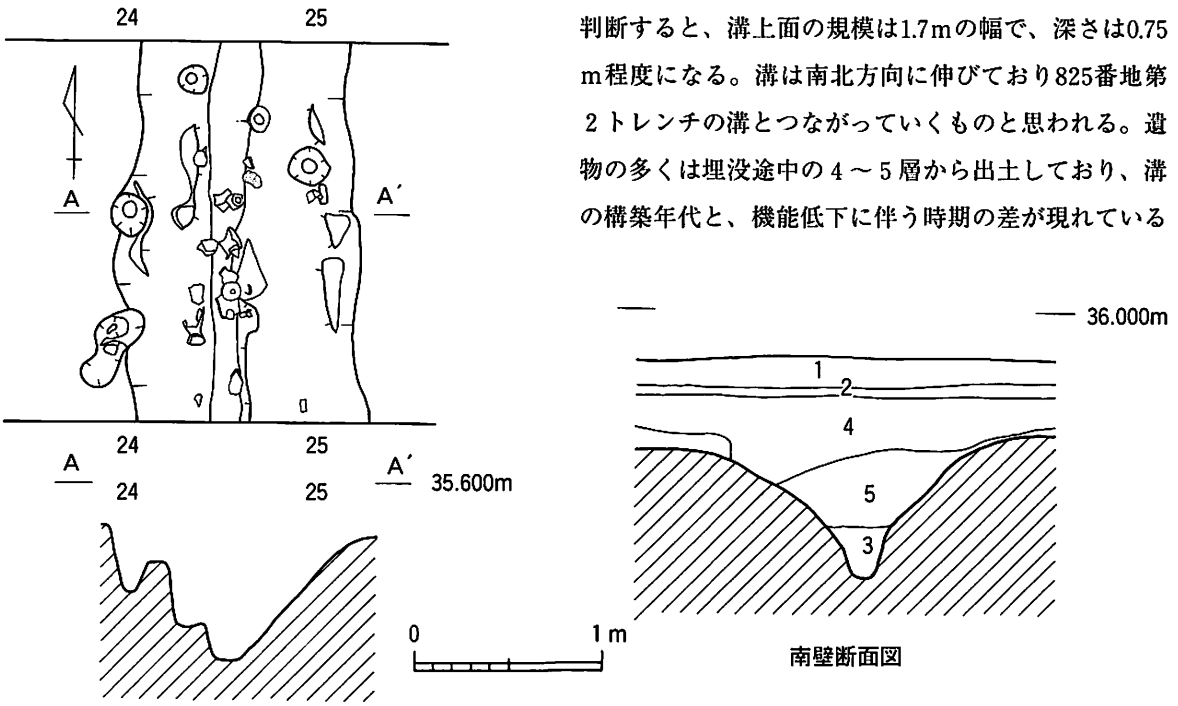
国土座標　南北Ｘ＝－525～－527

東西Ｙ＝－25,823.6～－25,854.6

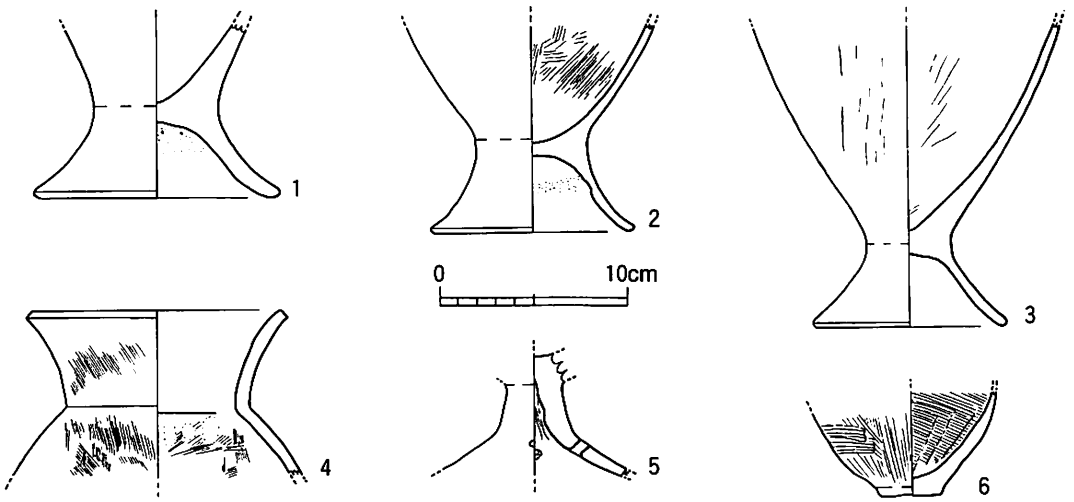
このトレンチは東西方向に長さ31ｍの長さに設定した。今回の調査区では最も北に位置し、他の畑に比べると一段削平されていたため、僅か20cmで遺構面に達した。さらに耕作のために数本の溝が刻まれていた。遺構としては溝状遺構と道路状遺構が検出され、柱穴が多数検出されたがトレンチという限られた広がりの中では列や建物を構成するものとしては把握できなかった。また、トレンチ東端部に於いて地山が掘り下げられている場所が見られたが、近年の掘削によるものであった。

（１）　溝状遺構（第323図）

トレンチ西端部より24～25ｍの範囲で検出されたもので、幅は遺構検出面で上端部幅1.2ｍ、下端部幅0.2ｍの「Ｖ」字形断面を呈した溝である。土層断面から判断すると、溝上面の規模は1.7ｍの幅で、深さは0.75ｍ程度になる。溝は南北方向に伸びており825番地第２トレンチの溝とつながっていくものと思われる。遺物の多くは埋没途中の４～５層から出土しており、溝の構築年代と、機能低下に伴う時期の差が現れている



第323図　溝実測図



第324図　溝出土遺物実測図

ようである。

遺　物（第324図）

1（P－15）は在地系甕の脚部である。全面ナデ仕上げで脚の内面には砂の付着が著しい。表面には煤の付着が見られる。2（P－10）も在地系甕の脚部である。全面ハケ目仕上げで脚の内面には砂の付着が著しい。表面には煤の付着が見られる。3（P－8）も在地系甕の脚部である。胴部は細く表面ナデ仕上げで内面はハケ目である。脚の内面には砂の付着が著しい。表面には煤の付着が見られる。4（P－12）は。短頸壺の破片である。5（P－16）は高杯の脚部である。絞り上げて脚部を作っており焼きも良い。6（P－1）は小形の鉢である。底部は小さな平底で、全面ハケ目調整である。

（2）道路状遺構

トレンチ西端部より4～5mの範囲で検出されたものである。北北東から南南西に向けて伸びている。

現状では2.2mが確認できた。幅28～30cm、深さ35cmで10個程度階段状の掘り込みが見られた。

遺物を伴っておらず時期の決定に苦慮するところであるが、268番地東西第3トレンチから南北第1トレンチ、東西第4トレンチで見られた道路状遺構、さらに138番地東西第1トレンチ東端で見られた道路状遺構と類似しており、これらに続く可能性も残している。

第2トレンチ（第322図）

国土座標　南北X＝－550～－552

東西Y＝－25,818.7～－25,844.7

813番地トレンチと814番地第1トレンチに挟まれた位置に設置した長さ15mのトレンチである。柱穴が多数検出されたがトレンチという限られた広がりの中では列や建物を構成するものとしては把握できなかった。遺構としては土坑と溝状遺構が検出され、土坑は部分的に調査区域を北側に拡張して範囲を明らかにした。

（1）　溝状遺構（第325図）

トレンチ西端から15.1～17.3mの間で検出されたものでほぼ南北に伸びている。北には825番地第1トレンチの溝へと続くが、南の814番地第3トレンチでは溝の方向が違っており、この溝の延長を確認できなかった。したがって、東側に曲がる可能性も残されている。

溝の上部幅は約1.8m、下部幅70cm、深さ1mで逆台形の断面である。溝掘削から埋土の堆積が進むが、初期の段階では土器の混入は無く、ある程度埋没した段階で見られる状況が確認できた。土器の量もさほど多くなく、825番地第1トレンチの溝状遺構における土器の出かたと共通している。

遺　物（第326図）

7（P－19）は在地系小形甕の口縁部附近の破片である。8（P－15）も在地系小形甕の破片で脚部である。9（P－27）は壺の口縁部のみの破片である。10（P－17）は短頸の壺としたが甕の様でもある。

11（一括）も壺の口縁部の破片である。薄手の土器であるところから長頸壺の口縁部であろう。12（P－11）と13（P－16）は器台である。12は口縁部に刻み目を施しくびれが上位にある。13は細かいハケ目で仕上げている。

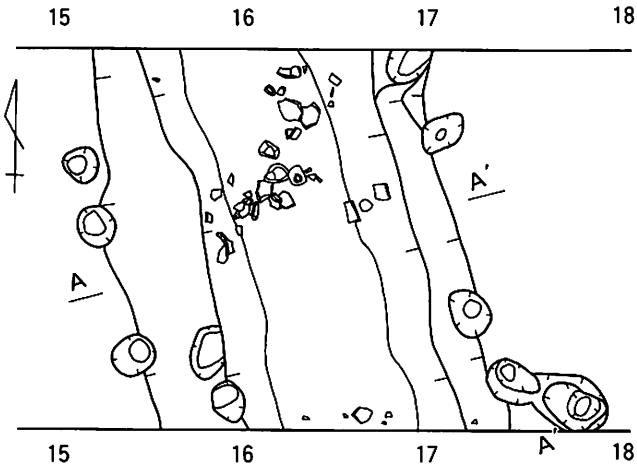
（2）　土坑（第327図）

トレンチ西端から15.1～17.3mの間で検出されたものである。直径90～95cm、深さ約30cmの擂鉢型をした土坑で、埋土は最下層に黒色土を薄く覆っているが、次からは熱により変色したかと思われる白粘土層が層をなして堆積し、埋没後に瓦質土器の鉢を伏せるように置いていた。周辺には土師器の皿を並べており、祭祀行為を行ったものと推察される。

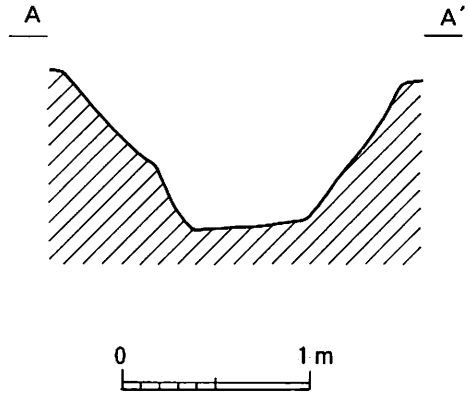
遺　物（第328図）

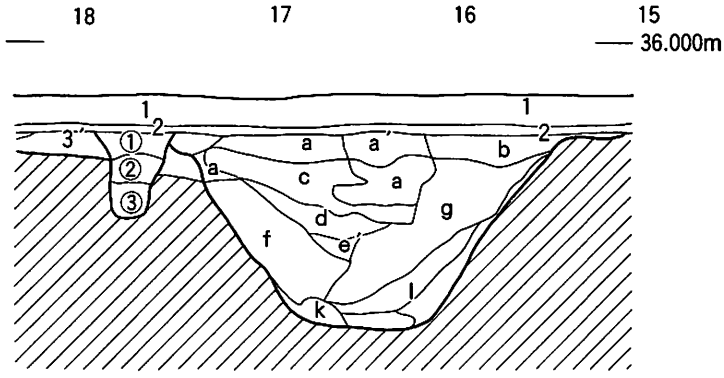
14（P－53）は土師の皿で底部は回転ヘラ削りである。15（P－48）も土師の皿で底部は回転ヘラ削りである。内面は煤の付着が著しい。16（P－40）土師の皿で底部は板目である。17（P－37）土師の皿で底部はナデ仕上げである。18（P－39）土師の皿で底部は板目である。19（P－51）土師の皿で底部は板目である。20（P－36）土師の皿で底部は板目である。21（P－53）も土師の皿で底部は回転ヘラ削りである。22（一括）も土師器の鉢で、全面煤の付着が見られる。23（P－50）も土師器の鉢で、全面煤の付着が見られる。これらは全て轆轤の痕が明瞭に残っている。

（中村幸史郎）

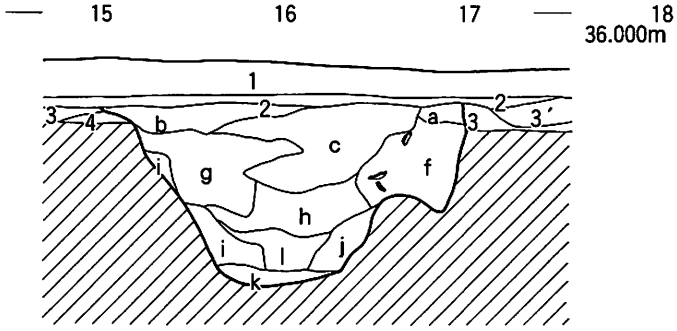


方825　2 T　溝



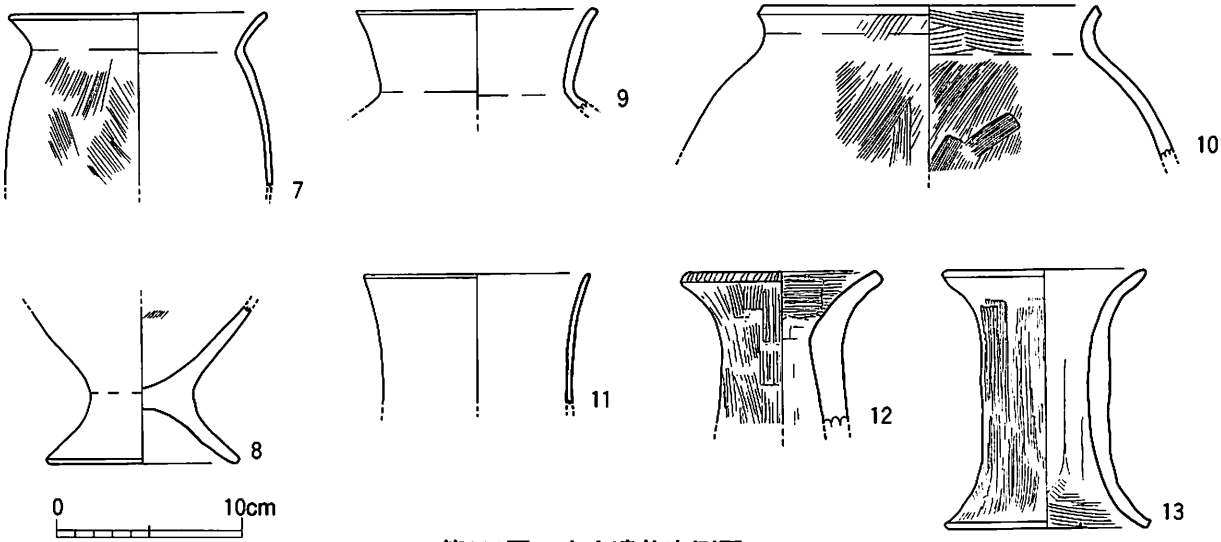


南壁断面図

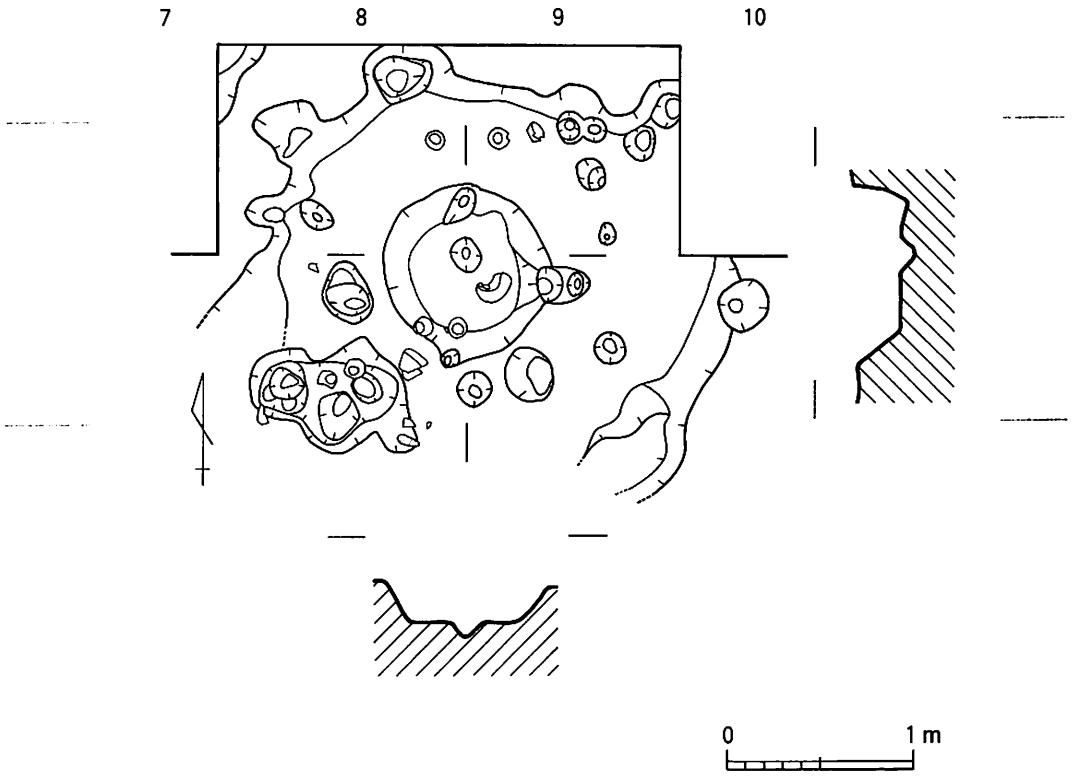


北壁断面図

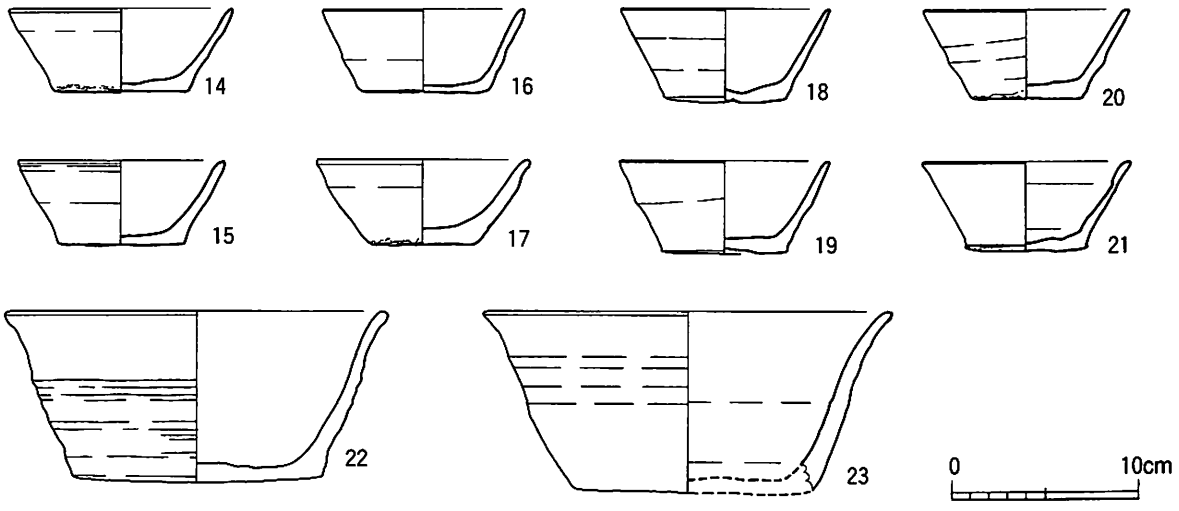
第325図　溝実測図



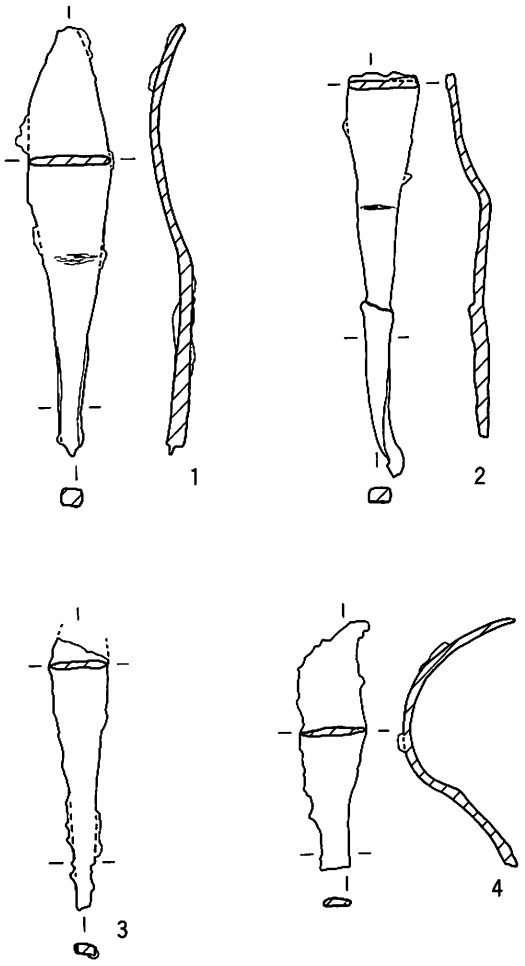
第326図　出土遺物実測図



第327図　土坑実測図



第328図　土坑出土遺物実測図



方保田813番地出土鉄器実測図
（S＝1／2）



方保田816・817番地出土鉄器実測図
（S＝1／2）

第329図　平成10年度出土鉄器実測図

第7節　調査の成果

当該年度における調査では当初この区域が遺跡の中で最も高い標高（36m）を示しており、隣接した128番地の出土文化財管理センター建設予定地で方形周濠墓の一部が検出されたことから、墓域の可能性を期待していたが残念ながら発見には至らなかった。

しかし、これまでの調査で確認されていた溝の全てが単独で検出されていたが、今回の調査で814番地第2トレンチにおいて2本の溝が交差している部分が確認できた。

820番地西端で見られた溝が814番地から817・818番地へと続きほぼ一直線に伸びており、東端では北東方向に直角に折れ814番地東端の溝から813番地の溝へと延びている。

交差した溝の片方については今回の調査範囲での確認は出来なかったが、明らかに溝によって区画された区域が存在していたようである。

さらに、この区域では住居跡が少なく、あたかも空白地帯であるかのような遺構の出方であった。

また、弥生時代より古代の遺構や遺物が多く見られ、特に円面硯や、青磁器が見られこの遺跡の奥行を感じることができ、時代によって遺構の比重が移動しているものとおもわれる。

柱穴が密集していたが限られたトレンチの中では建物の確定には至らなかったし、柱穴の多くは上面での確認に留めた。

このことも関連して弥生時代の遺構の検出は極めて少なく、溝に囲まれた特殊な区域となるのか否かについては今後の詳細な調査に委ねたい。

第７章　平成11年度調査

11年度は10年度調査区よりもさらに北東側を調査し、遺跡北東側の範囲確定を最大の目的とした。よって、なるべく多くの地点で調査ができるよう、調査区は主に２ｍ×２ｍのグリッドとし、特に必要と思われる部分のみ調査区のみをトレンチ状に拡張した。

このほか、これまであまり調査されていなかった遺跡の南側にあたる菊池川沿岸の遺構確認を目的に、177－１番地、220番地を調査した。

調査区が比較的広い831番地を１項で述べ、それ以外は調査地点が近い932－１番地、932－２番地、932－４番地を一つで、さらに881番地、888番地、893番地を一つの項で記述する。また、いずれにも属さない1019番地を１項で記述する。

第１節　831番地の調査

現状は畑地で地表面は緩やかに東へ傾斜している。東隣は、一段（比高差約１ｍ）下がっており、現在水田になっている。設定したトレンチは長さ30m、幅２ｍで、面積は60㎡である。（第330図）

検出された遺構は、溝が4条、土坑が1基である。

（１）　１号溝（第331図）

トレンチ東端で検出された。方向はトレンチにほぼ直交する。黒色土層上面で検出されたが、溝の両肩は後世のイモ穴で破壊されている。よって詳細な幅は不明であるが、推定すると1.8mを測る。溝底の幅は0.75m、深さは0.86mであった。

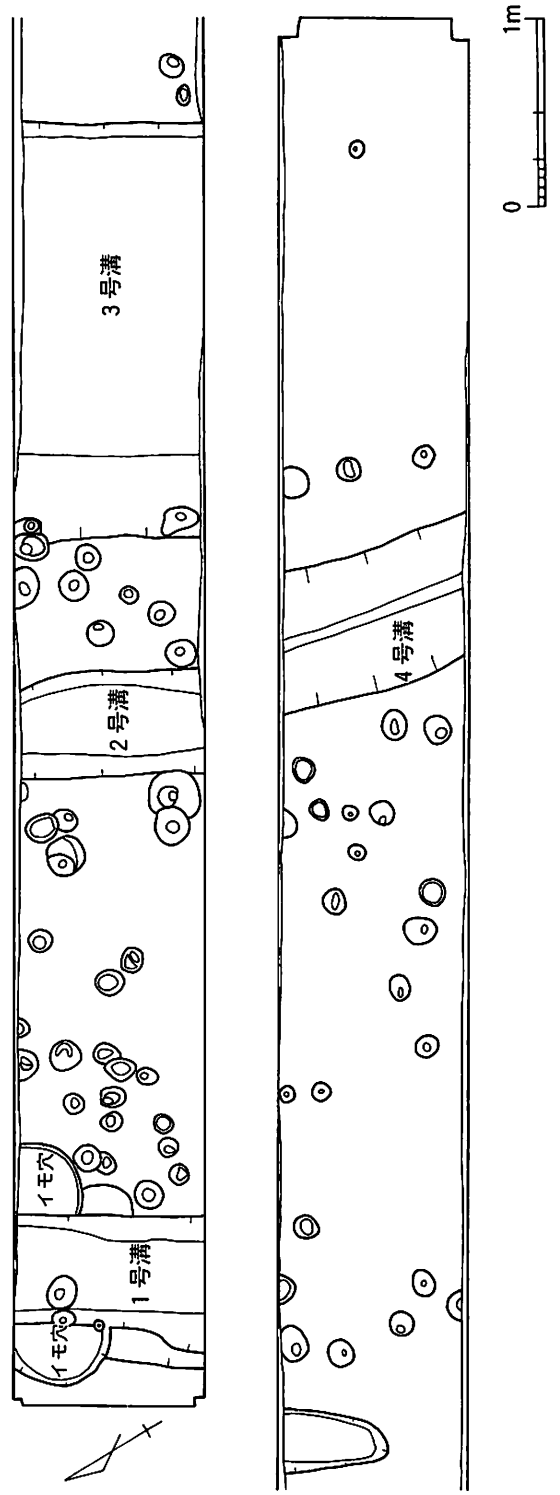
溝の断面形はU字型にちかい。西側肩は二段の幅の狭いテラスを持つ。

遺物（第332図）

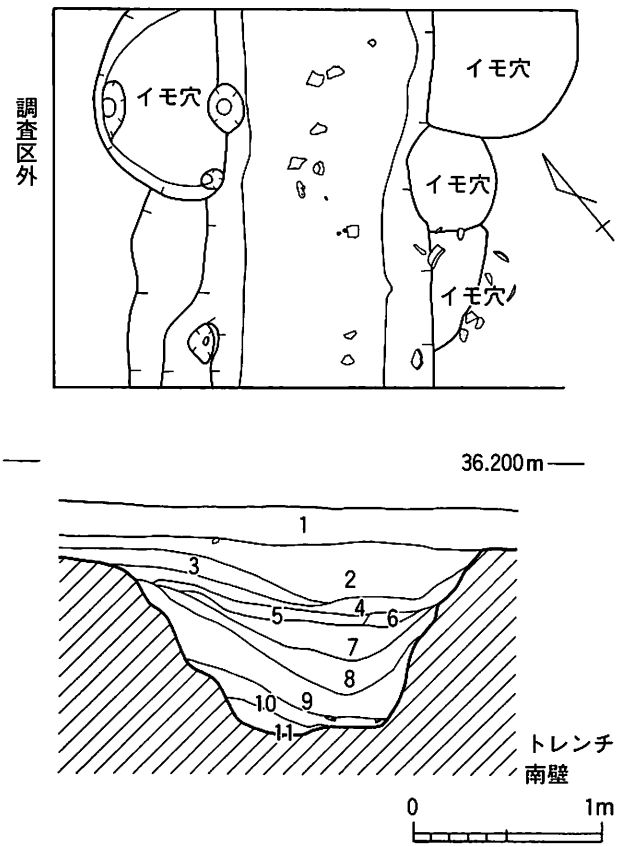
遺物は少なく、古代の土器が数点出土した程度である。いずれも埋土出土である。

１は土師器甕の口縁部である。２は土師器鉢か？内外器面とも横方向のヘラミガキが施されている。３は須恵器坏身の底部で、体部下部で回転ヘラケズリを施す。また、高台の接着のため施されたと思われる２条の浅い溝が、底部断面で確認された。

土器以外には鉄器が１点出土した。第340図－１は不明の鉄器である。断面形は長方形を呈する。上部から下部に行くにつれて徐々に厚みが薄くなっていく。

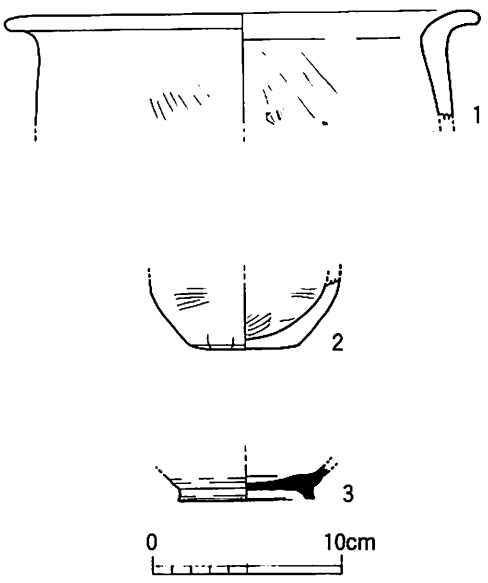


第330図　方保田831番地　遺構配置図（S＝1／80）



1層　表土
2層　赤黒色土（Hue2.5YR1.7／1）
3層　黒色土（Hue5YR1.7／1）
4層　黒褐色土（Hue5YR2／2）
5層　黒色土（Hue10YR1.7／1）
6層　黒褐色土（Hue7.5YR2／2）
7層　黒色土（Hue7.5YR1.7／1）
8層　黒色土（Hue5YR1.7／1）
9層　黒色土（Hue7.5YR2／1）
10層　黒色土（Hue10YR1.7／1）
11層　黒褐色土（Hue7.5YR2／2）

第331図　831番地　1号溝実測図（S＝1／40）



第332図　1号溝出土土器実測図

（2）　2号溝（第333図）

トレンチ東側で検出された。1号溝の西約6mに位置し、軸は1号溝とほぼ同方向である。東側肩を3号溝に切られている。

黒色土上面で検出された。幅は1.13m、溝底の幅は0.6m、深さは0.34mを測る。幅、深さとも非常に小規模の溝である。また、溝底面の標高も35.4mと他に比べ高い。

遺物（第334図）

遺物は弥生時代後期後半の土器片がわずかであるが出土した。1は高坏の口縁部で、外反しながら開く。やや深みを持つタイプで、外来系と思われる。2は底部の傾きから、台付鉢の底部及び脚台と思われる。3は高坏の裾部と思われる。

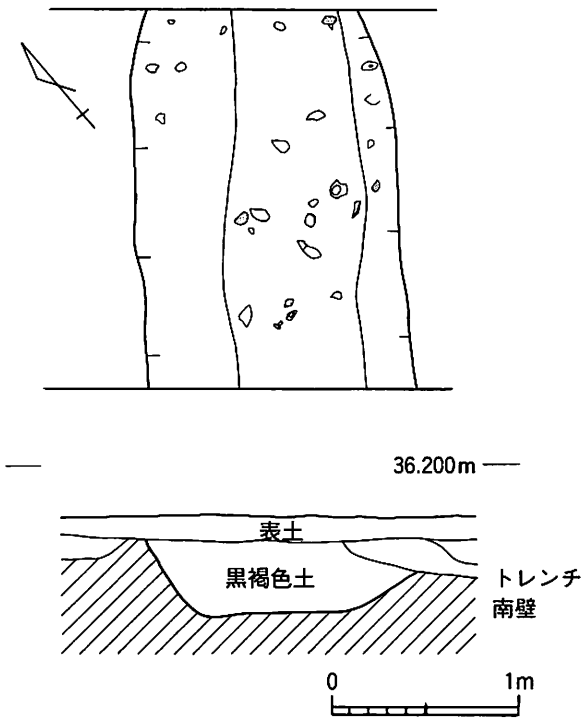
（3）　3号溝（第335図）

トレンチ中央部で検出された幅5.4mの大溝である。断面形は逆台形を呈しており、溝の西側肩が緩やかに立ち上がるのに対し、東側の勾配は非常に急である。深さは0.58mで、床面は礫層で底の幅は3.36mを測る。溝の走る方向はほぼ1号、2号溝と同方向で、トレンチにほぼ垂直方向である。埋土の状況から一度掘り直されていることが分かる。その掘りなおしの際、溝の幅は西側へ1.5m広がり、2号溝を切っている。

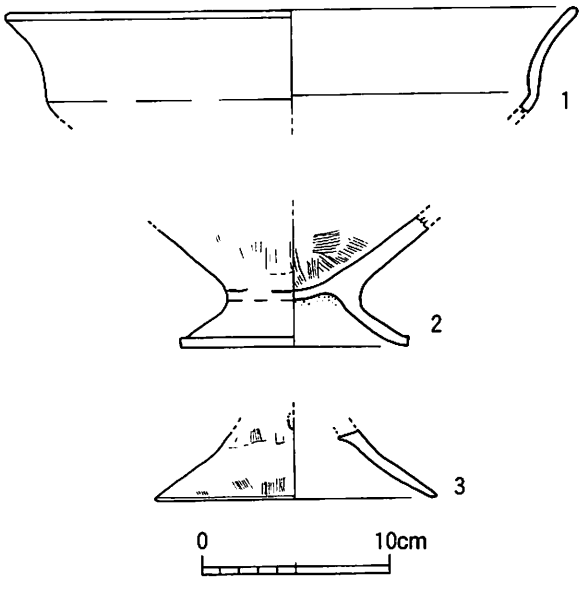
遺物（第336図）

遺物は溝東側に多く見られ、須恵器、土師器のほか礫などが出土した。いずれも底面から浮いている。2が中層から、4と5が下層から出土し、その他はすべて上層から出土したものである。1は土師器の甕である。2は高台付椀の体部である。口縁端部が一旦くびれ短く外へ開く。口唇部は丸みを持つ。3は須恵器坏の底部。4は須恵器坏蓋である。部分的に極暗褐色を呈する。5は須恵器高坏の脚部で、外器面は淡黄色を呈する。6は土師器の高坏と思われる。7は土師器坏の底部である。底部に粘土巻きの痕が残る。8は土師器坏の体部である。9は甕の口縁部と思われる。口縁部が折り曲げて作られている。

鉄器が1点出土した。第340図－2は鋒部が鋭利な鉄器である。平面形や断面形が弧を描く形状から、鉇と思われる。基部背面には木片が残る。



第333図　831番地　2号溝実測図（S＝1／40）



第334図　2号溝出土土器実測図

（4）　4号溝（第337図）

トレンチ西側で検出され、方向はほぼ磁北を向く。白色粘土層の上面で検出され、幅は1.45m、深さは0.7mで、底の幅は0.14mと非常に狭く、断面形は逆三角形を呈する。肩の勾配は、西側肩が緩やかなのに対し、東がやや急である。溝底北端と南端（間隔はほぼ2m）の比高差は5cmで、北から南へ緩やかに下がる。

遺物（第338図）

遺物は溝中央に集中して比較的多くの土器が出土した。いずれも底面からやや浮いた状態で出土している。1は甕の下半部である。2は大型の甕の底部と思われる。平底に近いレンズ状の底部である。3は高坏の坏部である。口縁部が内側へ屈曲し、口縁部上面が平らになっているため、口縁部の断面形は三角形を呈している。外器面はタタキ後縦刷毛で調整している。内器面は全面ハケ調整の後、放射状にヘラミガキを施している。このように口縁部が内傾する高坏は当遺跡では初例である。北部九州（豊前地方）に見られる高坏を強調したものか？6は甕の底部と思われる。非常に雑なつくりで、粘土を継ぎ足した痕が見られる。7は裾部を欠いた台付鉢である。半球状の鉢にやや長い脚がつく。外来系の土器であろう。8、9は甕の口縁部である。頸部がそれほどくびれない。8は頸部がほとんど曲がらない。8と9は手捏ね土器の鉢である。8は口縁部が緩やかに外へ開く。10はほぼ完形の器台である。

（5）　1号土坑（第339図）

トレンチ中央部で検出され、北半分は調査区外であるため全体を知ることはできなかった。プランはほぼ楕円形を呈し、長軸は不明であるが、短軸は0.67mを測る。深さは0.24cmであった。

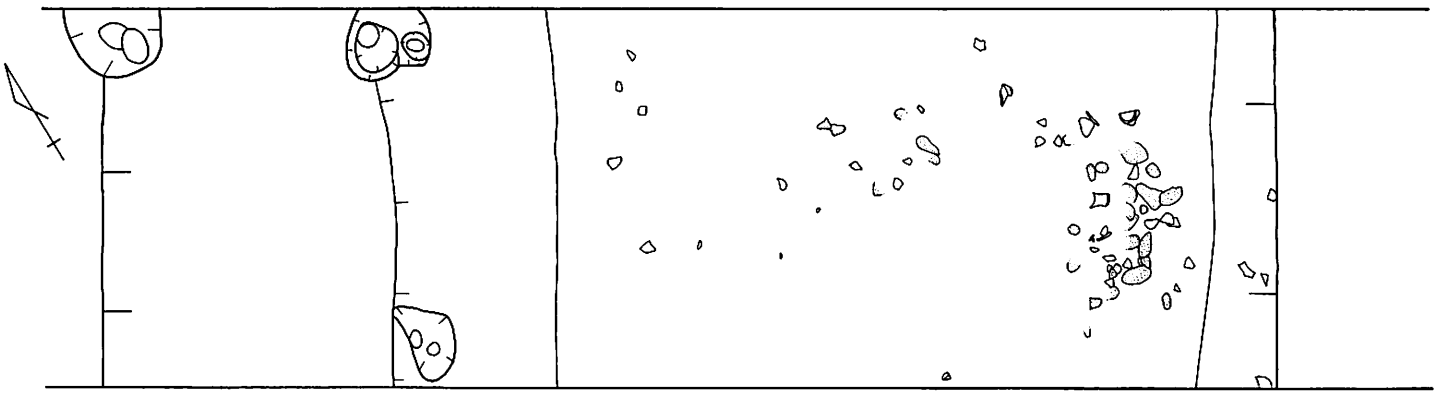
遺物

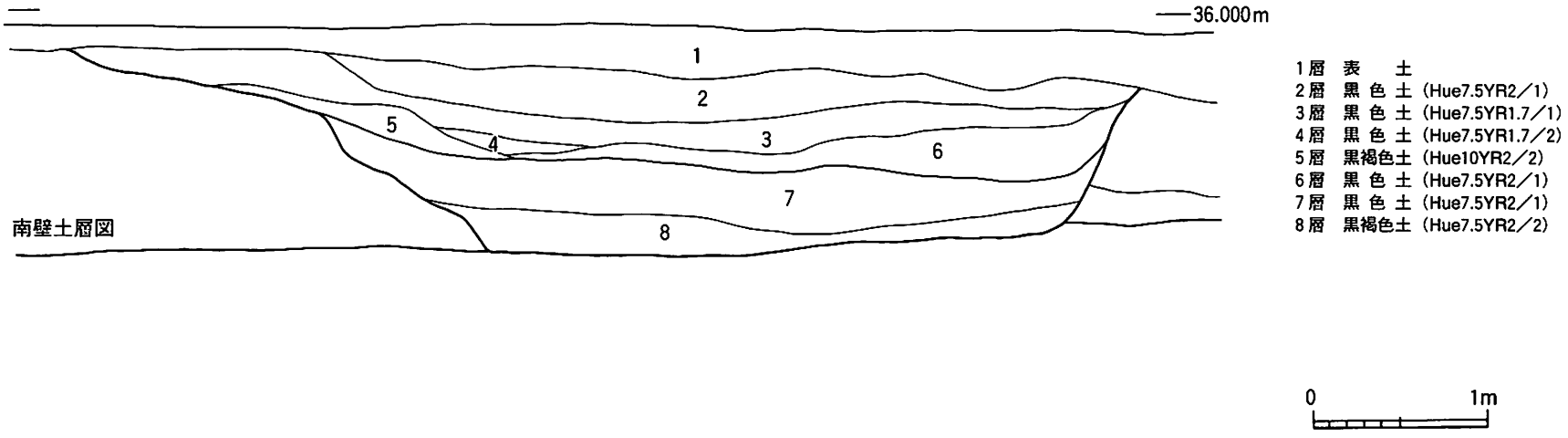
遺物は、埋土から小片の青磁片が出土した。

（6）　遺構に伴わない遺物（第342図）

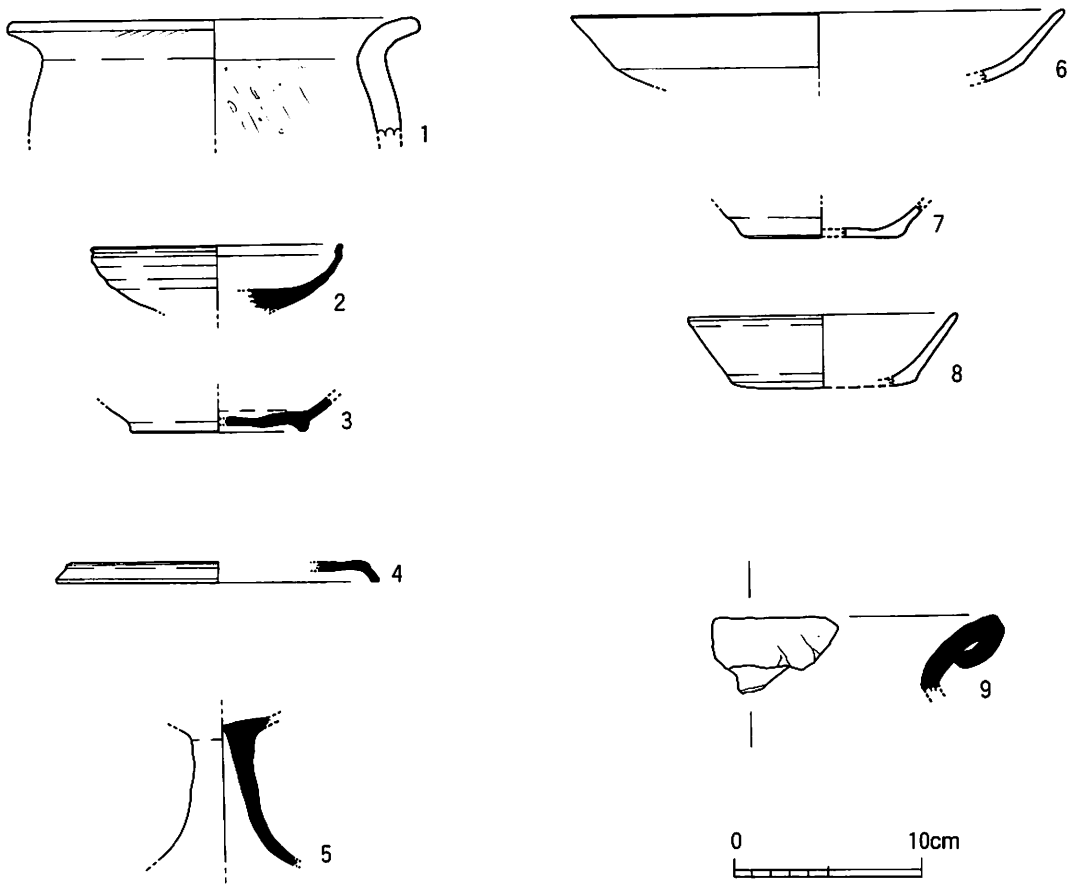
①弥生時代

1は高坏で、裾部を欠く。2は甕の口縁部である。口唇部と頸部突帯に刻目を施す。6は脚台付甕の下半部である。底部と脚台の接合部に指押しの痕が残る。4も脚台付の甕の下半部で、脚台部が非常に雑な作りとなっている。乾燥し終えた体部に無理矢理粘土を継





第335図　方保田831番地　3号溝実測図（S＝1／40）



第336図　3号溝出土土器実測図

ぎ足したようにも見える。脚台は指押し調整だけで、刷毛やなでなどの調整は施されていない。3は二重口縁の壺の口縁部と思われる。口の狭いタイプのもので、頸部もあまり長くない。5はほぼ完形の器台である。上半の一部を欠く。

②歴史時代

土師器　7～10は坏身である。7は内器面にヘラミガキを施す。10は口縁部を欠き、高台が外れている。17は坩堝の口縁部か？器壁が厚く、形がいびつで、器面の調整も雑である。器面はにぶい赤褐色または、赤灰色を呈する。18は深みのある鉢で、外器面底部にヘラケズリを施す。19は壺の口縁部と思われる。肩が張り、口縁部が短く外へ開く。頸部内器面にヘラの痕が残る。21は甑の底部と思われる。器壁が非常に厚い。

須恵器　11～13は坏蓋である。11は天井部を12,13はつまみを部分的に欠いている。14は高台付の坏身である。底部には粘土巻上げ痕が残る。高台は低く、断面が角張る。15は坏の高台部である。底部に長細く孔が穿ってある。16は盤の高台部と思われる。20は大甕の口縁部である。口唇部の外器面には波状紋が施される。頸部には格子状のタタキ目が残る。

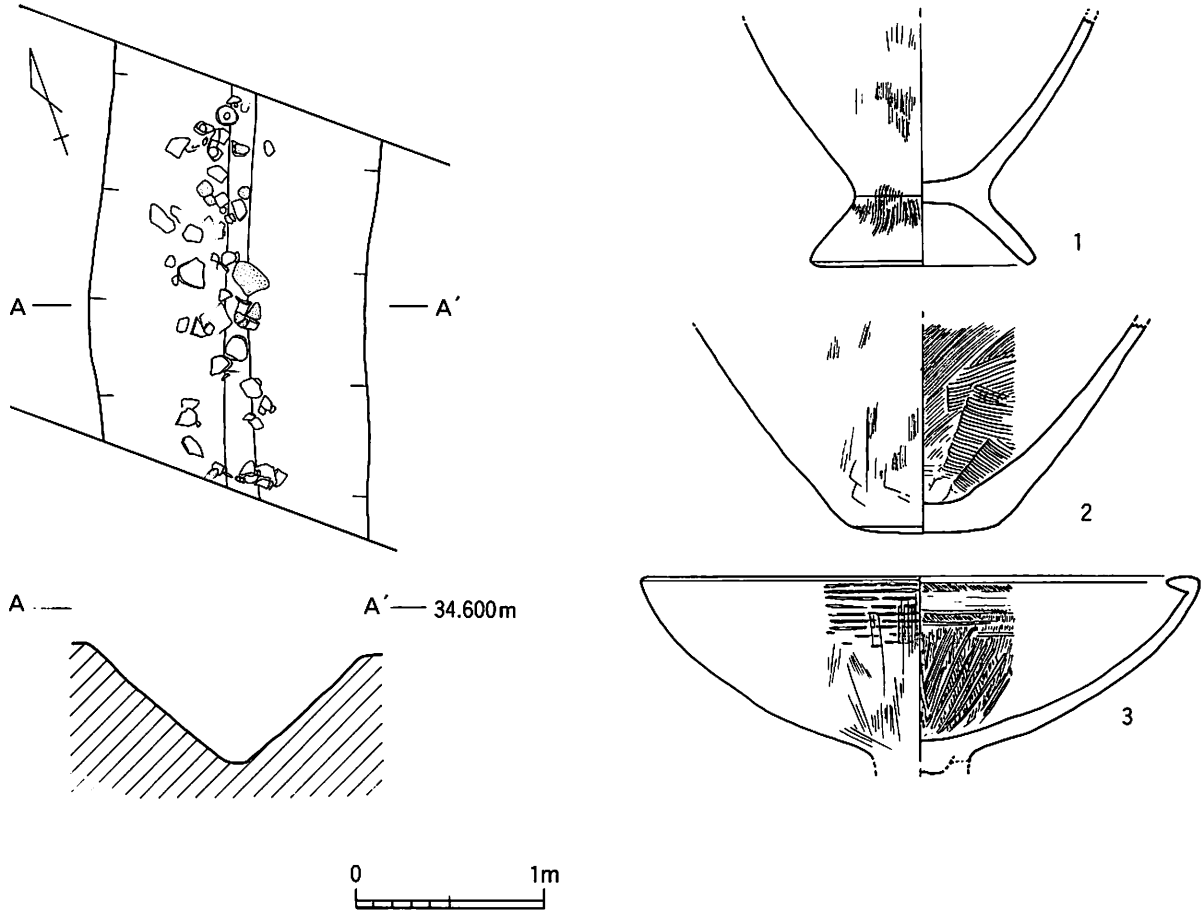
鉄器　古代の鉄器に該当するか判断がつかないが、この項に含めた。17－3は不明の鉄器である。下半は下端へいくほど薄くなるヘラ状になっている。

（7）　その他の遺物（第343図）

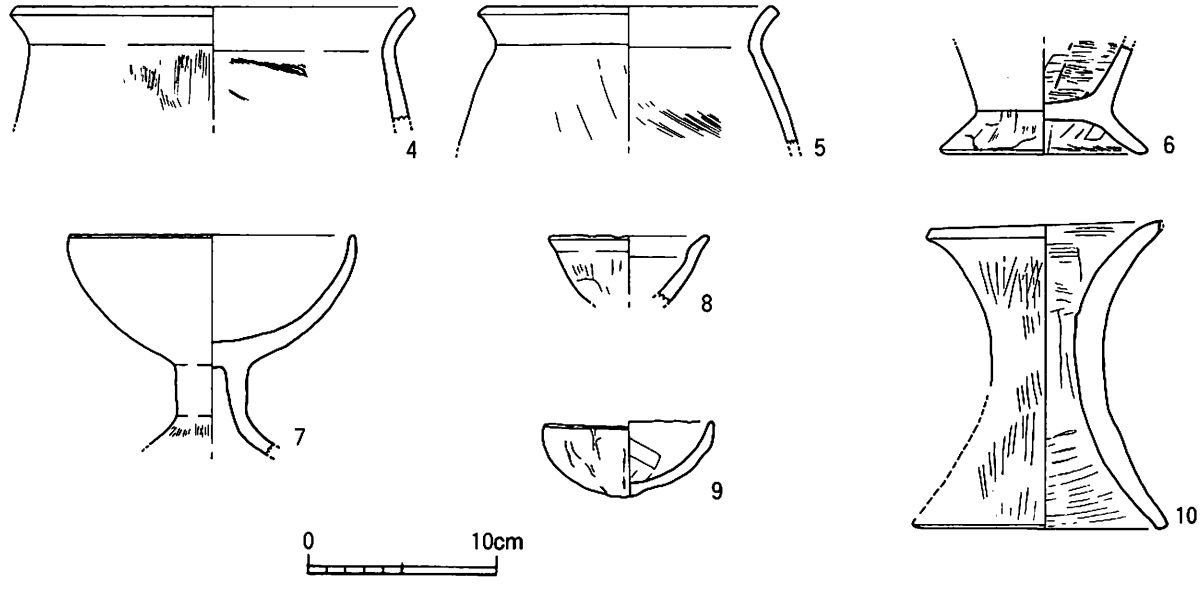
土器以外の遺物を掲載した。1は土製の勾玉である。長さは2.5cm、幅は1.0cmを測る。上部先端を欠いている。2～9は土錘である。5は3号溝から出土した。それ以外は黒色土からである。10は不明土製品である。2号溝から出土した。土製スプーンのようにも見えるが、柄のように突き出た部分は中空であり、椀状の部分とつながっている。11は把手か？一方の面に多数の刺突文が施されている。12～13は焼成粘土塊である。不定形で表面には植物の繊維痕が多数見られる。14は多孔式甑の底部と思われる。

（8）　まとめ

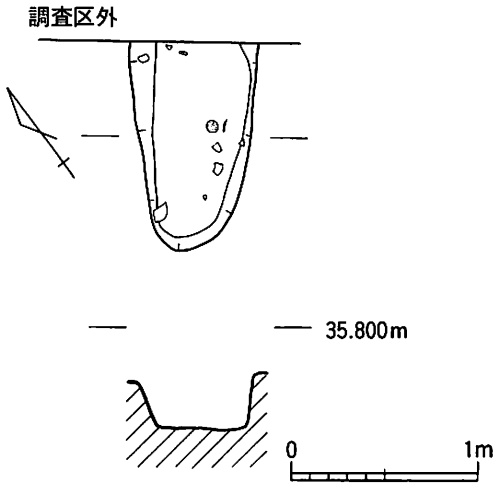
当調査区は、弥生時代の遺構密度が薄かった昨年度調査地よりさらに外側にあたる部分であったため、弥生時代の遺構が確認されないのでは、という考えもあった。しかし、最下層の白粘土層上面で弥生後期後葉の



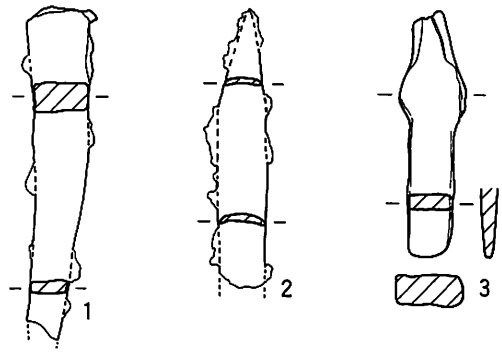
第337図　831番地４号溝　実測図（S＝1／40）



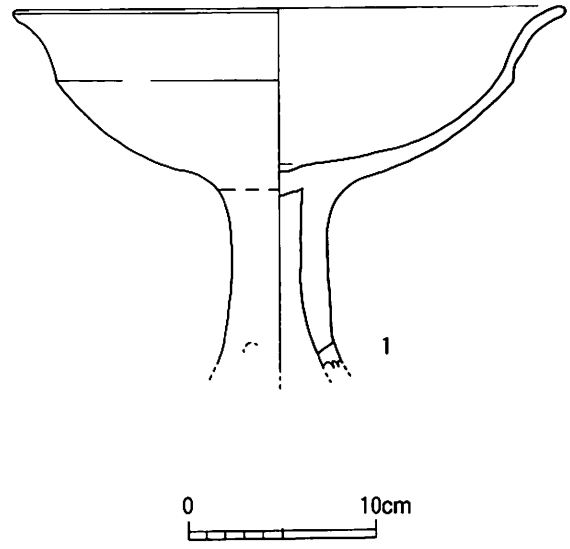
第338図　４号溝出土土器実測図



第339図　831番地　1号土坑実測図（S＝1／40）



第340図　方保田831番地出土鉄実測図
（S＝1／2）



第341図　遺構に伴わない土器実測図①

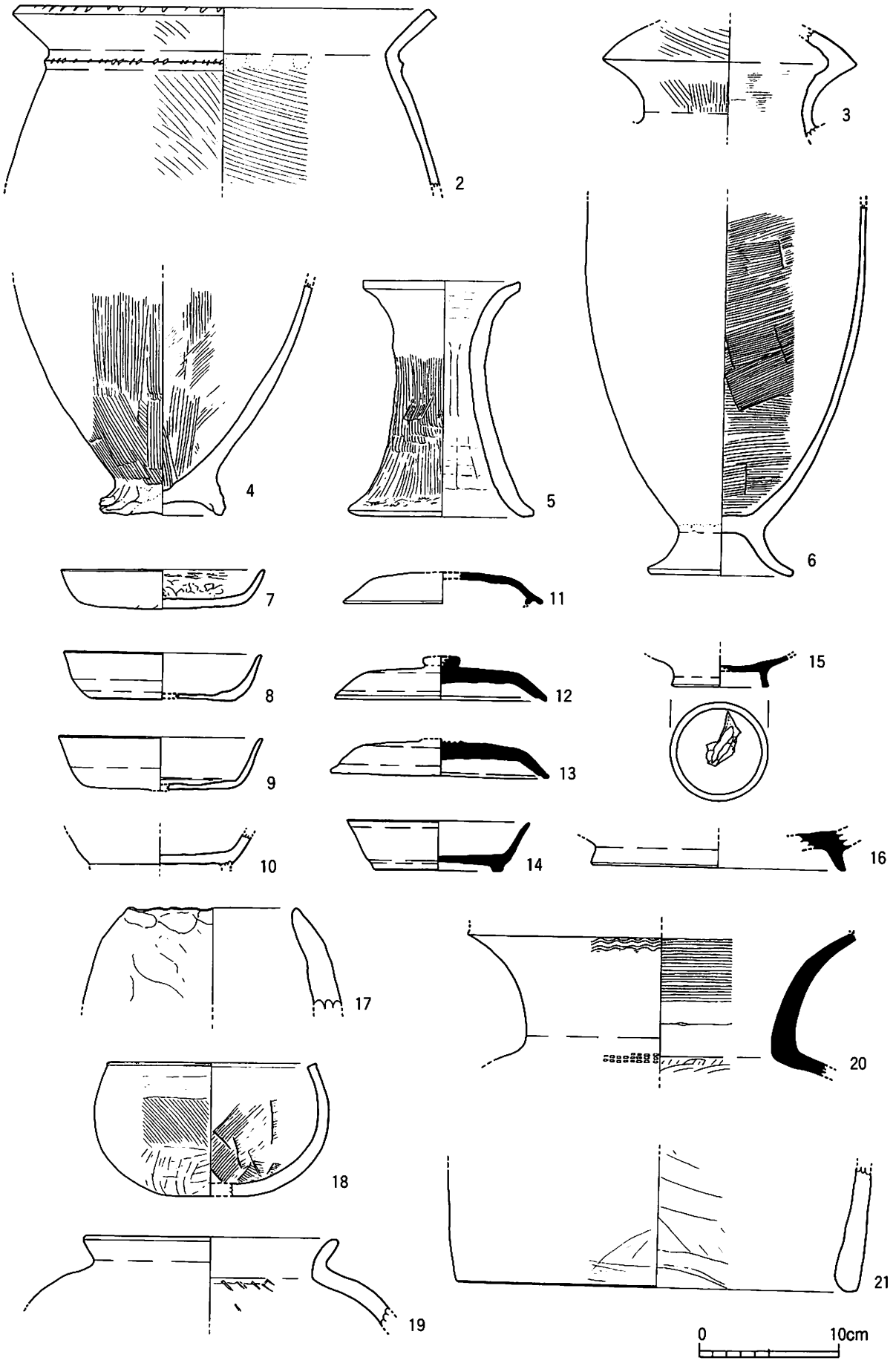
溝（4号溝）が検出されたので、少なくとも当調査区までは遺跡の範囲内であることが明らかとなった。

この4号溝は主軸がほぼ南北を向いており、遺跡の東端を示す谷の方向とほぼ同方向に走っていることが分かる。規模や方向、時期から考えると、平成10年度の調査で検出された813番地の溝及び814番地3号Tr.溝と同一である可能性が高い。前述のとおり、当調査区東隣の田圃は一段低くなっており、この畑の東端が台地の東端を示すものと思われる。この台地東縁に併行して、遺跡の内外を示す溝が長い距離で走っていたことが考えられる。4号溝から東側にかけて、つまり溝から外側と思われる場所については遺物の出土量も極めて少なく、遺構も検出されなかったことがこの予想を補強している。溝の埋没時期を考えると、比較的短期間のうちに埋まってしまっており、新たに掘り直されることはなかった。遺跡全体でみても、比較的古い時期にこの溝は役目を終えたようである。周辺の状況を見ると、溝埋没以降の遺構や遺物は見られないことから、活動範囲は遺跡の中心である西側へ移っていったと考えられる。

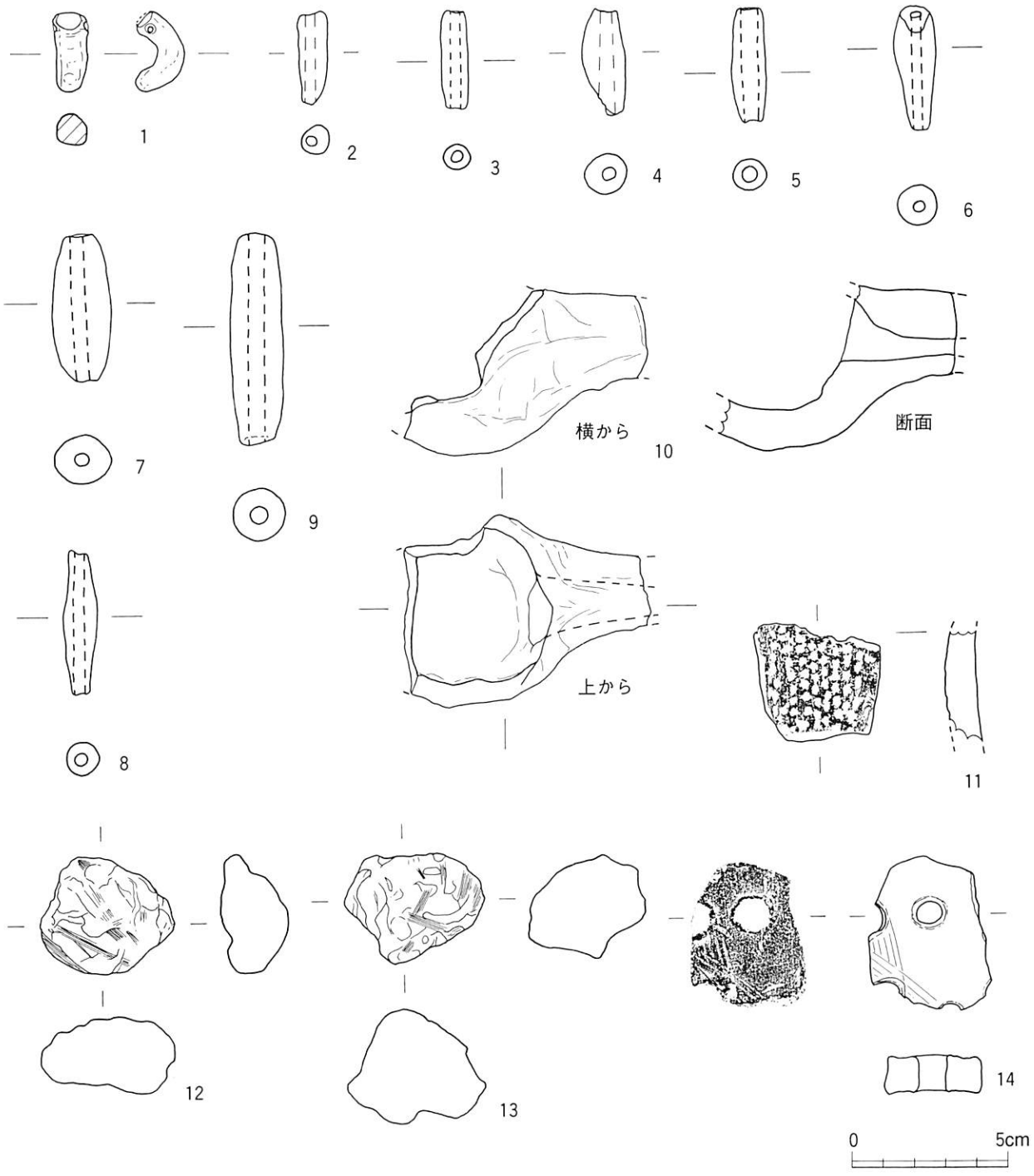
今回の調査で、台地東端を走る溝が少なくとも当調査区（831番地）まで続くことが確認されたが、さらに北へどのように走るのかは、今後の課題として残された。

弥生時代以外では、古代の遺構が良好に残っており、2条の溝状遺構が検出された。

出土遺物などから2つの溝ともほぼ同時期に造られたものと思われる。このうち3号溝については幅が5.4mと非常に広く、比較的大規模な溝として注目される。土層断面より少なくとも一度掘りなおされていることが分かったが、区画する溝として機能したのか。それとも防御的な性格を持ったものなのか、そして、なぜこのような大溝を掘削する必要があったのか、今回の狭小な調査では明らかにできなかった。今後の課題である。



第342図　遺構に伴わない土器実測図②



第343図　831番地出土その他の遺物実測図（土錘など）（S＝1／2）

第２節　932－１番地、932－２番地、932－４番地の調査

932－1番地と932－２番地は南北に接しており、932－1番地が南側に位置する。現状は畑地で、東隣は831番地である。932－１番地の南接地は標高が一段高く、現在は墓地になっている。

現状の地形はほぼ平坦にならされており、勾配はないが、以前は南から北へ向かって緩やかに標高が低くなっていたと思われる。

932－４番地は、932－２番地から一枚畑をはさんで西隣にある。現状は畑地で、地表面はほぼ平坦である。かなりの削平を受けている。

調査区については、932－１番地は地割りと同軸に２ｍ×２ｍのグリッドを３つ設定した。そして南方向から順に第１グリッド、第２グリッド、第３グリッドと名付けた。

932－２番地についても同様に、東西方向に20ｍ×２ｍのトレンチを設定した。

932－４番地は、畑の四隅のうち３箇所に２×２ｍのグリッドを設定した。３つをつなげると逆Lの字になり、南東側のグリッドを第１グリッド、北東側を第２グリッド、北西側を第３グリッドと名付けた。

（１）　932－１番地

①　第１グリッド（第344図）

ピットを14基検出した。直径は15～40cmで、深さは10cmから60cmを超えるものまであるが、30cmから40cmのものがもっとも多い。

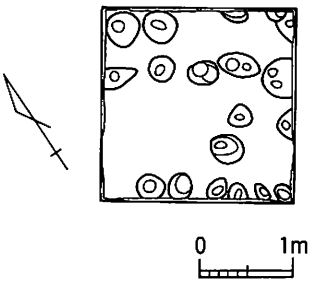
面積が狭すぎたため、建物になるかどうかなどは全く不明である。しかしながら、この密集した柱穴群は、平成10年度調査の813番地や825番地などで検出された柱穴群と似ており、古代の官衙的な建物群がこの地区まで広がっている可能性が考えられる。

遺物

遺物は量的に少なく、図化し、時代を限定できるものはなかった。ピットは埋土からみて古代のものと思われる。

②　第２グリッド（第345図）

グリッド北半分で住居跡と思われる遺構が検出された。検出されたのは竪穴の一部で、黒色土上面で検出され、床までの深さは35cmであった。床面からは４基のピットが検出され、直径は25から45cm、深さは６cmから20cmと浅い。このほか、壁沿いに直径20cmの範囲で焼土の散布が認められた。



第344図　方保田932-1番地第１Gr.全体図
（Ｓ＝１／80）

遺物（第346図）

遺物は浮いた状態で数点出土している。１は高坏の坏部である。住居内から出土した。口縁部は内傾し、内器面に放射状のヘラミガキを施す。外来系の高坏と思われる。２、３はグリッドの一括資料である。２は甕の脚台と思われる。底部に指押さえ痕が残る。３は高坏の脚部である。

③　第３グリッド（第347図）

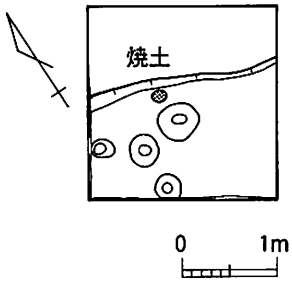
狭い調査区ながら、住居の床と思われる硬化面１面が検出された。西側が後世の撹乱等で失われている。床面は非常に硬化しており、直径40cm、深さ25cmのピットが１基掘り込まれている。床面及びその同じレベルから焼土や炭化物の散布が見られることから、焼失住居の可能性がある。規模等は不明である。

そのほか、硬化面範囲外からもピットが４基検出された。直径は20cmから30cmで、深さは15cm前後である。

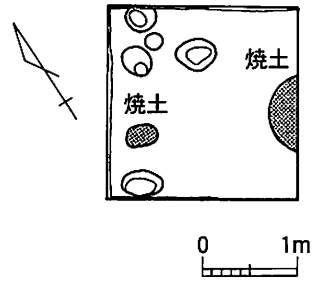
遺物（第348図）

遺物は少量で、硬化面に伴う遺物は小片のため掲載していない。胎土や器面調整などから後期後半の土器が主体と思われる。また、一括資料も後期後半の土器のみであるので、この硬化面は後期後半のものと考えてよいであろう。

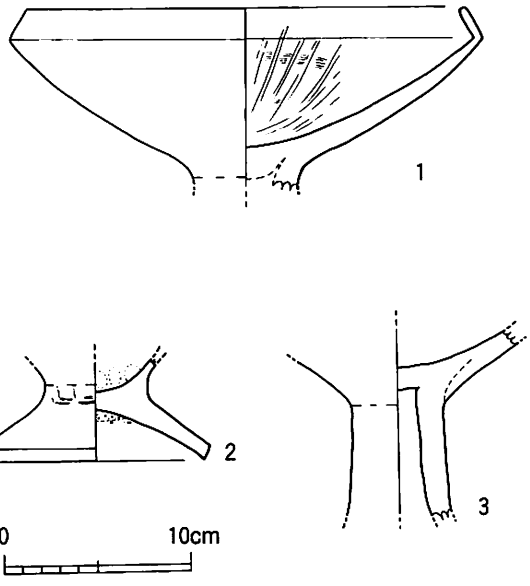
１、２はグリッドの一括資料である。１は甕の口縁部で、口縁部は外へ大きく開く。口唇部に一部煤が付着する。２は壺の底部と思われる。平底である。



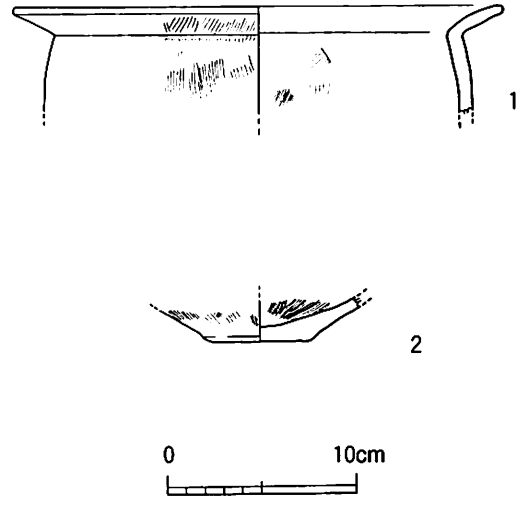
第345図　方保田932-1番地第２Gr.全体図
（S＝１／80）



第347図　方保田932-1番地第３Gr.全体図
（S＝１／80）



第346図　第２グリッド出土土器実測図



第348図　第３グリッド出土土器実測図

（２）　932－２番地（第349図）

検出面は黒色土層上面と褐色土層上面の２面である。黒色土上面においては、古代の住居跡が１基と不整形の土坑が検出された。また、下層の褐色土層上面では多数のピットと土坑を１基検出した。

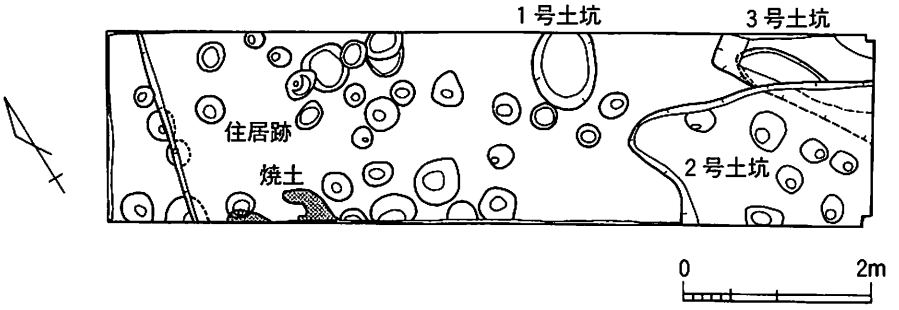
①住居跡（第349図）

黒色土上面において、方形を呈した白粘土が広がっていた。その範囲は、一部調査区外であったため長さは不明であるが、幅2.5m、厚さは６～10cmであった。その白粘土を取り除くと、下から焼土が検出され、それに伴って完形の土師器坏や甕の口縁部などが出土した。その焼土の東には硬化面が広がっていた。プランを把握できなかったが、おそらくカマド付きの住居跡だと思われる。

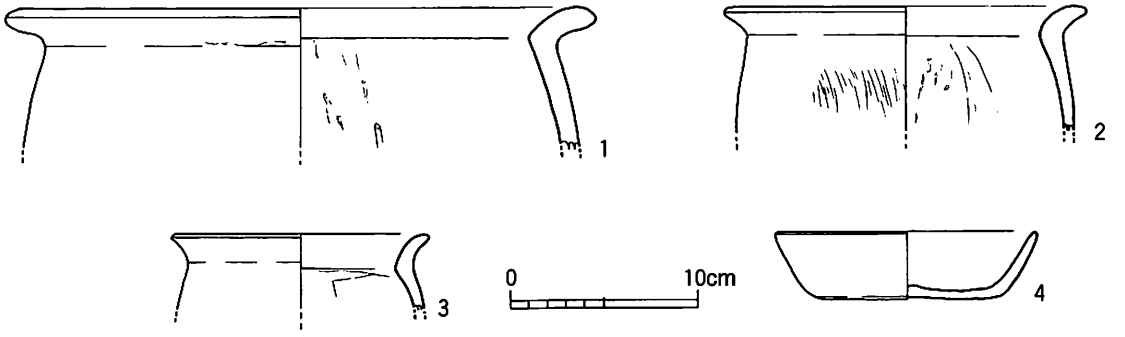
住居跡の規模は、プランが明確でなかったこと、調査区外の部分が多いこと、東側が不整形土坑に切られていることから不明である。

遺物（第350図）

遺物は土師器の甕と坏が出土した。１は大型の甕の口縁部である。口縁部が横に開く。２は中型の甕の口縁部である。３は小型甕の口縁部で直立気味に開く。４は土師器の坏で、完形である。底部には粘土ひも巻上げ痕が残る。



第349図　方保田932-2番地遺構配置図（S＝1／80）



第350図　住居跡出土土器実測図

②1号土坑（第351図）

トレンチ中央北側で検出された。北端が調査区外であるが、プランは楕円形と思われる。直径は推定96cm、短径は68cmで、深さは10cmと非常に浅かった。

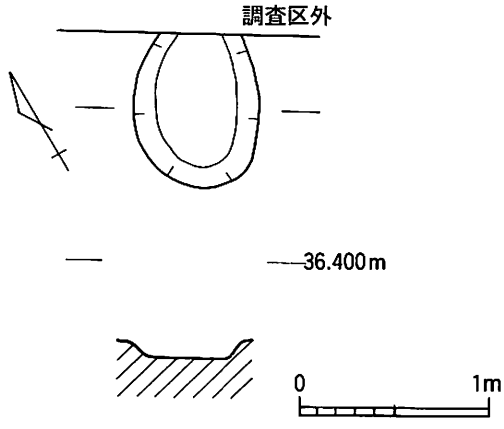
遺物はなかった。

③2号土坑（第352図）

トレンチの東側で検出された。プランの形は不整形で東西に長く延びており、北側の一部と東端は調査区の外になる。深さは20cmで、埋土はブロック状の褐色土を含む暗黒色土であった。床面は平坦で硬化面はなかった。

遺物

遺物は少量で、小片の土師器の破片が出土した。



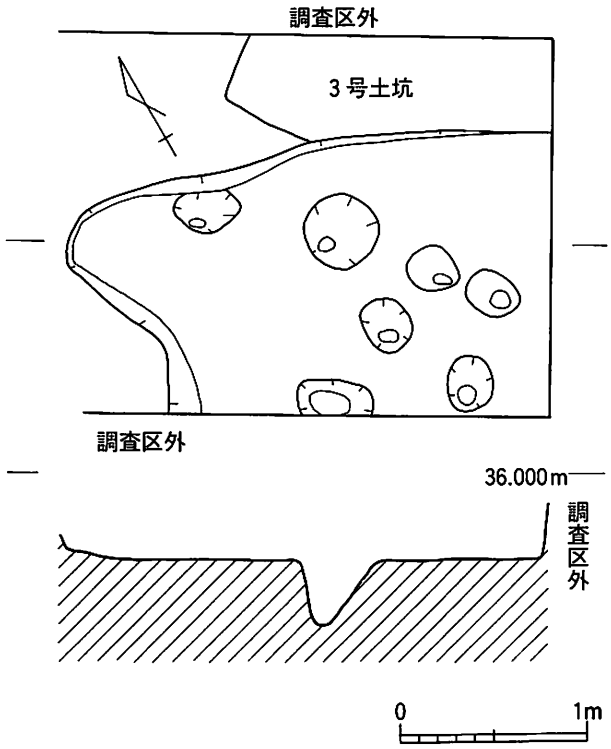
第351図　932-2番地　1号土坑実測図
（S＝1／40）

④3号土坑（第353図）

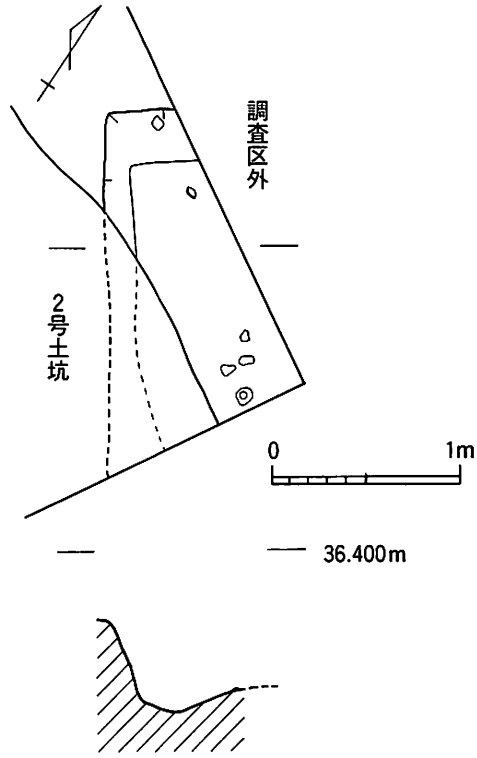
トレンチ北東隅で検出された。半分以上が調査区外であるため、規模は不明である。プランは長方形を呈するものと思われる。検出面から床面までの深さは60cmで、黄色粘土のブロックを含む黒褐色土が埋土である。

遺物（第354図）

遺物は弥生土器の小片が数点で、実測可能なものは甕の脚台（1）1点であった。



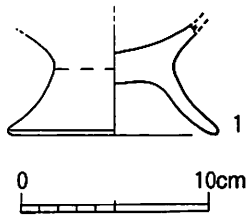
第352図　932-2番地　2号土坑実測図
（S＝1／40）



第353図　932-2番地　3号土坑実測図
（S＝1／40）

④遺構に伴わない遺物（第355図）

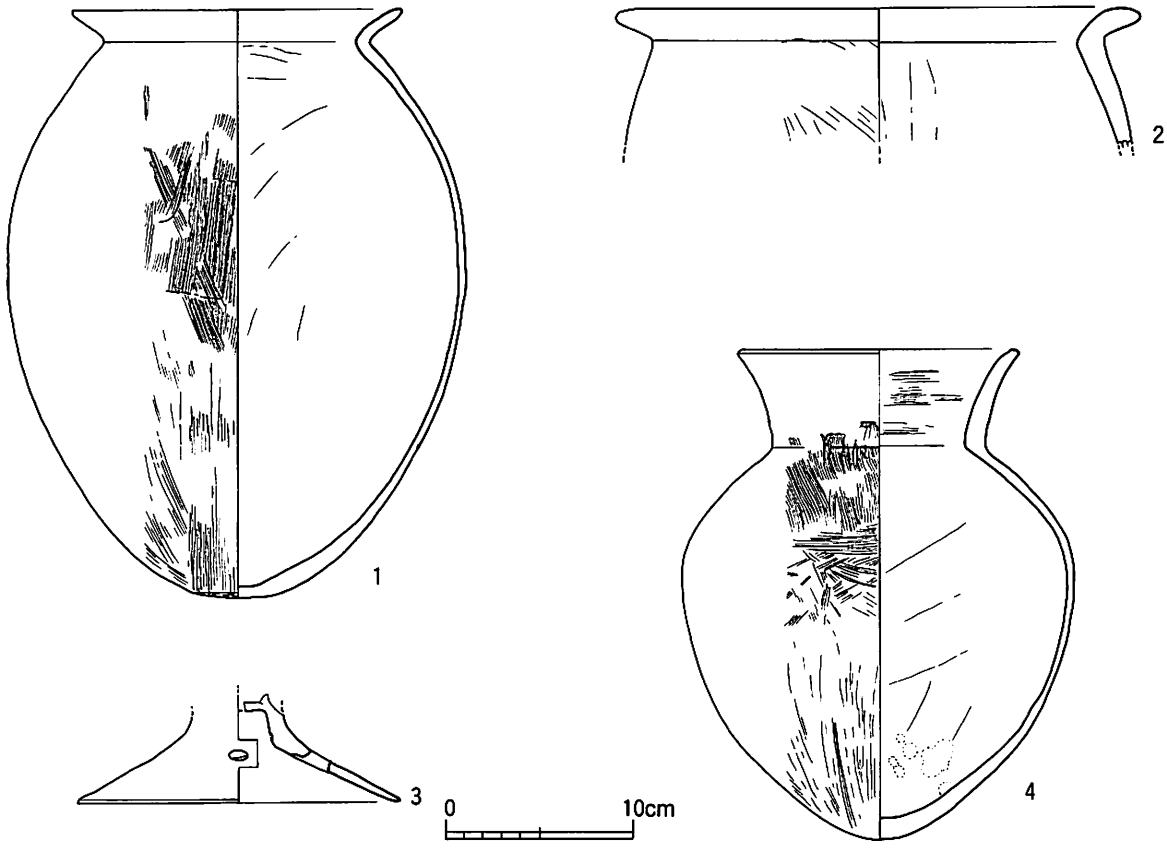
1、3，4はトレンチ北西隅で出土した。完形に近いものもあるため、何らかの遺構に伴うのかもしれないが、残念ながら遺構は検出できなかった。いずれも出土地及びレベルが近いため同時期の一括資料の可能性がある。1はほぼ完形の布留系の甕である。底部はやや平底気味で、胴部は丸みを持ち、ほぼ中位で最大径となる。口縁部はやや短く外に開き、端部は丸い。器面調整は、外器面は縦またはナナメ方向のハケ調整で、内器面は不明瞭だがヘラ削りが施されているのが確認される。2は古代の土師器甕の口縁部である。口縁部が大きく外へ開く。3は精製土器で、台付鉢の脚部か？外器面はきれいに磨かれており、光沢をもつ。胎土は精緻で、不純物が入ってない。土器の割れ方が特徴的で、剥離した割れ方をしている。古代以降の新しいものかもしれない。4は完形の広口壺である。口縁部はラッパ状にやや広がり、胴部はやや肩が張る。外器面はハケ調整で、最大径の部分が横方向で、それ以外は縦方向である。内器面は口縁部が横なでで、胴部から底部はナナメ方向のヘラ削りである。底部近くに指跡が残る。胴部中位が最も器壁が薄く、口縁部も比較的厚みがある。



第354図　3号土坑出土土器実測図

（3）　932－4番地

いずれのグリッドも後世の削平が激しく、表土の下が地山の層となっており、特別な遺構も検出されなかった。また、遺物も近世または近代陶磁片が数点出土したのみで、弥生時代に比定されるような遺物は確認されなかった。これにより、平面図は省略させていただく。



第355図　遺構に伴わない土器実測図

（4）　まとめ

今回の区域では、方保田東原遺跡において中心の時代である弥生時代の遺構は数基確認されたものの、全体的に遺構の密度は薄く、遺物の出土量も少なかった。包含層の遺物の量についても同様で、出土量は少ない。これらのことから、当調査地点は遺跡の外周部であることが窺える。弥生時代後期後半の早い時期に短期間集落が営まれた後、この活動が終わってから古代に入るまでの間、生活域としても墓域としてもこの地は利用されなかったことが分かった。

一方、古代については932－２番地第１グリッドのピット群、932－２番地の住居跡など、ある程度の遺構が検出された。平成10年度調査の814番地で出土した円面硯や825番地のピット群、および今年度の831番地で検出された３条の溝などとあわせると、この一帯が古代において政治的に重要な位置をしめる場所であった可能性が高くなってきた。今後周辺の調査を行っていくことで徐々に明らかになっていくであろう。

932－１番地、932－２番地については調査区が狭かったため、遺構は一部しか検出できず、その遺構が何であるか判断することがほとんどできなかった。そのなかで２基の住居跡が検出され、遺跡の存在は確認できたものの、遺構密度や遺物の出土量から、831番地同様、この一帯が集落の外周部で、わずかの期間しか使用されなかったことが確認された。

また、今回始めて932－４番地において馬見塚の集落内を初めて調査することができたが、残念ながら後世の削平のため遺構は残っていなかった。人家の敷地内を調査するのは様々な問題が多いが、現在の集落が遺跡の一部であったのかどうか、想定はされているものの確認までは至っていない。今後も地元の協力を得ながら確認調査を進めていく必要がある。

第３節　881番地、888番地、893番地、1019番地の調査

これらの３つの地区は、方保田台地の外側にあたる。小さな谷を越えた台地上で、そこに遺跡が続くのかどうかを確認するために、各番地に２箇所ずつ調査区を設けた。図２で分かるように、東から888番地、881番地、893番地と続く。881番地は他の二つよりも一段下がった場所であり、888番地と893番地はほぼ同じ標高である。現状は３つとも畑地である。

（１）　881番地（第356図）

当地は東西方向へ長く延びた畑地で、西へ緩やかに傾斜している。この畑の東西両端にトレンチを南北方向に設定した。トレンチの軸はいずれも畑の区割りに沿っている。互いのトレンチの間隔は45mである。

①第１トレンチ

畑の東端に設定した。トレンチの長さは８ｍ、幅２ｍで検出面までの深さは非常に浅く、わずか20cm～30cm強であった。表土の下層がローム層という部分もあり、包含層の厚さは２～22cmであった。後世の削平を受けている可能性がある。

検出された遺構は溝状遺構1条だけである。

溝（第356図）

トレンチ北端で検出された。幅は2.8m、深さは0.58mであった。断面は南側の傾斜が急で、北側が緩やかである。また、北側には一段幅40cm程度のテラスがある。溝の主軸はトレンチにほぼ直行していて、北西を向く。溝底面は南東から北西に向かって緩やかに傾斜していく。

遺物が１点も出土しなかったため、時期の判断はできなかった。

②第２トレンチ

畑地の西端に長さ８ｍ、幅２ｍで設定した。表土の下層である20cm堆積した暗赤褐色土の下は礫層であった。ローム層も確認されなかったことから、大規模な撹乱、削平が行われた可能性が高い。

遺構、遺物は全く確認されなかった。

（２）　888番地

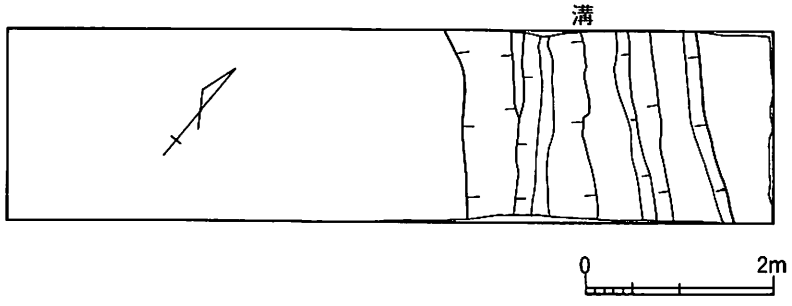
現状は、ほぼ平坦の広大な畑である。当地とつながって広がる西隣の畑が893番地であり、一段落ちた南側の畑が881番地である。

トレンチは２つで、いずれも軸を同じくし、長さ３ｍ、幅２ｍに設定した。西側のトレンチを第１トレンチ、東側を第２トレンチとした。互いの距離は14mである。

①第１トレンチ（第357図）

検出された遺構は、イモ穴と溝状遺構であるが、いずれも最近の遺構であると思われる。

遺物は出土しなかった。



第356図　方保田881番地遺構配置図（Ｓ＝１／80）

②第２トレンチ（第358図）

検出されたのはイモ穴のみで、これも最近の遺構である。

遺物の出土はない。

（３） 893番地

現状は畑地で、888番地の西隣に位置する。地表面はほぼ平坦である。

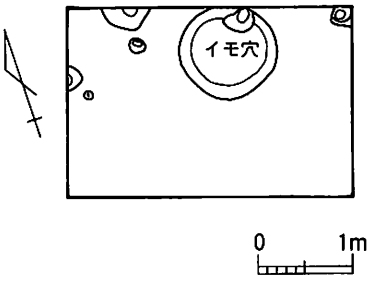
任意に３×２ｍのトレンチを同軸で２つ設定した。

南側のトレンチを第１トレンチ、北側を第２トレンチとしたが、発掘の結果、いずれのトレンチも表土の下が地山で、遺構、遺物も見られなかった。

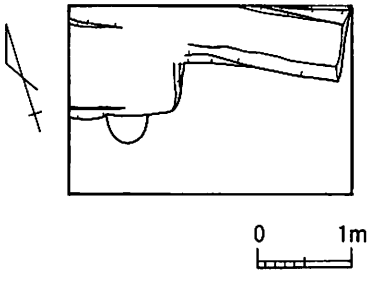
（４） 1019番地

方保田台地北東端の段下にあたる。台地上との比高差は２ｍ強あって、かなりの段差になっている。現在崖は石垣によって崩落防止が施されている。今回はその石垣の方向と同軸に長さ３ｍ、幅２ｍのトレンチを設定した。

調査の結果、黒褐色土など他の地区で包含層とされる土が確認されたものの、遺物が全く出土せず、遺構も検出されなかった。



第357図　方保田888番地第１Tr.遺構検出実測図（Ｓ＝１／80）



第358図　方保田888番地第２Tr.遺構検出実測図（Ｓ＝１／80）

（５） まとめ

台地外側の調査では、遺構、遺物とも皆無に近く、方保田台地と対照的であった。881番地において溝状遺構が１条検出されたが、遺物がなかったため時期は不明である。しかし、包含層からは弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺物は一切出土しなかったので、この時期から除外してよいと考えられる。

今回の調査区は後世にかなり大規模な撹乱が行われているようで、包含層の堆積も見られなかったところもあった。よって、遺跡と認定する材料がないことから、当地が遺跡の範囲外であると結論付けて差し支えないと考える。また、互いの台地の間には地形的に見ても谷が一つ入るため、これが遺跡を区切っていた十分な要素であったと思われる。一方、方保田台地の裾にあたる1019番地においても、遺構、遺物が確認されなかったことから、遺跡は台地の上面までが範囲であると考えてよいであろう。

ちなみに台地北東端にあたる旧大道中学校校庭遺跡は、以前、弥生時代後期の土器が多量に出土しているのが確認されている。この遺跡も方保田東原遺跡の一部と捉えるべきだろう。

以上のことをまとめると、方保田東原遺跡の北東部は旧大道中学校校庭遺跡まで広がり、その北東の台地の端が遺跡の範囲となる。

これらのことから方保田東原遺跡は、西は大道小学校校庭遺跡から東は旧大道中学校校庭遺跡まで広がる面積約35haという巨大な遺跡であると結論付けられる。これまで、方保田台地上の遺跡は「方保田東原遺跡」、「塚の本遺跡」、「大道小学校校庭遺跡」、「旧大道中学校校庭遺跡」の４つに分けて考えていたが、今回を含めたこれまでの調査成果を踏まえ、方保田東原遺跡と名称を一つにまとめることにしたい。

第４節　177－２番地の調査

現状は平坦な畑地で、トウモロコシが栽培されている。南東約20mには前方後円墳の亀塚古墳がある。設定したのは南北３m、東西２mのトレンチで、表土から1m下のローム層までを発掘した。基本土層は表土が20cm、耕作土が10cm、そして黒褐色土が30cm、黒色土が33cm堆積し、この黒色土層から弥生土器と縄文土器が出土する。下層に黒褐色土が堆積し、その下が基盤の層であるローム層になる。

検出された遺構は15基のピットと土坑が１基である。またプランが不明だが、硬化面２面が検出された。

（１）　土坑（第359図）

トレンチの中心で検出された。長軸0.74m、短軸0.59mを測り楕円形を呈する。深さは約0.20mである。南側にはピット１基あるが切り合い関係は不明である。床面は入り組んでおり、検出面から最下面までに２段のテラスがある。

遺物は小片の弥生土器であった。

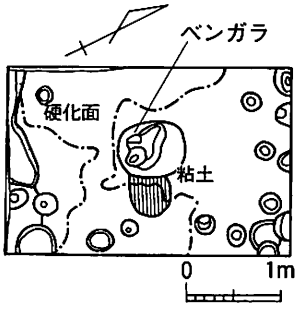
（２）　硬化面（第359図）

トレンチの東から西へかけて広がっていた。南北方向の最も幅の広いところで２mを測る。

この硬化面から3cm浮いた状態で鮮やかな赤色顔料の塊が出土した。

（３）　遺構に伴わない遺物（第360図）

縄文土器



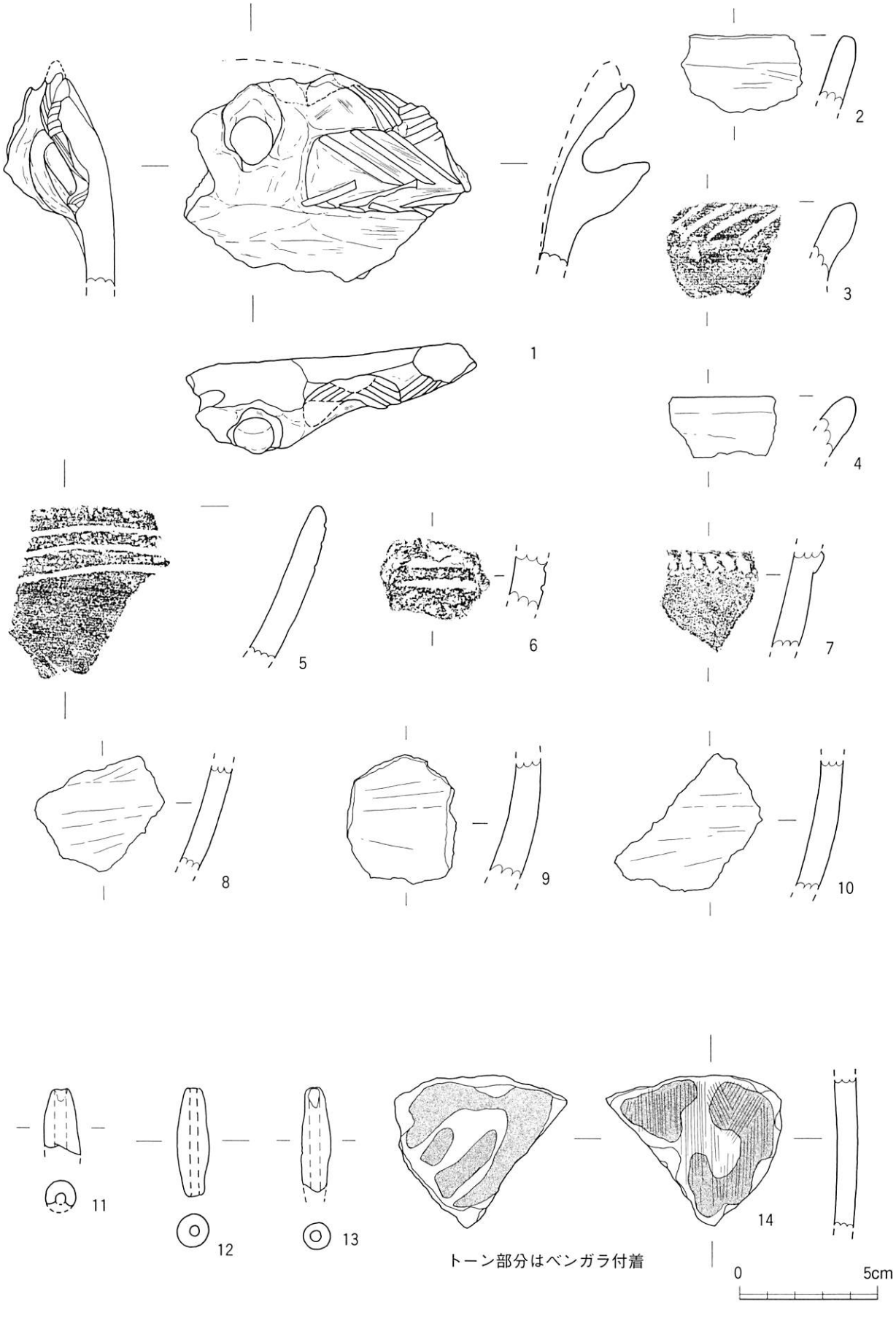
第359図　方保田177-2遺構検出状況実測図
（S＝１／80）

（４）　まとめ

この調査区では狭小な調査面積であったため、遺構の確定までは至らなかったが、硬化面を確認したことから、住居跡があったことが推察される。

遺物については、当遺跡では珍しく縄文土器が出土した。深鉢の口縁部で立体的な装飾が施されている。

また特筆すべきものとして、ベンガラ塊が挙げられる。硬化面から約３センチ浮いた状態で検出された。今までも当遺跡で硬化面（住居跡床面）からの検出例はあるもののこれほど色が鮮やかな例は初めてで、その質の良さが窺える。これらベンガラなどの赤色顔料に関する遺物や検出例の多さは当遺跡の特徴の一つに挙げられる。時期は、縄文時代か弥生時代かという問題が残るが、土層や遺物から弥生時代後期の可能性が強い。



第360図　177-2番地　出土遺物実測図（S＝1／2）

第５節　220番地の調査

方保田台地の南端部にあたる。現状は畑地で、南は竹林になっている。その竹林のすぐ先は菊池川で、台地上面と川面までの比高差は10数mにもなる。断崖絶壁である。

２つの調査地点を設け、南側のトレンチを第１トレンチと名付けた。もう一つは２mの幅で20mの長さを東西に設定し、これを第２トレンチとした。トレンチの軸はどちらとも、現在の畑の地割りに沿っている。基本土層は20cmの表土、古代～中世の包含層である黒褐色土層が20cm、弥生時代の包含層である黒褐色土層が30cm、そして検出面で基盤の層である黄色粘土層となる。

（１）　第１トレンチ（第361図）

南北に３m、東西に２mのトレンチで、菊池川に近い方の南側に設定した。南側で土坑が検出されたので、その規模を確認するために西へ１m拡張した。検出されたのは中世の円形土坑が１基と時期不明の不整形土坑が1基である。このほかピットが大小あわせて30基検出された。

①土坑（第361図）

トレンチ南側で検出された。土坑の約半分が調査区外のため、明確な規模は不明であるが、長軸3.4m、短軸3.0mの楕円形を呈するのではないかと推定される。深さは0.3mで床面はほぼ平坦である。張り床は施されていない。床面には規則的に並んだ4基のピットが検出された。また、土坑の外ではこれを取り囲むようにピットが５基並んでいた。これらは土坑に付随するものと考えられる。

遺物（第362図）

この土坑内からあわせて６点の土師椀が出土した。このうち３点はほぼ完形の状態であった。6点の椀のうち１～３は高台がない。高台の付く椀は、高台が高く裾が外に広がる10、９、７、６と高台が低い11と８がある。５も椀と思われるが器形が異なる。体部が直立気味で、口縁部端部がわずかに開く。3-2は瓦質土器で口縁部に菊花文のスタンプが施されている。このほか小片の緑釉片が１点、青磁片が10点、白磁片が12点、土錘1点のほか凝灰岩片、礫が出土した。一つの遺構からこれほどの輸入陶磁器が出土するのは当遺跡では例を見ない。

②遺構に伴わない遺物

鉄器　１点出土した。第385図－１は薄片状鉄片である。平面形は菱形に近い。非常に薄く、実用に耐えたのか疑問である。

（２）　第２トレンチ

220番地の北端のあぜに沿って、東西方向20m、南北方向２mのトレンチを設定した。検出された遺構は、溝状遺構が３条、土坑が１基である。

①１号溝（第363図）

トレンチ西端で検出された。溝の西半分が調査区外であったため溝の幅は確認できなかった。また、遺構掘削にあたっては危険防止のため、部分的に掘下げることにとどめた。確認できた溝の東肩により、その方向が北東－南西を向くことが分かる。深さは1.26mとかなり深い。大規模な溝であることが想定される。埋土には２cm大の小石を多量に含み、青磁片の小片が出土した。

②２号溝（第364図）

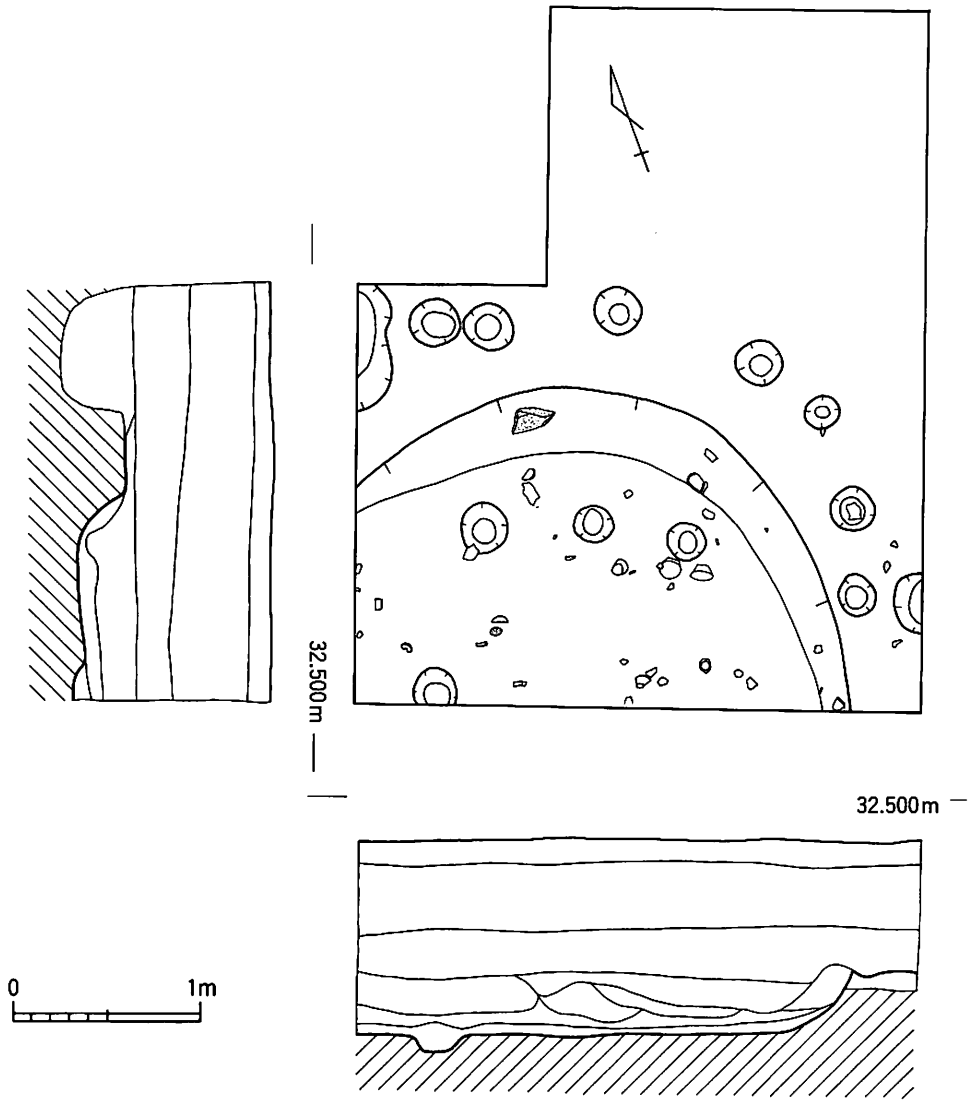
トレンチ中央付近で検出された。西肩が古墳時代の削平により破壊されているので、検出面での溝の幅は不明であるが、推定で約２mと思われる。溝底の幅は0.36mを測る。検出面からの深さは１mで、東側斜面には、幅0.32mのテラスが一段設けてある。溝の方向はほぼ南北を向く。

溝の西半分に集中して土器が出土した。埋土中のものが多く、溝の埋没途中に廃棄されたものと考えられる。遺物の量は、他の一般的な溝に比べるとそれほど多くない。特に中央から西側にかけて遺物が少ないのは、古墳時代かそれ以降の段階で削平を受けたためと思われる。

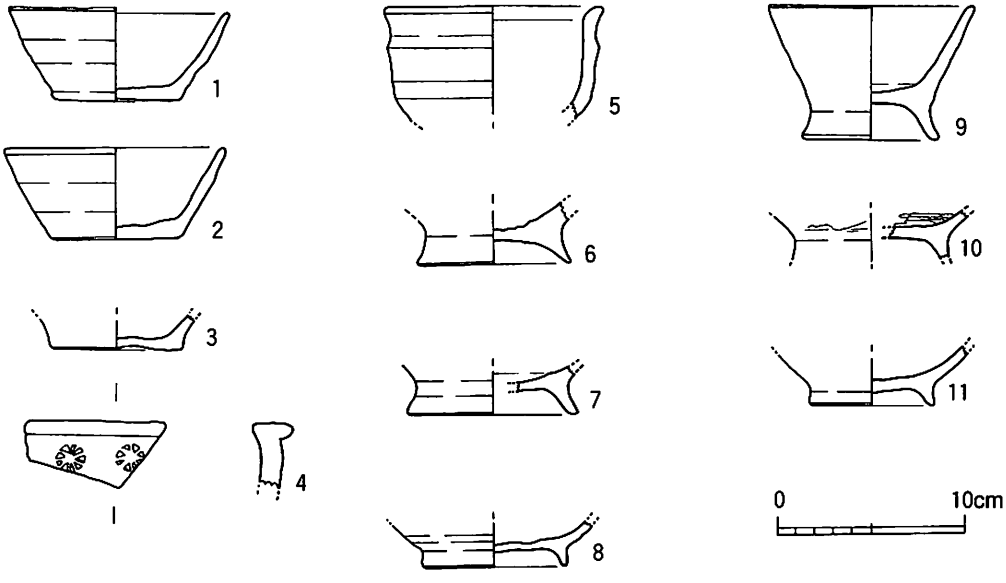
遺物（第365図）

土器は甕、壺、器台、鉢が出土した。

１、２は甕の口縁部である。１は外器面にナナメ刷毛が施される。２は、外器面にタタキ目が残り、タタキ後にナナメ刷毛が施される。３～５、10は甕の底部及び脚台である。３、４には脚台上位の内器面に砂型がつく。７は広口壺の口縁部、頸部である。口縁端部を欠く。頸部には突帯がめぐり、突帯の下位に櫛描平行文、櫛描波状文が施されている。平行文後に波状紋



第361図　第１トレンチ　実測図（Ｓ＝１／40）



第362図　第１トレンチ土坑出土土器実測図

が描かれている。6は複合口縁壺の口縁部である。頸部から外反して直立する。8は広口壺の口縁部で、頸部に刻目突帯がめぐる。9は器台の上半部である。上端に刻目を施す。15は完形の器台である。9と同様に上端に刻目を施す。下半外器面にはタタキ目がわずかに残っている。内外器面ともにハケ調整が施されている。11、12、14は無頸鉢である。11と12の口唇部は内傾する。13は有頸鉢で、口縁部が直立する。

③3号溝（第366図）

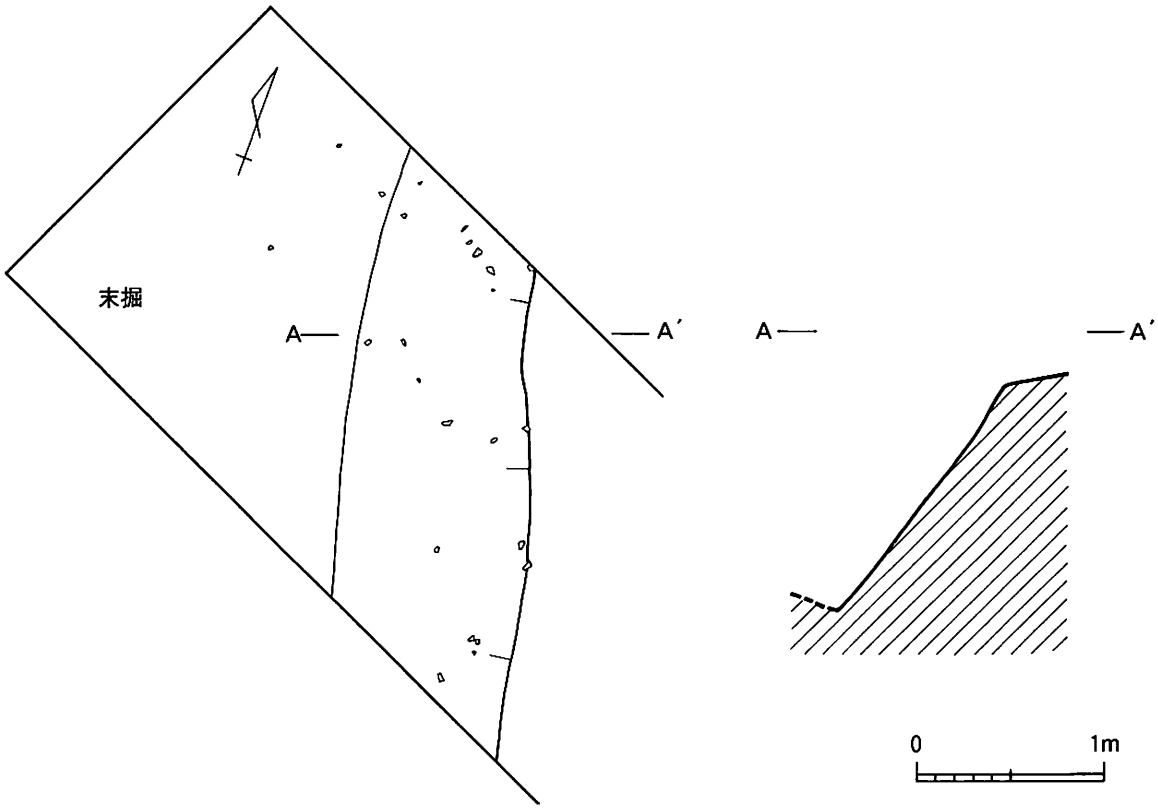
トレンチ東端で検出された、幅2.35m、深さ1.17mの溝である。断面形は逆台形を呈しており、溝底の幅は1.40mを測る。土層断面より埋土は自然堆積であり、両脇から土砂が流れ込んでいると当初考えられたが、出土遺物から見ると時期差のある遺物が混在しているために、自然埋没とは考えにくい。短期間のうち人為的に埋められた可能性が考えられる。

遺物（第367～381図）

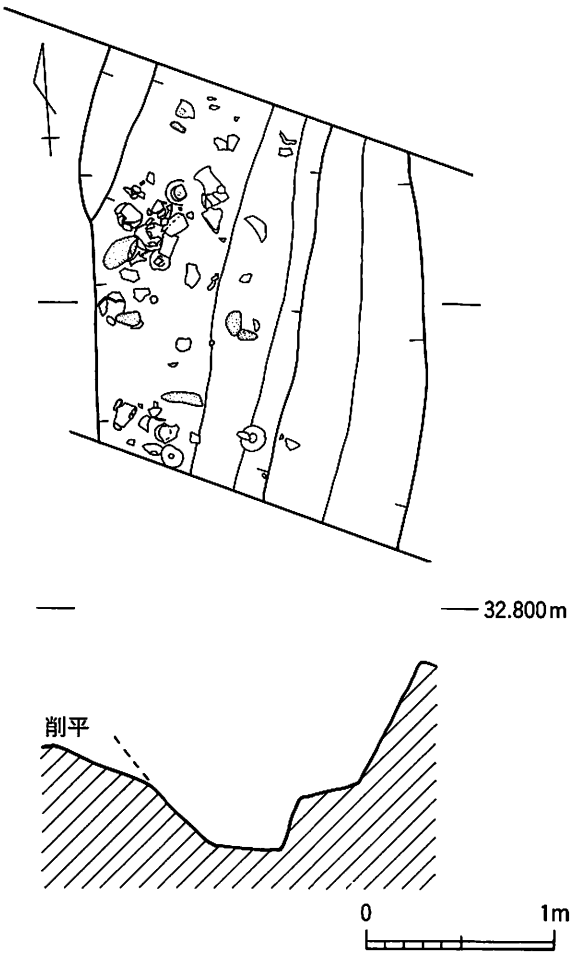
溝からは大量の土器が出土した。各層から出土したが、特に2層、5層、6層からの出土量が目立つ。器種は甕、壺、高坏、鉢、器台、片口である。各層ごとに記述する。

1層　1は完形の小型甕である。なで調整が施されている。3は完形復元された鉢である。平底で、深い。口縁部は指調整によって器壁が薄くなっている。底面にはヘラ記号が施されている。2は広口壺の口縁部である。頸部に突帯がめぐる。4、5は完形の器台である。5はかなり細くくびれる。いずれもハケ調整が施されている。

2層　6～16は甕である。16は大型甕の上半部、14は甕の下半部で、15は脚台を欠く。それ以外は完形の甕である。このうち、外器面にタタキ目が残るものが（10～16）で、タタキ目がないものが（6～9）である。10～12は縦刷毛が施されているため、タタキ目がわずかにしか見られない。胴部の器面調整はおおむねハケ調整で、なでを施されているものもある。全体的に、形がいびつで、作りが雑な印象を受けるものが多い。また、被熱しているものもあるが、これらは焼土及び炭化物と伴って出土した影響と思



第363図　第2トレンチ　1号溝実測図（S＝1／40）



第364図　第2トレンチ　2号溝　実測図
（S＝1／40）

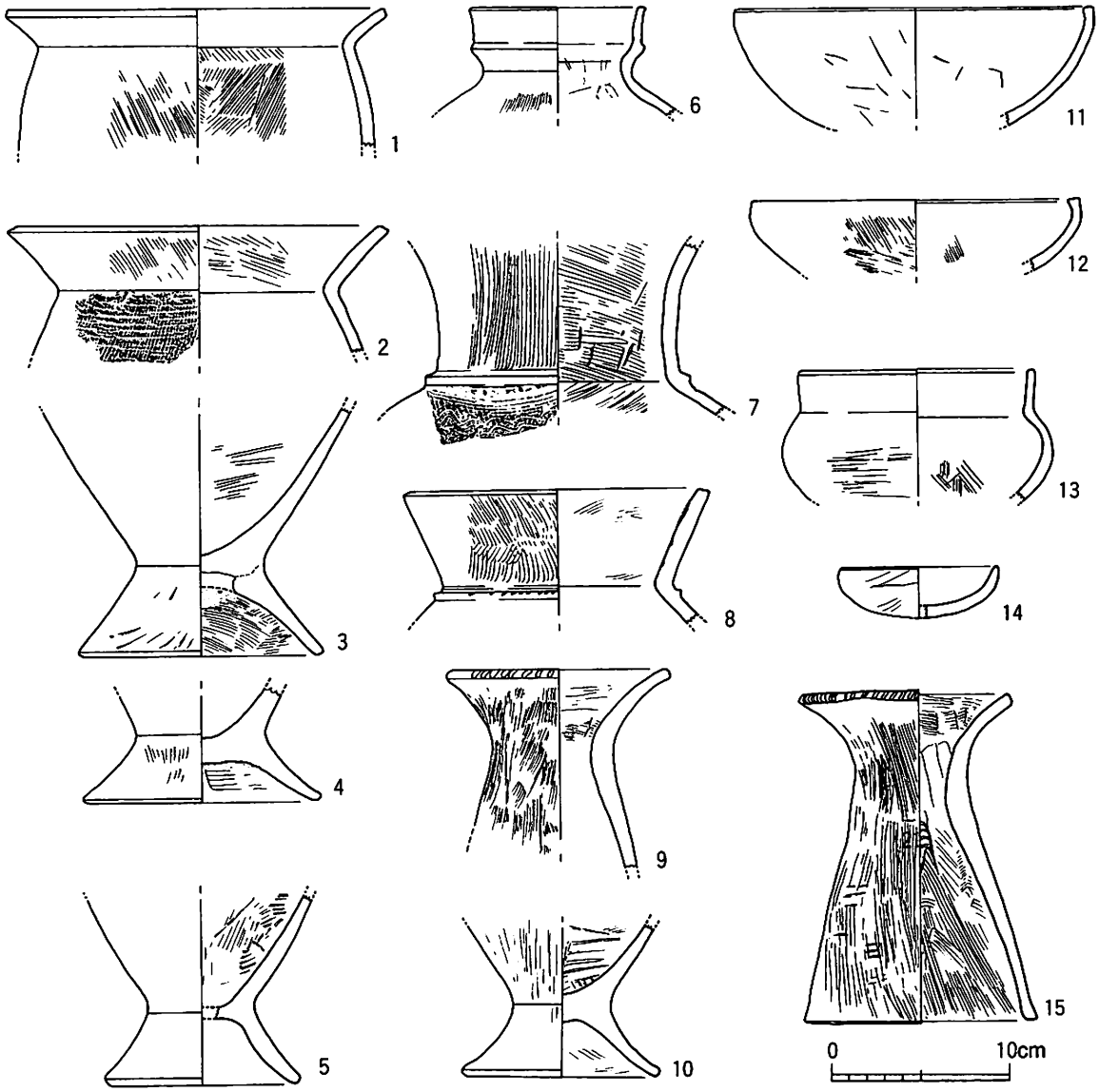
われる。27は器台である。下位を欠いている。22、24は有頸鉢である。22は完形でレンズ状の底部で、底面はハケ調整が施されている。24は器高が低く、口径が大きい。23、25は無頸の鉢である。いずれもやや深く、口縁部が若干内湾する。23は平底である。26は鉢のミニチュア土器である。17～21は壺である。20は直口気味であるが、その他は広口壺である。17は大型の壺で、頸部に刻目突帯がめぐる。外器面には粗いタタキ目が残り、ナナメ刷毛が施される。図では2点掲載しているが、接点が無いため分けて書いているものである。胎土調整から見て、同一のものである。18、19は長胴で最大径が胴部中位に位置し、レンズ状の底部を有する。内外器面ともハケ調整が施されている。21はやや器高が低く、胴部が横に張る。胴部下位に焼成後の穿孔が施されている。頸部に刻目列点文がめぐる。28は完形の高坏である。坏部内器面には放射状のヘラミガキが施されている。

3層　29は完形の甕である。肩部の外器面にわずかだがタタキ目が残る。30は有頸鉢の上半部である。口縁部が短く外反する。31は完形の片口である。外反する脚台を有し、体部は半球形である。

4層　32は大型の壺の下半と思われる。長胴で、レンズ状の底部である。外器面はタタキ目後刷毛が施されている。

5層　33～34は完形の甕である。35は被熱のため下半部の器壁が剥離している。両器面ともハケ調整である。33は胴部上位で横方向の割れが確認され、土器製作時の単位を知ることができる。34は外器面にタタキ目をわずかに残している。胴部上位に横方向のヒビが2箇所見られる。製作単位の現れであろう。41は大型の広口壺の口縁部である。口唇部に刻目を施す。42は完形の広口壺である。長胴でレンズ状の底部を有する。45は完形の高坏である。形が非常にいびつである。脚部に透孔がなく、その点では珍しい。46は高坏の脚部である。3つの透孔が施されている。38、39、43は台付鉢である。いずれも鉢部は頸部を有する。38は頸部がかなりくびれるが、39、43はあまりくびれずに外へ開く。40は高さと裾部径から判断して、台付鉢の台部と思われる。37は完形の無頸鉢である。底部は丸底である。44は完形の器台である。外器面にわずかにハケ目が認められる。

6層　47は甕の口縁部である。頸部がくびれず、直口する。口縁部端部及び口縁部下位に三角突帯がめぐる。流れ込みの可能性が高い。48は完形の脚台付の甕である。両器面ともハケ調整が施されている。49は脚台付の甕で口縁部を欠く。50は完形の広口壺である。51は器台の上半部と思われる。上位は外反した後屈折し、内傾する。52、54は小型の壺である。53は壺の底部と思われる。平底で、底面にハケ目が残る。54は完形の有頸鉢である。底部は丸底である。55、56は無頸鉢である。55は大型で、レンズ状の底部から体部へ開き、口縁部でやや内湾する。外器面にタタキ目が残る。56は完形で、口縁端部は丸みをもつ。57は高坏の坏部である。内器面にヘラミガキが施されている。58は完形の高坏である。口縁部は



第365図　第２トレンチ　２号溝出土土器実測図

一度内傾して外へ開く。裾部が内湾しながら開いているので膨らんだように見える。59は大型の広口壺である。レンズ状の底部から長胴に至り、突帯のめぐる頸部ですぼまった後、口縁部で外反する。口唇部と頸部の突帯には刻目が施される。

④１号土坑（第382図）

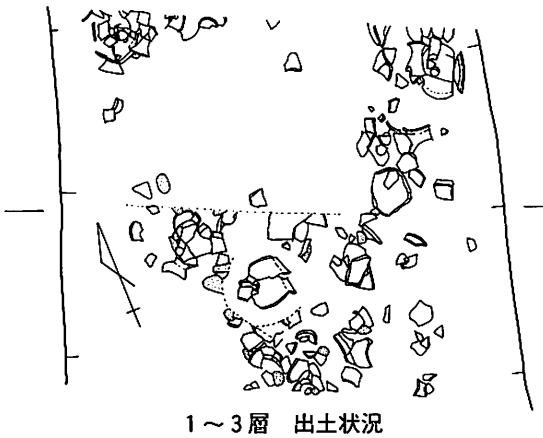
トレンチ中央やや東で検出された。軸はトレンチとほぼ同方向である。長軸1.05m、短軸0.79mの卵形を呈する土坑である。西側は一段テラス状になっていて、東側が円形に深くなっている。さらにその円の中心に10cm、深さ７cm程度の楕円形を呈するくぼみがある。土坑の深さはもっとも深い面までは0.25mを測り、中段面と最下面の比高差は0.10mである。

遺物

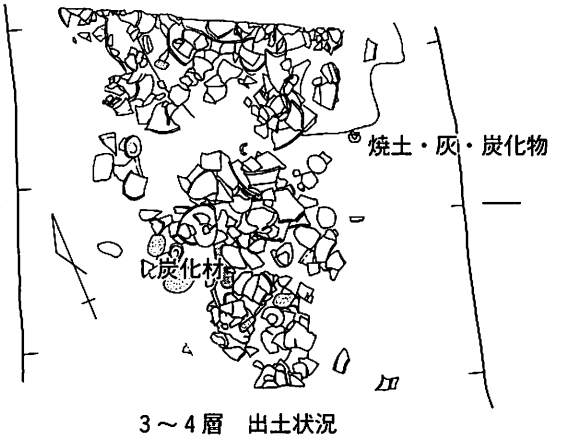
遺物は図化できない程の小片の土師器皿が出土した。

⑥遺構に伴わない遺物

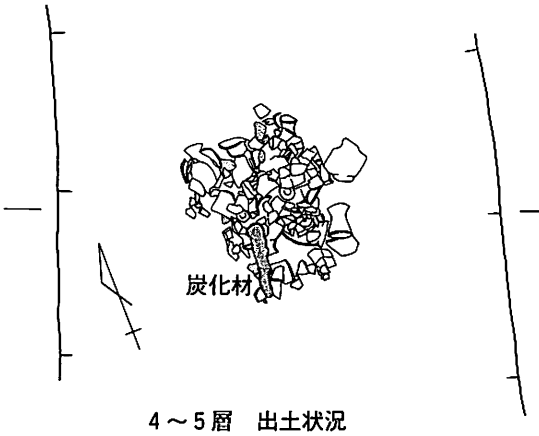
鉄器　１点出土した。第385図－４は棒状鉄塊である。断面形は楕円形または隅丸正方形を呈する。



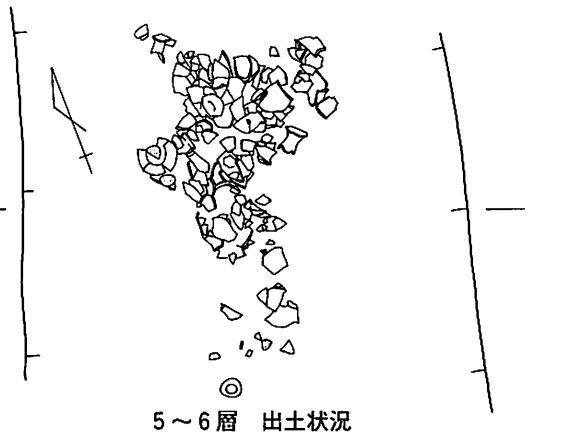
1～3層　出土状況



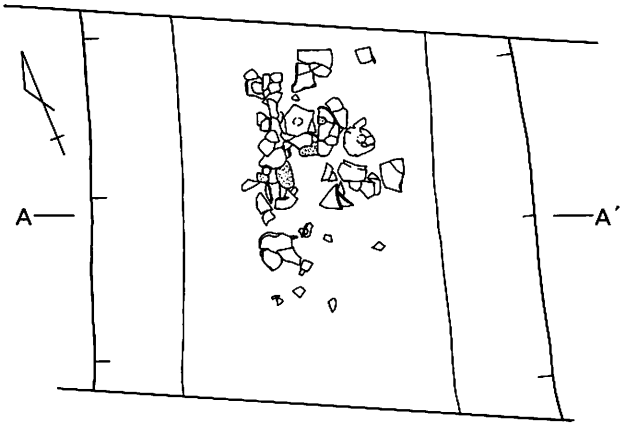
3～4層　出土状況



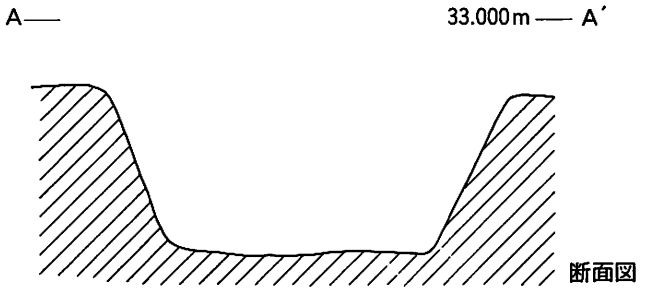
4～5層　出土状況



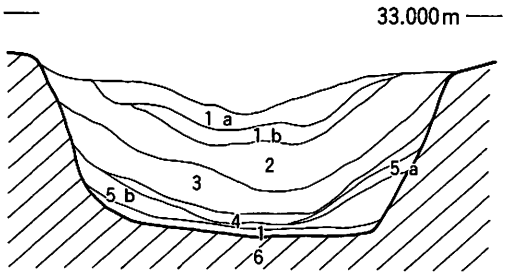
5～6層　出土状況



6層出土状況

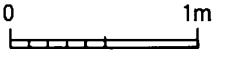


断面図

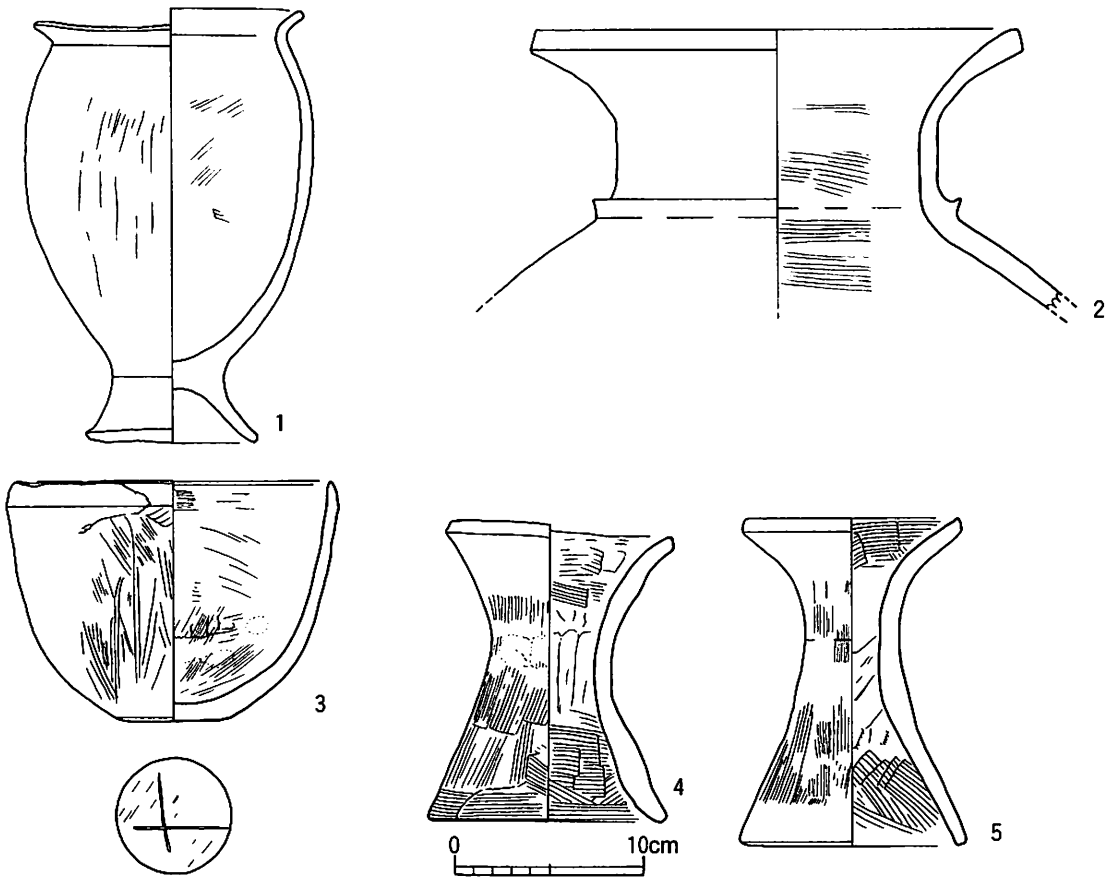


第2トレンチ北壁3号溝部分の土層断面図

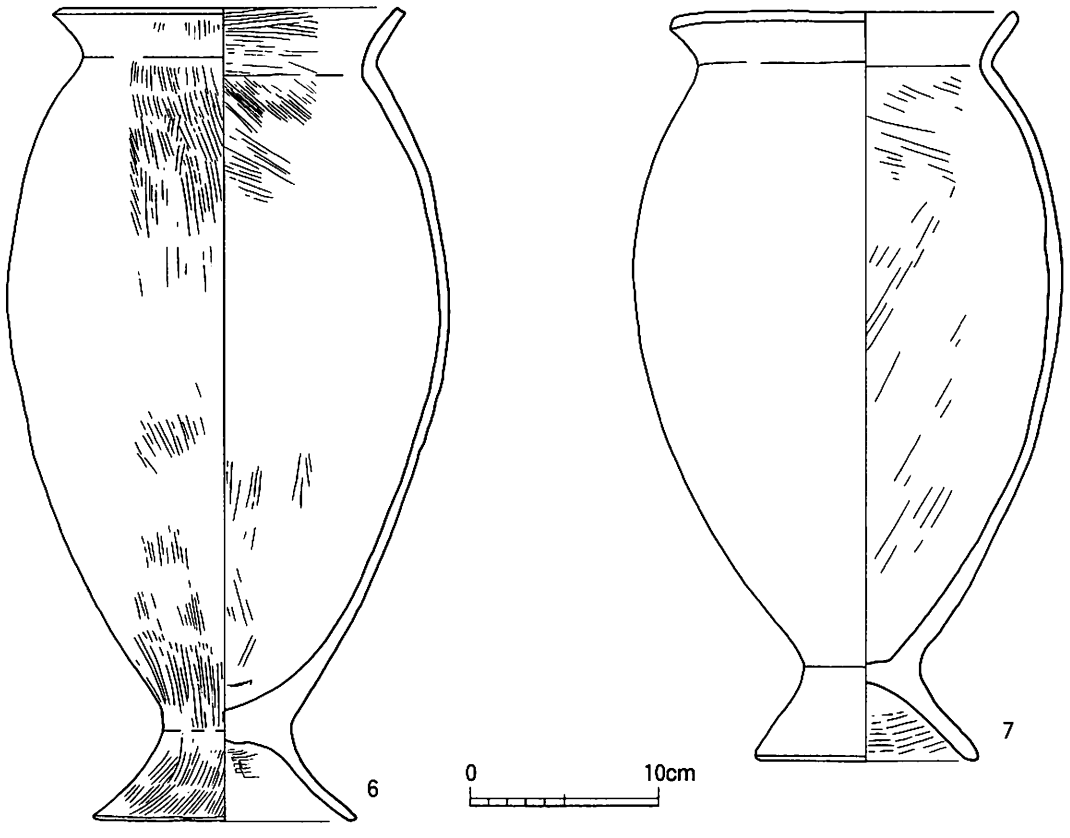
1a層　黒褐色土
1b層　黒褐色土。褐色土ブロックをやや含む。
2層　極暗褐色土。土器を多く含む。
3層　暗赤褐色土。大量の土器を含む。
4層　黒褐色土。炭化物を多く含む。
5a層　暗赤褐色土。不純物が少ない。
5b層　黒褐色土。
6層　褐色土。礫をやや含む。



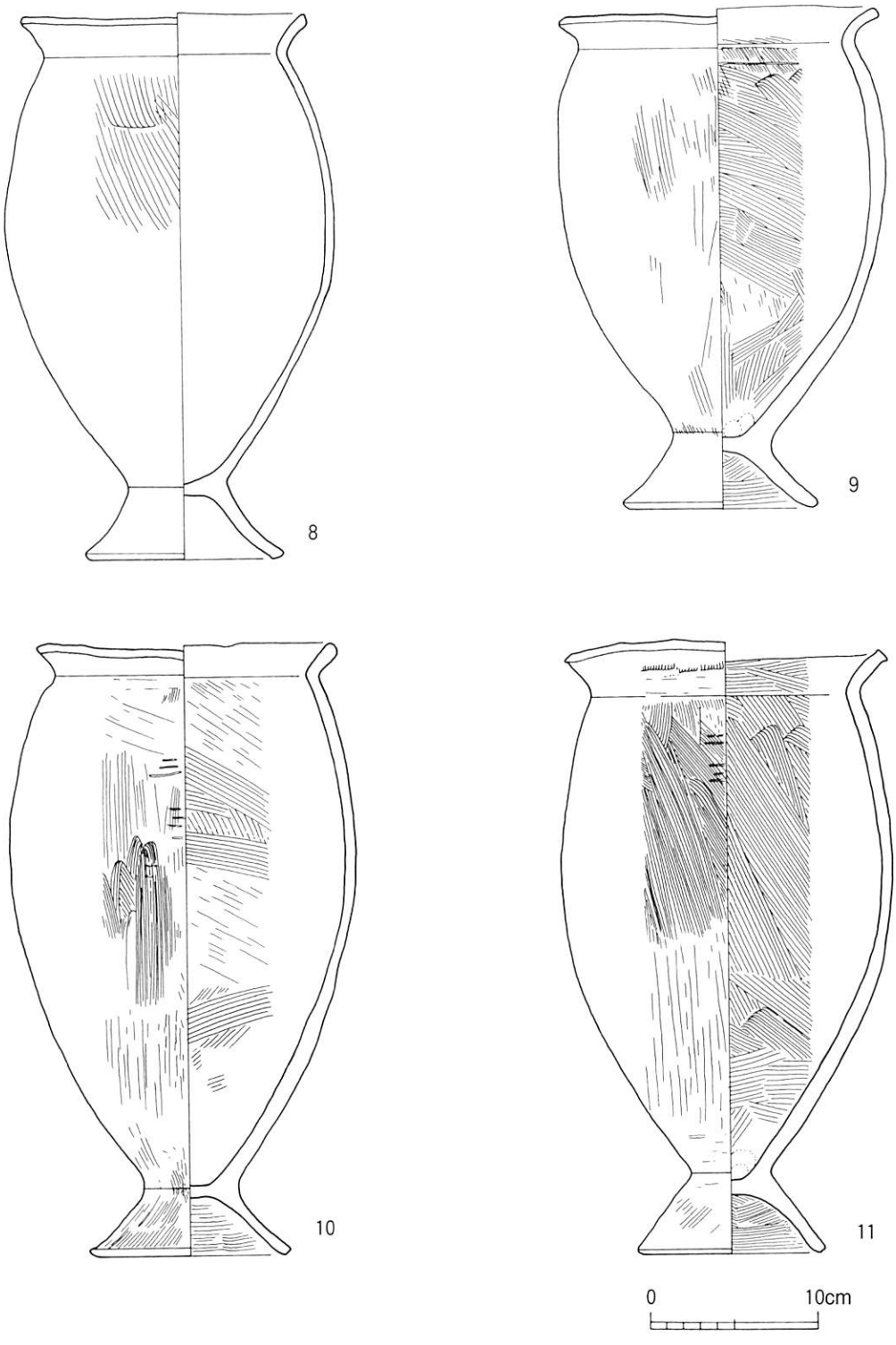
第366図　第2トレンチ　3号溝実測図



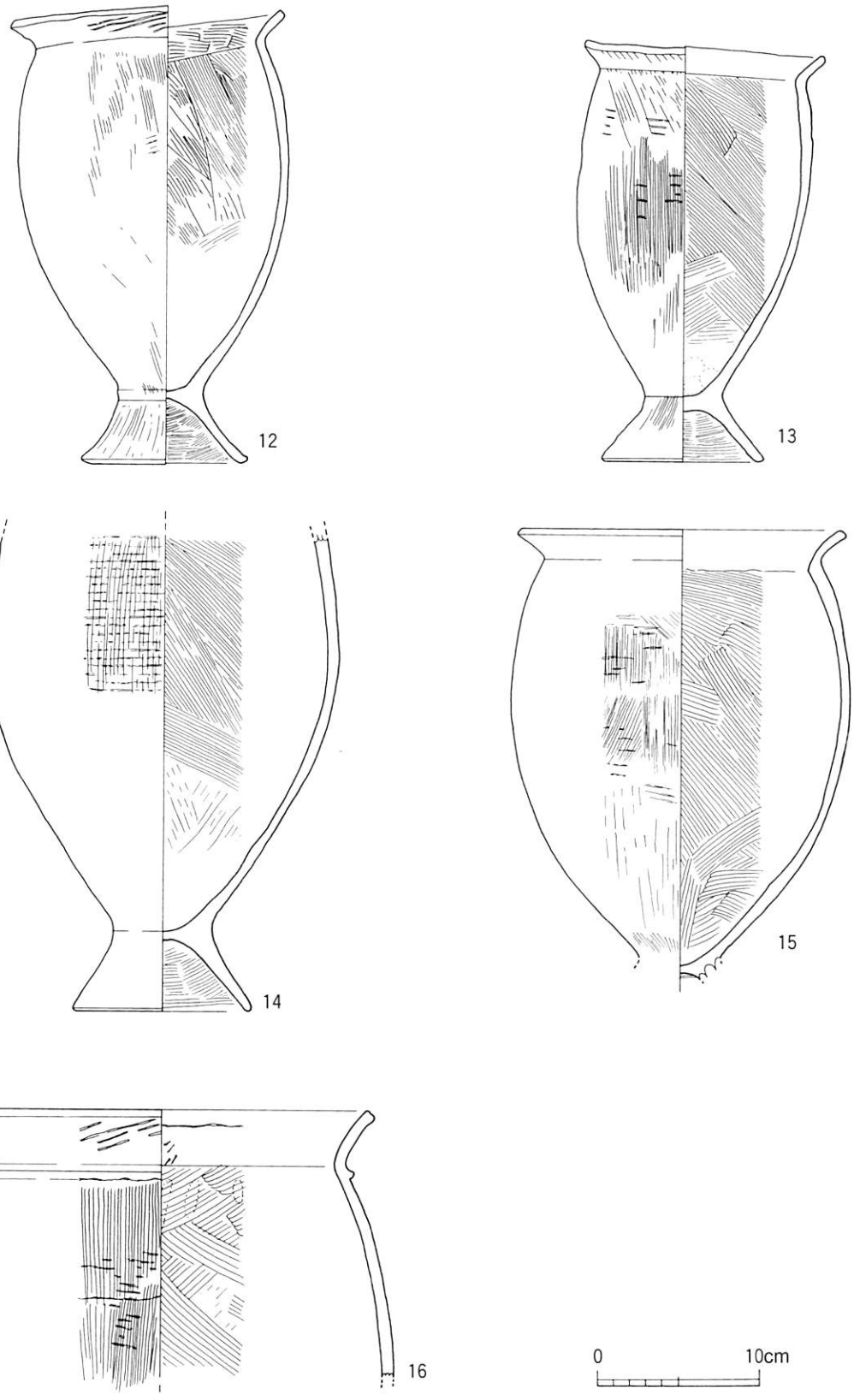
第367図　第２トレンチ３号溝出土土器実測図①（１層）



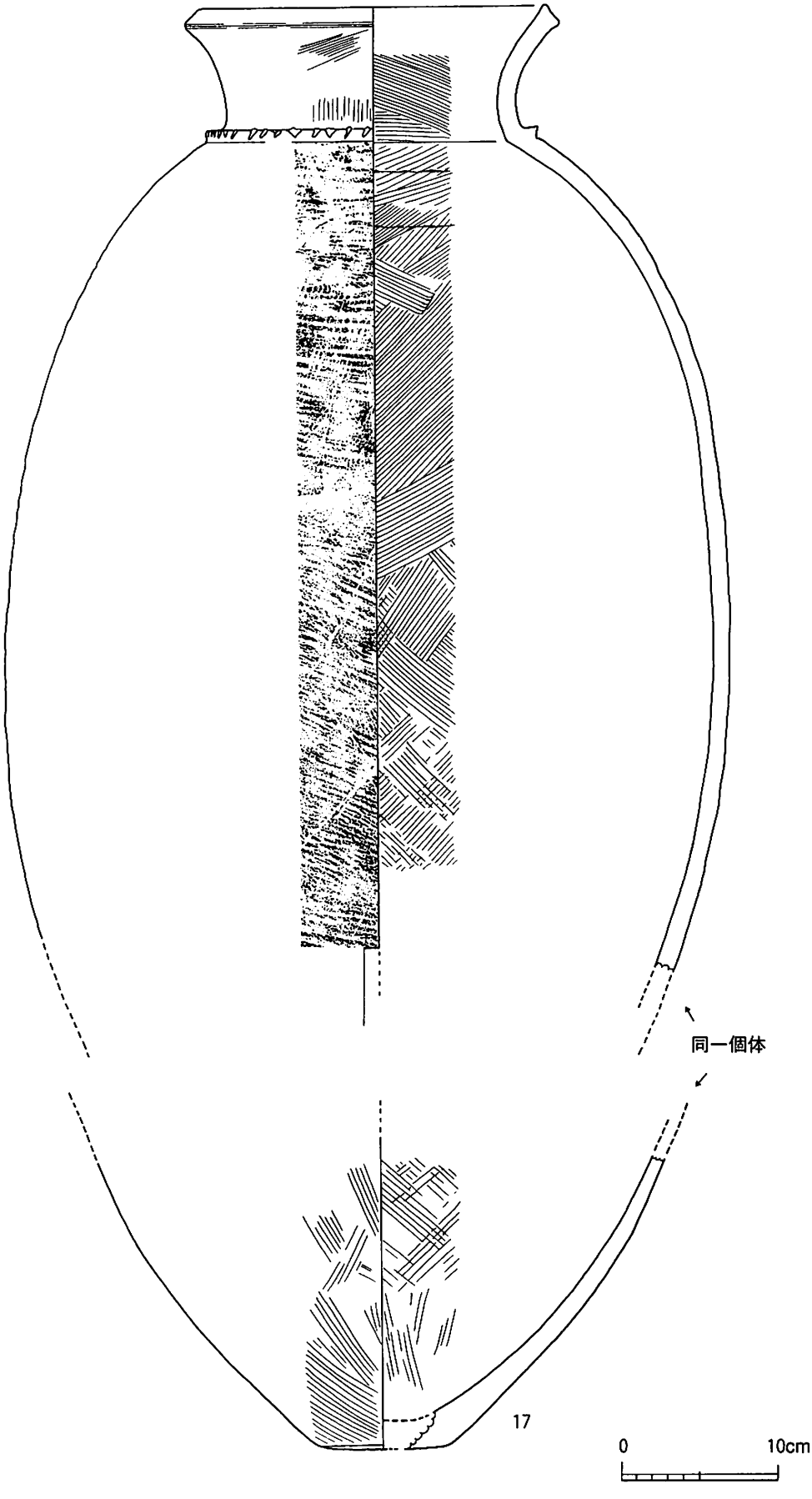
第368図　第２トレンチ３号溝出土土器実測図②（２層）



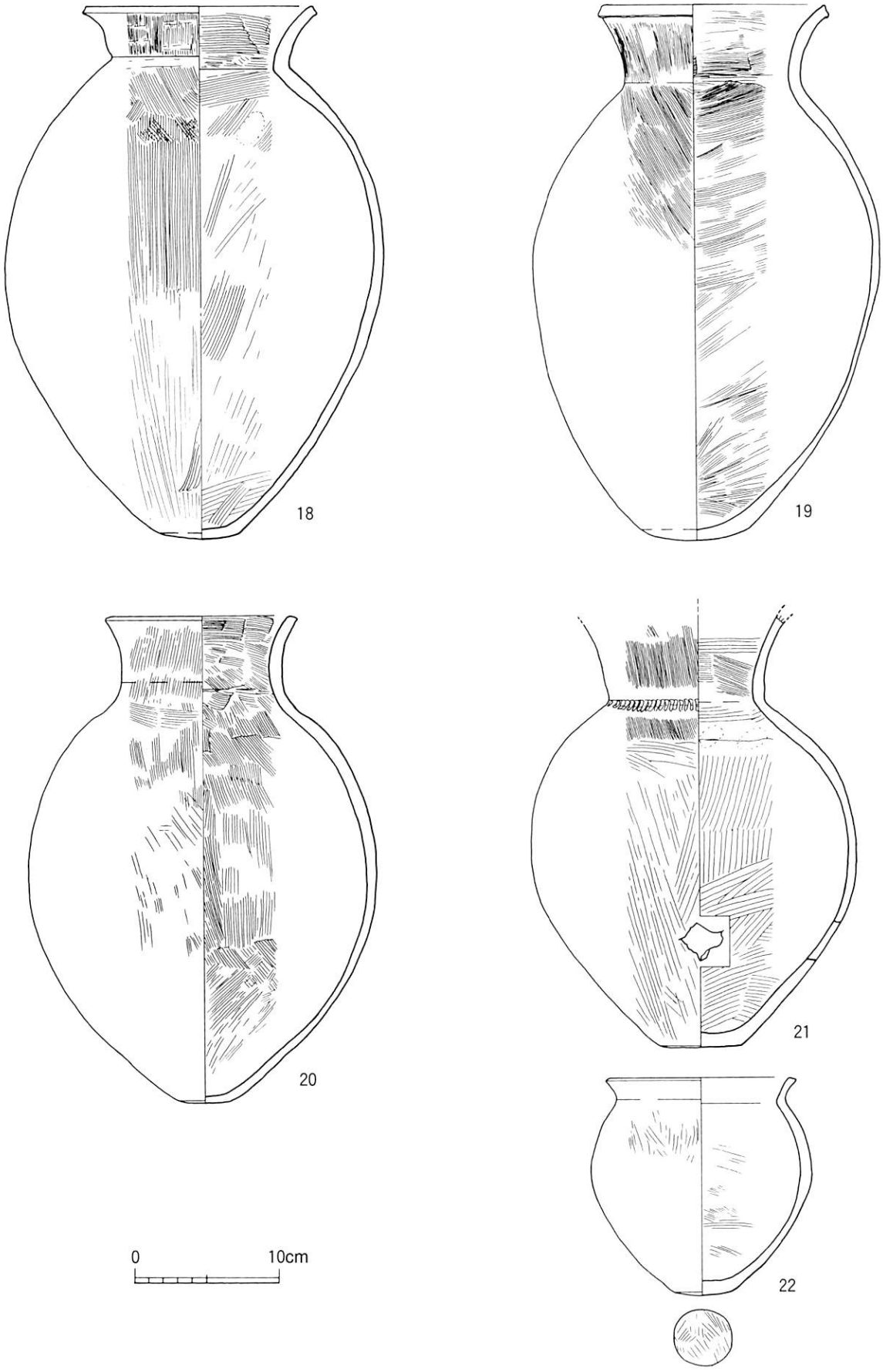
第369図　第２トレンチ３号溝出土土器実測図③（２層）



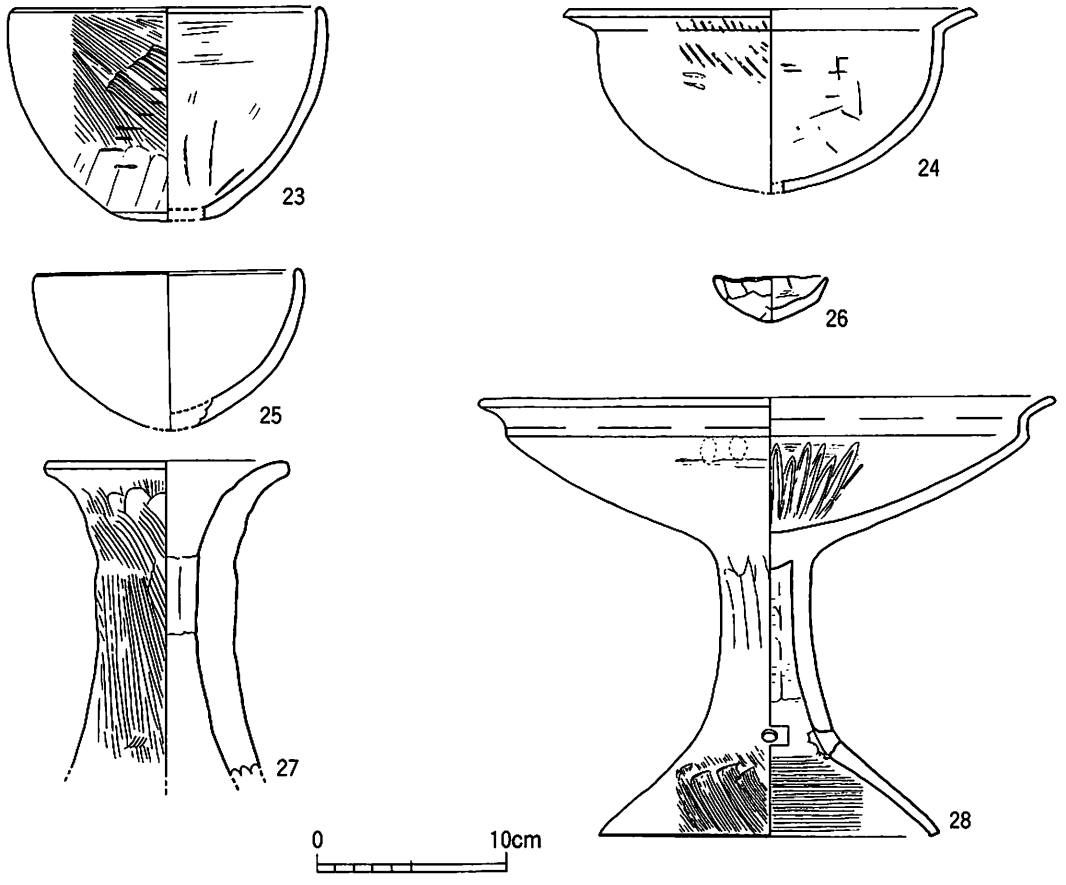
第370図　第２トレンチ３号溝出土土器実測図④（２層）



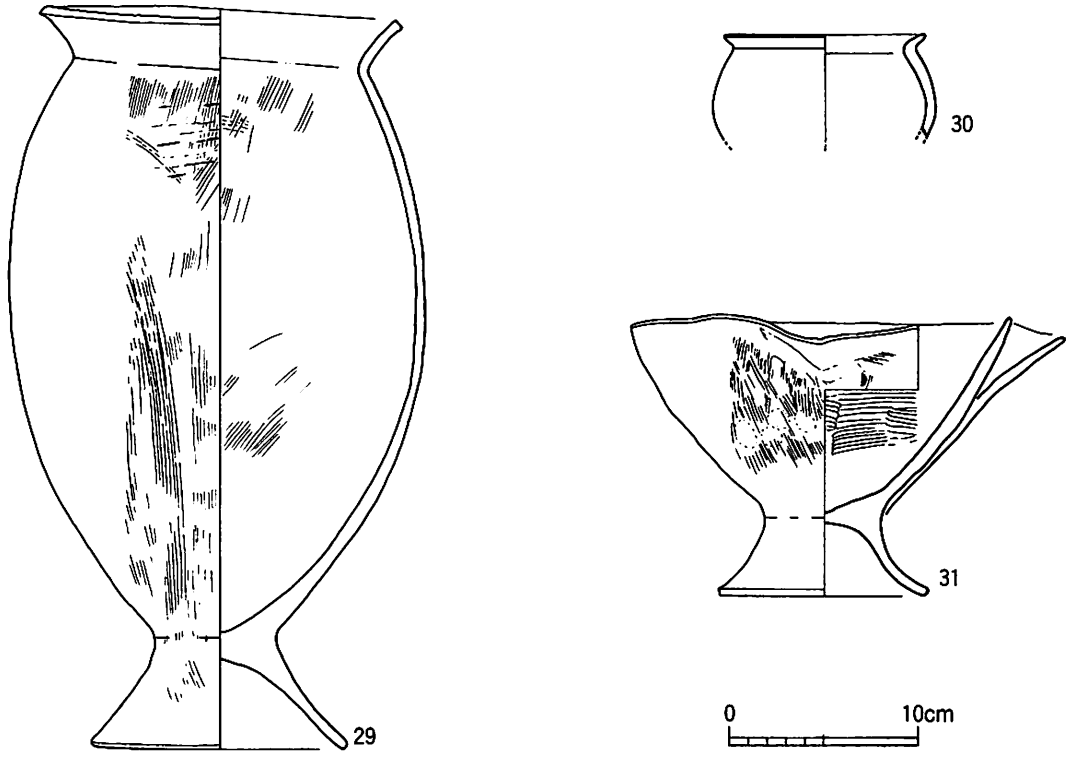
第371図　第２トレンチ３号溝出土土器実測図⑤（２層）



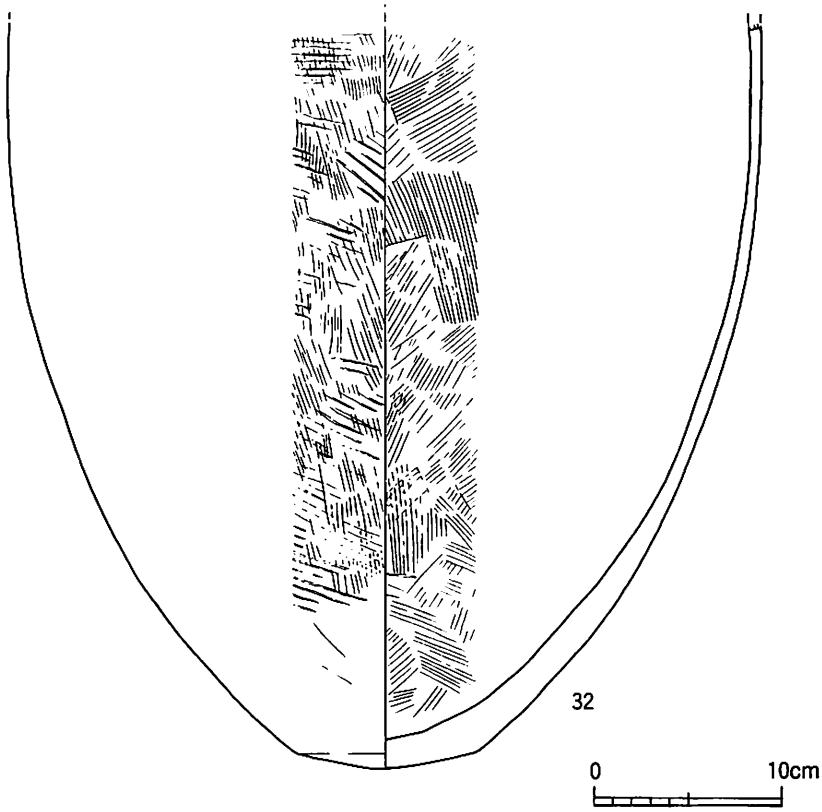
第372図　第２トレンチ３号溝出土土器実測図⑥（２層）



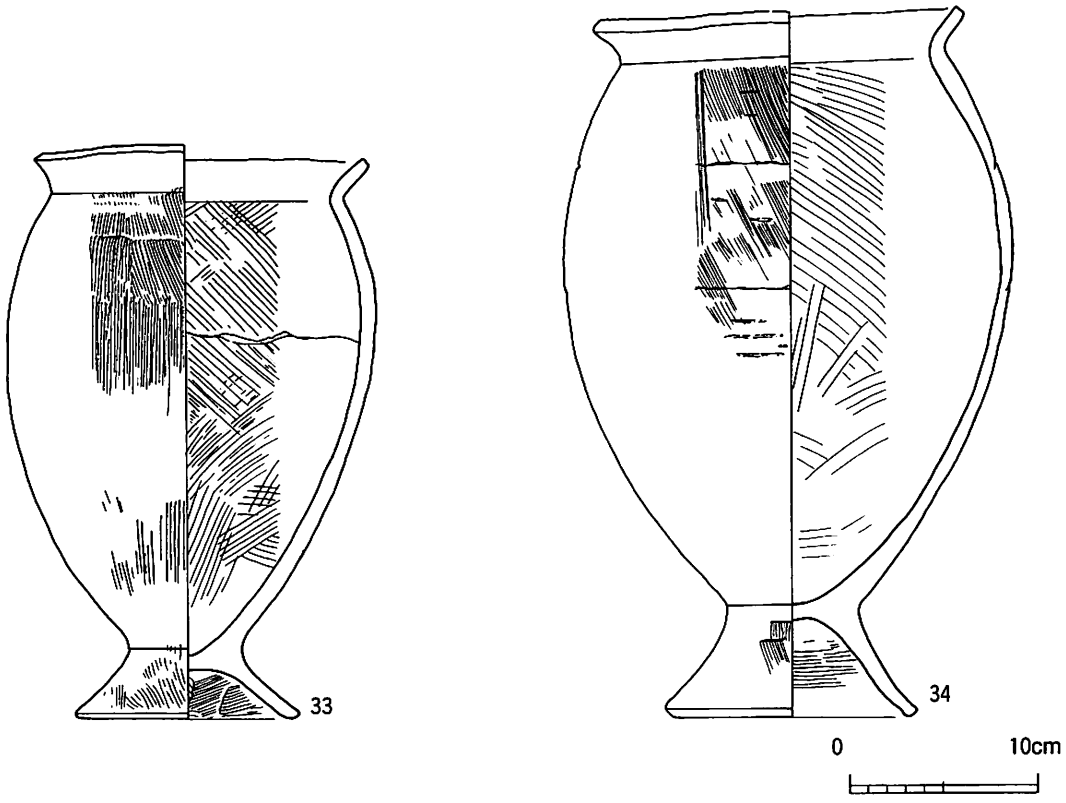
第373図　第２トレンチ３号溝出土土器実測図⑦（２層）



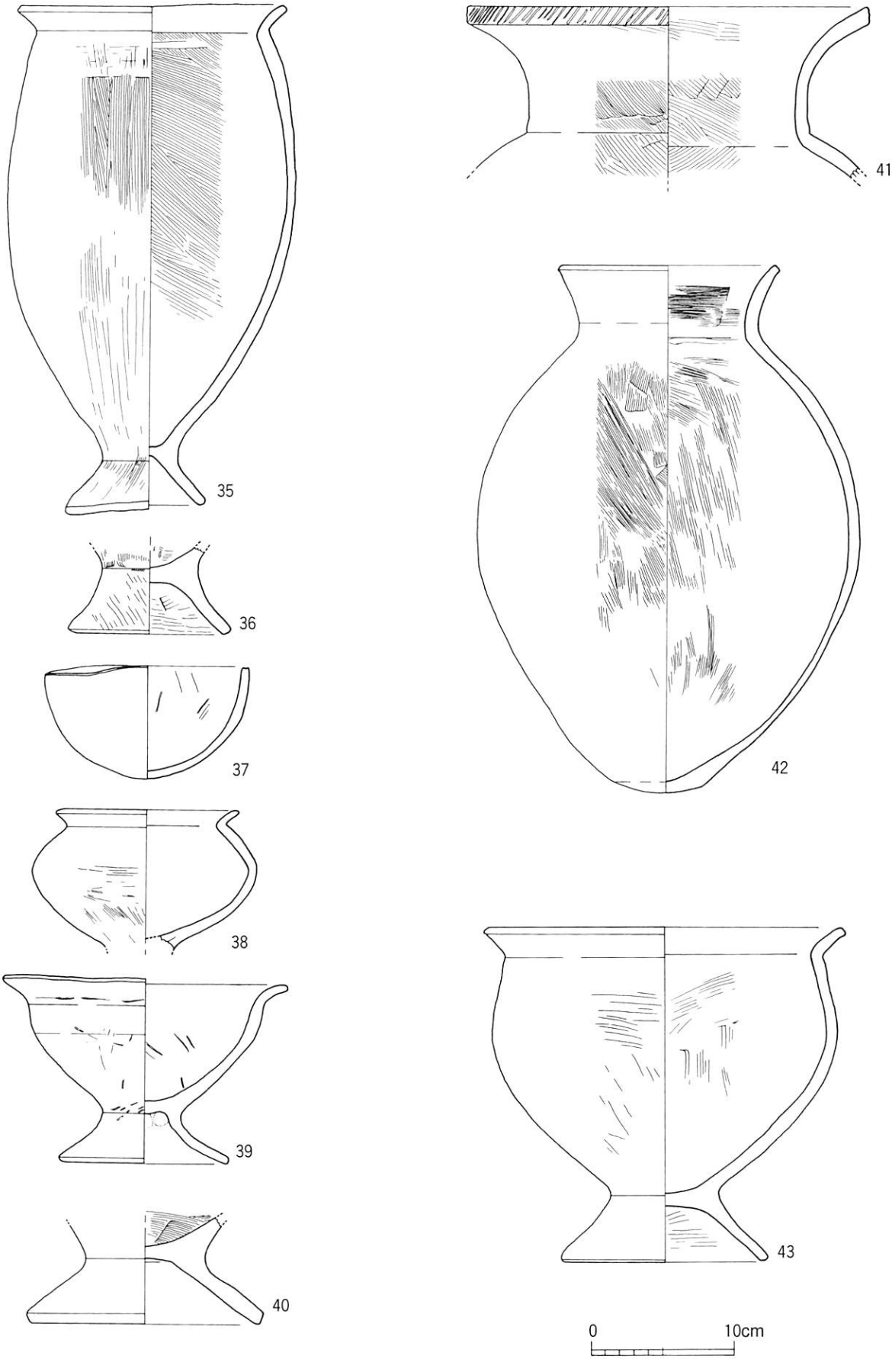
第374図　第２トレンチ３号溝出土土器実測図⑧（３層）



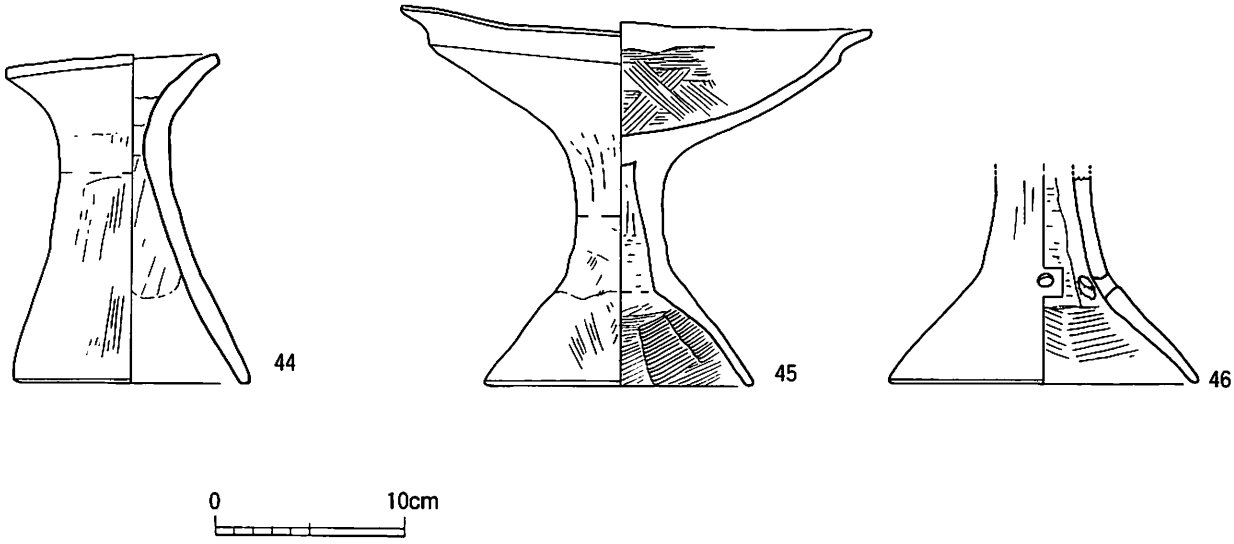
第375図　第２トレンチ３号溝出土土器実測図⑨（４層）



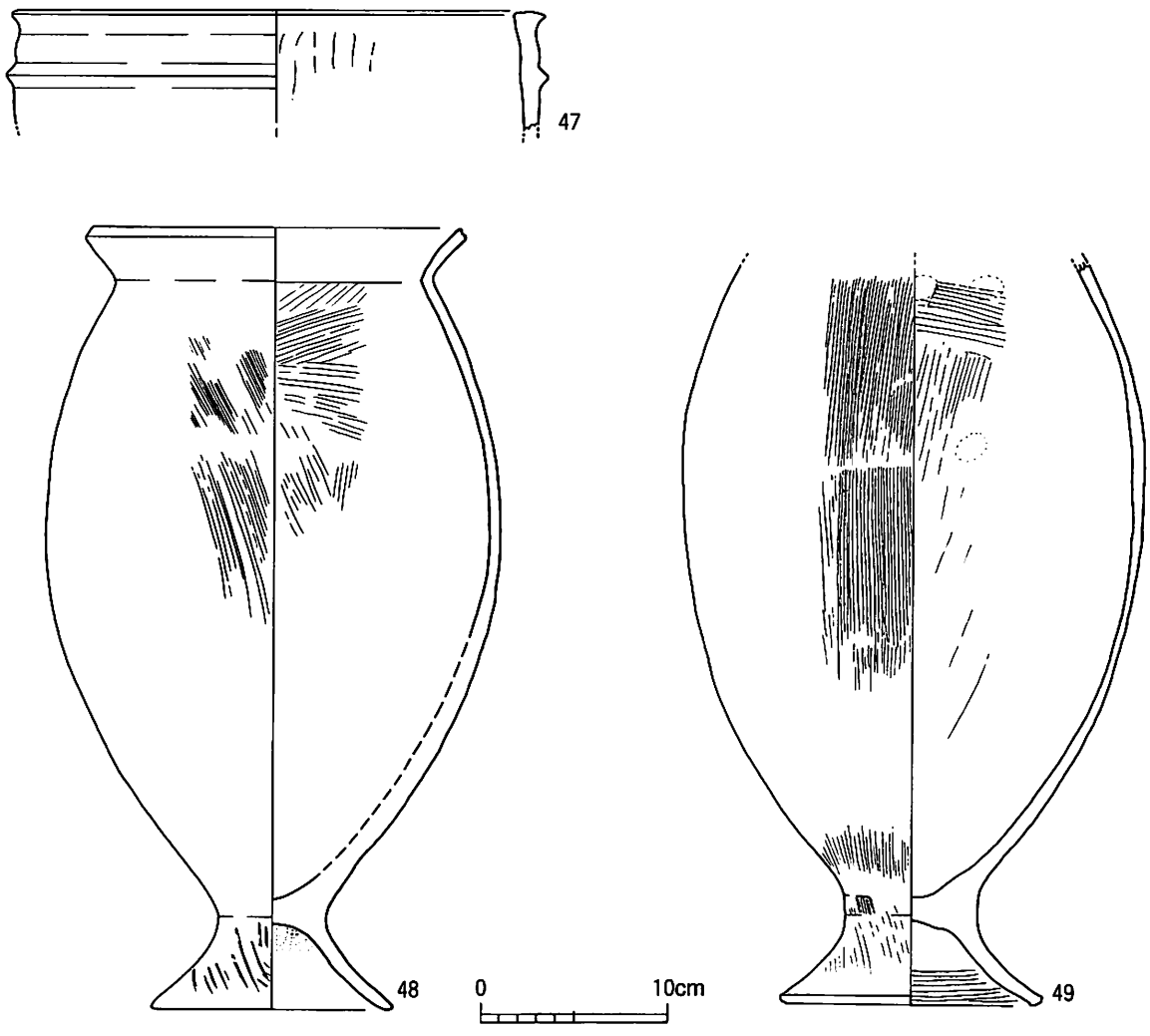
第376図　第２トレンチ３号溝出土土器実測図⑩（５層）



第377図　第２トレンチ３号溝出土土器実測図⑪（５層）



第378図　第２トレンチ３号溝出土土器実測図⑫（５層）



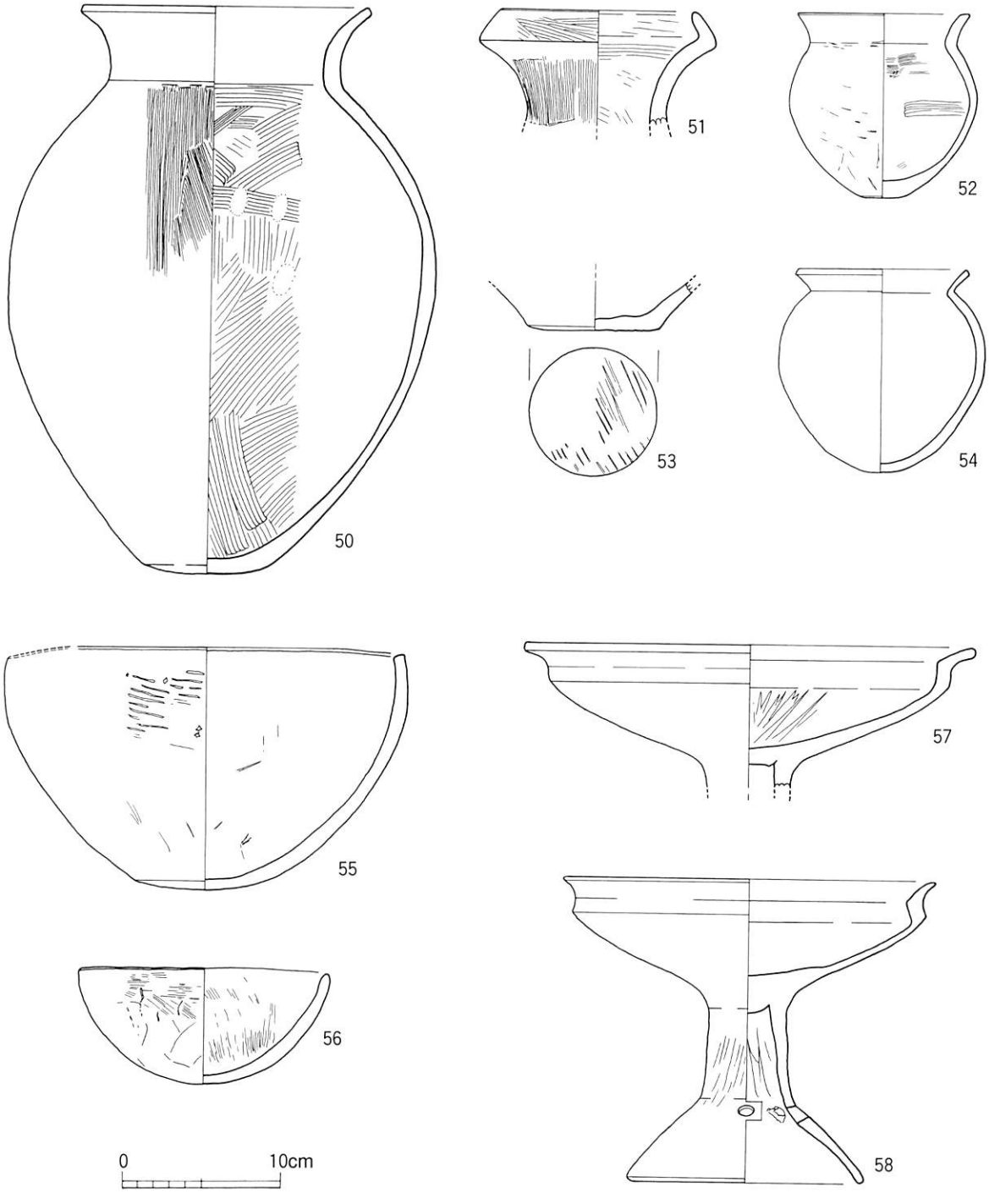
第379図　第２トレンチ３号溝出土土器実測図⑬（６層）

（3） まとめ

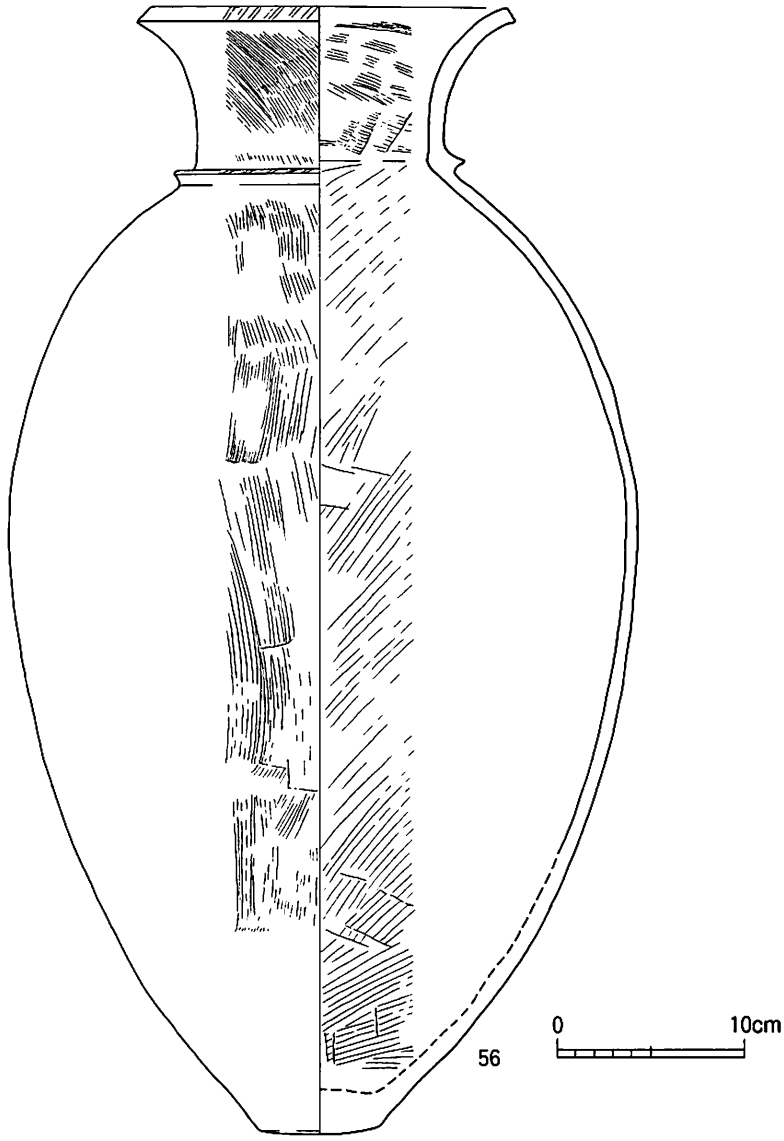
調査の結果、第１トレンチでは円形の土坑が１基、第２トレンチでは溝状遺構３条、土坑が１基検出された。

第１トレンチの円形土坑は10点の土師椀とともに、緑釉や青磁、白磁など比較的多くの輸入陶磁器が出土した。土坑は規模や遺物の出土状況からして墓と考えるには疑問が残る。性格は不明である。

第２トレンチでは、東端で検出された３号溝において、完形に近いものを含めて土器が層状に出土した。弥生時代後期後半の良好な土器資料を得ることができた。



第380図　第２トレンチ３号溝出土土器実測図⑭（６層）



第381図　第２トレンチ３号溝出土土器実測図⑮（６層）

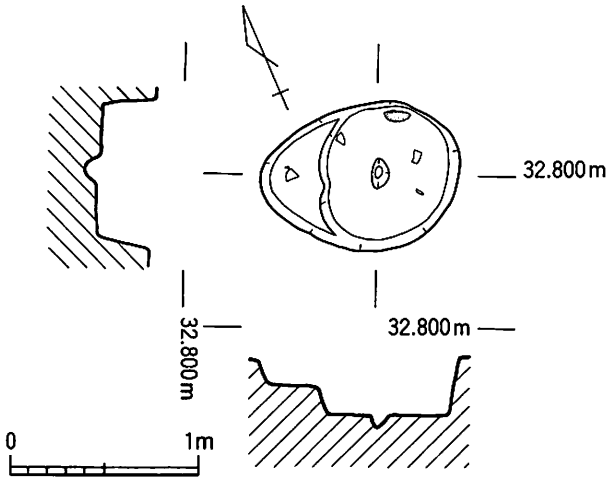
また、弥生時代以外のものとしては、中世の溝が検出された。この１号溝は埋土や規模、遺物の出土状況などの特徴から、これまでの調査で検出された中世の壕であることが分かり、壕の方向などをある程度把握できるようになった。平成２年度に行われた工場増設に伴う発掘調査において、同様な壕が検出された。この溝とつながって、さらに北西方向に伸びていくことが予想される。

全体的には溝を中心に数々の遺構を検出ことができた。遺跡が菊池川手前まで確実に存在し、弥生時代後期後半と中世の２つの時期に利用されていたことが確認された。しかし、その一方、住居跡などの生活遺構は検出されなかった。おそらく川に近いこの付近は、地形から考えても、集落の端であることは確実である。今回の結果から、居住区域がここまで及んでいなかった可能性が強くなった。

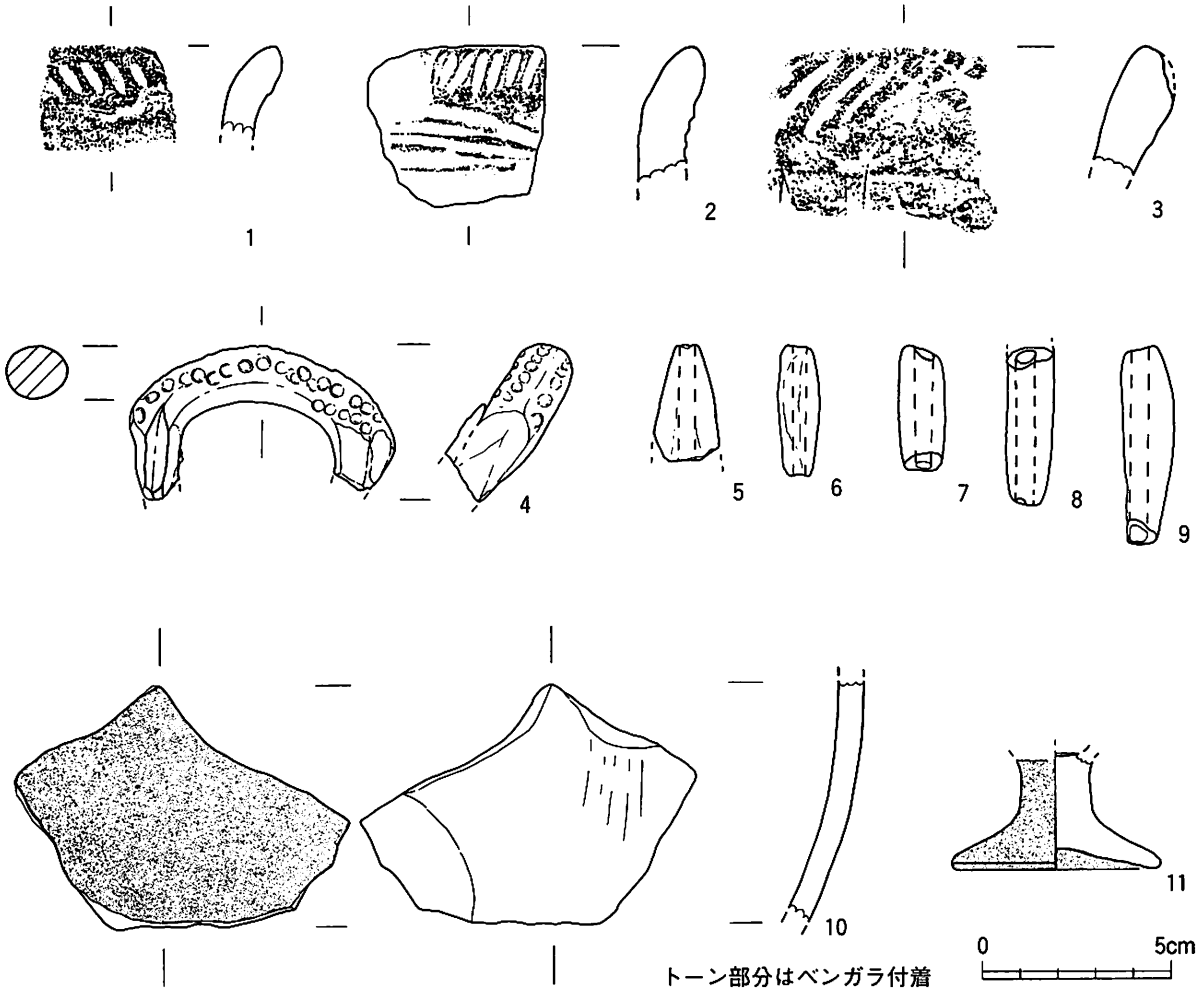
しかしながら、生活遺構がないわりには３号溝からのように、大量の土器が出土したことが新たな問題として挙がる。これらの土器は、どこからもたらされたのか。周辺に土器焼成遺構があったのか、不要になった土器を離れたところから持ち寄せて、集中的に廃棄したかのような出土量であった。３号溝だけではない

が、溝から出土する大量の土器片を見るたびに、この疑問が出てくる。今後の研究、解明を待ちたい。

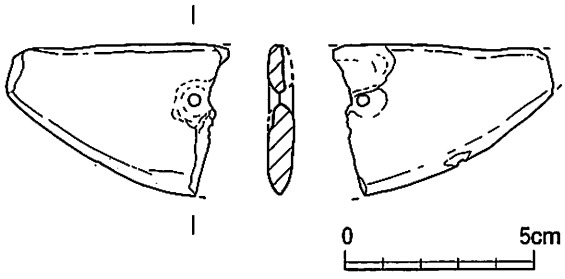
また、3号溝出土の土器の特徴として、接合率の高さ、破片の大きさなどが挙げられる。この点も、単に廃棄された土器と取り扱ってよいか、疑問を残す点である。



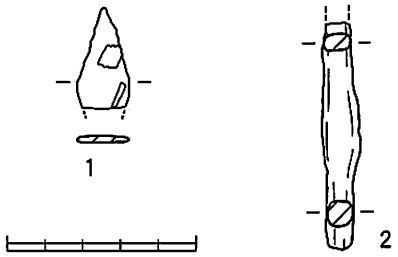
第382図　第2トレンチ1号土坑　実測図
（S＝1／20）



第383図　遺構に伴わない遺物（土錘など）（S＝1／2）



第384図　遺構に伴わない遺物（石包丁）
（S＝1／2）



第385図　方保田220番地出土鉄実測図
（S＝1／2）

表－6　831番地出土　土器観察表

図	No	遺構名	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備考
332	1	1号溝	P-11	甕	上半	25.0	－	7.5YR7/4 にぶい橙色	角閃石　長石 石英	良好	なで	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	無	無	土師器
332	2	1号溝	P-371	坏	下半	－	－	7.5YR7/4 にぶい橙色	角閃石　長石 石英　赤褐色粒	良好	胴部ヘラミガキ？	ヘラミガキ	無	無	土師器
332	3	1号溝	P-3	坏	底部	－	－	10YR6/3 にぶい黄橙色	角閃石	良好	なで	なで	無	無	高台付　須恵器
334	1	2号溝	P-45	高坏	坏部	28.6	－	7.5YR5/2 灰褐色	赤褐色粒　角閃石 長石 石英　雲母	良好	口縁部なで	なで	有	無	
334	2	2号溝	P-50	台付鉢	脚部	－	－	10YR8/3 浅黄橙色	長石　石英	良好	鉢底部ヘラ調整後なで 脚部なで	鉢底部刷毛 脚部砂型、なで	無	有	橙色の色素 が浮かぶ
334	3	2号溝	P-47	高坏	裾部	－	－	10YR7/4 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	縦刷毛後なで	なで	有	無	同一個体か？
363	1	3号溝	P-256	甕	口縁部	21.2	－	5YR7/6 橙色	長石　石英	良好	口唇部なで　頸部、胴部なで 口縁部ナナメ刷毛後なで	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	無	無	土師器
363	2	3号溝	一括	坏	坏部	13.1	－	7.5YR4/3 褐色	角閃石	良好	なで	なで	無	無	高台が外れている　自然釉 付着　須恵器
363	3	3号溝	P-240	坏	底部	－	－	2.5Y7/1 灰白色	黒色の粒子	良好	回転なで	回転なで	無	無	須恵器　高台付
363	4	3号溝	一括	坏蓋	口縁 端部	16.8	1.2	2.5Y6/1 黄灰色	緻密	良好	なで	なで	無	無	一部極暗褐色を呈する　須恵 器
363	5	3号溝	P-254	高坏	脚部	－	－	2.5YR7/3 浅黄色	石英	良好	回転なで	回転なで	有	無	自然釉付着
363	6	3号溝	P-251	高坏	坏部	29.8	－	5YR6/6 橙色	赤褐色粒　石英	良好	なで	なで	無	無	
363	7	3号溝	一括	坏	底部	－	－	2.5YR7/6 橙色	赤褐色粒　石英	良好	なで	回転なで 底部は未調整	無	無	土師器　赤彩あり
363	8	3号溝	一括	坏	底部欠	14.4	3.4	5YR6/6 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石	良好	なで	なで	無	有	土師器
363	9	3号溝	P-228	甕	口縁部	－	－	5YR4/2 灰褐色	赤褐色粒　石英	良好	なで	なで	無	無	須恵器
338	1	4号溝	P-358	甕	口縁部	21.0	－	10YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部なで　胴部縦刷毛	口縁部なで 胴部ナナメ刷毛後なで	無	有	
338	2	4号溝	P-353	甕	上半	15.0	－	10YR3/2 黒褐色	角閃石　長石 赤褐色粒　雲母	良好	口縁部なで　胴部刷毛？	口縁部なで　胴部ナナメ刷毛 肩部ナナメ刷毛後なで	無	有	器面がザラつく
338	3	4号溝	P-343	甕	脚部	－	－	7.5YR7/3 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	胴部なで　脚部ヘラ調整？	胴部刷毛　脚部刷毛後なで 裾部刷毛	無	無	調整が雑
338	4	4号溝	P-357他	台付鉢	裾部欠	15.0	－	10YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石 赤褐色粒　雲母	良好	鉢部、柱部なで　裾部縦刷毛	口縁部なで　鉢部ヘラ調整後なで 柱部ヘラ調整　裾部刷毛	有	無	長脚の脚台
338	5	4号溝	P-350	鉢	上半	8.3	－	2.5Y5/2 暗灰黄色	角閃石　長石 赤褐色粒　雲母	良好	口縁部なで 胴部縦刷毛？	なで	有	無	
338	6	4号溝	P-338	手捏土器 (鉢)	完形	9.0	4.0	2.5Y3/1 黒褐色	角閃石　長石 石英	良好	指なで	ヘラ調整後なで	有	無	
338	7	4号溝	P-354	器台	完形 復元	12.2	15.9	10YR8/2 灰白色	角閃石　長石 石英　赤褐色粒	良好	縦刷毛	受部、裾部ナナメ刷毛 中部指なで	有	無	
338	8	4号溝	P-379	甕	下半	－	－	10YR8/4 浅黄橙色	角閃石　長石 赤褐色粒　雲母	良好	胴部縦刷毛後なで 脚部上位縦刷毛　脚裾部なで	なで	無	有	
338	9	4号溝	P-375	甕	底部	－	－	10YR7/3 にぶい黄橙色	角閃石　長石 石英　赤褐色粒	良好	胴部縦刷毛後なで底部なで	胴部ナナメ刷毛底部指なで	有	有	
338	10	4号溝	P-345他	高坏	坏部	29.2	－	7.5YR7/4 にぶい橙色	長石　石英　雲母	良好	口唇部なで 坏上半部タタキ後縦刷毛 坏部下半縦刷毛かナナメ刷毛	口唇部なで　坏部底部ヘラミガキ 坏部上位ナナメ刷毛後なで 坏部中位刷毛後ヘラミガキ	有	無	内側に折れる口 唇部で上端は平坦
341	1	遺構外	P-305	高坏	裾部欠	29.6	－	10YR7/4 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	なで	なで	有	無	
342	2	遺構外	P-167	甕	上半	29.0	－	7.5YR7/3 にぶい橙色	長石　石英　雲母	良好	口唇部なで後刻目 口縁部ナナメ刷毛後なで 肩部ナナメ刷毛	口縁部なで　頸部指押さえ後なで 肩部～胴部ナナメ刷毛	無	有	橙色の色素が浮かぶ
342	3	遺構外	P-199	壺	口縁部	－	－	10YR7/4 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	口縁部上半ナナメ刷毛 口縁部下半縦刷毛	剥離のため不明瞭 横刷毛	有	無	
342	4	遺構外	P-304他	甕	下半	－	－	7.5YR8/4 浅黄橙色	角閃石　石英	良好	胴部～底部縦刷毛 脚部指押さえ	胴部～底部縦刷毛 脚部指調整	有	無	脚台の作りが 非常に雑

831番地出土　土器観察表

図	No	遺構名	P番号	器種	部位	口径	器高	色　調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備　考
342	5	遺構外	P-315	器台	完形 復元	11.7	16.6	10YR7/2 にぶい黄橙色	赤褐色粒　長石 石英　雲母	良好	縦刷毛　下端のみなで	受部なで　中部工具による調整 底部なで	有	無	
342	6	遺構外	P-303	甕	下半	−	−	10YR2/1 黒色	角閃石　石英 雲母	良好	なで	胴部〜底部横刷毛 脚部なで	有	有	
342	7	遺構外	P-62	坏	完形 復元	14.5	2.8	5YR6/6 橙色	赤褐色粒　角閃石 石英	良好	口縁部なで 底部ヘラケズリ	ヘラミガキ	無	無	土師器
342	8	遺構外	P-321	坏	底部欠	13.8	3.3	5YR7/6 橙色	赤褐色粒	良好	回転なで	回転なで	無	無	底部外器面に ヘラ記号あり　土師器
342	9	遺構外	P-65	坏	底部欠	14.4	3.8	5YR7/6 橙色	赤褐色粒	良好	回転なで	回転なで 底部ヘラ離し後未調整	無	無	土師器
342	10	遺構外	P-121	坏	底部	−	−	5YR7/6 橙色	長石　赤褐色粒	良好	回転なで	回転なで	無	無	土師器 高台が外れている
342	11	遺構外	P-189	坏蓋	下半	13.1	−	N5/ 灰色	赤褐色粒	良好	回転なで	回転なで	無	無	須恵器
342	12	遺構外	P-273	坏蓋	完形 復元	15.0	3.1	2.5Y7/1 灰白色	石英	良好	回転なで	回転なで	無	無	須恵器
342	13	遺構外	一括	坏蓋	つまみ を欠く	15.6	2.7	5Y7/1 灰白色	石英	良好	なで	なで	無	無	須恵器
342	14	遺構外	P-316	坏	完形	12.8	3.5	N5/ 灰色	石英（粒子大）	良好	なで	なで	無	無	自然釉付着 須恵器
342	15	遺構外	P-196	坏	底部	−	−	5YR6/1 灰色	長石　石英	良好	なで	なで	無	無	須恵器 底部に細長い孔
342	16	遺構外	P-321	坏	下半	−	−	N5/ 灰色	長石　赤褐色粒	良好	なで	なで	無	無	須恵器 高台付
342	17	遺構外	P-270	鉢	上半	11.6	−	2.5YR5/6 明赤褐色	赤褐色粒　長石 石英	良	指おさえ後なで	指おさえ後なで	無	有	坩堝か？
342	18	遺構外	P-106	鉢	底部欠	14.8	9.5	10YR7/4 にぶい黄橙色	角閃石　石英	良好	口縁部なで　体部ナナメ刷毛 底部ヘラミガキ	口縁部なで 体部〜底部ナナメ刷毛	無	無	
342	19	遺構外	P-139	壺	上半	17.6	−	7.5YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒　長石 石英	良好	口縁部なで　肩部磨耗のため不明瞭	磨耗のため不明瞭	無	無	丹塗り 甕か？
342	20	遺構外	P-321	甕	上半	−	−	7.5YR5/2 灰褐色	赤褐色粒　石英	良好	口縁部波状紋 口縁部〜頸部なで　肩部タタキ	口縁部上半横刷毛 口縁部下半なで　肩部タタキ	無	無	須恵器 口頸部を欠く
342	21	遺構外	P-182	甑	下半	−	−	7.5YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	なで	ヘラケズリ	無	無	一穴か？

表－7　932-1番地出土　土器観察表

346	1	2Tr. 住居	P-15	高坏	口縁部	23.0	−	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部なで　坏部なで	口縁部、坏上部なで 坏部横刷毛後ヘラミガキ	有	有	
346	2	2Tr. 一括	P-23	甕	脚部	−	−	10YR7/4 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	底部刷毛後なで 脚台なで	なで 脚台上半砂型	無	無	
346	3	2Tr. 一括	P-22	高坏	下半	−	−	10YR7/3 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	柱部たてなで その他不明瞭	なで	無	無	
348	1	3Tr. 一括	一括	甕	口縁部	25.6	−	10YR6/3 にぶい黄橙色	角閃石　長石 石英	良好	口縁部〜肩部ナナメ刷毛	口縁部なで 肩部ナナメ刷毛後なで	無	有	
348	2	3Tr. 一括	一括	壺	底部	−	−	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	胴部ナナメ刷毛　胴部下半なで 底部刷毛	底部刷毛	無	無	底部に橙色の色素が浮かぶ

表－8　932-2番地出土　土器観察表

図	No	遺構名	P番号	器種	部位	口径	器高	色　調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備　考
350	1	住居	P-10	甕	上半	31.0	－	7.5YR7/4 にぶい橙色	角閃石　長石 赤褐色粒	良好	口縁部なで	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	有	無	（土師）
350	2	住居	P-19	甕	上半	19.0	－	7.5YR7/3 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	口縁部なで　胴部縦刷毛	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	無	無	（土師）
350	3	住居	P-2	甕	上半	13.6	－	5YR6/4 にぶい橙色	角閃石　長石 石英	良好	なで	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	無	有	（土師）
350	4	住居	P-13	坏	完形 復元	13.6	3.6	5 YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	回転なで	回転なで	有	無	（土師） 底部に粘土紐巻 上痕が残る
354	1	土坑	P-58	甕	脚部	－	－	2.5Y6/2 灰黄色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	脚部なで	脚部なで	無	有	
	1	ピット 9		甕（土師）	口縁部	30.0	－	7.5YR6/4 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	口縁部なで　胴部ナナメ刷毛	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	無	有	（土師）
355	1	一括	P-37他	甕	完形	17.5	30.8	10YR6/3 にぶい黄橙色	角閃石　長石 赤褐色粒　雲母	良好	口縁部なで 胴部～底部ナナメ、縦刷毛	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	無	有	内器面底部 指押さえ痕
355	2	一括	P-65	甕	上半	27.6	－	7.5YR6/4 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部～肩部なで 胴部粗いナナメ刷毛	口縁部なで　胴部ヘラケズリ	有	無	（土師）
355	3	一括	P-40	台付鉢？	脚部	－	－	7.5YR7/4 にぶい橙色	角閃石　長石 雲母　精緻な胎土	良好	ミガキ	なで	無	無	透かし孔が3ヵ所 あったと思われる
355	4	一括	P-35	壺	完形	14.6	25.6	7.5YR5/3 にぶい褐色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口唇部なで　口縁部縦刷毛後なで 肩部、胴部下半縦刷毛 胴部中位横、ナナメ刷毛	口唇部、頸部なで 口縁部横刷毛後なで 胴部ヘラケズリ	有	有	

第８章　平成12年度の調査

12年度はこれまでの調査の結果を補足するものとして、これまで調査例の少ない指定範囲外の西側部分を調査することとした。台地西側にあたる大道小学校近辺の方保田集落は、現在も約130世帯の家屋が密集して建っているため、宅地開発の及んでいない畑地の西端を対象とした。遺跡全体からみると、ほぼ中間地帯にあたる。

調査区は196-1番地と209番地の２箇所で、互いは南北に接した位置関係にある。196-1番地が北側である。現状はどちらとも畑地で、196-1番地の方が一段高くなっているが、後世の開発で地形は変化している。地権者の話によれば、196-1番地の南側は盛土されており、以前は北側の方が低かったらしい。調査の際、基盤の層である黄色粘土層の上面の標高をたどってみると、196-1番地の北端が最も高く、それから南（菊池川方向）へ徐々に低くなっていき、209番地南側で再び高くなる。旧地形もおそらくこのような起伏があったと考えられる。調査地はいずれも一時水田として利用されたが、近年は畑地でトウモロコシ等が耕作されてきた。

第１節　209番地の調査（第386・387図）

トレンチは、長さ50m、幅４m、面積200㎡で、国土座標軸に沿って設定した。

検出された遺構は、弥生時代においては住居跡４基、溝５条、プラン不明の硬化面１面である。このほか、時期は確定していないが弥生の可能性の強い土坑が３基。

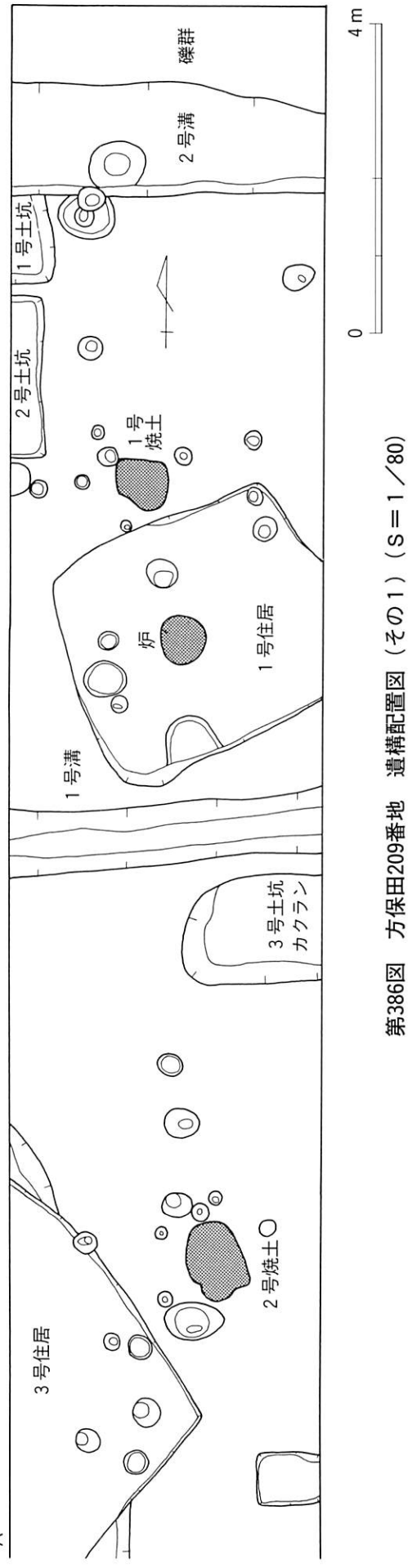
また、古代の遺構も検出された。残念ながら、土の差を異見分けられず、検出に失敗したものがある。遺構は、硬化面の広がりを確認したものが３面、断面から分かった土坑が２基、性格不明の焼土が２基である。

１．弥生時代の遺構と遺物

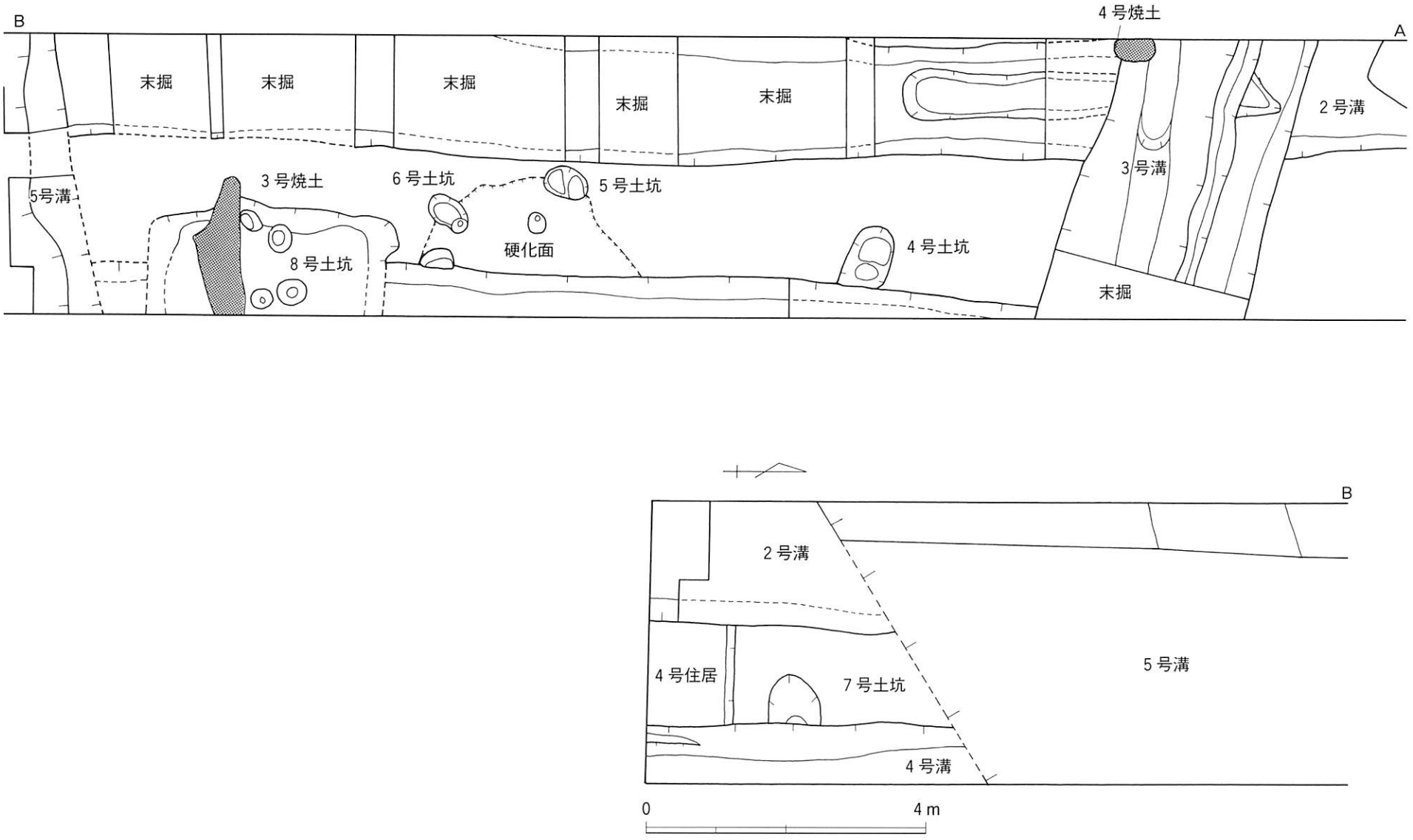
（１）　１号溝（第388図）

２区で検出された。幅0.77mで深さは0.45mを測る。この時期の溝の中ではもっとも幅が狭く、特異な溝といえる。トレンチとほぼ直交しており、軸は東西方向を向く。底面の標高は西へ行くほど低くなっている。

出土土器は弥生時代の土器片がわずか３点であり、



第386図　方保田209番地　遺構配置図（その１）（S＝１／80）



第387図　方保田209番地　遺構配置図（その２）（Ｓ＝１／80）

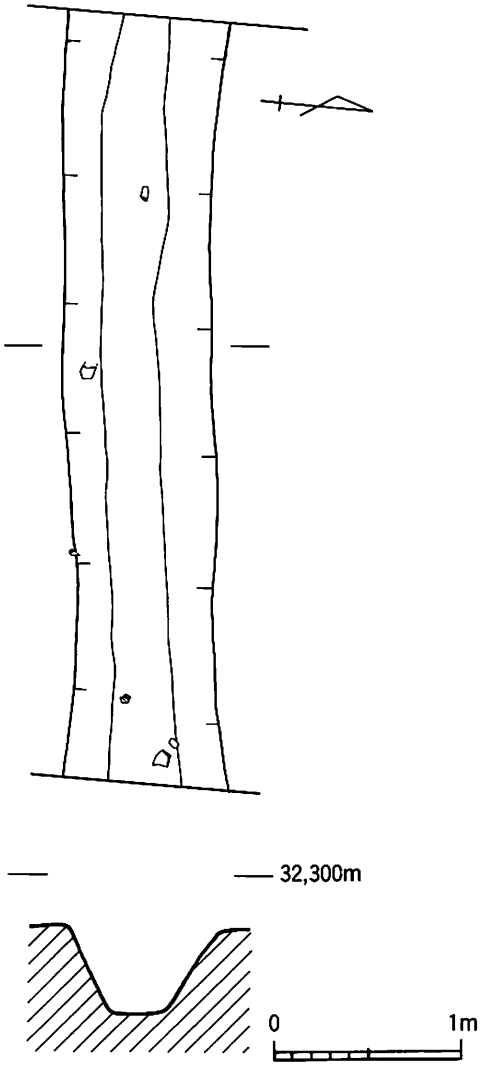
この遺物の少なさも特徴の一つである。切り合い関係もなく時期については明確な根拠を欠く。しかし、幅わずか50cmで断面形がV字を呈するなどの形状の特徴から、第2次調査（近江工業地区内調査）及び第5次調査（大道公民館建設に伴う調査）の2つの調査区で検出された溝であることでほぼ間違いない。図面上でこれらをつなげてみても、ほぼ一直線につながり、同一であることが分かる。

遺物（第389図）

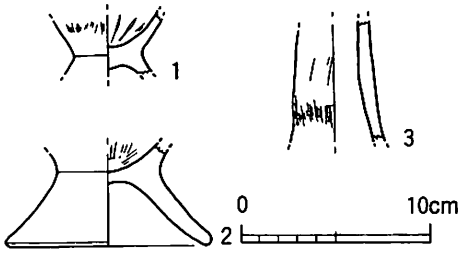
1は台付鉢ミニチュアである。外器面に細かい目のタテハケが見える。2は甕の脚台である。3は高坏の柱部である。外器面はナナメ刷毛が施される。

（2） 2号溝（第390図）

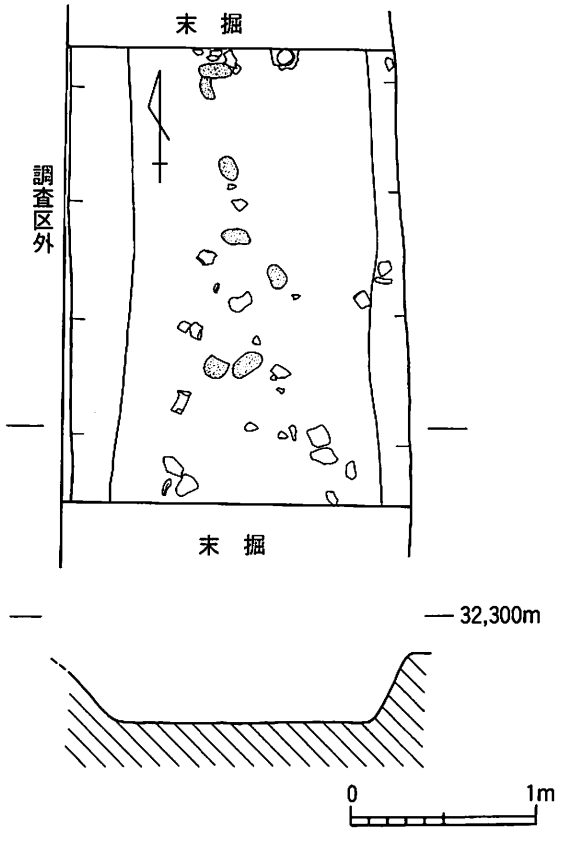
2区から5区にかけてトレンチ西側で南北方向に検出された。長さは約18mである。基本的には検出にとどめ、部分的に底面まで掘り下げた。幅は西肩が調査区外であるため不明だが、推定で1.75mになると思われる。底面の幅は1.26mで、断面形は逆台形を呈する。深さは0.33m～0.69mとばらつきがあるが、検出面の高低によるもので、底面のレベルで見ると、標高は約31.7mであり、それほど差異はない。南（菊池川方向）へ向かうに従いわずかに低くなっていく。溝の埋土は暗褐色土一層で、溝は一気に埋まったものと思われる。ほぼ南北方向に走り、若干西側に膨らむ。



第388図　1号溝　実測図（S=1／40）



第389図　1号溝出土土器実測図（S＝1／4）



第390図　2号溝（掘下部分）実測図（S=1／40）

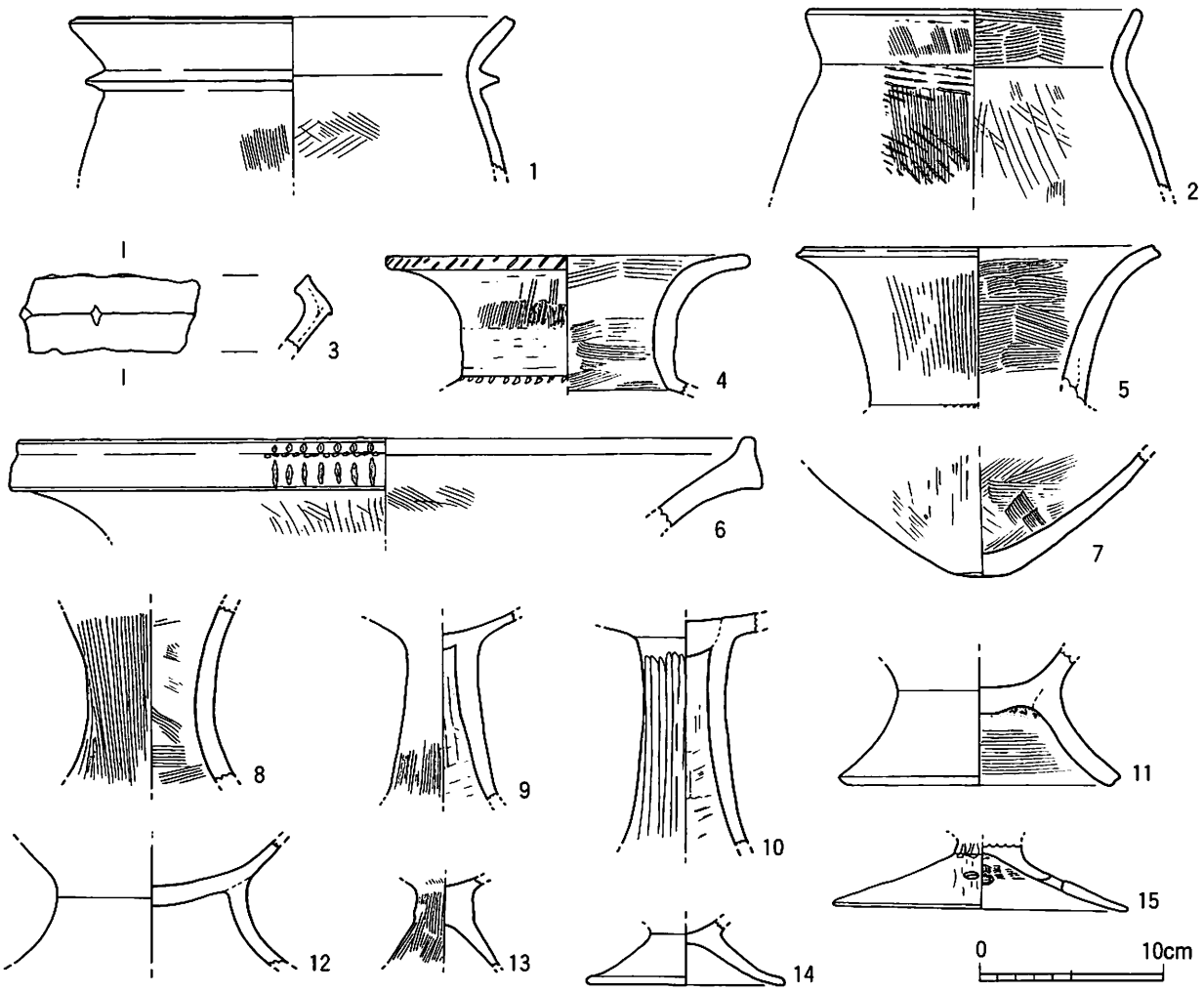
この溝の切り合い関係は、3号住居跡と3号溝および5号溝に切られ、4号住居跡を切る。

出土土器は弥生土器の小片が多く、完形に復原できるものは見られなかった。出土量についても少なく、3号溝、4号溝と対照的である。

遺物（第391図）

1は甕の上半である。口縁部がわずかに外反し、頸部に三角突帯がめぐる。2は甕の上半部である。胴部はタタキ後にタテハケが施されている。3は壺の口縁部か。口唇部の断面は角張り、口縁部は鋭く屈曲する。4、5は広口壺の口縁部である。4は口縁部が横に大きく開く。いずれも頸部に刻目文が施されている。6は大型壺の口縁部である。口縁部には3段にわたって刻目文が施されている。7は壺の底部と思われる。尖底気味の平底である。8は器台の中位である。外器面はタテハケが施される。9、10は高坏の柱部である。10の柱部外器面は縦方向のヘラ磨きが施されている。12は台付鉢の底部及び脚台である。鉢成形後脚台がつけられている。13は長脚付鉢の脚部か。外器面はタテハケを施す。11は甕の脚台である。脚台上位の内器面には砂型が見られ、脚台裾部はヨコハケが施されている。14、15は台付鉢の脚台である。15は裾が直線的に外へ長く伸びる。裾部には透孔が全体を四分割するように4個施される。

溝の形態や深さ、そして土器の出土量から、当遺跡で検出される弥生時代の一般的な溝とは異なる部分が多い。防御性を持たない排水溝的なもの、あるいは周囲と区画する溝と考えるべきか。



第391図　2号溝出土土器実測図（S＝1／4）

（3） 3号溝（第392～394図）

3区で検出された。ほぼ東西方向に伸びる幅2.86m、深さ0.98～1.2mの溝である。溝の北側には幅0.15mのテラスがあって、溝の底と0.54mの比高差の段となっている。溝の断面は南側肩が急で、北側肩が緩やかである。

溝底面は東側から西側へ低くなっていくが、図のとおり、途中0.2mの段下がりの部分がある。この段差は、溝の掘削単位を表すものではないかと思われる。

切り合い関係は、2号溝及び4号溝を切り、西側で古代の土坑に切られている。

土層断面を見ると土はほとんど南側から流れ込んでいるので、周堤または溝掘削時の廃土が南側にあったと思われる。また、土層観察により、埋土の南斜面と同じ勾配で3面の硬化面が確認された。かなり硬化した面であるため、この3回の時期に、道路的な機能を持っていた可能性がある。

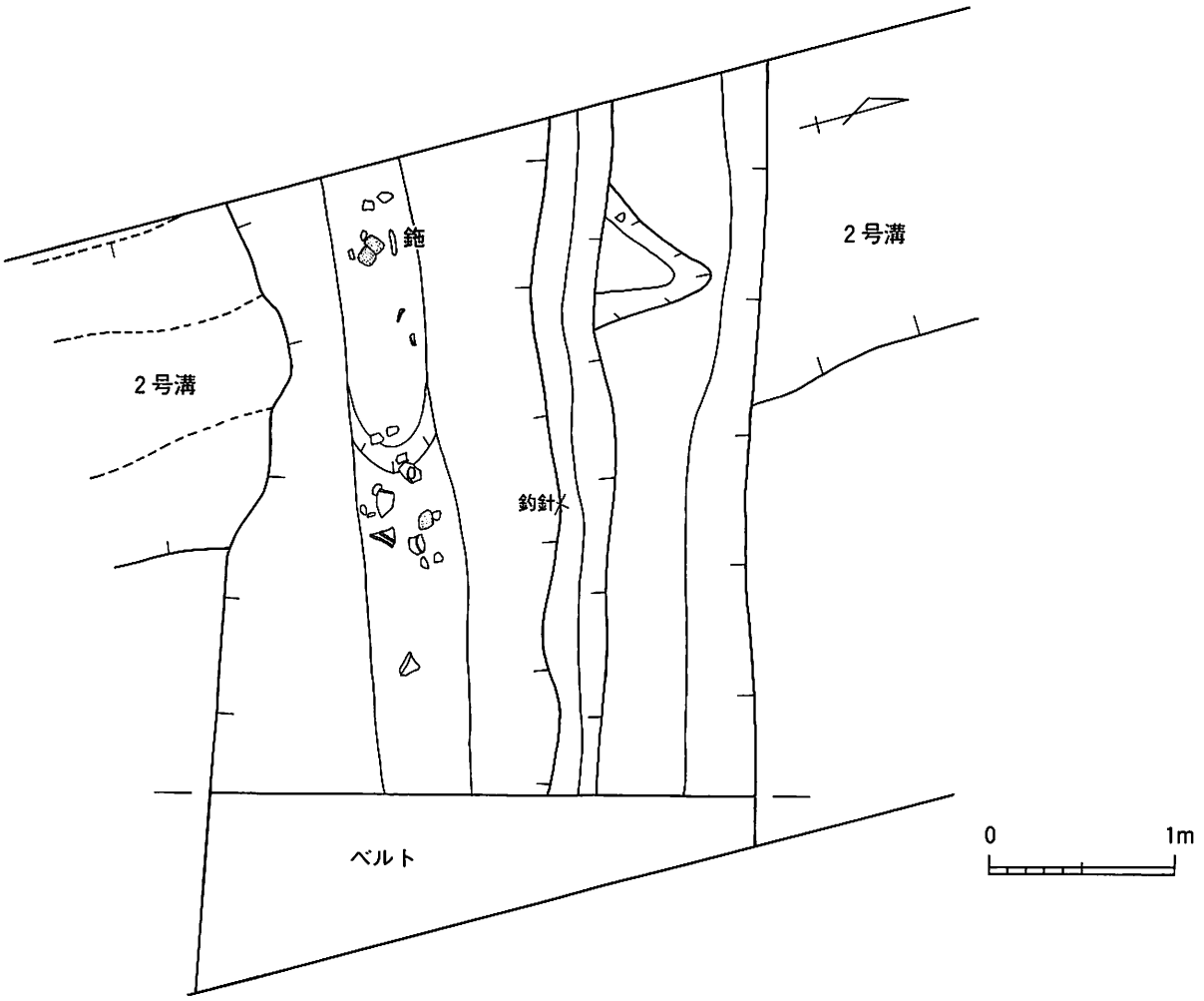
遺物（第395～401図）

この溝からは膨大な量の土器が出土した。土層断面等から、土器の廃棄は3回行われたようである。下層、中層ともに量はそれほど多くない。最後の廃棄が行われた上層からは、おびただしい量の土器が出土した。出土土器の破片は概ね大きく、完形のものも多かった。これらの土器には第400図の2点の高坏など、廃棄というよりも意識的に配置したかのような出土状態も見られた。また、上層から出土したほぼ完形の甕、壺については穿孔されたものも多く見られる。

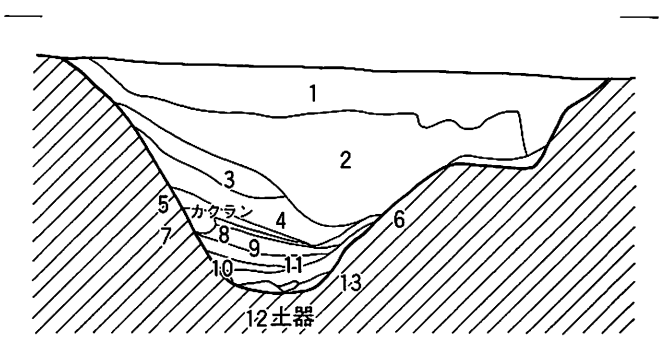
上層

甕　1はほぼ完形の甕である。平底を呈すると思われ、長胴である。頸部に刻目が施される。胴部にはタタキ痕が残り、それをタテハケやナデで消している。肩部に穿孔らしき孔が見られる。2は完形の脚台付甕である。胴部中位が最大径となる。外器面は一見タテハケだけのように見えるが、左斜め上方向のタタキ痕をタテハケで丁寧に消している。3は脚台付甕である。脚台部を欠いているが、それ以外はほぼ完形である。これも形がややいびつである。外器面の調整は非常に丁寧で、胴部上位にタタキ後ナナメ刷毛がわずかに認められるものの、それ以外の部位は丁寧なナデ調整が施されている。5も下半を欠いているが、脚台付甕と思われる。口唇部端部がややくぼむ。4と6はやや形がいびつで、口縁部端部のラインは水平にならない。6は口縁部までタタキ成形を行っている。外器面はタタキ後タテハケで、内器面はナナメ刷毛で調整されている。7も完形の脚台付甕である。脚台が低く、外へ開く。底部は厚さがなく、内器面側に若干隆起する。8はほぼ完形の脚台付甕である。脚台は打ち欠かけれている。胴部上位に穿孔が施されている。9は甕の上半部である。口唇部と頸部の突帯に刻目が施されている。頸部は断面形が台形を呈する。胴部はタタキ後またはヘラ調整後ナナメ刷毛が施されている。10は古代土師器の甕の口縁部である。上面で出土したもので、溝を切るなんらかの遺構に伴うものと思われるが、この部分で掲載した。

壺　12は大型の広口壺である。器高は49.5cmを測る。レンズ状の底部から、最大径である胴部中位へ続く。頸部ですぼまった後、頸部がやや直立し口縁部が外に開く。胴部の形は長胴でややいびつである。器面には穿孔と思われる孔が5箇所確認された。いずれも焼成後に外側から打ち欠いて穿孔されたものである。外反する口縁部の端部には刻目が施されている。13は完形の広口壺である。丸底の底部で、卵倒形の胴部から頸部で一旦すぼまると、頸部から口縁部はほぼ垂直に立ち上がって口縁部で外反する。頸部には櫛描波状紋と平行文が施されている。上段に平行文を描いた後に波状紋を施している。いずれも時計回りの方向である。14は完形の長頸小型壺である。胴部は横に広がっており、算盤玉形に近い。頸部に刻目が施されている。15は完形の小型長頸壺である。精製土器で、胎土が赤みを帯びた土で、他と明らかに異なる。器面は波状紋のある肩部を除いてヘラミガキが施されている。底部に一箇所穿孔が施されている。16は完形の広口壺である。底部はレンズ状の平底で器高が低く、胴部が横に張っているため全体的に丸みを帯びた器形となる。口縁部はそれほど長くないが、外側へラッパ状に開く。外器面、内器面ともに丁寧なナデが施されている。頸部や肩部にナナメ刷毛の痕がわずかに見られる。17は短口壺の口縁部である。口縁部が短く外へ開く。両器面に粘土接合痕が残る。18は完形の大型広口壺である。レンズ状の底部から胴部やや上位にかけて横へ大きく

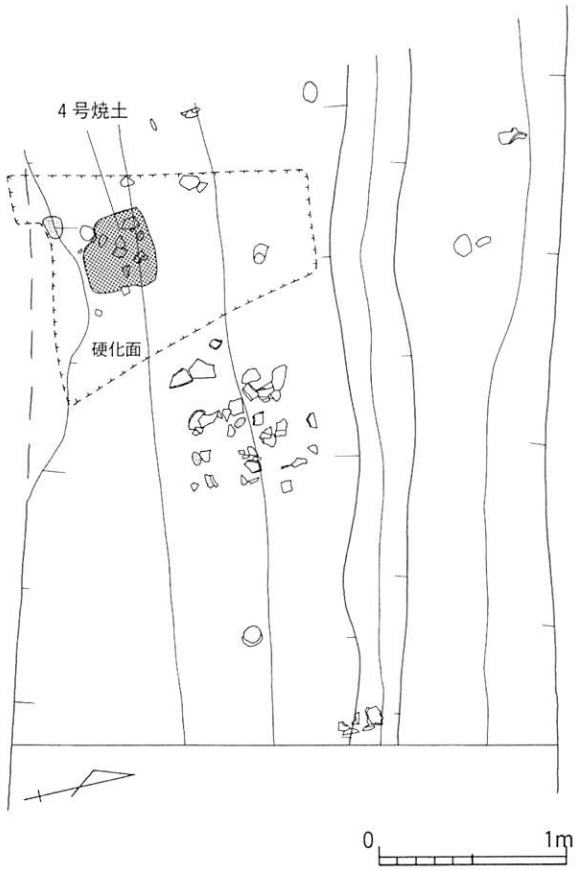


第392図　3号溝及び下層遺物出土状況実測図（S＝1／40）

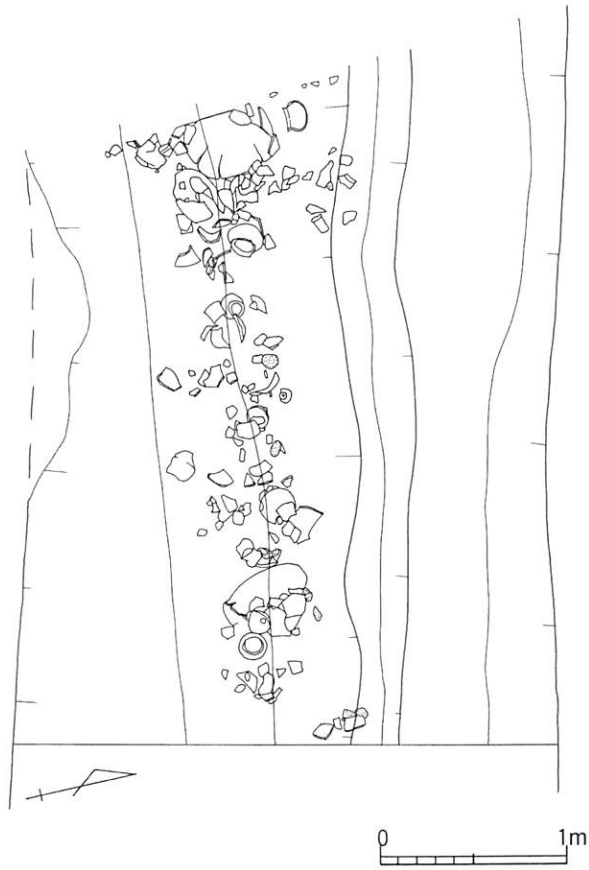


1層（暗褐色土）　上面
2層（黒褐色土）土器が大量に出土。　上層
3層（黒褐色土）不純物が少ない。
4層（黒褐色土）オレンジ色の粒子をやや含む。
5層（暗褐色土）非常にしまっている。
6層（暗褐色土）しまりがない。
7層（暗褐色土）非常にしまりがない。
8層（極暗褐色土）しまっている。土器が出土。　中層
9層（黒褐色土）黄土粒子を含む。
10層（黒色土）粘性がある。
11層（暗褐色土）しまりがない。炭をやや含む。　下層
12層（黒褐色土）粘性がある。　最下層

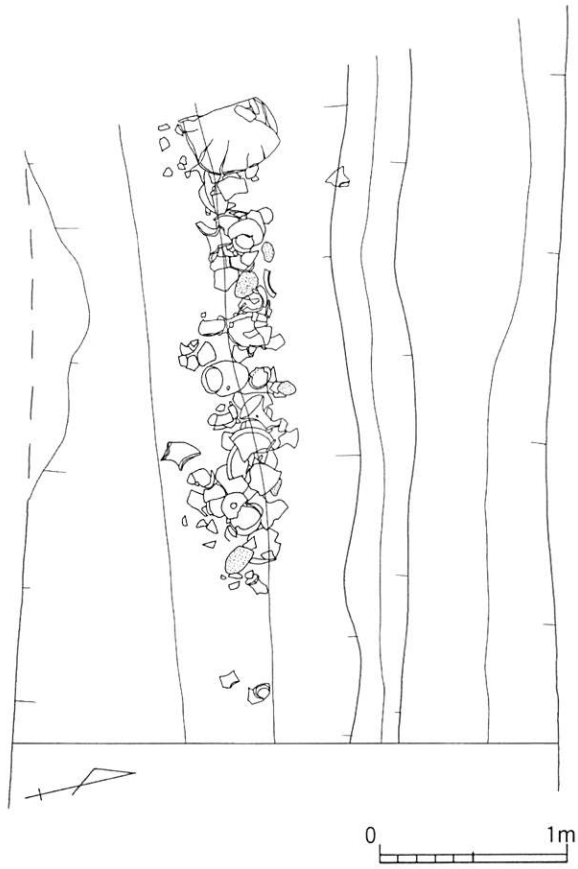
第393図　3号溝土層断面図（S＝1／40）



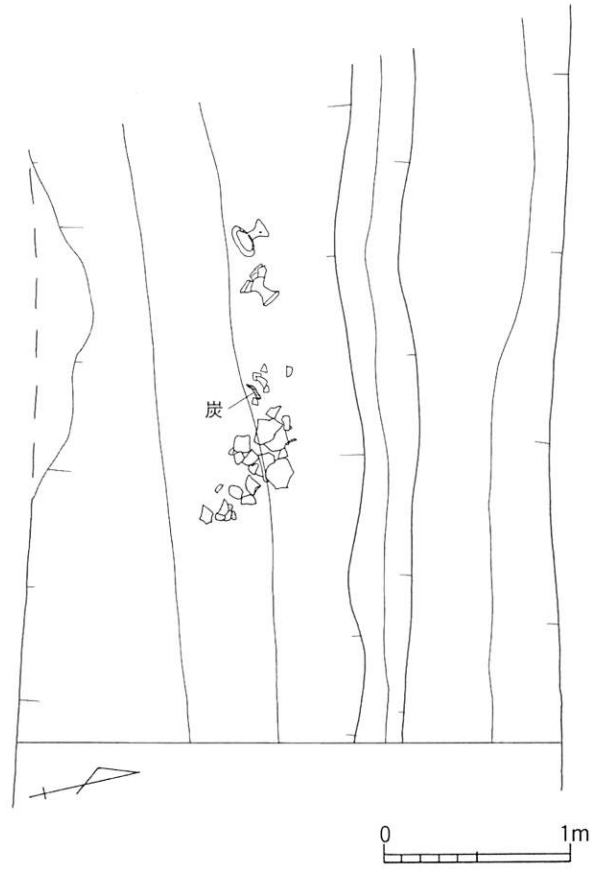
上面遺物出土状況（S＝1／40）



上層遺物出土状況その1（S＝1／40）

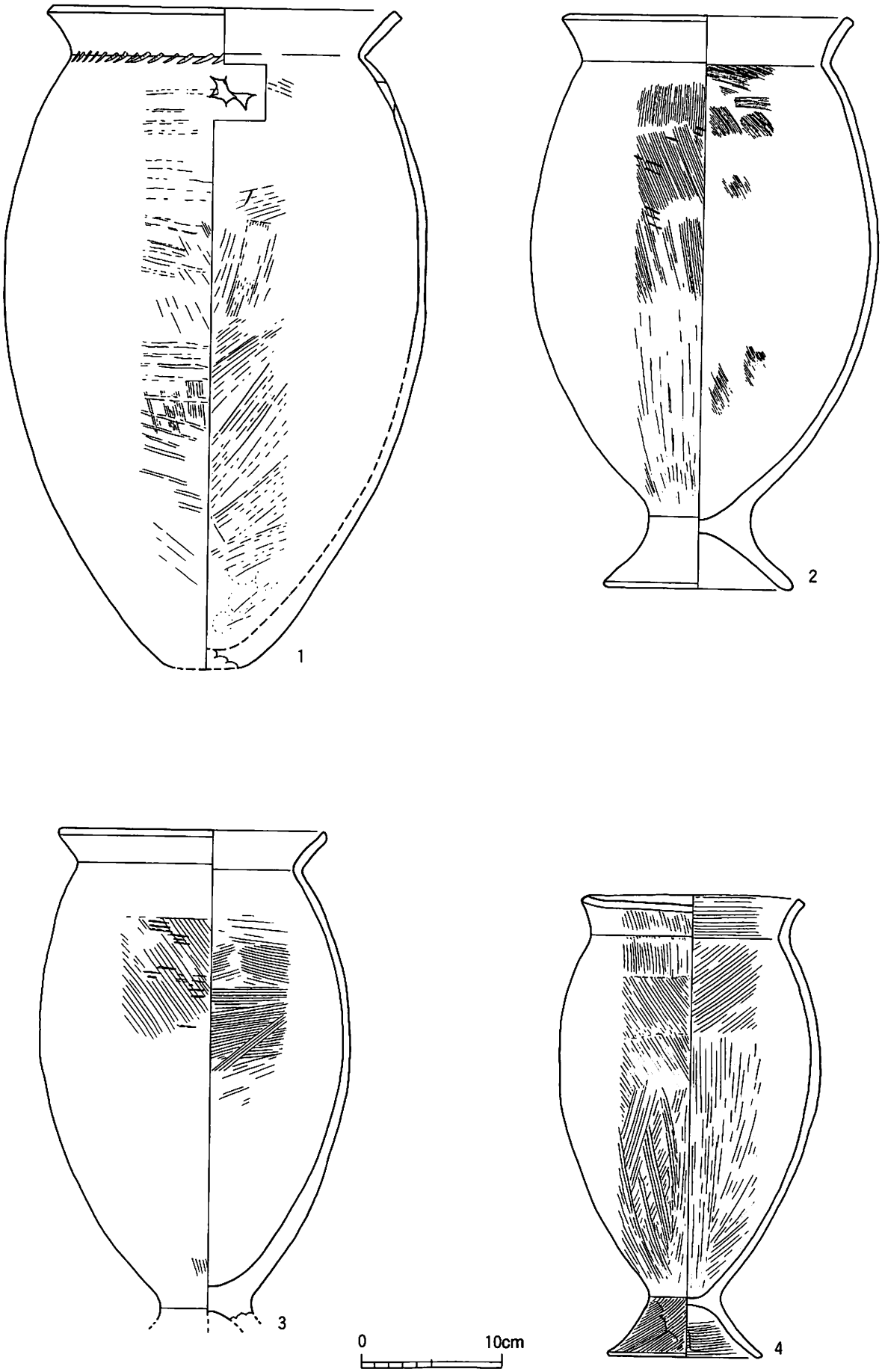


上層遺物出土状況その2（S＝1／40）



中層遺物出土状況（S＝1／40）

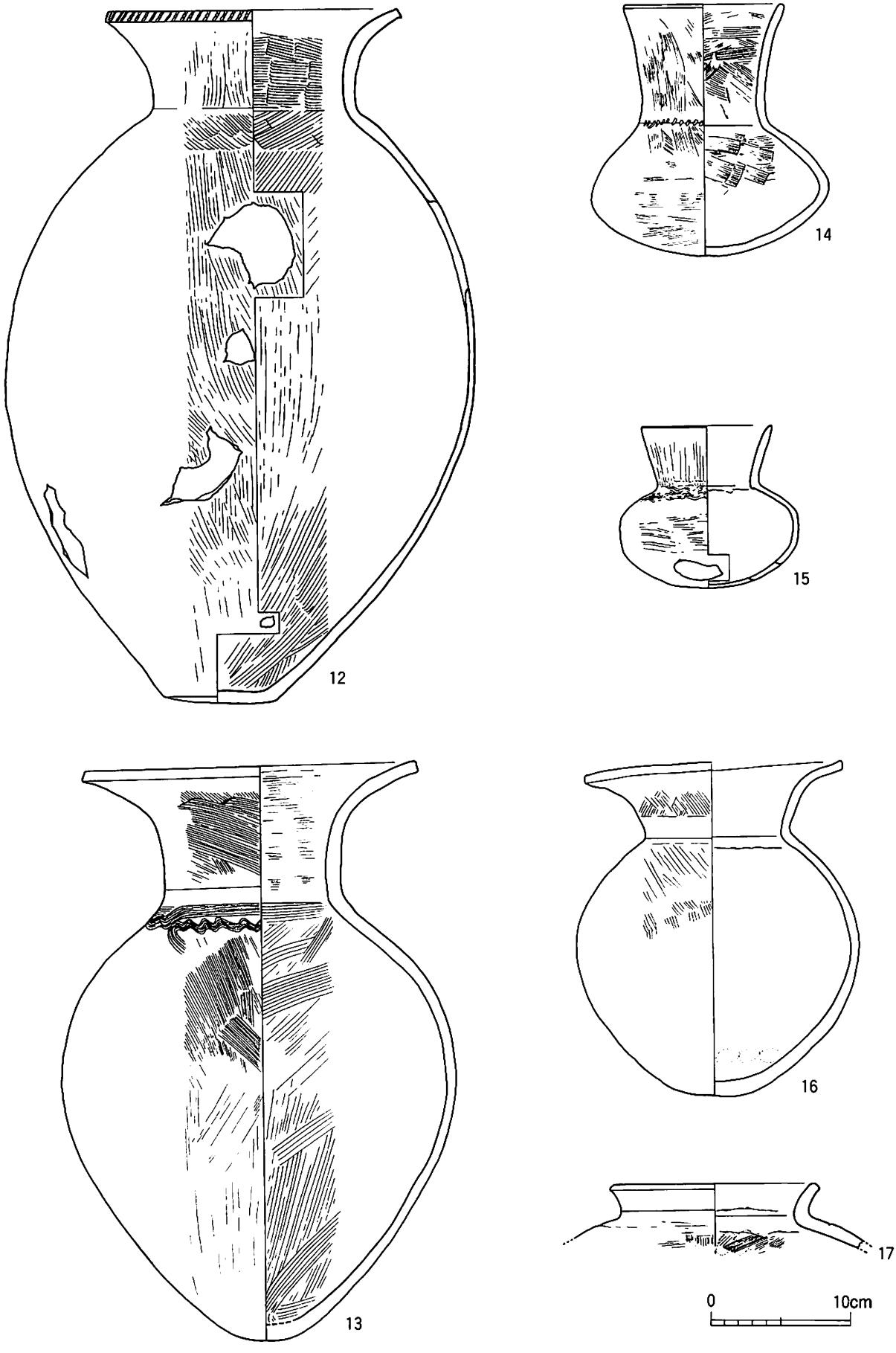
第394図　3号溝遺物出土状況実測図



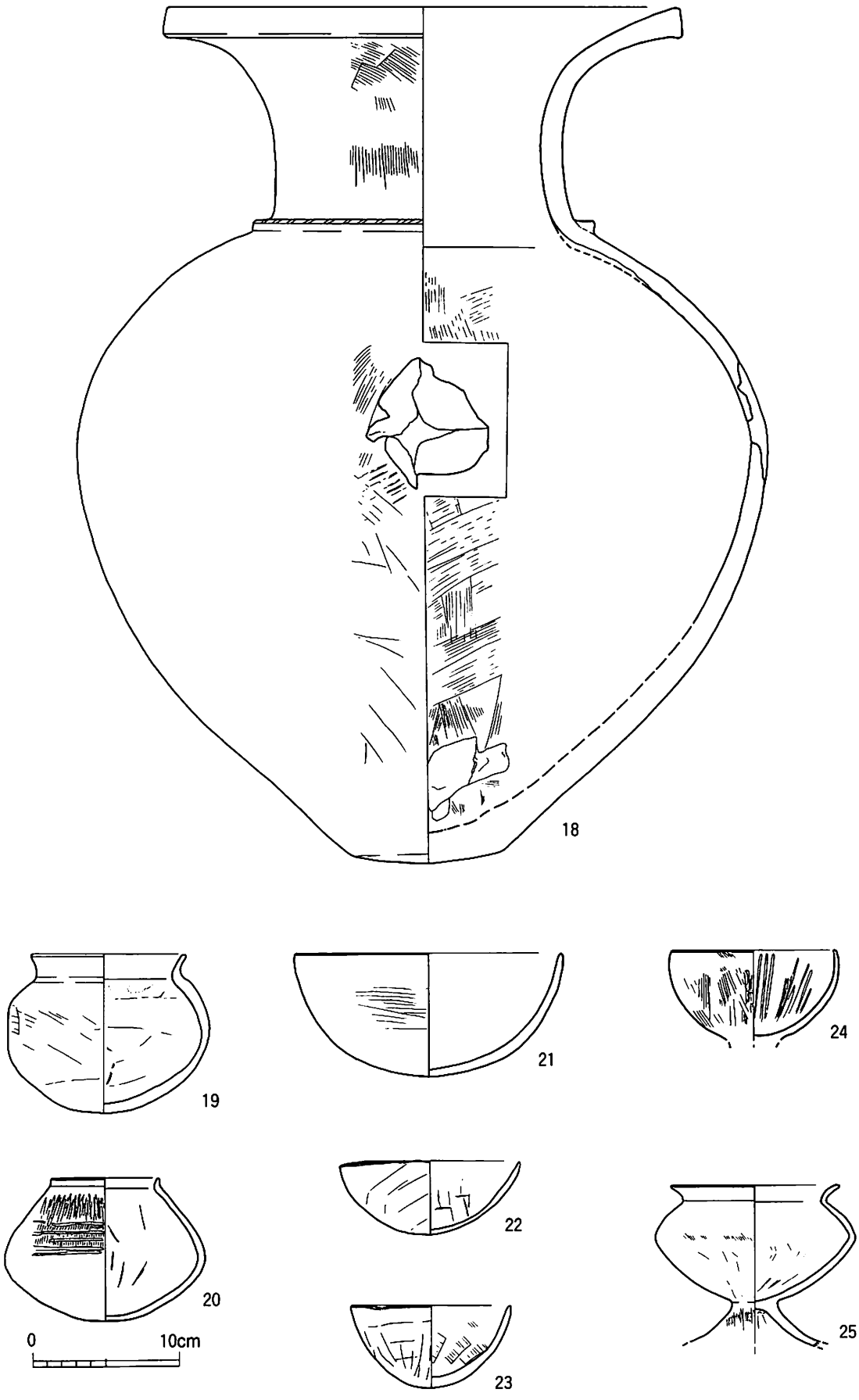
第395図　3号溝(上層)出土土器実測図①（S＝1／4）



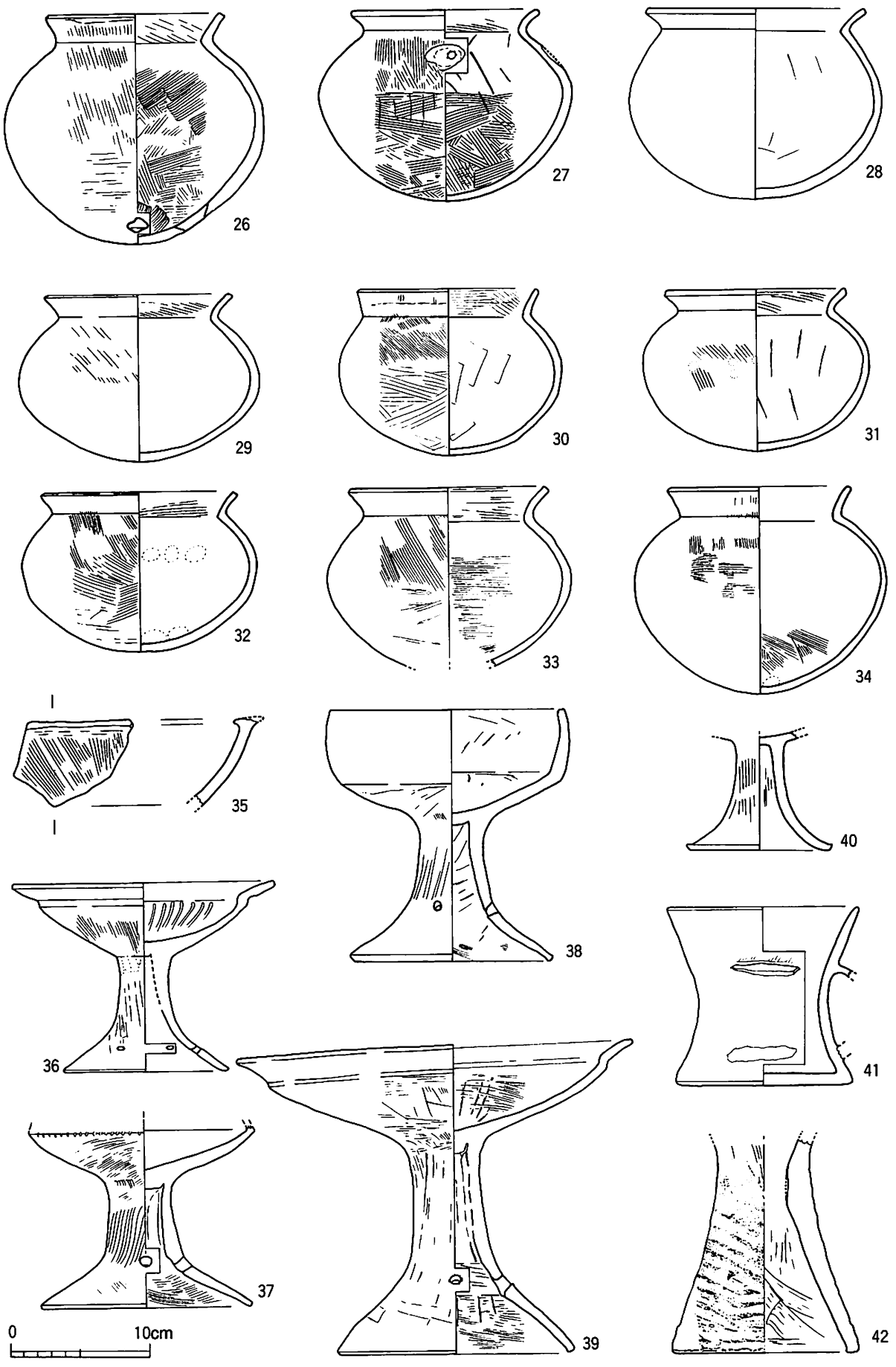
第396図　3号溝(上層)出土土器実測図②（S＝1／4）



第397図　3号溝(上層)出土土器実測図③（S＝1／4）



第398図　3号溝(上層)出土土器実測図④（S＝1／4）



第399図　3号溝(上層)出土土器実測図⑤（S＝1／4）

ふくらみ、頸部ですぼまる。首がほぼ直立し、口縁部で大きく外へ開く。頸部には刻目の施された三角突帯がめぐる。外器面は主にナナメ刷毛で調整されているが、胴部中位にはタタキ目が残っている部分もある。穿孔と思われる孔が3ヵ所確認された。19は完形の短口小型壺である。肩が張り、胴部中位が最大径となる。形がいびつで、調整も雑な印象を受ける。20は小型の無頸壺である。丸底で、最大径は胴部やや下位にあるため、下膨れのような形である。胴部にはタテハケ後横方向のヘラミガキを施す。肩部にはタテハケ後縦方向のヘラミガキが施されている。色調は赤褐色を呈し、精製土器である。

高坏　35は高坏の口縁部である。口縁部上面が平坦で、内側にわずかに突出する。粒子の大きな長石を含む特徴のある胎土である。36はほぼ完形の小型の高坏である。裾部に4つの透孔があり、坏部内器面はヘラミガキが施されている。37は口縁部を欠いた高坏である。坏体部の屈曲する部分から上位を欠く。割れ口から判断すると、故意的に打ち割られ、破損後も器として利用されたと思われる。坏体部の屈曲部には刻目が施されている。脚部に3つの透孔が施されているが、そのうち1点は貫通できていない。裾はほぼ直線的に開く。これらの特徴から、山鹿市に所在する蒲生上の原遺跡濠Ⅰで出土した「ブランデーグラス状の長脚付鉢」と同形と考えられる。38は坏部口縁部が内湾気味に直立する完形の高坏である。坏部体部から下は、一般的に見られる高坏と器形及び調整はほとんど変わりない。脚部に3つの透孔が均等に配されている。裾部は内湾しながら開く。特徴的な器形から外来系土器と思われるが、胎土は在地のものと差異はない。39は完形の高坏である。やや形がいびつである。坏部は浅く、口縁部は一度短く直立した後外へ開く。脚部に3つの透孔を施し、裾部は内湾しながら開く。坏部内器面は、放射状にヘラミガキを施す。40は高坏の脚部である。裾端部が角張って、上部へ反る。

鉢　無頸（21～24）と有頸（11、25～34）に分けられる。無頸には脚が付くものが、有頸のものには大型のものがある。21は無頸の鉢である。22、23も完形の無頸鉢である。21に比べやや小型である。いずれも外器面の調整は雑である。内器面は丁寧にナデられている。24も脚付の無頸の鉢で脚部から下位を欠く。内器面にヘラミガキが施されている。25は台付鉢で、最大径である胴部中位で屈曲し、口縁部は短く、外反する。色調は橙色を呈し、胎土の粒子が細かい。外器面、内器面ともに丁寧なナデ調整が施されている。26～34は完形又はほぼ完形の有頸鉢で、丸底で最大径が胴部中位にあり、口縁部が外反する。頸部の屈曲部内器面は大半が丸みを帯びているが、32や34のように明瞭な稜線を持つものもある。器面調整は、外器面はハケ調整がほとんどである。27は外器面全体にハケ目が明瞭に見られるが、それ以外はそれほど目立たない。内器面は、ナデとハケ調整がある。30は内器面がナデであるが工具による調整痕がわずかに認められる。32の内器面には底部と胴部上位に指頭圧痕が認められる。このほか、26の底部には1箇所焼成後の穿孔が施されている。また、27の肩部外器面には穿孔を途中で止めたかのような剥離痕がみられ、中心には直径5㎜程度の小さなくぼみがある。11は大型の有頸鉢の上半部と思われる。外器面はタテハケで、内器面はヨコハケで丁寧に調整されている。

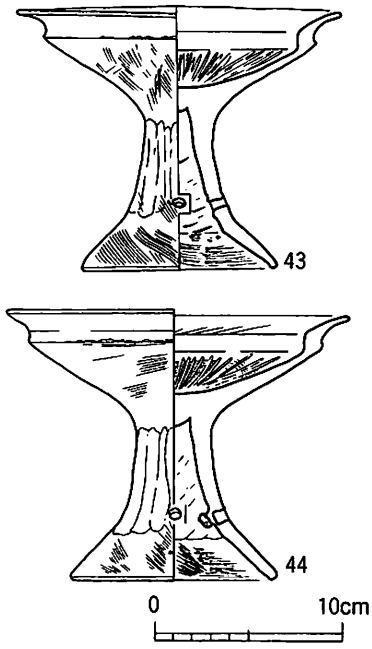
器台　42は上部を欠いた器台である。外器面全体に粗いタタキ目が残る。内器面は、下半が工具による調整が施されている。

ジョッキ形土器　41はジョッキ形土器である。把手を欠く。底部は平らで、胴部中位でくびれ、外反しながら口縁部にいたる。底部径よりも後円部径の方が大きい。

鉄器（第422図）　1点出土した。9は薄片状鉄片である。非常に薄く、均一の厚さである。表面に一部木片が付着する。

中層

高坏　43、44は完形の小型の高坏である。溝の北肩で二つ並ぶようにして出土した。胎土、器形、調整ともにほとんど同じであるため、同一人物によって作られた土器であろう。口縁部は外反しながら開く。脚部は柱部から裾にかけて緩やかに外に開く。坏部内器面はナデ後放射状にヘラミガキが施されている。脚部には3つの透孔があり、44の透孔は3つのうち2つは貫通していない。



第400図　3号溝(中層)出土土器実測図
（S＝1／4）

下層

甕　45は甕の口縁部から肩部である。口縁部端部には刻目が施され、頸部には刺突文が施された突帯がめぐる。外器面は肩部にナナメ刷毛が、内器面には口縁部にヨコハケが、頸部から肩部にはナナメ刷毛が施されている。

器台　46は器台の中位である。全体に径が細い。外器面は細いタテハケが、内器面下位はヨコハケが施されている。

この他、注目される遺物として、鉄製釣針と鉇が挙げられる。どちらも溝底面直上で出土しており、土器から弥生時代後期後半に属するものと考えられる。

鉄器（第422図）　釣針（7）と鉇の基部（11）が各1点出土した。7は完形の釣針である。長さは3.1cmで、幅は1.2cmを測る。平面形は整った「し」の字で、針先にはカエリがつく。軸部先端は瘤状にやや膨らみを持つが、錆の可能性もある。軸の断面形は正方形を呈する。

（4）　4号溝

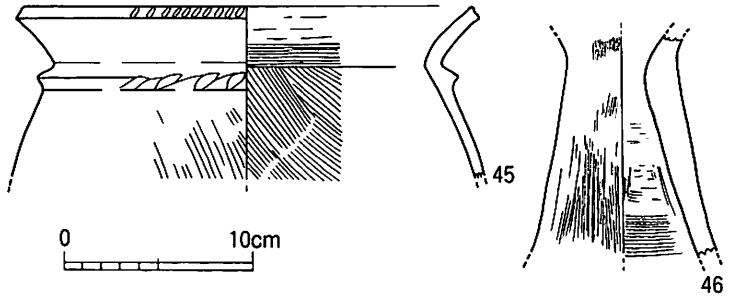
トレンチ東側の3区から5区で検出された。溝の東半分が調査区外であったため、幅及び断面形は不明である。発掘した西半分から考えると、断面形はV字形の可能性が強い。溝の主軸はほぼ南北方向で、直線に走る。深さは0.56～1.28mで、底面は南側へ行くにつれて、低くなっていく。今回検出した最北端と最南端間（距離にして21m）の標高差は0.67mである。

他の遺構との前後関係は、3号溝及び5号溝、4区不明土坑に切られ、トレンチ南端の4号住居跡と4区の硬化面及び5区の土坑を切っているので、3号及び5号溝よりも古く、4号住居跡及び4区硬化面、5区土坑よりも新しいということになる。

遺物（第402～405図）

この溝も遺物の量は非常に多い。トレンチ4区から5区にかけての部分の、溝の中央に多く見られた。また、5号溝北肩と切り合う部分も土器が多量に出土した。

埋土の観察から、埋没してしまうまでに2回掘りなおされていることがわかる。そしてその都度多くの土器が埋土とともにに埋まっている。南側断面で言うと上層（22層）、中層（25層）、下層（29層）で、土器は中層（25層）が最も多い。土器は甕、壺、高坏、鉢のほか、甑、ジョッキ形土器などもある。ほとんどが破片で、3号溝でみられたように完形に近いものはわずかであった。使用不可能になった土器片が廃棄されたと考えられる。



第401図　3号溝(下層)出土土器実測図（S＝1／4）

上層　甕、高坏、壺、鉢が出土した。

甕　1は甕の上半である。内器面に見られる頸部屈折部の稜線が鋭い。2、3は甕の脚台である。2は底部の器壁が薄く、下にくぼんでいる。4は脚台付きの甕で口縁部と頸部を欠く。胴部中位に最大径があり、長胴である。脚台裾部はやや分厚く、端部は丸い。胴部上半の外器面にはタタキ目がわずか

に残り、ナナメ刷毛で消している。内器面は丁寧にナナメ刷毛で調整されている。

壺　5～8、10は広口壺である。5は頸部の屈折部が丸みを帯び、口縁部は短く外反する。6は頸部に三角突帯がめぐり、口縁端部に薄い刻目が施されている。8は長頸で、口縁端部が肥厚し、上辺が平坦となっている。頸部に突帯がめぐる。10も長頸で、球形の胴部をもつ。頸部は緩やかにすぼまり、口縁部がラッパ状に開くと思われる。頸部外器面に櫛描簾状文が施されている。このほか、外器面の所々にベンガラが付着している。9は短頸壺の口縁部と思われる。厚みのある口縁部が短く外へ開く。

高坏　14、16は高坏の脚部と思われるが、長脚付鉢の脚部の可能性がある。14は小型で、柱部が円筒状である。16は柱部から裾部にかけてハの字状に広がり、裾端部でさらに外へ開く。裾部端部には沈線がめぐる。

鉢　11～13、15は鉢である。11は鉢の上半である。長脚が付くと思われる。胴部が横に張り、口縁部は短く外反する。12はおそらく長脚付鉢の鉢部であると思われる。口縁部がごくわずか立ち上がる。13は鉢の上半部で、焼成後胴部に大きな孔が穿かれている。15は台付鉢の脚台と思われる。甕の脚台の可能性もあるが、高さがないので鉢と考えた。

不明土器　17は不明土器である。高坏の坏部のようにも見えるが、口径が小さく、深い。体部下端で屈折し、外器面には稜線を持つ。

中層　甕、壺、甑、鉢、高坏、器台が出土した。

甕　24は甕の脚台である。砂型が認められる。

壺　18は広口壺の頸部及び口縁部である。長頸で、口は大きく開く。19は広口壺の頸部及び肩部である。頸部はやや直立気味に立ち上がり、口縁はラッパ状に開くものと思われる。頸部外器面にナナメの刺突文が施されている。20は広口壺の頸部及び胴部と思われる。頸部はやや直立気味に立ち上がる。胴部は球形で胴部中位に最大径がある。外器面肩部に簾状文が施される。21は壺の肩部である。外器面には櫛描簾状文と櫛描波状紋が施されている。簾状文が上段で、波状紋が下段に描かれている。22、23は壺の底部である。23は平底で、胴部は球形を呈すると思われる。22はレンズ状の底部で、かなり大型の壺になると思われる。両器面ともハケ調整が施されている。

甑　26は完形の甑である。底部に一箇所円形の孔が穿たれている。タタキで成形された後、ナナメ刷毛で器面調整されている。

鉢　25、28、30は鉢である。25は短口の鉢と思われる。上層出土の12と口縁部の形状が非常に似ている。28は小型台付鉢の脚部と思われる。裾部で大きく開き、内器面に稜線が見られる。30は長脚付鉢の脚部と思われる。外反しながら開き、端部がやや上へ反る。

高坏　29、31は高坏である。29は坏部で、口縁部が強く外反する。31は柱部から裾部にかけてやや開き、裾部で大きく外へ開く。柱部に5つの透孔が施されている。

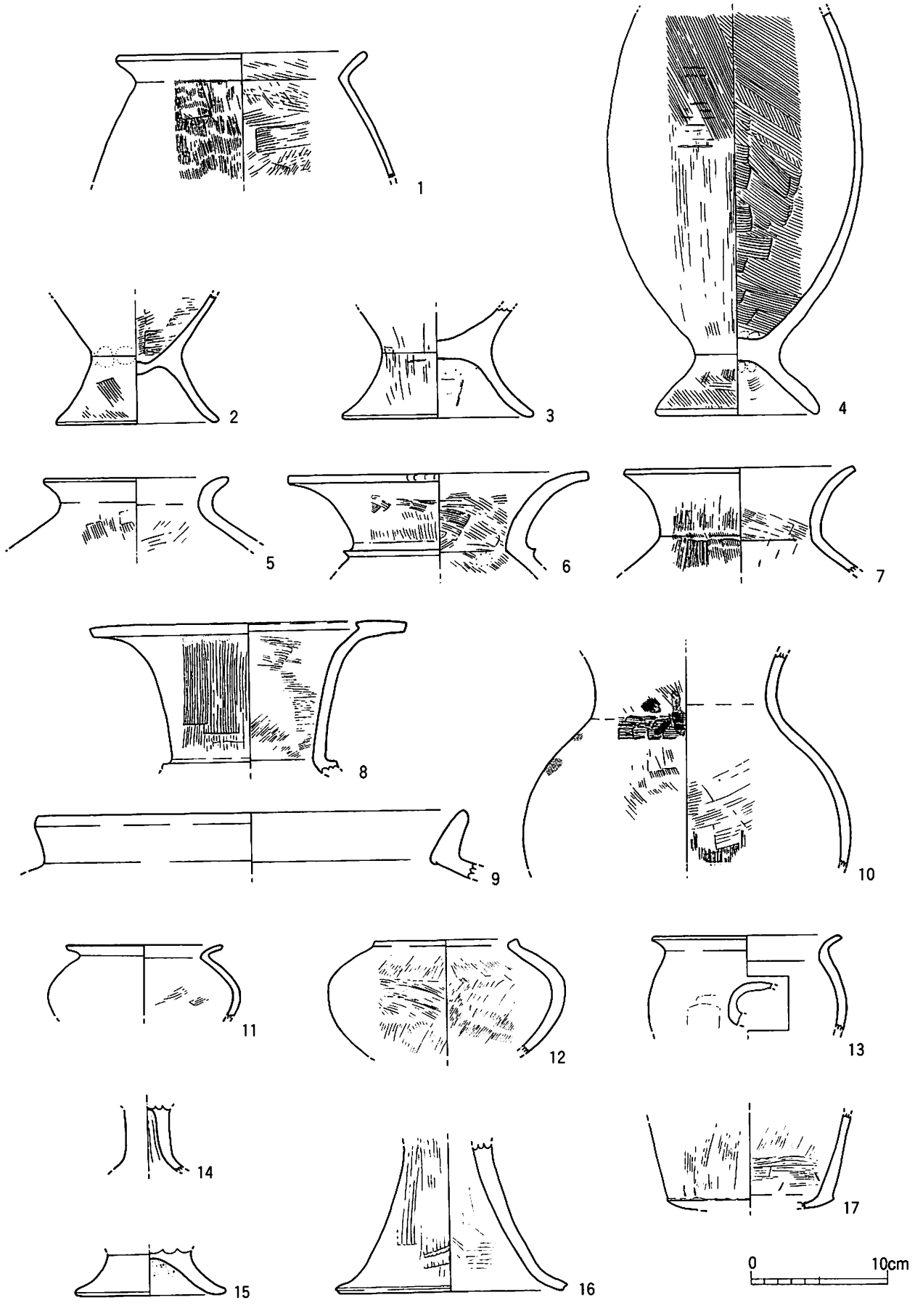
器台　32は完形の器台である。上端が外へ大きく開き、中位やや上で最もすぼまった後、裾部へ緩やかに開く。

不明土製品　27は不明土製品である。当遺跡の第Ⅲ次調査で出土した笠形土製品のようにも見えるが、図上端は穿孔されており、同種とは言いかねる。上辺は丸みを持ち、中位で屈折する。外反しながら下位へ至る。最大径は屈折部の7cmを測る。径全体の4分の1から復元した。

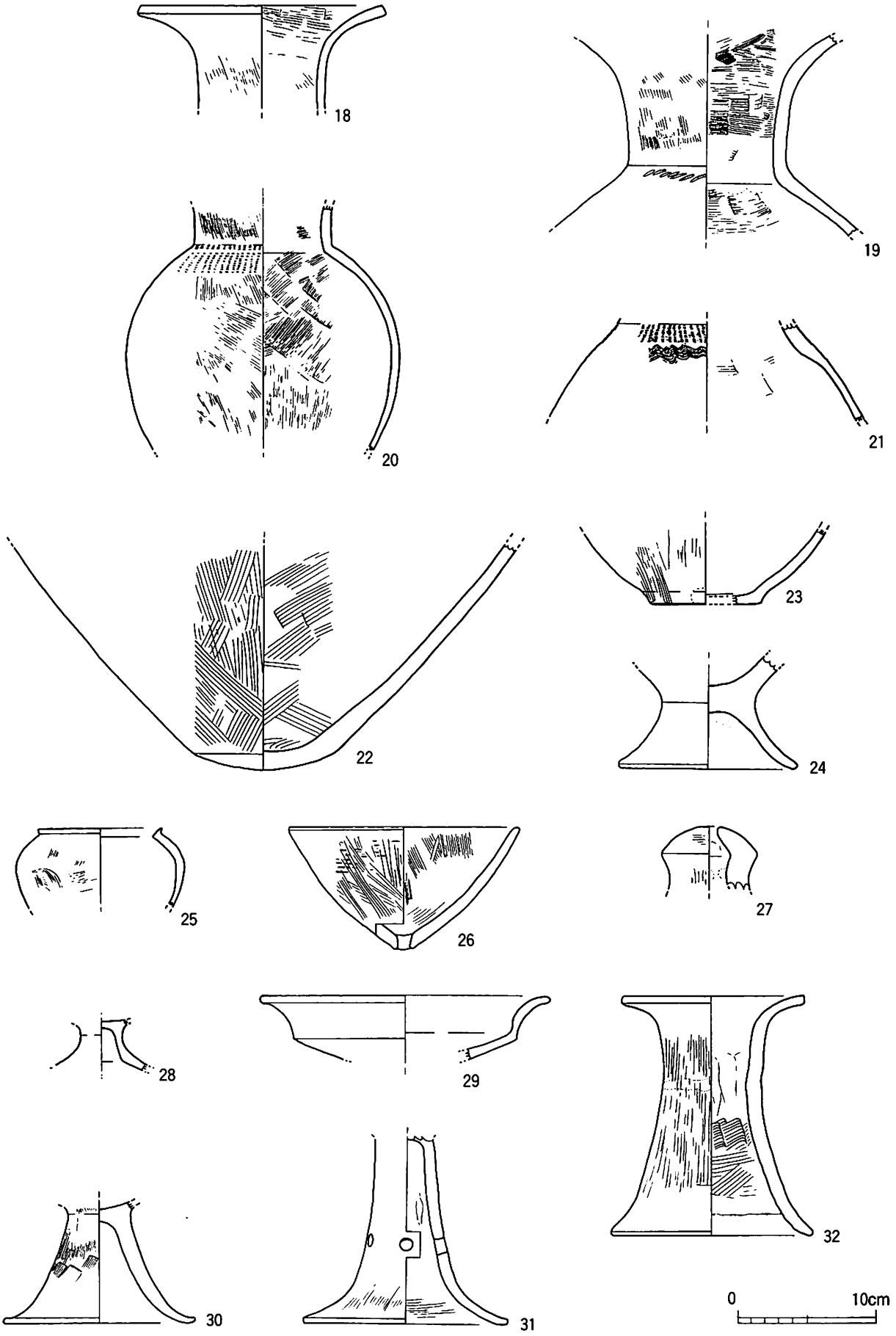
下層　甕、壺、鉢、ジョッキ形土器が出土した。

甕　34は甕の口縁部である。頸部に三角突帯がめぐる。口縁部はくの字に折れ曲り、口縁部端部は角張る。33は大型甕の上半部で、胴部は長く、頸部もそれほどすぼまらない。頸部には刻目突帯をめぐらし、その下位にはヘラを押さえつけて描かれたと思われる斜め方向の刺突文文が施されている。外反する口縁部で、口唇部には鋸歯文がヘラ状工具の連続押圧によって描かれている。36、37は脚台付甕の脚台部である。36の脚台裾部の径は20.3ｃｍとかなり大型である。

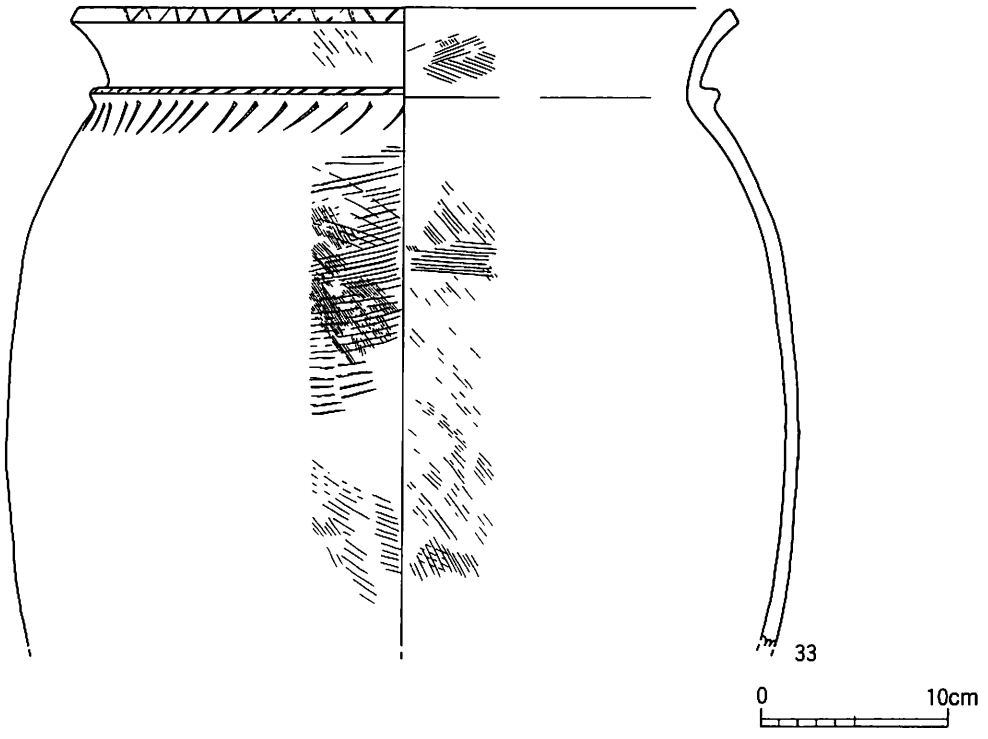
壺　40は広口壺の口縁部である。頸部は直立に立ち上がり、口縁部で大きく外に開く。38は広口壺の上半部である。胴部は球形で、頸部ですぼまった後直立し、口縁部で外に開く。肩部外器面に貼付円文が施されている。貼付円文は、2個1セットのものが6箇所あったと思われる。胴部外器面はタタキ後タテハケで、内器面はナナメ刷毛で調整されている。39は壺の下半と思われる。レンズ状の底部を持ち、胴部は長胴になる



第402図　4号溝（上層）出土土器実測図（S＝1／4）



第403図　4号溝（中層）出土土器実測図（S＝1／4）



第404図　4号溝（下層）出土土器実測図①（S＝1／4）

と思われる。胴部にタタキ後ナナメ刷毛が施されている。40は完形の直口壺である。平底気味のレンズ状の底部から長胴へ至り、頸部ですぼまった後、口縁部は直立気味に外傾する。外器面はナナメ刷毛とナデ、内器面は丁寧なナナメ刷毛が施されている。内器面底部には指頭圧痕が認められる。

鉢　42は小型の無頸鉢である。44は台付鉢の脚部である。裾部が直線的に大きく広がる。

ジョッキ形土器　43はジョッキ形土器である。全面ナデ調整が施されている。底部が上部へやや膨らむ。

（5）　5号溝（第406～407図）

トレンチの5区で検出された推定幅7.2m、深さ2.4mの大溝である。断面形は不整形な台形で、北肩の斜面が急で、南肩が緩やかな勾配となっている。

土層断面から判断すると、この溝は少なくとも1回は掘りなおされている。径5cm程度の石を多量含んだ褐色砂礫層が、南側から一気に流れ込んだ後、再び掘り直され、溝として機能したようだ。しかし、この砂礫層からは古代土師器と思われる小片の土器を包含しているため、古代以降で再び掘りなおされたと思われる。

遺物（第408図）

最下層からは弥生時代の可能性がある土器片が出土しているが、小片であることと器面が摩滅しているため時期は判別できない。形が判別できる遺物は、下層の16層で出土した古式土師器数点である。器種は甕、壺、高坏、小型丸底壺、甑で庄内新式から布留古式に比定される。同層から同時期の土器がまとまって出土しているので、埋没開始期はこの時期と考えられる。

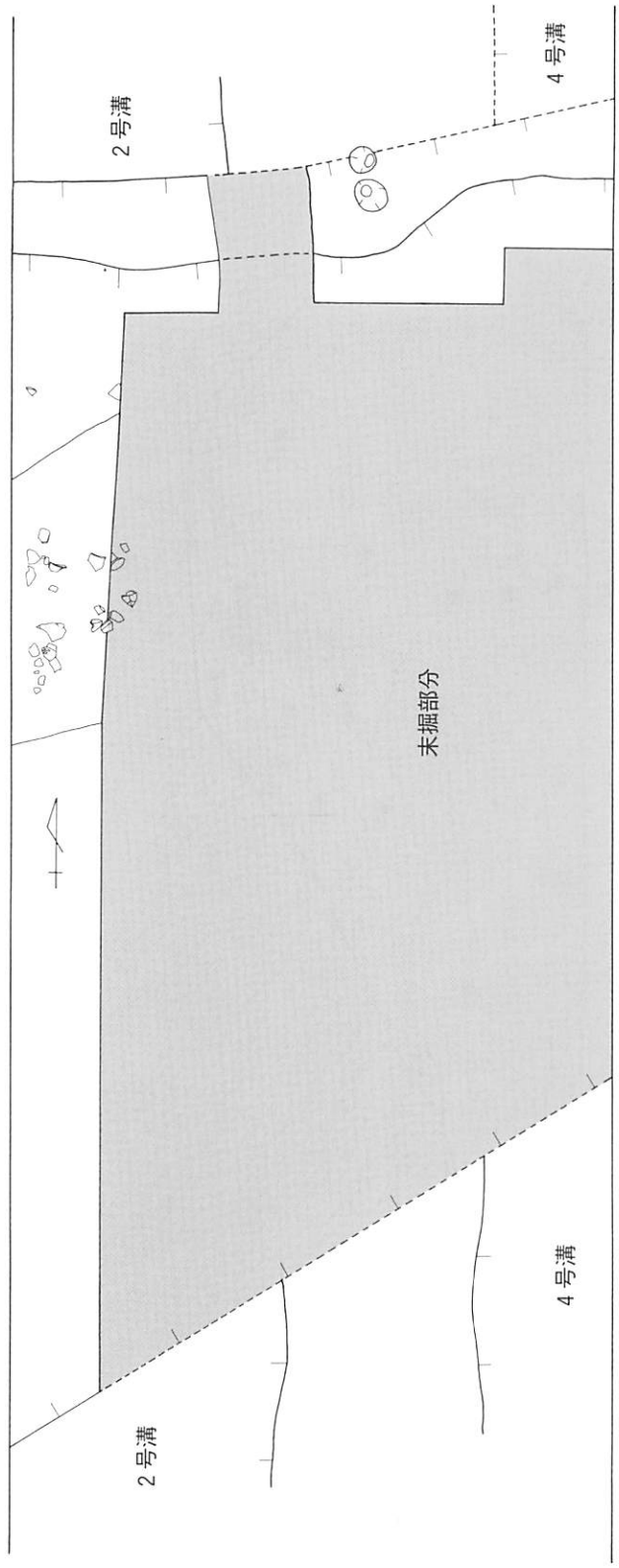
遺物は量としては少なく、大半の土器は最下層から出土した。器種は甕、壺（小型丸底壺）、高坏、台付鉢であった。

1はほぼ完形の甕である。底部は欠いているが尖底気味の丸底になると思われる。卵倒形の胴部で、口縁部は外反し、口縁端部は肥厚する。外器面はハケ調整、内器面はヘラケズリが施されている。2、3、4は甕の上半部である。2は胴部中位が最大径で、口縁部は外傾し、端部は丸い。3は肩が張り、口縁部端部はやや尖る。4は肩が張らず、口縁部が内湾気味に開く。端部は肥厚する。いずれも外器面はハケ、内器面はヘラケズリである。2は胴部中位に平行文のようなヨコハケが施されている。5は直口壺の口縁部である。頸

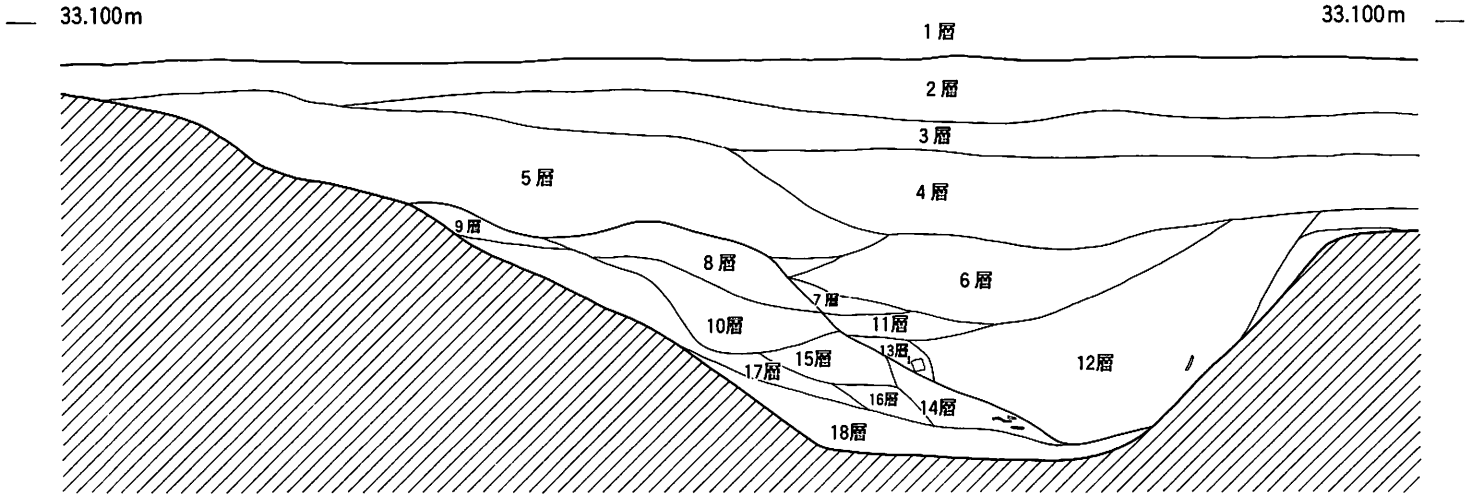


第405図　4号溝（下層）出土土器実測図②（S＝1／4）

部からほぼ直線に広がる。外器面は目の細かいナナメ刷毛調整が施される。6は小型丸底壺の上半部である。頸部でわずかにすぼまり、口縁部は外傾する。7は完形の台付鉢である。鉢部はやや深みがあり、円錐状の脚部には3つの透孔がある。外器面はナデを施し、鉢部内器面はヘラミガキが施されている。8は高坏の坏部である。体部は丸みをもち、口縁部は外へ大きく開く。体部内器面はヘラミガキが施される。

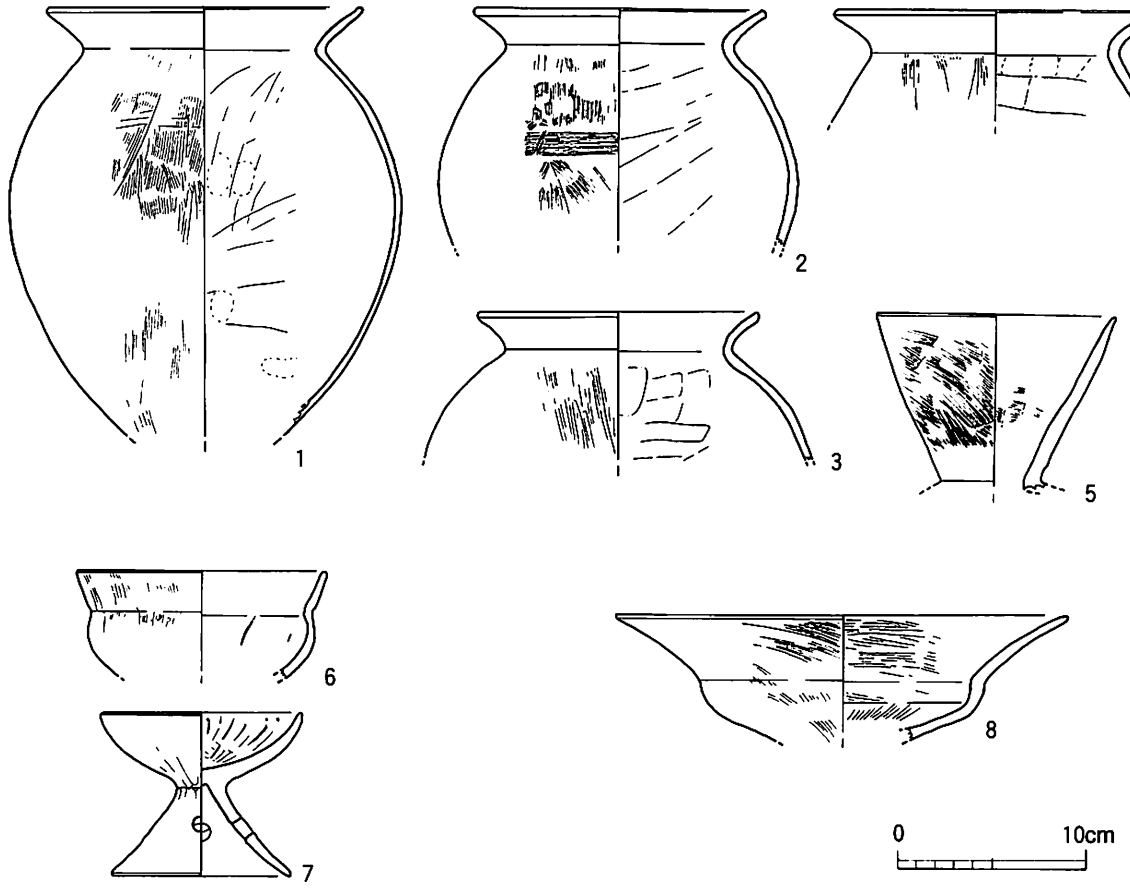


第406図　5号溝　実測図（S=1／50）



1層（表土）
2層（暗褐色土）しまってかたい土。
3層（暗褐色土）焼土粒を多く含む。
4層（黒褐色土）3cm大の石を含む。
5層（暗褐色土）1cm大の小石を多く含む。
6層（極暗褐色土）粘性がある。
7層（暗褐色土）小石や土器片が多い。
8層（暗褐色土）5層と質は一緒。しまって固い。
9層（黒褐色土）不純物が少ない。
10層（暗褐色土）8層よりも不純物が少ない。
11層（黒褐色土）不純物が少ない。
12層（黒褐色土）均質な火山灰土。
13層（暗褐色土）1cm大の石を含む。
14層（黒褐色土）しまりがない。
古式土師器出土。
15層（暗褐色土と礫）礫が大半。
16層（暗褐色土）4cm大の礫を含む。
古式土師器出土。
17層（暗褐色土）不純物が少ない。
18層（褐色砂質土）砂質土、粘性がややある。

第407図　5号溝土層断面図(西壁)実測図（S＝1／50）



第408図　5号溝出土土器実測図（S＝1／4）

（6）　1号住居跡（第409図）

1区南側で検出された。プランはややいびつな長方形で、住居の南西角は調査区外で検出されていない。長軸は東北東－西北西で、もっとも長いところで3.6m、短軸は3.06mを測る。

床面はかなり硬化しており、ほぼ平坦に広がる。

床面には所々に焼土と炭化物が検出されており、焼失住居の可能性が高いと思われる。

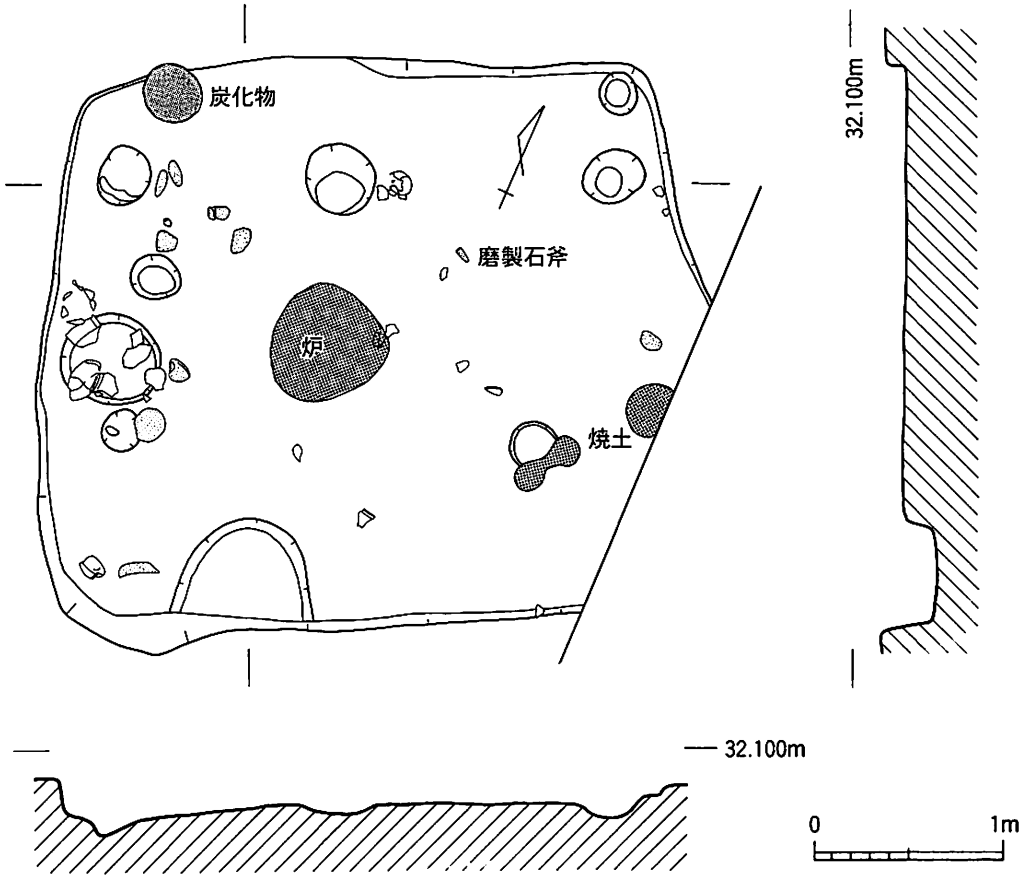
ピットは全部で8基検出されたが、ほとんどが浅い。炉は検出されなかったが、西壁近くに直径46cm、深さ5cmの浅い土坑があり、その周辺から完形の甕や、台石などが出土した。ちなみに、この土坑から焼土や炭化物は検出されていない。

このほか、南壁に半楕円形の土坑が1基検出された。長軸は0.77m、短軸は0.53mで深さは0.2mである。

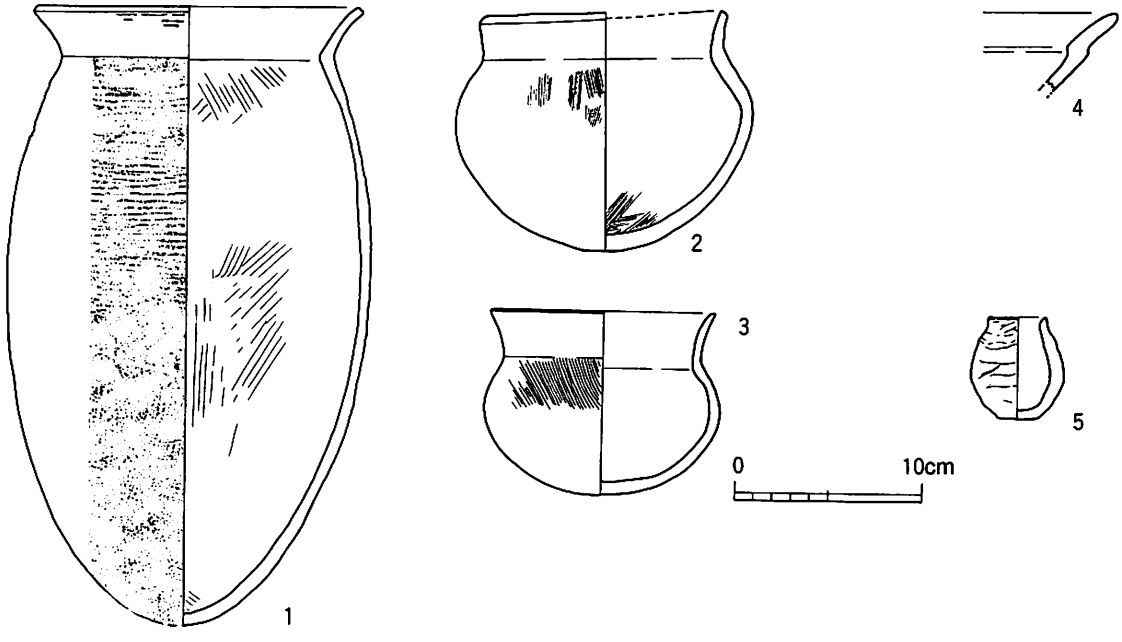
遺物（第410図）

住居内の出土遺物としては甕、鉢、小型壺などで、完形または完形復元可能なものが多く見られる。土器以外では完形の磨製石斧1点が住居のほぼ中央で出土した。土坑内の遺物は少なく、ミニチュア土器の鉢が1点出土しただけである。

1は完形の甕である。丸底の底部から長い胴部に至り、口縁部は外傾する。胴部上半外器面にはタタキ目が明瞭に残る。胴部下半の外器面はタテハケで調整されている。口縁部にもわずかにタタキ目が認められる。タタキ目はナデで消されている。内器面はナナメ刷毛後ナデが施されている。2、3は有頸鉢である。いずれも丸底で、胴部中位が最大径となる。口縁部はわずかに外傾する。肩部外器面にナナメ刷毛が見られる。4は高坏の口縁部である。口縁部はわずかにくびれ、外傾する。5は手捏ね土器である。平底で、無頸である。



第409図　1号住居跡　実測図（S=1／40）



第410図　1号住居跡出土土器実測図（S＝1／4）

（7） 2号住居跡（第411図）

1区の北端で検出された。上層に中世以降と思われる性格不明の礫群列があり、それを残して掘り下げたため、全体を発掘していない。また、東西両壁が調査区外で未検出のため、全体の規模は不明である。

検出面から床面までの深さは14～22cmで、床面はほぼ平坦である。南壁に付して楕円形の土坑が1基検出された。その土坑から完形の甕が1点出土した。2、3については、床面から浮いた状態で出土しているため、流れ込みの可能性が高い。

遺物（第412図）

1は南側土坑から出土した完形の甕である。肩部に1箇所穿孔が施されている。外器面は剥離が見られ器面調整が見難いが、ナナメ刷毛が施されている。内器面は明瞭なハケ目が残る。底部には指頭圧痕が認められる。2は甕の上半部である。口縁部から胴部まで外器面にタタキ目を残す。3は甕の脚台である。底部外器面はナナメ刷毛後ナデが施されている。4はミニチュア土器の高坏裾部と思われる。器面はナデ調整である。5は短頸壺の上半と思われる。口縁部が短く外傾し、胴部は横に張り球形を呈する。6は広口壺の口縁部である。口縁端部には斜め方向の刻目が、頸部には櫛描簾状文が施されている。7、8は高坏の坏部である。7は体部から屈折した後口縁部が強く外反する。

（8） 3号住居跡（第413図）

2区の西側で検出された。2号溝が埋没した後に建てられた住居跡であったのだが、切り合い関係を検出の段階で判断できず、南壁を除去してしまった。土層断面等から推測するとプランは長方形を呈し、南壁は3.1mを測ると思われる。住居の西半分が調査範囲外であったため、長辺の長さは不明である。床面はほぼ平坦で、もともと溝であったところを黄色粘土で貼床を施している。床面はそれほど硬化していない。炉については検出できなかった。遺物は小片の土器であったため、掲載していない。

（9） 4号住居跡（第414図）

5区南端で検出された。東西両側とも2号溝、4号溝に切られているため、規模は不明である。深さは20cmで、床面は明褐色土で貼床を施している。床の直上は炭化物が面状に広がっていた。焼失住居の可能性もあるが、焼土はそれほど見られない。遺物もわずかで、実測不可能な小片の土器が数点であった。時期は切り合い関係から古い住居跡と思われる。

(10) 1号土坑（第415図）

1区西側で検出された方形のプランを呈すると思われる土坑である。北側を2号住居跡に切られ、土坑も東側の一部しか検出されていないため、規模は不明である。深さは12cmで、床面はほぼ平坦である。遺物の出土は無かったが、暗褐色土の埋土から弥生時代のものと判断した。

(11) 2号土坑（第415図）

1区西側で検出された。プランは方形と思われ、1号土坑に北側を切られている。深さは10cmで、床面はほぼ平坦になると思われる。

遺物（第416図）

甕、壺、高坏の口縁部が出土した。1は壺の口縁部か？肩が張らず、口縁部は外傾する。2は小型の高坏の口縁部である。つくりが雑である。3は甕の口縁部と思われる。口縁部が短く外傾する。

(12) 4号土坑（第417図）

3区中央の東側で検出された。長軸はほぼ東西を向き、東側一部を4号溝に切られている。平面形は楕円形と思われる。長軸は不明で、短軸は62cmである。二段掘りになっている？

遺物（第418図）

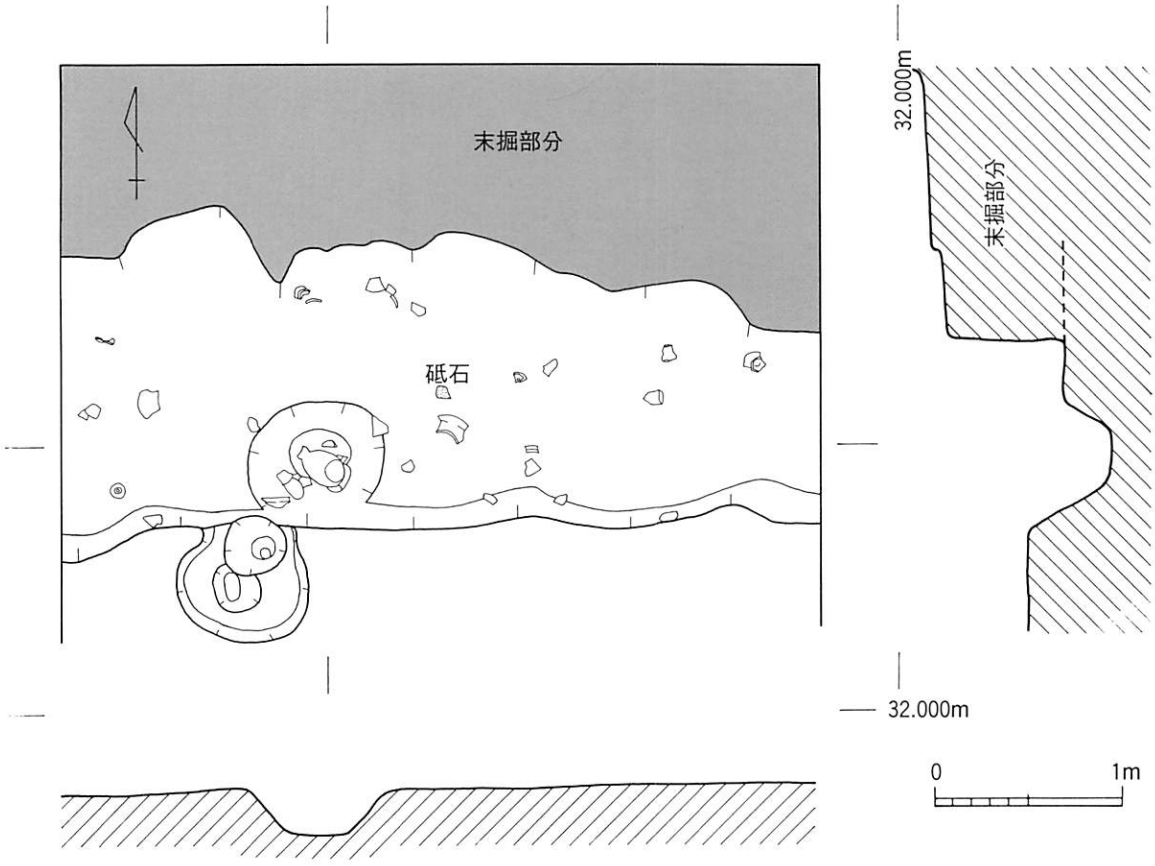
遺物は壺、高坏、鉢が出土した。4、5は広口壺の口縁部である。5は頸部に刺突文が施されている。4は口縁部がラッパ状に外へ開き、口唇部には刻目が施されている6は鉢の上半である。口縁部端部外器面に凹線状のくぼみが1条めぐる。7、8は高坏の口縁部である。7は口縁部がほぼ直角に屈折し、外へ開く。

(13) 硬化面、5号土坑、6号土坑（第419・420図）

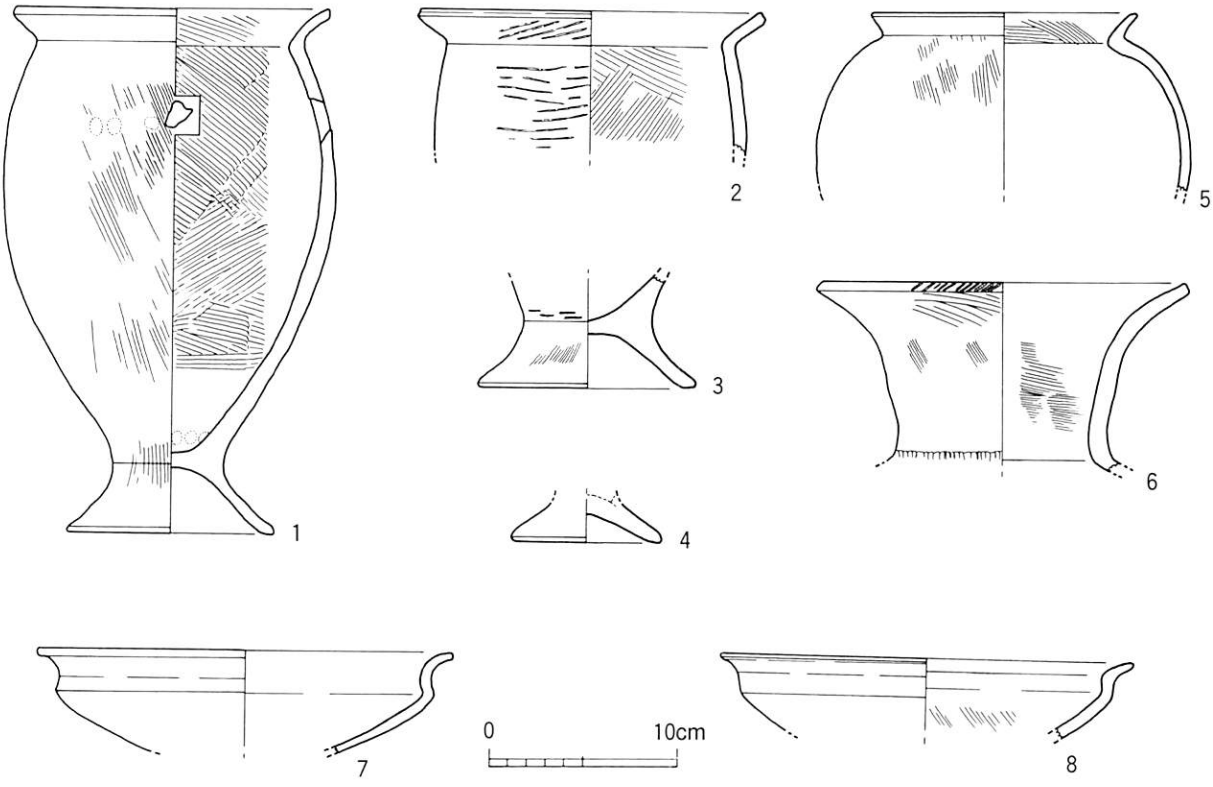
4区東側でプラン不整形の硬化面が1面検出された。南東側を4号溝に切られているため、全体の規模は不明である。壁は検出できなかったが、硬化面の範囲は2.8m×1.2mである。床は非常に硬化している。住居の床面である可能性が高い。

この硬化面に付随したものと考えられる土坑が2基あり、北側を5号土坑、南側を6号土坑と名付けた。

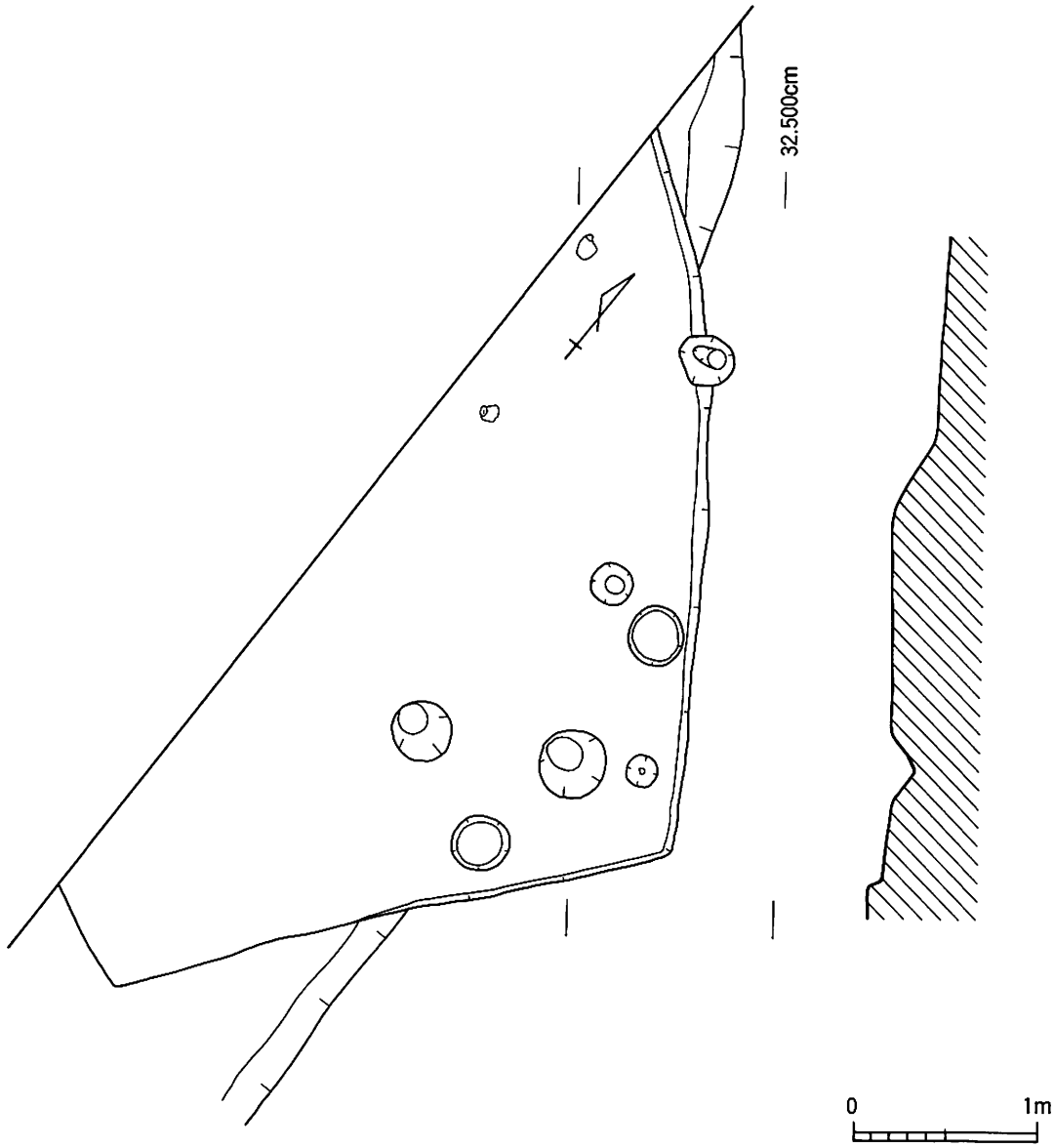
5号土坑は平面形が楕円形で、長軸62cm、短軸44cm



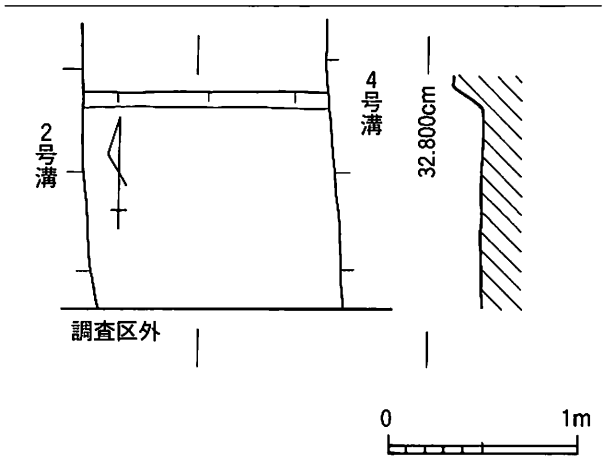
第411図　2号住居跡　実測図（S＝1／40）



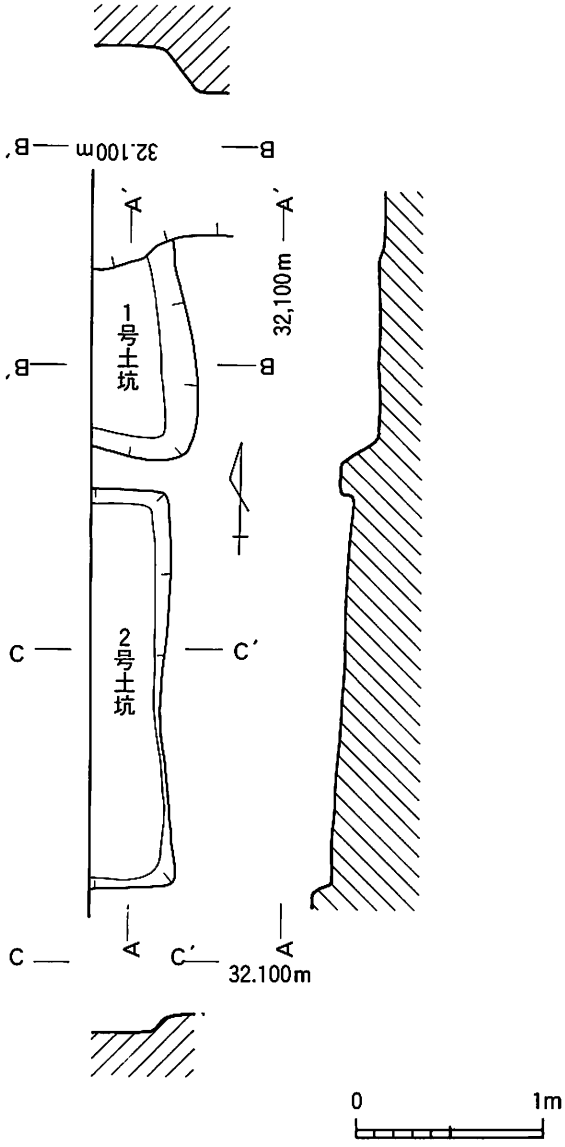
第412図　2号住居跡出土土器実測図（S＝1／4）



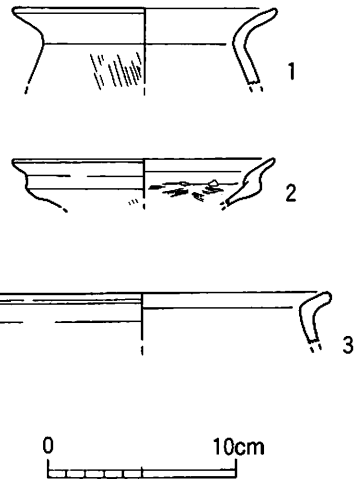
第413図　3号住居跡　実測図（S＝1／40）



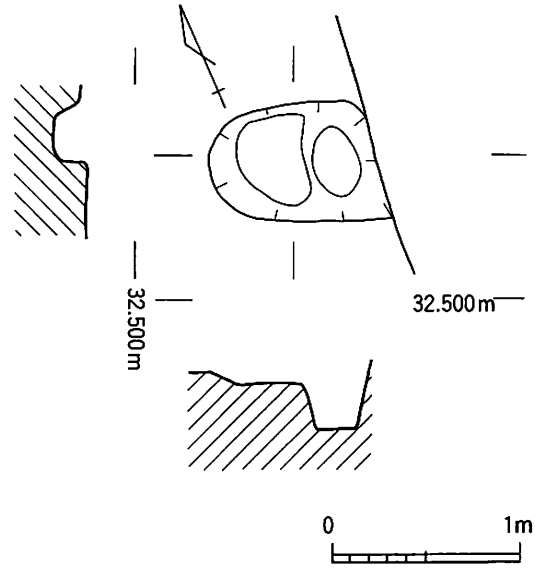
第414図　4号住居跡　実測図（S＝1／40）



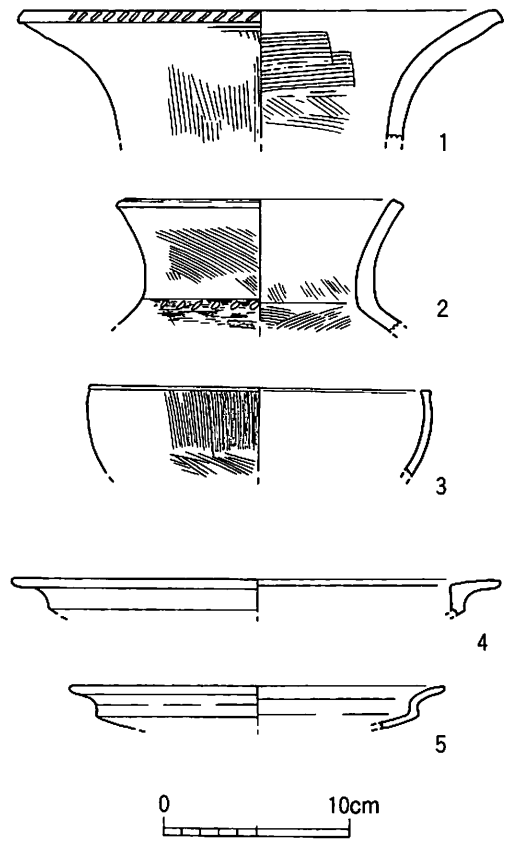
第415図　1号土坑・2号土坑　実測図
（S＝1／40）



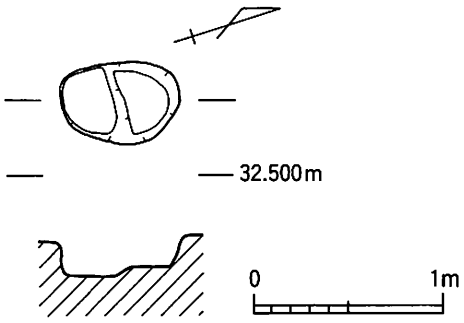
第416図　2号土坑出土土器実測図（S＝1／4）



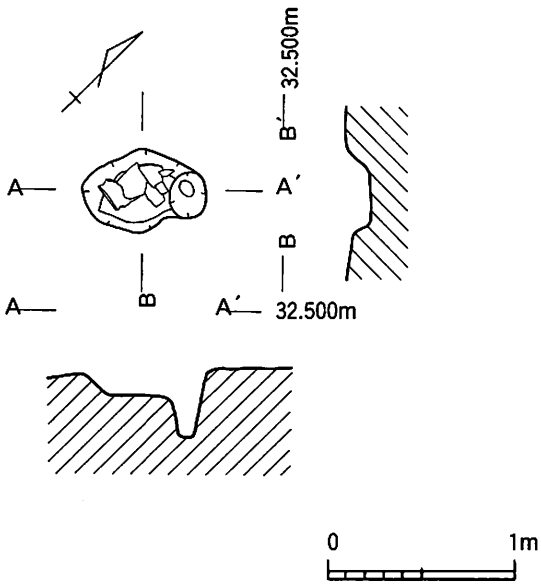
第417図　4号土坑　実測図（S＝1／40）



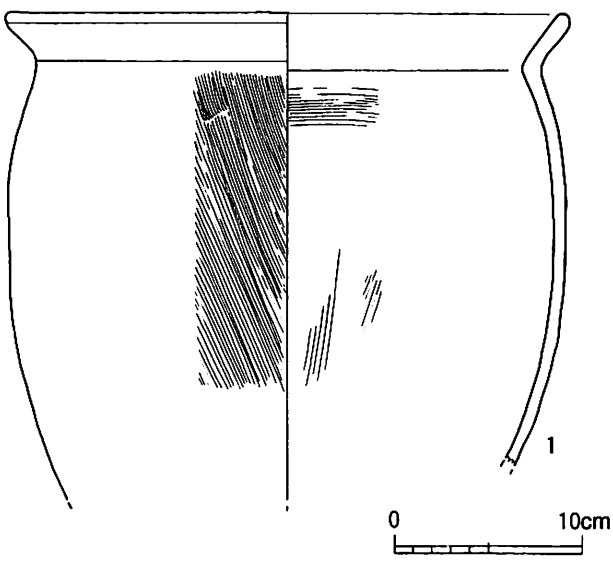
第418図　4号土坑出土土器実測図（S＝1／4）



第419図　5号土坑　実測図（S＝1／40）



第420図　6号土坑　実測図（S＝1／40）



第421図　6号土坑出土土器実測図（S＝1／4）

を測る。深さは24cmで、断面形はスリバチ状になっている。遺物は小片の土器である。

6号土坑は平面形が楕円形で、北東部を別のピットに切られている。土坑の長軸は65cm、短軸は38cm、深さは12cmを測る。

遺物（第421図）

6号土坑中から甕の上半部が出土した。1は甕の上半部で、口径は29.7cmを測る。最大径は胴部上位に位置し、口縁はくの字に外傾し、口縁端部は丸い。外器面はナナメ刷毛が施され、内器面はハケ調整後ナデが施されている。

(14)　遺構に伴わない遺物（第423図）

遺構に伴わない遺物のうち、完形に近いものや特徴のあるものを中心に掲載した。

土器

1～3は無頸の鉢である。2の口縁端部は内傾し、内器面に放射状のヘラミガキが施されている。4は甕の下半で、底部は丸底である。5は甕の脚台である。脚台は低く、器壁もやや薄い。内器面に砂型が認められる。6は広口壺の口縁部である。口縁部内器面に櫛描波状文が施されている。7は壺の底部である。底面に十字のヘラ描きがある。8は完形の器台である。9は器台の下半と思われる。壺の口縁部の可能性もあるが、器壁の厚さとすわりの良さから大型の器台の下半と判断した。外器面は細かい目のハケ調整で、内器面は縦方向の指ナデである。10～12はミニチュア土器である。11は鉢形で上半は内湾する。12は甕形で、底部は平底である。粘土紐の単位が分かる。10は壺の胴部で、頸部に波状紋が施されている。外器面は丁寧なヘラミガキである。13は台付鉢の鉢部と思われる。胴部は断面形が算盤形で、柱部との接合部外器面に櫛描波状紋を施す。外器面はヘラミガキで、内器面はナナメ刷毛である。14、15は台付鉢の脚台である。14は脚は低く、脚部の透孔が4ヵ所ある。15は裾が横に広がる。16は完形のスプーン形土製品である。右手で持つと良くなじむ。

鉄器（第422図）

遺構に伴わず、形状、出土した層から弥生時代のものと考えられるものは3点あった。2は鉇の鋒部である。先端は鋭利さを欠き丸みをもつ。4は完形の鉄鏃

である。全体的に分厚く、刃部なども鋭さがない印象を受ける。10はほぼ完形の袋状鉄斧である。長さ4.7cm、幅2.8cmと小型である。袋部の端部が分厚くなっており、1、3、5、9は未製品である。9は薄片状鉄片で、表面に木片が付着する。9以外は棒状鉄片である。外側に折り曲げ強度を上げたものと思われる。

青銅鏡片

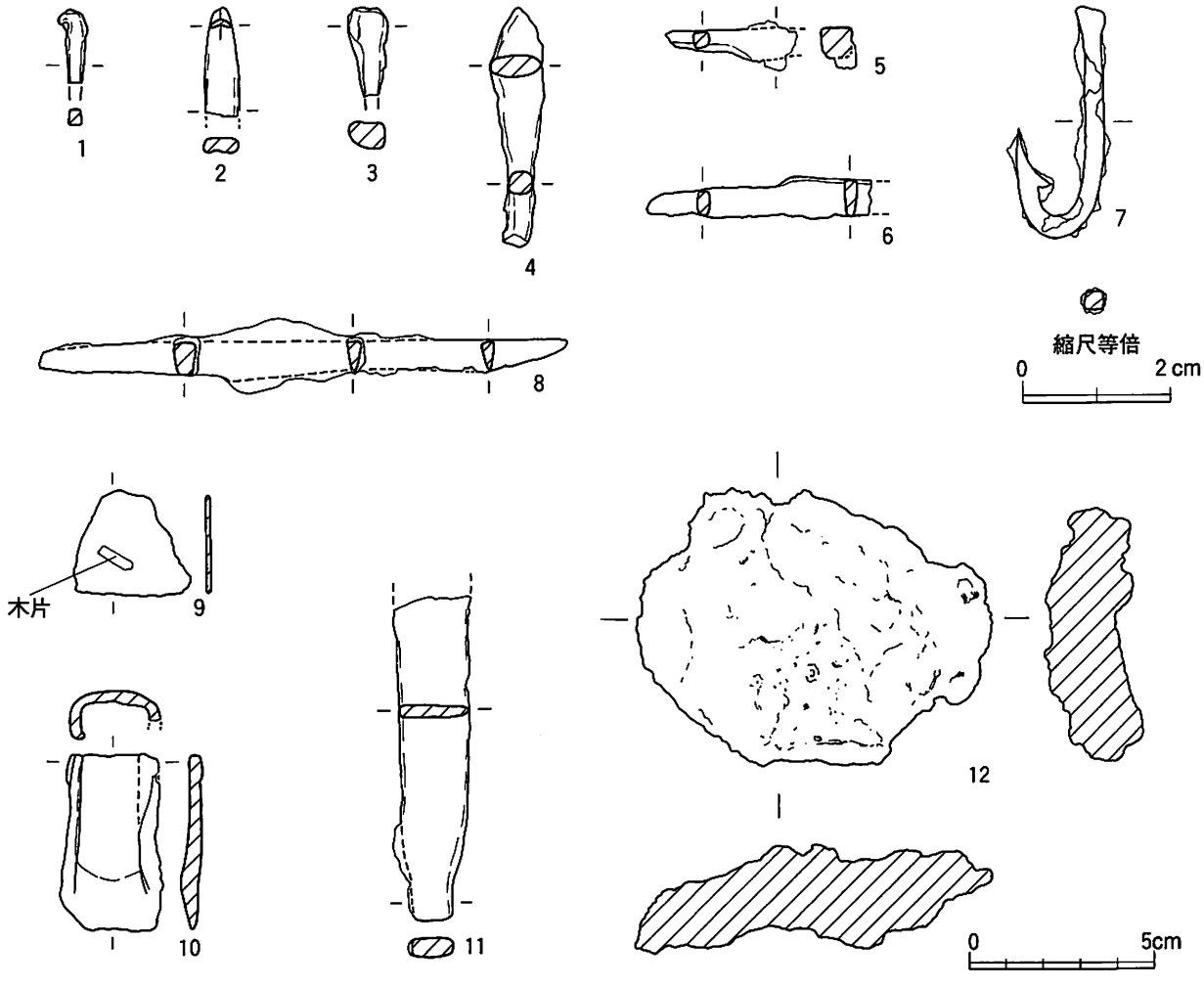
粘性の高い黒褐色土に被われていたため、発掘中に気づかず、洗浄中に発見された。

3号溝を切る古代の土坑と思われる遺構内から出土した。この土坑については、プランが確認できず、土層断面からその存在を知ったものである。おそらく、古代に撹乱にあい、その土坑に流れ込んだものではなかろうか。

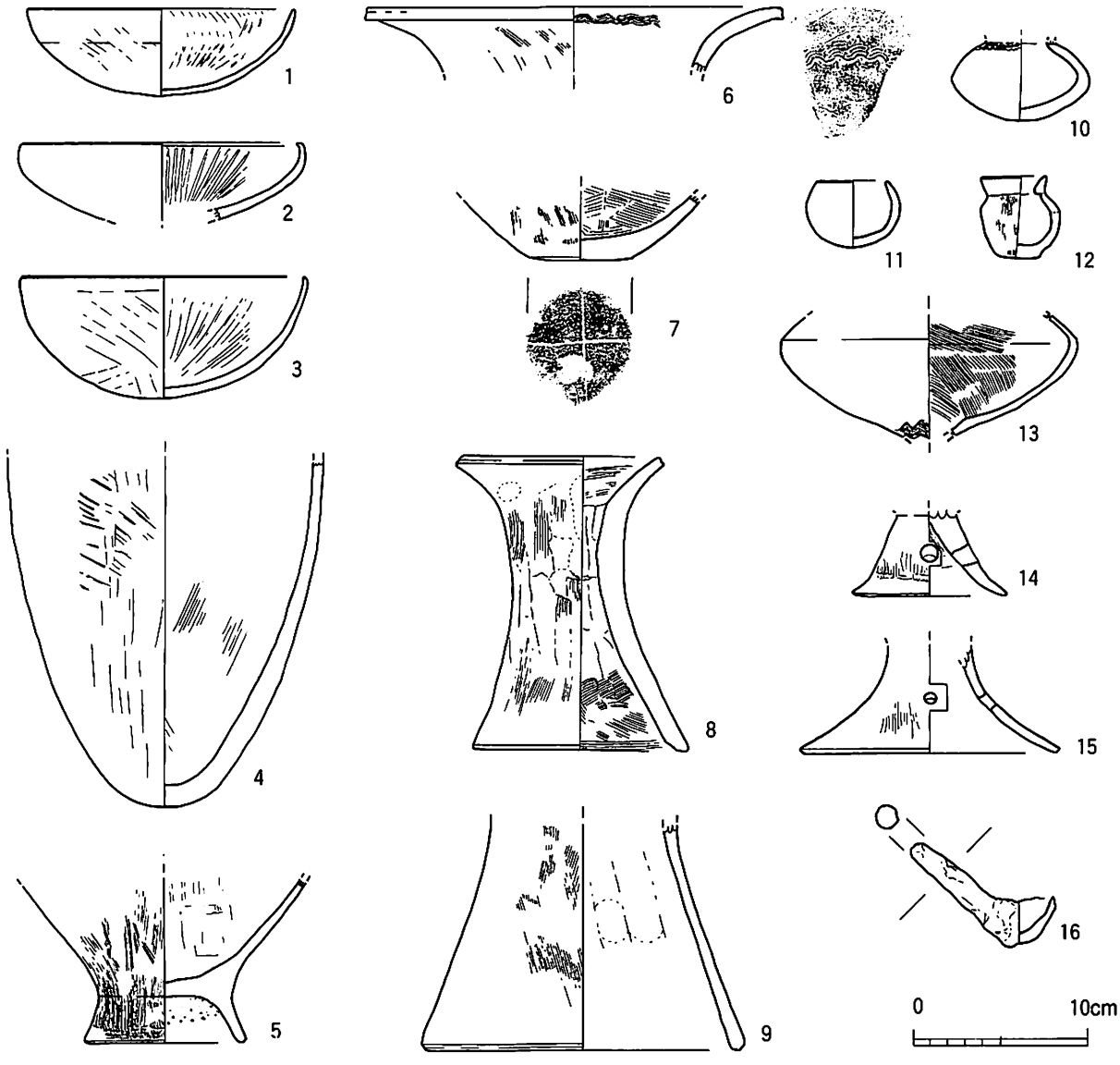
鏡片は全体の6分の1程度で、ワレは古い。ブロンズ病がはげしく、質はよくない。推定直径6.6cm、厚みは0.8㎜から3.2㎜であり、総じて薄い。現在での重さは9.0gである。外縁帯の幅は4㎜と狭い。紋様帯ははっきりと見えない。

装飾文様のある土器片（第424図）

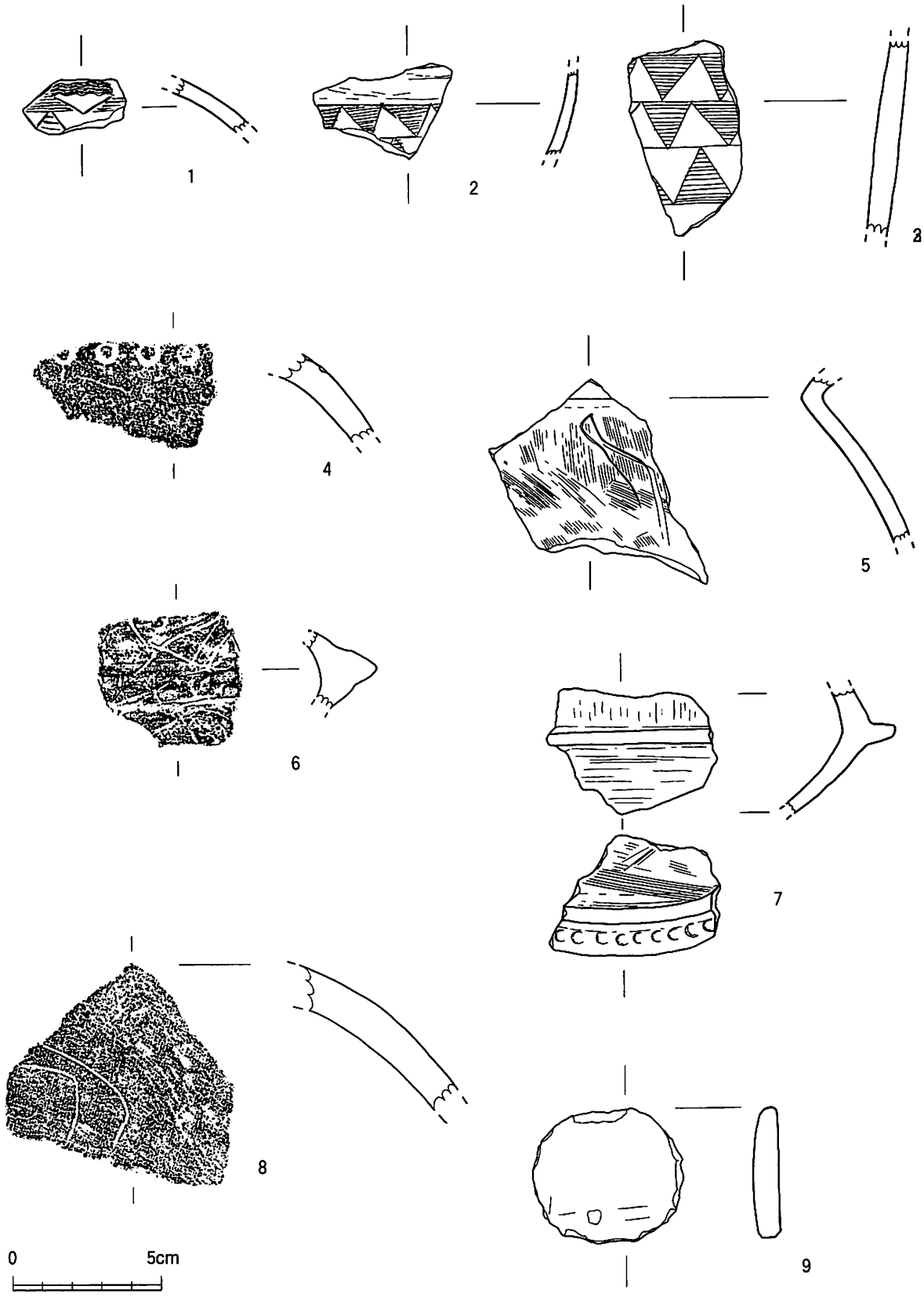
細い線刻で鋸歯文が描かれた土器片が3点見つかった（1～3）。1は小型の壷の肩部、2は鉢の胴部と思われる。3は破片としては大きいが、器種は不明である。4は、壷の肩部と思われ、竹管文が施されている。7も突帯の上面に連続竹管文が認められた。



第422図　209番地出土鉄器実測図（S＝1／2、7のみ等倍）



第423図　遺構に伴わない遺物実測図（S＝1／4）



第424図　装飾文様のある土器片、絵画、土器片、メンコ状土器片実測図（S＝1／2）

絵画土器（第424図）

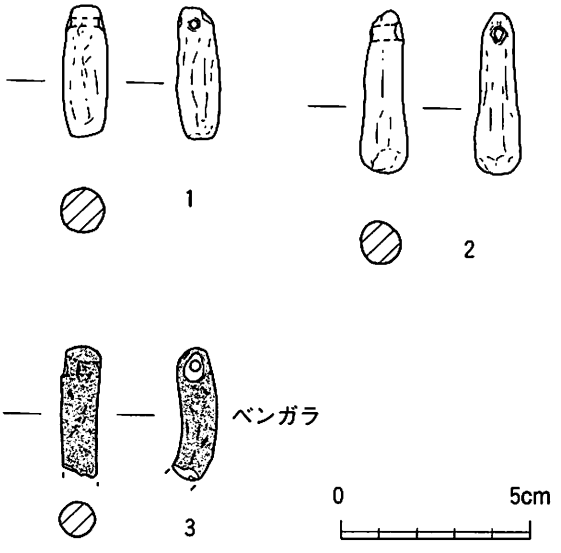
3点確認された。明確に何を描いたのか判明できたのは、1点だけである。5は、布留糸の甕の肩部で、外器面に鳥が描かれていた。6と8にもやや太い線が見られたのであるが、その内容は不明である。

メンコ状土器片（第424図）

1点出土した。長径5.2cm、短径4.1cmを測り楕円形を呈する。

土製品（第425図）

3点出土した。2は、下端に行くにつれ、太くなっており、その形状から鐸形土製品の舌である可能性が高い。1もその可能性がある。3は、表面にベンガラが塗布されており、土製勾玉と思われる。

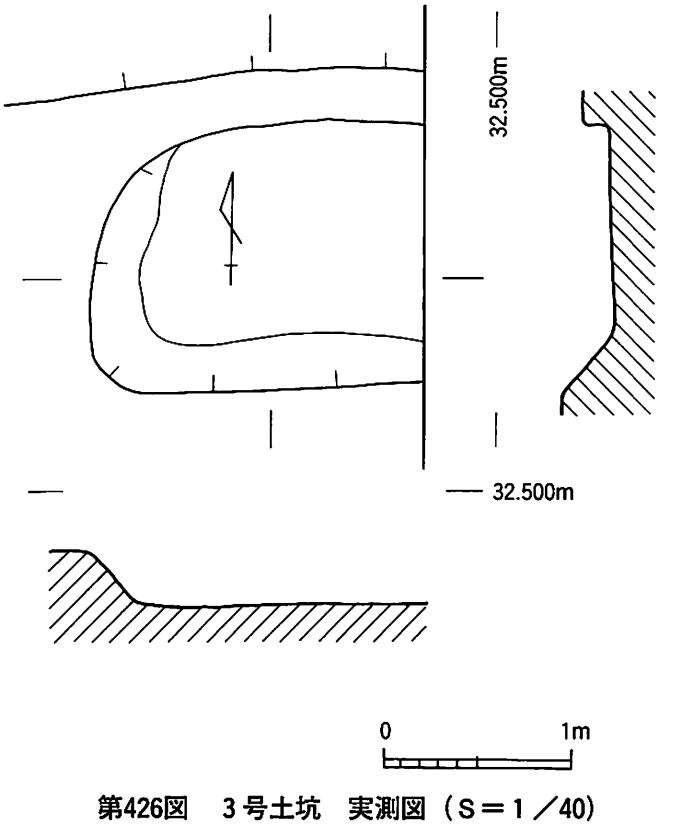


第425図　土製品　実測図（S＝1／2）

2．古代以降の遺構と遺物

（1）　3号土坑（第426図）

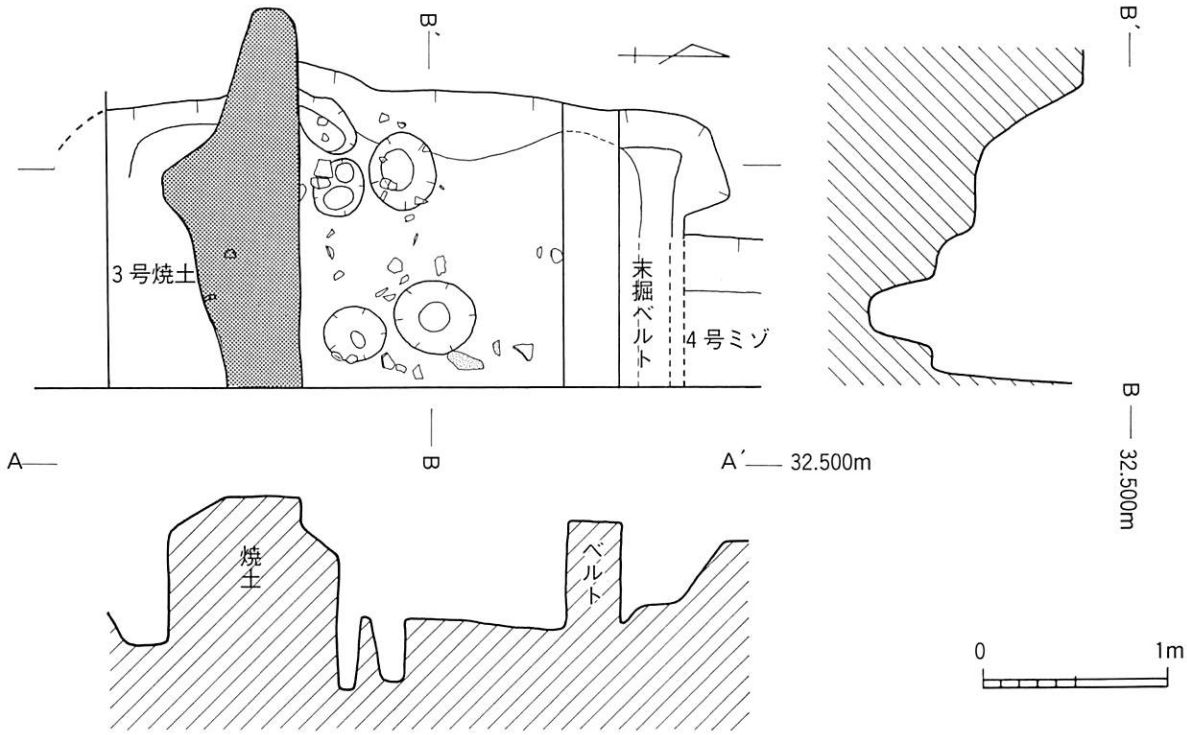
2区の東側で検出された。幅70cmの方形を呈する土坑である。東側の一部が調査区外であるため、長さは不明。深さは25cmで床面はおそらく平坦になると思われるが、モグラの撹乱により床の起伏がある。出土遺物が無いため判断しづらいが、黒色土の埋土から古代と思われる。



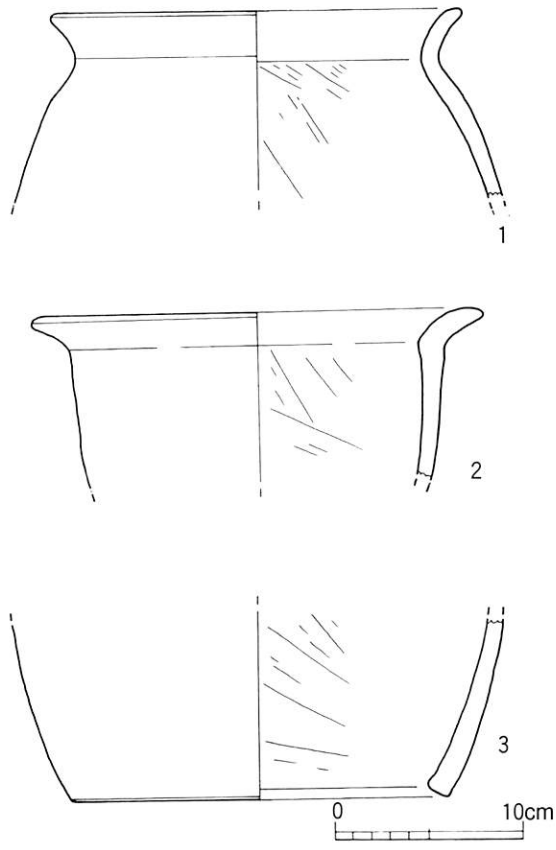
第426図　3号土坑　実測図（S＝1／40）

（2）　8号土坑と3号焼土（第427図）

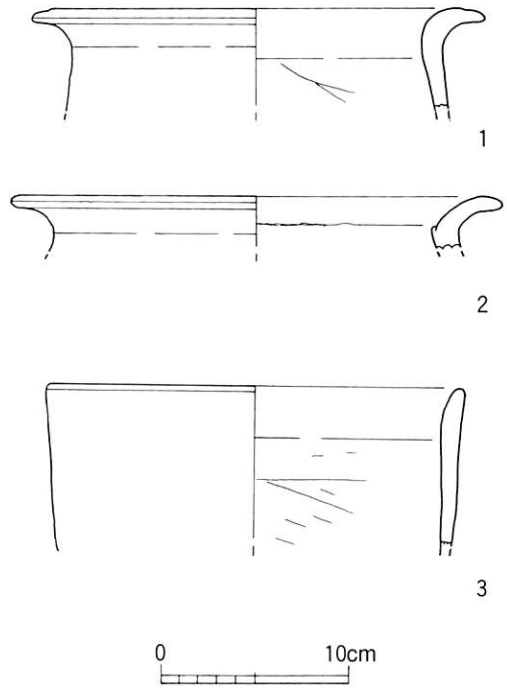
4区東側で検出された。4号溝を切っている。北壁及び南壁の一部は検出できず、トレンチ東壁の土層断面から復元した。その結果、南北辺が3.5m、深さ0.42mの方形を呈する土坑であると思われる。この土坑の真中付近で東西方向に、帯状の非常にしっかりとした厚さ約80cmの焼土及び焼土混じりの土が検出された。純粋な焼土については、西へ行くにつれて堆積が浅くなっていた。土器は土師器の甕、甑がほとんどで、須恵器の出土は非常に少なかった。焼土がかなり厚く堆積しているので、かなりの長期間焼成行為が行われて



第427図　8号土坑　実測図（S＝1／40）



第428図　3号焼土出土土器実測図（S＝1／4）



第429図　8号土坑出土土器実測図（S＝1／4）

いたと思われるが、結局、性格を明らかにすることはできなかった。

遺物（第428図）

（3号焼土）焼土からは、被熱した土師器片が出土した。1、2は甕の口縁部と思われる。3は甑の底部である。

（8号土抗）

遺物は土師器の甕、甑などが出土した。部位が判断できるものは少なかった。

1、2は甕の口縁部と思われる。口縁部は強く外反する。3は甑の底部と思われる。端部は内傾する。

（3） 1号焼土

1区中央付近で検出された。すぐ南には1号住居跡が検出されているが、時期が異なる。1号焼土は、検出時は不整形で凹凸が激しく、主軸がどこを向くのを判断するのも困難であった。当初は古代住居のカマドかとも思われたので、周囲を精査したが硬化面など住居跡と判断される遺構は検出されなかった。

平面形は隅丸方形で、長さ55cm、幅45cmを測る。主軸はほぼ南北方向である。出土した遺物は、土師器の甕や甑がほとんどで、小片ばかりであった。支柱となるような土器、石器等は出土しなかった。遺物や焼土の状況からカマドとしての機能を持つ遺構と想定されるが、不明な点が多い。

（4） 2号焼土

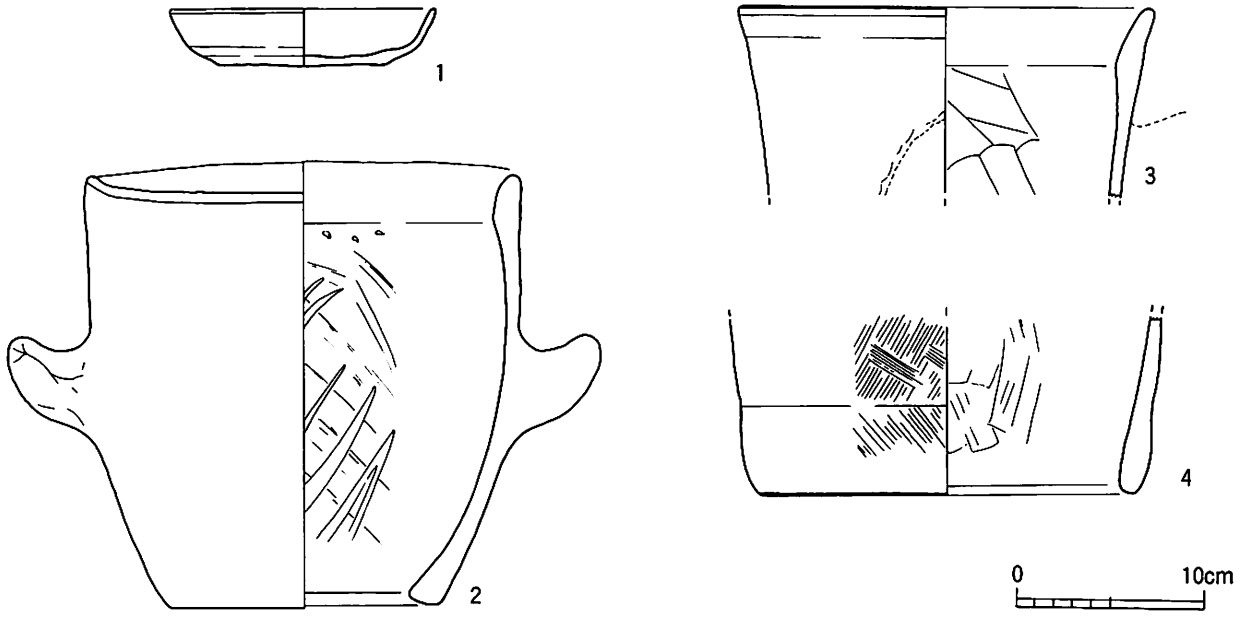
2区のほぼ中央地点で検出された。これも検出時は不整形の焼土塊であった。最終的には袖状のしっかりとした焼土が二つ並んで検出された。これらの間には南北に二つのくぼみがあったが、1号焼土のような円形の焼土は検出されなかった。出土遺物は土師器の甕か甑の小片である。

（5） 4号焼土

3区西壁で検出された。3号溝と4号溝が交わる部分で、プランは不明である。トレンチ西壁の土層観察から、土坑内に焼土があったと思われる。鉄滓もこの焼土に伴うものと思われる。遺物はほぼ完形の甑と、坏などが出土した。

遺物（第430図）

1は土師器の坏である。体部下位はヘラ削りが施されている。2は完形の甑である。底部は筒抜けになっており、そこから内湾しながら胴部へ至る。胴部中位が最大径となり、そこには二つの角状把手が付く。胴部から口縁部にかけてはやや内湾しながら直立する。したがって、頸部はくびれず、胴部と口縁部の境はない。内器面にはヘラ削りにより胴部の器壁がやや薄く



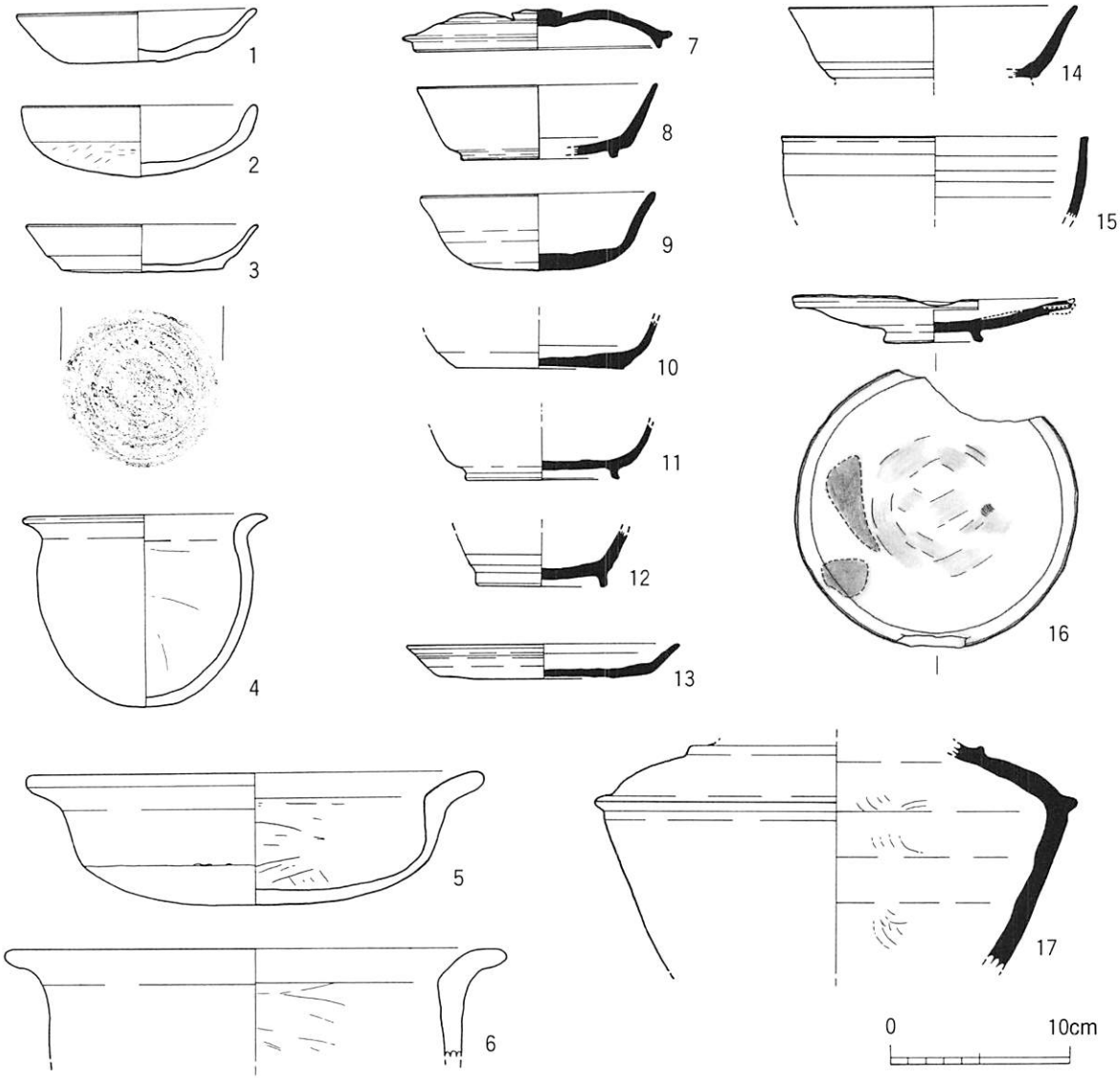
第430図　4号焼土出土土器実測図（S＝1／4）

なっている。外器面は全面ナデで、内器面は胴部がヘラケズリ後幅の細い工具で一部磨かれている。3は甑の口縁部である。無頸で直線的に外傾する。胴部内器面はヘラ削りが施されている。把手の剥離痕が見られる。4は甑の底部である。底部は筒抜けで、胴部下位でわずかにすぼまった後、ほぼ直立する。外器面はナナメ刷毛、内器面はヘラケズリが施されている。

（6） 遺構に伴わない遺物（第431図）

土師器　1～3は坏である。2は下半がヘラケズリで整形されている。1は底面に粘土紐の痕が明瞭に残る。3は底面に粘土紐痕が見られる。4は完形の小型壺である。5は鉢である。底部から胴部にかけてほぼ直角に屈曲し、口縁部は外反する。器壁は頸部から口縁部にかけて分厚くなる。6は甕の口縁部と思われる。

須恵器　7～12、14は椀である。このうち、高台の付くもの（11、8、12、14）と付かないものがある。12は高台が体部と底部の境に付けられているが、それ以外は屈折部からやや中央よりに付く。9は、底部は回転ヘラケズリが施される。10は体部下端にヘラ削りが施されている。7は坏蓋である。宝珠形のつまみをもつが、その重みでつぶれたような形となっている。13は完形の盤である。15は椀の上半部である。16は転

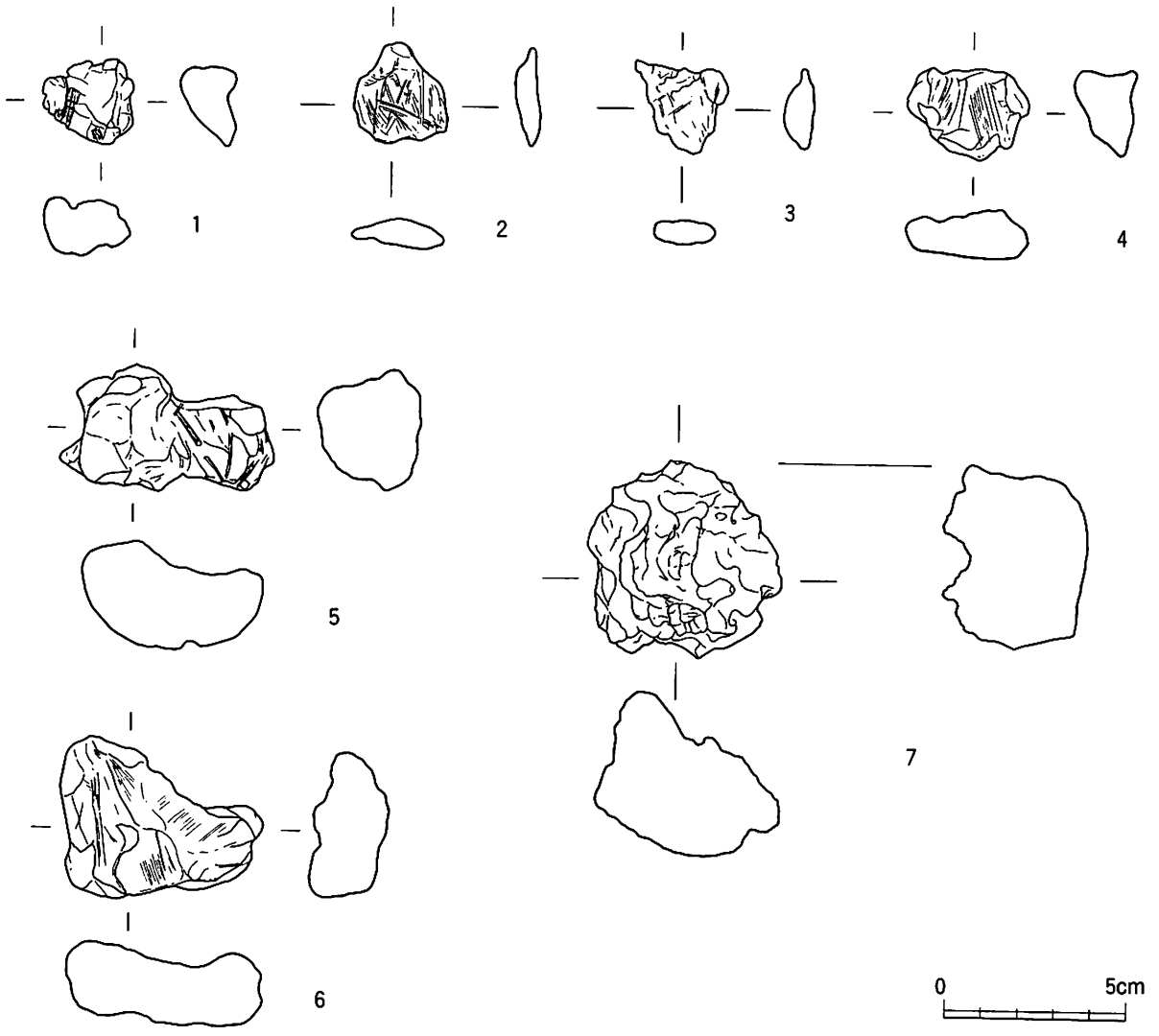


第431図　遺構に伴わない遺物実測図（S＝1／4）

用硯である。輪状つまみを持つ坏蓋を硯に転用している。液体を注ぎやすいよう、端部の一部を打ち欠いている。砥面には磨り痕と墨が認められる。17は長頸壺の胴部である。肩部と頸部に突帯がめぐる。内器面にはわずかに同心円形のタタキ目が残る。

鉄器（第422図）　6，8は刀子である。6は鋒部を欠く。12は鉄滓である。気泡が至る所で見られる。中心がややくぼみ、椀状に近い形状となっている。

焼成粘土塊（第432図）　当調査区全体で、合計7点の焼成粘土塊が出土した。平面形はいずれも不整形であるが、厚みがほぼ均一で板状のもの（2、3）と不均一で塊状のものがある。大きさも様々である。全て、土師器の胎土と非常に似ているので、古代のものと判断した。



第432図　焼成粘土塊　実測図（S＝1／2）

3．まとめ

（1） 溝状遺構について

溝状遺構は全部で5条を検出したが、まずその築造順序について触れたい。①最初に造られた溝は2つの南北方向に走る溝である（2号溝、4号溝)。この2つの溝の前後関係は不明である。しかしながら切りあうことなく、一部分については同一方向に走っていることから、お互いを意識して造られていたことが分かる。同時期に造られたか、もしくはどちらかが機能している状態のときに造られたと思われる。後者にしても、掘削時期の差はそれほど無いと考えられる。ただし、溝の構造及び土器の出土状況がかなり異なるため、溝の性格、目的は異なると思われる。②3号溝がこれら2号溝、4号溝を切る。4号溝については、3号溝隣接部の埋土が地山と色及び質が非常によく似た黄褐色土であるため、3号溝掘削時の土で埋められた可能性がある。③最後に2、4号溝を5号溝が切る。

まとめると、2号溝、4号溝→3号溝→5号溝の順で溝が掘られたと判断される。1号溝については切り合いがなかったため不明であるが、出土土器やこれまでの調査成果などから弥生時代後期後半と考えられ、2～4号溝とそれほど時期差はないと言える。

今回検出された5つの溝は、それぞれ規模、遺物の出土量などが異なり、様々なバリエーションを提示した。当遺跡でいわゆる一般的に見られる溝は3号溝、4号溝であり、深さ、幅、多量の出土土器など共通性も多い。一方、1号溝については、深さは浅く、幅も狭く、出土土器も皆無に近かった。また、2号溝については、幅はやや狭く、出土土器の量もそれほど多くなく、浅い逆台形を呈する点など他と異なる点が多く見受けられる。溝の深さについて、底面の標高をそれぞれ見てみると1号溝は31.55m、3号溝が30.6m～31.0m、4号溝が31.5m、そして5号溝が30.2mであり、2号溝は他に比べて浅い溝と言える。5号溝については、古墳時代に入った遺構であったが、幅7m以上で深さも1.5mと非常に大規模なものであった。

このような差が機能を表すのか、他の資料との比較等を行って探ることが今後の課題である。

（2） 5号溝について

5つの溝の中で最も目を引いたのは、5号溝であった。幅8mを越える大規模な溝が、古墳時代前期に掘られていることは注目に値する。しかしその一方で、その意味、目的、性格を考えると何故この場所に、この時期にこれほどの溝が造られたのかという問題が残る。

溝の規模、深さから見て居館の周溝の可能性は低い。もしそうならば、溝の幅はもっと狭く、深さも浅いはずである。また、環壕的な溝の可能性にも疑問が残る。5号溝の向きは菊池川にほぼ平行である。溝で守る部分はおそらく北側であろう。しかし、南側は20mも離れれば急な断崖であり、わざわざこのような大規模な溝を掘るまでもなく、地形的には十分要件を満たしている。また、溝の埋土観察から、周堤や盛土は外側にあたる南側にあったことが分かっているので、防御に不利なことを行っていたということになる。もう一つの可能性として、古墳の周溝を挙げておきたい。しかし墳丘は全く残されていないため、現状で判断するには根拠が少なすぎる。

いずれにしても、今回の調査ではわずか4mほどの長さでしか検出できなかったので、この遺構の性格は断定できない。今後より広い面積で確認した上、検討しなければならないが、単純に規模から考えても、当遺跡において重要な遺構に位置付けられるのではなかろうか。

問題は残されたが、この溝の発見は、これほどの大土木事業を遂行できる巨大な労働力を、少なくとも古墳時代前期まで保持していたということを示しており、当遺跡が改めて菊池川中流域の拠点的な集落であることを示す貴重な遺構であると言えよう。

（3） 古代の焼土遺構について

古代の遺構、遺物については、不明土坑や焼土など性格が不明な遺構を検出した。特に焼土遺構については、不明な点が多い。焼土及びその周辺からは、羽口など製鉄関連の遺物の出土はなかった。土師器片の出土が多いので、土師器焼成に関係する遺構か？今後の類例を待ちたいと思う。

第２節　196-1番地の調査（第433図）

209番地の北隣に位置する。現状は畑であるが、戦後に圃場整備が行われ、近年まではポンプで汲み上げ、水田として利用していたと地権者の方に伺った。圃場整備によって遺構残存の可能性は低いと考えられたが、南側については良好であったため、設定したトレンチの南半分を調査した。設定したトレンチは南北に45mの長さで幅は４ｍである。実際調査したのは約半分の25ｍである。

検出した遺構は、弥生時代の遺構として道路状遺構１条、古代の土器焼成遺構（不明焼土）２基、中世の大溝１条、時期不明の土坑１基である。

１．弥生時代の遺構と遺物

（１）　道路状遺構（第434図）

調査区３区から４区にかけて検出された。道路の方向はほぼ南北を向いている。

道路面は、１～２cm角に砕かれた土器と２cm大の小石（砂利）、さらに粘質が強い黒色土と砂粒が混ざったもので舗装されていた。土器と小石が散布しているというよりも、まさに舗装された状態という印象を強く受けた。サブトレンチでこの断面を観察してみると、およそ幅130cm、深さ15cmに掘りこんだところに土器、石、砂、土が一緒になったものが埋めていた。道路上面は硬化していたので、填圧のような作業が施されたのではないかとも思われる。道路面からは焼土、炭化物は検出されなかった。

遺物（第435図）

遺物は実測に耐えうるものが非常に少ない。実測可能な２点を掲載した。１は小型の甕の上半である。器壁が厚いが、おそらく弥生時代後期のものと考えられる。両器面ともハケ調整が施されている。２は長胴甕の下半か。壺の下半の可能性もある。丸底で、外器面はタタキ後刷毛調整である。これ以外の遺物は小片のため実測はできなかった。

時期としては、多量の小片の土器の中で、古代の土師器片は見られなかったことから、弥生時代終末期をさかのぼらないと考えられる。

（２）　土坑（第437図）

３区北端で検出された。北側半分は調査の対象外としたため、完掘はしていない。ほぼ東西に軸をとり、長さ2.4m、深さは0.44ｍで、幅は不明である。プランは長方形を呈するものと思われる。埋土は均質な暗褐色土で、遺物はほとんど出土しなかった。

遺物（第438図）

１は高坏の坏部である。口縁部が短く直立し、口唇部は内傾する。

（３）　遺構に伴わない遺物（第436・440・441図）

土器　遺構に伴わない遺物のうち、道路状遺構に隣接して出土した土器は４，16である。出土したレベルもほぼ同じである。

１、２は甕の口縁部である。口径が35cmを超える大型のもので、おそらく甕棺の一部と思われる。３はほぼ完形の甕である。それぞれに接点がないが、出土状態と胎土や調整などから同一である。長胴の甕であるが、頸部に刻目突帯がある点や口縁部が内湾気味に開く点など在地系とは異なる特徴をもつ。

壺は８点掲載した。複合口縁部が非常に多いのに気づく。５、10、13は複合口縁壺の口縁部で、口径は様々であるが、いずれも頸部から口縁部にかけて外湾しながら広がった後、口唇部がほぼ垂直に立ち上がる。４も複合口縁壺であるが、口唇部が肥厚し、やや外湾気味に開く。15は広口壺の口縁部である。また、下垂状の口縁部の壺も出土した。９は長頸壺の口縁部で、口唇部外面に３条の凹線が施されている。山陽地方の影響を受けたものか。16は小型の壺で底部と口縁部を欠く。頸部に低い突帯がめぐる。

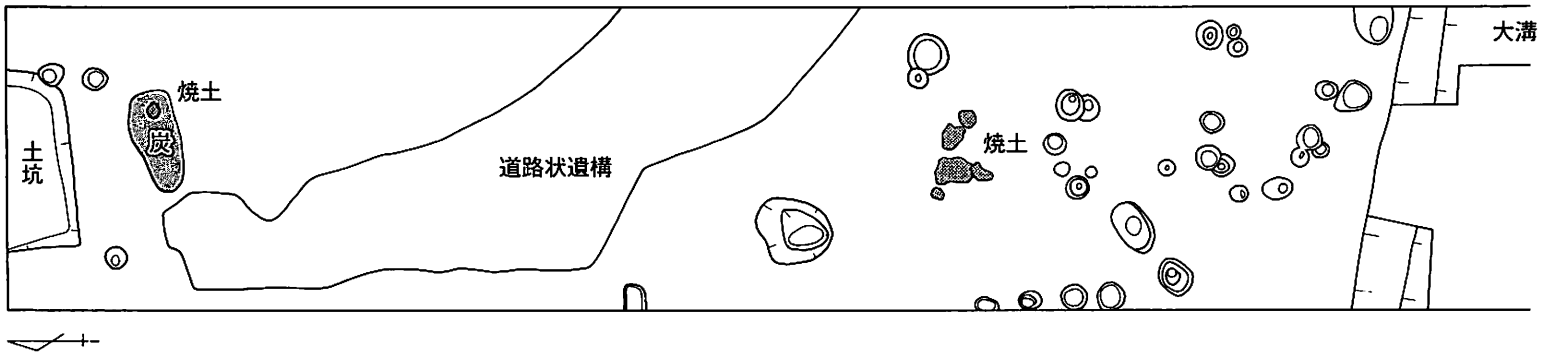
８は高坏の坏部である。口縁部は垂直に立ち上がり、口唇部は内傾する。このほか、ミニチュア土器も出土した。７は鉢のミニチュア土器か。脚台をもつ。12はジョッキ形土器である。把手ではなく、縦方向の２本の突帯が付くものと思われる。

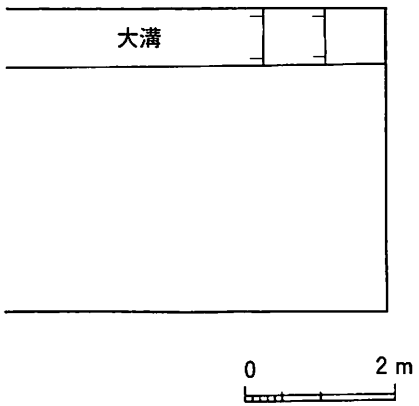
鉄器

１点出土した。１８－６は鉄剣の下半部か。全体的に厚さは均一で刃部は明瞭でない。基部が緩やかにすぼまる。

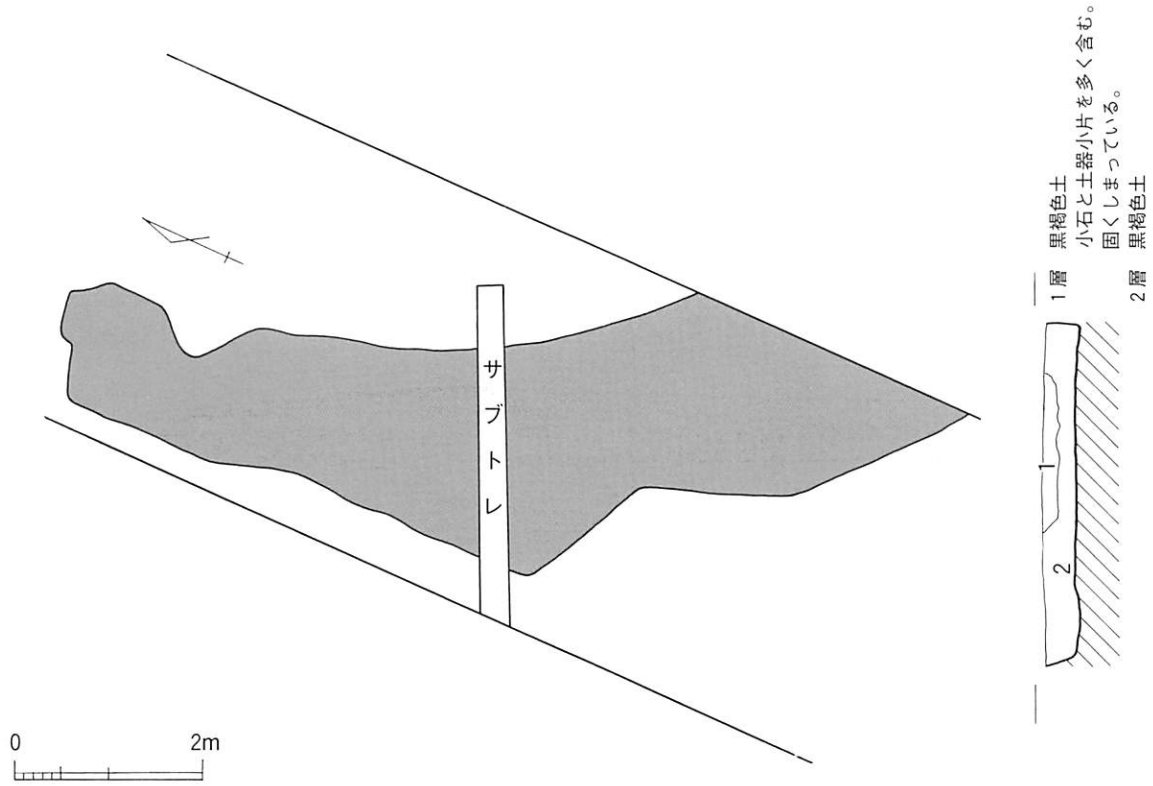
鐸形土製品（第436図）

包含層から出土した。全体の３分の１程度しか残っていなかったが、横断面の形状や外形の側面のラインから、鐸形土製品と判断した。形状は、四角柱状ではなく、ひれをもつ鐸形を呈するものではないかと思わ

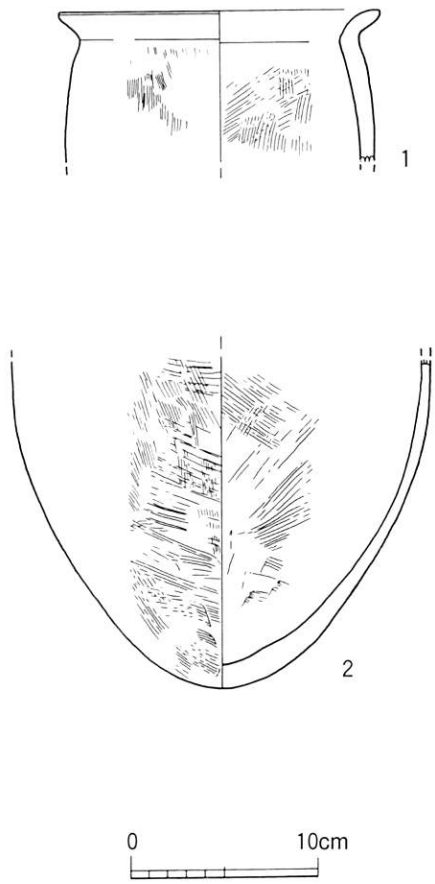




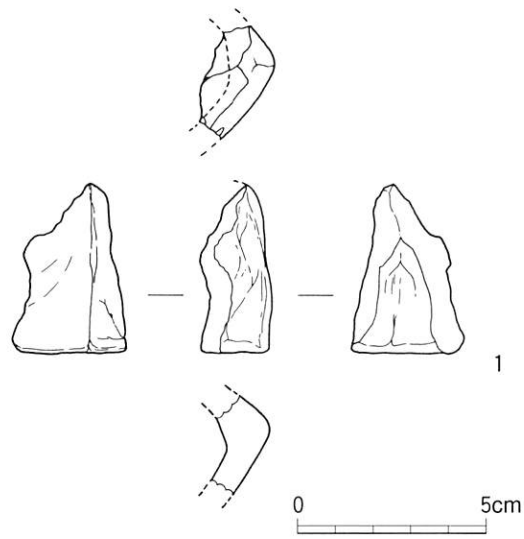
第433図　方保田196-1番地　遺構配置図（S＝1／100）



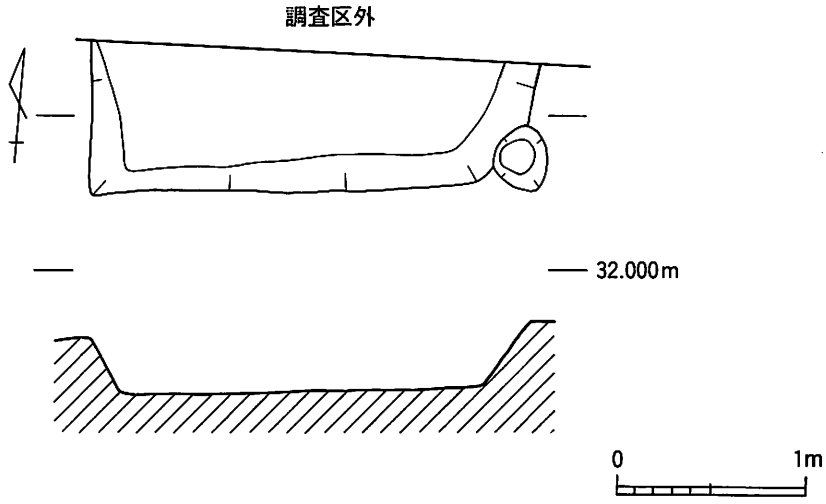
第434図　道路状遺構　実測図（S＝1／80）



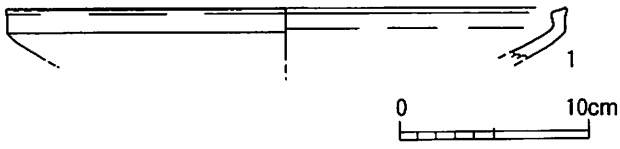
第435図　道路状遺構出土土器実測図
（S＝1／4）



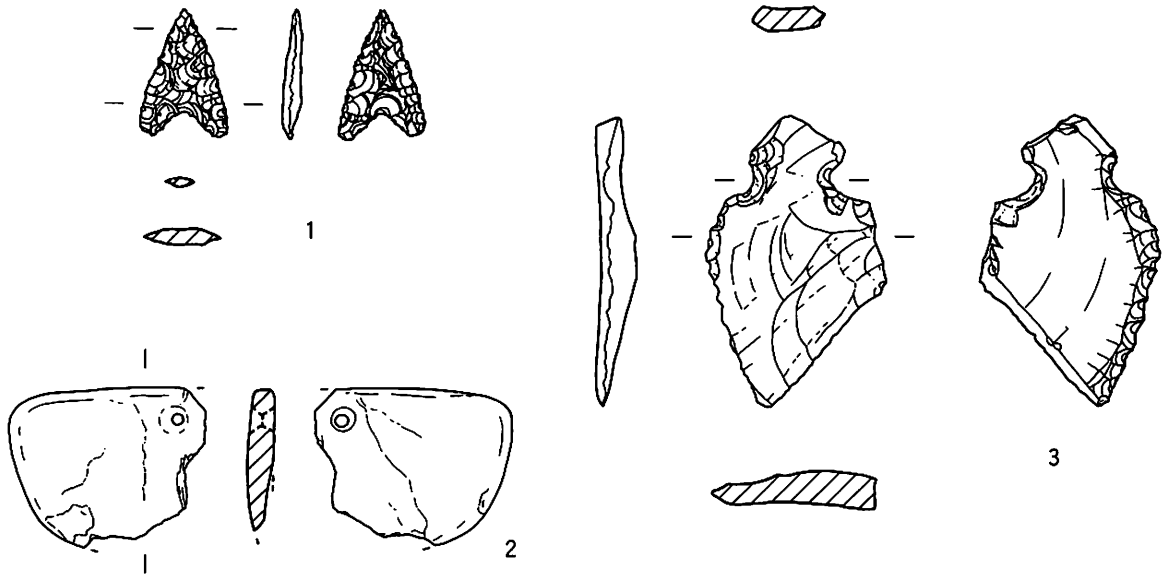
第436図　鐸形土製品　実測図（S＝1／2）



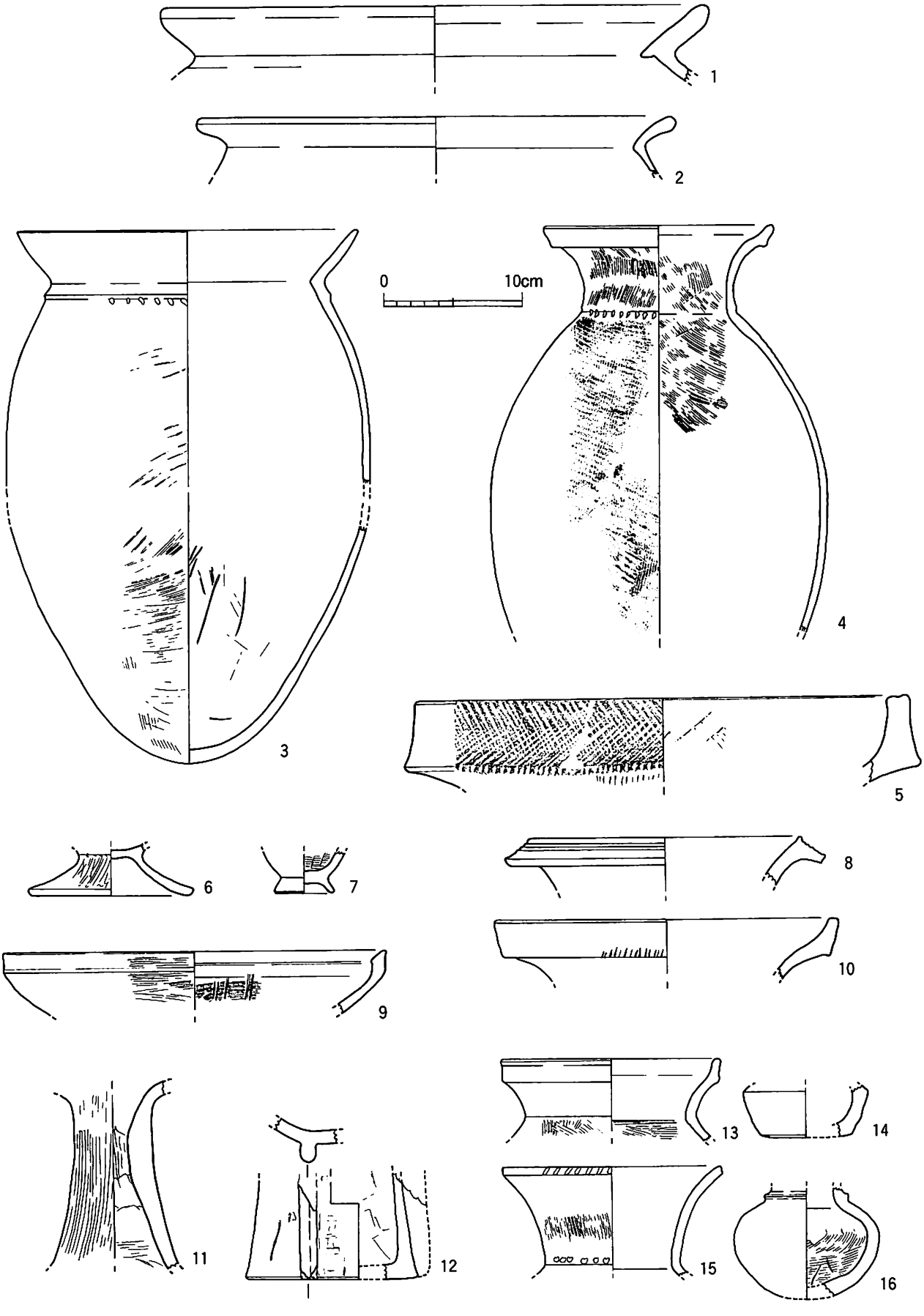
第437図　土坑　実測図（S＝1／40）



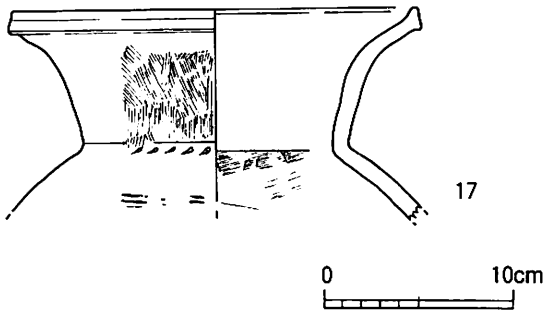
第438図　土坑出土土器実測図（S＝1／4）



第439図　石器実測図（1はS＝1／1、2・3はS＝1／2）



第440図　遺構に伴わない遺物実測図①（S＝1／4）



第441図　遺構に伴わない遺物実測図②
（S＝1／4）

れる。

石器（第439図）

石鏃（1）、石包丁（2）、石匙（3）が各1点出土した。

2．古代以降の遺構と遺物

（1）　4区焼土（第442図）

4区で1基検出された。北東－南西軸2m、北西－南東軸1.5mの範囲に白粘土と焼土が散布する。割合としては白粘土が大半を占める。白粘土の厚さは3～5cm程度で、面状に広がる部分とブロック状に点在するものがあった。焼土はそれ自体はしっかりしているが、面的には広がらない。白粘土を取り除くとその下から焼土が面的に検出された。これらの焼土は、白粘土が火を受けたものと思われる。また焼土の周囲には若干の硬化面が検出された。炭化物や灰などはみられなかった。

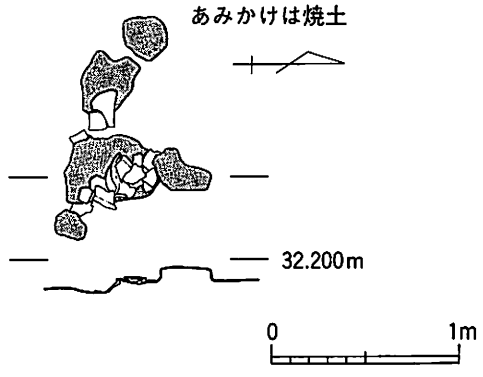
白粘土と焼土から土師器片（甕、甑）が、特に上半が多く出土したが、接合の結果完形になるものはなかった。このほか、焼成粘土塊が数点出土した。

遺構の性格として、焼成粘土塊が出土することから土器焼成遺構の可能性も考えられるが、炭や灰などが検出されていないため疑問が残る。

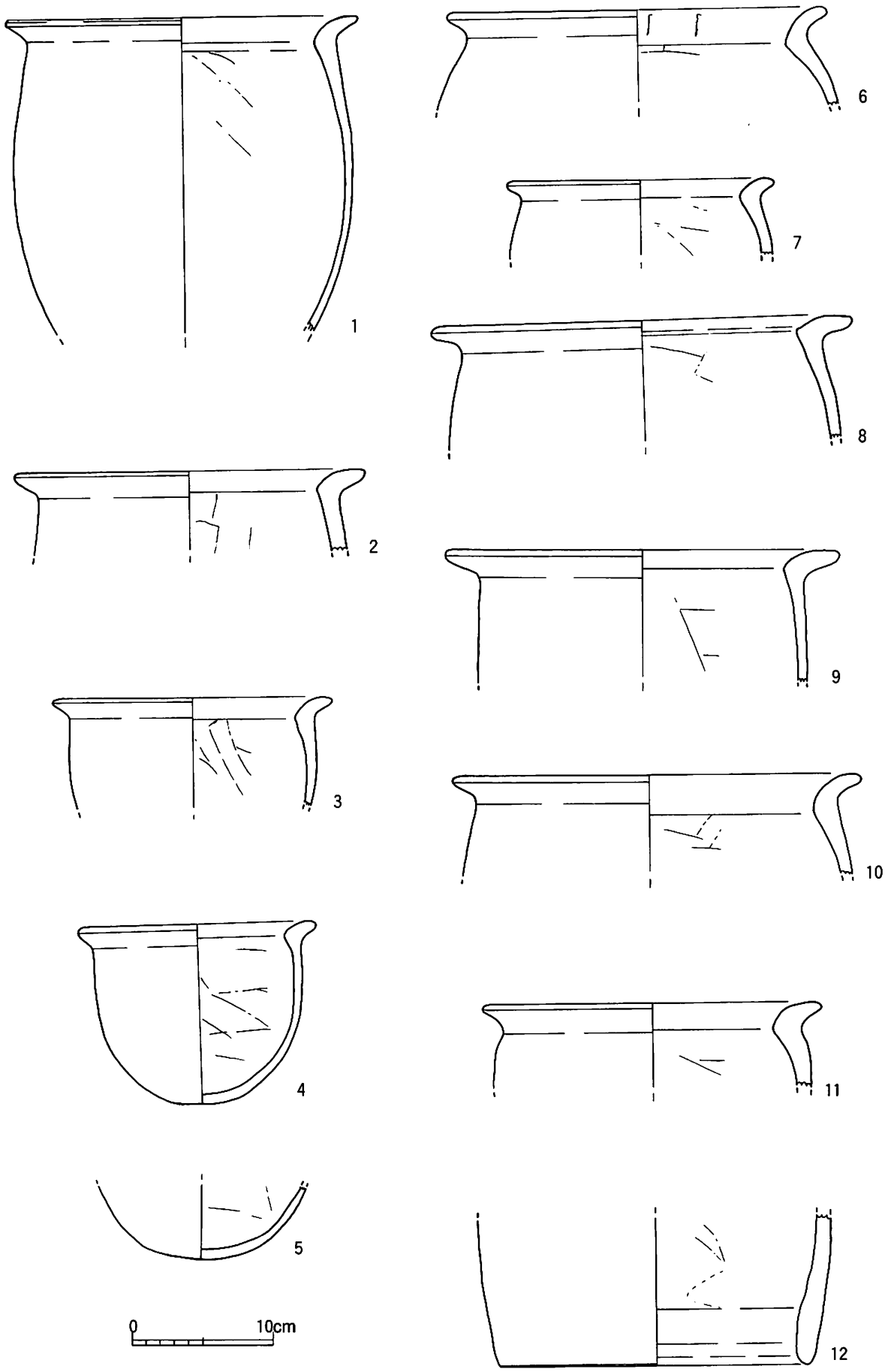
遺物（第443図）

出土した遺物は比較的多い。全てが土師器片で、甑又は甕である。口縁部10点と底部2点を掲載した。

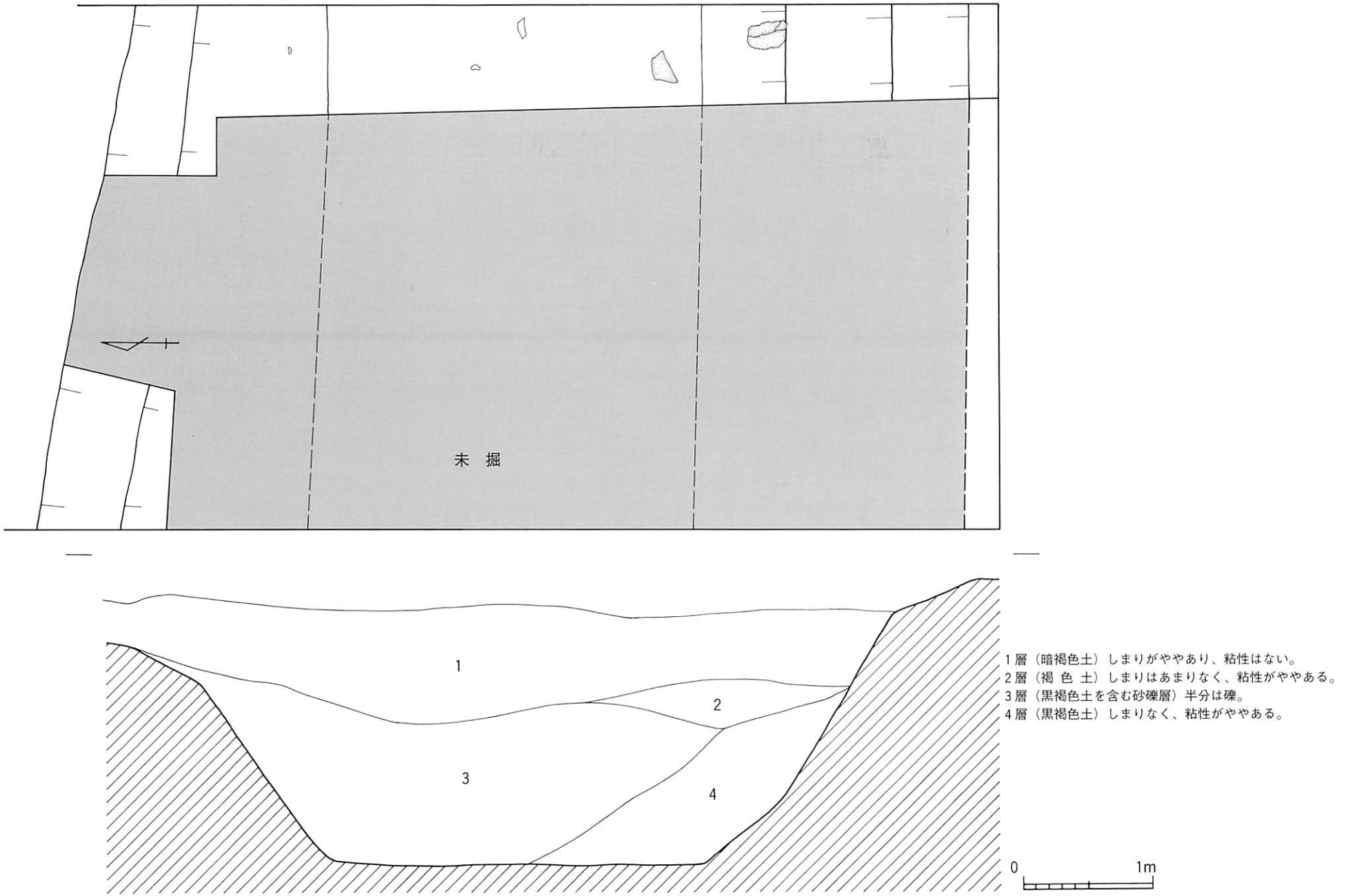
口縁部は、口径が20cm以下の小型4点と、それ以外8点に分けられる。小型の甕は4が完形であるが、他の3点も規模はそれほど変わらないと思われる。口縁部の開き方もそれほど差異がない。標準の大きさである2、　6、8～11は口径が22センチから30cmの範



第442図　焼土検出状況　実測図（S＝1／40）



第443図　焼土出土土器実測図（S＝1／4）



第444図　大溝　実測図（S＝1／50）

囲に収まる。このうち9以外は肩部が張らず胴部へ至る。12は甑の底部である。一穴式の甑と思われる。

（2） 大溝（第444図）

調査区南端で検出された大溝である。発掘にはかなりの土量と労力を必要とするのが予想されたので、断面と床面が確認できる最小範囲を掘下げた。

溝は幅5.8m、深さは2.0mで、ほぼ東西方向を向くと考えられる。断面形はほぼ逆台形で、両肩の勾配とも、かなり急な勾配となっている。

埋土は両側から自然に堆積した後、礫を多量に含む土砂が北側から堆積していた。かなりの土量であるため、故意に埋められたものと考えられる。

遺物は非常に少ないが、須恵器などが数点出土した。1、2は甕の口縁部である。3は大甕の肩部と思われる。外器面に自然釉が付着する。5、6は坏の底部である。いずれも高台がつく。4はいわゆる黒色土器で、内器面にはヘラミガキが施されている。

(3) 遺構に伴わない遺物（第446・447図）

移動式かまど　2点出土した。焚口部と思われる部分を確認したので、それと判断した。器面は、ヘラ状工具による調整となでであるが、丁寧ではない。

焼成粘土塊　4点出土した。1、2、4はほぼ同じ大きさで、厚みも均一である。3は半球状で、指で握ったような痕が残る。

3．まとめ

196-1番地では、調査の主たる目的である弥生時代から古墳時代にかけての遺構はそれほど検出されなかった。しかし、その一方で道路状遺構が検出され、当地が遺跡の一部であったことは知ることができた。

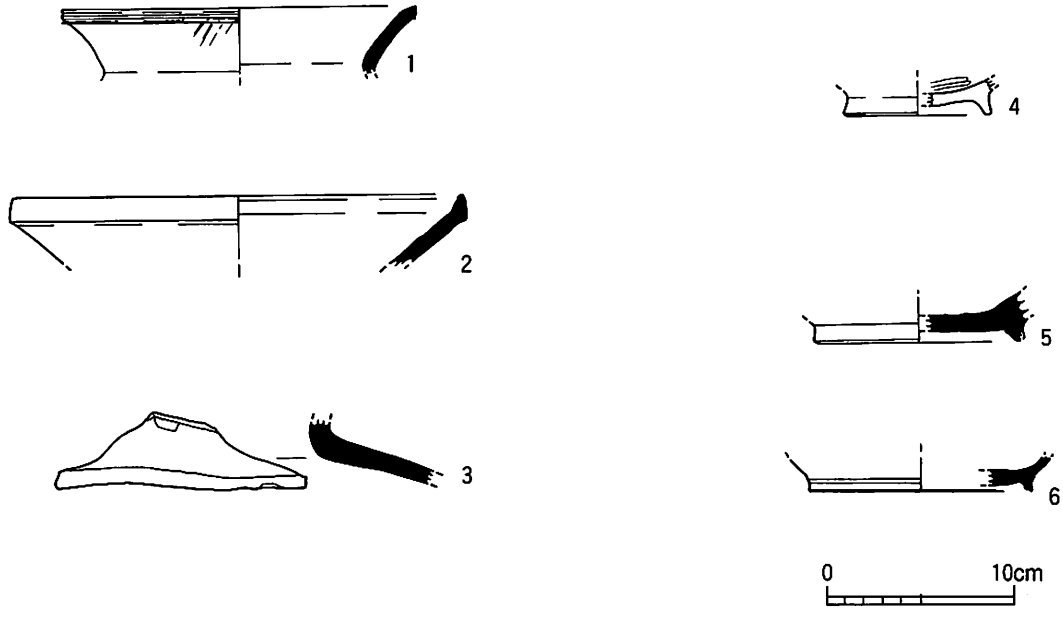
このほか、古代、中世の遺構については注目するものが検出された。

（1） 道路状遺構について

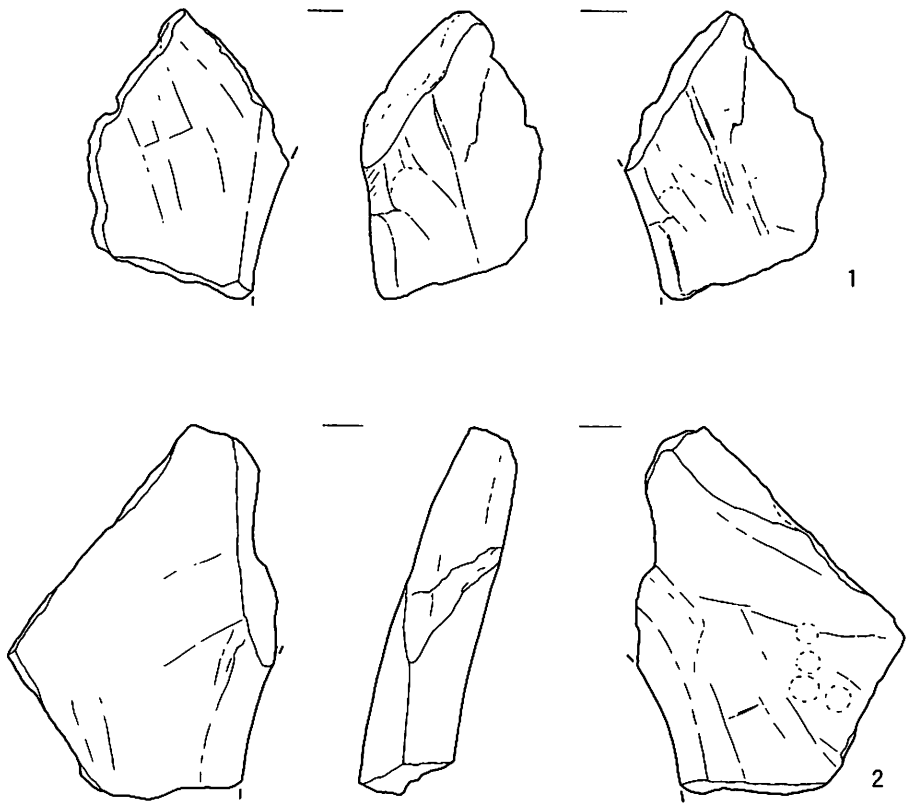
当調査区は、包含層は火山灰の黒色土であったが、他の包含層に比べて土質が水っぽく、水はけも良くなかった。さらに、この遺跡では珍しく、周囲に弥生時代後期遺構がほとんど検出されなかった。当時この地一帯は、水はけが悪く、ぬかるみが激しい場所であったかもしれない。しかし、何らかの理由でここを通らなければならず、足場を良くするためこのような道路を造ったのではないかとも考える。

（2） 焼土遺構について

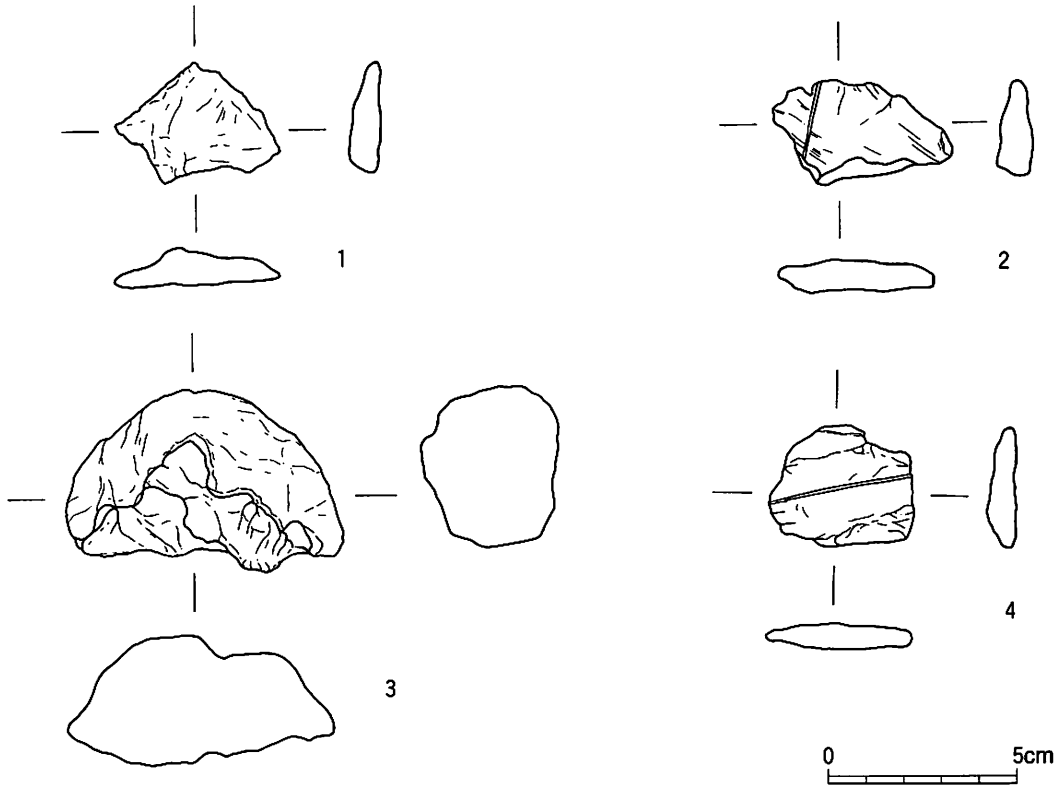
古代においては、4区焼土が検出された。性格は不明であるが、わずかの範囲に多量の土器片が出土したこと、そして焼成粘土塊も伴うから、土器焼成に関する遺構の可能性があるのではないかと考えている。しかし、今回は燃料である炭や灰などが伴って検出され



第445図　大溝出土土器実測図（S＝1／4）



第446図　移動式かまど実測図（S＝1／4）



第447図　焼成粘土塊　実測図（S＝1／2）

ていないため、土器焼成遺構として判断できる根拠を欠いている。古代においてこのような不明焼土遺構が数基検出しているが未だその性格は不明である。

ちなみに、熊本県内の土師器焼成遺構は現在のところ球磨郡須恵村沖松遺跡、八代市興善寺四郎丸遺跡、熊本市大江遺跡群、植木町田子山遺跡の4例知られている。いずれも焼成土坑である。今回の調査は土坑として検出していないが、焼成方法が異なる可能性もある。今後はプランや埋土の状況などをより細かく注意し、少しでもその性格が明らかになる調査を行いたい。

（3） 大溝について

中世においては、大溝が1条検出された。この大溝は、規模、埋土、出土遺物などから、サンチェリー工業工場建設に伴う事前調査（未報告）の大溝、および220番地1号溝（平成11年度調査）と同一のものと考えられる。図面上で復元しみると、菊池川添いの崖から端を発し、緩やかに弧を描きながらこの溝につながる。さらには、北西方向へ伸びていくと思われる。この大溝が村、または城を取り囲む壕であるとするならば、内部には建物跡などの遺構が検出されてしかるべきである。しかし、溝より内側にあたるはずの209番地からは、予想される遺構は検出されなかった。遺物については輸入陶磁器片や中世の土器片が出土しているので、今後は中世遺構についても注意を測るべきことを痛感している。

台地の西端にある大道小学校は、中世城の「方保田城」があったと考えられ、一部土塁なども残っている。また、小学校周辺の「本村」という集落は、町割が古い形態を残しており、中世の名残とも考えられる。

関連して、当調査区から西に20m付近で、平成12年度に下水道工事の立会い調査を行った。残念ながら溝は検出されなかったが、完形復元可能な黒色土器と土師椀が1点ずつ出土した。これら遺物もこの溝に関係したものと考えられる。

今回検出された大溝は、方保田城を核とした中世期の遺跡の範囲を知る鍵となる遺構といえる。今後台地西側の調査が進んでいくと、その方向や中世城の集落や城の範囲などが明らかになっていくと思われる。

表－9　209番地出土　土器観察表　　その1

図	No.	遺構名	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備考
389	1	1号溝	P-327	台付鉢	下半	－	－	10YR8/2 灰白色	角閃石　石英 長石	良	胴部縦刷毛 脚部なで	胴部刷毛調整　脚部なで	無	無	
389	2	1号溝	P-329	高坏	脚部	－	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良	柱部上半ナナメ刷毛後なで 柱部下半ナナメ刷毛	なで	無	無	
389	3	1号溝	P-328	甕	脚台	－	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良	不明瞭	底部刷毛　脚台なで	無	無	
391	1	2号溝	一括	壺	上半	24.0	－	10YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石　雲母	良好	口縁部なで　胴部ナナメ刷毛	口縁部なで　胴部ナナメ刷毛	有	無	
391	2	2号溝	P-835	甕	底部欠	18.4	－	5YR5/2 灰褐色	赤褐色粒　角閃石 雲母	良好	口唇部なで　口縁部ナナメ刷毛 胴部タタキ後縦刷毛	口縁部なで　肩部～胴部粗い縦刷毛	無	有	
391	3	2号溝	P-861	壺	口縁部	46.0	－	5YR 7 / 4 にぶい橙色	角閃石　長石	良	なで	なで	無	無	摩滅が激しい　小片
391	4	2号溝	P-872	壺	口縁部	20.0	－	7.5YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	口唇部細かい刻目 口縁部なで、縦刷毛　頸部刺突文	口縁部横刷毛　頸部細かい横刷毛	有	無	
391	5	2号溝	P-876	壺	口縁部	19.8	－	10YR8/3 浅黄橙色	長石　雲母	良好	口唇部なで　口縁部縦刷毛後なで 頸部なで	口唇部なで　口縁部横刷毛	有	有	頸部に刺突文の痕跡 がわずかに残る
391	6	2号溝	一括	壺	口縁部	40.2	－	5YR6/4 にぶい橙色	長石　雲母	良好	刻目　列点文　なで　縦刷毛	なで　ナナメ刷毛	有	無	
391	7	2号溝	P-853	壺	底部	－	－	7.5YR7/3 にぶい橙色	長石　雲母	良	ナナメ刷毛	ナナメ刷毛	有	無	
391	8	2号溝	P-875	器台	胴部	－	－	10YR7/3 にぶい黄橙色	赤褐色粒　長石 角閃石　雲母	良好	縦刷毛	上位ヘラ調整　下位横刷毛	有	無	丁寧な仕上げ
391	9	2号溝	一括	高坏	脚部	－	－	10YR7/3 にぶい黄橙色	長石	良好	柱部上位まで　縦刷毛	坏部ヘラミガキ　脚部ヘラ調整	無	無	
391	10	2号溝	P-843	高坏	脚部	－	－	10YR7/4 にぶい黄橙色	長石　雲母	良	ヘラミガキ	ヘラ調整	有	有	
391	11	2号溝	P-873	甕	脚台	－	－	7.5YR7/6 橙色	角閃石　長石	良好	なで	なで	有	無	砂型有
391	12	2号溝	P-831	台付鉢	下半	－	－	7.5YR8/2 灰白色	長石　石英	良好	丁寧ななで	なで	無	有	煤は内外に付着
391	13	2号溝	一括	台付鉢	脚台	－	－	7.5YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒　長石 雲母	良好	脚台縦刷毛	なで	無	無	
391	14	2号溝	一括	台付鉢	脚台	－	－	7.5YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 雲母	良好	なで	なで	無	無	
391	15	2号溝	一括	台付鉢	脚台	－	－	7.5YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒　長石	良好	なで	脚台上位横刷毛　脚台裾部なで	無	無	4個の穿孔
395	1	3号溝	P-603	甕	完形 復元	24.5	－	10YR4/2 灰黄褐色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部なで　頸部刻目文 肩部、胴部下位タタキ後なで 胴部中位タタキ後ナナメ刷毛後なで	口縁部なで　肩部ナナメ刷毛後なで 胴部ナナメ刷毛	有	有	肩部に穿孔あり
395	2	3号溝	P-602 他	甕	完形	20.8	40.5	7.5YR3/2 黒褐色	角閃石　石英 長石	良好	口縁部なで　肩部縦刷毛 胴部タタキ後ナナメ刷毛 胴部下半縦刷毛　脚台なで	口縁部なで 胴部ナナメ刷毛？	無	有	内器面に剥離が 多くみられる
395	3	3号溝	P-732 他	甕	脚台欠	19.2	－	2.5Y8/2 灰白色	角閃石　雲母	良好	口縁部～肩部なで　胴部下位底部なで 胴部上位タタキ後ナナメ刷毛	口縁部～肩部、胴部下半～底部なで 胴部上半横刷毛	有	有	砂型あり
395	4	3号溝	P-773 他	甕	完形	15.8	37.3	5YR5/8 明赤褐色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部縦刷毛後なで　肩部縦刷毛 胴部、脚台ナナメ刷毛　底部縦刷毛	口縁部横刷毛　肩部ナナメ刷毛 胴部縦刷毛　脚台横刷毛、なで	無	有	口縁部はいびつ
396	5	3号溝	P-646	甕	底部欠	17.8	－	7.5YR4/2 褐灰色	赤褐色粒　長石 雲母	良好	口縁部なで 肩部以下縦刷毛、ナナメ刷毛	口縁部、頸部なで　胴部ナナメ刷毛	有	有	胴部下半 被熱による剥離
396	6	3号溝	P-746 他	甕	完形	16.1	30.2	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口唇部、縁なで　口縁部縦刷毛後なで 胴部上半タタキ後縦刷毛 胴部下半縦刷毛	口縁部刷毛後なで 胴部上半ナナメ刷毛 胴部下半不明瞭　脚台なで	有	有	砂型あり いびつ　全体が黒い
396	7	3号溝	P-758 他	甕	完形	16.0	25.6	7.5YR4/2 褐灰色	角閃石　長石　雲母	良好	口唇部なで　口縁部ナナメ刷毛後なで 胴部縦刷毛　脚台ナナメ刷毛後なで	口縁部ナナメ刷毛後なで 頸部指おさえ　胴部下半、脚台なで 胴部上半ナナメ刷毛	有	有	

表－9　209番地出土　土器観察表　　その2

図	No.	遺構名	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備考
396	8	3号溝	P-753	甕	脚台欠	14.5	－	7.5YR7/4 にぶい橙色	角閃石　長石	良好	口唇無雛で　口縁部縦刷毛後なで 胴部上半縦刷毛　胴部下半不明瞭 脚台ナナメ刷毛後なで	口縁部横刷毛後なで 胴部ナナメ刷毛　脚台なで	有	有	穿孔あり 脚台にオレンジ色 の色素
396	9	3号溝	P-628	甕	底部欠	24.0	－	10YR8/2 灰白色	赤褐色粒　長石	良好	口唇部刻目　口縁部なで 頸部突帯に刻目 胴部ヘラ調整後ナナメ刷毛	口縁部～頸部なで 胴部ナナメ刷毛	無	有	
396	10	3号溝	P-414	甕	上半	18.8	－	2.5YR4/6 赤褐色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	なで	口縁部なで　胴部ヘラ削り	無	無	土師器　外器面全体 に赤色顔料が塗布
396	11	3号溝	P-422	鉢	上半	27.6	－	2.5Y7/3 浅黄色	長石　雲母	良好	口唇部なで　肩部～胴部縦刷毛 口縁部細いナナメ刷毛後なで 胴部中位粗い縦刷毛	横刷毛	有	無	橙色の色素が浮かぶ
397	12	3号溝	P-986	壺	完形	20.6	49.5	5YR6/6 橙色	赤褐色粒　長石	良好	口唇部刻目　口縁部縦刷毛後なで 肩部縦刷毛後ナナメ刷毛 胴部ナナメ刷毛　底部縦刷毛後なで	口縁部横刷毛後なで、横刷毛 肩部ナナメ刷毛　底部縦刷毛後なで 胴部上位逆方向のナナメ刷毛	有	無	穿孔５ヶ所　いびつ
397	13	3号溝	P-767他	壺	完形	23.8	41.2	10YR7/4 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石	良好	口唇部なで　頸部ナナメ刷毛 肩部櫛描波状文、平行文 胴部ナナメ刷毛　下半縦刷毛	口縁部～頸部横刷毛 肩部～底部粗い刷毛	有	無	橙色の色素が浮かぶ
397	14	3号溝	P-639他	壺	完形	11.5	18.0	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部刷毛後なで　肩部ナナメ刷毛 胴部横刷毛　底部なで	口縁部横刷毛後なで　胴部横刷毛 口辺部横、ナナメ刷毛　頸部、底部なで	有	無	頸部に刺突文
397	15	3号溝	P-675	壺	完形	9.4	11.7	2.5YR6/8 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母 白粘土粒	良好	口唇部なで　口縁部縦ヘラ磨き 肩部波状文　胴部横へら磨き 底部なで	なで	有	無	焼成後の穿孔有
397	16	3号溝	P-740他	壺	完形	18.3	23.8	10YR8/2 灰白色	角閃石　長石	良好	口縁部なで、ナナメ刷毛 頸部ナナメ刷毛後なで 肩部～胴部上位ナナメ刷毛	なで	有	無	いびつ　調整は丁寧
397	17	3号溝	一括	壺	上半	14.0	－	7.5YR8/3 浅黄橙色	長石　石英　雲母	良好	口縁部～頸部なで 肩部縦刷毛、横刷毛	口縁部～頸部なで 肩部指押さえ後ナナメ刷毛	無	有	
398	18	3号溝	P-879	壺	完形	35.0	58.2	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口唇部、頸部～肩部なで 口縁部上位ナナメ刷毛後なで 口縁部下位縦刷毛後なで 胴部中位ナナメ刷毛後なで 胴部下位タタキ後ナナメ刷毛後なで	口縁部～肩部不明瞭 胴部上位刷毛 胴部下位なで　底部刷毛	有	無	頸部に刻目突帯 穿孔３ヶ所
398	19	3号溝	P-597	壺	完形	10.5	10.8	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部～肩部なで 胴部～底部ヘラ調整？後なで	口縁部なで　肩部指なで 胴部～底部ヘラ調整後なで	有	有	橙色の色素が浮かぶ
398	20	3号溝	P-769	壺	完形 復元	7.3	9.9	2.5YR4/8 赤褐色	長石　石英	良好	口縁部なで　胴部中位～底部なで 肩部～胴部中位縦刷毛後ヘラ磨き	口縁部なで 肩部～底部ヘラ調整	無	有	
398	21	3号溝	P-654	鉢	完形	18.1	8.4	10YR7/4 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	口縁部、底部なで 胴部タタキ後なで	なで	有	有	
398	22	3号溝	P-743	鉢	完形	12.3	5.1	7.5YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	工具調整	ヘラ調整後なで	有	無	
398	23	3号溝	P-746	鉢	完形	10.9	5.8	7.5YR6/4 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部なで 胴部工具による調整	口縁部なで 胴部ナナメ刷毛後なで	有	無	
398	24	3号溝	P-986	台付鉢	脚台欠	11.0	－	2.5YR4/6 赤褐色	石英	良好	口縁部なで後一部ナナメ刷毛 柱部なで	なで後ヘラミガキ	有	無	精製土器
398	25	3号溝	P-749	台付鉢	脚台欠	11.5	－	5YR6/6 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	口縁部なで　肩部ナナメ刷毛後なで 下半ヘラ調整後なで 台部縦刷毛後なで	口縁部なで　体部ヘラ調整後なで 台部なで	有	無	
399	26	3号溝	P-609	鉢	完形	12.2	16.6	7.5YR7/3 にぶい橙色	長石　雲母	良好	口縁部縦刷毛後なで　頸部なで 肩部～胴部中位ナナメ刷毛 胴部中位～底部なで	口縁部ナナメ刷毛後なで　肩部なで 胴部～底部一部ナナメ刷毛	有	無	穿孔２ヶ所
399	27	3号溝	P-765	鉢	完形	13.2	13.6	10YR8/2 灰白色	長石　雲母	良好	口縁部なで　肩部縦刷毛後なで 胴部～底部横刷毛、ナナメ刷毛	口縁部ナナメ刷毛　肩部ヘラ調整 胴部＝底部一部ナナメ刷毛	有	有	穿孔？１ヶ所
399	28	3号溝	P-734他	鉢	完形	15.5	13.7	7.5YR7/3 にぶい橙色	角閃石　長石　石英	良好	なで	口縁部なで 肩部～底部ヘラ調整後なで	有	有	橙色の色素が浮かぶ
399	29	3号溝	P-759	鉢	完形	13.5	12.0	10YR5/1 灰褐色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部なで　上半ナナメ刷毛後なで 下半刷毛調整後なで	口縁部横刷毛後なで 体部なで	有	有	

表－9　209番地出土　土器観察表　　その3

図	No.	遺構名	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備考
399	30	3号溝	P-733他	鉢	完形	12.5	11.9	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部なで　肩部細いナナメ刷毛 胴部～底部洗い横刷毛後なで	口縁部横刷毛、ナナメ刷毛 肩部～底部ヘラ調整	有	無	橙色の色素が浮かぶ
399	31	3号溝	P-661	鉢	完形	12.6	11.6	10YR7/3 にぶい黄橙色	長石	良好	口縁部～肩部なで　底部なで 胴部中位ナナメ刷毛後なで	口縁部ナナメ刷毛後なで 肩部～底部ヘラ調整	有	無	
399	32	3号溝	P-880	鉢	完形	13.6	11.4	10YR8/2 灰白色	角閃石　長石　雲母	良好	口縁部なで　肩部～底部ナナメ刷毛	口縁部横刷毛後なで 胴部～底部なで	有	有	一部指頭圧痕あり
399	33	3号溝	P-649他	鉢	底部欠	13.8	－	10YR8/2 灰白色	角閃石　長石	良好	口唇部なで　胴部上半ナナメ刷毛 胴部下半～底部ヘラ調整	口縁部横刷毛　肩部横なで 胴部中位横刷毛	有	有	橙色の色素が浮かぶ
399	34	3号溝	P-648他	鉢	完形	12.8	14.8	7.5YR8/1 灰白色	角閃石　長石　雲母	良好	口縁部～肩部縦刷毛後なで 胴部上位縦刷毛　胴部中位横刷毛 胴部下位～底部丁寧ななで	口縁部～胴部中位 胴部下位ナナメ刷毛 底部指押さえ	有	無	橙色の色素が浮かぶ
399	35	3号溝	P-598	高坏	坏部	－	－	7.5YR7/6 橙色	角閃石　長石	良好	なで　縦刷毛	なで　縦刷毛	無	無	長石の粒が大きい
399	36	3号溝	P-655他	高坏	完形 復元	18.9	13.5	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	口縁部、裾部なで 坏部、柱部ナナメ刷毛	口縁部、脚部なで 坏部なで後ヘラ磨き	無	有	裾部に透し孔4つ
399	37	3号溝	P-739	高坏	口唇部欠	－	－	10YR8/2 灰白色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部下刻目　坏部刷毛後なで 柱部ヘラ磨き　裾部刷毛後なで	坏部なで　柱部指なで 裾部横刷毛	有	無	裾部に透し孔3つ
399	38	3号溝	P-678	高坏	完形	15.8	18.0	10YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	坏部なで　坏底部ナナメ刷毛後なで 柱部縦ヘラ調整　裾部なで 脚部下位ナナメ刷毛後なで	坏部ヘラ調整後なで 柱部ナナメ指なで 裾部ナナメ刷毛後なで	有	無	裾部に透し孔3つ 裾部に橙色の色素 が明瞭に浮かぶ
399	39	3号溝	P-742他	高坏	完形	28.5	22.3	7.5YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部なで　坏部刷毛 柱部刷毛後ヘラ磨き　裾部刷毛後なで	口縁部なで　柱部、裾部ヘラ調整 坏部横刷毛後なで後ヘラ磨き	有	無	裾部に透し孔3つ
399	40	3号溝	一括	高坏	口脚部欠	－	－	10YR8/3 浅黄橙色	長石	良好	坏部なで　柱部縦刷毛後なで 底部なで	坏部なで　柱部工具によるなで 底部なで	無	無	
399	41	3号溝	P-421	ジョッキ 形土器	把手欠	13.6	12.7	7.5YR7/3 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 雲母	良好	なで	口縁部～胴部なで　底部刷毛	有	無	
399	42	3号溝	P-662	器台	上端欠	－	－	7.5YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒　石英	良好	上位縦刷毛　下半タタキ	上位剥離で不明瞭 下半工具によるなで	無	無	
400	43	3号溝	P-807	高坏	完形	18.3	14.5	2.5Y R 8/1 灰白色	赤褐色粒　長石 雲母	良好	口縁部なで　坏部横刷毛後なで 柱部ヘラ磨き　裾部ナナメ刷毛	口縁部横刷毛後なで 坏部横刷毛後ヘラ磨き	有	無	橙色の色素が浮かぶ 裾部に透し孔3つ
400	44	3号溝	P-808他	高坏	完形	17.3	14.0	2.5Y R 8/1 灰白色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	口縁部なで　坏部刷毛 柱部ヘラ磨き　裾部ナナメ刷毛	口縁部なで　柱部ヘラ調整 坏部なで後ヘラ磨き	有	無	裾部に透し孔3つ
402	1	4号溝	P-948他	甕	上半	18.6	－	10YR6/2 灰黄色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部なで　頸部、胴部縦刷毛	口縁部ナナメ刷毛後なで 胴部ナナメ刷毛	無	無	
402	2	4号溝	P-702	甕	脚台	－	－	7.5YR7/6 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	底部ヘラ調整 脚台ヘラ調整後なで	底部摩滅のため不明瞭 裾部ヘラ調整後なで	無	無	砂型有
402	3	4号溝	P-786	甕	下半	－	－	10YR5/2 灰黄褐色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	胴部刷毛後なで　底部なで 脚台ナナメ刷毛後なで	胴部ナナメ刷毛 脚台なで	有	有	
402	4	4号溝	P-961	甕	口脚部欠	－	－	10YR7/4 にぶい黄橙色	赤褐色粒　長石 雲母	良好	肩部ナナメ刷毛　底部なで 胴部タタキ後ナナメ刷毛 胴部下位縦刷毛後なで　脚台刷毛	ナナメ刷毛　脚台横刷毛後なで	有	有	
402	5	4号溝	P-785	壺	上半	13.6	－	7.5YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部なで　肩部ナナメ刷毛	口縁部、肩部なで 肩部粗い刷毛	無	無	
402	6	4号溝	P-528	壺	上半	22.0	－	10YR7/3 にぶい黄橙色	角閃石　長石	良好	口唇部刻目　口縁部、肩部ナナメ刷毛	口唇部なで　口縁部ナナメ刷毛	無	無	
402	7	4号溝	P-692	壺	上半	17.0	－	10YR8/4 浅黄橙色	角閃石　長石　雲母	良好	口唇部なで　口縁部上位縦刷毛後なで 口縁部下位～肩部縦刷毛	口唇部なで　口縁部ナナメ刷毛 肩部刷毛後なで	無	無	橙色の色素が浮かぶ
402	8	4号溝	P-932	壺	上半	23.2	－	7.5YR6/4 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	口縁部、頸部なで 口縁部縦刷毛	口唇部なで　口縁部ナナメ刷毛	無	無	
402	9	4号溝	一括	壺	上半	32.0	－	7.5YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒 角閃石　長石	良好	口縁部なで　肩部ナナメ刷毛	口縁部なで　肩部ナナメ刷毛	無	無	
402	10	4号溝	P-784	壺	上半	－	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	口縁部ナナメ刷毛　肩部廉状文 胴部上半ナナメ刷毛後なで　下半なで	口縁部なで　肩部刷毛後なで 胴部ナナメ刷毛 胴部下位細かい縦刷毛	無	無	口唇部を欠く ベンガラ付着
402	11	4号溝	一括	台付鉢	脚台欠	11.6	－	7.5YR8/4 浅黄橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	口縁部なで	口縁部なで　体部刷毛後なで	無	無	

表－9　209番地出土　土器観察表　　その4

図	No.	遺構名	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備考
402	12	4号溝	P-791	高坏	上半	10.4	－	10YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	口縁部なで　胴部ナナメ刷毛	口縁部なで　胴部ナナメ刷毛	無	無	橙色の色素が浮かぶ
402	13	4号溝	P-522 他	鉢	上半	14.0	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石	良好	口縁部、頸部なで 胴部ヘラ削り	なで	有	無	焼成後の穿孔有
402	14	4号溝	P-523	高坏	脚台	－	－	10YR8/4 浅黄橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	なで	なで	無	無	
402	15	4号溝	P-698	甕	脚台	－	－	7.5YR4/1 褐灰色	角閃石　石英 長石	良好	なで	なで	無	有	砂型有
402	16	4号溝	P-520	高坏	脚部	－	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	柱部縦刷毛　裾部なで	柱部縦なで　裾部横刷毛後なで	無	無	
402	17	4号溝	P-699	不明	下半	－	－	N2/ 黒色	角閃石　長石　石英	良好	胴部縦刷毛　胴部下位縦刷毛後なで 底部なで	胴部上位縦刷毛 胴部下位横刷毛　底部不明瞭	有	無	
403	18	4号溝	P-455	壺	上半	18.0	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良	口頸部なで　口縁部ナナメ刷毛	横刷毛後なで	無	無	全体的に調整が 不明瞭
403	19	4号溝	P-588	壺	上半	－	－	7.5YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部、頸部なで　肩部刻目 口縁部下位ナナメ刷毛	口縁部ナナメ刷毛 頸部横刷毛後なで　肩部横刷毛	有	無	
403	20	4号溝	P-454	壺	上半	－	－	10YR7/2 にぶい黄橙色	角閃石　長石　雲母	良好	口縁部ナナメ刷毛　肩部庫状文 胴部ナナメ刷毛	口縁部横刷毛後なで 胴部ナナメ刷毛　胴部下位縦刷毛	有	有	
403	21	4号溝	一括	壺	肩部	－	－	10YR8/2 灰白色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	肩部庫状文、羽状文 胴部なで	肩部なで 胴部刷毛後なで	無	無	
403	22	4号溝	P-465	壺	下半	－	－	5YR5/8 明赤褐色	赤褐色粒　長石 雲母	良好	縦刷毛	ナナメ刷毛	有	有	
403	23	4号溝	P-470	壺	下半	－	－	10YR8/2 灰白色	角閃石　石英 長石	良好	胴部縦刷毛　底部なで	なで	有	無	
403	24	4号溝	P-782	甕	脚台	－	－	10YR8/2 灰白色	角閃石　石英 長石	良好	なで	なで	無	無	砂型有
403	25	4号溝	P-713	高坏	上半	9.0	－	10YR8/2 灰白色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	口縁部、頸部なで 胴部ナナメ刷毛後なで	なで	有	無	
403	26	4号溝	P-536	甑	完形	16.6	8.8	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　長石	良好	口唇部なで　胴部～底部縦刷毛 胴部上位タタキ後縦刷毛	ナナメ刷毛	有	無	
403	27	4号溝	一括	不明	胴部	－	－	7.5YR7/4 にぶい橙色	角閃石　長石　石英	良好	上位横刷毛後なで 下位縦刷毛後なで	なで	無	無	
403	28	4号溝	P-714	台付鉢	下半	－	－	10YR8/2 灰白色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	なで	なで	無	無	
403	29	4号溝	P-711	高坏	坏部	21.0	－	10YR8/2 灰白色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	なで	なで	無	無	
403	30	4号溝	P-929	高坏	脚部	－	－	10YR7/3 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	柱部ナナメ刷毛　裾部なで	底部なで	無	有	
403	31	4号溝	P-928	高坏	脚部	－	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良	柱部なで　裾部ナナメ刷毛後なで	柱部なで 裾部ナナメ刷毛後なで	無	無	裾部に透し孔５つ
403	32	4号溝	P-531	器台	完形	13.1	17.4	10YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石	良好	上位なで　中位縦刷毛、指押さえ 下位なで	上位なで　下位なで 中位縦方向に指調整、ナナメ刷毛	無	無	橙色の色素が浮かぶ
404	33	4号溝	P-913	甕	上半	35.6	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　長石 角閃石　石英	良好	口頸部、肩部肩部刻目 口縁部ナナメ刷毛後なで 胴部タタキ後ナナメ刷毛	口縁部ナナメ刷毛後なで 胴部ナナメ刷毛	有	有	
405	34	4号溝	P-1044	甕	上半	29.0	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	なで	口縁部横方向のヘラ調整後なで 肩部ナナメ刷毛後なで 胴部ナナメ刷毛	無	有	
405	35	4号溝	一括	甕	上半	22.0	－	10YR5/3 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	口縁部～肩部なで 胴部ナナメ刷毛	口縁部なで　胴部ナナメ刷毛	有	有	
405	36	4号溝	P-927	甕	下半	－	－	10YR7/4 にぶい黄橙色	長石　雲母	良好	胴部ナナメ刷毛　底部～脚台なで	胴部横刷毛　底部なで　脚台なで	有	無	
405	37	4号溝	P-922	甕	脚台	－	－	2.5YR6/8 橙色	赤褐色粒　長石 角閃石　石英	良好	なで	なで	無	有	
405	38	4号溝	P-915	壺	上半	24.6	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口頸部なで　頸部縦刷毛 口縁部上位ナナメ刷毛後なで 胴部タタキ後ナナメ刷毛	口縁部上位なで 頸部横刷毛後なで 胴部ナナメ刷毛	有	有	肩部に２個の貼付 円文が５～６ヶ所

表－9　209番地出土　土器観察表　　その5

図	No.	遺構名	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備考
405	39	4号溝	P-912	壺	下半	－	－	10YR7/3 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良	胴部中位タタキ後ナナメ刷毛 下半は不明瞭	摩滅のため不明瞭	有	有	
405	40	4号溝	P-901	壺	完形	12.5	34.6	7.5YR7/3 にぶい橙色	赤褐色粒　石英　雲母	良好	口唇部、頸部なで　口縁部縦刷毛 頸部縦刷毛　胴部～底部なで	口唇部なで　口縁部横ﾊ家 肩部～底部ナナメ刷毛	有	無	
405	41	4号溝	P-925	壺	上半	18.8	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口唇部なで　口縁部上位縦刷毛後なで 口縁部下位縦刷毛	なで	無	無	
405	42	4号溝	一括	鉢	上半	8.4	－	10YR7/2 にぶい黄橙色	角閃石　長石　雲母	良好	なで	なで	有	無	
405	43	4号溝	P-907	ジョッキ形土器	上端欠	－	－	7.5YR7/3 にぶい橙色	赤褐色粒 角閃石　長石	良好	なで	なで一部刷毛	無	無	
405	44	4号溝	P-900	台付鉢	脚台	－	－	7.5YR7/4 にぶい橙色	角閃石　石英 長石	良	ナナメ刷毛	柱部なで　裾部ナナメ刷毛	無	有	
408	1	5号溝	P-576他	甕	上半	17.0	－	7.5YR4/2 褐灰色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部なで　肩部ナナメ刷毛後なで 胴部ナナメ刷毛	口縁部なで　胴部ヘラ削り	無	有	
408	2	5号溝	P-582	甕	上半	15.6	－	10YR8/2 灰白色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部なで　肩部縦刷毛後なで 胴部刷毛	口縁部なで　胴部ヘラ削り	無	有	
408	3	5号溝	P-580	甕	上半	15.0	－	10YR8/2 灰白色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部なで　胴部ナナメ刷毛	口縁部なで　胴部ヘラ削り	無	有	
408	4	5号溝	P-581	甕	上半	17.2	－	10YR7/3 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	口縁部なで 肩部ナナメ刷毛後なで	口縁部、頸部なで　胴部ヘラ削り	無	無	
408	5	5号溝	P-573	壺	上半	12.8	－	5YR7/6 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	ナナメ刷毛後なで	横刷毛後なで	無	無	
408	6	5号溝	P-883	鉢	上半	13.4	－	2.5YR6/6 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	口縁部、頸部ナナメ刷毛後なで 胴部なで	口縁部なで　胴部ヘラ調整後なで	無	無	
408	7	5号溝	P-583	台付鉢	完形 復元	10.8	8.6	5YR7/6 橙色	角閃石　長石	良好	ヘラ調整後なで	体部ヘラ調整後なで後ヘラ磨き 脚部なで　裾部ナナメ刷毛	無	有	裾部に透し孔3つ
408	8	5号溝	P-881	高坏	坏部	24.1	－	10YR7/4 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	坏部ナナメ刷毛後なで	坏部上位ナナメ刷毛後なで 坏部下位ヘラ磨き	無	有	
410	1	1号住	P-205他	甕	完形	17.1	33.0	10YR3/2 黒褐色	赤褐色粒　長石 石英　雲母	良好	口唇部なで　口縁部タタキ後なで 肩部～胴部タタキ　底部不明瞭	口縁部なで　肩部～胴部ナナメ刷毛	有	有	胴部下半被熱 による剥離が激しい
410	2	1号住	P-204	鉢	完形	12.5	12.8	7.5YR6/2 灰褐色	赤褐色粒　角閃石 石英　雲母	良好	口縁部なで　肩部縦刷毛	摩滅のため不明瞭	有	有	
410	3	1号住	P-214	鉢	完形 復元	12.0	9.7	7.5YR6/3 にぶい橙色	長石　雲母	良好	口縁部なで　胴部ナナメ刷毛 底部なで	なで	有	有	
410	4	1号住	P-203	高坏	坏部	40.4	－	10YR8/2 灰白色	長石　雲母	良好	なで	なで	有	無	
410	5	1号住	P-812	ミニチュア土器（壺）		3.0	5.4	10YR8/3 浅黄橙色	長石　雲母	良好	工具調整	指なで	無	無	
412	1	2号住	P-394	甕	完形	16.5	27.9	10YR7/3 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部～肩部なで 胴部～底部ナナメ刷毛、縦刷毛 脚部縦刷毛	口縁部なで　頸部～胴部ナナメ刷毛 底部指押さえ　脚部不明瞭	有	有	胴部下位に穿孔
412	2	2号住	P-811	甕	口縁部	18.0	－	7.5YR7/3 にぶい橙色	長石　雲母	良好	口唇部なで　口縁部タタキ後なで 頸部なで	口縁部なで　肩部ナナメ刷毛後なで 胴部ナナメ刷毛	無	有	
412	3	2号住	P-145	甕	脚台	－	－	7.5YR7/4 にぶい橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	底部なで　脚部ナナメ刷毛後なで	なで	無	有	
412	4	2号住	P-173	台坏鉢	脚台	－	－	7.5YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	指調整後なで	なで	有	無	
412	5	2号住	P-156	鉢	上半	14.0	－	7.5YR6/6 橙色	長石　雲母	良好	口縁部なで　肩部ナナメ刷毛 胴部なで	口縁部ナナメ刷毛　肩部～胴部なで	有	無	
412	6	2号住	P-159	壺	完形	19.2	－	7.5YR6/6 橙色	角閃石　長石　雲母	良好	口唇部刻目　口縁部粗ナナメ 刷毛後細いナナメ刷毛 頸部なで後ナナメ刷毛、刻目	口縁部なで、横刷毛	無	無	
412	7	2号住	P-168	高坏	坏部	22.0	－	7.5YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部なで 坏部摩滅のため不明瞭	口縁部なで 坏部摩滅のため不明瞭	無	無	
412	8	2号住	P-432	高坏	坏部	21.8	－	10YR7/3 にぶい黄橙色	長石　雲母	良好	口縁部なで　坏部なで	口縁部なで　坏部ナナメ刷毛	無	無	

表－9　209番地出土　土器観察表　　その6

図	No	遺構名	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備考
416	1	2号土坑	一括	甕	上半	13.8	－	10YR8/2 灰白色	長石　雲母	良好	口縁部なで　肩部縦刷毛	なで	無	無	
416	2	2号土坑	一括	高坏	坏部	14.0	－	10YR8/3 浅黄橙色	長石	良好	口縁部なで　坏部指調整？	口縁部なで　坏部刷毛のようななで	無	無	
416	3	2号土坑	一括	甕	上半	20.0	－	10YR6/2 灰黄色	長石　雲母	良好	なで	なで	有	無	
418	1	4号土坑	一括	壺	上半	25.8	－	10YR8/3 浅黄橙色	長石　雲母	良好	口唇部刻目 口縁部横刷毛、縦刷毛	口唇部なで 口縁部横刷毛ナナメ刷毛	無	無	
418	2	4号土坑	一括	壺	上半	15.2	－	10YR7/3 にぶい黄橙色	長石	良好	口唇部なで　口縁部ナナメ刷毛 頸部横刷毛後キザミメ肩部横刷毛	口縁部なで、ナナメ刷毛 肩部ナナメ刷毛	無	無	
418	3	4号土坑	一括	鉢	上半	18.0	－	7.5YR8/4 浅黄橙色	?	良好	口唇部なで 胴部細い縦刷毛、ナナメ刷毛	口縁部なで	無	無	
418	4	4号土坑	一括	高坏	坏部	26.0	－	10YR8/3 浅黄橙色	角閃石　雲母	良好	なで	なで	有	無	
418	5	4号土坑	一括	高坏	坏部	20.0	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　長石 雲母	良好	なで	なで	無	無	
421	1	6号土坑	P-451 他	甕	上半	29.7	－	10YR7/2 にぶい黄橙色	角閃石　長石　雲母	良	口縁部なで 肩部～胴部ナナメ刷毛	口縁部なで 肩部ナナメ刷毛　胴部不明瞭	無	有	
	1	8号土坑	P-562	甕	上半	25.0	－	7.5YR8/6 浅黄橙色	角閃石　長石	良好	なで	口縁部なで　胴部ヘラ削り	無	無	
	2	8号土坑	P-898	甕	口縁部	26.2	－	7.5YR8/4 浅黄橙色	長石　石英	良好	なで	なで	無	無	
	3	8号土坑	P-571	甑	完形	22.0	－	7.5YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	なで	口縁部なで　胴部へら削り	有	有	
428	1	3号焼土		坏	完形 復元	14.0	－	5YR6/6 橙色	赤褐色粒	良好	体部上位なで　体部下位ヘラケズリ	回転なで	無	無	
430	2	4号焼土		甑	完形	22.8	－	7.5YR7/6 橙色	赤褐色粒　長石	良好	口縁部なで　胴部～底部なで 把手指調整	口縁部なで 胴部～底部ヘラ削り後ヘラ磨き	有	無	
428	3	3号焼土		甑	上半	22.0	－	7.5YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	なで	口縁部なで　胴部ヘラ削り	無	有	
428	4	3号焼土		甑	下半	－	－	7.5YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	胴部ナナメ刷毛　底部なで	胴部ナナメ刷毛　底部なで	無	無	
430	1	4号焼土	P-551	甕	上半	21.8	－	7.5YR8/6 浅黄橙色	赤褐色粒　長石	良好	なで	口縁部なで　胴部ヘラ削り	有	無	
430	3	4号焼土		甕	上半	24.0	－	5YR7/6 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	なで	口縁部なで　胴部ヘラ削り	無	無	
430	4	4号焼土		甑	下半	－	－	5YR7/6 橙色	赤褐色粒　長石	良好	なで	ヘラ削り	無	無	
423	1	遺構外 1区	P-184	鉢	完形	16.2	7.1	7.5YR7/3 にぶい橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	なで　胴部～底部工具によるなで	口縁部なで　胴部～底部ヘラ磨き	無	無	
423	2	遺構外 2区	P-344	鉢	上半	18.2	－	7.5YR7/3 にぶい橙色	長石　雲母	良好	なで	なで	有	無	
423	3	遺構外 1区	P-185	鉢	完形	15.6	5.1	10YR7/2 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	口縁部、胴部刷毛後なで	口縁部刷毛後なで後ヘラ磨き 胴部上半なで後ヘラ磨き 胴部下半不明瞭	有	無	
423	4	遺構外 2,3,4区	P-395 他	甕	下半	－	－	10YR7/4 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	なで	口縁部なで　胴部ヘラ削り	無	無	坏蓋を硯に転用
423	5	遺構外 4区	P-265	甕	下半	－	－	10YR6/2 灰黄色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	縦刷毛	胴部縦刷毛　底部なで	無	有	砂型有
423	6	Pit148		壺	口縁部	24.0	－	10YR6/2 灰黄色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口唇部なで　口縁部下位ナナメ刷毛 口縁部上位ナナメ刷毛後なで	口縁部なで　口縁部中位波状文	無	無	
423	7	遺構外 4区	P-263	壺	下半	－	－	10YR7/3 にぶい黄橙色	角閃石　長石　石英	良好	胴部ナナメ刷毛　底部刷毛	ナナメ刷毛	有	無	底部にヘラ記号
423	8	遺構外 5区		器台	完形 復元	12.0	17.0	7.5YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部なで 胴部縦方向にヘラ調整後縦刷毛	口縁部なで、横刷毛 胴部縦方向に指調整後なで 底部細かいナナメ刷毛、横刷毛	無	無	

表－9　209番地出土　土器観察表　　その7

図	No	遺構名	P番号	器　種	部位	口径	器高	色　調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備　考
423	9	遺構外 4区	P-270	器台	下半	－	－	10YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良	ナナメ刷毛　裾部なで	なで	無	無	
423	10	遺構外 2区		ミニチュア 土器（壺）	下半	－	－	5YR5/4 にぶい明赤褐色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	肩部波状文　胴部ヘラ磨き	なで	無	無	
423	11	遺構外 2区		手づくね 土器（鉢）	完形 復元	4.0	3.9	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	ヘラ削り	なで	無	無	
423	12	遺構外 2区		手づくね 土器（甕）	完形	3.9	4.9	10YR8/2 灰白色	角閃石　長石　石英	良好	口縁部、底部なで　胴部縦刷毛	なで	有	無	
423	13	遺構外 1区	P-189	台付鉢	体部	－	－	5YR6/8 橙色	赤褐色粒　石英	良好	胴部上半なで 胴部下半ヘラ磨き、波状文	ナナメ刷毛	有	無	
423	14	遺構外 2区		台坏鉢	脚台	－	－	10YR8/2 灰白色	角閃石　長石　石英	良好	柱部上位、裾部なで 柱部中位縦刷毛	柱部横方向のヘラ調整　裾部なで	無	無	裾部に透し孔4つ
423	15	遺構外 1区	P-219	台付鉢	下半	－	－	5YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 長石	良好	柱部なで　裾部上位縦刷毛	なで	有	無	
423	16	遺構外 5区		土製ス プーン	完形	－	－	10YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒　長石 石英　雲母	良好	指調整	指調整	無	無	
431	1	遺構外 1区	P-29	坏	完形	13.5	3.0	7.5YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒　長石 石英　雲母	良好	なで	なで	無	無	土師器
431	2	遺構外 2区		坏	完形	13.0	4.0	7.5YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石	良好	口縁部なで　胴部～底部ヘラ削り	なで	無	無	化粧土あり？土師器
431	3	遺構外 4区	P-264	坏	完形 復元	12.8	2.7	5YR7/6 橙色	赤褐色粒　長石	良好	なで	なで	無	無	土師器 底面に粘土粗の痕
431	4	遺構外 4区	P-541	鉢	完形 復元	13.6	10.7	10YR6/3 にぶい黄橙色	角閃石　長石　石英	良好	なで	口縁部なで　胴部ヘラ削り	無	有	
431	5	遺構外 3区	P-72	鉢	完形 復元	25.6	7.3	7.5YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 長石	良好	なで	上半なで　下半ヘラ削り	有	有	土師器
431	6	遺構外 3区	P-72	甕	上半	28.0	－	5YR7/6 橙色	赤褐色粒　長石 石英	良好	なで	口縁部なで　胴部ヘラ削り	有	無	土師器
431	7	遺構外 1区		坏蓋	完形 復元	13.6	2.2	N6/ 灰色		良好	なで	なで	無	無	須恵器
431	8	遺構外 2区		碗	完形 復元	13.4	4.2	2.5Y R7/1 灰白色	角閃石　石英 長石	良好	なで	なで	無	無	須恵器
431	9	遺構外 3区		坏	完形	13.1	4.3	2.5Y5/2 暗灰黄色	長石	良好	なで　底部ヘラ削り	なで	無	無	自然釉あり
431	10	遺構外 2区		壺	下半	－	－	2.5Y R6/2 黄灰色	赤褐色粒　長石	良好	なで　底部ヘラ削り	なで	無	無	須恵器
431	11	遺構外 2区	P-37	碗	下半	－	－	2.5Y R6/1 黄灰色		良好	なで	なで	無	有	須恵器
431	12	遺構外 5区		碗	下半	－	－	N4/ 灰色	細かい	良好	なで　体部下位ヘラ削り	なで	無	無	須恵器
431	13	遺構外 5区		坏	完形 復元	15.2	1.8	N6/ 灰色	長石	良好	なで	なで	無	無	須恵器
431	14	遺構外 5区		碗	上半	16.0	－	10YR6/2 灰黄色	細かい	良好	なで　体部下位ヘラ削り	なで	無	無	須恵器 高台の剥離痕
431	15	遺構外 5区		碗	上半	17.0	－	N6/ 灰色	細かい	良好	なで	なで	無	無	須恵器
431	16	遺構外 2区	P-361	転用硯	完形	15.9	2.5	5PB6/1 青灰色	長石	良好	なで	なで	無	無	
431	17	遺構外 4区	P-255 他	壺	胴部	－	－	2.5Y5/2 暗灰黄色	長石	良好	なで	肩部なで 胴部タタキ後なで	無	無	須恵器

表－10　196-1番地出土　土器観察表　　その1

図	No.	遺構名	P番号	器種	部位	口径	器高	色調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備考
1	4	溝	P-183	碗	下半	－	－	10YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石　石英	良好	なで	底部ヘラ磨き　高台なで	無	無	黒色土器
1	3	溝	P-184	壺	頸部	－	－	N6/　灰色	赤褐色粒　黒い粒	良好	なで	頸部なで　肩部タタキ後なで	無	無	須恵器
438	1	土坑		高坏	口縁部	30.0	－	10YR5/1 褐灰色	角閃石　長石　石英	良好	なで	口唇部なで　坏部ナナメ刷毛	無	無	
435	1	道路		甕	上半	19.2	－	2.5Y2/1 黒色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	口縁部なで　肩部縦刷毛後なで 胴部縦刷毛	口縁部なで　胴部刷毛	無	有	
435	2	道路	P-177	甕	下半	－	－	N1.5/　黒色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	胴部タタキ後刷毛 胴部～底部ナナメ刷毛	ナナメ刷毛	有	無	
443	1	焼土	P-181 他	甕	上半	25.0	－	10YR6/3 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	なで	口縁部なで　胴部ヘラ削り	有	無	土師器
443	4	焼土	P-1	甕	完形 復元	17.0	12.7	7.5YR6/3 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	なで	口縁部なで　胴部ヘラ削り	無	有	土師器
443	3	焼土	P-14	甕	上半	20.0	－	10YR1.7/黒色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	なで	口縁部なで　胴部ヘラ削り	無	有	土師器
443	2	焼土	P-2	甕	上半	25.0	－	5YR7/6 橙色	角閃石　長石　石英	良好	なで	口縁部なで　胴部ヘラ削り	無	無	土師器
443	6	焼土	P-2	甕	上半	27.0	－	7.5YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	なで	口縁部なで　胴部ヘラ削り	無	無	土師器
443	7	焼土	P-11	甕	上半	19.0	－	5YR6/6 橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	なで	口縁部なで　胴部ヘラ削り	無	有	土師器
443	8	焼土	P-181	甕	上半	30.0	－	5YR6/6 橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	なで	口縁部なで　胴部ヘラ削り	無	有	土師器
443	9	焼土	P-181	甕	上半	28.0	－	5YR7/6 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	なで	口縁部なで　胴部ヘラ削り	無	有	土師器
443	10	焼土	P-181	甕	上半	30.0	－	7.5YR7/6 橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	なで	口縁部なで　胴部ヘラ削り	無	有	土師器
443	5	焼土	P-6 他	甕	底部	－	－	5YR7/4 にぶい橙色	角閃石　長石　石英	良好	なで	ヘラ削り	無	有	土師器
443	12	焼土	P-181	甑	下半	－	－	7.5YR8/6 浅黄橙色	角閃石　長石 石英　雲母	良好	なで	胴部ヘラ削り　底部なで	有	有	土師器
443	11	焼土	P-10	甕	上半	24.0	－	5YR7/6 橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良好	なで	口縁部なで　胴部ヘラ削り	無	有	土師器
441	1	3区	P-4 他	壺	上半	21.6	－	10YR7/3 にぶい黄橙色	角閃石　長石	良好	口唇部なで　口縁部ナナメ刷毛 肩部刻目文　胴部タタキ後ナナメ刷毛	なで	無	有	
1	1	溝	一括	壺	上半	19.0	－	N6/　灰色	多量の長石	良好	口唇部凹線文　口縁部斜沈線　なで	なで	無	無	須恵器　自然釉有
1	2	溝	一括	壺	上半	24.0	－	N2/　黒色	多量の長石	良好	なで	なで	無	無	須恵器　自然釉有
1	5	溝	一括	壺	下半	－	－	2.5Y R6/1 黄灰色	長石　黒い粒	良好	なで	なで	無	無	須恵器
6	2	遺構外3区	P-113	甕	口縁部	35.0	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	なで	なで	無	無	甕棺
440	1	遺構外3区	P-124	甕	口縁部	40.0	－	10YR8/4 浅黄橙色	角閃石　長石　石英	良好	なで	なで	無	無	甕棺
440	3	遺構外3区	P-172	甕	ほぼ完形	25.0	38.5	10YR7/3 にぶい黄橙色	角閃石　長石　石英	良好	肩部～胴部上位タタキ 胴部下半～底部タタキ後刷毛	不明瞭	有	有	
440	4	遺構外3区	P-176 他	壺	上半	16.7	－	10YR7/3 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口唇部なで　頸部刻目 口縁部ナナメ刷毛後一部なで	口唇部なで 口縁部～胴部ナナメ刷毛	有	無	
440	5	遺構外3区	P-33	壺	口縁部	39.6	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口縁部斜格子文、刻目文 頸部縦刷毛後なで	口唇部横刷毛後なで 口縁部ナナメ刷毛後なで	無	無	
440	10	遺構外3区	P-110	壺	口縁部	23.4	－	10YR8/3 浅黄橙色	角閃石　長石　雲母	良好	なで 口唇部下刻目	なで	無	無	
440	13	遺構外3区	P-49	壺	口縁部	16.0	－	10YR8/4 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	口縁部なで　肩部ナナメ刷毛	口縁部なで 肩部ナナメ刷毛	無	有	
440	9	遺構外3区	P-71	壺	口縁部	19.8	－	10YR7/4 にぶい黄橙色	角閃石　長石　石英 雲母	良好	口唇部凹線文　口縁部なで	口縁部なで	無	無	
440	15	遺構外3区	P-56	壺	口縁部	16.0	－	7.5YR7/4 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	口唇部刻目　口縁部ナナメ刷毛、なで 頸部なで後押圧文	口縁部なで 他は不明瞭	無	無	

表－10　196-1 番地出土　土器観察表　　その 2

図	No.	遺構名	P番号	器　種	部位	口径	器高	色　調	胎土	焼成	外器面調整	内器面調整	黒斑	煤	備　考
440	16	遺構外3区	P-173	壺	口縁部欠	－	－	10YR7/4 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	頸部～肩部なで 胴部ヘラ調整後なで	頸部なで　肩部ナナメ刷毛	無	無	
440	12	遺構外3区		ジョッキ形土器	下半	－	－	7.5YR6/4 にぶい橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	胴部ハケ調整 胴部下位なで	胴部ナナメ刷毛 底部なで	無	無	把手ではなく、２本の縦方向の突帯
440	14	遺構外3区		壺	下半	－	－	7.5YR5/3 にぶい褐色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英	良	胴部上位なで	なで	無	無	
440	7	遺構外3区	P-68	ミニチュア土器（甕）	下半	－	－	10YR7/3 にぶい黄橙色	角閃石　長石　雲母	良好	なで	胴部横刷毛　底部、脚台なで	無	無	
440	6	遺構外3区	P-136	台付鉢	下半	－	－	10YR8/3 浅黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	なで後斜め方向のへら磨き	なで	無	無	
440	8	遺構外3区	P-70	高坏	坏部	28.0	－	5YR6/6 橙色	角閃石　長石　石英 雲母	良	横刷毛後なで	口縁部なで 坏部横刷毛後ヘラミガキ	無	無	
440	11	遺構外3区	P-14	器台	中位	－	－	10YR7/4 にぶい黄橙色	赤褐色粒　角閃石 長石　石英　雲母	良好	上半縦刷毛後なで 下半縦刷毛	上半なで 下半ヘラ調整後なで	無	無	

第９章　特殊な遺物

第１節　９年度出土の遺物（第448～452図）

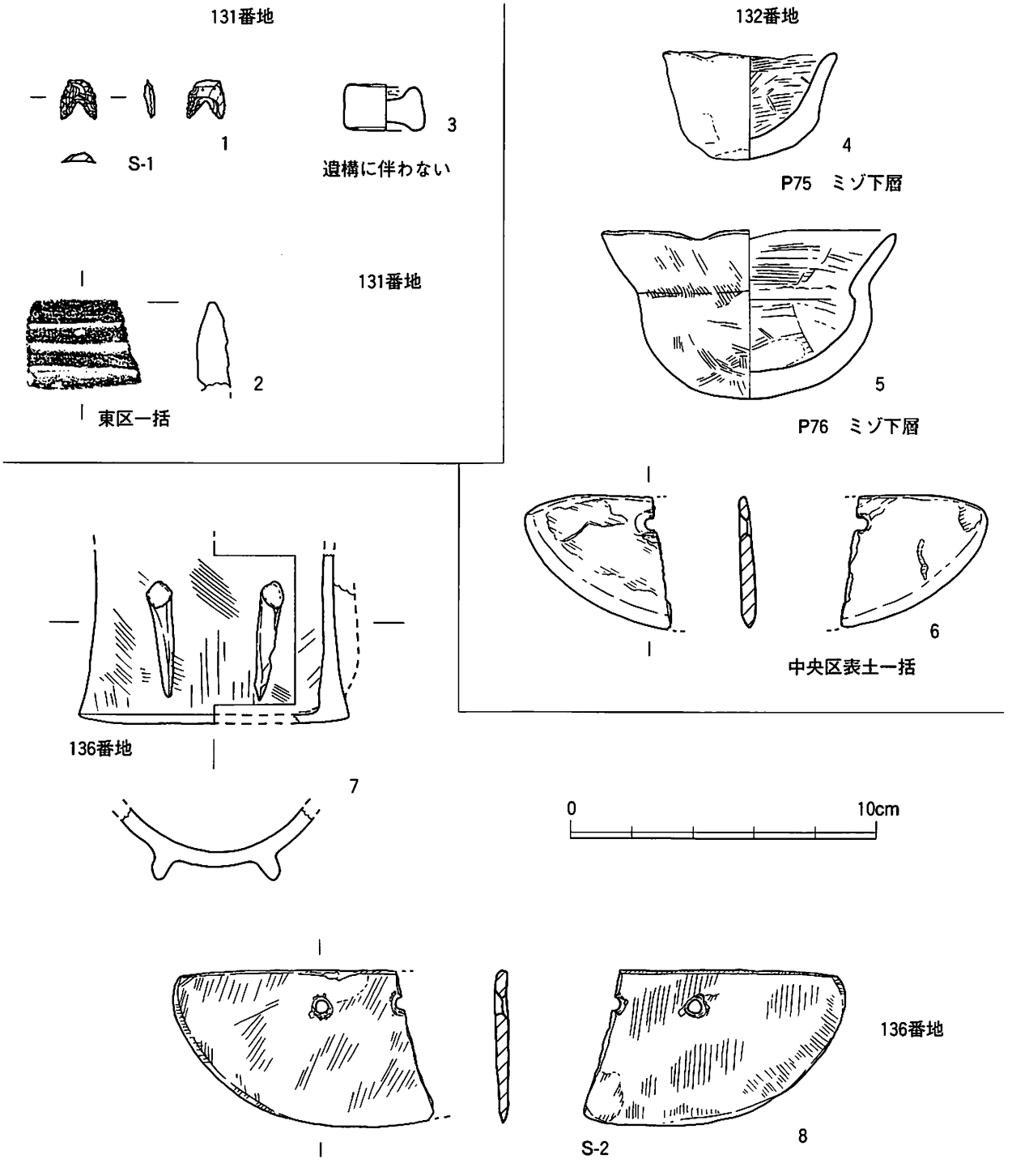
１　131番地出土の遺物（第448図）

１は黒曜石製の剥片を利用した石鏃で裏面に主要剥離面を残し先端を欠損している。

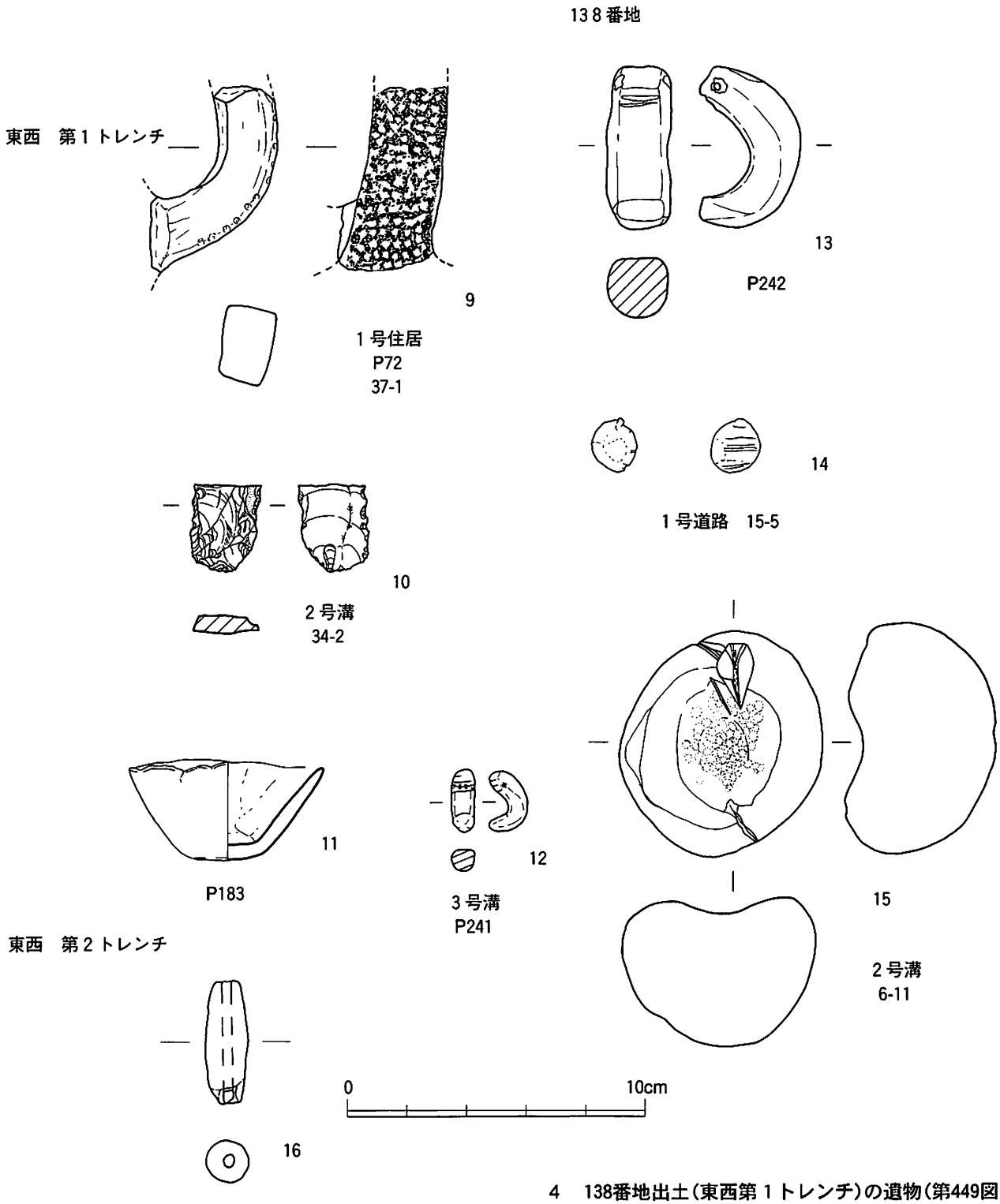
２は縄文式土器で鉢の口縁部である。３本の沈潜をめぐらしている。３は耳栓状土製品である。

２　132番地出土の遺物（第448図）

４（Ｐ－75）と５（Ｐ－76）は溝下層から出土した手捏土器である。６は石包丁の破片で穿孔部から折れている。



第448図　特殊な遺物実測図①



第449図　特殊な遺物実測図②

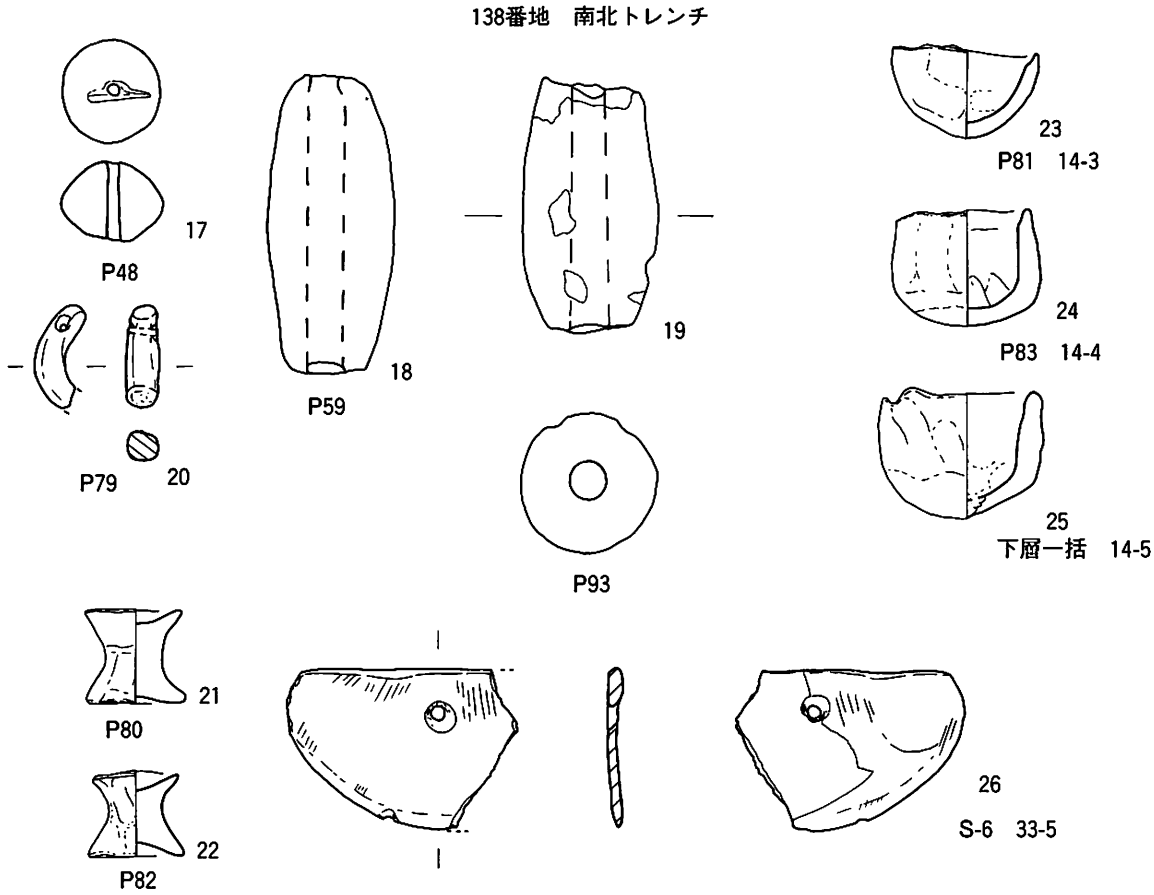
3　136番地出土の遺物（第448図）

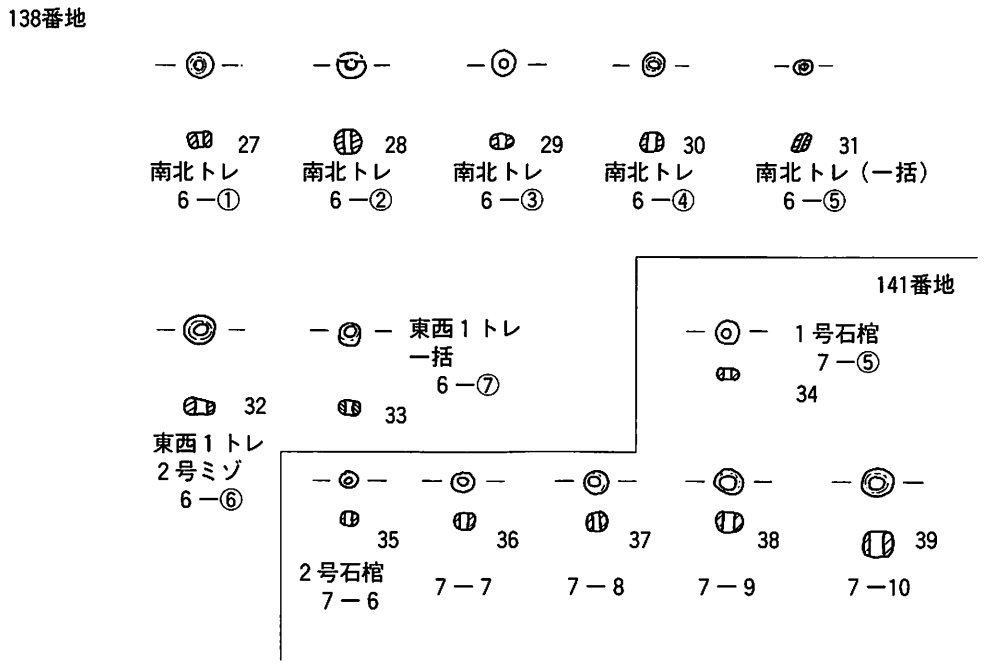
7はジョッキ形土器の破片で2本の凸帯が平行に立ち上部を欠いているが横に張り出して繋がり把手となる。8（S－2）は石包丁の破片である。32は2号溝出土のガラス製小玉で33もガラス製小玉である。

4　138番地出土（東西第1トレンチ）の遺物（第449図）

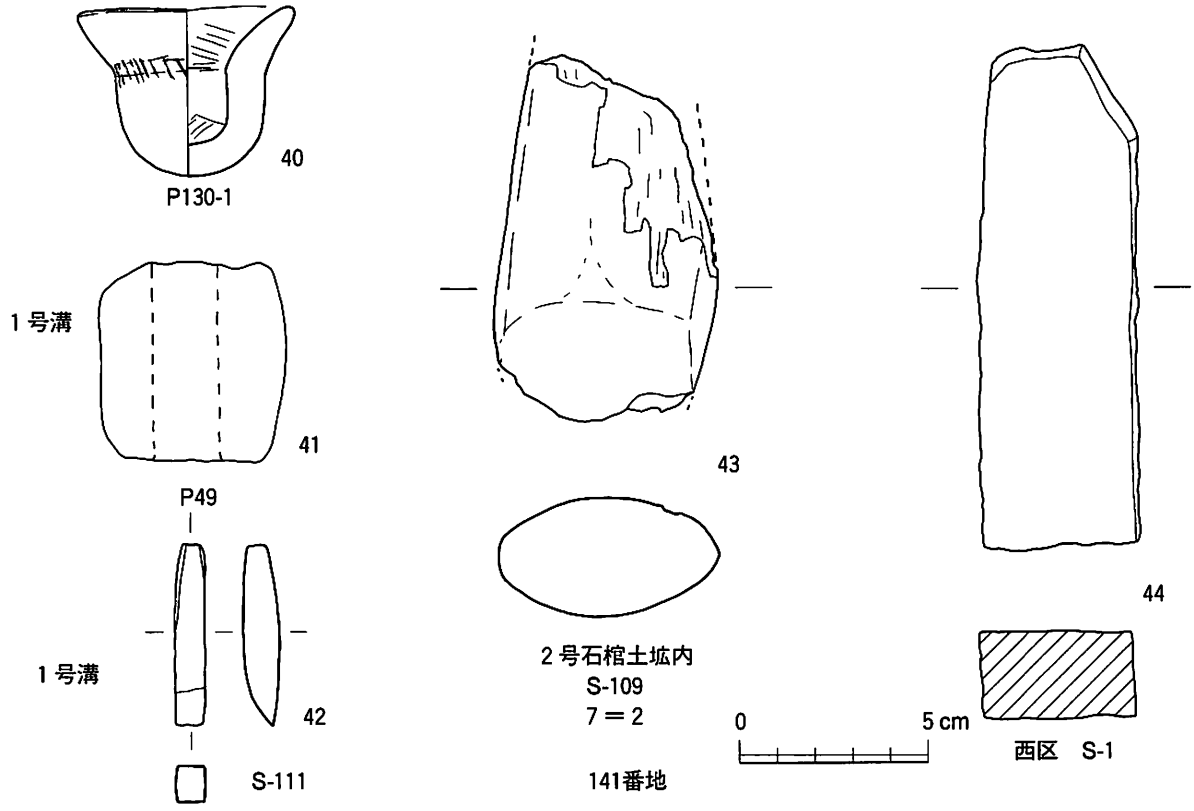
9は1号住居出土のジョッキ形土器の把手である。下半分しか残ってないが表面には刺突文による施文を行っている。10は2号溝から出土した黒曜石の剥片で使用痕を残している。11は手捏土器で12は小型の土製勾玉である。13は大型の土製勾玉で14は円形貼付文の剥離したものである。15は切り傷を持つ石である。16は第2トレンチ出土の土錘である。

5　138番地出土（南北トレンチ）の遺物





第450図　138番地出土の特殊な遺物実測図③



17は土製玉で算盤状を呈している。18（P－59）と19（P－93）は大型の土錘である。20（P－79）は土製勾玉で先端を欠いている。21（P－80）と22（P－82）は手捏の器台である。3と共通している形状である。23（P－81）24（P－83）25は手捏土器の鉢である。26（S－6）は石包丁の破片である。27～31はガラス製小玉である。

6　141番地出土の遺物（第451図）

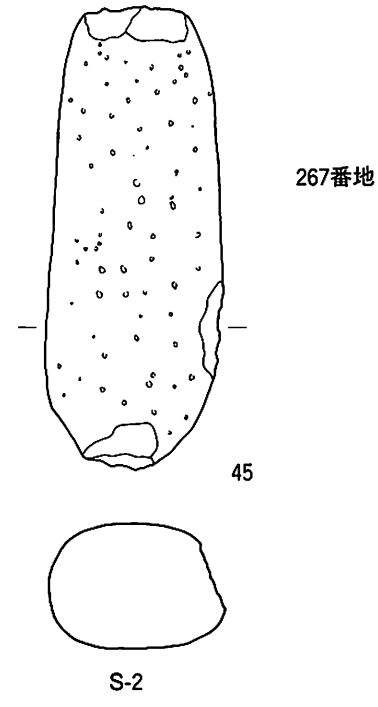
34は1号石棺出土、35～39は2号石棺出土のガラス製小玉である。40（P－130）は手捏土器で、41（P－49）は大型の土錘である。42（S－111）は小型の石ノミである。43（S－109）は2号石棺土坑内出土の石斧で両端を欠いている。44は砥石である。

7　267番地出土の遺物（第451図）

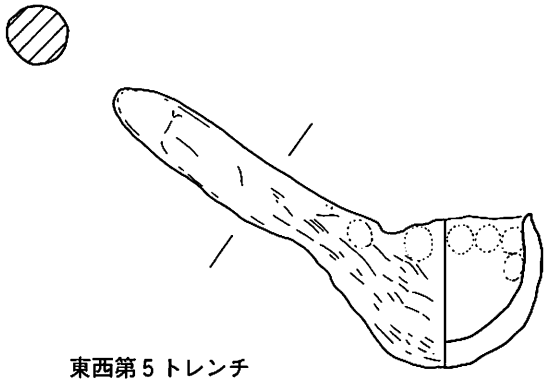
45（S－2）は自然石を利用しており両端を敲打によって使用されたもので、破損が著しい。

8　268番地出土の遺物（第452図）

46と47は東西第5トレンチ出土で46（P－1）は土

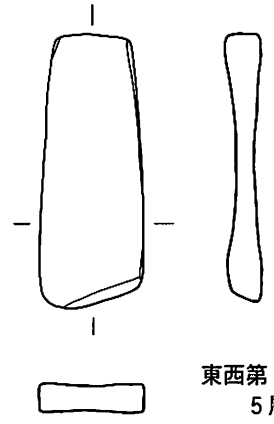


第451図　特殊な遺物実測図④



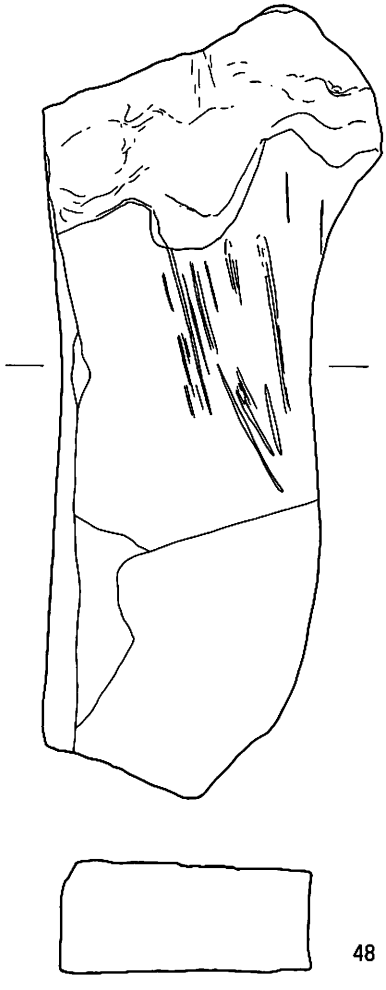
東西第5トレンチ
P-1

46



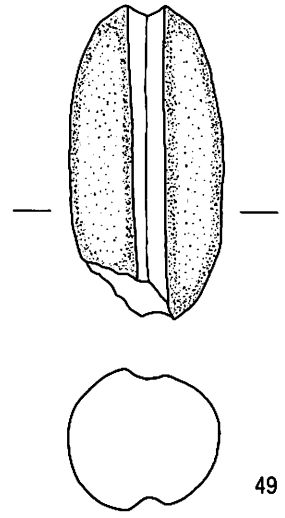
47

東西第5トレンチ
5層一括



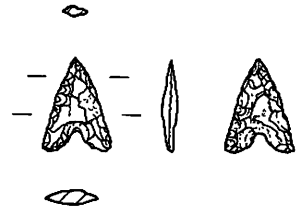
48

南北トレンチ
S-1



南北トレンチ
S-4
13-2

49

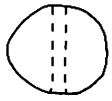


50

廃土中

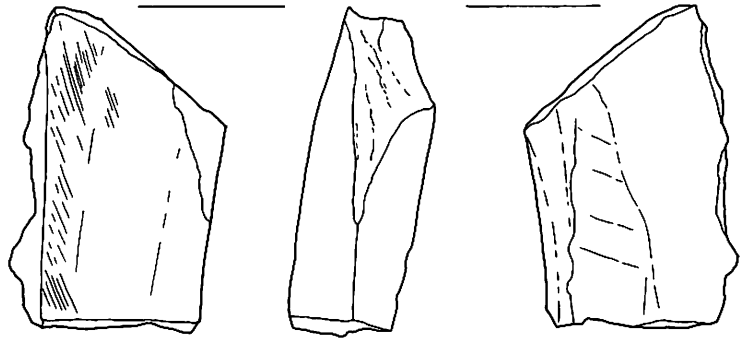
0 10cm

第452図　268番地出土の特殊な遺物実測図⑤



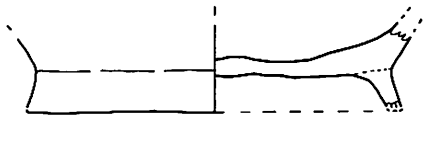
1

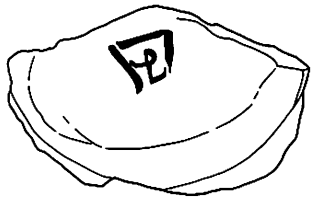
2号住居
P-7
16-3



2

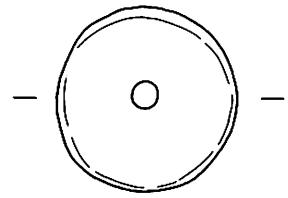
第2トレンチ　2号住居　P-3
64-1





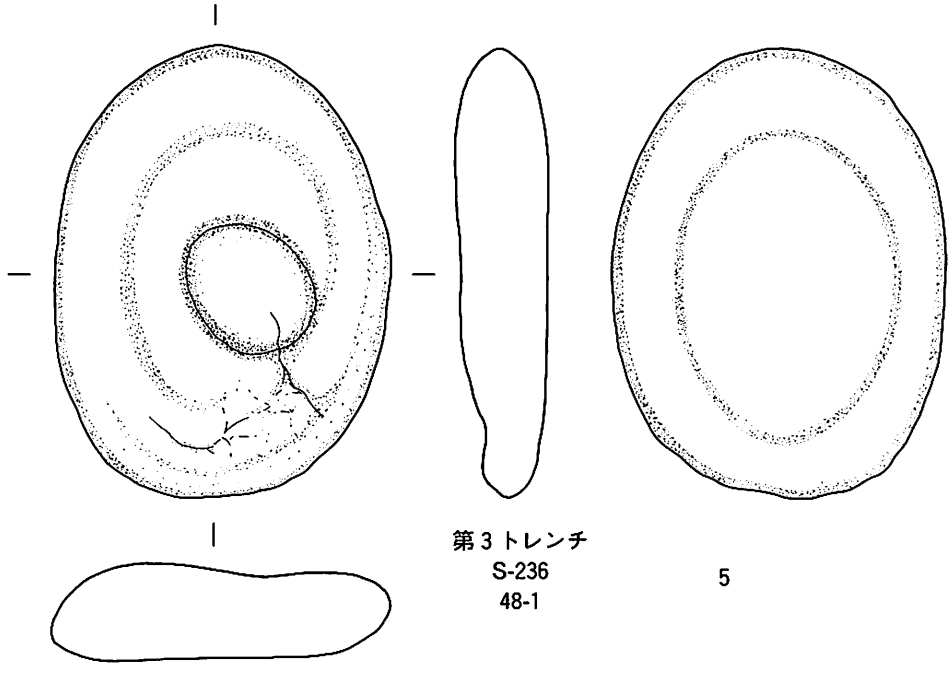
3

第2トレンチ
西区一括
9-4



4

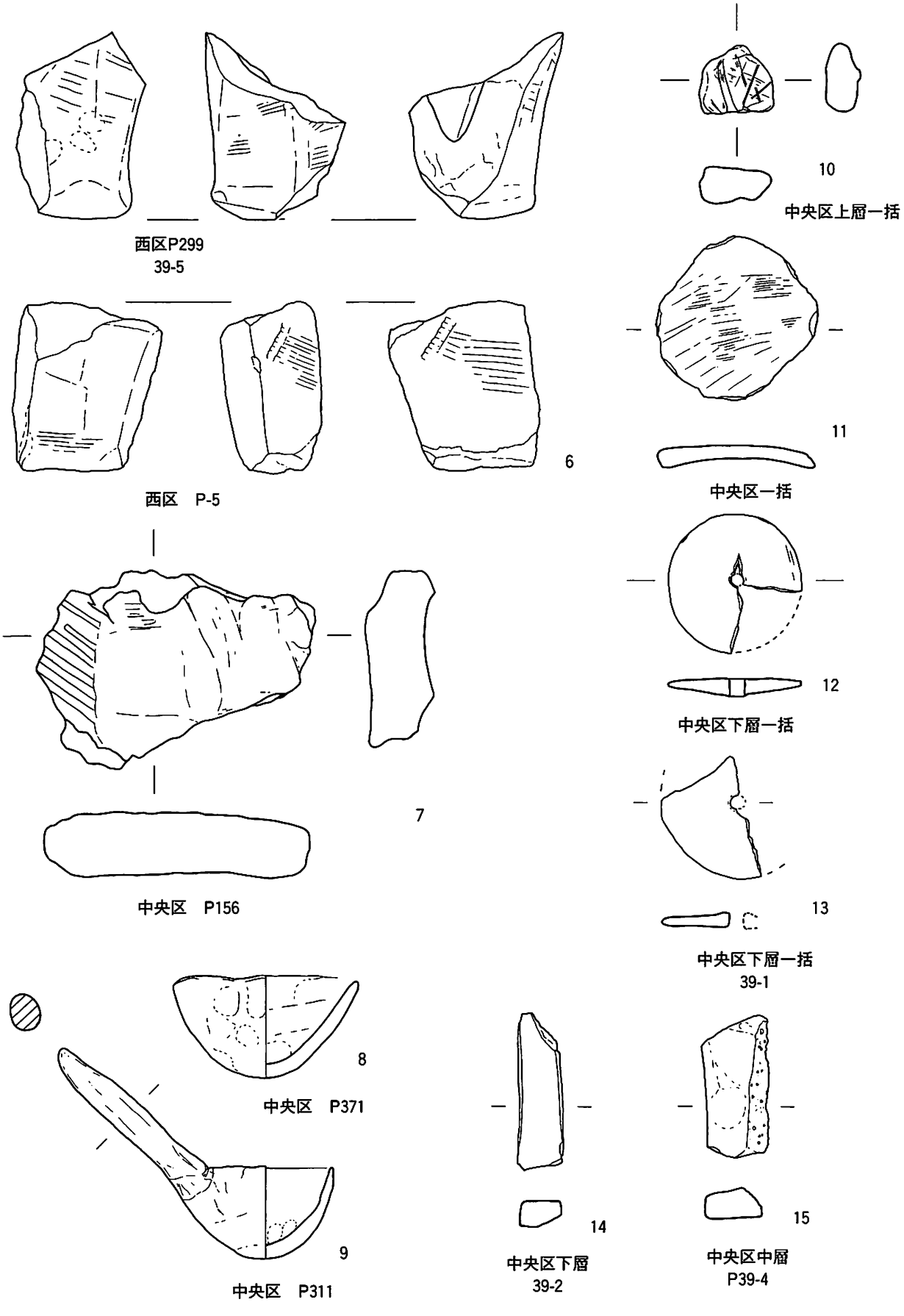
第3トレンチ
9-2



第3トレンチ
S-236
48-1

5

第453図　特殊な遺物実測図⑥



第454図　816・817番地出土の特殊な遺物実測図⑦

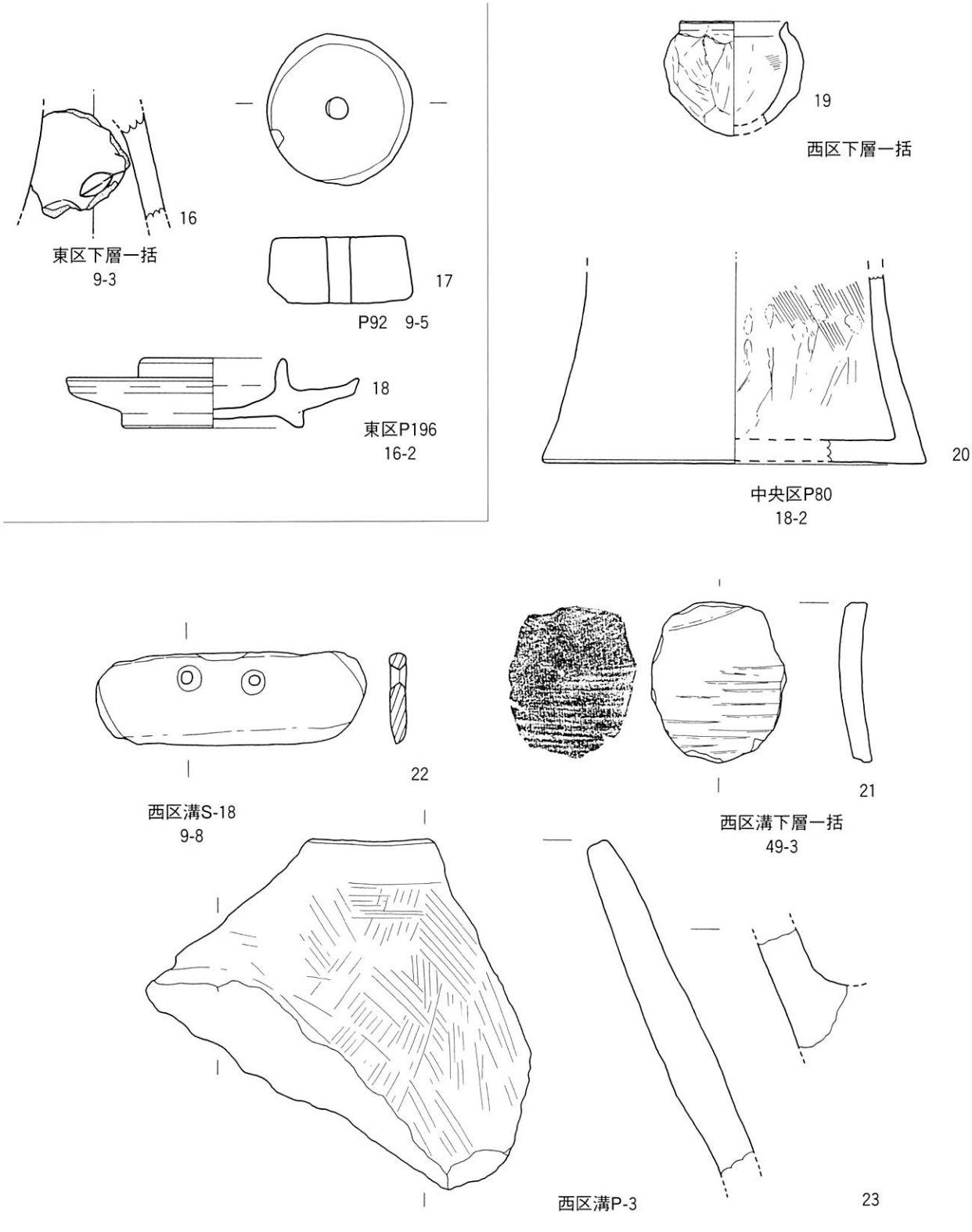
製スプーンの完形品で、47は小型の砥石である。

48～50は南北トレンチ出土で48（S－1）はかなり使い込んだ砥石で、49（S－4）は縦長に切り込みを入れた石錘である。50は黒曜石製の石鏃である。

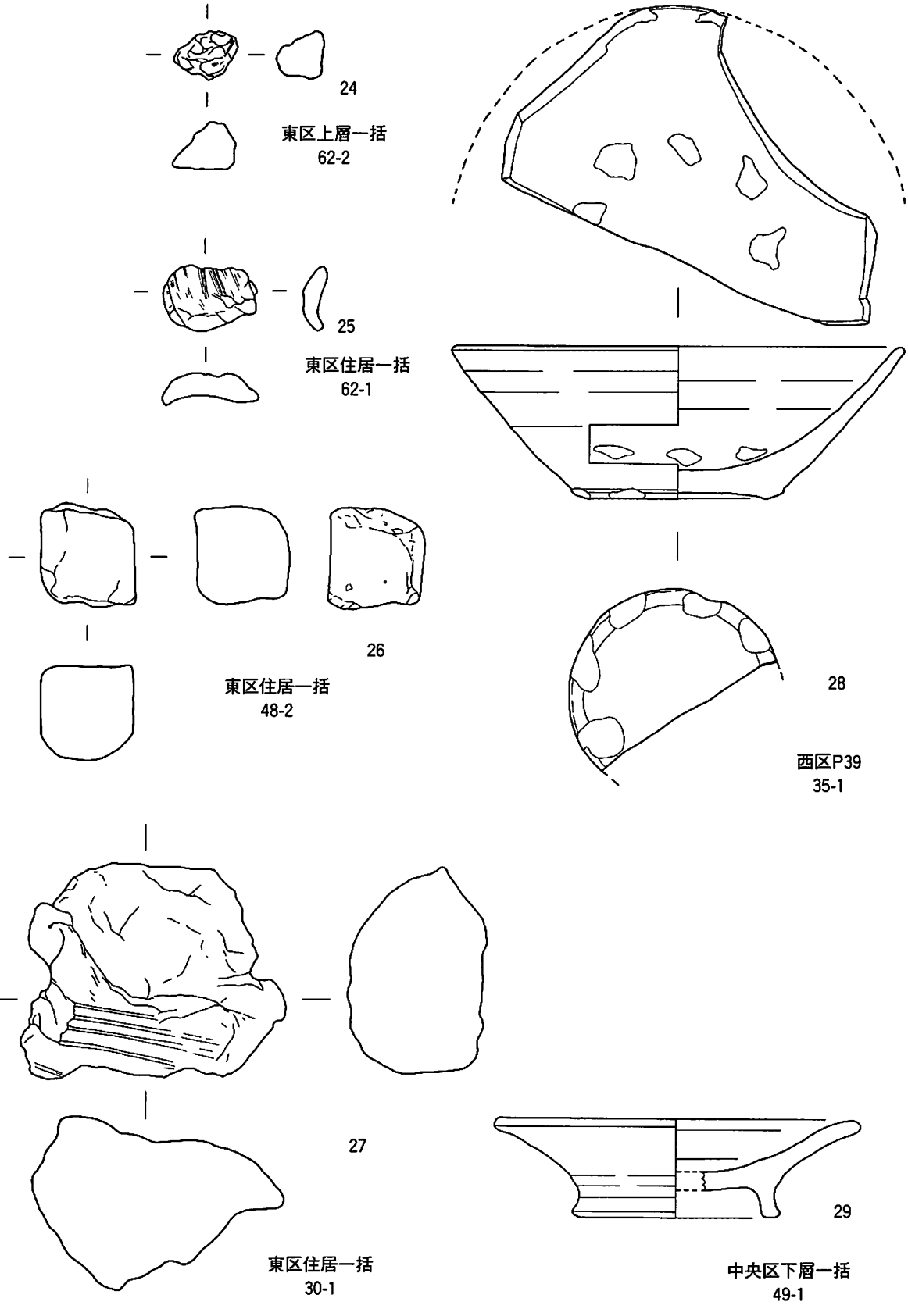
第2節　10年度出土の遺物（第453～457図）

1　814番地出土の遺物（第453図）

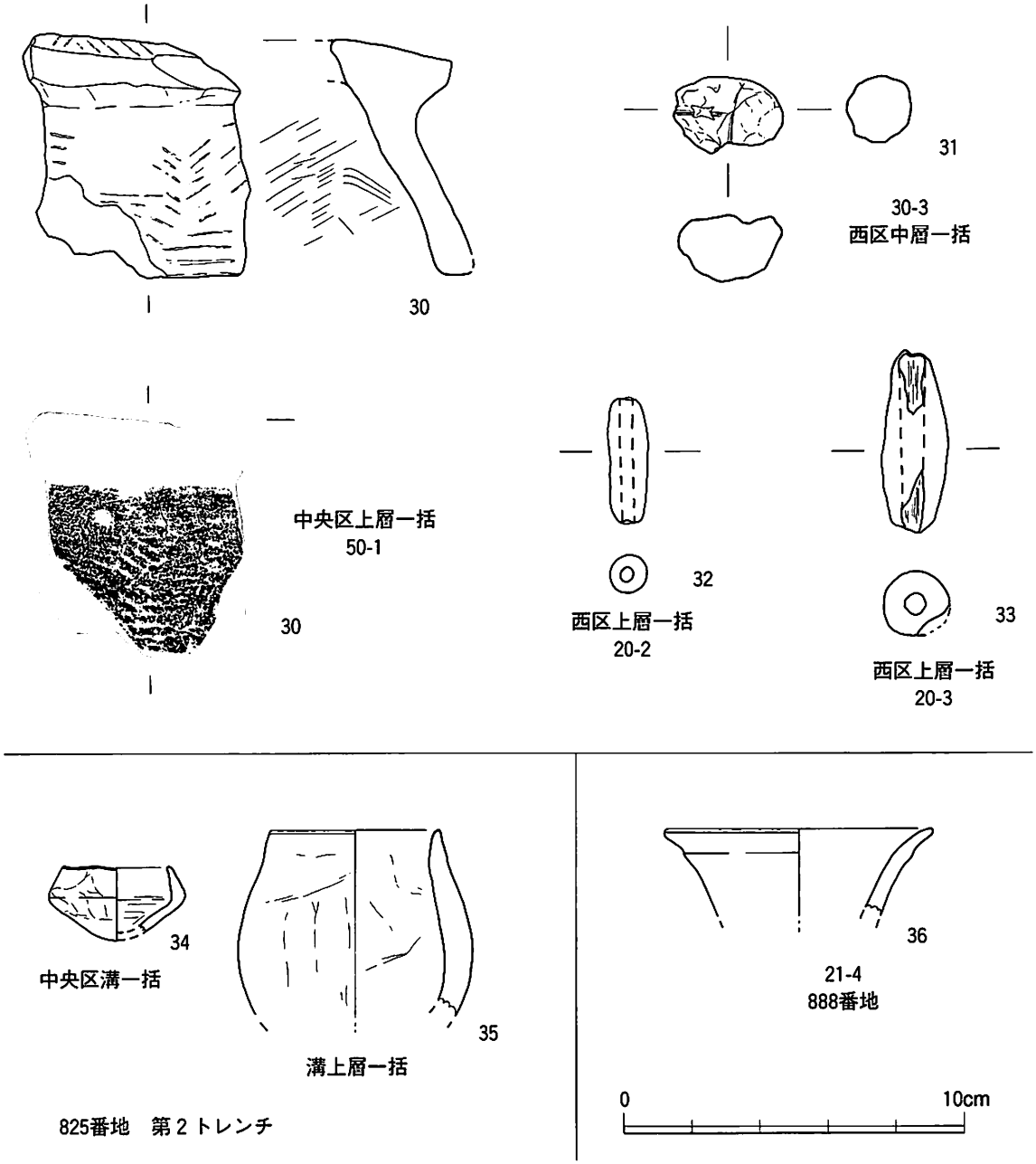
1～3は第2トレンチ出土、4～5は第3トレンチ出土である。1（P－7）は土製玉で、2（P－3）



第455図　特殊な遺物実測図⑧



第456図　821番地出土の特殊な遺物実測図⑨



第457図　特殊な遺物実測図⑩

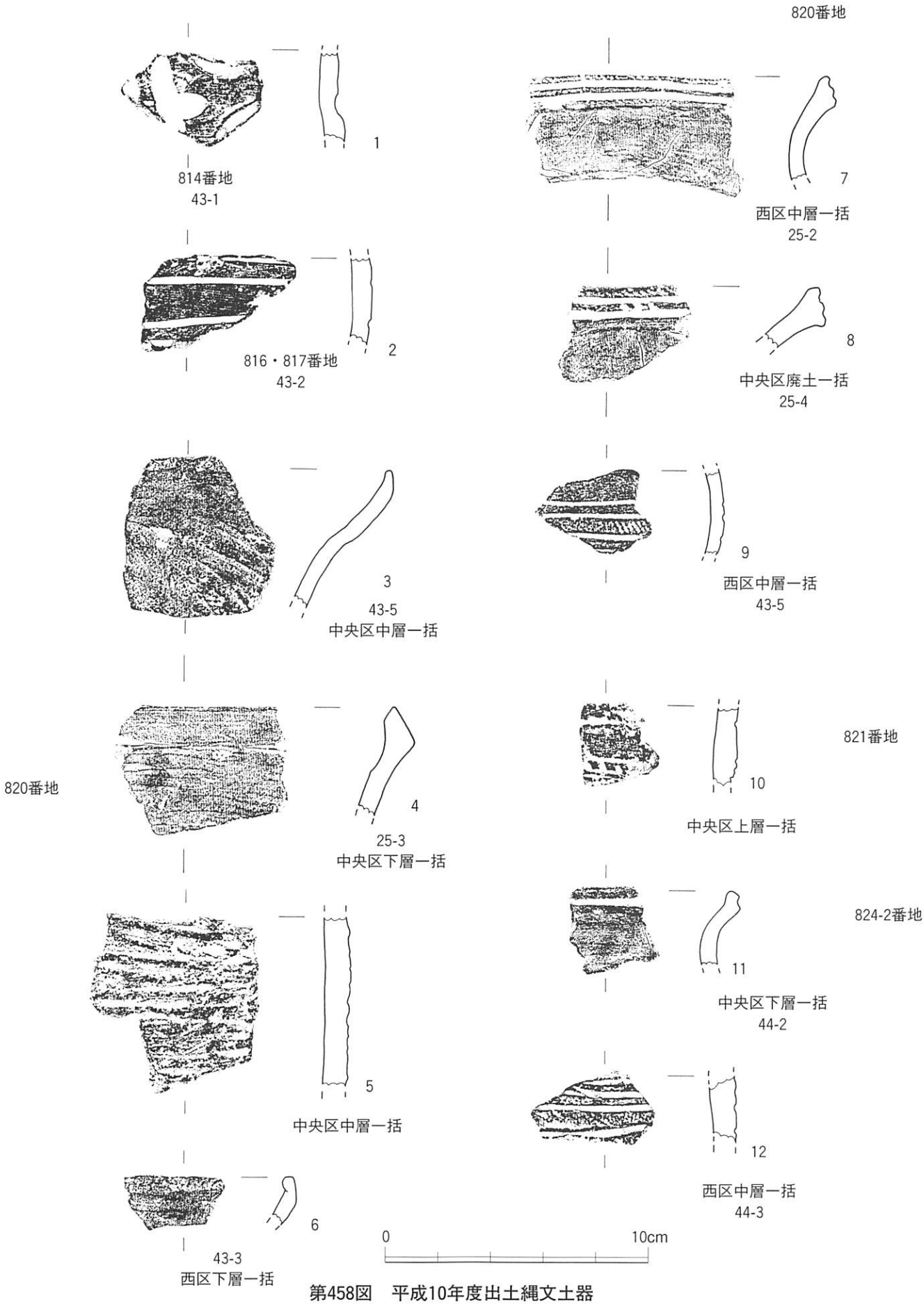
は移動式竈の破片である。３は土師の皿であるが底部に墨書で「田」と書いている。筆順を見てもかなり手馴れた人の手によるもののようだ。４は蛇文岩の紡錘車である。５（Ｓ－236）自然礫であるが表面に朱を塗っているものである。

２　816・817番地出土の遺物（第454・455図）

６（Ｐ－229）は土製品ではあるが脚部か手捏の一部か判断できなかった。表面には火を受けて痕跡があり、内部が中空になっていることから少なくとも把手にはならないようである。７は不整形の粘土版で時期、形状不明である。

８（Ｐ－371）は手捏の土器で、９（Ｐ－311）は土製土製スプーンの完形品である。10は焼成粘土塊で表面には植物繊維の圧痕を残している。11はメンコ状土製品で土器片の周囲をメンコ状に打ち欠いたものである。12と13は土製の紡錘車である。14と15は小型の砥石である。

16は木の葉模様を描いた土器片である。残念ながら全容はわからない。17（Ｐ－92）は土製の紡錘車である。18は土師の托形土器である。



第458図　平成10年度出土縄文土器

3　820番地出土の遺物（第455図）

19は手捏のミニチュア土器である。20（P－80）はジョッキ形土器の破片である。21はメンコ状土製品である。22（S－18）は完形の石包丁である。23（P－3）は移動式竈の破片である。

4　821番地出土の遺物（第456図）

24と25は焼成粘土塊である。26は砥石である。

27も焼成粘土塊で大型のものである。28は越州窯青磁である。半分程度であるがしっかりとした焼きである。29は土師器の高台付皿である。

5　824-2番地出土の遺物（第457図）

30は沓形器台の破片である。31は焼成粘土塊である。32と33は土錘である。

6　825番地出土の遺物（第457図）

34は手捏のミニチュア土器である、35も手捏土器である。

7　888番地出土の遺物（第457図）

36は青磁の破片である。壷口縁部と思われる。

第3節　縄文式土器（第458図）

1は814番地出土の阿高式土器の破片である。2と3は816・817番地出土で2は沈線と磨り消し縄文が見られる。3は深鉢の口縁部である。4～9は820番地出土で4と5は素文の深鉢、6は浅鉢片、7～9は鉢の口縁部と胴部である。

10は821番地出土で11と12は824-2番地出土である。多くは縄文後期から晩期にかけての土器であり、10年度調査区に集中して出土している。

第4節　内面朱塗り土器について

（図版PL.13＝4～8）

今回の調査では散発的に内面朱塗り土器が出土している。すべて破片であるが当該年度では総数33点を数え、そのうち別府大学本田光子教授に分析していただき朱が17点、ベンガラ16点であった。また、出土地点に集中した部分が見られ、特に84-2番地では朱11点、ベンガラ4点を出土している。これまでの調査でも大道農協では大型鉢の内面に全面付着した朱が残されており、直線距離でも100mも離れておらず、方保田東原遺跡において赤色顔料の生産流通に深く関わっていた事を物語っている。写真・の石杵は表採資料であるが、水銀朱精製の際使用される特殊なものであり、古墳時代の棒状石杵と称されるもので九州内はもとより兵庫県以西では初の発見である。註1

残念ながら表採のため具体的な遺構が見えないが、他の資料からもこの遺跡において朱およびベンガラの生産と流通に関わっている事が容易に推察される。

第10章　総括

平成8年度から12年度まで主にトレンチにより遺跡の広がりと遺構の密度を中心に調査をおこなってきた。大きな目標であった管理センター下で検出された大溝の行方も明確に把握できなかったが、より多くの情報が得られた。

ここでは遺構の時期についてこれまでの調査成果に基づき甕の形態や土器の特徴から大きく9期に位置づけることとした。

遺構の時期は別表1に示しているとおりであるが、基本的には1、土器の形式による時期の決定、2、遺構の切り合いによる前後関係、の2点で遺構の時期を明らかにしたのが表2である。残された課題はそれぞれの遺構に伴う遺物の比較検討を行って方保田東原遺跡における時間軸と土器形式の変遷を明らかにすることである。

併せて、外来系土器が多く見られ特に出雲、近畿地方との交流を示す土器が出土しており、どの段階で搬入されたかが明らかにしなければならない。このことは方保田東原遺跡の主たる生産物との関係にも深く関わってくるものと考えられる。先に述べた朱やベンガラを中心とした赤色顔料の生産と流通に関わったことや、鉄器の生産などが経済の核となったものと考えられる。

さらに青銅鏡や祭祀土坑が確認されたことで祭祀関連区域を想定でき、119番地3号住居では土器の生産に関わる遺構と判断された。

熊本県内の遺跡において方保田東原遺跡のように継続的に生活した痕跡を残す遺跡は見られず地理的要因のみならず、生産基盤の強さに起因するものと考える。このことは遺跡の優位性を示すものとして理解できる。

表－11　遺構の時間的位置付け一覧表　その1

年度	地番	調査区	遺構	時間的位置								
				1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	9期
平成8年度	84-2		1号住居	○								
			2号住居		○							
			1号土壙									
			2号土壙									
			溝状遺構				○	○	○			
	119		1号住居			○						
			2号住居									
			3号住居						○			
			4号住居									
			5号住居									
			6号住居									
			7号住居					○	○			
			8号住居									
			9号住居	○								
			10号住居					○	○			
			11号住居									
			12号住居									
			13号住居				○					
			14号住居					○				
			15号住居					○	○			
			16号住居				○					
			17号住居			○						
			18号住居									
			19号住居									
			20号住居									
			1号土壙						○			
			2号土壙									
			3号土壙									
			4号土壙									
			5号土壙									
			6号土壙									
			7号土壙（欠番）									
			8号土壙									
			9号土壙									
			10号土壙									
			11号土壙									
			12号土壙									
			13号土壙									
			14号土壙									
平成9年度	131	東西トレンチ	1号住居									
			2号住居						○			
			3号住居				○					
			4号住居									
			5号住居									
			1号溝					○				
			2号溝			○						
			3号溝	○	○		○					
			1号道路							○		
			2号道路							○		
			1号土壙									
			2号土壙	○								
	132	1号トレンチ	1号住居			○						
			1号溝			○	○					
			1号道路							○	○	
	136-1	1号トレンチ	1号溝		○							
		2号トレンチ	1号溝		○							

表－11　遺構の時間的位置付け一覧表　その2

年度	地番	調査区	遺構	時間的位置								
				1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	9期
平成9年度	138	東西第1トレンチ	1号住居		○							
			2号住居									
			3号住居									
			1号溝				○	○				
			2号溝		○							
			3号溝	○								
			4号溝	○								
			1号道路							○	○	
			不整形土壙									
		南北トレンチ	4号住居					○				
			祭祀土坑					○	○	○		
			西区A土坑									
		東西第2トレンチ	1号住居		○							
			1号溝		○							
			2号溝	○								
			3号溝		○							
			1号円墳							○		
	141	東西トレンチ	1号住居									
			2号住居					○				
			3号住居						○			
			4号住居								○	
			5号住居						○			
			6号住居									
			7号住居								○	
			1号溝	○	○							
			2号溝	○	○							
			3号溝						○			
			4号溝									
			貯蔵穴									
			1号石棺						○			
			2号石棺						○			
	267	東西第1トレンチ	1号住居					○				
			2号住居									
			道路									
		東西第2トレンチ	溝			○						
			道路									○
平成10年度	813	1トレンチ	1号溝	○								
			1号土坑								○	
	814	第1トレンチ										
		第2トレンチ	1号住居	○								
			2号住居									
			1号溝				○	○				
			2号溝			○						
		第3トレンチ	1号住居		○	○						
			2号住居								○	
			3号住居								○	
			4号住居								○	
			1号溝		○							
			土坑									
	816・817	1トレンチ	1号住居		○							
			2号住居								○	
			3号住居								○	
			4号住居					○				
			5号住居					○				
			6号住居								○	
			溝						○			
	820・821	1T	溝		○		○					
			土坑	○								
			1号住居	○								
			道路								○	

表－11　遺構の時間的位置付け一覧表　その3

年度	地番	調査区	遺構	時間的位置								
				1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	9期
平成10年度	824-2	1T	土坑1									
			土坑2									
			土坑3									
	825	1T	溝	○	○							
		2T	溝		○							
			西区土坑		○							
平成11年度	831	1T	1号溝								○	
			2号溝			○						
			3号溝								○	
			4号溝		○							
			1号土壙									
			土坑									
	932-1	1T	ピット群									
		2T	住居		○							
	932-2	1T	1号土坑									
			2号土坑									
			3号土坑									
	932-4	1T	遺構なし									
		2T	遺構なし									
		3T	遺構なし									
	1019	1T	遺構なし									
	881	1T	溝									
		2T	遺構なし									
	888	1T	遺構なし									
		2T	遺構なし									
	893	1T	遺構なし									
	177-2	1T	住居									
	220	1T	1号溝									
			土坑									○
		2T	1号溝									
			2号溝			○						
			3号溝		○	○						
			土坑									
平成12年度	196-1		溝									○
			住居									
			土坑									
			土坑1									
			道路状遺構				○					
			焼土								○	
	209		1号溝									
			2号溝									
			3号溝		○	○						
			4号溝	○	○	○						
			5号溝						○			
			1号住居				○					
			2号住居		○	○						
			3号住居									
			4号住居									
			1号土坑									
			2号土坑		○							
			3号土坑									
			4号土坑									
			5号土坑									
			6号土坑	○								
			7号土坑								○	
			8号土坑									

時期	特徴	5期	庄内系甕
1期	弥生後期後半	6期	布留系甕
2期	刷毛目長胴脚台甕	7期	古墳時代
3期	叩き目長胴脚台甕	8期	古代
4期	叩き目長胴丸底甕	9期	中世

表－12　方保田東原遺跡　遺構別年代一覧　その1

年度	地番	調査区	遺構	時期	切った遺構				切られた遺構			
					遺構名	時期	遺構名	時期	遺構名	時期	遺構名	時期
平成8年度	84-2		1号住居	1					溝状遺構	4～6		
			2号住居	2								
			1号土壙									
			2号土壙									
			溝状遺構	4～6	1号住居	1						
	119		1号住居	3								
			2号住居									
			3号住居	6								
			4号住居						6号住居			
			5号住居									
			6号住居		4号住居		8号住居					
			7号住居	5～6					13号土壙	5以後		
			8号住居						6号住居			
			9号住居	1					13号住居	4		
			10号住居	5～6	11号住居	5以前						
			11号住居	5以前					10号住居	5～6	11号土壙	
			12号住居									
			13号住居	4	9号住居	1						
			14号住居	5	15号住居	5～6	17号住居	3				
			15号住居	5～6	16号住居	4			14号住居	5		
			16号住居	4					15号住居	5～6		
			17号住居	3					14号住居	5	2号土壙	3以後
			18号住居						19号住居			
			19号住居		18号住居							
			20号住居									
			1号土壙	5	4号土壙	5以前						
			2号土壙	3以後	17号住居	3						
			3号土壙									
			4号土壙	5以前					1号土壙	5		
			5号土壙									
			6号土壙									
			7号土壙？									
			8号土壙									
			9号土壙									
			10号土壙									
			11号土壙									
			12号土壙									
			13号土壙	5以後	7号住居	5～6						
			14号土壙									
平成9年度	131	東西トレンチ	1号住居	1以前					1号土壙	1		
			2号住居	6					1号土壙	1	3号住居	4
			3号住居	4	2号住居	6	4号住居	4以前				
			4号住居	4以前					3号住居	4		
			5号住居	4以後	3号溝	1．2．4						
			1号溝	5								
			2号溝	3								
			3号溝	1．2．4					5号住居	4以後		
			1号道路	7	4号住居	4以前	1号溝	5				
			2号道路	7								
			1号土壙	6以後	1号住居	1以前	2号住居	6				
			2号土壙	1								
	132	1号トレンチ	1号住居	3								
			1号溝	3～4								
			1号道路	7～8								
	136-1	1号トレンチ	1号溝	2・5								
		2号トレンチ	1号溝	2								
	138	東西第1トレンチ	1号住居	2					祭祀土壙	4～6		
			2号住居									
			3号住居	4以前					1号溝	4～5		
			1号溝	4～5	3号住居	4以前						
			2号溝	2								
			3号溝	1								
			4号溝	1								
			1号道路	7～8								
			不整形土壙									
		南北トレンチ	4号住居	4								
			祭祀土坑	4～6	1号住居	2						
			西区A土坑									

表－12　方保田東原遺跡　遺構別年代一覧　その2

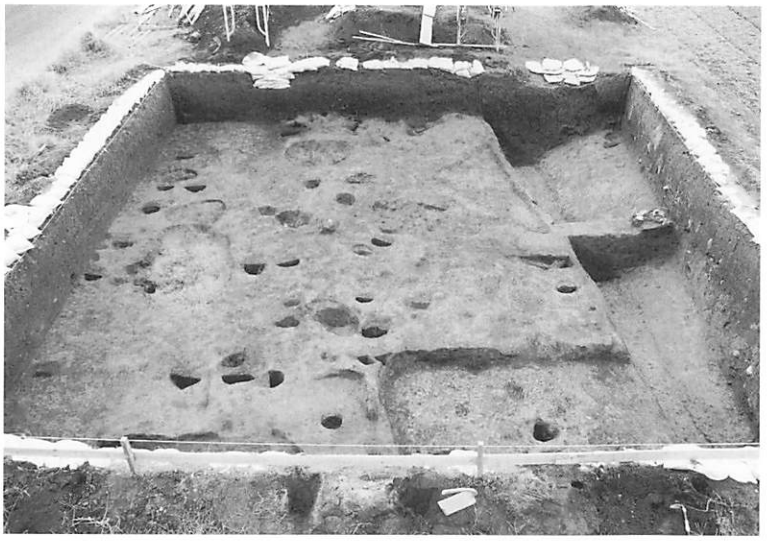
年度	地番	調査区	遺構	時期	切った遺構				切られた遺構			
					遺構名	時期	遺構名	時期	遺構名	時期	遺構名	時期
平成9年度	138	東西第2トレンチ	1号住居	2								
			1号溝	2								
			2号溝	1								
			3号溝	2								
			1号円墳	7								
	141	東西トレンチ	1号住居	5以後	2号住居	5						
			2号住居	5					1号住居	5以後	3号住居	6
			3号住居	6	2号住居	5						
			4号住居	8	5号住居	6						
			5号住居	6			貯蔵穴	6以前	4号住居	8	6号住居	8以後
			6号住居	8以後	5号住居	6						
			7号住居	8								
			1号溝	1～2					3号溝	6		
			2号溝	1～2								
			3号溝	6	1号溝	1～2						
			4号溝									
			貯蔵穴	6以前					5号住居	6		
			1号石棺	6								
			2号石棺	6								
	267	東西第1トレンチ	1号住居	5					2号住居	5以後		
			2号住居	5以後	1号住居	5						
			道路									
		東西第2トレンチ	溝	3・9								
			道路									
	268	東西第1トレンチ	1号住居									
			1号溝	2～3								
			6号溝									
		東西第2トレンチ	1号溝	2								
			3号溝						1号道路			
			1号道路									
		東西第3トレンチ	1号住居									
			2号道路									
		東西第4トレンチ	6号溝									
			1号道路									
			2号道路									
		東西第5トレンチ	1号住居						2号住居			
			2号住居		1号住居		3号住居					
			3号住居						2号住居			
			4号住居	5～6					5号住居	6以後		
			5号住居	6以後	4号住居	5～6						
		南北第1トレンチ	1号住居									
			2号住居									
			3号住居									
			2号溝									
			3号溝						1号道路			
			4号溝						2号道路			
			1号道路									
			2号道路									
			土壙									
			自然災害遺構									
平成10年度	813	1トレンチ	1号溝	1								
			1号土壙	8								
	814	第1トレンチ										
		第2トレンチ	1号住居	1					1号溝	4～5	2号溝	3
			2号住居						1号溝	4～5		
			1号溝	4～5	1号住居	3	2号溝	1				
			2号溝	3	1号住居	1			1号溝	4～5		
		第3トレンチ	1号住居	2～3								
			2号住居	8								
			3号住居	8					4号住居	8		
			4号住居	8	3号住居	8						
			1号溝	2								
			土壙									
	816･817	1トレンチ	1号住居	2					2号住居	8		
			2号住居	8	1号住居	2						
			3号住居	8								
			4号住居	5								
			5号住居	5								
			6号住居	8								
			溝	6								
	820･821	1トレンチ	溝	2・4								
			土壙	1								

表－12　方保田東原遺跡　遺構別年代一覧　その3

年度	地番	調査区	遺構	時期	切った遺構				切られた遺構			
					遺構名	時期	遺構名	時期	遺構名	時期	遺構名	時期
平成10年度	820・821	1トレンチ	1号住居	1								
			道路	8								
	824-2	1トレンチ	土壙1									
			土壙2									
			土壙3									
	825	1トレンチ	溝	1～2								
		2トレンチ	溝	2								
			西区土壙	2								
平成11年度	831	1トレンチ	1号溝	8								
			2号溝	3					3号溝	8		
			3号溝	8	2号溝	3						
			4号溝	2								
			1号土壙									
			土壙									
	932-1	1トレンチ	ピット群									
		2トレンチ	住居	2								
	932-2	1トレンチ	1号土壙									
			2号土壙									
			3号土壙									
	932-4	1トレンチ	遺構なし									
		2トレンチ	遺構なし									
		3トレンチ	遺構なし									
	1019	1トレンチ	遺構なし									
	881	1トレンチ	溝									
		2トレンチ	遺構なし									
	888	1トレンチ	遺構なし									
		2トレンチ	遺構なし									
	893	1トレンチ	遺構なし									
	177-2	1トレンチ	住居									
	220	1トレンチ	溝									
			土壙	9								
		2トレンチ	1号溝									
			2号溝	3								
			3号溝	2～3								
			土壙									
平成12年度	196-1		溝	9								
			住居									
			土壙									
			道路状遺構	4								
			焼土	8								
	209		1号住居	4								
			2号住居	2～3	1号土壙	2						
			3号住居		2号溝	2以前						
			4号住居	1以前					4号溝	1～3	2号溝	2以前
			1号溝									
			2号溝	2以前	4号住居	1以前			3号溝	2～3	2号住居	2～3
			3号溝	2～3	2号溝	2以前	4号溝	1～3				
			4号溝	1～3	4号住居	1以前	4号土壙	1以前	3号溝	2～3	5号溝	6
			5号溝	6	4号溝	1～3						
			1号土壙	2以後	2号土壙	2			2号住居	2～3		
			2号土壙	2					1号土壙	2以後		
			3号土壙									
			4号土壙	1以前					4号溝	1～3		
			5号土壙									
			6号土壙	1								
			7号土壙	8								
			8号土壙									

時期	時期・特徴
1期	弥生時代後期後半
2期	はけ目調整長胴脚台付甕
3期	たたき目調整長胴脚台付甕
4期	たたき目調整長胴丸底甕
5期	庄内系甕
6期	布留系甕
7期	古墳時代
8期	古代
9期	中世

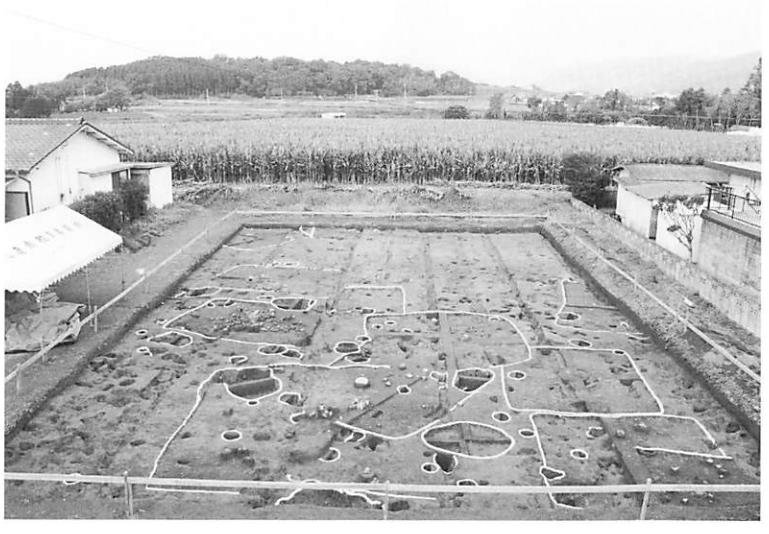
写　真　図　版



1
82-2番地　調査区全景

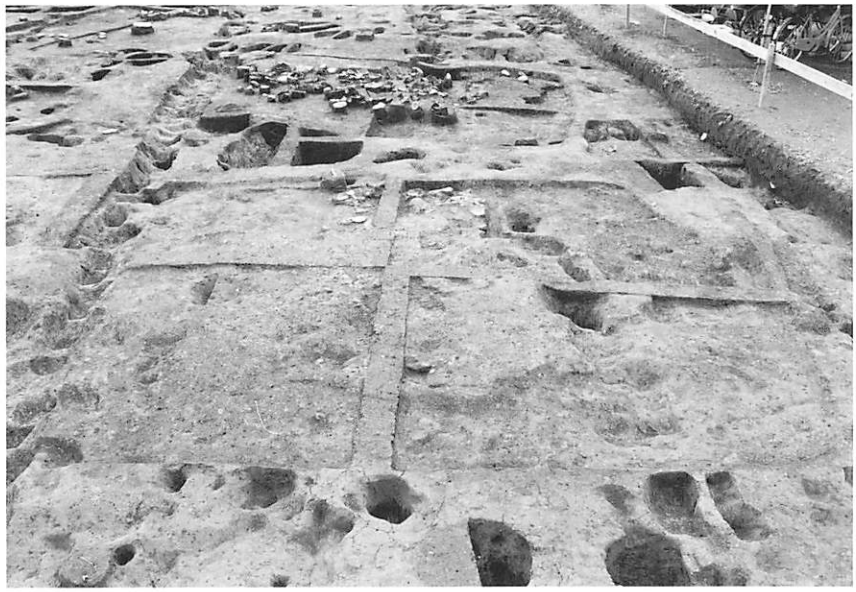


2
同　溝状遺構全景

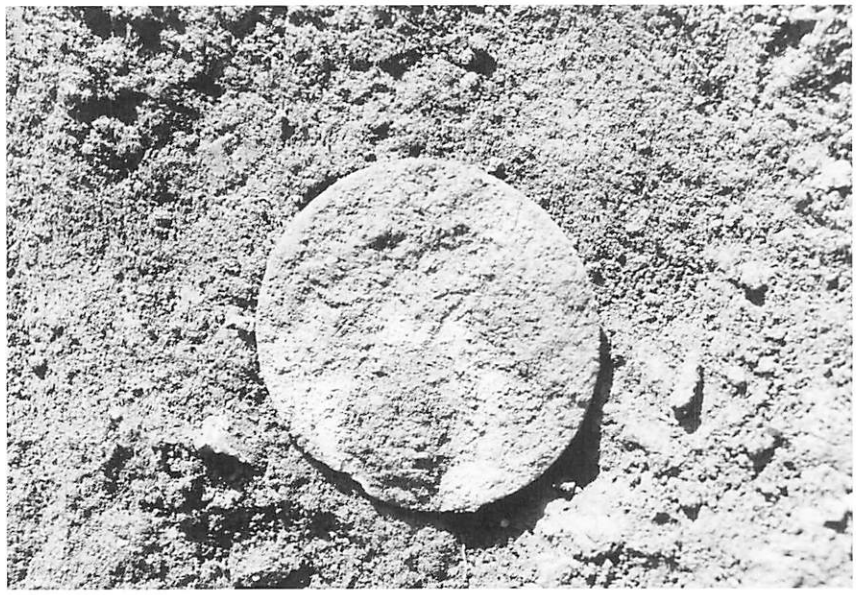


3
119番地　調査区全景

PL 2

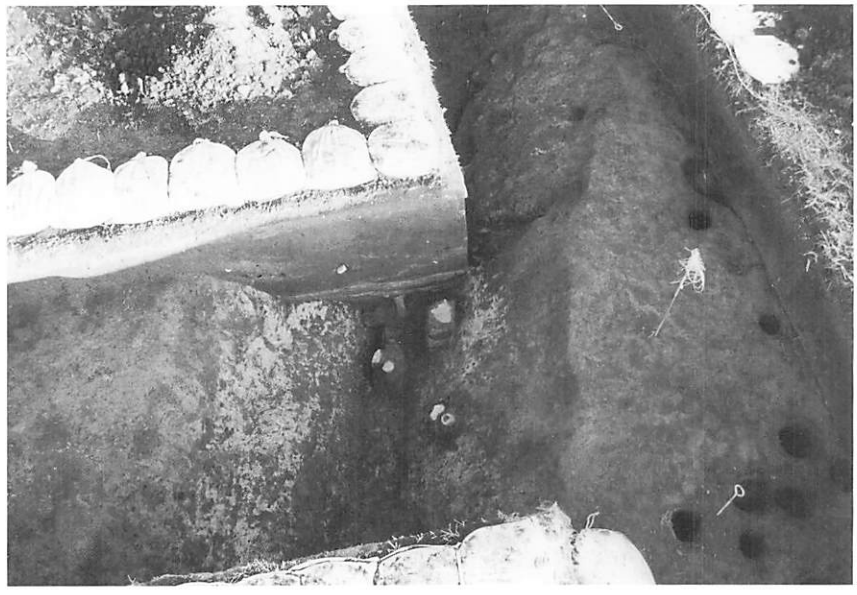


1
119番地　3号住居跡全景



2
同　15号住居跡鏡出土状況

9年度調査



3
131番地　3号溝全景



9年度調査

1
128番地　祭祀土坑全景



2
同　道路状遺構



3
141番地　1号石棺

PL 4



9年度調査

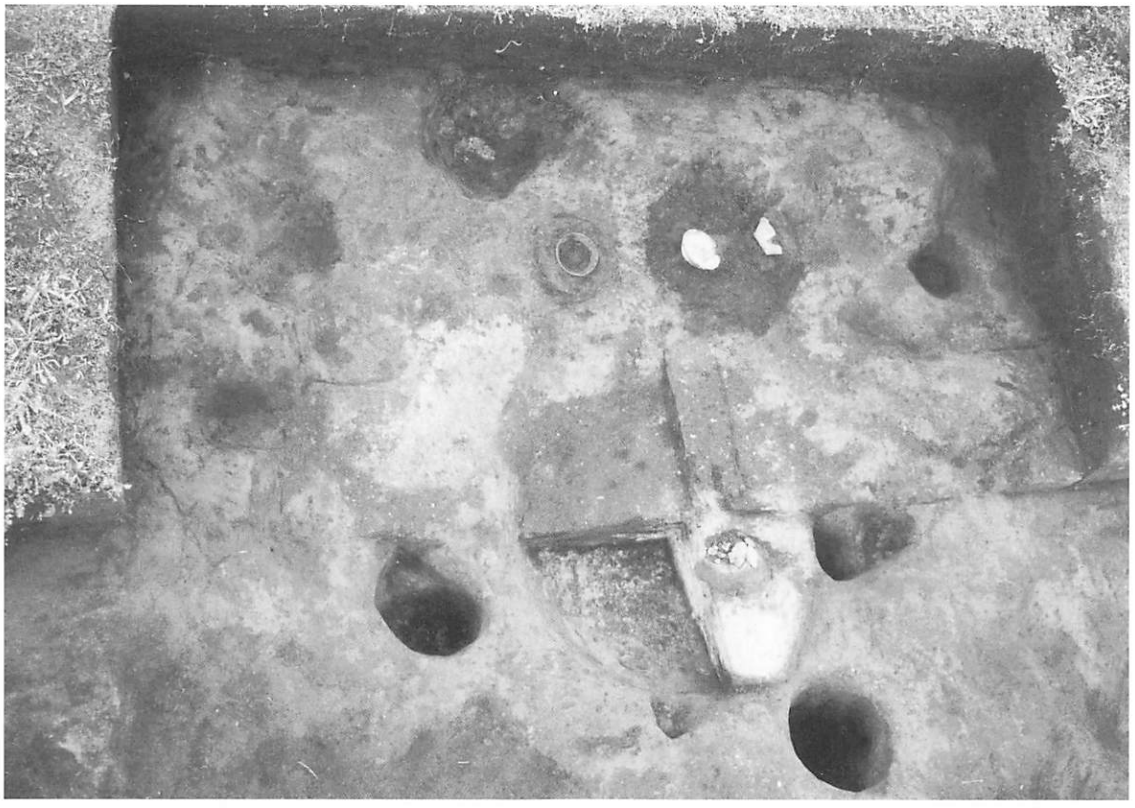


1
141番地　2号石棺



2
268番地　1号溝検出状況

3
同上　遺物出土状況



10年度調査　825番地　土坑　1



11年度調査　814番地　1・2号溝交叉点　2



12年度調査　220番地　3号溝　3

PL 6

12年度調査



196-1番地　大溝　　1



209番地　5号溝　　2



209番地　3号溝　遺物出土状況　　3

8年度調査

84－2番地



1　溝出土



2　溝出土



3　溝出土



4　溝出土　P244



5　溝出土　P328

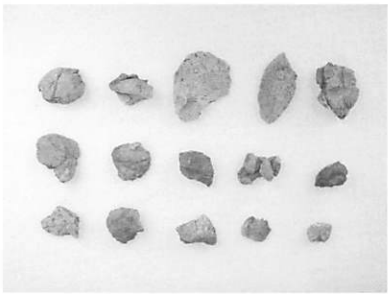
814番地



6　丹塗り土器

220番地

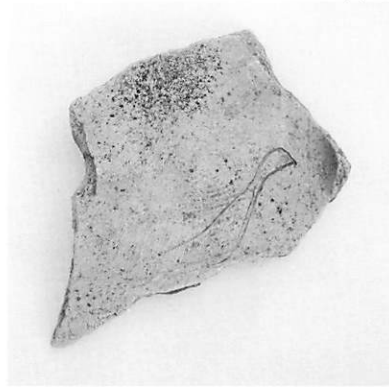
119番地



7　焼成粘土塊



8　絵画土器



9　絵画土器

220番地

209番地

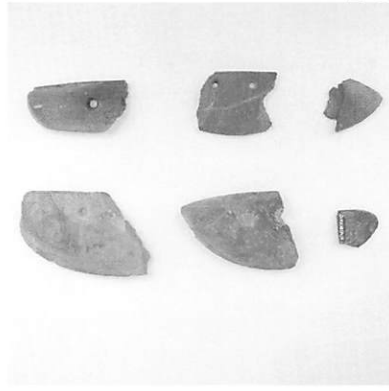
119番地



10　絵画土器



11　絵画土器



12　石庖丁・未製品

PL 8

9年度調査

131番地



1　3号溝出土　P－2



2　1号溝出土　P－58

132番地



3　溝　P－61



4　1号溝　P－123



5　1号溝　P－121



6　3号溝　P－236



7　祭祀土坑　P－242



8　祭祀土坑　P－196



9　南北トレンチ　P－265



10　P－245



11　P－208



12　P－236

9年度調査

138番地



1　P198　祭祀土坑



2　P192



3　P193ほか



4　P186ほか



5　P222ほか



6　P188



7　P195



8　P185ほか



9　P217



10　P183



11　P203



12　P237

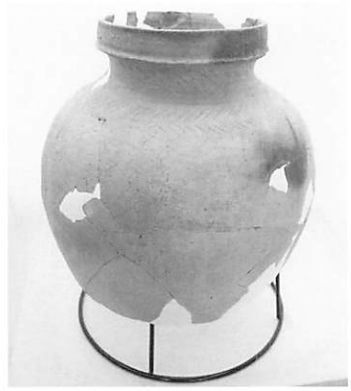
PL10

9年度調査

138番地



1



2　P60ほか



3　北端一括下層

268番地



4　P242



5　P245ほか



6　P237



7　P239



8　P186



9　P85



10　P277　4号住居跡



11　P276



12　P284

10年度調査

814番地



1　P121　1号溝



2　1号溝　P116



3　1号溝　P119



4　P75



5　P78



6　P90

820番地



7　溝　P137

821番地



8　P82ほか

825番地



9　P50

11年度調査

220番地



10　3号溝　P78



11　3号溝　P110



12　3号溝　P295

PL12

220番地



1　　3号溝　P460



2　　3号溝　P270



3　　P98

12年度調査　　209番地



4　　3号溝　P773



5　　3号溝　P258



6　　3号溝　P603



7　　3号溝　P879



8　　3号溝　P767



9　　3号溝　P896



10　　3号溝　P762



11　　3号溝　P678



12　　3号溝　P744

209番地



1　1号住居跡　P205



2　5号溝　P576

119番地



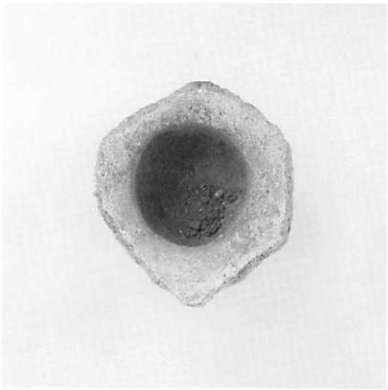
3　スプーン

84－2番地

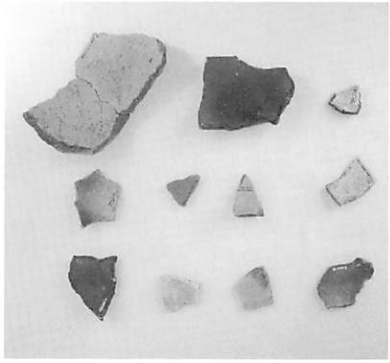


4　朱精成石杵

119番地



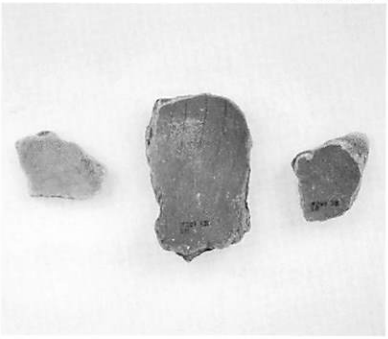
5　ベンガラ入土器



6　内面朱塗土器

209番地

209番地



7　ベンガラ塗り土器

119番地



8　内面朱塗土器

119番地



9　石庖丁未成品



10　石庖丁未成品

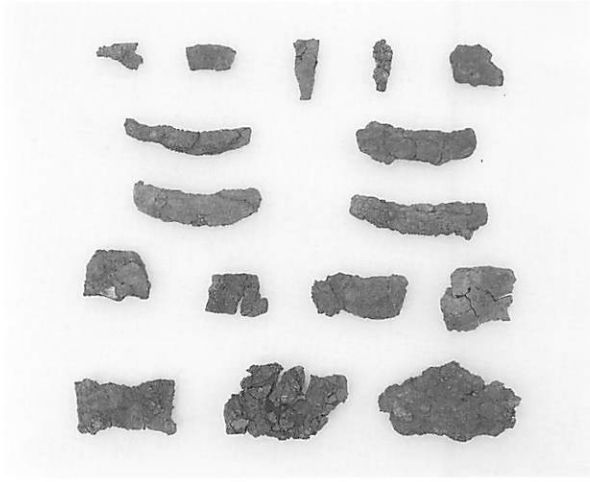


11　石庖丁未成品

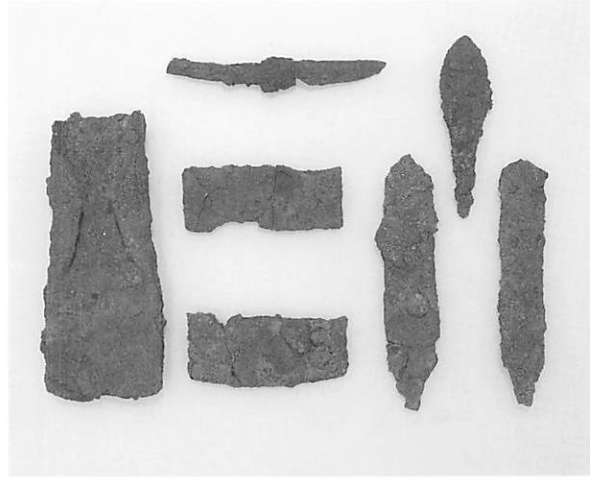
PL14

平成８年度

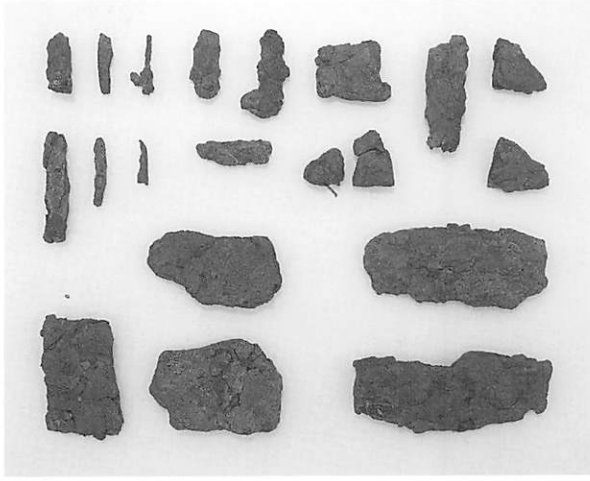
84－2番地



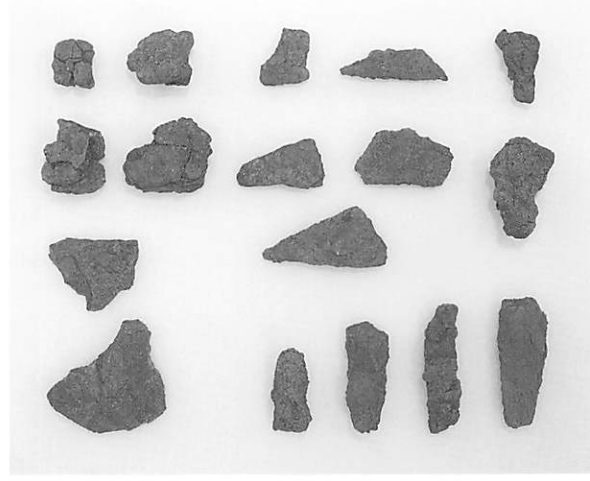
1　2号住居跡



2　一括



3　溝①



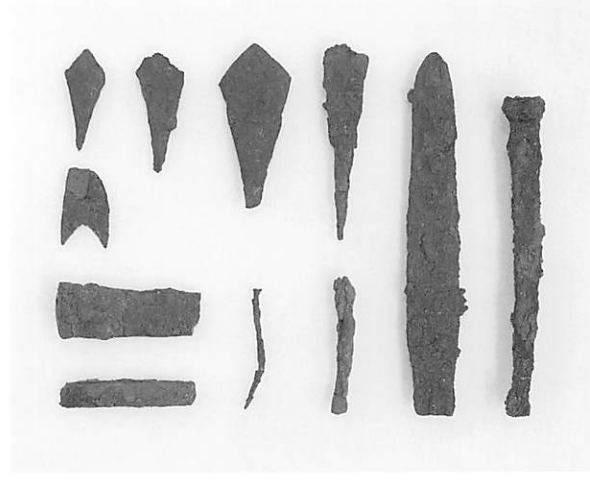
4　溝②

平成９年度

119番地

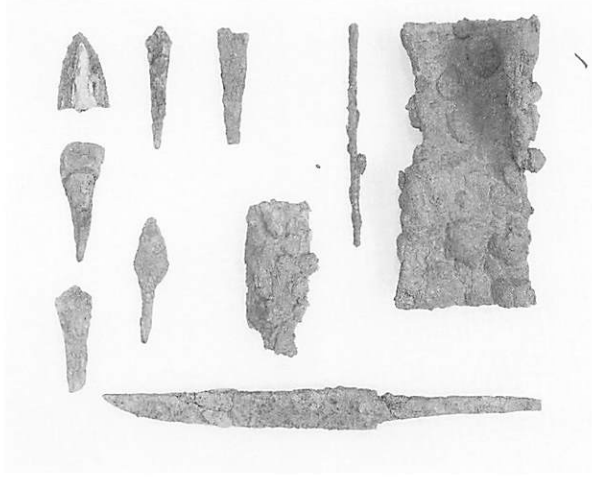


5



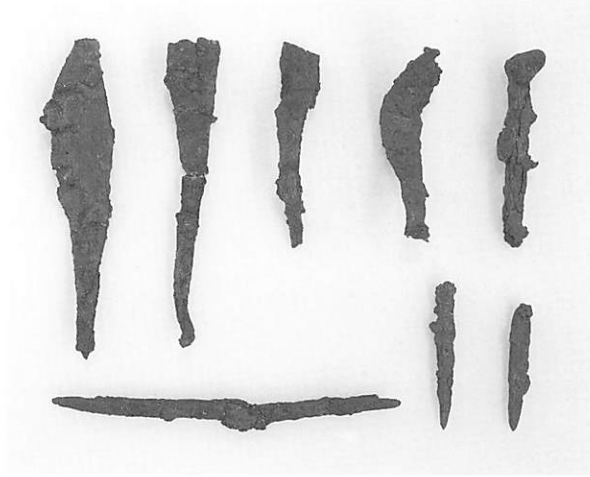
6

平成10年度



1

平成11年度



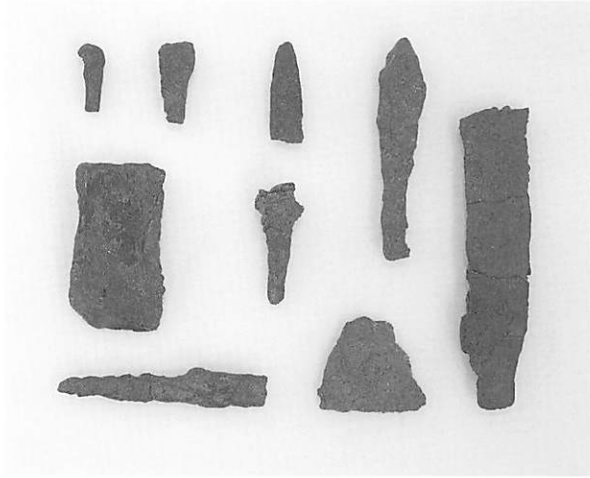
2

平成12年度



3

平成12年度



4



5　209番地　釣針



平成９年度　138番地　東西１トレ



6　石庖丁型鉄器

山鹿市文化財調査報告書第14集

方保田東原遺跡 Ⅳ

発行年月日　平成13年３月31日

編集
発行　山鹿市教育委員会
〒861-0501　熊本県山鹿市大字山鹿1026-2

印　刷　コロニー印刷
〒860-0051　熊本市二本木３丁目12番37号

正誤表

『方保田東原遺跡Ⅳ』 山鹿市文化財調査報告書 第14集 熊本県山鹿市教育委員会2001年

頁	左右	行・図表番号	誤	正
23		28 行	17、18は完形の広口壷である。19は～	17、19は完形の広口壷である。18は～
31	左	3 行	4、7は土錘である。	4、9は土錘である。
31	右	1 行	7の長さは7.3cm	9の長さは7.3cm
32			縮尺は1～3が1/2，4が1/1	縮尺は全て1/2 （4のスケールを削除）
41		6 図	6 図 1・4・6・12が記載漏れ	下表を挿入
41		6 図 5	6 図 5	6 図 3
41		6 図 7	6 図 7 黒斑 無	6 図 5 黒斑 有
41		6 図 8	6 図 8 黒斑 有	6 図 7 黒斑 無
41		6 図 9	6 図 9	6 図 8
41		6 図 14	器高6.5	器高8.6
41		9 図 2	7.5YR7/3 にぶい黄橙色	10YR8/4 浅黄橙色
41		9 図 3	9 図 3が記載漏れ	下表を挿入
41		9 図 9	煤 無	煤 有
41		9 図 10	黒斑 無	黒斑 有
41		14 図 2	煤 無	煤 有
41		14 図 6	P番号の欄:甕	P-267
41		14 図 7	P番号の欄:甕	P-313
41		14 図 8	黒斑 無	黒斑 有
42		15 図 11	15 図 11	15 図 14
42		15 図 13	15 図 13	15 図 12
42		15 図 14	15 図 14	他の遺物の為 削除
42		15 図	15 図 11・13が記載漏れ	下表を挿入
42		16 図 18	16 図 18	16 図 19
42		16 図 19	16 図 19	16 図 18
42		16 図 22	黒斑 無	黒斑 有
42		16 図 23	16 図 23(下段:台付鉢で記載)	16 図 27
42		16 図 25	16 図 25	下表の該当部分と差し替え
42		17 図 33	17 図 33	下表の該当部分と差し替え
42		18 図 38	18 図 38が記載漏れ	下表を挿入
42		18 図 39	器高19.3	器高22.7
43		18 図 51	19 図 51が記載漏れ	下表を挿入
43		19 図 59	P-175	P-179
44		20 図 78	20 図 78	下表の該当部分と差し替え
44		20 図 68他	20 図 68・69が記載漏れ	下表を挿入
44		21 図 88	21 図 88	21 図 89
44		21 図 84他	21 図 84・88が記載漏れ	下表を挿入
44		26 図 6	26 図 6	下表の該当部分と差し替え
44		26 図 2他	26 図 2・7が記載漏れ	下表を挿入
44		26 図 8	遺構名の欄:南西	遺構名の欄:南東
44		30 図 1	煤 無	煤 有
44		30 図 2	30 図 2が記載漏れ	下表を挿入
44		30 図 3	煤 無	煤 有
45	左	36 行	(第79図)	(第80図)
48	左	21 行	8は鉢または甕の脚台か。	7は鉢または甕の脚台か。
52	左	13 行	1は壷の	2は壷の
52	左	15 行	2は台付鉢の	1は台付鉢の
57	左	10 行	直径7.8cmで外縁を・・・	直径5.9cmで外縁を・・・
60	左	9 行	第83図6は	第84図6は
60	左	14 行	第83図8は	第84図8は
60	右	3 行	第82図14は	第83図14は
64	右	2・3 行	5は二重口縁で、6は口縁がラッパ状に	6は二重口縁で、5は口縁がラッパ状に
78		76 図 2	76図2の図	75図2と同一の為 削除
80	右	21 行	内行花内日光鏡系仿製鏡	内行花文日光鏡系仿製鏡
83	右	9 行	鉄器は17点である。	鉄器は22点である。
86		42 図 3	煤 無	煤 有
86		43 図 10	P-171 他	P-170 他
87		43 図 12	P-192 他	P-197 他
87		43 図 17	黒斑 無 煤 無	黒斑 有 煤 有
87		44 図 21	煤 無	煤 有
87		45 図 26	備考欄が空欄	備考 粘土接合面が明瞭に残る
87		45 図 27	備考 粘土接合面が明瞭に残る	45図26の説明の為 削除
88		45 図 40	黒斑 無 煤 無	黒斑 有 煤 有
88		48 図 1	48 図 1	49 図 1
88		48 図 2	48 図 2	49 図 2
88		54 図 1	54 図 1	54 図 2
88		54 図 2	54 図 2	54 図 1
89		58 図 1	器高 36.3	器高 31.3
89		58 図 8	黒斑と煤の欄が空欄	黒斑 有 煤 無
90		60 図 9	遺構名:遺構外	遺構名:15号住
90		72 図 4	72 図 4 遺構名 14号土坑 部位 上半	72 図 5 遺構名 6号土坑 部位 坏部
90		72 図 5	72 図 5 部位 坏部	72 図 4 部位 上半
91		75 図 4	黒斑 無	黒斑 有
91		76 図 2	76 図 2の記載	削除(75図2と同一)
92		77 図 1	黒斑 有	黒斑 無
92		82 図 3	黒斑 無	黒斑 有
92		82 図 7	82 図 7	82 図 10
92		82 図 8	82 図 8	他の遺物の為 削除
92		82 図 9	82 図 9	82 図 8
92		82 図 10	82 図 10	82 図 9
92		82 図 7	記載漏れ	下表を追加
102	左	14 行	6(P-60・1)	6(P-60)
103	右	6・7 行	17(P-50・52・53・8)	17(P-50・51・52・53)
105	右	5 行	23(P-21)	23(P-37)
122		23 行	半截竹管文	竹管文

頁	左右	行・図表番号	誤	正
127	左	6・7 行	第1トレンチ西端近くに0祭祀遺構	第1トレンチ西端近くに祭祀遺構
137	左	7 行	35(P-106・109)	35(P-106・108)
141	右	29 行	再度地権者の協を求めて	再度地権者の協力を求めて
142	右	24 行	8(P-198・203・205・245・・・)	8(P-193・203・205・242・・・)
145		図タイトル	9第145図	第145図
155	左	3 行	明らかに同一固体である。	明らかに同一個体である。
155	右	3 行	73(P-145・242)	73(P-187・191)
155	右	14 行	79(P-178・185・・・・)	79(P-176・185・・・・)
160	右	1 行	106(表土一括)	106(北側下層一括)
160	右	6 行	109(北端一括)	109(北東下層一括)
160	右	29 行	117(P-66)	118(P-66)
160	右	30 行	118(P-54)	117(P-54)
164	右	15 行	8(P-216)	8(P-173・216・217)
164	右	17 行	9(P-173・216・217)	9(P-216)
166	左	5 行	20は底部を残し	21は底部を残し
174	右	8 行	口径は13.3cmと17.0cmであった。	口径は17.0cmと13.3cmであった。
182	右	26～28行	(P-61)は小型の鉢で～くびれる程度であった。	文を削除
189～192		37	直径:5.1	直径:4.7
		33 51 139	備考の欄が空欄	備考　側面中央が膨らむ
		80 81 83 91 109 363 364	備考の欄が空欄	備考　上下の径が違う
		36 40 414	備考の欄が空欄	備考　2分の1程欠落
		41 263 412 413	備考の欄が空欄	備考　4分の1程欠落
		42	備考の欄が空欄	備考　5分の1程欠落
		243	備考の欄が空欄	備考　4分の3程欠落
		87	備考の欄が空欄	備考　真ん中で割れている
		89	備考の欄が空欄	備考　2つに割れている(厚み)
		133	灰色	淡灰色
		298	緑灰色	白灰色
		299～302	緑灰色	灰色
		307 319 327 346 362 372 400	淡灰色	白灰色
203		2 行	24(P-75・87)	24(P-75・81)
204		214 図 30	214 図 30(高坏の番号)	214図29
212	左	1 行	遺物(第222～226図)	遺物(第220～226図)
214	左	11 行	10(P-22・96)	10(P-22・98)
216	左	1 行	東西第2トレンチ(第219図)	東西第2トレンチ(第216図)
218	左	1 行	東西第3トレンチ(第219図)	東西第3トレンチ(第216図)
219	左	1 行	東西第4トレンチ(第219図)	東西第4トレンチ(第216図)
220	左	7 行	東西第5トレンチ(第219図)	東西第5トレンチ(第216図)
225			(第241図中 4号溝の左上に記載) 1号道路	2号道路
252	左	2 行	7(P-49・118・120)	7(P-118・119・120)
259	右	8 行	13は紡錘車である。	文を削除
267	右	4 行	13(P-213)	13(P-215)
267	右	5 行	14(P-213)	14(P-215)
284	右	12・13 行	12(P-11)と13(P-16)は	12(P-16)と13(P-11)は
284	右	25 行	14(P-53)	14(P-52)
290		22～24行	8, 9は甕の口縁部である。頸部がそれほどくびれない。8は頸部が…	4, 5は甕の口縁部である。頸部がそれほどくびれない。4は頸部が…
290	右	34 行	遺構に伴わない遺物(第342図)	遺構に伴わない遺物(第341・342図)
292	右	3 行	17-3は不明の鉄器である。	第340図の3は不明の鉄器である。
310	右	7 行	第385図-4は棒状鉄塊で	第385図-2は棒状鉄塊で
322			381 図 56(図の番号)	381 図 59
325		338 図 1	338 図 1	338 図 4
325		338 図 2	338 図 2	338 図 5
325		338 図 3	338 図 3	338 図 6
325		338 図 4	338 図 4	338 図 7
325		338 図 5	338 図 5	338 図 8
325		338 図 6	338 図 6	338 図 9
325		338 図 7	338 図 7	338 図 10
325		338 図 8	338 図 8	338 図 1
325		338 図 9	338 図 9	338 図 2
325		338 図 10	338 図 10	338 図 3
325		363 図 1～9	363 図 1～9	336 図 1～9
328		386 図	(第386図中の北端周辺の遺構) 2号溝	2号住居跡
351	右	18 行	3は甕の口縁部…	3 は3号土坑の遺物である。甕の口縁部…
351	右	26 行	4 、5は広口壷の	1 、2は広口壷の
351	右	27 行	4は口縁部が	1は口縁部が
351	右	27 行	5は頸部に刺突文が	2は頸部に刺突文が
351	右	29 行	6は鉢の	。3は鉢の
351	右	30 行	7 、8は高坏の	4 、5は高坏の
351	右	31 行	7は口縁部が	4は口縁部が
354		416 図	(図タイトル)2号土坑出土土器実測図	2・3号土坑出土土器実測図
356		422 図 11	(220番地調査の出土遺物としている)	(209番地調査の出土遺物)
358		424 図 1	(209番地調査の出土遺物としている)	(220番地調査の出土遺物)
358		424 図 2	(209番地調査の出土遺物としている)	(220番地調査の出土遺物)
361	左	7 行	(8号土坑)	(8号土坑)遺物(第429図)
361	右	10 行	3号溝と4号溝が	2号溝と3号溝が
363		432 図 6	(209番地調査の出土遺物としている)	(196-1番地調査の出土遺物)
365	右	33 行	18-6は鉄剣の下半部か。	第422図-11は鉄剣の下半部か。
365	右	27 行	8は高坏の	9は高坏の
365	右	23 行	9は長頸壷の	8は長頸壷の
368		439 図	(196-1番地調査の出土遺物としている)	(220番地調査の出土遺物)
373	左	14 行	1 、2は甕の・・・3は大甕の	遺物(第445図)1 、2は壷の・・・3は甕の
374		446 図 1・2	(196-1番地調査の出土遺物としている)	(220番地調査の出土遺物)

頁	左右	行・図表番号	誤	正
374		446 図	図タイトル 移動式かまど実測図	209番地調査出土遺物実測図
376			389 図 2	389 図 3
376			389 図 3	389 図 2
378			400 図 43	400 図 44
378			400 図 44	400 図 43
378			402 図 2	402 図 3
378			402 図 3	402 図 2
378		401 図 45	記載漏れ	下表を追加
378		401 図 46	記載漏れ	下表を追加
381			421 図1の下、3行の図番号の空欄	それぞれ図番号の欄に429を記入
381			423 図 1	423 図 3
381		423 図 2	423 図 2	下表を追加
381		423 図 3	423 図 3	423 図 1
381		428 図 1	428 図 1	430 図 1
381		428 図 3	428 図 3	430 図 3
381		428 図 4	428 図 4	430 図 4
381		430 図 1	430 図 1	428 図 1
381		430 図 3	430 図 3	428 図 2
381		430 図 4	430 図 4	428 図 3
383		1 図 1	1 図 1	445 図 1
383		1 図 2	1 図 2	445 図 2
383		1 図 3	1 図 3 器種:壺	445 図 3 器種:甕
383		1 図 4	1 図 4	445 図 4
383		1 図 5	1 図 5	445 図 5
383		6 図 2	6 図 2	440 図 2
383		440 図 9	440 図 9	440 図 8
384		440 図 8	440 図 8	440 図 9
384		445 図 6	記載漏れ	下表を追加
386	左	4・5 行	32は2号溝～ガラス製小玉である。	32、33は138番地出土のガラス製小玉である。
388	左	8 行	(第451図)	(第450・451図)
391		454 図 6	上下の遺物 2個体掲載	下段の遺物を削除
392		455 図 16	(816・817番地出土の遺物) (第455図)	16は24次調査(814番地)出土の遺物
395		458 図 3	(図番号)3 43-5	3 43-4

表(修正後・挿入部分)

図	No	遺構名	取上げ番号	器種	部位	口径 ( )は復元	器高	色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	黒斑	煤	備考
6	1	1号住	P-4	甕	口縁部	31.0		10YR8/3 浅黄橙	長石	良	口縁部なで 頸部刷毛	口縁部なで 胴部刷毛	有	無	
6	4	1号住	P-12	甕	脚台			2.5YR6/6 橙	角閃石 長石 石英	良	脚台刷毛	底部なで	無	無	砂型
6	6	1号住	土坑 P-9	甕	胴部			7.5YR8/6 浅黄橙	角閃石 長石 石英	良	刷毛	刷毛	有	無	
6	12	1号住	P-2	鉢	完形	15.4	7.4	10YR6/3 にぶい黄橙	長石 石英 雲母	良	口縁部なで 胴部刷毛	刷毛後なで (刷毛一部残る)	有	有	
9	3	2号住	土坑 一括	壺	口縁部	20.0		10YR8/3 浅黄橙	角閃石 長石	良	なで	なで	無	無	口縁部上端 2個1組の円形貼付文 1ヶ所
15	11	溝	P-310	甕	完形 復元	13.0	15.5	7.5YR8/3 浅黄橙	角閃石 長石 石英 雲母	良	口縁部タタキ後なで 胴部タタキ後刷毛	口縁部タタキ後なで 上半 刷毛 胴部ヘラケズリ	有	有	
15	13	溝	P-261	甕	完形 復元	13.9	17.6	10YR8/2 灰白	角閃石 長石 石英 雲母 赤褐色粒	良	口縁部なで 肩部刷毛後なで 胴部刷毛	口縁部なで ケズリ後なで 下半指頭圧痕	有	有	下半内器面に指頭圧痕
16	25	溝	P-328	沓形器台	完形 復元	6.0	8.5	10YR8/6 黄橙	長石 雲母	良	タタキ	なで	無	無	上端穿孔1ヶ所 側面つまみ有り
17	33	溝	P-17	鉢	完形 復元	12.0	6.2	10YR8/4 浅黄橙	石英 雲母	良	口縁部なで 胴部底部刷毛	指おさえ後なで	無	無	
18	38	溝	P-245	甕	完形 復元	15.5	19.7	10YR8/3 浅黄橙	角閃石 石英 雲母 赤褐色粒	良	口縁部なで 頸部刷毛後なで 胴部刷毛後カキ目 胴部刷毛後なで 底部なで	口縁部なで 胴部ケズリ 底部なで	無	無	全体赤色顔料の可能性有り
19	51	溝	P-225	甕	完形 復元	12.8	14.9	10YR8/2 灰白	角閃石 石英 赤褐色粒	良	口縁部なで 胴部底部刷毛 一部なで	口縁部なで 胴部ケズリ 底部指頭圧痕	有	無	内器面底部に指頭圧痕
20	68	溝	P-178	鉢 (甑)	完形	16.0	8.1	7.5YR8/4 浅黄橙	角閃石 長石 石英 雲母	良	口縁部なで 胴部刷毛	口縁部なで 刷毛	有	無	底部 穿孔1ヶ所
20	69	溝	P-203	鉢	完形	10.0	8.0	10YR8/3 浅黄橙	角閃石 長石 雲母	良	口縁部なで 胴部刷毛	口縁部なで ヘラケズリ	有	有	
20	78	溝	P-38	台付鉢	完形 復元	(12.8)	6.4	5YR5/8 明赤褐	石英 赤褐色粒	良	脚部なで	鉢部ヘラミガキ	無	無	内器面 鉢部 暗文
21	84	溝	南一括	ﾐﾆﾁｭｱ土器(鉢)	完形 復元	4.6	2.5	10YR6/2 灰黄褐	角閃石 長石 石英	良		なで	無	無	
21	88	溝	南端 一括	ﾐﾆﾁｭｱ土器(鉢)	完形 復元	7.6	7.0	7.5YR8/2 灰白	角閃石 長石 石英 赤褐色粒	良	口縁部刷毛 胴部指なで	刷毛	有	無	
26	2	北東	一括	ﾐﾆﾁｭｱ土器(鉢)	完形 復元	8.2	3.4	N2/ 黒	長石 石英 雲母	良	指調整	なで	有	無	
26	6	北東	P-5	沓形器台	完形 復元	6.0	6.8	7.5YR7/6 橙	長石 雲母	良	なで	なで	無	無	
26	7	中央南	P-1	器台	完形 復元	9.8	15.4	7.5YR8/6 浅黄橙	長石 石英	良	刷毛	上位刷毛 中位指調整 下位刷毛	無	無	
30	2	一括		灯明皿	完形 復元	8.0	3.0	2.5YR6/8 橙	角閃石 長石 石英	良	なで	なで	無	無	
82	7	遺構外	一括	鉢	完形復元	16.7	6.6	7.5YR8/4 浅黄橙	角閃石 長石 雲母 赤褐色粒	良	口縁部 ヘラケズリ後なで 底部 ヘラケズリ	刷毛	有	無	

図	No	遺構名	取上げ番号	器種	部位	口径 （ ）は復元	器高	色調	胎土	焼成	外面調整	内面調整	黒斑	煤	備考
401	45	3号溝	P-829	甕	上半	24.0		10YR8/3 浅黄橙	赤褐色粒　角閃石 石英	良好	口唇部刻目　口縁部なで 頸部突帯に刻目 肩部ナナメ刷毛後横なで 胴部ナナメ刷毛	口縁部横刷毛後横なで 肩胴部ナナメ刷毛	無	有	
401	46	3号溝	P-821	器台	胴部			7.5YR6/1 褐灰	角閃石　石英　雲母	良好	縦刷毛	上位ナデ　柱部工具による調整　下位刷毛	有	無	
423	2	遺構外　2区		坏	上半	16.0		5YR6/6 橙	赤褐色粒　角閃石 長石　雲母	良好	なで	なで後ヘラ磨き	有	無	
445	6	溝	一括	坏？	下半			5YR6/4 にぶい橙色	長石	良好	なで	なで	無	無	須恵器

鉄器計測値一覧表

頁	左右	行・図表番号	誤	正
93			10　図　5	10　図　6
93			10　図　6　　実測図№5-16	10　図　7　　実測図№4-16
93			10　図　7	10　図　5
93			10　図　9	10　図　10
93			10　図　10	10　図　9
93		10　図　11	実測図№4-8	実測図№3-8
94			25　図　52	25　図　53
94			25　図　53	25　図　52
94			27　図　2	27　図　15
94			27　図　11	27　図　12
94			27　図　12	27　図　11
94			27　図　15	27　図　2
95			83　図　15	83　図　16
95			83　図　16	83　図　15
95			329図4の後　空欄　1～3	削除（図の掲載なし）
95		422　図　7	実測図№17-5	実測図№19
95		422　図　10	(上段)不明棒状鉄片の番地209	385　図　2　　番地220
95		385　図　1	記載漏れ	下表を追加

図	No.	器種名	残存状態	番地	出土遺構	土層	長さ	幅	厚さ	重さ	その他	実測図No.
385	1	不明鉄片		220			2.7	1.4	0.2	1.1	木片が付着　　薄くて軽い	17-5

文化財調査報告の電子書籍の末尾に挿入する奥付

　この電子書籍は、『山鹿市文化財調査報告書第 14 集　方保田東原遺跡Ⅳ　重要遺跡確認調査』を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

　底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

　なお、平成 17 年（2005）に山鹿市、鹿北町、菊鹿町、鹿本町、鹿央町が合併し山鹿市となりました。調査記録及び出土遺物は、山鹿市教育委員会が保管しています。

書名：山鹿市文化財調査報告書第 14 集　方保田東原遺跡Ⅳ　重要遺跡確認調査
発行：山鹿市教育委員会

〒861-0592 熊本県山鹿市山鹿 987 番 3
電話： 0968-43-1651
URL：https://www.city.yamaga.kumamoto.jp/

電子書籍制作日：2025 年6月 19 日